ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼

サザンクロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼

【Ｎコード】
Ｎ０９３９Ｑ

【作者名】
サザンクロス

【あらすじ】
何を考えてるんだ俺は・・・。衝動的に始めてしまった。反省はしてるし、後悔もちょっぴりだけしている。まぁ楽しんでいただける作品にしたいと思います。

プロローグ（前書き）

俺は・・・バカだ・・・。

まぁやるだけやっていきます。

プロローグ

ＩＳ学園ゲート前。そこは女性のみが使用することが出来るＩＳ、正式名称『インフィニット・ストラトス』の使用方法を教育する機関だ。なので女生徒しかいないはずなのだが、そこには二人の男子が立っていた。いや、二人とも男子生徒用の制服を着ているから分からなかったが、よくよく見れば体付きから二人の内の一人は女性だと言うことが分かる。

「ここがＩＳ学園か。無駄にでかいな、なぁ、太陽？」

片方の男子生徒、銀髪の男子は左隣で腕を組んでいる赤髪の女子に問いかけた。

「・・・ＩＳは従来の戦闘兵器を遙かに凌駕する代物だ。その戦闘力は計り知れない。これくらいの広さがあって当然だろう」

太陽と呼ばれた女子は腕を崩すでもなく、表情を変えるでもなく男子からの問いかけに淡々と応える。

「相っ変わらず論理的だねぇ、太陽は」

「そう言うお前は脳天気そうだな、夜明」

「てっきびしぃ～」

銀髪の男子、夜明は心底愉快そうに笑う。太陽は夜明の気の抜けた笑顔に嘆息しながら腕を組み直したその時、

「すまない、待たせたな」

二人に向かって歩いてくる人影が一つ。その人影に視線を向けた夜明は器用に片眉だけを持ち上げて見せた。

「こいつぁ久しぶりです千冬の姐さん。いや、場所の関係上先生、もしくは教諭って呼んだ方が的確ですかね？」

「分かっているのならそう呼べ」

「へいへいっと」

夜明のどこか飄々とした態度にため息を吐きながらその女性、織斑千冬は気持ちを切り換えるように視線を太陽に向けた。

「お前とは初対面だな。私は織斑千冬、ここＩＳ学園で教師をやっている」

「夕暮太陽です。以後見知りおきを」

礼儀正しく会釈する太陽に千冬は満足げに頷く。

「ふむ。夜明（これ）の最高の相棒と聞いて少々不安だったが、どうやら要らぬ心配だったようだな。ところで夜明、一つ確認したいことがある」

「・・・何すか？」

元々鋭かった千冬の視線が更に鋭利になったのを感じ、夜明は僅かに身構えながらその視線を真っ向から受け止めた。

「一年前に現れた存在しないはずの４６８機目のＩＳ、『蒼き翼』はお前だったのか？」

「あぁ～、そのことか・・・ノーコメントってのは」

「私に二度同じ事を言わせるつもりか？」

「ですよねぇ～」

たはは、と笑いながら夜明は頭を掻いていたが、千冬の切り裂くような視線に耐えきれずに小さく頷いた。

「そうか・・・」

何を思ってるのか、千冬は遠い目で空を仰いだ。そして、

スパァン！！

手にしていた出席名簿で夜明の頭を叩いた。しかも角で。その威力、角度は全て申し分なく、見事に夜明を轟沈させる。

「おごぁぁぁ・・・」

「まったく、自分がどれだけ無茶なことをやったのか理解してるのか？」

千冬の問いに地面の上をのたうち回っていた夜明はゆっくりと立ち上がった。そこにさっきまで纏っていた飄々とした空気はなく、夜明はその銀色に輝く瞳を真っ直ぐに千冬に向ける。

「・・・確かに今思えば自分でもとんでもないことをやらかしたと

思うさ。下手打ちゃ確実に死んでただろうしな・・・でも」

ここで夜明は一端言葉を切り、胸元にある蒼い翼を模したネックレスを握り締めた。

「あそこでこいつの翼を広げてなけりゃ、俺は絶対にこんな風に笑ってはいられなかったと思うんだ・・・」

無言でネックレスを握り締め続ける夜明の姿に言いたいことを失ったのか、千冬は大きくため息を吐いて夜明の瞳を覗き込んだ。

「相変わらずだなお前は。・・・心配する方の身にもなれ」

「・・・ごめん」

ネックレスを握ったまま小さくなる夜明。千冬は相好を崩すと夜明の頭に手を置いた。

「何はともあれ、お前はたくさんの命を救ったんだ。それは誇りに思って良いことだ。よくやった」

「・・・何か殴られてばっかの姐さんから撫でられるって変な気分だな・・・」

そう言いつつも満更じゃないのか、夜明は照れたような、嬉しそうな複雑な表情を浮かべる。不意に、黙って二人の遣り取りを見ていた太陽が態とらしく咳払いをする。

「織斑教諭、そろそろ教室に向かった方がいいのでは？」

「む、言われてみれば確かに時間を取りすぎたな。よし、二人ともついてこい」

「「はい」」

颯爽と歩いていく千冬の後ろを同じく颯爽と二人はついていった。

「では、私が呼んだら入ってこい」

千冬が教室に入っていくのを見送りながら、夜明は感慨深そうに腕を組む。

「にしても一夏に会うのは久しぶりだな。あいつがＩＳを唯一動かせる男性としてテレビに出てきた時は冗談抜きでびびったな」

「正確に言うとお前が最初で彼が二番目だがな。・・・一つ聞きたいんだが夜明」

「ん？　どったの太陽？」

「お前と織斑一夏は友人なんだよな？」

太陽の問いに夜明は難しそうな表情で上を向いた。

「どうなんだろうなぁ。友人って言うか親友って言うか・・・。悪友が一番的確な表現かね？　ま、仲が良かったのは確かだな。小五の時に調子に乗って義兄弟の契りなんて結んだからな」

勿論、三国志に触発されてのことである。丁度いいタイミングで教室の中から「げぇっ、関羽！？」なんて叫び声が聞こえてきた。間髪入れずに出席名簿で頭を殴った音が響く。

「今のは・・・」

「何言ってんだ一夏の奴」

教室から聞こえた叫び声に太陽は目を丸くし、夜明は額に手を遣りながらため息を吐く。

『それではＳＨＲを終わりにする。・・・と言いたいところなのだが、もう二人ほど自己紹介を終えてない奴がいてな・・・。おい、入れ』

「う～っす」

「失礼する」

千冬に呼ばれ夜明は面倒そうに、太陽は礼儀正しく教室に入っていった。突然の登場人物、しかも現実離れした容姿の登場人物に教室は波立たぬ水面のように静まり返る。

「一応言っておくが銀髪は男子、赤髪は女子だ。自己紹介しろ」

「了解っす。どっちからやる？」

「では、私からやらせてもらうぞ」

「どぞどぞ」

教壇の上に立った太陽はしゃんと背筋を伸しながら教室を見渡した。

「夕暮太陽（ゆうぐれたいよう）だ。一応性別は女、以後見知りおきを」

「「「「「「「「・・・・・・・・」」」」」」」」

自己紹介に対して返ってきたのは数秒の沈黙。そして、

「「「「「「「「キャアーーーッッッ！！！」」」」」」」」

爆発するような歓声だった。

『何あの人！？　すごく格好ぃぃ！！』

『まさか千冬様みたいなタイプの人がもう一人いるなんて・・・夢みたぃ！』

『あの切れ長の目で睨んで欲しぃ！！』

びっくりして目を丸くしている太陽を尻目に女子のざわめきは加速していく。ヒュッ、と何かが空気を切り裂いた。女子生徒達が千冬が出席名簿を振り下ろした音だと気付くのに時間は要さず、教室はさっきと同様静まり返った。

「次ぎ」

「あいよ～っと」

太陽に変わって、次は夜明が教壇に上がる。

「月光夜明（げっこうよあけ）だ。ま、気楽に頼むぜ」

女子生徒が惚けた表情で夜明を凝視する中、夜明は目的の人物を見つけてにやっと口角を上げた。

「俺が旅に出たのが小学校卒業と同時だから・・・三年ぶりか。元気してたか、一夏？」

物語は始まった。

オリジナルキャラ設定（前書き）

指摘があったので修正します。

オリジナルキャラ設定

取り敢ず、オリジナルキャラ設定だ！！

キャラクター名、月光夜明（げっこうよあけ）
身長、１７５，９？
体重、６８，７？
性別、男
趣味、悪戯、人をからかうこと、夜空を見上げる、アクセサリー作り
好きな
物、バイク
人、友人
食べ物、魚類（特にエビ）
嫌いな
物、泣き顔（特に女性の）
人、他人を傷つける者
食べ物、トマト
容姿、上の上
瞳、銀
髪、銀（長さは腰まであり、翼の形をした髪留めを使って項（うなじ）で束ねている）

体付き、　長身痩躯。ほとんどが筋肉のためひ弱ではない
性格、風のように飄々としていて、雲のように掴み所がない。とにかく自由な奴で千冬でさへその奔放さには手を焼く。基本的に悪戯好きではあるが、他人に迷惑を掛けない悪戯をする。
生い立ち
孤児。五歳の頃に孤児院を飛び出し、死にかけていたところを千冬に拾われそのまま織斑家に住むことになる。一夏とは小一の頃からの付き合いでほぼ以心伝心している。喧嘩が異常に強くて、その髪から『白銀修羅』と呼ばれ、不良共から恐れられた。箒とは友人で、鈴とも顔見知り。小学校を卒業すると同時に自分探しの旅、改め世界一周の旅に出た。その途中で太陽に出会い、専用ＩＳ『レイジングウィング（不屈の翼）』を受け取る。

専用ＩＳ、レイジングウィング（不屈の翼）
世代、第４世代
制作者、夕暮太陽

待機状態、蒼い翼を模したネックレス
外見、白を基調とした装甲。背中部分には四枚の高出力推進翼があり、外側の推進翼にドラグーン、内側の推進翼にプラズマ集束砲が備わっている。腰部には二つ折り式の電磁レール砲があり、腹部には大出力ビーム砲がある。

詳細、近、中、遠、全ての距離でオールラウンドに立ち回れる全距離対応型ＩＳ。ほとんどの武装が大量にエネルギーを使用するため従来のエネルギー供給では戦闘は疎か、機動さへままならない。が、シールドバリアに回していたエネルギーのほとんどを攻撃、機動に割くことによって戦闘が可能、従来のＩＳを上回る攻撃力と機動力

を得る。その代償にシールドバリアが異常なまでに脆く、数回の攻撃で破壊され、シールドバリアが破壊されると強制的に稼働が停止される。防御に関しては両腕のビームシールドしか考えていない、『当たらなければどうということはない！』を地で行くＩＳ。マルチロック攻撃を使用すると機体に過度な負担がかかる為連続使用は出来ない。タイムラグはおよそ五分。

武装

・高出力ビームライフル

二挺のビームライフル。連結することによってロングレンジの射撃も可能。

・腹部大出力ビーム砲

腹部に装備された大出力ビーム砲。腹部に固定されてるため真正面にしか撃てない。レイジングウィングの装備の中で最も威力のある装備。

・腰部電磁レール砲

両腰部の電磁レール砲。この装備はスラスターであると同時にビームサーベルも収納することが出来る。

・ビームサーベル

高出力ビームサーベル。夜明は主にこれを二刀流で使用する。

・ビームシールド

両腕部のビームシールド。ビームを盾として展開する。出力を調整することで防御面を調節することが出来る。その防御力は大出力ビームの直撃を防ぐ。

・スーパードラグーン

外側の推進翼の小型機動兵器。夜明の脳波に反応して動く。

・プラズマ集束砲
内側の推進翼のプラズマ集束砲。腹部大出力ビーム砲に次ぐ威力を有している。

こんな感じになりました。指摘してくださった葵様、どうでしょうか？　もし何か変なところがあったら教えてください。

これは・・・う～ん・・・

オリジナルキャラ設定（後書き）

凡に、この機体の詳細はフリーダムのＷＩＫＩを見ながらやりました。

何か・・・強すぎる気が・・・

なので設定を見直しました。

もしよろしければ武器の名前を考えてください！！

武装がほとんどフリーダムと被ってますが・・・見逃してください！！！（土下座）

旧友との再会

「・・・よ、あけ・・・なのか？」

二人が、正確には夜明が教室に入ってきてから唖然としていた一夏は絞り出すように囁きながら夜明を指さした。夜明は悪戯が成功した子供のような屈託のない笑みを浮かべる。

「おいおい。高々三年間離れてたくらいで俺の面忘れちまったのか？　夜明、悲しい・・・」

「・・・はっ、忘れるわけねぇよ」

「そりゃ重畳。なら、もう一つの事も忘れてねぇよな？」

あぁ、と一夏は笑みを浮かべながら立ち上がる。

「俺とお前、織斑一夏と月光夜明は」

「この世に並び立つ者なき」

「「二人で一人の・・・大馬鹿野郎だ」」

千冬と太陽以外の女子がずっこけたのは致し方のないことだろう。そんな周囲をまったく意に介さず、二人は爆笑しながらがっちりと握手を交わした。

「会いたかったぜ一夏！」

「それはこっちの台詞だ、夜明！」

篤い友情で結ばれた男子が握手を交わす。中々良い画だが、如何せん暑苦しい物がある。背景に炎を燃やしている二人を現実に引き戻すべく、千冬は大きく咳払いをした。

「感動的な場面を遮ってなんだが授業を始める。織斑、月光、夕暮、席に着け」

一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わって休み時間。

「で、お前はこの三年間何をしてたんだ？　小学校卒業したと思ったら置き手紙一枚置いて世界一周の自分探しの旅に出やがって」

「悪かったって」

一夏は椅子の背もたれを前にして、後ろの席に座っている夜明を見た。今現在、この教室には学園にたった二人しかいない男子を一目見るべく、学園中から女子が集まってきていて異様な雰囲気に包まれていた。物理的な威力があれば蜂の巣になっているであろう量の視線が集まっているが、二人は特に気にする様子もない。一夏は三年振りに再会した友人の話を聞きたいらしく、夜明は最初（はな）から女子の視線なんざ気にしていなかった。

「そうだな。色々と話すことはあっけど、まずはこいつからだな」

夜明は後ろの席で読書をしている太陽に視線を向けた。太陽はちらっと夜明を見やるが、すぐに視線を手元の本に戻す。

「気になってたんだけど誰なんだその人？　お前の恋人か？」

「違ぇよ」

にべもなく否定する夜明。ボフンと太陽の頭が爆発したのを二人は知らない。

「お前が俺の相棒第一号だとすれば、太陽は相棒第二号だな。太陽、こいつが俺が言ってた一夏だ」

「織斑一夏だ。よろしく」

太陽は顔を隠すように持ち上げていた本を少しだけ下げ、視線だけを合わせて一夏に軽く会釈した。太陽の態度にちょっぴり傷つく一夏。

「・・・なぁ夜明。俺、何か夕暮に嫌われるようなことしたかな？」

「いや。こいつは俺以外の誰に対してもこんな感じさ。良い奴なんだけど、その所為で誤解されやすいんだ」

はぁ、と夜明がため息を吐いた時だ。

「ちょっといいか」

「え？」

「あ？」

突然話しかけられた。二人が怪訝な表情をしながら振り返ると、そこには篠ノ之箒が立っていた。

「誰かと思えば箒じゃねぇか。相変わらずおっかねぇ面してんな」

「そう言うお前こそ相変わらず軽薄な面をしているな、夜明」

「おぉ、辛辣」

六年振りに再会した友人の軽口に、箒はかなりマジな様子で軽口を叩き返す。ケラケラと楽しそうに笑う夜明を一睨みし、箒は一夏に

視線を向けた。

「廊下でいいか？」

「お、おう」

「いってら～」

すたすたと廊下に行く二人に、夜明はヒラヒラと手を振る。グワッシッ。

「お前も来い」

「いや～ん。一夏君のえっち～♪」

「気色の悪い声を出すな！！」

一夏に首根っこを掴まれた夜明。そのままずるずると廊下に引きずられていく。

「・・・」

終始無言を貫いていた太陽が本から視線を上げると、前の席には一夏に引きずられて行ったはずの夜明が座っていた。何故か制服の上のみを脱いでいる。

「秘技、変わり身の術ナリィ～」

ニンニン♪　と楽しそうに手を組んで印のような物を結ぶ夜明に、太陽は微笑しながら次のページを捲った。

「夜明。あのポニーテールの女子は誰なんだ？」

「あぁ、あいつ？　あいつは篠ノ之箒。俺と一夏の小学校の頃の友達でな。よくからかって遊んでたんだが、小四の終わり頃に転校しちまってな」

「転校か？」

「・・・身内の関係上、な」

「身内？　篠ノ之・・・あぁ、成る程」

どこか遠い表情をしている夜明が言いたいことを理解し、それ以上太陽は何も追求しなかった。パァンッ！！

「一夏に学習能力は無ぇのか？」

夜明の呟きに太陽は無言で肩を竦めた。

「で、あるからしてＩＳの基本的な運用には現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合、刑法によって罰せられ・・・」

副担任、山田真耶先生がすらすらと教科書の内容を読み上げていく。太陽は礼儀正しく授業を受けているが、夜明は欠伸を噛み殺すのに必死で全く聞いていなかった。

（暇だ・・・）

それが授業を受けた夜明の正直な感想だ。机の上にどっかりと積まれた五冊の教科書は既に内容を読破、理解してるので開く意味がない。暇潰しに視線を教室内に走らせようとするが、教室の端にいる千冬の存在を思い出し、慌てて意識を黒板へと集中させた。そんなことをしていようものなら確実に出席名簿の一撃が飛んでくるだろう。

（早く終わんねぇかな・・・）

再び込み上げてきた欠伸を噛み殺すべく、夜明は口元に手をやった。ふと、前の席に座っている一夏に視線を向ける。さっきから教科書、山田先生、隣りでノートを記入している女子の順に視線を走らせていた。そんな一夏の後ろ姿を見ながら、夜明は内心良い暇潰しが出来たと喜んでいた。

トントン。と、夜明の指が一夏にギリギリ聞こえるくらいの音を奏でる。ピクン、と一夏の肩が揺れたのを見て、今度は不規則なリズムで机を叩き出した。これは夜明と一夏が小学生の頃、授業中に教師に悟られないように会話をするために生み出した意思伝達方法だ。すぐさま一夏も夜明と同じように机を叩き出す。ちなみに内容はこうだ。

『一夏』

『夜明か!?　よくこれのこと覚えてたな』

『人間、必死で考えた物は忘れないもんさ。早速本題だが一夏。お前、山田先生が言ってること全く理解できてないだろ?』

『・・・分かるか?』

『そんだけ挙動不審になってりゃな・・・。入学前に渡された参考書は読んでないのか?』

『古い電話帳と間違えて捨てちまった』

『・・・お前、この三年で取り返しがつかないほど馬鹿になってないか?』

『否定・・・出来ねぇ・・・』

『・・・放課後に大まかなこと、教えてやろうか？　姐さんにばれたら事だろ』

『本当か！？　悪い、恩に着る！』

『よせよ、俺とお前の中じゃねぇか』

ここでこの話は終わり。・・・かと思われた。

「織斑、月光。さっきから机をトントン叩いているがどうかしたのか？」

突然声をかけられ、二人はギョッとしながら千冬の方を見る。

「な、何で分かったんだ、千冬姉！？」

パァンッ。

「織斑先生と呼べと言っているだろうが。お前等はこの学園の二人だけの男子だからな、他の生徒よりも注意深く観察している」

「流石は姐さん。実力も化け物並みなら観察力も化け物な」

ザシュッ。

「し、出席名簿じゃ有り得ない音が俺の頭から！？」

ウルトラセブンのアイスラッガーよろしく頭に突き刺さった出席名

簿を押さえながら、夜明は床の上をのたうち回る。見事なフォームで出席名簿を投擲した千冬はごく自然な動作で夜明の頭から出席名簿を抜き取り、腰に手を当てながら二人を見下ろした。

「で、どうしたんだ？」

千冬に再度問われ、二人は困ったように顔を見合わせた。

「あの、織斑君に月光君。何処か分からないところでもあるんですか？」

わざわざ山田先生が訊ねてきた。夜明は諦めたように頭を掻きながら、親指で一夏を指さす。

「俺は大丈夫なんですが、こっちが問題ありです」

「ちょ、夜明！？」

「一夏。この際だからもうゲロっちまえ。最初で躓いたまま進むと確実にあとで後悔するぞ」

「・・・だよなぁ」

夜明の正論に一夏は黙り込む。

「分からないところがあったら聞いてください。何せ私は先生ですから」

えっへんと胸を張る山田先生。その教師らしい姿（？）に頼ってみようと思ったのか、一夏は意を決して山田先生を見た。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど分かりません」

「全部、だろ？」

「はい、全部わかりません」

「え・・・、全部・・・ですか？」

山田先生の表情が若干引きつっている。

「無理ねぇな」

「・・・（コクリ）」

腕を組む夜明の後ろで太陽は静に頷いた。

「えっと・・・今の段階で授業が分からないって人はいますか？」

挙手を促す。シーン・・・。彼女たちはエリートであるため必然、こうなる。かなり納得がいってない表情の一夏の肩に、夜明は静に手を置いた。

「諦めろ、一夏。これが現実だ」

「・・・織斑。入学前に渡された参考書は読んでいないのか？」

千冬の問いに一夏はとても正直に答える。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

ゴガン！！

「必読と書いてあっただろうが、馬鹿者」

心底呆れた様子で言うが、千冬の声は拳で轟沈された一夏に届くことはない。千冬は一夏の身体の中から抜け出そうとしている魂を必死で捕まえている夜明に目を移した。

「月光、お前はどうなんだ？」

「俺すか？　全部読みましたよ。何ならここで暗記した内容を音読しましょうか？」

「・・・いや、いい。その態度から嘘でないことは分かる。すまないが織斑を手伝ってやってはくれないか？」

千冬の頼みに夜明は快く応じる。

「いいっすよ。一週間で覚えさせます」

夜明が千冬の頼みを承諾するのと、太陽が一夏の魂を元に戻したのが同時だったのは余談だ。

旧友との再会（後書き）

レイジングウィング（不屈の翼）の武装の名前を募集。気軽にお願いします。

次はあの金髪娘が登場。

指摘、感想ばっちこーい

「ちょっとよろしくて？」

「へ？」

「あぁ？」

二時間目の休み時間。一夏は夜明に基本的な単語の意味を教えて貰っていた。そこに突然声をかけられ、二人は素っ頓狂な声を出す。二人に声をかけてきたのは白人の女子だった。金髪の地毛で、白人特有の青い瞳がやや吊り上がっている。如何にも『今』の女性の雰囲気だを出している。昨今、ＩＳの所為で女性はかなり優遇されている。その優遇は最早行き過ぎていて、女子＝偉いという構図を当たり前としている女性も珍しくない。そして正直な話、一夏はこの手合いを苦手、夜明に到っては心底嫌っていた。

（誰だこの人？　夜明、お前の知り合いか？）

（冗談言うなよ。俺がこの手の奴が死ぬほど嫌いだっての知ってんだろ）

小声で話す二人に業を煮やしたのか、その女子は腰に手を当てながら再び声をかけてきた。

「聞いています？　お返事は？」

「あ、あぁ。訊いてるけど、どういう用件だ？」

「やめとけよ一夏。どうせ碌でもないことだろうから、訊くだけ無駄ってもんだ」

一夏は多少困惑しながらも普通に返事を返すが、夜明は初っ端から敵意を隠すこともせず、剥き出しにしていた。心なしか、その女子を見るその目も鋭くなっている。金髪の女子は夜明の鋭利な視線に若干たじろいたが、一回咳払いをしてわざとらしく声を上げた。

「まぁ！　何ですの、そのお返事に態度は？　私に声をかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度という物があるのではないかしら？」

金髪の女子の高飛車な物言いに一夏は困ったように表情を苦くし、夜明は露骨に舌を鳴らす。この女子が女性＝偉いと思っている者の典型だとわかり、心中うんざりしているところだ。

「悪いな。俺たち、君が誰だか知らないし」

「と言うか誰だよ手前？　名乗れ」

実際に二人はこの女子を全く知らない。一夏は担任の教師が千冬だったことの方が百倍ショッキングで、夜明は全員の自己紹介が終わってから教室に入ってきたのだから仕方ないことだろう。が、金髪の女子はそれがお気に召さなかったらしく、吊り目を更に吊り上げ、如何にも男性を見下した口調で続けた。

「この私を知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリス代表候補生であり、入試主席のこの私を！？」

「おぉ、まったく知らん」

「何で外国の代表候補生のことなんざ知ってなきゃいけねぇんだよ」

しゃあしゃあと言ってのける二人。二人の態度にセシリアが白い肌を真っ赤にして怒鳴ろうとした時、太陽が口を開いた。

「イギリス代表候補生セシリア・オルコット。専用ＩＳ『ブルー・ティアーズ』。ＩＳ学園入学試験で教官を倒した唯一の女子だ」

「へぇ、よく知ってんな」

すらすらと太陽の口から出てくる説明文に、夜明は素直に感心した。

「入学前にある程度調べておいた」

「あら。それは殊勝ですわね」

セシリアは満足そうに頷いた。それに反するように、太陽は冷めた目でセシリアを見据える。

「今日初めて実物を見たが・・・記憶する価値は無さそうだな」

「そいつは同感だ」

「な、何ですって！？」

セシリアは声を荒げた。それはどちらかというと太陽にではなく、太陽に同意した夜明に対して向けられた物のようだ。

「そういや夜明。一つ訊きたいことがあるんだけど」

「何だ？」

「代表候補生って何だ？」

周囲の女子がずっこけた。ずっこけこそしなかったものの、夜明は珍獣を見るような目で一夏を見た。

「一夏。幾ら何でもそれは物事を知らなさすぎ・・・いや、今までＩＳに触れたことがないんだから仕方な、でもテレビにも出てるしな・・・」

ウンウンと呻いている夜明に替わって、太陽が一夏に説明した。

「織斑。代表候補生というのは国家代表ＩＳ操縦者、その候補生として選出された者のことだ。と言うか単語から連想すれば分かるだろ？」

「おぉ。言われてみれば確かに」

ポン、と手を打つ一夏に脱力したのか、太陽は未だに呻き続けている夜明を現実に引き戻しに掛かる。

「つまり！　エリートなのですわ！」

ズビシッ、とセシリアは一夏の鼻先に指を突きつけた。

「本来なら私のような選ばれた人間とあなた達のような者がクラスを同じくするだけでも奇跡・・・幸運なのよ。そこのところをもう少し理解していただけないかしら？」

「「そうか、そいつはラッキーだ」」

「・・・馬鹿にしてますの？」

「お前が幸運だって言ったんだろうが・・・」

「ちなみに、俺は純粋に馬鹿にしてる」

太陽は呆れたように突っ込み、現実に戻ってきた夜明はセシリアに対する嫌悪感を隠そうともしない。再び怒鳴りそうになるセシリアだが、どうにか怒りを飲み込む。

「大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一、いえ、今は二人ですか？　どうでもいいですわね。少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、とんだ期待はずれですわね。そちらの方も女性に対する礼儀が全くなっていませんし」

「夜明はともかく、俺に何かを期待されても困るんだが」

「お前に払う礼儀なんざ欠片ほども持ち合わせていねぇよ」

「ふん。まぁでも、私は優秀ですからあなた達のような人間にも優しくしてあげますわよ」

これが優しさなのだとすれば、全人類が優しさで溢れかえっていることだろう。夜明と一夏はアイコンタクトを交わし、セシリアを無視して席に着いた。

「で、夜明。この単語の意味なんだが」

「あぁ、そいつは「ちょっとお待ちなさい！」・・・いい加減うざくなってきたな・・・」

またセシリアに勉強の邪魔をされ、夜明の身体からうっすらと殺意が湧いてきた。

「っ！？」

夜明の殺意に反応した箒は素早く竹刀を構え、一夏と太陽はどうどうと夜明を宥めた。夜明ほどでは無いにしろ、一夏はうんざりしながら視線だけをセシリアに向ける。

「今度は何だよ？」

「『何だよ？』でわありませんわ！　この入試主席の私が教えて差し上げると言っているのに、何故何も訊かないのですか！？」

「いや、夜明で間に合ってるし」

「なっ！？　あなたは入試で唯一人教官を倒した私よりも、その男から教わった方がいいと言うのですか！？」

全く以てその通りだ。一夏はその言葉を死ぬ気で押さえ込んだ。どっからどう考えても、男性を見下したセシリアに教えて貰うよりも、三年間面を合わせなかったとは言え、気心も知れている夜明から教えて貰った方が気分も能率も遙かにいいに決まっている。だが、その事を正直に言ったら、更に面倒なことになるのは火を見るよりも明らかだ。どうしたもんかと一夏が考えていると、夜明がセシリア

のある単語に反応した。

「唯一人？　入試ってあれだよな？　ＩＳを動かして闘うってやつ？」

「それ以外に入試など無いでしょうに」

「それってお前も倒してなかったっけ、一夏？」

「あぁ、倒してるな」

「は・・・？」

もっとも、一夏の場合、突っ込んできたのを回避したら相手が勝手に壁に激突してそのまま動かなくなっただけという、勝負と呼ぶには余りにもお粗末な物だった。そんなことを知らないセシリアは余程ショックだったのか、目を大きく見開いている。

「わ、私だけだと訊きましたが？」

「女子では、と言うしょーもないオチだろうな」

太陽の言葉が一夏と夜明のツボを突いたのか、二人は腹を抱えて爆笑し始めた。

「そ、そ、そう言えば夜明、お前はどうだったんだ入試？」

顔を真っ赤にしているセシリアに悪いと思ったのか、一夏は笑いを抑えながら訊ねた。

「お、お、お、お、俺の場合三十分間ノンストップで闘ってたんだけど、何時まで経っても決着がつかないだろうからって引き分けってことになったんだ。でもあのまま続けてたら確実に負けてただろうな。・・・女子では・・・ギャハハハハハハ！！！　やべっ、笑い死ぬーっ！！」

机をバンバン叩きながら夜明は笑い続ける。セシリアを気にする様子はまったくと言っていいほど無い。その時、丁度よく三時間目開始のチャイムが鳴った。

「・・・また後で来ますわ！　逃げないことね、よくって！？」

席に戻っていくセシリアの後ろ姿に夜明は一言。

「逃げるって何処へ？」

「屋上とかじゃないのか？　夜明、お前が闘ったっていう教官って誰だったんだ？」

「はて、誰だったかねぇ？　忘れちまったよ」

一夏の問いを飄々と受け流し、夜明は授業の準備を始めた。こうなると、何も教えてくれないのを一夏は長い付き合いで知っているので、質問の矛先を太陽に変えた。

「夕暮、夜明が闘った教官って誰だか知ってるか？」

「・・・・・・」

太陽は周囲を素早く見回し、一夏にだけ聞こえるように耳元で囁いた。

「織斑教諭。つまりお前の姉君だ」

「・・・マジか？」

太陽は一度だけ頷き自分の席に戻っていった。

「・・・夜明。お前、千冬姉と引き分けるなんて、どんだけ強くなってるんだよ？」

この空白の三年間で、親友は何処か遠くの所に行ってしまったのかもしれない、と一夏は漠然と考えるのだった。

「それでは、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違い、教壇に上がっているのは山田先生ではなく、千冬だった。

「あぁ、その前に再来週行われるクラス対抗戦の代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように千冬は言う。千冬の話を要約すると、早い話がクソ面倒な役職だ。しかも一年間は変更できない。当然、夜明と一夏はそんな面倒っちいものをやりたくないので無言だった。

「はい。織斑君を推薦します！」

どうやら現実はそこまで優しくないらしい。今のところは一夏限定で。

「私もそれがいいと思います」

「では候補者は織斑一夏・・・他にはいないのか？　自薦推薦は問わんぞ」

「ちょ、ちょっと待った!?　俺!?」

つい、一夏は立ち上がってしまう。そして浴びせられるのは『彼な

らやってくれる』という無責任且つ勝手な眼差し。

「織斑。席に着け、邪魔だ。他にいないのか？　いないのなら無投票当選だぞ」

「ちょっと待ってくれちふ、織斑先生！　なら俺は夜明を、月光夜明を推薦する！」

「待ちやがれ一夏！　てめ、自分がやりたくないからって俺を巻き込むんじゃねぇよ！！」

一夏同様、夜明は思わず立ち上がってしまう。それがいけなかった。

『あぁ、確かに』

『月光君もやってくれそうだよね』

『どっちがなってもおもしろくなりそう！』

教室の至る所からそんな声がチラホラ・・・。

「一夏ぁ！！　手前の所為で教室がそれっぽい空気になっちまったじゃねぇか！！　どう責任取るつもりだこの野郎！！」

「うるせぇ！！　俺だってそんな目立つことやりたくねぇんだよ！！」

二人の口論はヒートアップ、ついには殴り合いに発展する。

「あわわわわ、お、織斑先生ぇ～」

山田先生が涙目で千冬の袖を引っ張る。千冬は殴り合いを止めるでもなく、殴り合いを傍観していた。

「もうこの際だからこれで負けた方が代表者でいいだろう」

かなり投げ遣りに千冬が言ったその時、

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

甲高い声が教室に響いた。互いの顔面に必殺の拳をぶち込もうとしていた夜明と一夏は、取り敢ず互いの胸ぐらを掴み合ったまま手を止め、声の発生源であるセシリアに目を向けた。

「そのような選出は認められません！！　大体、男がクラス代表だなんていい恥曝しです！　このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「「「三」」」

三人のカウントダウンが重なった。一夏、太陽、千冬の物だ。

「実力から行けば私がクラス代表になるのは当然、それを物珍しいからと言う理由で極東の猿二匹にされては困ります！　私はこのような島国までＩＳ技術の修練に来たのであってサーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

「「「二」」」

「いいですか！？　クラス代表とは実力トップがなるべき、そして

それは私ですわ！」

「「「一」」」

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては苦痛」

「「「零」」」

カウントダウンが終了すると同時、轟音と共に教室が大きく揺れた。一夏、太陽、箒、千冬を除いた全員が机にしがみつく。教室の床に震脚を打ち込んだ張本人、月光夜明は無表情にセシリアを見据えた。

「金髪の女、んな事ぐちぐち言ってんならさっさと国に帰りやがれ。うざったすぎて反吐が出る。もっとも。帰ったところでお前を待ってるのはクソまずい飯と古臭いカビの生えた歴史だけだけどな」

「なっ・・・」

怒髪天を衝く言わんばかりにセシリアは顔を真っ赤にして夜明を睨む。対する夜明はごく親しい者しか分からないくらい静かな怒りを燃やしていた。この教室内で夜明の怒り具合が分かるのは一夏、太陽、箒、千冬だけだ。ちなみに、夜明がどれくらい怒ってるのかというと、怒髪天を貫く、とだけ言っておこう。

「あ、あ、あ、あなた！　私の祖国を侮辱しますの！？」

「侮辱？　寝言は寝て言え。手前の祖国なんぞに侮辱する価値は欠片も存在しねぇよ」

夜明は一切臆することなくセシリアを睨む。そんな夜明の態度が更に癪に障ったようで、セシリアは机を叩きながら宣言した。

「決闘ですわ！！」

「上等。売られた喧嘩は買う主義だ」

「言っておきますが、わざと負けたりしたら私の奴隷にしますわよ」

「安心しろ。俺は気に入らねぇ奴は全力でぶっ潰しに行かねぇと気が済まねぇ質なんだ」

「そう？　何にせよ丁度良い機会ですわ。イギリス代表候補生、この私、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

「言ってろ」

夜明は親指で喉を掻っ切る動作をしてから席に着いた。

「それで、ハンデはどの程度つければよろしいのかしら？」

「いるか」

一瞬、教室に静寂が広がる。遅れて爆笑の渦が起こった。

「げ、月光君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強いなんて大昔の話だよ」

収まらない笑いの渦。夜明は周囲の笑いを無視しながら、胸元にある蒼い翼のネックレスを握り締めた。

「ねー、月光君。今からでも遅くないからセシリアにハンデつけて貰ったら？」

斜め前の女子が気さくに話しかけてくる。その苦笑と失笑が混じった表情は、夜明の敗北を確信しいる表情だ。

「いらねぇって言ってんだろうが。喧嘩ってのは一対一、互いに全力でやるもんだ」

「それは代表候補生を舐めすぎだよ」

「一つだけ言っておく」

夜明は再び立ち上がり、教室をゆっくりと見回した。

「あんた達に一つだけ警告しておいてやるよ。俺とこいつ、月光夜明と織斑一夏を舐める奴は火傷じゃ済まないぜ。それからセシリア・オルコット、手前にはもう一つ言っておくことがある」

「あら何ですの？　やはりハンデのお願いですか？」

セシリアの嘲笑を無視し、夜明はある笑みを浮かべた。その笑顔はとても獰猛で、とても綺麗で、とても獣じみていて、とても・・・誇り高かった。

「言っとくが俺の魂は・・・

不屈（レイジング）だぜ？」

オリジナルＩＳ設定（前書き）

武装の名前は　煌　焔　様、ブラックサレナ様の意見を参考にしています。

ご協力ありがとうございます！

オリジナルＩＳ設定

ＩＳ名『レイジングウィング（不屈の翼）』

世代、第四世代

制作者、夕暮太陽

待機状態、翼を模した蒼いネックレス

外見、他のＩＳに比べ線が少し細い。白を基調とした装甲を持つ。背中部分に四枚の高出力推進翼があり、外側の推進翼に半自律高機動砲塔、内側の推進翼に超荷電粒子砲が備わっている。腰部には二つ折り式の電磁砲があり、腹部には超高密度プラズマ収束拡散砲がある。

詳細、近、中、遠、全ての距離でオールラウンドに立ち回れる全距離対応型ＩＳ。ほとんどの武装が大量にエネルギーを使用するため従来のエネルギー供給では戦闘は疎か、機動さへままならない。が、シールドバリアに回していたエネルギーのほとんどを攻撃、機動に割くことによって戦闘が可能、従来のＩＳを上回る攻撃力と機動力を得る。その代償にシールドバリアが異常なまでに脆く、数回の攻撃で破壊され、シールドバリアが破壊されると強制的に稼働が停止

される。防御に関しては両腕のビームシールドしか考えていない、『当たらなければどうということはない！』を地で行くＩＳ。常に全ての武装が装備されているため、収納、展開の必要がない。マルチロック攻撃を使用すると機体に過度な負担がかかる為連続使用は出来ない。タイムラグはおよそ五分。背部の推進翼を広角展開することで高速機動形態『ハイマットモード』に移行する。

武装

胸部装備
・牽制用６５ｍｍガトリング砲【スティンガー】

肩部装備
・対地・対空迎撃用自動追尾ミサイルポッド【アクティブ・ポッド】

腕部装備
・高出力エネルギービームライフル【ウィングスター】×２
・広域ビームシールド×２

背部装備
・半自律高機動遊撃砲塔【シューティング・ビット】×６
・半自律高機動突撃砲塔【フィン・ファング】×２

・対軍用超荷電粒子砲【スタードライブ】×２

腹部装備

・対軍用超高速超高密度プラズマ収束拡散自動追尾砲【スターライト・ブレイザー】

腰部装備

・１５０ｍｍ低反動超電磁砲【ディヴァイン・カノン】×２

・高出力ビームサーベル【スターライザー】×２

ワンオフ・アビリティー

名称、Ｍｏｄｅ（モード）　Ｅｘｅｌｉｏｎ（エクセリオン）

詳細、背部に装備してある四枚の推進翼に当たった光をエネルギーに変換する。

メリット、光であれば何でもＯＫ。光が当たってさえいれば無限にエネルギーを供給することが出来るので、エネルギーの事を一切考えずにマルチロックオン攻撃を使用可能。また、モードエクセリオンを発動させると武装に供給できるエネルギーのリミッターが外れ、武装の威力をほぼ無限に上昇させることが出来る。

デメリット、三分間しか使用できない。また、一度発動させると三分経つまでモードエクセリオンを解除することが出来ず、三分経過すると無傷でもＩＳの稼働が強制的に停止される。リミッターが外

れるため、武装に異常な負担を与える。モードエクセリオンを使用すると、レイジングウィングは整備が必要になるので数日間使い物にならなくなる。

特徴、モードエクセリオンを発動すると、推進翼のみが蒼くなる。

オリジナルＩＳ設定（後書き）

どうですかね？

蒼き翼？　違う！　不屈の翼だ！！

「お～い、一夏ぁ～」

「・・・うぅ」

「駄目だこりゃ。完全に処理落ちしてやがる」

放課後、一夏はぐったりと机の上に突っ伏していた。その一夏の姿を見つつ、夜明はため息を吐きながら広げていた参考書を閉じた。

「い、意味が分からん・・・」

「まぁ当然だわな。辞書でもありゃ違うんだろうけど、ＩＳの辞書なんぞ無ぇからな」

一夏は今日一日、全くと言っていいほど授業についていけてなかった。夜明がいなければ、更に悲惨になっていたのは確実だろう。

「それにしてもいいのかよ、夜明？」

「いいって・・・何がやい？」

参考書を仕舞いながら、夜明は問い返す。

「いや、何がって、今日から一週間後にあの～・・・誰だっけ？何たら・オルコットってのとＩＳで闘うんだろ？　なのに俺に勉強なんて教えてていいのか？」

一夏の問いに、夜明は気にするなと言うように軽く手を振った。

「問題無ぇよ。俺強いし」

「・・・お前のその自信はどっから出てくるんだ？」

あっけんからんと言い切る夜明に一夏は呆れたような視線を送るが、当の本人はケラケラと笑うばかり。

「でもま、身体が鈍ってんのは確かだな。後でアリーナにでも行くとしますか。お前も来るか？」

「え、いいのか？」

「あぁ。あの金髪ならともかく、お前に見られても別段困ったりはしないからな」

「そりゃいいや。実は今朝からお前がどんな風にＩＳを動かすのか見てみたいと思ってたんだ。あ、でも、訓練機の使用許可を貰うのって偉く時間が掛かるんじゃ」

「それなら大丈夫だ。だって俺」

夜明が何かを言いかけた時、教室の外に押し掛けてきている女子達を掻き分けるようにして、山田先生が教室に入ってきた。

「あぁ、織斑君に月光君。まだ教室にいたんですね、よかった～」

「何か用すか？」

「はい。えっとですね、お二人の寮の部屋が決まりました」

そう言いながら、山田先生は二人にそれぞれキーを渡す。このＩＳ学園は全寮制だ。それは男子である夜明と一夏も例外ではない。

「部屋？　俺の部屋はまだ決まって無かったんじゃないんですか？　一週間は家から通学してもらうって言われましたけど・・・夜明、お前は？」

「お前と以下同文」

二人は揃って山田先生を見た。二人の男子に見つめられ、山田先生はあたふたしながらも説明する。

「た、確かに二人とも部屋割りが決まっていなかったんですけど、事情が事情なので・・・」

つまり、ＩＳ学園は二人の保護と監視を最優先したと言うことだ。何せ夜明と一夏は前例のない『ＩＳを操縦できる男』なのだから。勧誘だの何だのは数多あるだろうし、過激な考えを持つ者達なら拉致監禁も有り得るだろう。

「成る程、納得」

「ならしゃあないよな」

「「ところで山田先生」」

ずずいと二人は山田先生に顔を近づける。

「あわぁ！？　な、何でしょうか！？」

ごっさ顔を真っ赤にしている山田先生に二人は同時に訊ねた。

「「食堂が近いのはどっちの部屋ですか？」」

「へ？　それなら月光君の部屋ですけど・・・」

拍子抜けした表情で山田先生が答えた瞬間、

「しゃおらぁっ！！」

一夏の鋭い上段蹴りが夜明の頭に襲いかかった。

「何の！！」

夜明は膝を曲げて一夏の上段蹴りを回避、曲げた膝をバネにして跳び膝蹴りを一夏の顎に放った。一夏は両腕を交差させて顎をガード。が、威力までは殺しきれず、後ろに数メートル吹っ飛んだ。床に着地すると同時に一夏は拳を構え、夜明も一夏が拳を構えたのを見て、拳を作る。おぉ！　と廊下から女子の歓声が上がった。

「どうした一夏？　その腑抜けた蹴りは？　お前、頭だけじゃなくて身体の方も弱くなったんじゃねぇのか？」

「馬鹿言うなよ。そう言うお前こそ随分とヤキが回ったみたいだな。自分探しのしすぎで平和ボケしたか？」

互いに軽口を叩き合いながら間合いを詰める。後一歩動けば相手の

間合いに入る位の距離で、二人は一端動きを止めて相手を睨んだ。

「一夏、お前に言っておくことがある」

「奇遇だな。俺もだよ、夜明」

同時に床を蹴り、拳を引く。

「「食堂は俺んだ！！」」

二人の拳が交差した。

「ふっ・・・Ｉ　ａｍ　ｗｉｎｎｅｒ・・・」

夜明はボロボロになった身体を引きずりながら寮の廊下を歩いていた。その手には、一夏から勝ち取った勲章（キー）が握られている。

「え～っと、１０２０室１０２０室～・・・あったあった」

目的の部屋を見つけた夜明は取り敢ずキーを使って部屋の中に入った。まず夜明の視界に入ったのは如何にも高級そうなベットが二つ。

「・・・（じぃ～）」

無言でベットを見つめる夜明。そして、

「とう♪」

徐ろに荷物を床に放り投げ、夜明はベットにルパンダイブ（服は脱いでないよ）で飛び込んだ。

「お～♪　こいつぁおもしれぇや♪」

トランポリンよろしくベットの上で跳ね回っていると、部屋にあるシャワー室から曇った声が聞こえてきた。

「少し静かにしてくれないか？　隣りの部屋にも迷惑だ」

「おっと、すまねぇ」

夜明が跳ねるのを止めると同時にシャワー室から出てきたのは、

「・・・何をしているんだ？　夜明？」

濡れた髪にバスタオル一枚というとってもセクスィーな姿の太陽が立っていた。

「すみません！　本当にすみませんでした！！」

夜明、一夏、太陽、箒の前で、山田先生が床に頭を打ち付けかねない勢いで頭を下げていた。どうやら、夜明と太陽、一夏と箒という組み合わせの部屋割りになったのは単純に山田先生のミスらしい。そのミスの所為で、一人の人間が殺されかけたのだから笑えない話だが。と、夜明は何故かボロボロになっている一夏を見て思うのだった。

「まぁ何にせよこれで本来の部屋割りになったんだからいいじゃねぇの。んじゃ、また明日な、太陽、箒。にしても一夏。お前よく殺されなかったな」

「自分でも今生きてることを神に感謝したいよ」

二人の後ろ姿を、正確には一夏の後ろ姿を刀のような視線で睨んでいた箒だが、二人の姿が廊下の角に消えると、少しだけ残念そうにため息を吐いた。

「大変だな」

不意に太陽が言った。少しの間、箒は何を言われたのか分からず、呆けたように太陽を見ていた。

「大変だなって・・・何がだ？」

口元にだけ笑みを浮かべながら、太陽は箒の耳元でそっと囁く。

「惚れているんだろ？　織斑一夏に？」

一気に箒の顔が爆発した。

「なななな何を言うか夕暮！　いいいい一体、何を根拠に、そそそそそそんなことを！？」

今にも木刀をぶん回しかねない程てんぱった箒の姿に、太陽の笑みは深まる。

「ほう、では惚れてないと？」

「当たり前だ！　私が一夏に惚れるなんてこと、あるわけ・・・」

箒は口をパクパク開けたり閉じたりを繰り返す。『あるわけ無いだろうが！』と続けられない箒の姿からその想いが想像できたのか、太陽は愉快そうにクスクス笑った。

「何を恥ずかしがる？　誰かを好きになるのは人として当たり前のことだ。寧ろ、誇ることだと思うがな」

「だから！　私は一夏に惚れてなど」

「篠ノ之、これはルームメイトとしての警告だ」

太陽は箒に身体を向けた。さっきまで浮かべていた愉快そうな表情は鳴りを潜め、真摯な眼差しで箒を見つめる。太陽の深紅の目に引き込まれ、箒は静かに太陽の言葉を待つ。

「誰かを好きになるのは当たり前のことであると同時にとても素敵なことなんだ。だから、その想いを自分で否定するな。誰かを好きになったのに、自分で想いを否定して、好きな相手に好きだと伝えられないのはとても・・・悲しいからな」

じゃ、と太陽は箒の肩を軽く叩いて、部屋の中に戻っていった。

翌日の朝。事故とは言え、箒の湯上がり姿を見てしまった一夏は戦々恐々としながら食堂へと向かったが、箒の態度が普通、寧ろ普段よりも軟化しているのに驚いていた。

「箒の奴、たった一日で随分と丸くなりやがったな・・・。お前が何か言ったのか、太陽？」

「・・・よあけ、・・・おさかな」

「・・・って、今のお前に何訊いても無駄か」

苦笑いを浮かべながら、夜明は鮭の切り身を箸でほぐし、太陽の口元まで運んでいった。今現在、二人がどんな姿かというと、起きているのか起きていないのか分からないくらい目を細くした太陽が、夜明の膝の上にちょこんと座っていた。夜明も太陽を膝の上からどかすでもなく、自分が使っている箸で太陽に鮭の切り身を食べさせてやり、自身も普通にご飯を食べている。二人の周囲では、女子達がもの凄く羨ましそうな目で太陽を見ていた。

「・・・夜明。何で夕暮はお前の膝の上に座って、しかもお前に飯を食べさせて貰ってるんだ？」

「こいつは朝が尋常じゃなく弱くてな。起床して一時間はまともな活動が出来ない。で、俺が飯を食わせてやってるって訳だ」

「・・・よあけ・・・みそしる」

「へいへい」

一夏に説明しながら、夜明はこぼさないように椀を太陽の口元まで運んで飲ませてやる。その光景に軽く胸焼けを覚え、一夏は視線を真っ正面に向けた。

「ん、どうした箒？」

「へ？　い、いや！？　何でもないぞ・・・」

ボソボソと何かを呟きながら、箒は食べるのに集中し始めた。が、その視線は夜明の膝の上に座った太陽と、目の前に座っている一夏を往復している。

「何だってんだ？」

「さぁ？」

「気になっていたんだが夜明。お前、オルコットとの決闘は訓練機

でやるのか？」

休み時間、夜明は箒の問いに首を振った。

「いんや。流石に訓練機で勝てるほど甘い相手でもあるまいよ。てか、俺専用のＩＳ持ってるからな」

夜明のこの台詞に教室がざわめいた。

「え？　月光君、それって本当！？」

「てか一年、しかも代表候補生でもないのに専用機持ち！？」

「あぁ。ほれ」

周りに集まった女子達に見えるように、夜明は制服の胸元を軽くはだけた。この時、女子の半分が鼻血の海に沈んだが、この際無視しよう。

「ほぉ。それがお前のＩＳの待機状態か？」

「おう」

箒は夜明の胸元で光る、蒼い翼のネックレスに注視した。唯一人、何が何だか分かっていない一夏だけが置いてけぼりを食っている。

「だが、専用機は国家か企業に所属している人間にしか与えられていないだろう。何故、お前が持っているんだ？」

「旅の途中で色々とあってな。何か各国の連中がぐだぐだ言ってる

らしいけど、今は日本の代表候補生になるってことで話が落ち着いてる」

おぉ～、と声が上がる。一夏は話についていけず、相変わらず読書をしている太陽に訊ねた。

「なぁ夕暮、専用機持ちってそんなに凄いことなのか？」

「当然ですわ」

太陽が答えようとすると、別の所から答えが返ってきた。見ると、セシリアが立っていた。相変わらずの腰に手を当てたポーズで。

「さっきの授業でも言っていましたけど、世界でＩＳは４６７機。つまり、その中でも専用機を持つ者は全人類六十億超の中でもエリート中のエリートですわ」

「「そ、そうなのか・・・」」

「そうですわ・・・って、何故、専用機を持っているあなたまで驚いてらっしゃるの？」

「人類って今六十億越えてたのか・・・」

「全世界のお父さんお母さん、ご苦労様です」

「驚くところはそこではないでしょう！！」

セシリアが両手で机を叩いたので、教科書がポロリと落ちた。夜明は露骨に舌を鳴らし、セシリアを無視して一夏に訊ねる。

「一夏。お前の専用機って確か、俺とこいつが闘う日に来るんだよな？」

「あぁ。ちふ・・・織斑先生が、当日勝った方と闘うことになるから覚悟しておけって言ってたな」

「あら、では当日は二連戦ということになりますわね。もっとも、私が勝つのは目に見えていますが」

「ほざいてろ、くそ女」

ビシッとセシリアの額に血管が浮かぶ。

「・・・どうやらあなたには一度自分の立場という物を叩き込まなければいけなさそうですわね・・・」

「やれるもんならやってみな」

二人が動こうとしたその時、授業開始を告げるチャイムが鳴った。

「命拾いしましたわね」

「互いにな」

教室に入ってきた千冬を見ながら、夜明は席に着いた。

「そうだ。一夏、お前にだけは教えといてやるよ」

「教えといてやるって・・・何を？」

夜明は悪戯っぽい笑顔を浮かべ、一夏に囁いた。

「俺のＩＳは世界に存在する全ＩＳ４６７機、そのいずれにも該当しない」

「は？　それってどういう意味だ？」

「当日のお楽しみ♪」

話はこれで終わりだと、夜明はノートを開いた。一夏は胸の中にもやもやした物を感じながら授業に臨んだ。案の定と言うべきか、千冬にぶん殴られたのは言うまでもない。

「一夏、気分はどうだよ？」

ピットへとやって来た夜明は軽く上を見上げながら一夏に訊いた。その視線の先には専用ＩＳ『白式』を身に纏った一夏の姿がある。

「あぁ、悪くないな。この調子なら初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）処理もすぐ終わりそうだ」

「そいつは重畳。初期設定だけのＩＳと闘うなんて萎えるからな。さて、と」

夜明は腰に両手を当てながら、アリーナへと続くピットゲートを見据えた。

「俺は俺の闘いに赴くとしますかな」

「随分と余裕だな。相手は仮にも代表候補生だと言うのに」

余裕綽々、と言うよりも緊張感が欠片も感じられない夜明に千冬が声をかけてくる。

「相手が代表候補生だろうが代表だろうが関係ありませんよ。俺は不屈の翼で飛ぶ。それだけです」

肩を竦めてみせる夜明に、千冬はふっと微笑を浮かべた。

「確かに、お前は昔からそう言う奴だったな。・・・調子に乗りすぎた小娘に灸を据えてこい、少しきつめにな」

「委細承知っと」

何時もと変わらず飄々とした夜明の態度に満足したのか、千冬は夜明の背を思い切り叩いた。結構な痛みに少し顔を歪めていると、今度は太陽と箒が立っていた。

「よ。俺の勝利の凱旋を祝うにはちと早すぎるぜ」

夜明の軽口に苦笑を浮かべながら、箒は夜明の肩に手を置く。

「あの金髪に日本男児が何たるかを見せてやれ」

「あいよ」

続いて太陽が目の前に立つ。

「夜明」

「何だ？」

「やりすぎるなよ？」

がくっとずっこけそうになる。

「・・・お前なぁ、少しは激励とかしてくれてもいいんじゃないの？　俺泣いちゃうよ？」

「なら泣け。いくらでも私の胸を貸すぞ」

「・・・お前って時々並みの男なんかよりも数億倍男らしくなるよなぁ・・・」

やれやれと首を振りながら、口元に笑みを浮かべ、夜明は太陽の頬を軽く撫でた。

「お前からもらった翼、広げさせてもらうぜ。行くぞ、レイジングウィング（不屈の翼）！！」

夜明が名を叫んだ瞬間、胸元のネックレスが輝き、二対の蒼い光の翼が発生して夜明の身体を包んだ。

「な、何故そのＩＳをあなたが！？」

セシリア・オルコットは混乱していた。ピットゲートから飛び出してきたそのＩＳに。そのＩＳの背部に展開された四枚の推進翼に。

ー戦闘待機状態のＩＳを感知。操縦者不明。ＩＳネーム不明。戦闘タイプ不明。特殊装備不明ー

ブルー・ティアーズが目の前のＩＳを謎の存在だと告げる。だが、セシリアはそのＩＳを知っていた。

一年前、突然現れた存在しないはずの４６８機目のＩＳ、四枚の翼を持つＩＳ、一年前に地球を救ったＩＳはこう呼ばれていた。

「『蒼き翼』」

と。

蒼き翼？　違う！　不屈の翼だ！！（後書き）

オリジナルキャラのＣＶ

月光夜明／山口勝平

夕暮太陽／朴　？美

です！

何のために闘う？（前書き）

戦闘描写を書くのは大変です。

でもそれと同時に・・・めっちゃ楽しい！！

何のために闘う？

『蒼き翼』。自分のＩＳ（相棒）をそう呼ばれ、夜明は少しだけ不機嫌そうに唇を尖らせた。

「『蒼き翼』じゃねぇ、こいつの名前はレイジングウィング（不屈の翼）だ。ったく、何だってそんなけったいな名前が・・・って、あの時モードエクセリオン発動してたからか、しくったなぁ・・・」

夜明の言うあの時とは一年前のことだ。今から丁度一年前に大、中、小、様々な大きさの隕石が総計１０８個が地球に飛来した。その隕石全てをたった一機で、たった一度の砲撃で全てを撃ち落としたのがこのＩＳ『蒼き翼』ことレイジングウィングである。各国はすぐにレイジングウィングを捕獲しようとしたが、従来のＩＳを遙かに上回るレイジングウィングの機動力に全くついていけず、僅か一分でレイジングウィングの反応が各国のレーダーからロストしたため、捕獲を断念した。そのＩＳが、今尚世間を騒がせているＩＳが目の前に、しかも男が起動している。セシリアの混乱は究極を極めた。不意に、セシリアの目の前に一枚のモニターが現れた。その画面にはピットにいる太陽達が映し出されている。

『ほう、随分と便利な物を持っているな、夕暮』

『もしよろしければお一つ作ってあげましょうか？　代金はそれなりにいただきますけど・・・。セシリア・オルコット、私の声が聞こえているか？』

「へ？　え、えぇ、聞こえていますわ」

多少、と言うかもの凄く面食らいながらも、セシリアは画面に映った太陽を見る。

『今、目の前の光景に混乱してるかもしれないが、それは捨て置け。夜明けがレイジングウィングを持っている経緯など、お前が知る必要はない。今は闘うことにのみ集中しろ。レイジングウィングのデータは今からブルー・ティアーズに送ってやる』

そう言って、太陽が端末を操作すると、レイジングウィングのデータがブルー・ティアーズの中に流れ込んでくるのがわかった。

ー戦闘待機状態のＩＳを感知。操縦者月光夜明。ＩＳネーム『レイジングウィング』。戦闘タイプ全距離対応型。特殊装備あり。ー

「な、何ですのこのＩＳは!?」

セシリアは現れたレイジングウィングのデータ画面を見て声を荒げた。何せ、レイジングウィングの火力、機動力はセシリアのＩＳブルー・ティアーズを、いや、従来のＩＳを全て、桁違いに上回っているのだから。そして、ある数値も、別の意味で従来のＩＳを上回っていた。

「な、何ですかこの紙っぺらみたいな防御力はぁー！？」

ピットにあるリアルタイムモニターの端に映し出されたレイジングウィングのデータを見て、山田先生は絶叫する。それもその筈で、レイジングウィングの戦闘能力を数値で表したデータは、色々なＩＳを見てきた山田先生さえも見たことの無い数値を叩き出していたのだから。ここまで両極端なＩＳも珍しい。と言うか存在さえしてないだろう。異常なまでの火力と機動力。そして・・・従来のＩＳを大きく下回る防御力。データを一通り見た千冬は太陽に視線を向けた。千冬の視線に気付き、太陽は軽く肩を竦めてみせる。

「夜明のＩＳ、レイジングウィングの大量にエネルギーを消費します。その消費量の多さで戦闘どころか起動さえままならなかったんですが、シールドバリアに回している分のエネルギーのほとんどを攻撃と機動に回しました。結果、爆発的な火力と機動力を得ましたが」

「防御が紙のＩＳが出来た訳だ」

「両腕部のビームシールドを除けばの話ですが」

白式の初期化（フォーマット）と最適処理化（フィッティング）をしている一夏の隣りで、箒は険しい視線をモニターに向けている。

「ここまで防御力が低いとなると・・・一撃でも当たれば負けてしまうのではないか？」

「流石に一撃はないが・・・まぁ二、三発が限度だろうな」

「おいおい、大丈夫なのかよ？」

一夏の問いに太陽は答えず、口元に笑みを浮かべながらモニターに視線を戻した。全員が太陽に釣られて視線をモニターに戻すと、今まさに戦闘が始まった所だった。

「た、確かに火力と機動力は高いようですが、シールドはそれこそ紙同然！　一撃でも当てれば私の勝ちですわ！」

多少声が震えているも、セシリアはそう宣言した。だが、その言葉は己に対する激励とも聞こえる。セシリアの宣言に夜明は何かを言うわけでもなく、飄々としたいつもの雰囲気を一切引っ込めて、鋭い視線をセシリアに送っていた。その時、アリーナに戦闘開始のブザーが鳴り響く。

「さぁ踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

そう言ってセシリアは六七口径特殊レーザーライフル、『スターライトｍｋ？』を構え、周囲に射撃型の自律機動兵器、ブルー・ティアーズ（以下ビット）を展開、弾雨の如き攻撃を開始した。対する夜明は一切動かず、両手に握った二挺のビームライフル、ウィングスターをぶら下げたまま浮いていた。

（当たった！）

セシリアが心の中で拳を握った瞬間、放たれたビームは夜明を貫通

した。

「おいおい。俺の残像なんか撃ち抜いてどうするんだよ？」

上下左右、全方向から夜明の声が聞こえる。

「っ！！」

驚愕するセシリアが周囲を見回すと、白い閃光が縦横無尽にセシリアの周囲を動いていた。

「円舞曲（ワルツ）で踊れ？　いいぜ、付き合ってやるよトップスター。しっかりとエスコートしてやる」

但し、と白い閃光がセシリアの前で急停止、セシリアの腹部に衝撃が走って後ろに吹っ飛ぶ。

「俺のダンスは超アップテンポだぜ？」

白い閃光が夜明で、夜明に腹を蹴られたのだと理解した時には、既にウィングスターから放たれた碧の光がセシリアの両肩を直撃していた。

ーバリアー貫通、ダメージ８８、シールドエネルギー残量、５１２。実体ダメージ、低ー

「ついて・・・これるか！！」

ブルー・ティアーズが被害を告げ終えた時には、夜明は再び白い閃光となっていた。

「・・・出鱈目もここまでくると何も言えないな・・・」

リアルタイムモニターに映し出された一方的なワンサイドゲームに、千冬は呆れたように呟いた。いや、ワンサイドゲームと呼ぶには、セシリアはよく夜明に食らい付いている。超高速で動く夜明をビットで追いかけ、移動先を予想してスターライトｍｋ?を撃つ。その射撃は正確だが、夜明には当たるどころか掠りさえしない。セシリアは夜明に善戦するも、完全に振り回されていた。

「一撃でも当たれば負ける可能性がある。ならどうする？　答えは簡単、当たらなければいい」

モニターに映った夜明は太陽の言葉を肯定するように、瞬間加速（イグニッション・ブースト）でセシリアの攻撃を避けた。再びスターライトｍｋ？とビットが放ったビームは夜明の残像を貫く。

「残像が残るほどの瞬間加速（イグニッション・ブースト）って・・・どれだけ速いんですか！？」

「レイジングウィングの機動力は全ＩＳ中トップクラス、いや、間違いなく最高だ。それくらい速くなければ敵の攻撃を回避し続けるなんて不可能、一瞬で墜とされてしまうからな」

「凄まじいな。あのレイジングウィングの性能は」

感嘆のため息を漏らす箒の言葉を、太陽は首を振って否定する。

「真に凄いのはレイジングウィングの性能に振り回されず、的確に制御している夜明だ」

「確かに・・・どうかしたのか、一夏？」

隣りでモニターを見ている一夏を見て、箒は少し心配そうに訊ねた。一夏は箒の問いに答えず、モニターを食い入るように凝視していた。

「夜明。お前、何時の間にそんな強くなったんだよ・・・」

モニターに映っているセシリアを自分に置き換えてみる。恐らく、いや、確実にワンサイドゲームで終わるだろう。友との差を痛感し、

一夏は拳を握り締めた。箒は無言でその拳に手を添える。

「夜明だって最初っからあんなに強かった訳じゃないさ」

太陽は一夏の方を向かずに言った。

「織斑一夏。夜明に追いつきたいのなら、強さに対する明確な信念を持て。夜明は信念を貫くために力を、レイジングウィングを手に入れた。だから、お前も信念を持て」

「信念、か」

ゆっくりと拳を解き、一夏はモニターを真っ直ぐに見つめた。

「さって、鬼ごっこもそろそろ飽きてきたな」

夜明はそんなことを呟きながら、多角的な軌道で後を追ってくる二つのビットを肩越しに見据えた。かれこれ、もう二十分はこの鬼ごっこを続けている。内心、夜明はしつこく追ってくるビットにうんざりしていたが、その一方で、ビットを操作しながら自分が動く先を予想して狙撃してくるセシリアの腕に感心していた。

（あんだけの啖呵を切るだけの腕はあるってことだな。だから）

「だからこそ俺はその高慢を叩き潰そう」

夜明は一瞬でブレーキをかけて動きを止めた。タイムラグ無しで後方に瞬間加速（イグニッション・ブースト）し、追い抜いていったビットをウィングスターで撃ち抜く。

「っ！？」

驚くセシリアの方を向いた夜明。肩部のアクティブポットが開く。

「そろそろ幕引きといこうぜ！」

レイジングウィングの両肩から左右四発、計八発のミサイルが射出された。同時に夜明自身も加速してセシリアに突っ込んでいく。

「くっ！」

セシリアはスターライトｍｋ?を構え、ビットと一緒にミサイルを撃ち落としていく。が、二発を撃ち漏らし、その二発はセシリアの周囲に浮かんでいたビットに直撃、爆破した。

「悪いがお前が奏でた円舞曲（ワルツ）、ここで終わらせてもらう！！」

ウィングスターを腰に収納し、高出力ビームサーベル、スターライザーを二本引き抜いてセシリアの間合い寸前にまで入り込んだ。

「かかりましたわ」

不意にセシリアが笑った。その腰部に広がったスカート状のアーマーから突起が外れ、動いた。

「残念でしたわね。ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

しかもさっきの四機と違い、レーザー射撃型ではない。これはミサイルだ。

「だからどうした?」

「え?」

夜明は一気に瞬間加速（イグニッション・ブースト）してセシリアの横を通り過ぎた。すれ違い様に一回転しながらスターライザーを振り、ミサイル型のブルー・ティアーズを斬り裂く。

「そらよっ！！」

ブルー・ティアーズが爆ぜる前に夜明はセシリアの真後ろで急停止、回し蹴りを背中に叩き込んでセシリアを爆発の範囲から逃し、自身も後方に瞬間加速（イグニッション・ブースト）して爆風を避けた。

「くっ・・・いい加減に！」

体勢を直しながらセシリアは再装填したミサイル型のブルー・ティアーズを放った。が、それらは多角的な軌道を描く前にウィングスターで撃ち抜かれた。

「行くぞ」

ー警告！　敵ＩＳから高エネルギー反応確認。トリガー確認。エネルギー装填確認ー

刹那、レイジングウィングの背部装備、スタードライブ二門から蒼い荷電粒子砲が放たれた。セシリアはその攻撃を避けられず、荷電粒子砲はセシリアに直撃した。

「終わったか・・・」

荷電粒子砲が直撃した際に発生した蒼い煙で満たされたモニターを見て、箒はほっと安堵のため息を吐いた。

「・・・いや、まだだ」

千冬の言葉に呼応するようにモニター内の煙は晴れていき、そして・・・

「へぇ、まだ動けるのかよ。スタードライブが直撃する寸前に全部のエネルギーを防御に回したのか」

夜明はゆっくりと、煙が立ち上っている高度まで降りてきた。徐々に煙が晴れていくと、セシリアが未だに浮いているのが見えた。だが、その姿は既にボロボロで、ＩＳが起動しているのが不思議なほどだ。

ーバリアー貫通、ダメージ２９８。シールドエネルギー残量、４３。実体ダメージ、レベル高ー

スタードライブの直撃は一気にブルー・ティアーズのシールドの三分の一を削った。セシリアは軽く、浅く呼吸をしながら夜明を見た。

「お強い・・・ですのね」

「当たり前さ」

切れ切れに言うセシリアに、夜明はウィングスターの銃口を向けた。

「俺には貫きたい信念がある。俺には背きたくない誓いがある。俺には護りたい世界がある。そして、こいつは俺が信念を貫くために、誓いに背かないために、世界を護るために太陽が与えてくれた翼なんだ」

ウィングスターを連結させ、ゆっくりとエネルギーを充填していく。

「そいつらがある限り、俺の魂（つばさ）は・・・・・・・・・・・・不屈だ」

セシリアは目を閉じた。この闘いが始まってから胸の中に感じていた疑念が、夜明の言葉で確信へと変わる。自分が負けるのは必然だったのだと。自分がイギリス代表候補生だったと、専用機持ちだと驕っていた時点で。相手が男だと侮っていた時点で、負けは確定していたのだ。

その胸に信念はあったか？

その心に誓いはあったか？

その背に世界はあったか？

無い、と言えば嘘になるだろう。だが、信念を貫くために、誓いに背かないために、世界を護るために闘ったことはあるか？　答えは否だ。セシリアはゆっくりと目を開いていき、夜明の目を見た。その目尻から一滴の滴が溢れる。

（あぁ。あなたは対等だと言ってくれるのですか？　こんなにも実力差があって、こんなにも驕り高ぶっていた私を。そんなにも強く

て誇り高いあなた自身と、対等だと思ってくれるのですか？）

その瞳には一欠片ほども油断もない。驕りも、侮りも、侮蔑もない。ただあるのは、対等の相手として見たセシリアの姿のみ。

「・・・負ける前に一つだけお願いしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「言ってみろよ」

「あなたのお名前を、訊かせて貰えませんか？」

訊きたかった。彼の名を、彼の口から、彼の言葉で、名前を教えて欲しかった。夜明はウィングスターをセシリアに向けたまま、はっきりと名乗り上げた。

「月光夜明だ」

引き金が引かれ、試合終了を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者、月光夜明』

何のために闘う？（後書き）

こんばんわ。

なんかよく書いていたデータが消えた、と言う話を見ます。

そこで、自分流、データが失われない方法をお教えします。

よろしければ参考にしてください。

その一、マイドキュメントに自分のファイルを開きます。

その二、自分のファイルの中にテキスト文書を新しく作ります。

その三、予めそのテキスト文書を開いておいて、時々書いたデータをコピーしてテキスト文書に貼り付け、上書き保存をしておく。

自分はこの方法でデータ喪失を乗り越えています。

皆さんも頑張ってください。ではまた次回ぃ～

「おっと、大丈夫か？　って気絶してやがる」

シールドエネルギーを全て削られ、敗北が決定したセシリアはゆっくりと墜ちていった。体勢を立て直す様子が見られないので、夜明は慌ててセシリアの華奢な身体を受け止める。受け止めてセシリアが気絶してるとわかり、軽くため息を吐いた。が、内心受け止めてよかったとも思っていた。

「世話のかかるお嬢様だこと」

やれやれと苦笑を浮かべ、夜明はゆっくりとピットゲートへと向かった。ピットで待機していた救護班にセシリアを渡し、歩み寄ってきた千冬達に視線を向ける。

「勝ったか。まぁ、当然か」

「・・・姐さん、もう少し褒めててくれても良いんじゃないの？俺って褒められて伸びるタイプなんだぜ？」

「お前は挫折を力に変えてきたんだ。どちらかというと叱られて伸びる方だろ」

「太陽、余計なこと言うなよ」

「そうなのか？　なら夜明、何を二十分以上も時間をかけているんだ。お前ならもっと早く終わらせられただろう」

「箒、お前は黙ってろ。気遣い無しですか。冷たいねぇ」

傷ついた、と露骨に両腕を広げて表情を顰めてみせる。結果、返ってきたのは三人の嘲笑だった。

「あ、これはマジでちょっとグサってきた」

胸元を押さえて蹲る夜明の肩に装甲で覆われた手が置かれた。見ると、最適処理化（フィッティング）を終えた一夏が微妙な表情をしていた。

「一夏・・・」

「まぁ、何だ。元気出せって」

「それがお前のＩＳか」

「心配する必要皆無だな」

一瞬で意識を切り換えた夜明に若干驚きながら、一夏は夜明によくＩＳが見えるよう後ろに下がった。夜明のレイジングウィングよりも白い装甲、飾り気のない、眩しいほど白いＩＳが一夏を覆い、護っていた。

「そいつがお前のＩＳ、『白式』か？」

「あぁ。こいつが俺のＩＳだ」

「そうかい」

夜明は愉快そうに唇を歪めた。ゆっくりと身体を浮かび上がらせ、

ウィングスターの銃口をピットゲートに向ける。

「さて。ここから先、俺たちに会話は必要ないよな、一夏？」

「分かってる。拳で語り合おう」

夜明と同じく一夏も浮上し、身体をゲートに向ける。徐々に開いていくゲート。千冬達はゲートに身体を向けている夜明と一夏の後ろ姿を見ながら、その時を待った。ゲートが完全に開ききると同時に二人は背中のスラスターを全開にしてゲートへと飛び込んだ。試合開始のブザーが鳴り、二人は弾丸のようにアリーナへと飛び込む。アリーナの中心で左右に分れ、三十メートルほど離れた所で互いに半回転。最高速度で相手に突っ込む。

ー戦闘状態のＩＳを感知。操縦者織斑一夏。ＩＳネーム『白式』。戦闘タイプ近接特化型。特殊装備ありー

ー戦闘状態のＩＳを感知。操縦者月光夜明。ＩＳネーム『レイジングウィング』。戦闘タイプ全距離対応型。特殊装備ありー

「行くぞ夜明ぇ！！」

「来い！　一夏ぁ！！」

一夏が振り下ろした近接用ブレード、雪片弐型を、夜明は交差させたスターライザーで受け止めた。

「始まった、か・・・」

モニターの中でぶつかり合った白と白のＩＳを見て、千冬は呟いた。
その表情には複雑な物が浮かんでいる。

「随分と浮かない表情ですね、織斑教諭」

千冬の隣りに立っていて、同じようにモニターを見ている太陽は、
視線をモニターから外さずに言った。ちなみに山田先生はセシリア
の付き添いで保健室に行っている。

「うむ。弟と弟分がＩＳで闘う日が来るなんて、あの時は想いもし

なかったからな・・・」

「織斑先生。一夏と夜明、どっちが勝つと思いますか？」

「確実に月光だろうな」

箒の問いに千冬は即答する。

「まず経験差がありすぎる。織斑がＩＳを動かしたのはＩＳ学園の入学試験時のみ。対して月光は下手なＩＳ所有者よりもＩＳを起動している。だろ、夕暮？」

「はい。旅の道中、暇なときがあれば夜明はレイジングウィングを起動していましたから。時間はざっと見積もって・・・千時間は堅いですね」

「この時点で月光の勝利は不動だろう。しかも、白式と違ってレイジングウィングには多彩な射撃装備が備えられている。だが」

千冬はモニターの中に映る一夏を、その手に握られた近接用ブレード、雪片弐型を見据えた。

「織斑が、一夏が雪片の性能を最大限に引き出せれば、一筋ではあるが、勝機が見えるかもしれない」

ほぉ、と太陽は笑顔を浮かべながら千冬に視線を向けた。その笑みには、からかいの念が多く含まれている。

「流石のブリュンヒルデ殿も人の子ということか。心の中で夜明が勝つと分かっているのに、少しでも勝利する方法があるのならそれ

に注視する。織斑教諭も中々のブラコンですな」

「夕暮、グラウンド運動の時間に校庭十周を加えようと思う。どうだ、嬉しいだろう？」

この千冬の提案に太陽と箒の表情が引きつる。嬉しい訳がない。ＩＳ学園の校庭は一周五キロある。それを十周もさせるなんて、はっきり言って殺人行為だ。千冬の職権乱用に太陽は軽く引き、箒はドン引きしていた。やがて、太陽はからかいの笑顔を苦笑にシフトし、視線をモニターへと戻した。

「了解。織斑教諭が身内ネタでからかわれるのが嫌いだというのはよく分かりました。それに、私だけならともかく、クラスメイト全員が被害を受けるのは余りにも心苦しい。それに・・・」

ここで太陽は苦笑を引っ込め、真剣な表情を浮かべながらモニターに映っている光景に見入った。

「雪片の能力が一気に戦況をひっくり返すだけの力を持っているのも事実だ」

モニターの中で夜明が一夏を殴り飛ばして距離を取り、スタードライブのエネルギーを充填し始めた瞬間、一夏の手の中で雪片が光り始めた。

「うぉらぁっ！！」

射撃装備を持っていないため、夜明から離れまいと必死で食らい付いてくる一夏。小刻みに振るわれる雪片をスターライザーで捌きながら、夜明は真上に急上昇。数瞬遅れて一夏も急上昇して夜明の後を追う。数メートル上昇した所で夜明は急停止。身体の上下を逆転させ、逆立ちの様な体勢で一夏を迎え撃った。

「くっ！」

一夏は夜明との激突を避けようとブレーキを試みるが、白式にレイジングウィング並みの機動力は無いのでブレーキはかけられず、一夏はそのまま雪片を突き出すように夜明に突っ込んだ。

「遅い！！」

夜明は薄皮一枚で一夏の刺突を回避、すれ違い様に裏拳を一夏の腹に叩き込む。無防備だった腹に一撃を貰い、一夏は大きく吹っ飛んでいった。

「行くぜ、一夏ぁ！！」

体勢を立て直しながら夜明はスタードライブのエネルギーを充填、上下の体勢をを元に戻すと同時にスタードライブの砲門を一夏に向け、荷電粒子砲を放った。

「くっ、白式！！」

一夏の叫びに呼応するかのように雪片が輝き始める。

「うおおぉぉぉ！！！」

輝く雪片を振り抜き、一夏は迫り来る二つの蒼い荷電粒子砲を何の抵抗もなく真っ二つに切り裂いた。

「・・・成る程。それが白式の零落白夜か。実際に見て思ったが、予想以上に厄介な代物みたいだな」

「あぁ。この零落白夜の前では全てのエネルギー系統の攻撃が無に帰す。エネルギーの使用量が半端じゃないから、考えて使わないと一瞬で燃料切れになっちまうけどな」

一夏が白く輝く雪片を軽く振り下ろすと、刀身から放たれていた輝きが収束していった。

（エネルギー系統の攻撃は全て無効化される、か。なら）

「実弾はどうだ！」

夜明はアクティブ・ポットを開き、計八発のミサイルを放った。一夏は雪片でミサイルを全て切り裂き、ミサイルが爆発する前に夜明に接近、雪片の刺突を繰り出す。

「喰らうか！」

夜明は突き出された雪片を真剣白刃取りの要領で受け止め腰部装備、ディバイン・カノンの銃口を一夏に向けた。高速で連射される実弾の直撃を受け、白式のシールドエネルギーは大きく削れる。

「がっ！　くそっ！！」

一夏はディバイン・カノンの砲撃に耐えながら雪片を引き戻し、夜明に蹴りを喰らわせる。蹴られたと同時に夜明は後方に瞬間加速（イグニッション・ブースト）して蹴りの威力を殺し、腰からウィングスターを引き抜いた。右から一発、左から一発。更に縦軸回転しながらウィングスターを連結させ、突っ込んでくる一夏に高出力の碧の閃光を放った。一夏は雪片を振って一撃目と二撃目を弾くが、三発目は弾けず、右肩に直撃した。

ーバリアー貫通。ダメージ１０７。シールドエネルギー残量、４９８。実体ダメージ、レベル低ー

「それがどうしたぁ！！」

一夏は白式から報告される被害状況と、右肩からもたらされる激痛を無視しながら瞬間加速（イグニッション・ブースト）して夜明の真っ正面に移動、零落白夜を発動させる。

「もらったぁ！！」

夜明の表情が驚愕に強張ったのを見て、一夏は心に勝利を確信しながら雪片の柄を両手で握り、大上段に振り下ろした。

「何がどうなっている！　零落白夜が発動していないのか！？」

モニターに映っている映像に箒は叫んだ。それもその筈で、零落白夜を発動させた雪片を、夜明は両腕部に展開したビームシールドで防いでいるのだから。

「いや、零落白夜はちゃんと発動している」

「なら何故！？」

苦い表情をしている千冬に、箒が食らい付く。箒のポニーテールを掴み、太陽は強引にモニターを見せた。

「簡単な話さ。零落白夜の能力はエネルギー系統の消滅させること。そして、レイジングウィングの腕部に装備されているのはビームシールドだ。零落白夜の能力から考えるに、防ぐのは不可能。ならどうする？　エネルギーを消滅されているそばから展開していけばいい」

太陽の言うとおり、夜明は常に両腕からエネルギーを展開することで零落白夜が発動した雪片を防いでいた。

「この勝負、白式のエネルギーが底をつくのが先か。レイジングウィングのエネルギーが底をつくのが先か。一種の根比べだな」

「いや、どっちかのエネルギーが底をつく前に夜明が勝ちますね」

妙に確信めいた表情で千冬を否定する太陽に、二人は怪訝な表情をしながらその表情を見る。太陽は深意が見えない表情で、レイジングウィングの腹部を見るだけだった。

（頼む！　後ちょっとでいい、保ってくれ白式！！）

千冬と同じ結論に達した一夏は雪片に注ぎ込むエネルギーを最小限にして、ビームシールドを押し切ろうと体重をかける。不意に、夜明の口元に笑みが浮かんだ。

「悪いな一夏。この勝負、俺の勝ちだ」

夜明が呟いた瞬間、一夏は本能的に危険を感じると同時に、太陽に見せて貰ったレイジングウィングの武装を思いだした。レイジングウィングの武装は、どれもが凄まじい威力を持っている。その威力は、先の闘いでブルー・ティアーズのシールドエネルギーを一撃で三分の一以上削ったスタードライブが物語っている。だが、レイジングウィングの武装の中で最も威力が高いのはスタードライブでは無い。

『対軍用超高速超高密度プラズマ収束拡散自動追尾砲【スターライト・ブレイザー】』

そして、この武器が装備されているのは・・・・・・レイジングウィングの腹部。

ー警告！　敵ＩＳから超高熱源反応を確認！ー

今更になって白式の警告が耳に届いた。死に物狂いで一夏は後方に飛んだ。が、

「終わりだ！！」

一夏が回避行動に移るよりも速く、夜明の腹部アーマーから目も眩むような閃光が放たれ、その光の柱を連想させる蒼い収束されたプラズマが一夏を飲み込んだ。

「一夏！」

一夏がスターライト・ブレイザーに飲み込まれたのを見て、箒は思わず声を荒げた。その両隣りにいる千冬と太陽も、真剣な面もちでモニターを見ている。

「・・・やはり、か」

モニター内から蒼い光が薄れきった時、太陽は少しだけ憎々しそうに呟いた。

「零落白夜。そう簡単には打勝たせてもらえないか・・・」

「・・・いや。素直に驚いたよ、一夏。まさかスターライト・ブレイザーを防がれるなんて思いもしなかったぜ」

スターライト・ブレイザーの直撃を受けて、未だに戦闘可能状態を保っている一夏に、夜明は素直に感心した。スターライト・ブレイザーが当たる直前に一夏は零落白夜を発動させ、スターライト・ブレイザーを切り裂いたのだ。それでも回避するまでには到らず、白式は深刻なダメージを受けていた。

ーバリアー貫通、ダメージ４４３。シールドエネルギー残量５５。

実体ダメージ、レベル高ー

白式が一夏に被害を報告する。それを受け、一夏は雪片を構え直す。その目から戦闘の意志は消えていない。

「まだやんのか？」

「ったりまえだ・・・」

夜明の問いに一夏は即答する。友からの返答に夜明は嬉しそうにアリーナの天井を仰いだ。

「やっぱりそうきたか。・・・本当に変わらないねぇ、お前は・・・。次で決めるぞ、一夏」

「あぁ」

二人は一端後方に下がり、五十メートルほど距離を取った。

「・・・行くぞ白式！！！」

一夏の両手に握られた雪片が今まで以上に強い輝きを放っていく。

「レイジングウィング、マルチロックオンシステム作動。スターライト・フルバーストの為のエネルギー充填を開始せよ」

夜明は両手に握ったウィングスターを一夏に向けた。続けてスタードライブ、ディバイン・カノンを発射態勢にし、背部装備のシューティング・ビット、フィン・ファングを周囲に展開、スターライト・ブレイザーのロックを外し、アクティブ・ポットとスティンガーを

除く全ての武装にエネルギーを供給し始めた。

『スターライト・フルバースト』

夜明はレイジングウィングのマルチロックオン攻撃をそう呼んでいた。一つ一つが絶大な威力を誇るレイジングウィングの装備を一斉に放つ。その威力は筆舌に尽くしがたく、１０８個の隕石をたった一度の砲撃で撃ち落としたのもこの攻撃だ。

ーエネルギー充填率５０％オーバー、発射までの秒読みを開始します。５ー

マルチロックオン用のバイザーが夜明の目を覆い、一夏にロックオンカーソルを合わせる。

ー４，３，ー

一夏が輝く雪片を突きの構えで前に突き出し、一気に加速して突っ込んできた。

ー２，１，０。スターライト・フルバースト、発射準備完了ー

夜明がウィングスターの引き金を引いた瞬間、圧倒的なエネルギーの大奔流が一夏を飲み込んだ。

「おおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！」

零落白夜を発動させた雪片がエネルギーの濁流を貫いていった。徐々にではあるが雪片はエネルギーを掻き分け、その刃を夜明に近づけていく。

（もう少し、もう少しなんだ！　だから白式、保ってくれ！！）

一夏の強い意志に呼応し、雪片は更に輝きを強くして進む速さを上げていく。

「・・・ふっ」

装甲が吹き飛びながらも突き進んでいく一夏の姿を見て、夜明は微笑してゆっくりとスターライト・フルバーストのエネルギー供給を少なくしていった。数秒後、エネルギーの奔流は消え、残ったのは全武装を展開させたままの夜明と、雪片を突きだした一夏だけだ。

「いっけぇぇぇ！！！！！」

一夏は最後の力を全て出し切り、瞬間加速（イグニッション・ブースト）で夜明に突っ込んだ。

コツン、と気の抜けるような音がアリーナに響き、唯の近接用ブレードへと戻った雪片が夜明の胸にぶつかった。

（・・・ここまできて、エネルギー切れかよ・・・）

急速に一夏の意識が薄れ、視界を黒一色に覆っていく。

（夜明、お前に追いつくのには、時間がかかりそう・・・だな）

薄れ行く意識の中、一夏が最後に見たのは満足そうな表情で口を動かしている夜明だった。

『お前の剣（おもい）、ちゃんと届いたぜ』

少なくとも、一夏にはそう動いてるように見えた。

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

翌日の朝のＳＨＲ、嬉々としてしゃべる山田先生に、一夏は弱々しく突っ込んだ。

「何でさ・・・」

と。

零落白夜対スターライト・フルバースト（後書き）

思う。戦闘描写をちゃんと書けているのか？　と。

出来れば感想をくだちゃい。

ドタバタな日常は超ドタバタな日常へ！（前書き）

今回はあの中華娘が見参！

「あの、山田先生、ちょっと質問いいですか？」

一夏は困惑顔で挙手した。

「はい、織斑君」

「何で俺がクラス代表なんですか？　昨日勝ったのは夜明ですよ」

「そりゃ俺とセシリーが辞退したからだよ。な」

「夜明さんの言うとおりですわ！」

「あぁ？」

思わず一夏は変な声を上げて目を丸くした。それこそ水と油、犬猿の仲という言葉さえ超越するほど角を突き合わせていた夜明とセシリアが親しそうに、しかも名前で呼び合ってるのだから。

「えっと、あの・・・夜明？」

「何だよ？」

「何時の間にそいつと仲良くなったんだ？」

「あぁ、そのこと」

夜明は頭を掻きながら話し始めた。早い話が昨日の夜、一夏が部屋

にいない時にセシリアが部屋にやってきて夜明に今までの暴言を謝罪したのだ。夜明も別に過ぎたことをぐだぐだ言うねちっこい性格ではないので、セシリアの謝罪を受け取った。そして一夏が部屋に戻ってくるまで他愛のない話をしていたら、いつの間にか名前で呼び合うほど仲良くなっていた。と、言うわけである。

「お分かり？」

「お、おぉ。取り敢ず俺が部屋にいない間に仲良くなったってのは分かった。もう一つ聞きたいんだけどさ」

「何だよ」

「セシリーって何だ？」

「俺がつけた渾名」

「・・・さよですか・・・」

何というか急すぎる展開に付いていけず呻いていた一夏だが、とても重要な、忘れかけていたことを思い出し、夜明の胸ぐらを掴んだ。

「って、その事はどうでもいい。夜明てめ、何だってクラス代表を辞退して俺に譲りやがった！？」

「いやだってさぁ、一夏お前ＩＳ初心者のくせに滅茶苦茶頑張って俺に食らい付いてたじゃん？　だから、そんなお前に敬意を表してクラス代表の座を譲ろうと思って」

しゃあしゃあとそんなことを言ってのける夜明に女子達は呆れ、目

を閉じたまま腕を組んでいた太陽がぼそりと呟く。

「で、本音は？」

「クラス代表なんて七面倒なことやってられるか。一夏辺りにでも押しつけちまえ」

「夜明、このゲス野郎！！」

余りにもストレート過ぎる夜明の本音。さしもの一夏も激高し、夜明を殴るために右腕を大きく引く。そして放たれた拳は夜明の顔面に吸い込まれるように、

スパァンッ！

ぶつかる前に千冬の出席名簿アタックが一夏の頭に炸裂した。

「喧しいぞ織斑。お前が泣こうが喚こうが、お前がクラス代表になることに変更はない。それに、ある国にはこんな格言がある」

頭を押さえて蹲る一夏に出席名簿を突きつけ、千冬は冷酷に言い放つ。

「敗者は黙って勝者に従え」

この千冬の一言に、一夏は黙りこくってしまう。前日の闘いでどれだけ一夏が夜明に善戦していても、一夏が夜明に負けたのは事実。黙りこくった一夏に追い打ちをかけるが如く、太陽は一夏に告げた。

「織斑。私と夜明が回った国の一つにはこんな言葉もあったぞ。『

死人に口なし、敗者に人権無し』」

「弁護士を呼んでくれぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！」

無駄と知りつつも、叫ばずにはいられず咆哮を上げる一夏。その魂の叫びは空を切り裂き、宇宙へと届きそうだった、と、後に箒は語った・・・。

「それではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織

斑、月光、オルコット。試しに飛んでみせろ」

遅咲きの桜も既に散り終えた四月も下旬。夜明達は鬼教師、改め千冬の授業を真面目に受けていた。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

千冬に急かされ、一夏は慌てて待機状態の白式、右腕に装備された白いガントレットを左手で掴み意識を集中させた。一夏の両隣には既にＩＳを展開し終えた夜明とセシリアが一夏を待っている。

（来い、白式）

一夏が心の中で白式に呼びかけた刹那、ガントレットから薄い膜が一夏を覆い、０．７秒で白式が展開された。

「遅い。相手に一服でもさせるつもりか？」

鬼教師の評価は辛辣だった。まぁいい、と千冬は矛先を一夏から夜明へと変える。

「月光。お前のＩＳ展開はどうにかならないのか？　その展開方法じゃどんなに速くやっても数秒はかかるぞ」

レイジングウィングの装甲展開は普通のＩＳとは違い、ネックレスから発生した二対の蒼い光の翼が夜明の身体を数秒間覆って、翼が消えるとそこにレイジングウィングを装備した夜明が浮いている、と言った感じだ。はっきり言って、ＩＳ展開中は隙しかない。やられ放題だ。だが、夜明は問題ないと言うように手を振ってみせる。

「大丈夫ですよ。どういう仕様か知りませんけどその光の翼、エネルギー・実弾全ての攻撃を防げますから」

「ほぉ・・・」

千冬は肩越しに後ろを振り返り、女子達の中に紛れ込むように身を潜めた太陽を見た。本人は千冬の視線に気付いてるのか気付いていないのか、何時も通りのクールな表情を浮かべている。

「・・・まぁいい、飛べ」

千冬が指示した瞬間、夜明とセシリアの姿が消え、頭上で静止していた。一夏も遅れて二人の後に続くが、その動きはセシリアの動きに比べると遅く、夜明とは比べ物にならないものだった。

「何をしている。レイジングウィングはともかく、スペック上の出力は白式の方がブルー・ティアーズよりも上だぞ」

千冬からのおしかりを受けながら、一夏は二人と同じ高度にまで上がってきた。急上昇と急降下は先日習ったが、一夏は『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』を未だに掴めずにいた。

「何て言うかやっぱり感覚があやふやだな。夜明、何かコツみたいなのとかって無いのか？」

一夏の問いに、夜明は数秒思考して首を振る。

「無いな。俺はＩＳの飛行を完全に感覚だけでやってる、少なくとも俺が言えることは無い。セシリー、何かコツみたいなのって無いのか？」

「そうですわね・・・。やはりイメージは所詮イメージ、自分が一番やりやすい方法を模索する方が建設的だと思いますわよ、一夏さん」

「だそうだ。一夏」

「んなこと言われたってなぁ」

困ったように頬を掻く一夏。

「なら説明してさしあげましょうか？　反重力力翼と流動波干渉の話になって長くなりますが」

「いや、遠慮しておく」

「俺もパスだ。その小難しい単語を聞いてただけで頭痛がしてきやがった」

即行で断る二人。一夏はともかく、夜明まで断るのが意外だったのか、セシリアは少しだけ驚いた表情を作る。基本、一夏と違って実技だけでなく筆記もこなせる夜明は周りから勤勉だと思われているが、実際は死ぬほど勉強が嫌いだから教師に、勉強に関して何も言われないように必要最低限のことを覚え、それを応用しているだけだ。まったく出来ない分野の物ならともかく、飛行は夜明の、レイジングウィングの専売特許。完璧に出来ることで面倒な知識を増やすようなこと、夜明は一切しない。

「ま、何だ。習うより慣れろ、だ。どうせ放課後訓練するんだろ？　付き合ってやる」

白式が来た日以降、一夏はほぼ毎日白式を起動して訓練をしていた。主なコーチは夜明、太陽、そして何故か毎回夜明に付いてくるセシリアだ。箒も一夏のコーチを買って出てはいるのだが、その教え方が

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、とする感覚だ』

『ずかーん、という具合だ』

等々擬音ばかりなので一切参考にならない。なので、ＩＳ訓練の時、箒は太陽の手によってアリーナから叩き出されている。当然、箒は抵抗するが、太陽は小太刀二刀を逆手に構えた異形の流派を心得ていて、度々箒は太陽に負かされていた。しかし、一夏と一緒にいられる時間を削るのは余りにも酷だと、太陽は雪片を使っての戦闘、つまり剣術での戦闘方法を教えるのは箒に一任。そのため、道場では一夏を独り占めできる箒だった。

「お、マジか？　なら頼む」

「了解。なら、放課後第三アリーナだな」

「夜明さん。もしよろしければ、一夏さんの訓練に私も参加させて貰えませんか？」

「別に良いぜ。寧ろ、セシリーみたいに射撃に特化した奴が訓練に参加してくれるのは大歓迎だ。射撃回避の訓練は俺じゃうまく出来ないからな」

「ご謙遜を。夜明さんの射撃能力は私のそれよりも上じゃなくて？」

「いや。早い話、手加減が出来なくて毎回急所にぶち当てちゃうんだよな」

遠い目をしている夜明の隣りで、一夏は微妙に顔を引きつらせているセシリアを見た。クラス代表決定のための戦闘以降、何故だかセシリアは何かと理由をつけて夜明と一緒にいたがる。一体どういう心境の変化だと一夏が首を捻っていると、

「夜明、何時までそんなところでくっちゃべってるつもりだ？　速く戻ってこい」

通信回線から冷静な太陽の声が聞こえてきた。遠くに離れた地上を見ると、やんわりと、だが有無を言わせずに太陽が山田先生からインカムを奪っていのが分かる。

「夕暮の言うとおりだ、さっさと降りてこい。ついでに急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチ、月光のみ一センチだ。順番は月光、オルコット、織斑だ」

「いや、何で俺だけそんなハードル高いんだよ」

文句を言いつつも夜明は一気に急降下、地表一ミリメートルの所で完全に停止した。おぉー、と女子から
歓声が上がり、千冬も珍しく賞賛の言葉を言う。

「やるな月光。流石に地表一ミリメートルで止まるなんて芸当、出

来るとは思わなかったぞ」

「ども」

夜明は賞賛の言葉に軽く頭を下げ、上空に浮かんでいる一夏とセシリアを見上げた。次に降りてきたセシリアは地表十二センチの所で完全停止、それなりの評価を受けた。だが、次の一夏は・・・。

ギュンッッ!!　・・・・・・・・バシン!!

「・・・一夏。お前、投身自殺でもする気なのか?」

「・・・返す言葉も無いな」

地面に激突する寸前に、夜明は一夏の足首を掴んで無理矢理停止させた。目と鼻の先にある地面に、一夏の額から嫌な汗が噴き出す。

「月光がいて助かったな、織斑。次は武装を展開しろ。もっとも、月光は展開もくそもないがな」

千冬は値踏みするような視線で夜明を、レイジングウィングを見た。他のどのＩＳとも違い、レイジングウィングは常に全ての武装が展開されている。強いて挙げるとすれば、ウィングスターとスターライザーを持ち替える時だけだ。それ以外、武装の収納（クローズ）と展開（オープン）は一切必要ない。

「それでは織斑、オルコット、やってみろ」

千冬の指示に従って二人はそれぞれの手に雪片弐型とスターライトｍｋ?を展開（オープン）する。日頃の訓練の御陰で一夏の展開はそれなりに速

くなっているが、やはり一日の長がある代表候補生、セシリアのほうが速い。

「オルコット、近接用の武器を展開しろ」

「え？　は、はい」

いきなり話を振られ、驚きながらもセシリアはスターライトｍｋ？を光の粒子に変換して、新たに近接用の武器を展開させる。が、中々武器のイメージが像を結ばないのか、粒子はセシリアの手の中でダンスを踊っていた。

「まだか？」

「セシリー、落ち着いてやれば出来るって」

夜明に頷いて見せ、セシリアは一度深呼吸、意識を集中させ、今度こそ武器を構成した。

「・・・何秒かかっているんだお前は？　実戦では良い的だぞ」

「じ、実戦では相手を近距離の間合いに入らせないので、問題ありませんわ！」

「ほう。全距離対応型とは言え月光に簡単に懐に入られ、あまつさえミサイル型の武装を斬られた者の台詞とは思えんな」

「あ、あれは・・・」

何やらごにょごにょ言っているが、千冬の言うことが正論のため何

も言い返せない。その原因である夜明はと言うと、少しだけ申し訳なさそうな顔をしていた。不意に、セシリアから恨みがましい視線と個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）が送られてくる。

『あなたのせいですわよ！』

『え？　そうなの？』

『そうに決まってますわ！　あなたが私に飛び込んでくるから・・・』

『そいつぁ悪かったな』

『そう思っているのなら、せ、責任をとっていただきますわ！』

『うん、無理♪』

「キィーッ！！」

突然ハンカチを取りだして噛み締めたセシリアの頭に、千冬の出席名簿アタックが炸裂したのは言うまでもない。

「ふ～ん、ここがそうなんだ」

ＩＳ学園ゲート前。小柄な身体の少女が、その身に似つかわしくない大きなボストンバックを肩から提げて立っていた。左右それぞれに高い位置で結んでいる髪を夜風に揺らせながら、少女はくしゃくしゃの紙を上着のポケットから取りだす。

「本校舎一階総合事務受付・・・どこにあんのよ？」

ぶつくさ言いながら、取り敢ず少女は足を動かす。ここで悶々悩んでいるよりも自分で探した方が速いと判断したのだ。

結果、

「もっと迷っちゃった・・・」

宛てもなく歩き回っている内に本気で迷子になってしまった少女。

キョロキョロと周囲を見回してみるが、一度も来たことがない場所なので目印など見つからない。

「はぁ・・・。ま、いっか。こんだけ奥に来れば誰か一人くらい通り過ぎるでしょ。その時案内してもらお」

少女はボストンバックを床の上に置き、その上にちょこんと腰を下ろした。

（そう言えばあいつ、元気かな）

ふと、そんな考えが胸中を過ぎった。あいつとは、二人目の男性ＩＳ操縦者として全世界に報道された銀髪の青年のことである。その青年がテレビに出てきた時、少女は本気で飲んでいた飲茶を噴き出した。

「・・・だから・・・でだな」

ふと、遠くの方から声が聞こえてくる。視線を向けると、複数の生徒達がＩＳ訓練施設から出てくるのが分かった。

（丁度いいや。場所聞こっと）

ボストンバックを肩にかけ、少女が声をかけようとすると、

「だ～か～ら、そのイメージってのが分らないんだよ」

男の声。あいつとの無二の親友で、いつも連んでいた一夏の声だ。

（一夏がいるってことは・・・）

「んな難しいことじゃねぇって一夏。イメージなんざ捨てちまえ、お前がお前のしたいようにすれば、絶対に白式は応えてくれるって」

（やっぱりいたぁ～！）

予期せぬ再会に高まる鼓動。少女は一旦心を落ち着かせるために歩みを止めて深呼吸。数回深呼吸を繰り返し、再び視線を向ける。そこには、今まで一度として忘れたことのない、艶やかで、流れるような銀髪があった。

（私だって分かるかな？　小学校卒業した時にどっか行っちゃって四年近く会ってないけど・・・あいつなら分かってくれる筈！）

何の根拠もない、でも絶対の信頼がある確信を胸に抱きながら声をかけるために息を吸い込んだ瞬間、

「そうは言ってもな夜明。正直な話、そんな芸当が出来るのはお前だけだと思うぞ」

「太陽さんの言うとおりですわ。幾ら一夏さんと白式に強い繋がりがあるとは言え、やはりそこまでの境地に行くにはまだまだ時間がかかりますわ」

銀髪を挟むように歩く赤髪と金髪の美少女。

（え、誰あの二人？）

さっきまで痛いほどに高鳴っていた鼓動は急速に落ち着いていき、酷く冷たい感情が胸中に湧き上がってきた。

その後、少女はすぐに総合事務受付を見つけた。

「ええと、これで手続きは全て終了です。ＩＳ学園へようこそ、凰鈴音（ファン・リンイン）さん」

少女、鈴音は受付嬢の笑みを無視し、受付に身を乗り出すように身体を乗せた。

「あの、月光夜明って何組ですか？」

「あぁ、あの噂の子？　一組ね。鳳さんは二組だからお隣さんね。そう言えば、あの子クラス代表になれたのに、もう一人の男子の織斑君に譲ったらいしいわね」

そんな噂に興味はない、とでも言いたげな表情で鈴音は質問を続ける。

「二組のクラス代表って決まってるんですか？」

「決まってるけど・・・聞いてどうするつもり？」

受付嬢の問いかけに鈴音は薄い笑みを浮かべた。その額にしっかりと血管を浮かび上がらせて。

「お願いしようと思って。友達を驚かせたいから、代表を譲ってって・・・」

ドタバタな日常は超ドタバタな日常へ！（後書き）

こんばんわ。サザンクロスです。

今回はちょっとばかしアンケートにご協力していただきたく、後書きを書いた次第です。

アンケートの中身は何かというと、太陽のＩＳを何をベースにするかというものです。

1，デスティニー

2，インフィニットジャスティス

3，レジェンド

4，暁

5，ダブルオーライザー

6，ユニコーン

の内のどれか二つを選んでください。

期限は二月一日まで。たくさんの方のご協力をお待ちしています。

四年振りの再会・・・誰だお前？

「と、言うわけで一夏クラス代表決定パーティーじゃぁぁ！！　今夜は飲み明かすぜ野郎共！！」

「「「いえぇ～っ！！」」」

「どう言うわけだ。野郎はお前と一夏以外いないだろうに」

「改め淑女諸君！！」

「「「きゃっほ～い！！」」」

異常にテンションが高い、お立ち台に見立てたテーブルの上に立つ夜明。その周囲ではしゃいでいる一組女子一同（一部除く）夜明達が騒ぐのを横目に見ながら、太陽は騒ぎから少し離れたところにいる一夏に目を向けた。頭の上に乗ってるクラッカーから放たれた紙テープが心に重い。

「大変だな、一夏」

苦笑を浮かべつつ、太陽は手に持った紙コップ（中身入り）を一夏に投げ渡した。

「サンキュ。何であいつ等は俺そっちのけで盛り上がれるんだ？一応、このパーティー、俺が主役だろ？」

「ほう。彼女たちに構って欲しいのか？」

どこか刺々しい声が聞こえる。振り向くと、二つ分のコップを持った箒が一夏を睨んでいた。太陽は箒が持っている二つの紙コップを見て、少しだけすまなそうに箒に視線を送った。

「誰もそんなこと言ってないだろ。寧ろ、静かで過ごしやすい」

「どうだかな」

当てつけるように鼻を鳴らし、箒は紙コップを太陽に渡す。太陽は礼を言いながら紙コップを傾け、そう言えばと何かを思い出した。

「さっき一年以外の誰かが来てたな。リボンの色からして二年の先輩だと思うが・・・」

「新聞部副部長二年、黛薫子見、参！　噂の新入生、織斑一夏君と月光夜明君にインタビューしに来ました！」

突如現れた謎の二年生はハイなテンションと共にボイスレコーダーを突きつけ、いい笑顔で言う。

「レッツ、トーキング！」

「・・・太陽、この人か？」

「その人、だな」

微妙な表情で薫子を指さす一夏に、同じく微妙な表情を浮かべた太陽は頷いて見せた。

「あ～っと・・・」

ボイスレコーダーを向けられたまま押し黙るわけにもいかず、一夏は頭を掻きながらコメントを考える。数秒間の思考の後、

「何というか、頑張ります」

何の面白味もない。薫子もえ～、とぶー垂れる。

「もっと良いコメント言ってよ～。俺に近づいたらぶった切るぜ、とか！」

「先輩。それじゃ俺唯の危険人物です」

白式唯一の装備が近接用ブレード、雪片なので、冗談抜きで笑えない一夏だった。不意に、誰かが一夏の首に片腕を回して、グイッと引っ張ってきた。

「無理だよ先輩。こいつは昔っからその類の物が死ぬほど苦手だから」

さっきまで騒ぎの中心になっていた夜明が一夏の首に片腕を回し、悪戯っ子のような表情を浮かべながら二リットルのコーラをラッパ飲みしている。

「おぉ、丁度よかった。もう一人の噂の新入生、月光夜明君、コメントちょうだい！」

一夏同様にボイスレコーダーを突きつけられた夜明。一息でペットボトルを空にして、夜明は笑みを深くしながらボイスレコーダーに囁いた。

「不用意に俺に近づくと撃ち抜くぜ・・・とでも言っとけばいいのか？」

「いいねいいねぇ！　捏造のし甲斐があるよそのコメント！」

何やらメモ帳に高速で書き込みを始める薫子。明日にでも、学園中に夜明の（捏造された）情報が流されることだろう。

（でもこいつは一切そんなこと、気にしないんだろうな）

常に飄々としていても、絶対に自分の流儀は変えない親友を、一夏は羨ましく思った。メモ帳に何かを書き終えた薫子は、次の標的をセシリアへと変える。

「ついでじゃないけどセシリアちゃん、コメントちょうだい」

「私、こういうことは苦手ですが、よくろしくてよ」

とか何とか言いながらも、セシリアは満更でもなさそうな表情を浮かべていた。何故か夜明のすぐ近くに控えていたセシリア。気合いの入った髪のセットは写真対策だろう。一夏はそう睨んだ。

「ではまず、何故私がクラス代表を辞退したかと言うと」

「長そうだね。てか確実に長いよね？　いいや、写真だけちょうだい」

「じ、自分からお願いしておいてそれはないんじゃなくて！？」

「適当に捏造しておくから大丈ブイ。そうだね、セシリアちゃんって月光君に負けたんだよね？　なら月光君に惚れたからということにしておこう」

「なっ！？　なな・・・」

顔を真っ赤にして、セシリアは処理落ちをし始めた。夜明が文字通り、目の前で手を振ってみるが、反応はない。

「お～い、セシリー？　・・・駄目だこりゃ」

「月光君、写真撮りたいから織斑君と並んでくれない？　ついでにセシリアちゃんも」

「了解っす。おーい、戻ってこいセシリー」

手の甲でセシリアの頬をぺちぺちと叩き、その意識を正気に戻す。

「なななな・・・はっ！　私は今まで何を！？」

「大丈夫か？」

「ひゃうっ！？」

正気に戻った瞬間、夜明の顔が間近にあったので、セシリアは変な声を上げながら後ろへと飛び退いた。その顔は更に赤くなり、棗のようにも見える。

「・・・セシリー。今の反応は流石に俺でも傷ついちゃう」

「ご、ごめんなさい」

沈痛な面もちの夜明が一夏の隣りに並び、未だ顔を赤くしているセシリアが夜明の隣りに並んだ。

「そんじゃ撮るよ～。１＋２＋３＋４＋５＋６＋７＋８＋９＋１０は？」

「５５」

「はい正解～」

パシャッとデジカメのシャッターが切られた。ふと周りを見て、夜明は目を丸くする。

「こいつぁ驚いた。皆、何時の間に入ってたんだ？」

一組のメンバーが撮影の瞬間に夜明達の周りに集合していた。恐るべきは女子の行動力である。

「まったく・・・」

唯一人、このメンバーの内に入っていなかった太陽は苦笑を浮かべ、壁に背中を預けながら紙コップを空にするのだった。

「おはよー月光君に織斑君。転校生の噂って聞いた？」

朝。席に着くなり二人はクラスメイトに話しかけられた。基本、敵意を向けなければ誰に対してもフレンドリーな夜明はとかく、一夏が女子と普通に話せるようになったのは僥倖と言えるだろう。

「転校生？　この時期にか？　太陽、なんか知ってるか？」

夜明に話を振られ、太陽は読んでいた本を閉じて目の前にディスプレイを開いた。

「中国の代表候補生らしいな。数日前にＩＳ学園に来て、全ての手続きが昨日終わって、今日から通学してくるらしい。名前、専用機までは流石に分からないな」

「私の存在を危ぶんでの転入かしら？」

いつの間にか夜明の傍にセシリアが立っていた。相変わらず腰に手を当てたポーズが様になっている。

「別にこのクラスに転入してくる訳でもないのだから、騒ぐことでもあるまいよ」

さっき、自分の席に鞄を置きに行った箒が一夏の側にいた。いくら話し方が普通の女子よりも古風とは言え、箒も女子、噂は気になるらしい。

「どんな奴なんだろうな？」

「少なくともお前より強いのは確かさ」

「だよなぁ・・・」

一夏はガクッと俯いた。相変わらずＩＳの訓練を続けているが、一夏は夜明に攻撃を当てるどころか、一度も夜明の機動に追いついたことがなかった。それはセシリアとて同じ事だが、一夏は男子。負けっ放しは嫌らしい。

「何はともあれ、今のお前に転入生なんて気にしてる余裕はねぇだろ。来月にはクラス対抗戦があるんだぜ？」

夜明の言うクラス対抗戦とは読んで字の如く、クラス代表によるリーグマッチだ。

「そう言えばそうだったな。夜明、今日の放課後も付き合ってもらってもいいか？」

ＩＳ訓練に、だ。だが、夜明が頷く前に太陽が首を振る。

「いや、今のお前はかなりうまくＩＳを扱えている。どちらかというと、今伸すべきなのは雪片の扱い方だ。今日は箒に剣術指南でもしてもらえ」

「当然だ」

「いや、でも俺一度も夜明に追いついてないし、攻撃も当ててない」

やんわりと、箒との剣術訓練を断ってＩＳ訓練をしたい一夏だが、太陽にぴしゃりと言い分を遮られてしまう。

「高々数週間だけしかＩＳを動かしていない奴が夜明に追いつく、まして攻撃を当てるなんて無理だ」

「・・・」

無言で項垂れてしまう一夏を見て、太陽は少しだけ表情を和らげながらその頭に手を置いた。

「まぁお前のＩＳ操作技術が格段に向上してるのは確かだ。それは私達が保証する」

「・・・そりゃどうも。つか、人の頭を気安く撫でるなよ」

一夏は少しだけ照れくさそうに太陽の手を払った。気を悪くした様

子もなく、太陽はあっさりと手を引っ込めながら、箒にだけ見えるように片目を瞑って見せた。太陽が一夏に、頑なに箒と修行をさせるのには訳がある。ここ最近、一夏は毎日ＩＳ訓練だけをしていて、箒との剣術訓練を疎かにしているからだ。別に気にしている様子はないが、少しだけ寂しそうにしている箒の為に、太陽は一肌脱いだ、と言う訳だ。

「ま、やれるだけやってみるさ」

「おいおい。そんなヘタレたこと言ってんじゃねぇよ。男なら絶対に勝つ！　くらいの勢いで行けよ」

「夜明さんの言うとおりですわ。一夏さんには勝っていただきませんと」

「男子たるものそんな弱腰でどうする。もっと気概を見せてみろ」

「勝ち負けに拘るつもりは毛頭無いが、やはり負けるのは癪だ」

夜明、セシリア、箒、太陽が好き勝手なことを言いまくる。自分が闘うわけでもないので、その表情はお気楽その物だ。友人達の心優しい（笑）声援に生返事を返すしかない一夏。

「それに、今のところ専用機を持っているクラス代表はお前と四組だけだ。油断していなければやれるだろう」

太陽が目の前に浮かぶディスプレイの情報を見ていた時だ。

「その情報、もう古いよ」

教室の入り口から声が聞こえてきた。その妙に聞き覚えのある声に、いち早く一夏と夜明は入り口の方を見る。

「残念だけど、二組の代表も専用機持ちがなったの。そう簡単には優勝させたげないよ」

右手を銃の形にして一夏に向けているのは・・・。

「お前、鈴か？」

「そ。中国代表候補生、凰鈴音。今日はあんた達、一組に宣戦布告しに来たって訳。それと」

鈴音は右手を一夏から夜明へと向ける。

「四年振りね。相変わらず雲みたいに掴み所が無さそうで安心したわ、夜明」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・誰だ、お前？」

「「「「へ？」」」」

教室の空気が一気に凍り付いた。と言うか氷点下にまで落ち込んだと言える。特に鈴音の驚きは強烈で、右手を夜明に向けたまま白く固まっていた。

「え、夜明お前・・・鈴のこと覚えてないのか？」

「そんな奴いたか？　少なくとも俺の記憶にはないんだが」

顎に手を当て、夜明は考え込む。その仕草から考えるに、本当に覚えていないようだ。

「え・・・、よあ、け。本当に、私のこと、覚えてないの？」

「だから誰だよあんた？」

「ほら、よく家に来てご飯食べてたじゃん。あの中華料理屋」

「んな昔のこと覚えてねぇよ」

冷淡に夜明は言い放つ。鈴音は夜明に向けていた右手をゆっくりと下げ、床に視線を落とした。その肩は小刻みに震え、目尻には大粒の涙が溜まっている。非難の視線が夜明に集まった。身体を撃ち抜くような視線の数々を、夜明は飄々と受け流す。物理的な重さがあるのではと錯覚してしまいそうな空気。息が詰まる、ではない。呼吸が出来ない、だ。鈴音の涙とクラスの我慢が臨界点に達しかけた瞬間、爆笑が教室に響いた。発生源は、

「・・・夜明？」

怪訝そうな表情を作る太陽を無視し、夜明は鈴音に歩み寄った。

「嘘嘘、冗談冗談。ちゃんと覚えてるって」

「・・・本当？　本当に私のこと覚えてる？　本当の本当に？」

捨てられた子犬のような目で見上げてくる鈴音の頬を両手で包み、夜明は親指で目尻に溜まった涙を優しく拭い取る。

「本当だって。ちゃんと覚えてるよ、鈴音（すずね）」

鈴音（すずね）。それは小学校六年の時、夜明だけが口にしていた鈴音の愛称だ。

（やっぱり覚えててくれた・・・）

鈴音の胸に暖かい物が溢れた。また、目尻に再び込み上げてくる物も。

「・・・四年間何の連絡もしないで・・・何処行ってたのよ・・・この馬鹿ーっ！！」

叫ぶなり、鈴音は夜明の胸に顔を埋めて泣きじゃくり始めた。両腕をぐるぐると回し、まったく威力のない拳でポカポカと夜明を叩く。夜明は苦笑しながら、鈴音の拳を防ぐでもなく、鈴音の頭を撫で続けた。

数分後。漸く落ち着いた鈴音はバッと夜明から離れた。泣き腫らした目を乱暴に擦り、顔を真っ赤にして夜明に指を突きつける。

「ま、また後で来るから！　逃げるんじゃないわよ、夜明！　ついでに一夏！」

そして脱兎の如く廊下を駆けていった。

「廊下は走るなよ～・・・って聞いてないか」

やれやれと首を振りつつ、ドアからにょっきりと突きだした頭を引っ込めると、そこには太陽とセシリアを筆頭にした女子達の姿が。

「夜明、今の娘は誰だ？　話から推測するに昔の友人みたいだが」

「よ、夜明さん！？　あの子とは一体どういう関係で！？」

二人に続いて女子の質問が火を噴く。そして。

バシンバシンバシンバシンバシンバシンバシンバシンバシンバシンバシンバシンバシン！

「席に着け馬鹿共。授業を始めるぞ」

千冬の出席名簿も火を噴くのだった。

「夜明、責任を取れ」

「あなたのせいですわ！」

「・・・何がやい？」

文句を言ってくる太陽とセシリアに、夜明は生暖かい視線を送ることしか出来なかった。何せ、文句を言われる心当たりが無いのだから。夜明は助けを求める為に一夏に視線を向けた。

「なぁ一夏。俺、この二人に文句言われるようなことしたか？」

「さぁ？　先生達に怒られたのが関係してるのだとすれば、確実に自業自得だな」

一夏の言うとおり、太陽とセシリアは午前中の授業だけでも山田先

生に五回注意、千冬に三回殴られている。理由は言わずもがな、朝の夜明と鈴音のエンカウントだ。千冬の授業で考え事をするなんて、ホホジロザメがうじゃうじゃいる海に百リットルの血をぶちまけ、頭からダイブするようなもの、即ち自殺行為だ。二人も自分達が言ってることは理不尽だと理解しているが、その原因が目の前で飄々としていれば文句の一つや二つ、言いたくもなる。

「取り敢ず飯食いに行こうぜ」

「じゃ、俺は箒誘ってくる。先に行っててくれ」

一夏は箒を誘いに行き、夜明と二人は食堂へと向かった。三人に付いてくる数人の女子。それは雪達磨式に増えていき、ちょっとしたハーメルンの笛吹状態になっていた。

「待ってたわよ、夜明！」

食堂に入った瞬間、夜明を向かえたのは鈴音の細い指だった。

「ん～、どした鈴音？」

夜明は突きつけられた指を無視し、鈴音の頭を撫で始めた。

「ふにゃ～・・・♪」

鈴音はそれこそ猫のように目を細め、全力でうっとりしていた。

「ふにゃ～・・・はっ！　違う！　そうじゃなくて・・・夜明！あんたさっきはよくも私のことからかってくれたわね！！」

頭を撫でられたまま鈴音は怒った。が、はっきり言ってまったく怖くない。

「だから悪かったって。美人になってたお前を見たら無性にからかいたくなっ両脇から内臓を貫くような衝撃がぁ！！」

脇腹を押さえて、夜明は床の上をのたうち回った。左右に立っていた太陽とセシリアが全力で、ノーモーションの肘鉄を打ち込んだのだ。

「・・・誰よあんた達？」

「夕暮太陽。こいつの相棒だ」

「セシリア・オルコット。イギリス代表候補生ですわ」

「ふ～ん・・・」

三人が睨み合っていると、一夏と箒が食堂にやってきた。

「悪い、待ったかって・・・何が起こってるんだ？」

「何故、夜明は脇腹を押さえながら床の上をのたうち回っているんだ？」

火花を散らす三人の女子に、脇腹を押さえながらのたうち回る銀髪の青年。前者はともかく、後者を的確に説明することが出来る人間はいないだろう。

四年振りの再会・・・誰だお前？（後書き）

こんばんわ。サザンクロスでございます。

前日の夜からアンケートを開始したのですが・・・たくさんの方がアンケートに協力してくださったので、びっくりしております。更なる協力者を手に入れるために、頑張っていく所存です。

今のところの結果ですが、

ジャスティス、６

暁、１

ダブルオーライザー、２

ユニコーン、２

ターンＡ、１

と言う感じの結果になりました。ジャスティスが圧倒的だな。まだまだアンケートは続きますので、何卒協力を！！

アンケートのついでと言っては難ですが、ＩＳの名前も募集したいと思います。

一応『トワイライトソード（黄昏の剣）』と言う名前にしようかな、と思っているんですが、そんなのよりもこっちの方がいいぜ！　的な物があったら書いてください。

では次回！

幻想を抱いて地に墜ちろ！！（前書き）

サブタイに意味はねぇっす

幻想を抱いて地に墜ちろ！！

「夜明。いい加減にどういう関係なのか説明して欲しいんだが」

「まさかとは思いますが、その方と付き合ってらっしゃるのですか！？」

昼食を食べ終え、早速二人は夜明に詰問を始める。周囲の女子達も興味津々だ。

「べべべ、別に、つ、付き合ってなんか」

「ねぇよ。小六の時の女友達だ」

「・・・・・・」

「あ？　どした鈴音？」

「別にっ！」

鈴音に睨まれ、夜明はキョトンとする。

「で、結局彼女は何なんだ？」

「小五の時に引っ越してきた友達」

箒の問いに返ってきたのは実にシンプルな回答。

「でも、俺、小学校卒業したと同時に旅に出たからな。実質、会う

のは三年ぶりだな。元気してたか？」

「してたわよ。あんたは？　少しくらいは連絡寄越しなさいよ」

「夜明はお前と離れていた三年間、実に健康体だったぞ。私が保証する」

「・・・夜明、誰この人？」

鈴音は太陽に訝しげな視線を送る。

「こいつは夕暮太陽。旅先で出会って仲良くなってな。一緒に旅してたんだ」

「私と共に旅してた二年間、夜明は実に元気だったぞ」

太陽は私と、の部分をえらく強調した。鈴音は数秒間太陽を睨み、視線をそのまま夜明へと向ける。その半目になった目には、若干の夜明に対する恨み言と、太陽に対するかなりの嫉妬があった。

「夜明。あんた自分探しの旅に行くとか言っといて、本当は女の子引っかけに行ったの？　不潔」

鈴音に半目で睨まれ、夜明は少しだけ困った表情で頬を掻いた。

「別にそんなつもりで旅に出た訳じゃねぇんだけどな。あ。でも、旅先で結構な数の美人と仲良くなったのは確か爪先を踏み砕かれたような激痛がぁっ！！」

左右に座っている太陽とセシリアの踵落としを爪先に受け、夜明は

苦痛に顔を歪める。本当なら床の上を転げ回りたいところだが、テーブルについているのでそういう訳にもいかない。鈴音と太陽の視線が交差し、空中に火花を散らす。

「初めまして。あんたがいない二年間、夜明と一緒にいた凰鈴音だよ」

「お初目に掛かる。お前がいない三年間、夜明と共に世界を旅していた夕暮太陽だ」

のっけから敵対心剥き出しである。

「んんっ！　私の存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん、太陽さん」

「・・・・・・誰？」

「・・・・・・誰だお前は？」

鈴音だけでなく、太陽までもが真顔で訊ねてくる。

「ちょっとお待ちなさい！　一億歩譲って」

「それは譲ったとは言えないだろ」

「確かに」

一夏と箒のツッコミは華麗にスルーし、セシリアはスビシッと鈴音に指を突きつけた。

「凰さんが私を知らないのはいいとして、何故太陽さんまで私のことを覚えてないのですか！？　同じクラスでしょうに！」

「いや、私他の国の候補生とか興味ないし」

「私は弱い奴を記憶しない主義だ」

「い、苛めですわーっ！！」

ズドドド！　っと空中に涙の線を残し、セシリアは食堂から飛び出していった。

「何やってんだよお前等・・・」

夜明は呆れ顔でため息を吐き、セシリアを追って食堂を飛び出した。

数十秒後。

「ううぅ～・・・、夜明さん～」

「よしよし。セシリーが凄いってのは俺が知ってるから」

エグエグ目をうるうるさせているセシリアと、それを撫でて落ち着かせている夜明。そして、二人をジト目で睨む太陽と鈴音という構図が出来上がる。

「ところで夜明」

「あん？」

夜明はセシリアを撫でながら鈴音を見た。夜明に撫でられているセシリアは既に涙を引っ込めていて、とろとろに顔をとろかせている。鈴音は羨ましさ半分、怒り半分でセシリアを睨み、気持ちを切り換えるように咳払いをした。

「あんた、ＩＳの操作とかどうなの？」

「ＩＳの操作？　特に問題ないと思うが」

「ふ、ふぅん・・・」

鈴音にしては珍しく、何やら口をもごもごさせている。

「あ、あのさ。もし夜明がして欲しいんならＩＳの操縦、見てあげ」

「必要ないな」

鈴音が全てを言い終える前にそれを遮った。その際に飲んでいたコーヒーをかなり強くテーブルに置いたため、ガチャンと硬質な音が響く。

「お前如きにＩＳの操作を見てもらわなければならない程、夜明は弱くない。何せ、お前と同じ代表候補生のセシリアを一蹴したんだからな」

「えっ、そうなの？」

鈴音に問われ、夜明はコクリと頷いた。鈴音はふ～ん、と頷きながら、キョトンとしている夜明、とろけと苦い物が複雑に混じり合った表情を浮かべたセシリアを見比べている。

「それって夜明が強いの？　その人が弱いの？　どっち？」

「「夜明【さん】が強いんだ【です】！！」」

テーブルに両の掌を叩きつけ、太陽とセシリアは勢いよく立ち上がった。そんな二人を、鈴音は少しだけ鬱陶しそうに見る。

「うるさいなぁ。そもそも私は夜明に聞いてんの。関係のない人はすっ込んでよ」

自分から聞いておいてそれは無いんじゃないか？　と思う一夏と箒だが、二人がうるさいのも事実だから何も言わなかった。それに、鈴音が聞いてるのも夜明本人のため、これもまた二人が口出しすることではない。だが、太陽は確固たる言い分があるのか、その大きな胸（余談だが、太陽の胸は山田先生と同等、若しくはそれ以上ある）を張った。

「関係ならあるさ。何せ、夜明のＩＳ『レイジングウィング』を作ったのは私なのだからな」

「「「「「「「「「「・・・・・・」」」」」」」」」」

空気が無くなったか？　と錯覚するような静寂。数秒後、どんなことが起こるか容易に想像でき、夜明は同じく呆けている一夏と箒の耳に耳栓を突っ込み、自身も指で耳を塞いだ。数秒後、

「「「「「「「「「「「「えぇ～っっ！！！？？？」」」」」」」」」」」」

食堂を揺らす程の驚きの叫び声が響いた。指で耳を塞いでいるのに、

脳を直接ハンマーで殴られたかのような衝撃が夜明を襲う。夜明と太陽が質問の的になろうとした時、

「うるさいぞ！！　一体何の騒ぎだ！？」

偶々、食堂の側を歩いていた千冬が怒鳴り込んできた。

「ち、千冬ね」

バシンッ！

「・・・織斑先生、太陽が夜明のＩＳを作ったって本当なんですか！？」

一夏の問いに千冬は露骨に舌を鳴らし、太陽を鋭い視線で見やる。

「夕暮、そのことは機密事項だと言っておいただろうが」

「織斑教諭。女には駄目だと分かっていても、やらなければいけない時があるんです！！」

時と場所、状況さえ間違っていなければ、この台詞は最高に格好いい物になっていただろう。が、太陽に与えられたのは千冬の出席名簿だった。

「お前という奴は・・・、冷静なのか感情的なのか分からん奴だな。貴様等。今さっき聞いたことは特一級の機密事項だ。故に、しゃべることも関わることも禁ずる」

「でも先生」

「分かったな？」

千冬の有無を言わせぬ口調に皆黙り込み、その場はうむやむのまま解散となった。

浴室の放課後。夜明達は第三アリーナでＩＳ訓練をしていた。昨日の太陽の爆弾発言もあり、かなきぎくしゃくとした空気が流れていたが、そんなことを気にしてもしょうがないと、皆、午後の授業ま

でには普通に太陽に接するようになっていた。

「お疲れだ。夜明、一夏」

ピットへと戻ってきた二人を、太陽の労いの言葉が出迎える。二人は軽く手を上げてそれに応えた。ちなみに、箒とセシリアは反対側のピットに行っている。

「何か飲むか？　欲しければ買ってくるが」

太陽がそこまで言った時、音を立ててスライドドアが開いた。入ってきたのは、

「夜明っ！」

鈴音だ。

「おつかれ。はい、タオルと飲み物。緑茶でいいよね？　ついでに一夏。タオルとスポーツドリンク」

「俺ぁついでですか？　ま、いいけどさ」

二人は鈴音に礼を言ってペットボトルを受け取り、タオルで顔を拭き始めた。不意に、太陽と鈴音の視線が合わさった。太陽が憮然とした表情を浮かべているのを見て、鈴音は微かに勝ち誇った表情を作る。

（余り調子に乗るなよ小娘）

（予め準備しとかなかったあんたが悪いんでしょ。何たって私と夜

明は幼馴染みだから。後小娘って言うな！）

こんなアイコンタクトが交わされていたことを、二人は知らない。

幼馴染み。

その何とも言えない言葉の響きに太陽は胸を貫かれ、両手を床につけるようなような形で膝をついた。

「んぐっ、んぐっ、ぷはっ。サンキュ、鈴音・・・って何だって太陽がｏｒｚ状態になってんだ？」

「？　・・・本当だ」

よく分からない光景に二人は目を丸くする。

「くっ、今回ばかりは負けを認めてやろう。凰鈴音」

「ふっ、何度でも掛かってきなさい。私はその悉くを全て叩き潰したげるわ！」

「「？？？？？」」

二人の頭の上の疑問符が増えたのは言うまでもない・・・。

「夜明、一夏、セシリア。これが今回のそれぞれの機動データだ。今後の参考にしてくれ」

「あんがと」

「サンキュウ」

「いただきますわ」

「それから箒。一応、お前のデータも取っておいたが・・・どうする？」

「ありがたく頂戴しておこう」

四人は太陽の手から、それぞれＵＳＢメモリを受け取る。太陽がＩＳ訓練その物に参加しないのは、ピットで四人のＩＳ稼働のデータを取るためだ。一度、箒が変わろうか、と提案してくれたが、太陽はやんわりと断った。箒にＩＳ稼働のデータを取るなんて小難しいこと、出来るとは思えないし、何より、太陽はＩＳ操作よりもデータを取ったり分析する方が好きなため、問題なかった。

「何？　あんた達、毎回訓練するたびにデータなんか取ってんの？」

「あぁ。太陽のデータは恐ろしく細かくてな。見るのが少しばっかり大変だが、凄く参考になる」

「ふ～ん」

小さく頷きながら鈴音は太陽を見た。

「ねぇ、夕暮。今度暇な時でいいから私のデータも取ってよ」

「構わないぞ」

「太陽さん、ちょっとよろしくて？」

言うなり、セシリアは太陽の襟を掴んで廊下の端へと引きずっていった。

（何だセシリア？　いきなりこんな所まで引きずってきて？）

（何だ、ではありませんわ！　何故わざわざ敵に塩を送るようなことを！？）

（敵？　塩？　・・・あぁ、鳳のことか。一つだけ言っておくがセシリア。夜明はＩＳ操作がうまいかうまくないか何て下らない理由で女性を好きになったりはしないぞ）

（そ、そうなんですの！？）

（あぁ。夜明を惚れさせたいのなら、まずは自分を高めることだな）

「何話してんだ？　太陽とセシリー？」

「さぁ？」

夜明と一夏は首を傾げる。それ程離れていないところで二人は話しているのだが、小声なので夜明達には聞こえない。

「ところでさ、夜明」

「ん？」

唐突に、何の脈絡もなく鈴音が訊ねてきた。鈴音にしては非常に珍しく、もじもじしながら顔を赤らめ、視線は天井を忙しなく彷徨っている。

「約束、覚えてる？」

「約束？　・・・あぁ、あの日の」

上目遣いに問われ、夜明は０，数秒の速さで記憶を掘り返す。

「約束ってあれだよな？　確か小学校卒業式当日の？」

「そう！　それそれ！」

「確か、鈴音の料理の腕が上がったら毎日酢豚を・・・」

「うんうん！」

目をキラキラ輝かせながら、鈴音は顔を覗き込んでくる。夜明は約束を思い出すために眉間を指で揉んだ。

「ちょっと待ってくれ。すぐに思い出すから。え～っと・・・」

必死で夜明は記憶を掘り返す。が、その作業の途中でとんでもない横槍が入った。

「おごってくれるって話じゃなかったけか？」

一夏だ。夜明は何か違う気がしたが、何分、昔のことの為、そんな約束だったような気がしてきてしまう。

「確かに、そんな感じのニュアンスだったと思うけど・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

はい？」

鈴音がそのままの体勢で固まった。そんなことには気付かず、一夏は羨ましそうに言う。

「にしてもラッキーだな夜明。うまい飯がタダで食わせてもらえるんだぜ？　ありがたい話だよな」

「いや、やっぱなんか違う気がするんだがな・・・。ん、どうした、鈴音？」

ここで漸く、夜明と一夏は鈴音の様子がおかしいことに気付いた。肩が小刻みに揺れ、視線を床に落としている。

「・・・な」

「「な？」」

「何て余計なこと言ってくれてんのよこの馬鹿一夏ぁぁぁーっっっ！！！！」

「くぺっ！？」

いきなり、鈴音は一夏の首を締め始めた。しかも、的確に頸動脈を締めているのだ。流石は代表候補生と言えるだろう。

「ちょ、いきなり何してんだ鈴音！？」

「一端落ち着け凰！　そのままじゃ一夏がぁ！！」

夜明と箒の二人がかりで鈴音を一夏から引っ剥がした。

「それにあんたもあんたよこの馬鹿夜明！！」

と、今度は怒りの矛先を夜明に向ける。

「何で女の子との約束をちゃんと覚えてないのよ！　最っ低！　馬

鹿ぁーっ！！」

ここで夜明が一言謝ればことが収まっただろう。が、夜明は謝らなかった。何故なら、鈴音に襟を掴まれてがくがくと凄い速さで揺さぶられているのだから。謝ろうにも謝れず、夜明の口からは単語、と言うか意味不明の音しか出てこない。

「すまない、待たせた・・・どういう状況だこれは？」

「ちょ、凰さん！　あなた夜明さんの脳をシェイクにするおつもりですの！？」

小声の密談を終え、戻ってきた二人は取り敢ず夜明を救出した。

「女の子との約束くらいちゃんと覚えときなさいよこの馬鹿夜明！！　朴念仁！　間抜け！　アホ！　唐変木！　バーカバーカバーカァ！！」

素晴しい罵倒の数々。浴びせられている本人は約束を忘れていたのが事実のため、何も言い返さずに苦笑している。が、彼の相棒二人はおもしろくない。そして言ってしまった。

「「うるさい、貧乳」」

禁句を。

「ばっ、お前等！」

珍しく狼狽した夜明が二人の口を慌てて塞ぐが時既に遅し。強烈な爆裂音。遅れて廊下が危なっかしく揺れ、五人は何とか振動に耐え

た。四人を庇うように両腕を広げていた夜明は鈴音を見た。鈴音は右腕のみにＩＳ装甲を展開している。

「へぇ～、言っちゃうんだ。人が気にしてることを、一番気にしてることを。・・・フ、フフフフフフ」

不気味に笑い始めた鈴音。取り敢ず二人に替わって夜明が謝ろうとするが、それよりも速く鈴音は笑いを止め、鋭い視線を一夏と太陽に送っていた。

「いいわ。まずは一夏。あんたをクラス対抗戦で叩きのめす。んで、夕暮は・・・後回し。それと夜明！！」

「は、はい！！」

思わず気を付けをしてしまう。今の鈴音はそれだけ怖かった。

「あんたには二人をぶっ飛ばした後、約束を思い出させるプラス、忘れてた埋め合わせをしてもらうから、その・・・か、覚悟しときなさい！！」

最後は幾分か顔を赤くして、鈴音はそれだけ言うと廊下を走っていった。鈴音を見送った後、夜明達は壁に出来た直径三十センチくらいのクレーターに注視した。

「・・・パワータイプだな。それも白式と同じ近接特化型、だな」

壁のクレーターを真剣な眼差しで太陽は観察する。はぁ、とため息を吐き、一夏は申し訳なさそうに頭を掻いた。

「いくら頭に血が上ってたとは言え、酷いこと言っちまったな。明日、鈴に謝っておくか」

「いや、多分無理だと思うぞ」

「何故だ？」

箒の問いに、夜明は反対側の壁を指さす。そこには、張り出された紙があった。表題は『クラス対抗戦日程表』。そして一夏の一回戦の相手は・・・二組、鈴音だ。

試合当日。夜明と太陽、箒とセシリアはリアルタイムモニターで一夏と鈴音の試合を鑑賞していた。モニターの中では一夏が鈴音のＩＳ『甲龍』の武装、衝撃砲『龍咆』に苦戦を強いられていた。

「太陽。この試合、どう見る？」

箒は太陽に訊ねた。その声色は一夏の無事を願う想いを隠し切れていない。

「・・・正直な話、かなり厳しいだろうな。甲龍の衝撃砲は砲弾だけじゃなく、砲身まで見えない。オマケに砲身射角の制限もない。仮に一夏がこれを攻略したとしても、凰自身がかなり強い。勝てるかどうかは・・・一夏の気持ち次第と言った所か」

「一夏・・・」

「・・・・・・・・・・」

夜明は真剣な表情でモニターを見ていた。いや、その表情は真剣と言うよりも、剣呑と言う表現のほうが正しいかもしれない。

「夜明さん、どうかされたのですか？　表情がとても怖くなっていますが・・・」

いや、と夜明はセシリアに首を振ってみせる。

「何だか知らないけど、朝からすごく嫌な予感がするんだ。何なんだ・・・」

その時、モニターから巨大な爆発音が流れてきた。数瞬遅れてアリーナの方角から衝撃が伝わってくる。突然の出来事に生徒達はざわめき始め、夜明と太陽は鋭い視線でモニターを見た。モニターの中ではステージの中央から黒煙が立ち上り、アリーナ天井の遮断シールドに大きく亀裂が入っているのが分かる。

「嫌な予感ってのは往々にして当たりやがるなくそっ！」

夜明はパニックになりかけている生徒達を掻き分け、アリーナに向けて走り始めた。一瞬遅れて太陽が続く。

「夜明、太陽！　くそっ！」

「あぁ、もう！　何がどうなっていますの！？」

更に数秒遅れ、箒とセシリアも二人の後を追い始めた。

「もしもし！？　織斑君、聞こえてますか！？　織斑くーん！！　凰さーん！！」

ピットでＩＳのプライベート・チャネルで山田先生が一夏と鈴音に呼びかけている。端から見れば唯の危険人物だが、彼女もまた善良な教師と言うことだ。

「少し落ち着いたらどうです山田先生」

「これが落ち着いていられますか織斑先生！？　織斑君と凰さんは自分達が食い止めるって言ってるんですよ！！」

「別にいいんじゃないか？　本人達がやると言ってることだし」

千冬はコーヒーに白い粉を入れていた。物腰も落ち着いている。

「取り敢ずコーヒーでも飲め。あなたに必要なのは落ち着くよりも先ず糖分だ」

「あの、それ・・・片栗粉ですけど・・・」

ピタッと千冬の手が止まった。何事もなかったかのようにスプーンを容器に戻す。

「・・・何故ここに片栗粉が？」

「さ、さぁ？」

不意に、二人の前に湯気が上るコーヒーが突き出された。

「どうぞ。片栗粉じゃなくて砂糖が入ってます」

「む、すまない」

「あ、ありがとうございます」

二人は渡されたカップを一気に飲み干した。確かにコーヒーの苦みの中に砂糖の甘さがある。

「で、何故お前達がここにいるんだ？」

カップを置き、千冬はコーヒーを渡してくれた太陽、その後ろにいる息を荒げた箒とセシリアに訊ねた。

「先生！　私にＩＳ使用許可を！　何時でも出れますわ！！」

「そうしたいのは山々だが・・・これを見ろ」

苦い顔で端末を操作し、モニターに表示された画面を切り換える。

「遮断シールドがレベル４に設定？　しかも全扉がロック・・・。侵入者の仕業ですか！？」

箒の問いに無言で頷く千冬。画面に映された第二アリーナのステータスチェックを見ながら、箒は床に足を叩きつけた。

「な、なら緊急事態なのですから政府にじょ」

「それよりも織斑教諭。夜明にＩＳ使用の許可を！」

「ん、何故・・・そう言えば月光は何処に行った？」

ここで初めて、千冬は夜明がいないことに気付いた。

「夜明なら第二アリーナの外で待機してます」

「・・・大体の想像はつくが、月光は何をするつもりなんだ？」

「外から遮断シールドをぶち破ります」

「・・・やれるのか？」

「夜明とレイジングウィングなら」

静かな千冬の問いに、太陽は絶対の信頼を込めて即答する。長い沈黙、実際は数秒の後、千冬は身体どと視線をモニターに向けた。

「・・・月光夜明にＩＳ使用許可を与える。観客と織斑、凰の保護を最優先させろ」

「はい！」

太陽は大きく返事を返すと、周囲に数枚のディスプレイを浮かび上がらせ、左右二枚のディスプレイ型のキーボードを猛烈な速さで叩き始めた。

「・・・頼んだぞ、夜明」

再びアリーナの光景を映し出したモニターを見ながら、千冬は誰にも聞こえないくらいの声で呟いた。

（どうすれば・・・！）

一夏は焦っていた。試合中に突然乱入してきた謎のＩＳ。全身装甲で、恐らく無人のＩＳに苦戦していた。二人で連携して、どうにか一夏が相手の懐に飛び込めるのだが、敵ＩＳのスラスターの出力が尋常じゃなく、雪片を当てる前に回避されてしまうのだ。白式のエネルギーは後三分の一、甲龍のエネルギーは二分の一。焦るなと言う方が無理だ。

「一夏！　もっ回行くわよ！」

「あぁ！！」

七度目となるトライ。鈴音が衝撃砲で敵ＩＳを砲撃、その間に一夏が瞬間加速（イグニッション・ブースト）で敵ＩＳに近づき、零落白夜で斬る。作戦はいたってシンプルその物。だが、その中で最も大切な決定打が欠けている。

「くそっ！！」

雪片を避けられ、一夏は悪態をつきながら後退する。今までなら、ここで敵ＩＳは一夏を攻撃してきた筈だ。一夏はそうなると思っていたし、鈴音もまたそうなることを予想して、一夏の援護に集中していた。が、敵ＩＳは一夏ではなく、鈴音の方に両腕のビーム砲口を計八門を向けた。

「「え？」」

二人の口から間抜けな声が漏れる。その声が引き金だったかのように、敵ＩＳはビームを放った。

「鈴！！」

一夏は急いで鈴音の方へと加速した。が、当然ビームの方が速い。あ、直撃だ。と、鈴音が他人事のように思った瞬間、再びアリーナを衝撃が襲う。敵ＩＳが侵入した時と比べ、音、衝撃は小さい。だが、圧倒的に速い。間髪入れずに飛び込んできた何かが鈴音の前で急停止、計八つのビームを防いだ。

「大丈夫か？　鈴音？」

聞き慣れた声に反射的に閉じていた目を開くと、そこには・・・

「助けに来たぞ」

二対の白い翼を広げ、本気の表情を浮かべた夜明が鈴音を護っていた。

「どうにか間に合ったか」

鈴音に向けられたビームを防げて、夜明は安堵のため息を吐く。後

ろの鈴音から返事がないので振り返ると、頬を赤く染めた鈴音が夜明を惚けた目で見ていた。

「お～い、大丈夫か？」

目のまで手を振られ、鈴音は慌てて意識を集中させた。

「う、うん！　大丈夫って後ろ！！」

敵ＩＳが再びビームを放ったのを見て、鈴音は声を上げる。夜明は鈴音の方を向いたまま左腕のビームシールドを展開、見もせずにビームを防いだ。敵ＩＳは乱入者である夜明の排除を優先したようだ。ビームの集中砲火を夜明に浴びせている。

「こんな乱射してよくエネルギーが保つよな。お前もそう思わねぇか、鈴音？」

「今は私のことはいいから敵を見なさい！　心臓に悪すぎるわ！」

見もせずにビームを防ぎ続ける夜明の姿に、鈴音の胸は別の意味でドキドキ。

「問題ねぇって。なぁ一夏！！」

「おう！！」

敵ＩＳに気取られないようにその後ろに移動した一夏は一気に加速して敵ＩＳの背後に接近、零落白夜を発動させた雪片を振り下ろす。雪片が当たる直前に敵ＩＳは最大出力で上昇。雪片を回避した。一夏は舌を鳴らしながら敵ＩＳを追わず、夜明達の所に飛んできた。

「避けられたか？」

「いや、感触からして少しは当たったはずだ」

「了解」

夜明は一夏の肩を叩き、推進翼を広げて敵ＩＳを睨む。

「後は任せろ」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　あんた一人でやるつもり！？」

飛んでいこうとする夜明の手首を鈴音は慌てて掴んだ。

「いや、そのつもりだけど？」

「馬鹿じゃないの！？　私と一夏が二人がかりでも苦戦したのに、あんた一人だけで勝てる訳無いでしょ！　ここは三人で」

「大丈夫だ」

早口で捲し立てる鈴音の口を、夜明はＩＳ装甲を解除した人差し指で閉じさせた。

「俺には貫きたい信念がある。俺には背きたくない誓いがある。俺には護りたい世界がある。そいつ等がある限り、俺の魂（つばさ）は不屈だ」

だから、と夜明は鈴音の頭を撫でる。

「信じてくれ。俺のこと、レイジングウィングのこと」

夜明が浮かべた笑顔に心を撃ち抜かれ、鈴音は顔を赤くしながら頷くしかなかった。

「じゃ、一夏。無いとは思うけど、流れ弾が来たときはよろしく」

「分かった。・・・夜明」

「何だ？」

「勝てよ」

一夏の檄に、夜明は小さく笑みをこぼす。

「誰に言ってんだ？」

絶対の自身を顔に浮かべ、夜明は敵ＩＳへと向かった。

「わざわざ待ってくれたのか？　機械のくせして気が利くな」

今まで一切攻撃をしてこなかった敵ＩＳに夜明は冗談交じりに礼を言った。実際の所、敵ＩＳは夜明とレイジングウィングの戦闘力を計っていただけであって、夜明のことを待っていた訳では無い。そんなこと、夜明にも分かっているが、冗談を言えるくらいに夜明には余裕があった。やがて、計測が終わったのか、敵ＩＳはゆっくりと動き始めた。

『新たな敵の認識を完了。危険度Ｓと断定』

スラスターを噴かし、爆発したかのような速さで夜明に突っ込み、右拳を叩き込む。

『即刻、排除』

零距離でビームを撃ち込んだ。

「・・・驚いたな。まさか機械（がらくた）でも幻想を抱くんだな。俺を倒せるなんて荒唐無稽、実現不可能な幻想を」

そこから一切動くことなく、夜明は左腕に展開したビームシールドで敵ＩＳの右拳、零距離射撃を防いだ。

「ならいいぜ」

敵ＩＳが左拳を引いたのを見て、夜明は右のウィングスターの引き金を引いた。

「その幻想」

ビームが直撃し、敵ＩＳの左拳を爆破。左腕を振って右拳を弾き飛ばす。

「俺が破壊する」

左のウィングスターを敵ＩＳの右肘関節部分に叩きつけ、引き金を数回引く。更に目にも止まらぬ速さで左手を引き、今度は右のウィングスターを剥き出しのセンサーレンズにぶつけ、引き金を引く。この動作を高速、且つ連続で繰り返し、敵ＩＳの関節、スラスターを全て撃ち抜いた。

「壊れた幻想を抱いて」

墜ちていく敵ＩＳの胸部、コアに連結させたウィングスターの銃口を向ける。

「地に墜ちろ！！」

放たれた碧の閃光は正確にコアだけを貫き、敵ＩＳは爆発すること

なく耳障りな音を残しながら完全に稼働を停止した。数秒の沈黙の後、ＩＳ学園中に歓声が爆発した。夜明はその歓声から逃れるようにウィングスターの連結を解除しながら、一夏と鈴音の所に飛ぼうとする。が、安心するのはまだ早いようだ。歓声を掻き消すようにアリーナに、設置されたスピーカーから太陽の声が流れてきた。

『まだ終わってないぞ！　夜明、所属不明のＩＳ三機を確認！　高速で第二アリーナに近づいている！　接触予想時間は一分後だ！！』

アリーナに響いた太陽の裂帛の声。夜明は何も言わず、険しい目をアリーナの遮断シールドに向けた。

幻想を抱いて地に墜ちろ！！（後書き）

こんばんわ。サザンクロスでっす。

さてさて、ちょっとしたオリジナル展開。

ここで皆様にヒント。この三機は一体なんでしょうか？

その一、ガンダムです。

その二、ＳＥＥＤです。

その三、新型か！？　です。

もう分かりますよね？　ではまた！！

不屈の翼ｖｓ魔のトライＩＳ（前書き）

敵方の武装の名前がまんま同じですが、ご了承。

敵の武装の名前まで考えられるほど、俺のスペックは高くねぇ！！

「操縦者は？　戦闘タイプは？　特殊装備の有無は分かるか！？」

「今、調べてます！　接触予想時間二十秒前までには分かります！」

ディスプレイから目を離さず、キーボードを高速で叩きながら太陽は千冬の問いに答える。よし、と千冬は頷き、インカムを口元に近づけた。

『月光、聞こえるか！？』

「ばっちし聞こえてますよ、織斑先生」

モニターから普段通りの飄々とした夜明の声が流れてきた。だが、その声音とは裏腹に、表情は険しいままアリーナの天井を見上げている。

『アリーナ外での戦闘を許可する。教師部隊が行くまで敵ＩＳ三機の足止めをしろ！』

「了解っす。足止めするのは構わないんですがね・・・姐さん」

『何だ？』

「別に倒しても構わないんだろ？」

モニターの中で不敵な笑みを浮かべる夜明。その笑顔を見て、千冬は多少苦い物を混じらせながらも、口元を綻ばせる。

『まったく、お前という奴は・・・。あぁ、構わない。可能なら捕獲を試みてくれ』

「委細承知」

『夜明！　アリーナの遮断シールドを解除したぞ！』

太陽の声に頷き、夜明はレイジングウィングの翼を広げた。

「月光夜明、レイジングウィング、出る！！」

急上昇してアリーナから飛びだし、予想接触空域、第二アリーナの上空で敵ＩＳを待ちかまえた。

「俺たちも行くぞ、鈴！」

「勿論！」

夜明に続いて二人もアリーナから飛び出そうとするが、千冬の声によって遮られる。

『織斑、凰。お前達はピットに戻って待機だ』

スピーカー越しの千冬の指示に、二人は目を剥く。

「何言ってんだよ千冬姉！　相手は三機なんだろ！？　だったら夜明と俺、鈴の三人で相手をするべきだ！」

「一夏の言う通りよ！　いくら夜明が強いからって、三機も同時に

相手するなんて無茶よ！」

『そんなことは分かっている！！』

学園中に響く千冬の怒声。一夏と鈴音のみならず、ピットにいる箒とセシリア、学園中の生徒が身体を強張らせる。唯一人、反応を見せなかったのが、高速で作業を続ける太陽だけだった。

『そんなことは分かっている。・・・だが、教師部隊の準備には最低でも後、五分はかかる。深手ではないにしろ、先の戦闘でお前も鳳も少なからず消耗してる。この状況で敵ＩＳ、それも三機を止めるのは月光にしか出来ない』

「でも！」

『教師には生徒を護る義務がある』

「ざけんな！！　夜明だって生徒だろうが！！」

『これが今打てる最善の策だ。だから、戻ってこい』

アリーナにいる一夏と鈴音には見えていないが，ピットにいる千冬は強く拳を握り締める余り、血を流していた。

『さっさと戻ってこい、一夏、鳳。はっきり言って、万全の状態じゃないお前達が加勢したところで、夜明の足を引っ張るのは目に見えてる』

やんわりと、だが有無を言わせぬ口調で太陽が割り込んできた。その手は相変わらずキーボードを叩いている。

『それに、今更行こうとしても無駄だ。たった今、第二アリーナの遮断シールドのレベルを最大にまで上げておいた。どの道、今からじゃ夜明を追えないさ』

「なっ!?　夕暮、あんたなんて余計なことを!」

「夜明を信じて待て。織斑教諭」

「何だ?」

怒り心頭と言った感じで怒鳴っている鈴音を無視し、太陽は周囲に浮いているディスプレイを三枚、千冬の前に移動させた。

「それが敵ＩＳの武装、及び情報です。後、序でと言う訳ではありませんが、敵ＩＳのプライベート・チャネルを傍受しました」

「繋げてくれ」

太陽は頷き、プライベート・チャネルを傍受したディスプレイの音声をＯＮにする。少しの間小さなノイズが続き、唐突に鮮明な声が流れてきた。

『で、結局私達はどうすればいいんですか、ガンフィッツ?』

『んなもん皆殺しに決まってんだろ、ジャスティア!』

『ジャスティア、シュヴァルツェ、お前等またブリーフィング聞いてなかっただろ!?　俺たちの目的は例の男二人、織斑一夏と月光夜明、及びその専用ＩＳの捕獲だ』

『殺しじゃないんですか？　・・・面倒ですね』

『んだよそれぇ～。誰も殺さないんじゃＩＳ動かした意味無いじゃねぇか。片方くらい殺してもいいよな？』

『やめろ！　それで怒られんのは俺なんだぞ！！　・・・ったく、この戦闘、いや殺人狂どもが・・・。まぁ、安心しろ。二人を捕まえた後のことは特に指示されてはいねぇ。つまり』

『『つまり？』』

『他の連中はぶち殺そうが何しようが俺たちの勝手ってこった』

『やっりぃぃぃ！！！　おいジャスティア！　どっちが多く殺せたかで勝負しようぜ！』

『別に構いませんが。もっとも、勝敗は目に見えてますが』

『そう言う話は後にしろお前等！！』

「「・・・」」

太陽と千冬は表情を険しくした。今の会話から敵ＩＳ操縦者の名前、そして三人共々危険人物だと言うことが分かる。

「また面倒なのが現れたな」

「ですね・・・あ」

何かに気付き、太陽は大きく舌を鳴らした。

「どうした、夕暮？」

千冬の問いに太陽は無言であるＯＮ／ＯＦＦスイッチを指さす。それは館内放送のスイッチ、そしてＯＮ。つまり、さっきの敵の会話が全て、筒抜けで学園中に流れたことになる。必然、生徒達はパニックになっていた。

「くそっ、館内放送のスイッチを切っておかなかったのは私のミスだな。夕暮。私は生徒達を落ち着かせに行く。月光のサポートはお前に一任する」

「はい！」

「それから篠ノ之とオルコット！　貴様等も織斑達と一緒にここで待機していろ！！」

こっそりとピットから出ていこうとした二人の背中に言葉を叩きつけ、千冬は事態収拾のためにピットを飛び出した。

「一撃離脱可変型ＩＳ、レイダー。長距離射撃型ＩＳ、カラミティ。突撃強襲型ＩＳ、フォビドゥン。・・・三機とも個性的だな。しかも遠隔操作ときたか・・・。パーティー会場はここか？　だとすると主催者は・・・俺、ってことになるのかね？」

目の前に現れた三枚のディスプレイから敵ＩＳ三機のデータを読みとり、ハイパーセンサーで拡大された、接近してくる三機を見据えた。

特徴的な円盤形バックパックを上半身に被せた緑色のＩＳ、フォビドゥン。

猛禽のような形に変形した黒いＩＳ、レイダー。

そのレイダーの上に乗っている水色のＩＳ、カラミティ。

「嫌な来賓だが来ちまった以上、歓迎しねぇとな」

マルチロックオン用のバイザーを下ろし、三機にロックオンカーソルを合わせる。

「受け取んなぁ！！」

スターライト・フルバーストが放たれた。眼前に迫り来るエネルギーの津波をフォビドゥンは大きく横に動いて避け、レイダーはローリングで回避、その際に放り出されたカラミティはスラスターで宙に浮いた。

「悪いが、こっから先はパーティー関係者以外立ち入り禁止だ。入りたきゃ招待状を見せな」

ウィングスターの銃口を眼下にあるＩＳ学園に向け、夜明は冗談交じりの笑みを浮かべる。

「そうかよ。生憎招待状は持って無くてな。こいつで勘弁してくれや！！」

カラミティの背部装備、二連装ビーム砲、シュラークが火を噴いた。夜明は僅かに上昇して二つのビームを避け、シュラークが放たれると同時に突撃してきたフォビドゥンに意識を集中させた。

「・・・はっ！」

フォビドゥンは手にした大鎌、ニーズヘグを左から薙ぎ払うように振るう。夜明はやや後ろに急上昇してニーズヘグを回避、スタードライブを発射態勢に移した。

（先ずは一つ！）

撃破の確信を込め、スタードライブから放たれた蒼い荷電粒子砲は真っ直ぐにフォビドゥンに向かっていく。が、ここで予想外のことが起こった。

「利きませんよ」

フォビドゥンはバックパックの両側にある可動装甲を機体前面に構え、荷電粒子砲を曲げた。

「なっ、曲がった!?」

「驚いてる暇なんかねぇぞ!!」

目を見開く夜明に思考の暇を与えず、フォビドゥンの背後から変形したレイダーが飛びだし、機首と肩にある機関砲を乱射する。

「忙しねぇな!!」

夜明は左斜め上に飛翔して機関砲とレイダーの突進を回避した。夜明の後ろでレイダーは人型に変形し、顔面装備のエネルギー砲、ツォーンを放つ。夜明は上半身だけをレイダーの方に向け、右腕のビームシールドで防いだ。

「流石に防ぐか。そうでなきゃ殺し甲斐がねぇ!!」

歓喜の声を上げながら、レイダーは右腕の二連装実弾砲と盾を組み合わせた複合武装を向けた。が、弾丸を放つ前に夜明がいない方向から熱源反応を探知、慌てて回避行動を取る。

「ガンフィッツ、手前ぇ！！」

レイダーに向けシュラークを放ったカラミティは悪びれもせず、今度はフォビドゥンにシュラークの砲門を向けた。

「ジャスティア！　手前もうぜぇ！！」

「こっちの台詞です」

フォビドゥンは可動装甲でビームをレイダーの方へと曲げる。

「ジャスティア！　このくそ女！」

「・・・味方同士で何やってんだお前等？」

互いに違いを墜とそうとする三機に夜明が呆れるのも無理はない。

「邪魔すんな！！」

レイダーは二機に警告しながら左腕のモーニングスター、ミョルニルを投げ放った。ミョルニルは内部にあるスラスターの力を借りて、高速回転しながら夜明に突っ込む。

「意外と遅いな」

ひょい、と夜明はミョルニルを半身になって避け、レイダーとミョルニルを繋ぐワイヤーを掴んだ。

「なっ！？」

「そらよっ！！」

夜明はワイヤーを思い切り引っ張ってレイダーを引き寄せ、レイダーの胸部に回し蹴りを打ち込む。その際に外側の推進翼から半自律機動突撃砲塔、フィン・ファングを二基射出し、レイダーを追わせた。

「自律兵器！？　くそが！」

レイダーは体勢を立て直しながら高機動形態に変形、フィン・ファングとの追い駆けっこを始めた。

「何してんだよ」

「・・・・・・」

レイダーを嘲笑しながらカラミティはシュラーク、フォビドゥンはバックパック両側に装備されたレールガン、エクツァーンを連射する。夜明は二機の連射を小刻みに動きながら避け、二機が産んだ射撃のタイムラグを狙ってフォビドゥンに突っ込んだ。腰部にウィングスターをマウントし、スターライザーを引き抜いてフォビドゥンの横を通り過ぎる時に可動装甲を斬る。

「・・・っ！」

「（手応えはあった！）そらっ！！」

フォビドゥンから離れながら再びウィングスターを構え、振り返りながら左、右の順で引き金を引いた。

「何度やっても同じですよ」

二つの閃光は可動装甲に曲げられる。

「（近接以外のビーム兵器は曲げられちまうか）ならこいつぁどうだ！！」

夜明はディバイン・カノンを連射し、アクティブ・ポットからミサイルを合計八発放った。フォビドゥンを攻撃している間、フィン・ファングでレイダーを追い回し、ウィングスターでカラミティを牽制する。

「っ・・・！」

実弾の軌道までは曲げられず、フォビドゥンは可動装甲で実弾とミサイルの雨を防いだ。容赦のない連射にフォビドゥンのエネルギーはジリジリと削られていく。やがて連射が止まり、可動装甲の間から顔を覗かせると、

「よう」

拳を引いた夜明の姿が目の前にあった。

「なっ！！」

慌てて可動装甲で防ごうとするが、それよりも早く夜明の拳がフォビドゥンの顔面を捉える。

「まだまだぁ！！」

そのまま夜明は握り拳を解いてフォビドゥンの頭を掴みながら推進翼（スラスター）を噴かし、そのまま加速しながら前進した。その先にはフィン・ファングに追い回されるレイダーが。

「シュヴァルツェ、避けてください！！」

「あ！？　今こっちは急がしごぉっ！？」

フォビドゥンがレイダーに激突し、夜明は瞬間加速（イグニッション・ブースト）をかけてアリーナの遮断シールドに突っ込み、瞬間加速（イグニッション・ブースト）の勢いをそのまま拳に乗せて二機を殴り飛ばした。二機は遮断シールドをぶち破り、既に避難が完了している第二アリーナのステージに突っ込み、大量の黒煙を舞い上げる。

「そこで大人しく」

スターライト・ブレイザーのロックを外してエネルギー供給を始め、

「寝てろ！！」

蒼いプラズマの柱を腹部から放った。プラズマの柱は寸分違わず黒煙の中心を捉え、爆風と共に更に大量の黒煙とステージの欠片をアリーナ内にぶち撒ける。

「こんだけやれば、二機とも止まってると思うが・・・・・・・」

夜明はハイパーセンサーを作動させながら、黒煙の中に動きが無いか調べた。そして黒煙の中で何も動かないのを見届け、レイダーとフォビドゥンの可動停止を確信する。

「さって、次はお前の番だな。降参するなら今の内だぜ？」

挑発的な笑みを浮かべながらウィングスターを向ける夜明。夜明の降伏勧告に、カラミティは、

「はっ、やっぱり餓鬼だな。詰めが甘い」

嘲笑で応えた。

「何？　・・・っ！？」

夜明は急上昇し、後方から接近してきた二つの熱源を避けた。さっきまで夜明がいたところを二つのビームが通過する。

「まさか・・・」

そう思いつつ、夜明はアリーナの方を見た。徐々に黒煙が晴れていく中、夜明の予想は最悪の形で的中した。

「男のくせに・・・調子に乗りすぎですよ・・・」

可動装甲を構えたフォビドゥンの背後に、アリーナに叩きつけられた時だけの損傷をしたレイダーがいた。スターライト・ブレイザーのダメージは見受けられない。当たる寸前にフォビドゥンが可動装甲でスターライト・ブレイザーの軌道を曲げたようで、二機のすぐ横に、スターライト・ブレイザーによって穿たれた巨大なクレーターがある。夜明が冷静に考える暇もあらばこそ、二機は最大出力で飛んできた。

「いい加減墜ちろくそ野郎ぉぉぉぉ！！！！」

「さっさと死んでください！！！！！」

「くそっ！！」

夜明は後ろにブーストしながらウィングスターを放つ。二つのビームは先行するフォビドゥンの可動装甲に曲げられ、フォビドゥンの後ろにいるレイダーに届かない。

「シュヴァルツェ！」

叫ぶやフォビドゥンは急降下、レイダーが投げ放ったミョルニルが夜明の腹部に激突した。

「がっ！！」

「喰らいやがれ！！」

カラミティが放ったビームをどうにか避け、体勢を立て直す。

ーバリアー貫通。ダメージ５２。シールドエネルギー残量、４３。実体ダメージ中ー

「こいつぁ、まずいか・・・」

「夜明が被弾した！？」

ピットのリアルタイムモニターで、夜明と敵ＩＳ三機の闘いを見ていた一夏は驚愕の声を上げた。それは周りにいる箒達も同じ事だ。何せ、ＩＳ訓練時、一夏、箒、セシリアは三人がかりで夜明に挑んでいる。だが、三人は夜明に攻撃を当てるどころか、機動に追いつくことさえままならなかった。なのに、今、夜明が相手にしている三機は夜明の機動についていき、あまつさえ一撃を入れたのだ。驚くなと言う方が無理である。

「まずいな。あの三機の操縦者、性格はともかく腕は確かだな」

「ど、どうにかなりませんの！？」

セシリアに肩を掴まれるが、太陽は首を振ることしか出来ない。モニターの中で三機の嵐のような砲撃を避け続ける夜明の姿に、皆、胸が締め付けられるような思いだ。

「・・・何も出来ないのか？　友が闘ってるのに、こんな所で見ることしか出来ないのか、私達は！！」

拳を壁に叩きつけた箒が皆の心を代弁する。不意に、太陽は頭を掻き始めた。

「しかし困ったな。さっき夜明が二機をアリーナに叩き込んだ所為で、遮断シールドが消えてしまった」

「は？　あんたこんな時に何言ってんの！？」

鈴音に怒りの表情で睨まれるが、太陽は構わず続ける。

「本当に困ったな。シールド復活には少なくとも、後二分はかかる。その間、中に入られ放題だし、外に出られ放題だ」

太陽の後頭部を殴ろうとしていた鈴音の動きが止まった。

「このままじゃ新しい敵が来た時も対処できないし、誰かが外に飛び出して、夜明の加勢するのも止められない。困った困った」

一夏達は顔を見合わせて頷き合い、ピットから飛び出していった。ドアが閉まる音を背中に聞きながら、太陽は静かに呟く。

「頼むぞ、皆」

「死ねよくそがぁぁぁ！！！」

「墜ちやがれぇぇぇ！！！」

「・・・・・・」

「しつこい女は嫌われんぜぇ！？」

カラミティのシュラーク、レイダーのミョルニル、フォビドゥンの

エクツァーンを避けながら、夜明は顔を汗で光らせながら軽口を叩いた。かれこれ、二分間はこの一方的な銃撃戦を続けている。三機の射撃は夜明に一切の反撃を許さず、その精神を削っていった。軽口でも叩いていなければ、夜明の精神が保たない。

（くそっ！　反撃の糸口が見つからねぇ！）

心の中で悪態を吐いた。

「いっただきぃぃぃ！！！！」

その瞬間に出来た隙を見逃さず、レイダーは夜明の胸にミョルニルを叩きつけた。

「がぁっ！！」

胸部装甲が砕かれたが、辛うじてシールドエネルギーは一桁残っていた。

「まだ、やれる！！」

そう己を奮起し、体勢を立て直そうとするが、

「墜ちろぉっ！！」

「死にやがれぇっ！！」

「さようなら」

それよりも早く、三機がそれぞれ別の方向からビームを放った。

（駄目だ、シールドが間に合わねぇ！！）

無駄と知りつつ夜明は両腕で顔を覆った。

「させるかぁぁぁぁ！！！！！」

刹那、白い閃きが夜明を包み、三機が放ったビームを斬り裂いて霧散させた。

（な、何で！？）

ここで聞こえる筈の無い声に、夜明が慌てて周囲を見回すと、そこには、

「仲間は絶対にやらせねぇ！！　俺が！　いや、」

「「「「俺（私）達が！！！！！」」」」

夜明を護るように、四機のＩＳがそれぞれの武器を構えていた。

不屈の翼ｖｓ魔のトライＩＳ（後書き）

一応、書いておきますが、三機の操縦者は三人とも女性です。

オリジナルキャラ設定　その二

キャラクター名、夕暮太陽（ゆうぐれたいよう）
身長、１６７，４
体重、５９，２？
性別、女
趣味、高い場所から夕陽を眺める（例、屋上、木の上）、お菓子作り、読書
好きな
物、本、電子関係の物、笑顔
人、夜明、友人達
食べ物、甘い物
嫌いな
物、雨
人、夜明に敵対するなら誰でも嫌い
食べ物、苦い物
特技、人の心を天気として聞こえる。（例、周りで誰かが怒っているのなら雷が聞こえ、悲しんでいれば雨の音が聞こえる）
容姿、上の上
瞳、紅
髪、紅（長さは若干肩に掛かるくらい。シャギィーが入っている）
体付き、　長身痩躯。ボン、キュッ、ボーンの凄い身体を持つ。（何時も鈴音やセシリアに羨ましがられる）
性格、基本的に冷静。だが、夜明が関わることとなると冷静なまま焦る、と言う恐ろしいスキルを発揮する。基本的に夜明以外の人間には無関心だが、助けを求められれば、その人が夜明に敵対でもしてない限り誰であろうと助ける。無口でクールなため、初対面の人間にはよく冷たい人だと勘違いされる。
生い立ち

とある事情で十三歳まで名前を持たない存在で、人としてではなく、道具として扱われていた。当時、名前は無く、番号で呼ばれていて、人の心を音で聞いてしまうと言う希有な体質から、何よりも笑顔を好むようになる。束経由で夜明と出会い、夕暮太陽と言う名を貰い、それ以来夜明と行動を共にするようになった。行動原理は夜明中心で、夜明の言うことなら大抵のことを聞いてしまう。唯一の欠点が朝に弱いことで、起床してから一時間はまともな行動が取れない。最近では、ルームメイトの箒に叩き起こして貰い、徐々にではあるがちゃんと起きれるようになった。

オリジナルキャラ設定　その二（後書き）

太陽の過去に関してはその内書きます。

「お、お前等、何でここに！？」

「お前が黒と緑のＩＳをアリーナにぶち込んだ時、その衝撃で遮断シールドが破れたんだ。それで外に出られるようになった訳だ」

四人を代表して、零落白夜を解除した雪片をアリーナに向けながら、一夏が応えた。

「い、いや。俺が聞きたいのはそういうことじゃなくて、お前等姐さんにピットで待機してるよう言われたんじゃ」

「アホ」

呆れ顔で一夏は夜明の額を小突いた。夜明は訳が分からずキョトンとした表情を浮かべている。

「仲間なんだ。助けるのは当たり前だろ？」

「友を助けるのに、わざわざ理由が必要か？」

「私に勝った夜明さんがあんな訳の分からない連中に墜とされるのが嫌なだけですわ！」

「私はその・・・まだ約束を忘れられた埋め合わせしてもらってないし・・・」

箒とセシリアは油断無く武器を構えながら三機を見据え、鈴音は若

干顔を赤くしながら連結した双天牙月を片手で弄んだ。

「・・・そっか。なら、やるか」

夜明は胸に付いていた胸部装甲の破片を剥ぎ取り、レイジングウィングの翼を広げる。

「まだやれるか？」

「シールドエネルギーは一桁まで削られちまったけど、攻撃に回している分のエネルギーは半分残ってる。問題ない」

レイジングウィングのステータスをディスプレイに広げ、夜明は一夏達に指示を飛ばした。

「俺はレイダーをやる！　一夏とセシリーはカラミティ、箒と鈴音はフォビドゥンを頼む！」

「おう！」

「分かりました！」

「心得た！」

「任せときなさい！」

「行くぞ！！」

夜明の声を合図に、五人はそれぞれの相手へと向かった。

「何だぁ？　いきなり闘いに割り込んできて、しかも目の前で友情ゴッコかよ。吐き気がするぜ」

「そうだろうな。味方同士で攻撃し合うお前等なんかには分からねぇだろうさ」

「一夏さん。この類の者には何を言っても無駄ですわ。ですから、武力を以て分からせてあげましょう」

「あぁ。セシリア、援護頼む」

「いいぜ、来いよ！　白いのよりも先にまずお前等を墜とす！！」

「・・・いきなりなんですか、あなた達？　勝負の邪魔をしないでくださいよ」

「三対一で相手を嬲るようなこと、勝負とは呼ばん」

「嬲るって言っても、夜明に圧倒されてたもんねあんた達。なっさけない」

「うるさいですよ、小娘」

「こむ・・・・・まぁいいわ。言っとくけど、こっちにはビーム兵器なんか無いわよ」

「お前の可動装甲は盾とし機能しないぞ」

「・・・このゲシュウマイディッヒ・パンツァーだけがフォビドゥンの全てではありません」

「あ～ぁ、なんかテンション下がる展開になっちまったなぁ」

「余所見してて良いのか？」

始まった二つの闘いを見ていたレイダーの肩を碧の閃光が掠める。慌てて振り返ると、ウィングスターの銃口を向けた夜明の姿があった。

「いきなり何しやがる！　後ろから撃つなんて卑怯だぞ！」

「だからわざと当てなかっただろうが。それに、三対一で闘ってきたお前等にそんなこと言われたくねぇよ」

「そいつもそうだな。でもいいのかよ？」

「何が？」

「あいつ等だよ」

レイダーは複合武装をカラミティと闘っている一夏とセシリア、フォビドゥンと闘っている箒と鈴音に向ける。

「死ぬぜ」

「・・・ぷっ」

夜明は数秒間レイダーを見て、小さく噴き出すことで返事を返した。

「何だよ？　人が親切で言ってやってるのに」

「なら小さな親切大きなお世話ここに極まれり、だな。お前如きが心配なんてしなくても、あいつ等は負けない。寧ろ、仲間と自分の心配をしろよ」

「・・・へぇ、俺たちがお前等みたいなガキ共に負けるって言いたいのかよ？」

遠隔操作のため表情は窺えないが、声音から怒りが感じ取れる。

「そのガキの一人を三人がかりで相手にしても倒せなかったんだから当たり前だろ？　それに」

夜明の姿が一瞬ぼやけ、瞬間加速（イグニッション・ブースト）でレイダーに突っ込んで顔面を殴り飛ばした。

「がぁっ！？」

「さっきも言ったけど、自分の心配しろよ」

体勢を崩したレイダーの胸部にさっきのミョルニルのお返しと言わんばかりに踵落としを叩き込み、下へと落下させる。

「くそ！」

「追いついてみろよ」

レイダーが姿勢を立て直して上を見上げると、推進翼（スラスター）を噴かして急上昇していく夜明の後ろ姿が見えた。

「追いついてみろだぁ？　このレイダーと追い駆けっこするつもりかよ？　・・・舐めてんじゃねぇぞガキがぁぁぁ！！！」

レイダーは高機動形態に変形し、すぐに夜明を追い始める。

（追いつけねぇ！？）

夜明を追い始めてから約十秒。最高速度で追っているのに、レイダーのハイパーセンサーに映る夜明の姿は一向に大きくならない。

（スピードで負けてるってのか、このレイダーが！？）

二機は雲を突き抜け更に上昇していく。雲を突き抜けた辺りで徐々にではあるが、夜明の速度が落ち始めた。

（よし、大丈夫だ！　追いつける！）

レイダーは夜明の背後に迫り、大気圏に入ったところで夜明を完全に追い越した。上昇したまま人型に変形し、夜明を振り返りながらツォーンにエネルギーを供給する。

「はっはぁ！　頑張ったみたいだけど残念だったな！　唯のＩＳが

このレイダーの機動力に勝てる訳ねぇだろうが！　死にやがれ！！」

接近してくる夜明にツォーンを放った。

「馬鹿が」

次の瞬間、レイダーの頭部が百八十度回転し、夜明とは真逆の方向にツォーンを放った。

「え？」

「理解できていないお前に説明することが一つと言いたいことが二つある。まずお前の頭が愉快な方向を向いている理由だが、口のビームぶっ放そうとした瞬間、瞬間加速（イグニッション・ブースト）した俺がお前の頭を殴ったんだよ」

頭が百八十度回転しているという、お茶の間には見せられない姿のレイダーの前で、夜明は逆手でゆっくりとスターライザーを引き抜いた。

「それから言いたいことその一。まずこのＩＳ、『レイジングウィング』は唯のＩＳじゃない」

右のスターライザーで頭を斬り飛ばし、左のスターライザーで右手の複合武装を斬り裂く。

「言いたいことその二」

更にミョルニル、右脚、左脚、背部の翼の順にスターライザーを高速で振り抜き、重力で落下しながらバラバラになったレイダーの残

骸にスタードライブの砲門を向けた。

「一対一（サシ）でやりゃお前等なんざ敵じゃないんだよ」

二筋の蒼い荷電粒子砲がレイダーを跡形もなく消し飛ばします。

「さて、次だ」

地表に背を向けたまま落下していた夜明は身体の向きを反転させ、急降下していった。

「はぁっ！！」

「せりゃぁっ！！」

箒の近接ブレードと鈴音の双天牙月が可動装甲を構えたフォビドゥンを襲う。

「くっ・・・」

二人の攻撃の衝撃に、フォビドゥンは後退を余儀なくされた。

「いい加減に」

「させないわよ！」

可動装甲を戻してバックパックの先端部分にあるプラズマ誘導砲、フレスベルグを撃とうとするが、鈴音の衝撃砲がそれを許さない。

「はぁぁぁ！！！」

フォビドゥンが衝撃弾を可動装甲で防いで動けない隙を突いて箒が吶喊し、可動装甲に近接ブレードで連撃を叩き込む。

「鬱陶しいです！！」

ニーズヘグを振って箒を真っ二つにしようとするが、ニーズヘグが当たる寸前に箒は鈴音の横に戻った。

「どう？」

「手応えはあった。後四回、いや、三回であの可動装甲を斬ってみせる！」

鈴音の問いに近接ブレードを斜めに振り下ろしながら箒は応え、再び近接ブレードを構えた。

「三回か、・・・ちょっと厳しいかも」

甲龍のエネルギー残量を思い浮かべ、鈴音は少しだけ不安そうな表情を作るが、その表情はすぐに笑顔へと変わる。

「ま、やるだけやったげるわ！　行くわよ篠ノ之！」

「あぁ！」

「ちぃ・・・」

向かってくる二人に内心イライラしながらニーズヘグを構えたその時、フォビドゥンは弾かれたように上を向いた。釣られて二人も上を向く。蒼天に浮かぶ雲を白い光が斬り裂いた用に見えた刹那、フォビドゥンに向けて雨のようなビームが降り注いできた。

「なっ！？」

フォビドゥンは狼狽しながらも可動装甲を上に構え、ビームの弾雨を凌ぐ。急降下してきた白いそれはビームを連射しながらフォビドゥンの前で急停止、腹部に蹴りを打ち込んだ。

「「夜明！！」」

吹き飛んでいったフォビドゥンにディバイン・カノンを乱射してからそれ、夜明は二人の方向を向いて叫んだ。

「こいつは俺がやる！　二人は一夏とセシリーの援護に行ってくれ！」

「それは構わないがあの黒いＩＳは！？」

「倒した！」

言葉少なに箒の問いに答え、夜明はフォビドゥンへと向かっていく。夜明の背中を見送りながら二人は頷き合い、一夏達の元へと向かった。

「随分手酷くやられたみたいだな」

「あなたの目は節穴ですか？　あの二人の攻撃は全て防ぎました。フォビドゥンの本体には傷一つついていません」

会話をしながら二振りのスターライザーとニーズヘグがぶつかり合う。

「そう言うあんたの目も」

スターライザーを振り抜いてフォビドゥンを吹き飛ばし、ディバイン・カノンの銃口を向ける。

「随分と節穴だなぁ！！」

放たれた超高速の弾丸は可動装甲を捉え、粉々に撃ち砕いた。

「何っ！？」

「鈴音と箒の攻撃でもうボロボロだったみたいだな。一撃で壊れちまった」

絶対の防御力を有していた可動装甲を壊され、フォビドゥンは少しの間呆然としていたが、自身を奮い立たせるようにニーズヘグを構える。

「まだです！　まだ私が負けた訳ではありません！！」

「いいねぇ、そう言うのは嫌いじゃない！」

突っ込んできたフォビドゥンが振り下ろしたニーズヘグを左腕のビームシールドで受け止めながら、でもな、とスターライト・ブレイザーのロックを外した。

「お前等は嫌いだ」

蒼いプラズマがフォビドゥンを飲み込み、消し飛ばした。

「おおおおぉぉぉぉぉっっっ！！！！！」

「利くかぁ！！」

一夏が振り下ろした雪片を複合シールドで防ぎ、右肩に担ぐようにして持ったバズーカ砲、トデスブロックを向ける。

「させませんわ！」

「ちっ！」

セシリアが撃ったスターライトｍｋ？とビットの弾雨を避けるため、カラミティは一夏への攻撃を諦めて後ろへと飛んだ。

「そらよ！」

後ろへと飛びながら左腕の複合シールドから突き出た二連装ビーム砲、ケーファ・ツヴァイを乱射して二人を牽制する。

「だぁくそっ！　射撃ばっかしやがって！！」

雪片でビームを防ぎながら、一夏はいらいらしたように吼えた。近接武器しか装備していない白式と射撃武器しか装備していないカラミティ。相性は最悪だ。

「一夏さん！　あのカラミティというＩＳの武装、夜明さんのレイジングウィング程で無いにしろ、威力が馬鹿げています、気をつけて！」

「分かってる！」

ケーファ・ツヴァイと一緒に放たれるシュラークを避け、セシリアはスターライトｍｋ？を撃つが、ビームは全てカラミティの周囲にあるシールドで防がれてしまう。

「ははは、無駄無駄無駄ぁ！！　このカラミティのシールドは三機

の中でも最硬だ！　さっきのガキが使ってた荷電粒子砲やプラズマ収束砲ならともかく、唯のライフルと近接用武器一本で勝てる訳無ぇだろ！」

「そうか。ならば」

「近接用武器四本ならどうよ？」

「はっ！？」

振り返ろうとした瞬間、カラミティの背中に連結された双天牙月が激突した。

「まだだ！！」

鈴音が投げた双天牙月に乗っていた箒が双天牙月を足場にして跳び、ブレードを振ってシュラークの片方を切り落とす。

「おまけ！」

落ちていく双天牙月を空中で掴み、鈴音は最大出力で衝撃砲をぶっ放した。

「ぐはぁっ！！」

箒が離れると同時に衝撃弾がカラミティに直撃し、大きく吹っ飛ばす。

「箒、鈴！？　お前達あの緑色のＩＳは！？」

「あっちで夜明が相手してる！　それよりも状況！」

「何度か攻撃を当ててるんですが、あのＩＳのシールドが堅固で・・・」

「奴を守っているシールドが問題なのか・・・一夏！　零落白夜を発動できるか！？」

箒の問いに一夏は小さく頷いて見せた。

「あぁ。でも、一回が限度だ」

「十分だ。鳳、私とお前でカラミティに隙を作るぞ。一夏が零落白夜を打ち込めるだけの大きな隙を」

「オッケー」

「私は二人の援護をしますわ」

「頼む。一夏、やれるか？」

「あぁ、何時でもやってくれ！」

「よし、行くぞ！」

零落白夜を発動させるためにエネルギー変換を始めた一夏を残し、三人はカラミティへと突撃した。

「ガキが二人増えた程度で結果は変わらねぇっ！！」

「そっ！　私達が勝つって結果はね！」

連結した双天牙月を高速で回し、ケーファ・ツヴァイのビームを防ぐ。

「もらった！」

カラミティの背後に移動した箒はもう片方のシュラークを斬るためにブレードを構えた。

「同じ鉄は踏まねぇよ！！」

振り返りながらトーデスブロックの砲身を箒の脇腹にぶつけ、吹き飛ばす。そのまま箒にカーソルをロック、引き金を引いた。

「墜ちろ！！」

「墜ちるのはそちらですわ！」

トーデスブロックから放たれた砲弾の弾道部分にスターライトｍｋ？のビームが当たり、砲弾はカラミティの至近距離で爆発する。

「っ！！　・・・こんのガキ共がぁぁぁ！！！！！！」

怒りの余り、叫びながらカラミティはケーファ・ツヴァイの銃口をセシリアに向けた。

「いただき！！」

鈴音が放った最大出力の衝撃弾がケーファ・ツヴァイを粉砕する。

「何だと！？」

「まだ」

「終わりませんわよ！！」

箒が残りのシュラークを切り落とし、セシリアがトーデスブロックを撃ち抜いた。武器を失ったカラミティを三人で拘束。

「「「一夏【さん】！！」」」

「あぁ！！！」

三人が声を向けた方向には・・・零落白夜を発動させた雪片を構える一夏の姿が。

「行っけぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

「こんな、こんなガキ共にぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！！！！！！」

三人がカラミティから離れた瞬間、雪片がその腹を刺し貫いた。

「大丈夫かお前等！？」

飛んできた夜明に、一夏は無言で雪片の切っ先を地面に向けた。雪片が示す先には上半身のみを残して、稼働を停止しているカラミティが見える。

「そっか。倒したのか」

「当たり前でしょ！　私達を誰だと思ってるのよ！？」

無い胸を張ってみせる鈴音。夜明は感謝の念を込め、笑いながらその頭を撫でる。

「ふにゃ～・・・♪」

「よ、夜明さん、私も頑張って闘ったのですが！？」

顔を赤くしながら、セシリアはずずいっ、と頭を突きだした。

「あぁ、セシリーもサンキューな」

夜明は残ったもう片方の手でセシリアの頭を撫でた。

「ふにゃ～・・・♪」

「はふぅ～・・・♪」

気持ちよさそうに目を細める二人。そんな二人を見て、一夏と箒は全力で癒されてたりする。

『さて貴様等。それなりの覚悟は出来ているだろうな？』

地獄の底から響くかのような鬼の声。アリーナの方を見ると、中継室で鬼の表情を浮かべている千冬の姿がハイパーセンサーで見えた。

「・・・こりゃ俺はともかく、お前等リアルに死ぬんじゃないか？」

千冬の説教と言う名の拷問を想像したのか、四人は顔を青ざめさせてがたがた震えている。

「ったく、もうちょっと後先のこと考えろ」

ー敵ＩＳの再稼働を確認！　警告、ロックされています！ー

「んだとぉ！？」

ギョッとしてカラミティの方を見ると、胸部から閃光が放たれた。
四人を突き飛ばしたため回避が間に合わず、閃光は夜明に直撃した。

深淵から浮かび上がってくるよう泡のようにゆっくりと、意識が覚醒していく。全身に感じる鈍痛を無視して目を開くと。

「成る程、リアルな地獄か」

「しばくぞ」

目の前に千冬の顔があった。

「まったく、お前という奴は。大出力のビームが直撃して墜ちたというのに、起きた第一声がそれか」

ため息を吐きながら千冬が顔をどけたので、天井からそこが保健室であることが分かった。全身を包む感触からベットで寝かされているのだと理解できる。

「姐さん、一夏達は？」

夜明の問いには答えず、千冬は外に入ってこいと合図した。保健室のドアが開いて、げっそりとした表情の一夏と箒が入ってきて、ベットの横にまでやって来る。

「一夏、皆に怪我は無いか？」

「お前の数億倍マシだよ。ったく、あんなのが直撃したってのに、よくそんなピンピンしてられるよな？」

「たはは・・・。セシリーと鈴音は？」

「二人ならまだ反省文を書いているぞ。『私は馬鹿です。故に、今後二度と教官の命令に背くような愚かな行動はしません』という文を延々と、正座で、一万枚に書き続けるんだ。私と一夏もやったぞ」

「そ、それは大変だったな」

その時のことを思い出したのか、表情を青ざめる二人に夜明は引き

つった表情で笑うしかない。

「太陽は？」

「夕暮なら今、あの独立稼働ＩＳと遠隔操作ＩＳを調べてくれている。お前に関しては、『夜明がこの程度で死ぬわけありませんよ』だそうだ」

「嫌な信頼のされ方」

「だな」

力無く笑いながら枕に頭を預けてため息を吐く夜明。千冬は少しだけ笑顔を浮かべながら、夜明の額を軽く撫でた。

「お前の御陰で生徒達に被害は出なかった。教師としても、一個人としても礼を言う。ありがとう」

「どういたしまｚｚｚ・・・」

「「「・・・」」」

再び眠りについた夜明を見て、三人は顔を見合わせて頷き合い、音を立てないように保健室から出ていった。

「そして目を覚ますとそこにはどアップの鈴音の顔が」

「にぎゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！？？？？？？？？」

鼻先三センチまで顔を近づけたところで起床した夜明とばっちり目が合い、鈴音は猫のような叫び声を上げながら夜明の上から飛び退いた。

「お、起きてたの！？」

「今さっきな。よっこらしょ」

「あ、馬鹿！　まだ寝ときなさいよ！」

上半身を起こそうとする夜明をベットに押し戻そうとするが、夜明は大丈夫だと鈴音の手を軽く押しのけて上半身を起こした。

「そういや。試合は無効になったんだってな」

「そりゃそうでしょ。あんなことがあったんだし、オマケにどっかの誰かさんがアリーナのステージにあんな馬鹿でかいクレーター作ったんだから」

「は、ははは・・・・・・・・」

上擦った声で笑いながら、夜明は額からドバドバと冷や汗を流す。
ポンピ～ン。

「あ、思いだした」

「へ？　何を？」

唐突にポンと手を打った夜明を鈴音はキョトンとした表情で見た。

「約束だよ約束。確か『料理がうまくなったら、毎日私の酢豚を食べてくれる？』だったよな？」

「え、あ、・・・うん」

何故か鈴音は顔を赤くしている。漸く夜明がちゃんと約束を思い出しタンジョだから、もっと喜びそうなものなのに。

「で？　うまくなったのか？」

「いや！　確かに昔と比べるとうまくなったと思うけど、でもまだ人に食べてもらう程でも無いかなーなんて！！」

真っ赤になった顔の横で両手をブンブン振る鈴音を見て、夜明は頷いた。

「そうか。確かに、誰かに食べてもらうならお前の親父さんくらいうまくならないとな。そういや親父さん達元気か？」

「あ、・・・うん。元気・・・だと思う」

「『思う』？　何だよその言い方？　まるで一年くらい会ってないみたいな感じだけど」

「・・・実は、そうなんだ」

「・・・何？」

鈴音の表情に陰りが差したのを見て、夜明は表情を真剣にする。

「私の両親、離婚しちゃってさ。中学二年の終わり頃なんだけど。その所為で私、国に帰っちゃってさ」

「・・・・・・」

「一応、母さんが親権を持ってるんだ。ほら、今じゃＩＳの所為でどこも女の人の方が立場上だし、待遇もいいから・・・」

「・・・・・・」

「父さんとは、一年近く会ってない。あんな元気の塊みたいな人だから、元気してるとは思うんだけど・・・」

「・・・そっか」

「家族ってさ・・・難しいよね」

「・・・・・・」

夜明は無言で鈴音の頭を撫で始めた。一瞬だけ鈴音は身体を強張らせたが、すぐにそれも弛緩する。

「ねぇ・・・夜明。ちょっとだけ胸借りても良い？」

鈴音はベットに落とした視線を上げず、細かく肩を震わせながら訊ねた。夜明は応える替わりに鈴音を撫でていた手を鈴音の後頭部に回し、優しく抱き寄せる。

「・・・うっ、・・・ぐし、・・・ひぐっ」

湿った暖かさを胸に感じながら、夜明は鈴音の頭を撫で続けた。

「ごめん。みっともないところ見せちゃって」

数分後。鈴音は目をぐしぐし擦りながら鈴音は謝った。夜明は首を振り、鈴音の頬をそっと撫でる。

「泣くことはみっともないことなんかじゃ無いさ。泣きたい時は泣けばいい。人は・・・涙を流せるんだから」

「・・・そうだね」

鈴音は夜明の手を両手で包み、自分の胸元まで持っていった。

「夜明の手、暖かいね」

「そうか？」

「うん。・・・夜明」

「何だ？」

涙とはまた何か別の物で潤ませた瞳で、鈴音は夜明の目を覗き込む。

「・・・どした？　熱でもあるのか？」

夜明の問いに答えず、鈴音は目を閉じてゆっくりと顔を近づけていった。

（？？？　本当に何だ？）

疑問符を浮かべつつ、取り敢ず鈴音と顔をぶつけないように後ろへと下がる。で、鈴音がベットの上に身を乗り上げて、夜明を押し倒すという構図が出来上がった。

（・・・何か嫌な予感がする）

夜明の胸中に嫌な物が去来したまさにその時、

「夜明さん、具合はいかがですか！？　このセシリア・オルコット、ようやく反省文を終わらせてあなたの看護・・・」

ドバーン！　と扉が開いてセシリアが飛び込んできた。必然、

「・・・・・・・」↑鈴音。

「・・・・・・・」↑セシリア。

「・・・・・・・どうすりゃいいんだ？」↑夜明。

こんな感じになる。

「あ～っと・・・」

鈴音の下で困ったように頬を掻いていると、

「何でこの超良いムードの中に飛び込んでくるのよこの金髪ロール！！！」

「お黙りなさい！！　夜明さんの貞操は渡しませんわ！！」

二人がＩＳを展開して闘い始めた。

「ちょ！？　待てよ二人とも！？　保健室、しかも怪我人がいるってのにＩＳで戦闘するなんてどういうりょうけ」

チュドーン。

「のわあああぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

月光夜明。彼はまだ知らない。この先、こんな命懸けのドタバタが更に加速していくことを・・・。

ドタバタは加速する（それは必然）（後書き）

こんばんわ。サザンクロスでっす。

今回は皆様の意見をお聞きしたく、後書きを書いた次第です。

太陽のＩＳですが、このまま行けばインフィニットジャスティスになる、というかほぼジャスティスになるでしょうね。

そこで、考えたのですが、シャスティスの背部ユニット、あるじゃないですか？

あの分離して乗れるやつ。あれを複数のビットで形成してる、みたいな感じにしたいと思うのですがどうでしょう？

分離させて別の形に組み替えることで武器にしたり、防具にしたり、高機動の為の装備にしたり。

ご意見待ってます。

鬼才襲来！　目的は・・・

「おはよう。今日も気を引き締めて・・・どうしたんだ？」

職員室に入った千冬は訝しげに眉を顰めた。職員室の中心では教師達が集まって、何かを中心にしながら話し合っている。

「あ、織斑先生！　実はさっきこんな物が送られてきて」

千冬が入ってきたことに気付いた山田先生が、話し合いの原因になっているＦＡＸを千冬に渡した。千冬は無言でＦＡＸを受け取り、文面に視線を走らせる。ＦＡＸにはこう書かれていた。

『ＩＳ学園にいる教師、並びに生徒諸君。遂にこの時がやって来た！　私が己の存在を世に示すために、私が世界を知るために、私自身が楽しむために！　血と涙と色々な体液で彩られた宴が！　今！　始まったのだ！　歓喜しろ、驚愕しろ、狂気しろ、絶望しろ、奮起しろ！　楽しい楽しいパーティーの始まりだ!!　ハッーハッハッハッゲホゴホッ!!　む、噎せたぁ!!　Ｐ，Ｓ　よっくーん、愛してるよぉーっ!!』

「文面に噎せたことを書く必要があるのか？」

一人の教師がボソリと呟くが、答えは誰からも返ってこない。

「くだらん」

ＦＡＸの内容を全て読み終えた千冬はばっさりと一言で切り捨て、ＦＡＸをくしゃくしゃに丸めてゴミ箱に放り込んだ。

「こんなくだらない物を気にしている暇、我々には無いだろうが。山田先生、行くぞ」

「え？　は、はい」

山田先生を連れて職員室から出ようと扉を開けた瞬間、

ヒュー、カァーン！！

非常にいい音を立てて、何かが落下してきて千冬の頭を直撃した。

「だ、大丈夫ですか？」

頭を押さえて膝をつく千冬に山田先生が心配そうに訊ねる。千冬は大丈夫だ、と応えてから自分の頭を襲った何かに視線を向けた。独特の光沢を持つ金ダライに。

「え？　何で天井から金ダライが？」

可愛らしく首を傾げながら、山田先生は金ダライを拾おうとした。

「山田先生！　それに触ってはいけない！」

「へ？」

千冬がその手を掴もうとするが、時既に遅し。手が触れた瞬間、超高圧の電流が山田先生を襲った。

「ふぇぇぇぇっっっっ！！！！？？？？」

「山田先生ぇーっ！！！！」

千冬の目の前で黒こげ山田真耶の出来上がり。千冬は山田先生を止められなかった己の不甲斐なさに歯噛みし、気絶した山田先生を職員室に放り込んだ。

「あの、織斑先生。一体何が」

「説明は後だ！　絶対に職員室から出るなよ、いいか絶対にだ！」

叩きつけるように言葉を残し、ゴミ箱から例のＦＡＸを取りだして千冬は走って教室へと向かう。

「（もし、これが私の予想通り、あいつの仕業なら止められるのは夜明しかいない）・・・グハァ！」

廊下を走る千冬を叱るように、パイ投げのパイが顔面に直撃したのは余談だ。

「おっそいな、山田先生と織斑先生。何かあったのか？」

夜明は教室の時計を見ながらそう呟く。現在の時刻は一時限目半ば。本当なら教壇の上に千冬か山田先生が上がって授業をしているはずなのに、今教室に二人の姿は無い。

「太陽、今日って職員会議みたいなのってあったか？」

太陽が首を振ったその時、

カァーン！　「グオォッ！？」

廊下の方から変な音と千冬の声が聞こえてきた。全員の視線が扉に向けられる。

「何だ？」

「夜明。今のって千冬姉の声だよな？」

「奇遇だな、一夏。俺もそう思ってたところだ」

二人は顔を見合わせ、恐る恐る扉から頭を突きだして廊下を覗き込んだ。そこにいたのは・・・

「キュウ・・・」

目を回してぶっ倒れている千冬と、何故だか廊下に転がっている金ダライ・・・。

「「・・・」」

余りに現実離れ、と言うよりもシュール過ぎる光景に二人は少しの間絶句する。が、それも数秒、

「千冬姉ぇ!?」「姐さん!?」

二人は慌てて千冬に駆け寄った。一夏が千冬を抱き起こし、夜明が金ダライを蹴り飛ばす。蹴り飛ばされた金ダライが床の上を跳ね回るけたたましい音の御陰か、千冬は弱々しくではあるが目を開いて二人を見た。

「織斑に・・・月光？　何故ここに？」

「そりゃこっちの台詞だよ千冬姉！　何だってこんな教室のど真ん前でぶっ倒れてるんだ!?」

何故か千冬の顔に付いているクリームを拭い取りながら一夏が訊ねる。千冬は弱々しく笑いながら、スーツの胸ポケットから一枚の紙、例のＦＡＸを取りだして夜明に渡した。

「姐さん、こいつは？」

「今朝、学園に送られてきたＦＡＸだ。差出人は恐らく、お前の師匠」

すっ、と夜明の目が細まる。受け取ったくしゃくしゃのＦＡＸを広げ、文面を心の中で読み上げて頷いた。

「成る程。確かにこいつは師匠の字だ」

「学園中にあいつの罠が仕掛けられているだろう。それらを全て回避できるのは、あいつが唯一人弟子と認めたお前だけだ。頼む、夜明。ＩＳ学園を救ってガクッ」

一夏の腕の中で千冬の身体が重くなる。

「そんな・・・千冬姉、千冬姉ぇーっ！！」

「落ち着け一夏。織斑教諭は気絶しただけだ」

教室から出てきて、二人の後ろに立っていた太陽が的確且つ冷静に突っ込むが、二人は聞いていない。

「くっ、姐さん。この仇は必ずや俺たちが」

「いや、だから気絶しただけだと」

「行くぞ一夏！　姐さんの弔い合戦だ！」

「おう！　見ててくれ、千冬姉・・・」

「だから気絶しただけだと言うのに！　人の話を聞けお前等ぁー！！」

廊下を走り去っていく二人の背中には届かず、太陽の叫びは廊下に虚しく響くのだった。

「～♪　～♪」

ＩＳ学園屋上。一人の女性がフェンスの上に座って鼻歌を歌っていた。幅数センチにも満たないフェンスの上に座るという、非常に危なっかしい状態にフェンスが微かな音を立てて軋んでいる。

「いやぁ～、よっくんとようちゃん会うのは久しぶりだなぁ～。二年かな？　これ渡す序でにいっくんと箒ちゃんとも会いたいにゃ～」

プラプラと振る足の遙か下には地面がある。落ちたら確実に死ぬであろう高さだが、女性に恐怖する様子は見当たらない。

「この二年間でよっくんはどれくらい成長したかな？」

『一夏！　そっちは駄目だ！』

『え？　うおぉぉっ！？　天井から熱湯が落ちてきた！？』

「お手並み拝見だよ、よっくん」

後者から聞こえてくる叫び声に、女性はとても楽しそうに頭につけたうさぎの耳を揺らすのだった。

「こいつで、最後ぉ！！」

夜明は降り注いでくる無数の金ダライを蹴り飛ばし、勝利の咆哮を上げた。彼の後ろでは、太陽、一夏、箒、セシリア、鈴音の五人が拍手している。

「しかし、誰がこのようなしょうもない仕掛けを学園に？」

「本当だよねー。こんなお笑い芸人が身体張って引っかかるみたいな仕掛けを学園中に、しかも一晩で作るって誰なんだろ？」

セシリアと鈴音が首を傾げて思考する横で、心当たりがあるのか四人は苦い表情を作っていた。

「これやったのってさ、確実にあの人だよな？」

「だろうな」

「あれ？　太陽ってあの人と面識あるのか？」

「あるぞ」

「あの人は・・・どこに行っても人を騒がせることしかしないな」

四人は揃ってため息を吐くと、屋上へと向かった。

「私達を置いていかないでくださいな！」

「ちょ、待ちなさいよ！」

さっさと歩いていく四人を追って、二人も慌てて屋上へと向かう。

「うおらぁっ！！」

屋上のドアの前まで来ると、夜明は何の躊躇もなくドアに蹴りをぶち込んだ。そして六人が見た物は・・・。

「おぉ～。予想到達時間よりも十分早かったよ。弟子が成長して私は嬉しいよ、よっくん」

頭にうさ耳をつけた謎の女性。誰？　的な目で女性を見るセシリアと鈴音。一夏と太陽はやはりと言う表情を浮かべ、箒はとても苦い表情をしている。唯一人、一歩前に出た夜明が腰を直角に曲げて頭を下げた。

「お久しぶりです、束師匠！」

「「・・・師匠？」」

「イタズラの、だがな」

「て言うか束って・・・」

「あぁ、ご察しの通りだ」

苦い表情のまま、箒は頷く。

「あの人の名は篠ノ之束。ＩＳをこの世に産み出した張本人、私の姉だ」

数秒の沈黙。

「「えぇ～～～～っっっ！！？？」」

セシリアと鈴音が驚くのも無理はない。何せ、世界中の国が血眼になって探している人が目の前に、しかも親しそうに友人と話しているのだから。

「束さんと夜明って昔っからやたらと馬が合ってな。よく二人でつるんでイタズラしてたな」

「そして主に被害を被るのは私とお前、千冬さんだったな」

何か思い出したくないことを思い出してしまったのか、一夏と箒の頭に暗雲が浮かぶ。そんな二人のことなぞ眼中になく、夜明と束は刑事ドラマに出てくる主人公の刑事と、真犯人のような雰囲気を出して対峙していた。

「束師匠、今からでも遅くはないから一緒に姐さんに謝りに行きましょう」

「ふっふっふ・・・大丈夫だよよっくん。私は完璧にして十全！ちーちゃんに見つからないように逃げる方法なんて何万通りも用意してるさ！」

「師匠のその言葉を信じて何遍姐さんに頭をかち割られかけたと思ってんですか！？」

過去、イタズラをする二人に制裁を加えるのは千冬の役目だった。大人達は子供の可愛いイタズラだ、と笑ってスルーしていたが、実際は二人を捕まえるだけの技量、怒るだけの度胸がなかったのが事実である。その点千冬は違い、イタズラの現場を見つけた瞬間、二人に鉄拳を落としていた。そして、主にその鉄拳の被害を被っていたのは束にスケープゴート扱いされていた夜明だった。そんな嫌すぎる扱われ方だったにも拘わらず夜明は束によく懐き、束もまた夜明を実の弟のように可愛がっていた。

「それに、師匠の仕掛けは全部やり過ごしました。断言しよう。師匠、俺はあんたを越えた！！」

「・・・」

擬音がつきそうなくらい鋭く指を突きつけた夜明に束は何も言わない。視線を下に向け、肩を細かく震わせている。怒っているのか？

「・・・ふっ」

否。

「あっはっはっはっは！！」

笑っているのだ。一頻り笑った後、束は口元に悪戯っぽい笑みを浮かべて、夜明と同じように指を突きつける。

「甘い！　その程度で私を越えたなんて考えるのは砂糖漬けにした大福の上にコンデンスミルクと蜂蜜をかけたくらい甘いよよっくん！」

「一口でも食ったら糖尿病になりそうだな」

「な、何だと！？」

太陽のもっともらしい突っ込みさえ無視される。

「な、何を以て甘いと言いますか！？」

「分からないかにゃ？　ならば聞きなせい！　束師匠、魂の叫びを！！」

「諸君　私はイタズラが好きだ
諸君　私はイタズラが好きだ
諸君　私はイタズラが大好きだ

金ダライが好きだ
落とし穴が好きだ
パイ投げが好きだ
ピコピコハンマーが好きだ
ハリセンが好きだ
熱湯が好きだ
冷水が好きだ
ローションが好きだ
生物が好きだ

我が家で　学校で

教室で　廊下で
校庭で　体育館で
商店街で　人前で
山中で　砂浜で

この地上で行われるありとあらゆるイタズラが大好きだ

ローションでヌルヌルの道を人が歩いてずっこけて後頭部を打ち付けるのが好きだ

投擲したパイが狙い違わず相手の顔面に当たった時は心が躍る

落とし穴に落ちて人が慌てふためくのを見るのが好きだ

その落とし穴に入っている生物に気付いた悲鳴を聞いた時は胸がすくような気持ちだった

熱湯をぶっかけられ人が床をのたうち回るのを見るのが好きだ

そこに冷水をかけて温度差に悲鳴を上げる様は感動すら覚える

ピコピコハンマーで頭を叩いて予想外の威力の無さにキョトンとする表情はたまらない

そこを改造ハリセンで叩き痛みに呻かせるのも最高だ

仕返しにハリセンを振りかざしてきた哀れな者達を金ダライで気絶させた時など絶頂すら覚える

イタズラがばれて皆に滅茶苦茶にされるのが好きだ

必死で考えたイタズラを何の反応も示さずにスルーされるのはとても悲しいものだ

圧倒的な正論に押し潰されそれでもめげないのが好きだ

イタズラをかわされ鼻で笑われるのは屈辱の極みだ

諸君　私は誰もが目を丸くするイタズラを望んでいる

諸君　私に付き従う六十億の全人類よ

君たちは何を望んでいる？

更なるイタズラを望むか？

情け容赦なく人を驚かせるイタズラを望むか？

鉄風雷火の限りを尽くして三千世界の皆を驚愕させるようなイタズラを望むか？」

『イタズラ！　イタズラ！　イタズラ！』（＊夜明一人）

「よろしい　ならばイタズラだ！

我々は好奇心を抑えて今まさに爆発しようとしている風船だ

だが、この陰気な世の中で数秒間耐え続けてきた我々にただのイ

タズラではもはや足りない！

大イタズラを！　一心不乱の大イタズラを！！」

「これが私の魂さ」

束の独白を聞き終えた一夏達の思いは一つ。

（（（（（（何て迷惑なんだ））））））

唯一人、夜明だけが拳を握り締め、感涙にむせび泣いている。

「何と、何と熱き魂・・・やはり束師匠！　俺の師匠はあなたしかいない、一生ついていきます！！」

「よく言った！　二人で目指せ全世界イタズラ化計画！！」

「うおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！」

バックに夕陽を浮かべながら肩を並べる二人。余りにもあほらしすぎるので、一夏達はため息さえも出てこない。

「で、何のようで来たんですか？」

「うん、実はね」

ズシャアアア×5

二人のテンションが余りに唐突に元に戻った為、一夏達は見事なヘッドスライディングを決めた。

「よっくんの顔がみたくなったなぁ～ってのが九分九厘の理由なんだけど、ようちゃんにも用があってね」

「え、私に、ですか？」

摩擦で熱くなった鼻頭を押さえながら、太陽は立ち上がった。

「オォ、ディアマイエンジェルようちゃん！　相変わらずええ乳し

てるね。揉んでいい？」

「別に良いですよ。減る物じゃないし」

「「「「いいのかよ！！？？」」」」

「それじゃ、いただきまーっす！！」

一夏達のツッコミを無視し、束は欲情にまみれた中年男性のように両手を卑猥に動かせながら、太陽の豊満なバストをむんず、と掴んだ。

「あぁ～、相変わらずだねぇ、ようちゃんの乳は。揉み応えといい張りといい柔らかさといい・・・くせになるぅ～」

「そうですか」

無表情の太陽の胸を束が揉みしだくこと約十分。

「堪能させていただきました。で、本題なんだけど。ようちゃん、ちみ専用のＩＳ作ったからあげるね。多分、もうようちゃん名義で用意した格納庫に入ってると思うから。じゃね！　いっくんと箒ちゃんもまたねぇー！　よっくーん！　心の底からアイラブユー！！」

そして、束は屋上から忽然と姿を消した。唖然とする六人の心を代表するように、夜明は頭を掻きながら一言呟く。

「相変わらず嵐みたいな人だな・・・」

「・・・これが、私のＩＳか」

その日の放課後、一人で忽然と用意された格納庫にやって来た太陽は目の前にあるＩＳを見て呟いた。

黒い。夜明のレイジングウィングに対抗するかのように深い漆黒。

（・・・私を待っていたのか？）

心の中で太陽が問いかけると、その漆黒のＩＳはすぐに高い、だが

耳に心地いい金属音で応える。それは当然のことだ。何故なら、このＩＳはあの天才、完璧にして十全の鬼才、篠ノ之束が夕暮太陽という存在のために作ったのだから。

「・・・ＩＳその物を操作するよりも、データなんかを取る方が好きなんだがな・・・」

困ったように頭を掻きながら、それでも、と太陽は微笑を浮かべる。

「与えられた以上、うまく使ってみせるさ。そう言えば、お前にはまだ名前が無いんだったな。なら、私が考えてやろう。そうだな・・・。よし。お前の名前は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

鬼才襲来！　目的は・・・（後書き）

こんばんわ。サザンクロスでっす。

今回は太陽のＩＳが来るお話。メチャメチャ無理矢理ですが、勘弁してください。

それからアンケート。

太陽のＩＳネームですが、次の三つの中からどれか一つを選んでください

1，トワイライトソード（黄昏の剣）

2，バルディッシュ・トワイライト（黒き黄昏）

3，トワイライトハーケン（黄昏の死神）

2番のバルディッシュ・トワイライトはくろや様に考えていただきました。ありがとうございます！

期限は二十三日までです。

たくさんの方のご協力を待っています。

新たなる嵐。その名は転入生・・・男だと!?

「２９７・・・２９８・・・２９９・・・３００！　あぁ～、終わったぁ！！」

六月頭、日曜日。窓から夕日が射し込む中、さっきまで自室の床の上で逆立ち腕立て伏せをしていた夜明は、大きく息を吐き出しながら床の上に寝ころんだ。上半身は裸で、肌の上には汗が光っている。

「・・・なぁんもやることねぇな」

一人そうごちながら組んだ両腕の上に頭を乗せる。太陽は東から貰ったＩＳの調整で手が離せず、一夏は中学時代の友人、つまり夜明とは面識の無い人の所に遊びに行き、他の友人達も各々の用事があった。故に、何もやることが無いので、夜明は朝から鍛錬をし続けていたのだ。凡に、一夏とは別々の部屋になっている。一夏が一人部屋に移動し、夜明が二人部屋のままだ。

「何でわざわざ俺たちを別々の部屋にするんだろ？」

「俺たちはこの世で二人だけの『ＩＳを動かせる男』だからな。待遇が良いんだろ」

こんな会話が二人の間で為されたことは余談だ。暇で暇でしょうがないので、夜明はよく小説などに出てくる暇潰し方法、『天井の染みを数える』をやってみた。が、大した暇潰しにならない。何故なら、

「この寮ってベットの下どころか天井まで掃除してっからな・・・」

天井が綺麗で染みなんて一切無いからだ。仕方がないので、もう一度グラウンドを走ってこようと（既に午前中だけで十周している）身体のバネを使って起き上がり、ドアノブに手をかけようとすると、

「夜明、いる？」

ノックの音と一緒に鈴音の声が聞こえてきた。

「いるぞぉ～」

そのまんまの格好で、夜明はドアを開いた。そこには案の定、鈴音の姿が。

「あ、いたんだ。え～っと、これから食堂に行くんだけどあんたもどう・・・」

そこまで言ったところで、鈴音は顔を真っ赤にして夜明を指さす。

「な、何であんたそんな格好してんのよ!?」

「あ？　格好？　・・・あぁ。そういや、今俺上脱いでたな」

夜明は数秒首を傾げ思考していたが、すぐに合点がいったように両手を打った。

「と、とにかく服着なさい服!!」

とか何とか言いつつ、夜明の上半身裸姿を脳内にしっかりとメモリーしている鈴音がいる。悪い悪いと夜明は苦笑しながら部屋の中へと戻った。

「あ・・・」

ちょっとだけ勿体なかったと思う鈴音は悪くない。

「で、何の用だ？　俺ぁこれからグラウンドを走ってくるつもりなんだが」

服を着て部屋から出てきた夜明は腕を組みながら鈴音に訊ねた。鈴音はまるで奇異な物を見るかのように目を丸くして夜明を見る。

「グラウンドを走ってくるって・・・あんた朝もグラウンド走って無かったっけ？」

「おう。その後に懸垂、腕立て、腹筋、背筋それぞれ五百回ずつ。昼飯食った後に丸太に蹴りの打ち込み千回」

「あぁ～、もういいもういい。聞いてるだけで筋肉痛してきた・・・」

何故だか全身を襲い始めた鈍痛を無視し、鈴音は気持ちを切り換えるように頭を振って夜明を見た。

「食堂行くついでにあんたを誘おうと思ってさ。行くよね？　行くよね？　よし行こう」

「強引だねぇ。でも、言われてみれば確かにそんな時間だな。んじゃ、一緒に行くか」

「そうこなきゃ♪」

一緒に、の部分でえらく上機嫌になった鈴音は足取りも軽く食堂へ向かった。その横を、まるで小さな子供の保護者になったような気分で夜明は歩く。

「そう言えばさ」

「ん？」

食堂へ向かう途中、唐突に鈴音は夜明に訊ねた。

「夜明ってさ、何であんな気でも違ったみたいに自分のこと鍛えるの？　今でも十分強いと思うんだけど」

鈴音の言うとおり、夜明の鍛錬風景は常識を逸していた。常人よりも多いとかそう言うレベルではないのだ。まるで、今の自分を殺そうとしている様にも見える。

「そうか？　俺なんか全然強く無ぇよ。少なくとも、俺が憧れてる強さは今の俺なんかよりも遙か先にある」

「夜明が憧れる位強い人？　・・・あぁ、千冬さん？」

「そ、正解」

にっ、と笑い、夜明は窓辺に手をかけて地平線へと沈み行く夕陽に目を向けた。

「何時だって姐さんは強かった。誰かを救えるくらい、誰かを護れるくらい。何時だって、姐さんは俺と一夏の憧れなんだ」

沈む夕陽に千冬の姿を重ねたのか、夜明は少しだけ相好を崩して微笑む。夜明の隣りで同じように夕陽を見ていた鈴音はケラケラと笑った。

「あそこまで強くなる必要無いと思うけどね。だって、夜明も自分の身は自分で守れるでしょ？」

「・・・そんなんじゃ、駄目なんだよ」

「え？」

気さくに言ったつもりなのに、夜明から返ってきた返事は驚くほど深く、暗い。鈴音は驚いて夜明を見ると、夜明は今まで見たこともないような悲痛な表情で夕陽を睨んでいた。

「自分しか護れないちっぽけな強さなんて、あっても意味無いんだよ・・・」

その今にも泣きそうな表情に、鈴音は唯、言葉を失った。

「そんじゃ、いただきま～す。・・・ってどうした、鈴音？　食欲無いのか？」

「・・・いや、あるわよ勿論。私が言いたいのはそうじゃなくて」

そこで一端言葉を切り、すぅーっと大きく呼吸をしてから思い切りテーブルを叩いた。

「何であんた達がいんのよ！！」

いきなり怒鳴られ、二人の向かい側の席に座っている一夏はびっくりして食べていたご飯を喉に詰まらせ、しれっとした表情の太陽は無言で夕食のソバをすすり続ける。

「い、いきなり何怒鳴ってんだよ鈴？　俺は唯単に帰ってきた時にお前等と合流したから一緒に来ただけだぞ？」

「偶然だ」

嘘せながら応える一夏としゃあしゃあと応える太陽。ぐぬぬ、と唸る鈴音を夜明が宥める。

「まぁまぁ落ちつけって。飯は大勢で食ったほうがうまいだろ？」

「・・・私はあんたと二人で食べたかったのよ」

「あ、何？」

「何でもない！」

やけくそ気味に叫び、鈴音は猛烈な勢いでご飯を食べ始めた。やれやれと肩を竦めながら、夜明も食べ始めようとしたその時、

「ねぇ聞いた聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え？　何の話？」

「織斑君と月光君の話」

「いい話？　悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「はいテンション下げてねぇー。いい？　これは女子だけにしか教

えちゃ駄目よ？　実は、今月の学年別トーナメントで・・・」

食堂の方で、何やら十数人の集団（女子だけ）が黄色い声を上げている。夜明と一夏は物珍しそうにその光景を見ていた。

「随分とあっちは騒がしいな」

「トランプかなんかでもやってるんじゃ無いのか？　若しくは占いとか」

二人でそんな考察を立てていると、

「えええええっ！？　それってマジ！？」

「マジで！？」

「うそー！　きゃーっ、どうしよー！」

黄色い声は更に声量を増して押し寄せてくる。夜明と一夏のみならず、太陽と鈴音もその余りの姦しさに表情を顰めた。

「場所替えね？　あそこまでうるさくされると落ち着いて飯も食えやしない」

「そうだな。もう少し離れた所で食べよう」

「賛成」

「異論は無い」

四人はそれぞれの盆を持って、入り口の極力女子達の声が届かない所に移動して食事を続けた。ふと、何かを思い出したかのように太陽が視線を上げる。

「そうだ。さっきの彼女たちの会話で思いだしたが、学年別トーナメントはもう今月だったな」

「「「あぁ、確かに」」」

太陽の言う学年別トーナメントとは、文字通りのＩＳ対決トーナメント戦。早い話、全員強制参加の一大イベントと言う奴だ。勿論、それは専用機持ちの夜明達も例外ではない。

「今のところ俺たちに縁はないだろうけど、ＩＳ関連の企業の人達が大勢来るのかね？」

「だろうな。一、二年はとかく、三年は色々と大変だろう」

うんうん、と頷く太陽の隣りで、一夏は少しだけ考え込むような表情を作る。

「ん？　どうした？」

「いや、そんな大したことじゃないんだけど、トーナメントの相手が誰になるのかなと思って」

「誰だろうと関係ないだろ。相手が誰だろうが全力でぶつかる、そいつが礼儀ってもんだ」

夜明の言葉に一夏はだな、と頷いた。夜明は満足そうに一夏に見て、

口元を不敵な笑みで歪める。

「一夏。お前が相手だった時は精々派手にぶっ飛ばしてやるよ」

「上等だ。こっちも零落白夜でお前のスターライト・フルバーストをぶった斬ってやる」

二人は互いに挑戦的な笑みを浮かべながら拳をぶつけ合った。そんな二人を横目で見ながら、鈴音と太陽はひそひそと小声で言葉を交わす。

「何て言うかさぁ。二人とも無駄に熱いよね」

「いいじゃないか。ぶつかり合って燃える友情。これぞまさに青春」

鈴音が太陽の余りに熱血臭い台詞に目を白黒とさせていると、一夏の目が点になった。不審に思った三人が一夏が見ている方向に視線を向けると、そこには食堂の入り口に立つ箒の姿がある。

「「あ・・・」」

互いに視線が合い、気まずそうに視線を反らす。視線を外しながら無言になる二人を、夜明達は微妙な目で見ていた。

（何なのこいつら？　何か合う度にこんな気まずい感じの空気になるけど）

（さぁ？　私も詳しいことは分からないし）

「（二人がこんな感じになったのは先月、つまりあの所属不明のＩ

S襲撃からだな）・・・お前達、何かあったのか？」

「「い、いや！　別に何も！！」」

軽く声が裏返っている。これで何も無いと思えと言う方が無理な話だ。再び三人は顔を見合わせ、探るような視線を箒に送る。

「う・・・そ、そうだ。竹刀の手入れをまだしていなかったな。夕食を食べる前にやっておくべきだな。そうだ、そうしよう・・・」

誰に言うわけでもなく、箒は一人で呟きながら三人の視線から逃げるように走っていった。今度は一夏に視線を向ける三人。

「な、何だよ・・・」

「一夏、正直に答えろ。何があった？」

「いや、別に、な、に、も・・・」

三人の視線という名の力に耐えきれず、一夏はため息混じりに呟いた。

「相談に乗ってくれないか、兄弟？」

「おう。吐くだけ吐いちまえ、兄弟」

「成る程ねぇ～・・・」

一夏から話を聞いた夜明はうんうんと頷いた。

「学年別トーナメントで優勝したら付き合ってもらうと・・・」

「そうなんだよ・・・。夜明、どうすればいいと思う?」

その類の相談を夜明にするか。太陽と鈴音は顔を見合わせながら苦笑いを浮かべ、食べ終えた食器を持ってカウンターに向かう。

「事情は大体分かった。でもそんな悩むことでもないだろ」

「え、そうなのか？」

「そうだろ。付き合うって言ったってどうせ買い物か何かだろ？」

「おぉ、成る程」

納得したように一夏が手を打った瞬間、ガッシャーン！！！！×２

凄い音が食堂に響いた。びっくりして振り返ると、太陽と鈴音がコントみたいな転び方でぶっ倒れている。足の上に乗った食器はご愛敬だ。

「だ、大丈夫かお前等！？」

「い、いや。大丈夫だが・・・。それよりもお前等、それは本気で言ってるのか！？」

「は？　本気って何が？」

「いや、だから今の遣り取り！」

鈴音に言われて尚、二人は首を傾げていたが、数秒間も思考して漸く答えに辿り着いた。

「いや、本気も何もそれ以外に捉えようがないだろ」

「てかあるのか、それ以外に？」

本気でそう思っている二人の表情に、太陽と鈴音は深々とため息を吐く。

「やれ唐変木だ、やれ朴念仁だとは思っていたが、まさかここまでとは・・・」

「本当よね。心の底から箒に同情するは私」

まるで不出来、と言うか恋愛沙汰に疎い息子を見るような目で見られ、夜明と一夏は首を傾げ続けていたのは言うまでもない。

そんなこんな色々あって月曜日の朝、女子達はＩＳスーツのカタログ片手にワイワイ騒ぎながら意見を交換している。

「やっぱりハヅキ社製でしょうか？　いや、見た目重視の方向が強すぎますわね・・・。箒さん、あなたはどれにするおつもりかしら？」

「いや、まだ決めていないな・・・。太陽、お前はどうするんだ？」

女子の中で唯一人、カタログを開いていない太陽は周囲にディスプレイを浮かべて、例のＩＳのパラメーターを弄くり回していた。

「おい、太陽」

「・・・・・・」

「太陽さん」

「・・・・・・」

「「太陽【さん】！！」」

「うぉっ！？　どうした二人とも、いきなり大声なんか出して？」

耳元で叫ばれて漸く二人が呼びかけてることに気付き、太陽はディスプレイから目を離して二人に視線を向けた。

「いきなりじゃないぞ。何回呼びかければ気付くんだ？　それはそうと・・・そのＩＳは・・・」

「あぁ。束さんが作ったあの子だ」

「どうなんです、そのＩＳの能力は？　かの鬼才篠ノ之束が太陽さんの為に創り上げたＩＳ。とても興味がありますわ」

「夜明のＩＳ、『レイジングウィング』と対を為すＩＳとでも呼ぶべきか。レイジングウィングが大火力を有しているのに対し、この子は近接武装に重きを置いている。私好みの装備だ」

次々とディスプレイの画面を変えながら、太陽はそのＩＳに関しての情報を頭の中で整理していく。正直言って、太陽の後ろでディスプレイを見ている箒とセシリアには何が何だか分からない。

「そう言えば、名前は決まったのか？」

「決まったぞ。だが、教えてはやらないさ。まだ夜明にも教えてないんだからな」

悪戯っぽく笑いながら太陽が指パッチンでディスプレイを消した時、教室の扉が開いて千冬が入ってきた。ざわざわ騒いでいた女子達は一瞬で静まり返る。凡に、夜明と一夏の分のＩＳスーツは既にあるので、二人はカタログを見ずにぐーすか寝ていた。

バシンッ！！×２

出席名簿で二人を叩き起こしてから千冬は生徒達の方を向き、朝のＳＨＲ前の説明みたいな物を始めた。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを

使うことには変わりない。各人気を引き締めてかかれ。そうそう、ＩＳスーツが届くまでは学園指定の物を使ってもらうぞ。忘れた者は学園指定の水着、まぁそれすらも忘れた者は下着で構わないだろう」

「「いや構えよ」」

夜明と一夏のツッコミを華麗に無視し、千冬は教壇を山田先生に譲って自分は教室の隅へと向かう。

「え～っと。それではＳＨＲを始めます。その前に転校生を紹介します！　しかも二人です！」

驚く暇もあらばこそ。女子達が騒ぎ出す前に扉が開き、その件の転校生と思われる二人の異国人が教室に入ってきた。

「失礼します」

「・・・・・」

二人の内の一人を見て、女子達は騒ぎ始めるのをピタリと止めた。

「え？」

「なっ！？」

「そんな！？」

「ほぉ」

「ヒュゥ～【口笛】」

上から順に一夏、箒、セシリア、太陽、夜明だ。この五人でさえも驚き、感心する理由。それは・・・

転校生の一人が男子だからだ。

新たなる嵐。その名は転入生・・・男だと！？（後書き）

内容がねぇな・・・

余談ですが今日は作者の誕生日です。

お父さん、お母さん、産んでくれてありがとう。

オリジナルＩＳ設定　その二（前書き）

ＩＳの名前はバルディッシュトワイライトに決めました。

ご協力に感謝します。

それと、バルディッシュトワイライトの武装ですが、こうしたほうが良いんじゃないか、という案がありましたらお送り下さい。

オリジナルＩＳ設定　その二

ＩＳ名『バルディッシュトワイライト（黄昏の黒斧）』

世代、第四世代

制作者、篠ノ之束　（命名者、夕暮太陽）

待機状態、紅い太陽を模したネックレス

外見、他のＩＳに比べて線が細い。黒を基調とした装甲を持つ。背中部分には複数の自律兵器から成る支援機動飛翔体があり、左腕装備に大型ビームブレード、ビットシールド。右腕装備に大型ビームガンブレードを装備している。肩部には投擲用のビームトマホークを装備。

詳細、近、中、特に近接戦闘に特化している近距離戦闘型ＩＳ。レイジングウィングに比べ、機動力、総火力は劣るが、それを補うだけの防御力と豊富な近接武器を持つ。劣るとは言っても、比べる対

象が桁違いなだけであって、普通のＩＳよりも基本的なスペックは高い。背部装備を分離させて左腕の大型ビームブレード、右腕の大型ビームガンブレードに装備させることで強化可能。シールドも分離が可能で、バリアーを張ることも出来る。レイジングウィング同様全ての武装が展開されている。

武装

肩部装備

・投擲用ビームトマホーク【フレイア】×２

左腕装備
・高出力大型ビームブレード【オールデリート】
　オールデリート・ハーケン（ビット装備時）
・ビットシールド
　四つのビット【フィン・ファンネル】から成るシールド。分離させることでバリアーを張ることも可能。エネルギー武器だけでなく実弾も防げる。

右腕装備
・高出力大型ビームガンブレード【ライオンハート】（イメージはエクシアのＧＮソード。折り畳み式でビームライフルに変形する）
　ライオンハート・ザンバー（ビット装備時）

背部装備
・ＩＳ支援高高機動飛翔体【クアンディム】
　クアンディムのパーツ
・自律高機動ソードビット【スラッシュ・ファング】×４
・自律高機動ライフルビット【シュート・ドラグーン】×４

脚部装備
・高密度小型ビームサーベル【グリフォン】×４　（爪先と踵にそれぞれ二つ）

ワンオフ・アビリティー

名称、Ｍｏｄｅ（モード）　Ｔｒａｎｓａｍ（トランザム）

詳細、機体の出力を十倍以上に増加させる。

メリット、モードトランザムの間は全てのエネルギーを十倍以上に増加させることが出来るので、相手からの攻撃、エネルギー残量、その他諸々を一切考慮することなく行動することが出来る。また、オールデリート・ハーケンによる似非トランザムライザー、ライオンハート・ザンバーによるウィングゼロカスタムのツインバスター

ライフル並みの砲撃をすることが出来る。

デメリット、レイジングウィング同様三分間しか使用できない。また、稼働が強制停止することはないが、全ての性能が著しく低下する。

特徴、モードトランザムを発動すると全身に幾つもの紅い筋が現れ、発光する。

オリジナルＩＳ設定　その二（後書き）

どうですかね？　凡に、背部装備の名前ですが、ダブルオークアンタとケルディムから取りました。・・・だせぇな。ご意見待ってます。

初対面・・・じゃない？

「フランスから来たシャルル・デュノアです。この国では不慣れがことが多くてご迷惑をお掛けするかもしれませんが、皆さんよろしくお願いします」

転入生の片割れ、金髪の美男子、シャルル・デュノアはにこやかに笑いながら一礼する。皆、唖然としてて、何時も通りなのは夜明と太陽だけだ。

「へぇ。お前、野郎か？」

「はい。こちらに僕と似た境遇の人が二人いると聞いて本国から・・・」

シャルルが何やら丁寧に説明し始めたが、二人は聞いていない。夜明は後ろの席の太陽に素早く目配せした。

（太陽、デュノアってぇと・・・）

（あぁ。フランスで最も大きいＩＳ関連企業だ。差詰め、彼はそこの息子かなんかだろう）

（でも、だとしたらおかしくないか？　何だって社長さんは跡取り息子をこんな危険以外何もない所に？）

（色々と憶測は立てられるさ。無用な詮索は彼に失礼だぞ）

（だな）

そこで二人はアイコンタクトによる対話を中断せざるを得なくなった。

「き・・・」

「き？」

「「あ、まず」」

二人はそれぞれのポケットから二組の耳栓を取りだし、まずは自分達の耳に入れて、次に夜明は一夏の、太陽は箒の耳に耳栓を入れる。この間僅か二秒。恐るべき早業だ。

「「「「「きゃあ～～～～～～～！！！！！」」」」」

教室に響く黄色い声。耳栓をしていて尚脳に響くその威力、ソニックウェーブと言っても過言ではない。予め覚悟していた夜明と太陽は比較的ダメージは少ないが、一夏と箒はその黄色い声の波に耐えきれずに机に突っ伏した。

「男子！　三人目の男子！」

「しかもこのクラス！」

「二人と違って守ってあげたくなる！」

「地球に生まれて・・・よかったぁ～～！！！」

何故彼女たちはこんなにも騒げるのか？　二人は顔を見合わせてた

め息を吐きながら、花も恥じらう十代乙女の底なし体力に感服する。

「あー、騒ぐな。まだ自己紹介は終わっていないだろうが」

心底面倒そう、且つ鬱陶しそうに千冬はぼやく。山田先生ではなく千冬からのお言葉なので、皆はぴたりと騒ぐのを止めてもう一人の転入生、女子を見た。

「・・・・・・・」

終始無言。ガチの黒い眼帯をつけた、夜明よりも白が強い銀髪の美少女は腕を組んだまま黙っている。さっきまで下らなさそうに女子を見ていた視線は今や千冬に向いていた。

「・・・ボーデヴィッヒ、あいさつをしろ」

「はっ、教官」

いきなり居住まいを正して千冬に敬礼する銀髪。敬礼をされた千冬はまた面倒そうな表情でため息を吐いた。

「ここで教官は止めろ。ここでは私は教師、そしてお前は生徒だ」

「了解しました」

再び敬礼をしそうになり、思い出したように敬礼を止めてクラスを見渡す。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「・・・・・・・・・・」

それだけ。後はさっきと同じように終始無言だ。

「あ、あの～、それだけですか？」

「これ以外に言うべきことなど無い」

ラウラの無慈悲、冷淡な即答に山田先生は涙目だ。余りにも居たたまれない空気の中、不意に一夏とラウラの視線が交差する。

「っ！　・・・貴様が」

「？」

つかつかと一夏に歩み寄り、そして、

バシンッ！！

「・・・何の真似だ？」

ラウラは一夏の頬に振り切ろうとした平手を押さえた人物、夜明に敵意の籠もった眼差しを向けた。対する夜明は飄々としながらも、怒りを込めた口調で応じる。

「そいつぁこっちの台詞だ。何だ？　ドイツじゃ初対面の相手に平手をぶち込むのが挨拶なのか？　おっかねぇな」

夜明の手の中でラウラの手首がメキメキと音を立てた。ラウラは少しだけ驚いた表情を浮かべ、慌てて夜明の手を振りほどこうとする

が、万力の如き夜明の握力がそれを許さない。

「離せ！」

押さえられてない方の手で拳を繰り出すが、容易くもう片方の手で止められてしまう。ラウラの手首から奏でられる不協和音は更に酷くなり、表情が苦痛で歪み始めた時、漸く千冬が止めに入った。

「そのくらいにしといてやれ、月光」

「了解っす」

投げ飛ばすように夜明はラウラの手首を離した。黒板に叩きつけられたラウラは握り潰されかけた手首を押さえながら千冬、夜明の順に視線を向ける。

「月光？　・・・銀髪銀眼・・・！　そうか、貴様が月光夜明か」

いきなり名を呼ばれ、夜明は微かに眉を顰めた。

「何でお前が俺の下の名前まで知ってんだよ？　俺には手前みてぇな過激な思想を持った知り合い、いねぇぞ」

その質問には答えず、ラウラは指を夜明、一夏に向けて決然と言い放つ。

「月光夜明、織斑一夏。私は貴様等の存在を認めない」

「はぁ？」

「それで結構。手前みたいな奴に認められようがられまいが、俺たちがこの世に存在してることに変わりはねぇ」

いきなり向けられた敵意に一夏は唖然として口を開き、夜明は同じくらいの敵意を込めてラウラを睨む。ラウラは鼻を鳴らして自分の席である最後尾の席に座って目を閉じた。

「あー・・・これでＨＲを終了する！　各人、急いで着替えて第二グラウンドに集合！　今日は二組との合同ＩＳ模擬戦闘だ、遅れるなよ！」

千冬の号令で凍り付いてた空気が氷解し、はっとして皆動き始めた。

「月光、織斑。お前等がデュノアの面倒を見てやれ」

「あ、はい・・・」

「うっす」

一夏は未だにラウラから敵意を向けられたことに困惑している。夜明は既に気持ちを切り換え、少し間の抜けた返事を返した一夏の頭を千冬の替わりに叩いてからシャルルの元に向かった。

「君が月光君と織斑君？　初めまして、僕は」

「後だ。一夏、急ぐぞ」

「オッケー」

言うが早いが夜明はシャルルの手を取って教室を出た。その後を一

夏が付いてくる。

「野郎は空いてるアリーナの更衣室で着替えることになってる。ぼやぼやしてっと授業に遅れるから早めに慣れろよ」

「う、うん・・・」

頷きながらも、シャルルはさっきまでと違い落ち着きが無い。視線はちらちらと自分の手を握った夜明の手を見ている。不審に思いながらも、夜明は速度を落とすことなく歩いた。そうしなければ、

「ああっ！　転入生発見！」

「しかも月光君達と一緒！」

こうなるからだ。周囲に集まり始めた女子達に二人は表情を苦くし、シャルルは何が何だか分からなさそうにキョトンとしてる。

「一夏」

「夜明」

二人は顔を見合わせて頷き合い、一気に走り始めた。

「え！？　いきなりな」

驚くシャルルだが、すぐに走るのに集中しなくちゃいけなくなったので、取り敢ず口を塞いで夜明に引っ張られないように走る。

「逃がすな！　者共、出会え出会えぇ！！」

どこからか法螺貝の音が聞こえてきたのは三人の気のせいと言うことにしておこう。夜明は振り返って後を追ってくる女子達の多さに舌打ちした。

「くそ、さっさと授業の準備しろよな・・・」

「夜明！」

一夏が指さす方向を見ると、廊下の突き当たりに一箇所だけ窓が開いてる場所があった。しかも、お誂え向きにそのすぐ外には第二アリーナがある。

「成る程、こいつは好都合だ。一夏、あれで行くぞ」

「あぁ、あれだな！」

更に速度を上げる。正直走るのに必死で質問をする気力なんか皆無だが、二人が口にする『あれ』に本能的な恐怖を覚え、シャルルは質問をせずにはいられなかった。

「ね、ねぇ！　あれって何！？」

「やりゃ分かる！　デュノア！」

「何！？」

「舌噛むなよ！！」

「へ？　何のこ／／／！！」

ひょいと夜明に抱きかかえられ、シャルルの顔が真っ赤に染まる。
そんなことは意に介さず、夜明と一夏はそのままの速度で窓に突っ込んで、思いっきり床を蹴って踏み切る。

「「ヒャッホォォォォォォォ！！！！！！！！！！！！」」

「キャアアアアアアアア！！！！！？？？？？？？」

一応言っておくが、三人が飛び降りたのは四階だ。数秒間の浮遊感の後、強烈な衝撃と落下音と共に落下が止まった。

「はっはぁ！　これなら追いつけないだろ！」

「だな。にしてもあんな所から飛び降りたんだ俺。・・・正直言って信じられねぇ」

「人間、本気になりゃ大概のことは出来るもんさ。・・・あ、どしたデュノア？」

漸く、夜明は抱きかかえているシャルルが表情を真っ赤にさせていることに気付いた。真っ赤にした表情でシャルルは苦笑いを浮かべる。

「は、ははは。二人って結構パワフルなんだね・・・。それと月光君、そろそろ下ろしてくれると嬉しいんだけど・・・」

「あ、悪い悪い」

シャルルを下ろし、三人は互いに向き合い自己紹介をした。

「俺は月光夜明。夜明で頼む。こっちは織斑一夏、俺の相棒」

「一夏って呼んでくれ」

「よろしく二人とも、僕もシャルルでいいよ」

「了解・・・って急げ！　もう五分くらいで授業始まんぞ！！」

「げ、まじか！？」

「それは急がないとね！」

三人は尻に火がついたようにアリーナの更衣室に飛び込んだ。

「遅い！」

「遅い？　何言ってんですか織斑先生。授業開始までには間に合っ」

バシンッ！！

「五分前行動だ！」

「・・・了解っす」

口答えをしたために千冬から制裁を受ける夜明。その後ろではシャルルがクスクス笑い、似たようなことを言おうとしてた一夏は内心ホッとする。

「随分と遅かったですわね」

「色々とあんだよ・・・」

隣から何でか刺々しい声で話しかけてくるセシリアに適当な返事を返しながら、夜明は千冬に殴られた所を撫でた。余談だが、千冬は夜明に対してだけ本気で殴る。

「理不尽だ・・・」

バシンッ！

「・・・さぁせんでした」

「分かればいい」

再び殴ってきた千冬に一礼し、ため息を吐きつつ尚非難がましい視線を向けてくるセシリアに向き直った。

「しょうがないじゃん、シャルルの案内してたんだから」

「どうだか。夜明さんはさぞかし女性との縁が多いようですから。・・・それよりもあの転入生の銀髪の方とどういう関係か教えてくださらない！？」

鼻息も荒く問いただしてくるセシリアに若干気圧されながら、取り敢ず夜明はセシリアの頭を撫でて落ち着かせようとする。

「どうどう、よく分からんが落ち着けセシリー」

「はふぅ～・・・♪」

セシリアの頭を撫でていると、

ドゲシッ！

いきなり後ろから蹴られた。何事かと思い振り返ると、

「人の目の前でイチャイチャしてんじゃないわよこの馬鹿！」

明らかな怒気を含んだ表情で、鈴音が夜明を睨んでいた。足は尚夜明の脚、しかもアキレス腱の辺りを蹴り続けている。

「ちょ、鈴音。マジでそれは痛い！」

「当たり前でしょ、痛くしてんだから！」

痛みの所為でセシリアを撫でる手が止まり、セシリアはハッ、と正気に戻った。

「いけませんわ　幸せの余り飛んでましたわ・・・。誤魔化さないでちゃんと説明してください！」

「説明？　セシリア、それって何？」

「こちらの夜明さん。どうやら今日転入してきた方とお知り合いだったようで」

セシリアの回答に、鈴音の表情が疑問から憤怒に変わる。

「それどういうことよ、夜明！？」

「俺が聞きてぇよ！　ってか静かにしろお前等！　騒いでたら織斑先生が来ちま」

「・・・安心しろ。もう来ている」

壊れたブリキ人形の如きぎこちない動きで三人が振り返る。視線の先には文字通りの鬼、鬼神が立っていた。

バシーンッ！！！

蒼天に響く炸裂音。列の最後尾にいる太陽は上空を仰ぎながら一言。

「よく響くな・・・」

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「「「「「「「「「「はい！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」

」

合同授業と言うこともあってか、生徒達の返事は元気がいい。約三名を除いて。

「いつつ・・・何かと言えばすぐに人の頭をモグラ叩きみたいにぽんぽんと・・・」

「夜明のせい夜明のせい夜明のせい・・・」

「ざけんな。お前がぎゃんぎゃん喚くのが悪いんだろうが」

「何よ、やるの？」

「やんのかこら？」

メンチを切り合う不良よろしく睨み合う二人。その視線だけで、普通の人間なら尻尾を巻いて逃げ出すだろう。

「今日は戦闘を実演して貰おう。幸い、若さを爆発してる馬鹿者共がいるようだからな・・・オルコット！　鳳！」

「な、何故私！？」

完全なとばっちりだ。がっくりと肩を落とすセシリアの肩を夜明が叩く。

「・・・誰の所為だと思ってますの？」

「鈴音」

「うぎぃーっ！！　ぶん殴る！！」

腕をぐるぐる回して鈴音が夜明を殴ろうと飛びかかるが、それよりも早く千冬が二人の首根っこを掴んで皆の前に引きずっていった。

「専用機持ちはすぐに始められるからな。文句はやった後で言え」

「だから何故私・・・」

「夜明の所為なのに・・・」

ドナドナをバックに流しながら引きずられていく二人に、夜明は思いっきり舌を突き出す。ちょっと癒される光景だ。

「やる気を出せお前等。・・・あいつに良い所を見せる良い機会だぞ？」

「やはり！　ここはイギリス代表候補生であるこの私が！」

「専用機持ちの実力、見せたげるわ！！」

千冬が何かを囁いた瞬間、二人の態度がコロッと変わった。一瞬でやる気をマックスに上昇させた二人に皆驚きを隠せない。

「で、誰と闘えばよろしいのでしょうか？」

「何時でもやれるわよ」

「慌てるな。お前等の相手は」

その時、

「あああああーっ！　ど、どいてくださ～い！！」

空気を切り裂く音と一緒に何かが突っ込んできた。振り返った一夏は驚愕に目を見開く。

「何とぉっ！！？？　くっ、間に合え夜明プロテクション！！」

「あ、いきなりってマジかぁっ！！？？」

一夏に盾扱いされた夜明に何かが高速で突っ込む。夜明は激突する寸前にレイジングウィングを展開させ、派手に後ろに転がりながら突っ込んできた何かを受け止めた。

「あだだ・・・。山田先生、大丈夫ですか？」

夜明は苦笑いを浮かべながら腕の中の人物、山田先生に問いかけた。

「は、はひ。らいじょうぶれふ」

顔を真っ赤にして、噛み噛みで答える山田先生。それを聞いて安心した夜明は抱きかかえた山田先生を離そうとするが、瞬時に殺気を感じ取ってその場から飛び退いた。一瞬遅れて二人がいたところをレーザーが通過する。

「ほ、ホホホホ。おかしいですわね、ちゃんと頭を撃ち抜くように狙った筈なんですが」

「セシリー俺のこと殺す気か！？」

額に血管を浮かび上がらせながらも上品に笑ってみせる辺り流石と言える。・・・もっとも、その声音は引きつりに引きつって上品とはとても呼べないが・・・。笑うセシリアの隣りで、同じように血管を浮かび上がらせた鈴音が双天牙月を連結させ、何の迷いもなく夜明の首目掛けて投擲した。

「トゥースッ！？」

ギリギリの所で回避するが、夜明はあることを失念していた。それは、双天牙月はブーメランのように持ち手に向かって戻ってくること。

（あ、これは避けられねぇ）

冷静にそんなことを考えている間にも、双天牙月は回転を増して夜明に迫る。直撃を覚悟すると、

「はっ！」

銃声二発。夜明の腕の中で、アサルトライフルを構えた山田先生が的確に双天牙月の両端を撃ち抜いて軌道を変えた。

「「「「「おぉっ！」」」」」

生徒達の間から賞賛の声が上がる。

「凄いですね、山田先生」

「ありがとうございます。それはそうと月光君、そろそろ離してくれると嬉しいんですけど、あ！いや、決して月光君にこうされてるのが嫌と言うわけでは」

「あ、すいません」

最後まで聞かずに夜明は山田先生を離した。山田先生は夜明から少し離れ、顔を赤くしながらちらちらと夜明を見て、いやんいやんと身体をくねらせる。

「離して！　離してください！！」

「離しなさいよ！　つぅか太陽！　何であんたはそんな冷静なの！？」

千冬に変わって暴れだしそうな二人を抑えていた太陽は露骨にため息を吐いた。

「馬鹿かお前等。世の中には不可抗力と言う物があるだろうが」

別段咎め立てするつもりはないらしい。だが、太陽が押さえ込んでいる二人はそこまで達観してもないし、大人でもなかった。

「「そんなんで納得出来るか（出来ませんわ）！！」」

ほらね。

その後、模擬戦で山田先生は二人をフルボッコにして、ＩＳ学園の教師の強さを改めて生徒達に示した。そして今は専用機持ちの生徒がグループリーダーになって実習をしている。凡に、太陽はまだＩＳの調整が終わっていないため普通の生徒に混ざっている。

「姐さん、ちょっといいですか？」

運良く太陽と同じ班になった夜明はグループの生徒達を太陽に任せ、各グループの様子を眺めている千冬の横に歩いていった。

「織斑先生と呼べと言ってるだろうが・・・。ボーデヴィッヒのことか？」

「はい。何であの銀髪は俺の名前を知ってたんですか？」

千冬は周囲を見回してから、小声で申し訳なさそうに夜明の耳元で囁く。

「すまないな。あれは私が原因なんだ」

「姐さんが？」

「あぁ。私が一時期ドイツ軍で教官をやっていたことは知っているな？」

「はい」

千冬はある事件が切っ掛けで、一年間ドイツ軍で教官をすることになった。夜明自身、その事件に深く関与しているため、知らないと言う方がおかしい。

「実はその時、勢いでお前のことを喋ってしまってな。それ以来、あいつはお前を敵視、いや違うな。強すぎるライバル心を持ってしまったと言うべきか・・・。とにかく私が原因だ。すまない」

「いや。原因さえ分かればそれでいいですよ。てか何て言ったんですか？」

「それは秘密だ」

そんなこんなで午前の実習は終わり、皆が待ちに待った昼休みがやって来た。訓練用のＩＳを片づけていた夜明と一夏はゴキゴキと肩を鳴らした。

「あぁ～、疲れた」

「まったくだ。ＩＳがあそこまで重いとはね。・・・鍛錬に付け加えるか？」

「いや、やめとけよ」

漫才じみた遣り取りをしながらアリーナに向かう。ふと、何かを思い出したように一夏は足を止め、自機の調整をやっていたシャルルの方を向いた。

「お～い、シャルル。着替えに行こうぜ」

何気ない誘い。なのだが、何故かシャルルは顔を赤くし、少しばかり慌て始めた。

「あ、いや。僕は機体の微調整をやっとかなきゃいけないからさ。二人とも先に行っててていいよ」

「そうなのか？　なら調整が終わるまで待ってるけ」

「いいからいいから！　僕のためだけに待って貰うのとか悪いし！　二人とも先に戻ってて」

頑なシャルル。それでも尚一夏は何か言いたそうだが、見かねた夜明が一夏の耳を引っ張って引きずる。

「シャルルがこう言ってるんだからそれでいいだろ」

「あだだ、分かったから耳引っ張るの止めてくれ！！」

悲鳴混じりの声が遠のいていき、シャルルがホッとため息を吐いた時、

「シャルル」

「わひゃい！？」

いつの間にか後ろに一夏を引きずっていった筈の夜明が立っていた。
シャルルは突然の夜明の出現に鼓動を早めた胸を押さえ、約十秒ほどしてから夜明の方を向く。

「よ、夜明。びっくりさせないでよ・・・」

「はは、悪い悪い。もしお前がよければなんだけど、昼飯一緒に食べないか？　場所は屋上なんだけど」

「屋上で？　う～ん・・・分かった。調整が終わったら行くよ」

「そっか。ならなるべく早く来いよぉーっ！」

シャルルの返答に満足したのか、夜明はニッと笑いながら走っていった。同じように笑いながらシャルルは手を振る。夜明の後ろ姿が見えなくなると、シャルルは手を振るのを止め、暗い表情でため息を吐いた。

「・・・僕は、何をしてるんだろう・・・」

胸の中に浮かび上がってきた罪悪感めいた何かを払拭するように、シャルルは急いで機体の調整を終えた。

初対面・・・じゃない？（後書き）

悲しみで花が咲くものか！

・・・名言です。

色々訳あり・・・取り敢ず話せば？

昼休み、屋上。

「いやぁ、今日も良い天気だなうん」

「・・・そうか。それは何よりだが・・・一夏」

「どうした箒？」

一夏の隣りに座っていた箒は一回大きく息を吸い込み、周囲に視線をやる。夜明、太陽、シャルル、セシリア、鈴音の順で円を描くように座っていた。

「何で皆がいるんだ？」

「いや、何でって言われても。大勢で食べた方がうまいだろ？」

「・・・そうだが・・・」

困ったように一夏は頭を掻く。箒は理不尽と分かりながらも、一夏に恨みがましい視線を送らずにはいられなかった。二人を見かねた太陽が弁当を取り出す。

「取り敢ず食べてしまおう。昼休みは無限ではない」

「太陽の言うとおりだな。飯食って即行ダッシュはしたくねぇ」

夜明も弁当を取りだしたのを見て、皆それぞれの弁当を取りだした。

凡に一夏の分は箒が作ってきたらしい。

「いただきます」

「「「「「「いただきます」」」」」」

七人仲良く手を合わせて食事開始。夜明と太陽、箒と鈴音はお手製、シャルルとセシリアは購買のパン、一夏は作ってきてもらった弁当だ。

「おぉ、うまいなこの唐揚げ。えらく仕込みが込んでるな・・・シャウガと醤油、後は・・・何だろ？」

「おろしニンニクにコショウを少しだけ混ぜてある。大根おろしも良い隠し味になる」

「へぇ。凄いじゃん、箒」

「こ、これくらい普通だ」

一夏に褒められ、ぶっきらぼうな口調だが箒はてれてれと頬を赤くしている。二人（主に箒）の頬笑ましい光景に微笑する太陽だったが、箒の弁当の中身を見てあることに気付いた。

「箒、お前の弁当には唐揚げが入ってないみたいだが、どうしてだ？」

太陽に突っ込まれ、箒は慌てふためいたように顔を赤くして両手を振る。

「い、いや太陽、これはだな・・・私は今ダイエット中なんだ！！」

かなり苦しい言い訳だ。が、これをあっさり信じるのが唐変木クオリティ。納得する一夏と夜明だが、ふと別の疑問が浮かんでくる。

「え、ダイエットなんかしてるのか、箒？」

「意外だな。普通にスリムだからする必要無いと思うけど。まぁ、身体が細い割に胸がおゴボアガァッ！！！」

夜明の脇腹を太陽の肘鉄が打ち抜き、顔面を酢豚入りのタッパーとサンドウィッチ入りのバスケットが直撃する。投擲者は勿論セシリアと鈴音だ。

「夜明。食事中に女子の発育のことを口にするなんて感心しないな」

「女の子の胸のことを言うなんて最っ低！！」

「夜明さんにはデリカシーが無さすぎますわ！」

女子三人から非難囂々の罵倒を受け、夜明は顔を顰めて脇腹と鼻面を押さえながら起きあがって三人をそれぞれ見る。

「いてて・・・。いきなり何すんだよお前等。怒る理由がわから・・・あぁ、そっか。太陽はともかく、セシリーと鈴音は箒よりも胸がちっさラブレットォッ！！！」

問答無用で二人が放った拳が夜明の鳩尾、喉仏を直撃した。よく分からない悲鳴を上げながら夜明はレールガンよろしく吹っ飛び、フェンスに叩きつけられる。

「「何か言った（言いまして）？」」

「殴ってから言う台詞じゃないだろうに・・・」

どす黒い良い笑顔の二人に太陽が呆れながらも突っ込む。だけど、と今度は屋上の端っこで大の字になってる夜明を見て言った。

「もっとも、今回ばかりは夜明が悪いな。流石にフォローの言葉が出てこない」

不意に、クスクスと忍び笑いが聞こえてきた。皆が声の方を向くと、シャルルが笑いを抑えるのに必死になっているのが分かる。

「どうかしたのか、シャルル？」

一夏の問いにシャルルは目尻に浮かんだ涙を拭いながら手を振って答えた。

「ごめんごめん。今まで僕、こんな漫才みたいな遣り取り見たことなくて・・・フフフ」

余程さっきの遣り取りがおもしろかったのか、シャルルは小刻みに身体を震わせて笑いを堪えている。そこに追い打ちをかけるように、ぶっ倒れている夜明がよろよろと腕を持ち上げた。

「ふ、二人とも、良い拳を持ってるじゃねぇか・・・。どうだ、俺と、世界を目指して、見ガクッ」

パタッと倒れた夜明の腕を見て、我慢の限界に達したシャルルは大

声を上げて笑い始めた。

「ま、色々とあったけどよろしくな、シャルル」

「うん、よろしくね夜明。・・・俺と世界を目指してみないか・・・フフフ」

「よっぽど気に入ったんだな、それ」

昼休みに色々なドタバタがあったが、午後の授業も無事に終わり、夜明は自室に帰ってきた。案の定と言うべきか、今はルームメイトになったシャルルの荷解きの手伝い（と言ってもほとんど荷物が無い）をしている。

「ほれよ」

「うん、ありがとう。紅茶とは随分違うね。僕は紅茶も好きだけど、こっちも好きだな」

夜明が入れてくれた緑茶を啜りながら、シャルルはそう緑茶を評価した。夜明はごろんとベットに横になりながら自身も緑茶を飲む。

「そいつぁ重畳。どうもセシリーは緑茶の緑色が苦手らしい。・・・緑茶から緑色取ったら唯の苦いお湯じゃねぇか」

「はは、確かに」

そんな感じに談笑をしつつ、夜明は思い出したように身体を起こして部屋に備え付けてあるパソコンを開いた。いきなりパソコンを開いたので、シャルルは興味津々で肩越しに画面を覗き込む。

「何してるの？」

「あぁ。ＩＳ特訓のデータを整理しようと思ってな。一夏の動きも結構様になってきたから、そろそろ五連続瞬間加速（フィフス・イグニッション・ブースト）を教えてやろうと思ってね」

「ご、五連続って凄いね。そんな出鱈目な動き、普通のＩＳじゃ出来ないよ」

「そうでもないさ。練習と根性、後はちょっとのセンスさえありゃ誰だって出来るさ。そういやシャルル、お前も専用機持ちだよな？」

「うん。専用機って言っても『ラファール・リヴァイヴ』をカスタムしただけのＩＳだからね。そこまで凄くは無いよ」

「専用機持ちってだけでも普通の奴からして見れば凄いと思うがね。もしよかったら放課後のＩＳ特訓、付き合ってくんねぇか。近接戦闘はともかく、射撃を教えるのは難しくてな」

「うん、いいよ」

快く頷くシャルルだが、ここでとある疑問が浮かんだ。

「射撃を教えるのが難しいって・・・夜明のＩＳって超高出力火器ばっかり搭載してるよね。射撃って得意な方なんじゃ」

夜明は苦虫を噛み潰したような表情で頭を掻きながら、胸元をはだけながら蒼い翼のネックレス、待機状態のレイジングウィングを取り出す。

「確かに砲撃をぶち込むのは得意分野だけど、得意なのと教えるのは違うって言うか・・・。手加減できなくて毎回当てちゃうんだよな」

「そ、そうなんだ・・・／／／」

シャルルは少しだけ声を詰まらせながら言った。その視線はちらちらとはだけられた夜明の胸に向かい、頬は心なしか赤い。シャルル

は平常心を取り戻そうと一回咳払いをした。

「それなら僕が一夏の射撃訓練を見ようか？　これでも射撃には自信があるんだ」

「マジでか？　是非頼むわ」

「いいよ、任しといて」

こうして、放課後のＩＳ訓練にシャルルが加わることになった。

「一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「それは同感だ。武器の特性把握は攻撃には勿論、回避にも必要不可欠だ」

「そ、そうなのか？　一応、理解してるつもりではいるんだが」

土曜の午後、夜明達は第四アリーナで訓練をしていた。土曜の午後は完全に自由時間になるため、他の生徒の姿もチラホラ、と言うよりも三人の男子目当てでかなりの人数が見られる。その生徒達の中に混じって、夜明、箒、セシリア、鈴音は太陽とシャルルから射撃のレクチャーを受けてる一夏を見ていた。

「そっか・・・。サンキュー、二人の教え方は分かり易いな。他の皆はちょっと・・・」

「安心しろ一夏。私もあんな説明では理解できない」

太陽に何とも言えない目で見られ、夜明を除く三人が抗議の声を上げる。

「それは一夏が私の説明をちゃんと聞いていないのが悪いんだ！」

「そうよ！　こっちは丁寧に説明してやってんのにその馬鹿は！」

「私の理路整然とした説明のどこがいけないと言うんですか！」

「お前等、それ本気で言ってんのか？」

夜明が半目になるのも無理はなく、この三人の説明はとにかく無茶苦茶だ。

箒、鈴音の場合。

『こうズバーッ、とやってからガキンッ、ドカンッ、と言った感じだ』

『何となく分かるでしょ？　感覚よ感覚・・・何で分かんないんのよ！』

これを説明と呼べと言う方が無理な話である。

セシリアの場合。

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

理路整然としすぎている。そして最後の頼みの綱とも言うべき夜明は。

『言葉で説明するよりも拳で説明した方が万倍早ぇっ！　いくぞ一夏！！』

超絶実践主義のためある意味三人よりも分かり易い、ある意味三人よりも難しい、と二拍子揃って尚更質が悪い。

「ま、今の所は一夏を二人に任せとくか。セシリー、鈴音、箒、俺

等は少し離れた所で訓練してようぜ」

夜明の提案にセシリアと鈴音は一に二もなく賛成したが、箒だけが二人に囲まれてる一夏と離れようとしている夜明達を見比べている。

「どした箒、早く行こうぜ」

「い、いや。私はやはり一夏の面倒を見」

「ここで訓練しておけば学年別トーナメントの時、一夏に良い所見せられるかもな」

「さぁ、張り切って訓練に臨むとしよう！！」

「扱いやすっ」

「ですわね」

二人の声は聞こえていないのか、箒は両腕をグルングルン回して使用許可を貰った訓練ＩＳを取りに行った。夜明は箒の後ろ姿を生暖かい目で見つつ、二人の方を見た。

「そいじゃおっ始めるか。何時も通り俺に一撃でも当てられればお前等の勝ちな」

「その前にちょっとだけ聞きたいことがあるんだけどさ、夜明」

「ん、何だ鈴音？」

「太陽って専用のＩＳ貰ったのに一回も戦闘訓練に参加してないの

って何で？」

「それは私も気になりましたわ」

二人に訊ねられ、夜明は頭を掻きながら一夏にレクチャーをしている太陽を見る。

「俺も話を聞いただけで詳しくは知らないんだけど、どうやら太陽のＩＳ、『バルディッシュトワイライト』はまだ最適処理化（フィッティング）が終わってないらしいんだ」

夜明の答えに二人は目を丸くした。それもそうで、第二移行（セカンド・シフト）ならともかく、最適処理化（フィッティング）はＩＳに乗る上で一番最初にすること。そんな数週間もかかる様なものではない。

「何でもバルディッシュトワイライトの奴、一次移行（ファースト・シフト）どころか二次移行（セカンド・シフト）まで終わらせようとしてるんだと。だから時間が掛かってるんだ・・・ってのが太陽の言い分だが。ってか、自分達で聞きに行けよ。さって、それじゃやります」

「おい」

「あぁん？」

振り返ると、そこには孤高の転入生、ラウラ・ボーデヴィッヒがＩＳを展開していた。ラウラが纏う黒い見覚えのないＩＳに夜明は首を傾げるが、夜明の後ろでセシリアと鈴音が呟く。

「『シュヴァルツェア・レーゲン（黒い雨）』・・・」

「ドイツの第三世代型、よね？」

「ほう、腐っても代表候補生と言う訳か。腕は悪そうだが知識だけはありそうだ」

ラウラの物言いに沸点の低い二人はキレかけるが、夜明は片手を上げて二人を制した。

「一体何のようだよ？　二人のこと侮辱しに来たのか？　だったら失せろ、目障りだ」

「そんなことをするほど私は暇じゃ無い。貴様に用があってきたんだ。私と闘え」

夜明はチラッと後ろの二人に視線を向け、それから再びラウラに視線を向ける。

「断る・・・って言ったら？」

「言わせない」

言った刹那、左肩の大型実弾砲が火を噴いた。

「レイジングウィング！！」

放たれた弾丸は夜明自身に届く前に、胸元から現れた蒼い二対の翼によって弾き飛ばされた。翼はゆっくりと夜明を覆い、翼が消えるとそこには白い装甲を纏った夜明の姿が。

「こんな密集空間でいきなりぶっ放すなんてあれか、手前はトリガ

ーハッピーですかこの野郎?」

「なら射撃武器でなければ問題あるまい」

ラウラは両手首からプラズマ刃を展開、夜明へと打ち掛かった。夜明は面倒くさそうにため息を吐きながら腰からスターライザーを引き抜いて、振り下ろされたプラズマ刃を容易く受け止める。

「せめて俺と闘う理由を教えて欲しいんだが!」

鍔迫り合いをしながら夜明はラウラの腹に蹴りをぶち込んだ。蹴られる寸前にラウラは後方に飛び退き、蹴りの威力を緩和する。宙に浮いたままラウラは敵対心に満ち満ちた視線とプラズマ刃を夜明へと向けた。

「教官は言っていた。貴様は強いと。自分よりも、な」

ここで夜明は大きく目を見開いた。それは後ろにいるセシリアと鈴音も同じだった。教官、つまり千冬が他人を、しかも弟分である夜明を自分よりも強いと言ったのだ。普段から頭をぶん殴られている夜明にしてみれば、随分と複雑な気持ちになる。

「私は・・・貴様を認めない。教官よりも強い人間がいるなんて、認めてたまるか」

更に瞳の中の憎悪を滾らせ、ラウラはプラズマ刃を構える。

「私は貴様を倒す。倒して貴様を否定する。そして、教官こそが最強であると示す」

「・・・オッケイオッケイ。手前の言い分はよ～く分かった。迷惑な話だな、くそっ。・・・まぁいい、来いよ」

夜明がスターライザーを構えたのを見て、ラウラは身体を低く屈める。瞬間加速（イグニッション・ブースト）で夜明に突っ込もうという魂胆だ。

「ぶっ潰す」

「やれるもんならな」

背中が爆発したように見えた瞬間、弾丸のようにラウラが突っ込んできた。迎え撃とうとスターライザーを構えた瞬間、何かが二人の間に割り込んできて、ラウラのプラズマ刃を防いだ。

「・・・一夏？」

「大丈夫・・・に決まってるよなぁ、お前なら」

プラズマ刃を雪片で受け止めながら、肩越しに夜明を見た一夏は苦笑いを浮かべる。表情を引き締めて雪片を振り抜いてラウラを吹き飛ばし、夜明の隣りに並んだ。

「状況は分からないけど、取り敢ずあいつが気に入らなかったから割り込んだ」

「んな理由かよ！　でもま、礼は言っとくけど」

二人が武器を構えたのを見て、ラウラは唇を歪めて笑う。

「丁度良い。二人纏めて叩き潰してやる」

『そこの生徒！　何をしている！　学年クラス出席番号を言え！』

スピーカーから大音量で教師の声が流れてきた。騒ぎを聞きつけてやって来た、第四アリーナを担当している教師だろう。

「・・・興が削がれた」

それだけ言うとラウラはあっさりと戦闘態勢を解き、アリーナゲートへと向かっていった。

「おいボーデヴィッヒ！　一つ良いこと教えてやるよ！」

後ろから聞こえる夜明の声を無視して、ラウラは歩みを止めずに行く。それでも構わずに夜明は話を続ける。

「姐さんが『モンド・グロッソ』で二連覇を果たせなかった理由、実は俺も関わってんだ」

「！！」

弾かれたようにラウラは振り向いて夜明を見た。『モンド・グロッソ』の詳細については原作二巻を参考にして欲しい。早い話、一夏と夜明が謎の組織に誘拐されて、それを千冬が助けに行ったと言う訳だ。

「良かったな、闘う理由が出来て。闘うことでしか己の存在を示すことが出来ない哀れな黒ウサギ」

「・・・その黒ウサギに翼をもがれると言うことを忘れるな、不屈

の翼」

今度こそ、ラウラはアリーナから去っていった。

「シャルル～、シャワー出たぞ～」

「あ、うん。分かった」

シャルルはシャワールームから夜明が出てきたのを確認して、シャ

ンプーやボディソープを抱えてシャワールームに入ろうとするが、ふと歩みを止めて夜明の美しい銀髪をじぃ～っと注視した。

「あ、何だよ？」

「・・・夜明の髪って凄く綺麗だよね。どんなシャンプー使ってるの？」

ベットの上に座ってその銀髪をタオルで無造作に拭き続けながら、夜明は奇異な物でも見るような目でシャルルを見る。

「綺麗って・・・いきなり何言ってんだお前？　シャンプーなんざ気にしたことねぇよ」

「え、そうなの？　じゃあ手入れとかは？」

「するわけねぇだろ」

「えぇ～っ！？」

いきなりシャルルが叫んだので、夜明はビックリして動きを止めた。

「い、いきなりどうした！？」

夜明の言葉を無視して、シャルルは夜明の肩を掴みながら熱の籠もった視線でその目を覗き込む。

「そんな、勿体ないよ！　こんなに綺麗な髪なのに痛んだりしたらどう責任取るつもりなの！？」

「せ、責任!?　そんなの俺の髪なんだから取りようがないし、そもそも髪が痛んだりとかなんてのもどうでもいい、っつか、男が髪のことなんか普通気にしねぇよ!」

「バカァーッ!!」

「へブゥッ!!」

シャルルの鋭い平手が夜明の頬を捉えた。その平手は結構な威力で、夜明の頬に綺麗な跡を残す。

「分かってない!　分かってないよ夜明!　髪の綺麗さに性別なんて些細な問題、いや、問題すら無いんだよ!」

「そ、そうなのか?」

「そうなの!　と言うわけで」

何処から取りだしたのか?　シャルルは右手に盾を、左手に剣を・・・でなくて右手にドライヤーを、左手にクシを構えた。

「僕がお手入れしてあげるよ」

「いや、別にい」

「してあげる」

「・・・是非にお願い致します」

可愛らしく微笑んでいるのに、何故かとっても怖く見えるシャルル

の空気に耐えきれず、夜明はベットの上で土下座する。

「それじゃあやるよ」

「・・・もうどうにでもしてくれ・・・」

夜明の後ろに回って何やら楽しそうにドライヤーを使って、シャルルは夜明の髪を梳かし始めた。既に抵抗は無意味と悟った様で、夜明はシャルルの為すがままになっている。

「本当に夜明の髪って綺麗でサラサラしてるね。いいなぁ～・・・」

「んなこと羨ましがるなよ。男が髪綺麗なんて言われたって何も嬉しくないぞ」

「そうかな？」

「そうだろ」

暫くの間、部屋の中にはドライヤーが風を噴き出す音とシャルルの鼻歌、髪が梳かされる音だけが響いた。

「なぁ、シャルル」

唐突に夜明が口を開いた。

「ん、何？」

「何で男の振りなんてしてんだ？」

シャルルの手がピタリと止まった。慌てて何事も無かったかのように動かし始めるが、双眸は驚愕に大きく見開き、心臓は痛いほどに鼓動を速めている。

「あ、あはは。何のことかな夜明。僕は歴とした男の子だよ？」

「ふ～ん。お前がそう言うならそれはそれで良いけど」

よっと立ち上がり、夜明はベットの脇にあるサイドテーブルの上にある翼の形をした髪留めを掴んで手早く髪を結んだ。

「あ、まだ終わってないんだけど・・・」

「もう充分してもらったよ。ありがとな、シャルル」

柔らかい笑顔で言われ、シャルルは頬を赤らめながら頷く。

「んじゃ、俺ちょっくら散歩行ってくっから」

「うん。・・・湯冷めしないように気をつけてね」

「了解」

手をヒラヒラと振って、夜明はドアノブに手をかけた。

「シャルル」

「・・・何？」

「お前がどんな目的でここに来てるのかは知らないし、お前がどん

な心意を持っているのかは俺には推し量れない。でも、これだけは伝えとく」

振り返り、真っ直ぐにシャルルのエメラルド色の瞳を見据え、はっきりと伝える。

「俺ぁ、お前の味方だ」

じゃ、とそれだけ言い残し、夜明は今度こそ部屋から出ていった。

数分間、シャルルは夜明が出ていったドアを見つめていたが、何かを決心するとシャワールームの中に入っていった。

「ただいま～」

「・・・うん、お帰り」

約十分後、夜明が部屋に戻ってきた。中を見ると、既にシャルルはシャワーを済ませたようで、寝間着に着替えていた。髪もしっとりと濡れていて、何故かベットの上で正座をしている。夜明はちらっと時計を見た。時刻は六時少し前、夕飯にはまだ早い。

「六時半くらいになったら飯食いに行こうぜ」

シャルルの返事を聞かず、夜明は空中で体勢を捻りながらベットにダイブ、組んだ両腕に頭を乗せながら天井を見据える。

「あ、あの、夜明！」

いくらもしない内にシャルルが話しかけてきた。夜明は上半身だけを起こし、シャルルを見る。

「どうした？」

シャルルは暫くの間、部屋中に視線を走らせて逡巡していたが、意を決して夜明の銀眼を真っ直ぐと見つめた。

「聞いて欲しいことがあるんだ」

色々訳あり・・・取り敢ず話せば？（後書き）

太陽「・・・何だって私はこんな所にいるんだ、夜明？」

夜明「え～っと、何だったかな・・・そうそう！　感想で何か凄いの来たじゃん、次回予告書いてくれたあれ」

太陽「あぁ、ＨＡＬ－ＨＡＬ様の感想だな。本当にありがとうございました」

夜明「そこで、作者自身もあんな感じの次回予告をやってみようと言う話になったらしいんだ」

太陽「無理だろ。この駄作者じゃ」

夜明「・・・そんな身も蓋もないこと言ってやるなよ・・・。取り敢ず頼んだ」

太陽「ふ、やれやれ。本来ならこんな面倒なこと、箒辺りにでも任せるんだが、夜明直々の頼みとあってはやらざるを得ないか。では、やるぞ」

こんばんわ、太陽です。道路が凍ってて滑りそうになりました。皆さんも気をつけてくださいね。さて、次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は、

『シャルル、真実を語る』

『夜明、命とは何たるか』

『太陽、夕陽に強さを説く』

の三本です。

次回も見てくださいね。ジャン、ケン、ポン！

『チョキ』

ウフフフフ。

夜明「待て待て待て！　何でそんな超国民的アニメの次回予告パクってんだよ！？」

太陽「パクリではない。・・・何かだ」

夜明「分からないなら使うな！！」

太陽「凡にこのジャンケン、十連続で勝つと私を好きなだけ撫で撫でする権利がもらえるらしいぞ」

夜明「作者ぁっ！！　ぶっちＫＩＬＬ！！」

夜明、命を語る　太陽、強さを語る（前書き）

今回は二人に語ってもらいます

夜明、命を語る　太陽、強さを語る

「で、聞いて欲しいことって何だよ？」

互いのベットに腰掛け、向き合う二人。夜明は普段と変わらない飄々とした態度だが、シャルルはガチガチに緊張してる。

「・・・そんな緊張してちゃ喋れるもんも喋れなくなんぞ」

見かねた夜明が呆れたように突っ込むと、シャルルは慌てたように深呼吸、改め過呼吸を始めた。

「そ、そうだよね。ちょっと待ってて。スー、スー、スー、スー・・・」

「落ち着け、そりゃ過呼吸だ」

案の定、シャルルは咳き込み始め、夜明は表情に浮かべた呆れを深くしてシャルルの背をさすってやる。咳が止まったのを確認して、夜明は自分のベットに戻った。

「ありがとう。・・・その前に聞きたいんだけどさ、夜明。何で僕が女の子だって分かったの？」

今のシャルルはスポーツジャージを着ている。そして、ジャージに浮かび上がった身体のラインは明らかに女性のそれだ。夜明は頭を掻きながらこれまでのことを思い返す。

「まず一番始めに怪しいと思ったのはお前を抱きかかえた時だな。

どうも男の子って割には筋肉や身体が柔らかすぎる。二番目は一夏の着替えの誘いを断ったとこ。これだけなら身体に古傷があって、それを見られたくないって考察も立てられるから、はっきりとした根拠にはならなかったけど。そして最後に動作はともかく、反応が女の子っぽい」

夜明が寝間着に着替える度に食い入るように見つめてくる。シャルルは気付かれていないと思っていたが、実際は気付いていたけど夜明が何も言わなかっただけの話だ。それ以外にも細かい点を上げていけばきりがない。

「そうなんだ・・・。あんなに男の子の喋り方や仕草を覚えさせられたのにな。意味無かったな・・・」

「・・・話してくれよ。お前が言いたいこと、俺に聞いて欲しいこと全部」

シャルルはコクリと頷くと、居住まいを正してポツポツと語り始めた。

「まず、僕が男の振りをしてＩＳ学園に入った理由なんだけど、実家の方、デュノア社の社長である僕の父から命令されたからなんだ」

「・・・命令？　実の親が子供に対して命令なんておかし・・・あぁ」

訝しげに眉を寄せていた夜明だが、シャルルが表情を曇らせているのを見て大方の想像が付いたのか、苦虫を噛み潰したような表情を作る。

「養子・・・いや、愛人の子か」

「夜明って本当に勘が鋭いね。そうなんだ。母が死んで父の部下がやって来たのが二年前、その時の検査でＩＳ適正が高いことが分かって、非公式ではあるけどデュノア社のテストパイロットをすることになったんだ」

好き好んで話したい内容では無いだろう。シャルルは曇らせていた表情に更に陰を差させ、それでも話を続けた。夜明は無言でシャルルの話に耳を傾ける。

「一度だけ本邸に・・・あ、僕は普段、別邸にいて父とは別々に暮らしてるんだ。それで、一度だけ本邸に呼ばれたことがあるんだけど、あの時は酷かったな。『泥棒猫の娘が！！』って本妻の人に殴られちゃったよ。母さんも少しくらい話してくれれば良かったのに」

そう言いながら、シャルルは乾いた笑いを浮かべる。夜明も、愛想笑いの一つも浮かべなかった。笑える要素など、今の話には何一つとして存在してない。夜明の拳が軋んで剣呑な音を立てたので、夜明は慌てて拳から力を抜いた。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったんだ」

「第三世代型開発の遅れ、か」

「うん。いくらＩＳのシェアが世界三位だからって、所詮リヴァイヴは第二世代型。それにフランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッションプラン』から除名されちゃってるからね」

「んで、デュノア社も第三世代型ＩＳの開発に着手した。が、圧倒

的に他国や他の会社よりもデータや時間が不足。政府からは予算を大幅に削られ最悪の場合、援助は全面的にカット。・・・差詰め、お前が男装してるのって広告かなんかの為だろ？」

「・・・それだけじゃないよ」

どこか苛立ちを含んだシャルルの声。夜明はその答えすらも予想していたのか、声音も表情も変えずに淡々と言葉を紡ぐ。

「一夏の白式や俺のレイジングウィングのデータを盗め・・・か？」

「・・・本当に、ごめん」

涙で声を曇らせながら、シャルルは深々と頭を下げた。それに返ってきたのは・・・。

「・・・許さねぇ・・・」

骨の髄まで凍り付きそうな、絶対零度の怒りに満ちあふれた夜明の声。その声の余りの冷たさにシャルルはビクッと身体を震わせ頭を下げたまま、襲いかかってくるだろう夜明の拳に耐えるために歯を食いしばる。

「・・・頭上げてくれ、シャルル」

恐る恐るシャルルが目線を上げて夜明の目を見ると、夜明は深々とシャルルに頭を下げた。

「え・・・？」

「悪かったな。こんな喋りたくもないことを話させちまって。本当

にすまない」

何が何だか分からずに戸惑いの表情を浮かべているシャルルに、夜明は続けて謝罪の言葉を伝える。

「あの、夜明」

「何だ？」

「怒ってないの・・・僕のこと？」

「怒ってるさ」

頭を掻きながら、夜明は視線を上げて天井を仰いだ。

「けど、少なくともこの怒りはお前に対して向けられた物じゃない。お前の親父に向けられた物だ・・・。で、シャルル。お前はどうしたいんだ？」

「え、どうしたいって言われてもなぁ・・・。夜明にばれちゃったから本国に戻されるのが落ちかな？　それで代表候補生も下ろされて、牢屋に入れられる・・・と思うよ」

自分を待つ悲劇的な道筋が明確に描けているにも拘わらず、シャルルはどこかスッキリした表情で夜明に微笑みを向ける。

「何だか夜明に話したら胸の中が軽くなったよ、ありがとう。それと、今まで騙しててごめんね」

「・・・違ぇ、全っ然違ぇ」

夜明がシャルルに返したのはシャルルの謝罪とは何の関係もない。戸惑いの表情を浮かべるシャルルの瞳を、夜明はその銀眼で真っ直ぐと撃ち抜いた。

「俺が聞きてぇのはお前の親父が用意したくそ下らない結末でも、お前の見当違いの謝罪でも無ぇ。俺はお前が、シャルル・デュノアと言う存在がどうしたいかを聞いてるんだ」

「よ、夜明、どうしたの？　ちょっと様子がへ」

「そもそもがおかしいんだよ。お前の親父は何様のつもりだ？　勝手に子供作っといて、今までほったらかしにしといたくせに利用価値があるって分かった瞬間お前のことを道具みたいに利用して、それが駄目だったら牢屋にぶち込む？　・・・巫山戯るのも大概にしろ！！！」

いきなり夜明に怒鳴られ、シャルルは反射的に身を引いた。夜明は怒りで肩を震わせて周りが見えなくなっていたが、シャルルの表情に戸惑いと怯えが浮かんでいるのを見て、バツが悪そうに怒りを収めながら頭を掻く。

「わ、悪い。お前のこと怒鳴るなんて見当違いもいいとこだな・・・。シャルル、俺はお前がどうしたいのかを聞きたいんだ。父親だか何だか知らねぇが、例え誰であっても人の生き方を強制できる権利なんて無いんだ。だってお前の命、シャルル・デュノアの中にある命はお前だけの物なんだから」

「僕の・・・命？」

「あぁ。人間だろうが動物だろうが植物だろうが、命は何にだって一つだ」

シャルルの肩を掴んで顔を上げさせ、夜明ははっきりと、決然と、シャルルの目を見ながら何の疑いも挟む余地もなく言い切った。

「だからその命はお前だ、お前の親父の物じゃない！！」

「で、でも、僕に選択肢なんてな」

「無いなら作りゃいいさ！　他人の言うことに従って、他人の都合で行動を束縛されるなんて人生楽しい訳無いだろ！」

「そ、そんなこと言ったって・・・」

シャルルの目尻に涙が浮かび始めたのを見て、夜明は謝りながらシャルルの肩から両手を離す。

「二回も済まねぇ。そうだよな、いきなりそんなこと言われたって、選択肢を作るなんて無理だよな・・・なら、ここにいろよ」

「え？」

「何かあったよな・・・ほら、あれ。特記事項二十一、ＩＳ学園に在学してる生徒には外部からの介入は原則として許可されていない」

「・・・夜明って本当に大雑把だね」

「うっせぃ！！　ま、三年時間はあるんだ。少し考えてみてくれ。それでも駄目だったら、俺がお前の居場所になってやるよ」

夜明のこの言葉に、シャルルの瞳が大きく揺れ動いた。そのことを知ってか知らずか、夜明は他者を安心させる優しげな笑顔を浮かべる。

「俺みたいなちっぽけな人間でも背負える物が、誰かの居場所になれるってのは太陽(あいつ)が教えてくれたからな」

だから、と言葉を続ける。

「俺がお前の居場所になってやるよ、シャルル・デュノア」

「・・・・・・・・うぅ・・・」

「ちょ待てぇーっ!!　何で泣く!?　何で泣く!?　何でこのタイミングで泣くの!?」

数秒間、夜明の顔を凝視した後、シャルルは大粒の涙を零して泣き始めた。いきなりシャルルに泣かれ、さっきまでの笑顔は何処へやら。珍しく夜明がオロオロとしてると、

『困ってるようだな、現実の俺』

（この声は俺の中の天使!?）

『この状況、お前だけで対処するには荷が重いだろ。よければ助言するが』

（あぁ、是非に頼む!）

【おっとぉ、そいつはちょっと待ってもらえねぇか】

（この声は俺の中の悪魔!?）

【そいつだけのアドバイスで良いのか？　物事ってのは良きにしろ悪しきにしろ選択肢が多い方がいい】

（言われてみれば確かに・・・）

『取り敢ず、何で泣いてるのかを聞いてみないと』

【天使の言うとおりだ。原因が分からないんじゃ解決の仕様がない】

「（そうだな）・・・あのぉ～、シャルルさん。何で泣いておられるのでしょうか？」

まるで繊細な硝子細工、いや、砂糖細工にでも触れるかのような丁寧さで夜明は訊ねた。声を涙で詰まらせながら、それでもシャルルは途切れ途切れに言う。

「ご、ごめん・・・。今まで、そんなこと言ってくれる人がいなかったから、嬉しくて・・・」

「さいですか・・・（だそうだ。アドバイスプリーズ!）」

第一次脳内会議、開催。

『これは簡単だな。頭を撫でれば万事解決だ』

（確かに、鈴音も大概撫でれば泣き止むからな・・・）

【何を草食系なことを言ってやがる。こう言う時は、「そうか、なら存分に俺の胸の中で泣けばいい」「夜明・・・」抱き合う二人、そしてそのままベットに押し倒】

（失せろ俺の中の悪魔ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！）

【あばじゃあああああああああああああああ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・】

『おぉっ！？　悪魔が手加減無しのスターライト・フルバーストで跡形もなく消し炭に！！』

（はぁ、はぁ、・・・ありがとう、俺の中の天使、早速実行してみる）

『お、おう。成功を祈る』

第一次脳内会議、終了。夜明は天使のアドバイス通り、恐る恐るシャルルの頭に手を伸して撫でる。数秒間も撫で続けていると、シャルルは可愛い笑顔を浮かべて夜明の手を堪能し始めた。取り敢ず泣き止んでくれたことに夜明はホッとする。

「夜明の手って、暖かいね」

「そうか？　何か前にも鈴音に同じようなこと言われたな」

「うん、お母さんの手みたい」

「・・・男としてその喩えられ方は如何なものだろう・・・」

「あは、そうだね」

漸く、シャルルは笑った。屈託のない十五歳の女の子、その物の笑顔を。そのシャルルの優しい雰囲気を纏った笑顔に感化されたのか、夜明も相好を崩してシャルルの頭を撫で続ける。

「やっぱ（女の子は）笑ってる方がいいな。そっちの方が可愛いし」

夜明に可愛いと言われ、ボッとシャルルの顔が真っ赤に染まった。

「そ、そうかな？　僕って可愛いかな？」

「ん？　そりゃ笑ってる方が可愛いに決まってるだろ（全女子共通で）」

「そ、そっか。エヘヘ・・・」

・・・多少、理解の食い違いがある物の、シャルルが自分を見つけるための一歩を踏み出したことだけは確かだろう。

「な、何でこんなことに・・・」

その女子、篠ノ之箒は放課後の廊下を歩きながら、頭を抱えたい気持ちを必死で押さえていた。理由は今朝方から学園中を跋扈してる噂、

『学年別トーナメントで優勝できれば織斑一夏、月光夜明と交際できる』

と言う物だ。

（それは私と一夏だけの話、しかも夜明まで巻き込んでしまってるしぃーっ！！）

うがぁーっ、と頭を掻きむしらないで我慢してる辺り、彼女の精神力の強さが窺える。気が付けば、彼女は夕陽が沈んでいくのが見える屋上に来ていた。

「どうしてこんなことに・・・」

ここに来て漸く箒は頭を抱えた。とにかく、学年別トーナメントで優勝できれば問題ないのだが、もし、仮に優勝できなかったとしたら、一夏が自分以外の女子と付き合うことになる。

「それだけは絶対に避けなければ!!」

叫んでから赤くなる。慌てて周囲を見回し、誰もいないのを確認してホッと息を吐き出す。

「と、とにかく優勝すればいいんだ。そうすれば問題はな」

その時、意識が心の奥底に埋め込んでいた思い出したくない記憶を掘り起こした。

「大丈夫だ・・・、私はあの時とは違う。・・・違う、筈だ・・・」

「悩み事か？　恋する乙女？」

聞き慣れた声が箒の耳に届いた。声が流れてきた方を向くと、フェンスの上に座っている人影が見える。

「・・・太陽？」

箒はその友人の名を呼んだ。太陽は振り返らずに唯、夕陽を見つめ続けている。オレンジの光に照らされ、唯でさえ赤い髪が燃えているようにも見える。

「私は高い所から夕陽を眺めるのが好きでな。良くこうやって見てるんだ」

よっ、と軽い声で太陽はフェンスを蹴り、箒の横にまで跳躍してきた。箒がいるところとフェンスまでの距離は凡そ十メートルある。恐るべき跳躍力だ。

「相談なら、乗るぞ」

その太陽が浮かべる包容力のある笑顔に相談してみる気になったのか、箒はポツポツと話し始めた。

「全国大会の時、自分が振るっていた剣の余りの醜さに自己嫌悪に陥った、か」

太陽に全てを話して聞かせた箒は、フェンスの向こうに見える夕陽を見ながら太陽に訊ねた。

「・・・太陽、強さとは一体何なんだろうな？」

「・・・それは難しい質問だな」

箒と同じように夕陽を見ながら、太陽は組んだ腕を崩さずに思考を続ける。数十秒後、太陽は徐ろに答えた。

「夜明ならこう言うだろうな。『そんなものは十人十色、十人いれば十通りの強さがあるし、千人いれば千通りの強さがある。自分自身で気付き、見つけるしかない』とな」

「ならお前は、夕暮太陽ならどう答える？」

「そうだな・・・こう答えるだろうな」

腕組みを解き、腰に手を当てながら太陽は箒を真っ直ぐに見つめた。

「大切な物を守るために必要不可欠な物だ」

「必要不可欠な物？」

「あぁ」

腰に手を当てたまま、太陽は夕陽が沈んでいく方向を見た。それにつられ、箒も視線を同じ方向に向ける。そこには穏やかな光景が広がっていた。生徒達が他愛ないことで談笑し、教師が明日の予定に悩みながら普段通りの日常を送っている世界。夕陽に照らされたその光景はとても穏やかで、何かが入り込む余地など無い。

「箒、この世界は好きか？」

唐突な太陽の質問。いきなりの質問に箒は戸惑いの声を上げるでもなく、無言で考えた。隣りには友人達がいて、何よりも一夏がいる。

「あぁ、悪くない」

「この世界を護りたいという想いは？」

「胸の中にある」

「それは良かった。・・・でもな、箒。護りたいと願う想いだけで護れるほど、この世界は優しくない」

逆もまた然り、太陽は視線を夕陽から箒に向けた。

「強さだけで護れるほど、この世界は単純ではない」

箒も夕陽から太陽へと視線を変える。

「だからこそ、私達は見誤ってはいけないんだ。強さとは何たるか、想いとは何たるかを。強さ無き想いは唯の戯れ言に成り下がり、想

い無き強さは唯の暴力へと変わり果てる」

トンッ、と軽く箒の胸を拳で叩いた。

「見誤るなよ」

「・・・あぁ」

「お願いです、部屋を変えてください！！」

屋上から降りてきて、食堂に向かっていた太陽と箒の耳に悲鳴じみた声が聞こえてきた。二人で顔を見合わせ、何事かと声の方に行ってみると、同じクラスの一人が山田先生に泣き出さんばかりの表情で頭を下げていた。対応する山田先生は既に涙目だが・・・。

「あの、どうかしたんですか？」

「あぁ、夕暮さん！　丁度良いところに！！」

山田先生に縋り付かれ、太陽は困ったように頭を掻く。ここだけの話、山田先生はかなりの頻度で太陽を頼っていた。それも、プリントを運ぶとか授業の準備を手伝うとかそんなレベルの物ではない。おいおい、それは生徒に見せちゃまずいだろ、的なレベルの物まで太陽に手伝って貰っていた。基本、クールだが誰に対しても甘い太陽は苦言を言うこともなく山田先生の手伝いをしている。それは教師としてどうなんだ？　という突っ込みがどこからか聞こえてくる気がするが、置いておこう。

「はい、実は・・・」

話を要約すると、この生徒はラウラのルームメイトらしく、その空気が余りにも殺伐としてるために部屋替えをお願いしに来たそうだ。

「いきなりそんなことを言われても・・・困っちゃいます」

「そこを何とか！　この通り！！」

困り顔の山田先生と頭を下げ続ける生徒。このままでは永遠に平行線だろう。箒がそう思っていた時、予想外の助け船が出てきた。

「なら、私が部屋を変わってやろう」

「「「え？」」」

三人は目を丸くしながら声の人物、太陽を見た。

夜明、命を語る　太陽、強さを語る（後書き）

次回予告
夜明だ、今回もいつになく駄文だったな。こんな作品だが皆、見捨てないでくれると嬉しいぜ。さて、次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『太陽、ラウラと同棲する』

『ラウラ、代表候補生二人を相手取る』

『太陽、実力の片鱗を見せつける』

の三本です。次回も見てくださいね。ジャン、ケン、ポン！

『パー』
じゃぁな～

この作品のＯＰみたいな物

何か消さないと豪い目に会うらしいので、ＯＰを消します。

取りあえず、二百文字分書かないといけないので、何か書いておきます。お題は動物化した夜明ラバーズ。

「ガォー！　（サーベルタイガーの太陽！）」

「キューン！　（狸のセシリア！）」

「ニャー！　（ネコの鈴音！）」

「ワンワン！　（柴犬のシャルロット！）」

「……！　（ウサギのラウラ！）」

「コーン！　（狐の楯無）」

「「「「「「ガォー！　キューン！　ニャー！　ワンワン！　……！　コーン！」」」」」」

（六人揃って獣戦隊ニャンジャコリャー！）

本当に何これ？

この作品のＯＰみたいな物（後書き）

好評だったらＥＤも作る・・・かも？

実力の片鱗（前書き）

今日中にもう一話アップします

実力の片鱗

「今日からここで暮らすことになった夕暮太陽だ、よろしく」

そう言って軽く会釈した太陽を、ルームメイト、ラウラ・ボーデヴィッヒは冷ややかな目で見つめ、それから興味なさそうに視線を自身のＩＳデータを映したパソコンの画面に移した。

「愛想ゼロ、だな。まぁ、それもいいだろう」

やれやれと首を振り、太陽は肩からぶら下げていたバックをベットに放り投げ、自分もベットにダイブする。何かラウラに話しかけようとも考えたが、話しかけたところで真っ当な返事は期待できそうに無いので、そのまま眠ることにした。

「・・・おい」

ラウラと逆の方向、つまり壁の方に身体を向けて寝ようとすると、酷く無機質な声が聞こえてきた。少し驚きながら振り向くと、相変わらず冷めた目で自分のことを見てくるラウラの姿がある。

「貴様はあの有象無象共とは少し違うみたいだな。興味が湧いた、名乗れ」

ラウラの上から目線の言葉に太陽は怒るを通り越して呆れてしまう。

「名乗れって・・・さっき言っただろうが」

「聞いていなかった。だから名乗れ」

「聞いてないお前が悪い」

名乗る気がないことを示すように太陽は再び身体を横たえ、ラウラと逆の方を向いた。一瞬、ラウラの口元が引きつったが、すぐに太陽から興味が失せたようで、また視線をパソコンの画面に戻す。

「一つだけ言っておく。私の邪魔だけはするな」

「お前がこっちの距離に入ってこなければ、こっちもお前の邪魔はしないよ」

これから同じ部屋で暮らしていく二人。この二人の間から発せられるギスギス感から考えるに、その生活は恐ろしく殺伐とした物になるだろう・・・。

「「「・・・」」」

一夏、セシリア、鈴音は目の前の光景に唖然としていた。

「ほらどうした？　ドイツの第三世代型ＩＳは生身の人間に遅れをとるようなガラクタなのか？　それとも、扱っている人間がガラクタなのか・・・」

「黙れ！！」

左腕に長大なＩＳ専用近接ブレード、右腕に大口径のショットガンを装備した太陽が、ＩＳを展開したラウラと対等に渡り合っている。こうなった経緯は十数分前に遡る・・・。

鈴音、セシリア、放課後の第三アリーナで偶然鉢合わせ。学年別トーナメント優勝に向けての特訓らしい。

←

どちらが上か下か白黒つけるために戦闘開始・・・しようとした時、ラウラが乱入。二対一の闘いに発展する。

←

ラウラの強さに二人が苦戦してると一夏が乱入。三対一になるがそれでも状況は変わらず。

「やはり敵ではないか。私とこのシュヴァルツェア・レーゲンの前では貴様も有象無象の一つでしかない・・・失せろ」

肩に装備された大型カノンの銃口が一夏に向けられたその時、

「っ！！」

いち早く異変に気付いたラウラは後ろに飛び退いた。間髪入れずにさっきまでラウラがいた場所に百七十センチはあるＩＳ専用近接ブレードが空気を切り裂いて突き刺さる。

「お前等、練習熱心なのは結構なことだが・・・少しばかりやりすぎなんじゃないのか？」

近接ブレードの投擲者、太陽はやれやれと言う風に首を振りながら歩み寄ってきた。その右手には大口径のショットガンが握られている。

「「「太陽【さん】！？」」」

「・・・夕暮、貴様どういうつもりだ？」

「どこぞの馬鹿共がＩＳ訓練に白熱しすぎているとクラスメイトが教えてくれてな。織斑教諭が来るまでの時間を稼ぎに来た訳、だ」

喋りながらも太陽は歩みを止めず一夏達の前で止まると、鍔までステージ深くに刺さった近接ブレードの柄を左手で掴み、易々と引き抜いた。

「大丈夫か？」

近接ブレードを肩に担ぎながら、太陽は一夏達の方を見ずに訊ねた。
一夏達に向けられていない双眸はラウラを鋭く睨んでいる。

「時間稼ぎ・・・だと？　まさか貴様、ＩＳを装備してもいないのにこの私に挑むというのか？」

「ＩＳを装備していなくても、時間稼ぎくらいなら出来るさ」

「・・・ここまで舐められたのは生まれて初めてだな・・・。いいだろう、先ずは貴様からだ！」

ラウラは体勢を低くし、一気に瞬間加速（イグニッション・ブースト）で太陽に突っ込んでプラズマ刃を振り下ろした。一夏達が声を上げる間もなく、ステージに爆風が広がる。

「・・・どういう仕掛けだ？」

「仕掛けなんて無いさ。強いて言うなら・・・努力の賜だ」

爆風で舞い上がった砂塵が薄れると、そこでは太陽がラウラのプラズマ刃を近接ブレードで受け止めていた。瞬間加速（イグニッション・ブースト）の衝撃も、プラズマ刃が振り下ろされた威力も全て左腕一本で受け止めている。呆然としているラウラに、太陽は少しだけ意地の悪い笑顔を浮かべて見せた。

「闘うためだけにこの世に生を受けたのは何もお前だけではないぞ、遺伝子強化素体（アドヴァンスド）」

「！！　何故その事を貴様が知っている！」

驚愕に目を見開くラウラの両腕を弾き上げ、右腕に握ったショットガンの銃口を腹部に向けながら、太陽は吼える。

「答える義理は無いな！」

一回の銃声で放たれた六発分の散弾がラウラを吹き飛ばす。空中に放り出されたラウラは急いで機体を制御し、太陽を見下ろした。太陽はその視線に物怖じせず、軽く両腕を広げてみせる。

「さぁ、遊ぼうか。Ｅｉｎ　ｓｃｈｗａｒｚｅｓ　Ｋａｎｉｎｃｈｅｎ【黒ウサギちゃん】」

そして冒頭に戻ると言うわけだ。

「その程度の腕で夜明と一夏の存在を認めない？　寝言は寝て言え！！」

四方八方から迫ってくるワイヤーブレードを近接ブレードで叩き落とし、或いはショットガンで撃ち落としながら、太陽はラウラを圧倒していく。

「くっ・・・」

ラウラは表情を歪めながら太陽の猛攻をどうにか捌いていた。普段通り冷静になっているなら数分も経たずに太陽を止められるだろう。だが、今のラウラは生身で自分に挑んできた太陽への怒りと戸惑いで、冷静とは無縁の世界にいた。複数のＩＳとの戦闘を想定して闘ったことはある。一対一の闘いは言わずもがな。であるが、こちらがＩＳを装備しているのに対し、敵が生身の戦闘など一度としてし

たことが無く、生身であるにも拘わらず挑んでくる太陽の姿が何よりもラウラを怯ませていた。不意に、太陽の攻撃がピタリと止んだ。

「前座は終わったな」

「？　何を言って！？」

太陽がラウラの目の前から飛び退いた瞬間、誰かがラウラの後頭部を掴んで強引に上へと放り投げる。

「よう」

宙に投げ飛ばしたラウラに連結させたウィングスターの照準を合わせ、夜明は引き金を引いた。ラウラは空中で逆立ちをするような不安定な体勢でビームをかわし、瞬間加速（イグニッション・ブースト）でウィングスターの射線上から逃れ、危なっかしく着地しながら夜明を睨む。

「夜明一人じゃ無いよ！」

シャルルの声が聞こえ、同時に二挺のアサルトライフルから弾雨がばら撒かれた。ラウラは後方に下がって銃弾を避ける。シャルルはラウラを追わず、夜明の隣りに着地した。

「太陽、時間稼ぎご苦労さん」

「そう思ってるなら頭を撫でろ」

「ほいほい」

突き出された太陽の頭をＩＳ装甲を解除させた手で撫で、夜明はラ

ウラの方を向く。その目には静かだが、確かな怒りがあった。

「さて、俺の仲間に手ぇ出したんだ・・・。覚悟は出来てんよなぁ、ラウラ・ボーデヴィッヒ！！」

怒気が混ざった夜明の叫び。空気がビリビリと震え、直接怒りを向けられていないシャルル達も背筋に鳥肌が立つのを感じた。

「・・・いいだろう。その翼、ここで撃ち墜とす」

夜明の怒気に一瞬だけ怯んだが、ラウラは唇を歪めて笑い、背後にワイヤーブレードを広げる。

「シャルル。俺があの馬鹿の相手をするから、お前は流れ弾とかの対処を頼む」

「了解。・・・夜明」

「ん、どうした？」

振り向くと、シャルルが何やら頬を染めながら、上目遣いで自分のことを見ていた。

「あの・・・絶対に負けないでね」

そのシャルルからのお願いに、夜明はニッ、と笑いながらシャルルの頭に手を置いた。

「負けねぇよ、絶対にな」

一、二回シャルルの頭を撫で、夜明は腰からスターライザーを引き抜いてラウラを見据える。ラウラも既に両袖からプラズマ刃を展開して準備を整えていた。

「行くぜ」

「来い！！！」

ラウラの叫びに呼応して、全てのワイヤーブレードが夜明に襲いかかった。夜明はワイヤーブレードを全てスターライザーで弾き返し、瞬間加速（イグニッション・ブースト）でラウラに突っ込む。振り下ろされたスターライザーをプラズマ刃で受け止め、ラウラは肩の大型カノンを射撃態勢に移行させた。

「遅い！」

夜明はラウラの胸に蹴りをぶち込み、胸部からスティンガーを放ちながら距離を取った。ラウラは悪態を吐きながらプラズマ刃で小口径の弾丸を薙ぎ、今度こそ大型カノンを放った。夜明はそれをスタードライブから放った荷電粒子砲で相殺する。夜明は再び瞬間加速（イグニッション・ブースト）でラウラに突撃し、スターライザーを構えた。

「馬鹿の一つ覚えが！！」

ワイヤーブレードを全て射出し、夜明に襲いかからせた。小刻みな軌道を描きながらワイヤーブレードは夜明の全方位から襲いかかる。

「残念、一つ覚えじゃないんだな」

不意に夜明の姿が消えた。超高速で横に移動してワイヤーブレードの軌道上からずれ、更に超高速でラウラの背後に回り込む。つまり、

「なっ、三連続の瞬間加速（イグニッション・ブースト）だと！？」

「ついでに言っとくが、俺の瞬間加速（イグニッション・ブースト）連続使用可能回数は五連続だ」

言い切る前にワイヤーブレードのワイヤー部分を斬り、ディバイン・カノンをラウラの背中に連射する。

「ぐっ！？　オォォ！！！」

ディバイン・カノンの直撃を受けながらもラウラは裏拳の要領でプラズマ刃を振るった。その一撃をサマーソルトキックで打ち上げ、夜明はそのままラウラの上に移動。ウィングスターを引き抜いて両袖を撃ち抜く。夜明の腹部に光が収束し始め、数秒と経たぬ内にスターライト・ブレイザーの発射態勢が整った。

「Ａｕｆ　Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈｅｎ　（さようなら）・・・！」

真上から超高密度のプラズマを放とうとした瞬間、何か見えない手のような力が夜明を拘束する。その力に気を取られ、一瞬スターライト・ブレイザーの発射が遅れた。ラウラはその一瞬を逃さずに瞬間加速（イグニッション・ブースト）で夜明の下から脱出、スターライト・ブレイザーの直撃を避ける。放たれたプラズマの柱はステージを穿ち、巨大なクレーターを作った。

「・・・驚いたな。そいつが慣性停止能力（ＡＩＣ）って奴か？凄いな」

クレーターの中心に降り立ち、夜明は感心したように頷く。ラウラは荒い息を吐きながら夜明の言葉に応えず、ただただ、夜明を睨み

ながら拳を握り締めた。

（何だ、・・・何なんだあの男の強さは!?）

夜明の強さ。圧倒的な力量の差にラウラは震えた。それは恐怖からか？　いや、怒りからだ。

（こんな男に・・・こんな男に私は負けるのか!?）

教官、千冬が唯一自分よりも強いと言いきった男。それが目の前の男、月光夜明だ。

（認めてたまるか、認めてたまるか・・・教官よりも強い人など存在しない・・・存在してはいけないんだ!!）

どす黒い怒りで満ちたラウラの胸中に、微かな声が響いた。

【ねが・・・が？　な・・・みず・・・んかく・・・のぞ・・・より・・・いちか・・・るか？】

ラウラの胸中を謎の声が満たし始めたその時、

「そこまでだ!!」

鋭い声が飛んできた。全員が声の方向を向くと、そこには千冬が立っていた。千冬はアリーナ中に視線を走らせ、その惨状（主に夜明と太陽の所為）にため息を吐く。

「まったく、お前等・・・。学年別トーナメントの練習に熱心なのはいいことだが、流石にアリーナを破壊されるのは黙認しかねる。

今後一切、学年別トーナメントまでの間、私闘を禁ずる、相違ないな？」

「構わないっす」

「異論は無い」

「僕もそれで構いません」

夜明と太陽、シャルルが返事をしたのを確認し、千冬はラウラの方を見た。

「ボーデヴィッヒ、お前もそれでいいな？」

「は・・・はい」

「それでは解散！」

銃声のように響いた千冬が手を叩いた音で、その場は一応収まった。

実力の片鱗（後書き）

今回の次回予告は休み、です。

「で、身体の方は大丈夫なのかお前等？」

ここは保健室。一時間前に暴れる二人を小脇に抱え、夜明はセシリアと鈴音を運んできた。ベットの上には身体に包帯を巻いたセシリアと鈴音、ベットの脇では夜明、太陽、一夏、シャルルが苦笑いを浮かべている。

「別に助けてくれ何て頼んだ覚え無いのに・・・」

「あのまま続けてれば私達が勝ってましたわ」

「はっ、あれだけ圧倒されてたくせに・・・、どの口がほざけるんだ？」

太陽に鼻で笑われ、二人は怪我をしていることも忘れて身を乗り出した。

「太陽、あんたね・・・アタタタ・・・」

「言って良いことと言っちゃいけないことが・・・つうぅ・・・」

「・・・言わんこっちゃない」

ため息を吐きながら太陽は二人を無理矢理横にさせた。その様はまるで駄々を捏ねる子供を寝かしつける親のようにも見え、夜明達は必死で笑いを堪えている。

「そ、それにしても夕暮さんって強いんだね」

「あぁ。まさか千冬姉以外の人で、生身でＩＳと闘える人がいるなんて思わなかったぜ」

さっき、アリーナで、生身でありながらラウラを圧倒していた太陽の姿を思い返し、二人は改めて目の前の赤髪の少女を見た。整いすぎて浮世離れした顔立ち、千冬並みのボディライン、対野郎としてはある意味最強だろう。

「ま、強くなくてはあそこでは生きていけなかったからな・・・」

口元に苦笑いを浮かべながら、太陽は少しだけ遠い目で保健室の天井を仰いだ。その妙に哀愁を漂わせる姿に、一夏は恐る恐る夜明に訊ねる。

「・・・なぁ、夜明。もしかして俺とシャルル・・・地雷踏んだ？」

「いや。少なくともあいつは過去を振り切ってるから大丈夫だろ」

夜明がいつもの表情で答えたその時、

ドドドドドドドドドドドドドドドドド・・・・・・・・・・・・！！！！！！

「な、何だ、地震か！？」

そのアフリカ象が大群で押し寄せてきたかのような地鳴りは保健室の前で止まり、その地鳴りの原因であろう大量の一年女子がドアをぶち破って（比喩表現にあらず）保健室に雪崩れ込んでくる。

「月光君！！」

「織斑君！！」

「デュノア君！！」

声と共に突き出される無数の腕、腕、腕、腕・・・。

「軽いホラーかこいつは！？」

軽く悲鳴を上げながら夜明は一夏とシャルルを小脇に抱えながら跳躍し、セシリアと鈴音が横たわっているベットの上に飛び乗ってその腕群から逃れた。

「まぁまぁ、一回落ち着けお前等」

パンパンと手を叩きながら太陽が女子達の前に立ちはだかり、全員を落ち着かせた。この時、夜明達の目に太陽は女神のように見えたとか何とか・・・、話を戻そう。

「で、そんな雁首揃えてどうしたんだ？」

「これ！！」

バンッ！！　と効果音がつきそうな勢いで女子が突きだしたのは学内緊急告知文だった。太陽はそれを受け取り、一通り文面に目を走らせて納得しながら紙を夜明達に渡す。

「あぁ～、何々・・・。今月開催される学年別トーナメントはより

実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする・・・なるへそ」

早い話、彼女たちは学園で三人しかいない男を誰よりも速く確保しに来た女子達らしい。

「月光君！」

「織斑君！」

「デュノア君！」

「「「私と組もう！！！」」」

引く手数多とはこのことだろうか。正直言って全く嬉しくない。三人は顔を見合わせた。特に夜明とシャルルの表情はよろしくない。シャルルは一瞬だけ夜明に助けを求めるような視線を送るが、すぐにその視線を逸らした。その遠慮深さに夜明は苦笑し、シャルルの肩に腕を回してはっきりと女子達に言った。

「悪ぃ、俺はもうシャルルと組むって約束しちまったんだ。他当たってくれ」

「え、そうなのか？」

驚く一夏。その驚く暇さえ命取りとなりかねる。

「なら織斑君、私と組もう！」

「いや、私と！」

「いえいえ、私と！」

「いやいやいや、おいどんと！」

「おい、最後の一つはおかしいだろ！　てかそんな目をギラつかせながら近づかないでくれ、怖い！！」

一夏は必死で後ずさるが、それくらいでこの女子の生け垣から逃げられるわけもなく・・・

「あぁーっ！！！」

哀れ・・・。夜明とシャルルはしめやかに合掌した。その時、奇跡か幸運か。保健室の前を、キョロキョロと誰かを捜すように箒が歩いてるのが見える。箒の姿を認めた一夏は死に物狂いで保健室から飛びだし、箒の手を掴んだ。

「箒！！」

「い、一夏か！？　いきなりどうし、いや、今はそんなことどうでもいい。い、一夏。もしまだパートナーがいないのなら、わた「俺とペアになってくれ！！」・・・へ？」

自分が言いたいことを先に言われ、箒は寸の間唖然とする。一夏は捕まえた箒の手を両手で握り、最近よく下げるようになった頭を下げる。

「頼む！　俺は・・・お前じゃなきゃ駄目なんだ！！　（色々と精神的な意味で）」

ズギューンッ！！　と箒は何か・・・もとい心をその一夏の言葉で撃ち抜かれ、一気に顔を真っ赤にさせた。

「そそそそ、そうか。私じゃないと駄目なのかお前は・・・。ははは、そうかそうか・・・良いだろう、ペアになってやる」

「ありがとう箒、恩に着る！」

「あぁ、ではまた後でなぁ～」

夢見心地という表現がピッタリな足取りで、箒は自室へと帰っていった。目の前で一気に男子三人がペアを組み、テンションが急激に下がったのか、女子達は一人、また一人と保健室を後にしていく。

（助かった・・・）

夜明がホッと息を吐くと、

「夜明！」

「夜明さん！」

ベットから勢いよくセシリアと鈴音が飛び出してきて、夜明の胸ぐらを掴みかねない、てか実際掴みながらガクガクと揺さぶる。

「私と組みなさいよ、幼馴染みでしょ！」

「いいえ、ここはクラスメイトの私と！」

「やかましい！！」

ガクガクと揺さぶられ、何も喋れない夜明の心を代弁するかのように太陽が二人の頭を掴み、勢いよくぶつけてベットに放り投げた。二人がぐったりと気絶しているのを見て、ため息を吐きながら夜明に目を向ける。

「まったく、怪我人は怪我人らしく大人しくしてろ・・・夜明」

「悪いな、太陽。もう決めたんだ」

心の底から申し訳なさそうに、でもはっきりとした決意を持った目で夜明は太陽の視線を受け止めた。数秒の沈黙の後、真っ直ぐに夜明を見据えていた太陽の視線が柔らかい物になった。

「分かってるさ。事情は大体飲み込めた。お前はお前の道を行けばいい」

夜明の肩をポン、と軽く叩き、保健室から出ていく。

「私は精々、この名に恥じぬよう、お前の道を照らすだけさ」

歩き去っていく太陽の背を見送りながら、夜明はポツリと一言。

「本当にあいつは並みの男なんかよりも男らしいな・・・」

「あ、あのさ、夜明」

「ん、どしたい？」

シャワー後、最早恒例行事となった髪の手入れ（シャルルが夜明に）をしながら、徐ろにシャルルが口を開いた。心なし勢いのある口調に、夜明は少しばかり驚く。

「少し遅くなっちゃったけど、あの、助けてくれてありがとう」

「助けて？　・・・・・・・俺なんかしたっけか？」

「ほら、保健室でさ。トーナメントのペアになるって言ってくれた

の、凄く嬉しかったよ」

その事か、と夜明は気にするなと言う風に片手を軽く振った。

「別に礼を言うようなこっちゃねぇよ。困ってる奴を助けるのは当たり前だからな」

「そんなことないよ。その当たり前のことが当たり前に出来るって凄く大変なことなんだよ。それが出来る夜明って凄いよ。本当にありがとう」

「・・・そこまでストレートに言われると照れるなぁ・・・」

普段、余り褒められないような行い（主に悪戯）を繰り返しまくってる所為で、他人から感謝の言葉を聞き慣れてない夜明は少しだけ頬を赤くして頭を掻く。

「ま、そんな気にすること無いって！　シャルルみたいに可愛い女の子を助けられるんなら、俺ぁ喜んで火の中水の中土の中森の中何処にでも飛び込むぜ」

「か、可愛い・・・／／／」

ボッ、とシャルルの顔が音を立てて赤くなる。落ち着き無く視線を室内に彷徨わせ、上目遣いに夜明の目を覗き込んだ。

「ほ、本当に？　僕って可愛い？　嘘言ってない？」

「んな嘘つくほど俺も暇じゃ無いって。それに、そんな嘘をつくようなゲス野郎に成り下がった覚えも無いからな。それじゃ、さっさ

と寝ちまおうぜ。明日からは二人の連携を考えなきゃいけないんだから」

「うん、そうだね。それじゃ夜明、おやすみ」

「おう、お休みシャルル」

「・・・すぅ～・・・すぅ～・・・」

穏やかに寝息を立てている夜明の寝顔を、誰かが覗き込んでいた。
不審者か？　侵入者か？　違う、シャルルだ。

「・・・夜明って不思議だよね」

額にかかった流れるような銀髪を髪で梳きながら、シャルルは呟く。
額に触れた指から伝わってくる夜明の程良く高い体温で、鼓動が速くなっていくのが分かった。

『俺がお前の居場所になってやるよ』

そんなこと、初めて言ってもらえた。母が死んでから、無為に、意味もなく生きてきた自分、シャルル・デュノア。必要とされず、何の暖かさもない灰色の生活に慣れてしまった自分。もう、何かに心を動かされること何て無いと思っていた。なのに、

（何で、君はこんなにも僕の心を揺り動かすんだろうね、夜明）

出会った。この少年に、月光夜明と言う存在に。

風のように飄々としていて、雲のように掴み所がない。雷を纏った嵐のように怒ったかと思えば、野原を撫でる風のように穏やかに側にいてくれる。だけど、こちらから近づけば秋に吹く涼しい風のように連れなく離れていき、気がつけば春の暖かな陽気を纏った風のように包み込んでくれる。

「・・・君はずるいよ、夜明」

口ではそんなことを言いながらも、シャルルはとても優しげな表情を浮かべていた。こうして夜明を撫でているだけで、母がいてくれた時、いや、その時よりも暖かな感情が胸の中に溢れてくる。

「おやすみ、夜明・・・」

胸の中に溢れた暖かな感情を一緒に感じて欲しいように、シャルルはそっと夜明の額に口付けを落とした。

月光夜明という存在（後書き）

次回予告

一夏だ。今回は俺がやるらしいんだが、まぁ夜明と太陽に負けない程度に頑張るか・・・頑張るって何をさ？

さて、次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『始まる学年別トーナメント』

『同じペアになったラウラと太陽』

『夜明とシャルル、一夏と箒の闘い』

の三本だ。それじゃ次回も見てくれよ。ジャン、ケン、ポン！

『チョキ』

次回も見てくれよ～

学年別トーナメント、開幕

「うっへぇ～、凄いの一言に尽きるなこりゃ」

更衣室にあるモニターに映った観客席の様子を見ていた夜明は呆れたように呟いた。観客席には各国政府関係者、研究医委員、企業エージェント、等々重鎮のすし詰め状態である。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認、僕たち一年はまだそこまで深くは関わらないだろうけど、上位の人達には早速チェックが入るだろうね」

「ふ～ん・・・ま、お偉いさんなんざどうでもいいか」

心底どうでもよさそうな夜明をシャルルは苦笑いしながら見ていた。

「そんなこと言っちゃ駄目だよ。まぁ、僕たちには無縁の話だけどさ」

けっ、と鼻を鳴らし、夜明が再びモニターに視線を向けると、さっきまで観客席の様子を移していたモニターの画面はトーナメント表へと変わっていた。夜明は自分とシャルルの名を探そうとトーナメント表に目を走らせる。

「月光とデュノア・・・あったあった。Aブロック一回戦二組目か、相手は・・・おいおい、マジかよ」

「どうしたの、夜明・・・あ」

二人して間の抜けた声を出しても、対戦相手は変わらない。

二人の一回戦の相手は一夏と箒のペア、そして、Aブロック一回戦一組目の選手は太陽とラウラだった。

「「・・・・・・・・・・」」

余りにも殺伐とした空気。二人が放っているその物理的重量を感じさせる空気から逃れるためか、更衣室には太陽とラウラしかいない。

夜明とペアになれなかったので、別にこれと言って組みたい相手もいなかった太陽は抽選でペアを決めることにした。そして決まった相手が・・・。

「・・・・・・」

静かな殺気を込めた目で太陽を見ているラウラであった。

（この黒ウサギは相手にではなく、私に襲いかかってくるんじゃないだろうな・・・）

本気でそんな考えが脳内を走り、太陽はため息を吐かずにはいられない。軽く頭を振って無駄な思考を頭から追い出し、バルディッシュトワイライトの待機状態である紅い太陽を模したネックレスを握り締めた。まだ一次移行（ファースト・シフト）さえ終わっていないが、初期設定だけの武装で相手に勝つ自信が太陽にはある。

「おい」

いきなり声をかけられ、少しばかり驚きながらラウラを見た。

「先に言っておくぞ。月光夜明は私が墜とす」

「・・・その心意気は大変結構だがな、その前に一回戦を勝たないと夜明を墜とすどころか、闘うことすら出来ないぞ」

「・・・ちっ、分かってる」

僅かに苦い表情を作り、ラウラは立ち上がった。

「行くぞ・・・足を引っ張るなよ」

「互いにな」

二人が肩を並べて更衣室を出ていったその時、選手の呼び出しを告げるブザーが鳴り響いた。

「さて、相手は打鉄とラファール・リヴァイヴか」

太陽は対峙する対戦相手の二人を見据えながら呟く。片方は防御面に重点を置いた近接型ＩＳ、打鉄。片方は多数の装備でどんな局面にも対応できるラファール・リヴァイヴ。どっちも学園に訓練機として置かれてるため、ほとんどの生徒はこの二機を使うことになっている。

「こんな下らない闘い、さっさと終わらせるぞ」

ラウラは瞬間加速（イグニッション・ブースト）の為に身体を僅かに屈め、試合開始を待った。五、四、三、二、一。試合開始。

「失せろ・・・？」

瞬間加速（イグニッション・ブースト）で突っ込もうとした瞬間、ヒョイッと太陽がラウラの首根っこを掴んで持ち上げ、後ろへと投げ飛ばした。一瞬、何をされたのか理解できずに無表情のまま唖然としていたが、目の前に地面が迫ってきているのを視認し、ラウラは慌てて態勢を整えて着地する。

「・・・夕暮、どういうつもりだ」

ラウラの若干の殺意が籠もった視線を背中に受け、それでも太陽は振り向かずに相手を見据えながら腰に差している、初期装備の二本の大型ビームサーベルを抜き放った。

「一番楽しみにしていた夜明との闘いをお前に譲ってやるんだ、これくらいの我が儘言わせろ」

ゆっくりと両腕を持ち上げ、頭上まで上げたところで一気に振り下ろし、ビーム刃を展開させる。

「夕暮太陽、バルディッシュトワイライト。目標を駆逐する」

強く床を蹴ると同時に瞬間加速（イグニッション・ブースト）で爆発的に加速し、まずは打鉄に向かっていった。

「は、早い！？」

打鉄は慌てて近接ブレードで太陽の突進を防ごうとするが、サマーソルトキックで容易く近接ブレードを弾き飛ばされてしまう。

「ここは、私の距離だ！！」

超高速の斬撃で打鉄の装甲のみを全て切り裂き、ＩＳスーツのみとなった打鉄装備者を回し蹴りで蹴り飛ばした。そのまま回転してリヴァイヴの方を向き、さっきと同じように瞬間加速（イグニッション・ブースト）で吶喊する。

「くっ！」

リヴァイヴは思いだしたかのように慌てて二挺のアサルトライフルを乱射するが、太陽は身体と装甲を掠める弾丸を無視して連続の瞬間加速（イグニッション・ブースト）でリヴァイブの横を通り過ぎた。その際に右のビームサーベルを振ってアサルトライフルを切り捨てる。更にリヴァイヴの真後ろで急速反転、再び瞬間加速（イグニッション・ブースト）でリヴァイヴの横を通り過ぎ、今度は回し蹴りでアサルトライフルを破壊した。その回し蹴りの際の回転を利用してリヴァイヴの頭を掴み、床に叩きつける。

「それじゃ、さようなら」

太陽は相手を押さえつけていない方の手でビームサーベルを突き立て、相手のシールドエネルギーを全て削り取った。こうして、開始

十秒と掛からずに一回戦は呆気なく終了となる。

「す、凄い・・・」

シャルルは思わずと言った感じで呟いた。それはモニターで太陽の闘いを見ていた者達共通の感想だろう。太陽は文字通り、ものの数秒と掛からずに相手を倒したのだ。反撃も、回避も許さずに。

「あいつは近接格闘が異常なまでに強かったからな。相手は運が悪

かったな」

うんうんと頷いていた夜明だが、すぐに表情を引き締め更衣室から出ていった。夜明が出ていったことにシャルルはすぐに気付き、その後を追う。

「さて、次は俺たちの番だ。準備は良いか、シャルル？」

「うん。勝とう、夜明！」

「あぁ！」

二人は拳をぶつけ合って、アリーナへと赴いた。

「「・・・」」

夜明と一夏は無言で互いを見合っていた。言葉は要らない。拳で、剣で語り合うのみ。シャルルと箒も二人の間に水を差すなど、無粋な真似はしなかった。試合開始のブザーが鳴り響く。それと同時に夜明と一夏は飛翔し、シャルルは二挺のアサルトライフルを展開して箒に向けて弾丸をばら撒いた。さっきの試合の敗者と同様に打鉄を装備した箒は近接ブレードで弾丸を弾き、或いはシールドで防ぎながらシャルルに接近して近接ブレードを振るう。

「私の相手はお前、か！」

「うん、一夏の相手は夜明に任せることにしたん、だ！」

盾で近接ブレードを防ぎながらシャルルはアサルトライフルからショットガンに武装を変え、後ろに下がりながら引き金を引く。箒は上方に跳び上がって散弾をかわし、スラスターを噴かしながらシャルルに切り掛かった。暫くの間、こんな感じで押したり引いたりの攻防が続き、箒は一気に勝負をかけようと近接ブレードを大上段に振り上げ、加速してシャルルに突っ込む。

「これで終わりにする！！」

その強烈且つ鋭い一撃を、シャルルはどうにか盾で防いだ。が、近接ブレードは盾に食い込み、箒はそのまま盾諸共シャルルを斬ろう

と近接ブレードを引こうとした、刹那。

「っ！？」

盾の装甲が吹き飛び、近接ブレードを跳ね上げた。シャルルは何が起こったか分からずに呆然としている箒の手首を掴み、盾の中から現れたその武装を押しつけた。威力だけなら第二世代型最強を謳われた六十九口径パイルバンカー、灰色の鱗殻【グレー・スケール】。通称盾殺し【シールド・ピアース】。

「この距離なら・・・外さない！」

箒に反撃する隙を与えずに、第一撃目を腹部に叩き込む。衝撃が箒の身体を撃ち抜き、続けざまに次弾が放たれる。一撃、一撃、一撃。計三発の衝撃が撃ち込まれ、装甲に紫電が走って箒のＩＳは強制解除された。

「一夏、後はたの・・・む」

前向きに倒れそうになる箒の身体を慌てて受け止め、シャルルは取り敢ず自分の闘いが終わったことに安堵のため息を吐く。

「ふぅ・・・。こっちはやったよ、夜明」

そう言いながら上を向くシャルル。そして、その目には想像を絶する闘いが映し出された。

「うわぁ～、織斑君ってあんなに強くなったんですね」

教師のみ立ち入り可能の観察室で、夜明と一夏の闘いを見ていた山田先生は思わずと言った感じでそう呟いた。その横で同じようにモニターの戦闘映像を見ていた千冬は鼻を鳴らす。

「ふん。あいつは放課後、毎日あんな化け物と闘っているんだ。強くならない方がおかしい」

その口調はぶっきらぼうだが、どこか嬉しそうな色を含んでいる。

やっぱり弟想いだなぁ～っと、山田先生は思ったが、言ったら最後、何をされるか分かった物ではないので、モニターへと視線を戻した。

モニターの中では白と白の影が超高速で火花を散らしながらぶつかり合って、超高速で離れてを繰り返している。影と影がぶつかり合う度にアリーナに降り注ぐ白い火花が、その闘いをより幻想的なものとしていた。その火花が降り注ぐ中、再び超高速でぶつかり合った影と影が鍔迫り合いを始める。

「オッラァ！！」

夜明はスターライザーを振り抜いて一夏を吹き飛ばし、自身は後方に下がりながらスターライザーをウィングスターに持ち替え、片腕を一振りした。

「行け、ファング！！」

背中の推進翼（スラスター）からフィン・ファングを二基射出して一夏を追わせ、ウィングスターを連射する。一夏は小刻みに動き回りながらフィン・ファングとウィングスターの射撃を避け、零落白夜を発動させながら夜明へと突っ込んでいった。

「突撃だけじゃ、俺には勝てないぞ！！」

フィン・ファングを呼び戻し、更にシューティング・ビット六基を周囲に展開しながらウィングスターを連結。計九個の砲門からビームを放つ。一夏は雪片を身体の前で構え、九つのビームを防いだ。

「残念ながら、突撃しか知らなくてな！！」

雪片を振り下ろしてビームを霧散させ、そのまま夜明へと突っ込んでいく。夜明は後ろに下がりながらスターライト・ブレイザーのロックを外してエネルギー供給を開始した。が、何を思ったのか発射準備が完了した瞬間にエネルギー供給を一旦止め、ウィングスターをスターライザーに持ち替えて一夏に全速力で突っ込んでいく。

「一夏ぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

「夜明ぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！」

夜明が振り下ろしたスターライザーが一夏の両肩に、一夏が振り抜いた雪片が夜明の腹に食い込んで、互いのシールドエネルギーを削っていった。スペックから考えるに、防御力が極端に低いレイジングウィングが先にシールドエネルギーが尽きると考えられるが、よくよく見ると、夜明は腹部からスターライト・ブレイザーを放つことで雪片を防いでいる。

「「オォォォォ・・・・・・・・ラァッ！！！！」」

数秒間の拮抗の後、二人はそれぞれの武器を一気に振り抜いた。振り抜いた勢いで少しだけ互いに距離が開き、二人は武器を握ったままその時を待つ。

『レイジングウィング、シールドエネルギー残量、０』

『ラファール・リヴァイヴ・カスタム?、シールドエネルギー残量、１０４』

『白式、シールドエネルギー残量、０』

『打鉄、シールドエネルギー残量、０』

こうして、次にラウラ、太陽ペアと闘うのは夜明、シャルルペアと言うことになった。

学年別トーナメント、開幕（後書き）

次回予告。
箒だ。今回負けてしまったのは悔しいが、この敗北を糧として私と一夏は更に精進しよう。さて、次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『シャルル、弾丸の雨を降らせる』

『太陽、斬撃の嵐を放つ』

『不屈の翼、黒い雨を穿つ』
の三本だ。次回も見てくれ。ジャン、ケン、ポン！

『パー』
では次回！

「あ～あっ、負けちまったか」

「ふっ、だな」

試合に負けた一夏と箒はそれぞれの口から悔しさを零した。だが、その表情には後腐れやそう言ったものは一切無い。全力を出しきった上での敗北なのだから、二人に悔いはなかった。

「負けちまったか、って・・・お前は俺のシールドエネルギーを０にしただろうに」

苦笑いを浮かべながら二人に歩み寄ってくる夜明と、その後ろからついてくるシャルル。

「何言ってやがんだ。手加減してたくせに」

拳を握り締め、一夏は夜明の胸に軽くパンチした。一夏が言ってることは事実なので、夜明は苦笑いを浮かべたまま甘んじて拳を受け取る。

「ま、確かに手加減はしてたわな。モードエクセリオン発動してないし・・・。でも、お前が強くなってるのも確かだよ」

「へっ、すぐにでも追いついてやるよ」

拳をぶつけ合う二人を、腕を組んでいる箒の隣りに立ったシャルルが羨ましそうに見ていた。

「いいよね、ああ言うの。男の青春って感じがして」

「そうだな・・・って、お前とて男だろうが、デュノア」

「え・・・あっ!?　そ、そうだったね！　でも僕、今まであ言う風なことする人いなかったからな・・・」

地雷を踏みかけていることを瞬時に悟り、シャルルは慌てて両手をブンブン振ってどうにか誤魔化した。だが、後半言ってることは事実である。

「そうか・・・。何はともあれ私と一夏に勝ったんだ。是非とも優勝してくれ」

「うん、絶対に勝つよ」

箒の激励にシャルルは力強く頷く。その激励の裏に、一夏と女子を付き合わせないためにはこの二人に勝って貰うしかない！！　と、言う箒の切実な願いがあったことなど、シャルルには知る由もない・・・。

「この時を待っていたぞ・・・」

ラウラは目の前に相対する夜明を見据えていた。その隣りにいるシャルルなど、眼中にない様子。身体は内側から爆発しそうな力を押さえるように小刻みに震え、試合開始のブザーを待っている。

（馬鹿が、そんな頭に血が上った状態で夜明に勝てる訳無いだろうに・・・いや、戦闘が始まれば冷静になるのか？　どちらにしろ、夜明の勝利が不動であることに変わりはないが）

興奮と闘争心を抑え切れていない相方を見ながら太陽はため息を吐き、自分が闘うことになっているシャルルに目を向ける。ラウラが夜明との勝負を自分にやらせろと言ってきた時、太陽はラウラが拍子抜けするほどあっさりとその事を承諾した。

（どうせボーデヴィッヒが負けて、すぐに夜明と闘えるだろうからな）

と、言うのが太陽の正直な本音である。と、ここで漸く試合開始のブザーが鳴り響いた。

「その翼、へし折ってやる・・・！」

「うさぎちゃんには無理だね」

ラウラと夜明は互いに瞬間加速（イグニッション・ブースト）を行い、スターライザーとプラズマ刃をぶつけ合わせた。一瞬の鍔迫り合い後、弾かれたように離れて急上昇する。

「さっさと終わらせろよ、よあ、おっと！！」

二人の闘いを観戦していた太陽に弾丸の雨が降り注いだ。太陽は最小限の動きで全ての弾丸をかわし、二挺のアサルトライフルの銃口を向けてくるシャルルを視線を向ける。

「観戦を決め込むのは勝手だけど、せめて僕との勝負が終わってからにしてくれないかな？」

試合開始してから数秒とは言え、自分のことを完全に無視していた太陽に若干の怒りを覚えながら、シャルルはアサルトライフルのマガジンを交換した。

「それもそうだな・・・なら」

苦笑いを浮かべながら太陽は腰に差した二本の大型ビームサーベルの柄をゆっくりと握り、一気に腰から引き抜いてシャルルに突きつける。

「早速始めるとしようか」

瞬間加速（イグニッション・ブースト）で太陽が突進して二挺のアサルトライフルを切り裂くのと、シャルルが高速切替（ラピット・スイッチ）でショットガンを展開したのは同時だった。

「・・・これって本当に学生の闘いなんですか？」

「・・・正直言って、学生の闘いとは思えんな・・・」

相変わらずの観測室。山田先生と千冬はモニターに映った闘いに驚嘆を禁じ得なかった。モニターの中では白と黒の影が高速の銃撃戦を展開し、黒とオレンジの影が高速で斬り結んでいる。とてもではないが、学生の戦闘で済ませられるレベルではない。

「織斑君もそうですけど・・・あの四人にはたくさんのスカウトが来るでしょうね」

「そう言う輩から生徒を護るのも、教師の仕事だ」

千冬の言葉に山田先生はですね、と頷き、再びモニターに視線を向けた。

「あ、夕暮さんが一気に距離を詰めましたね」

瞬間加速（イグニッション・ブースト）でシャルルに突っ込んだ太陽は大型ビームサーベルを高速で振り回した。シャルルは後方に動くことで斬撃をかわし、サブマシンガンで太陽を牽制している。

「夕暮のＩＳは今のところ一切の射撃武器を装備していない。対するデュノアは二十もの射撃武器を有している。このまま近づくことを許さずにシールドエネルギーを削っていけば、デュノアが勝つだろうな。だが、夕暮の格闘技能には目を見張るものがある。一瞬でも間合いに入るのを許してしまえば、その時点で決着がつくかもしれないな・・・」

太陽とシャルルの闘いに注視していた二人だが、今度は夜明とラウラの闘いに視線を変える。そこでは夜明の高機動についていきながら攻撃もしているラウラの姿があった。

「強いですねぇ、ボーデヴィッヒさん。月光君の機動についていける人なんて、ＩＳ学園の教師の中でも数えるほどしかいませんよ」

「ふん・・・」

しみじみという山田先生の横で、千冬は心底下らなさそうに鼻を鳴らす。

「相変わらず強さと攻撃力を同一の物と考えているな。だが・・・」

（それでは夜明には疎か、一夏にすら勝てないだろうな）

千冬の心の言葉に応えるように、夜明は襲いかかってくるワイヤーブレードを全て弾き飛ばした。

「そろそろ決めさせてもらうとするか」

ばら撒かれる弾丸を斬り、或いは弾き、若しくは避けながら、太陽は最小限の動きでシャルルに近づいていく。

「サブマシンガン、それも二挺の連射で被弾ゼロだなんて・・・本当に凄いね！」

一切無駄のない太陽の動きに賞賛を送りながら、シャルルはマガジンが尽きたサブマシンガンを光の粒子に変え、次の武装を呼び出した。シャルルの手が握っている物を見て、太陽の動きが一瞬だけ止まる。その瞬間を見逃さず、シャルルはその武器、グレネードランチャーの引き金を引いた。放たれたグレネードは太陽のすぐ側で爆発して、爆風と鉄の破片を撒き散らす。

「く・・・」

爆風を避けるために太陽は大きく後ろに飛び退いた。必然、シャルルとの距離は大きく開く。この時をシャルルは待っていた。すぐさまグレネードランチャーを収納し、両肩にチェインガン、両手にガトリングガン、両腰にレールガンを展開して、全ての銃口を太陽に向ける。

「流石の君でも、二本のビームサーベルじゃこの数の武器の連射は防げないでしょ！！」

言葉が終わる前にシャルルはガトリングガンの引き金を引いた。それに呼応してチェインガン、レールガンからも弾丸が放たれる。想像を絶する数の弾丸が太陽の視線を覆った。

（勝った！）

シャルルは心の中で勝利を確信する。だが、

「残念だったな」

次の瞬間、太陽は軽く跳躍して全ての弾丸を切り裂いた。タン、と小さな音を立てて着地した両足の爪先、踵から小型のビームサーベルが展開されている。

「バルディッシュトワイライトは二刀流じゃ無い。六刀流だ」

呆然としているシャルルに大型ビームサーベルの切っ先を向けながら、太陽はスラスターにエネルギーを溜めた。

「そして、」

太陽の姿が消え、シャルルの目の前に現れる。シャルルは慌てて後方に飛び退こうとするが、既にそこは太陽の距離だった。

「さようなら」

両手の大型ビームサーベルで肩、腕、腰の武装を斬り、僅かに膝を

曲げて、跳び上がりながらシャルルを蹴り上げ、もとい斬り上げる。

「冥土の土産に一つだけ教えといてやるよ。私も夜明同様、瞬間加速（イグニッション・ブースト）を五連続で使える」

再び太陽の姿が消え、黒い影が五連続でシャルルの周りを動いたように見えた。姿を現した太陽は腰に大型ビームサーベルを戻しながら、指を鳴らす。

「クロックオーバー」

パチン、と言う軽快な音がアリーナに響いた瞬間、シャルルのＩＳ装甲が音を立ててバラバラになった。ここで漸く、シャルルは自分の周囲を動き回っていた影が太陽だったことを理解し、その際に全ての装甲を斬り裂かれたのだと悟る。

「さて、それじゃま、闘いも終わったことだし、夜明が勝つのを待つとす・・・」

シャルルをアリーナの隅まで運び、太陽は二人の闘いがよく見えるところまで戻ろうとしたが、ふと厳しい視線を観客席に送った。

「ん、どうしたの夕暮さん？」

「・・・急用が出来た。デュノア、夜明には適当に伝えておいてくれ」

「え、それってどういう意」

シャルルの言葉を最後まで聞かず、太陽はＩＳを解除してアリーナ

の外へと走っていった。

「あ、あれ!?　夕暮さんがアリーナから出ていっちゃいましたよ!?」

戸惑いの表情で山田先生は千冬を見る。山田先生と同様に千冬も戸惑いの表情を浮かべていたが、それはすぐに戦士の表情へと変わった。

「いい加減に・・・墜ちろ!!」

「無茶言うなよ」

迫り来るワイヤーブレード、ラウラが使用してくる慣性停止能力を急加速、急停止、急旋回で避けながら、夜明はウィングスターを確実にラウラに当てて、ラウラのシールドエネルギーをじりじりと削っていった。

「ちょこまかちょこまかと・・・っ！」

不意に夜明の動きが止まった。突然夜明が停止したことにラウラは面食らったが、その隙を見逃さずに一気にワイヤーブレードを射出、ギリギリの所で夜明の右腕を絡め取る。

「おろ」

「墜ちろ！！」

振り子の原理でラウラは夜明を床に叩きつけようと、ワイヤーブレードを振り下ろした。急速に目の前に迫ってくる地面、夜明は慌てることなく左手を突き出し、衝撃を左腕一本のみで受け止める。

「何！？」

「驚くとは、余裕だな」

左腕を軸にして夜明は半回転、逆にラウラを壁に叩きつけた。

「ぐはっ！」

衝撃でラウラの肺から空気が押し出される。急いでラウラはワイヤーブレードを呼び戻そうとするが、それよりも速く夜明はスターライザーでラウラとワイヤーブレードを繋いでいるワイヤーを斬った。夜明はラウラの制御を失って力無く手の中でぶら下がった八本のブレードを見せつけるように突き出し、口元に笑みを浮かべながらスターライザーを肩部の大型カノンに向ける。

「次は・・・そいつを壊すとするか」

その些かもラウラを同等の強さの者と見ていない態度。ラウラの中で何かが切れる音が響いた。

「舐めるなぁぁぁぁ！！！！！！」

ラウラは右手を突きだして慣性停止能力を発動。当然、そんな隙だらけの攻撃が夜明に当たるわけもなく、夜明は上に飛んで攻撃をかわす。夜明に攻撃する暇を与えず、ラウラは両肩の大型カノンを放った。右に左に瞬間加速（イグニッション・ブースト）して徹甲弾を避け、更に瞬間加速（イグニッション・ブースト）でラウラに突撃しようとエネルギーを溜め始めた瞬間、先日の模擬戦闘時に感じた見えない手で拘束されるような感覚が夜明を襲った。ラウラの方を見ると、勝ち誇った笑みを浮かべている。

（成る程。さっき叫んだのは冷静さを失ったように見せるための演技、か・・・）

「止めだ」

両肩の大型カノンが夜明に照準を合わせる。いくら無傷とは言え、この砲撃が直撃すればレイジングウィングのシールドエネルギーは一撃で全て削り取られるだろう。レイジングウィングのスペックデータを思い出しながらラウラが勝利を確信した瞬間、夜明の口元が歪んだ。

「・・・お前、馬鹿だろ？」

そこでラウラはあることに気付いた。夜明の背部にある推進翼（スラスター）の一部が無くなっていることを。

（まさか！？）

気付いたときにはもう遅い。二基のフィン・ファング、六基のシューティング・ビットが放ったレーザーがラウラの両肩に装備された大型カノンを貫く。一瞬遅れて大型カノンは爆散した。

「くっ・・・」

至近距離からの爆発にラウラは気を取られ、慣性停止能力が緩んだ。その瞬間を逃すはずもなく、夜明はラウラに接近する。ラウラが気がついたときには既にスターライザーで両袖のプラズマ刃を斬り落とされ、ウィングスター、ディバイン・カノン、スタードライブ、スターライト・ブレイザー、フィン・ファング、シューティング・ビット、計十五の砲門がラウラに照準を合わせ、夜明の目にマルチロックオン用のバイザーが下りていた。

「Ｓｐｉｅｌ　ｉｓｔ　ｅｉｎ　Ｅｎｄｅ　Ｋａｎｉｎｃｈｅｎ（遊びは終わりだよ、ウサギちゃん）」

ドイツ語で別れを告げられ、暴力的なまでのエネルギーの濁流がラウラを飲み込む。

ＩＳ装甲が強制解除され、アリーナの床に横たわるラウラに一瞥を送り、夜明は太陽と闘うためにアリーナ内に視線を走らせた。

「・・・あっれぇ～？　太陽の奴、何処行きやがった？　シャルル、太陽の奴何処行った？」

「えっと・・・急用が出来たから適当に伝えといてくれって・・・」

シャルルから太陽の伝言を聞き、夜明は呆れたように眉を顰める。

「何だそれ？　・・・なら、気長に待つとしま」

その時、異変が起きた。

黒き雨、不屈の翼を墜とすこと叶わず（後書き）

次回予告
シャルルです。夕暮さん何処に行ったんだろう？　夜明が闘いたがってるのに・・・って何でシールドエネルギーを全部無くなったのにボーデヴィッヒさんはまたＩＳを展開してるの！？
ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『ラウラ、偽りの黒き騎士を纏う』

『レイジングウィング、発動、モードエクセリオン』

『悪夢の三機、再来』
の三本です。次回も見てください！　ジャン、ケン、ポン！

『チョキ』
次回も見てねぇ～

この作品のＥＤみたいなもの・・・かな？

消さないと豪い目に会うようなので、かわりにネタを書きます。お題はこの小説の登場人物戦闘力。

生身での場合。

太陽＞千冬＞銀河＞夜明＞ライラ＞＞＞＞（人として超えられない、と言うか超えちゃいけない壁）＞楯無＞ラウラ＞一夏＝箒＞シャル＞鈴音＞セシリア

って感じかなぁ。

続いてＩＳ搭乗状態の場合

夜明＞太陽＞ラウラ（モードマルート発動時）＞＞＞＞（超えたら一生後悔する壁）＞一夏（後で壁を越えるかも）＞楯無＞箒＝シャル＝鈴音＝セシリア

後半は殆ど差はなし。

この作品のＥＤみたいなもの・・・かな？（後書き）

どうだろ？

蒼き翼。それは救済の証

「Ｓｐｉｅｌ　ｉｓｔ　ｅｉｎ　Ｅｎｄｅ　Ｋａｎｉｎｃｈｅｎ（遊びは終わりだよ、ウサギちゃん）」

別れの言葉と共に視界を覆うエネルギーの奔流。

（こんな・・・こんな所で負けるのか・・・私は・・・！）

エネルギーの奔流が身体から装甲を引き剥がしていくのが分かる。だが、それでも尚、ラウラは敵意に満ちた目を夜明に向けていた。

（私は負けられない！　・・・負けられないんだ・・・！）

闘うために鉄の子宮から産み出された存在。遺伝子強化試験体Ｃ－００３７。それがラウラ・ボーデヴィッヒと言う存在だ。どうすれば人体を効率よく破壊できるか、どうすれば時間をかけずに敵軍を撃破できるか。それだけを覚えて生きてきた。彼女は優秀だった。それは彼女の戦闘訓練の記録が証明している。

だが、ある兵器の出現により、彼女は更に深い闇へと叩き落とされた。そう、ＩＳと呼ばれる兵器が全てを変えた。

『ヴォーダン・オージェ』

簡単な概要はこうだ。肉眼にナノマシンを移植して視覚信号伝達の速度向上、動体反射の強化。その処理を施された目は『越界の瞳』と呼ばれる。理論上では一切の危険を含まない、はずだった。だが、彼女の目は常に『越界の瞳』を発動した状態に陥ってしまった。そんな彼女を待っていたのは『出来損ない』の烙印。それが彼女をよ

り深い闇へと引きずり込んでいく。そんな中、唐突に光は彼女に降り注いだ。

「左目の『越界の瞳』が制御不能、か。・・・言い訳だな。言っておくが、そんな下らない理由で弱いままでいられるほど、私の訓練は優しくないぞ？」

織斑千冬と言う光が。千冬の訓練は出来損ないの烙印を押された彼女を一気にＩＳ専用部隊の最強へと変えた。

憧れた。織斑千冬と言う存在に、その強さに、その凛々しさに、己を貫く姿に。強烈に、壮絶に、凄絶に、ひたすら憧れた。

「何故、そこまで強いのですか？」

ある日、彼女は訊ねた。その問いに、千冬は今まで見せたことのない様な、少しだけ優しい笑みを浮かべて答える。

「私には弟が二人いる。一人は実の、もう一人は義理のだ。少しばかり惚気になるが、義理の方は私よりも強いぞ」

「教官よりも？　弟が・・・ですか？」

「あぁ。あの一夏（バカ）を見ていると、強さとはどうあるべきなのか。あの夜明（アホ）を見ていると、強さをどういう風に使えばいいのかが分かる」

「・・・いまいちよく分かりません」

「それでいい。最初から分かる答えなどこの世には無いからな、精々悩め。いつか日本に来ることがあれば会ってみると良い。・・・

それと、一つだけ忠告しておくぞ・・・」

そこから先の千冬の言葉を、彼女はよく覚えていない。

（違う。そんな表情を浮かべるのは、私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに・・・）

だから、認めなかった。千冬にそんな表情を浮かべさせる存在が。特に、自分が憧れている存在が、自分よりも強いと言った存在を。

（この手で叩き潰すと決めたんだ・・・。教官が、私が憧れたあの人こそが最強だと証明するために。奴を、月光夜明を完膚無きまでに敗北させると！）

だから、動かなくなるわけにはいかない。あの男はまだ動いている。そして、最早自分のことを見てすらいない。この立場を逆転させなければならない。そのために・・・。

（力を・・・寄こせ・・・）

その時、彼女の胸の中で何かがざわめいた。

【・・・願うか？　・・・汝、自らの変革を望むか？　より強い力を欲するか？】

答えるまでもない。夜明（あいつ）を潰すためならば何が代償でも構わない。命だろうが、心だろうが、魂だろうが。何から何までくれてやる。だから・・・。

（比類なき最強を私に寄こせ！！）

Damage Level ..... D

Mind Condition ..... Uplift

Certification ..... Clear

≪Valkyrie Trace System≫ .....

boot

「あああああああっっっっっ！！！！！！！！！」

「「っ！？」」

突然、アリーナに響き渡ったラウラの絶叫。太陽の姿を探していた夜明とシャルルは反射でラウラを振り返る。

「えっ、嘘っ！？」

そこでは驚愕を禁じ得ない光景が広がっていた。シールドエネルギーを全て削られて強制解除されたシュヴァルツェア・レーゲンの装甲が再び展開され、激しい電流を放ちながら変形していた。装甲はスライム状にラウラを包み、その身体を飲み込んでいく。

「・・・こんな隠し球を持ってたとはねぇ。ラウラ・ボーデヴィッヒ、なかなか食えない奴だな」

ククク、と夜明は愉快そうに喉を鳴らした。だが、浮かべている表情に愉快の色はなく、元々鋭くさせていた眼光を更に鋭くさせ、ラウラを見据えている。装甲だったものは完全にラウラを飲み込み、ある姿を形成していった。最小限の黒い装甲を纏った四肢。目の部分を赤く不気味に輝かせているフルフェイスのアーマー。そして何よりも夜明の視線を引いたのは、その手に握られた武器である。見間違うはずもない。それは、彼がこの世で最も憧れている内の一人が使っていた武器なのだから。

「雪片・・・」

今や、一夏が握っているはずの武器を振り上げ、ラウラだった者は夜明に突っ込んだ。居合いの構えで振り抜かれた刀を夜明は上半身を後ろに反らすことでかわし、間髪入れずに上段から振り下ろされたそれを白刃取りの要領で受け止める。

「夜明!!」

「来んな!!」

走り寄ってこようとするシャルルを一喝して止め、夜明はラウラだった者の力に押し負けないように全身に力を込めた。一瞬でも気を抜けば、一撃で倒されてしまうだろう。運が良ければ、堪え忍ぶかもしれない。だが、夜明にはそんな分の悪い賭をするつもりはなかった。そんな賭をすることよりも、夜明は目の前の贋作をどうやってぶちのめすかを考えていた。

（（許さねぇ・・・））

夜明のその怒りは、試合を見ているある者とシンクロしていた。

「離してくれ！！　今すぐにあの馬鹿をぶっ飛ばす！！」

「落ち着け一夏！！」

「一夏さん落ち着いてください！！」

「いきなりどうしたのよ！！」

さっきまで、リアルタイムモニターで試合を見ていた一夏は、ラウラだった者が握っている武器が何なのかを理解した瞬間、アリーナに向けて走り出そうとしていた。周りにいた箒、セシリア、鈴音が止めていなかったら、本気でアリーナに殴り込んでいただろう。

「一回落ち着け！　そして状況を冷静に分析して、私達に分かるように説明しろ！」

箒に両肩を押さえ込まれた一夏は肩を荒く上下に動かしながら深呼吸を繰り返し、声を絞り出すように話し始めた。

「あれは、あいつがやっている技は、千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだ。それをあいつは・・・くそっ！！　あんな訳の分からねぇ贋作の力に振り回されてるラウラも気に入らねぇ・・・一遍ぶん殴らねぇと気が済まねぇ！！」

ラウラだった者が振るっているのは唯の暴力だ。何の意志もない、想いもない、千冬が振るっていた強さとは似ても似つかない贋作の技。

「とにかく殴る！！」

「ちょっとお待ちにまって。それは一夏さんがわざわざやることではないでしょう」

セシリアの諭すような言葉で、漸く鼓膜が痛いほどに響いている放送が届く。

『非常事態発生！　トーナメントの全試合は中止！　状況をレベルDと断定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！　来賓、生徒はすぐに

避難すること！』

「今ので分かると思うけど、あんたが行かなくたって事態は収拾されるわ。わざわざ危険に飛び込むことないって」

鈴音の冷静な声で、一夏の思考はより冷静になった。だが、その胸の中に湧き上がった想いは消えてはいない。

「違うんだ。俺は『やらなきゃいけない』をしに行くんじゃない。『俺がやりたい』ことをやりに行くんだ。これだけは譲れない！！」

（そこをどうにか譲っちゃくれないかい、相棒）

「夜明！」

ＩＳのプライベート・チャネルで聞こえてきた夜明の声。その声に隠し切れていない怒りの色を見て取り、一夏は一旦アリーナに殴り込むのを止めた。

（こいつをぶん殴る役目、俺にやらせちゃくれないか？）

（だったら二人で殴ろうぜ）

（いや、お前が来るまでの間にこいつのエネルギーは無くなる。そうすれば、一生殴るチャンスは来なくなるぞ。俺がお前の分まで殴っておくから）

（だけど・・・！）

（・・・一夏。姐さんの強さがどういう物か知っていて、尚かつ憧れてるのはお前だけじゃ無いんだぜ？）

（・・・夜明。お前もしかして・・・キレてる？）

（・・・結構トサカに来てる・・・ってだけ言っとく）

よっぽどの事がない限り、夜明は怒ることはない。仲間や大切な人が傷つけられでもしない限り、本気で怒る事なんて無かった。その夜明が、仲間を傷つけられた訳でも無いのに本気で怒っている。千冬に憧れる想いが自分と同等、或いはそれ以上と一夏は察し、握り締めていた拳をゆっくりと解いた。

（・・・俺の分までぶちかましといてくれ）

（委細・・・承知！！）

一夏との遣り取りを終え、プライベート・チャネルを閉じた夜明は改めてラウラだった者を見た。その表情はフルフェイスの装甲に隠され、何も見えない。だが、夜明には分かる。その表情はかつて、その武器、雪片を握っていた人とは似ても似つかない物だと。何の意志も何の強さも持たない、贋作の表情だと。

「こんな物が・・・」

ゆっくりと雪片を押し返す。

「こんな何の意志も、想いも強さもない下らない力が・・・」

一歩前に踏み出し、渾身の力でラウラを吹き飛ばした。

「お前が憧れた存在に、織斑千冬に見出した強さなのか、ラウラ・ボーデヴィッヒ!!」

スターライザーを引き抜きながら両肩の装甲を開き、全てのミサイルを射出する。ラウラだった者は回避し、刀でミサイルを防いだ。だが、最後の一発は避けることも斬ることも出来ず、頭部に直撃した。煙が晴れ、左目部分のみが損傷してラウラの金色の瞳が覗いた。

「・・・」

その金色の瞳は、普段のラウラからはとても想像できないような弱々しさを持っていた。助けて欲しい、と夜明に言ってるようにも見える。

「・・・済まねぇ、一夏。お前との約束は反故になりそうだ」

その金色の瞳を見た瞬間、夜明の胸中から怒りは消え去った。変わりに湧き上がってきた想いは、その銀眼に映った者全てを救おうとするとても身の程知らずな想い。

（やれるか、俺に？）

逡巡する想い。スターライザーを構えたまま固まる夜明。再びラウラだった者が動こうとしたその時。

【・・・お前ならやれるさ。・・・いや、やるんだろ？】

「っ！？　太陽！？」

この場にはいない筈の太陽の声が聞こえた。慌てて周囲を見回すが、当然太陽の姿は見つからない。プライベート・チャネルで話しかけてきたと言う可能性もあるが、太陽からプライベート・チャネルがかけられた記録も無い。少しだけ呆然としていた夜明だが、すぐに口元を緩めた。

（そうだよな、太陽。やれるかじゃない。やるんだ）

「シャルル」

「ふぇっ、何!?」

固唾を呑んで二人を見守っていたシャルルはいきなり夜明から声をかけられて、間抜けな声を上げる。驚くシャルルにお構いなしで、夜明はニッと笑いかけた。

「俺があの馬鹿を救う所、ちゃんと見といてくれよ」

「・・・」

シャルルは数秒間、夜明の顔を穴が空くほど見つめた。それから、口元を綻ばせてしっかりと一度頷く。

「うん。しっかり見てるよ」

「ありがとな・・・行くぜ、レイジングウィング」

夜明の呼び掛けに応えるように、レイジングウィングの背部にある四枚の推進翼（スラスター）が微かな輝きを帯び始めた。そして、夜明は歌い始めた。救いの歌を。

「我、使命を受けし者なり。契約のもと、その力を解き放て。風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に。この手に救いの証を。モードエクセリオン、発動!!」

『Ｍｏｄｅ（モード）　Ｅｘｅｌｉｏｎ（エクセリオン）　Ｓｔａｎｄｂｙ　ＯＫ.　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ?』

レイジングウィングの声が脳内に響いた瞬間、世界の全てが自分の

色に染まるような感覚が夜明を包んだ。

「綺麗・・・」

思わずと言った感じで山田先生は呟いた。その視線が送られているモニターの中では、レイジングウィングに装備された四枚の推進翼（スラスター）が鮮やかな蒼に染まり、幻想的な蒼い光の粒子を放っている。

「モードエクセリオン。レイジングウィングのワンオフアビリティ

ーにして、救いの証」

目にも鮮やかに染まった蒼き翼に見とれながら、千冬は厳かに囁いた。

「モードエクセリオン。話には聞いていましたが、とても美しいですわ・・・」

「あれってレイジングウィングのワンオフアビリティーなの？」

光り輝く蒼い粒子が降り注ぐ光景に見とれながら、鈴音はセシリアに訊ねた。同じように見とれながら、セシリアは一回頷く。

「太陽さんから聞いたのですが、レイジングウィングのワンオフアビリティー、モードエクセリオンは背中に装備されている推進翼（スラスター）に当たった全ての光を、己のエネルギーへと変換して使役することが出来ると」

「全て・・・か？」

「はい。自然の光でも、人工の光でも関係ないそうです。光さえあれば、無限にエネルギーを供給することが出来ると」

「無限に！？　そいつは凄い・・・」

「それだけではありませんわ。モードエクセリオン発動時は武装のリミッターが外され、威力を無限に上昇させることが出来るそうですわ」

セシリアの説明を肯定するようにモニターに映った夜明はスターライザーを構え、凄まじい速度でエネルギーを供給し始めた。

（もっとだ。もっと鋭く、もっと高密度に。あんな贋作を一刀両断できるくらいの力を・・・）

際限なくエネルギーを流し込まれ、両手で構えられたスターライザーは更に輝きを増していく。その輝きは既に直視できないほどにまで増していた。

「・・・」

ラウラだった者は刀を構え、夜明に突っ込んだ。鋭く振り下ろされた刀が描く軌道は袈裟斬り。だが、そこに意志はない。

（俺はそんな斬撃よりも鋭い斬撃を知っている）

力ではない強さを見せてくれた人の斬撃を。

（俺はそんな斬撃よりも強い斬撃を知っている）

誰かを護るために強くあり続けた人の斬撃を。

（俺が憧れた斬撃には・・・ほど遠い！！）

誰よりも近くで見せてくれた。誰よりも深く教えてくれた。だからこそ、その姿に憧れた。誰かのために強くあろうと、誰かのために強さを使えるようになろうと、願う。

「贋作如きが・・・消えろ！！！」

袈裟斬りに薙ぎ払いで応じる。超々高密度に収束されたスターライザーはあっさりと刀を斬り飛ばす。すぐさま上段に構え、真っ直ぐに振り下ろした。一瞬、ラウラだった者の動きが止まり、ゆっくりと装甲が両断されていく。

「さて・・・一夏をどう説得したもんかね？　・・・こいつの替わりに殴られるか？　・・・嫌だな」

気を失って崩れ落ちそうになるラウラを抱きかかえ、夜明は一人ぼやくのだった。

「一つだけ忠告しておくぞ。あいつ等の内のどちらと会う時でも心を強く持て。特に銀髪の方は女心を掴むのがうまい。下手をすると、惚れるぞ？」

ひどく嬉しそうな、どこか照れくさそうな表情で千冬は言った。その時に感じた胸の中のモヤモヤ。今ならはっきりと断言できる。ちょっとした嫉妬だった。

「教官も惚れているのですか？」

だから、あんな馬鹿な質問をしてしまったのだろう。

「姉が弟に惚れると思うか？　もう一人は・・・魅力的ではないと言えば、嘘になるな」

ニヤッと良い笑顔を浮かべて笑う千冬の姿を見て、彼女はますます落ち着かなくなった。彼女に、憧れの存在にこんな表情をさせられるその男達が・・・羨ましい。

そして出会って分かった。闘って理解した。

強さとは、何たるか。

その答えは無数にあるだろう。十の人がいれば十通りの。千の人がいれば千通りの。その内の答えの一つと、壮絶且つ凄絶に出会ってしまった。

『強さってのは・・・自分の大切なものを貫くための道具だな』

・・・道具、なのか？

『当たり前さ。強さってのは人がどう使うかで存在意義が決まる。強さその物には何の意味もない。強さを持っている人にこそ意味があるんだ』

・・・そう、なのか？

『使用目的（たいせつなもの）の無い道具（つよさ）に何の存在意義があるってんだ？』

・・・なら、お前の道具（つよさ）の使用目的（たいせつなもの）とは何だ？　どんな大切なものを持てば、そんなに強くなれる？

『強い？　中々おもしろい冗談だな。俺如きの強さで強い、なんて言ってたら、お前が憧れてる教官には永遠に届かないぞ。ま、使用（たいせ）目的（つなもの）ならちゃんとあるけどな』

・・・それは？

『俺には貫きたい信念がある。俺には背きたくない誓いがある。俺には護りたい世界がある。そいつ等があるから、俺の魂（つばさ）は不屈でいられるんだ』

・・・では、その信念とは？　誓いとは？　世界とは一体何なんだ？

『教えてやんねぇよ。俺はミステリアスな男なんだ』

・・・悪戯っぽい笑顔で言い切られ脱力してしまう。その笑顔を見ただけで、何となく答えが分かった様な気がした。

『そしてこの不屈の翼を羽ばたかせて、誰かのためにありたい。自分以外の誰かのために全てを使い切ってみたい』

・・・それは、まるで・・・あの人のようだ。

『そうか？　煽てたって何も教えねぇぜ』

・・・それは残念だ。

『でも、一つだけ教えといてやるよ』

・・・？

『俺の護りたい世界。その中に、お前も入っちまったんだよ』

・・・今まで感じたことのない衝撃に、私の胸が、心が大きく揺さ

ぶられる。

『だから・・・護ってやるよ、ラウラ・ボーデヴィッヒ。俺が、俺と不屈の翼が』

・・・これが、教官の言っていたことか。これが、そうか。

ときめいてしまった。身体が熱くなり、顔さえも直視できない。心臓は早鐘の如く、呼吸が嵐の如く乱れる。

『護ってやるさ』

・・・月光夜明。あぁ、確かにこの男には・・・

惚れてしまいそうだ。

蒼き翼。それは救済の証（後書き）

次回予告
セシリアですわ。先ずは前回の次回予告よりも話が進まなかったことを謝罪しますわ。あのラウラ・ボーデヴィッヒ、夜明さんにあんなことを言われて・・・キィーッ、羨ましいぃーっ！！

ゴホン、お見苦しいところを見せましたわ。
それでは、次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『今度こそ現れた悪夢の三機』

『黄昏の黒斧、覚醒』

『この三機はやっぱり噛ませ犬』
の三本ですわ。次回も是非見てください！　ジャン、ケン、ポン！

『グー』

見てくださらないと酷いですわよ～

戦場に舞うは黒き黄昏の姫（前書き）

これが太陽の本気じゃあああああああ！！！！！！！！！！！！！！

それではどうぞ！！

夜明がラウラを救い出す数分前。アリーナの観客席、避難が終わって誰もいないはずのそこに、三人の女性がいた。一人は黒い髪を短髪にした勝ち気そうな女性、一人は長い緑の髪で右目を隠している女性、最後の一人は肩にかかるくらいの水色の髪をしている。

「何でぇ、ＶＴシステムを発動したからちっとはまともな闘いになると思ったのに・・・全っ然駄目じゃん」

「仕方ないでしょうね。いくら過去のモンド・グロッソの動きをトレース出来るとは言え、相手はあの蒼き翼、レイジングウィングなのですから」

「まぁ、相手が弱かろうが強かろうがどうでもいい。ジャスティア、映像は記録してるよな？」

「一応・・・、レイジングウィングの動きが速すぎて、参考になるかは著しく不安ですが・・・」

ジャスティアと呼ばれた緑色の髪の女性は手に持った映像記録装置をいじりながら、首を傾げる。すると、唐突に声をかけられた。

「こんな所で何してるんだ？　避難の放送が聞こえなかったのか？」

「「「っ！？」」」

ギョッとして三人が振り返ると、そこにはＩＳスーツを纏った太陽が腕を組んで立っている。太陽が三人に送る鋭い眼光に若干、と言

うよりもかなり怯みながら、黒髪の女性は虚勢を張った。

「な、何だよお前。お前には関係ないだろ！」

「うるせぇよシュヴァルツェ！！　・・・悪いな、家の連れが騒がしくて」

「質問に答えろ」

謝罪を無視されたことに若干の怒りを覚え、水色の髪の女性は口元を引きつらせるが、ここで事を起こすのは得策ではないと思ったのか、無理矢理笑顔を浮かべる。

「私達は最近立ち上がった『某国企業』って言う会社の者なんだが、ちょっとばかしＩＳのデータを取ることに熱中しすぎたみたいでな。気がついたら」

「自分達以外を残して皆避難を完了させていたと・・・」

「そういうこった」

苦笑いを浮かべる水色の髪の女性を見て、太陽は納得したのかそれ以上は言及せずに三人についてこいとジェスチャーした。

「仕事熱心なのは大変結構だが、それで死んでは元も子もないぞ。観客席の外に案内するからついてきてくれ」

くるりと踵を返した太陽の後ろ姿を見ながら、三人は太陽に聞こえないくらいの小さな声で密談を始める。互いを見もせずに、唇を動かすだけで会話をしているのだから凄い。

（どうするんだよ？）

（どうするもこうするも無いでしょう。ここでついていかなければ怪しまれてしまいます）

（ジャスティアの言うとおりだな。ここで捕まったらスコールに迷惑がかかる。・・・オータムはどうでも良いけどな）

（（確かに））

瞬時に小声の会話を終わらせ、三人は太陽の後に続いて歩き始めた。

「それにしてもさっきのお前の試合、凄かったな。もしよければ卒業した後、家に来ないか？」

水色の髪の女性の勧誘に、太陽は薄く笑みを浮かべながら振り返る。その笑みは企業に勧誘されたことを喜んでいると言うよりも、この三人を小馬鹿にしてるように見えた。

「いいや、遠慮しておこう。十五歳で自分が勤める会社を決めるつもりはない。それに」

薄い笑みを更に鋭利にさせ、太陽ははっきりとその名を口にした。

「過去の亡霊と付き合う気なんて毛の先程もないからな。『亡国機業（ファントム・タスク）』」

三人の歩みがピタリと止まる。シュヴァルツェは唖然とした表情を隠そうともせずに太陽を凝視し、ジャスティアはその表情を太陽に

見せないようにシュヴァルツェの前に立った。水色の髪の女性、ガンフィッツは動揺を声に出さないようにしながら自然な表情を浮かべる。

「『亡国機業（ファントム・タスク）』って・・・何だ？　新しいＩＳ関連きぎょ」

「惚けるなよ、遠距離射撃型ＩＳカラミティ搭乗者、ガンフィッツ・アクセリオル」

ガンフィッツの目が大きく見開かれた。驚愕するガンフィッツを意に介さず、太陽は視線をジャスティア、シュヴァルツェの順に走らせる。

「そっちの緑色のは突撃強襲型ＩＳフォビドゥン搭乗者、ジャスティア・ガロード。その後ろの黒髪は一撃離脱可変型ＩＳレイダー搭乗者、シュヴァルツェ・ギリアン」

次々に名前を言い当てられ、三人は後ろに飛び退いて太陽から距離を取った。太陽を睨む三対の目にははっきりと警戒の色が浮かんでいる。

「・・・どうやら、白を切っても無駄みたいだな」

「理解が早くて助かる」

鋭利な笑顔をそのままに、太陽はゆっくりと三人に歩み寄った。だが、その間の距離は三人が太陽が進むのに応じて後退りしているため、一向に縮まらない。

「何で私達の名前を知ってたんだ？」

「答えると思うか？」

ガンフィッツの隣りで顎に手を当て考えていたジャスティアは、何かに気付いたように顔を上げた。

「ガンフィッツ。前回、私達がここを襲った時、私達のプライベート・チャネルをハッキングしていた者がいました。もしかすると・・・」

「あぁ、それは私だ」

さも何でもないことのように答える太陽。ガンフィッツは目を更に鋭くしながら太陽を睨む。

「成る程。ついでに私達の名前も調べてた、ってことか？」

「ついでじゃない、暇潰しだ。さて、悪いが潰れて貰うぞ。『亡国機業（ファント・タスク）』」

「潰れるのはお前ぇだ！！」

二人の後ろでＩＳを展開していたシュヴァルツェは一気に加速して太陽に突っ込んだ。シュヴァルツェの突撃に続くように二人もＩＳを展開し、各々の武器を太陽に叩きつける。凄まじい衝撃がアリーナ内を走り、三人の攻撃を瞬時にＩＳを展開することで防いだ太陽だが、威力までは殺せずに観客席を守っていたシールドをぶち破ってアリーナ内に吹き飛ばされた。

「っつ・・・。やはり初期設定だけで専用ＩＳ三機と闘り合うのは

無謀か・・・」

チラッ、と後ろに視線を向ける。必然、そこにはラウラを抱きかかえ、モードエクセリオンの反動でＩＳが強制解除された夜明と、辛うじて装甲が残っているシャルルが二人を守るように立っているのが見えた。

「・・・」

太陽は視線を戻し、観客席防衛シールドに穿たれた穴から出てくる三人を見据えた。ゆっくりと目を閉じ、自分の相棒、バルディッシュトワイライトのコアに呼びかける。

（私の声が聞こえているか、バルディッシュトワイライト？　もし聞こえているのなら、私の我が儘を聞いてくれ）

三機のＩＳが最大威力の砲撃を放とうと、エネルギーを供給し始める。

（私には護りたい・・・いや、側にいたい人がいる。そして、護りたい仲間も出来た。私は彼が、彼等が傷つくところを絶対に見たくない。だから、頼む）

今の今までゆっくりと、確実に中身と外見（ソフトウェアハードウェア）を書き換えていたバルディッシュトワイライトのコアが、凄まじい速度でとんでもない数値を示し始めた。

（私に皆を）

三機が砲撃を放つ。

「大切な人を護るための力を私に貸してくれ！！！！」

その切実な叫びが響いた瞬間、三つの閃光が太陽を直撃し、爆煙がアリーナ内に広がった。

「「「「「太陽【さん】！！！」」」」」

アリーナ内外から響く声。三機は太陽を墜としたことを確信し、夜明達へと向かう。唯一人、夜明だけが唇に笑みを浮かべながら爆煙の中心を見ていた。

「・・・やれやれ、まさかこのタイミングで終わるとはな。コアに介入した甲斐があったと言う物だ」

爆煙の中から太陽の声が聞こえてきた。その声音には、一切ダメージを受けた様子や、損傷を負った様子はない。三機はギョッとして止まり、徐々に薄れていく爆煙の中心を凝視した。

「私は意外と主人公体質なのかもしれないな・・・。まぁいい、さて」

内側が爆発したように煙が吹き飛ばされると、そこには。

「反撃といこうか」

一次移行（ファースト・シフト）どころか、二次移行（セカンド・シフト）までも終わらせた黄昏の黒斧、バルディッシュトワイライトの姿があった。

「・・・冷や冷やさせてくれるな、夜明同様」

モニターの中に無傷で現れた太陽の姿に苦笑いを浮かべながら、千冬はホッと息を吐いた。口ではこんな事を言っているが、内心は穏やかではなかったのが事実である。太陽と話をするべく、千冬はプライベート・チャネルを開いた。

（夕暮）

（何ですか、織斑教諭？）

（手助けは必要か？）

（要りません）

太陽の即答に千冬は苦笑いを深くさせる。

（そうか・・・なら、存分に暴れろ。お前とお前のＩＳの初陣だ。精々、派手に散らせてやれ。それと、出来ればでいいからその三機を捕獲してみてくれ）

（Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌｏｒｄ）

こうして、太陽の圧倒的すぎる闘いが始まった。

二次移行（セカンド・シフト）を終え、バルディッシュトワイライトは大きくその姿を変えていた。左手の大型ビームサーベルは柄のみになり、右手の大型ビームサーベルは折り畳み式の実体剣に変わり、装甲と一体化して柄の部分から銃口が覗いている。両肩からは投擲用のビームトマホークの柄が突き出し、腰部には敵を捕らえるためのアンカーが装備されている。そして、何よりも目を引くのは背中部分に装備された飛行ユニットだ。身体の半分ほどの大きさがあるそれは、太陽の背を守るように背中に装備されている。

「「「・・・」」」

余りの変わり様に襲撃者三人は唖然としていたが、思い出したかのように散り、三方向から太陽に襲いかかる。太陽は三方向から迫ってくる三機を見据えた後、左手の高出力大型ビームサーベル、オールデリートをゆっくり持ち上げ、一気に斜めに振り下ろした。鍔元から大量の紫電と共に超高密度のビーム刃が溢れ出す。

「ウオォォッッッ！！！！！」

魂が震えるような咆哮を上げながら太陽はオールデリートを右肩に背負うように振り上げ、切っ先で円を描くように振り抜いた。特別、何か威力を上昇させている訳でもない。なのに、その一撃が放った衝撃波だけで、三機は錐揉みしながら吹き飛ばされた。

「「「ウワアアッッッ！！？？」」」

三人の悲鳴を無視して、今度は右腕の大型ビームガンブレード、ライオンハートの銃口を視線の先にいるフォビドゥンに向けた。放たれた黒い閃光は正確にジャスティアが握っているニーズヘグの柄部分と刃を繋いでいる部分を撃ち抜く。

「何っ！？　これなら！」

柄だけになったニーズヘグを放棄して、ジャスティアはプラズマ砲、フレスベルグを放った。それと同時にシュヴァルツェはツォーンを、ガンフィッツはシュラークを放つ。三方向から放たれた砲撃に太陽は慌てることなく、左腕に装備されたシールドを四つに分離させた。シールドを形成していた四つのビット、フィン・ファンネルは三角錐状に太陽を囲み、それぞれを頂点にしたエネルギーシールドを発生させて三つの砲撃を防ぐ。

「そろそろ幕引きといこうか」

フィン・ファンネルを左腕に戻しながら背部ユニットであるクアンディムを外し、更に八つのビット、スラッシュ・ファング、シュート・ドラグーンのそれぞれ四つに分離させる。スラッシュ・ファングを左腕のオールデリートに装備させてオールデリート・ハーケンに、シュート・ドラグーンを右腕のライオンハートに装備させてライオンハート・ザンバーに強化する。

「我、使命を受けし者なり。契約のもと、その力を解き放て。想いは夕暮に、強さは夜明けに、そして黄昏の輝きはこの胸に。この手に友との絆を。モードトランザム、発動！！」

『Mode(モード) Transam(トランザム) Standby OK. Are you ready?』

力を解放するための歌。その歌がアリーナに響いた瞬間、バルディッシュトワイライトの装甲が展開し、その部分が紅く輝きながら紅の粒子を放ち始めた。

「行くぞ」

「!?」

次の瞬間、太陽の姿が消え、ジャスティアの真ん前に現れオールデリート・ハーケンを構える。ジャスティアは急いで可動装甲を構えるが、オールデリート・ハーケンはその可動装甲を容易に斬り裂いた。可動装甲を失って無防備になったジャスティアの装甲を、太陽は両足の爪先と踵から小型ビームサーベル、グリフォンを展開してバラバラに斬り刻んだ。

「ジャスティア!!」

「仲間の心配をしてる暇があるのか?」

「っ!?」

ガンフィッツがジャスティアの名を呼んだ時、既に太陽はガンフィッツの背後に移動し、ライオンハート・ザンバーの実体剣を広げながらビーム刃を展開し、シュラークを斬り落としながらビームを放ち、ジャスティアと同じ方向に吹き飛ばした。

「飛べ」

太陽が小声で指示を出すと腰部に装備された二つのアンカー、ドレインホーネットが吹き飛んでいった二人を追い、足首をがっちりと掴む。

「そうらぁっ！！」

腰部から伸びるドレインホーネットと装甲を繋ぐワイヤーを掴み、太陽は挟み込むように二人をシュヴァルツェに叩きつけた。そしてドレインホーネットを放つ前にオールデリートから分離させておいたスラッシュ・ファングで三人を拘束、身動きを取れなくさせる。

「ちょ、離れろお前等！！」

「無理だ、このビットが邪魔で離れられねぇ！！」

「まずいですよ！　あの黒いＩＳ、凄いエネルギー反応を放ってます！！」

騒ぐ三人を冷めた目で見ながら、太陽はライオンハート・ザンバーの銃口を三人に向け、想像を絶する多さのエネルギーを供給し始めた。銃口に紅の輝きを中心として黒いエネルギーが集まり、太陽は呟く。

「ファイナル・エリシオン・・・」

紅の筋を中心とした黒い閃光の柱がライオンハート・ザンバーから放たれ、三人を飲み込んだ。そのまま黒い閃光の柱は天井の遮断シールドを突き破り、三人をアリーナ外へと叩き出す。

「・・・あ、出来れば捕獲しろって言われてたけど・・・、まいっか」

ライオンハート・ザンバーを下ろしながら太陽は一人囁き、態勢を反転させて夜明達の所にまで下りてきた。

「強いな、お前」

唖然として喋れないシャルルの替わりに、夜明は下りてきた太陽に言った。ニヤッと良い笑顔を浮かべながら太陽はＩＳ装甲を解除し、右手を腰に当てる。

「私は常にお前の隣りに立っているんだ。なら、これくらいの強さは必要だろ？」

笑顔のまま言い切る太陽に夜明は何も言えない。苦笑いを浮かべながら、バルディッシュトワイライトの待機状態である、紅の太陽を模したネックレスに視線を注いだ。

「にしても、よくあんな良いタイミングで最適処理化（フィッティング）が終わったな。運が良いと言うか何と言うか・・・」

「バルディッシュトワイライトのコアに干渉して、無理矢理計算を速めたからな。いやぁー、大変だった」

「・・・お前、無理すんなぁ・・・」

呆れたように夜明が呟くと、太陽はクスクス笑いながら夜明の頬を突く。

「無理を通して道理を蹴飛ばす。それこそ人生の醍醐味だろう。それに、忘れたのか、夜明？」

誰もが見惚れる笑顔を浮かべたまま、太陽は悪戯っぽくウィンクした。

「私は不可能を可能にする女だぞ」

戦場に舞うは黒き黄昏の姫（後書き）

次回予告

鈴音よ。太陽の奴あんな強かったんだ！？　物静かなイメージしかなかったからちょっと意外かも・・・。

さて、次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『太陽、過去を大雑把に語る』

『ラウラ・太陽と友人になる』

『シャルル、夜明と一緒に風呂に入る』

の三本よ。次回も見なさいよ、ジャン、ケン、ポン！

『パー』

見ないと衝撃砲ぶち込むわよ！！

太陽の過去。頑張るシャルロット。（前書き）

太陽の過去が・・・まぁスルーしてください

太陽の過去。頑張るシャルロット。

「う・・・」

瞼を下ろしている目に光が降り注ぎ、少しだけ眩しさを感じたラウラはゆっくりと瞼を上げた。

「・・・知らない・・・天井」

視界に入った白い天井を見て、思わずそんな事を言ってしまう。すると、自分が横たえられているであろうベットの側から、小さなため息が聞こえた。

「まさかお前がネタに走るとはな・・・。まぁいい、気分はどうだ？」

その聞き覚えのある、と言うか一瞬で誰なのか判断できる声に反応すると、そこには案の定、ベットの側に立っている千冬の姿が。

「私は・・・？」

「無理な負荷が身体に掛かった事による筋肉疲労、及び打撲だ。当分の間は動けないだろうから、無理はするなよ」

どことなくはぐらかすような口調。

「私に・・・何が起きたのですか？」

ラウラはその口調には誘導されず、全身に走る痛みを無視しながら

上半身を起こした。赤と金のオッドアイで真っ直ぐと千冬に訊ねる。引く気はないと見たのか、千冬は一度ため息を吐いて話し始めた。

「一応、重要案件、機密事項であることは留意しておけ。ＶＴシステムは知っているな？」

「はい。正式名称ヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロッソの部門受賞者（ヴァルキリー）の動きをトレースするシステム。でも、確か・・・」

「ご名答だ。ＩＳ条約で現在どの国家・組織・企業でも研究・開発・使用が全て禁止されている。そんなシステムが、何故だかお前のＩＳに積まれていた」

「・・・・・・」

「現在、学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろうな。お前にも何らかの事情聴取が来るかもしれない、覚悟しておけ」

千冬の話を聞いてはいるのだろうが、ラウラは視線を千冬に向けず、シーツを握り締めた両手に落とす。

「私が・・・望んだからですね」

織斑千冬になることを。言葉として伝えこそしなかったが、千冬にはラウラの言いたいことがちゃんと分かったようだ。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はい！！」

突然、名前を大声で呼ばれ、ラウラは反射的に視線を千冬に向ける。

「お前は誰だ？」

「私、は・・・・。私・・・・は」

ラウラ・ボーデヴィッヒです。その言葉が口から出てこない。どうしても今の状況では、そうであると自信を持って言い切れなかった。

「答えられないなら、これからラウラ・ボーデヴィッヒになればいいさ」

いきなり、第三者の声が介入してくる。少しだけ驚きながら二人が振り返ると、そこには保健室のドアに軽く体重を預けた太陽の姿があった。手には少し大きめの箱を持っている。

「夕暮、身体は大丈夫なのか？」

「元々、怪我どころかかすり傷一つさえついてませんでしたからね。検査するだけ時間の無駄ってやつです」

肩を竦めながら、太陽は千冬の隣りに立った。二人とも、女性としては身長が高い上に背筋もピシッと伸びているので、二人が並んで立つ光景はとても絵になる。そんなことを、ラウラは無意識の内に考えていた。千冬はニッ、と笑うと、ラウラの頭に手を置く。

「夕暮の言うとおりだな。お前はこれからお前になれ。少なくとも三年間はこの学園に在籍していなければいけないんだ。時間は死ぬ

ほどある、悩めよ小娘」

ラウラを一撫でして、千冬は背を向けてドアに歩いていった。まさか撫でられるとは思っていなかったのか、ラウラは少しだけ口を半開きにして千冬の後ろ姿を見ている。

「あぁ、それとだな」

ドアに手をかけたところで立ち止まり、振り返ることなく言葉を投げかけた。

「お前は私にはなれないぞ。あいつ等の姉というのは、こう見えて心労が絶えないのさ」

それだけ言い残して、今度こそ千冬は保健室から出ていった。保健室には呆然としているラウラと、クスクス笑っている太陽だけが残される。

「かけても？」

「あ、あぁ」

ラウラから許可を貰い、太陽はベットの側にある椅子に座った。その際に持っていた箱をサイドテーブルに置く。

「気分はどうだ？」

「悪くはないが・・・何故ここに？」

「少しの間だけとは言え、共に闘った仲なんだ。相方の心配をする

のは当然だろ？」

どうにも反応に困る返答が返ってきたので、ラウラは多少の気恥ずかしさを覚えながら話題を変えるべく、サイドテーブルの上に乗せられた箱を指さした。

「それは？」

「私が作ったケーキだ。腕にはそれなりに自信がある。よければ食べてくれ」

「そ、そうか・・・」

何とも言えない沈黙が流れる。その沈黙に耐えきれず、ラウラが太陽の方を見ると、太陽は薄い微笑を湛えながらラウラを見ていた。

「・・・そう言えば夕暮。お前、以前の私闘の時『闘うためだけにこの世に生を受けたのは何もお前だけではないぞ』と言っていたが、どういう意味なんだ？」

ふと、ラウラはそんなことがあったな、と思い出しながら太陽に訊ねた。

「良く覚えてたなそんなこと。・・・そのままの意味さ。私はお前と同様、闘うためだけに生を受けさせられた・・・いや、闘うために存在その物を書き換えられた、と言う方が正しいな」

「・・・存在を書き換えられた？」

「あぁ。ＡＤＶＥＮＴ（アドベント）　ＣＨＩＬＤＲＥＮ（チルドレン）。私達のことを闘うため

の存在に変えた連中は私達のことをそう呼んでいた」

特に言い淀む訳でもなく、太陽は滑らかに話し始めた。

「連中の話を要約すると、私達は身寄りのない孤児で、何処に連れて行かれようが誰も困らなかったらしい。あぁ、言い忘れていたが、私は連中に引き取られた時、つまり五歳の時までの記憶を一切なくしている。連中の目的は唯一つ、世界最強の兵器、ＩＳを誰よりも上手く扱える最強の人形を作り出すこと。引き取られた私達はその為のモルモットと言う訳さ」

「・・・続けてくれ」

「五歳までの記憶が無いのは、連中が私達の遺伝子を弄くり回してくれた時の弊害らしい。だから、元々自分がどんな名前で呼ばれていたのかも覚えていない・・・。話が逸れたな。遺伝子を弄くり回された私達は一切の記憶、感情を奪われて様々な訓練を施された。ＩＳの操作、人を殺すための技術、挙げれば切りがない。その中で、私は常に最高の成績を記録し続けてきた。だから、連中は私のことを最高傑作と呼ぶと同時に、最低最悪の欠陥品だとも呼んでいた」

「最高傑作なのに・・・最低最悪の欠陥品？」

訝しげに眉を顰めるラウラに、太陽は微笑しながら親指で自身のこめかみを示す。

「ＡＤＶＥＮＴ（アドベント）　ＣＨＩＬＤＲＥＮ（チルドレン）の中で、私だけが感情を残していたのさ。だから、私だけは連中の言うことに逆らい続けてきた。普通の訓練は真面目に受けてやっていたが、訓練の一つに人間を殺す、ここで対象になったのは公の場に出すことが出来ない犯罪者だ

ったな。とにかく、訓練の一つで人間を殺すと言うくそ巫山戯た物があったんだが・・・。その時、少しキレてしまってな。単身で連中が使用していた研究所の五分の三を潰した。全部破壊するつもりだったんだが、取り押さえられてしまったんだ。その後、連中は私に一切の訓練をさせないで、私から感情を取り除くことに全力を注いだ」

「な、何をされたんだ？」

怖い物見たさ、もとい聞きたさでラウラは訊ねた。太陽は相変わらずの微笑を、けど何処か濁ったような笑みを浮かべてラウラを見据える。

「聞くか？　私は別に話しても構わないが、聞けば少なくとも向こう一週間、飯は疎か、水も飲めなくなるぞ」

表情を青ざめながらラウラが首を振ったのを見て、太陽は話を続けた。

「連中が私から感情を取り除こうとしたのを始めたのは、私が八歳の時だったからな。四年間、連中は私から感情を取り除こうと努力したが、無駄だと分かったのか遂に諦めて私を拘束して牢屋にぶち込んだ。処分しなかった辺り、連中がどれ程私に未練を残していたかが窺えるな」

ククク、と太陽は愉快そうに喉を鳴らす。

「そんな生かさす殺さずの生活を一年間強いられて時だ。あいつは私の前に現れた！！」

突然、太陽は目をキラキラ輝かせながら身を乗り出してラウラを見た。反射的にラウラは身を引く。その太陽が言うあいつが誰のなのか、容易に想像がついた。

「月光、か？」

「あぁ！　夜明（あいつ）は血と硝煙しかなかった私の世界を一瞬で叩き壊し、そこから私を引きずり出した。そして、番号で呼ばれていた、名前の無かった私に夕暮太陽という名前をくれた」

『こんな陰気くさい所で何してんだよ？』

『闘うためだけの存在？　それがどうした。闘うためだけの存在が生きてちゃいけないなんて道理は無ぇだろ』

『名前が無い？　そりゃ不便だな・・・。よし、俺が名付けてやる』

数年経った今でも覚えている。とてもじゃないが忘れられる物では無い。記憶を奪われ、闘うこと・・・殺すことしか知らなかった彼女にとって、彼の仕草が、全てが、存在その物が直視できないほどに眩しかった。

「だから、決めたんだ。夜明の為に生きて、夜明の為に死ぬと」

「・・・・・お前も、あいつに救われたんだな」

「あぁ。あいつに救われた者同士、仲良くするか」

二人は顔を見合わせ、タイミングを図ったかのような同じタイミングで笑い始めた。一頻り笑うと、太陽は椅子から立って腰に手を当

てる。

「では、私はこの辺で失礼させてもらおう。皿とフォークは箱の中に入ってる。食べた感想なんか聞かせてくれると嬉しい」

「あぁ、分かった。・・・優しいんだな、お前は」

「いいや、違うね」

ククク、と愉快そうに笑いながら、太陽は親指と人差し指で小さな隙間を作った。

「人よりお節介なだけさ。ほんのちょっとな」

じゃ、と背を向けながら片手を上げ、太陽は保健室から去っていく。暫くの間、ラウラはドアを見ていたが、太陽が置いていった箱から皿とフォーク、それから生クリームとイチゴで出来たケーキを取りだして一口食べた。

「・・・うまい」

ケーキを口に運ぶたびに、咀嚼するたびに身体に痛みが走るが、それすらも今の彼女にとっては嬉しい物だに感じられる。

彼女は。ラウラ・ボーデヴィッヒはここから始まるのだから・・・。

「・・・」

学生寮の屋根の上。そこで、夜明は組んだ両腕を枕にして、更に足を組みながら無言で星空を仰いでいた。

「何してるの、夜明？」

声がしたので、視線のみをその方向に向けてみると、シャルルが立っていた。夜明はそのまま視線を星空に戻し、端的に答える。

「星、見てた」

ふ～ん、と言いながら、シャルルは夜明の隣りに座って寝ころびな

がら夜明と一緒に星空を見上げた。
アリーナでの騒ぎを収めた張本人が何でこんな所でのんびりとしているのかと言うと、ついさっき、漸く教師陣からの事情聴取が終わり、食欲も無かったので夜明は屋根の上までやって来て、星空を見上げていたと言うわけだ。ちなみに、シャルルはキチンと夕飯を食べている。

「シャルル。一つ聞きたいことがあるんだけど、いいか？」

「うん、良いよ。僕の答えられる範囲でなら答えるよ」

事情聴取やら何やらで、夜明と一緒に色々と偉い目にあったシャルルだが、何故だかニコニコと笑っていて機嫌がいい。

「ＩＳで会話とかって出来るのか？　プライベート・チャネルとは違う・・・二人だけの空間、って感じの」

「二人だけの空間？　う～ん・・・操縦者同士の波長が合うと特殊な相互意識干渉（クロッシング・アクセス）が起こるって言う。・・・多分、それだと思う」

「波長ねぇ・・・。よぉ分からん」

「仕方無いんじゃないかな。ＩＳにはまだよく分かってない機能や現象がかなりあるから。開発者の篠ノ之博士も全部を把握するのは無理だって、どこかのインタビューで答えてたから」

「あの人の場合、面倒だからサボっただけだろ・・・んぁ？」

何か刺々しい視線を感じ、隣りを見ると、さっきまでの機嫌の良さは何処へやら。シャルルがむすぅ～っとした表情で夜明を見ていた。

「夜明、二人だけの空間って、もしかしてボーデヴィッヒさんと？」

「はっきりと覚えてる訳じゃないけど、多分な」

「ふ～ん、そう」

何処か拗ねたような口調で、シャルルは夜明にそっぽを向きながら空を見上げる。夜明は何でシャルルが不機嫌なのか分からずキョトンとしていたが、考えても分かりそうにないから空へと視線を戻した。

「・・・よ、夜明。話したいことがあるんだけど・・・」

「話したいこと？」

横を向くと、シャルルは若干顔を赤くしながら夜明を見つめている。

「うん、大事な話」

「別に構わないぞ」

「なら・・・」

よっこらしょっ、とシャルルは起きあがり、両手を夜明の頭の両脇に置いて馬乗りになった。突然シャルルに跨られ、夜明はポカンとした表情を作ってシャルルを見る。

「あの、シャルル。何で俺の上に馬乗りのなってんの？」

「え!?　そ、それはその・・・大事な話だからちゃんと目を見ながら話したいと思って!」

「そうか。で、話って何?」

この言い訳を信じるのが夜明クオリティ。シャルルは夜明があっさりと無理な理由を信じたことに面食らったが、意識を変えてじっと夜明の目を覗き込んだ。

「その・・・この前の話のことなんだけど・・・」

「この前・・・学園に残るってあれだよな?」

「そう。僕ね、ここにいようと思うんだ。僕はまだ、ここが自分の居場所だって思える所が見つけられていないし、それに・・・」

「それに?」

首を少しだけ傾けながら訊ねてくる夜明に、シャルルは沈黙を返しながら深呼吸を数回繰り返す。そして、片手を夜明の胸に置いた。

「夜明が僕の命は僕だけの物だって教えてくれたから、夜明が僕の居場所になってくれるって言ってくれたから。そんな夜明がいるから、僕はここにいたいと思えるんだよ」

「そうかい」

夜明は嬉しそうに笑った。もし、自分が言ったことが誰かの決断を促すために役立ったというのなら、こんなに嬉しいことはない。

「それにね。もう一つ決めたんだ」

「へぇ、そうなのか」

「うん、僕の在り方。夜明が教えてくれたんだよ？」

「う～ん・・・覚えが無ぇな」

「ははっ、夜明って本当に自分に関することはどこまでも鈍いよね。憎たらしくなるくらい」

「面目ない」

「いいよ、許してあげる。でもその代わり、これからは僕のことシャルロットって呼んでくれる？　二人切りの時だけでいいからさ」

「シャルロット・・・」

「うん、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「了解だ、シャルロット」

「ん♪」

夜明に撫でられ、シャルロットはとても嬉しそうに返事を返した。屈託のない十五歳の女の子の笑顔、あの時浮かべていた無邪気な笑顔を。シャルルは笑顔を浮かべたまま、夜明の胸に頬摺りした。

「このままここで寝ちゃ・・・駄目かな？」

「偶には良いんじゃねぇの？　星空キャンプも良いもんだ」

夜明はシャルロットの頭を撫でながら星空を見上げる。そんな夜明に甘えるように、シャルロットは夜明の胸に顔を埋めた。

「・・・昔ね、僕が夜怖くて眠れなかった時、お母さんが一緒に寝てくれたんだ」

「ふ～ん・・・」

不意に、シャルロットは遠い目をしながらポツリと呟いた。シャルロットを撫でる手を止めることなく、夜明は耳を傾ける。

「夜明が撫でてくれるみたいに、お母さんも僕を撫でてくれた。それで、僕が眠りそうになった時は額にキスしてくれたんだ・・・」

シャルロットの目がとろんとし始めた。夜明はシャルロットを撫でていた手を止め、額にかかっている金色の髪をかき上げて軽くキスする。

「寝れそうか？」

普段通りの声音の夜明の問い。対するシャルロットは顔が爆発したかのように赤くなっていた。

「・・・余計寝れなくなっちゃったよ・・・」

「ん？　何だって？」

「何でもない！」

夜明に顔が赤いことを悟られないように、シャルロットは顔を夜明の胸にグリグリと押しつけた。シャルロットの行動に疑問符を浮かべるも、夜明はゆっくりと目を閉じていった。

翌日の朝のＳＨＲ。シャルロットの姿が見当たらない。同じようにラウラの姿もないが、昨日の今日なので、差詰め負傷での休みだろう。

「夜明、シャルルはどうしたんだ？」

「さぁ？　先に行ってて言って、食堂で別れたからな。何か部屋に忘れ物でもしたんじゃねぇの？」

一夏の問いに夜明が答えていると、教室の扉が開いて山田先生が入ってきた。

「み、みなさん。おはようございます～・・・」

何故だか元気がない。心なしか、眼鏡もずり落ちてるような気がする。

「今日はですね、転校生を紹介します。いや、転校生というか、もう自己紹介はすんでるというか・・・」

困ったように頭を抱える山田先生を尻目にクラスは一気に騒がしくなった。今月だけで既に二人も転校生が来てるというのに、まだ来るのか。夜明と太陽も少しばかり興味津々で顔を見合わせる。

「それでは、入ってきてください」

「失礼します」

妙に聞き覚えのある声。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願いします」

ぺこりと皆に頭を下げたのは女子制服を着たシャルロット。丁寧に頭を下げられたもんだから、ポカンとしていた一同は頭を下げてし

まう。

『え？　デュノア君って女？』

『おかしいと思った。男にしてはどうも線が細いと思ってたのよね』

『あれ、月光君って同室だったんだから気付いて無いわけ』

ここに来て、誰よりも速く正気に戻った夜明は一夏の方を見た。

「一夏」

「何だ？」

「地の果てまで逃げてくる！！」

「健闘を祈る！！」

互いに敬礼を交わし、夜明は弓から放たれた矢のようにドアへ向けて走り始めた。だが時既に遅し、廊下側から蹴破られたかのような勢いでドアが開かれる。入ってきたのは・・・。

「夜明ぇっ！！！！」

鈴音だった。しかもご丁寧にＩＳアーマーを展開し終えている。

「死ね！！！」

両肩から放たれたフルパワーの衝撃弾。どうにかレイジングウィングを展開して防ごうとするが、当然間に合う訳もない。夜明の脳裏

に記憶が走馬燈のように駆け抜け始めたその時。

ガァンッ！！！

何かが夜明と鈴音の間に割って入って衝撃弾を防いだ。驚く無かれ、二人の間に割って入ったのは何と・・・ＩＳを展開したラウラだった。よくよく見ると、両肩に装備していた大型カノンが無い。

「た、助かった・・・。ありがとな。にしても、お前のＩＳ、もう直ったのか、すげ」

「コアが辛うじて無事だったからな、予備のパーツで組み直した」

「ほぉ、そいつはすむごぉ！！」

夜明はそこから先を続けられなかった。何故なら・・・ラウラに胸倉を掴まれ、唇を唇で塞がれたからだ。数秒後、ラウラは夜明を解放し、一方的に指を突きつけて宣言する。

「私はお前を嫁にする！　異論は認めない！　決定事項だ！！」

「嫁？　俺、男なんですが・・・」

「日本では気に入った相手を嫁にするのが習わしだと聞いた」

「いや、んな習わし無いから」

冷静に突っ込んだところで、夜明はハッとしたように周囲を見た。まず最初に目に入った鈴音が金魚よろしく口をパクパクさせている。

「あ、あんたねぇぇっ！！！」

「サラバ！！」

再び衝撃砲の砲口が覗いたのを見て、夜明は鈴音が入ってきたのとは反対のドアへと走る。が、ドアに手を伸す前に頬をビームが掠めた。恐る恐る振り返ると、

「夜明さん、どこにお出かけになるんですか？　私、いそいで話さなければならないことがありまして、えぇ、急を要しますの。ホホホホホ・・・」

笑いは優雅。だが、目は完全に逝っている。夜明はすぐに身を翻して窓へ向かう。そこに立ちはだかる影が一つ。

「夜明」

「た、太陽！　あれは不可抗力だ！　幾ら何でも反応できないって！！」

自分と同等、若しくはそれ以上の身体能力を有する太陽から逃げ出すのは困難と考え、夜明は必死の説得を試みた。太陽は目を閉じ、腕を組んだまま一度頷く。

「確かにな。さっきのは不可抗力だろう。でもな・・・」

「でもな・・・」

太陽はクワッと両目を開いて指を夜明に突きつけた。

「不可抗力と分かってても乙女には許せん物があるんじゃぁーっ！！！

震えるぞハート！
燃え尽きるほどヒート！
おおおおおっ
刻むぞ血液のビート！！」

「ちょ待てぇっ！！　お前何時の間に波紋なんて会得した！？」

「とある学者はこう言っていた。複雑怪奇、天外魔境な乙女心は不可能を可能にすると！」

「マジ！？」

「マジだ！　喰らえ、山吹色の波紋疾走【サンライトイエローオーバードライブ】！！」

「ぐあああああ！！！！！！！！」

金色の波に飲み込まれ、夜明は吹き飛んで壁に叩きつけられる。

「くそっ・・・こうなったら俺はパワーを持った像を呼び出してオラオラオラと連呼させるしかないのか・・・」

そんな馬鹿な事を言っていると、ちょいちょいと肩を叩かれた。振り返ると、とっても素敵な笑顔を浮かべたシャルルが立っている。但し、その腕に展開されているアーマーはとっても素敵ではない。

「夜明って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしちゃったよ」

「いや、俺としてはそんな物を展開させているお前にビックリだ・・・」

シャルルはニコッと笑い、アーマーをパージさせる。そして現れた六十九口径パイルバンカー、『灰色の鱗殻【グレー・スケール】』。

「は、ハハハハハハ！！」

「知ってるか、箒。人間って極限を超えると笑うしかなくなるらしいぞ」

「あれがそうだというのか・・・」

二人は散りゆく友に合掌。轟音が教室を、学園を揺らしたのは言うでもない・・・。

太陽の過去。頑張るシャルロット。（後書き）

次回予告は休み

覚醒の前兆

「ゴメンね、わざわざ手伝ってもらって」

「良いってことよ。どうせやることなかったしな」

地平線に沈んだ夕陽が赤い光を射し込む廊下、夜明とシャルロットは今月の学校行事である臨海学校の詳細について書かれたプリントを持っている。

「やることなかったって・・・、今日はセシリア達と街に行くんじゃなかったの？」

「いいのいいの。そもそも、お前がいなきゃ行っても意味無いしな」

「ふぇ？」

「ま、何をするにしたって好きな奴と一緒の方が良いってことさ」

そう言いながら、夜明はいつものようにシャルロットの頭を撫でる。その頬が若干赤く見えるのは、窓から射し込んだ夕日の所為だけでも無さそうだ。

「夜明・・・・・・」

「シャルロット・・・・・・」

廊下で見つめ合う二人。時と場所を考えろと言ってやりたいが、恋する男女にそんな事を言うのは無粋以外の何ものでもない。夜明は

シャルロットを撫でていた手を項に回し、ゆっくりと引き寄せ・・・。

「あ・・・れ・・・？」

ぼーっとした頭をフル回転させながら、シャルロットは現状を把握する。現在は朝の六時半、間違っても廊下に夕陽なんて射し込んじゃいない。加えてここは廊下ですらない。一年寮の自室だ。詰まるところ・・・。

「夢・・・」

シャルロットは上半身を起こしながら深く、深くため息を吐く。その深さは深海二万マイルを優に超えそうだ。

（あぁ、せめてもう十秒くらい見れてれば・・・）

名残惜しさ故か、シャルロットは先程まで見ていた夢を脳内シアターでリプレイした。数秒ほどして、顔が爆発したように赤くなる。何やってんだか・・・。

（学校、それも廊下でやるなんて・・・）

胸に手を当ててみれば分かる。心臓が機関銃の如く鼓動を乱射していることが。でもよくよく考えてみると。

（あの朴念仁・オブ・朴念仁ズの夜明からキスしてくるなんて有り得ないね・・・）

一気に鼓動が収まった。はぁ、とまたもや深いため息を吐きつつ隣りのベットを見ると、そこにはルームメイトの姿が無かった。余談だが女子と言うことが発覚したので、シャルロットと夜明は別々の部屋になっている。当然と言えば当然だが・・・。

「ま、いっか・・・」

こんな早朝からいないルームメイトのことも気になるが、シャルロットの脳内においての優先順位は今すぐに二度寝をして、夢の続きを見ることだ。夢の続きが見れますように、と心の中でお願いしな

がら、シャルロットはシーツを被って横になる。

（でも、どうせ夢ならもうちょっとエッチィのでもいいのに・・・）

またしてもシャルロットは顔を爆発させた。鼓動を収めるのが一苦労だったのは言うまでもない。

（そう言えば・・・）

ふと思う。

「夜明ってどんな夢を見てるんだろう・・・？」

ザァ・・・ン、ザァァ・・・ン。

（波の音が・・・聞こえる）

優しげな波の音が耳を撫でていくのを感じながら、夜明は周囲を見回した。どこともつかぬ雪のように真っ白な砂浜。

「・・・見覚えがねぇな」

困ったように頭を掻く夜明。世界中を歩き回っている夜明だが、こんなにも白い砂浜は見たことがない。仮に見ていたとしたら、忘れている訳がない。

「取り敢ず・・・寝るか」

両腕両足を広げて、砂浜の上に大の字に寝そべりながら、夜明は目を閉じた。敷き布団代わりの白いサラサラとした砂が心地よい。そのままうつらうつらしていると。

「・・・を・・・るか？」

「んぁ？」

聞き慣れない声が耳に入ってきたので、夜明は深い闇の中に落ちそうになっていた意識を引きずり上げた。身体についた砂を落としながら声のした方向を向くと、そこに一人の女性が海の中、膝下まで

を海に浸からせながら立っているのが見える。

「・・・」

夜明にはその人物に見覚えは無い。だが、妙な親近感を覚えたのも確かだ。

何時も自分と共に闘ってくれる相棒を連想させる細く、鋭いラインをした白銀の甲冑。
顔は目部分のみがガードで隠されて表情は窺えず、肩に掛かるくらいにまで伸びた銀色の髪にはシャギーが入っている。
そして何よりも目を引くのはその背中から生えている二対の天使のような翼だ。優に数メートルはあろうかと思えるその翼は淡い燐光を放ちながら、時折蒼く脈打っている。

「・・・を・・・るか？」

再びその女性、蒼き翼の騎士は訊ねてきた。それ程距離が離れているわけでもない。なのに、その声は酷く小さく籠もっていて、夜明には聞こえていない。

「あぁ～、悪い。良く聞こえないからもう一遍言ってくれねぇか？」

蒼き翼の騎士の声を聞こうと夜明が立ち上がった瞬間、突如として白い霧が二人を覆い始めた。ギョッとする暇もあらばこそ。夜明の視界はあっという間に霧に飲み込まれ、何も見えなくなった。

「・・・夢だよな」

漸く白い霧が薄れて視界が晴れると、そこにはここ最近で見慣れ始めた天井があった。夜明は妙にスッキリしてしまった頭でさっきまで見ていた夢のことを考える。

「あんな場所、知らないよな・・・。それに、あの女の人は一体？・・・考えても詮無いことか」

やれやれとため息を吐きながら起き上がろうとすると、

「ん・・・・・・」

この部屋にいるはずのない、自分以外の声が聞こえた。そして声の高さから察するに、男の物ではない。と言うか、もしこれが男だったら、頭が砕け散るまで夜明は自分の頭を壁に打ち据え続けるだろう。恐る恐る、且つ慎重に布団に手をかけ・・・一気にめくる！！

そこには案の定・・・。

「やっぱりお前かラウラ・・・」

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒその人だ。転校初日から一夏の頬を張ろうとし、その一撃を止めたのがそもそもの始まり。その後色々と・・・色々とありすぎた。取り敢ず、目下の問題は・・・。

「・・・何で素っ裸なんだよ・・・」

ラウラが裸で寝ているという点だ。身につけている物を上げるとすれば、左目を覆う眼帯と待機状態のＩＳである、右脚のレッグバンドのみ。

「ん、何だ朝か。夜明、お早う」

何か慌てるでもなく、普っ通にラウラは朝の挨拶をしてくる。その図太さに一種の感銘を受けながら、夜明は自身を落ち着かせるために一度咳払いをした。

「￥―＝＊、＃＄％　（お早う、ラウラ）」

・・・まったく落ち着いていなかった。夜明の口から出てきたのが意味不明な言語だったためか、さしものラウラも目を丸くして驚いている。

「あぁ～、夜明。一応言っておくが・・・ここは地球だぞ？」

「分かっとるわんな事！！」

哀れみとも呆れともつかない表情で冷静に突っ込まれ、夜明は落ち着くことではなく怒ることで日本語を取り戻した。

「ったく、何だってお前は俺のベットに、しかも素っ裸で寝てんだ？」

「夫婦とは何も包み隠さぬものだと聞いたぞ。それに、こういう起こし方は将来結ばれる者同士の定番だとも」

「まず第一に俺とお前は夫婦じゃないし将来結ばれる者同士でもないしそもそもそんな間違った知識をお前に教えたのはどこの大馬鹿野郎だって俺は何処から突っ込めばいいんでしょうねぇーっ！！」

ほとんどやけくそ気味になりながら夜明は頭を掻きむしった。その際に指から発生した摩擦が脳に良い効果をもたらしたのか、ふと夜明の頭に名案が浮かぶ。

「ラウラ」

「何だ？　・・・子作りなら学校が終わってからが／／／」

「違う！！　身体をシーツで隠しながら頬を赤らめるな！！　俺が言いたいのはだな・・・俺は奥ゆかしい人が好きだ」

ほぉ、とラウラの目が丸くなった。その言葉を噛み締めるように二

度、三度頷く。うまくいった。と思えたのも束の間。

「成る程・・・しかしそれはお前の好みだろう？」

「へ？」

「私は私だ」

シーツで隠した胸を堂々と張るラウラ。その余りに堂々とした姿に、夜明は呆れを通り越して感心してしまう。

「それにな、お前の相棒が言ったんだぞ」

「太陽が？　何を？」

「私は私になれと」

「朝っぱらから裸で野郎の寝床に潜り込むことがお前、ラウラ・ボーデヴィッヒのなり方なのか！？」

「安心しろ。こんな事をする相手は嫁のお前だけだ」

「だから俺は男だ！！」

「えぇい！　なら腹を括って私に唇を奪われろ！」

「もう奪われたわ！！　つぅかこれ以上キスされてたまっか！！」

痺れをきらして飛び掛かってきたラウラをシーツで受け流し、夜明はラウラを取り押さえるべく手を伸す。が、ラウラも訓練された軍

人。伸びてきた夜明の手を蹴り上げ、逆に取り押さえに来た。

「何の！！」

「流石は私の嫁だ！！」

こんな感じで攻防が続く。・・・こうやって見てみると、この二人は結構良いコンビなのかもしれない。

「「あ」」

どこか既視感（デジャヴ）を感じさせる声を同時に上げながら、セシリアと鈴音は廊下でばったりと出くわした。この先を歩いていって辿り着くのは夜明の部屋。二人の目的は明確である。

「あら、こんな所で出くわすなんて偶然ね」

「えぇ、まったくの偶然ですわね」

からからと二人は笑う。どの口が偶然なんて戯けた事を抜かせるのやら・・・。

「私は夜明さんと一緒に朝食を頂くつもりですが、鈴さんは？」

「私も夜明のこと朝食に誘おうと思って。あ、私が誘ってくるからセシリアは先に食堂に行っててていいよ」

「そういきませんわ。鈴さんこそお先に食堂へどうぞ。夜明さんは私が責任を持ってお連れしますから」

「アハハ。いいからさっさと行けって言ってんのよ金髪ロール・・・」

「オホホ。お断りすると言ってますのまな板中華小娘・・・」

廊下のど真ん中で、竜虎よろしく額を突き合わせながら睨み合う二人。いや、こんな低レベルなメンチの切り合いで引き合いに出すのは竜虎に失礼だろう。敢えて喩えるとすれば・・・狐と狸の化かし合い・・・が妥当だろう。そんな不毛且つ低レベルな睨み合いを続

ける二人に近づく一つの人影。

「廊下のど真ん中で何をしてるんだお前等は・・・。邪魔だろうが」

二人は良く知っている。この辛辣且つ、何の遠慮も配慮も持たない声の持ち主を。

「「太陽【さん】？」」

二人の側に立っていたのは今も眠っているはずの太陽だった。以前にも説明したとおり太陽は異常なほど朝に弱く、起床して一時間はまともな行動が出来ない。その太陽がこんな朝早く（六時半過ぎ）で、しかも意識をはっきりとさせているのだ。二人の驚きはそれなりに大きい。

「太陽、あんたがこんな朝早くに起きてるなんて珍しいわね。天変地異の前触れ？」

「地球滅亡のサインか何かでしょうか？」

友人二人の何とも心暖まる言葉に表情を顰めながら、太陽は何故だかうっすらと濡れている髪を指で梳いた。

「箒が起こしてくれたんだよ・・・頭に冷水ぶっかけてな」

「「あぁ」」

太陽の髪が濡れてることに合点がいき、二人は揃って手を打つ。やれやれと首を振りながら、太陽はさっさと二人の横を通り過ぎて夜明の部屋へと向かった。

「ちょ、待ちなさいよ太陽！」

「抜け駆けは卑怯ですわよ！」

慌てて二人は太陽の後についていく。一分も経たぬ内に三人は夜明の部屋の前まで来た。

「・・・何をしてるんだお前等？」

扉をノックしようと持ち上げた手をそのままに、太陽は後ろを振り返りながら呆れた表情を作る。鈴音はしきりに髪型を気にし、セシリアは声の調子を整えるために何回も咳払いをしていた。太陽はため息を吐きつつ、ノックのために持ち上げた手を一旦下ろして二人を待つ。別に二人を待つ必要はないのだが、律儀に待つ辺り太陽の優しさが窺える。二人が準備を終えたのを確認して、太陽は今度こそ扉をノックした。

「おい、夜明。起きてるか？　起きてるなら一緒に朝食を食べないか？」

返事は返ってこない。替わりに返ってきたのはドスンやらバコンやら剣呑な音。三人はビックリしながら顔を見合わせ、扉にそっと耳を押しつけた。ドカン、ズコンなんて音に紛れて、微かだが会話が聞こえる。

『この気持ち、まさしく愛だ！！』

『愛だと！？』

『そうだ！　だが、行き過ぎれば愛も憎しみに変貌する！』

『そんなことがあってたまるか！　あんたは歪んでいる！！』

『そうさせたのはお前だろうに！！　だから私はお前の唇を奪う！
世界など関係無しに！！』

『あんただって世界の一部だろうが！！』

『ならばそれは、世界の声だ！』

『あんたのその歪み、俺が断ち斬る！！』

何ともネタに満ちた会話だ。夜明の部屋に侵入者が忍び込んだのだろうと推測した三人は再び顔を見合わせ、完璧に息のあったタイミングで扉に蹴りをぶち込んで粉砕する。

「夜明！　大丈夫・・・」

「夜明の部屋に侵入するなんて良い根性して・・・」

「夜明さん！　このセシリア・オルコットが来たからにはもう大丈夫・・・」

上から順に太陽、鈴音、セシリアだ。そして固まる三人の視線の先では。

「はぁ、はぁ・・・。流石は私の嫁だな」

「ぜぇ、ぜぇ・・・。だから俺は男だ」

汗だくになった全裸のラウラと、同じく汗だくになってラウラをベットの上に押さえ込んでいる夜明の姿がある。汗だく、全裸の美少女に、同じく汗だくの美少年。しかも美少年の方は美少女に馬乗りになって押さえ込んでいる。必然、導き出される答えは一つ。

「「「夜明ぇっ！！！」」」

「うぇい？」

突然、大声で名前を呼ばれ、漸く夜明は三人の存在に気付いた。

「あ、お前等。どうし「死ね！！」うぉっ！？　鈴音！　お前一体何をとち狂って衝撃砲なんかぶっ放「死になさい！！」ぎゃぁっ！　セシリー、お前もか！？　太陽。二人を止めてくれ！！」

二人が放つ攻撃の雨をラウラを抱きかかえて避けながら、夜明は未だに固まっている太陽に助けを求める。夜明の呼び声で正気に戻った太陽は荒く上下に動いている二人の肩に手を置いた。

「落ち着け二人とも」

二人の砲撃が止み、夜明は安堵のため息を吐く。そのため息が絶望の悲鳴に変わるとも知らずに・・・。

「こういう事はキチンと役割を分担してからやるべきだ」

「・・・へ？」

間抜けな表情を浮かべている夜明を無視し、太陽はてきぱきと二人

に指示を飛ばした。

「鈴音、お前は衝撃砲で夜明の内臓を吹き飛ばせ。なるだけグロテスクにな。セシリア、お前は心臓を打ち抜け。私は頭を斬り飛ばす」

「「了解」」

「いや了解じゃねぇだろ!?」

「「「大人しく往生しろ!!!」」」

「何を言ってるのか分かってんのかお前等!!??」

「人の嫁に手を出すな」

この早朝のドタバタ・・・で済ますには余りにも規模の大きいいざこざは寮母である山田先生が飛んでくるまで続いたとか何とか・・・。

覚醒の前兆（後書き）

次回予告
太陽だ。まったく、夜明の奴。いくら寝ているとは言え布団の中に誰かの侵入を許すなんて気を抜きすぎなんじゃないのか？
さて、次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『夜明、シャルロット、バツを受ける』

『夜明、シャルロット、買い物に行く』

『太陽、セシリア、鈴音、ラウラ、二人の後をつける』
の三本だ。次回も見てくれ。ジャン、ケン、ポン！

『チョキ』
見てくれよ～

デート？　何それ？　カロリーになんの？（前書き）

・・・太陽のイメージソングはデジモン屈指の神曲『ｂｒａｖｅ　ｈｅａｒｔ』に、

夜明のイメージソングはハガレンの「ＲＥＡＤＹ　ＳＴＥＡＤＹ　ＧＯ」にしたいと思います。

デート？　何それ？　カロリーになんの？

「し、死ぬかと思った・・・」

「まったくだ、よく死ななかったな。流石は私の嫁だ」

「お前が言うな！　それに俺は男だ！」

「「「・・・」」」

時間、場所共に移り変わり、現在ここは食堂。あの地獄の修羅場を生まれ持った身体能力とラウラの助けを借りて生き残った夜明ｗｉｔｈ四人娘は、少し遅めの朝食を取っていた。凡に夜明の右隣にラウラ、左隣に太陽、真正面にセシリア、左斜め前に鈴音が座っている。

（皆のもうまそうだなぁ・・・）

そんなことを考えながら各々が口にしているメニューに視線を走らせていると、その視線に目敏く気付いたラウラは夜明に訊ねた。

「何だ、欲しいのか？」

「いや、そう言う訳では」

「分けてやろう」

「人の話を聞け」

恐らく、いや確実に聞いていない。夜明がため息を吐く横でラウラは一口大に千切ったパンを銜え、夜明の口元へと運んでいく・・・。

「何するつもりだお前！？」

「ん、何だ、食べないのか？」

「俺はひな鳥か何かか！　手前の食いたい物くらい手前で食うわ！」

近づいてきたラウラの顔を押し返しながら、夜明は少しばかり赤くなった顔を振った。不意に、ドンッと勢いよくテーブルに食器を置く音が二つ食堂に響く。音の発生源は勿論この二人、セシリアと鈴音だ。

「食事の時くらい静かにしたらどうなのよ・・・」

「そうですわ。他の皆さんにも迷惑が掛かります」

「いや、迷惑もくそも食堂には俺たち以外いな・・・」

夜明はそこから先を続けることが出来なかった。何故なら、二人の額にこれまた見事な血管がビシッと浮き出ているのだから。

今の二人に逆らうのは賢明でないと判断した夜明は無言で箸を進める。が、お隣さんの天然スキル、人の神経を逆なでする、が発動し、巻き込まれるのを余儀なくされた。

「何だ、五月蠅いな。・・・あぁ、嫉妬か」

「「はぁ！？」」

「自分達が出来ないものだから、羨ましいと・・・心の狭い」

「だ、誰が出来ないって！？」

「それくらい私に取っては造作もありませんわ！」

二人はそれぞれのスープ（鈴音はわかめスープ、セシリアはクラムチャウダー）を口に含んで身を乗り出してくる。恐ろしいのはその眼力。

「「・・・！　・・・！！」」

二人の目が速くしろ、とどっちのを飲むんだと言う風に語りかけてくる。どちらか一方を選べば、確実に選ばれなかった方が夜明をあの世に送り届けることだろう。

困り切った表情で夜明は左隣の太陽に視線を向けた。

「・・・」

パクパクと、無言且つ無表情でご飯を口に運んでいる。完全に傍観を決め込んだ態度だ。続いて、夜明はラウラに視線を向ける。

「ちなみに夜明が言ってたんだが」

夜明の視線を感じたのか感じなかったのか定かではないが、チキンサラダを咀嚼しながらラウラは言った。

「こいつは奥ゆかしい女性が好きらしいぞ」

「「！！」」

しれっと言うラウラに、まるで鳩が豆鉄砲を喰らったかのような表情で固まる二人。そしてそうなのか？　と視線で夜明に問いかけてくる。

夜明が返答に窮していると、ご飯を食べ終えた太陽が空になった食器を乗せた盆を運びながら、ボソッと呟いた。

「夜明が好きなのは奥ゆかしい女性じゃない。クールで大人びた女性だ」

ボソリと、だが確実に三人に聞こえるくらいの声量で太陽は囁く。

クールで大人びた女性。すぐさま三人の脳裏にある女性の姿が浮かぶ。常に凛とした、女傑の中の女傑。織斑千冬の姿が。

「「「・・・」」」

「？　どしたお前等？」

無言で固まる三人を見て、夜明はご飯を食べながら首を傾げる。三人の脳内でレベルSの警告アラームが鳴っているのを、彼は知らない。

急に押し黙った三人に疑問符を浮かべていると、

「わああっ・・・！　遅刻、遅刻しちゃう！」

非常に珍しい声が食堂に響いた。声の主は慌ただしく食堂に駆け込み、予め作り置きされていた定食を手にとって空いている席、夜明

の左隣に座る。

「よぉ、シャルロット」

「あ、夜明。お早う」

シャルロットに挨拶をしてから、夜明は食堂の時計に目を向けた。今からでは相当急いで食べなければ授業に間に合わない。と言うか、シャルロットがこんなギリギリの時間で食堂に来ることが珍しい。

「随分遅かったみたいだけど、何かあったのか？」

「う、うん。ちょっと二度寝しちゃって・・・」

「へぇ～」

意外そうに夜明が頷いたその時、無情にも朝のＳＨＲの予鈴が鳴り響いた。

「うわわわわっ！　本当に遅刻しちゃうって！」

余談だが、既に太陽達は食堂を出ていってていない。まぁ、今日の朝のＳＨＲは千冬がやることになっているので、仕方ないと言えば仕方ないのだが・・・。話を戻そう。予鈴がなって更に慌てたシャルロットは急いでご飯を掻き込んだ。急ぎすぎて、当然喉に詰まる。

「何やってんだよお前は・・・」

唯一人、食堂に残ってシャルロットを待っている夜明は呆れたようにため息を吐きながら、シャルロットにコップを渡してその背中を

さすってやった。

「・・・あ、ありがとう・・・。って、夜明！　急がなきゃ！」

「そいつもそうだっと！」

二人は急いで食堂を飛び出していった。ＳＨＲの本鈴が鳴るまで約一分、死ぬ気で走ればギリギリで間に合うかもしれない。昇降口に駆け込んで下駄箱から上履きを引きずり出し、廊下を走って階段を駆け上る。

「うおらぁっ！！！」

意味が皆無の声を上げながら、夜明は教室の扉を蹴り破った。遅れてシャルロットが駆け込んでくる。

「け、結果は！？」

教壇の上に立っている千冬に問いかけた。腕組みをしていた千冬はため息を吐き、親指で教室の壁に備え付けられた時計を示す。

「五秒遅刻だ、馬鹿者共」

出席名簿が二つの快音を響かせたのは言うまでもない・・・。

「カラスが鳴くから掃除しよぉ～♪　・・・何のこっちゃ」

遅刻した罰として、夜明とシャルロットは二人仲良く教室の掃除を命じられた。普段は専門の業者がやってくれるのだが、こういった時に軽度の罰として教室を掃除させるらしい。夕陽が射し込む教室で、夜明とシャルロットはせっせと掃除をしていた。

「～♪　～♪」

「・・・楽しそうだね、夜明」

「へ、楽しくないのか？」

意外そうに夜明を見るシャルロットに、夜明はそれ以上に意外そう

な目でシャルロットを見る。まぁ、罰で教室を掃除させられているというのに、その罰を楽しそうにやっていれば誰だって不審に思うだろう。夜明は手早く集めた床のゴミをちり取りに入れてゴミ箱に入れた。

「俺って結構、細々した作業とか好きなんだよな。掃除とかも好きだし、あとアクセサリー作りとかも」

「へぇ、そうなんだ。・・・よいしょっと・・・お、重い」

夜明の言葉に相づちを打ちながら、シャルロットは机を運んでいる。その机の中には全ての教科書が無理矢理詰め込まれていて、それなりの重量を持っている。

「無理しなくていいぞ。机は俺が運んどくから」

「だ、大丈夫だよ。これでも専用機持ちだし、体力には自信が」

そこまで言葉を続けた所で、シャルロットは机の重量に耐えきれずに足を滑らせた。すぐに夜明はシャルロットの後ろに回り込み、その華奢な身体を支える。

「ったく、説得力が欠片もねぇよ。俺がやっとくよ」

「う、うん。ありがとう・・・」

後ろから抱きしめられるような態勢で支えられ、シャルロットは顔を赤くさせて視線を宙に彷徨わせた。シャルロットの視線が泳いでいるのに気付いた夜明はすぐにシャルロットから離れる。

「おっと、悪ぃ」

「あ・・・」

夜明が離れてとても残念そうな声を出すシャルロット。夜明はキョトンとしてシャルロットを見る。

「どうかしたのか？」

「い、いや。何でもないよ」

両手を振りながらシャルロットは夜明から顔を背けた。これ以上夜明の顔を見ていたら、顔が赤くなっている事どころか、心臓が早鐘のようにビートを刻んでいることまで悟られそうだ。落ち着くために深呼吸をしながら窓の外に視線を向ける。夕陽が射し込む学校の教室。突然、脳内に今朝方見た夢がリプレイされ、シャルロットの顔が爆発する。

（あわわわ・・・どうしよう。何か喋らないと・・・。え～っと・・・）

凄いテンぱり様だ。だからか。

「そういやさぁ」

「わひゃい！？」

こんな変な声を出してしまったのは・・・。流石の夜明もこのシャルロットの声に疑問を覚え、運んでいた机を置いてシャルロットを見る。

「どした、いきなり変な声出して？」

「な、何でもない。ちょっと考え事してて。それよりも夜明の方こそ何か用？」

上手い具合に話題をすり替えられ、夜明は疑問も抱かずに己の中の疑問を吐露する。

「聞きたかったんだけどよ、前に『二人きりの時はシャルロットって呼んで』って言ってたじゃんか。それで、てっきり俺ぁまだしばらく野郎のフリをしてんのかと思ってたんだが・・・そこん所どうなの？」

「え、え～っと・・・それは、ね」

いつもはハキハキとした受け答えをするのに、何故だかシャルロットは返答に窮する。夜明と窓の外を交互に見比べ、それから一回咳払いをする。

「その、ちゃんと女の子として・・・夜明に見て欲しくて・・・」

気恥ずかしいのか、シャルロットは顔を赤らめたまま消え入りそうな声で言う。ほぉ、と夜明は納得したように頷いた。

「そうか。つか、俺は普通にシャルロットのこと女の子として見てるぞ」

「え、それって・・・」

予想外の言葉にシャルロットの胸がときめく。だが、そこはフラグメイカーにしてフラグブレイカーの夜明。

「だって野郎じゃないもんな」

「・・・」

かぁ、と窓の外でカラスが鳴いたのは気のせい・・・かもしれないが、カラスの鳴き声が聞こえてきそうなくらいに教室の空気は間抜けな物になっていた。

（うぅ～・・・、夜明って、夜明ってぇ～）

地団駄を踏まない辺り、シャルロットの我慢強さが理解できる。さっきまで気恥ずかしさで赤くなっていた頬は今や憤りの赤になっていた。朴念仁・オブ・朴念仁ズのなせる技か。夜明は時折、とても心に響くようなことを言ってくる。加えて性格、容姿も良いので、そう言うことを言われた人は例外なく顔を赤くする。唯一つ、難点を挙げるとすれば、その心に響く台詞を誰にでも言ってしまうことだろう。そして、そう言う台詞は自分にだけ言って欲しいと思う、シャルロット以下、ここにいない女性陣だったりした。

「ん～、にしてもシャルルからシャルロットか・・・。何か普通になっちまったし、別の呼び名でも考えっか」

「えっ、いいの？」

「お前が良けりゃの話だけどな」

「うん、全然大丈夫。お願いしたいな！」

ぶんぶんと勢い良く頷くシャルロットに若干気圧されながら、夜明は顎に手を当てて数秒間思考する。シャルロットにとって、その数秒は数時間にも感じられたのは余談だ。

「そうだな・・・シャルなんてのはどうだ？　呼びやすいし親しみやすいと思うんだが」

「シャル。・・・うん、いいよ！　すごく気に入った！」

「そ、そうか。偉く気に入ってくれたみたいだけど」

「そうだね。シャル、シャルか・・・。ウフフフ」

幸せ一杯の笑顔でシャルロットは掃除用具の片づけを済ませていく。ご機嫌すぎるシャルロット、改めシャルの態度に疑問を覚えるも、夜明は机を運んでいった。そして全ての机を運び終えたところで、結構マジな顔でシャルを見る。

「ところでシャル、お願いしたいことがあるんだが」

「え、何かな？」

未だに夢見心地、幸せに浸かっているシャルの手を夜明はがしっと掴んだ。いきなりの夜明の行動にシャルが頭の上に疑問符を浮かべていると、夜明はマジな表情のまま告げた。

「付き合ってくれ」

「え？」

「おぉ～、よく晴れたな」

週末の日曜日。よく晴れ上がった空を腰に手を当てて仰ぎながら、夜明は満足そうに頷く。その隣にいるシャルは晴れ上がった空とは対照的にどんよりとした空気を纏っている。

「夢が砕け散る音が聞こえたよ・・・」

今朝方からずっとこんな感じだ。流石の脳天気、お気楽、飄々としてる、が三拍子揃った夜明でも心配になってしまう。
凡にシャルの服装はホワイト・ブラウス。その下にはスカートと同じ色のライトグレーのタンクトップを着ていた。夜明は右膝の辺りに傷があるジーパンに白いTシャツとかなり普通。最も、肩にマントのようにかけた星空の刺繍が入った黒い羽織の所為で普通とはかけ離れた格好に見えるが・・・。

「どうしたよシャル？　具合でも悪いのか？」

「・・・」

心配になって顔を覗き込んだ。それだけなのに、シャルに非難囂々の目で見つめられ、夜明は少しだけたじろいでしまう。

「あ～っと、シャル」

「夜明」

「はい、何でしょう？」

「乙女の純情を弄ぶ奴は馬に蹴られて死ぬと良いよ」

思わず敬語になってしまった夜明にかけられた言葉は、過激とかそう言うのを越えてしまっているかなり危ない発言。思わず顔が引きつる夜明だが、ふと冷静に考えてみて納得する。

「確かにな。そんな奴は馬に蹴られるべき、いや、俺に殴り殺されるべきだな」

「止めといた方がいいよ。自分で自分を殴り殺すなんて光景、シュール過ぎるから」

「？　シャルの言うことは難しくてわかんねぇや」

首を傾げる夜明を見て、シャルは深海二万マイルにまで到達しそうな深い深いため息を吐く。

「はぁ・・・どうせ、どうせそんな事だろうと思ったよ。相手はあの夜明なんだし、買い物とかに決まってるじゃないか。・・・期待した自分が馬鹿みたい・・・」

またも深いため息を吐かれ、夜明の胸中によく分からない罪悪感のような物が生まれた。

「あぁ～、その、何だ・・・ごめん」

「・・・（じぃ～っ）」

無言の圧力、真綿で首を絞められるかのような感覚に夜明は辟易する。その苦しさから脱出するべく、夜明は賢明に頭を働かせる。

「お、お礼に駅前の専門店でパフェおごる」

「・・・パフェだけ？」

「・・・何か欲しい物買ってプレゼントしてやる」

「本当！？」

パァッ、とシャルの顔が輝いたのを見て、夜明はその輝きが失われない内にコクコクと頷いた。さっきまでのどんよりとした空気は何処へやら、シャルはニコニコ笑いながら夜明に手を差し出す。

「後、手を繋いでくれたらいいよ」

「あ？　まぁ、それくらいお安いご用だ」

大した疑いも持たずに夜明はシャルの手を握った。何でかシャルの顔が赤くなったので、夜明は心配になって再びシャルの顔を覗き込む。

「本当に大丈夫か、シャル？」

「う、うん！　大丈夫だから行こっ！」

そう言って、シャルは夜明の手を引っ張って街へと繰り出していった。普通、こういう場面で相手を引っ張るのは男の役目だと思うのだが・・・ま、いいだろう。

二人で仲良く手を繋ぎながら歩いていく夜明とシャルをストーキングするかの如く、茂みの中から二つの頭が覗き、近くの木の陰から一つの人影が現れた。大体の察しはつくだろうが、茂みの中にいるのがセシリアと鈴音、木の陰にいたのは太陽である。

「ねぇ・・・」

「何ですの・・・」

「どうした？」

何時も通りの太陽と違い、二人は何やらどんよりとした目で、手を繋いで歩く二人の後ろ姿を見ている。

「あれってさぁ・・・手ぇ握ってない？」

「握ってますわね」

「私達の目が腐っていなければ、の話だがな」

百人に聞けば百人が同じ答えを返すであろう返事を返し、セシリアは握っていたペットボトルを握り潰した。飛んでいくキャップを太陽がキャッチし、近くのゴミ箱へと放り込む。

「そっか、やっぱりそっか。私の見間違いでもなく、白昼夢でもなく現実か・・・よし殺そう。一杯殺そうそうしよう」

「お手伝いしますわ」

「止めんかこのボケ共」

ＩＳを展開して砲撃を始めようとした二人の頭を掴んでコンクリートに叩きつけ、二人の意識を刈り取った太陽はため息を吐きながら後ろを振り返った。

「で、お前は何時までそこに隠れてるつもりだ、ラウラ？」

「うむ、やはり気付いていたか、太陽」

太陽が出てきたのとは別の木の陰から、銀髪眼帯の美少女、ラウラが出てきた。この二人、学年別トーナメントが終わってからかなり仲が良くなり、今では名前で呼び合うほど親しい。太陽は気絶した、と言うかさせた二人を小脇に抱えてラウラを見る。

「手間をかけさせやがって・・・お前はこれからどうするつもりだ？」

「決まってる。私も交ざってくる」

「待てぃ」

太陽はすたすたと歩いていくラウラの頭に手刀を落とし、襟首を掴んで引き寄せた。

「交ざるなんて無粋な事は止めろ。お前だって、夜明と二人きりの時に誰かに乱入されたら嫌だろ？」

「む・・・確かに。ではどうする？」

ラウラに問われ、太陽は少しだけ悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「決まってる・・・ばれないように尾行だ」

「了解」

斯くして、二人（気絶した二人も入れれば四人）は仲良く肩を並べながら夜明とシャルの後を追い始めた。

デート？　何それ？　カロリーになんの？（後書き）

次回予告

夜明だ。妙にシャルの機嫌がいいな、何かあったのか？　それに太陽の奴等、何だって俺たちの後なんてつけてやがんだ？

さて、次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『箒、一夏を買い物改めデートに誘う』

『夜明、教師陣と出くわす』

『太陽、水着を選んで貰う』

の三本だ。次回も見てくれよ。ジャン、ケン、ポン！

『グー』

またな～。

デートには乱入が付き物・・・んな訳無いか（前書き）

ついでですが、太陽の服装。

左膝の辺りに傷があるジーパン、黒いＴシャツ。太陽が刺繍された真っ白な羽織を夜明同様、肩にかけている。

デートには乱入が付き物・・・んな訳無いか

ＩＳ学園一年学生寮。設備、食堂、その他諸々が充実している寮の一室の前で、一人の女子生徒が何やら落ち着き無くそわそわしていた。

名を篠ノ之箒。言動が古風なために思考も古風だと思われがちだが、実際は普通の女の子と何ら変わりのない思考を持った花の乙女である。さて、何故に彼女がここでそわそわしているのかと言うと、

（ど、どうやって一夏をデートに誘えばいいんだ・・・）

意中の相手、織斑一夏を臨海学校で着る水着を買いに行く買い物、もといデートに誘うのを躊躇っているからだ。普段の彼女を見ている者がその光景を見れば、目を丸くするだろう。

（えぇい！　女は度胸だ！！）

己に活を入れ、ドアノブに手をかけようとしたその時、何の前触れもなく内側からドアが開いた。そして出てきたのは勿論、

「あれ、箒じゃん。どうしたんだ？」

織斑一夏その人である。ドアを開いたままの態勢で一夏が視線を送る先では、箒が胸を押さえて蹲っていた。ドアを開こうと思ったら目の前に一夏の顔が現われ、驚きの余りに反射で回れ右をしてしまったのだ。

「おい、本当にどうした箒？　具合が悪いんなら部屋に戻った方がいいんじゃないのか？」

一夏の気遣わしげな声も、今の箒には届いていない。

（いいいきなり出てくる奴があるか！　こっちはまだ心の準備さえ出来ていないと言うのに！）

かなり理不尽な怒りである。行き場のない怒りを押さえ込み、箒は立ち上がりながら一夏の方を向いた。箒の顔が妙に赤いことに疑問を持つ一夏だが、気温が高いからだろうと自己完結する。

「きょ、今日は良い天気だな、一夏」

「ん？　あぁ。天気予報では一日中晴れとかって言ってたからな」

「そうだな。こんな良い天気の日には何処かに出かけてみたくならないか？」

「まぁ確かに」

「だ、だったら！！」

一夏が首肯した瞬間、箒はズズイッと顔を一夏に近づけ、何故かその胸倉を掴んだ。

「かかかか、買い物に付き合ってくれないか！？」

捲し立てるように一夏を買い物、改めデートに誘う箒。肝心の一夏はと言うと、

「ほ、箒。ぐるじい・・・」

締め上げられ、かなり苦しそうな声を上げている。数秒ほどして漸く一夏を締め上げていることに気付いた箒は、慌ててその手を離した。

「す、すまない」

「ま、まぁ気にしてないからいいよ。にしても買い物か・・・別に良いぞ。丁度、臨海学校で使う水着を買いたかった所だし」

「ほ、本当か!?」

再び一夏の首を締め上げそうになるが、そこはどうにか己を律する箒。伸びかけた両腕を引っ込め、期待に瞳を輝かせて一夏を見る。そして、一夏から返ってきた返答は予想以上に嬉しい物だった。

「ついでだし、買い物行った後に昼飯でも食べるか？　今から行ったら丁度、昼飯時だし」

一夏からの食事の誘い。買い物に行く序でとは言え、箒を歓喜させるには十分な物である。箒は誰が見ても輝いてる、と言うくらい嬉しそうな表情を浮かべた。

「そ、それは良い考えだな！　是非そうしよう、そうするべきだ！」

「それじゃ、今が九時半だから・・・十時にゲート前で集合な」

「あぁ、遅れるなよ？」

「言われなくても。んじゃ、後でな」

一夏の姿がドアで見えなくなり、箒は自分の部屋に移動を始めた。
その口元は嬉しさの余り緩みに緩み、少しだけ開いた唇の間からは押さえ切れてない笑いが漏れている。

（やった、やったぞ！　買い物に誘えただけでなく、その後の食事の約束まで取り付けたぞ！　これはデートだ、誰が何と言おうとデートだ！）

「やったぁーっ！！」

突然、学生寮に響いた箒の歓喜の叫びに驚いて、全生徒達が部屋から顔を覗かせたのは余談だ。

「水着はこっちだよな・・・おぉ！　あんな所にかわゆいワンこが！」

「はいはい、可愛いのは分かったから行こうねぇ～」

「ワンこ～・・・」

フラフラとペットショップの方に歩いていこうとする夜明の襟首を掴み、シャルはやんわりと夜明を水着売り場へと引きずっていく。両腕をペットショップに向け、パタパタと振る夜明の姿に母性がくすぐられたのは内緒だ。

ここ、ショッピングモール『レゾナンス』は駅前にあり、駅舎、周囲の地下街全てと繋がっており、食べ物、衣服、更にはレジャーまで網羅している。老若男女、全ての年齢層に対応できるという看板は伊達じゃない。二人はそこの二階を歩いていた。

「そう言や、シャルも水着買うのか？」

「う～ん、どうしようかな。・・・あのさ、夜明って、その・・・僕の水着姿・・・見たい？」

「はぁ？」

夜明は疑問符を浮かべながら首を傾げる。が、シャルが何を言いたいのか理解したのか、コクリと一回頷いた。

「そうだな、折角だし一緒に泳ごうぜ。結構楽しみにしてるんだ」

・・・どうやらシャルの言いたいことを的確には理解してない様子。なのだが、夜明が言った楽しみを、シャルは自分の水着姿を楽しみにしてると勘違いしたようで、嬉しそうに相好を崩した。

「そ、そうなんだ。なら、新しいの買っちゃおうかな」

繋いだ手に軽く力を込め、シャルは何度も頷く。

「んじゃ、野郎と女は水着売り場が違うし、一回ここで別れるか」

パッと手を離すと、何故だかシャルは残念そうな声を漏らした。名残惜しそうに自分に伸された手を見て、夜明は軽く首を傾げる。

「どうした、シャル？」

「えっ、ううん。何でもないよ」

「そっか。なら、三十分後にここで集合な」

「うん。じゃ、後でね」

コクンと頷いて、女性用水着売り場へと向かうシャルの後ろ姿を見送って、夜明も自身の水着を選ぶために男性用水着売り場へと向かった。

「にしてもまぁよくこんだけあるな。数撃ちゃ当たるじゃねぇぞ」

陳列された水着の多さに面食らいながら、夜明は自分に似合いそうな水着を探していく。十分後、無難な白いトランクス型の水着を選んだ。選んだ水着を片手にさっきシャルと別れた場所へと向かう。すると意外なことに、そこには既にシャルが立っていた。

「あり、もう選び終わったのか？　速いな」

「ううん、そう言う訳じゃなくてさ。夜明に選んで欲しかったりして」

「そうなん？　なら実物を見に行くか」

実物を見ないことには話にならないので、夜明はシャルについていって女性用水着売り場へと足を踏み込む。そこは男である夜明にとって、天外魔境の地だった。何と言っても水着の数や種類、男の比ではない。物珍しさからキョロキョロとしていると、その場には似つかわしくない野太い音が聞こえてきた。その低い声は女性のそれではない。興味が湧いた夜明は声が聞こえた方に歩いて行ってみると、そこには、如何にも軽薄そうな格好をしたチャラ男、A、B、C、Dがシャルを囲んでいた。

「あの、どいてくれませんか？　待たせてる人がいるんで」

と、シャルははっきりと拒否の態度を示しているのだが、チャラ男共はシャルの言うことを聞く気は無い様子。ニヤニヤ笑いを深めながら、シャルを囲む輪を小さくしていく。

「そんな連れない事言うなよぉ～」

「そうそう、待たせてる奴なんてそのまま待たせとけば良いって！

それよりも俺たちとどっか行こうぜ」

やれやれとため息を吐きつつ、夜明は足早にシャルへと歩み寄った。そのまま拳を握り締め、腰の回転を使って重心を乗せた一撃を、シャルの肩に腕を回そうとしていたチャラ男Aの顔面に叩き込む。そのコンクリートでも容易にぶち抜きそうな一撃をモロに喰らってチャラ男Aは勢い良く吹っ飛んでいき、水着売り場から叩き出されて動かなくなった。

「「「・・・」」」

何が起こったのか分からずに呆然としてるチャラ男B、C、Dの中からシャルの手を掴んで引きずり出し、チャラ男共が振り向く前にシャルを背中に隠して三人を睨む。

「な、何だ手前!?」

「そりゃこっちの台詞だボケコラボケ。俺の連れに何してんだ?」

普段の飄々とした態度からは想像も出来ないような鋭い眼光を湛え、夜明はチャラ男共を視線のみで牽制する。その眼光の鋭さに尻込みするヘタレ、改めチャラ男共だが、人数の多さから自分達の方が有利と判断したのか、腰から折り畳み式のナイフを取りだして精一杯の虚勢を張った。

「舐めてんじゃねぇぞコラァ!」

「その見てくれだけの面、膾にしてやろうかぁ!!」

「ぶっ殺すぞ!!」

絵に描いたような小物だ。夜明は軽くため息を吐きながら頭を掻き、シャルにすら目視出来ないほどの速さで拳を繰り出し、三本のナイフの刀身をへし折る。折られて宙へと舞う三つのナイフの刀身を掴み、夜明は卵の殻を握り潰すかのように刀身を粉々にしてチャラ男共に投げつけてやった。

「やるか？」

腹の底が冷えるような夜明の声。チャラ男共は表情を青くしながら首を振り、その場から脱兎の如く逃げていった。夜明に殴り飛ばされた仲間を置き去りにして。

「ったく。どこの国でも綺麗な花には虫が寄ってくるもんだな」

こういう台詞が何の恥ずかしげも無く言えるのが夜明。綺麗な花なんて言われたもんだから、シャルの顔は瞬間湯沸かし器並みの速度で赤くなる。

「んで、俺に選んで欲しいのってどれ？」

「あ、うん。こっち」

未だに顔を赤くしたままシャルは夜明の手を引っ張っていく。はてな、と疑問符を浮かべていると、シャルはそのまま夜明を試着室へと引きずり込んで・・・。

「あの、シャルさん。試着室って女性のみ使用可能じゃ・・・」

「ほ、ほら。水着って実際に着替えてみないと分からないし・・・

ね？」

「な、なら、俺は外で待って」

「だ、駄目！　すぐに着替えるから待ってて！」

強い口調で言うなり、いきなり夜明の目の前で上の服を脱ぎ出すシャル。夜明はギョッとして音速を超える速さで方向転換してシャルに背を向ける。狭い試着室で美少女と二人きり。しかも、後ろからは服を脱ぐ衣擦れの音と、女子特有の甘い香りが流れてくるのだから始末が悪い。

（な、何故こんなことに！？）

「ほぉ。シャルロットの奴、なかなかに大胆なことをする。見習わなければ」

「「見習うな!!」」

夜明とシャルが入った試着室から死角になっている場所。そこから覗いている三つの頭。言わずもがな、ラウラ、セシリア、鈴音の三人である。凡に、太陽は新しい水着を買いたいとのことで、数分前から三人と別行動をとっていた。

「うぅ～っ、シャルロットってば、あんな所に夜明を連れ込むなんて・・・」

「中で何が起こっているのでしょうか・・・はっ！　まままままさか！　とても口では言えないようなことをお二人は!?」

「落ち着け。もしそんな事になっているのなら、あんな静かな訳無いだろ」

色々な意味でギリギリな会話をしていると、水着を片手に持った太陽が一行と合流する。

「お前等、二人の邪魔はしてないだろうな？」

太陽が戻ってきたことで振り返る三人。そして、その太陽の手に握

られている水着を見て固まる。何故なら、太陽が手にしていたのは赤いトランクス型の水着、それも男物なのだから。

「あ、あの～、太陽。それって男物だよ？」

「そんなことは先刻承知だ」

「な、なら上はどうするおつもりですの？」

「晒（さらし）を巻くが」

何か問題でもあるのか、と言いたげな表情で太陽は三人を見る。三人は顔を見合わせ、やんわりと、だが有無を言わせずに太陽の手から水着を取り上げた。

「太陽。ちょっとこっち来なさい。私達が選んであげるわ」

「そのチョイスは余りにも太陽さんの身体が可哀想ですわ」

「私もこういう事には疎いが、幾ら何でもそれは無いと言うことは分かるぞ」

三人に背中を押され、太陽は疑問符を浮かべながらその場から離れていった。

「ん～・・・」

顎に手を当てて唸りながら、箒は手にした水着を見つめる。普段の自分なら確実に着ないであろう露出面積が多いビキニタイプ。自らがその水着を着た場面を想像し、箒は顔を真っ赤にして水着を棚に戻した。

（こ、こんな、ははは破廉恥な物、着れる訳・・・）

だが、ふと思う。この水着を着た自分を見た時、一夏はどういう反応を示すのか？　妄想、と言う名のフィルムが脳内シアターで流される。勿論、主演男優は一夏、主演女優は自分だ。

『綺麗だぞ、箒』

『せ、世辞など聞きたくない』

『これが世辞を言っている目に見えるのか？』

『き、綺麗だなんて言って、どうせ水着がと言う落ちだろう！？』

『そんな事あるもんか。お前が一番綺麗だ・・・』

『い、一夏・・・』

『もう一回言うぞ箒。綺麗だ』

（何ちゃって！　何ちゃって！）

全てが自分の良いように作られた映像に赤面しながら、箒は隣りにいる誰かの肩をべしべしと何の加減もなく叩きまくる。

「ほ、箒！　めっちゃ痛ぇ！　凄く痛ぇ！！」

「え？」

聞き慣れた声に反応すると、そこには凄く痛そうに顔を顰めた一夏の姿が。その手には選んできたであろう水着が握られている。やっと箒が肩を叩くのを止めたので、一夏は肩をさすりながら箒を見る。

「どうしたんだよ箒？　いきなりトマトみたいに顔を赤くしたと思ったら凄く嬉しそうな表情浮かべて。怪人二十面相にでもなったつも・・・」

ここで、一夏は箒が手にしてる水着を見て頬を赤くした。箒も何故一夏が顔を赤くしているのか理解して、慌てて水着を棚に戻した。

「そ、それ着るのか？」

「そ、そそそそんな訳、あるかぁ！！」

顔を真っ赤にさせて否定する箒。

「そ、そうか・・・」

間髪入れずに箒が否定したので、一夏は少しばかり残念そうな表情を作る。偶然、その表情を見た箒は鼓動が速くなるのを感じた。

「み、見たいのか？」

「はい？」

消え入りそうな声で訊ねられ、一夏は目を丸くする。

「だ、だから見たいのか？　私が、この水着を着たのを・・・」

「・・・ま、まぁ、な」

箒同様、顔を真っ赤にさせながら一夏は頭を掻いた。二人の間に何とも言えないむず痒いような、甘いような空気が広がる。その空気に耐えきれず、二人が何かを口にしようとした時、

「何をしてるんだお前等は・・・」

呆れたような声が響いた。自分達のことかと思い、ギョッとしながら声のした方を向いた二人が見たのは、試着室から頭を突きだした夜明と、呆れたように腰に手を当てた千冬、顔を真っ赤にしてる山

田先生だった。

デートには乱入が付き物・・・んな訳無いか（後書き）

次回予告

千冬だ。夜明の馬鹿は試着室に入って何をしてたんだ？　差詰め、デュノアに連れ込まれたのだろうが。一夏は、随分と篠ノ之と良い空気になっていたな・・・。

さて、次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『夜明、一夏、千冬の水着を選ぶ』

『ラウラ、夜明に可愛いと言われる』

『臨海学校、ついに始まる』

の三本だ。次回も見ろ。ジャン、ケン、ポン！

『パー』

見なければ特別補習だ。

臨海学校だよ、全員集合！！

（シャル、俺にはお前が何をしたいのか皆目見当がつかん！！）

いい感じで思考が暴走している夜明の背後では、シャルも夜明同様、いい感じに思考を暴走させていた。まぁ、彼女がこんな事をしたのには一応、理由があるのだが。

（うぅ・・・勢いで夜明のこと試着室に連れ込んじゃったけど・・・どうしよう？）

と言うのも、彼女が自分と夜明を尾行してきている四人娘に気付いたからだ。何故か、今は自分達から少し離れたところにいるけど。何故、シャルが四人の尾行に気付けたのかと言うと、長ったらしくなるので九割方割愛するが、ＩＳの『コア・ネットワーク』なるものが関係してるらしい。

（ん～、四人とも、諦めて帰ってくれないかなぁ～・・・）

夜明がどう思ってようが、夜明がどう思っていようが。大切なことなので二回書きました。シャルにとっては意中の相手と二人きりで外出。詰まる所、デートだ。夜明自身、デートという単語に首を傾げそうだが、シャルは心の底からデートだと主張したかった。

（で、でも、同じ個室で着替えるのってやりすぎたかな？　・・・へ、変な子とかって思われてないよね！？）

やってから不安になる複雑な乙女心。その行動力は見事な物だが、如何せん少々暴走気味になる傾向がある。不安を胸に抱きながら背

後を窺うと、夜明はシャルに背を向けて意味もなく視線を試着室の天井に彷徨わせていた。その真っ赤になった耳と項から、どれだけ困っているのかが分かる。

（夜明も困ってるみたいだし・・・）

だが、同時に嬉しくもある。

（赤くなってるって事は、僕のこと女の子として見てくれてるってことだよね）

そう思うと、自然と頬が緩んでしまうシャルだった。意を固め、下着も脱いで水着を着る。

「い、いいよ」

「お、おう」

夜明が振り返り、水着姿になったシャルを観察した。その視線を感じてシャルは落ち着きなさそうにもじもじしながら、夜明の感想を今か今かと待ちわびる。そのワンピースとセパレートの中間のような水着を見て、照れに照れていた夜明は引きつってはいるが笑顔を浮かべた。

「い、良いんじゃないか？　似合ってると思うぞ」

決して適当に言った訳ではない。その事が伝わったのか、シャルは嬉しそうな表情を浮かべる。

「そ、そう？　だったらこれにするね」

「そりゃ良かった。んじゃ、俺はそう言うことで」

シャルに呼び止められる前に夜明は試着室から出ようとドアを開いた。

「え？」

「えぇ？」

「えぇぇ？」

「何をしてるんだお前は・・・」

そこにはキョトンとした表情をしてる山田先生に呆れ顔の千冬。そして、そこから少し離れた所にはギョッとした表情でこっちを見ている一夏と箒の姿が・・・。

「水着を買いにですか。でも駄目ですよ、二人で試着室に入るのは。教育的にも感心できません」

「す、すみませんでした・・・」

山田先生に返す言葉もなく、シャルはぺこぺこと頭を下げている。苦笑いを浮かべる夜明の隣りには千冬、そして何故か合流した一夏と箒が立っていた。

「そういや、姐さんと山田先生は何の買い物に？」

別に学園でもないので、夜明は普通に千冬に訊ねる。千冬は無言で手にしていた水着を示した。どうやら教師陣も土壇場で準備するらしい。

「ところで、何時まで隠れてるつもりだ？　セシリー、鈴音？」

ギクッ、何て音が聞こえたのは気のせいだと思う。

「そ、そろそろ出ていこうと思ってたのよ」

「た、タイミングを計ってたんですわ」

何やら言い訳じみたことを言いながらセシリアと鈴音、登場。柱の影から出てきたのが二人だけだったので、夜明は首を傾げて周囲を見回した。

「あれ、太陽とラウラは一緒じゃ無かったのか？　二人の気配も感じてたんだけど」

「二人だったら水着を選びに行ってるけど」

「へぇー」

興味が無さそうに夜明が頭を掻いていると、何やら閃いた表情で山田先生がポンと手を打つ。

「あ、そう言えば、私ちょっと買い忘れた物があるので行って来ます。場所が分からないので鳳さん、オルコットさん、ついてきて下さい。あと、デュノアさんに篠ノ之さんも」

そう言って、山田先生は有無を言わせずに四人を連れて何処かへと行ってしまった。後に残された夜明と一夏、千冬の間に変な沈黙が数秒流れる。

「ふぅ、山田先生は余計な気を遣う」

「ですな」

「え？」

「若干一名分かってないのがいるが・・・まぁいい。一夏、夜明」

「何すか、姐さん？」

「な、何ですか織斑先生？」

何時も通りに返答する夜明だが、一夏は久しぶりに名前を呼ばれたと言うこともあり、どうにもギクシャクとした反応を返してしまう。その時、一夏が浮かべてる表情が余程可笑しかったのか、千冬は苦笑いし、夜明は必死で噴き出すのを堪えていた。

「今は就業中ではないから名前でいい。私達はこの場では唯の姉弟だろ？」

姉弟水入らず（一名、義理の弟が交ざっているが・・・）と言うことらしい。

「で、一夏、夜明。どっちの水着が良いと思う？」

そう言って千冬は二人にハンガーにかけられた水着を二つ見せた。一つはセクシーな黒い水着、もう一つは機能性を重視した白い水着。どちらもビキニタイプのため、露出度はそれなりに高い。

（（黒だな））

二人の答えが完全に一致した。が、ここで一夏はふと思う。こんな凄い水着を着てたら男が寄ってくるかも、いや、確実に寄ってくる。

「・・・白かな」

「黒だろ」

真っ二つに別れる二人の意見。夜明は千冬に言い寄ってくる能なしの男共が、どういう風に千冬にぶっ飛ばされるのかを想像しておもしろそうに唇を歪めた。千冬は苦笑いを含めながら答えを返す。

「黒の方か」

「いや、白の」

「諦めろよ一夏。お前が最初に注視してたのは黒の方だって、姐さんは分かってるぞ」

「お前は気に入った方を注意深く見る傾向があるからな、すぐ分かる」

二人に簡単に見抜かれ、少しだけ一夏は落ち込む。

「俺って・・・分かり易い男なのかな・・・」

「まぁ、それはある意味美徳だろう」

いきなり乱入してきた謎の声、（夜明には誰だか分かっているようだが）に振り向くと、そこには三つの水着を持った太陽が立っていた。

「よ、ラウラに水着を選んでもらってたんじゃないのか？」

「正確にはセシリアと鈴音、ラウラの三人に選んでもらったんだがな・・・。丁度良い。夜明、この中からどれが一番私に似合うか選

んでくれないか？」

太陽は三つの水着を夜明に見せた。別に断る理由もないので、夜明は選んでやろうと差し出された水着三着を注視し、一夏と千冬も興味があるのか、夜明の肩越しから覗き込んでいる。一つ目は鈴音が選んだのであろうタンキニタイプの水着。赤い色が太陽の髪に映えているが、どうにも子供っぽく見えてしまう。二つ目はセシリアが選んだと思われるビキニタイプ。赤い髪と反目するような蒼が目に眩しい。そして三つ目は、

「「「・・・・・・」」」

「しかし、よくこんな物があったものだな。子供達の精神衛生上よくないと思うんだが・・・」

一夏は仕方ないとして、夜明と千冬さえも絶句させてしまう水着の正体とは？　・・・俗に紐型と呼ばれる水着だった。露出度が高いとかそう言うレベルの物ではない、露出しか無い様に見える。野郎二人は耳まで赤くなり、千冬は頭痛を堪えるように頭を押さえた。

「・・・夕暮、その水着は自分で選んだのか？」

「いえ、ラウラが選んでくれました」

「ラウラはお前のことを何だと思ってんだ！？」

夜明に選んで貰ったビキニタイプの水着を買うためにレジへと向かう太陽を見送りながら、一夏は気になっていた疑問を夜明にぶつける。

「そう言えば夜明。お前、太陽と付き合ったりとかする気ってないのか？」

「はぁ？　何だそれ？　別に無ぇよ。そう言うお前はどうなんだ？　篝と随分いい感じになってたみたいだが」

「そ、それは、その・・・」

答えにくそうに頭を掻いてる一夏に苦笑いを向けてから、夜明は千

冬を見た。

「姐さんはどうなんですか？　そう言う浮ついた噂は一切聞いたことがありませんけど」

「手の掛かる弟が二人もいるからな。その二人が自立してから考える」

「とか何とか言って、高校生の頃、銀河兄貴に告白して振られたくせ・・・ごめんなさい」

これ以上言葉を続けるのは命を危険に晒すと判断した夜明は、すぐに千冬に謝った。だが、千冬が夜明に向けている殺人的な視線は緩まない。

「あ、あいつは特別だ。・・・それよりも、お前等は彼女とかは作らないのか？」

彼女。すぐに箒の顔が思い浮かんで一夏は赤面するが、夜明は首を傾げながら悩みの声を上げる。その表情は本気でどうしようか、と考えている物だ。

「彼女ねぇ・・・。正直言って、この歳で生涯の伴侶を決めようとは思わないんだよな」

その容姿と性格から軽薄な男だと思われがちだが、夜明はとても古い考え方を持っている。『交際＝結婚』なんて構図を持っているくらいだ。似たような考えを持っている一夏はウンウンと頷いているが、千冬は目を丸くして驚いている。

「ず、随分と昭和じみた考え方だな・・・。可愛いからちょっと付き合ってみるか、とか思わないのか？」

「姐さん、俺がそんな器用なことが出来る男に見えますか？」

「見・・・えないな。すまん」

外見はともかく、夜明の性格を熟知してる千冬は素直に謝った。

「だがしかし、恋愛に興味が無いわけではないだろう。ラウラなんてどうだ？　色々と問題はあるだろうが、あれで一途だし容姿も悪くない。それにキスした仲だろ？」

「そこ突っ込んじゃいますか」

苦笑いを浮かべながら、夜明は頭を掻く。その夜明にしては珍しい困ったような表情が面白かったのか、いつの間にか千冬は苦笑を微笑に変えていた。

「満更でもないか？」

「ま、確かにラウラは可愛いですからね」

恥ずかしがる様子もなく夜明は言い切る。

「おま、よくそう言う事を素面で言えるよな」

「事実だからな。事実を言い淀む理由はあるまいよ」

とにかくと話を無理矢理終わらせた。

「俺は彼女なんて作るつもりは無いですよ。そう言うのはもっとこう・・・生活の基盤とかがキチンとしてからじゃないと」

とても高校生が言うこととは思えない。頑なな夜明の態度に千冬は苦笑しながら、二人が選んだ水着を買うためにレジへと向かった。

三人から少し離れた所にある売り場。水着が壁のように並んでいて向こうからは見えない場所で、ラウラ・ボーデヴィッヒはその白い

肌を赤に染めていた。原因は勿論、

『確かにラウラは可愛いですからね』

夜明のこの一言だ。

『おま、よくそう言う事を素面で言えるよな』

更に追い打ちをかけるようなもう一言。

『事実だからな。言い淀む理由はあるまいよ』

完全な不意打ちにラウラの顔は更に赤くなる。心臓は今までに無いほどに速くなり、周囲のざわめきがあるにもかかわらず、はっきりと鼓動を耳で聞くことが出来た。

「・・・・・・」

驚きと、その驚きを遙かに上回る嬉しさで言葉が出てこない。褒めろ、と何度と無く夜明に言っていたラウラだが、実際に可愛いなんて言われたのは初めてだ。

（か、可愛い・・・？　私がかかかかか・・・）

いい具合にショートし始めた頭をフル回転させすぎながら、ラウラは何度も何度もコールする番号を間違え、ＩＳのプライベート・チャネルを開いた。連絡先は・・・

原作とほぼ同じになるので、割愛。

「う～みだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

太陽の歓喜の叫びがバス内に木霊した。

臨海学校だよ、全員集合！！（後書き）

次回予告
シャルロットです。本当はラウラがやる予定だったんですけど、いい感じに頭がオーバーヒートしちゃったから、替わりに僕がやります。いいなぁラウラ、夜明に可愛いって言ってもらえて・・・。

さて、次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『一同、海に繰り出す』

『太陽、チャラ男共を撃退する』

『嵐を起こす鬼才、再び』
の三本です。次回も見て下さい。ジャン、ケン、ポン！

『パー』
夜明に何買ってもらおうかなぁ・・・。

夜明と太陽、二人のトンデモＩＳ（前書き）

唐突に思いついた。皆様からの評判が良ければ、本編で使うかも・・・。

夜明と太陽、二人のトンデモＩＳ

現れた強大な敵、膝をつく夜明達。万事休すか！？

「仕方ねぇな。こうなったらあれやるしかないか、太陽」

「あぁ、あれだな」

自信に満ちた二人の表情。そこに微かな光を感じ、一夏は希望を込めて二人に訊ねた。

「お、おい。あれって何だ！？」

一夏の問いに、太陽はハードボイルドな笑みを浮かべる。

「そんなの決まってるだろ」

二人の叫びが虚空に響き渡った。

「「合体（ぐわぁったい）だぁ！！！」」

ＩＳ名『黄昏の翼（トワイライトウィング）』

世代、第五世代【搭乗者の想いに応えるＩＳ】

制作者、該当無し

待機状態、無し

外見、装甲は白色。ワンオフ・アビリティーが発動すると装甲の随所がスライド展開して、そこから黒い燐光を放つ。背中には大型高出力推進翼（ウィン グスラスター）が一対装備され、右のウィングスラスターは蒼く、左のウィングスラスターは紅い。左肩には太陽型の盾を装備し、右肩には三日月型の盾がある。

詳細

・レイジングウィングとバルディッシュトワイライトが合体したことで生まれた最強のＩＳ。どう言った経緯で合体するのかは分からないが、篠ノ之束曰く、『二機の搭乗者、つまり月光夜明と夕暮太陽の想いに二機のコアが感応し、本来不可能なＩＳ同士の合体を可能にした』とのこと。合体と言うよりも融合に近く、合体すると完全に別のＩＳへと姿を変える。

・合体時、搭乗者である夕暮太陽は精神のみになって月光夜明と融合する。つまり、一人の肉体の中に二つの人格が同時に存在すると言うことになる。仮面ライダーＷのサイクロンジョーカーエクストリームを想像すると分かり易い・・・と思う。

・搭乗者の肉体のベースは月光夜明だが、夕暮太陽と融合することによって左の瞳が紅色になり、銀髪にも所々に紅が混じる。

・全ての能力が圧倒的に優れているが、武装が二つだけになってしまったため、搭乗者の腕が問われるＩＳになった。

武装

右腕装備

・レイジングハート

大型超高出力ビームライフル。威力がレイジングウィングのスターライト・ブレイザーに匹敵するにも拘わらず、連射を可能にした規格外仕様（オーバースペック）。但し、威力が強すぎるため味方がいる時は使用できない。

左腕装備

・バルディッシュ

大型超高出力ビームブレード。通常時は柄のみだが、戦闘形態に移行すると柄から刀身が現れ、ビーム刃を展開する。ビーム刃を放出、斬撃に合わせて帯状に展開することが可能。

ワンオフ・アビリティー

名称、限りない世界（インフィニティ・ワールド）

詳細、搭乗者の想いを機体へと反映させる。（例、夜明の正の感情が強くなればなるほど機体の性能が上がり、夜明の負の感情が強くなればなるほど性能が落ちる）

また、他者の想いを力に変えることも可能。

特徴、発動すると装甲の随所がスライド展開して、その部分から黒い燐光を放つ。

夜明と太陽、二人のトンデモＩＳ（後書き）

どうでしょうか？　ＩＳで合体は無いかな・・・。

オリジナル話予告。未来編（前書き）

ちなみにですが、この話。企業の名前やら主要人物の名前やらをもの凄いパクってるのであしからず。この話を書く前に名前、考えておかないと・・・。

オリジナル話予告。未来編

「頼む、力を貸してくれ！　未来を護るためにはアンタの力が必要なんだ！」

突如、夜明達の目の前に現れた謎の銀髪の少年。その少年に触れた瞬間、夜明達は何処かへと転送された。

「・・・何処だぁ、ここ？」

転送された先で夜明達が目にしたのは荒廃した大地、そしてＩＳをも上回る戦闘力を有した巨大兵器、アームズフォート。

「・・・本当に何処だ？」

「ここはあんた達がいた世界から二百年後の世界。つまり、二百年後の地球さ。そして今や世界は宇宙に進出した民間企業『ラインアーク』と、地球に残り続けている企業連との戦争状態さ」

「ご丁寧な説明どうも。そう言うお前は誰なんだ？」

「あ、自己紹介がまだだったな。俺は大空流星。あんたのひ孫だよ、月光夜明」

「「「「「「「「「・・・んだとぉぉぉぉぉ！！！！？？？？？」」」」」」」」」

「よろしくな、ひい爺ちゃん」

にしし、とその少年、夜明のひ孫を名乗る大空流星は悪戯っぽく笑った。

地球にあるラインアークの基地へと連れて行かれた夜明達。一室に案内され、待機を命じられる。

「にしても二百年後の世界、か。ドッキリか何かだって一蹴してやりたい所だけど、流石に否定要素が無ぇな」

「あぁ。ＩＳの量産化、遠隔操作と独立稼働の確立。そして何より

ＩＳと同等、若しくは上回る戦闘力を持った巨大兵器、アームズフォート・・・。挙げればきりがないな」

「でもさ、何であの流星ってのは俺たちのことを呼んだんだ？」

一夏の問いに一同が首を傾げていると、基地に避難していた民間人から話を聞きに行っていたシャルが戻ってきた。

「お待たせ。色んな人から話を聞いて分かったんだけど、この時代では僕たちは英雄として扱われてるみたい」

「え、そうなの？」

「うん。特に夜明は伝説的な存在になってたよ。亡国機業（ファントム・タスク）を潰したり、それ以外でも違法な実験や開発をしてた幾つもの企業を単騎で壊滅させたんだって」

「調子に乗りすぎてないか、未来の俺？」

呆れ気味に夜明が呟いたその時、大きな衝撃が一同を襲う。何事かと思って部屋から頭を突き出すと、ラインアークの職員と思しき連中が慌ただしく基地内を駆け回っていた。

「おい、何があったんだ？」

ラウラの問いに、一人の職員が顔面を蒼白にさせながら答える。

「ＢＦＦ社のアームズフォート、スピリット・オブ・マザーウィルが攻めてきたんです！！」

許可もなくブリーフィングルームに入った夜明達。会議中なのも意に介さず、ディスプレイに表示されたスピリット・オブ・マザーウィルのデータに視線を走らせる。

「これがアームズフォート・・・。確かに大きいし、武装の火力もＩＳより上ね・・・」

「こんな巨大兵器を創り上げる為に技術を使うなんて・・・人類は何処で道を踏み外してしまったのでしょう？」

鈴音とセシリアが各々の感想を述べている横で、夜明は頭を掻きながらディスプレイを覗き込んでいる太陽を見た。

「ふ～ん・・・どう見る、太陽？」

「普通に潰せるだろ。お前とレイジングウィングなら」

アームズフォート、スピリット・オブ・マザーウィルを潰した事で勢いに乗る夜明、改めラインアーク関係者達。そんな彼等の前に立ちはだかったのは企業連に所属しているＩＳ搭乗者達、そして更なるアームズフォート。夜明達は望む望まないに拘わらず、この世界規模の戦争に巻き込まれていくことになる。

「おい流星。あの仮面を付けて演説してる変態は誰だ？」

夜明の問いに、皆は部屋に備え付けてあるテレビへと視線を向けた。画面の中では仮面を付けた金髪の男性が声高に演説をしている。流星は苦虫を噛み潰したように表情を歪め、吐き捨てるように呟いた。

「・・・そいつの名前はラウ・ル・クルーゼ。この戦争を始める切っ掛けになった男だよ」

「どっかの馬鹿が言ってたよ。歴史ってのは戦争と平和と革命の三拍子・・・終わらないワルツの様なもんだってな」

「確かに、夜雲さんがそんなことを言ってたな」

夜明の言葉に太陽が頷く。セシリアは悲しげな表情を作って、己が手に握られたスターライトｍｋ？に視線を落とした。

「・・・でも、ワルツでは先には進めませんわ」

「そうね。それに、革命くらいならやっても構わないけど、戦争なんて泣く人が増えるだけでしょ」

セシリアに賛同して首肯する鈴音の横で、シャルが決意を湛えた瞳で皆を見渡す。

「だったらさ、平和と改革の二拍子・・・マーチに出来ないかな？」

「行進曲（マーチ）か。それなら人類は前へ進めるな」

「悪くないぜ」

頷き合う箒と一夏。今まで腕を組んで目を閉じていたラウラが徐ろに口を開いた。

「我々がこの下らない戦争を終わらせれば、ワルツはマーチになるんだな？」

「それは分からないさ。でも、少なくとも人々の心を変えることは出来るかもしれないぜ？」

「新たな時代へと人々を導くために道を切り開く。過去の遺物である私達に出来るのはそれくらいだ」

「また君か？　厄介な奴だよ、君は！」

「あんただけは！！」

「あってはならない存在だというのに！」

「知ったことか！」

「知れば誰もが望むだろう、君のようになりたいと、君のようで在りたいと！」

「人は自分以外にはなれねぇよ！！」

「だとしても望まずにはいられない。故に許されない、君という存在は！」

「力だけが、俺の全てじゃない！！」

「それが誰に分かる！　誰にも分からぬさ！！」

「なら分からせてやるさ！　俺の信念で、俺の生き様で！！」

「その君の信念を誰が見てくれるというのだ！？　誰が君の生き様を胸に刻んでくれるというのだ！？　人は己が信じたことにしか目を向けず、そして認めない物を否定する！」

「違う！　人はそんなもんじゃない！！」

「何が違うというのだ！？　憎しみの瞳と、引き金を引く指しか持たない者達しかいないこの世界の何を信じる！？」

「その瞳を憎しみで溢れさせ、引き金を引くしかない状況を生みだしたのは何処の誰だ！！　人が何なのか知ろうともしないお前如きが人を語るな！！」

「知ろうとせずとも分かるさ！　人は所詮、他者から幸せを奪うことしか出来ない生き物だ。人々が幸せを奪い合う果てに何が待っていると思う？　滅びだ！！」

「滅びなんてさせねぇさ！　俺が！！」

「最早誰にも止められない！　この戦争で地は灼かれ、涙と悲鳴は新たなる争いの狼煙となる！」

「狼煙なんて上がらねぇよ。俺がこの戦争を終わらせるんだからな！！」

「喩え君が止めたとしても、戦争は繰り返される！　それだけの業

を人類は重ねてきたんだ！　その世界に救う価値などあるのか！？」

「だとしても、護りたい世界があんだよおおおおおお！！！！！！！！！！！！！」

オリジナル話予告。未来編（後書き）

相当大雑把に書きました。原作の五巻が終わった辺りで書く予定だから、結構先になりますね。

海は良い物だ！　ｂｙ太陽

「う～み～は～、広いな～、おおき～いな～♪」

トンネルを抜けたバスの窓から海が視認できるようになると、窓側の席に座った太陽は上機嫌で歌っていた。その様子は初めて電車に乗って、流れていく景色に驚いてる子供のようにも見える。

「楽しそうだね、太陽」

向かい側の列、窓際の席に座っているシャルが声をかけても振り返らず、太陽は両足をプラプラさせながら海を見続けた。

「どうも昔から海を見るとテンションが上がってしまうみたいでな。そう言うお前は随分と嬉しそうだな、シャル」

「え、そうかな？　・・・えへへ・・・」

太陽に指摘され、少しだけ頬を染めながらシャルは嬉しそうに左手首に視線を落とした。そこには銀色のブレスレットが巻かれている。驚く無かれ、このブレスレットは夜明の手作りだ。先日、買い物に付き合ってくれたお礼に夜明が材料を買い、一から作ってシャルにあげたのである。夜明手作りのブレスレットを渡された時、シャルの喜びようは凄かったとだけ書いておく。

「えへへ♪」

もっそい上機嫌だ。そんな彼女を羨ましそうに見る人物が一人。

「まったく、シャルロットさんは朝からご機嫌ですわね」

太陽の隣りに座っているセシリアが少しむすっとした表情でシャルを見ている。そんな視線も何のその、シャルは相変わらずの表情でブレスレットを撫でている。

「先日、二人だけで何処かへ行ったかと思えばプレゼント、しかも手作り・・・ずるいですわ」

「ならお前も作ってもらえばいいだろう。頼めば作ってくれるぞ、あいつは」

窓の外に目を向けたまま、太陽は言った。凡に、太陽が肩にかけていた羽織は夜明の手作りである。一回ため息を吐き、セシリアは窓の外に視線を向けた。外にはバスと併走して、一台の大型バイクが走っているのが見える。運転しているのは勿論夜明で、その背中に抱きついているのは鈴音だ。夜明がバイクで旅館に向かうと言った時、『夜明の後ろに誰が乗るのかジャンケン大会』が勃発したことを夜明は知らない。

（鈴さん、少し夜明さんにくっつきすぎではありませんか？）

決勝戦まで進んだのに鈴音の心理戦（チョキを出すと言ってきたので、パーを出したら本当にチョキを出してきた）で、夜明の後ろを逃した負け犬（セシリア）の遠吠えである。セシリアの視線に気付いたのか、鈴音はセシリアの方を向くと可愛らしく舌を突きだした。

（きぃーっ！）

心の中でハンカチを噛むセシリア。そんな憤りをどうにか殺してい

る彼女とは対照的に、シャルの隣りに座っているラウラは大人しくしていた。時々、挙動不審になって周囲をキョロキョロと見回している。

「こ、こんな水着、着れる訳、いや、でも・・・」

何やら凄い思い詰めた表情でブツブツと独り言を囁いている。普段の彼女からは想像できない状態に心配になって、シャルは声をかけるべきかどうか迷ったが、何でそんな風になっているのか大方の想像がついたのでそのままにしておいた。話は変わるが今まで一回も出てきていない一夏と箒はどうしてるのかと言うと。

「ｚｚｚ・・・」

「ｚｚｚ・・・」

二人仲良く寝ていた。箒は一夏の肩に頭を預け、一夏は箒の頭を枕にして寝ている。なんとも仲睦まじい限りだ。シャルが眠りこけている二人を見て羨ましがっている内に、バスは旅館へと到着した。

「「「・・・」」」

旅館へと到着した一同は、太陽を筆頭に早速海へと向かっていた。
夜明と一夏、箒も水着に着替えようと、更衣室のある別館に向かおうとする道中、道ばたにウサギの耳が生えていた。しかも『引っ張ってください』という張り紙付き。こんな珍奇な光景を作る人物、三人の知る限りでは一人しかいない。夜明は嬉しさに目を輝かせながら周囲を見回し、一夏は困ったように頭を掻き、箒はさっさと別館へと行ってしまった。

「なぁ箒、これって・・・いないし」

ため息を吐き、ウサ耳を引っこ抜こうと両手を伸した瞬間、夜明の手が一夏の手首を掴んで動きを止める。

「夜明？」

「待て一夏。師匠のことだ、確実にこれはフェイク。本命は・・・こっちだ！！」

叫ぶや夜明はウサ耳を引っこ抜いて空へと投げる。夜明の予想通りウサ耳はフェイクで、あっさりとひっこ抜けた。

「あの、夜明さん、何をしてますの？」

丁度その時セシリアが通りかかり、空中に何かを投擲した態勢の夜明に訊ねる。何にも無い空に何かを投げた男、けったいにも程がある。夜明はセシリアの問いには答えず、無言で空を見据えた。投げられたウサ耳は空気を裂きながら飛んでいき、空中で何かと衝突して甲高い音を立てながら落下する。そしてウサ耳が落ちてくるのと同時に、

ズガーン！！

何かが三人の目の前に落下して突き刺さった。しかも外見がエキセントリック過ぎる。

「に、にんじん！？」

漫画なんかで良く出てくる、いわゆるデフォルメされた人参がそこにはあった。

「あっはっはっは！　流石はよっくん、見破ったか！」

パカッと真っ二つに割れた人参の中から笑い声と共に夜明に抱きついたのは、稀代の天才篠ノ之束その人である。

「お久しぶりです師匠！」

飛び出してきた束を受け止めた衝撃を殺すため、夜明は束を抱きかかえたままその場で一回転した。

「いやぁ～、相変わらずよっくんの腕の中は落ち着くねぇ～・・・ｚｚｚ・・・」

夜明の胸にグリグリ顔を押しつけてたかと思えば、束はそのまま眠ってしまう。苦笑いを浮かべながら夜明は束の頬を突いた。

「師匠、起きてくださ～い」

「・・・オォッ！　いかんいかん、眠ってしまったよ。ところでよっくん、箒ちゃんは何処かな？」

「えぇっと、箒なら・・・」

そのままの態勢、つまり抱き合った状態のままで二人はナチュラルに話を進める。一夏は引きつった笑いを浮かべているが、当然セシリアは黙っていない。

「ちょ、ちょっと夜明さん！　いつまでそうしていらっしゃるつもりですの！？」

「おんやぁ～、確か君は・・・」

ここで初めて束はセシリアに気付いた様で、何かを思い出すように指を顎に当てる。数秒後、思い出したのかポンと手を打った。

「思いだした。ようちゃんにＩＳを渡しに行った時にいた通行人Ａちゃん」

酷い覚え方だ。

「私の名前はセシリア・オルコットですわ！」

「そうかいそうかい。よろしくね金髪ロールちゃん」

「人の話を聞いてますの！？」

「聞いてないだろうな・・・」

一夏の言うとおり束はセシリアの話を聞いておらず、夜明だけを見ていた。

「何をかっかしてるの、カルシウム不足？　ま、いいか。私はこの箒ちゃん探知機で箒ちゃんを見つけてくるかな。それじゃよっくん、後でね～」

夜明の頬にキスをして、束はそれこそウサギの如く箒が歩いていった方向に走っていった。箒ちゃん探知機恐るべし。

「師匠、気をつけて～！」

その後ろ姿に手を振ってから後ろを向くと、今にも泣きそうな表情でセシリアが口をパクパクさせている。どうやら束が夜明の頬にキスをしたこと、並びに束にキスされても何の動揺も見せない夜明にショックを受けているようだ。涙目のまま夜明の胸倉を掴み、ガクガクと揺さぶった。

「夜明さん、あなたと篠ノ之博士は本当に唯の師弟関係ですの！？」

「どどどどしたセシリー!?　唯の悪戯の師匠とその弟子だよ!!」

「本当に本当ですの!?」

「本当だって!」

しつこいくらいに確認をしてから漸くセシリアは夜明の胸倉を離し、誤魔化すように一度咳払いをした。余談だが、既に一夏は別館へと行っている。

「そ、それならいいんです・・・。夜明さん、あなたもこれから海に?」

「ん。あんな綺麗な海が目の前にあんだ、泳がなきゃ損だろ」

「で、でしたら」

再び咳払いをした。何か恥ずかしいことでもあるのか、頬を赤くさせて視線を泳がせている。少し逡巡した後、意を決して手に握った小瓶を夜明に渡す。それは、

「サンオイル?」

「せ、背中には塗れませんから、夜明さんにお願いしたいのですが・・・よろしくて?」

「別にそんくらい良いぞ」

あっさりと夜明の口から出てきた承諾の言葉に、セシリアの表情が

パァッと明るくなる。

「本当ですね！？　後からやっぱり無しは認めませんわよ！」

しつこいくらいに念を押し、セシリアは別館に向けて走り出した。
その足取りは実に軽やかで、今にも空へと飛んでいきそうな程だ。
何故、そんなにも速いのか疑問に思いながら、着替えるべく夜明も
別館へと向かった。

砂浜へと一歩を踏み出した夜明と一夏。途端、空の中でギラギラと輝いている太陽の日光で熱せられた白砂が二人の足の裏を灼く。その熱さに目を白黒させながら、二人は砂浜を見渡す。休憩時間なのか、旅館で働いてると思しき人達が結構いるが、それ以上に女子生徒で溢れていた。健全（？）な男子である二人にとって、結構目に毒な光景だ。意識を水着姿の女子達から逸らす意味合いも兼ねて、二人は準備体操を始めた。

「あれ、そう言えば太陽は？」

屈伸をしながら一夏は周囲を見回す。砂浜にも、海にも太陽の姿が見えない。一番最初に着替えて海へと繰り出したのに、何処にも太陽はいなかった。太陽の姿は見えないが、夜明は彼女がどこにいるのか分かっているようで、無言で海を指さす。一夏がその方向を見ると、海から巨大な水柱が立ち上がっていた。

「うおおおおっ！？　な、何だぁ！？」

驚く一同（夜明を除く）に大量の水飛沫をかけながら、水柱を立てた張本人は軽やかに砂浜に着地して大声で笑い始める。

「あっはっは、大漁かな大漁かな！　面白いくらい魚が捕れる！」

その人物、太陽は右手に握った銛（もり）を肩に担ぎ、左手には大量の魚を詰め込んだ袋を持っていた。夜明と一夏に気が付くと漢らしく銛を砂浜に突き立て、二人の元まで歩いてくる。そして蒼いビキニタイプの水着を纏った、とても女子高生とは思えない身体を惜しげもなく晒しながら、ドヤ顔で二人に袋を見せた。某無人島サバイバル芸人も真っ青だ。

「見ろ二人とも、大漁だぞ」

「相変わらずだなお前・・・女将さんに頼まれたのか？」

「あぁ。海に行く前にＭｙ銛の日輪丸を手入れしてた所を見られて、全員分の魚を獲ってきてくれるよう頼まれたんだ。あれで漸く全員分の半分だ」

「もう全員分の半分も集めたのか！？」

「おいおい、大丈夫かよ？」

この短時間で太陽がそれだけの量の魚を獲ったことに一夏は驚き、夜明はハイペースな太陽を心配する。太陽は誰もが見とれる笑顔を浮かべ、片目を瞑った。

「大丈夫だ。私は海に潜るのが大好きだからな！　それじゃ二人とも、また後で！」

軽やかに砂浜を走って、太陽は頭から海へとダイブした。太陽の意外な一面を見たせいか、一夏は少しだけ唖然としている。

「い、意外だな・・・」

「そうだろ。あいつってあぁ見えて、結構アクティブなんだぜ」

準備体操を終え、いざ海へと向かおうとすると、

「よ、あ、けっ～！」

いきなり夜明の後ろから鈴音が飛び掛かってきた。大して慌てた様子も見せず、夜明は鈴音を受け止めてそのまま肩車する。

「うおっ！？　鈴か！？」

「何でお前が驚いてんだよ。それから鈴音、人の上に飛び乗るな」

タンキニタイプの水着を着た鈴音を頭の上から引きずり下ろそうとするが、鈴音は猫のような身のこなしで夜明の手を避ける。

「ケチなこと言ってんじゃ無いわよ。それにしても遠くまで見れるわ。ちょっとした監視塔になれるんじゃない、夜明」

「なりたく無ぇよ」

ごもっとも。しかも監視員ではなくて監視塔である。なりたい人はいないだろう。にへへ、と笑っている鈴音にため息を吐いていると、簡単なビーチパラソルとシート、それにサンオイルを持ったセシリアがやって来た。

「夜明さん、ここにいたんですの・・・って何をしてるんですの鈴さん！？」

「ん～、移動監視塔ごっこ？」

何故に疑問系？　凡に夜明が鈴音に乗られて平気でいられるのは、小学生の頃に良くこうして乗られて慣れているからだ。決して、彼女の胸が小さいから気にならないと言う訳ではない。

「とにかく、鈴さんはそこからどいてください！」

「えー、ヤダ」

「な、何を子供みたいな事を・・・」

若干の怒りで顔を少し赤くしながら、セシリアはパラソルを砂浜に突き刺す。

「何々、もめ事？」

「ってそんなことより！　月光君が肩車してる！」

「え、本当だ！　いいないいなぁ～」

「きっと交代制、そして速い者勝ちよ！」

何やら勘違いをした女子達が夜明の周りに集めってきた。夜明は頭痛を訴え始めた頭を押さえ、一夏に視線を送る。

「一夏、頼めるか？」

「あぁ。出来るだけやってみる・・・」

女子達を治めるため、一夏は女子達にそう言うサービスはしてませんと説明し始めた。一夏に感謝しながら、夜明は女子達が騒ぎ始めた原因、鈴音を引きずり下ろす。

「下りろ鈴音、誤解が広まる」

「ん、仕方ないか」

特に抵抗するわけでもなく、鈴音はあっさりと夜明から下りた。セシリアは唇を引きつらせてご立腹の表情。そのまま鈴音とドンパチを始めようとする雰囲気だったので、夜明は咳払いしてセシリアの注意を引く。

「所でセシリー、俺にして欲しいことがあったんじゃ無いのか？」

夜明に言われ、セシリアはハッとしたように表情を元に戻し、一回咳払いをしてパラソルの下にシートを敷いた。そして上の水着を外してシートの上に寝そべる。

「そ、そうでしたわね。では夜明さん、早速サンオイルを塗ってください」

「う、うぇ～い・・・」

サンオイルを受け取って固まる夜明。今更になって安請け合いをしたことを後悔し始める。基本、ヘタレである彼はこういう風な形で女性と触れ合った事はない。セシリアの白い肌で既にノックアウト寸前である。が、ついさっき約束した手前断る訳にもいかないので、意を決してオイルを塗ることに。

「そ、そいじゃぁ塗るぞ」

「ひゃあっ！？　よ、夜明さん、サンオイルは手で少し暖めてから塗ってください」

「わ、悪い。何分、こう言う事をすんのは初めてだから」

「そ、そうなんですの？　初めてでしたら仕方ありませんわね」

どこか嬉しそうなセシリア。セシリアの態度に首を傾げるも、夜明は言われたとおりにオイルを塗っていく。セシリアは気持ちよさそうに目を細めながら、夜明に身を任せる。

「・・・」

と、ここで面白く無さそうに二人を見ていた鈴音が行動に出た。夜明の手からサンオイルの瓶を見事な手際で奪い取り、暖めもせずにペタペタとセシリアに塗っていく。

「私がやったげるわよ、ペタペタ～っと」

「きゃあっ!?　り、鈴さん！　邪魔し、冷たい！！」

セシリアに悲鳴を上げさせて満足したのか、鈴音は夜明の手を取ってそのまま海へとダッシュした。

「ちょ、鈴音!?　ごめんセシリー！　後でちゃんと責任とるから!!」

顔を真っ赤にさせて怒っているセシリアに謝ってから、夜明は鈴音に手を引っ張られるままに海へとダイブする。

「ぶはっ！　鈴音てめ！」

夜明が海面に頭を出し周囲を見回した時には、既に鈴音は夜明から離れた所まで泳いでいた。

「夜明！　あっちのブイまで競争ね。負けたら@クルーズのパフェ奢りなさいよ！　よーい、ドン！」

言うや否や鈴音はブイに向かって泳ぎ始めた。凡に@クルーズと言うのは女子に大人気の店の名前だ。鈴音を見送りながら夜明は首をならし、掌に拳を打ち付ける。

「上等！　こんぐらいの距離差、一瞬で縮めたらぁ！！」

威勢良く吼え、夜明は凄まじい速さで鈴音を追い始めた。

（サンオイルを塗って貰うって・・・セシリアも大胆なことするわね）

泳ぎながら自分もやってみようかと思う。が、すぐに顔を赤くしてその考えをうち消す。自分から触れるのは構わないが、夜明から触られるのには抵抗、ではなく恥ずかしさがある。我が儘、だがそれは女子だけに許される特権だ。

（えぇい！　恥ずかしがってどうする鳳鈴音！　ここで頑張れば、あの朴念仁も私のことを意識するはず！）

気合いを入れたは良いが、そこから先が良くなかった。気合いを入れた瞬間に海水を思い切り吸い込んでしまい、溺れかけてしまう。突然のことに鈴音は軽くパニックになり、上下の感覚を失った。本格的に溺れ始めたその時、力強い腕が鈴音を引っ張り上げた。

（あ、夜明だ・・・）

その細いが、力強い腕に抱きかかえられ、鈴音の胸に安堵が広がる。

「おい、大丈夫か鈴音!?」

鈴音を引っ張り上げた夜明は大声で容態を訊ねながら、その背中を軽く叩いて海水を吐き出させた。数回咳き込んで海水を吐き出した鈴音は弱々しく笑いながら夜明を見る。

「う、うん、もう大丈夫・・・」

「そうか、なら良かった・・・。太陽！」

大声で相棒の名を呼ぶと同時に親指と人差し指を口の中に入れ、甲高い音を奏でる。指笛の音が海面に響いた数秒後、二人のすぐ横の海面が盛り上がり、太陽が顔を出した。

「どうしたんだ、夜明？」

ゴーグルを外しながら、太陽は問いかけた。

「鈴音が溺れちまった。大丈夫だと思うけど、一応先生呼んどいてくれ。俺は鈴音を砂浜まで運んでる」

「了解だ」

二つ返事を返し、太陽は砂浜に向かって速く、そして滑らかに泳いでいった。

「た、太陽の前世って、人魚じゃないの？」

「かもな」

短い会話を交わし、夜明は鈴音を背負って砂浜へと向かう。砂浜に着くと、そこには太陽が呼んできた山田先生がいて、鈴音を連れて旅館へと戻っていった。

「これで一安心、と。悪いな太陽。邪魔しちゃって」

夜明の謝罪に太陽は肩を竦める。

「気にするな。少し休憩しようと思ってた所だし、友人を助けるのは当然だろ？」

そこに女子達を治めていた一夏が加わった。

「一夏。さっきは悪かったな」

「別に良いよ。どうせやること無かったし」

そのまま三人で適当に談笑していると、

「あ、夜明に一夏。ここにいたんだ」

不意に呼ばれたので、そっちの方向を向いてみるとそこにはシャルと・・・。

「な、何だそいつは？」

「新手のお化けか何かか？」

バスタオル数枚で頭から膝までを隠した奇妙奇天烈な存在がいた。しかも二体。太陽はそのバスタオルお化けが誰なのか分かったのか、クスクスと微笑を浮かべている。

「ほら、出てきなって。大丈夫だから」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める・・・」

「そ、そうだな。気持ちがまだ大丈夫ではない・・・」

「あ？　もしかしてラウラか？」

「んで、こっちは箒？」

聞き覚えのある声に、二人は一瞬でバスタオルお化けが誰なのか分かった。片方がラウラで、もう片方は箒だ。どちらも普段の堂々とした雰囲気は微塵もなく、弱々しい雰囲気を放っている。

「二人とも、着替えたんだから見てもらわないと」

「し、しかしだな。心の準備という物が・・・」

「も、もう少しだけ待ってくれ」

二人がバスタオルを脱ぐ様子はない。業を煮やしたシャルは強硬手段に出ることにした。

「ふ～ん。二人が出てこないんなら僕、夜明と遊びに行こうかな」

「な、何？」

「そうだ、一夏も一緒に行こうよ」

「何だと！？」

言うなり、シャルは夜明の手を取った。一夏に一緒に行こうとジェスチャーを送り、そのまま波打ち際へと二人を連れて行く。

「ま、待て！」

「私達も行くぞ！」

「その格好でか？」

太陽のからかい混じりの問いに、二人は少しだけ怯んでからバスタオルに手をかけた。

「えぇい！　脱げばいいんだろう脱げば！」

「腹を括るぞラウラ！」

半ば、ではなく完全にやけくそで二人はバスタオルをかなぐり捨てる。そして、二人の水着姿が陽光の下にさらけ出された。

「わ、笑いたければ笑えばいい」

「似合わないのは、自分達が一番よく理解してる」

まずラウラ。ふんだんにレースがあしわられた黒の水着。一見、大人の下着に見えなくもない。そして髪は普段のように伸したままではなく、鈴音のように頭の両サイドで纏めている。

次に箒。普段の彼女なら絶対に着るどころか選びさえしないであろうビキニタイプの水着。縁に黒いラインが入ったそれはかなり色っぽく、髪型は何時も通りポニーテールにしている。

「「・・・」」

二人の水着姿を見て、夜明と一夏は一言。

「「似合ってんじゃね？」」

「「ふぇ？」」

夜明と一夏同様に、二人の間抜けな声が重なる。戸惑う二人を意に介さず、二人はそれぞれの評価を述べた。

「ラウラ、普通に可愛いぞそれ。なぁ、一夏？」

「あぁ。箒は可愛いって言うか、どっちかって言うと綺麗だけど」

「か、可愛い！？」

「き、綺麗！？」

二人の感想、正確にはそれぞれの意中の人からの感想に二人は顔を真っ赤に染め、そのまま何処かへと脱兎の如く走り去っていった。

「っておーい！　お前等何処に行くんだぁーっ！」

夜明の声は届かず、二人はどんどん小さくなっていく。

「まったく・・・」

苦笑いを浮かべながら、太陽は二人を追い始めた。

「何だったんだ、あいつ等？」

「さぁ？」

本気で分かっていない二人にため息を吐きながら、シャルは近くから持ってきたビーチバレーボールを持ち上げて二人に見せる。

「箒とラウラは太陽に任せて、僕たちは遊んでようよ」

シャルの意見に二人は賛成し、三人は暫くの間、ビーチバレーに興じた。

「おぉ、ようやく戻ってきたか・・・って」

「ん、どうした夜明？」

戻ってきた三人の姿を確認した夜明が変な声を上げる。一夏の問いに、夜明は簡潔に答えた。

「ナンパされてらぁ、あいつ等」

「え、マジでか？」

一度頷き、夜明達はもっと近くまで行こうと歩き始める。

「多分、旅館の従業員の一人だろうな。今は関係者以外は立ち入り禁止になってるし、ここ」

「ふ～ん。ナンパねぇ・・・ちょっと待て、それって箒もされてるのか？」

「あぁ。と言うよりも、あの従業員、箒が目当てっぽい」

「夜明、シャル。穴用意しといてくれ。人一人埋められるくらいの大きさの穴」

「駄目だよ一夏！　殺人沙汰はまずいって！」

右腕のＩＳ装甲と雪片弐型を展開させて、その従業員を切り殺そうとする一夏をシャルはどうにかして止める。

「離してくれシャル！　男には、男には殺らなきゃいけない時があるんだ！！」

「字が違うぞ。放っといても大丈夫だろ、あいつ等がそんなナンパなんかに引っかかるとは思えないし」

一夏が落ち着くのを待ち、三人は改めてナンパの現場を見る。

『可愛い子ばっかだね～、やっぱりＩＳ学園の子？　もしよければ一緒に遊ばない、向こうにダチもいるからさ』

絵に描いたような軟派野郎。ここの旅館の従業員になれたのは余程運が良かったのだろう。箒とラウラは無視の方向でいるようだが、太陽は苦笑いを浮かべてはっきりと断りの態度を取った。

『悪いが、断らせて貰おう』

『え、何で？　彼氏でもいんの？』

『あぁ。とても魅力的な奴が、私達三人にな』

「え、あいつ等彼氏いたのか？」

「初耳だな」

そりゃそうだろう。何せ、ナンパにあってる二人も初耳なのだから。

驚いてる二人を尻目に、太陽は二枚の写真を取り出す。

『こいつ等だ』

『お、おい太陽！　これは夜明（わたしのよめ）のじゃないか！』

『こっちは一夏！？　ま、まさか太陽お前！』

「え、俺等？」

「差詰め、ナンパ撃退に用意してたんだろうよ」

納得する二人。

『へぇ・・・。でもこんな奴より俺の方が良いに決まってるって！』

ナンパ野郎のその一言で、ラウラと箒の殺意が一気にクライマックスになる。

『このゲス。私の嫁を侮辱するとは良い度胸だな・・・』

『この場にいない人物を貶める発言。人間性を疑うな』

殺気立つ二人を宥め、太陽はナンパ野郎の耳元で何かを囁いた。

『そんなことは無いぞ。私とこいつの関係は凄いぞ』

『凄い？』

『あぁ、余り大きな声ではいえないが・・・（ゴニョゴニョ）』

『へ、変態だ！』

「ちょっと待ってくれ、あいつは何を言ったんだ？」

目を見開く夜明。太陽がどんなことを言ったのかは分からないが、側にいる二人が顔を真っ赤にさせてることからとんでもない事だというのは分かる。

『それだけじゃないぞ、他にも・・・（ボソボソ）』

『そ、それは法律、いや、人として許されるのか！？』

夜明の表情から血の気が引いていく。

『ば、馬鹿なことを言うな太陽！　夜明がそんなことをやる訳無いだろう！』

さっきまでフリーズしていたラウラが太陽に食って掛かった。が、太陽はそれを受け流して話を進める。

『驚くのはまだ早いぞ。こいつの要求次第では、彼女も交えて・・・（ヒソヒソ）』

『！？！？！？　たたたた太陽！？　お前、何を言って・・・・』

『う、嘘だろ！？　これ以上、俺の中の常識を壊さないでくれ・・・！』

最早、言葉も出ないラウラに呆然とするナンパ野郎。太陽はニヤリと唇を歪め、箒の方を見ながら止めを刺す。

『更にな、こいつの彼氏は（モニョモニョ）を使った（コソコソ）

も・・・』

『”＃＄％＆’＊｝？￥―～＝@！！！！？？？？』

『や、止めろ！　世界が、世界が壊れる・・・・！　止めてくれぇぇぇぇ！！！！！！！！！！　・・・・・・・・』

頭を掻きむしりながら、ナンパ野郎は砂浜へと倒れ込んだ。太陽はやりきった表情で、一度ため息を付いた。

「やれやれ、こういうのは困りものだ」

「「そりゃこっちの台詞だぁーっ！！！！！！！！！！」」

二人の叫びがシンクロし、シャルがラウラと箒の意識を取り戻すのに苦労したのは言うまでもない。

海は良い物だ！　ｂｙ太陽（後書き）

今回は休み。

風雲急を告げる

「いやぁーっ、うまい！！」

早いもので、時刻はもう既に夕飯時。浴衣に着替えた夜明達、一年生共は大宴会場で豪華な夕飯を楽しんでいた。特に、夜明は出てきている料理が自身の好物（主に魚介類）ばかりなので、もの凄くご機嫌だったりする。

「本当に美味しそうに食べてるね。そんなにお魚好きなの？」

右隣に座ってるシャルの問いに、夜明は笑顔で頷いた。

「あぁ、大好きだ。魚さえ食べていられれば、ビタミン不足で死んでもいいと思っている。と言うか、そうやって死にたい」

碌でもない欲望だ。流石にその願望は理解しかねるのか、シャルは引きつった笑みを浮かべながら箸を動かしている。シャルに少し引かれてる事に気付かず、夜明は夕飯を楽しんだ。

「う、うぅっ・・・」

最も、彼の左隣に座っている彼女は余り楽しんでいる様子ではないが・・・。一々隣で呻き声を上げられていると思うように箸が進まないので、夜明は箸を口に入れたまま左隣に座っている女子、セシリアを見る。

「おい、大丈夫かセシリー？」

「え、えぇ。大丈夫、です、わ・・・」

そんな途切れ途切れの声、しかも涙目プラス顔を真っ青にさせて言われても説得力が全くない。原因は今彼女がしている座り方、正座にあった。英国人であるセシリアは正座が本当に苦手らしく、ろくすっぽまともにご飯を食べれていなかった。

「・・・本当に大丈夫なのか？」

次第にセシリアが震え始めたのを見て、夜明は本気で心配になってくる。セシリアは健気にもコクリと頷く。が、それ即ち最早喋る気力も無いと言うことだ。余談だが、別室には正座が苦手な生徒や教員のための席が設けられていて、外国の人達は大半がそっちに移動していた。強引にでもセシリアをそっちに移そうかと冗談抜きで考え始めた時、セシリアの左隣に座っていた太陽が徐ろに口を開く。

「本人が大丈夫だって言ってるのだから、大丈夫だろう」

「・・・そうか？」

コクコクと無言で頷き、セシリアは刺身をとって口に運ぼうとする。が、取り損なった。凡にこれで二回目だ。

「こ、この席を獲得するのに使った労力を考えれば、この程度の障害・・・」

何のこっちゃ？　夜明はシャルにアイコンタクトで訊ねた。対して、シャルは女の子には色々あるの、とアイコンタクトを返す。刺身を三回取り損なったのを見かね、夜明はセシリアを説得することに。

「セシリー」

「席は移りませんわ」

説得する余地すらも無い。ここまで強硬な態度をとられては無理矢理移動させることも出来ないので、代案を出すことにする。

「しかし、そのままじゃ食えないだろ。食べさせてやろうか？」

と、夜明が言った瞬間、もの凄い勢いでセシリアが食いついてきた。

「そ、それは本当ですの、夜明さん！？」

「おぉ、男に二言はねぇ。それに、刺身とかの鮮度とかが落ちたら勿体ないしな」

「そうですわね！　せっかくの料理が傷んでしまっては、作って下さった方々に失礼ですわね！」

言い分はごもっとも。ではと、夜明はセシリアから箸を受け取って、早速刺身を一切れとった。

「わさびはどれくらいだ？」

「少しで・・・」

セシリアはわさびが苦手らしい。作者も苦手だ。セシリアの言うとおりに夜明は少量のわさびを刺身に付け、口元まで運んでやる。

「ほれ、あーん」

「あ、あーん」

パクリと刺身を一口で食べる。途端に刺身の歯応えやら味、わさびの辛みやらが口の中に広がるが、嬉しさと恥ずかしさやらでセシリアはそれを感じる事は出来なかった。

「うまいか？」

「は、はひ。おいひいれふ・・・」

笑顔で問われ、まともな返事を返すことが出来ずにセシリアは顔を真っ赤にさせる。そんなセシリアの態度に疑問符を浮かべながら、夜明は次の料理をセシリアに食べさせてやった。

太陽とシャルが夜明に群がろうとしていた女子達を落ち着かせていたのは余談だ。

「いくぜ夜明・・・スペードとハートのフルハウスだ！」

「残念、俺はロイヤルストレートフラッシュだ」

「うごぉっ、またか！？」

露天風呂から上がって部屋（千冬の）に戻ってきた夜明と一夏はトランプでポーカーをやっていた。勝率は今のところ１０：０、つまり一夏がボロ負けしている。

「ちっきしょーっ、もう一回だ！」

「はっ、良いぜ。俺に勝てると思っているその幻想、まずはそいつをぶち壊す！」

こんなアホな会話をしながら再びポーカーをしようとしていると、部屋の扉が開いて千冬が入ってきた。風呂帰りなのか、髪は少しだけ濡れていて、首にはタオルが巻かれている。千冬は夜明と一夏しかいない部屋を見回して一言。

「何だ、女の一人も連れ込まんとはつまらん奴らだ」

「連れ込むって・・・」

「誰が鬼の巣穴に女の子を連れ込ん頭蓋がメキメキと剣呑な音をぉ!!」

本当に微かな声で呟かれた夜明の声を聞き逃さず、千冬は素早く夜明の頭を掴んでアイアンクローの刑に処した。

「誰が鬼だ誰が。まったく・・・」

「そんなことをしてるから、鬼って言われるんですよ」

いきなり部屋に入ってきた太陽に三人とも驚く。太陽は軽く手を上げて三人に挨拶をした。

「夕暮か。何か用か？」

「夜明とイチャつきに来ました・・・と、言うのは冗談ですから夜明の頭を離して下さい織斑教諭」

千冬の手の中で夜明の頭が更に剣呑な音を立て始めたので、太陽は慌てて千冬の手から夜明を救った。救出された夜明はぐったりとしながら床に横たわり、見えてるのか見えてないのかも定かではない虚ろな目で太陽を見上げる。

「あ、あれ？　太陽、お前何時の間に髪の毛を蒼に染めたんだ？」

どうやら千冬のアイアンクローは夜明の視神経に致命的なダメージを与えたらしい。太陽と一夏にジト目で睨まれ、千冬は気まずそう

に目を逸らした。

「そ、そんなことよりも夕暮、お前は何をしに来たんだ？」

慌てて話題を逸らした千冬にため息を吐きながら、太陽は夜明の頭を膝の上に乗せる。

「いや、何をしに来たとかではなくて、単純に遊びに来ただけです・・・と、言うのは言い訳で、実は夜明に頼みが・・・」

「フンフ～ン♪」

彼女、セシリア・オルコットは上機嫌で廊下を歩いていた。理由は言わずもがな、夕飯時に夜明にご飯を食べさせてもらえたからだ。

（憧れの『あ～ん』。夢のようでしたわ）

さっきの事を脳内シアターでリプレイして、セシリアは廊下のど真ん中でほおを両手で挟んでいやんいやんと身体をくねらせる。幸せな記憶をエンドレスでリプレイを繰り返しながら夢遊病者のように歩いていると、いつの間にか足は彼女を夜明達がいる部屋の前へと運んでいた。しかも、

「・・・」

「・・・」

ピンと張り詰めた糸のような空気を放って、扉に張り付くように耳を押しつけている女子二人というカオスなオマケ付き。

「鈴さん？　それに箒さんも。一体何をしむぐっ！？」

「しっ！」

口で言うよりも速く、鈴音はセシリアの口を塞ぐ。状況が分からずにキョトンとしていると、扉の向こうからこんな声が聞こえてきた。

『千冬姉、かなり久しぶりだから緊張してる？』

『そんな訳あるか馬鹿者っ！？　も、もう少し加減をしろ・・・』

『はいはい。それじゃここは・・・と』

『うあっ！　そ、そこは止め』

『大丈夫だって、すぐに良くなるよ』

『あぁぁっ！』

「「「・・・・・・」」」

耳に痛い程の沈黙。箒が今にも泣きそうなのは二人の見間違いではない。しかも、

『ここなんかどうだ？』

『あっ！？　や、優しくしやってくれ』

『これ以上ないくらいに優しくしてるぞっと』

『ひゃあっ！！　ひ、人の話を聞いて』

『無いよ』

『んんっっっ！！』

こんな声まで聞こえてくる。セシリアは唇を引きつらせ、鈴音は恐ろしく沈んだ表情を浮かべていた。三人が放つ空気が葬式さながらの物になり始めたその時、

バァンッ!!

「「「へぶぅっ!!!」」」

思いっきりドアに殴られた。十代女子にあるまじき悲鳴を上げた三人を見下ろしているのは、

「何をしてるんだお前等?」

先程から非常に艶かしい声を上げていた太陽だ。しかも、その背後には千冬が控えている。三人は千冬を見るやダッシュ! が、速攻で捕まった。セシリアと鈴音は太陽に首根っこを掴まれ、箒は千冬に浴衣の裾を踏まれて逃げられず、三人は部屋の中へと引きずり込まれた。

「盗み聞きとは感心せんな」

「まったくです」

仁王立ちする二人の前で、神妙に正座する三人。その不可思議な光景を、夜明と一夏はキョトンとした面もちで見ていた。千冬は何かを思いついたかのように指を鳴らし、太陽にシャルとラウラを呼んでくるよう頼んだ。

「あの・・・何をしてたんですか?」

太陽が部屋から出ていったのを確認して、箒は恐る恐る千冬に訊ねる。返ってきた答えは恐ろしいほどに拍子抜けする物であった。

「マッサージ」

「「「あぁ」」」

だからあんな声を出してたのか、と三人の中で疑問が氷解する。何を想像してたんだ、と千冬のからかい混じりの問いに顔を赤くしたのは余談だ。

「それにしても汗をかいたな。二人とも、もう一度風呂に行って来い」

「「「へ～い」」」

汗を流すために二人はお風呂セットを小脇に抱えて部屋から出ていった。その時、すれ違いに太陽が連れてきたシャルとラウラが部屋に入ってくる。

「さて、役者は揃ったな」

にやりと笑みを浮かべ、千冬は旅館に備え付けられている冷蔵庫から清涼飲料水を取り出して六人に投げ渡した。六人がそれぞれの飲み物を飲んだのを確認し、自身も缶ビールを仰ぐ。

「んぐっ、んぐっ・・・プハッ。それじゃ聞くぞ小娘共。あのバカとアホの何処が良いんだ？」

バカとアホ。誰を指すかは容易に想像できた。一夏と夜明しかいない。

「わ、私は別に・・・昔よりも、その・・・」

これは箒。

「腐れ縁なだけだし、そんな深い意味は無いし・・・」

続いて鈴音。

「く、クラス代表として、私を下した者としてしっかりして欲しいだけですわ」

言わずとも分かると思うが、セシリア。素直になれない三人をニヤニヤ笑いながら見た後、千冬は未だに黙っている三人に視線を向ける。

「ぼ、僕は・・・私は、優しいところです」

ぽつりと呟くように言うシャルだが、その言葉の中には真摯な響きがある。

「確かにな。だが、あいつは誰にでも優しいぞ」

「そう・・・ですね。そこはちょっと悔しいかな」

照れ笑いを浮かべながら、シャルは熱くなった頬を冷ますために手団扇で風を送った。

「で、お前は？」

千冬に話を振られ、ラウラはビクッと身体を竦ませながら、言葉を紡ぎ出した。

「つ、強いところでしょうか・・・」

「分かり易いな。あいつは確かに強い。・・・ま、私が一番気になっているのはそいつなんだがな」

千冬の視線に従って、五人は最後の一人である太陽に視線を向ける。太陽は無言でペットボトルを仰いでから、はっきりと断言した。

「全てです」

へ？　と五人は固まり、千冬はおもしろそうに唇を歪めた。

「人として、女として、夕暮太陽として、私は月光夜明の全てを愛しています」

何の恥ずかしげも無く、太陽は言い切る。聞いている五人の方が顔を赤くするほど、その姿は堂々としていた。こんな台詞を何の躊躇いもなく言い切った太陽を凄いと思う一方で、羨ましいとも五人は思った。

「ふん。お前みたいな美人にそこまで言わせるなんて、あいつも成長したものだな。・・・欲しいか？」

千冬の言葉に太陽以外の全員が固まる。それから、おずおずとラウラが訊ねた。

「く、くれるんですか？」

「やるかバカ」

えぇ～っと心の中で突っ込む五人。そんな五人を見ながら、太陽は愉快そうに笑みを浮かべる。

「アホかお前等。本気で惚れてるなら、奪い取るぐらいの気持ちで行けよ」

その通り、と千冬は空になった缶ビールを握り潰した。

合宿二日目の朝。ＩＳ試験用のビーチに集合した彼等は、装備試験

運用とデータ取りの準備を始めていた。凡に、夜明と太陽のＩＳはそもそもが完成しているため用意されている装備や強化パッケージなどは無く、ひたすらに他の生徒の仮想敵をすることになっている。

「嫌な役回りだこと」

「一々パーツを取り替えなきゃいけない一夏達に比べれば、楽なものだと思うがな」

二人が首をゴキゴキ鳴らしながらＩＳを展開しようとしたその時、

「篠ノ之、ちょっとこっちに来い」

「はい」

千冬に呼ばれ、打鉄の装備を用意しようとしていた箒はそっちへと向かう。

「お前には今日から専用」

「ちーちゅわーんっ！！！！！！」

ズドドド・・・っと砂煙を巻き上げながら砂浜を走ってくる人影が一つ。ここは関係者以外立ち入り禁止の筈なのだが、そんなの何のその。そんな些細なことで、彼女の邁進は止められない。

「・・・束」

千冬は頭痛を堪えるように額を押さえ、飛び掛かってきた束の顔面を掴んで砂浜に叩きつけて夜明の方へと放り投げた。

「師匠、一日ぶりです」

「おやよっくん。それにようちゃんも」

「久しぶりですね。束さん」

こんな感じで束がドタバタを巻き起こすが、それは割愛。肝心の話をするとしよう。

「それじゃお披露目タ～イムっ！　来い、シャイニン○ガン○～ム！！」

叫ぶや束は空に向けた指をパッチン。すると空から銀色の箱的な物が落ちてきて、

「ぶぎゃあっ！？」

夜明を押し潰した。余りに突然の出来事に一同呆然。数秒後、皆して箱の周囲に集まった瞬間、砂浜から勢い良く夜明が飛び出してきた。予め、自分の下に穴を作っておいたらしい。

「「ジャン！！」」

ドヤ顔でポーズを決める夜明と束。太陽は深々とため息を吐き、千冬は無言で二人の背後に歩み寄って問答無用の拳を二人の頭に落とした。

「篠ノ之。これがお前専用のＩＳ」

「『紅椿』だよ！　よっくん！！」

「うっす！！」

いつの間にか復活した二人。束の指示に従って夜明が銀色の箱を思いっきり殴ると、壁が壊れて中身を現す。そのＩＳ、『紅椿』は日光で紅の装甲を輝かせながら、箒を待っていた。

「そいじゃ、早速フィッティングとパーソラナイズを始めよっか。天才の私がやるんだからすぐに終わるよ。箒ちゃんこっち来てぇ～っ！」

「・・・はい」

心の底から楽しそうにディスプレイを空中に広げる束とは対照的に無表情な箒。宣言通り、束はフィッティングを終え、作業用に開いていたディスプレイを閉じた。

「そいじゃ次はいっくんを見てみようか。いっくん、白式を展開させてちょ」

「あ、はい」

紅椿が自動的にパーソラナイズを終わらせてる間に、束は白式の装甲にプラグをぶっ刺して、表示されたデータに視線を走らせる。

「おんやおんやおんやぁ・・・。不思議なフラグメントマップを構成してるね。何ざんしょ、いっくんが男だからかな？」

何やら小難しい話になりそうな空気なので、夜明は束から視線を外

して紅椿のスペックデータを見ている太陽を見た。

「どうなんだ、箒のＩＳ『紅椿』は？」

「私のバルディッシュトワイライトが参考にされてるみたいだな。装備されてる武装から考えるに、接近戦を主とした万能型だろう」

「へぇ～」

夜明が感心したようなため息を吐いた所で、束が白式のデータを取り終わるのと、紅椿のパーソラナイズが同時に終わった。そして紅椿の試運転が始まる。箒が意識を集中させた瞬間、紅椿は凄まじい速度で飛翔した。

「「おぉっ」」

大量の砂煙が舞い上がる中、紅椿の飛翔を視認できたのは夜明と太陽だけだった。上空二百メートルほどの所で箒が滑空していると、オープン・チャネルで束が語りかけてきた。

「そいじゃ武器の説明をするねぃ。右の刀が『雨月』、左の刀が『空裂』ね」

束の台詞に応えるように、箒は流れるような動作で腰から二本の刀を抜き取る。

「雨月は対単一を想定した武装でね、打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を連射して敵を蜂の巣に！　する武器だよ」

束の説明を受け、箒は雨月を突きの構えにした。仮装の相手を目の

前に創り上げ、その敵を一撃で貫き通す。すると、雨月が突きを放った周囲に幾つもの赤い球体が出現し、空をゆっくりと流れていく雲にたくさんの穴を穿った。

「続いて空裂ねぇ～。こっちは対集団の武装だよ。斬撃に合わせて攻性エネルギーをぶつけるんだよ。そいじゃこいつを打ち落としてみてね」

ポチッとな、と束は十六連装ミサイルポットをコール。形を成した瞬間に全てのミサイルを吐き出させる。

「箒！」

一夏が叫ぶが、それは要らぬ心配だったようだ。

「・・・やれる！　この紅椿なら！」

言うや、箒は右脇下に構えた空裂の切っ先で円を描くように振り抜き、赤い帯状のレーザーを展開させる。箒の周囲に帯状に広がったエネルギーは全てのミサイルを撃墜した。

「ひゅ～」

「ほぅ」

誰もが呆然として言葉も出ない中、夜明と太陽だけが感心の声を上げた。

「それじゃ、本日のメインイベントだよぉ～っ！」

降りてきた箒と紅椿の状態を確認し、束は楽しそうに言った。はてな、と誰もが疑問符を浮かべる。

「あの、束さん。メインイベントって」

「嫌だなぁ、いっくん。一番強い子達がまだ何もして無いじゃない」

束が指を向けたその先には、

「は、俺？」

「私、ですか？」

キョトンとしながら自分を指さす夜明と太陽が。

「そうだよ～。箒ちゃんに紅椿を渡すのもそうなんだけど、私の今回の目的の一つはよっくんの『レイジングウィング』とようちゃんの『バルディッシュトワイライト』のデータを取ることなのだよ。さぁ！　早くＩＳを展開して！　ハリーハリー！！」

束に急かされ、夜明と太陽は急いでＩＳを展開させた。

「飛ぶぞ、レイジングウィング」

「翔るぞ、バルディッシュトワイライト」

二人が相棒の名を口にした瞬間、互いのネックレスからそれぞれのＩＳが展開された。レイジングウィングのネックレスからは二対の蒼い光の翼が広がり、夜明を覆って装甲を展開させる。そして太陽はと言うと、両腕を軽く広げ、片膝を曲げる、何故か仮面ライダー

Wの変身ポーズを取っていた。バルディッシュトワイライトのネックレスから大量の粒子が放たれ、疾風と共に太陽を包んで装甲を展開した。

「で、俺たちは何をすれば良いんですか？」

軽く浮遊しながら、夜明は束に訊ねた。束はにやっと笑うと、海上に武器をコールした。それは箒の時と同様、いや、少しだけ仕様の違う十六連装ミサイルポッドだった。

「このミサイルを落としてもらおうかねぃ。最初に言っておくけど、このミサイルはさっき箒ちゃんが落としたミサイルの三倍の速度、二倍の威力があるから」

とんでもないことを言いながら、束は更にミサイルポッドをコールしていく。その数凡そ・・・八。つまり、単純計算で行けば、夜明と太陽はそれぞれ六四発ずつ落とせばいいことになる。

「そいじゃ、五秒後に発射するよ。五～、四～」

「早くね！？」

「せめて心の準備をさせて下さいよ！！」

愚痴を口にしながら、二人は一気に上空へと上昇する。高度三百メートルの所で停止し、ミサイルが発射されるのを待った。

「二～、一～。いっくよぉ～！！」

とりゃっ！　と束は楽しそうにミサイルを発射。計一二八のミサイ

ルが夜明と太陽に向かって飛んでいく。二人は顔を見合わせると頷き合い、ミサイルから距離を取るでもなく、何と自ら突っ込んでいった。

「「「「「「っ！！？？」」」」」」

固唾を呑んで成り行きを見守っていた一同はビックリする。二人はそのまま減速せず、ミサイル群に突っ込んだ。

「太陽！　どっちが多くミサイルを撃ち落とせるか競争な！」

「良いだろう！　後で吠え面を掻くなよ！」

ミサイル群の中心で急停止し、太陽は超高速で動きながらミサイルを切り裂いていき、夜明はその場から動かずに近づいてくるミサイルを全て撃ち抜いていった。空中で絶えず爆発が起こるが、二人には傷どころか汚れ一つ付かない。

「す、すご・・・」

一夏達が驚いている間の僅か数秒。その間に二人は全てのミサイルを落としていた。

「あぁ～、互いに六四か・・・引き分けだな」

「勝負は次に持ち越しか」

二人が残念そうにため息を吐いた時、束の口元が邪悪に歪むのを、確かに皆は見た。

「まだまだ！　お楽しみはこれからさ！！」

束は更にミサイルポッドをコール。次々に現れていくそれらは・・・数え切れない。

「おい、束！　一体何個呼び出したんだ！？」

流石の千冬も束を止めに掛かる。だが、束はそんなことをお構いなしで発射を指示する。

「ん～っとね、正確な数は分からないけど・・・一二三一発はあるよ」

千冬の顔が青くなった瞬間に、全てのミサイルポッドからミサイルが射出された。

「うぉっ！！　マジか！？」

「相変わらず無理をさせる！！」

二人は悪態を吐きながら高速機動形態へとＩＳを移行させた。夜明は背部の推進翼を広角展開させて『ハイマットモード』になり、太陽は背部のリフターを外して飛び乗る。迫り来る数多のミサイルを目視してから、二人は瞬間加速（イグニッション・ブースト）で爆発的な初速を生み出してそれを維持させながらミサイル群の間をすり抜け、地表すれすれで体勢を急反転させた。

「行くぜ、相棒」

「あぁ、派手にやろう」

夜明は全ての武装を発射態勢に移行し、エネルギーを供給し始めた。
太陽はライオンハートにシュート・ドラグーンを装備させ、ライオンハート・ザンバーへと変える。

「スターライト」

「ファイナル」

夜明の目をマルチロックオン用のバイザーが覆い、ライオンハート・ザンバーの銃口に黒い光が圧縮されていく。

「フルバースト!!!」

「エリシオン!!!」

そして放たれた暴力的なまでのエネルギー。二人が放ったエネルギーの奔流は反転しようとしていた全てのミサイルを飲み込み、悉く爆破した。

「おぉ～、二人とも凄い凄い～」

場違いな拍手を束がしていると、更に場違いな声がビーチに響いた。

「たたた、大変です織斑先生っ!!!!」

いつもとはレベルの違う慌てぶりで千冬を呼ぶ山田先生。そして夜明達は初の実戦を体験することになる。

風雲急を告げる（後書き）

次回予告
ラウラだ。箒のＩＳ『紅椿』の性能も凄いが、やはりあの二人の実力は圧倒的だな・・・。

さて、次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『夜明達、特命任務を言い渡される』

『現れた銀の福音、終焉の騎士』

『墜ちる白』
の三本だ。次回も見ろ。ジャン、ケン、ポン！

『グー』
でわな。

紅の驕り、白の墜落（前書き）

久方ぶりの戦闘描写・・・。ええ、ええ、駄目駄目ですよ・・・。

ええ、今回もパクリですよ。・・・ごめんなさい。突っ込まないで頂けると嬉しいです。

紅の驕り、白の墜落

「全員、揃ったな。では現状を説明する」

突然、千冬の指示によって訓練は中止になった。ほとんどの生徒が部屋での待機を命じられているが、夜明達専用機持ちは、本来は宴会に使う大座敷に集合させられている。教師陣と夜明達の中心に空中投影のディスプレイが浮かび上がってきた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ、イスラエルの共同開発の第三世代型軍用ＩＳ、『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』と『終焉の騎士（ナイト・オブ・オメガ）』が軍の制御下を離れて暴走、監視空域より離脱したとの連絡があった」

突然の説明に一夏は面食らってポカンとしてしまう。軽く混乱しながら周囲を見ると、箒以外の全員は厳しい表情を浮かべていた。特にラウラと太陽は真剣な表情を浮かべている。唯一人、何時も通りの飄々とした雰囲気を崩さないまま、夜明は大座敷の壁にもたれている。

「その後、衛星による追跡の結果、福音と終焉はここから二キロ先の空域を通過することが分かった。予想接触時間は五十分後、学園上層部の通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

淡々と続く千冬の言葉。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、今作戦の要は専用機持ちに担当して貰う」

詰まるところ、夜明達だけで暴走した軍用ＩＳ二機を止めろと言う

ことだ。混乱を深めている一夏と箒を余所に、真っ先にセシリアが挙手する。

「目標ＩＳ二機の詳細なスペックデータを要求します」

「分かった。だが、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。口外した場合、諸君等には査問会の裁判と監視が待っているからそのつもりで。では夕暮、皆に説明を頼む」

コクリと頷き、太陽は立ち上がりながら指を鳴らした。すると座敷の中央で映っていた空中投影ディスプレイが二枚に分かれ、それぞれのＩＳのスペックを映し出す。太陽は二枚の内の一枚を巨大化させ、説明を始めた。

「まず最初に『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』のスペックを説明する。広域殲滅を目的とした特殊射撃型、攻撃と機動に特化したＩＳだ。セシリアのブルー・ティアーズ同様、オールレンジ攻撃が可能。特殊武装、及び格闘性能は不明。尚、現在この機体は超音速飛行を続けている。アプローチは一回が限界だと考えておいてくれ。一夏、福音を墜とすのはお前の役目だ」

「えっ！？　お、俺！？」

突然話を振られ、戸惑いながら一夏は己を指さす。

「あぁ。アプローチが一回しか出来ない以上、一撃必殺の攻撃力、つまりお前の白式の零落白夜で墜とすしかない。唯、そうするとなると問題点が浮かんでくる。どうやって一夏を福音の元まで運ぶかだ。私のバルディッシュトワイライトのリフターで運ぶという手もあるが、それだと私自身が追いつけないからな・・・セシリア、確

かブルー・ティアーズの強化パッケージに強襲用高機動パッケージがあったよな？」

「はい。『ストライク・ガンナー』ですわね。超高感度ハイパーセンサーもついていますから問題ありませんわ」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！　そう言う奴の相手って、俺なんかよりも夜明の方が適任なんじゃないのか！？」

トントン拍子で話が進む中、一夏は夜明を指さす。危ない役割をしたくない、と言う訳では絶対にない。唯、レイジングウィングのスペックを考えて、心の底からそう思っているのだ。レイジングウィングは福音と同等、いや、福音を上回る火力と機動力を持っている。福音を一撃で墜とすことは勿論、万が一（夜明に限ってそんな事はないが）福音を墜とすことに失敗した場合でも福音の追跡が可能だ。だが、太陽ははっきりと首を振る。

「そんなことは分かっている。だが、夜明には別の役割がある」

もう一枚のディスプレイを巨大化させ、太陽はもう一機のＩＳの説明を始めた。

「次に『終焉の騎士（ナイト・オブ・オメガ）』の説明をする。このＩＳは対単体、そして対集団に対応できる全距離対応型だ。武装は二つと少ないが、どちらも威力は絶大、当たれば一撃でアウト、と言うのも有り得る」

「・・・このＩＳにはスラスターが付いていないのか？」

ディスプレイを見ていたラウラは太陽に訊ねた。

「ラウラの言うとおり、終焉には一個もスラスターが付いていない。背部に装備されたマントがスラスターの役割を担ってるようだ・・・あぁ、一つだけ言っておくが、このマントを攻撃して墜とそうとしても無駄だぞ。仮装シミュレートの結果、このマントはスターライト・ブレイザーの直撃にも耐えられることが分かった。そして何よりも気をつけて欲しいのは・・・」

ここで、『終焉の騎士（ナイト・オブ・オメガ）』のディスプレイの横にもう一枚のディスプレイが現れた。

「終焉の特殊装備、『次元超越弾』だ」

「「「「「「「次元超越弾？」」」」」」」

一同の声が重なる。

「早い話が超強力な重力を発生させる弾丸を放って空間を歪曲、終焉だけが通ることの出来る特殊な空間を作り出すのさ。簡易的なブラックホールだとでも思えばいい」

夜明の説明で皆は納得したように頷いた。

「つまり福音ほどでは無いにしろ、終焉は超音速飛行をしている。それに追いつけて、尚かつ次元超越弾を使用される前に終焉を倒すことが出来るのは、この中では夜明しかいない」

「だけど・・・」

「嫌なら降りてもいいんだぜ、一夏」

腕を組んだまま壁に背を預けていた夜明が唐突に口を開く。

「こいつは訓練じゃない、実戦だ。覚悟が無いのに出れば、死ぬしかない」

これから自分が能力未知数のＩＳと命懸けの闘いを演ずることになると言うのに、夜明には臆した様子は一切ない。その姿を見て、一夏は及び腰になっていた自分を蹴り飛ばした。

「・・・分かった、俺がやる。いや、やってみせる」

一夏の言葉を聞いて、太陽は具体的な作戦の内容に入ろうとしたその時、

「ちょ～いと待ってくんないかなぁ～」

場違いすぎる暢気な声が座敷に響いた。全員がその声の発生源、天井を見上げる。そこには、

「・・・何やってんですか、師匠・・・」

完璧にして十全の鬼才、人類史上最大のトラブルメーカー、篠ノ之束の首が天井から生えていた・・・。

「そんじゃま、派手に行きますかぁ～」

時刻は十一時半。これでもかと言わんばかりに陽光が降り注ぐ砂浜、そこに立つ四人の影。右から順に一夏、箒、夜明、太陽である。何故にセシリアではなく箒がいるのかと言うと、

『箒ちゃんの紅椿はねぇ～、即時万能対応機（リアルタイム・マルチロール・アクトレス）の展開装甲だからパッケージなんか無くても超高速機動が出来るんだよぉ～』

とのこと。ならばと太陽は作戦を変更。一夏を運ぶ役割を箒に変え、セシリア達には待機を命じた。夜明の役割は変わらず、単機で終焉を墜とすこと。そして、太陽は三人がそれぞれの相手と接触が予想されている空域から少し離れた所で待機、万が一の時の保険になっている。夜明の気の抜けた声を合図に四人はＩＳを展開させた。

「来い、白式」

「行こう、紅椿」

「飛ぶぞ、レイジングウィング」

「翔るぞ、バルディッシュトワイライト」

四人の身体をそれぞれのＩＳ装甲が包み、ＰＩＣによって僅かに浮遊する。太陽は皆の周囲にディスプレイを広げ、再び作戦の確認をした。

「もう一度作戦の説明をするぞ。まず福音の方は一夏が箒の背中に乗って一気に接近、零落白夜を叩き込む。万が一失敗した場合は一度撤退、それが不可能ならば戦闘に入って私の到着を待つ。終焉は夜明が倒す。それで良いな？」

「「「あぁ」」」

真剣な面持ちで返答する三人。だが、約一名の声だけ、妙に喜色に満ちている。

「しかし、偶々私達がいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせれば出来ないことなど無い、そうだろ？」

「だろうな。でも箒、先生達が言ったとおり、これは訓練じゃなくて実戦なんだ。何が起きるか分からないから、十分気をつけて」

「そんなことは分かっている。何だ、怖いのか？」

「いや、そう言う訳じゃ」

「安心しろ、お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいい」

こんな感じで、箒は妙に気分を高揚させている。専用機が手に入った嬉しさかどうかは定かではないが、少なくとも、その態度はこれから闘いに赴く者のそれではない。箒の調子を見かねた夜明はため息を吐きながら、箒の頭に軽く肘鉄を打ち込んだ。

「浮かれてんじゃねぇよ。死にてぇのか？」

その一撃で幾分かは気分が落ち着いたのか、箒は頭を押さえながら夜明を睨んで押し黙った。だがやはり、嬉しそうな微笑を口元に浮かべている。

『一夏、どうにも箒の奴は浮き足立ってるみたいだ。お前がサポートしてやれ』

『どんなミスをするか予想が出来ない。しっかりやれ』

夜明と太陽から送られてきたプライベート・チャネルに、一夏は返事を返した。夜明同様に一夏も、妙に浮き足立っている箒の様子に危惧を抱いている。

「それでは、作戦開始！」

太陽の声を合図に、四人は空へと飛翔した。箒は一夏を背に乗せて、夜明と太陽はそれぞれのエネルギーで目標高度の五百メートルにまで到達し、それぞれが目指す空域に向けて高速で移動し始める。

「仕損じるなよ！！」

「二人とも、無理はするな！」

まず最初に近くの空域で待機することになっていた太陽が一行から離れ、その数秒後に夜明も離れていった。

（夜明の奴、大丈夫・・・いや、あいつに限って負ける訳がない。俺は、俺の役割を果たそう）

「暫時衛星リンク確認。情報照合完了。目標の現在位置を確認。一撃で決めるぞ、一夏！」

「あぁ！」

一夏が雪片の柄を握る手の力を強めると、暫時衛星から目標の情報を照合させた箒が紅椿を加速させる。加速と同時に展開された脚部と背部装甲は展開装甲の名に相応しい。箒は更に加速し、ついに二人のハイパーセンサーが目標の姿を捕捉した。

（（あれか！））

二人の心の声が重なる。そのＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』はその名に相応しく全身の装甲が銀に輝いていて、日光を受けて輝いていた。何よりも異質なのは、頭部から生えた一対の巨大な翼。それは大型スラスターと広域射撃武器を融合させた特殊装備らしい。

「目標との接触は十秒後、集中しろ！」

箒の声が聞こえた時には、既に一夏は意識を握った雪片と、目の前を飛翔している福音に集中させていた。一夏の集中に応えるように、雪片は輝きを増していく。福音と二人の距離は見る間に縮まり、

「うおおおっ！！」

福音が攻撃範囲内に入った瞬間、一夏は瞬間加速（イグニッション・ブースト）を発動させ、福音に向けて突っ込んだ。雪片の輝く刃が福音に触れた、と一夏が確信した刹那、福音は最高速度のまま体勢を反転、後退する形で二人と相対する。突然、福音が反転したことに一夏は面食らうが、引くには遅すぎるのでそのまま福音へと突撃した。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘（シルバー・ベル）》、稼働開始」

抑揚のない機械音声がオープン・チャネルで聞こえると同時に、福音は身体を一回転させて一夏が振るう雪片を回避。逃すまいと、一夏も雪片を振るが、全てを紙一重で避けられ、零落白夜発動限界が迫っていることに焦りを覚えて大振りの一撃を出してしまう。その隙を逃すほど、福音は優しくはない。

「！！」

頭部から生えた大型スラスター、それの装甲の一部が開き、そこから砲口が覗く。

「Ｌａ・・・♪」

甲高いマシンボイスを放ち、福音は二人の視界を覆うほどの光弾をばら撒いた。

「ここら辺だと思うんだがな・・・」

一夏達と分かれた数十秒ほどの空域で、夜明は中に浮いたまま周囲を見回す。そこは高度五百メートルの高所、そこで夜明は『終焉の騎士（ナイト・オブ・オメガ）』と接触する筈だ。夜明は周囲への警戒を怠らず、唯、目標が出現するのを待っている。周囲三百六十度を見回したその時、

ー警告！　前方空間より歪みを確認、敵ＩＳ出現！　ー

「来たか！」

レイジングウィングからもたらされた情報に従って視線を前方に向けた。そのコンマ数秒後。轟音を立ててその空間が歪んだ。半径十メートルほどの黒い球体が出現し、嫌な音を立てて空間を侵食していく。轟音が止み、ゆっくりと球体が薄れていく。そこにいたのは・・・。

白銀の鎧のような装甲で覆われた威風堂々たる姿。

橙色の龍を模した左腕の籠手、紺色の狼を模した右腕の籠手。

外側が白、内側が赤のマントを風に靡かせた騎士の姿をしたＩＳ『終焉の騎士（ナイト・オブ・オメガ）』がそこにいた。余談だが、このＩＳを開発した研究者達は、日本のとあるデジタルなモンスターを育成するゲームにはまっていたらしい。

「「・・・」」

両者は無言で睨み合った。時間にして数秒ほどの空白の後、二人同時に動き出す。夜明は高速で後ろに下がりながらフィン・ファング、シューティング・ビットを展開。対して、終焉は左腕の籠手から大型の実体剣、グレイを黒煙と共に射出させる。

（先ずは小手調べだ・・・！）

夜明は後退したままウィングスターの引き金を引いた。二つの銃口から碧の閃光が放たれるのに連動して、夜明の周囲に展開された八つの砲門からも閃光が現れる。眼前に迫ってくる計十の閃光を、終焉はグレイを一薙ぎさせることで全てを吹き飛ばした。出鱈目な方

向に跳ね返された閃光が夜明の真横を通り過ぎ、幾つかのシューティング・ビットを破壊する。

「んなっ、マジか！？」

夜明の驚愕に応えるように、終焉は右腕の籠手から大型荷電粒子砲、ガルルを展開させて夜明へとその砲口を向けた。

ー警告！　敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填ー

ガルルの砲口が光った刹那、高密度に圧縮された荷電粒子弾が放たれた。夜明は横に移動してそれを回避。横を通過した際に、荷電粒子弾が発生させていた余波に押されて少しだけ体勢を崩すが、すぐに体勢を直して、反射的に荷電粒子弾の弾道を目で追う。僅かな時間、荷電粒子弾は直進して、二人から数百メートルほど離れた海面へと直撃した。その瞬間、紺色のエネルギーがドーム状に広がり、周囲を染め上げていった。

「どんだけ馬鹿げた威力だよ・・・」

呆れるように呟きながら、夜明は右腕を頭の後ろに持っていってビームシールドを展開、接近してきていた終焉が振り下ろすグレイを防ぐ。巨岩を叩きつけられた様な感覚が夜明を襲うが、その一撃をどうにか耐え、回し蹴りの要領で右脚を振り上げ、グレイを弾き飛ばした。更にそのまま半回転して、左のウィングスターを終焉の腹に押しつけ、数回トリガーを引く。数回、碧の閃光が終焉に直撃して、数メートル後退させた。夜明は終焉が体勢を立て直す前にスタードライブを発射態勢に移行、蒼い荷電粒子砲を二発ぶっ放す。終焉は実体剣を収納させたグレイの口部分で背中に羽織ったマントを

掴み、身体を覆って荷電粒子砲を防いだ。数秒の拮抗後、終焉は左腕を振り抜いて荷電粒子砲をうち消した。

「ちぃっ・・・」

口の中で小さく悪態を吐きながら夜明は腰からスターライザーを引き抜き、瞬間加速（イグニッション・ブースト）で終焉に突っ込んで両手を振り下ろす。終焉は振り下ろされたスターライザーをグレイ、ガルルの口部分で受け止めた。二人はそのまま鍔迫り合いに入る。夜明はそのままの体勢で、腹部装備のスターライト・ブレイザーを撃とうとするが、終焉がそれを許してはくれない。確実にスターライト・ブレイザーへのエネルギー供給を始めた瞬間に鍔迫り合いに押し負け、グレイで切り裂かれるだろう。

（どうすれば・・・）

鍔迫り合いに集中したまま打開策を探していると、プライベート・チャネルから太陽の裂帛の声が流れてきた。

『夜明！　一夏が福音に墜とされた！！』

次の瞬間、夜明はサマーソルトキックで終焉の顎を打ち上げた。身体を上下逆に半回転させ、収納状態のままスタードライブを放った。体勢を崩した終焉に二つの蒼い荷電粒子砲が直撃する。更に駄目押しとばかりに一回転して上下を元に戻すと、腰のディバイン・カノンを展開させて乱射させる。小口径弾が直撃して、終焉は黒煙を上げながら海へと墜ちていった。

「くそが！　やっぱり箒か・・・！！」

忌々しそうに呟くと、夜明は推進翼を広角展開させて、最大出力で一夏達がいる方向へと飛んでいった。

「Ｌａ・・・♪」

再び甲高いマシンボイスが響き、福音は全方位へと一斉射撃を始めた。

「やる・・・だが押し切る！！」

狙いもへったくれも無い光弾の雨をかわしながら、迫撃をかける。
そして・・・福音に隙が出来た。

「一夏！」

「うおおおっ！！！」

一夏は咆哮を上げた。だが、それは箒の呼び掛けに応える物では無い。その証拠に、一夏は直下海面へと全速力で飛んでいた。瞬間加速（イグニッション・ブースト）と零落白夜を同時に発動させて、この海域にはいないはずの船へと向かっていた光弾を切り裂く。

「何をしている！？　折角のチャンスを・・・！」

「船がいるんだ！　この海域は先生達が封鎖してる筈なのに・・・密漁船か！！」

悔しげに歯噛みすると、一夏の手の中で輝いていた雪片から急速に光が失われていった。エネルギー切れ、つまり福音を墜とすチャンスを失い、作戦の要も無くしたと言う事だ。

「馬鹿者！　犯罪者など庇ってどうする！　そんな連中」

「箒！！」

怒鳴っていたところを逆に怒鳴り返され、箒は身体を竦ませる。

「何馬鹿なこといってるんだよ！　力を手にしたら、弱い人のことが見えなくなるなんて・・・らしくない、全然お前らしくないぞ箒・

・・」

「わ、私は・・・」

動揺を隠しきれず、箒は手で顔を覆う。その時、福音は一斉射撃状態へと入っていた。しかも、照準してるのは他でもない・・・箒。

「箒ぃぃぃぃっっっ！！！！！」

雪片を投げ捨て、一夏は全てのエネルギーを使って、箒へと瞬間加速（イグニッション・ブースト）した。

（頼む！　白式！　頼む！！）

スローモーションになった視界の端で福音から光弾が放たれ、次の瞬間、一夏は箒と福音の間に割り込んで、箒を護るように両腕を広げる。刹那に響く何十発もの爆裂音。箒の視界を黒煙が埋め尽くした。

「い、一夏？」

恐る恐る箒が声をかけると黒煙は晴れていき、装甲をずたずたにされた一夏が姿を現した。装甲を失った部分の肌は焼かれ、血が流れ出ている。ぎこちない動作で振り向くと、一夏は箒の無傷を確認して満足そうに笑った。そして、目を虚ろにさせてゆっくりと落下を始める。

「一夏ぁっ！！！」

頭から海へと落下しそうになる一夏を箒がキャッチした。

「一夏っ、一夏っ、一夏ぁっ！！！」

半狂乱で箒は一夏の名を呼んだ。だが、返事は返ってこず、一夏はそのまま意識を失った。何度も何度も一夏の名を呼ぶ箒を、福音は無情に見つめながら一斉射撃態勢へと移行する。そして光弾をばら撒こうとした瞬間、福音の頭上を人一人分よりも一回り大きい影が現れた。福音が反射で上を見上げると、

「貴っ様ぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！」

怒りの表情を浮かべた太陽が急降下していて、オールデリートを構えていた。オールデリートが振るわれる直前に福音は後ろへと緊急回避、どうにか直撃を避けたが、斬撃の余波で吹き飛んで海中へと姿を消す。太陽は福音が姿を消した海面に向けてライオンハート・ザンバーを乱射しながら箒と一夏を見た。戦闘を続けられない状況なのは、誰の目から見ても明らかだった。

「くっ、どうすれば・・・」

太陽が小さく悪態を吐くと、向こうの空から一筋の輝きが見えてきた。その輝きは一瞬で大きくなり、太陽の隣りで急停止する。

「夜明！」

「太陽か・・・一夏と箒は！？」

無言で太陽は二人を示す。夜明が舌を打ったその時、オープン・チャネルで千冬の声が聞こえてきた。

『作戦は中止だ！　夕暮、お前は織斑と篠ノ之を回収して戻ってこい！　月光は』

千冬の指示が終わる前に、海面に二つの水柱が現れた。一つは福音、もう一つは終焉。

「・・・俺はここで時間を稼ぎます」

『・・・分かった、無理だけは絶対にするな。夕暮、お前は急いで二人をこっちに戻した後、月光と協同して二機と交戦しろ』

「了解です」

太陽は返事を返すと同時に一夏を肩に担ぎ、箒を小脇に抱え、全速力で指定された回収ポイントへと飛んでいった。その後ろ姿を見送り、夜明はゆっくりとスターライザーを構える。

「・・・行くぞ・・・！！」

一瞬後、日光によって海面に映し出された三つの影が超高速で激突した。

紅の驕り、白の墜落（後書き）

次回予告
シャルロットです。一夏は大丈夫なの！？　それに夜明は残って二機の相手をしてるって言うし・・・えっ、夜明の反応がロストしたってどういう事！？

次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『不屈の翼、海中に没す』

『太陽、箒を導く』

『黄昏の黒斧、再び』

の三本です。ジャンケンなんてしてる場合じゃ無いよ～っ！！！

不屈の翼、海中に消える　黄昏の導き（前書き）

太陽は～♪

この小説で～♪

一番～♪

漢～♪

不屈の翼、海中に消える　黄昏の導き

「作戦はどうなったんだ太陽！？」

戦闘を続行できない状態の一夏と箒を抱えて戻ってきた太陽を迎える四人と救護班と思われる教師達。四人を代表して、ラウラが訊ねる。

「作戦は失敗した！　一夏は重傷、箒はエネルギー切れで闘える状態じゃない。今、福音と終焉の相手は夜明がしてる」

「えっ！？　あの二機を同時に相手してるの！？」

シャルの問いに頷くことで答えを返し、太陽はその場から四人を下がらせて一気に飛翔した。今から全速力で飛んで、夜明が二機と交戦している空域に到達するのには最低でも五分はかかる。そして、今夜明が相手をしている福音と終焉は唯のＩＳではない。軍用ＩＳなのだ。どんな隠し球を持っているか、分かった物ではない。

（夜明でも、あの二機を同時に相手取るのは無理だ・・・）

「おおおおおおっっっっ！！！！！！！！！！！！！」

が、太陽の予想に反して、夜明は福音と終焉を相手に善戦していた。フィン・ファングとシューティング・ビットを全て破壊され、装甲の何カ所かに出来た損傷からまったくの無傷ではないことが分かる。だが、戦況は夜明の方に傾き始めていた。

「Ｌａ・・・♪」

甲高いマシンボイスと共に、福音の翼から無数の光弾がばら撒かれる。対して、夜明はディバイン・カノンを連射することで全ての光弾を撃ち落とした。夜明と福音の間の空間に何十もの爆発が発生し、轟音と黒煙が空間を満たす。響く轟音が収まると、微かな飛行音が夜明へと迫っていた。反射的に夜明は音が聞こえてきた方へと左手を突き出す。黒煙を切り裂いて飛んできた終焉が振り抜きかけたグレイが掌の装甲を切り裂いて食い込む。

「いって・・・おらよぉっ！」

更にグレイの刀身が深く食い込むにも拘わらず夜明は左手に力を込めて終焉を引き寄せ、その左肩に肘鉄を打ち込んだ。ゴキッと嫌な音を立てて終焉の左肩装甲が砕け、護られていた搭乗者の骨に罅を入れる。

「女性を傷つけるのは嫌なんだがな！」

グレイを離し、終焉の顎を思い切り蹴り飛ばす。言動と行動が伴っていない。まぁそれはおいといて、腰にマウントしていたウィングスターを引き抜いて飛んでいく終焉に狙いを定めるが、引き金を引くよりも先にレイジングウィングが福音に照準されたことを知らせてくる。心の中で悪態を吐き、夜明は横に瞬間加速（イグニッション・ブースト）して光弾を避け、更に急降下して海面すれすれを飛び始めた。夜明が飛ぶ際に発生する余波で、いい感じに海が遮蔽幕のようになっている。

「Ｌａ・・・♪」

そんなことお構いなしに福音は光弾を連射、更に体勢を立て直した終焉までもがガルルを撃ってくるのだから質が悪い。

「無茶苦茶だなおい・・・」

福音の光弾はともかく、終焉が放つ荷電粒子弾は掛け値なしで一撃必殺の威力を持っている。直撃は勿論、余波でも当たれば唯では済まないだろう。その事を証明するように、光弾が当たって水柱を上げる海面の中心に荷電粒子弾があたり、紺色のドームを作り上げた。後方で広がるエネルギーのドームを前に瞬間加速（イグニッション・ブースト）することでかわし、夜明は出力を最大まで上げたウィングスターで目の前の海面を撃ち、

巻き上げられた海水の幕で姿を隠す。

ー警告！　敵ＩＳにロックされています！ー

砲撃を止めて様子を見ていた二機に同じ警告がもたらされる。ロックが確認された方向、後方斜め上を見ると、そこには海水の幕から飛び出して二機の頭上を越え、姿勢を上下反転させた夜明がウィングスターと発射態勢に移行させたスタードライブの砲門を二機に向けていた。そのままの姿勢で夜明はウィングスターとスタードライブを連射する。放たれた碧の閃光と蒼い荷電粒子砲は福音と終焉に直撃、或いは海面へと当たって黒煙と水柱を作り出す。姿勢を元に戻しながら夜明は連射を止めず、次々と砲撃を二機に撃ち込んでいった。二機の姿が黒煙と水柱の中に完全に隠れたところで漸く夜明は連射を止め、海上すれすれで浮きながらスタードライブを収納し、ウィングスターは二機に向けたままにする。

（・・・やったか？）

そう思った刹那、黒煙の中から荷電粒子弾が放たれた。夜明は反射的に両腕を身体の前で交差させてビームシールドを展開、どうにか荷電粒子弾の直撃を避けた。だが、威力はまったく殺せず、勢い良く海面へと叩きつけられる。

「・・・ぶはぁっ！！　し、死ぬかと思った！！」

数秒後、海中から飛び出した夜明は犬のように身体を振るわせて、身体から滴る海水を飛ばした。ふと、ハイパーセンサーがこっちに向けて飛んでくる福音を捕捉した。

（先ずは福音を墜とす！）

福音を先に撃破して終焉と一対一（サシ）の状況を作ろうと考えた夜明は連結したウィングスターを右手に持ち、更に連結させたスターライザーを左手に構えて福音へと突っ込む。福音が光弾を放ってくるが、それらを最小限の動きでかわす。そして激突する寸前に大きく左手を引いて、スターライザーを福音の右大型スラスターを貫いた。そのままの状態で福音が暴れるよりも早く、先のウィングスターとスタードライブの連射で出来た左大型スラスターの損傷部位にウィングスターの銃口を無理矢理ねじ込み、引き金を何回も引く。損傷部位からウィングスターを引き抜くと同時に福音の左大型スラスターは内側から膨張して爆ぜた。片方の大型スラスターを失って体勢を崩した福音に更なる追撃をかけるべく、夜明は右大型スラスターからスターライザーを抜いて、連結させた後ろのスターライザーで右大型スラスターを切り裂いた。飛行の手段を失って海へと墜ちていく福音の腕を掴んで持ち上げ、止めを刺すためにスターライト・ブレイザーにのエネルギー供給を開始する。

ー警告！　敵ＩＳ射撃体勢に移行、トリガー確認！ー

（って、仲間諸共か！？）

ギョッとしながら福音を抱きかかえて回避行動を取ろうとするが、ふと疑問が浮かぶ。

（ちょい待て。今のは終焉が射撃体勢に入ったことの警告だよな・・・なら、何でロックの警告はされなかったんだ・・・まさか！！）

終焉の方向を向いた夜明の視界に、最悪の展開が形となって映し出される。終焉の右手から展開された荷電粒子砲、ガルル。その光り輝く銃口が向いているのは夜明の方向ではなく・・・一夏が墜ちる

原因、つまり密漁船へと向けられていた。

「ふっざけんなあああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

怒りの咆哮を上げながら夜明は福音を放り出し、密漁船に向けて最大出力の五連続瞬間加速（フィフス・イグニッション・ブースト）をした。ガルルの砲口に光が収束され、放たれる僅かな時間で夜明は終焉と密漁船の間に割り込み、全てのエネルギーを使ってビームシールドを展開する。ビームシールドが展開された瞬間、ガルルの砲口から幾つもの荷電粒子弾が放たれ、ビームシールドを直撃した。

「頼むレイジングウィング！　耐えてくれ！！」

夜明の懇願を掻き消すかのように荷電粒子弾はビームシールドを殴りつけ、黒煙と爆音を広げる。放たれた荷電粒子弾は計六発。二発目を防いだところで右腕のビームシールド発生装置から煙が噴き出し、四発目で左腕のビームシールドが完全に消えた。そして五発目で右腕のビームシールドも消え、六発目が夜明の両腕に直撃した。圧倒的なエネルギーが夜明を襲い、レイジングウィングのシールドエネルギーを一撃で零にする。両腕からもたらされる激痛を無視して、夜明は背に護っていた密漁船に視線を向けた。荷電粒子弾は六発とも全て夜明が防いだので、船に傷らしいものは無い。

（よ、良かった・・・っ！！）

ホッとして気が緩んだ瞬間、誰かの手が夜明の喉を捕えた。視線を向けると、そこには夜明に破壊されたスラスターの替わりにエネルギーの翼を生やした福音、第二形態移行（セカンド・シフト）を終えた『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』がいた。

「マジ・・・かよ・・・」

夜明の顔が絶望で歪む。そんな夜明を嘲笑うかの如く、福音はゆっくりとエネルギー翼で夜明の身体を包んだ。そのコンマ数秒後、あの出鱈目な連射能力を持った無数の光弾が零距離で夜明を襲う。福音がエネルギー翼を広げると、全身をズタズタにされた夜明が黒煙を上げながら蒼い海へと墜ちていった。

「・・・く、そ・・・がぁ・・・」

その言葉を最後に、夜明は背中に強烈な衝撃を感じて、冷たい海の中へと水没していった。

「・・・」

旅館の一室。空は相変わらず青いが、天高くに浮かんでいた日輪は西へと傾き始めていた。ベットに横たわった一夏はもう三時間以上も目を覚ましていない。その傍らにいる箒は、もうずっと前から項垂れ続けていた。髪を結んでいたリボンは太陽が彼女を脇に抱えた時に外れ、箒の顔を覆い隠すように垂れ下がっている。

（私の、所為だ・・・）

関節が白くなるほどきつく拳を握り締めながら、箒はあの時一夏が浮かべた笑顔を思い浮かべた。あの時、確かに一夏は笑っていた。だが、今の彼は笑顔を浮かべていない。

『作戦は失敗だ。月光と夕暮が戻り次第、次の作戦を伝える。それまでは各自現状待機だ』

旅館に戻ってきた箒を迎えたのは、千冬の待機命令だけだった。千冬はそのまま一夏の手当を指示し、自身は作戦室に戻って太陽と夜明の連絡を待っている。何も言われず、責められない。そのことが何より箒にとって辛かった。

（何で、私はいつも・・・）

力に流されてしまう。振り翳したくて仕方なくなる。湧き上がる暴

力への衝動を抑えきれなくなる。

（太陽が、教えてくれたと言うのに・・・）

あの夕焼けが眩しい屋上で、太陽が自分の疑問に真摯に応えてくれた事を思い返す。

『強さとは、大切な物を守るために必要不可欠な物だ』

あの時の太陽の表情が脳裏に浮かんだ。

『守りたいと願う想いだけで守れるほど、この世界は優しくない』

『逆もまた然り。強さだけで守れるほど、この世界は単純じゃない』

『だからこそ、私達は見誤ってはいけないんだ。強さとは何たるか、想いとは何たるか』

『強さ無き想いは戯れ言に成り下がり、想い無き強さは唯の暴力へと変わり果てる』

『見誤るなよ』

太陽が語ってくれた言葉全てが箒の胸を深々と抉る。更に拳を強く握り締めたその時、乱暴に扉が蹴り開けられた。見ると、セシリア達他の専用機持ちを従えた太陽がずかずかと部屋の中に入ってきている。だが、何故か夜明の姿はない。

「ここにいたか。夜明がいないことも含めて説明する。だから黙ってろ」

箒の疑問に先回りして答え、太陽は何故か海水で濡れている髪を梳き上げて一同を見回した。

「単刀直入に言うぞ。夜明が墜ちた」

「「「「「・・・え？」」」」」

全員の表情が固まる。そんな事は歯牙にもかけず、太陽は淡々と話を続けた。

「福音と終焉との戦闘で月光夜明は撃墜、反応が完全にロストした。現在、織斑教諭が指揮する捜索班が反応がロストした海域を中心に捜索をしているが・・・まぁ、絶望的だろうな」

夜明が墜ちた。その事実が信じられず、一同は顔を見合わせる。不意に、絞り出すように箒が呟いた。

「わ、私の所為だ・・・」

箒のその言葉に誰も返事を返さず、唯一人、鈴音だけが冷めた視線を向けている。

「で、私は落ち込んでまーすってポーズ？　馬鹿じゃないの？」

箒が鈴音を睨むが、そんな物は何処吹く風と言った感じで受け流して、鈴音は太陽を見た。

「で、どうすんのさ太陽？」

「決まってる。さっさと作戦立てて、あの二機をずたぼろにして、夜明を殴り起こしに行くぞ」

「いいわねそれ。シンプルで私好み」

ニッと笑う鈴音を満足そうに見てから、太陽は視線をラウラに移した。

「ラウラ、福音と終焉の反応を軍に追わせてたらしいな。結果はどうなんだ？」

「お前は・・・ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスはついてるようだが、光学迷彩は付いていなかったらしい。衛星で目視できた」

「上等。セシリア、シャル、強化パッケージのインストールはどれ位で終わる？」

「何時でも大丈夫ですわ」

「後はＧＯサインを待つだけだよ」

二人の返事に太陽は再び上等、と返し、最後に箒を見た。

「後は、お前の覚悟だけだな、箒」

「わ、私は・・・」

視線をベットの上で横たわる一夏へと向ける。一夏の身体に巻かれた包帯に胸が痛んだ。

「自分が信じられない、か？」

図星を突かれ、箒は黙り込む。太陽は一度だけため息を吐き、箒の肩を両手で掴んだ。強引に自分の方へ身体を向けさせ、目を覗き込む。

「た、太陽？」

「自分が信じられないのなら、信じなくて良い。唯、私を信じろ。お前を信じる私を信じろ」

箒の目が大きく見開かれた。そして、その瞳にある物が浮かぶ。決意という名の、並みならぬ覚悟が。

「私は・・・闘う！　・・・いや、共に闘おう。そして、勝つ！！」

「いい返事だ、それじゃ作戦会議だ。・・・あの二機には空前絶後の大敗を喫してもらおう」

その時、太陽が浮かべていた笑みは酷く獰猛だった。

「・・・何処だぁ？　ここ？」

夜明は周囲を見回した。あるのは海、そして足下には白い砂浜。見覚えは、

「あるなぁ・・・。確か、臨海学校に行く前日に見た記憶が・・・。でも、何だってこんな所に？」

「夜明？　お前、何だってこんな所に？」

ウンウン呻きながら首を傾げていると、不意に声をかけられた。振り向くとそこには。

「一夏？　お前こそ何でここに？」

一夏が立っていた。

「さぁ？　気が付いたらここにいたんだよなぁ・・・。何処だここ？」

「知るかよ・・・あぁ？」

二人して頭を掻きながら周囲を見回していると、歌声が聞こえてきた。

「～♪　～♪　～♪」

とても綺麗で、とても元気がいい、とても透き通った歌声。その歌声が妙に気になり、二人は歌声が聞こえる方へと歩み始める。

「～♪　～♪　～♪」

その歌を歌っている者は波打ち際にいた。爪先を濡らしながら、踊るように謳う少女。白い髪を輝かせて、本当に楽しそうに歌っている。一夏は近くにあった流木へと座り、夜明はその場に腰を下ろした。

何故か、その少女に声をかけようとは思わず、二人は無言でその歌を聴き続けた。

「さて・・・夜明と一夏を墜とした罪、数えてもらうぞ三下共ぉっ！！！」

目の前に対峙する二機に咆哮を浴びせながら、太陽はバルディッシュトワイライトの装甲をスライド展開させ、紅の粒子を放ち始めた。

不屈の翼、海中に消える　黄昏の導き（後書き）

次回予告
鈴音よ。太陽の奴、本気でキレてるわね。軍用ＩＳ二機を相手取って圧倒するってどんだけよ・・・。

次回のＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『黄昏の黒斧、戦場に舞う』

『戦乙女、想いを胸に闘う』

『蘇る白、不屈の蒼』

の三本よ。さって、戦闘の準備をしないとね・・・

Revive Doresshi white & Raising w

凄い増えてきましたね、ＩＳの小説・・・俺も頑張らんと・・・。

六人が立てた作戦は至ってシンプル。と言うか、作戦なんて呼べるほど高尚な物ではない。モードトランザムを発動させた太陽が出来るだけ二機を消耗させ、その後に残りの五人が二機をフルボッコにするという何ともお粗末な物だ。

「出し惜しみはしない！！」

紅の粒子を放出しながら、太陽はオールデリート・ハーケンとライオンハート・ザンバーを構え、二機へと突っ込んでいった。福音が光弾を乱射するが、そんなのお構い無しで太陽は更に加速する。光弾が太陽に直撃するが、モードトランザムによって強度が増されたシールドが直撃する光弾全てを防いだ。光弾が直撃したことによって発生した黒煙が太陽の姿を覆い隠す。終焉がガルルの砲口を黒煙に向けた瞬間、オールデリート・ハーケンを構えた太陽が急降下して福音の片方のエネルギー翼を斬り落とした。福音のすぐ下で急停止と急反転を行い、ライオンハート・ザンバーの実体剣を広げ、ビーム刃を展開させる。

「少しの間、退場してろ！！」

ライオンハート・ザンバーの実体剣で残ったもう片方のエネルギー翼を斬り裂き、右足の踵からグリフォンを展開させて踵落としの要領で福音の頭に叩きつけた。太陽は落下していく福音に追撃をかけようとはせず、終焉が振り下ろしたグレイをオールデリート・ハーケンで防ぐ。火花を散らせながら鍔迫り合いを演じながら、ライオンハート・ザンバーをブレードモードからライフルモードへと移行し、黒く輝き始めた銃口を終焉に向けた。

「ファイナルエリシオン・・・！」

黒い閃光が終焉を飲み込んで吹き飛ばし、海中へと叩き込む。もう一発ファイナルエリシオンを放とうと終焉に銃口を向けるが、光弾が背中を直撃して太陽の意識を終焉から逸らさせた。後ろを振り返ると、さっき両方のエネルギー翼を斬られた筈の福音がエネルギー翼を生やして太陽へと向かっていた。

「復活の早いことで・・・」

呆れたように太陽が呟いた瞬間、福音は再び両翼から光弾を放った。視界を覆うほどの量の光弾を避けようとはせず、太陽は顔の前でオールデリート・ハーケンを構える。

「ロイヤルセイバー」

太陽がその言葉を口にするとオールデリート・ハーケンの柄から溢れるビームが倍増し、あれよあれよと言う間にビーム刃の刀身が数十メートルにまで伸びた。太陽は刀身が数十倍にまで伸びたオールデリート・ハーケンを無造作に構え、横薙ぎに振り抜く。それだけで全ての光弾は斬り裂かれ、爆発した。爆発の間を縫うようにして福音は太陽へと迫り、両腕を伸す。太陽を掴んで、零距離で光弾を撃ち込むつもりなのだろう。だが、太陽は近接格闘の達人。その腕前は千冬をも凌駕する。当然と言うべきか、太陽は容易く福音の両腕を弾き飛ばした。

「遅い」

両腕を弾かれて無防備になった福音の胴体にライオンハート・ザン

バーを向ける。引き金を引いて福音を墜とそうとするが、福音はエネルギー翼で身体を覆って太陽の射撃を防いだ。砲撃を防がれ、僅かに太陽は苦い表情を浮かべるが、エネルギー翼で自分を守るなど、太陽の前では意味を為さない。オールデリート・ハーケンを上へと放り投げ両足の爪先と踵にグリフォンを展開、超高速の蹴り、いや、蹴斬撃で福音を守るエネルギー翼を斬り裂き始めた。グリフォンの切っ先が描く紅い光の残光が福音を覆い、残光で福音の姿が見えなくなる。そして残光が晴れると、そこにはエネルギー翼を斬り裂かれて無防備な姿を晒け出す福音の姿が。太陽は福音に背を向けて落ちてきたオールデリート・ハーケンを掴み、再び伸びてきた両腕を半回転斬りで弾き飛ばした。回転の勢いを殺さず、ライオンハート・ザンバーの銃口を福音の胸に叩きつける。

「絶望がお前の・・・ゴールだ」

再びライオンハート・ザンバーから放たれたファイナルエリシオンが福音を吹き飛ばし、海中へとぶち込んだ。

ー警告！　敵ＩＳのロック、及びトリガーを確認！ー

「漸く目を覚ましたか」

太陽は慌てることなく振り返り、海中から飛び出してきた荷電粒子弾三発を見据える。一発目と二発目をオールデリート・ハーケンで斬り、最後の三発目をファイナルエリシオンで相殺した。

「・・・・・・」

無言で海中から飛び出してくる終焉と福音に注意しながら、太陽はバルディッシュトワイライトに訊ねた。

（モードトランザムの残り時間は？）

ーモードトランザム継続可能時間、残り二分。敵ＩＳ健在、モードトランザムを解除することをお勧めしますー

バルディッシュトワイライトからの返答に満足しながら、太陽は更に出力を上げた。スライド展開された装甲から放たれる紅の粒子が数倍に増える。

「上等。二分もあれば、更にこいつ等を削れる・・・全てを振り切る！！」

両手に握った武器を振り下ろし、太陽は二機の攻撃を迎え撃った。

「そろそろ、バルディッシュトワイライトのモードトランザムの限界時間だね」

少し離れた海域で三機の闘いを見ていたシャルが呟いた。それを合図に、五人は動き出した。砲戦パッケージ『パンツァー・カノニーア』を装備したラウラは狙撃体勢に入り、機動パッケージを装備させたセシリアは上空へと飛んだ。背には防御パッケージを装備したシャルを乗せている。箒はその背に鈴音を乗せて海へと潜った。例の如く、鈴音も強化パッケージをつけている。

「太陽が福音と終焉を墜とせれば、それに越したことは無いんだが・・・」

ラウラの呟きは風の中に消えていく。モードトランザムの限界時間は一分をきり、ハイパーセンサーの中で再び三機は激突する。

「頑丈だなぁおい！！」

悪態を吐きながら、太陽は五連続瞬間加速（フィフス・イグニッション・ブースト）で終焉へと接近し、爆発的な威力を纏った蹴りを腹部に打ち込んだ。終焉は雲を切り裂いて飛んでいくが、蹴られる寸前に終焉はガルルを砲撃、荷電粒子弾を太陽に直撃させる。

「ぐぅっ・・・」

黒煙の中から吐き出された太陽は真っ逆様に海へと落下していく。すぐに体勢を立て直そうとするがそれよりも早く福音が光弾を放ってきたので、太陽は迎撃を余儀なくされた。

「舐め・・・」

上下逆さまの体勢から全てのグリフォンを展開させ、

「るなぁーっっ！！！！！」

ブレイクダンスの要領で身体を回転させて光弾を斬る、或いは弾き返して直撃を避ける。回転の勢いを利用して体勢を立て直し、福音へと視線を向けた。

『敵機を危険レベルAと判断、最大攻撃力を使用する』

機械音声で告げるや、福音は羽ばたかせていたエネルギー翼で身体を覆う。さっき、太陽の攻撃を防ごうとした時とは意図が違う。今回は防御ではなく、攻撃の為だ。太陽の脳裏に嫌な物が過ぎる。そして、最悪なことにそれは的中した。福音は翼を回転させながら広げ、全方位に嵐の如き光弾の雨を降らせた。しかも、それらは空中で方向転換し、全ての光弾が太陽目掛けて飛んでくる。

「逃げ場は無い、か。・・・上等！！」

三百六十度全方位を見回してから、太陽は唇に鋭い笑みを浮かべた。

「だったら、全て打ち落とすだけだ・・・」

両腕を左右に突き出す。

「ロイヤルセイバー」

オールデリート・ハーケンの柄から溢れるビームが増大。

「ファイナルエリシオン」

ライオンハート・ザンバーの銃口に黒い輝きが生まれる。

「うおおおおおっっっっっっっ！！！！！！！！！！！」

咆哮を上げながら、太陽は左に紅のビーム刃、右に黒い閃光を放ちながらその場で回転を始めた。太陽目掛けて飛んでいた光弾はビーム刃に斬り裂かれ、或いは黒い閃光に飲み込まれて爆発を起こす。一回転して全ての光弾を撃墜したことを確認し、太陽は両腕をダランと両脇に下げた。両肩がより多くの酸素を吸い込むために大きく上下している。

「はぁっ・・・はぁっ・・・。やはり、ロイヤルセイバーとファイナルエリシオンの併用は控えた方がいいな。トランザムも限界時間に達しぐっ！！」

鈍い衝撃が太陽の腹部を襲った。視線を前に向けると、急降下しながら自身へと突っ込んできた終焉がグレイを太陽の腹に突き立てていた。終焉は太陽に反応する暇さえ与えず、ガルルの砲口を胸に叩きつける。

（しま）

轟音と爆煙が海上に広がった。零距離で荷電粒子弾を撃ち込まれた太陽はゆっくりと落下していく。両手に握られた武器は光の粒子となって消えていった。

「まだ・・・やれるか・・・バルディッシュトワイライト？」

その問いの解答はＮＯの様だ。スライド展開されていた装甲が閉じ、そこから放たれていた紅の粒子も消えていった。それでも、太陽は満足そうに笑いながらコアがある胸部を撫でる。

「そうか・・・。良く頑張ってくれた・・・、後は任せたぞ！！！」

海に沈む直前に太陽は叫んだ。

「後は任せたぞ！！！」

最後の叫びを残して太陽が海中へと没するのと同時に、ラウラは砲撃を開始した。超音速の砲弾が福音と終焉を直撃、大爆発を起こす。

「初弾命中を確認、続けて砲撃を行う！」

二機が反撃に転ずるよりも早く、ラウラは次弾を装填、発射した。再び超音速で飛来した砲弾を福音は回避、終焉は荷電粒子弾で撃ち落としてラウラへと向かう。

（敵機接近まで四千・・・三千・・・予想よりも速いか！）

二機が接近してる間もラウラは砲撃を続けているが、福音は光弾を放つことで砲弾の半数以上を迎撃、終焉は身体をマントで覆い隠し、砲弾を防いでいる。ラウラとの距離が五百を切ったところで、二機は瞬間加速（イグニッション・ブースト）してラウラへと手を伸した。砲戦パッケージを装備しているため、機動力が落ちたラウラでは避けられない。だが、ラウラは口元に笑みを浮かべた。

「セシリア！！」

二機がラウラへと伸した手を閃光が撃ち抜く。上空から一気に急降下してきたセシリアによる狙撃だ。二機はすぐにセシリアを認識、迎撃しようとするが、

「させないよ」

二機の背中をショットガン二挺による近接射撃が襲う。セシリアの背中に乗っていたシャルによる物だ。二機は体勢を崩すがそれも一瞬で、すぐに反撃へと転じた。

「それくらいじゃこの『ガーデン・カーテン』は落ちない・・・って言いたいけど、流石にそれはキツいかな！！」

リヴァイヴに装備されたそれぞれ二枚の実体シールドとエネルギーシールドで福音の光弾を防ぎながら、シャルは終焉に向けて高速切替（ラピッド・スイッチ）で呼び出したアサルトカノンを向け乱射する。加えてセシリアの高速機動射撃、ラウラの砲撃で二機は確実に消耗していった。

『現空域からの離脱を最優先』

全速力で二機は強行突破を計ろうとするが、

「させるかぁっ！！」

海面が膨れ上がり、爆ぜた。飛び出したのは箒とその背に乗った鈴音。箒は福音へと突っ込み、鈴音は箒の背から飛び降りて、終焉に炎を纏った衝撃弾、熱殻拡散衝撃弾を放つ。

「箒！　終焉は私達がやるから、あんたは福音を墜としなさい！！」

「分かった！！」

箒が福音と交戦し始めたのを確認して、鈴音は終焉に目を向けた。四機から立て続けに砲撃を受け、終焉は反撃すら出来ずに身体をマントで覆い、四機の砲撃に耐えている。その後、数分間砲撃を続け、終焉は黒煙の中に隠れた。

「・・・やりましたの？」

セシリアの声が合図だったかのように一陣の風が吹き、黒煙を吹き飛ばした。黒煙の中から姿を現した終焉は身体をマントで覆ったままの状態で沈黙している。

『グレイ、ガルルを最大出力に設定。敵機を駆逐する』

機械音声が響いた瞬間、四人は再び砲撃を始めた。終焉はマントを払ってそれらの砲撃を防ぎ、左腕からグレイを射出する。グレイの刀身に刻まれている溝からオレンジの光が溢れ、炎を纏った。そのままグレイを一回転させるように振り抜き、熱波と刃風だけで四人を吹き飛ばした。吹き飛ばした四人に追撃をかけようとはせず、終焉はガルルの砲口を空へと向ける。

『絶対零度（アブソリュート・ゼロ）の豪雨（レイン）』

空へと放たれた冷気を纏った砲弾は終焉の上空数百メートルの所で停止、数メートルにもなる氷柱を数え切れない程放った。氷柱は勢い良く降り注ぎ、容赦なく四人を切り裂いていく。どうにか撃墜することを避けられた四人だが、その視線を終焉へと向けて表情を絶望に歪めた。終焉は再びガルルの砲口を空へと向けている。

「あれを連射できるの・・・」

シャルの呟きに答えるように、終焉は二発目を空へと放った。

「おおおおっっっ！！！！！」

福音が放つ光弾の雨を、箒は雨月から放ったエネルギー刃で相殺、空裂を振りかぶって福音へと叩きつける。福音は両腕で空裂を防ぐが、空裂の軌道に合わせて発生した攻性エネルギーまでは対応できずに直撃、海へと落下していった。

「ここで、お前を墜とす！！」

箒は福音へと加速しながら雨月を構え、エネルギー刃で福音を攻撃しようとする。が、その瞬間に背筋を悪寒が走り、反射的に仲間が闘っている方向を向いた。そこでは、数メートルもある数え切れない量の氷柱が仲間を襲っていた。それを見た箒の脳裏に過ぎったのは自分を守って墜ちた一夏の姿。

「仲間は・・・やらせない！！！！」

再び空へと砲口を向けている終焉へと突撃しようとするが、何かに足首を掴まれてガクンと速度が落ちた。振り返ると、福音が箒の足首を掴んでいた。

「邪魔を」

雨月で足首を掴んだ福音の手を斬り、

「するな！！！」

空裂の攻性エネルギーをぶつける。扇形に広がった攻性エネルギーは福音を直撃するが、福音はその直撃に耐えて、箒を引きずり下ろした。

「何っ！？　ぐっ！！」

福音に喉を掴まれ、箒は呻き声を上げる。福音はゆっくりと翼を広げ、箒を包んでいった。

ざぁ・・・ざざん・・・。

（・・・ん？）

砂浜に座り込んでいた夜明はある異変に気付いた。それは流木に座っていた一夏も同じらしく、二人は揃って波打ち際へと視線を向ける。何時の間にか、波打ち際で歌っていた少女の歌が終わっていた。踊るのも止めて、少女は空を見上げている。

「どうかしたのか？」

不思議に思って少女へと近づく夜明と一夏。それでも少女は二人の方向を向こうとはせず、空を見上げ続けている。二人も視線を空へと向けると、少女の声が耳に届いた。

「呼んでる・・・行かなきゃ」

「「え？」」

視線を空から少女へと戻そうとするが、二人の目の前にいたはずの

少女の姿は見当たらない。掻き消したかのように、忽然と消えた。
残っているのは波の音のみ。

「あの女の子は？」

「分かんねぇ」

二人して首を傾げ、さっきまで座っていた場所に戻ろうとすると、

「力を欲しますか？」

「力を欲するか？」

背に声を投げかけられた。急いで振り返ると、二人の女性が膝下までを海の中に沈めて立っていた。

一人は白銀に輝く甲冑を身に纏い、大きな大剣を自らの前に立てて両手を預けている。目を隠すガードで顔は下半分しか見えない。

一人は同じく白銀の甲冑を身に纏い、腕組みをしている。背中から二対の白い翼を生やし、時折蒼く脈打っている。もう一人の女性同様、目部分のみがガードに隠されている。

「力を欲しますか？」

「力を欲するか？」

再び二人は訊ねてきた。

「力、か・・・。難しい事聞くな」

「同感だ。確かに、そんなこと余り考えたこと無かったな」

波の音を耳にしながら、二人は考える。

「そうだな・・・。仲間を守るためかな」

「仲間を・・・」

「あぁ、仲間をな。世の中って色々と闘わないといけないだろ？不条理なこととか、道理のない暴力とか。そう言う物から、俺は仲間を守りたいんだ。この世界で一緒に闘う、仲間を」

「そうですか・・・」

大剣を携えた女性は静かに頷く。

「俺は・・・目に映った人全てを助けたい・・・だな」

「目に映った人、全てか？」

「おう。誰か一人助けられたとしても、他の人を助けられなくて、その人を泣かせちゃ意味は無いんだ。俺は、俺の視界の中に入っている人を誰一人として泣かせたくない。だから、皆を助けたい・・・これって傲慢かな？」

「・・・それがお前の在り方なら、貫け」

「良いんじゃないか、お前らしくて」

一夏の言葉に夜明は照れくさそうに頭を掻く。

「だったら、行かなきゃね」

また後ろから声をかけられた。二人が振り返ると、さっきまで歌っていた少女がそこにいた。人懐っこく、無邪気な笑顔を浮かべて二人を見ている。

「ほら、ね？」

「「あぁ」」

二人の手を取って、少女はにこりと微笑む。少しだけ照れくさい気持ちになりながら、二人は頷いた。その瞬間、世界に変化が訪れた。二人を覆っていた全てが白く、蒼く輝いていく。蒼白の輝きに抱かれて、二人の視界がどんどんぼやけていった。

「そう言えばあの女の人、誰かに似てたな」

「奇遇だな、俺もそう思ってたところだ」

白い・・・騎士の女性。

それは突然現れた。零距離射撃の秒読みが開始される中、箒はただただある人の事を想った。

「一夏・・・」

愛おしい人の名を口にし、箒は覚悟を決めて瞼を閉じた。その刹那、

『!?』

福音は箒を掴んでいた手を離した。いきなりのことに混乱しながら、箒は目を開いた。目の前では、強力な荷電粒子砲が直撃して吹き飛ぶ福音の姿が。荷電粒子砲の発生源を見て、箒の目尻に涙が浮かぶ。

「あ、・・・あ」

「仲間は、やらせねぇっ!!!」

涙で滲んだ視界に映ったのは白く、輝きを放つ機体。白式第二形態・雪羅を纏った一夏がいた。

それは突然現れた。無数の氷柱が四人に降り注ごうとする中、海中に幾つもの輝きが浮かんだ。次の瞬間、海中から幾つものレーザーが放たれ、全ての氷柱を撃ち落とした。四人に掠り傷一つ作らせずに。

反射的に海中を見た四人の視界が涙で歪む。

「あぁ、誰一人としてな」

救いの翼を蒼く輝かせ、瞳と髪も蒼銀へと変わった夜明が太陽を抱きかかえていた。

「「俺たちが！！」」

Revive Doresshi white & Raising w

今回は休み。

ｊａｃｋｐｏｔ！！（前書き）

レイジングウィングの音声に英語と日本語が混ざっていますが、気にしないでください。

ｊａｃｋｐｏｔ！！

「・・・まったく、遅いぞ夜明。何だ、ヒーローでも気取ってみたくなったのか？」

血の気が引いた顔で、太陽は弱々しく微笑みながら軽口を叩く。対して夜明は一番近くにいたシャルに太陽を託して、やはり悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「何言ってやがんだ。男のガキってのは、何時だって心の底からヒーロー気取りなんだよ」

視線を上空にいる終焉へと向け、ゴキゴキと首を鳴らす。

「そんじゃ、ぶっ飛ばしてきますか！」

「ちょ、ちょっと待ってよ！　身体は大丈夫なの！？」

シャルの問いに夜明はひょいと眉を上げた。

「身体？　・・・あぁ、そう言や俺、あいつ等に墜とされたんだっけ」

その場でくるりと一回転してみせる。福音の零距離射撃を喰らったと言うのに、その身体には傷一つ付いていない。

「うん、大丈夫っぽい。シャル、太陽のこと頼んだ」

「夜明！　ちょっとま・・・」

シャルの話を最後まで聞かず、夜明は終焉へと向かっていった。途中で振り返り、他の三人にも声をかける。

「後は俺に任せといてくれ」

「・・・何が任せといてくれ、よ。私達がどんだけ心配してたかも知らないで」

蒼銀へと変わった、風に靡く長い髪を見送りながら鈴音は呟いた。

「まったく・・・心配をかけさせるとは、難儀な嫁を持ってしまったものだ」

「・・・その嫁宣言に関して語り合わなければいけませんわね・・・」

夜明が現れた御陰か、その場の緊張感は消え失せていた。戦場の緊張感など消し飛ばす程の安心感を夜明は放っている。

「さてと・・・」

終焉と同じ高度まで昇ってきた夜明は背部二対の推進翼をゆっくりと蒼銀に染め上げていった。

「死合うか！　『終焉の騎士（ナイト・オブ・オメガ）』！！」

『Ｍｏｄｅ（モード）　Ｍｅｓｓｉａｈ（メサイア）　ｗｉｎｇ（ウィング）　Ｓｔａｎｄｂｙ　ＯＫ.　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ?』

次の瞬間、夜明は蒼銀の閃光となった。

「い、一夏っ!?　一夏なんだな!?」

「おう、待たせたな」

慌てて一夏の元へと飛んでいく箒。今にも泣きそう、と言うか泣いている箒を撫でながら、一夏は優しい笑顔を浮かべる。

「よかった・・・本当に、よかった・・・」

「心配かけた。もう、大丈夫だ」

「し、心配など」

慌てて目元を拭っている箒に一夏はある物を渡す。

「り、リボン？」

「あぁ。誕生日、おめでとう」

七月七日。偶然か必然かそれとも神の悪戯か、今日は箒の誕生日だ。今一夏が手にしているリボンは臨海学校の前に、箒に買い物に誘われた時にこっそり買っておいたのだ。最も、こんな戦場のど真ん中で渡すことになろうとは、一夏も思いもしなかっただろう・・・。

「せっかくだし、使ってくれよそれ」

「・・・あぁ」

「じゃ、行ってくる。夜明(あいつ)も始めたみたいだし、まだ終わってないからな」

言うなり、一夏はこちらへと向かってきていた福音に急加速、真っ正面からぶつかり合った。

「再戦といくか！」

今、目の前の光景を見たままに伝える。蒼銀の閃光が終焉を覆い隠していた。疑問符が大量に浮かぶだろうが、事実なのだから仕方がない。蒼銀の閃光の正体は勿論、夜明である。

『Ｍｏｄｅ（モード）　Ｍｅｓｓｉａｈ（メサイア）　ｗｉｎｇ（ウィング）』

それが、夜明が新たに手にした力の名だ。本来、周囲に展開して独立した動きで敵を砲撃するはずのシューティング・ビットとフィン・ファングを推進翼に固定、砲口をスラスターとして用いる。それだけではなく、このモードメサイアウィングが発動している間、レイ

ジングウィングの全ての射撃武器へのエネルギー供給が絶たれていて、その分のエネルギーを全てスラスターに回している。つまり、モードメサイアウィングを発動している間、夜明は射撃方法を失う替わりに爆発的な超高速機動を得る、と言う訳だ。

（・・・にしても妙だな）

スターライザー二刀を逆手に構え、容赦ない斬撃を終焉に浴びせながら夜明は思う。レイジングウィングにはマルチロックオン用のセンサーは付いているが、超高感度ハイパーセンサーが装備されていない。本当なら超高速機動に入った瞬間に情報を処理しきれなくなって、あっと言う間に頭がパンクするはずだ。なのに、夜明の頭はパンクなんかしていない。寧ろ、処理する情報が少なすぎて頭が爆発しそうだ。

（髪と目が蒼銀になったからか？）

そうだ。髪が蒼銀になった瞬間、頭が妙に冴え渡り、目が蒼銀になった瞬間、相手どころか、視界に移っている空間がどのように変化するのかさえ見えるようになっていた。現に、今終焉が振りかぶっているグレイがどのような威力で、速さで、軌道で振り抜かれるのかが手に取るように分かる。

（見える、俺にも敵が見える！）

その瞬間、夜明の中で何かが弾けた。振り抜かれたグレイを紙一重でかわし、一息で十六連の斬撃を叩き込む。それだけじゃなく、右、左、二連の回し蹴り、最後に踵落としで終焉を海へと墜とす。終焉は落下しながらガルルを夜明に向けて放つ。迫ってくる荷電粒子弾を夜明はロール回避、終焉へと加速した。終焉が次弾を放つよりも

速く瞬間加速（イグニッション・ブースト）で懐に飛び込み、スターライザーをガルルに突き立てる。更に終焉がグレイを構える前にスターライザーをグレイに突き刺す。

「あら・・・」

両脚を引いて、

「よっとぉぉっっ！！」

終焉の胸を思い切り蹴り飛ばす。弾かれたように飛んでいく終焉。グレイとガルルはスターライザーで固定されてるため、当然の如く引き千切られた。夜明がスターライザーを振り下ろすと、橙色と紺色一対の籠手が宙へと投げ出され、紫電を放ちながら大爆発を起こす。

「そんじゃ、最後は派手に決めさせてもらいますかっと！！」

スターライザーを腰に収納して、夜明は終焉へと瞬間加速（イグニッション・ブースト）する。終焉の首を掴み、上空へと急加速。僅か十数秒で大気圏に到達する。ギリギリで酸素が存在している所まで上昇し、地表へと反転する。

「空気抵抗で熱くなる過激なフリーフォールをお楽しみ下さい！！」

言うや、夜明は最高速で地表へと向かい始めた。その速度は凄まじく、シールドバリアに守られていなければ、二機とも空気抵抗で燃え尽きているだろう。夜明に首を掴まれて落下する終焉の背後に空気抵抗で発生した赤い光が生まれる。この速度で地面は勿論、海面に叩きつけられても唯では済まないだろう。だが、二つだけしかない武装を奪われた終焉に為す術はない。

「隕石落下（メテオウォール）！！　・・・ってか？」

赤い残光を引く落下体が海面へと直撃する。

「・・・あ、あいつ等いんの忘れてた」

刹那、高さ数キロにもなる水柱が周囲の海域を襲った。幸いと言うべきか、被害が及びそうな海域には無人島しかなく、死傷者は出ないだろう。

・・・約数名を除いて・・・。

「こ、殺す気かぁーっ！！」

特大の波がうねりを上げる海から飛び出す四つの影。その影に近づきながら、夜明は苦笑を浮かべて謝罪した。その両腕には終焉の操縦者と思しきＩＳスーツ姿の女性が抱きかかえられている。

「悪かったって！　じゃ、俺は一夏の手伝いに行ってくるから！」

ギャアギャアと文句を喚いている鈴音に言い返す間を与えず、夜明は抱きかかえていた女性を押しつけた。そしてハイパーセンサーが見つけた福音と一夏が闘っている方向へと飛ぼうとするが、警告音がそれを押しとどめる。

「っ！？　どうした、レイジングウィング！？」

『Ｍｏｄｅ（モード） Ｍｅｓｓｉａｈ（メサイア） ｗｉｎｇ（ウィング） ｔｉｍｅ ｏｖｅｒ 通常モードへ移行』

目の前にメサイアウィングの発動限界を告げるウィンドウが現れると同時に、背中の推進翼が蒼銀から通常モードの白へと戻っていった。更に、髪の色も銀に戻っている。

「くっそ、メサイアウィングの限界時間か・・・モードエクセリオンはやれるか？」

『Ｎｏ ｐｒｏｂｌｅｍ（問題ありません）』

「ありがとな・・・。行くぞ！　我、使命を受けし者なり。契約のもと、その力を解き放て。風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に。この手に救いの証を。モードエクセリオン、発動！！」

『Ｍｏｄｅ（モード） Ｅｘｅｌｉｏｎ（エクセリオン） Ｓｔａｎｄｂｙ ＯＫ． Ａｒｅ ｙｏｕ ｒｅａｄｙ？』

翼が白から蒼へと変わっていく。世界が自分の色へと変わっていく感覚が夜明を包んだ。

（情報処理能力は使えないけど、目の方はまだ大丈夫みたいだな）

「派手におっ始めるか！！」

「はあああっっっ！！！」

一夏が振り抜いた雪片を、福音はひらりとかわす。一夏は慌てることなく雪片を戻し、左手の新装備、雪羅（せつら）で福音を追った。白式が第二形態に移行したことで現れた雪羅は、状況に応じて幾つかのタイプへと切り換えられるらしい。一夏のイメージに応えるように、雪羅の先からエネルギーの爪が伸びて福音を斬り裂いた。シールドエネルギーに阻まれはしたが、その一撃は確実に福音の装甲を削っている。更なる追撃をかけようとした瞬間、

ズガァァァァン！！！！！

凄まじい轟音が周囲に響き渡った。ギョッとして振り返ると、視線の先では見上げんばかりに立ち上がった巨大な水柱がある。

「夜明の奴、やったのか！？」

答えは返ってくる訳も無く、替わりに福音が放った光弾が一夏を襲った。

「何度も喰らってたまるか！！」

光弾を避けようとはせず、一夏は雪羅を前に突き出して福音へと飛ぶ。

ー雪羅、シールドモードへ切替。相殺防御を開始ー

甲高い音を立てて左腕の雪羅が変化する。変化した雪羅は光の膜を広げ、福音の光弾を全て消していった。雪羅が作り出したシールド、エネルギーを無効化する零落白夜のシールド。当然エネルギーの消耗は激しいが、攻撃を無力化出来る以上、圧倒的に一夏の方が有利だ。福音には実弾装備が搭載されていないのだから。

「行くぞ福音！！」

更に、二機だったウィングスラスターは四機に増えて、二段階瞬間加速（ダブル・イグニッション）を可能としていた。複雑な動きをする福音にも追いつける。

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

機械音声で告げると、福音は羽ばたかせていた翼を身体に巻き付けた。嫌な予感が一夏を襲う。その予感が実現しそうになった瞬間。

「一夏ぁっ！！」

「夜明っ！！」

夜明が飛んできた。モードエクセリオンを発動させて、蒼く輝く光の粒子を推進翼から溢れさせながら夜明は一夏の隣りで止まった。

「終焉は！？」

「墜とした！　一夏、下がってろ！」

一夏の問いに夜明は親指を立てて応える。その立てた親指をそのまま後ろへと向け、一夏が後ろへと行ったのを確認して、マルチロックオン用のバイザーで双眸を覆った。バイザーの画面は何もないはずの空間に数え切れない量のロックオンカーソルを示している。

「当たれぇぇぇぇぇっっっ！！！！！！！！」

撃ち落とす対象が無いにも拘わらず、夜明は全武装を発射態勢に移行、引き金を引いた。スターライト・フルバーストが放たれると同時に、福音は身体に巻き付けていた翼を広げて全方位に光弾を撒き散らした。だが、光弾は一夏へと軌道を変える前にスターライト・フルバーストで全て撃ち落とされる。

「行け一夏！！」

「おう！！」

一夏は雪片を構えて福音へと突っ込んだ。福音はギリギリの所で雪

片をかわしたが、回避先には既に夜明がいた。

「俺を忘れてもらっちゃ困んぜぇ！！」

福音を叩き落とし、二人は噛み合った歯車のように見事な動きで福音を攻撃し始めた。

（一夏が駆けつけてくれた・・・！）

それは嬉しいを飛び越えていた。心が熱くなる、熱を撒き散らしながら躍動する。福音を圧倒する二人の姿を見て、箒は強く願った。

（私は共に闘いたい。一夏の背を守りたい！）

箒の想いに応えるように、紅椿の展開装甲から紅の粒子に混ざって金色の粒子が溢れ始めた。

「これは・・・！」

ハイパーセンサーに映し出された紅椿のステータス画面で、エネルギーが急速に回復していくことが分かる。

ー『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築・・・完了ー

項目に映し出されているのはワンオフ・アビリティーの文字。

（まだやれるのか？）

応えるように、紅の粒子と金色の粒子は数を増していく。

（ならば行くぞ、紅椿！！）

一夏から受け取ったリボンで髪を結び、箒は福音へと向かった。

「・・・まずいな」

福音を圧倒する二人を見て、太陽はポツリと呟いた。それを耳聡く聞いたラウラは眉を顰める。

「まずいとは・・・何がだ？」

「さっきの夜明が発動していた・・・モードメサイアウィングと言ったか？　あれのエネルギー消費量が想像以上に多かったらしい。エネルギーを消費しすぎて、モードエクセリオンの光変換が追いついていない」

「それはつまり」

「もう一分もしない内にモードエクセリオンは発動限界、それに伴ってＩＳも強制停止させられる」

「えぇっ！？　それって凄くまずむぐぅっ！！」

騒ぎ出したシャルの口を塞ぎ、太陽は四人にそれぞれ視線を投げかけた。

「だからお前等、少し耳を貸せ」

「ぜらあああっ！！！」

一夏が零落白夜で福音の翼を斬る。

「墜ちろぉっ！！！」

夜明がウィングスターで福音の翼を撃ち抜く。しかし、福音はすぐに翼を再生させ、二人に連続射撃を仕掛けてくる。

ーエネルギー残量二十％。予測稼働時間、三分ー

「夜明！　お前のエネルギー残量はどうだ！？」

「残り一分も保たねぇ！　モードエクセリオンの光変換が間に合ってない・・・メサイアウィングで使いすぎたかちっくしょ！！」

ステータス画面をチェックしながら、夜明が悪態を吐いたその時、

「一夏！！」

「箒！？　お前、ダメージは」

「そんなことはいい！　これを受け取れ！」

箒、紅椿の手が白式の装甲に触れた瞬間、一夏の身体を電流のような衝撃と、炎のような熱が走って視界を揺らした。

「な、何だ！？　エネルギーが回復・・・箒！　これを夜明にも」

「余計なこと考えるな一夏！！　俺はいいから福音を止めろ！！」

「お前も福音を止めろこのバカ！！」

「あぁ！？」

振り返ると、そこにはズタズタになった装甲を展開させた太陽がシャルに支えられて、腰部装備のドレインホーネットを投げ縄のように振り回していた。太陽を支えているシャルも、その周囲に浮かんでいる三人も最低限の装甲だけを展開させている。

「私達からの心ばかりのプレゼントだ、受け取れぇっ！！」

叫びながら、太陽は思いっ切りアンカーを投げた。反射的に夜明はアンカーを片手で受け止めた。すると、アンカーからレイジングウィングにエネルギーが流れ込んできた。

「おい太陽！　こいつぁどういう」

「私達のＩＳからエネルギーを抜き出してお前に与えた。さっさと福音を止めろ！！」

「夜明さん、負けたら承知しませんわよ！！」

「早く終わらせなさいよ！！」

「勝って！　絶対に勝って！」

「嫁の底力を見せて見ろ！！」

太陽、セシリア、鈴音、シャル、ラウラからの声援を受け、夜明は笑顔を浮かべた。

「太陽、セシリー、鈴音、シャル、ラウラ！！　お前等最高だ！！」

アンカーを手放し、夜明は福音へと飛んでいった。

「一夏！！」

「夜明か！　決めるぞ！！」

「おうさっ！！」

夜明は一夏の左隣に並び、ウィングスターを連結させて福音へと向けた。一夏は雪羅を荷電粒子砲に変え、夜明と同じように福音へと向ける。

「二人とも、やれ！！」

福音と交戦していた箒は両方の翼を斬り、福音から離れた。二人は武器のエネルギー充填を完了。そして、

「「Ｊａｃｋｐｏｔ」」

引き金を引いた。放たれた二つの光は過たずに福音を撃ち抜く。二人に撃ち抜かれて、福音は紫電を放ちながら空中で停止していたが、やがてＩＳ装甲を失って、操縦者は海へと落下し始めた。

「しま」

ウィングスターを腰に収納した夜明が加速し、海面ギリギリで操縦者を抱きとめた。一夏がホッと息を吐いていると、隣りに箒が飛んできた。

「終わったな」

「あぁ、やっとな・・・」

二人で空を仰ぐ。作戦が始まった頃には透き通るように青かった空は既に無く、夕焼けが一同を優しく照らしていた。

「はぁ・・・疲れた」

ーモードエクセリオン、発動限界。ＩＳ、強制解除されますー

「え？」

レイジングウィングがそう告げた数秒後、夜明のＩＳ装甲が強制解除された。

「何でこうなるのぉーっ！！！！」

マンガのように泣きながら、夜明は福音の操縦者をしっかりと抱きしめて海へと落下した。

ｊａｃｋｐｏｔ！！（後書き）

次回予告

箒だ。作戦が無事に成功してよかった。一夏も夜明も無事だったし・・・。唯、あの旅館の前で、鬼の形相を浮かべている織斑先生は怖すぎる・・・！

次回、ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼は

『一同、千冬に怒られる』

『箒、想いを伝える』

『夜明、美女二人に目をつけられる』

の三本だ。次回も見てくれ、ではな！

月明りに照らされ繋がる想い（前書き）

今回、太陽がもっそい凄いことをします。その事を留意して読んでくださいな。

太陽のキャラが壊れてもいいよね？

答えは聞いてない！！

マジですみません・・・。この表現はアウトか？

月明りに照らされ繋がる想い

「作戦完了・・・と言いたい所だが、貴様等は独断行動により重大な違反を犯した。学園に戻ったら反省文の提出と特別訓練を用意してやるからそのつもりでいろ」

「・・・はい」

福音と終焉との激戦を終えて、帰還してきた夜明達を待っていたのは背後に不動明王を浮かべた千冬だった。腕組みして待っていた千冬を見た時点で、夜明と太陽は自分達を待ち受けているであろう運命をあっさりと受け止めた。二人の予想通り、一同は大広間で正座させられている。約一名を除いて。

「あの～、織斑先生」

「何だ、月光」

「何で俺だけ何の説教も無いんですか？」

挙手した夜明が不思議そうに問う。戻ってきた八人の中で、夜明のみがお咎め無し。労いの言葉をかけられ、一人だけ部屋に戻って良いと言われたのだ。

「お前の場合、復活して飛び出した所が偶々交戦空域だったからな。それで反省文や特別訓練は酷という物だろう」

はぁ、と何とも言えない返答を夜明は返す。ちらっ、と横で正座をさせられている仲間を見た。少なくとも三十分は正座を続けさせら

れていて、セシリアの顔は真っ赤から真っ青へと変色している。意識が飛ぶ危険信号にも見えた。

「あ、あの、織斑先生。もう、その辺で。怪我人もいますし・・・」

わたわたと山田先生は千冬を宥めている。さっきから救急箱やら水分補給パックを持ってきたりと忙しない。怒り心頭だが、千冬が説教を終わらせたのを見て取り、山田先生は急いで指示を出し始めた。

「そ、それでは、一度休憩してから診断をしましょうか。ちゃんと服を脱いで、全身を見せてくださいね・・・あっ！　男女別ですよ！　分かってますか、織斑君、月光君！？」

（（当たり前だろうが））

口には出さず、二人は大広間の出口に向かいながら水分補給パックを手にとって飲み始める。身体のことを考慮して、温度は温めだ。

「あぁ～・・・、口の中切れてんな」

「そりゃ災難・・・あ？」

一瞬で水分補給パックを空にさせて、ゴミ箱へと放り込んだ夜明は無言で千冬が見ていることに気付いた。

「何すか、織斑先生？」

何ぞまた説教でもされるのか、と一同は身構える。

「・・・しかしまぁ、よくやった。よく全員無事に帰ってきたな」

「「「「「「へ？」」」」」」

まさか褒められるとは思わず、六人は間抜けな声を出す。夜明と太陽は顔を見合わせ、素直になれていない千冬にため息を吐く。褒めたと思えばすぐに顔を背けてしまい、千冬の表情は窺い知れない。

「「「「「・・・・・」」」」」

と、何故か太陽を除く女子達が二人を睨んでいた。

「あの、二人とも。女子の診察を始めるので、その・・・」

「私達の裸体でも見たいのか？」

「「「「「とっとと出てけ！！！」」」」」

そう言うことかと納得し、二人は慌てて大広間から飛び出した。ぴしゃりと閉じた襖に背を預け、同じタイミングでため息を吐く。

「・・・なぁ、夜明」

「何だよ？」

「俺たち・・・仲間を守れたんだよな？」

俺と、白式は。

お前と、レイジングウィングは。

夜明は一夏の方を向かずに、親指を襖に向けた。

「これが答えだと思うんだが？」

『それでは診察を始めます・・・夕暮さん、大きいです・・・』

『山田先生の方が大きいのでは？　それに、大きくても良いことありませんよ』

『確かにな・・・。肩は凝るし、下着や服も着れるサイズが制限されるし』

『ふ、二人とも！　しーっ、しーっ！！』

『『え？　・・・あぁ・・・』』

『『・・・それは私達に対する当てつけかぁぁぁぁ！！！！』』

『鈴さん、ラウラさん！　どこにそんな暴れる元気がありますの！？』

襖の向こうからドスン、バタン等の騒がしい音が聞こえてくる。夜明と一夏は無言で顔を見合わせ、大笑いし始めた。この声が、彼女たちの他愛のない会話こそ、二人が守りたかったもの。大笑いし続けながら、二人はしっかりと拳をぶつけ合った。

ざぁ・・・ん、ざぁ・・・ん。

「～♪　～♪」

波の音の間を縫って、誰かの歌声が聞こえてきた。砂浜に座って夜空を仰いでいる夜明は瞬きをすることも忘れ、星空に見入りながら歌を紡いでいる。

「～♪　～♪」

「・・・相変わらず音痴だな、お前は」

夜明の歌声に辛辣な評価を下したのは、

「太陽・・・」

「よぅ」

夜明と同じく水着姿になった太陽だ。自由時間の時はマジマジと見なかったので分からなかったが、太陽の水着姿はセクシー、を通り越してエロい。普通の男だったら、月と星の光を浴びて神秘的にさえ見える太陽の姿に赤面していただろうが、そこは朴念仁・オブ・朴念仁ズの夜明。

「こんな所で何してんだ？」

普っ通に話しかけた。対して、太陽は夜明が自分の水着姿を見て何も感じていないことに腹を立てる訳でもなく夜明の隣りに座る。

「お前を捜してたんだよ。今宵は満天の星空、そしてお前は星空を見上げるのが趣味・・・お前が何をしに行ったかなんて、バカでも分かる」

そうかい、と夜明は視線を太陽から星空へと戻した。太陽も夜明と同じように・・・ではなく、夜明の肩に頭を預けながら夜空を仰ぐ。長いこと（と言っても数分）そうしている内、夜明は徐ろに口を開いた。

「そう言えば太陽。お前、身体は大丈夫なのか？」

「山田先生にも診察してもらったが、大事無い。バルディッシュトワイライトが私を守ってくれたからな」

「本当か？　何処か痛いところとかは無いのか？」

「私は泣くのを我慢してる子供か・・・。心配してくれるのか？」

「当たり前だろ」

悪戯な笑みを浮かべながらしなだれかかってくる太陽に、夜明は真顔で答えた。

「お前は俺の大切な人なんだ。お前が痛いのとか我慢してるなんて、俺は嫌だぞ」

「・・・・・本当に、お前は不意打ちが得意だな・・・」

何時になく真剣な表情で言われ、赤く染まってしまった顔を見せまいと太陽は夜明から顔を背ける。しなだれかかってきたかと思えば、顔を背ける太陽の態度に夜明は首を傾げた。無言のまま、二人は視線を星空へと戻した。

「・・・夜明」

「何だ？」

「私はお前が大好きだ」

「・・はい？」

夜明の目が点になる。返ってきた返答が何とも間抜けな物だったので、太陽は不安そうに、上目遣いで夜明を見た。

「・・・私なんかに告白されても、嬉しくないか？」

ブンブンと夜明は首を振る。

「いや、いきなりの事に驚いて、脳の回転が追いついてないだけだ。あ～っと、その大好きは・・・Ｌｉｋｅの方か？」

「Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ」

「さ・・・いですか・・・」

「それで、返事は？」

太陽に催促され、夜明は困ったように頭を掻いて言葉を探した。ちらっと太陽の方を見ると、真っ直ぐな瞳を向けてきている。適当にはぐらかす事は出来ないと判断し、夜明はゆっくりと話し始めた。

「あぁ～、その～、何て言うかだな、太陽」

「何だ？」

「俺は・・・そう言う・・・・何て言うんだ？　交際って言うのは・・・十五歳じゃ早いと思うんだ」

「そうか？」

「そうだろ」

『交際＝結婚』と言う構図を持っている夜明だからこその考えだ。

「ほぅ・・・それで、返事は？」

「今は・・・何も言えない。そう言うのは・・・生活の基盤がキチンとしてからだから・・・俺が社会人になってからじゃ駄目か？」

夜明のヘタレ過ぎる答えに、太陽は深々とため息を吐く。

「つまり、お前はこれから私に少なくともＩＳ学園を卒業するまでの三年間、告白したのに答えを貰えない生殺しの生活を送れと言うんだな？」

「・・・悪い」

雨に濡れた子犬のようにシュンとしてしまう夜明。もう一度ため息を吐き、太陽は夜明の頬を突いた。

「謝ることは無いさ。告白しようと考えてた時から、そんな色っぽい返事は期待してない」

「そう、か」

「だがな、夜明」

「うん？」

「私はな、告白の返事を先延ばしにされたからって、自分の想いを押さえられるほど育ちの良い女じゃ無いぞ」

「あぁ？　そりゃどういうっ！？」

夜明に最後まで言わせる暇を与えず、太陽は夜明を押し倒して唇を唇に押しつけた。しかも、ラウラの時と違って、舌が口の中に入ってくると言うオマケ付き。

「”＃＄％＆’（）～＝＾¥@：；！！！！！！！！！？？？？？？？？？？」

太陽に押し倒され、目を白黒させながら夜明は暴れる。暴れて自分の下から抜け出そうとする夜明の腰を両脚、両手首を両手でしっかりと拘束しながら太陽は夜明の口内を舌で蹂躙していく。

「・・・・・・っぷは。・・・これは・・・良いな」

頬を染めながら言ったかと思えば、両腕を夜明の首に回して逆の状態、つまり、太陽が下、夜明が上の状態に身体を動かした。夜明が状況を把握する前に頭を強引に引き寄せて唇を奪う、勿論、舌も差込んでいる。再度暴れる夜明だが、首に両腕、腰に両脚をしっかりと絡められている為、抜け出すこと叶わず。太陽は夜明の歯茎を舐め上げ、舌を搦めとり、流れ落ちてくる唾液を嚥下する。

「・・・ん、・・・じゅる・・・れろ・・・うん・・・」

砂浜に淫猥な水音を響かせること約数分、漸く太陽は夜明を解放した。顔をこれ以上ないくらいに赤くさせ、口元を拭いながら、夜明は凄い勢いで太陽から距離をとる。

「なななななな、何を考えてるんだお前は！？」

夜明の唾液がついた唇を舐め、若干頬を赤く染めながら太陽は小悪魔のように笑う。

「何って・・・どうすればお前が私を襲って既成事実を作れるか考えていた。これくらい凄い事をすれば、理性が吹っ切れて襲ってくると思ったんだが・・・このヘタレ」

「・・・・・・・・・・・・（怒り、羞恥、その他諸々の何やらで言葉が出ない）」

小悪魔のような笑みを妖艶に彩らせ、太陽は四つん這いで夜明に躙り寄る。顔を真っ赤にさせている夜明の首に両腕を回し、首筋を舐めてぞくぞくするような声音で囁いた。

「本当なら、このまま私がお前を襲ってもいいんだがな・・・流石に星空キャンプで行為が出来るほど、私は大らかじゃ無い。それに・・・」

「そ、それに？」

「観客も来てしまったみたいだからな」

観客。その言葉の響きに妙な恐怖感を抱き、夜明は太陽が視線を向けている方向を振り向いた。そこには・・・。

「「「・・・（涙目）」」」

今にもガン泣きしそうな表情のセシリア、鈴音、シャル、ラウラの姿が。ラウラのみ涙目ではなく、驚愕で目を見開いている。

「・・・・・・・・・・・・何時から彼女たちはあそこにいた？」

「お前が私を押し倒して無理矢理唇を奪った所、からだな」

無理矢理、の部分で四人の額に血管が浮かぶ。未だかつてない命の危機の到来に、夜明は表情を青ざめさせた。クスクス笑いながら、太陽は夜明にだけ聞こえるように呟く。

「恋する乙女にあんなつれない返事をした罰だ、精々逃げろ」

太陽の呟きは聞こえなかった筈なのに、四人はそれが合図だったかのようにＩＳを展開し始めた。

「私という者がありながら・・・」

「何兆回殺されたい？」

「説明、してくれるよね・・・」

「ウフフフフ、フフフフフッ」

順番はラウラ、鈴音、シャル、セシリアだ。

「太陽、てめぇ憶えとけ！！！」

涙目になりながら、夜明は太陽を抱きかかえて走り始めた。その瞬間、二人がさっきまで座り込んでいた所が砂煙を巻き上げて吹き飛ぶ。走る夜明を追いかけるワイヤーブレード、衝撃砲、銃声、ビット。オーバーキルもいいとこだ。

「死ねる！　これは死ねる！　間違いなく死ねる！　百パー死ねる！！　マジで死ねる！！　本気で死ねる！！！　漏れなく死ねる！

！！　無限の可能性で死ねる！！！！」

「ハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！！！！！！！！！」

月明りと星明かりに照らされる砂浜で、夜明の悲鳴と太陽の笑い声、ＩＳ四機によるワンサイドゲームの音だけが響き続けた・・・。

夜明が一方的な攻撃から逃げる少し前、一夏は箒に呼び出されて砂浜へと来ていた。

「んで箒、話って何だよ？」

一夏に問われ、水着姿の箒は指をもじもじさせる。当然、一夏も水着だ。話をするのを逡巡していた箒だが、意を決して一夏の瞳を見据えた。

「一夏、まず最初に、助けてくれてありがとう」

「助け？　・・・あぁ、あの時か。そんな礼を言う事でもないだろ。仲間を助けるのは当たり前なんだから。話って、それだけか？」

「い、いや。それだけでは無いんだ・・・」

まだ何か言いたいことがある箒。長いこと押し黙っているが、一夏は押し黙って箒が話すのを待っている。決心がついたのか、頬を真っ赤にさせて一夏を見た。

「い、一夏ぁっ！！」

「は、はい！！」

まさか大声で名前を呼ばれるとは思って無く、一夏は反射的に気をつけをする。

「わ、わわわわわわ私は、お前のことが、好『ドガァァァァン！！！！』誰だ！！　ここ一番で邪魔をする奴らは！！？？」

清水の舞台から飛び降りる位の気構えで告白しようとしただけに、箒の怒りは途方もなく大きい。反射的に轟音が響いた方向を向くと、

幾つもの爆煙が見えた。そして、その爆煙の間を縫うようにして逃げ惑っている夜明の姿も・・・。

「・・・何をしてるんだ?」

「さぁ?　・・・ってか、夜明の奴、こっちに来てないか?」

一夏の言うとおり、夜明は二人がいる方向へと走ってきていた。

「おいおい・・・。箒、逃げるぞ」

「え?　きゃっ!?」

爆撃に巻き込まれることを避けるため、一夏は箒の手を引いて岬の方へと走っていく。大きな岩の上を走り、岩と岩の間に出来た窪みに身を潜めた。

(ここで隠れてれば、爆撃に巻き込まれることは無いだろ。夜明は・・・自力で何とかするはずだ)

「い、いきなりだな、一夏・・・。人気のないところに連れて・・・私とて、困る・・・」

「う?」

何やら箒がボソボソと呟いているので、一夏は箒を振り返る。

「ん・・・」

何故か?　箒は目を閉じて唇をやや上方向に向けて突き出していた。

「!?!?!?!?」

「・・・・・・」

顔を怪人二十面相のように変化させる一夏とは対照的に、箒は静かに待っている。その表情はとても綺麗だ。ふと、一夏の脳裏に箒に付いていく前の太陽との会話が過ぎる。

『逃げるなよ。逃げずに、箒の気持ちを真っ正面から受け止めてやれ』

言われた時は何が何やらさっぱり分からなかったが、この時になって一夏はその言葉の意味を理解した。一夏は静かに深呼吸して、箒の肩に触れる。一瞬だけ箒の身体が強張るが、改めて身を預けてきた。

「箒・・・」

「一夏・・・」

二人はゆっくりと近づき・・・

月明りに照らされて作り出された二人の影がくっついた、とだけ記しておく。

翌朝、一同はＩＳ及び専用装備の撤収作業に当たっていた。十時を過ぎた辺りで作業は終了、全員がクラス別のバスに乗り込む。

「・・・返事がない、まるで屍のようだ」

「そんなネタが言えるんだ、心配する必要は無いな」

指定された座席に座った夜明を一言で表すとボロボロだ。昨日の夜、一時間強四人に追い回され、旅館を抜け出したのがばれて千冬に大目玉。睡眠時間は三時間弱、それでＩＳ装備の撤収作業という重労働、・・・正直死ねる。

「だ、誰か・・・飲み物を持っていらっしゃいませんか？」

しんどさの余り、思わず救いの手を求める。

「・・・ツバでも飲んでろ」

「知りませんわ」

「あるけどあげない」

ラウラ、セシリア、シャルの返答。鈴音は二組だから別のバスに乗っている。一夏と箒はと言うと、

「「・・・」」

何やら二人だけの世界に入っていた。顔を真っ赤にさせて互いを見ていないのに、何故か手はしっかりと握り合っている。理由は分からないけど声をかけるのは野暮だと思い、夜明は隣りに座っている太陽に視線を向けた。夜明の視線に気付き、太陽は笑みを浮かべながら人差し指で夜明の唇をなぞった。

「ツバなら飲ませてやるぞ。・・・口移しで」

音速で首を振り、夜明は深々とため息を吐いた。その時だ。

「失礼、月光夜明はいるか？」

「あ、俺だけど」

一番前の席に座っていたことが幸いし、夜明はすぐに返事を返した。

「ほぅ、君が・・・。ナタル、こっちだ！」

その女性、銀髪の美女はミラーシェイドのサングラスを外しながらバスの外に呼びかけると、今度は鮮やかな金髪を持った美女がやって来た。二人とも年齢は二十程、確実に夜明達よりも年上だ。おしゃれな青いカジュアルスーツを着てて、谷間が目に眩しい。

「この子がそうなの、アンス？」

「本人が言っているのだから間違いあるまい。中々に素敵な男だと思わないか？」

オレンジと紺のオッドアイと、ブルーの二組の双眸が夜明を見つめる。品定め、と言う訳ではなく、純粋に夜明に興味を持っているらしい。

「あの、あんた方は？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』の操縦者よ。こっちは」

「『終焉の騎士（ナイト・オブ・オメガ）』操縦者、アンサラー・オヴリージュ。アンスと呼んでくれたまえ」

金髪、銀髪の美女にそれぞれ挨拶され、夜明は戸惑いながらも頭を下げた。

「は、はぁ・・・。俺は『不屈の翼（レイジングウィング）』操縦者、月光夜明って言います」

予想外の言葉に面食らっていると、両頬に唇が触れた。

「ふぇ？」

「これはお礼。ありがとう、不屈の翼さん」

「次は戦場などではなく、もっと雰囲気のある場所で会いたいものだな」

「サイですか・・・」

「それじゃ、またね。バーイ」

「次に会う時までに、もっと素敵な男性になっていてくれよ、少年」

手をヒラヒラと振って去っていく二人を、夜明は半分魂が抜けたような状態で手を振りながら見送る。そして、ブリキのおもちゃの様に振り返ってみた。

「「「「・・・・・・」」」」

背後に不動明王やら毘沙門天やら、そう言った戦に関係する神々を背後に従えた女性陣の姿が・・・。

「浮気者め」

「夜明って本当にモテるよねぇ」

「行く先々で幸せ一杯ですわね」

「今のは看過できないな」

スタスタと近づいてくる足音。その音は、まるで軍靴のように聞こえる。

「あ～、死んだくせぇ・・・」

「「「「はい、どうぞ」」」」

言葉と共に叩きつけられる五百ミリペットボトル。正直死ねる、と夜明は後に千冬に語ったとか何とか・・・。

月明りに照らされ繋がる想い（後書き）

休み。

夏休みってなんか良いよね（前書き）

更新が滞ってすみません。テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー3が面白すぎて・・・。

夏休みってなんか良いよね

八月。とある中華娘がクソ暑いと嘆いていた。名を鳳鈴音、中国代表候補生にしてＩＳ学園に通う一年生だ。その彼女を更に暑苦しくするかの如く、彼女の目的の人物は鉄骨を蹴りでへし折っている。

「破っ！！」

気合一閃。鋭い呼気と共に放たれた蹴りが鉄骨を直撃、日本刀で斬ったかの如き断面図で吹っ飛んでいった。そして、半分になった鉄骨が飛んでいく先には・・・鈴音がいる。

「へ？　うっきゃあああああ！？」

死に物狂いで鈴音は頭を下げ、鉄骨の直撃をかわした。ズガンッ！と剣呑な音と一緒に砂煙が彼女の後ろから流れてくる。恐る恐る振り返ると、蹴り飛ばされた鉄骨は完全に寮の壁を貫通、風穴を穿っていた。

「お、鈴音か。どうした？」

「どうした？　じゃない！！　何よあれ！　危うく頭が吹っ飛ぶとこだったわよ！！てか、この穴どうすんの！？」

「気にするな、ギャグ補正が何とかしてくれる」

「ギャグ補正って何！？　って、本当に直ってる！？」

寮の壁に出来た穴が塞がったのを確認して、鈴音の目的の人物、月

光夜明はケラケラ笑いながら残った鉄骨を肩に担いだ。

「んで、俺に何か用か？」

「ま、まぁ用っちゃ用だけど・・・て言うか、あんたこそ何でこんな所にいんのよ？」

「見て分かれよ。鍛錬だ鍛錬」

鍛錬、とか言いながら鉄骨を蹴りで両断する人間は、古今東西夜明しかいないだろう・・・。半目で夜明を見ながら、鈴音は態とらしく咳払いする。

「そ、それにしても今日は暑いわね」

「だったら何で、こんなお天道様が燦々と降り注いでいらっしゃる中庭に来たんだ？」

夜明が鍛錬をしていたのは中庭。そして時刻は正午、二人の頭上では日輪がこれでもかと言わんばかりに光を放っている。暑いのは当然だ。ぐぬぅっと詰まった鈴音に肩を竦め、夜明はついてこいとジェスチャーした。

「暑いの苦手なお前にはこの日差しはきついだろ、部屋にでも来るか？」

「へ？　う、うん、そうね。じゃあ、あんたの部屋に行ったげるわ。何か飲み物出しなさいよ」

「へいへい・・・、コップ一杯分のガムシロップで良いよな？」

「あんた私を糖尿病にする気!?」

漫才じみた会話をしながら、二人は人気のない寮の廊下を歩いていった。現在、ＩＳ学園は夏休みのため、半分以上の学生が祖国へと帰っている。寮に人気がないのもその為だ。

（そう言えば、私って汗臭くないわよね）

不意にそんな疑問が胸中に浮かんでくる。エアコンなんて高尚な物、部屋にならともかく廊下になんて付いてるわけも無いので、廊下内は結構な温度になっている。なので、多少汗をかいても致し方ないのだが、そこは花も恥じらう恋する乙女、気にするなと言う方が無理な話だ。

「そう言やよぉ」

「な、何よ!?」

「・・・何焦ってんだ？　まぁいい。その後ろに隠してるのって何なんだ？」

夜明の言う隠してるの、とは鈴音が夜明に話しかけようとした時、反射的に背に隠した物だ。

「こ、これは・・・部屋に行ったら話したげるわ！」

「そうかい・・・っと、ついたな」

夜明の後に続いて鈴音も部屋に入る。二人きりというのもあってか、

妙に胸がドキドキしてしまう鈴音。ベットに腰掛けると、妙にいい匂いがしてきた。

「ちょっと待っててくれ、麦茶持ってくるから」

そう言って夜明が台所の方に向かってしまったため、鈴音は本気で手持ちぶたさになってしまう。やることも無いので脚をブラブラさせていると、本棚の中にある物を見つけた。アルバムである。

「これって」

「あぁ、そいつか。そいつは俺が旅に出てから撮ったのなんだよ。撮った俺本人が言うのもどうかと思うけど、結構綺麗に撮影出来てると思うぞ」

「ふぅ〜ん・・・見てもいい？」

と、言った時には、鈴音は既にアルバムを開いていた。

「見てもいい？　って答えを聞く前に見るなよな・・・」

「どうせ、見ても良いって言うつもりだったんでしょ？」

「・・・けっ」

あっさりと心の内を言い当てられ、夜明は鼻を鳴らしながら麦茶が入ったコップ二つをサイドテーブルに置く。

「一応、大陸ごとに写真は分けてあんだよな。えっ・・・と、確かここは」

アルバムに収められている写真の説明をしようと、夜明は鈴音の隣りに腰掛けてアルバムを覗き込んだ。距離がとても近くなるので、必然、二人の肩がくっつく。

「ち、近いわよ！」

夜明を押しのけようと鈴音は顔を押し返そうとするが、夜明は突き出された手を軽々と避けた。

「近いって、しょうがないだろ。そうしなきゃ俺も見れないんだし・・・って、こうすりゃいいのか」

ポンと手を打つ。そして何処をどういう経緯を経てそういう結果に到ったのか、ベットの上に胡座をかいて、膝の上に鈴音を座らせる。

「これでよしっと・・・この写真が・・・」

満足そうに頷いて、夜明は写真の説明を始めるが鈴音には聞こえていなかった。カチコチに固まり、顔だけを真っ赤に変化させている。

（え、ちょ、何なのこれ！？　これ何てエロゲ！？）

いい感じに思考がショートさせている。項に吹き掛けられる夜明の吐息が鈴音の思考のオーバーヒートに拍車をかけていた。それだけではなく意図してか無意識の内か、夜明は右手で鈴音の頭を撫でている。意図してやっているのだとしたら、相当な女誑しだ。どうせ無意識の内での行動だろうが・・・。吐息を項に吹き掛けられ、頭を撫でられるという二重苦（二重快楽？）を味わされ、鈴音の理性はがしがしと削られていった。

（あ、・・・眠い・・・）

訂正。理性を削られているのではなく、眠気を増進させられている。ゴロゴロと喉を鳴らしながら夜明の手に頭を押しつけたところで、漸く夜明は鈴音の様子に気が付いた。

「んで、これがエジプトで・・・って、聞いてんのか鈴音？」

「ふぇっ！？　き、聞いてるわよ！　えっと・・・太陽と一緒にテロリストの本拠地を潰した時の記念写真よね！？」

常識で考えて、そんな写真がアルバムの中に収められている訳がない。

「その写真なら、次のページに」

「マジであるの！？」

常識なんて枠に囚われないのが月光夜明と言う男だが・・・。

数十分後。

「大分話が逸れた気がするがまぁ置いといて・・・、俺に何の用なんだよ？」

誰の所為だ。鈴音は口元まで出かかってきた言葉を飲み下し、コホンと咳払いをする。そんな事をしても痛いくらいに熱くなった顔の火照りや、早鐘のような鼓動が収まるわけでも無いのに・・・。ポケットを探り、二枚のチケットを取り出す。

「夜明、あんた夏休みにどこか出かける予定とかって無いの？」

「ん～？　そうだな・・・。これと言って無いわな。少なくとも、夏休み前半に予定はない」

夜明がこう言ってるのには理由がある。今現在、彼の半身とも呼ぶべき相棒、夕暮太陽が色々と面倒なことをするためにＩＳ学園から離れているのだ。アラスカ条約やら何やら諸々の条約に基づいて、

世界は日本に世界最強二機のＩＳ、レイジングウィングとバルディッシュトワイライトの詳細なデータを要求してきたのだ。当然と言うべきか日本政府は二機のデータなど碌に持っておらず、ＩＳ学園へと責任を押しつけた。そしてＩＳ学園はレイジングウィングの開発者、兼バルディッシュトワイライトの搭乗者である太陽に世界への説明を命じた、と言う訳である。相棒が世界を相手に面倒なことをしているのに、自分だけ遊びほうけているのはまずいだろう、と言うのが夜明の考えだ。

「鍛錬三昧の毎日・・・ってとこだな」

「哀れになるくらい灰色の夏休みね・・・。ったく、しょうがないわね、この私が融通を利かせてあげるわよ」

「・・・上から目線なのが気に入らんが、聞くだけ聞いてやる」

ピロリ～ン！　獲物（よあけ）は餌（チケット）に興味を持った。食い付きは上々！　鈴音は心の中でガッツポーズを作る。

「ん」

「あ、何じゃこりゃ？」

鈴音が差し出したチケットをしげしげと見る夜明。

「あんた知らないの？　今月出来たばかりのウォーターワールド、それのチケットよ。豆知識だけど、前売り券は今月分が完売、当日券は開演二時間前に並ばないと買えないのよ？」

「ほぉ、そいつは凄い。よくそんなの手に入れたな」

感心したように夜明は眉を上げる。夜明に感心され、得意になった鈴音はこのチケットを手に入れるのがどれだけ大変だったかを滔々と語り始めようとした。

「で、いつ行くんだ？」

が、それは夜明の言葉によって遮られる。話を遮られたことよりも、鈴音は夜明が言った言葉に表情を固めた。

「え。い、行くの？」

「誘いに来たのはお前さんだろうが。それとも何か、自慢しに来たのかこん畜生」

「じ、自慢しに来た訳じゃないわよ・・・」

どもる鈴音だが、その心内は狂喜乱舞していた。どうやって夜明を誘うか、それで悩んでいた鈴音にとって、夜明から誘いに乗ってきてくれたのは嬉しい誤算である。

（っと、いけないいけない。ここで調子に乗っちゃ駄目よ。勝利を目前にして舌なめずりするなんて、二流どころかど三流がやることよ）

「ま、鍛錬しかしてない暑苦しいあんたを誘うのなんて私くらいのもんよね。感謝しなさいよ」

調子に乗っちゃ駄目、とか言っといて、調子に乗った鈴音はチケットで夜明の額をぺちぺちと叩いた。それがいけなかった。

「・・・人の額をチケットで叩くなんざぁ随分と躾のなってない子猫だな・・・お茶の間に見せられない状態にしてやろうか？」

「ご、ごめんなさい・・・」

頭を掴んできた手に込められた力がマジであることを理解し、鈴音は素直に謝った。ここで謝っていなければ、夜明は何の躊躇もなく鈴音の頭を変形させただろう。素直に謝罪したので満足したのか、夜明は鈴音の頭を離した。

「どうせ金取んだろ？　いくらだ？」

「二千五百円」

「たか・・・くも無いか、お前から聞いた話から考えるに。・・・ほれ」

夜明は引き出しの中に仕舞っていた財布を取り出し、二千五百円を鈴音に渡した。

「毎度～」

にこにこ顔で二千五百円を受け取り、鈴音は夜明にチケットを渡す。勿論、チケットが売れたことではなく、夜明をデート（少なくとも、鈴音はそう思っている）に誘えたことの笑顔だ。

「聞き忘れてたけど、いつ行くんだこれ？」

「明日の土曜日」

「急だなおい。ま、いいか。んじゃ、待ち合わせは十時くらい、場所はゲート前でいいよな？」

「そうね、それで良いわよ」

「んじゃ、明日」

「遅れたら承知しないわよ」

コップに入った麦茶を一気に飲み干し、鈴音は捨て台詞を残しながら後ろ手に扉を閉めた。出るなり心の中ではなく、実際にガッツポーズを作る。

（やったあああっ！！　早く部屋に戻って準備しなきゃ♪）

嬉しさの余り動かずにはいられない。そんな感じの足取りで、鈴音は廊下を歩いていった。

「さって、やることが無いな・・・。もう一遍鉄骨をへし折るか」

鈴音が部屋から去って数時間後、夜明は明日の準備を整えてやることが無くなり、再び鍛錬をするためにベットから跳び起きた。汗を拭くためのタオルを首に巻き、ドアノブを握る。

「月光、いるか？」

その刹那、扉が勢い良く開いて夜明の鼻面を強かに殴りつけた。

「ぐおおおおぉぉぉぉっっっっ！！！！？？？？　鼻が、鼻がああぁぁっっ！！！！」

夜明は床の上に倒れ、痛みの余りのたうち回る。その珍奇な光景を作った、扉を開いた人物、織斑千冬はキョトンとした表情で夜明を見た。

「あ・・・、すまなかった。鼻は・・・」

屈み込んで夜明の様子を窺う。鼻を押さえている両手をこじ開け確

認すると、物の見事に夜明の鼻はへし折れていた。

「・・・」

無言で夜明の鼻を掴み、

「フンッ！」

ボキィッ！！

「いっでぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！？？？？？？？」

骨を元に戻した。

「折れてないな」

「いや折れてたよ！　確実に折れてたっつの！！　つうか、折れてなきゃあんな音しないだろうが！」

「喧しい！！」

「り、理不尽だ！！」

理不尽すぎるボディーブローによって沈められる。回復するのに数分を要し、回復しきった夜明は千冬に麦茶を振る舞った。

「それで、何の用ですか？」

「・・・私が言えた義理でもないが、普通、自分の鼻をへし折った相手をもてなすか？」

「俺は普通じゃないんで」

その一言で納得し、千冬は半分ほど麦茶を飲み干す。

「早速本題に入るぞ。この前の福音・終焉事件、ご苦労だった」

「恐悦至極」

「そこでだ。あの事件で一番の功労者であるお前にこれを渡してやる」

千冬がスーツのポケットから取り出した物、それは・・・。

「・・・」

「最近出来たウォーターワールドのチケットだ。驚くことに前売り券は今月分が完売、当日券は会場二時間前」

「あぁ、それ以上言わなくていいっす。知ってますから」

「そうか。とにかくこれをお前にやる。ではな」

チケットを強引に夜明の手に押しつけ、何かを言う間も与えずに千冬は部屋を出ていった。後に残されるのは困ったように頭を掻いている夜明と、その手に握られたチケットのみ。

「ふぅ。やっと戻ってこれましたわ」

そう言って、ＩＳ学園ゲート前に止められた白のロールルイスから降りてきたブロンドの美少女、セシリアは髪を掻き上げた。

（やはり、想い人とは同じ空の下にいたいものですわね）

彼女、セシリア・オルコットは祖国、イギリスでの仕事を終えて漸く帰ってきた所だ。学生なのに仕事？　と思う者もいるだろうが、代表候補生や名家の者ともなるとやらなければならないことが多々あるらしい。

「お嬢様」

呼び声に振り返ると、幼馴染みでもあり専属のメイドでもあるチェルシーが微笑を湛えて控えていた。

「どうかされたのですか？」

「いえ、何でもなくてよ」

淀みなく返事を返すセシリアに微笑みかけ、チェルシーは恭しく頭を下げる。

「そうですか。では、私どもはお部屋に荷物を運んでおきますね」

もう一人のメイドと一緒に荷物を運んでいくチェルシーの後ろ姿を見送り、セシリアは彼の人へと想いを馳せた。

（では、私は）

「早速、月光様に会いに行かれますか？」

「ちぇ、チェルシー！？」

ビックリ仰天。そこには荷物を運びに行ったはずのチェルシーの姿が。金魚の如く口をパクパクさせているセシリアに、チェルシーは再び頭を下げる。

「申し訳ございません。恥ずかしながら、お嬢様に一つ確認しておかなければならないことを失念してまして、戻って参りました」

「そ、そう。それで、確認というのは？」

「あの白いレースの下着は月光様用ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

口を半開きにして白くなるセシリア。そこに追い打ちをかけるように・・・。

「何が俺専用だって？」

「うっきゃああああああああああああああああ！！！！！！！！！！？？？？？？？？？？」

聞き慣れた、ではなく一番聞きたかった（今の状態を考えると、一番聞きたくなかった）声がした。セシリアは壊れたブリキ人形のようにぎこちなく、チェルシーは繊細な西洋人形のように優雅な動作で振り返る。

「どしたセシリー？　いきなり猿みたいな悲鳴上げて？」

黒いジーパンに白いシャツ、マントのように肩に羽織った黒い羽織という普段着スタイルの夜明がそこにいた。

「よ、夜明さん。何故ここに？」

「ん？　いや、暇潰しに鍛錬してたら唐突に今日、セシリーが帰ってくる日だったことを思い出してな。早めに終わらせて迎えに来たって訳。で、そっちのメイド服の姉ちゃんはどちらさん？」

「お初お目にかかります。私、セシリアお嬢様にお仕えしているチェルシー・ブランケットと申します。以後、見知りおきを」

丁寧なお辞儀をされ、夜明も丁寧にお辞儀を返す。

「あぁ、この間セシリーが話してくれたメイドさんか。初めまして。俺は月光夜明だ、よろしく」

「はい、月光様。・・・時に、ご無礼ながらお伺いしたいのですが、お嬢様は私のことを何と？」

「何と？　そうさね・・・とても気が利いて、優しくて優秀で、美人だって言ってたが・・・確かに美人だな」

成る程、と夜明は納得したように頷いた。まぁ、とチェルシーは嬉しそうに相好を崩す。それはとても優しくて、人を包み込むような暖かさを持った、綺麗な笑顔。今まで夜明に一言も美人なんて言われたことの無いセシリアはやきもちを焼いている・・・かと思われたが、実際は心の中で大量の冷や汗をかいていた。

（よ、夜明さん、何故そんなにチェルシーを情熱的な視線で？【飽くまでセシリア目線で見た場合】・・・！！　太陽さんが言ってましたわね、夜明さんは大人びた女性が好みだと・・・ま、まさか、チェルシーに、ひひひひひ一目惚れ・・・・）

こんな感じでセシリアが暴走してることなど露知らず、二人は話を続ける。

「私も月光様の話はお嬢様から耳にしております」

悪い意味でセシリアの頭が冷えた。冷えたのも束の間、すぐに別の意味で頭がヒートアップを開始する。

「ほぉ、そいつぁ気になるな。銀髪銀眼の変人って辺りが妥当な評価だと思うが・・・セシリーは俺のことを何て？」

（お願い！　後生だから話の内容は言わないでチェルシー！！）

セシリアの懇願が届いたのか、それとも自分が仕えるお嬢様をからかうためか（予想するに多分後者だ）・・・、さっき浮かべた笑顔とは別の、茶目っ気に溢れた笑顔を浮かべ、チェルシーは人差し指を唇に当てた。

「それは、女同士の秘密です」

「・・・セシリー」

「・・・何ですの？」

所変わって学園の食堂に隣接したカフェ。高が学園のカフェと侮る無かれ。冷暖房完備、年中無休の上に駅前の喫茶店なんざ鼻で笑えるくらいに本格的なドリンク。四季折々のデザートを食べれるとあって、夏休みでも学生の姿は絶えない。そんな洒落た所で好きな人と二人きり、絶対に嬉しいはずであろうシチュエーションなのに、セシリアの表情は晴れない。手に持ったアイス・カフェラテの中に入った氷がストローでかき混ぜられて澄んだ音を奏でる。

「なんか機嫌が悪いみたいだが・・・俺の所為か？」

「そうですわ」

「即答かよ・・・」

頭をがりがりと掻きながらため息を吐き、夜明は困ったようにため息を吐いた。

（ため息を吐きたいのは私ですわ）

口から出そうになったため息を飲み込み、ストローを銜えてアイス・カフェラテを飲む。普段ならおいしく感じるはずのそれも、味が分からない。数分ほど経った頃だろうか。何かを思い出したようで、夜明は顰めていた表情をハッとさせた。

「セシリー」

「・・・はい」

「ここに行かないか？」

「・・・はい？」

翌日の十時。

「「で、これはどういうことか説明してくれるわよね（ますわよね）？」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい」

ウォーターワールドゲート前。そこには気合の入った格好で仁王立ちする鈴音とセシリアと、土下座している夜明の姿があったとか・・・。

夏休みってなんか良いよね（後書き）

質問、太陽の日常生活を見てみたいですか？

プールは危険が一杯・・・この二人の所為で

「つまり、千冬さんから福音・終焉事件を解決したお礼として、このウォーターワールドのチケットを貰った。でも、あんたは私から買ったチケットを既に持っていた」

「そこに偶々私が帰ってきて、夜明さんは私を誘ったと」

「そう言うことになりますですはい」

土下座をしている夜明の後頭部を思い切り踏み抜きたい衝動を抑えつけ、二人は同じタイミングでため息を吐く。場所はウォーターワールド内の喫茶店、夜明は二人から事情聴取と言う名の尋問を受けていた。しかも、椅子の上で土下座をさせられていると言うオマケ付き。喫茶店にいる客、及びウエイトレス全員が三人に好奇の視線を向けている。

『痴話喧嘩？』

『二股がばれた・・・』

『女二人で男を取り合ってる・・・』

耳に痛い勝手な憶測に基づいた話がチラホラと聞こえてくる。耐えきれず、夜明が視線を上げて二人を見ると、

「誰が頭上げて良いって言った？」

「床と睨めっこしてて下さいな」

「はい、この世に産まれてきてごめんなさい」

二人の鬼神がいた。鬼神×二から放たれる尋常じゃない殺気と怒気、プレッシャーに精神を押し潰され、夜明は己の行動どころか存在さえ否定する。

「「・・・」」

再び土下座を始めた夜明に射殺さんばかりの視線を投げかける二人。二度目のため息を吐き、今度は互いに視線を向けた。

「苦労するわね」

「えぇ、お互いに・・・」

好きな人と二人だけでデート。そう思っていたのに、実際に行ってみればそこには別の女の姿。泣ける、とかそう言うレベルでは無い。ぶっ殺し物だ。特に、セシリアは夜明から誘われたと言うこともあり、その怒り、落胆は計り知れない。気合の入った二人の私服姿が涙を誘う。

「で、どうする？」

「そうですわね・・・帰りましょうか。泳ぐ気分でもありませんし・・・夜明さんの所為で」

「そぉね、夜明の所為で」

痛烈に皮肉られても、夜明はグゥの音も出せない。と言うか、グ、

でも言った瞬間に二人から制裁を受けるのは分かり切っているので、何も言わなかった。

「てかさぁ、このまま帰んのも癪じゃない？」

「そうですわね。・・・では、夜明さんの懐から閑古鳥の鳴き声が聞こえるまで好きな物を買っていただくと言うのは如何でしょうか？」

「良いわねそれ」

本人の目の前でする話じゃ無い。財布の中身どころか、銀行に預けたお金まで使い切られるビジョンが頭の中に浮かび、夜明の頬を一筋の冷や汗が伝う。夜明の様子を知ってか知らずか、二人が立ち上がろうとしたその時、園内放送が響いた。

『では、本日のメインイベント！　水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！　参加を希望する方は十二時までにフロントへとお届けください！』

「へぇ、そんなのがあんだ。太陽と一緒に出れれば、優勝できるだろうな」

この場にいない女性の名前を口に出来るあたり、夜明の図太さ、もとい鈍感は相当な物だと言うことが窺える。二人の頭の中で堪忍袋の緒が引き千切られる音が響いた。乙女の怒りを拳に込め、純情を踏みにじった（意図してではなく）悪漢を殴ろうとした瞬間、二人の耳がピコンと反応する。

『優勝したペアはなんと！　沖縄五泊六日の旅にご招待！』

（（これだ！！））

「「夜明（さん）！」」

「あ？」

「「目指せ優勝！！」」

「・・・はい？」

さっきまで拳を握り締めていたはずの手を、二人は揃って夜明に差し出した。まるで状況が飲み込めず、夜明は疑問符を浮かべて首を傾げた。

「それでは！　第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！」

司会のお姉さんが開始の宣言をしながら大きくジャンプした。着ている水着が大胆なビキニということもあってか、会場から歓声と拍手が巻き起こる。参加者は全員女性、観客のテンションも大いに上がっていることだろう。ちなみに、夜明はと言うと、

「二人ともーっ！　頑張れよーっ！！」

観客席で鈴音とセシリアの応援をしていた。本当なら鈴音とセシリアのどちらかとレースに出場する筈だったのだが、受付の人に空気を読んでください、的な視線を送られるし、後ろで二人がどっちが夜明とレースに出るかで言い争ってるのでうんざりし、二人に無理矢理ペアを組ませたのだ。そして、自分は高みの見物、と言う訳である。

「では皆さん！　参加者に今一度大きな拍手を！！」

再び響く拍手。レース参加者は手を上げたりお辞儀をしたりと何らかの反応を示しているが、その中で一切の反応を示していないペアが一組。黙々と柔軟運動をしている。

「「・・・」」

言わずとも分かると思うが、鈴音とセシリアだ。最初こそ夜明と一緒に出れなくてブスッとした表情をしていたが、今は気分をシフトさせてもうすぐ始まる障害物レースに集中している。他の参加者、観客（夜明除く）なんぞに関心はない。あるのは唯一つ。

「優勝賞品は沖縄五泊六日の旅！　皆さん、奮ってゴールを目指してください！」

この優勝賞品のみだ。二人は声援を送ってくれている夜明に手を振り、それぞれ勝手な妄想を膨らませながら顔をにやけさせる。

（朴念仁・オブ・朴念仁ズの夜明でも、若い男女二人で南国の島に行けば・・・）

（夏は人を変えるとも言いますし、夏休み最後の思い出ということでなら・・・）

ふと、互いの視線が交差した。

（セシリアからは適当に考えて奪いましょ）

（鈴さんには、何か別な物で譲ってもらいましょう）

腹黒い計画を立てながら、二人は柔軟を終えて司会のお姉さんに視線を向ける。

ーレースの説明中ー

面倒だから割愛したわけではないのであしからず。・・・本当だか

らね！

「いよいよレース開始です！　位置について～、よ～い・・・」

パァンッ！　と景気のいい競技用ピストルの音が響き、参加者二十四名十二組が一斉に駆けだした。

「おぉー、始まったか」

観客席に座っている夜明は先程売店で買ったポップコーンを摘みながら、走る二人を見守った。脚払いをかけてきたペアをジャンプでかわして、序でにプールへと叩き落としながら先へと進む。このレース、なんと妨害オッケーの過激レースなのだ。端から見れば最年少ペアである二人が一番不利そうにも見えるが、実際はＩＳ国家代表候補生として軍隊と同じ訓練を受けてきた二人。ぶっちゃけた話、滅茶苦茶有利である。

「しかし、さっきのペアを突き落としたのはいただけねぇな」

最年少ペアの二人が向かってくるペアを難無くプールへと突き落とす大立ち回りを演じたせいか、妨害上等な過激ペアは二人を集中して妨害し始めた。夜明が見守る中、二人はペースを落とすことなく進んでいるが、結構しんどそうである。

「俺と太陽だったら、妨害なんか全部無視してちゃっちゃとゴールするんだがな・・・ってんぁ？」

目を瞑って頷いていた夜明だが、突然響いた歓声にギョッとして目を開いた。視線を走らせるとすぐに歓声の原因が分かり、引きつった笑みでポップコーンを噛る。

「ふ、二人とも、えげつないなぁ・・・」

鈴音とセシリアはラリアットを仕掛けてきた妨害ペアを余裕で避け、プールに叩き落とす際に水着を奪っておいたのだ。しかも、奪い取った水着は妨害ペアが落ちた反対側の観客席に丸めて放り込むなど陰険なことこの上ない。

「何が二人をあそこまで駆り立てるんだろ・・・？」

疑問符を浮かべながらポップコーンを噛るのを止めない夜明。障害物も何のその、プールに浮かべられた不安定な小島を大道芸もかくやという動きで二人は渡っていく。水着が取れると言うトラブル（実際は二人の確信犯）で湧いていた会場は、今や二人の活躍で湧いている。次々と小島を渡っていき、二人はゴール（天井からワイヤーでつるされている小島）前の小島へとたどり着いた。

「にっしても鈴音とセシリー以外で残った最後のペア、筋肉の付きが一般人のそれじゃないな。何者だ？」

「トップの木崎・岸本ペアはご存じ先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルの武闘派ペアです！」

「あぁ、納得」

逃げ切るのが無理だと感じたのか、反転して鈴音とセシリアに向かうアマゾネスな体型の女性二人の説明に、夜明は合点がいって頷く。

（あそこまでノンストップで走っていた二人じゃ、体力的に考えてあのアマゾネス二人の相手はきついな。さて、どうやってこの難関

を乗り越えるのかな？）

二人はバックステップでアマゾネス二人から距離を取るが、そこは浮島、最早逃げ場はない。

「こうなりゃ奥の手よ！　セシリア！」

「何ですの！？」

「突っ込んで！」

「わ、私がですか！？」

「速く！！」

鈴音に必勝の策があると信じ、単身セシリアはアマゾネスペアに吶喊した。

「そこで反転！」

「え？」

戸惑いながら、セシリアは振り向く。振り返った瞬間に視界に入ったのは鈴音の・・・足の裏。

「ぶべぇっ！！」

女の子なら一生上げたくないであろう声を上げ、セシリアは思いっ切り、思いっ切り顔面を踏まれた。

「せ、セシリーを踏み台にした！？」

セシリアの顔面を踏み台にして鈴音は一気に跳躍、ゴールに飛び付いてフラッグを獲得した。鈴音とは対照的に、セシリアはアマゾネス二人のタックルを受けて数メートル下のプールへと落下、数メートル級の水柱を上げる。

「ありがとう、あんたの御陰よセシリア。あんたのことは一生忘れない・・・」

「いや、セシリー死んで無いから」

読唇術で鈴音が何を言ってるのか分かり、聞こえていないだろうけど突っ込まずにはいられない夜明だった。ふと、プールに落ちたセシリアが心配になってプールを覗き込む。

「ふ、ふ、ふ、ふふふふ・・・」

地獄の底から響くかの如く笑い声。夜明がまずい、と思った時には、既にプールからさっきの数倍の大きさの水柱が出来上がった。

「私の、私の顔を足で。それも夜明さんの前で・・・、今日という今日は許しませんわ鈴さん！！」

ブルー・ティアーズを展開し、セシリアは憤怒の表情を浮かべて鈴音に肉薄する。対する鈴音もくるくる手の中で回していたフラッグを投げ捨て、甲龍を展開させて臨戦態勢に入った。

「ななぁっ！？　何と、二人はＩＳ学園の生徒のようです！　まさかこの大会で二機のＩＳを見れるとは思っていませんでした！　・

・・あれ、でも、ルール的にはどうなんでしょう・・・？」

「反則じゃねぇの？　・・・いや、でも二人ともゴールするまでは正々堂々（？）やってた訳だし、ルール違反じゃ無いんじゃ・・・って、冷静に言ってる場合じゃねぇっ！！　おーいっ！　司会の姉ちゃん！　早いとこ観客の人達を避難させてくれ！！」

司会のお姉さんに一声かけてから、夜明はざわめいている観客席を飛び越えて戦闘をしている二人の元へと走っていった。

「おいお前等！！　バカなことやってんじゃねぇぞ！！」

「おりゃぁぁぁっ！！」

「はぁぁぁぁっ！！」

聞いちゃいない。互いのブレードがぶつかり合い、火花を散らす。

「お前等！　姐さんにマジで殴られるぞ！！　どんだけ痛いのか分かってんのか！？」

その一言で、一瞬だけ二人の動きが鈍る。だが、それは本当に一瞬で二人はすぐに闘い始めた。どうやら千冬に殴られることよりも、相手をぶちのめすことの方が優先事項らしい。

「ティアーズ！！」

「見えてるっての！！」

ビットを射出するセシリアにスラスターを巧みに使って複雑な機動

をする鈴音。結構高レベルな闘いだが、そんな評価が出来るほど今の夜明は冷静ではない。互いに武装をフル展開させて近距離で争う二人。その内、夜明の肩が小刻みに震え始めた。心なし、身体の周囲に量子的な揺らぎが見える。

「動きが止まればこちらの領域ですわ！！」

「この距離なら衝撃砲の方が速いっての！！」

会話から察することが出来るが、二人に闘いを止める気配はまるでない。この会話を聞いた瞬間、夜明の中で何かが切れた。量子的な揺らぎはすぐさま形となり、マルチロックオン用のバイザーが夜明の双眸を覆う。

「手前等ぁ・・・」

重複ロックオンと超高熱源反応を感知し、二人はゆっくりと夜明の方を見る。そこには全ての武装を射撃態勢へと移した夜明の姿が・・・。

「いい加減に、しやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！」

「「ご、ごめんなさぁーいっ！！！」」

謝罪するが時既に遅し。色とりどりの奔流が二人に直撃した。

「すいません、すいません、本当にすいませんでした！！」

十数分ほど時は進み、ウォーターワールドの事務室。司会のお姉さんにこってりと絞られ、夜明は平謝りに謝っていた。夜明がスターライト・フルバーストを鈴音とセシリアだけに直撃させるという離れ業をやってのけた御陰で二人は一瞬で撃沈、幸いにして怪我人も零。・・・なのだが、二人が暴れた事による被害はあった。ひたすら頭を下げ続ける夜明の肩にお姉さんの手が置かれる。

「君は謝らなくていいんだよ。この二人を止めてくれたんだし、寧ろこっちが感謝したいくらい・・・何だけどねぇ・・・」

夜明の肩から手を離し、夜明の後ろに控えていた鈴音とセシリアの耳を思いっ切り引っ張った。

「「いだだだだだだっっ！！？？」」

「何でこの子が謝ってるのに、あんた達からは一言も謝罪が無いの！？」

「「いだだだだだだっっ！！？？」」

「ちょ、二人の耳が千切れる！　二人が耳無しになっちゃうからマジで！！」

喧々囂々。ギャアギャアと騒ぐこと約数分。

「とにかく！　こう言ったことは金輪際しないでくださいね！！」

「「はい・・・」」

「本当にすみませんでした」

漸く許しを貰って、三人は事務室から出てきた。当然と言うべきか、夜明の後ろを歩いている二人の足取りは重い。優勝賞品はレースその物が滅茶苦茶になってしまってたため、無しだ。

「おい」

二人は床へと落としていた視線を上げて夜明の後ろ姿を見る。夜明は腰に手を当てながら振り返り、ため息を吐きながらこう言った。

「ばぁ～か」

「「っ！！」」

二人の中で何かが切れかかるが、今さっきの事を思い出してシュンとなる。自業自得だと思いつつ、落ち込む二人が余りにも哀れに思えてしまう。再びため息を吐き、夜明は苦笑いを浮かべながら二人を撫でた。

「そう落ち込むなって。次はいいことあるさ！　甘い物食いたくなったから、俺はこれから@クルーズに行くけど、お前等はどうする？」

「・・・期間限定のパフェ、一番高いの」

「・・・当然、奢りですわよね？」

「はいはい」

苦笑いを浮かべたまま二人の手を取り、夜明は歩き始めた。いきなり手を握られて二人は赤面するが、これくらいの役得はあってもいいだろうと、喜色満面で夜明の腕を取る。別段咎めるわけでもなく、夜明はそのまま両手に華の状態で歩いていった。

プールは危険が一杯・・・この二人の所為で（後書き）

こんばんわ。サザンクロスでっす。

いきなりですが、新しい小説を始めます。何を考えているのだろう、俺は・・・。

今日、散歩に行っていたら突然、仮面ライダーオーズのオリジナルコンボが浮かび、それを小説にしたいと思います。近日公開。

買い物に行こう（前書き）

今回は太陽が主な話です。そして初の一人称（最初だけ）

買い物に行こう

「久しぶりだね」

・・・またこいつか・・・。私はうんざりした様子を隠すつもりもなく、深々とため息を吐きながら瞼を上げた。そこには案の定、そいつがいた。

「こうして会うのは・・・二年振りかな?」

「・・・生憎、日記は書かない主義だ。仮に書いてたとしても、お前何ぞとの出会いは記録しない」

そう、絶対に記録などしない。誰が、好き好んで自分自身の中に存在している負の感情が固まった存在に出会ったことなど記録するものか。そいつ、私の中に存在する負の感情の固まりは、私とそっくりな姿で夢の中に現れる。姿形、全てが私とそっくり。声まで一緒ときたものだ。忌々しい・・・。

「そんなつれないこと言うなよ。僕たち一心同体だろ?」

唯一つ違う点を挙げるとすれば、それは笑い方だ。私はあんな下卑た笑みは浮かべない。

「お前と一心同体・・・か。吐き気と嫌悪感以外出てこない言葉だな」

「・・・君は何時もそうだよね・・・。そうやって僕から、自分の中に存在している負の感情から目を逸らし続ける。絶対に自分の中

にあるマイナスの存在を認めない・・・」

「目を逸らしている訳じゃ無い、お前に直視するだけの価値が無いだけだ」

「巫山戯るな！！！」

胸倉を掴まれて無理矢理目を合わせられる。負の感情が怒りで轟々と燃やしている瞳を、私は絶対零度の目で見つめ返す。

「僕はお前、お前は僕なんだぞ！　何で自分から目を逸す、何で自分を認めない！！」

「・・・誰かを憎む、誰かを怒る、誰かを羨む、誰かを蔑む、誰かを妬む・・・。そう言ったマイナスしか産まない感情は、私にとって不要なんだよ」

そうだ。私、夕暮太陽という存在は月光夜明の隣りにいるだけで全てが満たされているんだ。誰かを憎んだり、誰かを怒ったり、誰かを羨ましがったり、誰かを蔑んだり、誰かを妬んだりする必要は無い。夕暮(わたし)太陽は今、全てが満たされているのだから。

「私にとって、お前は不必要なんだよ！！」

負の感情の頭を掴んで、一気に握り潰す。掌を通して石膏を握り潰したような感覚が伝わる。負の感情は粉々に砕け、細かな粒子となって空間に広がっていった。

「・・・想い出の中で、じっとしててくれ」

（・・・僕は・・・想い出にはならなよ・・・）

不意に湧き上がってきた大欠伸を噛み殺そうともせず、太陽は大きく欠伸をしながら頭を掻いた。

「朝っぱらから、嫌な夢を見てしまったな・・・」

頭を掻きながら寮の食堂に入ると、朝食を摂っているシャルとラウラの姿が目に入った。シャルは食堂に入ってきた太陽に気が付いて

手を振っているが、ラウラは何かに夢中になっているようで太陽に気付いていない。

「お早う、太陽」

「お早う。シャル、ラウラ。・・・シャル、ラウラは何をしているんだ？」

夢中になってフォークの先端にマカロニを通しているラウラを指す。シャルは幾分引きつった笑みを浮かべて、同じようにマカロニを通したフォークを口に入れた。

「あはは・・・。僕がフォークにマカロニを通してるのを見て、ラウラもやり始めたんだ。太陽もやってみる？　結構楽しいよ」

「ほう？」

シャルからフォークを受け取り、太陽はフォークにマカロニを通した。ラウラが結構苦戦しているのに、こっちは一回で成功している。

「確かに、おもしろいな」

「でしょ？　むぐぅ」

マカロニを通したフォークをシャルの口に突っ込み、からかうような笑みを浮かべながら軽くデコピンした。

「これを面白いと言える、お前さんの頭がな」

ガビーン！　とショックを受けているシャルを残し、太陽は朝食を

取りに行く。

「よし、出来た・・・。何を落ち込んでいるんだ、シャルロット？」

マカロニを通すことに夢中になって、周囲が見えていなかったラウラは全てのマカロニを通したフォークを軽く持ち上げた。だが、シャルは薄暗い雲を頭上に立ち込めさせながらトーストを噛っていて、視線を落としている。

「そ、そっかぁ・・・。やっぱり僕の頭って面白いのかな・・・」

めっさ悲しそうだ。

「買い物？」

朝食の蕎麦を食べながら、太陽は問い返した。太陽に面白いと言われ、ショックを受けていたシャルはどうにか調子を取り戻し、コクリと頷く。

「うん。ラウラの私服とか、パジャマとか買いに行こうと思ってるんだ。良かったら太陽も行かない？」

ツユの中に万能ネギを入れながら、太陽は今日の予定表を頭の中に思い浮かべた。午後はバイトのシフトが入っているが、それまではこれと言った予定は入っていない。最後の一口を啜り、太陽は立ち上がった。

「そう言うことなら付き合わせて貰おう。午後にはバイトが入っているから、途中で別行動になるが構わないか？」

「うん、大丈夫だよ。十時くらいに行こうと思ってるんだけど」

「せっかくだし、夜明（よめ）も誘っていこう。私は良い亭主になるな」

「・・・お前の場合、亭主の方が合ってるんだから不思議だ」

十時。私服へと着替えた三人は駅前のデパートに行くため、バスに乗った。約一名、ラウラだけが私服ではなく制服なのは置いておこう。シャルと太陽は私服だ。シャルは淡い水色を加えた白いワンピース。涼しさと軽快さを醸し出している。太陽は相変わらずのジーパン、白いTシャツにマントのように羽織った日輪の刺繍が入った白い羽織だ。似合ってはいるが、季節感は皆無に等しい。

「太陽ってさ、それ以外の服持ってないの？」

「あぁ、この組み合わせを七組持っているからな。別に他の服が欲しいと思ったことはない」

同じ組み合わせの服が七組も。それはそれでシュールな光景だと、シャルは思った。

「それに、私みたいな粗忽者が洒落た服を着たって似合わないだろ」

この台詞を一般的な容姿の十代女子の前で言えば、太陽は間違いなく八つ裂きにされるだろう。かく言うシャルも一瞬だけムカッ、と来る程だ。自覚は皆無のようだが、太陽は千人中千人が認める美少女だ。現に、男も女も関係無しで太陽に見惚れている。その美少女が自分のことを粗忽者などと言っているのだ。はっきり言って、嫌味にしか聞こえない。

「でも、それじゃ勿体ないよ、太陽は綺麗なんだし。それに、一度

くらいお洒落な格好したいなぁ、って思ったことはあるでしょ？」

「いや、一度も」

即答され、シャルは絶句してしまう。このまま行ったら、太陽は永遠に服に興味を持たないのではと言う、妙に確信が持てる疑問が浮かんできた。

「・・・ラウラの服を買うついでに、太陽の服も何か買おう」

「ん？　いや、別に必要な「買おうね？」・・・は、はい」

シャルの妙な迫力に押され、反射的に頷いてしまう太陽。そんなこんなしている間に、バスは駅前に着いた。ちなみに、一度も会話に参加していなかったラウラは何をしているのかと言うと・・・。

（市街地制圧前に大型輸送機による空爆が・・・）

『戦争時化の市街戦シミュレーション』をしていた・・・。

「『サード・サーフィス』か。変わった名だな」

「結構人気があるお店みたいだよ。ほら、女の子もたくさんいるし」

シャルに言われ、太陽とラウラはサード・サーフィスの店内を見回した。確かに、結構な人数の女性（三人と同年代）が服を見ている。セール中と言うこともあり、店内はかなり騒々しい。

「それで二人とも。私服はスカートとズボン、どっちが良い？」

「どっちでも構わない」

「蹴りをするときに邪魔にならない方で頼む」

どちらにしても対応に困るオーダーだ。

「どっちでも良いって・・・。それに太陽。蹴ることを前提として服を選ぶのは止めようよ・・・」

ばさり、と何かが落ちる音が聞こえた。三人が音のした方向を見ると、この店の店長と思しき人が三人を凝視している。

「落ちてるぞ」

太陽が歩み寄り、客に渡すはずの紙袋を拾い上げた。文句を言おうとしていたその客も、太陽と二人に見とれて言葉を失う。

「金髪（ブロンド）に銀髪（プラチナ）、赤髪（スカーレット）・・・？」

店長の異変に気付き、他の店員と客も三人に視線を移して魅了された。

「ど、どんな服をお探しで？」

店長の声が上擦っている。見るからに緊張していて、サマースーツを着こなしている人とは思えない。何故に目の前の女性が緊張しているのか分からず、太陽は返答に困った。替わりに、シャルが答える。

「えっと、取り敢ずこの二人に似合う服を探しているんですが、何かいいのありますか？」

「こ、こちらの銀髪の方と赤髪の方ですね！今すぐ用意するので少々お待ち下さい！」

言うなり、店長は店の奥へと消えた。シャルと店長さんだけに任せるのも何だと思い、二人は自分でも服を捜してみようと店内を見回した。が・・・。

「・・・まるで分からないな」

「同感だ。よく、彼女たちはこの山のような量の服から自分に合う物を選べるな」

凄まじい量の服に、二人とも辟易してしまう。オマケに店員、客に拘わらず注がれる視線。居心地が悪いったらありゃしない。

「・・・ラウラ、私は少しトイレに行って来る。シャルにそう伝えといてくれ」

「な!?　一人だけ逃げるな!!」

伸びてきたラウラの腕をヒラリとかわし、生け垣となりつつある客達の頭上を飛び越えて、太陽は一旦店から離れた。

数分後、店へと戻ってきた太陽。人垣を掻き分けてラウラ達の元へ戻ると、シャルが凄い勢いで店長さんが用意したのであろう服の山を物色していた。その勢いたるや、太陽でさえ目を丸くする程。

「ず、随分気合が入ってるな」

「うん！　ラウラが可愛いのがいいって言ったからさ！」

「ラウラが？」

意外な返答に、太陽は思案顔になりながらラウラを見る。

「べ、別に深い意味はないぞ」

誰であろうと、一瞬で嘘だと見抜ける動揺っぷり。普段からラウラと親しくしている太陽なら尚更だ。にぃっ、と笑い、太陽は何気ない風を装って言う。

「そう言えば、夜明は可愛い服とかが好きだったな」

「ほ、本当か！？」

凄い勢いでラウラが食い付いてきた。笑いを深め、太陽はラウラの

頬を指でプニプニする。

「どうした？　深い意味は無いんじゃ無いのか？」

「・・・／／／」

真っ赤になりながら返答に詰まるラウラを見て、太陽は面白そうに笑った。恨みがましい目で睨まれるが、そんなの何処吹く風。二十分ほどして、シャルが選んだ服に着替えたラウラが試着室から出てくる。

「へぇ、似合ってるじゃないか」

店内の全員が息を呑む中、太陽は眉を持ち上げながら率直な感想を述べた。ラウラが着ているのは肩が露出した黒いワンピース。所々にあしらわれたフリルが可愛らしい。

「それじゃ、ラウラのお洒落姿も見られたことだし、私はこの辺で」

「「待てぃ」」・・・別に私は服なんか要らないのだが・・・」

逃走を図ろうとする太陽だが、シャルとラウラの妙に息のあったコンビネーションで逃げること叶わず。結局、服を買うこととなった。

「で、何か色とか形とかの希望はある？」

「そうだな・・・。色は赤か銀のどちらかがいいな」

妙に張り切っているシャルを見て諦めがついたのか、太陽は素直に希望を述べる。

「了解、任せちゃって！」

異様な熱の入りようで服を選ぶシャルの姿に、本当に珍しく太陽は一抹の不安を覚えた。ふと、黒いワンピースを着たラウラと目が合う。その目はこう言っていた。

『腹を括れ』と。

「・・・ま、大丈夫だろう」

十数分後、シャルが選んでくれた服を手に太陽は試着室へと入った。

「・・・認めよう。シャル、お前はセンスがいい。少なくとも、これは私好みだ」

試着室から出てきた太陽を見て、一人の女性が呟く。

「ロックシンガー？」

その表現が今の太陽にはピッタリだった。下は相変わらずのジーパンだが、左脚が太股までしかなく、惜しげもなく太陽の脚線美を披露していた。右脚はちゃんと踝（くるぶし）まであるが、数カ所に傷が入っていて肌が露出している。無地の白いシャツは短い、故に臍だし。深紅の革ジャンはノースリーブで、背中部分に銀色の糸で炎の刺繍が施されていた。

「これでギターかマイクを持っていれば、完全にロックシンガーだな」

楽しそうに笑いながら、太陽は舌を出しながらポーズを取ってみせ

た。

その後、バイトに行く太陽と別れ、二人はオープンテラスのカフェでランチをとった。その時、何の因果かどこかの喫茶店の店長（女性）に声をかけてしまい、バイトをやる羽目に。

女性はメイド、男性は執事の格好をして接客するという、所謂メイド（執事）喫茶と言う奴だ。しかも、制服（ラウラはメイド服、シャルは執事服）に着替えた二人を待っていたのは、

「何してるんだ、お前等？」

執事の服を着た太陽だった・・・。

買い物に行こう（後書き）

起きたら十二時だった。・・・このままではいけない。人として・・・。

「シャル、四番テーブルに紅茶とコーヒーを持っていってくれ。ラウラ、お前は七番テーブルに注文を取りに行ってくれ」

太陽の指示を受けて、シャルは紅茶とコーヒーを乗せたトレーを片手に四番テーブルへ、ラウラは注文のための端末を手に七番テーブルへと向かう。太陽は何をしているのかというと、キッチンで注文された料理を作ったりしていた。更に、店長からの指示があった時は、フロアとしても活躍している。早い話、フロアとキッチンを同時にこなしているのだ。

『それって大変なんじゃないの？』

というシャルの質問に、

『別に』

と、太陽は何の苦もなく返したとか何とか。まぁ、時給が普通のバイトの人よりも二倍になっているのだから、元は取れているのだろう。さて、彼女たちの働きぶりを見てみるとしよう。

「お待たせいたしました。紅茶をご注文されたお客様は？」

「は、はい」

自分の方が年上だというのに、緊張している女性客。シャルが放つ貴公子然とした雰囲気を考えれば、まぁ当然の反応だろう。紅茶とコーヒーをそれぞれの客に差し出し、この店の、とあるサービスの

要不要を訊ねた。

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？　よろしければ、こちらで入れさせていただきます」

「お、お願いします。砂糖とミルクたっぷりで」

「わ、私も！」

普段ならノンシュガーノンミルクなのだが、今回だけは特別と言うことで一つ。お嬢様方、改めお客様の注文を受け、シャルは柔らかな笑みを浮かべた。

「かしこまりました。では、失礼いたします」

スプーンをそっと握り、砂糖とミルクを加えたカップを静かにかき混ぜる。時折聞こえる、カップの縁とスプーンが当たる音さえ耳に心地いい。

「お待たせいたしました」

「あ、ありがとう」

優雅なお辞儀を返し、シャルは別の客がいるテーブルへと向かう。模範的、の一言に尽きる接客振りだ。一方のラウラは・・・。

「水だ、飲め」

注文を取るはずなのに、何故か水の入ったコップを勢い良く置く・・・と言うよりも、叩きつけている。コップが割れていないのは軽い

奇跡だ。

「こ、個性的だね。もっと君のことが知りた」

話を聞くどころか、注文さえも取らずにラウラはカウンターへと向かって何かを告げる。少しして、出されたコーヒーを持ってきた。

「飲め」

さっきよりも優しく（壊れそうなのに変わりなし）カップをテーブルに置く。優しくとは言っても、音がするくらい強く置いたので中身が零れたのは当然だ。

「え、えっと、コーヒーを頼んだ覚えは無いんだけど・・・」

「何？　客でないのなら出ていけ」

取り付く島もない。ラウラのような美少女と少しでも長く話したいが為か、男は萎縮しながらも言葉を探しながら会話を続けようとする。だが、そこは『ドイツの冷氷』と呼ばれたラウラ。

「飲んだら出ていけ。邪魔だ」

「・・・はい」

見ている周りの方が可哀想になる物だ。ラウラが次の仕事を貰おうとカウンターに身体を向けた瞬間、太陽の飛び膝蹴りが顔にめり込んだ。それだけではなく、太陽は追撃と言わんばかりに倒れたラウラの鳩尾に肘鉄を落とす。

「己はお客様を何だと思っているんだ！！」

「ぐおおぉぉっっ！！！　し、しかしだな太陽！　こいつ等はコーヒーを注文していないと」

「注文を取ろうともしないで！　頼まれてもいないコーヒーを持っていったのはどこのバカだ！！」

ラウラにアルゼンチンバックブリーカーをかけながら、ラウラが注文を取るはずだった男性客達に謝罪しようと太陽が視線を向けると・・・。

「あ、あの子超いい・・・」

「罵られたい、見下されたい、差別されたいぃっ！」

「・・・異常性癖の持ち主で助かったな」

「あ、謝るから技を解いてくれーっ！！」

「・・・これはカオスだなぁ・・・」

思わず呟いてしまったシャル。お客様方全員が同意したのは言うまでもない・・・。

そんなこんなで働き続けること二時間。臨時でバイトに入った二人の噂が広がって、客足が減る気配は一向にない。寧ろ、増えている。国家代表候補生として鍛えられているシャルとラウラも肉体的にはともかく、精神的な疲れを感じ始めた。他の従業員も顔に疲労を浮かべる中、唯一人、太陽は一切の疲れを見せずに働いている。そんな時、事件は起こった。

「全員動くんじゃねぇ！！」

突然、扉が蹴破られた。一瞬、何が起きたのか理解できない店内の皆様だったが、次の瞬間に響いた銃声で悲鳴を上げることに。

「きゃあああっっ！！？？」

「騒ぐな！　静かにしろ！！」

「騒ぎの原因がよくほざく・・・」

呆れたように呟きながら、太陽はその押し入り迷惑人間共、明らかに強盗と分かる格好をした三人組を観察した。それぞれの手にハンドガン、ショットガン、サブマシンガンが握られている。一人の男が背中から下げているバックに紙幣が詰め込まれていることから察するに、逃走中だったのだろう。

「あー、犯人一味に次ぐ。君たちは完全に包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返すー」

「・・・あんな対応、ドラマかアニメの中だけかと思ってたんだがな・・・」

駅前と言うこともあってか、警察の対応は異常なまでに早かった。唯、惜しむらくは対応の仕方がビックリするほど古いことである。十代には確実に通じないであろう警察の対応にため息を吐きつつ、太陽はシャルとラウラに目で合図を送った。二人とも静かに頷き、それぞれの行動へと移る。

「ど、どうしましょう兄貴!?　囲まれちゃいましたよ?!」

これしきのことで狼狽えるくらいなら、最初から強盗なんてするな。突っ込みを飲み下しながら、太陽は手近のテーブルに置かれていた灰皿を握った。

「狼狽えるんじゃねぇ！　こっちには人質がいるんだ。警察だって強引な真似は出来ないさ」

その人質が自分達を無力化しようとしているなんて、この時は想像もしなかっただろう。リーダー格と思われる男が体格のいい手下にそう告げると、もう一人の部下であろう、もやしのように細い手下がショットガンのポンプアクションを行った。

「へ、へへ。そうですよね。俺たちには高い金で買ったこれがあるんだし」

両手で構えたショットガンの銃口を天井に向け、余り意味がないだろう威嚇射撃を行おうとすると、

「止めろこのカス共。人のバイト先をこれ以上壊すな」

風切り音が店内を通り過ぎ、クリスタル製の灰皿がそのもやしのような手下（以下、手下2）の手に直撃した。灰皿の投擲者、太陽は腰に片手を当てながら男達に視線を送る。いきなり灰皿を投げつけられて殺気立つ強盗犯達だが、太陽の美しさに見惚れてしまう。が、それも数秒のこと、すぐに三つの銃器の銃口を太陽へと向けた。

「何してくれてんだ姉ちゃん!?」

「大人しくしてろってのが聞こえなかったのか!?」

「裸にひん剥いてやろうか!?」

三者三様、品が欠片も感じられない強盗の言葉に太陽は頭を痛める。やれやれと首を振りながらため息を吐き、両手を襟から執事服の中に突っ込む。

「そんな玩具如きで・・・」

ズボッと両手を引き抜いた。その手に握られているのは・・・。

「がたがた強がり言ってるなよ、ど三流共」

対戦車用マシンガン、ガトリングガン。太陽の両手に握られた二つの兵器は、明らかに太陽の身長を超えている。

「ど、どこにそんな物隠してた!?」

「ってか、明らかに服の内側に収まってるサイズじゃないだろ!?」

所持している火器の迫力が違いすぎだ。さっきまで強盗が頼りとしていた三種の銃器が、太陽の前では水鉄砲よりも頼りなく見える。

強盗の悲鳴混じりの叫び、太陽はハードボイルドな笑みを浮かべて答えた。

「知らないのか？　執事服の中には宇宙が広がってるんだぞ？」

「そうなのか!?」

「いや、常識で考えてよ!」

目を輝かせながら反応するラウラに、シャルが小声で突っ込む。苦笑いを浮かべながら、太陽は何の躊躇いもなく引き金を引いた。

「精々踊ってくれ」

鼓膜を劈(つんざ)かんばかりの銃声が店内に轟いた。強盗達は持っていた銃

器を投げ捨て、死に物狂いで近くにある障害物に隠れた。顔が涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっていて、軽く漏らしかけているのは仕方ないことである。数分後、漸く銃声が止んだ。

「た、弾切れですか!?」

強盗犯のリーダー、恐怖の余り敬語になっている。ガタガタ震えている強盗犯達に返ってきたのは、太陽のクスクス笑いだった。数秒、肩を震わせて笑いを堪えていたが、我慢の限界に達して太陽は爆笑し始める。

「ハッハッハ!!!!!　・・・空砲だ!」

爆笑し続けながら、太陽はガトリングガンとマシンガンを投げ捨てる。言われてみれば確かに、太陽の足下に散らばっている薬莢や店内を漂う硝煙の匂いはあれど、太陽が射撃したことで出来た銃創は一つも無い。銃器を持っていたにも拘わらず、たった一人の少女に手玉に取られて強盗犯の怒りはクライマックス。銃を乱射しようとするが、さっき投げ捨ててしまったため、手元にはない。慌てて周囲を探すと。

「捜し物はこれ?」

「お、ありがとよ・・・」

差し出された銃を見て、愕然とする。三種の銃は既にシャルの手によって分解されていた。

「あ、後ろ気をつけたほうがいいよ」

ご親切な忠告に振り返った彼等三人の視界に入ったのは、空中で回し蹴りを放つ銀髪美少女メイドだった。

「木ノ〇旋風！」

先日、夜明が読んでいるのを偶然目撃したマンガの技で、ラウラは強盗犯三人を一遍に蹴り飛ばした。手下１と手下２は窓硝子を突き破って外に叩き出され、リーダーは店内の壁に叩きつけられる。

「やるじゃないか」

感心したように太陽は右手を銃のような形にしてラウラに向けた。
それに、ラウラは親指を立てて応える。そんな暢気な二人の腕をシャルが慌てて引っ張った。

「二人ともまずいよ！　太陽はともかく、僕たちは代表候補生なんだから、公になるのは避けないと！」

窓の外を見ると、警察が乗り込んできそうな勢いだった。ラウラの回し蹴りによって叩き出された二人は既に御用となっているだろう。

「それもそうだな。しかし、この制服はどうする？」

「後日、私が店長に返しておく」

「お願い！」

そのまま三人して店を飛び出そうとすると、

「捕まって豚箱にぶち込まれるくらいなら、全部ぶっ飛ばしてやらぁ！！」

意識を取り戻したようで、リーダーは起き上がるなり革ジャンを左右に広げた。その腹には結構な威力のあるプラスチック爆弾が巻かれている。勿論、起爆装置はリーダーの手に。どこまでも典型的、そして小物じみている。

「うわ～・・・」

「諦めが悪いな」

シャルとラウラが再びリーダーの気を失わせようと身構えた刹那、既に太陽が動いていた。

「何度も言わせるな、人のバイト先をこれ以上壊すな」

両袖の中からシルバー、先の尖っている銀食器を飛び出させる。右にはフォークを四本、左にはナイフを四本握り、最小限の動作でリーダーに向けて投げつけ始めた。天井にある電灯から光を浴びて、八本のシルバーは輝きながら壁に突き刺さった。リーダーの革ジャンを壁に縫いつけて。それだけで終わることはなく、次々に太陽はシルバーを投げつけてリーダーの服を壁に縫いつけて、磔にした。

「少し豚箱にぶち込まれて」

最後の一本を投げると同時に走り出し、壁に磔にされて動けないリーダーの眼前に移動して右脚を勢い良く後方に振り上げ、

「頭を冷やせ！！」

振り子のように勢いをつけて、インステップで、リーダーの股間を、蹴り上げた。

「っっっっっっっっっっっっっっっっっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

店内の時間が止まる。シャルは表情を顰め、ラウラは僅かの哀れみを帯びた視線をリーダーに向けた。店内の男性客達は顔を青ざめさせながら、反射的に股間を押さえる。

「・・・」

リーダーの手から起爆装置が滑り落ちた。無言、無表情のまま、リーダーは一筋の涙を流した。その様、胸が締め付けられるほど痛々しい。

「これに懲りたら、強盗なんてこと止めて真面目に働けよ。じゃ」

リーダーが落とした起爆装置を空中で受け止め、握り潰しながら太陽は颯爽と立ち去った。その後に続くシャルとラウラ。さながらそれは、黄昏（トワイライト）に吹く漆黒（シュヴェルツ）の風（ファール）のようだった。

「もう夕方か、早いな」

強盗事件が発生してから二時間後、三人は残っていた買い物を済ませて、ある店に向かっていた。太陽がバイク屋に行きたいと言ったことからである。

「バイク屋？　別に良いけど、何で？」

「いや、夜明がバイクを持ってるだろ？　だから私もバイクを買って、二人でツーリングなんかしたいな、と思って」

つまり、太陽がバイクを買えば、夜明を独占できる時間が増えることになる。その懸念が顔に出ていたのか、太陽は軽く笑いながら二人を見た。

「別に、そのまま夜明をかっ攫おうと言う訳じゃないんだ。それくらい構わないだろ？　・・・自分で言っておいて難だが、ツーリングに誘ってそのままどこかにかっ攫うと言うのもありだな」

「「それはダメ（だ）！！」」

シャルとラウラの声が綺麗に重なる。二人の反応に笑いながら、太陽は道を歩いていった。からかわれていたことに気づき、二人は顔を赤くしながら太陽の後をついていく。十数分ほど歩いていると、太陽の目的の店と思われるバイク屋が見えてきた。でかいウィンドウの前に、油で汚れた作務衣を着た年輩の男性がアルコール度数の

高そうな酒を煽っている。

「邪魔するぞ」

「いらっしゃ・・・おや、あんたは月光の坊主が言っていた姉ちゃんかい？」

その老人と夜明は面識があるようだ。老人がついてくるようにジェスチャーし、太陽達は老人の後に続いて店の中に入った。

「いらっしゃいませ。・・・親父、その人達は？」

「月光の坊主が紹介した姉ちゃんだ」

「あぁ、月光様が言っていた・・・。お話は伺っております」

「バイクが欲しいんだが」

「こいつさ」

老人が酒瓶を向けたその先にあるバイクは・・・。

「何て言うか・・・」

「ゴツい、な・・・」

それがシャルとラウラの感想。

「ホンタスーパー？『ケルベロス』。１３００ＣＣのアルコール車、出力はトラック並の化け物よ」

「ほぅ・・・」

見定めるように、太陽はケルベロスの撫でながら周囲を回る。黒と赤の塗装、バルディッシュトワイライトの装甲によく似た配色だ。一頻りケルベロスを撫で回し、気に入ったのか太陽は笑みを浮かべる。

「気に入った。こいつを貰う」

「ありがとうございます。では、こちらに」

店長が出してきた書類に太陽は目を走らせた。太陽が何やら面倒そうな手続きをしていて暇になったシャルは新しい酒瓶を取り出した老人に尋ねる。

「あの、夜明はどんなバイクを買ったんですか？」

興味があるのか、ラウラも老人を見ている。

「月光の坊主が買ったバイクか？　ケルベロスの兄弟マシン、ホンタスーパー？『フェンリル』だ。基本的なスペックはケルベロスと同じだが、あいつ自身でカスタムしてるだろうからとんでもない代物になってんだろうな・・・ん？」

店内に置かれているテレビ。さっきまでドラマが放送されていたが、いつの間にか臨時ニュースを報道している。

『番組の途中ですが、ニュースをお送りします。先程午後四時五十五分、〇×刑務所から強盗殺人犯の赤野楼矢が脱獄。現在、パトカ

ーを奪取して逃走中。近隣住民の方は十分に注意してください。繰り返します』

「近くじゃねぇか。こりゃまた物騒なこった」

老人が酒瓶を煽ろうとしたその時、店の前を白黒配色の車が猛スピードで通りすぎていった。

「・・・ねぇラウラ。今のって・・・」

「あぁ、間違いなく今テレビで報道されている脱獄犯だろうな。一瞬だけ運転席が見えたが、テレビに出ていたのと同じだ」

二人は顔を見合わせる。

「ん、どうした？」

そこに店長との話を終えた太陽が戻ってきた。シャルは頭を掻きながら、さっき店の前を脱獄犯が通り過ぎていったことを話す。話を聞き終え、太陽は一度頷いた。

「成る程な。おい店長、あれを届ける必要は無いぞ。今乗っていく」

「い、今ですか！？　と言われましても、まだ燃料のアルコールが入ってませんし」

「今入れる」

言うなり、太陽は老人の手から酒瓶を奪い取った。シャルとラウラの制止も聞かずに給油口の蓋を開けて酒瓶の中身を注ぎ込む。

「お、オイオイ。そんなもん入れたらエンジンがぶっ飛ぶぜ」

「安心しろ。エンジンには内緒にしておく」

酒代だ、とニヒルな笑みを浮かべながら、老人に十万円を渡す。

「え～っと、価格が三百五十万なので、お釣りは」

何を言っても無駄だと悟ったのか、店長は諦めた表情で太陽から渡された五百万の束を数える。太陽は首を振りながらケルベロスに跨って、一気にハンドルを捻った。腹の底に響くような重低音。

「とっとけ、残りはガラス代だ！！」

ウィンドウに向かって急発進して、一気に窓ガラスをぶち破った。派手な音を上げて散らばる硝子の破片と一緒に道路に着地して、脱獄犯が逃げていった方向へと走り始める。

「ガラス代、ね」

店長は苦笑いを浮かべ、掃除用具を取りに店の奥へと入っていった。夜明が紹介していたと言う時点で、普通の客でないことは予測していたのかもしれない。

「「・・・」」

余りの事に呆然とする二人。数秒後、やっとラウラが一言ひねり出す。

「太陽には・・・本当に敵わないな・・・」

「そうだね・・・」

翌日早朝。脱獄犯が素っ裸になって電柱からぶら下げられているのが見つかり、世間を騒がせた。

お風呂大パニック！？（前編）（前書き）

バイトをしてる間、唐突に思いついたので書きます。

お風呂大パニック！？　（前編）

「あぁ～、疲れた」

「だなぁ～」

時は黄昏。地平線へと沈んでいく夕日がオレンジ色の光を放っていた。窓から射し込んでくる夕陽を受けながら、夜明と一夏は寮の廊下を歩いている。ＩＳ関連での書類を書くために今朝方に拉致監禁され、今の今まで拘束されていたのだ。

「にっしても書類やら何やら面倒くせぇな。いっそのこと、スターライト・フルバーストで吹っ飛ばせばよかったぜ」

「何物騒なこと言ってんだよ。しょうがないだろ、俺たちは代表候補生でもないのに専用のＩＳを持ってるんだから」

「お前はともかく、俺は日本の代表候補生になるってことで話がついてた筈なんだよ。蒸し返すなって話だ」

不機嫌そうに夜明は鼻を鳴らす。風のように自由で、雲のように気ままな夜明は授業はともかく、拘束されることを極端に嫌う傾向がある。実際、書類の手続きをしている場面で千冬がいなかったら、夜明は書類を持ってきた政府の人達を半殺しにしていた。

「ま、まぁ、過ぎたことだし気にするのは止めようぜ。それより、風呂にでも行かないか？　今の時間帯は俺たちが入れる時間帯だし」

「そうだなぁ」

夜明の機嫌の悪さに嫌な汗をかいた一夏は両の大浴場に行くことを提案。別にこれからの予定も入っていないので、夜明は一夏に賛成、両者はそれぞれの部屋から道具を持って大浴場へと向かう。

「しっかし、こんだけの広さの風呂が俺たち二人だけで使えるんだから贅沢だよな」

「まったくだ。・・・ん?」

風呂に入ろうとシャツを脱ごうとしていた夜明の動きが止まる。

「どうしたんだ?」

不審に思って一夏が声をかけると、夜明は脱いだ衣服を入れるための籠と籠の間を指さした。そこには・・・。

「で、一夏さんとは何処までいきましたの？」

「減る物じゃないんだ。話せ」

「へ、部屋に押し掛けてきたかと思えば何だいきなり！？」

所変わって箒と太陽の部屋。特にすることもないので適当的に二人で談笑していたら、いきなりセシリアとラウラが部屋に押し掛けてきた。その後に続いてシャルが部屋に入ってくる。凡に、鈴音はクラスの友達と出かけていていない。

「「で、一夏（かれし）とは何処まで行ったんだ（ましたの）？」」

部屋に押し掛けて来るなり開口一番、とんでもない質問が二人の口から飛び出してきた。当然、箒の顔は一瞬で完熟トマト並に赤くなる。暫くの間、話せ話さぬの押し問答が続いたが、箒の方が根負けしてポツリポツリと話し始めた。

「き、昨日はその・・・二人で買い物に」

「そうなんですの・・・」

「それで？」

根掘り葉掘り聞こうとするセシリアとラウラ。止めようとは思っているのだが、自身も年頃の女の子であるため、シャルは二人を宥めながらも興味津々で耳を峙(そばだ)てている。幼児のように何でもかんでも聞いてこようとする二人に辟易し、箒は太陽に助けを求める視線を送った。

「話してやればいいじゃないか」

助けるつもりは皆無らしい。大人びた笑みを浮かべながら、椅子に座っている。助けを求めるのは諦め、二人に聞かれるまま箒は質問に答えていった。そんなこんなして数分後、本題だと言わんばかりにラウラが咳払いする。

「そ、それでは・・・したのか？」

「したのか・・・とは何を？」

「その・・・、何というか・・・ちょめちょめと言うか、にゃんにゃんと言うか・・・」

どうにも煮え切らない二人。箒も二人が言いたいことが分からず、首を傾げている。シャルは二人が何を言いたいのか分かったのか、顔を赤くした。さっきまでとは打って変わって、へどもどになっている二人に替わり、太陽が何のオブラートにも包まずに訊ねる。

「早い話、一夏とセックスしたのか？　と二人は聞きたいみたいだぞ」

時が止まった。

「お、女の子がそんなこと言っちゃダメェーッ！！」

いち早く正気に戻ったシャルが慌てて太陽の口を塞ぐが、時既に遅し。セシリアとラウラは完全にショートし、箒は羞恥の余りあぅあぅ言っている。

「せせせせ、セックスなんて・・・・お前は何を言っているんだぁっ！！！？？？」

この反応からして、してないと見るのが妥当だろう。太陽は悪戯っぽい笑みを深めからかうように訊ねた。

「何だ、したくないのか？」

「したいに決まってる！！」

ここまで見事な自爆も珍しい。数秒ほどして自分が何を口走ったのか気づき、箒は枕に顔を埋めてしまう。ケラケラと笑いながら、太陽はうりうりと箒を突いた。

「どこまでやったんだ？　一夏とどこまでやったんだ？　Aか？　Bか？　枕に顔埋めとらんとお姉さんに言ってみんしゃい」

Sっ気全開夕暮太陽。太陽が浮かべるサディスティックな笑みに三人は若干引き気味。徐ろにシャルが呟く。

「それにしても、いいなぁ箒。好きな人と両想いになれて」

「確かに」

「私達なんて・・・」

頭の中に意中の相手の顔を思い浮かべた。あの飄々としてて、自由な男の笑顔が浮かぶ。そして、そんな箒と一夏が演じる恋人同士の激甘な場面も想像できないこともあり、三人は揃ってため息を吐いた。その時、

「全員、両手を頭の後ろで組んで伏せろ！　そこのバカ二人は抵抗を止めろ！！」

凄い勢いで扉が開かれ、木刀を握った千冬が部屋に殴り込んできた。箒、セシリア、シャルはいきなりのことにびっくりして行動できないが、太陽とラウラは窓枠にかけていた足を下ろす。

「何だ、織斑教諭じゃござせんかい」

「何の用でしょうか？」

「・・・何で、太陽さんとラウラさんは咄嗟の行動で窓へと向かえるのですか？」

「「今、そこは問題じゃない」」

二人の声が重なった。太陽は夜明と一緒に旅をしている間、宿に泊まっている時にゲリラが奇襲をかけてくることが日常になっていたので、その時の反応で窓へと向かったのだ。勿論、ラウラは軍での訓練からである。まぁ、今は二人の言うとおりそこは問題では無いので、話を進めるとしよう。

「よくもまぁそんなシラが切れるな。貴様等が犯人だと言うことぐらい、すぐに想像はつく」

犯人？　五人は顔を見合わせる。

「心当たりは？」

「無い」

「ありませんわ」

「無いね」

「あるわけ無いだろ」

「だそうです」

「これを見てもそれが言えるか？」

千冬は木刀を握っていない方の手を突き出す。その手には小型集音マイクとＣＣＤカメラ。

「これが、大浴場の脱衣所に仕掛けられていた」

「何ですって！？　・・・でも、この学園には女子しかいないはず。仕掛ける意味が、いや、でもこの時間帯は・・・あぁ」

「太陽、一人で納得してないで説明してくれ」

何やら一人でブツブツと呟いていた太陽だが、何かを悟ったのか納得したように頷いた。太陽と違い何が何だか分かっていない箒達は太陽に説明を求める。

「少し頭を使えば分かるだろうが・・・。この時間帯、大浴場は男子、つまり夜明と一夏が使っている。そして、このマイクとカメラは二人を盗撮するのが目的でつけられた物だ」

「「「「何ぃっ!?」」」」

四人、特に箒が殺気立った。

「そして、織斑教諭はこのマイクとカメラを仕掛けたのが私達だと思っているらしい」

「「「「何だってぇっ!?」」」」

四人の表情がショックで歪む。そんなことお構いなしで、千冬は木刀を五人に突きつけた。

「いい加減にシラを切るのは止めろ見苦しい！　こんな下らない事を思いついて、尚かつ実行できるバカなど貴様等しか思いつかん！！」

納得できるから恐ろしい。作者や読者が納得できても、この五人が納得できるわけもなく。

「ちょっと待ってください！　いくら何でも、その認識はあんまりですわ！」

「そうですよ！　覗きや盗撮なんて真似、絶対にしません！！」

「そのような不埒な真似、する筈がないでしょうが！！」

セシリア、シャル、箒の余りの剣幕に押されて千冬は黙り込む。そこに太陽とラウラも加わる。

「その通りだ！　そもそも、マイクやカメラなんて狡い真似はしない！！」

「フレーム越しの嫁の裸になんの意味があろうか！　この目で直に見に行きます！！」

とてつもなく余計な一言だった。

「やはり貴様等だな！！」

「「何故だぁぁぁぁ！！？？」」

千冬が放った一閃で沈められる二人。更に二人のとばっちりを受け、三人も仲良く木刀で轟沈される羽目に。

「あでで・・・。織斑教諭、思いっ切り叩いてくれちゃって・・・」

千冬に殴られてから三十分後、むくりと太陽が起き上がった。頭に残る鈍痛に呻いている間に、他の四人も呻き声を上げながら起き上がる。

「大丈夫か、お前等？」

「どうにかね・・・って、こうなったの太陽とラウラの所為でしょ・・・」

シャルの呻き声に微かな怒りが混じっているが、怒る気力も無いらしい。ため息を吐き、ベットを支えに立ち上がった。

「酷い・・・濡れ衣だ・・・」

「本当ですわ。何故、私達が盗撮なんて真似をしなければならないのかしら?」

ブツブツと文句を言いながら、それぞれの無事を確かめ合う。

「このまま濡れ衣を着せられたままと言うのも癪だな。・・・どうする、太陽?」

ラウラの問いに、太陽は口端を上げて答える。

「決まってる。ここで泣き寝入りをするほど、私達は大人しい馬じゃない。向こうがそう言っているのなら、本当にしてやろうじゃないか・・・覗きを」

「この階段を降りて廊下を抜けて、更にその先の階段を降りた先が大浴場だ」

「成る程。で、ラウラ。作戦は？」

「一気に駆け抜ける」

「シンプルだ」

階段の踊り場で簡易的なブリーフィングを行う五人。太陽、ラウラ、セシリアはノリノリだ。箒は・・・。

「一夏は私の恋人だ一夏は私の恋人だ一夏は私の恋人だ一夏は私の恋人だ一夏は私の恋人だ一夏は私の恋人だ一夏は私の恋人だ・・・」

なんか凄いヤンデッてる。理由はラウラのこの一言。

『貴様は自分の彼氏がどこの馬の骨とも分からない奴に盗撮されて黙っているのか？』

これが箒の心（いらん部分にも）火をつけた。シャルは四人を止めるつもりのようだが、四人の体内で静かに燃え上がるテンションに負けて参加を余儀なくされている。

「よし、一気に行くぞ」

頷き合い、音を立てないように階段を降りていった。だが、動きは素早く疾風の如く。半分を降りた所で一気に飛び降り、箒、ラウラ、シャルは踊り場で前転して衝撃を殺し、太陽、セシリア、は膝をクッションにして衝撃を受け止めて走った。

「皆さん、止まってください！！」

大浴場へと続く階段が見えた辺りで、一人の教師が五人の前に立ちはだかった。誰かと思えば彼女たちの副担任、山田先生その人である。

「脱衣所にカメラが仕掛けられていると聞いて、見張っていたら・・・まさか本当に覗き犯がいるなんて・・・。み、皆さん、エッチなことはダメなんですよ／／！！」

何やら顔を赤くして言っているが、今の五人（シャルを除くので四人）の耳には届いていない。今、五人（しつこいようだがシャルは除く）の頭にあるのは、目の前に現れた障害物をどう排除するかだけ。

「太陽さんどうします！？　山田先生ですわよ！」

「構わん、ぶちのめせ！！」

「え、えええぇっっ！！？？　何を言ってるんですか夕暮さん！私は一応教師なんですよ！？」

「黙れ！　私達は脱衣所にカメラを仕掛けたという不名誉極まりない称号を取り除くために行動している！　故に、正義は我らにあり

！　なので、私達（せいぎ）の前に立ちはだかるものあれば、見敵必殺（サーチ&デストロイ）、いや、見敵虐殺（サーチ&デス）だ！！」

「了解ですわ！　一撃で仕留めて見せます！！」

「オルコットさん！　あなたも了解じゃ無いでしょう?!」

セシリアは山田先生の叫びを無視して拳を握り締めた。彼女たちには真実の究明という一応の建前がある。なので、ある程度のことは許される・・・様な気がしないでもない。

「あの時の雪辱、今ここで晴らします！！」

最も、今のセシリアは思いっ切り私怨で動いているが・・・。言わずとも分かると思うが、あの時とは鈴音とタッグを組んだときにボコボコにされた時のことだ。詳しくは原作二巻を読んでみよう。

「きゃあああ！！！」

突き出されたセシリアの拳を、山田先生の手が受け止め・・・るのではなく受け流した。驚くセシリアを更に後ろへと流して山田先生は回転しながら受け止めた方とは逆の腕で、セシリアの後頭部に肘鉄を打ち込む。かなり鈍い音が響き、セシリアは音もなく崩れ落ちた。

「「「「・・・え?」」」」

「え?　って・・・きゃあっ!?　お、オルコットさん、大丈夫ですか!?」

呆然として足を止める四人に騒ぐ山田先生。そこにため息を吐きながら歩み寄る人影が一つ。

「何を驚いているバカ共が・・・。山田先生は元代表候補生なんだぞ。これくらい出来て当然だ」

「お、織斑先生！　どどどうしましょう?!　オルコットさんが、オルコットさんが!!」

「一旦落ち着きなさい山田先生。正当防衛だから問題ないはずだ」

「いや、正当ではなくて過剰の間違いじゃ？」

「夕暮、何か言えた義理か貴様？」

底冷えするような声。さながら、地獄から聞こえてくる鬼の唸り声のようだ。千冬という決戦兵器を前に四人は尻込みする。いくら彼女たちが一般の人達から一線を画する力を有しているとは言え、千冬はその彼女たちを越える強さを持っている。このまま闘っても、負けるのは自明の理だ。

（ど、どうするの太陽!?　相手が山田先生一人ならともかく、織斑先生が相手じゃ勝ち目がないよ!）

（シャルの言うとおりだな。ここは一旦下がって作戦を練り直そう）

（セシリアどうするんだ?　まさか見捨てるのか!?）

（そんなゲスなことはしない!　ラウラ!）

（合点！！）

素早くアイコンタクトを交わし、太陽から指示を受けたラウラは懐からビー玉サイズの玉を取り出して床に叩きつけた。刹那、小さな炸裂音と一緒に白い煙が廊下に満ちる。

「くっ！　煙幕か！？」

「ゲホッ！　ゴホッ！　こ、ここまでするんですか！？」

数十秒後、煙幕が晴れ、廊下から太陽達がいなくなったことを知る。勿論、気絶していたセシリアの姿もない。

「逃げられたか」

千冬の舌打ちだけが廊下に響いた。・・・教師がする事じゃねぇよ・・・。

「やはり作戦を立てないと厳しいか・・・。とは言っても、作戦を立てる時間も無し。詰まるところ・・・」

「正面突破しか無い、か」

「ま、手の打ちようはあるさ」

意味深に呟き、太陽は携帯を取り出してメールを打つ。場所は戻って箒と太陽の部屋。理想郷（アガルタ）へと続く階段を守る鬼神（ちふゆ）。この人数では突破は疎か、足止めさえままならない。そこで作戦を立てることになったのだが、如何せん時間も人員も足りない。そこで太陽は何かを思いついたようで、顔に必勝の笑みを浮かべていた。

「手の打ちようって・・・何か良い作戦でもあるの？」

セシリアの手当をしているシャルの問いに、太陽はいんやと首を振る。

「いんや、作戦なんて呼べるほど高尚な物では無いさ。今の私達には時間も人員も足りていない。流石に時間は増やせないが、人員は増やせる」

太陽が携帯を閉じると同時に、部屋の扉が開いた。入ってきたのは一年一組のクラスメイト全員。部屋に入りきったかなんて野暮な質問は無しだ

「太陽、私達に話って何？」

「よく来てくれた、まずは一つ聞くぞ。・・・夜明と一夏の裸に興味は無いか？」

『『『『詳しく聞かせろ』』』』

このクラス、結構好きになれるかもしれない。そんな考えがシャル、箒、ラウラの頭の中、同時に浮かんでくる。

「いまさっき、私達は二人の入浴シーンを覗きに行ったんだが、卑劣にも大浴場の前で待ち伏せていた教師陣の妨害を受けたんだ」

『ふむ、それで？』

卑怯なのはお前達だろ。何て突っ込みは無い。皆の心は既に一つ、夜明と一夏の裸のみに向けられていた。流石は鈍感イケメンの二人。

「セシリアが起きたら、私達は再び大浴場へと向かう。そこでだ、お前等には警備をしている教師陣の排除を頼みたい。報酬はこの学園にたった二人しかいない男子の艶姿。どうだ？」

『『『『乗った！！』』』』

こうして、太陽と愉快な仲間達は数多くの同志を得た。恐るべきは

形振り構わない太陽の根性である。ある意味、太陽を敵に回した時点で教師陣の苦戦は決まっているようなものだ。

「今から隊を五つに分ける。A隊は私、B隊はラウラ、C隊はシャル、D隊は箒、E隊はセシリアに従って欲しい。いいか！　私達の目的は唯一つ、理想郷（アガルタ）への到達だ！　敵がいても立ち止まるな、突き進め！　戦友が倒れたらその死体を踏み越えて戦友を倒した敵を討ち取れ！　私達に後退の文字は無い！　そして不可能も敗北も！！　己が全力を四肢に込め、全速力で駆け抜けるぞ！！」

『『『『オォッーッ！！！！！！！！！！！！！！！』』』』

こうして内容はともかく、一つの目的を持った軍団が生まれた。

お風呂大パニック！？（前編）（後書き）

次回は鈴音も出てくるよ～

お風呂大パニック！？　（後編）

「織斑先生、流石に夕暮さん達ももう現れないんじゃないでしょうか？　私達が彼女たちを撃退したのはついさっきですし」

「奴らを侮ってはいけない。奴らは代表候補生（二名除く）であり、それと同時に一種のバカです。この程度で諦めるようなタマではありませんよ。伊達に、福音・終焉を止めることに貢献した訳ではない」

「そ、そうなんですか？　・・・あ、アレは！？」

大浴場にまで到る廊下を巡回していた千冬と山田先生の視界に移ったもの、それは・・・。

『おおおおっっ！　障害は排除だぁぁぁぁ！！！！』

『邪魔する奴は教師だろうと関係ない！　虐殺だ！！』

『サーチ&デース！！』

寮を崩さんばかりの気迫で走ってくるへんた・・・改めバカ一同。それぞれの目には理想郷（アガルタ）しか無く、目の前にいる千冬と山田先生など障害物としてしか見ていなかった。その証拠に、二人に見つかっても尚、彼女たちの足は止まっていない。

「た、大変です織斑先生！　変態が編隊を組んでやって来ました！」

「本当に何をしてるんだこいつ等は？　・・・いや、何よりも恐ろ

しいのはこいつ等をこうも簡単に仲間にした夕暮か・・・」

何のことはない。唯、一緒に男湯を覗きに行かないか、と誘っただけです。・・・何てこと、口が裂けても言えそうにない。

「懲りるどころか、数を増やして再び向かってくるとは・・・。伊達に夜明が最高の相棒と賞した訳ではないか・・・。山田先生、巡回中の警備部隊に連絡を！　私は定位置につく、一人たりとも通すな！」

「は、はい！！」

こうして、ＩＳ学園教師陣ＶＳ花盛り(ただのバカども)の乙女達の闘いが始まった。・・・実に下らない・・・。

「太陽！　セシリアのE隊が教師陣と接触したぞ！」

「了解！　お前等！　この階の教師陣は一旦E隊に任せて、私達は一気に階段を降りるぞ！！」

「「「「おおおおっっっっ！！！！！」」」」

ラウラの報告を受け、太陽は後ろを振り返りながらついてくる同志達に告げる。返ってきたのは野太い了解の歓声。凄い団結力だ。

「セシリア！　ここは任せたぞ！！」

「了解ですわ！　確実に殲滅してから後を追います！！」

「きょ、教師を前に何という会話をしているんだ貴様等！？」

セシリア率いるE隊と対峙している教師の一人が何かを言うが、二人が聞いてる訳もない。十数人の生徒が教師を囲んでいるという、教育上非常にあれな光景だが、気にしないでおこう。階段を駆け下りる太陽達。背後から聞こえてくる教師の断末魔から考えるに、後方の憂いは無くなったと考えて良いだろう。

「ところで太陽」

「ん、どうした箒？」

廊下を走りながら、太陽は立ち止まることなく聞き返した。箒は何やら話しにくそうにしているが、意を決して話し始める。

「その、彼女たちに一夏の裸を見せなければいけないのだろうか？　協力して貰っているのにこういう事を考えるのもどうかと思うが、・・・私は誰にも一夏のそういう姿を見られたくない」

恋する乙女の独占欲。協力して貰っている手前、報酬として一夏と夜明の艶姿があるのだが、箒は一夏の艶姿を自分だけが見たいらしい。何とも可愛らしい心情だ。箒の吐露を聞いて、太陽はそんなことかと鼻を鳴らす。

「何を言ってるんだ？　私が何の策も用意せずにあいつ等を仲間に引き入れたと思っているのか？」

「「「え？」」」

箒、ラウラ、シャルの疑問の声が重なった。脚を止めず、太陽は口元を悪魔のように歪める。

「あいつ等には、教師達を始末するのを手伝って貰った後、どさくさに紛れて気絶させるつもりだったさ。そうすれば私達の苦労は少なくなる、私達だけが夜明と一夏の艶姿を拝められるなど、まさしく一石二鳥」

「「成る程」」

安心したように息を吐く箒とラウラ。悪魔の如き笑みを浮かべる太

陽を見て、シャルの一言。

「悪魔だ、悪魔がここにいる」

甚だ不本意な評価だろうが、手駒を使えるだけ使って、見捨てるという外道な作戦を取ろうとする太陽には妥当な評価だろう。丁度その時セシリアが一行に合流し、太陽達は一気呵成に大浴場へと向かった。

「小型カメラの次は覗きか・・・。バカだバカだとは思っていたが、モノホンのバカとは恐れ入るぜ」

立ちはだかる人影が一つ。その人影を見て、太陽達は目を丸くする。

「よ、夜明!?　何でここに!?」

両手にオートマチックのハンドガンを握った夜明の出現に一同は戸惑う。ハンドガンに装填されている弾はゴム弾の為、法律上は問題ない・・・と信じたい。夜明はため息を吐きながら、ハンドガンのグリップで頭を掻いた。

「どこぞのバカどもが脱衣所に隠しカメラを仕掛けた挙句、覗きをやろうとしてるって聞いて止めに来たんだよ」

「違いますわよ夜明さん！　私達は盗撮なんてしてませんわ!!」

烈火の如き勢いでセシリアは捲し立てる。だろうな、と夜明。

「んなこたぁ分かってるよ。唯、何で覗きなんかやってんだって話だ」

「決まってるだろ。盗撮の真犯人を見つけて私達にかけられた濡れ衣の払拭、後は犯人をボコボコにするため」

「ほうほう」

「それは序ででで、本当は嫁(おまえ)の艶姿を覗きに来た」

「月光夜明、目標を駆逐する」

「「何故だ!?」」

「いや、そんなことが言える二人の方が何故だだよ!」

夜明にハンドガンの銃口を向けられ驚愕する太陽とラウラにシャルが素早く突っ込む。と、ここで黙っていた箒がポツリと呟いた。

「・・・夜明がここにいると言うことは、今、大浴場を覗きに行っても意味が無いのではないか?」

確かに。真相の追求がついでの目的で、夜明と一夏の艶姿が真の目的である以上、夜明が大浴場にいないのなら意味がない。

「何で風呂に入っていないんだこのボケナス!!」

「今からでも遅くはないから風呂に戻れ!　そして私達に裸を見せろ!!」

太陽とラウラの一方的、と言うか無茶苦茶すぎる要求に夜明は目を剥く。

「巫山戯んな!!　何が悲しくて友達が覗きに来ると分かっている風呂に入ってなきゃいけねぇんだよ!!」

「お前が覗きに来ることが分かっていたら、私は梃子でも動かないぞ」

「何を変態じみたカミングアウトをしてやがる?!」

太陽の大胆すぎるカミングアウトに夜明は目を丸くし、太陽の両隣にいる箒達は顔を赤くした。それでも太陽のカミングアウトは止まることを知らない。

「そして舐めるような視姦、言葉責めがあれば最高だな」

「変態の上にドM!?　俺にはお前が分からねぇよ!!」

「お前が求めるのであれば、亀甲縛りでも受け入れる準備がある」

「止めろ!!　お前の発言はこの世界に破滅しか生まねぇ!!」

うがぁっ!　と頭を抱える夜明にシャルが訊ねた。

「そう言えば夜明、一夏がいないけどどうしたの?」

「あ?　一夏なら、今風呂に入ってるよ」

「ならば箒にだけでも一夏の艶姿を・・・」

「見させると思うか?」

「「「「「っ！！？？」」」」」

ギョッとして振り返る。そこには木刀を片手に握った千冬が立っていた。その足下には先程まで勇敢に戦っていたであろう、クラスメイト達が死に体となって横たわっている。かなりの激戦だったみたいだが、千冬は汗一つかいていない。恐るべし、決戦兵器。

「貴様等、覚悟は出来ているんだろうな？」

木刀を斜めに振り下ろす千冬にハンドガンを構える夜明。前門の虎、後門の狼（意味は違うが）状態だ。世界最強に評されるであろう二人に囲まれ、太陽達は万事休すの状態に。

「こうなれば自棄だ！　夜明を確保して全力で逃亡するぞ！　行き先は誰もいない所が望ましい！」

「ちょっと待て！　そんな所に俺を連れ込んでどうするつもりだ？！」

「決まっている！　私、セシリア、シャル、ラウラで美味しく召し上がってやる！　初体験が５Ｐと言うのも難だが、この際贅沢は言ってられん！！　箒、悪いが今回は私達に譲ってくれ！」

太陽のこの発言にセシリア、シャル、ラウラ、箒の顔が真っ赤に染まった。５Ｐの意味が正確に分かるようで、その赤さは尋常ではない。

「巫山戯るな！！　そんな不純異性交遊、させるわけが無かろうが！！」

「なら止めて見せろ！！　織斑教諭は私が食い止める！　お前等は夜明を捕獲しろ！！」

どこから取り出したのか二本の木刀を構え、太陽は千冬へと打ち掛かっていく。木刀と木刀がぶつかり合うけたたましい音を背に、四人はゆっくりと夜明の方を振り返った。

「さて、少しＯＨＡＮＡＳＩしようか、お前等」

白い魔王、ではなく、銀色の堕天使がそこにいた。

翌日の男子が風呂に入る時間帯。

結局あの後、セシリア達は銀色（よあけ）の堕天使の圧倒的すぎるプレッシャーに耐えきれずに即行で降参する。同志が全員降参してしまったので、太陽も白旗を揚げざるを得なかった。その後、肉体言語を伴う説教をされて、まともに睡眠すら取れずに夜を過ごす羽目に。だがこの五人、未だに諦めていなかった。

「今回こそは成功させるぞ！！」

「「「「「「「「「「「「「「オォッ！！！」」」」」」」」」」」」」

太陽の鼓舞に従って拳を突き上げるラウラ達十一年一組の愉快な仲間達。例の如く、シャルがどうにか止めようとしているが、猫に小判、馬の耳に念仏、豚に真珠である。右から左、とも言えるだろう。

「今回もこれで行くの？　昨日はこのメンバーで手も足も出なかったんだよ」

直接的な言い方は無駄だと悟り、シャルは理論で説得することに。主犯格であるラウラ達が詰まるが、そんなことは予想済みだと太陽は余裕の笑みを浮かべた。

「案ずるな、策は練っている。・・・ほら、来た」

太陽が示すその先には。

「呼ばれたから来たんだけど・・・何の騒ぎ、これ？」

鈴音の姿が。キョトンとしている鈴音に太陽が事情を説明する。

「な！？　あんた達、私を差し置いてそんな魅力てゲフンゲフン！！　・・・じゃなくて、そんなバカなことしてたの！？　・・・太陽、まさかとは思うけど、それに参加させるために私を呼んだの？」

「鈴、ちょっとこっちに」

鈴音の質問には答えず、太陽はちょいちょいと手招きする。疑問符を浮かべながらも、鈴音は呼ばれたとおり太陽の隣りに立った。誰からも見えない所で小声の交渉が始まる。

『これで手を打ってはくれないか？』

『こ、これは！？』

『私達に協力すれば、成功しようが失敗しようがこの写真が手に入る。そして、成功すれば夜明の艶姿が見れるんだ。悪くない交渉だと思うんだが？』

『・・・フィルムごと寄越しなさい』

『交渉成立だ』

ほくほく顔で戻ってくる鈴音。本人は隠してるつもりのようだが、嬉しさの余り歩調が軽くスキップになっている。ふと、鈴音のポケットから写真の端が覗いてることに気付き、箒が小声で訊ねた。

「太陽、鈴に何を渡したんだ？」

「夜明の寝顔写真ｗｉｔｈ胸はだけバージョンだ」

「「「っ！！」」」

「落ち着け。後でやるから」

凄い反応を見せたセシリア、シャル、ラウラを宥め、太陽は午前と午後で掻き集められるだけ掻き集めた戦力、つまり、学年全員に視線を向ける。

「さてさて。これだけの戦力が集まったのは僥倖だが・・・私が言えた台詞でもないだろうが、バカしかいないなこの学園」

確かに、と皆頷く。

「まぁ、ガリ勉よりもバカの方が付き合いやすいしおもしろい・・・。準備はいいか野郎共ぉぉっっ！！」

「「「「「「「「「「「うおおおぉぉぉっっっ！！！」」」」」」」」」」」

寮を揺るがすほどの大音量。予め全員に目的を話しているため、余計な話は無用だ。

「出陣（で）るぞ！！」

今こそ、闘いの時。

「またやってんのか、あのバカども・・・」

「なぁ、夜明。こんな大騒ぎになるくらいなら、脱衣所にカメラが仕掛けられてるなんて言うんじゃ無かったな・・・」

「言うな。俺だって後悔してるんだからさ」

揃ってため息を吐く夜明と一夏。二人が見下ろす先には、ラウラ達

が率いる一年女子全員の姿が。

「よくもまぁ、あんだけ集めたもんだ・・・」

「まったくだ・・・ん?」

廊下の向こうに誰かがいることに気付き、一夏がそっちの方を向く。つられて夜明もその方向を振り向くと、用務員のおじさんがいた。

「あの人か。結構よく見るよな・・・って夜明?」

一夏が視線を来る先、そこには前日、太陽が浮かべていたのと同じような表情を浮かべた夜明がいた。

「・・・もう、何かを言う気力さえ無いが、これだけは言わせろ。お前等は本物のバカだ」

セシリア、鈴音、シャル、ラウラの眼前にいる人物、千冬はため息を吐きながら木刀を構えた。周囲では彼女たちが引き連れてきた同志達が大浴場を警備していた教師達と交戦している。凡に、太陽の姿はない。何故かと言うと、

『ちょいとした策があってね。まぁ、それの下準備みたいな物だ』

と言って、一時戦線を離脱しているのだ。無言で構えるラウラ達を見て再びため息を吐き、千冬は視線をシャルへと向けた。

「デュノア。お前はこのバカどもを止めようとしていたら、いつの間にか無理矢理夕暮達に付き合わされたクチだろ？　事情は考慮してやるから、部屋に戻っておけ」

しかし、シャルは一歩も引かない。それどころか、一歩前に踏み出した。

「はい。最初は太陽達を止めるつもりでした。でも、太陽達を止めるのが無理だと分かって、せめて盗撮の濡れ衣だけでも晴らそうと協力してました。・・・でも、それは唯の建前だったんです」

「・・・デュノア、貴様まさか・・・」

「喩え許されない行為だとしても、自分の気持ちは偽れません。はっきり言います。僕は・・・

純粋に欲望のために夜明の裸が見たい！！」

「やはり夕暮に毒されていたか！！」

頭を抱え込む千冬。そんなことはお構いなしで、シャルは更に言葉

を紡いでいく。

「僕だって健全な思春期の恋する女の子なんです！　好きな人の裸を見たいと思って何が悪いんですか！！」

「悪いとは言っていない！！　唯、それを行動に移すのがいかんと言っているのだ！！」

至極ごもっともな言葉。だが、喩え理路整然とした言葉であったとしても、シャルの心についた炎は消せないだろう。更に一歩踏み出し、指を千冬に突きつけた。

「いかんとか、悪いとかそんなの関係ない！　誰かに後ろ指を指されるのだとしても、僕は自分の気持ちに正直に在ります！！」

シャルの凄まじく何かが違う叫びが廊下に響いたその時、

「よく言った、シャル！！」

よく通る声が廊下に響いた。

「この声・・・。貴様か！？」

「遂にこの時がやって来た！　多くの同志（へんたい）が無駄死にでは無かったことの証明のために、再び立ち上がるために！　己の欲望を満たすために！！　皆、私は帰ってきたぁっ！！！」

太陽の前口上。威力はさながら核のようだ。この前口上で女子達は奮い立ち、教師陣は気勢を削がれる。いち早く、気を立て直した千冬が太陽に指を向けた。

「お前一人が増えた所で、何が出来ると言うんだ!?」

「何時、私が一人だと言った?」

不敵に唇を歪め、太陽は右手を高々と持ち上げた。天を貫く、と言わんばかりに真っ直ぐと天井に向け、誰の耳にも届くように指を鳴らす。

「来てくれ!　私に力を貸してくれる数多の同志よ!!」

その刹那、地を揺るがす地響きが湧き上がってきた。ギョッとして周囲を見ると、右にはＩＳ学園二年女子、左にはＩＳ学園三年女子の姿が・・・。太陽のちょいとした策というのは、こういう事だ。ＩＳ学園全生徒の力を借りる。口にすれば一言で済むが、実行するとなるとそうもいかない。それを、太陽はたった数十分でやり遂げて見せたのだ。

「謀ったな・・・謀ったなぁ!　夕暮!!」

悔しそうに歯ぎしりする千冬に、太陽はこれ以上ないくらいの笑顔で答えてみせる。

「あぁ、謀ったさ!　私の夜明に対する執着心と、女の度量をな!!　全軍、突撃ぃぃっ!!!」

こうして、激闘の末、太陽達は教師陣を下した。そんな彼女たちを大浴場で待っていたのは・・・。

骨と筋だけの身体。

年の割には鍛えられた肉体。

総白髪の頭。

「どうしたのですか皆さん？　雁首揃えて老人の裸を見に来たので？」

学園内の良心こと、用務員の轡木十蔵。

『割にあわねぇーっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

全米が、泣いた。

ちゃんちゃん♪

盗撮　真の黒幕（前書き）

そういや、犯人が誰だったか書いてなかったので書きます。

「うぅっ・・・。まさか大浴場が妖怪が行水している地獄の三丁目になっていたなんて・・・」

「太陽、気持ちは分からなくもないけど、覗いておいてその言い方は無いよ・・・」

太陽を諫めるシャルの声にも元気がない。二人のやや後ろをついてくる他の四人も、それは同じ事だった。意中の相手が艶姿を披露しているると思って踏み込んでみれば、そこにいたのは皆に人気のある用務員のじいさん。いくら人気があるとは言え、じいさんの裸なんざ見たくもない。それを見てしまったのだから、太陽達のダメージは計り知れない。

「今が夏休みで助かったな。もし、この状態で授業を受けるのだとしたら、まともな受け答えなんて出来ないぞ」

ラウラの言うとおり、もしこの状態で授業を受けさせられたら、どうなるか分からない。授業を真面目に受けようと意識を集中しよう物なら、用務員のじいさんの裸体が脳裏に浮かぶことは確実、まともに授業が受けられるのか？　と聞かれれば、百人中百人が無理、と答えるだろう。

「私達なんてまだ良い方だろう。他の皆は夜明と一夏の艶姿を期待してたのに、蓋を開けてみたらあんな・・・」

箒は表情を青ざめながら口元を押さえる。似たように顔を青ざめさせたセシリアが心配そうに背中をさすってやった。この六人だから

この程度で済んでいるのだ。他の人達は、悲惨の一言に尽きる。主犯格である六人が夜明と千冬から肉体言語のみの説教を受けてる間は魂が抜けたかの如く真っ白になっていたが、正気を取り戻すと吐いては気絶し、意識を取り戻してはまた吐いて気絶する、を繰り返す地獄絵図を作り上げていた。

「正直、あいつ等には・・・申し訳ないことしたわね・・・」

鈴音の一言に皆頷く。あの惨状を見れば、誰だってそう思うだろう。覗き犯全員に肉体言語をしようとしていた千冬さえ、その余りの悲惨さに全員を部屋へと戻した。あの状態の人間に追撃をかけるなど、どんな冷酷残忍な人間にも出来ることではない。仮に出来る人間がいたら、そいつは人間じゃない、鬼だ。

「とにかく、今は部屋に戻って寝よう。もう、二、三日は何もしたくなっ！！」

頭を掻いていた太陽の目が細まり、空気を切り裂いて飛来してきた何かを木刀で弾き飛ばした。太陽の一閃で真っ二つになると思われたが、その何かは甲高い音を上げながら軌道を逸れ、壁に突き刺さる。

太陽が木刀を振るうのと同時に構えていた五人がその壁に視線を向けた。

「これは・・・扇子・・・ですわよね？」

セシリアは壁から何か、扇子を抜き取って全員に見せた。折り畳まれた状態の扇子。さして高価な一品という訳でも無さそうな、お土産屋辺りで売ってそうな代物。無言でセシリアから扇子を受け取り、太陽はパン！　と開いてみせる。そこにはこう書かれていた。

『お疲れさま～♪　先生達の注意を引いてくれてありがと♪　君たちの御陰で作業が滞りなく進みました。あなた達の分まで、私が楽しんでおくから、じゃね♪』

「・・・何これ？」

「・・・何だろうね、見当がつかないよ」

首を傾げる五人。だが、太陽一人はその文面が意味することを的確に理解しているようで、肩を震わせている。

「ん？　・・・ど、どうした太陽？」

一番最初に、太陽の異変に気付いたラウラが距離を取りながら訊ねた。他の四人も太陽が放つ空気が尋常では無いことに気付き、ゆっくりと距離をとる。ラウラの問いに答えることなく太陽は扇子を折り畳み、ゆっくりと、粉々になるように扇子を握り潰した。

「・・・あいつの仕業か・・・。あんの女狐ぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！！」

太陽の怒りの叫びが寮内に木霊した。

「いやぁ～♪　太陽は本当にいい働きをしてくれたね。こうして私はおもしろい物が見れた上に、楽して盗撮道具を回収できたんだから。さてさて、それじゃあ夜明の艶姿を拝見させてもらおうかな」

その人物、全体的に余裕を感じさせ、それでいて嫌味な物をまったく感じさせない人物は、脱衣所に仕掛けておいたもう一組のカメラと集音マイクを手に持っていた。カメラとマイクからコードを伸して、テレビに繋げる。

「夜明の艶姿、夜明の艶姿・・・うふふ・・・♪」

察せられると思うが、この女性もまた、夜明（無意識だよ、本当だよ）に墜とされた人の一人だ。名を更識楯無。ＩＳ学園二年生にして生徒会長。そして、太陽並に夜明に惚れ込んでいる人物である。彼女が夜明に惚れた経緯は、後ほど書くことにする。

「それにしても、法律って本当に面倒だよね。私はもう結婚してもいい年齢なのに、夜明がまだ結婚していい年齢になってないし・・・。これ、何て生殺し？」

ぶつぶつと文句を呟きながらコードの接続を終えたらしく、楯無はベットの上に飛び乗った。

「替えの下着もあるから濡れても大丈夫。さって、それじゃあ愉しませてね、夜明♪」

数十秒後、その部屋、更識楯無の一人部屋から嬌声が聞こえてきたとか何とか・・・。

祝、ＰＶ百万突破記念！

夜明「祝！！　百万ＰＶ突破！！」

一同「「「「「「「いぇっ～～～！！！」」」」」」」

ドンドンパフパフ～

夜明「いやぁ～。この小説が始まって約一ヶ月半。よくこんだけの人が見てくれたな」

一夏「ほとんど毎日更新してたからな。地道だが、そういう積み重ねが大切なんだ」

ラウラ「と、言うわけで、この小説を読んでくださっている方々にスペシャルなプレゼントだ」

セシリア「実はこの小説の真主人公なのではないか？　性別を詐称してないか？　主人公よりも漢らしくないか？　三拍子揃ったＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼第一ヒロイン、夕暮太陽さんの艶姿ですわ！！」

鈴音「題名は『通りすがりの堕天使エロメイドだ、覚えておけ！』よ」

箒「文章では些か伝わりにくいだろうが、そこは堪忍して欲しい」

シャル「作者さんには絵の才能が皆無だからね。それじゃあ準備は良い、太陽？」

太陽『一つ聞きたいんだが、私は何をすればいいんだ？　文章だから、ポーズを取ろうにも伝わらないぞ』

夜明「何か適当的な台詞でも言っとけ！　暗幕オープン！！」

暗幕、オープン

太陽「あ～っと。お帰りなさいませだ、ご主人様。飯にするか、風呂にするか、それとも・・・」

太陽、後ろを向いて両肩を剥き出しにする。

太陽「わ・た・し、か？」

夜明「・・・・・・ごはぁっ！！！」

夜明の口から噴水の如く血が噴き出てくる。

一夏「夜明！？　一旦カーット！！」

暫くお待ち下さい

夜明「それでは本題に入ろう。本題はズバリ！　教えて太陽先生だ！！」

一夏「ここでは、大人気ライトノベル『バカとテストと召喚獣』のバカテストを俺たちが解くぞ。コメントをくれるのは勿論・・・」

太陽「パンチの効いた答えを期待するぞ」

スーツ（男物）をばっちりと着こなした太陽。伊達メガネ装備。

シャル「・・・太陽。せめて番外編くらいでは女性らしい格好をしようよ・・・」

太陽「嫌だね。スカートはスースーして落ち着かない。では行くぞ、第一問！」

鈴音「一問目は化学よ！」

バカテスト
化学
第一問
調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。

シャルロット・デュノアの答え
『問題点・・・・・・マグネシウムは炎にかけると酸素と反応するため危険という点。
合金の例・・・・・・ジュラルミン』

太陽のコメント
正解だ。例に挙げていいのは『合金』と限定されているため、鉄ではダメだったのだが、お前はそんなことに引っかからなかったみたいだな。

ラウラ・ボーデヴィッヒの答え
『問題点・・・・・・周囲の環境が密林であるため、鍋を製作するのに必要な鉱物が採掘出来なかったこと』

太陽のコメント
軍人であるお前らしい答えだが、生憎テスト内ではそんな特殊すぎる環境、想定していない。仮に鉱物が採取できたとしても、鍋を製作する前に餓死するぞ。

鳳鈴音の答え
『問題点・・・鍋が中華鍋じゃなかったこと』

太陽のコメント
何時、誰が中華料理を作れと言った？　そして何故、作る料理を中華に限定する？

織斑一夏の答え
『合金の例・・・・・・オリハルコン』

太陽のコメント
出来れば、現実に存在する物で頼む。

月光夜明の答え
『合金の例・・・・・・デスプライト鉱石』

太陽のコメント
あぁ、私も集めるのに苦労したよ。

太陽「・・・これは酷いな」

セシリア「つ、次は国語ですわ！」

バカテスト

国語

第二問

問　以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

シャルロット・デュノアの答え

『（1）弘法も筆の誤り』

『（2）泣きっ面に蜂』

篠ノ之箒の答え

『（1）猿も木から落ちる』

『（2）弱り目に祟り目』

太陽のコメント

正解だ。他にも（1）なら『河童の川流れ』、（2）なら『踏んだり蹴ったり』などがあるな。

セシリア・オルコットの答え
『（1）弘法の川流れ』

太陽のコメント
中々シュールな光景だな。と言うか、よくこんなのが思いついたな。

織斑一夏の答え
『（2）泣きっ面に（姉の）拳』

太陽のコメント
おい、何で答案用紙に涙の跡が・・・あぁ、大体想像が付いた。何も聞かん。

ラウラ・ボーデヴィッヒの答え
『（1）猿を木から叩き落とす』
『（2）泣きっ面を張り飛ばす』

月光夜明の答え
『（1）弘法の筆をへし折る』
『（2）弱り目から金を巻き上げる』

太陽のコメント
確信を込めて言ってやる。お前等は人の皮を被った鬼だ。

太陽「・・・夜明、ラウラ。お前等は真面目に解答する気があるのか？」

箒「次は生物だ！」

バカテスト
生物
第三問
問　以下の問いに答えなさい
『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

シャルロット・デュノアの答え
『1、脂質　2，炭水化物　3，タンパク質　4，ビタミン　5，ミネラル』

太陽のコメント
正解だ。特に女性の場合、栄養は美容に不可欠の要因となるからな。
疎かにしちゃいけないな。

織斑一夏の答え
『1、脂質　2，炭水化物　3，タンパク質　4，ビタミン　5，
ミネラル　6，篠ノ之箒』

篠ノ之箒の答え
『1、脂質　2，炭水化物　3，タンパク質　4，ビタミン　5，
ミネラル　6，織斑一夏』

太陽のコメント
仲が良さそうで何よりだ。幸せになってくれよ。

ラウラ・ボーデヴィッヒの答え
『1，クワの実　2，イチジク　3，野イチゴ　4，ブラックベリー　5，コケモモ』

太陽のコメント
全部サバイバルで手に入れることが想定されている物だな。女の子らしさが欠片も感じられない・・・と言いたい所だが、全部果実なので、辛うじて女の子らしさは保っているな。

月光夜明の答え
『1，信念　2，覚悟　3，魂　4，根性　5，誓い』

太陽のコメント
それを地で行って、餓死しかけたのはどこのバカだ？

太陽「・・・・・・いい加減、頭が痛くなってきた」

夜明「最後は国語だ！！」

バカテスト
国語

第四問
問　以下の言葉を言った人物、また、意味を答えなさい。
『天上天下唯我独尊』

シャルロット・デュノアの答え
『人物、釈迦』
『意味、天の上にも天の下にも人間はそれぞれ一人しかいなく、だから一人一人が尊い』

太陽のコメント
正解だ。この言葉は時々『この世で自分より偉い者はいない』と言う風に誤用されるが、それは間違いだ。・・・まぁ、つい最近まで私もそう言う意味だと思っていたから、とやかくは言えないがな。

夜明、一夏、箒、セシリア、鈴音、ラウラの答え
『人物、織斑千冬』
『意味、誰であれ、私の授業に遅れた者は血祭りだ』

太陽のコメント
あ、あんな所に織斑教諭がって、冗談だ、戻ってこーいっ!!　・・・行ってしまったか・・・。

太陽「評判が良ければ、次回もやる可能性があるぞ」

シャル「お楽しみに～！」

過保護な姉は嫌われる　（前編）（前書き）

太陽のキャラがわからねぇ！！

作者の切実な叫びです。

過保護な姉は嫌われる　（前編）

コンコン、とノックの音が部屋に響いた。

「・・・誰だ？」

「夕暮太陽です」

「入ってくれ」

「失礼します」

音もなく扉が開き、燃えるような赤髪の美少女、夕暮太陽が部屋の中に入ってきた。後ろ手に扉を閉め、両手を後ろに組んで立つその姿は軍人である。

「よく来てくれたな、夕暮・・・」

部屋の中心に置かれている机に座った人物、織斑千冬は両手を顔の前で組み、何やら深刻そうな雰囲気を纏っていた。部屋の中は必要最低限の光しかないため薄暗く、また無音であるため、その千冬が纏う雰囲気をより一層深刻そうなものにしている。

「織斑教諭、何のために私を呼んだんでしょうか？」

千冬が纏う雰囲気に少しだけ気圧されながら、太陽は自分を呼んだわけを訊ねた。夏休みを満喫していた太陽に届いた一通の手紙。それは千冬から送られてきた物で、情報漏れを防ぐために口頭で用件を伝えたいという警戒よう、それも誰にも見られないように指定し

た所まで来いという指令付き。完璧超人である太陽でも、些かの緊張感は拭えないだろう。

「うむ、お前を呼んだのは他でもない・・・。一夏と篠ノ之が付き合っているのは知っているな？」

「は？　え、えぇまぁ」

いきなり妙なことを問われ、太陽は少し間抜けな返答を返してしまったが、すぐに表情を引き締めた。一夏、世界でたった二人しかいないＩＳを扱える男絡みのことであるのなら、どんなことでも想像できるからだ。

「それがどうかしたのですか？　まさかとは思いますが、箒を利用して一夏をどうにかしようなんてクソ共が現れたんですか？」

だとすれば、この黄昏の黒斧（バルディッシュトワイライト）が生かしておかないと太陽は息巻く。

いや、と首を振り、千冬は本題に入った。

「率直に言おう。夕暮、お前には二人が学生として、行き過ぎた交際をしていないかどうか調べてほし、ちょっと待て！　何故本題に入った途端に部屋から出ていく！？」

背後から聞こえる千冬の声を無視し、太陽は部屋から出て扉を閉める。内心、来なけりゃ良かったと後悔しながら帰路に就いた。

「さって、晩飯はカツ丼がいいな・・・」

頭を掻きながら立ち去ろうとすると、閉めたドアをぶち破って部屋の中から鎖鎌の分銅が飛び出してきて、太陽の身体を雁字搦めにす

る。抵抗する暇も鎖を振り解く暇もなく、太陽は部屋の中へと引きずり込まれた。

「何故帰ろうとする？」

「・・・それを本気で聞いてるのだとすれば、あなたは本物のバカですよ、織斑教諭」

深々とため息を吐きつつ、太陽は己が身を縛り付けている鎖を引き千切る。

「過保護な姉は嫌われますよ」

「だから、バレないように調査しろ」

無茶苦茶だ。まともに会話をすること、と言うか、視線を合わせていることさえアホ臭くなり、太陽は肩を竦めながら千冬に背を向ける。

「とにかく、私はそんなことはしませんよ。調べるのなら、どうぞご自分で」

千冬に背を向けたから、太陽は気付かない。千冬の口元が狡猾に歪んだことを。

「そうか。なら」

無視してドアノブを握る。

「二年に進級出来なくなるだろうからそのつもりでいろ」

流石に無視できない。ドアノブを握ったまま太陽は勢い良くずっこけ、木製の扉を頭突きでぶち破った。扉が邪魔なので、思っくそぶつけた額を押えることも出来ず、太陽は痛みに呻きながら扉の蝶番を破壊して、木製の扉から頭だけ突き出すというシュールな格好で千冬に視線のみを向ける。

「せ、生徒を脅迫するなんてどんな神経してんですかあんたは！？」

「脅迫？　何だそれ？　食えるのか？」

開き直りやがった・・・。骨が軋むほどの力で拳を握り締め、太陽は全力で千冬に殺意を送った。普通の人間ならそれだけで呼吸困難などに陥っているだろうが、そこはモンドグロッソ初代総合優勝者（ブリュンヒルデ）、額に一筋の冷や汗を流すに留まる。・・・いや、真に凄いのはブリュンヒルデに冷や汗をかかせる太陽か・・・。暫くの間そんな状態が続き、太陽の殺意で建物が軋み始めた時、諦めたように太陽が折れた。

「はぁ～・・・。分かりました、分かりましたよ。二人がどんだけのバカップルなのか調べてくればいいんでしょったく・・・」

（ま、私も興味あったからな。あの二人のバカップルぶり）

こうして、夕暮太陽による織斑一夏と篠ノ之箒の交際調査がスタートするのである。

「ここがそうなのか？」

「あぁ、ここが篠ノ之神社。箒が転校する前に住んでた所だ」

そう言って、一夏は太陽の後ろから降りた。千冬から二人の交際調査、なんて無茶苦茶な任務を言い渡された太陽は早速二人を観察しようとしたが、如何せん箒の姿が見当たらない。身を潜めながら箒と一夏を探していると、何処かへ出かけようとする一夏を発見、さり気なく色々なことを聞き出したと言うわけだ。

（日本の祭りは初めてだな・・・少し、楽しみだ）

箒の生家である篠ノ之神社で祭りがあり、そこに向かうところだと一夏から聞き出した太陽はケルベロスで篠ノ之神社へと向かったのだ。後ろに一夏を乗せて。

「え～っと、俺はこれから箒に会いに行くけど、お前はどうする？」

「少し周りを見て回ってから行くよ。早いとこ、恋人に面を見せに行ってやれ」

一夏が少し顔を赤らめたのを見て、太陽はからかうような笑みを浮かべながら手で早く行けとジェスチャーする。一夏の姿が境内へと入っていったのを確認して、太陽は一通のメモ帳を懐から取り出して、時計を見ながらスラスラと何かを書き始めた。

「えぇ～・・・『只今午後三時四十分。これより、織斑一夏と篠ノ之箒の交際調査を開始する』・・・何をやっているんだろうな、私は・・・」

一陣の風が太陽の側を通りすぎていく。少しだけ目尻から塩辛い汗を流し、太陽は誰にも見つからないように境内の中にある木々を伝って一夏と箒の姿を探した。僅か数十秒で二人を見つけた太陽は枝の中に身を潜めながら観察を開始する。二人は境内でお守りを販売している店の近くに立っていた。

「い、一夏!?　何故ここに!?」

「いや、夏祭りがあるの思い出して来たんだ。どうせ寮にいたってやること無かったし。それに・・・」

「それに？」

「恋人、だからな。お前は・・・」

「そ、そうか・・・／／／」

顔を赤く染めて俯く二人。その様子を、太陽は何とも言えない感情を胸の中に抱きながら観察している。念のために言っておくが、一夏と箒が付き合い始めてから一ヶ月くらいしか経っていない。

「（あの初々しい反応は仕方ないかもしれないな・・・）『二人の交際は健全その物。心配する要素は皆無』・・・ん？　箒の奴、一夏をどこに連れて行くつもりだ？」

掌サイズのメモ帳にボールペンを走らせながら、太陽は箒が一夏の手を引いて何処かへ行くのを確認した。行き先は・・・人気のない物陰。

「うぉい、まさか・・・」

何やら嫌な予感を感じ、太陽は二人の後を追った。移動した先の木で一番太い枝に両脚を絡ませ、その枝にぶら下がるような体勢で顔を覗かせる。案の定と言うべきか、そこでは。

「ん・・・じゅる・・・れろ・・・」

「はぷ・・・ちゅ・・・いちひゃぁ・・・」

一夏と箒がキスしていた。しかもディープなのを。数秒ほどその光景に見入り、頬を赤くしながら太陽は頭を枝の中に引っ込めてメモ帳にボールペンのペン先を当てた。

「『・・・とは言い難し。人目を憚るだけの理性はあり』・・・こんなの報告してもいいのか？　・・・織斑教諭のことだ。確実に何らかの行動を起こすだろうな。よし、やはり捏造するか」

そう決心し、その場から離れた。今の二人は幸せその物。誰であれ、それをぶっ壊そうとする輩は今の内に牽制しておかなければならない。

「『・・・以上を以て、私、夕暮太陽は織斑一夏、篠ノ之箒の交際を問題ないものと報告する』・・・これでいいだろ」

捏造した情報をメモ帳に纏め、太陽はため息を吐きながらメモ帳とボールペンを懐に仕舞った。

「ま、あのブラコンの織斑教諭でもこれを見れば納得するだろ。さて、私は私で祭りを楽し「太陽もいたのか？」ん？」

名を呼ばれて振り返ると、そこには一夏と箒が立っていた。手を繋ぐ、それも恋人繋ぎ。

「ラブラブだねぇ、お二人さん」

呆れたように呟く太陽。二人は顔を赤くしながら、繋いだ手に軽く力を込める。見てるだけで砂糖が吐けそうな光景だ。お手上げ、と

言わんばかりに太陽が両手を上げると、二人の後ろから四十代後半の女性が現れた。

「箒ちゃん、浴衣の準備が出来ましたよ。・・・あら、そちらのお嬢さんは？」

「紹介します。私の友人の夕暮太陽です。太陽、この人は私の叔母の雪子さんだ」

「初めまして。夕暮太陽です」

「あらあら、ご丁寧にどうも。篠ノ之雪子です」

雪子は柔和な笑みを浮かべつつ頭を下げた。太陽も礼儀正しく頭を下げる。

「・・・（じぃ～）」

「・・・あの、私の顔に何かついてますか？」

まじまじと雪子に顔を見つめられ、太陽は居心地悪そうに身動ぎした。

「ちょっとね・・・。太陽ちゃん。あなた、浴衣に興味とかって無いかしら？」

「はい？」

「そんなこんなあって、私も浴衣を着ることになってしまったのだが・・・・」

「・・・身内がすまない」

ざぱーん、と二人は同時にお湯を頭から被った。あの後、何やかんや、と言うか無理矢理な形で浴衣を着ることを承諾させられた太陽は、こうして箒と一緒に汗を流すために風呂に入っていたりする。最初、断ろうと思っていた太陽だが、厚意を無下にするのも悪いと思い、着ることにしたのだ。

「気にすることはないさ。浴衣というのには興味があったからな、寧ろ感謝してるよ」

カポーン、と湯船に浸かること数分、徐ろに箒が口を開いた。

「な、なぁ太陽。相談したいことがあるんだが・・・」

「一夏絡みか？」

「・・・あぁ」

「・・・それは別に構わないんだがな・・・箒」

「？」

「惚気だったら・・・殺すぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・（ダラダラ）」

風呂に入っているのに冷や汗をかく。ある意味、凄すぎる特技だ。凄味を利かせた太陽の声はそれだけのプレッシャーを放っていた。

「まぁ、冗談だ。話してみろよ」

「う、うむ。実はな・・・一夏がキスをしてくれないんだ」

「よし、惨殺絞殺圧殺断殺刺殺撲殺フルコースを喰らわせてやる・・・歯ぁ食いしばれぇぇぇ！！！」

「ひぃぃぃ！！！！」

太陽が放つ殺気がマジなことを肌で感じ、箒は本気でビビる。数十秒後、どうにか、自力で殺気を収めた太陽は箒に話すよう促した。

「それで、一夏がキスしてくれないなんて戯れ言、どの口がほざけるんだ？　少なくとも、毎日十回はキスしてる仲だろうが、お前と一夏は」

「いや、授業がある日はともかく、休みの日は少なくとも二十回ゲフンゲフン！　・・・話が逸れたな」

太陽にジト目で睨まれ、慌てて箒は話を戻す。

「確かに一夏はキスしてくれるのだが・・・、私からしたことはあっても、一夏からしてくれたことが無いんだ」

「・・・成る程」

それだけで太陽は全てを理解した様子。深々とため息を吐きながら浴槽に両腕をかけ、天井を仰いだ。何で彼氏がいるわけでもないのに、友人の恋愛相談に乗らにゃならんのだ、と思っているのは内緒だ。

「早い話、不安なんだろ」

無言で箒は頷く。自分からキスすることはあっても、彼氏（いちか）からしてくれることはない。もしかして、一夏は嫌々自分とキスしているのではないか？　そんな不安が箒の胸中に生まれていた。

「一夏にとって、私は・・・魅力的では無いのかな・・・」

ポツリと、普通の場所でなら誰にも聞こえない程度の大きさで箒は呟く。だが、ここは風呂場。どんなに小さな呟きであっても、結構響くものだ。箒の呟きを耳にした太陽は再びため息を吐き、ざぱざぱと音を立てながら箒に近づいた。

「箒」

「たいよキャッ！」

突然、太陽の腕が腰に回されて箒を強引に引き寄せた。箒が逃げないよう腰に左腕を回し、太陽は箒の豊満な胸に、自身の負けず劣らずの胸を押しつける。

「た、太陽、何をして」

「少し黙ってろ。・・・ほら、聞こえるだろ、私の鼓動」

「あ、あぁ・・・」

「凄く、速いだろ」

太陽の艶かしい吐息が至近距離で顔にかかり、箒の鼓動まで速くなってきた。訳の分からないまま、箒はコクリと頷く。

「お前の身体は、同性の私が見ても鼓動が速くなるほど魅力的なんだ。もう少し自分に自信を持て。それに・・・」

「ひゃあぁっ！？　た、太陽、お前、何をしてんんっ！！」

太陽はいきなり右手で箒の太股を撫で上げた。驚きの表情を浮かべて箒は抵抗しようとするが、口から漏れそうになる嬌声を押えるのに必死で、それどころではなくなる。箒の声を無視して今度は右手を箒のヒップへと伸し、首筋を甘噛みし始めた。

「た、太陽、止め、いやぁ・・・」

「彼氏がキスしてくれないなんて、可愛いこと言うなよな」

首筋を舐め上げ、耳元でゾクゾクするような声で囁く。

「襲いたく・・・なっちゃうだろ・・・」

途端、箒は背筋を濡れた舌で舐め上げられるような感覚に襲われた。数秒の間ボーっとしていたが、太陽の左腕の拘束が無くなっていることを理解し、箒は音速の速さで太陽から距離を取って浴槽の隅へと逃げ込んだ。

「たたた太陽！　私に、そっちの気は、無いぞ！！」

必死の形相で箒は宣言する。こうでもしなければ、初体験が女同士なんて最低最悪のトラウマが植え付けられると思ったからだろう。太陽はさっきから浮かべている、異常なまでに艶めいた表情で箒を見つめる。そして、

「だろうな。私だって無い」

いつもの表情へと戻して、ニヤッと笑った。

「・・・・・・へ？」

箒の口から間抜けな声が飛び出たのを聞いて、太陽の笑みは満足そうに深まる。

「いやな、お前が余りにも可愛いこと言うもんだから、ついからかいたくなって」

つい、であんな事をされちゃたまったものではない。からかわれていたと理解し、箒は顔を真っ赤に染めながら声にならない声を上げて太陽に抗議した。

「・・・・・・・・・・・（声にならない訴え）」

「ハッハッハッハ！　お前が悪いんだぞ、あんな可愛いこと言うから」

豪快に笑いながら、太陽は湯船の中で立ち上がった。タオルは肩にかけていて、同性から見ても羨ましいと思える身体を惜しげもなく晒け出す。

「安心しろ。お前の身体、心は百人中百人、全員が魅力的だって言うよ。私が保証する」

妙なことを保証され、箒は複雑な気分になった。だが、それと同時にこんな考えも浮かぶ。

（私の身体を見て良いのは、一夏）

「私の身体を見て良いのは、一夏だけ・・・なんて考えてないよな？」

「え、エスパーかお前！？」

「何だ、本当に考えてたのか」

「・・・・・・・・・・／／／」

恥ずかしさの余り、箒は頭まで湯船に浸かる。再び豪快な笑い声を上げながら、太陽は浴室から出ていった。

「さて、雪子さんに浴衣を着させてもらったことだし、祭りを楽しむとする」

「あれ、太陽じゃん。お前も来てたんだ」

太陽の目の前には驚きの表情を浮かべている夜明。今夜、最高の祭りが体験できると、太陽は無意識の内に思っていた。

過保護な姉は嫌われる　（後編）

「へぇ・・・。一夏と箒の交際状況がどんな物か調べてこい。もしやらなかったら留年させる・・・と。・・・何考えてんだ、姐さん？」

太陽からここに来るまでの経緯を話して貰い、夜明は千冬の無茶苦茶に冷や汗を流すのを禁じ得ない。流石の完璧超人でも、学園の単位には勝てないと言うことだろう。

「本当だ。振り回される身にもなって欲しいものだな・・・」

祭りで篠ノ之神社が賑わっている中、二人は騒ぎの中心から少し離れた所に植えてある木の上で話していた。話の内容は、何故ここに来たのか、である。

「お前は何で来たんだ？」

「いやな、部屋の中でゴロゴロしてたらさ、唐突にここの祭りのこと思い出してよ。それでフェンリルかっ飛ばして来た訳」

「ふぅん・・・。まぁ、お前がどうしてここに来ているのか何てのはどうでもいい。夜明」

シュビッ、と太陽は夜明の顔に人差し指を突きつけた。いきなり指差され、首を傾げながらキョトンとしている夜明に満面の笑みで告げる。

「デートしよう」

「・・・デートだぁ？」

素っ頓狂な声を上げる夜明。

「そう。夕暮太陽から、月光夜明にデートのお誘い」

対する太陽は嬉しそう。デートすることを承諾して貰った訳でもないのに、口元には笑みが浮かんでいた。

「デートねぇ・・・」

「・・・別に嫌なら嫌で、断っていいんだぞ」

煮え切らない態度の夜明に太陽は拗ねてみせる。基本、敵対でもしない限り誰に対してでも甘く、優しい夜明がそんな態度を見せられて黙っていられるわけもなく。

「別に構わねぇぞ」

「本当か！？」

パァッ、と太陽の顔が輝く。心底嬉しそうに目を輝かせている太陽に夜明は頷いて見せた。

「デートって言ったって、二人で食べ歩くだけだろ？　そんな気合入れてやることでもないし」

「・・・鈍感もここまで来ると殺意が芽生えてくるな・・・」

何か、恐ろしく物騒なことを言ってる。今なら、夜明に対する殺意と、夜明をここまで鈍感に作った神への殺意で世界を飲み込めるような気がする。そんな確信めいた思いが太陽の胸中に浮かんできた。

「え？　何怒ってんだお前？」

「そんな風に、本気で分からないって表情で尋ねられるお前は凄いと思うよ・・・」

このままでは、木の上で不毛な遣り取りを続けるという最悪な結果で祭りが終わってしまう。そう断言できる気がして、太陽は夜明の手を掴んで木から飛び降りた。こんなアホな会話をしている暇があるのなら、さっさと夜明を連れて祭りを楽しもうという魂胆だろう。

「ちょ！？　あっぶねぇなおい。飛び降りるなら飛び降りるって言ってくれよ」

とか文句を言いつつ、何の危なげもなく着地するのが夜明クオリティ。内心、いい意趣返しが出来たと、太陽は心の中で舌を出す。

「ほら、さっさと行くぞ」

「行くって・・・何に？」

「デートだ！！　何でお前はついさっきした会話さえ覚えてないんだ！？　鳥だって三歩歩いている間は記憶を失わないぞ！！」

木の上から飛び降りるのを一歩、着地するのを一歩と考えれば、夜明は鳥よりも記憶力が劣っていることになる。

「あぁ、悪い悪い。んじゃ、行くか」

「ん♪」

夜明が祭りのざわめきの方へと歩いていく後ろ姿を見て、太陽はさっきまで浮かべていた怒りの表情を引っ込めて夜明の腕を取った。

「太陽」

二人仲良く出店の間を歩いていると、不意に夜明が口を開いた。ん？　と太陽は顔だけを夜明の方に向ける。

「似合ってるなその浴衣。正直、見違えた」

「ん・・・そ、そうか／／／」

いきなり浴衣姿を褒められ、太陽はほおを赤くして照れる。太陽が着ている浴衣は漆黒に色とりどりの揚羽蝶が舞い踊っていた。所々にある金の球と曲線が派手かもしれないが、太陽は見事にそれを着こなしている。

「あぁ。どこの極道の娘かと思ったぜ」

「・・・秘技、瞳にフレンチキス」

太陽の白魚の如き指が夜明の双眸に突き立った。それなりにメルヘンな技名だが、実際にやってることは恐ろしくえげつない。

「ふぉぉっっっ！！？？？　目が、目がぁーっ！！！」

某空に浮かぶ城を目指したどこぞの大佐のように夜明はのたうち回る。まぁ、今回は完全に夜明が悪い。太陽は不機嫌そうに鼻を鳴らし、つかつかと歩いていった。

その後、何やかんやで祭りを楽しむ二人。夜明は右手にリンゴ飴を握り、太陽は左手に綿菓子を持って石畳の道を仲良く歩いていた。手を繋ぐ、それも恋人繋ぎをしているので、端から見ればお似合いのカップルに見えることだろう。ふと、太陽の足が止まった。

「ん、どした太陽？」

「夜明、ついてる」

指で自分の唇の端を叩く。疑問符を浮かべながら、夜明は太陽が叩いている部分と同じ所を触ってみた。指先から僅かな粘着感が感じられる。

「んぉっ！？」

驚きながら指先を見ると、リンゴ飴の飴が少し付いていた。そう言うことかと思いながら、夜明は指先に付いた赤い飴を舐め取る。

「サンキュ」

礼を言いながらまだ付いている飴を指で拭い取ろうとすると、太陽が手首を掴んでそれを止めた。

「私がとってやる」

「あ？」

何するつもりだ？　と問い返す間もなく、太陽は夜明の後頭部に手を回して引き寄せ、夜明の口元に付いた飴を舐め取った。それもたっぷり数秒ほどかけて。周囲が祭りの騒ぎにテンションを上げているから良かった物の、下手をすれば見られていただろ。

「な、何してるんだよお前！？」

かなり顔を赤くしながら夜明は太陽から距離を取る。

「からかっただけさ」

とても十五歳とは思えない色っぽい妖艶な笑みを浮かべながら、太陽は少し赤みが残っている舌で唇を舐めた。からかわれたと分かり、夜明は少し頬を膨らませて太陽を睨む。その夜明の様子に満足したのか、太陽はクスクスと忍び笑いを漏らした。

「あ、一夏と箒だ」

「なっ！？」

さっきのを見られたかと思い、太陽は高速で後ろを振り返る。だが、そこには誰もいない。

「何だ、誰もいないじゃない！？」

夜明に視線を戻そうとした太陽の口元に濡れた感触。その感触が夜明の舌だということを理解するのに数秒を要し、太陽は頬を赤く染めながら夜明を見る。

「仕返し」

それだけ言って、夜明は少年のように笑った。その笑いを見た瞬間、太陽の中で何かが切れる音が響く。・・・何かを押さえつけていた糸が切れる音を。

「夜明、ちょっとこっちに来い」

有無も言わさずに太陽は夜明の手首を掴み、人気のない雑木林に足

早に向かっていった・・・。

「にしても人が多いよな。もう九時も過ぎてるってのに、一向に人が少なくなる様子がないな」

「日本に住んでいる人は、元来お祭り好きなのかもしれないな」

真夜中になっても一向に減らない人。篠ノ之神社の石畳の道は、ちょっとした人の川状態になっていた。その余りの多さに、一夏と箒

は目を丸くしながら歩いている。ふと、何かに気付いたのか箒は歩みを止めた。

「どうした？」

一夏の唇に人差し指を当てて黙らせ、箒は耳を澄ませる。それを見て、一夏も耳を澄ませた。すると、祭りの中心になっている櫓の方向から威勢の良い和太鼓の音が流れてくるのがわかった。

「随分と元気良く叩いてるな」

「行ってみよう」

その和太鼓を叩いてる人のことが気になり、二人は櫓の方へと足を向ける。かなりの人が歩いているので、結構歩きにくい。それでも二人の繋がった手は離れることはない。何とも仲睦まじいことだ。数十秒ほどして、二人は櫓の元に辿り着く。そこで二人が見たのは。

「み、見るな一夏！！」

何故か焦った声を出して、箒は一夏の双眸を片手で塞いだ。理由も分からずいきなり視界を閉ざされて真っ暗闇の世界に放り込まれたが、一夏は甘んじて恋人の手を受け入れる。箒が一夏の目を塞いだ理由、それは。

「・・・・・・・・・・・・」

櫓の一番上に置かれている和太鼓を、一心不乱に叩いている太陽だ。何故か浴衣の上半分を脱いでいて、晒しを巻いた上半身を汗で光らせている。時にバチを手の中で回転させ、時に自身も回転して、緩

急をつけながら太鼓を叩く。その一心不乱な姿に誰もが見とれ、祭り全体が静寂に包まれていた。

「・・・・・・・・・・・・覇っ！！！」

フィニッシュ！！　と言わんばかりにバチを叩きつける。一際大きな音が響き、それから数秒後に拍手が巻き起こる。汗を拭いながら頭を下げ、太陽は櫓の上から飛び降りて箒と一夏の隣りに着地した。

「よ」

「よ、・・・じゃなくて、何をしてるんだ太陽？」

「ん～、憂さ晴らし？」

「憂さ晴らし？　・・・そう言えば、さっき夜明と一緒にいるのが見えたんだけど、夜明はどうしたんだ？」

一夏の問いに苦々しい表情を浮かべ、太陽はある方向を指差す。二人は太陽の指が示した方向に視線を向けた。

「おらぁっ！！　もっと気合入れろお前等ぁ！！！」

「「「「「「「「「うおぉぉぉっっっ！！！」」」」」」」」」

小学校などの運動会で使われるような、チャチな物ではない御輿を担いだ屈強な男衆。その男衆が担いだ御輿の上には、二人がよく知る人物が乗っている。

「何やってんだよ、夜明・・・」

超ノリノリで男衆に発破をかける夜明を見て、一夏は知らず知らずの内に呟いていた。箒は太陽に視線を向けて説明を求める。

「恥ずかしい話だが、色々とあって性欲が押えられなくなってな。人気のない雑木林に夜明を連れ込んで逆レイプしようかと思っていたんだが、生憎そこにはあの御輿担ぎの男達がいてな。一瞬で夜明と意気投合して、あぁなった訳だ」

恥ずかしい話と自分で言っているが、そんなことは欠片も思っていないだろう。その証拠に頬はまったく赤くない。聞いてる箒の方が赤いくらいだ。

「ぎゃ、逆レイプ・・・／／／」

「お前もやってみたらどうだ？　あの唐変木・オブ・唐変木ズの一夏だ。それくらいでもしなきゃ、一線は越えられないぞ」

「なななな、何を言ってるんだお前は!!??　・・・あれ、一夏は？」

太陽は無言で親指をある方向に向ける。その方向に視線を向けると。

「「わっしょい!!　わっしょい!!　わっしょい!!」」

夜明と一緒になって御輿の上に乗る一夏の姿が。恋人（ほうき）そっちのけで滅茶苦茶楽しそうだ。自分のことを放っておいて楽しんでいる彼氏に、箒は小さくため息を漏らす。

「・・・私達の周りにいる男はバカしかいないな」

「だな」

だが、そこがいい。と思考が重なったことを二人は知らない。

その後、予定されていた花火大会も無事終わり、太陽は浴衣を雪子に返してＩＳ学園の寮に帰ろうとしていた。勿論、夜明も一緒である。

「そう言や、一夏はどうするんだ？　もし帰るっていうなら後ろに乗せるけど」

夜明から問われ、一夏はちらっと箒に視線を向ける。

「・・・いや。今日は泊まらせて貰うことになってるから。二人とも、またな」

「おぉ」

「では、また今度会おう。・・・っとその前に」

ゴーグルを掛けようとしていた手を止め、太陽はケルベロスから降りて箒に歩み寄った。首を傾げている箒に懐から取り出した袋を渡す。

「箒、これをやる」

「？　何だこれは？」

「見れば分かる」

言われたとおり、箒は袋の口を開けて中身を確認した。途端、未だかつて無い程に顔が赤くなる。夜だというのに、顔の色の変化が分かるくらいに赤い。あぅあぅと意味不明なことを口走りながら自分と袋の中身を見比べる箒の肩を叩き、太陽は口角を吊り上げながら耳元で囁いた。

「励め。じゃあな」

真っ赤になっている箒の肩をもう一度叩き、疑問符を浮かべている一夏に手を振って太陽は今度こそゴーグルをかけてケルベロスに跨る。

「なぁ、箒に何渡したんだ?」

隣りでフェンリルに跨っている夜明に意味深な笑みを送り、太陽はそのままケルベロスを発進させた。慌てて夜明もその後を追っていく。二人の後ろ姿に手を振り、一夏は箒の側に寄った。

「なぁ箒。顔が真っ赤だけど大丈夫か? 体調でも悪いのか?」

心配そうに訊ねてくれる一夏に首を振って見せ、無言で箒は袋の中が見えるように、口を広げて一夏に見せる。どれどれ、と袋の中を覗き込む一夏。数秒後、その顔は箒同様真っ赤に染まる。

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

何とも言えない、気まずい沈黙が二人の間に流れた。太陽が箒に渡した袋の中にはゴム製の避妊用具、早い話、コンドームが入っていた。それもかなりの数が。そのことが示していることは一つ。二人が顔を真っ赤にするのも無理はない。

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

無言のまま、互いに視線を上げる。ばっちしと目が合い、更に気まずくなったのは言うまでもない。何時間、何日、下手をすれば何ヶ月間にも感じられる時間を経験し、沈黙に耐えきれなくなった箒が口を開いた。

「い、一夏！！」

「は、はい！！」

名を大声で呼ばれ、一夏は反射的に姿勢を正す。一夏に伝えたいことがあるのに、箒の口からは意味不明な言葉しか出てこない。

自分は嫌じゃないと。寧ろ、そう言う関係になりたいと。そう一夏に伝えたいのだが、やはり口から出てくるのは意味不明な言葉だけ。

「い、いいいいい一夏ぁっ！！！！！」

「はいいいいいっっっっ！！！！！！」

涙目になりながらも必死に伝える。

「わ、私は・・・

子供が三人は欲しいぞ！！！！」

もう、色々とぶっ飛び過ぎている。それだけ思考が滅茶苦茶になっていたんだと理解していただきたい。一夏の顔が更に赤くなったことに首を傾げるが、自分がとんでもないことを口走ったのを思い出し、箒は本気で死にたくなった。再び流れる、死にたくなってくる重苦しい、それでいて長ったらしい沈黙。

「・・・箒」

そんな息をするのも億劫な沈黙の中、一夏は大きく深呼吸して箒の肩を掴んだ。ビクッ！　と箒は身体を強張らせ、涙目で一夏を見つめる。

「その・・・寝る時間になったら・・・お前の部屋に行くから」

一夏の言葉に込められた意味を悟り、箒はこれ以上ないくらいに顔を赤くし、身体を震わせた。だがそれでも、小さくだが、はっきりと分かるようにコクリと頷いた。この先のことは皆様の想像にお任せする。

翌日の朝。寮の食堂で、いつもの面子と一緒に朝食を食べていた夜明の携帯に一通のメールが届く。凡に、太陽の『織斑一夏と篠ノ之箒の交際調査』の報告書は、昨日の内に千冬に提出されていた。

「何だ？　・・・一夏からだ」

ポケットから携帯を取り出し、受信ＢＯＸを開いた。

「・・・」

すぅ、と夜明の表情が無になり、太陽達の興味を引く。その視線に気付いていないのか、夜明は何か言うわけでもなく返信のメールを送信した。

「『眼科に行け』・・・と。これでよし」

どんなメールが送られてきたんだ?

「夜明。今のって一夏から?」

鈴音の問いにみそ汁を啜りながら頷く。

「何と書かれてたんですの?」

「何か知らないけど『朝陽が黄色に見える・・・』だとよ。朝一で訳の分からないメールを送ってくるんじゃねぇ、って話だ」

はぁ、とため息を吐く。だが、太陽達はため息を吐くわけでもなく、顔を赤くした。

(((((あの二人、ついにしたのか)))))

予想よりも早かったな、と言うのが太陽以外の感想。

(((((・・・良いなぁ・・・)))))

これは五人共通の感想。

過保護な姉は嫌われる　（後編）　（後書き）

二回目のバカテストは、ユニークアクセスが十万に達したらやります。

夕暮太陽の華麗なる一日

夕暮太陽の華麗なる一日。それは・・・死にかけることから始まる。

「・・・ＺＺＺ・・・ＺＺＺ・・・」

「太陽、起きろ。朝だぞ。太陽、太陽」

太陽のルームメイトである箒が太陽を揺り動かして起こそうとするが、太陽は微かに不機嫌そうな吐息を吐き出しながら更にシーツを身体に強く巻き付けてしまう。現在の時刻は午前八時。まともな人間であるのなら、既に活動を始めているであろう時刻だ。

「やっぱり起きないか・・・。本当にこいつは朝に弱いな」

正攻法で太陽を起こすのを諦め、箒はため息を吐きながらある物を持ってくるために部屋に備えられている簡易キッチンに向かう。数十秒後、箒は戻ってきた。その手には薬缶、それも氷水を満載したのが握られている。箒は薬缶の口を太陽の顔の上に持ち上げ、

「起きろ」

何の躊躇いもなく、氷水を鼻の穴に注ぎ込んだ。

「・・・ＺＺＺ・・・ＺＺＺ・・・ガボボ・・・ガボァッ！？」

数秒後、肺の中に氷水が満ちて漸く太陽は跳ね起きた。激しく咳き込みながら肺の中の氷水を吐き出し、びしょ濡れになった胸元を押える。

「ぜぇ、ぜぇ・・・。お、鬼に頭を掴まれて三途の川に突っ込まれる夢を見たぞ・・・」

「まぁ、水死しかけたからな」

そんな夢を見るのも当然だろう。箒は薬缶をキッチンに戻しながらそう思った。

「箒、お早う」

「・・・お早う、太陽」

朝一で水死しかけたというのに、全くと言って良いほど気にしていない太陽。その余りの度量の大きさに箒は深い感銘を覚える。

「もう朝か・・・。毎朝悪いな、起こしてもらっちゃって」

「気にするな。もう慣れたから」

毎朝、お前を殺しかけることも。そう言う余計なことは心の中だけで呟くのが大人というもの。太陽は両腕を伸しながら大欠伸をして、ベットの上から飛び降りた。基本、彼女はタンクトップに下着というかなり刺激的な格好で寝ている。そして、そのまんまの格好で部屋から出て、一夏と遭遇して箒に殺されかけたのは余談だ。

「さぁて、今日も一日頑張るか！」

「太陽の後をつけるわよ」

「「「「え？」」」」

朝食後、鈴音が唐突に呟いたことに全員は疑問の声を揃える。場所は寮の食堂。太陽は朝食を食べるなり部屋へと戻り、何処かに出かける準備を始めていた。箒が聞いたことによると、散歩序での買い物に行くらしい。そのことを箒から聞いた鈴音は、何を思ったのか太陽の後をつけようと提案してきた。

「つけるって・・・そんな事してどうするつもりなの？」

「考えてもみなさいよ！　あいつが一人で買い物に行くのよ？　イコール、夜明関連の何かを買うと見て間違いないでしょ」

確かに、と一同頷く。それに唯の買い物であるのなら、太陽は彼女たちを買い物に誘うだろう。それをしないということはつまり・・・。

「・・・人に見せられないような物でも買いに行くのか？」

ラウラのその一言に、他の四人の頭にあることが浮かぶ。

夕暮太陽は変態の上にドＭであると。（詳しくは『お風呂大パニック！？（後編）』を読んでみよう）夜明にそんな感じの罵倒をされても、太陽は肯定も否定もしなかった。彼女が変態でドＭなのかは定かではないが、もし、彼女たちの予想通り、太陽が人に言えないような物を買いに行ったのだとしたら・・・。

「「「「夜明（嫁）（さん）が危ない！！」」」」

「いや、どっちかというと、太陽の方が危ないと思うんだが・・・」

顔を真っ赤に染めながら立ち上がる四人に、同じように顔を赤くした箒が突っ込む。そんなこんなあり、五人は太陽の後を尾行することに。凡に、一夏がＩＳ関係で動けないため、箒が四人と一緒に太陽を尾行するのは余談である。

「で、鈴さん。太陽さんをつけようとする本当の目的は何ですの？」

「あいつの弱点を探す為よ！　どっからどう考えても可笑しいでし

ょ！？　全人類が振り向くだろう顔立ち、十五歳とは思えない身体のライン、頭も良くて性格も良し。料理は出来るし腕っ節も強い。そして何よりＩＳ操作も化け物じみた強さ！　こんな完璧超人がいてたまるかってのよ！！　仮にいたとしても、私は認めないわ！絶対に弱点を探しちゃる！！」

・・・浅ましいの一言に尽きる。

五人が太陽の尾行を開始すること早一時間。今日はある気分なのか、

太陽はバイクではなく徒歩で目的地のデパートへと向かっていた。服装は何時も通りのジーパン、シャツ、羽織ではなく、先日、シャルが選んでくれたロックシンガーのような服装。

「あれ、結構気に入ってくれてるみたいだね」

自分が選んだ服を着てくれて、シャルは嬉しそう。その隣りで、セシリアもウンウンと頷いている。

「そうみたいですわね。・・・それにしても鈴さん。この格好、何とかなりませんの？」

太陽の十メートル程後ろに立っている電信柱の影に隠れている五人の格好は、はっきり言って可笑しかった。強面の刑事がつけるようなゴツいサングラスに、両手には広げられた新聞・・・。はっきり言おう、シュール以外の何ものでもない。実際、道を歩いている人達も五人の珍妙な格好に驚いている。

「何とかって、何言ってんのよ。これは日本の伝統的な尾行のための装備なのよ」

道行く人達の視線も何のその、鈴音は胸を張って言う。そうなんですの？　と言うセシリアの問いかけるような視線に箒は首を振る。

「バカなことを言ってるんじゃない。太陽を見失うぞ」

ラウラに叱咤され、五人は慌てて太陽の後を追っていった。五人の美少女がゴツいサングラスをかけ、新聞紙を広げたまま電信柱の影に移動する様はまさにシュール。それ以外の表現が浮かばない。

「どろぼーう！！」

のんびりとした空気が流れていた日常に不釣り合いな叫び声。声のした方向を向くと、鞄を引ったくられた主婦と、鞄を引ったくったであろう青年の走る姿が。青年は太陽と五人が向かっている方向とは逆の方向へと逃げているため、ここからでは追いつけそうにない。

「やれやれ、引ったくりなんてリスクの高いことするくらいなら、最初から真面目に働け、って話だな」

やれやれだぜ・・・、とため息を吐きながら、太陽は足下に転がっていた空き缶を蹴り上げた。そのままオーバーヘッドの要領で足を振り上げ、引ったくりに向けて空き缶を思い切り蹴り飛ばす。空き缶は凄い速さで引ったくりへと向かい、いい音を立てて後頭部に直撃した。当然、引ったくりは昏倒し、空き缶はクルクル回りながら近くにあるゴミ箱へと入る。

「ゴミはゴミ箱に、ってな」

後ろに大きく仰け反った上に、右脚を振り上げている非常に不安定な体勢にも拘わらず、太陽は何の苦もなく体勢を元に戻して歩いていった。その後ろ姿を見てシャルが一言。

「・・・あんな人間に弱点があると思う？」

五人の中で、頷ける者は誰一人としていなかった・・・。

太陽の弱点を見つけるのを早々に諦め、今や鈴音達は純粋な興味で太陽の後をつけていた。端から見れば、完全なストーカー行為である。目的地であるデパートに着いた太陽は、まずデパートの二階にあるＣＤ屋へと向かった。十数分ほどＣＤ屋で時間を潰し、数枚のシングルを買って、次に本屋へと向かう。

「何て言うか・・・普通ね」

「ですわね。太陽さんのことですから、もっとこう、何というか、表向きは雑貨屋だけど、裏では武器屋を営んでいる的な店に行くと思ってましたのに」

「・・・二人は太陽のことを何だと思っているのさ？　それとセシリア、君は小説の読み過ぎ」

いい加減痛くなってきた頭を押え、シャルは太陽が立ち読みしている雑誌の表紙に視線を向ける。十代の女性を対象にしたファッション雑誌・・・と言う訳ではなく、お菓子作りの雑誌。

「・・・こうして見ると、太陽も意外と女の子らしいんだな」

箒の一言に一同頷く。もの凄く失礼なことを言っているが、彼女たちがそう思うのも仕方ない。何故なら太陽はつい最近まで、と言うか、今でも服装に関して興味が全くない。オマケに四メートル級のグリズリーの脊椎を拳一撃でへし折り、海中でシャチと格闘して勝利した人物なのだから。そんなのはまだ可愛い話で、他にもテロリストを三十分で壊滅させた、暴走したＩＳを生身で無力化させるなど、彼女は武勇伝に絶えない。尚、これらは全て夜明の談で、全てがノンフィクションである。

「・・・最強の美少女、夕暮太陽」

ラウラが思いつきでつけた太陽の二つ名は、言い得て妙と言えるだろう。そうしている間に読むべきものを全て読んだのか、太陽は雑誌を元の場所に戻して本屋から出ていった。

「次は何処に行くのかしら？」

「時間帯から考えて、レストランではないでしょうか？」

時計を見ると、十二時を少し過ぎた辺りだった。太陽の後を追う序でに自分達も昼食を食べようと言う話になったが、太陽の歩みが止

まっていることに気付き、五人も歩みを止める。見ると、太陽の周囲を数人の男達が囲んでいた。それも如何にも遊び人という風体の無能そうな連中。太陽をナンパするつもりらしい。

「うわぁ～・・・バカな連中」

鈴音の呟きに他の四人は心底同意する。以前にも太陽を含めた六人で出かけた時、こういう輩が出てきた。その時太陽がとった行動は、軍人であるラウラさえ顔を顰めるものだったのだ。

「ねぇねぇ、かーのっ！！！？？？」

声をかける暇さえ与えず、太陽は馴れ馴れしく話しかけてきた男の股間を蹴り上げた。何の躊躇もなく、それも全力で。過激すぎる太陽の行動に男達は仰天し、予想していた鈴音達も表情を顰める。太陽はそのままでサマーソルトをした。股間を蹴り上げられたままの男は三メートルほど上へと飛ばされ、そのまま重力に従って頭から落ちてきた。ゴッ、と鈍い音が響き、男はそのまま泡を吹いて失神する。

「・・・私の前から失せろカス共。種無しにされたいのなら、話は別だがな」

絶対零度さえも下回る太陽の冷徹な視線。その手の趣味の持ち主なら泣いて喜ぶであろう代物だが、ノーマルな趣味の人間にとっては恐怖以外の何ものでもない。地獄に住む閻魔や鬼だって泣いて逃げ出すだろう。失禁しなかった辺り、その男達はそれなりに度胸がある人達だったようだ。ガン泣きしながら走り去っていく男達の後ろ姿に鼻を鳴らし、太陽は歩いていった。

「・・・太陽ってさ、本当に気に入らない相手には容赦ないよね」

シャルの言うとおり、太陽には人を攻撃することを躊躇うことがほとんど無い。夜明や箒達のような友人ならともかく、基本的に太陽は他人に対して関心がない。だが、それでも優しさを向けるだけの心を持っている。だが、気に入らない者に対しては本当に躊躇いがない。もし、法律とかが無ければ、声をかけてきた瞬間に殺しているだろう。最初っから太陽に友人として見られていたため、箒達は太陽が放つ吹雪にも似た殺気に慣れていなかった。

「・・・太陽さんは一体、どのような過去を歩んできたのでしょう？」

不意にセシリアは呟く。あれだけの殺気を放てるのだから、相当な修羅場を潜り抜けてきたことは容易に分かった。唯一人、太陽から過去のことを聞いていたラウラが何とも言えない表情をした時。

「・・・で、お前等は何時まで私をつけてくるつもりなんだ、鈴音、セシリア、シャル、ラウラ、箒？」

いきなり名を呼ばれてギョッとする。太陽の方を見ると、太陽は視線を五人の方にしっかりと向けていた。逃げ切るのは無理と判断し、五人は素直に隠れていた物陰から出てきた。出てきた五人を見て、太陽は深々とため息を吐く。

「ったく、何をしてるかと思えば・・・。取り敢ず飯にするぞ」

その後、昼食を食べながら鈴音達は太陽に尋問され、全ての経緯を洗いざらいぶちまけた。その際に言い出しっぺである鈴音が太陽からお仕置きされたのは余談である。

「もうこの際だから真っ正面から聞こう。太陽、お前に苦手な物とかってあるのか？」

「別にないぞ」

ラウラの問いに即答する太陽。想像がついていたとは言え、太陽が絵に描いたような完璧超人であることを痛感させられ、一同はため息を吐く。

「ま、こんな所までついてきてご苦労なことだが、私はもう帰るぞ。お前達はどうするんだ？」

別に何か買う必要もないので、皆はそのまま寮に帰ることにした。デパートから出る寸前に、太陽はあることを思い出して、さっきお菓子作りの雑誌を立ち読みした本屋に取って返してある物を購入する。

「太陽、あんた何の本買ったの？」

鈴音に問われ、太陽は何の躊躇もなく答えた。

「エロ本」

五人の歩みが止まり、視線が太陽に向けられた。太陽は微かに頬を染めながら微笑し、本屋で買った物が入れてある袋を軽く持ち上げてみせる。

「来るべき日に備えて勉強しようと思ってな。・・・お前等もどうだ？」

来るべき日。それが何を示すのか一瞬で分かり、一同はコクリと頷いた。その日、太陽と箒の部屋には深夜まで電気がついてたとか・・・。

ズガァァン！！　凄まじい音が寮に響いた。その瞬間に寮の一角が吹っ飛び、二つの人影が飛び出てくる。一つの人影は片手にカップ麺（塩味）、もう片手に割り箸を持ち、もう一つの人影は背中に大量の武装を括りつけ、両手でＩＳ専用の近接ブレード（二メートル超）を振り回していた。

「またか・・・。あの二人も良く飽きないな・・・」

その光景を呆れたように見ている夜明達。その中に太陽はいない。何故なら・・・今さっき吹き飛んだ寮の一角から飛び出した人影の一つこそが太陽なのだから。では、もう一つの人影は、と言う問いにはこう答えが返ってくるだろう。

「夕暮ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

織斑千冬だと。阿修羅とてこんな表情は出来ないだろう、鬼神へと表情を変えて長大なＩＳ専用近接ブレードを嵐の如く振り回している。振り下ろせば地面が割れ、振り上げれば雲を引き裂き、薙ぎ払えば木々がへし折れていった。尚、三つとも比喩表現ではないのであしからず。最も、真の化け物はその生物災害（バイオハザード）と言っても過言ではない千冬の斬撃を、カップ麺（塩味）を片手に避け続ける太陽だろう・・・。

「貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という

奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴は貴様という奴はぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

無呼吸でここまで連呼できる千冬の肺活量は驚嘆に値する。背中に括りつけていた武装の一つ、大型ビームライフルを引き抜き、太陽の頭に狙いを定めて何の躊躇もなく引き金を引いた。ビームライフルの銃口に黒色のエネルギーが収束され、爆発的に膨張しながら太陽へと放たれる。

「バカだなぁ、そんな威力しかない武器が私に当たる訳ないのに。そんなことも分からないのか、今の織斑教諭は？　・・・度を超えた怒りは有害以外の何ものでもないな」

ウンウン、と頷きながら側転で千冬の射撃をかわし、太陽は割り箸で挟んだ麺を啜った。千冬がこうなったのは、この暢気に麺を啜っている赤髪美少女が大きな原因である。先日、祭りから帰ってきた一夏と箒を見て、千冬は女の勘で二人の関係がどうなったのかを一瞬で理解し、怒髪天を衝かせながら太陽を殺しに行ったのだ。

「あの二人は放っておいてもあぁなりましたよ。寧ろ、避妊用具を渡しておいたんだから感謝してくださいよ」

十五歳で出来ちゃった結婚はまずいですからね、と付け加えながら太陽はカップ麺（みそ味）を啜った。その瞬間、千冬が完全にキレて本気で太陽を殺しにかかったのである。その際に発生した被害は・・・ＩＳ学園全体の四割が壊滅したとだけ言っておく。その後、二人は学園のお偉いさん方に二十四時間ほど説教をされ、キチンと反省したように・・・見えたが、二人の闘いが終わることはなかった。それが数日前の話。

「あの二人が組んだら、ＩＳ無しで世界と闘えるんじゃない？」

ＩＳ学園最強の二年生は二人の世界中の戦争が凝縮されたような闘いを見て、そう語ったとか何とか・・・。そして、この二人の殺し合いは最早、ＩＳ学園の名物になっていた。二人が闘うたびに何らかの物理的被害が出るので、原因となった一夏と箒はもの凄く居たたまれない気分である。

「別に気にするこたぁねぇだろ。あの二人が勝手にやってるだけだし」

夜明の言葉にセシリア達は頷いて同意を示す。所で、とセシリア達は顔を赤くして箒を引っ張っていった。

「「「「それで、どうだったの（ですの）（だ）？」」」」

「な、何がだ？」

「初めての時は痛いって聞いてるんだけど・・・」

シャルのその一言で、皆が何を聞きたいのか理解して、箒は顔を赤く染めた。

「ふ、巫山戯るな！！　そそそ、そんな事、言えるわけな・・・」

「「「「・・・（キラキラ）」」」」

もの凄く瞳をキラキラ輝かせながら見てくるもんなので、根負けした箒は顔を真っ赤にしながら語り出すのだ。

「た、確かに最初の方は痛かったが・・・、一夏は優しくしてくれたから・・・」

その時の事を思い出したのか、箒は顔を赤くしながらも嬉しそうに表情を緩めた。・・・序でに変なスイッチも入ってしまったらしく、独白は止まることを知らなくなる。

「だが、痛みが引いてきたと分かった瞬間から一夏は・・・。ダメだ一夏！　そんなに激しくしないで、そんなにされたら、私、私・・・」

「何を騒いでるんだあいつ等は？」

少し離れた場所、ガールズトークで盛り上がる箒達に視線を向けながら夜明は首を傾げる。小声で話しているので、会話の内容は拾えていない。

「・・・夜明」

「何だよ？」

不意に一夏が声をかけてきたので、夜明は視線を一夏に向けた。一夏は視線を夜明に向けることなく、ＩＳ顔負けの戦闘を繰り広げている太陽と千冬を見ている。

「あの二人ってさ・・・本当に人間なんだよな？」

「疑わしい部分が多々あるが、人間だろうよ。・・・多分、きっと、メイビー・・・自信なくなってきた・・・」

少なくとも、ＩＳ専用の近接ブレードをＩＳの補助無しで軽々と振り回したり、その木刀のように振り回される近接ブレードを割り箸で受け流す者が同じ種族であるなどと、二人には到底思えなかった。自分達が人外であることを主張するかの如く、太陽と千冬は割り箸と近接ブレードをぶつけ合ってクレーターを生み出すのだ。

「いい加減しつこいぞと！！」

「貴様だけは・・・貴様だけはぁぁぁぁ！！！！」

「話が通じてないな・・・」

光速で急所を的確に狙ってくる近接ブレードの切っ先を割り箸で受け流し、太陽は思いっ切り千冬の腹を蹴り飛ばした。だが、千冬は表情を歪めこそしたが、勢いを一切緩めることなく太陽へと突っ込む。それには流石の太陽も意表を突かれ、張り倒された。

「貴様だけは・・・殺す！！！」

片足で太陽の胸を押さえつけ、千冬は近接ブレードを握った右手を大きく振り上げ、全身全霊で振り下ろした。刀身が顔に触れる寸前、太陽はギリギリの所で近接ブレードを受け止める。・・・やっぱり割り箸で。

「本気で殺す気ですか！？」

「当たり前の事を聞くな！！！」

千冬が本気だと理解して冷や汗を流す太陽。ごく当たり前に返事を返しながら、千冬はビームライフルの銃口を向けた。このビームライフルを零距離でぶっ放せば自分も無事では済まないのに、千冬はそんなこと眼中にない様子。引き金が引かれ、銃口にエネルギーが収束される。エネルギーが放たれる刹那、太陽は右足を振り上げてビームライフルを蹴り上げた。天空に向けて漆黒の光の柱が現れる。

「なっ！？」

「いい加減に」

ブレイクダンスの様に身体を回転させて、押さえ付けていた千冬の足を弾き飛ばし、

「弟離れしろ、ブラコン教師！！！！」

両手をバネにして垂直に跳び上がり、揃えた両足で千冬の顎を蹴り抜いた。数メートル上に上がったところでエルボードロップの体勢に移行する。

「がはぁ・・・。忘れるなよ夕暮。例え私を倒したとしても、第二、第三の私が貴様を」

「どこの魔王だあんたは！！！」

最後まで言い終わらせず、太陽は落下のエネルギーをたっぷりと乗せた肘鉄を千冬の喉に打ち込んだ。数秒ほど肘で千冬の喉を押さえ付け、太陽は千冬が気絶した事を確認してからゆっくりと立ち上がる。

「まったく、毎日毎日勘弁して貰いたいものだな。・・・まぁ、原因である私がとやかく言える筋合いはないがな」

首を回して関節をゴキゴキ鳴らし、太陽は部屋へと戻っていった。

これが今のところのＩＳ学園の日常。

八月も中旬、夏休みも折り返し地点へと到達したその日、それはやって来た。

「月光君、お手紙が来てますよ」

「手紙？　・・・俺にですか？」

はい、と頷きながら寮母である山田先生は、部屋で太陽達とだべっていた夜明に手紙を手渡す。基本、外部からの干渉を認めていないＩＳ学園は送られてきた物をチェックしている。特に、生徒に対して送られてきた物には細心の注意を払ってチェックをしているのだ。そして、寮母である山田先生を介して夜明の元に来た、と言う訳である。

「誰からだ？」

太陽の問いに首を傾げつつ、夜明は手紙の封を切った。

「・・・銀河兄貴からだ」

「ほぉ、あの人からか。それで、何て？」

「明日辺りＩＳ学園に来るから、それを知らせるための手紙だ」

読むべきものは全て呼んだのか、夜明は手紙をクシャクシャに丸めて屑籠に放り込む。

「兄貴？　夜明、あんたにお兄さんなんていたの？」

ベットに腰を下ろした夜明に鈴音が問う。

「あれ、そういや言ってなかったっけか？　一夏は」

「知ってるよ。面識もあるし」

そうか、と頷きながら夜明は頭を掻きつつ話し始めた。

「元々、俺はある孤児院に預けられてたんだよ。んで、五歳の時に孤児院から飛び出して、餓死しかけてる所を姐さんに見つけて貰って、そのまま織斑家に住み着いた、って訳だ。銀河ってのは、その孤児院に預けられてる二番目の年長で、俺の義理の兄貴」

夜明の説明にほぉ～、と頷く一同。と、ここでシャルの頭に一つの

疑問点が浮かんでくる。

「でもさ、夜明は五歳の時にその孤児院を出ていって、そのまま帰ってないんだよね？　だったら何で、今更そこから手紙が来るの？」

「別に帰らなかったからって、そのまま何の交流も無かったって訳じゃねぇさ。小学校に行ってる間は何度か顔出したし、旅に出てる時も偶に戻ってたからな」

それに、と付け加える。

「銀河兄貴と姐さんは高校時代、同じ高校同じ教室だったんだ。・・・こっからは内緒の話だがな」

ぐっと声の調子を低くし、皆に寄ってくるよう手でジェスチャーした。一夏と太陽を覗く全員が夜明に顔を近づける。

「この銀河兄貴。姐さんの初恋の相手だ」

「「「「「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！」」」」」

数秒の静寂の後、寮内どころかＩＳ学園の敷地内に響くほどの絶叫を上げる太陽を除いた女性陣。バッ！　と一夏の方を見ると、一夏は苦笑いを浮かべていた。

「ははは・・・、驚くのも無理ないよな。でも、本当の話だぜ。千冬姉は高二くらいの時に銀河さんに告白して、それで振られてる」

「・・・マジ？　千冬さんの方から告白したの？」

鈴音の問いに頷く夜明と一夏。鈴音達は互いに顔を見合わせた。あの織斑千冬に初恋の相手がいる。普段の千冬を知っている彼女たちにとって、それは青天の霹靂以外の何物でもなかった。

「あぁ、言っとくけど、このことをネタに姐さんをからかうなよ。マジでガン泣きするから」

「銀河さんに振られたあの日、千冬姉に付き合わされた自棄酒はきつかったな・・・」

その日のことを思い出したのか、二人は表情を青ざめながら遠い目をする。千冬が高校の頃と言えば、二人は小学生。その頃に自棄酒に付き合わされるのはきついだろう。

「ま、まぁとにかく、明日、銀河さんがここに来るんだ。それなりに気合を入れておいたほうが良いぞ。あの人は何というか・・・凄い人だからな」

太陽の呟き。それがまた、彼女たちの不安を煽るのだった。

「一つ聞きたいのだが太陽。その銀河と言う奴はどんな人物なんだ？」

翌日、ＩＳ学園へとやって来た銀河が待っている部屋へと向かう中、夜明についてきたラウラが太陽に訊ねた。自分達も興味があるのか、箒達も興味津々で太陽に視線を向けている。

「そうだな。まず、生身の強さでは私や夜明、織斑教諭を凌駕している」

「本当に人間なんですの、その銀河というお方は！？」

セシリアが悲鳴混じりの声を上げた。当然、夜明の耳にも届くわけで、夜明は足を止めて苦笑が混ざった笑顔を浮かべてセシリアの方を振り返る。

「セシリー、そう言いたくなる気持ちも分かるけど、せめてもう少しオブラートに包んだ言い方してくれないか？」

「ご、ごめんなさい・・・」

気にするな、と手をヒラヒラと振って夜明は歩いていくが、セシリアはシュンとなってしまう。まぁ、セシリアが言っていなければ自分達が同じようなことを言っていただろうな、と等達は思う。夜明もそうだが、太陽と千冬の身体能力、並びに戦闘能力は人の領域を完全に逸脱している。その二人を凌駕すると言うのだから、これから会う銀河と言う人物は、確実に化け物であろう事が容易に予想できた。

「・・・ねぇ太陽。銀河さんって見た目はどんな人なの？」

鈴音の問いに太陽は顎に人差し指を当てて首を傾げる。凡に、鈴音達の脳内に浮かんでいるイメージは共通して、筋骨隆々の二メートルを超えている狂戦士（バーサーカー）だ。

「どんな人と言われてもな・・・。見た方が早いだろ。ほら、もうそこだし」

太陽の言うとおり、銀河なる人物が待っている部屋はもう目の前だった。更に信じられないことに、その部屋の前に立っている夜明と一夏が緊張した面持ちをしている。一夏はとかく、夜明を緊張させるとは如何なる人物か？　自然と、彼女たちの姿勢も正された。

「失礼します」

数回扉をノックしてから、夜明は扉を開いて部屋の中へと入った。一旦扉の前で止まり、夜明は姿勢を正して一礼する。

「お久し振りです、銀河兄上」

夜明が頭を下げたので、後ろにいる一行は夜明が頭を下げている人物を見ることが出来た。その部屋にあるソファに座って待っていたのは・・・。

「・・・夜明か、久しいな」

長身痩躯の男性。身長は夜明よりも少し大きい。中性的な顔立ちをしていて、頭の上側と右側に管のような髪飾りをつけている。何というか、身体全体から高潔を連想させる空気を放っていて、何時の間にか一行は姿勢を正していた。何よりも驚くべきは、夜明が敬語で話していることだ。しかも、動作から最大限の礼儀を払っていることが窺える。

「臨海学校の時に大怪我を負ったそうだが、もう大丈夫なのか？」

「はい、問題在りません」

「ならば良し。・・・その後ろの者達は何だ？　太陽と一夏は久しいな」

「お久し振りです、銀河さん」

「あ、はい。久し振りです銀河さん」

太陽と一夏が頭を下げたのを皮切りに、箒達も自己紹介を始めた。

「篠ノ之箒です」

「セシリア・オルコットですわ」

「鳳鈴音です」

「シャルロット・デュノアです」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。・・・です」

ラウラのみ、少ししてから慌てて言い直す。銀河は立ち上がり、箒達に頭を下げた。

「夜明（これ）の義兄である月光銀河だ。愚弟がいつも世話になっている」

銀河と向かい合う形で夜明は椅子に座り、それ以外の者は夜明の後ろで立っている。

「それで銀河兄上、用件というのは何でしょうか？」

「その件だが、・・・それよりも夜明、彼女たちとはどういう関係だ？」

「？　唯の友人ですが」

何でそんな事を聞かれたのか分からず、夜明は疑問顔で首を傾げながら答えた。夜明の返答を聞いて、銀河は深々とため息を吐きながら再び太陽達に頭を下げる。

「・・・愚弟が本当に済まない」

「「「「「えぇ、まったくです」」」」」

太陽、セシリア、鈴音、シャル、ラウラの声が重なり、夜明はキョトンとした表情を作った。その様を、一夏と箒は乾いた笑いを浮かべて見ていた。

「話はそれたが・・・夜明、お前は実家に帰ってくるつもりはないのか？　夜雲兄上と、夜桜姉上がお前に会いたがっていてな」

「あぁ・・・あの二人ですか」

何か共通の頭痛の種があるのか、二人は揃って深いため息を吐く。

「それに、皆もお前に会いたいと言っていたぞ。夏休みを利用して、一度帰ってきてみたらどうだ」

「そうですね・・・。分かりました、一度帰ります」

何やらトントン拍子で話が纏まっていた。その後、二人は太陽達を放って話を進めた。

「では、二日後の午後に車を回す」

「分かりました、お待ちしています」

「うむ。・・・時に夜明」

「はい、何でしょう？」

「好い人は出来たか？」

ガァン！　と夜明は勢い良く額を机にぶつけた。中にガラスが嵌め込まれているタイプなので、いい感じに罅が蜘蛛の巣のように出来上がる。太陽達が心配する中、夜明は額を押えながら涙目で銀河を睨んだ。

「てて・・・。いきなりそう言う訳の分からない事を言うのは止めてくれって昔から言ってるだろ、銀河兄貴！！　・・・あ」

とここで、夜明は自分が敬語でなかったことに気付く。それに対して銀河は満足そうに笑い、腰を上げた。

「それで良い。お前は弟で私は兄。兄弟間において、敬語は無用だ。・・・では、私はこれで失礼する」

銀河は太陽達に頭を下げ、部屋から出ていった。暫くの間、痛そうに額を押えながら銀河が出ていった扉を見て、夜明は徐ろに太陽達の方へと向いた。

「二日後に、俺は実家に帰るけど、お前等も来るか？」

勿論、答えなど決まっている。

～オマケ～

「夜明の奴、また女性を墜としたのか。・・・本人に自覚がないのは分かるが、あれは余りにも無節操すぎるな・・・ん」

ゲートに向かう銀河が見つけたのは、両手にＩＳ専用近接ブレードを持ち、背中に数多の殲滅兵器を括りつけた千冬だった。

「夕暮ぇ、どこに行ったぁ？　今なら膾切りですましてや「久しいな、千冬」ん？　・・・ぎ、銀河ぁ！？」

突然、初恋の相手が目の前に現れ、千冬は自分が何をしているのかも忘れて素っ頓狂な声を上げる。余談、とは言わないが、千冬の初恋は現在進行形で継続している。

「随分と物々しい格好をしているが・・・戦争でもしに行くのか？」

銀河に問われて千冬は自分がどんな格好、と言うか武装をしているかを思い出し、慌てて両手の近接ブレードを背中に隠した。

「いや、その、これは、だな・・・学園の警備だ！」

顔を真っ赤に染めながらの血冬の言い分。苦しすぎる言い訳だ。だがそこは夜明の義兄。

「成る程。それ程の武装をせねば相手取れぬ者達が襲撃をかけてくるのか・・・。大変だな、お前も」

あっさり信じちゃいます。

「それにしても・・・お前は相も変わらず美しいな」

「う、うつく・・・」

プシュ～、と顔を真っ赤に染めて煙を噴き出す千冬。そんな千冬を、銀河は限りなく無表情に近いキョトンとした表情で見ていた。

「・・・銀河さんも夜明のことを言えないよな・・・」

その光景を物陰から見ていた太陽は、そう呟かずにはいられなかった。

義兄の来訪、夜明の帰郷（後書き）

オリジナルキャラ

月光銀河（げっこうぎんが）

年齢、千冬と同じ

容姿、ＢＬＥＡＣＨの朽木白哉

性格、常に冷静沈着で規則を重んじる傾向が強い。だが、情に篤い面もある。

生い立ち、夜明同様、月光家に拾われてそのまま月光家の子となる。中学、高校と通して千冬と同じクラスだった。

千冬に告白されているが、振っている。その際の言葉がこれだ。

「・・・これは何の罰ゲームだ？」

これからも分かるとおり、夜明並みの鈍感（本人に自覚無し）

祝、ユニークアクセス十万突破記念！　教えて太陽先生Ｐａｒｔ２！

夜明「祝！！　ユニークアクセス十万突破！！」

一同「「「「「「「「いぇっ～～～！！！」」」」」」」」

ドンドンパフパフ～

夜明「唯の思いつきで始めたというのに意外と好評だった俺たちによるバカテスト！　今回はその第二弾だ！」

一夏「コメントをくれるのは勿論この人！　変態の上にどＭ！？ヒロインじゃなくてヒーロー！？　我らが女傑、夕暮太陽だ！！」

太陽「まともな解答をしてくれることを願うが・・・まぁ、無理だろうな」

太陽、スーツ（女物）をばっちり着こなす。手には教鞭。

シャル「あれ？　今回は女物の格好だね」

太陽「気分転換という奴さ。・・・夜明、教師と生徒の禁断の関係にならないか？」

セシリア・鈴音・ラウラ「何を言ってるんだお前はー！！！」

太陽、教鞭を一振りして三人の跳び蹴りを受け流す。

太陽「それでは、これより問題を始める」

箒「今回の問題は英語、物理、保健体育、国語、ＩＳの武装問題の五本立てだ！」

シャル「張り切って行っちゃいましょう！！」

バカテスト
英語
第一問
問　以下の英文を訳しなさい。
『Although John tried to take the airplane for Japan with his wife, s handmade lunch, he noticed that he forgot the passport on the way.』

シャルロット・デュノア、セシリア・オルコットの答え
『ジョンは妻の手作りの弁当を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしたが、途中でパスポートを忘れていることに気がついた』

太陽のコメント
正解だ。特筆して語ることは無いな。

ラウラ・ボーデヴィッヒの答え
『ジョンは妻の手作りの無反動砲を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしたが、途中で自製のテロリスト殲滅用重機関銃を忘れている

ことに気がついた』

太陽のコメント
まず第一に空港の金属探知器に引っかかるし、飛行機がテロリストに占拠されることを前提にするのは止めろ。テロリスト殲滅云々以前に、お前がテロリストだ。

月光夜明の答え
『ジャンは妻の手作りのパスポートを持って日本行きの飛行機に乗ろうとしたが、何故か途中で警察に捕まり、両手が後ろに回った』

太陽のコメント
本気で何故かと思っているのか？　手作りパスポートの意味を少し考えろ。・・・と言うか、ジャンじゃなくてジョンだ。

太陽「何でこう、お前等は・・・」

鈴音「次は物理よ！」

バカテスト
物理
第二問
問　以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であって（　）である』

シャルロット・デュノアの答え
『粒子』

太陽のコメント
正解だ。他にも光は様々な性質を持っているが、それはまた次回と言うことで。

ラウラ・ボーデヴィッヒの答え
『レンズで集束させることで爆発的な熱量を生み出して敵軍を殲滅する兵器』

太陽のコメント
生命に恩恵を与えてくれる太陽光をなんて用途で使っているんだ。

月光夜明の答え
『虫眼鏡で直接見ると危険』

太陽のコメント
ガキかお前は。

太陽「・・・頭が痛い」

セシリア「次は保健体育ですわ！」

バカテスト
保健体育
第三問
問　以下の問いに答えなさい。
『女性は（　）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

シャルロット・デュノアの答え
『初潮』

太陽のコメント
正解だ。

織斑一夏・篠ノ之箒の答え
『初体験』

太陽のコメント
止めろ生々しい！　唯でさえセシリア達が羨ましがってるってのに！

セシリア・オルコット、鳳鈴音の答え
『初恋』

太陽のコメント
個人的には正解としてやりたいが、残念ながら間違いだ。

ラウラ・ボーデヴィッヒの答え
『初めて銃を撃った時』

太陽のコメント
・・・お前が言うと異常なまでに説得力があるな・・・。

太陽「・・・後二問だ。頑張れ私」

ラウラ「次は国語だ！」

バカテスト
国語
第四問
問　次に示す四字熟語の漢字を答え、適切な例文を作りなさい。
『ゆうきりんりん』

シャルロット・デュノアの答え
『漢字【勇気凛々】』
例文【彼は勇気凛々、困難へと立ち向かっていった】』

太陽のコメント
正解だ。願わくば、より多くの人達にこういう生き方をして貰いたいものだな。

鳳鈴音の答え
『漢字【勇気鈴々】』

太陽のコメント

随分と可愛らしいな。

セシリア・オルコットの答え

『例文【彼女は勇気鈴々と歌いながら歩いていった】』

太陽のコメント

彼女の歩む道に何があるのか・・・、非常に気になるな。

太陽「次で・・・最後だ・・・」

夜明「最後はＩＳの武装問題だ！」

バカテスト

ＩＳ武装

第五問
問　以下の武装の正式名称を答え、効果を説明しなさい。

シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒの答え。
『正式名称【慣性停止結界（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）】』
効果【ＰＩＣを発展させた物で、対象を任意で停止させることが出来る】』

太陽のコメント
正解だ。流石のラウラも、今回ばかりは真面目に答えてくれたか。

鳳鈴音の答え
『正式名称【Ｐ＝プリン。Ｉ＝一杯。Ｃ＝チョー嬉しい】』

太陽のコメント
・・・後で作ってやるからもう黙ってろ。

セシリア・オルコットの答え
『効果【対象を大量のプリンで埋没させ、幸せの余り動けなくする】』

太陽のコメント
どちらかと言うと、体中がベタベタして気持ち悪いと思うんだが・・・。

月光夜明の答え
『正式名称【Ｐ＝プレッシャーを。Ｉ＝いい感じに放つ太陽が。Ｃ＝チョー怖い】』

太陽のコメント

・・・歯ぁ食いしばれぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！！

太陽「・・・この企画もう止めないか？」

夜明「今回が不評だったらな。じゃ、またなぁ～！！」

いざ、実家へ

「そいじゃお前等ぁ、忘れ物は無いか？」

「「「「「「「は～い」」」」」」」

ゲート前に集合した主人公ズ。夜明の問いに元気良く返事を返す一同。結局、専用機持ちが夜明の実家に遊びに来ることになったのだ。結構な大人数だが、夜明は別に嫌な表情は見せなかった。

「それで夜明、夜明の実家にはどうやっていくの？」

「銀河兄貴は車回してくれるって言ってたから、もうそろそろ来ると思うんだが・・・」

シャルの問いに頭を掻きながら夜明は応える。夏休み、友人の家に泊まりに行くと言うこともあり、一行は思い思いの私服を着ていた。全員がレベルの高い美少女と言うこともあって、どこぞのアイドルユニットにも見える。

「くぁ・・・」

だと言うのに、この男は暢気に欠伸なんてしている。夜明の実家に行くので、それなりに気合の入った服を着ている彼女たちはご愁傷様。

「箒。似合ってるぞ、その服」

「あ、ありがとう・・・」

あの唐変木・オブ・唐変木ズの一夏でさえこうだと言うのに。恋する少女達は恨めしそうにため息を吐きながら夜明を睨んだ。特にラウラは初めて私服姿を披露すると言うこともあって、彼女たちの中で一番ジト～っとした目で夜明を睨んでいる。その視線に気付いたのか、夜明は頭を掻きながらラウラの方を向く。

「何だよ？　てかラウラ。お前、私服なんか持ってたのか？」

「い、以前、出かけた時、シャルロットに選んでもらってな。・・・変か？」

ラウラは不安そうに上目遣いで夜明に訊ねた。今まで私服を着ていなかったのは、夜明に披露する機会が中々無かったからだ。その披露したかった相手に『似合ってない』なんて言われたら、トラウマどころの騒ぎではない。確実にみっともなく泣き出すだろうし、最悪死ぬかもしれない。・・・ウサギは寂しいと死んでしまうのだから。

「変？　どこがだ？　似合ってて可愛いと思うぞ」

ポフポフと、夜明はラウラの頭を撫でる。

「ほ、本当か!？　・・・！　ゲフンゲフン！　な、なら、好きなだけ撫でるといい」

夜明に褒められ、もの凄く嬉しそうな表情を浮かべるラウラ。数秒ほどして自分がどれだけ顔を輝かせているかに気付き、数回咳払いをして表情を元に戻そうと努力する。だが、どれだけ表情を元に戻そうとしても、嬉しすぎてすぐに表情が緩んでしまう。表情を緩み

に緩ませながら仁王立ちするラウラを、夜明は不思議そうな表情を浮かべながら撫で続けた。

「ほう。褒めるのはラウラだけか？　だとしたら妬けるな」

恐らくセシリア達が確実に思っているであろう事を言いながら、太陽は夜明の首に両腕を回す。太陽がこういうスキンシップをしてくるのは今日に限った事ではないので、夜明は面倒くさそうにため息を吐きながら太陽を押し返した。

「何を訳の分からない事を言ってやがる。何で聞かれてもないのに、似合ってるだの可愛いだの言わなきゃいけねぇんだよ。お前等が可愛いのは分かり切ってることだろうが」

こういう事を何の恥ずかしげも無く言えるのが月光夜明。セシリア達は顔を赤く染めながら照れ隠しの笑いを浮かべ、夜明が自分だけでなく、他の皆のことも可愛いと思っていることが分かったラウラは不機嫌そうに頬を膨らませている。だが、それも夜明に撫でられてすぐに気持ちよさそうな表情を浮かべた。その光景を見て一夏は一言。

「いやぁ、夜明って本当に鈍いんだな・・・ん、どうした箒、そんな疲れたような表情を浮かべて？」

「いや、それをお前が言うか？　と思ってな・・・」

疲れた表情を浮かべている箒に疑問符を浮かべていると、一夏の視界の中に一台の車が入ってきた。

「おい夜明。銀河さんが言ってた車ってあれじゃないか？」

「あ？　・・・あぁ、あれだな」

二人の遣り取りに車の方を向く一同。そして、太陽を除く全員が例外なく固まった。何故なら二人の言う車というのは・・・馬鹿でかいリムジンなのだから。そのリムジンは黒色のボディを陽光で輝かせながら夜明達の前で急停止、運転席から一人の男性が降りてくる。

「お久し振りです、若旦那！！」

「やっほー海坊主。どうでも良いけどその若旦那っての止めてくれないか？」

「無理な相談です！」

夜明を若旦那と呼び、海坊主と呼ばれたその黒服、屈強、グラサン、スキンヘッドと四拍子揃えた男性は勢い良く夜明に頭を下げた。絶対にやで始まってざで終わる職業の方が出てきたことに、夜明、太陽、一夏以外の面子はドン引きしている。

「こちらの方々が？」

「うん、俺のダチ」

「分かりました。さぁ皆様方！　車に乗ってください！　荷物は自分がキチンと車に積んでおきますんで！」

荷物を海坊主に任せ、夜明達は車に乗り込んだ。夜明、太陽、一夏は普通に乗り込んだが、箒達はまるで虎穴に入るかの如くおっかなびっくりしている。外見に相応しく、車内は尋常じゃなく広い。冷

房完備、何故車の中にそんな物がと突っ込みたくなるようなテーブル、冷蔵庫まである始末。それだけの物があるというのに、八人もの人間が入った車内にはまだ余裕がある。

「あぁ～、これ乗んの久し振りだな」

「ね、ねぇ夜明。あんたの実家って孤児院なのよね？」

「ん、そうだけど」

両脚をぐでーっ、と伸している夜明に鈴音が恐る恐る訊ねた。他の面子も色々と聞きたいことがあるのか、夜明を凝視している。

「だったら、何でこんな馬鹿でかいリムジンが迎えに来るの？　しかも運転手の人、あれじゃまるで・・・」

「あぁ、そう言えば言って無かったか」

その先に鈴音が何を言いたいのか分かり、夜明は頭を掻きながら姿勢を正す。

「俺の実家、孤児院は孤児院でも、孤児院兼温泉宿兼極道なんだよ」

「「「「「「・・・は？」」」」」」

こういう反応が返ってくるのも無理からぬ事だろう。

「日本中の極道の頂点に立つ月光組。それが俺ん家。元々は極道一筋だったみたいだけど、先々代くらいの組長の奥さんが大層な子供好きらしくてな、それで孤児院を始めたんだと。それならって当時の組長が孤児院始める序でに温泉宿を始めたんだ。近くにいい源泉があったらしい」

窓の外を流れていく景色に目を向けながら、夜明は実家のことを話していた。別段、話すこともないので、箒達は車内にあった煎餅とお茶を片手に夜明の話を聞いている。海坊主はその外見から想像できないほど滑らかにリムジンを運転しているのは余談だ。

「んで、温泉宿がビックリするくらい成功。笑っちゃうくらいの資

金を手に入れた月光組は周囲の土地の大半を買い占めて、月光市って名前の町・・・まぁ、ちょっとした独立国家を作ったんだよ」

「独立国家？」

「そ、独立国家。まぁ、それは置いておこう。それで、俺はその月光組の若頭ってことになってる。・・・大変不本意だがな。序でに言うと銀河兄貴は副組長、俺と銀河兄貴の上にいる夜雲兄貴が組長だ」

「へぇ、夜明の実家って極道だったんだ・・・」

「軽蔑するかい？」

「「「「「まさか」」」」」

夜明の言葉に箒達は首を振る。

「あぁ、それと注意事項。月光市に住んでる一般人の人達はともかく、月光組の組員は一番下の連中でさえ人外じみた力を持ってるから、間違っても喧嘩するなよ・・・確実に死ぬだろうから」

とてもじゃないが、冗談を言っている様子では無い。無意識の内に、箒達は音を立てて唾を飲み込んだ。

「人外じみたって・・・どれくらい強いんですの？」

セシリアの問いに夜明は顎に指を当てて考えた。

「そうだな・・・。まず最初に今、車を運転してくれてる海坊主。

こいつは何の装備もなしで、一日四頭の鯨を捕鯨した」

この時点でおかしい。

「んで、俺の世話役で佐助と半蔵ってのがいるんだけど、佐助は素手でシベリアトラを倒した。半蔵は百メートル走でチーター相手にぶっちぎりの勝利」

ここまで来るとファンタジー世界の住人だ。これだけでも既に月光組が人外集団だというのは理解できるのに、まだ話すことがあるのか、夜明は眉間に皺を寄せて考え込んでいる。

「後は・・・そうそう。銀河兄貴だけど、五機のＩＳを素手で完膚無きまでに叩き壊した」

「生身の人間がＩＳを破壊したと言うのか！？」

驚愕するラウラに頷いて見せ、夜明は話し始めた。

「俺がＩＳを操作することが出来る二人目の男だって分かって二ヶ月位経った頃かね？　俺の経歴を調べたどこぞのバカな国が、俺以外にも月光組の孤児院にＩＳ操作が出来る男がいるかどうかの調査、並びいた場合の捕獲を命じて、五機のＩＳが襲撃をかけてきた事があったらしいんだが・・・数分間の戦闘で銀河兄貴はＩＳ五機のコア以外を全て破壊、搭乗者を皆殺し、その国にコアと一緒に死体を送ったんだと」

一同に戦慄が走る。

「こ、殺したのか？」

「あぁ。『身内には日輪の如き優しさを。敵対者には吹雪の如き冷酷さを』ってのが月光組のモットーだからな。まぁ、お前等は俺の友人だから身内の範囲に入るだろうけど」

と、ここで夜明は車内の空気が妙な物になっていることに気付き、窓の外の風景から視線を車内へと戻した。太陽を除く全員が、葬式のような空気を出していた。特に一夏とラウラ以外は表情を青ざめさせてさえいる。その様を見て、夜明はケラケラと笑った。

「心配しなくても大丈夫だっての。基本的に家の連中は誰に対しても優しいからよ」

今更そんなことを言われても、まったく安心感を得られない一同だった。

「ここが・・・」

「月光市・・・」

セシリアと鈴音は窓の外に流れていく町の風景を見ている。三十分ほど前に月光市に入った一同の感想は映画村だった。月光市は何故か異常なほどに町並みが古く、江戸時代のような雰囲気を放っているのだ。

「まぁ、昔っから何も変わって無いらしいからな」

「若旦那、そろそろ着きますよ」

「了解。そいじゃ皆、降りる準備してな」

海坊主の言う通り、数分もしない内に海坊主が運転する車は目的地に着いた。車から降りた夜明達を迎えたのは。

「・・・これがジャパニーズマフィアの本拠地・・・」

「セシリー、その認識はどうかと思うぞ・・・」

馬鹿でかい門を構えた温泉宿だった。ご丁寧に看板には、『月光温

泉宿兼月光組』と書かれている。威風堂々たる鉄の門には大きく左側に月、右側に光と書かれていた。

「そんじゃ、入るとします・・・か！！」

つかつかと門に歩み寄るなり、夜明は門の中心部分を蹴り飛ばした。門が勢い良く内側に開き、壁にぶつかって派手な音を上げる。いくら実家とは言え、遠慮とかそう言う物が欠片もない。

「・・・若旦那、その開け方はやめて下さいって言ってるでしょ」

「へぇへぇ」

八人分の荷物を軽々と運ぶ海坊主の言葉を受け流し、夜明は門を潜って宿へと向かった。その後に太陽達が続く。白い砂利の中にある石畳の道を渡り、夜明は温泉宿の玄関（横にスライドさせる）を開いて、そのまま絶句した。絶句して固まる夜明の後ろ姿を不思議そうに見ながら、一夏達は肩越しに宿の中を覗き込む。夜明が絶句した理由は容易に分かった。

「「「「「「「「「「「「「「「お帰りなさいませ、若旦那！！！！！！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」」」」」」

この月光温泉宿の従業員であろう人達と、月光組の組員であろう人達がもの凄い数、正座で頭を下げて夜明を出迎えているのだから。夜明は恥ずかしそうに頭を掻き、それから満面の笑みを浮かべた。

「ただ今戻ってきたぜ、野郎共！！！！！」

番外編、闇鍋大会！　犠牲者は誰だ！？（前書き）

ポッと思いついた。

番外編、闇鍋大会！　犠牲者は誰だ！？

千冬「と、言う訳で・・・どういう訳だ？　・・・まぁいい。特別番外編の闇鍋大会を開始する！　進行は私。織村千冬が勤めさせていただく。審査員はこの二人」

夜明「闇鍋・・・かぁ。何でだろ、寒気が止まらねぇ・・・」

一夏「風邪か？　無理しない方が良いぞ」

千冬「どうやら、夜明は本能的に生命の危機を感じ取っているみたいだな・・・。そして肝心の闇鍋を作る挑戦者達はこいつ等だ！！」

太陽「さて、精々頑張るとするか」

箒「一夏、うまい鍋を食べさせてやるからな」

セシリア「料理とは闘い・・・必ず勝って見せますわ！」

鈴音「うぅ・・・鍋なんかよりも酢豚の方が上手に出来るのに・・・やるだけやってやるわ！！」

シャル「料理なんてそんなしたこと無いんだよね。ちゃんと出来るかな？」

ラウラ「夫に手料理を食べて貰う・・・これぞ妻の務めだ」

千冬「この五人の小娘共だ。それではルールを説明しよう。五人にはそれぞれ各々の趣向を凝らした鍋を作ってもらう。審査員である

二人は目隠しの状態で鍋を食べて材料を当て、誰が作ったのかを当てて貰う」

夜明「つまり、これって食う側にとっての闇鍋ってことか」

一夏「それはそれで面白そうだな」

千冬「制限時間は三十分、調理の過程は私が実況で伝える。それでは調理・・・開始!!!」

ジャァァァン!!　（銅鑼の音）

（注）ここから夜明と一夏には目隠しがされます。

千冬「まずは一番手慣れていそうな夕暮のから見てみるとするか。・・・ほう、これはこれは・・・」

太陽「夜明の好物でしてね。どうやって臭いを取るかが重要になってきますね」

夜明「俺の好きな物？　魚介類か？」

一夏「だと思うけどな」

千冬「次は篠ノ之だな。・・・随分と調理の手際が良いな」

箒「は、はい。毎日してますから・・・花嫁修業の一環で・・・／／／」

千冬「・・・。すまん、手が滑った（超棒読み）」

ドンッ

箒「へ？　（ブスリ）　いったぁぁぁぁ！！？？　包丁が手に刺さったぁ！！！」

時を同じくして審査席。

夜明「止めろ一夏！　少なくとも今のお前じゃ姐さんには逆立ちしたって勝てないだろ！！」

一夏「離しやがれ夜明！　男には殺されると分かっていてもやらなきゃいけない時があるんだ！！」

白式を展開した一夏を生身で押さえ込む夜明。

千冬「ふぅ、認めたくない物だな。自分の若さ故の過ちという物は・・・。次は鳳だな。・・・篠ノ之と比べて手際が悪いな。おまけに材料も上手く切れてない」

鈴音「う、うるさいなぁ。良いんですよ、おいしければ！」

千冬「その意見には概ね同感だがな、鳳・・・そんなにコチュジャンを入れてどうするつもりだ？」

鈴音「へ？　・・・って、キャアアアア！！　何か私の鍋が真っ赤に染まってる！！」

夜明「今流行りの激辛鍋って奴か？」

一夏「激辛ですめばいいけどな・・・」

千冬「次はオルコットだが・・・何故ここに硫酸の空き瓶が転がっているんだ？　こっちには硝酸カリウム、そっちにはクロロ酢酸？　・・・一体、何が起きているんだ？」

セシリア「あ、織村先生、丁度良いところに。鍋を二つ三つ貸して貰えませんか？」

千冬「それは構わんが、何があった？」

セシリア「はい。お鍋に材料を入れたら底が抜けてしまって・・・」

夜明、一夏、千冬「「「・・・（ダラダラ）」」」

千冬「悪い夢を見ていたと思おう・・・。次はデュノアか、お願いだからまともであってくれ・・・」

シャル「あ、織村先生」

千冬「デュノア、どんな具合・・・これは鍋と呼べるのか？」

シャル「確かに普通とは違うと思いますけど、ありだと思いませんか？」

千冬「まぁ、確かにうまそうではあるな」

夜明「シャルはまともらしいな」

一夏「と言うか、セシリアみたいなのがもう一つとかあっても困るぞ」

夜明「確かに」

千冬「最後はボーデヴィッヒか・・・。これは確かに鍋だが・・・」

ラウラ「教官、どうかされましたか？」

千冬「何でもない、続けてくれ」

ラウラ「はい」

千冬「・・・眼帯とエプロンの組み合わせがここまでシュールだとは思わなかったな・・・」

三十分後。

千冬「それでは実際に食べてみてもらうか。まずはこれだ」

夜明「これは・・・何か凄く甘い匂いがするな」

一夏「本当だ。でも、甘ったるいとか、そう言う嫌な匂いではないよな」

二人、食事中。

夜明「リンゴにメロン、それ以外にも色々と果物が入ってるな」

一夏「暖かいフルーツ白玉って感じだな」

千冬「これを作ったのは誰か、答えろ」

夜明、一夏「「シャル」」

千冬「正解だ」

シャル「よ、よかった～」

千冬「次はこれだ」

夜明「・・・何か、目隠しされてるってのに視界が赤くなってきたぞ」

一夏「おまけに喉や鼻もヒリヒリしてきた・・・何だこの殺人的な辛さは！？」

夜明「恐らく鈴音だろうな。辛さをどうにかしようと悪戦苦闘した挙句、辛さが倍増・・・って感じだろ」

千冬「取り敢ず食え」

二人、食事中。

夜明、一夏「「・・・かっれぇぇぇぇ!!!!!!!!」」

千冬「だそうだ。精進しろ、鳳」

鈴音「うぅぅ、普段ならこんな事にならないのに・・・」

千冬「次だ」

夜明「おでんだな・・・」

一夏「おでんだなぁ・・・」

二人、食事中。

夜明「可もなく不可もなく」

ラウラ「も、もっと言うべき事があるだろ、夫として!?」

夜明「無ぇよ」

千冬「次は飛ばして」

箒「嫌々、おかしいですよねその対応!?」

千冬「・・・ちっ」

夜明「舌打ちしたぞ！　司会が舌打ちしたぞ今！」

一夏「千冬姉！　箒の何が気に入らないって言うんだよ?!」

千冬「えぇい！　この際だから言わせて貰うが篠ノ之、一夏はやらんぞ!!」

箒「なら奪い取って見せます！」

千冬「言い切ったな小娘！　ならば勝負！」

箒「負けません!!」

夜明「いい加減にしろお前等ぁぁぁぁぁ!!!!!」

結局、箒の鍋は食いそびれました。

鈴音「えぇ～、千冬さんが箒とガチで闘ってるんで、ここからの司会は私がやらせていただきます。次は・・・つっても、後二人しかいないんだけどね」

夜明「もう何でもいいから早く終わらせよう・・・」

一夏「そうだな、もう疲れた・・・」

二人、食事中。

夜明「うまいなぁ、この魚たち」

一夏「魚介類特有の臭みも無いし。うん、うまい」

鈴音「これは太陽の鍋よ。さって、最後はセシリアの鍋なんだけど・・・ん？　太陽、何でそんな所でぶっ倒れてんの？」

太陽「に、逃げろおまえ・・・らガクッ」

鈴音「ちょ、太陽あんたどうしたの！？」

セシリア「お待たせいたしましたわ！」

鈴音「せ、セシリア！　取り敢ずその鍋は放っておいて太陽を運ぶのをてつだ・・・ちょっと待ちなさい。何で鍋の中からどす黒い湯気が昇ってるの？　しかも髑髏の形になってるし！！」

セシリア「これですか？　ちょっと用意してもらった鍋が全部溶けてしまったので、土鍋を使わせてもらったのですが・・・何故か太陽さんが湯気を嗅いだ瞬間、昏倒してしまいまして・・・」

鈴音「あんたの所為かぁーっ！！　って、夜明と一夏は！？」

審査席に一枚の紙。そこにはこう書かれていた。

『探さないでくださいｂｙ夜明、一夏』

シャル「よく分からない終わり方だね」

ラウラ「おでんの何がダメだと言うんだ・・・」

長兄との挨拶　阿修羅すら凌駕する夕暮教官!?

「二日振りだな、夜明」

「銀河兄貴か」

部屋へと案内された一同に銀河が訪ねてきた。これから一夏達を連れて月光市を案内しようと思っていた夜明は少しばかり不機嫌そうになるが、銀河が何で訪ねてきたのかを察してため息を吐く。

「夜雲兄貴か？」

「あぁ。夜桜姉上共々お呼びだ」

「そうかい・・・お前等、俺はちっとばっかし用事が出来たから席外すぜ。適当にくつろいでくれ」

「行ってら～」

心底面倒くさそうな表情を浮かべながら頭を掻き、夜明は銀河についていった。

「なぁ太陽。夜明と銀河さんが言ってる夜雲さんと夜桜さんって誰だ？」

畳の上にぐで～っと横になりながら、部屋から出ていく二人に手を振っている太陽に一夏が訊ねる。太陽が上半身を起こしてみると、一夏達は興味津々で太陽に注視していた。

「夜雲ってのは夜明と銀河さんの兄貴、夜桜ってのは夜雲さんの奥さんだ」

「まだ夜明にお兄さんがいるの？」

鈴音の問いに首肯しながら、太陽は窓辺に腰掛けて夜明と銀河の言う夜雲と夜桜なる人物の情報を思い出そうと頭をバリバリ掻く。

「タイプ的には銀河さんじゃなくて夜明寄りだな、夜雲さんは。自由奔放というか、豪放磊落と言うか・・・とにかくしがらみに囚われない自由な人だよ。夜桜さんはこの中で言うなら・・・シャルに近いだろうな。気性の穏やかな人だから・・・見に行ってみるか？」

「勝手に動いていいんですの？」

「構わないだろ。友人の兄と姉を見たくなっただけなんだし」

と決まれば太陽の行動は素早い。窓辺から腰を上げるや否や、すたすたと足早に部屋から出ていった。一夏達は慌てて太陽の後を追った。数分も歩かない内に、太陽達は肩を並べて歩いている夜明と銀河に追いついた。

「何だ、来たのかよ」

「皆が夜雲さんと夜桜さんを見てみたくなったらしくてな」

「そうか・・・しかし、兄上と姉上に一見の価値があるかどうかは疑問だな」

「同感。普段の行いを見てれば、あの二人は年中イチャイチャ色ボ

ケ淫蕩バカップルだからな」

再び二人同時にため息を吐く。どうやら、二人の兄と姉である夜雲と夜桜なる人物は相当なくせ者らしい。かなり不安になり、太陽の後ろに立っている箒はちょいちょいと太陽の肩を突く。

「なぁ太陽。その夜雲と夜桜というのは如何なる人物なんだ？」

「・・・何とも言えないな。お前と一夏の発展型とでも言うべきか・・・」

「「は？」」

一夏と箒は揃って疑問符を浮かべた。時を同じくして、夜明はパンパンと手を叩く。

「半蔵！　いるか！？」

「・・・ここに」

「「「どひゃあぁ！？」」」

突如、背後に人の気配と声を感じ、鈴音、セシリア、シャルは悲鳴を上げながら夜明の後ろに隠れた。さっきまで誰もいなかった筈のそこに、三十代の男性が片膝をついている。

「おぉ、そこにいたか半蔵。夜雲兄貴と夜桜姉さんはどうしてる？」

夜明の問いに半蔵は唯一言、「・・・閨」と答えた。半蔵の返答を聞いて、夜明と銀河は冗談抜きで激しい頭痛を感じ出す。

「真っ昼間から何してんだあの二人は・・・」

「・・・半蔵、済まないが二人に言伝を頼む。客人がいるのだから、程々にしておけと」

「御意・・・」

ヒュバッ、と半蔵の姿が消えた。数秒後、何の前触れもなく再び現れる。

「・・・後、二十分後に来てくれとの事です」

「「・・・あんのバカが！」」

夜明と銀河の台詞が重なった。

「「辞世の句を詠め」」

「は、ははは。冗談きついぜ二人とも。何でそんな剣呑な表情で刀をって刺さってる！　切っ先が刺さってるぞ銀河！　って痛い痛い！！　夜明！　お前のは口の中にまで刺さってる！！」

「あらあら、夜雲さん達ったら♪」

言われたとおり二十分後。夜雲と夜桜が待っている大広間へと向かった夜明達を出迎えたのは、

「遅いぞお前等、何してるんだよ」

後ろに流れるようにツンツンした頭の青年と、桜色という人間離れした色の髪をした女性。その青年の言葉を聞くなり、二人の頭から何かが切れる音が聞こえ、どこから取り出したのか抜き身の日本刀を片手に青年を締め上げ始めた。桜色の髪の女性は、楽しそうに微笑みながらその光景を見ている。

「いい感じにカオスだな・・・」

どこか遠くを見るような目で呟く太陽。その後ろでは、夜明と銀河

の地獄の折檻を否応なしに見ている一夏達がこれ以上ないくらいに表情を青ざめさせていた。二人の地獄の折檻が続くこと数十分、漸く二人の気が晴れたようで、青年は解放された。

「あでで・・・み、見苦しいところを見せたね。俺は十一代目月光組組長、月光夜雲」

「その妻の月光夜桜ですわ」

頭を下げられ、慌てて一夏達も頭を下げ返す。自己紹介が終わると、夜雲は興味深そうに、まじまじと太陽達を見ていた。

「太陽ちゃんは分かるとして・・・夜明。彼女たちって友達なんだよな？」

「そうだけど・・・」

夜明の答えにそうかそうかと頷きながら、夜雲は夜明にこっちに来いと指でジェスチャーする。疑問符を浮かべながらジェスチャーに従うと、夜雲は夜明を部屋の隅へと連れて行った。

「太陽ちゃんと同じ属性のラウラちゃん。ツンデレの鈴音ちゃんとセシリアちゃん。癒し系のシャルロットちゃん・・・選り取り見取りじゃねぇの。で、どの子が本命なんだ？」

ウリウリと肘で脇腹を突いてくる。一度ため息を吐き、夜明は何の躊躇もなく夜雲の心臓部分に全力の拳を叩き込んだ。夜雲の体内から何かが弾け飛ぶ音が聞こえ、口から大量の血が吐き出される。血の海を作る夜雲をその場に放棄し、夜明は太陽達の所に戻った。

「そうそう。太陽ちゃんにお願いがあるんだけど」

「うぉっ!?　ば、バカな。確実に心臓を破壊したはずだぞ。なのに何故!?」

「ちょ、あんた自分のお兄さんに何て攻撃してるのよ!?」

確実に心臓を破壊したはずの兄が数秒で復活したことに驚きを隠せない夜明。驚愕の表情を浮かべている夜明に鈴音が突っ込む。

「私に、ですか?」

「うん。最近、月光組に新しく入りたいって子達が来たんだけど、どうも緊張感が足りないと言うか何というか・・・兎に角、根性を叩き直して欲しいんだ。試験は今日の夜遅くにやるからさ」

「別に構いませんが・・・精神が崩壊しても知りませんよ?」

「彼等は道場の方にいる。ついてきてくれ」

何か恐ろしいことを言っている太陽を連れ、銀河は部屋から出ていった。これと言ってやることも無いので、夜明も一夏達を連れて道場へと向かう。

「夜雲兄貴に夜桜姉さん。せめて俺たちがいる間はイチャつかないでくれよ!」

そう言い残すのを忘れずに。

「彼等だ」

道場へと案内された太陽。銀河が指差す方向には、町のチンピラから抜け切れていない感が溢れている少年達が五、六人ほど。

「あいつ等ですか。・・・確かに乳臭い面をしてますね」

「・・・太陽って時々酷いことを平然と言ってのけるよね」

「銀河さん。彼等を鍛え直せばいいんですか？」

シャルの声を無視し、太陽は少年達の方を指差す。

「あぁ。・・・やりすぎないでくれよ」

「無理です」

いともあっさり銀河の頼みを切り捨て、太陽は少年達に向かって歩いていった。その間にマントのように羽織っていた羽織の袖に腕を通して両手の親指を噛み破り、頬に血で赤い紋章のような物を描く。それを見て、夜明と銀河は呻き声にも似たため息を吐いた。

「あぁ、あの状態に入っちまった・・・」

「彼等の無事を祈ろう」

「？　何を言ってるんだ」

二人の言葉に疑問を持ったラウラが何かを訊ねようとした瞬間、少年達の目の前まで歩いていった太陽は何の躊躇も、何の宣言も無しに先頭にいる少年を蹴り飛ばした。余りにもいきなりのことで、防ぐことは疎か受け身を取ることさえ出来なかった太陽に蹴られた少年は、床に何度もバウンドして壁に叩きつけられる。

「「「「「「・・・」」」」」」

余りにも突然すぎる太陽の行動に、当事者でない一夏達も唖然としている。ゆっくりと足を下ろし、太陽は大声で宣言した。

「クズ共！！　今から貴様等を矯正する！！　私には貴様等クズ共

の拒否権、及び人権を踏み躙る権限が与えられている！！　分かったかクズ共！！」

「・・・あの状態の太陽をな、月光組では畏敬の念を込めてこう呼んでるんだ」

太陽の変わり様に驚いて声も出ない一夏達にそっと囁く。

「『鮮血の陽光（ブラッディサンライト）』」

＊ここからは過激な表現を含みますので、音声のみでお楽しみ下さい。

「修正してやる！　歯ぁ食いしばれぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

「ちょっと待ってくれ！！　何でそんな数十メートルはありそうな鉄柱を片手で軽々と振り回せバギャアァ！！！」

「私のこの手が黄金に輝く！！　クズ共を正せと雄叫び上げる！！灼・熱！！　サンライト、フィンガアアアァァァ！！！！」

「何で人の手が光を放ちながら発熱してぐぎゃあああああああ！！！！！！！！！」

「だからお前等はクズなのだぁ！！　酔舞（すいぶ）・再現江湖（さいげんこうこ）デッドリーウエイブ！！　ば～く発！！」

「あぎゃあああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

「無駄ぁ！！　ロードローラーだぁ！！！！」

「どっからそんなの持ってきたぎゃあああああああああ！！！！！！！！！」

「約束された勝利の剣(エクスカリバー)ァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！！！」

「何だか知らないけどごめんなさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

「いいか貴様等！　貴様等は目を掛ける価値もない愚劣な豚以下の存在だ！！　変わりたければガッツを見せてみろ！！　どうした！　返答する気力さえ無いのか！！　何とか言ったらどうだこのウジ虫共！！」

「うわぁ・・・太陽の奴、本当に容赦無いな・・・」

「あれが太陽のやり方さ。最初の最初で徹底的に精神を破壊し、その後に異常としか言えない訓練をさせるんだ」

ずたぼろの雑巾のようになってしまった少年達に罵倒を浴びせている太陽を見ながら、夜明と一夏は半蔵が用意してくれたお茶と煎餅を楽しんでいた。その後ろでは箒達四人が太陽の余りの変わり様に、涙目になりながら抱き合っている。

「あ、あれ？　そう言えばラウラは？」

鈴音の問いに夜明は無言で太陽の方を指差す。

「待ってください教官！　自分達はまだやれます！！」

少年達に混じって、太陽の特訓を受けるラウラの姿が・・・。

「黙れ！！！」

何か言っているラウラの頬を、太陽の世界を狙えそうな右ストレートが捉える。吹っ飛んでいくラウラに起き上がる暇さえ与えず、太陽は倒れているラウラの頭を思いっ切り踏み躙った。

「黙れこのウジ虫が！！　何時、私が貴様に発言を許可した！！いいか！　耳の穴かっぽじってよく聞け！　貴様等は最低のウジ虫だ！　ダニだ！　この宇宙で最も劣った生命体だ！！　人として当たり前の人権を返して欲しければ私の訓練に耐え抜いて見せろゴミ虫共！！！」

ラウラの頭に足を乗せたまま、太陽は道場の隅に用意してある重りと丸太を指差す。

「さっさと身体に重りを巻き、丸太を担いで月光市内を十周してこい！！」

いきなり現れた謎の赤髪美少女に罵倒混じりのバイオレンスを受け、藁にも縋る思いで言われたとおりにして道場を飛び出す少年達、及びやる気満々のラウラ。だが、道場を出ても太陽の罵倒は止まることがなかった。

「この程度で何を喘いでいるクソ虫！！　そんなに喘ぎたいのならガチホモに【検閲削除】ってもらえクソ虫が！！」

後ろにピッタリとくっついてきて、尚かつ身の丈と同じ大きさの木剣を振り回してくるのだからたまらない。月光市内を六周した頃だろうか。一人の少年が疲労で蹴躓き、丸太を放り出してぶっ倒れた。倒れた少年に走り寄り、何をするわけでもなく太陽は竹刀の先端を地面に突き刺して、汚物でも見るかのような目で倒れた少年を睨む。

「また貴様か。所詮貴様などその程度の存在だと言うことだ。さっさとお家に帰って父親と母親に泣きついていろ!!　もっとも、貴様のような根性無しを産んだ親なのだから、どうしようもない低俗な親なのだろうな」

「お、俺の親父とお袋の悪口を言うんじゃねぇ!!」

少年は瞳に闘志を燃やしながら立ち上がり、太陽に殴りかかった。太陽は少年の拳を容易く避け、カウンターの肘鉄をその鼻面に打ち込む。

「何度でも言ってやる。貴様の親は低俗だ!　違うというのなら、ガッツで証明して見せろ!!」

「ちきしょう、ちきしょうちきしょう!!!　俺の親は世界で最高の親だぁぁぁぁ!!!!!」

鼻を押えながら地面をのたうち回っていた少年は再び丸太を抱え、凄い勢いで走っていった。その光景を遠く離れた所で見ていた夜明は一言。

「相変わらずスパルタだねぇ〜、太陽の奴」

だが、夜明は後に思い知ることとなる。この程度、まだ序の口だと言うことを。

「いいか！　今の貴様等は人間以下のゴミ虫だ！！　人権も何もかもを剥奪された、存在しているだけで地球に害悪を及ぼすこの世の不要物だ！！　貴様等に呼吸する価値は疎か、存在する価値さえない！！　唯の【検閲削除】だ！！　私の訓練を終えて初めて、貴様等はこの世に産声を上げて誕生する！！　それまでの間、貴様等は私の指示に従って地面を這いずり回るクソ虫だ！！　それからそこ

の雌豚ぁ！！！！」

勿論、ラウラの事である。ぶっ倒れて呼吸は疎か、生きていることさえ怪しい少年達の横で両手を膝に付け、荒い呼吸を繰り返しているラウラの髪を掴み、太陽は頭突きを思いっ切りかました。

「この程度の訓練で何をしている！！　ドイツ軍の精鋭はこの程度で呼吸を荒げるゴミ屑か！！　それとも貴様がゴミ屑なのか！？　ならば貴様はここにいる資格はない！！　さっさと惚れた男の所にでも行って、腰でも振ってろ！！」

「泣くことも笑うことも貴様等には必要ない！！　貴様等は闘うための兵器だ！！　闘わなければ存在する価値はない！！　隠れて【検閲削除】している【検閲削除】に過ぎん！！」

「罵られて屈辱を受けたいか！！　殴られて痛い思いをしたいか！！　この負け犬根性が染みついた芥溜めがお似合いの【検閲削除】が！！」

「とろとろ走るなこの【検閲削除】！！　さっさと走らなければお前の【検閲削除】に【検閲削除】を流し込むぞ！！」

「この【検閲削除】の【検閲削除】共がぁ！！　貴様等の【検閲削除】を【検閲削除】して、【検閲削除】するぞ！！」

そんなこんなで試験の時間がやって来た。途中から夕食と風呂で、訓練を見ていなかった夜明達は、様子を見がてら道場へと足を運んできた。道場の中心には太陽とその隣りに立つラウラ、そして試験を控えた少年達が異様な空気を放って佇んでいる

「な、何ですの。この肌を刺すようなプレッシャーは？」

セシリアの問の答えは目の前にある。太陽は道場に入ってきた夜明達に一瞥を送り、すぐに視線を少年達に戻した。

「いいか！　貴様等はこの時を以てウジ虫を卒業する！！　貴様等は任侠者だ！！」

「「「「「イエス、マム！！」」」」」

「い、イエス、マム！？」

目を丸くするシャル。そんなのお構いなしで、太陽は少年達を鼓舞し続ける。

「貴様等はこれから最大の試練と闘う！　晴れて月光組の一員となるか、それとも再びウジ虫に戻るかの瀬戸際だ！　どうだ、楽しいか！！？？」

「「「「「イエス、マム！！」」」」」

「良い返事だ！　ラウラ！！」

「はっ！！」

太陽に敬礼をして、ラウラは一歩前へと進み出た。整列している少年達の表情を一瞥し、大きく息を吸い込んで咆哮を上げる。

「野郎共！！　私達の特技は何だ！？」

「「「「「見敵虐殺（サーチアンドデス）！　見敵虐殺（サーチアンドデス）！　見敵虐殺（サーチアンドデス）！！！」」」」」

「私達の目的は何だ！？」

「「「「「見敵虐殺（サーチアンドデス）！　見敵虐殺（サーチアンドデス）！　見敵虐殺（サーチアンドデス）！！！」」」」」

「私達の喉を潤すのは何だ!?」

「「「「「敵対者の血だ！　血！　血！」」」」」

「お前等は月光組を愛しているか!?　月光市を愛しているか!?」

「「「「「ガンホー！　ガンホー！　ガンホー!!!」」」」」

「よし、行ってこい!!!」

何処かへと走っていく少年達。その後ろ姿を見送る太陽とラウラ。

「夜明。興味本位で聞きたいのだが・・・月光組の試験とはどんな物なんだ?」

「一%本気の俺、若しくは銀河兄貴か夜雲兄貴と闘って勝つこと」

「「「「「無理じゃね?」」」」」

彼等の予想に反して、少年達は一%の本気を出した銀河に勝利、無事に月光組に入ることとなった。

長兄との挨拶　阿修羅すら凌駕する夕暮教官！？（後書き）

オリジナルキャラ。

月光夜雲（げっこうやくも）

イメージ、ＦＦ？　クライシスコアのザックス

月光夜桜（げっこうよざくら）

イメージ、ガンダムＳＥＥＤのラクス。

ラウラ、着物を着てみる

「ん・・・もう朝か・・・」

昨日の悪夢（夕暮教官の地獄の特訓風景）が夢の中に出てきた所為か、夜明は布団の中で嫌な汗を掻いていた。今、夜明がいる部屋は月光宿の一室。当然、宿泊する部屋割りは男女別になっている。特例として、一夏と箒は同室になっている・・・。まぁともかく、男女の部屋は別々になっている・・・筈なのだ。なのに・・・。

ふに。

「ふに？」

「あん・・・」

「あん？」

とにかく起き上がろうと敷き布団に手をつくと、何やら柔らかい感触が掌を通して感じられる。人肌の暖かさで、お椀のような形をしたそれは・・・

「まさか！？」

自分が触っている物が何なのか想像がつき、夜明は掛け布団を勢い良く剥がした。そこには案の定と言うべきか。

「いきなり胸を揉みしだいてくるなんて・・・積極的だな、夜明／／」

「やっぱりお前か、ラウラ・・・」

全裸のラウラがいた。頬を染め、両腕で胸を隠している姿はかなり色っぽい。どんぴしゃで予想が当たったとは言え、夜明はラウラの裸に赤面してしまう。顔が赤いことをラウラに悟られぬよう、逆の方向を向きながらラウラに掛け布団を投げつけた。

「さっさと服着ろ」

「むぅ～、朝起きたら妻が全裸で寝てるというのに、襲いかかってこないとはどういう了見だ・・・」

掛け布団を投げつけられたので夜明が赤くなっているのが見えず、ラウラは掛け布団を身体に巻き付けながら頬を膨らませる。取り敢ず夜明に言われたとおりに服を着るラウラ、二人は敷き布団の上で正座する形で向かい合う。

「で、何でお前さんは朝っぱらから人の布団の中で素っ裸になってるんだ、ラウラ？」

その質問にラウラはキョトンとしながら首を傾げた。

「朝っぱらから？　何を言ってるんだ夜明。今はもう昼だぞ」

「んだとぉっ！？」

夜明は布団の横に置いておいた携帯を掴んで、背面ディスプレイに表示される現在の時刻を確認する。時刻は既に十二時を過ぎていて、その事を示すかの如くお天道様は人々の真上にある。

「・・・太陽じゃあるまいし、何で俺はこんな時間まで寝てたんだ？」

「さぁ？　久し振りの故郷に安心して、普段よりも眠りが深かったんじゃないのか？」

考えるのも面倒なので、ラウラの予想を正解としておくことにした。自分が起床した時間帯、ラウラが全裸で布団の中に入っていたこと。それとこれとは無関係だと思い、夜明はラウラのこめかみにグリグリと拳を押しつけた。

「って、時間のこたぁどうでも良いんだよ。何でお前は俺の布団の中にいるのかって聞いてんだよ」

それも全裸で。無意識とは言え、ラウラの胸に触ってしまった罪悪感と、ラウラの裸を見てドキドキしてしまった事への意趣返しと言わんばかりに、夜明はグリグリの力を強くする。かなりの痛みが頭を襲う。ラウラは涙目になりながら夜明の腕をタップした。

「け、結構痛いぞこれ・・・。今朝方、朝食を食べている時に銀河殿が月光市を歩いてきたらどうだと言ってな。まだ寝ているお前を置いて、組員の人に月光市を案内してもらってたのだ。その途中で抜け出してきて、お前とにゃんにゃんするために戻ってきたと言うわけだ」

正直もここまでくると笑えない。素直すぎるラウラの返答に苦笑いしつつ、夜明はラウラの首根っこを掴んで扉の前まで運んでいった。

「取り敢ず、着替えるから出てろ」

「え、にゃんにゃんしないのか？」

「するか！！」

ラウラを部屋の外に放り投げ、何か言う暇も与えずに夜明は部屋の扉をぴしゃりと閉める。少しの間ラウラは部屋の扉を見ていたが、視線を自分の身体に戻して悲しそうな表情を浮かべた。

「・・・やはり、私は女性としての魅力が無いのだろうか・・・」

着替え終わった夜明はこれと言ってやることも無かったので、ラウラを連れて月光市を案内することにした。ラウラにしてみれば夜明と二人きりになれるので願ってもないことだろうが、何故かその表情は浮かない。

「あそこの和菓子屋は羊羹がうまいな。んで、あっちの店は色々な物を扱ってる・・・って聞いてるのか、ラウラ？」

「え？　・・・あ、あぁ、すまない。少し考え事をしていた」

「考え事って・・・まぁいいか。何か食いたい物とかあるか？」

夜明の問いに、俯き気味に無言で首を振る。それ程喋る方ではないラウラだが、ここまで無口なのもおかしい。心配になり、夜明は足を止めてラウラの顔を覗き込んだ。

「大丈夫かラウラ？　何か元気無いみたいだけど？」

「だいじょううわぁ！？　ち、近いぞ！！」

顔を上げると、予想以上に夜明の顔が近かったので、ラウラは顔を赤くさせながら夜明を押しのけた。

「だ、大丈夫ならそれで良いんだが・・・。でも、本当に辛くなったら言えよ」

「分かった・・・」

とここで、ラウラの目が何かに釘付けになった。不審に思った夜明はラウラの視線を辿り、何があったのか納得する。ラウラの視線の先、そこには美しい浴衣を着て、化粧をした女性達が歩いていた。所謂、舞妓という奴だ。ここに住んでいるのなら、舞妓が歩いてる光景なんて珍しくも何ともないのだが、ラウラは月光市は疎か、日本にも最近やって来たのだ。その光景はとても鮮明に見えるに違いない。

「夜明。あの人達は？」

「あれか？　ありゃ舞妓だ。酒の席で踊ったりして興を添える人達だよ。仕事帰りか、これから仕事に行くかのどっちかだな」

夜明の説明を聞きながら、ラウラは食い入るように舞妓達を見ている。産まれた時から軍で育っていた彼女にとって、美しい浴衣や化粧で着飾った舞妓は、とても眩しく見えるのだろう。ラウラの視線に気付き、徐ろに夜明は訊ねた。

「・・・やってみたいか、舞妓」

「やれるのか！？」

おぉ、と夜明は頷く。

「ここから五分くらい歩いた所に、服を貸してくれる店があんだよ。そこ行けば、服貸してくれる序でに化粧もしてくれると思うぞ」

「ではすぐに行こう！」

言うや、ラウラは夜明の手を引っ張って歩き始めた。歩くと言うよ

りも、走るに近い早歩きだ。その速さたるや、道行く人が驚いて道を譲るほど。

「ちょ、ちょっと待てよラウラ！　お前、その店の場所分からないだろ！？」

ピタッ！　とラウラの歩みが止まり、顔を赤くさせながら夜明の方を見た。

「・・・案内をお願いする」

夜明の言うとおり、歩いて数分の所にその服貸しだし屋はあった。品揃えはかなりあり、町人武士売り子の服は当たり前、アブノーマルな所を行くと、火消し大工御代官様、果ては野党なんて服まである。特に着たい服がある訳でもないので、夜明はラウラが着替えている間、店の外で待っていることに。

「にしても、時間掛かってるな。いや、普通の浴衣とかだったらともかく、舞妓は時間が掛かるのか」

そんなことを呟きながら待つこと三十分ほど。服貸しだし屋の前で立っていると、誰かが控えめに肩を叩いてきた。

「ん。おわ・・・」

ったのか？　と続けようとして、夜明は絶句する。

「ど、どうだ？　おかしく・・・ないか？」

人は本当に美しいものを見ると言葉を失う。そして、夜明は現在進行形でそれを体感していた。ラウラが着ているのは落ち着いた柄が雫の黒い着物。元々が雪のように白い肌のため、化粧は必要最低限しかしておらず、唇にさした紅が非常に色っぽい。いつもは無造作に伸している銀髪は結い上げていて、簪が挿されている。

「・・・」

今まで見たことの無いラウラの姿に、夜明は阿呆のように口を半開きにして見とれた。ラウラは薄く化粧をした頬を染めて期待するよ

うな眼差しで夜明を見るが、夜明は未だ、ラウラに見とれている。数秒ほど沈黙が続くと、何を思ったのかラウラはもの凄く悲しそうな表情を浮かべた。

「・・・そうか。言葉も出ないほど似合ってないんだな」

夜明が何も言わないので、自分の舞妓姿は言葉も出ないほど酷い物だと勘違いしたらしい。泣きそうなのを堪えて店の奥へと戻ろうとするラウラの肩を、夜明は慌てて掴んだ。

「ちょ、何一人で自己完結してんだよ!?」

「だ、だって・・・私のこの姿は言葉もないほど似合ってないのだろ?」

「いや、そう言う訳じゃなくてだな・・・その・・・」

非常に珍しく、夜明は顔を真っ赤に染めながら声を詰まらせる。

「お前が綺麗すぎて、見とれてたんだよ・・・」

「・・・何だと?」

夜明の口から出てきた予想外すぎる言葉にラウラの目は大きく開かれる。信じられないと顔で露骨に語りながら、怖ず怖ずと夜明に訊ねた。

「そ、それは本当か?」

「・・・こんな恥ずかしいこと、二度も三度も言わせないでくれ・・

・」

ラウラの肩を離し、夜明はそっぽを向く。その項が真っ赤に染まっているのを見て、ラウラは堪らなく嬉しくなる。

「それじゃ、行くぞ」

「行くぞって・・・どこに？」

「そんなの決まってるだろ」

呆れたような表情を浮かべ、夜明はラウラの手を握った。

「町歩きに行くんだよ」

月光市へと繰り出した夜明とラウラ。二人が歩いていくと視線だけじゃなくて、歓声まで背中を追いかけてくるのだから驚きである。

「な、なぁ夜明。何故、皆は私達の方を見てるんだ？」

「正確には私達、じゃなくてお前なんだがな。お前が綺麗だから見とれてんだろ」

道行く人達から遠慮のない視線をぶつけられ、ラウラは夜明の後ろに隠れるように歩いていた。軍人とは言え、道を歩いている百人近い人達に一斉に注目されるのは怖いらしい。それだけの視線を集めるほど、ラウラは綺麗だった。

「あの、写真いいですか！？」

「もしよろしかったら、一緒に撮らせてください！」

こう声を掛けてくるのは、月光市に観光しにきた人達。元々月光市に住んでいて、尚かつ夜明のことを知っている人達は夜明の隣りを歩いているラウラを見て、夜明の彼女だ何だと好き放題言っていた。もっとも、その声はたくさんの人達に囲まれている二人に届くことは無いだろうが・・・。

「おいおい。幾らラウラが綺麗だからって、こりゃ多すぎだろ？」

「（ま、また綺麗って言われた・・・／／／）お、お前達。一旦落ち着いて・・・」

たくさんの人達に囲まれ、辟易する二人。兎に角、一回落ち着いて貰おうとラウラが声を張り上げようとした瞬間、ラウラは転びそうになった。舞妓の衣装で履いていた、履き慣れていない厚底の下駄が原因である。地面に倒れかけると、誰かの力強い腕がラウラの腰に回して、ラウラを抱き寄せた。

「おっと、大丈夫か？」

ラウラを抱き寄せ、夜明は訊ねる。その顔の距離、凡そ数センチ。

「・・・キュウ・・・」

「キュウ？　ってラウラ！？　おい、しっかりしろ！　ラウラァッ！！！」

夜明に綺麗と言われ、色々と限界寸前になっていたラウラは、夜明の吐息を顔に感じた瞬間に目を回してしまった。

「こ、ここは？」

「気がついたかい？」

目を開くと見慣れぬ和風の天井が視界に入り、横から声が聞こえてきた。身体を起こしながら横を見ると、ラウラに舞妓の衣装を貸してくれた服貸しだし屋の女主人がいた。

「あの、私は」

「いやぁ、夜明ちゃんが血相変えてあんたを背負ってきた時はぶったまげたよ。多分、着慣れてない着物への緊張感と、たくさんの人達に囲まれた緊張感が上手い具合に爆発しちまったんだろうね」

いえ、夜明の顔が近くにあったからです。なんて言える訳もないので、ラウラは赤面しながら立ち上がった。そこで、今自分が着ている服が舞妓の衣装ではないことに気がつく。

「あぁ。悪いけど服なら脱がさせて貰ったよ。こっちも商売だからね。彼氏が店の前で待ってるよ」

女主人が言う彼氏が誰なのか容易に想像がついたのでラウラは更に顔を赤くするが、微かに笑みを浮かべて女主人を見た。

「夜明は私の彼氏ではない。私の夫だ」

自信満々に言い切り、ラウラは部屋から出ていった。

「・・・最近の子は進んでるんだねぇ・・・」

その後ろ姿を見ながら、女主人はしみじみと呟くのだった。

ラウラが服貸し出し屋から出ようとすると、店の表が妙に騒がしい事に気付いた。不審に思い、微かに扉を開けて外を見てみると、夜

明が大勢の人達に囲まれている。全員、夜明が小さい頃から月光市に住んでいた人達である。

「で、夜明。いつあんな可愛い子を墜としたんだよ。羨ましいじゃねぇかこの野郎！」

夜明の首に腕を回している四十代の捻り鉢巻をしているおっさんが、夜明の脇腹を拳でウリウリと突く。夜明は結構な痛みで引きつった笑顔を浮かべながら、どうにか捻り鉢巻おっさんのホールドから逃れた。

「痛いよ親方。それに、何度も言うけどラウラは俺の彼女なんかじゃ無いよ」

それを聞いて、扉の隙間から目を覗かせていたラウラは頬を膨らませた。

（夜明の奴、あんな事を言って・・・。前から思っていたが、夜明は私の夫であることに対しての自覚が無さすぎる。ここは一度、身体に教え込んでやるべきか？）

そんな事を考えているラウラだが、そんな事など、どうでも良くなってしまった。

「それに、ラウラはとても魅力的な女の子だからな。俺如きの彼女にするには勿体ないさ」

夜明のこの一言が聞けたからである。扉を開けて、店先へ一気に飛び出そうとしていたラウラの心臓の鼓動の速度が爆発的に上昇する。

（い、いきなり何を言い出すんだあいつは！？　私を殺す気か！？）

ラウラが鼓動を治める暇もなく、夜明は次の爆弾を投下した。

「確かにすんげぇ美人だったな。舞妓の衣装着てる姿は本当に綺麗だったぜ」

「まぁ、確かに外見も凄く綺麗だけど、本当に凄いのはラウラの中身だよ。一途で、純粋で、意志も固くて、けど時々凄く可愛くて・・・本当に魅力的な女の子だと思うぜ」

こういう台詞を何の恥ずかしげも無く、何の躊躇も無く言ってのけるのが夜明クオリティ。話を聞いている周りの人達の方が、顔を赤くしている。

「・・・なぁ。本当は夜明ってあのラウラって子にべた惚れしてんじゃ無いのか？」

「いや。多分・・・いや、確実に素で言ってるぜあいつは」

少しの間続く沈黙。そして、

「流石は夜明！　俺たちじゃ恥ずかしさの余り言えないような事を平然と言ってのける！」

「「「「「「「「「「そこに痺れる！　憧れるぅっ！！！！！」」」」」」」」」」

「言ってろ。・・・にしても、ラウラはまだ起きてないのか？」

楽しそうに騒ぐ一同に肩を竦め、夜明は店からラウラが出てくるのを待った。

「一途で、純粋で、意志が固くて・・・けど凄く可愛くて・・・（ボン！！）」

店の中で、ラウラが顔を爆発させている事など、夜明に知る由もない・・・。

「・・・♪」

「・・・」

温泉宿へと向かう帰り道。時刻は既に六時を回っていて、お天道様は沈み、空に星が輝き始めた頃、二人は無言で歩いていた。夜明と手を繋いでいるラウラはとても嬉しそうで、夜明は不思議そうにラウラを見ている。

「随分、機嫌良いな。何か良いことでもあったのか？」

「ん、まぁな♪」

ラウラにしては珍しい要領を得ない答えだが、深く追求するつもりもないので、夜明はあっさりと引き下がった。

「・・・」

ふと、ラウラは足を止めてじぃ～っと夜明を見た。

「？　俺の顔に何かついてるか？」

「いや、そう言う訳じゃなくてな・・・（これくらいならしてもいいか？）」

夜明の問いに首を振り、ラウラは夜明の左腕に自分の腕を絡ませた。

「本当にどうした？」

「これくらい許せ」

「・・・ま、いいけどよ」

嫌な表情をする訳でもなく、夜明は視線を前へと戻して歩き始めた。
夜明との身長差が結構あるので、ラウラがついていくのは大変かと思われたが、夜明がラウラの歩幅に合わせて歩いているので、そこまででも無かった。そう言う夜明の細かな心遣いが、ラウラにはとても嬉しかった。

（これから先も、お前とこうして歩いていたいものだな、夜明）

ラウラ、着物を着てみる（後書き）

夜明「そろそろ来る頃だと思うんだがな・・・」

太陽「夜明、あれじゃないのか？」

夜明「お、来た来た」

月光閃火「と言うわけで」

輝刃「セシリア！　貴様に料理の基礎をたたき込みに来た!!　・・・所で、肝心のセシリアはどこに行った？」

夜明「俺の後ろでチワワよろしく震えてます」

月光閃火「そうか。一つ聞きたいんだが夜明。お前と太陽、セシリア以外の面子はどうした？」

太陽、無言である方向を指差す。二人がその先を見ると、そこには・・・。

一夏・箒・鈴音・シャル・ラウラ「「「「「・・・」」」」」

物言わぬ骸となった五人の姿が。

輝刃「・・・何故、彼等はあんな変わり果てた姿に？」

太陽「いやですね。お客様が来るのだから、失礼なものを出しちゃ

いけないと五人にセシリアの料理を毒味、もとい味見をしてもらったのですが・・・あの有様です」

月光閃火「これは・・・重傷だな」

夜明「これが犯人（セシリア）が使用（りょうり）した凶器です」

夜明、謎の気泡を放つ七色のスープ的な物を差し出す。

輝刃「セシリア。一応聞いておくが、これは何かね？」

セシリア「び、ビーフシチューなのですが・・・」

ブチィ！！

月光閃火・輝刃「「どこの世界に気泡を放つビーフシチューがあるんじゃあああああ！！！！！！！！！！」」

激高する二人。ビーフシチュー、改めスープ的な物をセシリアに叩きつける。

セシリア「！”＃＄％＆’（）～＝＋@＜＞！！！！！？？？？？」

太陽「って何してんだアンタらぁぁぁぁ！！！！　料理を教えに来た人が、料理を教える相手を半殺しにしてどうすんの！？」

月光閃火・輝刃「「・・・・・・・・・・・・はっ！！」」

太陽「はっ！！　じゃないだろうが！！！！！！！！」

夜明「セシリーしっかりしろ！！　セシリー！　セシリー！！！！！」

セシリア「刻の・・・刻の涙が、見えます・・・わガクゥ」

こんなんで良いんでしょうか？

シャルロット、お母さんになる

夜明達が月光市にやって来て三日目。月光市は異常なまでの活気に満ちあふれていた。理由は明日から明々後日までかけて行われる月光市の祭典、月光祭である。月光市全てを巻き込む祭りなので、人々の活力たるや、祭りの準備中からクライマックスだ。

「釘が足りねぇぞ！　さっさと持って来いやボケナス！！」

「材料が足りない？　んなもん気合で何とかしやがれ！！」

「人手が足りない！　誰か、援軍を頼む！！」

こんな感じの会話が、怒号、拳、蹴り、金槌、電動鋸なんかと一緒に飛び交っている。何も知らない人が見れば、月光市の住人が全員殺人鬼になったと確信するに違いない。そして、月光組も例外ではなく。

「野郎共！　俺たちの特技は何だ！！？？」

「「「「「「「「「大騒ぎ！　大騒ぎ！　大騒ぎ！！！」」」」」」」」」

「俺たちの目的は何だ！！？？」

「「「「「「「「「「月光祭の成功だ！　成功！　成功！！！」」」」」」」」」」

「月光組を愛しているか！？　月光市の皆様を愛しているか！！？

？」

「「「「「「「「「「ガンホー！　ガンホー！　ガンホー！」」」」」」」」」」

「よし！　作業開始！！！！」

鬼教官と化した太陽の指揮下、月光組の組員達が忙しそうに動き回っていた。月光（かれら）組の場合、自分達の店だけではなく、住民達の店の手伝いもしなければならないので、その忙しさは文字通り目が回るほどだ。

「私はこれから服貸し出し屋の出店、コスプレ店を手伝ってくる！　野郎共も気合を入れていけ！！」

指揮官である太陽も、前線に身を投じて手伝いに勤しんでいる。凡に夜明達は何をしているのかと言うと・・・。

「お～い！　山姥の衣装どこに行った！？」

「夜明！　この小物ってどこに置いておけばいいの！？」

「夜明さん！　一階の廊下の装飾について相談したいことがあるのですが・・・」

「夜明！　やはり登場するお化けに吸血鬼（ヴァンパイア）を入れるべきだと思うのだが・・・」

「夜明！　こっち手伝って！　僕だけじゃこの腕白ちゃん達を相手取るのはきついよ！！」

忙しそうに動き回っている。一夏、箒、セシリア、鈴音、ラウラは月光孤児院に預けられている年齢の高い子供達と一緒に夜桜の指揮の下、お化け屋敷の準備をしていた。一方、シャルは年齢が低い子供達の相手を一手に引き受けている。夜明はその両方を手伝っている感じだ。何故にシャルと夜明が二人だけで小さい子供達を相手にしているのかと言うと、その経緯は凡そ、一時間ほど前に遡る。

「それで夜明、俺たちに手伝って欲しいことって何だよ？」

鬼教官モードになった太陽をガタガタ震えながら見ていた一夏達（ラウラ除く）。そこに丁度よく夜明に呼ばれ、急いで走ってきた訳である。少しでも早く鬼教官モードになった太陽から遠ざかるため、一夏達は廊下を走った。指示された部屋まで来ると、夜明がいた。浮かべている表情は些か渋い。

「お前等なぁ、仮にもここは宿なんだから廊下を走ったりするなよな」

「あぁ、悪い。それで、俺たちに手伝って欲しいことって、やっぱり月光祭絡みのことなのか？」

「ま、その認識で間違っちゃいねぇよ。詳しくはこれを見てくれ」

一夏の問いに頷きながら、夜明は手に持っていたチラシの様なものを渡す。

「これは・・・お化け屋敷？」

ざっとチラシに目を通した箒は眉を少しだけ上げながら夜明を見た。疲れたように頭を掻きつつ、夜明はため息を吐きながら事の次第を話し始める。

「月光組が孤児院をやってるってのは前に話したよな？」

一同、頷く。月光温泉宿から少し離れた所に、月光孤児院がある。大きさは結構なもので、そこにいる孤児の数は五十人は越えている。

「それがどうしたの？」

首を傾げながらシャルは訊ねた。余程疲れることがあるのか、夜明は再び深いため息を吐く。

「実は昨日の夜、夜桜姉さんが孤児院に行った時、子供達が自分達も何か店をやりたいって言い出したんだよ。でも、そんな月光祭が始まる前々日に言われたって、何の用意もしてないから出来る訳も無くて、どうにか諦めてもらおうと思ったんだが・・・これが泣くこと泣くこと」

その時の事を思い出したのか、夜明は軽く表情を引きつらせる。夜明に表情を引きつらせる程なのだから、子供達の泣きっぷりは相当なものだったに違いない。ここまで話を聞いて大方の予想がついたようで、一夏達は苦笑いが混じった表情で夜明を見る。

「大体分かった。早い話、俺たちにその準備の手伝いをして欲しいんだろ？　にしても、何でお化け屋敷なんだ？」

「子供達たっての希望だ・・・それじゃ、悪いけど手伝ってくれや」

夜明に連れられ、孤児院にやってきた一行。孤児院の前では夜桜と

年齢の高い子供達を中心にお化け屋敷の準備が進められていた。

「夜桜姉さん、助っ人連れてきたぞ～」

大声で夜明が呼ぶと、夜明達に気がついた夜桜は手を振る。準備を手伝っていない、と言うか手伝えない小さな子供達は夜明に気付くと、遊ぶのを止めてわらわらと夜明に走り寄ってきた。

「兄ちゃ～ん」

「兄ちゃん、一緒に遊ぼ！」

「あぁ～、分かった分かった。後で遊んでやイデデデ！！！　髪の毛を引っ張るのは止めろって言ってんだろ！！」

誘蛾灯に引き寄せられる蛾よろしく近づいてくる子供達を適当に受け流し、夜明は準備を手伝おうとするが、子供の一人が夜明の腰まである髪を掴んだので、否応なく相手をすることに。

「本当に子供に懐かれてるよな、夜明って」

歩いてくる一夏達に気付くと、子供達は夜明の後ろに隠れてしまった。年齢の高い子達はともかく、小さな子供達はかなり人見知りをするらしく、一夏達を見ると逃げてしまう。特にラウラを見ると、蜘蛛の子を散らすように逃げてしまう。そして、その反応は少なからずラウラを傷つけていた。

「ふふ、大丈夫だよ。お姉ちゃん達は何にもしないから」

シャルが一歩前に進み出てくると、子供達は夜明の背後から出てく

る。何故だかこの子達、シャルにだけは懐くのだ。子供達に囲まれるシャルを見て、ラウラは少しだけ羨ましそうな表情を浮かべる。

「夜明さん、早速で悪いのですが、この子達の相手をお願いできないでしょうか？　少しでも目を離すと何をするか分からないので・・・所で、何故一夏さん達がここに？」

「俺が手伝ってくれって頼んだ」

「あらら、それでわざわざ？　ありがとうございます」

夜桜に頭を下げられ、慌てて一夏達も頭を下げ返す。夜明が子供達の相手をしている横で、夜桜はテキパキと一夏達に指示を与えていった。一夏、箒、セシリア、鈴音、ラウラは夜桜と一緒にお化け屋敷の準備。夜明とシャルは子供達の遊び相手だ。

「準備って、具体的には何をすりゃいいのかしら？」

「さぁ？　でも、一つ確実なのは夜明さんよりも楽だと言うことですわ」

確かに、と皆は頷く。

「あだだだ！！！　俺の髪で綾取りをするんじゃねぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！」

こんな声が聞こえてくるのだから、その認識は間違ってはいないだろう。

そんなこんなあって二、三時間後。準備は順調に進んでいる。その様子を、夜明とシャルは遊びながら眺めていた。もっとも、眺めている余裕があるのはシャルだけだが・・・。

「お母さん、鶴が出来たよ！」

「私は蛙！」

「皆、凄いね～」

折った折り紙を片手に見せてくる子供達に、シャルはパラパラと拍手を送る。何故か、この子達はシャルのことをお姉ちゃんではなく、お母さんと呼ぶ。シャルの母性が溢れまくっているのか、それとも年増と思われているかのどっちかだ。後者だった場合、彼女は確実に泣くだろう。凡に夜明は。

「ちょ、お前等待て！　流石にそんな乗られたら背骨が折れあぐわぎゃあああああ！！！！！！」

他の腕白共に押し潰されて、下敷きになっていた。異常な身体能力を持っている夜明だが、その身体能力は主に速さに傾いている。なので、力はあまり無く（と言っても、常人を上回っているが）、十数人の子供達のボディプレスはきついらしい。子供達の下敷きになっている夜明を、シャルは苦笑いしながら引きずり出した。

「ほら皆。お兄ちゃんと遊びたいのは分かるけど、こんなことしちゃダメだよ」

熊や虎とじゃれてるのならともかく、子供達と遊んでて圧死したなんて笑えない。子供達の下から夜明を引きずり出したシャルは、夜明の頭を膝枕して、甲斐甲斐しく介抱し始めた。

「夜明、大丈夫？」

「あ、あぁ。何とかな・・・世界が潰れて見えたぜ・・・」

膝枕の状態で話す二人を見て、一人の子供が大声でこんな事を言い放つ。

「夫婦だ！！」

「「ぶほぉっ！！！！！？？？？？」」

何か口に含んでた訳でもないのに、二人の口から何かが噴き出した。
咳き込む二人を意に介さず、二人を見て夫婦と叫んだ男の子は夫婦
夫婦と叫びながら走っていく。それもセシリア達が作業をしている
方向に。

「待て庄司！　それは色々とやばいから！！」

命の危険を敏感に察知し、夜明はその男の子の後を慌てて追いかけ
ていった。一方のシャルは、真っ赤に染めた頬に両手を添えている。

「ふ、夫婦。僕と夜明が夫婦・・・えへへ♪／／／」

何か、もの凄く嬉しそうな顔でピンク色の妄想を広げていた。

その後、男の子を捕まえることが出来なかった夜明は、セシリア、鈴音、ラウラから説教（肉体言語を伴う）を受け、死んだように眠っていた。夜明に説教と言う名の折檻を加えた三人は、怒ったまま昼食を食べに月光市へと向かった。一夏は箒の手料理を食べさせて貰っている。夜桜とシャルはその仲睦まじい光景を、少し離れた所で見ていた。夜桜の周りには子供達、シャルの膝には夜明が眠っている。

「幸せそうですわね、一夏さんと箒さん」

「そうですね。恋が実ってないこっちにしてみれば、羨ましさの余り死にそうですよ」

どこか黒いものを含んだ笑顔で、シャルは幸せそうに弁当（箒手製）を食べている二人を見ていた。それから視線を膝で眠っている夜明に移し、本当に愛おしそうに夜明を撫でる。その光景を見て、夜桜はクスクスと笑う。

「フフフ。本当に夜明さんは女性の心を掴むのがお上手ですわね。こんなにも魅力的な女性達の心を奪っているのだから」

「本当、節操なしも良いとこですよ」

あはは、と苦笑いを浮かべ、シャルは夜明を見つめ続けた。さっきまで三人の折檻を受けた後遺症で呻いていたが、今は穏やかな寝息を立てている。ふと、夜明の寝顔に見入っていたシャルの胸中にある疑問が浮かんできた。夜明を好きになった時からきになっていた事。

「あの、夜桜さん。少し聞きたい事があるんですけど」

「私の答えられる範囲であれば、答えて差し上げますわ」

「夜明が言ってる、貫きたい信念、背きたくない誓い、護りたい世界って何なんですか？」

「・・・」

シャルの問いに答えず、夜桜は見定めるような視線をシャルに送る。穏やかな雰囲気を漂わせている夜桜から刀にも似た空気を感じ、シャルは思わず目を逸らしそうになる。シャルが目を逸らすよりも先に、夜桜は刀のような空気を引っ込めた。

「シャルロットさん。それは私の口からでは何も言えません。それは、夜明さんの口から話されるべきことです」

「そ・・・うですか・・・ならもう一つだけ聞かせてください。何で、夜明はこんなにも強いんですか？」

セシリアの傲慢を粉々に砕き、正体不明（アンノウン）の敵から鈴音を護り、シャルを迷いの中から導き、ラウラを歪んだ世界から救い出した。どれ

も、並みの人では出来ない芸当である。だが、夜桜はゆっくりと首を振った。

「いいえ。夜明さんは強くはありませんよ。どこにでもいる、とても元気のいい男の子です」

夜明みたいなのがどこにでもいたら、世界はおかしな事になっているだろう。シャルがその事を指摘しようとすると、夜桜は真っ直ぐな視線をシャルの膝で眠る夜明へと向けた。

「夜明さんは強いわけではありません。強く在ろうとしているんです」

「・・・何故？」

「・・・昔、夜明さんが旅に出ていたことは知っていますわね？その時・・・太陽さんに出会う以前ですが、中東のどこかの国で内紛に巻き込まれ、仲良くなった人達が目の前で皆、死んでしまったそうです」

「え・・・」

「その時からですわ。夜明さんが己を護る力ではなく、誰かを護るための力を求め始めたのは」

夜桜から話されたことの意味が理解できず、シャルは固まる。夜桜は手を伸し、そっと夜明の頬を撫でた。

「本当に、その時からこの子は無茶をするようになりました。誰かの為に命を懸けるのは当たり前、己の存在全てを懸けて、誰かを救

おうとする・・・この子の義姉としては、そんなブレーキが壊れた車のような生き方はして欲しくありませんが・・・同時に、この子のことをとても誇りに思います」

夜明の頬から手を離し、夜桜はシャルに頭を下げた。

「シャルロットさん。夜明さんのことを、見ていてあげてください」

お化け屋敷の準備へと戻っていく夜桜の後ろ姿を見送り、シャルは夜明の寝顔に視線を移した。

「・・・そう言えば、君は旅に出てからと、太陽に出会うまでの間を話したことが無かったね」

聞こうとしても、のらりくらりと逃げられてしまう。シャルは夜明の額を撫でていた手を背中に回し、夜明を抱き寄せた。後頭部に手を宛い、ゆっくりと引き寄せていく。

「何時か教えてね、君の全てを。僕も、君に僕の全てを知って欲し

い・・・だから」

君のことをもっと好きになるから、僕のことを好きになって。腕の中で眠る少年を愛おしく思いながら、シャルは寝ている夜明に口付けをした。

シャルロット、お母さんになる（後書き）

夜明「今回のはクオリティが著しく低いな・・・」

太陽「同感だ。シャルはこんなキャラではないと思うのだが・・・。そう言えば月光閃火殿、セシリアの料理修行はどうなっているんですか？」

月光閃火「難航してるよ・・・あんな感じに」

輝刃『このバカがあああああ！！！！！！！！』

セシリア『ごめんなさいぃぃぃぃ！！！！！！！』

夜明「おぉ、肉体言語を伴う修行か」

鈴音「さ、流石にあれはやりすぎじゃ・・・」

月光閃火「そうでもないさ。こいつを見てくれ」

太陽「？　何だこれは？　くず鉄の固まり？」

月光閃火「輝刃が教えた通りのレシピで作ったシチューに、セシリアが余計な一手間（げきぶつ）を加えたステンレス製鍋の成れの果てだ」

夜明・太陽・鈴音「「「・・・（汗）」」」

セシリア、夜明の涙を見る

ジジ・・・と月光市の至る所に設置されている放送機器から小さなノイズが流れ出てくる。数秒ほどノイズが続き、声が聞こえてきた。

『あ～っと、何か小難しい話とかしなきゃいけないみたいで、もの凄く面倒だから誰かに替わって欲しいなんて嘘です！　嘘だからその刀を引っ込めてくれ銀河！！』

月光祭が始まるので、月光組組長である夜雲から始まりの挨拶的な物があるようなのだが、放送機器の向こう側から流れてくる夜雲の声はビックリするほどやる気がない。そこに抜き身の刀を持った銀河が現れたのだろう、ドタドタと言う騒がしい音と、夜雲の切羽詰まった声が流れてきた。数秒後、何かが切り捨てられる音と、夜雲の断末魔が響く。

『・・・愚兄が済まなかった。では、これより月光祭の始まりを宣言する！』

銀河が始まりを宣言した瞬間、月光市内に住民達の歓声が爆発した。誰も夜雲の断末魔が響いてきたことに突っ込まないことを見ると、銀河が夜雲を切り捨てるのは日常茶飯事らしい。

「おいおい、誰も夜雲兄貴の悲鳴に関して突っ込まないのかよ」

「・・・そう言う夜明さんこそ、眉一つ動かさずにいますわね」

「まぁ、夜雲兄貴が銀河兄貴に殺されかけるのはいつものことだからな」

ケラケラと笑う夜明を、セシリアは何とも言えない表情で見ていた。今、夜明とセシリアは二人だけで出店が並んでいる月光市の道を歩いていた。夜明はジーパン、白いTシャツ、星空の黒い羽織を着ている。その隣りを歩いているセシリアはと言うと、浴衣を着ていた。髪型は頭の上で団子状に丸め、目にも鮮やかな蒼地に、白く輝いているように見える星が鏤められている。

（夜明さんと二人きりでお祭り・・・私の浴衣姿、変じゃありませんわよね？）

嬉しそうな表情を浮かべたと思えば、慌てたように自身の姿に視線を落とすセシリア。百面相を浮かべるセシリアを、夜明は不思議そうな表情を浮かべて見ていた。何故にセシリアが夜明と二人きりなんて美味しい状況にいるのかというと、太陽達とのジャンケンに勝ったからである。一日目はセシリア、二日目は太陽、最後の日は鈴音が夜明と二人きりで祭りを楽しむことになっていた。運悪くジャンケンに負けたシャルとラウラは、血の涙を呑んで我慢することになった訳だ。

「にしても、他の皆はバラバラに行っちまうし・・・皆で一緒に色々と回りたかったんだけどな・・・」

隣りに美少女がいるにも拘わらず、この発言。セシリアは笑顔のまま握り拳を作り、拳に青筋を作るが、好きな人と祭りを楽しめることに変わりはないので怒りを収めることに。取り敢ず、今のところの彼女の目標は夜明と手を繋ぐことだ。

「それにしても出店のバラエティーが尋常じゃないな。メジャーなのは綿菓子焼きそばたこ焼きかき氷。マイナーなのだと占いにモグ

ラ叩き、大人の玩具屋って何だよ・・・」

普通の出店の間にポツンとあるいかがわしい名前の店。実際はパズルやらルービックキューブなどの小難しい玩具を扱っている店であって、いかがわしい物を売っている訳ではない。まぁ、そんなことは置いといて。

（このまま自然に、さり気なく夜明さんの手を握って・・・）

夜明がキョロキョロと出店に視線を走らせているのをいいことに、セシリアは尋常じゃない輝きを帯びた目をしていた。そのギラつくような視線の先にあるのは夜明の左手。スターライトｍｋ？で敵に狙いを定める時と同じ目で、セシリアは夜明の左手を睨む。

（まだ・・・まだ・・・今ですわ！）

迅雷一閃。空気を切り裂くように伸びるセシリアの手。その手は狙い違わず夜明の左手を握る・・・筈だったのだが。

「お、あっちに面白そうな店があんな。行ってみようぜセシリー」

夜明がひょいと方向転換してしまった為、セシリアの手は虚しく宙を彷徨うことに。何もない空間に手を伸すという、かなり奇異な姿をしてしまい、セシリアは夜明の後ろ姿を睨み付けた。

（よ、夜明さん！　もしかしなくても、あなた態とやってらっしゃいません！？）

涙目のセシリア。セシリアの考えが当たっているのなら、夜明は相当な碌でなしだ。まぁ、この男の場合、態ととかではなく偶然だろ

うが・・・。数歩歩いた所で、隣りにセシリアがいないことに気がついた夜明は振り返り、自分を睨んでくるセシリアに視線を向ける。

「何してんだセシリー？　ほら、行くぞ」

スタスタとセシリアに歩み寄り、何の躊躇いもなく手を握って夜明はセシリアを引っ張っていった。

「っ！？　よ、夜明さん・・・」

いきなりのことでセシリアは驚くが、過程はどうあれ、夜明と手を繋ぐことが出来たのだから結果オーライである。手を繋いだまま歩くこと数十秒。夜明が面白そうと称した出店が見えてきた。そこにあったのは金魚すくいの出店、ではなく。

「珍魚すくい？」

出店に書かれている店名を見て、セシリアは訝しげに眉を顰める。その珍魚すくいなる店にはたくさんの野次馬が集まっていた。だが、やろうとする者は一人としていない。それもその筈、本来、たくさんの金魚が泳いでいるはずの水槽にいるのは・・・。

「電気ウナギに電気ナマズ。こっちにいるのはアロワナにピラニア・・・おいおい、スッポンとワニガメは魚じゃねぇだろ・・・」

等々の、危険極まりない魚（？　と思われるのも含まれているが）なのだから。電気ウナギが電流を放ってピラニアを捕食し、ワニガメがスッポンを甲羅ごと噛み砕いている光景は地獄絵図と言っても過言ではない。

「・・・見なかったことにしましょう」

「・・・それが賢明だな」

少し気分が悪くなったので、二人は珍魚すくいの店から離れた。特に二人の興味を引く出店もないので、二人は手を繋いだままの状態で歩いてる。そうしていると、セシリアの意識は夜明と手を繋いでいる右手に集中していった。

（夜明さんの手、暖かいですわ・・・）

夜明の手から伝わってくる体温は常人のものよりも少し高く、妙に人を安心させる。セシリアがほっこりとした表情を浮かべていると、夜明の歩みが止まった。

「・・・」

物思いに耽るような、痛みに耐えるような複雑な表情を浮かべ、夜明は無言である所を凝視している。夜明の様子を不審に思い、セシリアは夜明の視線を追っていった。そこには小さな出店、いや、出店と呼べるほど高尚なものではない。地面にブルーシートを広げ、その上に商品であろう手作りの人形が置いてあるだけだ。

「夜明さん。夜明さん」

「・・・！！　あ、あぁ、悪い。ちょっと昔のこと思い出してさ」

セシリアに袖をちょいちょいと引かれ、夜明は苦笑いを浮かべながら頭を掻く。

「昔のこと・・・ですの？」

「あぁ。つっても、三年くらい前のことだけどな・・・セシリア、ちょっと良いか？」

そう訊ねる夜明の顔には、年不相応な哀愁のようなものが漂っていた。

「少しばっか、愚痴りたくなった」

「まず、この話を始めるにはあの時の事を話さないとな。世間には発表されてなかったけど、小さな頃に俺と一夏は謎の組織とやらに誘拐されたことがあるんだ」

あの後、夜明は二人分のラムネを買って、少し祭りの騒ぎから遠ざかった人気のない公園へとやって来た。最初、セシリアは人気の無い所に連れてこられたので、何か色っぽいことを期待していたが、夜明の雰囲気が普段とは違ったものになっているのに気付き、流石にそんな考えを捨てた。夜明は公園にあるブランコに腰掛け、セシリアは隣りにあるブランコに腰掛ける。

「その時、モンドグロッソに出場してた姐さんと、どこかで情報を掴んできた夜雲兄貴と銀河兄貴が助けに来てくれたんだけど・・・助けられることを待つことしか出来なかった自分が凄く情けなくなってな」

自分達を攫っていった誘拐犯に対し、何の抵抗も出来なかった自分。その時の事を思い返すと、未だに夜明は腸が煮えくり返るような怒りを感じた。

「でも、それは致し方の無いことですわ。まだ幼かった夜明さんと一夏さんが無事だっただけでも奇跡だと思いますわ」

「それでも自分が許せなかったんだよ・・・その時から俺は強くなることに固執するようになった。もう、誰かに助けられるのを待ってるだけなんて、嫌だったから」

そこまで言った所で、夜明は自嘲気味の笑みを浮かべる。

「毎日毎日、身体がぶっ壊れるような鍛え方をして、確かに俺は強くなった・・・自分の身だけしか守れない、クソ下らない力を手に入れた」

吐き捨てるように呟き、夜明は話を続けていった。

「そんなクソ下らない力を得て、誰よりも強くなったと勘違いしてた俺は世界に旅立った・・・色々な国を回ったよ。時々、密入国して、その国の警察と鬼ごっこをする羽目になったことが何度かあったけど・・・」

「そ、それは・・・」

遠い目をする夜明。セシリアは頬を引きつらせている。今の話、笑ってスルーするに、ちょっとばかし洒落にならない。ペシペシと頭を叩いて正気を取り戻し、夜明は飲み終わったラムネの瓶に視線を落とす。

「旅を始めてから半年くらい経った頃かな。俺は中東にある国に滞在してたんだ。貧しくて小さな村だったけど、住んでる人達は皆、いい人達だった・・・滞在して一週間くらい経った頃だな。その国で内紛が起こった。場所は俺が滞在していた村だ」

「え・・・」

思わず絶句するセシリアに曖昧な笑みを向け、夜明は組んだ両手を額に押しつけた。

「当然、俺もその内紛に巻き込まれたよ。俺の世話をしてくれた人達や、仲良くした子達を守ろうと思った・・・けど」

現実は無情だった。夜明は周りの人を守るどころか、自分自身のこととさえも守ることが出来なかったのだ。出来たことと言えば、致命傷を避けることだけ。

「内紛が始まったのが早朝で、終わったのが夕暮の時だったな。俺は両脚を撃ち抜かれて、這うようにしか動けなかったんだ。生きてる人を助けようと、必死に動き回ってたんだけど、皆殺されてた」

無言で話を聞いていたセシリアはふと、夜明の声に湿ったものが混じっていることに気がつく。

「最後に見つけたのが俺を世話してくれた人達。まだ息はあったけど、素人の俺が見ても分かるくらいの重傷だった。すぐに手当をすれば助かったのかもしれないけど、俺はそれが出来なかった・・・」

「夜明さん・・・」

両脚を撃ち抜かれ、這うような動きしかできなかった夜明に手当は疎か、助けを呼びに行くことさえ出来なかった。組んだ両手を額に押しつけ、視線を地面に落としている夜明の肩が小刻みに震え始める。

「俺は、何も、出来なかった・・・目の前で、あの子が泣いてたのに、傷だらけで、血だらけで、泣いてたのに、俺は、何も・・・」

あの時のことは一生忘れない。己の無力さを心から呪い、血が出るまで拳を地面に叩きつけ、嗄れるまで泣き続けたあの時のことを。

「夜明さん！」

「俺は、自分が、情けなくて・・・、死ぬほど情けなくて！」

「夜明さん！！」

手の甲に指が食い込み、血が流れ出す。肩を震わせ、歯を食いしばって嗚咽を漏らし始めた夜明を、セシリアは無意識の内に抱きしめていた。

「俺は、俺は・・・あああああああああ！！！！！！！！！！！！」

嗚咽は何時の間にか、慟哭へと変わる。涙で浴衣が濡れるのも構わず、セシリアは夜明を力の限り抱き締めた。

「・・・悪い。みっともない所を見せた」

数分後、泣き止んだ夜明は赤くなった目尻を拭いながらセシリアに謝罪する。慈しむような笑顔を浮かべ、セシリアは夜明の頬を伝い落ちる涙を拭き取った。

「泣くことはみっともないことではありませんわ。人として、心があるものとして当然のことですわ。それに・・・」

同時に安心もしていた。時々、セシリアは夜明を遠くに感じることがあった。如何なる時であっても飄々とした態度を崩さず、どんな事があっても自分を貫く夜明の姿を。自分などでは、手を伸すどころか、見上げることさえ出来ない所に居るのではないかと。だが、そんな思いも氷解していた。夜明のように強い人間であっても、人並みに弱い部分があり、人並みに泣くのだ。その事にセシリアは安心感を覚え、夜明の意外な一面を見れて、ちょっと得した気分にもなっている。

「それに？」

「な、何でもありませんわ！」

少し頬を赤くしながらセシリアは首を振る。夜明は不思議そうに首を傾げいたが、やがてブランコから腰を上げて夜空を仰いだ。

「だから俺は決めたんだ。信念を貫こうと」

絶対に誰も泣かせない信念。

「誓いに背かないと」

視界に映った人、全てを救う誓い。

「世界を護ると」

自分と一緒にいる人達がいる世界を護る。

「俺は・・・出来てるのかな？」

夜空で煌々と輝いている満月へと手を伸し、夜明は己に問う。その問いに答えたのは己ではなく、隣りにいたセシリアだった。夜明が伸した手に絡めるように、セシリアはそっと手を添える。

「出来てますわ、きっと」

私は、そんなあなたの姿に惚れたのだから。心の中でそっと呟いて、セシリアは夜明に微笑みかけた。途端、夜明の表情は赤く染まった。月の光に照らされたセシリアの微笑みが綺麗すぎて、直視できない。

「あ、ありがと・・・」

そう言うのが精一杯だった。

セシリア、夜明の涙を見る（後書き）

夜明「どうにか書けたみたいだな。そしてセシリーは輝刃先生に鬼の講習を受けてる訳だ・・・」

太陽「さて、セシリアの料理は輝刃殿と月光閃火殿に任せるとして、今回はこの駄作を読んでくださっている皆様に協力を要請したい」

夜明「実は、未来編の話で俺たちの強化パッケージを出そうと思ってるらしいんだが、アイディアが全く出てこないらしいんだ」

太陽「一応、私とラウラ、シャルとセシリアは思いついてるらしいんだが、それ以外の面子はさっぱりだ」

夜明「そこで、皆様からアイディアを募集させていただく」

太陽「夜明、一夏、箒、鈴音のは全くと言って良いほど思いついてないので、彼等の強化パッケージを考えて頂けるとありがたい」

夜明「期限とかは考えてないから、是非に送って欲しい・・・っと月光閃火さん。セシリーの修行は順調ですか？」

月光閃火「あぁ。化学薬品を使わなくなったのは格段の進歩だな。だが・・・」

夜明・太陽「「だが？」」

月光閃火「今回作ったのがオムライスなんだが。何を思ったのかセシリアの奴、オムライスの中身まで黄色にしようと、ライスに大量

のカラシを混ぜやがった」

夜明・太陽「「うわぁ・・・」」

太陽、弱点が発覚する

月光祭二日目。夜明は出店が並んでいる道を練り歩いていた。その左腕には揚羽蝶が舞っている黒い浴衣を着た極道の娘・・・でなくて、太陽が抱きついている。夜明と二人きりでいられるのが余程嬉しいのか、その表情は喜色満面。

「なぁ太陽」

「ん～♪」

聞いちゃいない。夜明はため息を吐きつつ、若干、頬が赤くなっていることを太陽に悟られないように顔をあらぬ方向へと向ける。何故か、今日に限って太陽は胸に晒しを巻いていない。そしてブラジャーもしてない。その状態で夜明の左腕に抱きついているのだ。後は押して測るべし。ふと、上機嫌の太陽は夜明の頬が赤いことに気がつく。

「ん、どうした夜明？　・・・あぁ、そう言うことか」

ニヤリ、と確信犯じみた笑みを浮かべると、夜明の左腕に絡めている両腕の力を強くさせ、夜明に胸を押しつけた。

「こうして欲しかったんだろ？」

「違う！　逆だ！　・・・一つ聞きたいんだが、何で何にも付けて無いんだよ？」

普段の太陽なら、胸に晒しを巻いてる筈なのに、何故に今日に限っ

て何も付けてないのか？　夜明の問いに太陽は頭を掻きつつ答える。

「あぁ～。ほら、私って一般の人と比べると胸がでかいだろ？　だから普段は晒しで押さえ付けてるんだが、偶にどうしても何も付けたくない日が来るんだ」

「それが今日だってぇのか？」

「あぁ」

太陽は夜明から少し身を遠ざけ、身体を揺らした。普段は晒しで押さえ付けられて常人のサイズになっている太陽のバスト。今は押さえ付けているものが何も無いので、スイカやらメロン、と言うかそれ以上のサイズの双山が太陽の動きに合わせて揺れる揺れる。道行く男共は例外なく太陽（の胸）に目を奪われ、彼女持ちは彼女に思い切り抓られている。

「・・・もの凄くデリカシーの無いこと聞くけどさ太陽。お前って胸のサイズどんくらいあんのよ？」

「少なくとも、三桁は越えてたな」

そんな化け物じみた大きさの胸が、重力で垂れることなく突き出ているのだ。恐ろしいことこの上ないし、胸が小さい鈴音やラウラ辺りが知ったら、月光市は地獄絵図と変わり果てるだろう。

「・・・まぁ、お前の胸の大きさなんて俺にとっちゃどうでもいい話だ」

「おいおい、自分から聞いておいてその言い方はあんまりじゃない

のか？」

そんなこんな談笑しつつ、二人は歩いていった。

二人が出店を楽しむこと約一時間。昨日、セシリアと歩いていた時は主に食べ物系統の出店を見ていたので、夜明は今日はアトラクション系の出店を楽しんでいた。金魚すくいやヨーヨー釣り、射的屋や輪投げ屋などの出店で太陽と勝負している。歩いていく二人の両手には、出店から巻き上げ・・・もとい勝ち取った大量の戦利品（

金魚や水風船のヨーヨー、大量のお菓子等々・・・）が。

「勢いに任せて大量に取っちまったが、どうしたもんか・・・」

「孤児院にいる子供達にあげればいいだろ」

二人で話し合った結果、そう言うことになり、二人は祭りの喧騒から離れて、孤児院へと足を向ける。すると、

「百鬼夜行のお通りだぜ！」

「愉快なお化け達と一緒に悲鳴を上げてみないか！？」

「今ならカップル半額ですわ！」

「彼女は彼氏に抱きつくチャンスよ！」

「寝苦しい熱帯夜に冷や汗をかいてみませんか！？」

「恐怖の余り、夜寝れなくなる、トラウマになること請け合いだ！」

お化け、と言うか妖怪のコスプレをした六人の集団が歩いてきた。よくよく見ると、それは一夏達だった。奇怪な格好をした友人達のいきなりの登場に、流石の二人も驚きを禁じ得ない。二人に気がついた一夏達はぞろぞろと歩いてくる。凡にコスプレは一夏が落ち武者、箒が砂掛け婆、セシリアがヴァンパイア、鈴音が化け猫、シャルが夢魔、ラウラがなまはげである。

「何してんだお前等？」

「よ、二人とも。実は、六人で色々と歩き回ってたら夜桜さんに捕まってな。お化け屋敷の手伝いをさせられてるんだ」

彼等も彼等で色々と大変らしい。

「・・・お化け屋敷？」

妖怪の格好をした一夏達を見たその時から、何故か夜明の後ろに隠れている太陽は夜明を見上げた。太陽の視線に気付き、夜明は太陽に言い忘れていたことを思い出す。

「そういや言って無かったな。孤児院だけど、お化け屋敷をやることになったんだよ」

一日で準備した割には、結構完成度高いけどな、と付け加える夜明。その背中に隠れながら、太陽は微かに、本当に微かにだが震えていた。

「にしてもシャル。何だってそんな露出度の高い妖怪（？）の格好を？」

夢魔が妖怪なのかどうかは疑問だが、それは置いておくとして。シャルが着ている妖怪の服は夢魔という種族でもある所為か、かなり露出度が高い。夜明に訝しげな表情で見られ、シャルは恥ずかしそうに身動ぎする。

「わ、若気の至りかな。そ、そんなに見ないで、恥ずかしいから・・・」

「だったら着るなよ」

ごもっとも。何故にシャルがこんなえっちぃ格好をしてるのかと言うと、着る衣装を決める際、偶々、夢魔の服を見つけ、もしこれを着ている自分を夜明が見たら、自分を見る目が変わるかもしれない、と言う下心があったからだ。まぁ、確かに変わってはいる。

「・・・シャルって、露出狂の気でもあるのか？」

かなり悪い方向に。好きな人にとんでもない誤解をされ、シャルは涙目で弁解を始めた。その光景を何とも言えない表情で見ている一同。ふと、鈴音があることに気付く。

「太陽。あんた、何で私達から距離取ってんの？」

鈴音が太陽にした質問で、一夏達はそのことに気がつく。太陽は妖怪の格好をした一夏達から二メートルほどの距離を取っていて、それ以上は近づこうとしなかった。一夏達が近づこうとしても、ギリギリ認識出来るか出来ないかの動きで距離を取っている。太陽の不審な動きに気付き、箒の中である疑問が浮かんだ。

「太陽。まさかとは思うがお前・・・妖怪が怖いのか？」

カチン、と太陽の動きが止まった。

「怖い？　何を言っているんだ箒。いいか、そもそも妖怪、他の呼称で言えば、妖（あやかし）や物の怪というのは日本で伝承される民間信仰において、人間の理解を超える奇怪で異常な現象や、あるいはそれらを起こす、不可思議な力を持つ非日常的な存在のことだ。日本の集落や家屋にみられる、自然との境界の曖昧さによる畏怖や、里山や鎮守の森のように自然と共にある生活が畏敬や感謝になり、妖怪は、

これらの怖れや禍福をもたらす存在として具現化されたものでもある。「神さび」という言葉に代表されるように、古いものや老いたものは、それだけで神聖であり神々しいとされてきた価値観も、妖怪（九十九神）が古い物や長く生きた物の憑き物という解釈と重なるな。そして、現在では妖怪の存在の実証はされておらず、科学が未発達だった時代の呪術的思考の産物や迷信とされるが、日本人の心や思考のあり方を表す一つの事柄でもあるんだ。まぁグダグダと長いことを言ったが、結局、何を言いたいかというと、この世に妖怪やお化けなんて不可思議な存在はいないんだ。故に、存在しない物を怖がるなんて器用なこと、私には出来んよ、箒」

マシンガンの様に捲し立てる太陽。息をする暇は疎か、反論すら許さない太陽に圧倒され、箒は反射的に頷く。

「「・・・」」

太陽がマシンガンの如き早口で捲し立てる様を見ていた鈴音とセシリアは、無言で顔を見合わせた。そして、ある実験をしてみることに。鈴音は大きく息を吸い込むと、態とらしく声を上げた。

「あっれぇ～、あんな所に人魂が浮かんでる～」

刹那、その場にいる者達の視界から太陽が消えた。その場に質量のある残像を残すほどの太陽の動きに、一夏と箒、ラウラは勿論、セシリアや言った当の本人である鈴音でさえびっくりしている。

「・・・と思ったけど、やっぱり見間違いだったみたい」

「そんな事は分かっていたさ」

いきなり地面に穴が開き、地面の中から太陽が出てきた。あの一瞬で穴を掘り、自分に土が掛からないようにしながら、太陽は地面の中に身を隠したらしい。余りの早業に声も出ない皆。だが、これで確信が持てた。太陽はお化けや妖怪の類が怖いのだと。

「太陽。あんたやっぱお化けとか怖いんじゃん」

「そんな事実は断じてない」

「では、あの人外じみた動きは何でしたの？」

「私の命を狙ってきたゲリラに対する対応・・・の練習だ」

淀みなく、それでいて無茶苦茶だと分かる太陽の言い分。一夏と箒、ラウラは顔を見合わせて苦笑いを浮かべる。だが、鈴音とセシリアは、それはそれは小悪魔のような笑みを浮かべる。普段から太陽にからかわれることが多い二人。どうにか仕返しをしてやりたいと考えているのだが、この二人が太陽に仕返しなど出来るわけも無く、何時も手痛いしっぺ返しを受けているのだ。太陽の苦手な物が分かった今、二人の心は太陽に仕返しすることで埋め尽くされている。

「ふ～ん。お化けが怖くないなら、お化け屋敷に寄ってってくれるわよね？」

「え！？　いや、夜明も一緒だし、それは私の一存では・・・」

「夜明さん。太陽さんが是非、一緒にお化け屋敷に行きたいと言ってらっしゃいますわ」

夜明を理由にして太陽が逃げる前に、セシリアが先手を打った。今

にも泣きそうになっているシャルを撫でている夜明は何の疑いもなく太陽を見る。

「え？　太陽、そうなのか？」

夜明に問われ、太陽はぐっ、と返答に詰まった。まさか、好きな人にお化けが怖いから嫌です、何てこと言える訳もない。太陽は表情が青ざめそうなのを押え、ぎこちない笑みを浮かべる。

「じ、実はそうなんだ・・・（鈴音、セシリア。何時かお前等に地獄を見せてやる）」

復讐を誓った太陽の後ろで、鈴音とセシリアは夜明から見えないようにハイタッチを交わした。

「でもさ太陽。お前って」

「はいは～い。お話は後にしてお化け屋敷に行くわよ～」

「愉快なお化けさん達が待ってますわ」

夜明が何かを言いかけるが、鈴音とセシリアが夜明の両腕を取ってさっさと歩いていく。こうして、太陽はなし崩し的にお化け屋敷を楽しむことになった。

「それでは、恐怖の一夜を楽しんでこい」

受付係であるラウラに見送られ、二人はお化け屋敷と化した孤児院に足を踏み入れる。このお化け屋敷、結構人気があるらしく、かなりの数の人が入っていた。凡に、二人は今日の最後の客である。

「にしてもお化け屋敷か。この歳になって入ることがあるとは思ってなかったな。なぁ、太陽。・・・太陽？」

何の返答も返ってこないので、夜明は隣りを歩いている太陽に視線を向けた。

「作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物

だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ作り物だ・・・」

何か凄いブツブツ言ってる。夜明は苦笑いを浮かべ、太陽のスピードに合わせて歩いていった。入り口を真っ直ぐと歩いていった廊下の曲がり角で、何かがぶら下がっている。夜明が受付でラウラから渡された懐中電灯を向けると、

「おぉ、良く出来てるな」

「・・・・・・・・・・!!（声にならない悲鳴）」

真っ赤な血を滴らせた生首が。夜明には微塵も驚いたり怖がる様子はないが、太陽は涙目になって両手をブンブン振っている。

「大丈夫かよ、太陽？」

「う、うぅ・・・問題・・・にゃい」

恐怖の余り、噛み噛みになっている。太陽の強情さに呆れたような笑みを浮かべ、夜明は歩いていく。階段を上っていると、何かが階段を跳ねながら落ちてきた。そして、その何かは太陽の手にジャストフィット。

「・・・」

微かに血のような塗料が付着した頭蓋骨。それが太陽の手の中で、物言わず（当然だが）太陽を睨んでいた。顔が真っ青＋涙目＋震えて動くことが出来ない太陽を見かね、夜明は太陽の手から頭蓋骨を

取り上げて、そこら辺に放り投げる。

「行けるか？」

「・・・（コク、コク）」

夜明の問いに涙目のまま頷いた。夜明は今にもガン泣きしそうな太陽を心配しながらも、取り敢ず進んでいった。

口裂け女、登場。

「・・・！！」

ゾンビ、登場。

「・・・！！！！！」

提灯お化け、登場。

「・・・！！！！！！！！！」

最早、太陽には恐怖の叫びを上げる気力も無いらしい。・・・最初からあったのかどうか疑問だが。とうとう、太陽はその場に女の子

座りして泣き出してしまった。

「あぁ～、やっぱ止めとくべきだったな」

相方が泣き出してしまったのを見て、夜明は今更ながらに太陽を止めなかった事を後悔。

「・・・う、や・・・」

「あ？」

太陽は小声で何かを呟く。だが、余りにも声が小さすぎて聞こえない。太陽の声を聞き取ろうと、夜明が身を屈めた瞬間。

「もういやぁぁぁーーーーーーーーーーっ！！！！！！！！！！！！！！」

「ちょ！？　太陽！？」

突如叫び声を上げ、太陽は泣きながら走り去っていった。夜明の声も届かず、太陽は物の数秒で夜明の視界から消え去る。暫しの間、夜明は呆然としていたが、慌てて太陽を追いかけていった。

「怖かったよ～」

「はいはい。もう大丈夫だからな」

数分後、物置の隅で泣きじゃくっている太陽を夜明が見つけ、お姫様抱っこをしてさっさとお化け屋敷から脱出した。現在、太陽は恥も外聞もなく泣きながら夜明の胸に顔をグリグリと押しつけている。夜明にポフポフと撫でられている太陽を見て、意趣返しが成功した鈴音とセシリアは複雑な、シャルとラウラは羨ましそうな表情を浮かべた。

「お前等な・・・幾ら太陽にからかわれてるからって、あれはやりすぎだろ」

「あれでもあいつは女の子なんだ。泣かせるのは、同性としてもどうかと思うぞ」

「「ごめんなさい」」

一夏と箒に説教され、二人は反省した様子。そのまま、泣いてる太陽を連れて夜明達は屋敷へと戻った。

夜中。

「はぁ、何だか今日は疲れたな。にしても、太陽の奴、まだお化けとかの類が苦手だったのか・・・」

深々とため息を吐き、夜明は眠ろうと布団を敷き始めた。太陽のケアは箒、シャル、ラウラに任せているので、問題ないだろう。布団を敷き終え、寝ようとすると、コンコンとノックの音が聞こえてきた。

「？　誰だ？」

こんな時間帯に訊ねてくる者も珍しいので、夜明は不思議そうにしながら扉を開く。そこには・・・

「こ、こんばんわ・・・」

無地の寝間着を着た太陽が枕を抱き締めて立っていた。

「太陽か。どうした？」

夜明の問いに、太陽は消え入りそうな声で答える。

「こ、怖くて、一人じゃ寝れない」

「はぁ？」

余りにも子供っぽい事を言われ、夜明は目を丸くして呆れた表情を浮かべた。太陽は既に十五歳。間違っても、怖いから眠れないと言う年齢ではない。

「お前なぁ・・・ガキじゃないんだから、んなアホなこと言ってねぇでさっさと寝ろよ」

ため息を吐いて扉を閉めようとすると、太陽の手が夜明の手首を掴んだ。

「ど、どうしても・・・ダメ？」

今にも泣きそうな表情で太陽は夜明を見る。普段の太陽なら絶対見せないような表情を浮かべられ、身内にはとことん甘いこの男が断れる訳も無く。

「・・・」

再びため息を吐き、夜明は太陽に部屋に入ってくるよう親指でジェスチャーした。パァッ、と太陽の表情が華やかになり、嬉しそうに部屋に入ってくる。夜明は太陽が寝るための布団を敷いた。

「それじゃ、電気消すぞ」

引っ張って消すタイプの電灯の紐を引き、夜明は室内を真っ暗にした。

「・・・何でお前が俺の布団の中にいんだよ？」

電気を消して布団に潜り込む刹那、太陽は自分の布団から夜明の布団に移動し、夜明に抱きついていた。両腕を夜明の背中に回し、絶対に離さないと言わんばかりに力を込める。

「こいつは・・・」

一瞬、布団の中から叩き出そうかとも考えたが、太陽が余りにも安心しきった表情で胸に顔を擦り付けてくるので、そんな思いも一瞬で消し飛んだ。

「お休み、太陽」

とまぁ、こんな感じで綺麗に終われれば良かったのだが、そう言う訳にもいかず。草木も眠る丑三つ時、夜明は現在進行形で生き地獄を楽しんでいた。原因は勿論この人。

「・・・よあけ・・・だいすき・・・」

寝言で告白してくる太陽である。ここで少し考えて欲しい。太陽は普段、胸に晒しを巻いている。その、晒しで胸を押さえ付けられている状態で常人位のバストを持つ太陽が、下着も何も付けない（寝ているのだから当然）＋薄い寝間着一枚で、全力で夜明に抱きついているのだ。当然、その大きすぎる双山は夜明の胸板に押しつけられることに。

「・・・こ、ここは地獄か？　それとも天国という名の地獄か？」

夜明にとって、この状況は地獄以外の何物でも無いらしい。

（煩悩退散淫魔覆滅家内安全開けゴマエロイムエッサイムテクマクマヤコン）

頭の中で意味を為さない言葉を出鱈目に呟いていく。

「・・・くー・・・」

夜明とは対照的に、これ以上ないくらいの幸せな表情を浮かべて寝る太陽。両腕に力を込め、胸を更に夜明に押しつける。

（持て！　持ち堪えて見せろ俺の理性！！！！！！）

月光夜明。彼の夜はまだまだ長い・・・

太陽、弱点が発覚する（後書き）

夜明「今回はグラタンか・・・そういやセシリーと輝刃さんは？」

太陽「二人なら後片づけをしてるぞ。料理の後は、後片づけをキチンとしてなければいけないらしい」

夜明「成る程。では早速・・・（パク）」

月光閃火「どうだ？」

夜明「うん。完全に成功してただろうな・・・ホワイトソースと間違って、生クリームさえ使ってなかったら」

月光閃火「劇物を使わなくなった次はうっかりミスかよ！？」

太陽「強化パッケージの募集はまだまだしているぞ」

鈴音、仲間と歌う（前書き）

ちろっと編集しました。唄の部分が無くなりますのでご了承

鈴音、仲間と歌う

「・・・い、一睡も出来なかったＺＥ！」

夜明の理性と本能が脳内で、オールナイトでフィーバーな核戦争を行っていた。故に、夜明は一睡も出来ず、テンションも変な感じで右肩上がりである。夜明が寝ることが出来なかったその理由は。

「く～・・・く～・・・」

至福の表情を浮かべ、幸せそうに寝息を立てていた。序でに、胸をこれでもかと夜明に押しつけながら、頬摺りのオマケ付き。今、脳内では本能軍が圧倒的に理性軍を押していた。

（が、頑張れ！　頑張ってくれ俺の理性！！　・・・いや、そこまで頑張らなくてもいいか・・・って、何を考えてるんだ俺は！！！）

軽く理性が飛びかけ、夜明はベシベシと結構な力で頬を叩く。ジンジンする頬からもたらされる痛みで頭が冴えるが、本能が理性を押し始めるのも時間の問題。次に同じような状態になったら、正気に戻る自信が夜明には無い。再び理性が吹っ飛びそうになる前に、夜明は太陽を起こすことに。

「太陽、起きろ。朝だぞ」

軽く頭を叩く。

「エヘヘ、ダメだよ夜明。シシケバブだなんて」

「どんな夢見てんだよ・・・」

返ってきた意味不明な寝言。その寝言が意味することを測れず、夜明の額に一筋の冷や汗が伝い落ちる。更に悪いことに、太陽は夜明の身体に回している両腕の力を強くした。規格外の大きさの双山が夜明の胸で潰れ、夜明の理性をこれでもかと削っていく。

（この世に神はいない！！）

夜明が心の中で叫んだ瞬間。

「夜明さん。朝ですわよ・・・・・・・・・・」

「さっさと起きなさいよ。寝起きが最悪の太陽じゃあるま・・・・・・」

「夜明。早くしないと朝ご飯が冷めちゃ・・・・・・・・・・」

「さっさと起きろ。そして私に朝ご飯を食べさせ・・・・・・・・・」

スパーンと扉が開き、セシリア、鈴音、シャル、ラウラがズカズカと部屋に入ってきた。四人は部屋の敷居を跨いだ辺りで状況に気付き、見事な彫像と化す。

「ち、違うぞお前等！！　これは太陽が怖くて一人じゃ寝れないとか言って、俺の布団に潜り込んできただけであって・・・お前もそろそろ起きろ太陽！！」

四人の周りに視認出来るどす黒いオーラ、四人の殺気で部屋が軋む

音、殺伐とし始めた部屋の匂い、血のような味になった空気、夜明の肌を切り裂く、四人を中心に吹き始める微風。五感全て、序でに第六感でも命の危機を察知し、夜明は死に物狂いで太陽を起こしに掛かった。ベシベシと、太陽の頬が赤くなるまで往復ビンタを続ける。一分ほど続けると、漸く太陽は寝惚け眼を開いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・夜明？」

「起きたか太陽。さっさと俺の布団からで「・・・・・いただきます」むごぉっ！？」

布団の中から出ていくよう促す夜明の言葉を、太陽は己の唇で夜明の唇を塞ぐことで遮る。数秒ほどそのままの状態を保ち、チュポンと音を立てて夜明の口から舌を引き抜いた。

「ごちそうさま・・・うにゅぅ・・・」

ブチィッ！！！　と四本の糸が同時に切れる音が室内に響く。夜明は恐る恐る、音の発生源であろうセシリア達に視線を向けた。

「「「「・・・・・・・・・」」」」

ＩＳを展開し終え、何時でも夜明の処刑が始められる状態だ。

「お前等、落ち着け。流石に俺も、実家で殺人事件が起こるのは嫌だ」

脳裏で走馬燈が駆けめぐる中、夜明はどうにか後ろへと後ずさろうとする。だが、太陽がしっかりと抱きついているので、まともな動

きが出来ない。

「夜明、愛してるぅ・・・・・・」

火に油、と言うかガソリンを注ぎ込む太陽。鈴音は双天牙月、シャルは盾殺し（シールド・ピアース）、ラウラはプラズマ刃を構え、セシリアは三人の後ろでスターライトｍｋ？の銃口を夜明に向けている。どっからどう見ても、夜明に逃げ場はない。

「・・・夜雲兄貴、夜桜姉さん、銀河兄貴。先立つ不孝をお許し下さい・・・」

夜明は涙混じりの声で呟く。四人が夜明に各々の武器を突き立てようとした刹那、一陣の風が部屋を駆け抜けた。

「・・・朝から騒々しいな。騒ぐのは構わないが、人の弟を手に掛けようとはどういう了見だ？」

双天牙月、盾殺し（シールド・ピアース）、プラズマ刃を片手に握った木刀で受け止め、夜明を護るように銀河が立っていた。スターライトｍｋ？を構えていたセシリアは、既に銀河の手で意識を刈り取られている。

「「「なっ！？」」」

ＩＳを装備した三人の攻撃を生身で受け止めた銀河に、鈴音達は驚きを隠せない。学年別トーナメント前に行われたセシリア＆鈴音ＶＳラウラの私闘の時、割り込んできた千冬のようにＩＳの装備を持っているならともかく、今、銀河が手にしているのは何の変哲もない木刀だ。驚くなと言う方が無理な話である。

「た、助かったぜ銀河兄貴・・・」

「お前も色々と大変の様だな。・・・まぁ、自業自得の色が強いがな・・・」

最後の部分を夜明に聞き取れないくらいの声で囁き、銀河は三人の攻撃を受け止めていた木刀を一振りして、三人を部屋の外へと吹き飛ばした。

「さて貴様等。人の愚弟を手に掛けようとしたんだ。・・・それ相応の覚悟は出来ているな？」

「「「い、いやあああああああああああ！！！！！！！！！！！！」」」

この日、三人は初めて知った。千冬以上の恐怖を振りまける人の存在を。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・」

「もうしませんもうしませんもうしませんもうしませんもうしませんもうしません・・・」

「許してください許してください許してください許してください許してください許してください・・・」

「死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない・・・」

朝食の席。セシリア、鈴音、シャル、ラウラは燃え尽きた真っ白な灰のようになって、食事に手を付けようともせずに譫言を繰り返していた。

「・・・セシリア達の身に何が起こったんだ？」

騒動の後、箒によって叩き起こされた（水風呂の中に頭から叩き込まれた）太陽はみそ汁を飲みながら夜明に視線を向ける。銀河の折檻の一部始終を見ていた夜明は、ただただ、乾いた笑いを浮かべる

しかなかった。

どうにか祭りが始まる頃までには正気を取り戻し、鈴音は意気揚々と夜明の隣りを歩いていた。着ている浴衣は薄紫色の鈴柄。鈴音の足取りは軽く、ツインテールがピコピコと揺れている。

「どした鈴音。何か良いことでもあったのか？」

「うん、現在進行形で♪」

不思議そうな目で訊ねてくる夜明に、鈴音はそう答えた。聞きようによっては好意に気付くであろう答えだが、そこは朴念仁・オブ・朴念仁ズの名を冠する男。

「そっか。そりゃ何よりだ」

気付く訳無い。鈴音は軽くずっこけるが、今は夜明と一緒にいられることを楽しもうと気持ちを切り換える。彼女が機嫌の良い理由は、今夜行われる花火大会にあった。

（二人っきりで花火を見て、良い雰囲気になれば朴念仁の夜明でも、そう言う気分になるはず・・・きっと、多分、メイビー・・・）

そうなる可能性は、限りなく低い。だが、ジャンケンで夜明と一緒にいられるのがこの日になった鈴音はこのチャンスを最大限に生かすつもりである。

（ラウラと太陽は夜明にキスしてるし、シャルロットは子供達から夫婦って呼ばれてたし、一昨日のセシリアは妙に機嫌が良かったし・・・ここで頑張らないと、確実に置いていかれるわ！）

悲壮とも言える覚悟を固め、鈴音は拳を握り締めた。取り敢ず、花火大会が始まるまでには結構時間があるので、夜明と一緒に出店を回ることに。

「そう言えばさ、夜明って昔はここに住んでたのよね？　昔と何か変わったところってあった？」

鈴音の問いに、夜明は考え込むように頭を掻いた。

「変わったところね・・・別に無いな。町の様子とかも変わってなかったし、あるとすればお兄さんって呼んでた人達が、ナイスミドルになってた位だな。・・・あ、でも、珍魚すくいは無かったぜ」

「でしょうね」

珍魚すくいと聞いて、鈴音は表情を真っ青にさせた。一昨日、一人で祭りを楽しんでいたときに偶然珍魚すくいの店を発見したのだが、鈴音が水槽を覗き込んだその時、タイミング良く水槽にいたワニガメがスッポンの首を食い千切ったのだ。以来、珍魚すくいは彼女にとってトラウマになっている。

「まぁ、あんなゲテモノ屋台、行きたいとは思えないよな。行くとしたら・・・」

目の前にある射的屋を指差す。

「こういう普通の屋台だよな」

「同感」

射的屋のおじさんにお金を渡し、二人は空気銃と五発のコルク弾を受け取った。

「鈴音。ただやるだけじゃつまらねぇから、勝負しねぇか？」

「お、良いわねそれ、面白そう。じゃあ、撃ち落とした景品が少ない方がかき氷奢るってのはどう？」

「異論はない」

空気銃の銃口にコルク弾を込め、二人は空気銃を構える。鈴音はちゃんと両手で構え、夜明は片手で構えていた。何を狙うか考えていた鈴音の脳裏に、ふとあることが浮かんでくる。

（もし、私がこの勝負に勝ったら・・・）

～妄想～

『鈴音のかき氷、うまそうだな』

『そう？　でもあげないわよ』

『んなこたぁ分かってるよ』

『・・・あ、あんたがどうしてもって言うなら、一口あげるけど』

『お、マジか？』

『マジよ。はい、あ～ん・・・』

～妄想終了～

（こ、これは良いわね！！）

この妄想を実現するためにも、鈴音はスナイパーのような目で商品へと狙いを定めた。まぁ、そんな不純な思いを抱えたまま勝てる訳もなく。

「・・・」

「あぁ～、何か悪いな」

結果は五対零で夜明の圧勝。ズ～ンと擬音がつきそうなくらい項垂れている鈴音の隣りを、鈴音に奢ってもらったかき氷（イチゴ）を片手に夜明が歩く。

「・・・ふん、いいもん。私は射的もまともに出来ないポンコツだもん・・・」

圧勝されたのが余程悔しいのか、語尾が幼児退行してる。余りにも鈴音が子供っぽく拗ねているので、夜明は苦笑いを浮かべながら鈴音を撫でた。

「ほら、機嫌直せよ。もうすぐ花火大会だぜ」

夜明に撫でられ、鈴音ははふぅ～、と目を細めながら喉をゴロゴロと鳴らす。その様は猫その物だ。鈴音の機嫌が直るまで撫でていると、歩いている人達の間を縫うように太陽達がやって来た。

「お、ここにいたかお前等」

「あ？　太陽？　それに皆も。どうしたんだ、雁首揃えて？」

「これだ」

夜明の問いに答えず、ラウラが一枚のチラシを渡す。そんチラシを受け取り、夜明は鈴音と一緒に内容を読んでいった。

「あぁ～、何々・・・月光カラオケ大会。参加は自由、定員は三十人まで。優勝者には花火を見るための最高のスポットをお送りします・・・へぇ、随分と面白そうなことやってんじゃねぇの。で、これがどうかしたのか？」

「それ、太陽が出場登録してきたから、僕たちも出るんだって」

「「はい？」」

こうして、無理矢理カラオケ大会に参加させられた二人。結果や如何に。

「さてさて、優勝して来ちまったけど、本当に眺めがいいな」

「そ、そうね。確かに花火も良く見えそうね・・・」

花火がよく見える場所、祭り会場の中心にある櫓の一番上にやって来た夜明と鈴音。優勝したのは鈴音なので、本当なら鈴音一人で来るはずだったのだが、鈴音たっての願いで夜明もついてきたのだ。

凡に、櫓の上には一人分の椅子しかないので、夜明が椅子に座って、夜明の膝の上に鈴音が座っている感じになっている。

「もうそろそろだな」

「・・・ふにゃ～」

夜明に頭を撫でられ、鈴音は受け答えは疎かまともな返答さえ出来ないでいた。夜明は鈴音が膝の上に乗ると、何故か鈴音の頭を撫でまくるのだ。鈴音の体格が膝の上にジャストサイズで、猫のような雰囲気を出してるからだろうか・・・。

（気持ちいいにゃ～♪　・・・ちょっと待ちなさいよ。これってもしかしなくてもチャンスじゃない？）

ふと、そんな考えが浮かんでくる。櫓の一番上にいるので、当然周りには誰もいない。即ち、告白しようが何しようが、誰にも邪魔されないと言うことだ。

（こ、これはチャンスなんじゃないかしら!?　ななならら、告白・・・って、普通告白とかって、男子からするもんじゃ・・・）

今、この状況を利用して夜明に告白しようとする鈴音だが、一向に踏ん切りがつかない。そうこうしてる内に、花火が始まった。一筋の光が夜空を駆け上がり、爆音を上げて爆発して、黒い空に巨大な光の花弁を創り出す。その一発を皮切りに、幾つもの花火が地上から打ち上げられ始めた。

「おぉ、相変わらず派手だな」

感心したように夜明が呟くのを後ろから聞きながら、鈴音は一つため息を吐く。こんな夜空で幾つもの花火が派手に爆発していたら、すぐ近くにいる夜明にさえ、余程大きな声を出さないと、何も聞こえないだろう。そして、鈴音は大声で告白が出来るほど、図太い神経の持ち主ではない。

（今日は諦めよ・・・そう言えば・・・）

ふと、昔の事を思い出す。まだ、家族がバラバラになっていなかった時の事を。父と母と一緒に、花火を見に行った時の事を。

（父さん、元気かな・・・）

胸の前で組んだ両手に自然と力が入った。肩が小刻みに震えそうになるのを、必死に押える。だが、どうしても押えきれない。不意に、夜明の両腕が鈴音を包んだ。何かを言うわけでもなく、鈴音の震えが止まるのを待っている。

（・・・本当に、こいつは・・・）

心の中で苦笑いを浮かべる。心の中で悪態を吐いていると、いつの間にか震えは止まっていた。

（だから私はあんたが嫌いなのよ）

乙女の恋する心には全くと言って良いほど気がつかないのに、こういう心が揺れ動いた時、誰かにいて欲しい時。何時も側にいてくれて、心を守ってくれる。鈴音にとって、夜明のその気配りの良さが時々憎たらしくなる時がある。だが、それ以上に。

（だから私はあんたが大好きなのよ）

鈴音、仲間と歌う（後書き）

夜明「これで夏休み編は終わりだな。次回から原作五巻の内容に入るぞ」

太陽「迫る学園祭に女狐。私がメイドで夜明が執事!?　女狐の魔の手から、私は夜明を護ることが出来るのか!?」

夜明「アホなことはここまでにして、今、俺の目の前に炒飯（セシリア作）がある」

月光閃火「うん。見た目も匂いも問題無さそうだな。問題は・・・」

太陽「劇物になってないかどうか・・・」

夜明「では、いただきます。（パク）」

太陽・月光閃火「「・・・」」

夜明「・・・うん。普通にうまいね」

こうして、月光閃火と輝刃はセシリアから解放されるのだった。

太陽「強化パッケージ案、まだまだ募集中！」

生徒会長、見！　参！

九月三日。二学期初の実戦訓練は、一組と二組の合同で行われていた。

「「・・・」」

第二アリーナ内で対峙していた夜明と太陽は互いに瞬間加速（イグニッション・ブースト）で距離を詰め、スターライザーとオールデリートをぶつけ合わせた。一秒だけ鍔迫り合いを続け、弾かれたように離れる。

「・・・斬る！」

太陽は右手のライオンハート、両足の爪先と踵にあるグリフォンを展開させ、夜明へと向かっていた。夜明はもう一本のスターライザーを引き抜き、太陽を迎え撃つ。両者、凄まじい打ち合いを始めるが、すぐに太陽が夜明を圧倒し始めた。六刀対二刀である上に、近接戦闘においては完全に太陽の方が夜明よりも実力が上だ。

「はっ！！」

三連続の回し蹴りでスターライザーを吹き飛ばし、オールデリートとライオンハートを夜明の胴を挟むように振る。胴を斬られる寸前に夜明は急上昇し、スタードライブを発射態勢に移行して荷電粒子砲を放った。太陽は左腕のシールドで荷電粒子砲を防ぐが、一瞬の隙が生まれる。その一瞬で夜明は腰にマウントしていたウィングスターの銃口を太陽に向け、周囲にシューティング・ビット、フィン・ファングを展開させて太陽に向かわせ、オールレンジ攻撃を開始した。

「流石にこれはきついか！」

太陽は左腕のビットシールドを分離させ、自分の周囲にバリアーを張る。ウィングスター、シューティング・ビット、フィン・ファングから放たれた計十のビームを防ぎ、背部ユニットを分離させた。バリアーが消えた瞬間、スラッシュ・ファングとシュート・ドラグーンが夜明へと迫っていく。夜明は後ろへと瞬間加速（イグニッション・ブースト）し、太陽は急降下することで互いのオールレンジ攻撃をかわした。

「墜ちろ！！」

太陽は左肩にある投擲用トマホーク、フレイアを引き抜いて夜明に投げつけた。続けざまに右肩のフレイアも投げつける。

「そりゃこっちの台詞だ！！」

夜明は周囲を高速で動く太陽の自律兵器を全て破壊し、回転しながら飛んでくる二つのフレイアをディバイン・カノンで撃ち落とした。そのままディバイン・カノンの連射を太陽に浴びせようとするが、太陽は超高速で連射される小口径弾をロール回避、瞬間加速（イグニッション・ブースト）で夜明に接近し、オールデリートを振り上げる。

「ちっ！」

夜明はディバイン・カノンの連射を止め、両腕をビームシールドを展開させながら交差させてオールデリートを受け止めた。ここで勝負を決めようと、スターライト・ブレイザーのロックを解除してエネルギー供給を開始するが、エネルギー供給が終わるよりも先に太陽はオールデリートの上にライオンハートを叩きつけた。

「がぁっ！」

二つ分の斬撃を受け止めきれず、夜明は地面へと叩きつけられた。肺から空気を叩き出されるのを感じ、夜明は痛みで閉じそうになった目を無理矢理開く。その視界に黒い影と光る切っ先を認識し、夜明は反射的に頭を右へと傾けた。頬を掠め、ライオンハートの切っ先が地面に突き刺さる。

「私の勝ちだ！！」

勝利を確信し、太陽は夜明の胸にオールデリートを突き立てようと振り上げた。刹那。

ー警告！　超高熱源反応を確認！ー

次の瞬間、夜明の腹部から放たれた蒼いプラズマの柱が太陽を飲み込んだ。アリーナに試合終了のアラームが鳴り響く。言うまでもなく、太陽の敗北だ。

「これで十戦中、俺の六勝四敗だな」

「くそ、今回は勝てると思ったんだがな。まさか、スターライト・ブレイザーのエネルギー供給が終わってたとはな」

実戦訓練を終え、後片づけを終えた二人はいつもの面々と学食に来ていた。凡に二人が闘っていたのとは別のアリーナで一夏と鈴音が闘っていたらしく、結果は一夏の負けらしい。

「はぁ。何でパワーアップして負けるんだよ・・・」

「白式は燃費が悪すぎるんだよ。唯でさえエネルギー、それもシールドエネルギーを大量に削るってのに、それがもう一個増えたんだから」

それだけではない。背部ウィングスラスターの大型化に伴い、エネルギーを大量に消費するようになったのだ。しかも、ウィングスラスターのエネルギー系統は左腕の多機能武装腕（アームド・アーム）《雪羅》の荷電粒子砲と同じなので、使い分けをしっかりしないと、戦闘どころか機動

さえもままならなくなる。

「何でお前のレイジングウィングはあんなエネルギーをバカみたいに使う武装しかないのに、白式よりも長く戦闘できるんだよ・・・」

ご飯を食べながら羨ましそうに見てくる一夏。夜明は苦笑いを浮かべながら自分もご飯を口に運んだ。

「何でって言われてもねぇ。レイジングウィングはシールドエネルギーのほとんどを削って攻撃と機動のエネルギーにしてるからな。その御陰だろ」

「じゃあ、白式もそう言う仕様にすれば・・・」

ふと、そんな考えが浮かんでくるが、一瞬で却下した。白式のシールドエネルギーを削ると言うことは、シールドエネルギーを使う零落白夜が使えない、と言うことである。零落白夜が使えない白式。はっきり言って、要らん子だ。はぁ、と一夏がため息を吐くと、腕を組みながら箒が啖呵を切る。

「ま、まぁ、アレだ！　どんなにエネルギーの問題が深刻でも、私と組めば解決だ！」

箒の専用ＩＳ『紅椿』のワンオフアビリティー『絢爛舞踏』は最小のエネルギーを増大させ、しかも他のＩＳにその増大させたエネルギーを譲渡することが出来る。何と言うか、エネルギーを大量に使う白式の為のワンオフアビリティーみたいだ。ただ、一つ問題点があるとすれば・・・

「箒。お前、絢爛舞踏を自由に発動できるのか？」

太陽の問いに、箒はシュンとなってしまう。心なし、ポニーテールが垂れてるように見えなくもない。一夏は苦笑いを浮かべ、箒を撫でた。

「もしペアを組むのだとしたら、箒以外と組む気は無いよ。箒が隣りにいてくれるだけで、俺は強くなれるからな」

「一夏・・・」

「・・・相変わらずラブラブだなお前等・・・」

呆れたような太陽の視線を気にせず、二人は二人だけの空間に入ってしまう。夜明は苦笑し、他の女の子達は心底羨ましそうに二人を見て、それから夜明に視線を送った。ふと、夜明は昼食を食べていた手を止め、頭を掻く。

「にしてもペアか。もし誰かと組む機会があったら、俺は誰と組んでみればいいんだろ？」

この一言で、女性陣の目がピカン、と光った。

「何を難しそうな顔をしている。お前は私の夫だ。故に私と組め」

ムニ、とラウラが指で頬を押してくるのを感じる。やって来た当初とは大違いで、ラウラは本当に変わった。態度も柔らかくなり、こんな冗談（本人にすれば冗談ではない）を言えるようにまでなっている。まぁ、何時も浮かべている仏頂面で冗談を言うのは些かいただけんが・・・

「ざ～んねん。夜明は私と組むのよ。幼馴染みだし、甲龍は近接も中距離もこなせるから、レイジングウィングの苦手距離をカバー出来るのよ」

「アホかお前は。そもそも、レイジングウィングにも、夜明にも苦手距離なんて無い。それに、近接も中距離も私のバルディッシュトワイライトの方が甲龍よりも強いぞ。だから、組むとしたら私が最適だ」

「な、何を勝手なことを！？　コホン。それならこの私も立候補しますわ。同じ遠距離型、敵のアウトレンジから共に敵を撃ち抜きましょう」

何やらセシリアが顔を赤らめて言っているが。

「バカだろセシリア。レイジングウィングは遠距離型じゃ無くて全距離対応だぞ」

「それに、あんたのブルー・ティアーズなんかよりも圧倒的に総火力が高いしね。夜明と組んだとしても、はっきり言ってあんたは要らん子決定よ」

「・・・ひ、酷すぎますわ」

太陽と鈴音の容赦ない言葉にセシリアはおろろんと涙を流す。

「二人とも、それは言い過ぎじゃないかな・・・」

二人の容赦無さに冷や汗を流すシャル。夜明はセシリアを慰めるために頭を撫でていて、ラウラからも頭を撫でることを要求されて二

人を撫でていた。

「まぁ、もしペアを組むのだとしたら、シャルと組むだろうな」

「え、僕!?」

いきなり話の矛先を向けられ、シャルは昼食を食べていた手を止める。そして何故かフォークとスプーンを置き、人差し指をもじもじさせながら夜明に訊ねた。

「そ、それは何でかな?」

「俺のレイジングウィングのメイン武装は主にエネルギー系だからな。もし相手がエネルギー系の攻撃を無効化出来る装備をしていたら、まともな戦闘が出来なくなる。だから、実弾武装を多く装備してるお前と組んだ方が良いってこった。それに」

「・・・それに?」

「前に組んだしな」

「あ、そう・・・」

全くと言って良いほど色気の無い返答を返され、さっきまで輝いていたシャルの双眸はガラス色へと変わる。視線は虚ろになり、食事を再開した。

「あ、どしたシャル?」

「どうせ、どうせそんな事だろうと思ってたのに・・・何を僕は期

待してたんだろう・・・」

シャルのため息が合図だったかのように、女子達は一斉に夜明に非難の目を向ける。

「あんたって酷いわね」

「女心を何だと思ってるんだこのボケナス」

「夜明さんの朴念仁振りには、時々殺意が芽生えますわ」

「シャルロット、後でカフェオレを奢ってやるから気を持ち直せ」

「み、皆、ありがとう」

「？３？」

何で非難されてるか分からず疑問符を浮かべる夜明。一夏と箒はそんな夜明を見て、苦笑を浮かべてため息を吐くのだった。

「何だってんだあいつ等？」

「それが本気で言えるんだから、お前は凄いよ」

最早、二人専用となっている男子用ロッカールーム。首を傾げている夜明と、苦笑いを通り越して呆れた表情を浮かべる一夏。手早くＩＳスーツに着替え、一夏は白式のコンソールを呼び出して調整を始め、夜明は後ろから一夏の作業を覗き込む。

「やっぱり雪羅に割いてるエネルギーが多すぎるな。これをどうにかして抑えられないか？」

「と言うか、雪羅を使いすぎない戦闘を心がければ良い話じゃ「だーれだ？」・・・」

「は？」

夜明の声が途切れ、誰か女性の声が聞こえてきたので、一夏は少し驚きながら後ろを振り返った。一夏の後ろでは、水色の髪をした二

年生（リボンの色で分かる）が夜明の目を両手で塞いでいる。その表情はとても嬉しそうに輝いている。その二年生とは対照的に、夜明は唇を真一文字に引き結んでいた。

「はい時間切れ～」

解放され、夜明はゆっくりと振り返った。自分の目を塞いでいたのが誰なのかを確認し、深々とため息を吐く。

「やっぱりお前か・・・」

「え？　夜明、この先輩と知り合いなのか？」

不本意ながらな、と夜明は答える。突然現れた二年生の第一印象は不思議、だ。全体的に余裕を感じさせる雰囲気。だがそれは嫌味ではなく、人を落ち着ける雰囲気のように感じられる。だが浮かべている笑みは悪戯っぽく、それでいてとても嬉しそうだ。

「・・・一夏、先に授業行っててくれ」

「え？　授業って・・・マジかよ!?」

壁の時計を見て一夏は絶叫する。時計の長針は、授業開始二分前を示していた。一夏は慌ててロッカールームから飛び出そうとするが、慌てて夜明を振り返る。

「お前は行かないのか!?」

「野暮用が出来た。織村先生にそう伝えといてくれ」

ヒラヒラと肩の上に持ち上げた手を振り、一夏にさっさと行けとジェスチャーする。何をするのか分からないが、このまま行けば次の授業を担任している千冬に殺されるのは目に見えていた。なので、一夏は色々な疑問を飲み込んでロッカールームから出ていった。一夏が走っていく音が小さくなっていき、完全に聞こえなくなった所で漸く夜明は口を開く。

「・・・久し振りだな、楯無」

夜明に名を呼ばれ、その二年生、ＩＳ学園最強、更識楯無はキラキラと目を輝かせた。

「本当に久し振りだね、夜明！」

何時の間にか取り出した扇子をパン！　と開く。そこには達筆な筆文字でかでかと『我愛（ウォーアイニー）？』と書かれていた・・・

夜明と楯無の馴れ初め。未来からの影

現在、一夏は命の危機に瀕していた。と言うか、瀕しているというか、命を握られていると言った方が表現的には正しいかもしれない。本鈴ギリギリでアリーナに飛び込んだ一夏を待っていたのは。

「一夏。夜明の姿が見当たらないんだが、どうしたんだ？」

モードトランザムを発動させたバルディッシュトワイライトを展開させた太陽だった。オールデリートとライオンハートを交差させるように一夏の首に押しつけ、それはそれは素敵な笑顔を浮かべている。だが、その笑顔は慈愛の女神の物ではなく、無慈悲な天使の物だった。女子達はガタガタ震え、千冬でさえ冷や汗を垂らしている。

「あ、あの太陽。状況が飲み込めな」

ライオンハートの銃口からビームが放たれた。

「次は頭を撃ち抜く」

「夜明は二年生の先輩と話してるであります！！」

太陽の脅迫にあっさりと屈し、一夏は直立不動で叫んだ。語尾にサーを付けかねん勢いの口調だ。二年生、の部分で太陽の額に青筋が浮かぶ。心なし、オールデリートとライオンハートの剣先が震えているように見えなくもない。

「二年生、か。特徴は？」

「え、何でそんなこと聞くん」

バシュン！！

「何というか人を落ち着かせる雰囲気を放っている人だったであります！　後、髪の毛の色が水色です！！」

ブチィッ！！　と太陽の額に浮かんでいた青筋が音を立てて切れた。額からピュ～ッと血が噴き出すが、太陽は不気味な笑い声を唇の間から漏らしながらオールデリートとライオンハートを一夏の首からどける。

「そうか、やっぱりあいつか・・・あんの女狐ぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！」

怒りの咆哮を上げながら、太陽はアリーナの遮断シールド目掛けてロイヤルセイバーとファイナルエリシオンを放ち始めた。

「夕暮！　お前ここを破壊するつもりか！？」

千冬の声は届かず、太陽は刀身が数十倍に伸びたオールデリートと、銃口から黒い閃光を放ち続けているライオンハートを振り回す。

「今度こそ引導をくれてやらあああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

・・・どうやら、彼女と楯無には浅からぬ因縁があるらしい・・・

「で、話って何じゃいな？」

場所はＩＳ学園校舎屋上。夜明は平然と授業（それも千冬の）をサボり、楯無の誘いに乗ってきたのだ。夜明を誘った二年生、更識楯無は不機嫌そうに膨らませた頬を開いた扇子で隠し、ジト目で夜明を睨む。

「むむぅ～。幾ら何でもそんな色気の無い切り出しは無いんじゃない？　もっとこうあるでしょ。『元気だったか？』とか『綺麗になったな』とか、『結婚しよう』とか」

「一つ目と二つ目はともかく、最後のはおかしいだろ」

ごもっともで。楯無はジト目を細め、ため息を吐きながら手首をスナップさせて扇子を閉じた。

「色々と話したいことはあるけど、取り敢ず重要なことから話すよ。まず、亡国企業（ファントムタスク）の情報」

へぇ、と夜明は感心の吐息を漏らしながら眉を持ち上げる。

「掴んだのか？」

「うん。て言っても、そんな重要な情報でも無いんだけど」

そう言って、楯無はポケットから掌サイズの端末を取り出し、カチカチと操作し始めた。数秒ほどで操作を終え、夜明に手渡す、端末を受け取り、夜明は端末の画面に映し出された一枚の写真を見た。それは満月が浮かんでいる夜空を移した写真で、月光に照らされた雲を切り裂くように二機のＩＳが飛んでいる。

「こいつは・・・」

夜明は写真に写っている二機のＩＳに目を細める。先行している一機は背中に円形の大型スラスターを装備していて、大型スラスターには十一個のビットが装備されている。先行するＩＳに続く形で飛んでいるＩＳは暗くてはっきりとは分からないが、くすんだ青色の装甲を必要最低限しか展開しておらず、右腕にアサルトライフル、左腕にレーザーライフルを装備している。

「見たこと無いＩＳでしょ？　この二機は一週間前に太平洋沖を飛

んでいて、亡国企業（ファントムタスク）の連中と合流したんだ。偶然、この写真が撮影できたのは僥倖だったよ」

「この二機・・・」

「あ、やっぱり気がついた？　そう。その二機、どっちも第四世代型なんだ」

楯無の言葉に、夜明の目つきが剣呑になっていった。現在、各国が開発を進めているのは第三世代型のＩＳ。それも試作段階の物ばかり。それをすっ飛ばして第四世代型ＩＳを開発するなど、ＩＳの開発者である鬼才、篠ノ之束しか出来ない。だが、束は興味のある人間としか拘わろうとはしないので、この二機を束が開発して誰かに渡したと言う可能性は皆無だろう。つまり、

「完全なアンノウンってことか・・・」

「そ。でも、この二機の名称だけは分かったよ」

一旦、楯無は夜明から端末を返して貰い、数回ボタンを押して画面を拡大させた。拡大された画像は二つに分けられていて、ＩＳネームであろう英語が装甲に刻まれている。

「『Ｐｒｏｖｉｄｅｎｃｅ（プロヴィデンス）』、『Ｓｔａｙｓｉｓ（スティシス）』か」

「今のところ、家の総力を上げて追跡させてるけど、芳しい結果が得られるかどうか・・・」

プヒィーッ、と楯無は愉快なため息を吐く。数秒、夜明は険しい目で端末の画面を見ていたが、画面をブラックアウトさせて端末を楯

無に返した。

「まぁいい。ここで頭悩ませてたからって、何か良い考えが浮かんでくる訳でも無いしな。俺は授業に行くとするよ」

「ん、分かった。所で夜明。今夜、私の部屋に来る気はない？」

「じゃ、そう言う事で」

楯無の誘いを真っ向から無視し、夜明は屋上から足早に去っていった。

「相変わらず連れないなぁ～」

夜明の後ろ姿を見送りながら、楯無は口元まで扇子を持ち上げて景気のいい音を出しながら広げる。そこには、『これで終わりだと思わない方が良い』と書かれていた。

「さて、それでは色々と話を聞かせて貰うぞ。夜明」

「・・・すまん、状況が掴めないんだが・・・」

その日の放課後。太陽は帰りのＳＨＲが終わるや否や夜明の首筋にスタンガン（五十万ボルト）を押しつけ、用意していた麻袋に気絶した夜明を放り込んで部屋へと拉致監禁した。手にはラウラが持っている切れ味抜群のタクティカルナイフが握られている。凡に、太陽以外の女性陣は何をしているのかというと。

「自白剤はどんなのを使うんですの？」↑セシリア

「これだ。効果は薄いが、即効性があるから問題ないだろう」↑ラウラ

「でも、どうやって飲ませんのよ？」↑鈴音

「それなら大丈夫。口に放り込んで、無理矢理水で流し込めばいいから」↑シャル。

白い錠剤を片手に持ったラウラを中心に恐ろしい会話をしている。

ベットに腰掛けている一夏と箒は苦笑いを浮かべてその光景を見ていた。

「それじゃあ、授業をサボってあの女狐と何をしていたのか洗いざらいぶち撒けてもらお「太陽さん」何だセシリア？」

「夜明さんから話を聞く前に、その女狐という方のことを話してもらいたいのですが」

セシリアの後ろでラウラ達がコクリと頷く。太陽は瞳の中に浮かべていた狂気を引っ込め、タクティカルナイフを鞘に収めた。

「それの話なら、私よりも夜明に聞いた方が早いだろ」

太陽に促され、夜明は縄で雁字搦めにされて床に転がされたまま話し始めた。

「そうだな。俺とあいつの出会いはロシアに不法入国して、ロシアのＩＳ研究所に迷い込んでしまった時のことだ」

「どうやったらそんな所に迷い込めんのよ・・・」

それは置いといて。

＊これは夜明が中東での出来事を経験し、太陽と出会う前の話です。

「ここどこだ？　見た感、最先端の技術が詰め込まれた研究所って感じだけど・・・」

天井裏へと身を潜め、人一人通るのがやっとの大きさの通路を匍匐前進で進みつつ、夜明はここがどこなのか首を傾げた。・・・どうすれば、迷い込んだだけで研究所の天井裏の細い道を匍匐前進する状況になるのかは若干気になるところだが。鉄格子から廊下を見下ろし、どうするのか考える。

「いたか！？」

「ダメだ！　どこを探しても見つからない！！」

「絶対に探し出せ！　ここでは『モスクワの深い霧（グストーイ・トゥマン・モスクヴェ）』のテストが行

われているんだ！　もし見られていたら、ただ事じゃ済まないぞ！！」

警備をしているであろう制服を着た人達が、マシンガンやらアサルトライフルやら物騒な物を持って走り回っている。夜明の頭の中に、降りていって出口を教えて貰うと言う考えが一瞬浮かんだが、その考えはすぐに破棄された。この状況でそんなことをしたら、蜂の巣になること間違いない。

「しゃあねぇ。面倒だけど、ここの戦力を全部無力化させるか・・・」

心底面倒そうに頭を掻きながら夜明は囁いた。凡に戦力というのは、この研究所に配備されているＩＳも含まれている。端から聞けば何を言っているんだと思われるだろうが、この少年はそれを軽々と、それも生身でやってのけるだろう。

「そんじゃ、やるか」

夜明は鉄格子を殴って外し、廊下へと飛び降りた。

「ざっとこんなもんか？」

無力化（銃を破壊する）し、気絶させた警備員達を廊下へと寝かせながら夜明は呟く。夜明がこの研究所の戦力の鎮圧に乗り出して僅か三十分。その僅かな時間で、夜明はＩＳ以外の戦力を全て無力化させた。

「さて、それじゃ帰るとしま」

ズズゥン・・・！

腹の底に響くような揺れが聞こえ、研究所全体が揺れた。夜明は振動が伝わってきた方向、新型ＩＳのテストが行われているらしいアリーナの方向を見る。

「何だ今の？　そう言えば、さっき誰かが新型ＩＳのテストをしてるって言ってたよな・・・まさか」

その新型ＩＳを狙って何処かの組織が襲撃を掛けてきたのか？　そんな考えが頭の中に浮かび、夜明は表情を剣呑な物へと変える。だが、すぐに何時も通りの表情へと戻した。

「仮にそうであったとしても、俺には関係ないし。さっさとここから出てこ」

そう言って、夜明は歩き始めた。・・・出口の方向ではなく、振動が伝わってきた方向に。

「・・・本当に難儀な性格してんな俺は！」

忌々しそうに呟き、夜明は廊下を全速力で走っていった。

「・・・これは、まずいかな？」

『モスクワの深い霧（グストーイ・トウマン・モスクヴェ）』の搭乗者、更識楯無は小声で呟いた。『モスクワの深い霧（グストーイ・トウマン・モスクヴェ）』のテスト中、突然現れた襲撃者。日本製の打鉄を纏ったその襲撃者は、瞬く間に楯無の相手をしていたパイロット（ラファール・リヴァイヴ装備）二人を切り伏せ、楯無へと向かってきた。楯無はランスで襲撃者が振るう近接ブレードを防ぎながら、切り伏せられた二人に視線を向ける。ＩＳの絶対防御の御陰で即死はしてないみたいだが、出血が酷い。早く措置をしないと、命に関わるだろう。

（早くこいつを倒さないと・・・）

「・・・余所見とは余裕だな」

楯無が二人の方へと目を向けた瞬間、襲撃者はランスを弾き飛ばして袈裟斬りを放った。ランスを吹き飛ばされ、手元に武器が無くなった楯無にその攻撃を防ぐことは出来ず、もろに斬撃を喰らって後方へと吹っ飛ぶ。慌てて起き上がろうとするが、それよりも早く襲撃者が近接ブレードを振り上げて迫ってきた。急いで蛇腹剣で防ごうとするが、間に合いそうもない。

（あ、死んじゃったな）

妙に冷え切った頭に死の予感が浮かび、楯無は目を閉じた。刹那、

衝撃が楯無を襲う。・・・だが、痛みは一向に訪れない。不審に思って目を開くと、そこには銀色の髪を靡かせた一人の少年が、襲撃者の一撃を、楯無が引き抜こうとしていた蛇腹剣で防いでいた。

「・・・ったく、予想的中かよ・・・どうしてこう、俺の勘は嫌な方向にばかり反応するのかね？」

ため息を吐きつつ、夜明は蛇腹剣を思いっ切り振って襲撃者を吹き飛ばした。振り抜いた蛇腹剣を持ち上げ、肩に預ける。

「大丈夫か？」

目線だけ後ろに向け、楯無に訊ねた。戸惑いの表情を浮かべながら、楯無は頷いてみせる。数メートルほど吹き飛ばされ、襲撃者は耳障りな音を立てて床を滑っていく。漸く止まり、近接ブレードの切っ先を夜明に向けた。

「・・・何者だ？」

襲撃者の質問に夜明はこう答える。

「通りすがりの大馬鹿野郎さ、覚えなくていい」

「・・・そうか。なら、死ね・・・っ！　ち」

再び突っ込もうとしてきた襲撃者だが、何かに気付いて構えを解いた。さっき夜明に吹き飛ばされた時、全ての衝撃を殺しきれなかったらしく、打鉄の装甲から煙が噴き出している。襲撃者は忌々しそうに舌打ちをして、宙へと跳躍した。

「・・・私はM。名乗れ、イレギュラー」

「・・・ムーンライトとでも、答えておこうか」

「・・・その名、忘れん」

襲撃者、Mは方向転換して、アリーナの外へと飛び出していった。
Mの後ろ姿を見送り、夜明は蛇腹剣を肩から下ろして楯無の方を振り返る。

「ふぅ、これで一安心・・・って顔が赤いけど大丈夫か？」

心配そうに訊ねてくる夜明を、楯無は今まで感じたことのない感情を胸に抱きながら、頬を染めて見ていた。

「ってのが、俺と楯無の出会い。・・・にしても、楯無の奴、何で俺なんかに興味を持ったんだ？」

「「「「「「「もうお前、一遍死ねよ」」」」」」」

この男の鈍感は死ななきゃ・・・いや、死んでも直らない。そう確信した太陽達だった。

「そう言えば、何で太陽ってその楯無さんって人のこと嫌いなの？」

「・・・あの女狐、私の目の前で夜明とキスしやがったんだ」

太陽が楯無に殺意を抱くのは致し方のないことのようだ。

夜明と楯無の馴れ初め。未来からの影（後書き）

質問。アークエンジェルとミネルバ。どっちが好きですか？

学園祭の催し物は何にする？

翌日。ＩＳ学園の生徒達は全校集会のため、朝っぱらから体育館に集められている。内容は勿論、今月半ばほどに行われる学園祭のことだ。

「しかし、これだけの数の女子が集まるとなると」

「あぁ。騒がしいを通り越して姦しいな」

ＩＳ学園に在校している全ての生徒が集まっているのだ。その喧騒は相当な物だろう。

「それでは、生徒会長から説明をしていただきます」

静かに生徒会役員が告げると、喧騒は潮を引くように消えていった。流石は生徒会長、ＩＳ学園最強の名は伊達ではない・・・まぁ、この生徒達の中で、生徒会長の意味を分かっているのが何人いるかと言う話だが。

「皆、おっはよ～う」

気さくな挨拶で壇上に上がったのは水色の髪を持った二年生、更識楯無である。その刹那、

「女狐ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

生徒達の間から、赤い弾丸が飛び出した。ＩＳを装備しているわけ

でもないのに、瞬間加速並み(イグニッション・ブースト)の速度で楯無へと突っ込んだ太陽はどこから取り出したのか、ＩＳ専用近接ブレードを楯無に振り下ろす。

「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

人一人を容易にミンチに出来る威力を秘めた一撃が楯無に振り下ろされる・・・前に、一瞬遅れて生徒達の間から飛び出した夜明が太陽を羽交い締めにした。

「落ち着けこのバカ！　こんな大勢の前で人死に出すつもりか！？」

「離せ夜明！！　大丈夫安心しろ！　ちょっとあの水色女狐を真っ二つにするだけだ！！」

「世間一般ではそれを殺人って言うんだよ！！　織村先生！　ちょっとこのバカ抑えるの手伝ってください！」

「げ、月光。夕暮に何があった？　こいつがここまで感情を剥き出しにするのは初めて見るんだが・・・」

「昔、色々とありまして・・・」

夜明は千冬と協力し、太陽を抑え付ける。

「離せ！　離せ！　・・・あいつを殺してやるんだぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

太陽の物騒すぎる叫びが体育館に大きく反響するのだった。

「まぁ、色々と紆余曲折（それで済ましていいのか甚だ疑問だが）があったけど、取り敢ず自己紹介ね。私は更識楯無、君たち生徒の長よ。よろしく！」

ヒュビッと扇子を持ち上げて挨拶する楯無を、列の所々で熱っぽい吐息を漏らしながら見ている生徒達が。更識楯無。彼女の魅力は男女問わずに発揮されるもののようだ。

「では、今月最大のイベントである学園祭だけど、今回に限って特

別ルールを設けさせてもらったわ。名付けて・・・」

手首をスナップさせて楯無は扇子を開き、空間投影ディスプレイを起動させる。凡に、扇子に書かれている文字は『君に決めた！』だ。

「『各部対抗月光夜明と織斑一夏争奪戦』！」

楯無が扇子を一振りするのに合わせ、ディスプレイにでかでかと夜明と一夏の写真が映し出される。

「え・・・？」

「んだとぉぉぉぉぉ！！！！！！？？？？？？」

「「「「「えええええええ～～～～～！！！！！？？？？？」」」」」

ポカンとする一夏に驚愕の声を上げる夜明。更に女子達から割れんばかりの叫び声。冗談抜きで体育館が揺れ、続いて全女子達の視線が二人に突き刺さる。

「静かに。例年通りに行くと、学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出してそれに対して投票を行い、上位部活動に特別助成金が出る仕組みでした。でも、それじゃつまらないので・・・」

悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべ、楯無は夜明、一夏を扇子で指した。

「一位と二位の部活動に、月光夜明か織斑一夏のどちらかを強制入部出来る権利を上げましょう！」

再度、体育館を揺らす叫び声が響く。

「うおおおおっっっ！！！」

「素晴しい！　素晴しすぎるわ会長閣下！」

「やぁぁぁってやるわ！！」

「今日から早速準備よ！　秋季大会？　ほっとけあんなん！」

「野郎共！　最高でも一位、最低でも二位だ！！」

気合のスピードメーターを振り切らせ、雄叫びを上げる女子達を見て一夏は呆れたように呟いた。

「おいおい、秋季大会をあんなん呼ばわりするなよ。てか、女子の大会に出場する訳にもいかないし、マネージャーって柄でも無いぞ俺たち」

「いや一夏、俺たちが突っ込むべき点はそこじゃないだろ」

何処かずれた相方の反応に額を押え、夜明は力無く一夏に突っ込みを入れる。夜明の言うとおり、二人が突っ込むべき点はそこではない。二人に何の了承も無いことだ。・・・まぁ、

「あはっ♪」

良い笑顔でウィンクしてくる楯無にもの申せるなら、申して見ろと言う話になるだろうが・・・

同日、教室にて放課後の特別ＨＲ。学園祭の出し物を決めるとあり、教室はわいのわいのと騒がしいことこの上ない。クラス代表として意見を纏める一夏、一夏に手伝いをお願いされている夜明は何をしているかと言うと。

「ＺＺＺ・・・ＺＺＺ・・・」

机に突っ伏して爆睡してた。その隣りで、一夏はクラスメイトが出

した案を書き込んだ紙を片手に途方に暮れている。

（内容が『月光夜明と織斑一夏のホストクラブ』、『月光夜明とツイスターゲーム』、『織斑一夏とポッキー遊び』、『二人と王様ゲーム』・・・）

「却下」

「「「「「えぇぇぇぇっっっっ！！！！」」」」」

大ブーイング。一夏はそれを収めるため、両手を上げて静かにするようジェスチャーした。

「静かに！　取り敢ず、夜明にも聞いてみるから。・・・おい、夜明」

「ｚｚｚ・・・ｚｚｚ・・・ｚｚっは！　寝てない、寝てないぞ」

一夏に肩を揺すられ、夜明は慌てて口元を拭いながら起きた。寝惚け眼で寝てないと連呼する姿。数人の女子達が鼻血の海に沈んだのは割愛しておこう。

「寝てないって・・・まぁいいか。これが皆からの意見なんだけど」

「ほう。どらどら・・・」

一夏から意見が書き込まれた紙を受け取り、夜明は物の見事に固まった。数秒ほど沈黙を貫き、それからの夜明の行動は異常なまでに速かった。『ズグシャァッ！』と紙を握り潰し、『ドビシィッ！』と握り潰した紙を床に叩きつけ、『ズダダダ！』と床をぶち抜きそ

うな勢いで紙を踏みつけ、『ドバァッ！』とボロボロになった紙を蹴り上げ、『ズバババババ！』と秒間千発の手刀を繰り出して紙を細切れに。それだけじゃ足りないのか、どこからともなく取り出した百円ライターと殺虫剤で簡易火炎放射器を作り、紙を跡形も無く消し炭にする。

「俺が！　お前等に！　引導を！　呉れてやらぁぁぁぁぁ！！！！！」

更にどこから取り出した！？　と突っ込みたくなるような魔剣を片手に暴れだそうとする夜明。人外と化した夜明を、一夏、箒、セシリア、シャル、ラウラの五人がかりで抑え付ける。地獄となった教室の中、唯一人太陽だけが落ち着いて窓を開き、夜明が紙を燃やした際に発生した煙を外に流していった。

数分後。どうにか夜明を落ち着かせることに成功させ、一年一組の出し物はメイド喫茶になった。

高層マンションの最上階に到るまでの廊下、そこを歩く人影が二つ。

「おいスコール！　何だってあんなクソ二人の言いなりになってんだよ！？」

「別に言いなりに何てなっているつもりはないわ。彼等は私達に情報を求め、その見返りに彼等は私達に兵器を提供してくれる。これは歴としたビジネスよ」

粗野な言動が目立つ美女と、その先を歩いていくスコールと呼ばれた金髪の美女。スコールの腕には分厚い書類が抱かれている。

「あいつ等の兵器なんていらねぇだろ！　私達だけで十分な筈だ！！」

「・・・忘れたの、オータム」

ため息を吐きながら歩みを止め、スコールはオータムを振り返った。

「私、あなた、M、ガンフィッツ、ジャスティア、シュヴァルツェ

が同時にかかっていったのに、あの女・・・オッツタルヴァとそのＩＳ『ステイシス』に掠り傷一つ負わせられなかったことを」

「・・・そうだけどよ・・・」

「そろそろ口を閉じなさい。部屋に着くわ」

スコールが言って十秒もしない内に、二人の眼前に扉が現れる。スコールは一度咳払いをして、扉を数回ノックした。

『・・・誰かな？』

「スコールよ。頼まれてた物を持ってきたわ」

『入ってくれたまえ』

ドアノブに手を掛け、スコールは部屋の中へと入っていった。その後ろにオータムが続く。二人が入ったその部屋、豪華な飾りで溢れかえったその部屋には二人の人物がくつろいでいた。一人はスコール同様の金髪の男で、顔の上半分を仮面で隠している。もう一人は下着姿の青髪の女性で、枕を背もたれのようにしてベットに寝ころび、分厚い小説を読んでいる。青髪の女性は小説から視線を上げ、スコール、そしてオータムを確認すると途端に顔を顰めた。

「・・・スコール。この部屋にそれを連れてくるのは止めろと言った筈だぞ。部屋の空気からドブの臭いがしてきやがる」

青髪の辛辣な言葉に、オータムは唾を飛ばして声を荒げる。

「うるせぇ！　お前等がスコールに何するか分からねぇから、俺が

こうやってスコールの護衛をしてんだよ！！」

「そう言う台詞は、それ相応の実力を身につけてから言え首輪付き」

「んだとぉ・・・」

剣呑な空気が流れる中、二人の主がそれぞれに待ったをかけた。

「止めなさいオータム。あなたと彼女が闘り合えば、確実にあなたが死ぬことになるわ」

「止めておけオッツタルヴァ。彼女たちは商談の相手だ。荒事は避けたい」

「・・・ちっ！」

「元から荒事なんて起こすつもりは無い」

舌打ちしてスコールの後ろへと戻ったオータムに侮蔑の視線を送りながら、オッツタルヴァは小説に視線を戻す。彼女が言ったことは、言外に自分とオータムでは荒事にさえならないと言っているのだ。二人が矛を収めたのを確認し、金髪とスコールは視線を合わせた。

「それでスコール、例の物は？」

「これよ」

スコールは腕に抱いていた書類を、金髪が座っているテーブルの上に置く。金髪は書類にざっと目を通し、満足げな笑みを浮かべる。

「ふむ、確かに。では、約束通り、君たちに無人ＩＳ百機を譲ろう。何度も言うが、あの無人ＩＳの戦闘力は余り高くない。量産ＩＳならともかく、専用機などが相手では足止めになるかどうかも怪しいから注意して欲しい」

「流石に百機もあれば、足止めくらいにはなるでしょう。それではまた後で、クルーゼ、オッツタルヴァ」

スコールとオータムが出ていったのを確認して、オッツタルヴァがクルーゼに目を向けた。

「聞きたかったんだがクルーゼ。スコールに頼んだ物ってのは何なんだ？」

「月光夜明と夕暮太陽の情報さ。可能な範囲でいいから集めてくれと言ったのだが、まさかこれ程とはな・・・もう数年もしない内に彼女たちが壊滅させられると思うと、惜しい気が浮かんでくるよ」

コーヒーを飲みながら物思いに耽るような口調のクルーゼに、オッツタルヴァは鼻で笑ってみせる。

「はっ。過去の亡霊如きが、今を全力で生きようとしている連中に敵う訳も無いだろう。亡国企業が滅ぶのは必然だったのさ」

「それはカラードランク１、オッツタルヴァとしての言葉か？　それとも、ＯＲＣＡ旅団旅団長、マクシミリアン・テルミドールの言葉かね？」

クルーゼがその名を口にした途端、オッツタルヴァは表情を渋い物にした。

「クルーゼ、その名で俺を呼ぶのは極力止めろと言った筈だぞ。幾らここが過去で企業連やラインアークの目が無いからと言って、何が起こるのか分からないのだから」

くくく、とクルーゼは小さな笑い声を唇の間から漏らす。

「それは済まなかったな。所で、私が頼んだ物の用意はどれくらい進んでいるんだ？」

「大型無人ＩＳのことか？　それならさっきメルツェルから連絡があって、もう少しで用意できるって言ってたぞ。数日後には過去（こっち）に送れるらしい」

「そうか。ならば焦る必要もないか」

呟きながら、クルーゼは書類に付いてきた数枚の写真の内の一枚、夜明が映った写真を持ち上げた。

「月光夜明。君に直接的な恨みは無いが、我らの為に消えてくれ」

ピッ、と写真を上に投げると、オッツタルヴァが投げたナイフが写真を捉えて壁に縫いつけた。そのナイフは過たず、夜明の心臓部分を貫いている。

生徒会長は超アクティブ

「は～い♪」

「「・・・」」

学園祭の出し物（ご奉公喫茶）が決まったので、職員室にいる千冬に報告しに行った夜明と一夏。千冬への報告を終え、職員室から出てきた二人を待っていたのは良い笑顔を浮かべてる楯無だった。ニコニコ笑う楯無を見据え、夜明は拳を鳴らす。

「取り敢ず・・・殴らせろ」

「何故に!?」

「いや、そんな事が言える先輩の方が何故に!?　ですよ」

オーバーに驚いてみせる楯無に、一夏が苦笑を浮かべながら突っ込む。何の承諾も無しに学園祭の景品にされたのだ。怒らない方がおかしい。夜明は拳を楯無のこめかみに押しつけ、思い切りグリグリとする。

「い、痛い！　痛いよ夜明!!」

「当たり前だろうが痛くしてんだからよぉ!!!」

その後、夜明のお仕置きが数十秒ほど続き、漸く楯無は解放された。

「いたたた・・・頭変形してない?」

「してないです」

涙目でこめかみを押えている楯無を置いて、二人はアリーナの方へと歩き出す。夜明の横に、ごく自然な流れで楯無が並んで歩き出した。・・・振り切るのは困難と言えよう。

「で、生徒会長様が俺たちに何の用だよ？」

「酷いなぁ。用が無くちゃ話しかけちゃいけないの？　そんな邪険な扱いされたら、私泣いちゃうよ？」

「泣けば？」

「うわぁ～、酷い」

酷いと思わない？　と楯無は一夏を見る。だが、一夏からしてもこっちは被害者、向こうは加害者なので、乾いた苦笑を返すしかない。一夏の反応に楯無は頬を膨らませるが、一回咳払いをして気持ちを切り換えた。

「んっ、ん！　まぁ雑談はさておき、今回は二人に用があって来たんだよね～」

「俺たちにか？」

楯無は頷き、扇子をパンッ！　と開いた。今回は『ジャストミート！』と書かれている。この人は何種類の扇子を持っているんだ？と夜明と一夏の疑問が重なった。

「そ、まずは一夏君から。これから当面、私が君のＩＳコーチをするから」

「いや、間に合ってます」

一夏をコーチしているのは夜明に太陽、箒、セシリア、鈴音、シャル、ラウラ。数え出せばきりがない。だが、一夏の隣りに立っている夜明は頭の後ろで両手を組んで、楯無に賛同する。

「いや。これはこれで美味しい話だぞ一夏。何せ、楯無は曲がりなりにもＩＳ学園の生徒会長だからな」

「はい？」

訳が分からずキョトンとしている一夏。

「あり？　もしかして知らない？　ＩＳ学園の生徒会長と言うのは」

楯無が説明しようとしたところで、前方、窓、後ろの三方向から同時攻撃が楯無目掛けて放たれた。前方からは竹刀を持った女子、窓からは弓道の矢、後ろにあるロッカーからはボクシンググローブを嵌めた女子。

「一夏、ＩＳ学園の生徒会長と言うのはな」

襲撃者に反応した楯無に替わって、夜明が一夏に説明し始めた。楯無はまず竹刀を振り上げた女子の喉笛に畳んだ扇子を叩き込んで意識を奪い取った。女子が手放した竹刀の柄頭を蹴り飛ばし、窓の外から放たれた矢を弾いて、矢を放っていたであろう袴姿の女子の眉間に直撃させて見事撃破。最後に体勢を立て直すこともせずに跳躍

し、背後から襲いかかってきたボクシング女子に後ろ回し蹴りを叩き込む。

「生徒達の長たる者は」

ビックリしている一夏の隣りで、夜明は淡々と言葉を紡いでいく。

「最強であれ」

後ろ回し蹴りの際に上へと放り投げていた扇子をキャッチし、楯無は扇子でスカートの裾を押さえた。チラッと二人に悪戯っぽい視線を投げかける。

「見た？」

「み、見てませんよ！」

「残念ながら、お前の脚線美しか見えなかったな」

「あら、嬉しいこと言ってくれるね」

ケラケラと笑いながら二人に歩み寄り、扇子を開いて楯無は二人を順番に見る。

「取り敢ず、話がしたいから生徒会室に来てくれるかな？」

夜明はともかく、さっきの光景を見ていた一夏に楯無の頼みを断る事は出来なかった。

「ふにゅわ～。げっちーは最高の抱き枕だにゃ～・・・」

「・・・殴って良いかこいつ？」

「・・・妹が済みません」

生徒会室にやって来た夜明と一夏を出迎えたのはクラスメイトである。のほほん、改め布仏本音とその姉、布仏虚だった。本音・・・もうのほほんと表現しよう。のほほんは入ってきた夜明を見るや、抱きついてそのまま寝た。いきなり抱き枕にされて拳を震わせる夜明

に、虚は申し訳なさそうに謝る。

「・・・まぁいいや。んで、何で二人しかいないんだ？　生徒会ってもう少し人数がいるもんだと思うんだが」

「それは俺も気になった」

「あぁ、それはですね・・・」

二人の問いに虚が答えてくれた。曰く、生徒会長は最強でないといけないのだが、それ以外の生徒会役員は生徒会長が好きなようにしていいらしい。凡に、この二人は昔から更識家に仕えてきた人達だそうだ。

「お宅等二人がここにいる理由は分かった。んじゃこっちから質問。楯無、何であんなクソ迷惑な提案してくれやがったんだ？」

勿論、部活動争奪戦のことだ。

「最初から説明するとだね。夜明と一夏君が部活動に入らないことで色々と苦情が寄せられててね。生徒会としては君たちを何れかの部活動に所属させないといけなくなっちゃった訳よ」

それなりに納得できる理由ではある。だが、部活動に興味の無い夜明、ＩＳの訓練で手一杯の一夏にしてみれば、いい迷惑以外の何物でもない。更に言うなら、女子と同じ部活動というのは精神的にも色々な問題がある。ロッカー、シャワー、・・・挙げればきりがない。

「でね、交換条件として一夏君を学園祭の間まで鍛えてあげよう、

って話になったの。私が身もＩＳも」

「遠慮します」

「まぁそう言わずに。夜明からも何か言ってちょうだい」

「そこで俺に話を振りますか・・・」

楯無に話を振られ、夜明は面倒そうにため息を吐く。左手は虚から受け取ったカップを口元にまで運び、右手は執拗に膝枕をねだってくるのほほんを撫でている。

「一夏。楯無に教わってみるのも結構良いかもしれないぞ。少なくとも、そいつは俺や太陽と同等の強さを持ってるから」

「お前と太陽と同じくらい強い！？　・・・信じられないな・・・」

「あれ？　さっきのじゃ証明にならないかな？」

「夜明や太陽なら、もっと早くあの三人を沈められたでしょうしね」

一夏の言うとおり、夜明ならもっと手早く三人を倒してただろうし、太陽なら何が起きたのか理解できない早さで三人の意識を刈り取っていただろう。

「そうかもね。でも、君より強いのは確かだよ」

その一言に一夏もカチンと来た様子。そこに追い打ちをかけるように、夜明は頭を掻きながら言った。

「そうだな。少なくとも今の一夏じゃ楯無に有効打を入れるのは疎か、掠り傷一つ付けられ無いだろうからな」

とまぁ、先輩と友人からの失礼な言葉もあり、一夏は楯無と闘うことになった。負けたら楯無に従うという条件付きで。楯無は得物を罠に掛けた猟師のような笑みを浮かべ、夜明は呆れた表情で一夏を見ていた。

その後、道場に向かって楯無と勝負した一夏だったが・・・負けた。

そりゃもう壮絶なまでに負けた。ボッコボコのフルボッコにされた挙句、最後の捨て身の攻撃さえも受け流されて、空中コンボを叩き込まれたのだ。その時、楯無の一言がこれである。

「ごめんね。でも、私の身体に触って良いのはこの世に一人だけだから」

その言葉を最後に、一夏は意識を手放した。

「楯無、ありゃやりすぎじゃないか？」

勝負の最後に楯無が放った空中コンボを思い出し、夜明は背筋に薄ら寒い物が走るのを感じた。楯無はクスクス笑いながら、手拭いを枕にして寝ている一夏に視線を向ける。

「だってさぁ、幾ら勝負に集中してたからって、女の子の胸に手を伸したんだよ？　これくらいの罰は当然じゃないかな？」

「だとしてもねぇ・・・」

オーバーキル感が否めないが、取り敢ず過ぎたことなのでもう突っ込まないことに。そう言えば、と夜明はあることを思いだした。

「そう言や楯無。一夏だけじゃなくて、俺にも用があったんじゃねぇのか？」

夜明が訊ねた途端、楯無にしては珍しく、本当に珍しく頬を赤らめてもじもじし始めた。

「あ、あのさ夜明・・・結婚ってどう思う？」

楯無の質問の意図が理解できず、夜明は頭の上に大量の疑問符を浮かべる。それでも律儀に答えようと考え込む辺り、夜明は相当なお人好しだ。

「いきなり何言ってんだお前？　・・・結婚ねぇ、愛の産物だろ？」

「よ、予想以上にストレートな答えが返ってきてお姉さんドキドキだよ・・・」

何の恥ずかしげもなく、結婚を愛の産物と言い切った夜明に楯無の頬は更に赤みを増す。

「だ、だったら、その、私と・・・」

「？３？」

顔を真っ赤にさせて口籠もる楯無を夜明は不思議そうに見ていた。

丁度その時。

「チェストォォォォォォォォ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

道場の壁が吹き飛んだ。壁が吹っ飛んだ際に発生した衝撃をもろに喰らい、寝ている一夏は勿論のこと、夜明と楯無も吹っ飛んで逆側の壁へと叩きつけられる。濛々と埃が舞う中、道場の壁に出来上がった風穴から入ってきたのは。

「よぉ・・・さっき振りだな女狐・・・」

木刀を肩に担いだ太陽と、専用機持ちの皆だった。箒以外の面子はかなり殺気立っていて、太陽なんかは殺気が具現化して、太陽の周囲に赤い鬼がいるように見える。

「お、お前等。何しにここに？」

「お前を連れ戻しに決まってるだろ。まったく、私を放っておいてどこぞの馬の骨とも分からない女と過ごして・・・目標を撃破する」

ラウラがＩＳを展開するのに合わせ、箒を除く面子もＩＳを展開させた。凡に箒は、気絶している一夏を安全な場所へと移している。太陽達の目を見て本気だと悟り、夜明は慌てて楯無の前に立った。

「ちょ、ちょい待てお前等。今すぐに楯無の用件聞くから、取り敢ず待ってろ」

それなら、と太陽達はＩＳを解除・・・すると言っても準待機状態にして話が終わるのを待つことにした・・・楯無に殺気を送り続けること忘れずに。太陽達の乱入で落ち着いたのか、楯無は何時も通りに戻った表情でため息を吐く。

「はぁ・・・何で邪魔するかな？　ま、少し落ち着いたから良しってことで・・・夜明」

「何だ？」

「私と結婚しよう」

「・・・・・・・・・・・・はい？」

「結婚。英語で言うとｍａｒｒｙだね」

いきなりのプロポーズ。夜明はポカンとした表情を浮かべ、太陽達はあわあわと震えている。いち早く冷静さを取り戻した太陽は、一度咳払いをして楯無を睨んだ。

「とうとう頭が狂ったのか女狐？　男性は１８歳にならないと結婚できなばぁ！！」

顔に新聞紙を強かに叩きつけられ、太陽は悲鳴を上げる。新聞紙を投げた者、楯無に文句を言おうとするが、ふと新聞紙の一面が視界に入って顔が真っ青になった。それは太陽の肩越しに新聞紙を覗き込んだセシリア達も同じ事である。

「・・・法律改定。何をとち狂ったのか、政府は民法第七百三十一条 【 婚姻適齢 】を男子満十八歳から満十六歳に改定。政府は全てのコメントを拒否、政府への不信感がより一層高まった日である・・・まさか」

青ざめた太陽達が視線を送る先、そこには凄く良い笑顔の楯無が。手首のスナップで開かれた扇子には『無理ならば 変えてしまおう法律を』と言う恐ろしい俳句的な文章が書かれている。

「更識の力を以てすれば、これくらい余裕だよ」

「無茶苦茶だよこの人!!」

「そんな事でお家の力を使うんじゃないわよ!! ってか、法律を変えることが出来るなんてあんた何者!?」

頭を抱えるシャルの隣りで、鈴音が視線を鋭くさせて訊ねた。鈴音の問いに対し、楯無は扇子で口元を隠しながら笑みを浮かべる。

「唯の恋する女子高生さ。手段を選ばない・・・ね」

「それでは月光さん。こちらにサインを」

「朱肉はこちらで～す」

何時の間にか夜明の背後に現れた布仏姉妹。姉の手には結婚届、妹の手には印鑑と朱肉が握られている。夜明は妹、のほほんが手にしている印鑑を見て、思わず噴き出した。

「お、おいのほほん！　これは家の実印じゃねぇか！！　何でお前が持ってるんだ！？」

「先日、月光さんの実家を訪ねた際、夜桜さんと言う月光さんの姉上様があっさりと貸してくれました」

「生徒会長さんとちげっち～は将来を誓い合った仲なんだよ～って言ったら、あっさりとね～」

「・・・あのバカ姉・・・」

対応したのが夜桜だとすると、印鑑を見ず知らずの相手に渡したことが容易に想像できたので、夜明は押えきれない頭痛にため息を吐いた。ふと、夜明は一筋の光明を見つける。

「おい、布仏姉。お前は比較的真人間だから、こんな馬鹿げたことはおかしいって分かるよな？」

生徒会、だけでなくＩＳ学園でも常識人であろう布仏虚に夜明は常識を問う。虚はメガネのブリッジを押し上げ、確かにと頷いた。

「確かに、無茶苦茶だと言うことは分かってます・・・ですが」

レンズと瞳をピカンと光らせる。

「人をからかうことが大好きなお嬢様ですが、こと、月光さんの事に関しては本気の本気。ですので、私達は全力でお嬢様の恋路を応援することにしたのです」

「したのだ～」

「ダメだこいつ等、早く何とかしないと・・・」

希望を絶たれ、夜明は深々とため息を吐く。

「私と結婚しよう夜明！　何よりも甘い蜜月が私達を待ってる！」

キラキラと目を輝かせる楯無。夜明は俯けていた視線を上げ、確固たる意志を宿した目で楯無を見据えながら、はっきりと宣言する。

「だが断る！　俺はこの年で身を固めるつもりは更々無い！！」

さらば！　と夜明は太陽達が作った風穴から飛び出していった。夜明の後ろ姿を見送りながら、楯無は口元に笑みを浮かべる。瞳に輝いている光は捕食者のそれ。

「ふふふ、逃がさないよ夜明。精の貯蔵は十分？　学生結婚する覚悟は出来てる？　私は出来てる！　むぁちなすぁーいっ！！！！」

夜明の後を追って、楯無も風穴から道場を飛び出していった。耳に痛い沈黙が道場内に満ちるが、太陽が徐ろにハンドサインで集合をかける。

「これより・・・どうすれば更識楯無を抹殺できるか会議を始める」

恋とはまさに戦争・・・よく言った物だ。

学園祭、始まり始まり～

「・・・はぁ、死にたくなってくるぜ・・・」

この世の全てに絶望したかの表情で、夜明は深々とため息を吐く。
つい数分前まで楯無と鬼ごっこを演じ、やっとこ逃げ切った所だ。

（さっさと部屋に戻って寝よ・・・）

疲れ切った身体を引きずって一年寮の廊下を歩き、やっとの思いで自室へと到着。扉を開けることさえ億劫に感じながら、ドアノブを捻る。

「お帰りなさい。ご飯にします？　お風呂にします？　それともわ・た・し？」

躊躇い無く扉を閉めた。それもその筈、誰もいないはずの夜明の部屋に、裸エプロンと言う過激すぎる格好をした楯無がいたのだから。状況を整理するべく、夜明は部屋の表札を確認した。表札に書かれた月光の字が部屋を間違っていないことを告げている。

「・・・ふぅ。楯無の幻覚を見るなんて・・・俺も疲れてるんだな」

幻覚の割には随分とリアルだったけど、と無理矢理自分を納得させ、夜明は再び扉を開いた。

「お帰りなさい。にゃんにゃんする？　イチャイチャする？　それともエッチなことする？」

「言い方が変わっただけで選択肢は一つだけしか無いだろうが！！」

この現場を誰かに見られる前に夜明は素早く部屋の中に入って、廊下に誰もいないことを確認しながら扉を閉める。こんな場面、見られたらとんでもない噂が学園中に、それも数時間も経過しない内に広められることだろう。そして、夜明が太陽達に殺されかけるのは目に見えている。

「・・・こんなんばっかだちきしょう・・・」

地球の核にも届くのではと思えるほど深いため息を吐き、夜明はちらっと後ろを振り返った。

「あはっ♪」

楯無は胸を強調するようなポーズを取って、上目遣いで夜明を見ている。神速の速さで視線を扉に戻し、制服の上を脱いで振り返ることなく楯無に渡す。

「後生だからこれを羽織ってくれ。幾ら何でもその格好は色々とまずい」

「何がまずいのかな～」

分かっている癖に、楯無は態とらしい声を出しながら夜明の背中を突いた。だがまぁ、素直に制服を受け取ってくれたので、夜明はほっと息を吐く。

「あぁ、夜明の香り・・・これで数日間はオカズに困らないね」

前言撤回。ほっと息を吐いてる時間なんか欠片もない。自分の制服がどのような用途に使われるのかと思うと背筋に怖気が走り、夜明は楯無の手から引ったくるように制服を奪い取った。

「すまん、やはりそのままの格好でいろ」

「夜明ってこういうのが趣味なの？　見かけによらずエッチィね」

「違う！！」

楯無にからかわれ、振り回され、弄られること約数分。

「・・・で、何でお前さんは俺の部屋にいる訳？」

最早喋る気力さえも無い程疲れ切った表情で夜明は尋ねる。夜明が腰掛けているのとは別のベットに腰掛けた楯無（裸エプロン）は開いた扇子で口元を隠し、脚を組ながら目元を微笑させた。凡に、扇子に書かれているのは『愛の巣』だ。

「いやぁ、今日からここに住もうと思ってね」

「よし、歯を食いしばれ」

「色々とすっ飛ばしてない！？」

どのような理由で？　どのような方法で夜明と一緒の部屋になるのかはこの際置いといて、取り敢ず夜明は楯無を殴るための拳を握り締める。流石の楯無も夜明の拳を防ぐ、若しくは捌く自信がないので強硬手段に出ることに。

「そりゃ！」

「へぶぅっ！！」

ラグビーのタックルの要領で夜明の腹部に頭突きして、楯無は夜明をベットの上に押し倒した。

「な、何しやが・・・」

胃の中身が激流となって口の中から出そうになるのを堪え、夜明は涙目で楯無を上から退かそうとして声を失う。現在、楯無は裸エプロン、それもギリギリで着れるか着れないかくらいのサイズを着ているので、身体のラインがハッキリと浮き出ていた。

「んふふ、エロゲーみたいで燃えるシチュエーションじゃない？」

妖艶な笑みを浮かべながら楯無は夜明のＹシャツのボタンへと手を伸し、見事な手際で全てのボタンを外していく。数秒と経たずに夜明の胸板を露出させ、桜色の部分に舌を這わせる。

「・・・！！」

夜明は身体を強張らせた。思わず情けない声が漏れそうになったが、気合と根性でどうにか耐える。夜明の反応がお気に召さなかったのか、楯無は夜明の胸を舐め上げていった。ゆっくりと、夜明を味わうように舌を上へと運び、首筋に到達すると甘噛みし始める。

「た、楯無、マジで、止めてくれ・・・」

「聞こえな～い」

夜明の懇願を無視して楯無は更に夜明の首筋を舐め上げ、耳たぶを口に含む。夜明が顔を真っ赤にさせている様を視覚で楽しみ、耳の穴に舌を入れた。

「なぁっ・・・!?」

夜明の口から情けない声が漏れたので満足したのか、楯無は夜明の耳の中で舌をくねらせてからゆっくりと引き抜く。

「ふふふ、夜明ってば可愛い・・・もっと気持ちいいことしてあげよっか?」

荒い息を吐いている夜明に追い打ちを掛けるように、楯無は蠱惑的な声で囁く。囁いている間も、楯無の手は夜明から理性を奪おうと夜明を撫で回している。夜明の目が焦点を失っていくのを見て、胸を強く押しつける楯無。

「言ってくれれば、私はどんな事でもしてあげるよ。口でしてあげるし、胸でもしてあげる。だから・・・」

ここまで言っているのだから、自分からすれば良いと思うだろうが、それはそれで味気ない。楯無は飽くまで、夜明から自分を求めて欲しいのだ。自分からするのではなく、夜明から。こう考える辺り、彼女も乙女だろう・・・行動が乙女ではないが。

「お、俺は・・・」

夜明の顔、目、声から急速に理性が失われていく。後一撃で夜明を墜とせると確信し、楯無は三日三晩寝ずに考えた殺し文句を夜明の

耳元で囁いた。相当恥ずかしい台詞なのか、顔は羞恥で真っ赤に染まっている。

「・・・夜明ので、私の中、ぐちゃぐちゃに掻き回して」

刹那、夜明は楯無を押し倒していた。楯無でさえも認識出来ない程の速さだ。余りの速さに楯無はビックリしたが、望んだ結果が出たので嬉しそうに身体から力を抜く。

「あ、今日は危険日だけど・・・ま、いっか♪」

夜明は楯無の身体を覆っているエプロンに手を伸して、乱暴に引き剥がした。

かに思えたが、

「オラァッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

何とまぁビックリ。楯無のエプロンを脱がすかと思われた手で、思いっ切り自分の額を殴りつけた。本気の本気、一切の加減無しに。

「・・え？」

真っ白になっている楯無を余所に、自分の手で脳震盪を起こした夜明は酔っ払いのような覚束ない足取りであっちに行ったりこっちに行ったり。最終的にベットに倒れ込んだ。

「・・・お〜い、夜明〜？」

上半身を起こし、楯無は夜明の頬をプニプニしてみた。夜明は何の反応も示さず、漫画のように目を渦巻き状に回転させている。

「・・・この展開ってあんまりじゃない？　私の頑張りって・・・」

色々と恥ずかしいのを我慢して夜明を誘惑していたのに、肝心の夜明は自分で頭を殴って気絶してしまった。不機嫌そうに頬を膨らませ、楯無は夜明の頬を軽く抓る。

「据え膳食わぬは男の恥って言葉を知らないの？　女の子に恥をかかせるなんて、愛想が尽きちゃいそうだよ」

夜明にしてみれば、その据え膳に食われかけたのだから笑えない。愛想が尽きそう、とか言っているが、楯無は愛おしそうに夜明を撫でた。

「このまましてもいいんだけど、それじゃ意味無いからね。今回はこれだけで我慢してあげる」

夜明の首筋に口付けして、楯無は強く夜明の肌を吸う。数秒して夜明から離れると、夜明の首筋には見事なキスマークが出来ていた。

「いつか君を捕まえる」

「う～ん・・・」

翌日の朝、夜明は納得のいかない顔で教室へと向かっていた。楯無が部屋に住むと言った辺りから記憶が曖昧で、おまけに首筋に妙な違和感を感じる。

「・・・何か嫌な予感しかしねぇな」

部屋を出ていく時、楯無が浮かべていた笑みを思い出して夜明は一人愚痴る。まぁ、考えても詮無いことだと割り切って頭を切り換えた。今日の授業は千冬のオンパレード状態、こんな浮ついた気持ちで授業を受ければ、頭が出席簿で変形するのは確実だ。

「夜明、お早う」

「お早う、夜明」

呼び声に振り返ると、足早に歩み寄ってくる一夏と箒の姿が。

「ん、どうしたんだ夜明。何か妙に疲れてるみたいだけど？」

夜明の表情が妙に疲れていることに気付き、一夏は夜明に訪ねた。対して、夜明は力無い笑みを浮かべるだけ。

「あはは・・・昨日から楯無が俺の部屋に住み着いてな。それの御陰だ」

「そ、それは大変だな・・・」

少し見ただけでも、楯無は一癖も二癖もある人間だと言うことは分かるので、一夏と箒は同情を隠し切れていない視線を夜明に送る。

「朝起きたら俺のYシャツだけ着て布団に潜り込んでたし・・・あいつが何をしたいのか俺には皆目見当がつかないぜ・・・」

「そう言えるのは古今東西お前だけだろうな、夜明」

深々とため息を吐く夜明の後ろ。何時の間にいたのか、太陽がジト目で夜明を睨んでいた。同じような目をしているラウラ、シャル、鈴音、セシリアがその隣りに続いている。

「うおっ!?　太陽、それにお前等も何時の間に?」

夜明の問いに答えず、太陽達は額を突き合わせた。

「夜明の話から察するに、あの女狐は夜明の部屋に侵入してるみたいだが・・・どうする?」

「「「「殺そう」」」」

この恋する少女達、物騒すぎて言葉が出てこない。夜明達が呆然としていると、セシリアがあることに気が付く。

「あら?　夜明さん、その首の物は一体・・・?」

「あ？　何のこと・・・って何か跡が付いてるな。何だこりゃぁ！？」

首筋の違和感に気付いて首を傾げた瞬間、太陽の左手が夜明の胸倉を掴んで思いっ切り引き寄せた。右腕にＩＳ装甲を展開させ、ライオンハートの銃口を額に突きつける。数瞬遅れ、他の面子もＩＳを展開させて主武装を夜明に向けていた。

「あ、あの、皆さん。怖すぎるんだけど・・・」

尋常じゃない量の冷や汗を流しながら、夜明は恐る恐る太陽達に視線を走らせる。単色になった太陽達の瞳に映り、夜明の脳内では走馬燈が全速力で駆け巡っていた。

「言え夜明、あいつに何された？」

「そ、それが記憶になくて・・・」

たはは、と力無く夜明。嘘はついていないと判断したのか、太陽は夜明を離す。

「・・・まぁいい、女狐から聞き出せばいいだけの話だ。それじゃ、授業へと向かうとするか・・・その前に」

太陽は夜明の胸倉を再び掴み、

「むごぉっ！？」

夜明の唇を奪った。全員が顔を赤くする中、数秒ほど夜明の唇を強

く吸って離れる。

「ふむ、やはり唇にキスマークを作るのは難しいか・・・」

ぶつぶつと呟きながら歩いていく太陽の後ろ姿を、無言で見送るしかない夜明達。次に動いたのはラウラだった。

「夜明」

「何でしょぉ！？」

また唇を奪われ、夜明は目を白黒させる。

「お前は私の夫なんだ。そのことを忘れないように」

ビシッ、と夜明を指差しながらラウラは言う。続いてシャル。

「・・・夜明」

「・・・お前は何するぅ！？」

三度目のキス。顔を赤くしながらシャルは夜明の耳元で囁く。

「・・・絶対に君の心を僕の物にして見せる」

最後にセシリアと鈴音。

「「よ、夜明（さん）！」」

「今度は何だぁ！？」

また唇を奪われては堪らないと、夜明は慌てて唇を手で防ぐ。だが、二人は夜明の唇にではなく、頬にキスをしていた。

「こ、今回はこれで勘弁してあげますわ！」

「つ、次はもっと凄い事してやるから・・・覚悟しときなさいよこんちきしょぉーっ！！」

流石にこんな所で口付けする度胸は無かったらしく、二人は小物のような捨て台詞を残して走り去っていく。その後ろ姿を見送りながら、夜明は一夏と箒の方を見た。

「・・・なぁ、一夏、箒。あいつ等は精神が錯乱する類の毒でも吸い込んだのか？」

「・・・何でお前はそうなんだ！」

「皆・・・強く生きてくれ・・・」

ここまでしても好意とかそういう類の物に結びつけようとしない夜明に、いい加減怒りを覚える一夏と箒だった・・・。

明日は学園祭。恋する少女達の戦争は加速する。

学園祭、始まり始まり～（後書き）

オマケ

「（キスマーク・・・）・・・一夏」

「ん、どうした箒、って何で俺の首筋に吸い付いてんだ!?」

強化パッケージ、今でも募集中

ご奉公喫茶・・・何のこっちゃ？

待ちに待った学園祭当日。一般公開はされないので花火こそ上がらないが、生徒達のテンションが花火並みに弾けているから上げる必要も無いだろう。一般公開をしないと言っても、生徒一人に一枚渡されるチケットで、一人だけ招待できることになっている。まぁ状況はとかく、夜明達のご奉公喫茶なる店を見てみよう。

「月光君と織斑君の接客が受けられるの！？」

「しかも燕尾服！」

「それだけじゃなくて、ゲームをして勝ったら一緒に写真撮らせてくれるんだって！」

「これは行かない手はないわ！！」

もっそい繁盛してた。正確に言うと、夜明と一夏がもの凄い引っ張りだこな訳だが。忙しいのは野郎二人だけで、それ以外は割と楽に仕事をしている。

「いらっしゃいませ♪　こちらにどうぞお嬢様」

「誠心誠意ご奉公させてもらおう」

特にシャルと太陽は楽しそうだ。夜明に似合っていると言われたからだろう。二人は接客班なのでメイド服を着用している。太陽のメイド服姿が激レアというのもあり、教室内にはシャッターの音が絶

えない。

「にしても凄い客だな、俺たちだけで大丈夫かよ？」

接客班は夜明と太陽、一夏と箒、セシリア、シャル、ラウラの七人。それ以外は調理と雑務を担当している。まったくの余談になるが、一夏が燕尾服を着て接客するのを嫌がっていた箒を説得したのは太陽だった。調理はともかく、雑務は切れた食材の補充やらテーブルの整理などで忙しそう。その中でも一番大変そうなのが廊下に出来た長蛇の列を整理しているスタッフだ。

「こちら二時間待ちで～す」

「大丈夫です。学園祭が終わるまでは開店してますから」

整理しているのに何故か増えているという、ある意味ホラーな現象を起こしている列から起こっている各種クレームに対応しているスタッフはご苦労様だ。

「さて、俺は俺の仕事をするか」

気合を入れて接客に臨もうとすると。

「ちょっとそこの執事、テーブルに案内しなさいよ」

何やら乱暴な口調のお嬢様・・・改めお客様。毎日耳にしている声に振り返ると、そこには案の定鈴音の姿が。だが、着ている服が案の定ではない。

「鈴音、何してんだお前？」

鈴音はチャイナドレスを着ていた。一枚布のスカートタイプで、真っ赤な生地に龍をあしらっていて、かなり大胆なスリットが入っている。

「う、うるさい！　うちは中華喫茶をやってんのよ！」

「ほぉ、飲茶とやらか？　にしてもお前、何でそれ着て来たんだ？」

「せせせ、宣伝に決まってんじゃない！　唯でさえあんた達の所に客持っていかれちゃってるんだから、少しでも宣伝しとかなきゃいけないでしょ！？　あ、あんたに見て欲しかった訳じゃ無いからね！」

まさかこの格好を見て欲しかったと言える訳も無く（実質言ったようなものだが）、鈴音は頬を赤く染めながら憤慨してみせる。相当鈍い人間でも、ここまで言われりゃ何かに気付くだろうが、そこは夜明。

「ふ～ん、そっちも大変だな。そいじゃテーブルに案内するから来てくれ・・・じゃなかった。ご案内いたしますお嬢様」

「お、お嬢様！？」

「客にはそう言って接客するルールだ」

「そ、そう、ルールなら仕方ないわね！　・・・仕方ないわね」

何で二回言った？　そんな疑問が湧き上がってきたが、相手は友人とは言え客なので、黙ってテーブルに案内することに。凡に、一年

一組『ご奉公喫茶』の内装は学園祭とは思えないレベルの調度品が置いてある。半数はセシリアが手配した物、もう半数はそれを参考にして太陽が手作りした物だ。学園祭なんかでこんなレベルの物を手配するセシリアもセシリアだが、たった数日で似たような物を作る太陽も太陽だ。テーブルやイスが高級だとティーセットもそれに釣られてレベルが上がるわけで、調理担当の連中は色々と大変そうだ。

「それで、ご注文は何になさいますか、お嬢様？」

「そ、そうね・・・」

庶民育ちである鈴音には居心地が悪いのか、鈴音は二度、三度身動ぎして夜明が開いているメニューを凝視する。

「この『執事ご褒美セット』って何よ？」

「今日は良い天気ですね」

「そこまであざとい話題の転換って、逆効果だと思うわよ・・・」

流石に、この話題の転換には難がある。

「何お客様相手に誤魔化そうとしてんのよ」

「はっはっは、何を仰いますかお嬢様」

「・・・気持ち悪いから止めなさいよ、その喋り方」

それが執事になった夜明を見た、鈴音の素直な感想だった。いくら

鈍感とは言え、流石に鈴音のオブラートに包まない物言いはぐさりと来た様子。

「お前なぁ、言うに事欠いて気持ち悪いは無いだろ？　こっちは恥ずかしいの我慢してやってるのに」

「じゃあこの『執事にご褒美セット』一つ」

「お嬢様。窓の外で鳩が飛んでますよ」

「当たり前でしょ」

誤魔化しは利かないようだ。諦めて夜明は軽くため息を吐き、深々と腰を折った。

「『執事にご褒美セット』が一つ、ですね。少々お待ち下さい」

内心毒づきたい気持ちを抑えつつ、夜明は鈴音の前から立ち去る。オーダーだが、ブローチ形マイクから音声で通じているので通す必要はない。

「お待たせしましたお嬢様」

「う、うむ、苦しゅう無いわよ？」

片手に『執事にご褒美セット』なる巫山戯た物を乗せ、夜明は鈴音の元に戻ってきた。鈴音はお嬢様を気取っているみたいだが、その様は滑稽だ。語尾が疑問系だし、色々と間違っている。

「では、説明させていただきます」

「よ、よきにはからえばいいわよ？　・・・って、何で座ってんの？」

鈴音と向かい合う形で、夜明は鈴音と同じテーブルに座った。片や燕尾服、片やチャイナドレス。構図としてはシュールなことこの上ない。

「・・・ってかよ、普通の口調でいいか？　お前相手にこの口調って違和感しか感じねぇ」

「まぁ、確かにさっきの口調はあんたに似合わないわよね。許したげるわ」

さっきのお前の口調も十分おかしかった。喉元まで込み上げてきた台詞を飲み込み、夜明は『執事にご褒美セット』である冷えたガラス製コップに入ったポッキーと、アイスハーブティーを鈴音に差し出す。

「で、これってどんなセットなのよ？　お菓子と飲み物だけど」

「・・・食べさせられるんだよ」

「はい？」

「だから、執事にお菓子を食べさせるセット」

夜明の説明を理解するのに要した時間は数秒。鈴音の顔が赤く染まった。

「な、何よそれ？　って言うか、お金取ってお菓子あげるとか・・・」

「キャンセルは出来ないからな・・・だから別のにしといた方が良いって言ったんだよ」

「で、でもまぁ、一度注文した以上は・・・ごにょごにょ・・・」

「任意のサービスだし、やりたくなかったらやらなくても良いんだぜ。その時は俺も戻るけど」

「そ、そう。なら何か勿体ないし、折角だし序でだし・・・ご褒美あげようかしらね」

いや要らんだろ、と言う夜明の言葉を無視し、鈴音はポッキーを一本手に取り、夜明の口元に先端を向けてくる。顔が真っ赤なのは仕方ないと言うべきだろうか。

「は、はいご褒美、あ～ん・・・」

「・・・鈴音、そんなに恥ずかしいならしなくてもいいんだぞ？お前、思いっ切り横向いてるし」

「するってば！　お金払ったんだから、サービスしなさいよ」

「・・・了解。あーん」

「あーん」

ポッキーの先端が夜明の口内に入り込み、夜明はそれを噛み砕いた。

パキッ、と軽い音と一緒にポッキーは砕け、数秒と掛からずに口の中で溶ける。

「た、食べさせてあげたんだから、私にも」

「悪いがそう言うサービスはしていない。さっさと帰れ」

いつの間にか二人の横にやって来たメイド服姿のラウラが、怖い目で鈴音を睨んでいた。その目線、明らかにお客様に向ける物ではない。

「そ、そうなんだ。分かった」

「・・・・・・」

「おいラウラ。五番テーブルで注文みたいだが」

「分かっている！」

不機嫌そうに鼻を鳴らし、ラウラはメイド服の裾を翻して去っていった。

「何怒ってんだ？」

「さ、さぁ？」

赤く染まった顔を俯き加減にして、鈴音は両手で持ったポッキーをこりこりと食べている。その様、小動物のようで実に可愛らしい。

「鈴音。可愛いなお前」

「ぶぅーっ！！」

いきなり夜明に可愛いと言われ、鈴音は口に含んでいたハーブティーを盛大に噴き出す。まぁ、いきなりこんなこと言われれば無理からぬことだ。ごほごほ咳き込みながら、鈴音は顔を更に赤くさせて夜明を睨む。

「か、可愛いって、あんたいきなり何言ってんのよ！？」

「いや、可愛いと思ったら自然と口が。出来れば部屋に持って帰って愛でてぇ」

「へ、部屋にって！？　・・・はふぅ・・・」

頭から煙を噴き出して鈴音は気絶した。目の前でいきなり鈴音が気絶したので、夜明は慌てて鈴音を抱き起こす。

「ど、どした鈴音！？　何だ、貧血か！？　それとも熱射病か！？」

「落ち着け夜明。室外ならともかく、室内で熱射病は有り得ないからな」

いい感じに暴走している夜明を一夏が落ち着かせる。鈴音を介抱してる間に動いている影が四つ。

「ふぅ、これでよし、と。接客の続きを「「「「夜明（さん）」」」」」んぁ？」

気絶した鈴音を二組に返してきて、戻ってきた夜明は呼び声で振り

返った。するとそこには。

「「「「・・・（こりこり）」」」」

さっきの鈴音のように両手でポッキーを持ちながら食べている太陽達の姿が。

「・・・何してんだお前等？　仕事しろよ」

呆れたように呟きながらさっさと仕事に戻る夜明。太陽達は数秒固まるが、すぐにポッキーを飲み込んだ。

「・・・期待した私達が愚かだった」

「・・・流石にあの言い方は傷つきますわ」

「・・・仕方ないよ、仕事サボってた僕たちの方に非があるわけだし」

「・・・しかし、あの反応は悲しすぎるぞ」

「・・・幾ら何でもその反応は可哀想すぎるんでないかい、夜明？」

お通夜のような空気を放ちながら仕事に戻る四人を見て、いつの間にかやって来た楯無（メイド服装備）は扇子を開く。そこに書かれているのは『罪な男』だ。

その後、太陽と楯無が血で血を洗うような闘いに突入しようとしたが、どうにか夜明が場を取りなしたので、学園祭中に校舎が崩壊すると言う最悪の結末は回避できた。ホッと息を吐いていると、何時だか夜明と一夏にインタビュー（と言う名の捏造）をしてきた新聞部の黛薫子がご奉公喫茶にやって来た。

「新聞部の黛薫子でっす。今回は噂の月光執事と織斑執事を取材に来ましたー」

そんなこんなあって、夜明と一夏は女性陣と一緒に写真撮影をする羽目に。

一組目、一夏と箒。

「・・・」

「どうした？　もしかしてこの格好で写真撮るのが嫌なのか？」

「う、うむ。このような格好で撮った写真が残るのは避けたいのだが・・・」

「良いじゃん、似合ってるんだし」

「そ、そうか。一夏が言うんだったら・・・／／／」

二組目、夜明と太陽。

「さて、写真撮影だが、何か要望はあるか？」

「二人で一人の仮面ライダー。あれがやりたい」

「あれか・・・にしてもメイドと執事が仮面ライダー・・・訳わかんね」

「「さぁ、お前の罪を数えろ」」

三組目、夜明とセシリア。

「夜明さん、笑顔を」

「こうか？」

「少し固いですわ。それでは接客業は出来ませんわよ」

「そうかね？　にしてもお前さんは楽しそうだな」

「そうですか？　うふふ」

四組目、夜明とラウラ。

「それにしても、お前と私では結構な身長差があるな」

「言われてみれば確かに」

「・・・してもいいぞ」

「あ？」

「だ、抱っこしてもいいぞ、と言ったのだ」

「ん、別に良いけど　（ヒョイ）」

「ほ、本当に抱っこする奴がいるか！？」

「分かった」

「下ろすな！　抱っこしてろ！」

五組目、夜明とシャル。

「よ、夜明。この格好って変じゃないかな？」

「安心しろ。ばっちり似合ってるし可愛いぞ」

「そ、そっか。可愛いのか・・・エヘヘ・・・」

「何か笑顔百倍だな・・・」

こうして恙なく写真撮影を終え、夜明と一夏は休憩がてら学園祭を回ることに。・・・当然、彼女たちが黙っているわけも無いのだが。

学園祭・・・部活動の店は如何に？

休憩時間。どっちが先に休憩するかジャンケンで一夏に負けた夜明。未だかつて着たことのない執事服を着用しての接客に、些かの疲労感を感じる。凡に、一夏は箒と一緒に学園祭を見に回っている。

「しっかし、客が一向に減らねぇな」

お嬢様、もとい客の要望をテキパキと捌き、夜明は軽いため息を吐く。それなりに時間が経過すれば客足が減ると思っていたのだが、そんな希望は甘っちょろすぎると痛感させられた。

「月光君よ、本物よ！！」

「こっち向いて～！！」

「執事服、これはレアだわ！！」

「何でこうパワフルなのかね俺と同年代の女子達は・・・」

花盛りのティーンエイジャー。その体の内に秘めた力は誰にも想像できない。弾幕よろしく降り注ぐお客様方のサービス要求に辟易していると、くいくいと袖を引かれた。

「ん、どうしたセシリー？」

「あの、夜明さんをご指名してらっしゃるお客様が・・・」

「またかよ・・・分かった、すぐ行くって何かあったのか？」

これで四二回目だ。夜明は天井を仰ぎながら嘆息する。了承の旨をセシリアに伝えようと視線を戻した所で、ある違和感に気付く。夜明を指名してくる客が多いので、夜明を指名する場合は他の接客班、つまり太陽達を通すことになるのだ。まぁ当然と言うべきか、夜明の指名が入ってくる度に不機嫌になっていく接客班。例に漏れずセシリアも不機嫌になっている・・・筈なのだが、今回は少し勝手が違うらしい。不機嫌とかではなく、困惑しているような表情を浮かべていた。

「その、何かあったと言うべきか・・・兎に角一番席に」

「あ、あぁ」

釈然としないが、客を待たせるわけにもいかないので、セシリアに言われたとおりに夜明は一番席へ向かう。窓際の良く日が当たる席。何故だか、そこだけ他とは隔絶された様な、色彩がおかしい感じを覚えた。だが、そのおかしな感じの正体はすぐに分かった。

「・・・成る程」

これはセシリアが困惑するのも無理はない、と一番席に座っている客を見ながら夜明は心の中で呟く。その席、一番席に座っている女性だが、この場にいる誰とも、存在感その物が違うのだ。人を見る目がない者でも分かるだろう。この女性がただ者ではないことを。

「・・・来たか」

窓の外に視線を向けていた女性は夜明が来たことに気付き、親指で向かいの席に座るようジェスチャーした。夜明は指示された通りに

席へと座る。その僅かな間に、女性を隈無く観察するのも忘れない。肩に触れるか触れないかくらいの長さ、女性にしては少しばかり短すぎる青髪。顔は誰もが羨望の念を抱く美女だが、全身から放っている刃にも似た冷たい空気が、女性が通常とは一線を画した存在だと告げている。例えるなら日本刀。美しく在りながら、人を殺すための殺人包丁。それも、鞘に収まっていない抜き身。

「そう殺気立つな。こちらに戦闘の意思はない」

知らず知らずに僅かな殺気を漏らしていたこと、その僅かな殺気を一瞬で悟られたことで、夜明は驚きを隠せずに動きを止めた。一瞬だけ硬直し、すぐにイスへと座る。

「・・・どういったご用件でしょうか？」

剣呑な表情を浮かべることが押えきれず、夜明は声に微かな敵意を交えながら女性に尋ねた。すぐには答えようとせず、女性はテーブルの上に置いてあるまだ手付かずのブッラックコーヒーに視線を落とす。

「何、少しだけ興味があったのさ。史上最強と謳われたＩＳ『不屈（レイジン）の翼（グウィング）』とその搭乗者、月光夜明にな」

「は、はぁ・・・」

どう返事をしていいか分からず困惑する夜明を、女性は顎に指を当てて探るような視線を送る。夜明に数秒ほど居心地の悪さを感じさせ、女性は再び視線をコーヒーに戻した。

「・・・対峙しただけで首輪付き共とは次元を異とする存在だとい

うのが分かるな。ラインアークの連中が象徴としているのも頷ける・・・」

「首輪付き？　ラインアーク？」

聞き慣れない単語に困惑する夜明を無視し、女性はテーブルの上にコーヒー代を置いて席から立ち上がった。

「オッツタルヴァだ。すぐに忘れることになるだろうが、今日一日だけでも覚えておけ。それと、赤髪の相方に銀食器を凶器にするなと伝えておけ」

一方的に言い捨て、青髪の女性、オッツタルヴァは一組を出ていった。超絶的な空気を纏って歩くその姿に、一組の外で長蛇の列を作っていた客達はモーゼの十戒よろしく割れる。オッツタルヴァの後ろ姿を見送り、夜明はオッツタルヴァに刺すような視線を送っていた太陽に視線を向ける。

「太陽。あの女に見覚えとかってあるか？」

「いや、無いな。仮に見ていたとしたら、絶対に忘れるわけがない。あの女、殺気も出してないのに私の動きに気付きやがった」

毒づき、太陽は両方の袖から覗かせていた複数のナイフとフォークをテーブルの上に置いた。オッツタルヴァが少しでもおかしな動きをした時、すぐに殺せるようにするためだ。対峙しただけで夜明に警戒心を抱かせるほどの雰囲気、一般の目があるにも拘わらず、太陽に殺す決意をさせた存在感。どれを取っても普通ではなかった。

「オッツタルヴァ、か・・・」

オッツタルヴァが残していったブッラクコーヒー、それだけが窓の外から射し込む陽光を受けて輝いていた。

「休憩時間になった訳だが・・・どこか行きたい所ってあるか、シャル？」

「じ、じゃあ、料理部に行きたいんだけど・・・」

一夏と箒が戻ってきたので、夜明は休憩を取って学園祭を回ることにした。その際に誰が夜明と一緒に見回るかで口論になったが、平和的解決方法（ジャンケン）でシャル、ラウラ、セシリア、太陽の順番に決まる。

「料理部？　日本料理に興味でもあるのか？」

「うん。日本の伝統料理を作ってるんだって。せっかくだし、作れるようになりたいなぁって」

「あぁ、確かにシャルって料理うまいからな」

ふと、実家に帰っていた時に料理を作ってもらったことを思い出し、夜明は呟く。

「そ、それじゃあ、今度また作ってあげるね」

「楽しみにしておくよ」

会話を交わしながら歩いている内、二人は調理室に着いた。

「おぉ、凄ぇの一言に尽きるなこりゃ」

調理室に入った二人を出迎えたのは大量のお総菜だった。並べられた大皿には肉じゃが、おでん、和え物ｅｔｃｅｔｃ・・・とにかく色々とある。

「これが肉じゃが？」

「あぁ。夜桜姉さん曰く、昔の女性の必須スキルだったらしいぞ」

「それはどうして？」

「何でも、肉じゃが上手く作れる女性と結婚できると幸せになれるとか何とか・・・」

「け、結婚！？　そ、そうなんだ・・・」

夜明の説明にビックリし、シャルは無言で肉じゃがを見つめていた。食べたいのかと思い声をかけようとするが、肉じゃがを見る目が尋常ではないので、声をかけられずにいる今日この頃。取り敢ず、食べてみることに。

「こいつはうまい・・・」

「おいしいね、夜明。どうすればこんなにおいしく作れるんだろ？」

「それは料理部に入ってからのお楽しみ・・・って感じじゃねぇの？」

「料理部かぁ・・・よ、夜明はさ、僕の料理がおいしいと嬉しい？」

「そりゃ誰だって嬉しいだろ」

おいしい料理が食べれることは、人をこの上なく幸福にさせる・・・ってどこかの偉い人が言ってたような気がしないでもないが、やっぱり気のせいだった。嬉しそうに肉じゃがを食べているシャルを可愛く思いながら、シャルとの休憩時間は終わった。

「遅い！」

「おいおい、まだ約束の時間一分前だぞ」

廊下で待っていた眼帯メイドことラウラに文句を言われ、夜明は携帯の背面ディスプレイを確認する。背面ディスプレイに映し出された時間は約束の一分前を示していた。夜明の淀みない反論でラウラは詰まるが、顔を赤くさせながら腕を組んで屁理屈をこねる。

「ご、五分前行動だ！」

「そりゃ立派なことで」

苦笑いを浮かべ、夜明はラウラの手を掴んで歩いていった。向かう先は茶道部。

「て、手を握るな！」

「ん、悪い」

「あ・・・やっぱり握っていろ！」

「どっちなんだよ・・・」

苦笑いを浮かべて歩くこと一分弱、二人は茶道部にやって来た。

「さて、ここでは抹茶が体験できるらしいが、どんな物なのかね？」

「少なくとも、泥水を煮沸しただけの物よりはうまいだろう」

そりゃそうだ。と言うか、比べること自体がおかしい。畳の上で正座して待っていると、和菓子が出された。夜明は一口で食べたが、ラウラは食べることを逡巡している様子。ラウラに渡されたのは白い餡で出来たウサギの形をした和菓子で、中途半端に歯形を残すのが嫌らしい。

「ラウラ、早く食べないと抹茶が飲めないぞ」

「う、うぅ・・・そうだな」

覚悟を決め、ラウラは和菓子を口の中へと放り込む。一口で和菓子

を楽しみ、その後に抹茶をいただき、二人は茶室を出ていった。

「抹茶って聞くと苦いものってイメージがあっけど、そうでも無かったな。それに、茶道ってだけあって和服だった・・・」

ふと、ラウラの舞妓姿を思い出して夜明は頬を赤らめる。あの時のラウラは本当に綺麗だった。

「なぁ・・・」

「む、どうかしたのか？」

「ラウラって本当に綺麗だよな」

「！？！？！？　い、いきなり何を言ってるんだお前は！！」

顔を真っ赤に染めつつも、ラウラは嬉しそうに笑いながら夜明の背をベシベシと叩くのだった。

「そう言やぁ、セシリーってバイオリンが弾けるんだっけか？」

「えぇ。後、ピアノも少々」

「凄ぇなぁー。俺は音楽の授業とか寝てたから、リコーダーすらまともに吹けねぇよ」

「で、でしたら！」

いきなりセシリアは夜明の腕を引っ張り、ある方向を指差す。そこには『吹奏楽部の楽器体験コーナー』と書かれた看板を下げた教室がある。

「今からでもやってみては如何かしら？　まぁ、私が教えて差し上げてもいいですわよ」

「って言われてもなぁ。俺、楽譜読めないし」

「夜明さん。音楽とは、そこに愛があればいいんです」

「おぉっ！　よく分からんが深い言葉だな！」

よく分からないがセシリアの言葉に深い感銘を受け、夜明は導かれるまま教室の中に。そこでホルンを吹いてみることになったのだが・・・。

「ふー！　ふー！」

まったく音が出ない。それでも諦めずに夜明は息を吐き続けるが、結果は同じ。夜明の顔が普通の色から赤色、青色へとシフトし、最終的に真っ白になる。見かねた吹奏楽部部長とセシリアが止めようと夜明の肩に手をかけた瞬間、夜明はそのままぶっ倒れた。

「ちょ、夜明さん！？」

「きゃぁ～！　保健室保健室！！」

周囲の生徒の手も借り、息を吐きすぎて気絶してしまった夜明を保健室に運ぶ。何というか散々だが、セシリアはセシリアで夜明に膝枕が出来て嬉しそうだった。

「り、リアルに死ぬかと思ったぜ・・・」

「集中するのはいいが、せめて死なない程度にやれよ」

息の吐き出しすぎて死にかけた夜明の隣りを歩く太陽。呆れたような視線を送っているが、その手はしっかりと夜明の手を握っている。

「それで、お前はどこに行きたいんだ?」

「ん〜、特に考えてないな。お前と二人でいられれば、それで良いからな・・・お、でもあれは面白そうだ」

二人が歩いているのはグラウンド、太陽が視線を向けている先には、野球部の出し物と思しきアトラクションがある。マウンドの上に大砲のような機械があり、砲身から恐ろしい速度で硬球を吐き出している。バッターボックスに入っている生徒はバットを振るどころか、バットを振る体勢にさえ入れなかった。

「おぉ、速いな」

「あの速度、完全に人間が反応できる速度じゃないな・・・夜明、行ってみよう」

「おっしゃ」

興味を掻き立てられ、二人は受付へと向かう。

「いらっしゃーいって月光君!?　写真撮らせて!」

「どうぞー」

最早慣れてしまった遣り取りを終え、二人は受付の先輩から説明を受ける。

「えぇー、超高速バッティングマシーン、投げる君に挑戦してみよう!　一回百円、見事ホームランを打てた人には豪華賞品を差し上げます!」

「ほぉー。凡に、その投げる君ってのは時速何キロの球を投げられるんだ?」

「一番遅くて二百キロ、一番速くて五百キロだね」

「それ、人間が打てる速さじゃないだろ・・・」

プロ野球の選手や大リーガーでも無理だろう、だが、そこは漢太陽。何の迷いも無く最高速度を選び、金属バットではなく木製バットを肩に担いでバッターボックスへと歩いていった。

「夜明、そこで私の勇姿を見ていろ」

「・・・あいつの場合、本当にホームラン打ちそうだな。てか、バッターボックスに入るメイドってシュールすぎんだろ・・・」

現在休憩時間のため、太陽はメイド服を着ている。そんな格好でバットを振れるのかと言う疑問が野次馬の胸中に浮かんでくるが、何の造作もなくバットを構えた太陽を見てその疑問もすぐに霧散した。

「それじゃ第一投、行くよ～！」

受付の人が叫んだ瞬間、投げる君からウィ～ン、と微かな音が聞こえてきた。大量に硬球が入っている籠から一個を吸い上げ、砲身へと装填する。そして、

ズドォンッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

間違ってもこんな音は出ないだろう音を放ち、砲身から硬球が吐き出された。その速度たるや、空気抵抗で燃え尽きないのが不思議なくらい。誰もが打てないと思った。だが・・・

「何だ、存外遅いじゃないか」

ボソリと呟き、太陽は残像さえ残らない速度でバットを振り抜く。グラウンド中に快音が響き、太陽に打たれた硬球は空の彼方へと消えていった。夜明以外の誰もが呆然とする中、太陽は満面の笑みを浮かべながら夜明を振り返り、

「V♪」

可愛らしくVサインを作るのだった。

「夜明、一夏君。ちろぉーっと生徒会の出し物を手伝ってちょうだい」

「「は？」」

二人が拒否する暇も与えず、楯無は二人の首根っこを掴んで引きずっていった。既に買収されているのか、箒達、しかも太陽までがそのドナドナのような光景を無言で見送っている。

「ちょ、ちょっと待て楯無！　話が全く見えねぇ！！」

「だから、手伝ってって言ってるじゃない」

「せ、せめて何をやるのか教えてくださいよ！！」

楯無は口元をにんまりと微笑ませ、狩人の目で二人を見た。

「観客参加型演劇『灰被り姫（シンデレラ）』よ」

シンデレラってこんなんだっけ!?　違うっしょ!!

「二人とも、着替えたー？」

「あぁ・・・」

「取り敢ず・・・」

第四アリーナの更衣室。ドアの外から聞けてくる楯無の声に気のない返事をし、二人は更衣室から出てきた。格好は何というか、王子様である。

「あらら、二人とも似合ってるじゃない。はい、王冠」

二人は渋い表情のまま、楯無から王冠を受け取る。

「嬉しそうじゃないわね。何？　シンデレラ役の方が良かった？」

「誰だって了承も無しに演劇に出されりゃ不機嫌にもなるし、俺たちに女装する趣味はねぇ」

間髪入れずに夜明は否定し、一夏は何度も頷いた。楯無は開いた扇子で口元を隠しながら目元に悪戯っぽい笑みを浮かべ、時計に視線を向ける。

「さって、そろそろ始まるわね。二人とも、準備して」

二人がこれから向かうのは第四アリーナ一杯に作られた特設セット。学園祭で使うには勿体ないくらい豪華な物だった。客席は勿論満席

で、演劇の始まりを待つ声が更衣室にまで届いている。

「あの、楯無先輩。俺と夜明って脚本とか台本とか一回も見せて貰ってないんですけど」

「大丈夫。基本的にこっちがアナウンスするから、それに合わせて物語を進めてくれればいいよ。あ、台詞は基本的にアドリブね」

芸人泣かせの要求だ。もっとも、二人は芸人ではないので泣くことは無いだろうが・・・。ここまで来てしまっては後戻りすることは出来ないので、二人は諦めの表情を浮かべて舞台袖に移動することに。

「俺たちは・・・何でこんな所に来てしまったんだろう?」

「さぁな・・・どうでもいいが、二人も王子様がいていいのかよ?」

「さぁ、幕開けよ!」

言いしれぬ不安を抱えている二人を無視し、無情にも幕が上がっていく。アリーナ内のライトが点灯され、舞台の上に立った二人を照らす。

「昔々、あるところにシンデレラと言う少女がいました」

「よかった、出だしは普通みたいだな」

「ってか、これ以外の出だしってあんのか?」

取り敢ず始まった舞台がまともだったことに安堵し、二人は舞踏会

エリアへと向かう。・・・その安堵が絶望に変わるとも知らず・・・。

「否、それは最早名前ではない。幾多の舞踏会を駆け抜け、群がる敵兵を薙ぎ払い、灰燼を纏うことさえ厭わない地上最強の兵士達。彼女らに相応しき称号、それが『灰被り姫（シンデレラ）』！！」

「・・・え？」

「おいおい、コンバットだなシンデレラ」

「今宵もまた、血に飢えたシンデレラ達の夜が始まる二人の王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という死地に少女達が舞い踊る！」

「は、はぁっ！？」

「惚けてんじゃねぇ一夏！！　これは冗談抜きだ！！」

「もらったぁぁっっ！！！」

叫び声に振り返ると、そこには白銀のシンデレラ・ドレスを身に纏った鈴音。その手には中国の手裏剣こと、飛刀が握られている。

「鈴音！？　お前まで参加してたのか！？」

「そんなのどうでも良いからそれを寄越しなさい！！」

言うや、鈴音は飛刀を夜明に投げつけた。夜明はセットにあるテーブルを片手で持ち上げ、盾代わりにして飛刀を防ぐ。ホッとしたの

も束の間、盾のように構えていたテーブルを、鈴音のガラスの靴を履いた足が貫通する。凡にこの靴に使われているのは強化ガラスらしく、ちょっとやそっとじゃ壊れないらしい・・・現在進行形で襲われている二人にとって、そんなこたぁどうでもいい話だが。

「こ、殺す気かお前!?」

「殺す気で行かなきゃあんたから奪い取れないでしょ!!」

「何で演劇で人を殺す気でいるんだお前は!?」

テーブルから足を引き抜いた鈴音と、両手にトレーを構えた夜明が対峙する。今にも殺し合いでも始めそうな二人を見て、一夏はオロオロする。

「お、俺はどっちを応援すればいいんだ?」

「いや応援とか言ってる前に止めろよ!!　・・・一夏!　後ろだ!!」

「え?　って、トゥース!!!」

振り返った瞬間、一夏は奇怪な叫び声を上げて、自分の後頭部目掛けて振り下ろされた刀を白刃取りした。驚く無かれ、刀を振り下ろしたのは箒だった。

「ほ、箒!?　お前、俺に何か恨みでもあるのか!?」

「あるわけ無かろうが!　だが、私達の幸せな生活のためだ・・・散ってくれ一夏!!」

「わ、訳が分からん！！」

箒が振るう刀をどうにか避けていく一夏。

「おいおい、何で箒は一夏を殺そうとしてんだ？　まさか浮気！？
・・・一夏に限ってそれはないか・・・ん？」

鈴音の攻撃を捌く中、夜明は赤い光線が空中を泳いでいることに気が付く。はてな、と思っていると、顔の真横が弾け飛んだ。

「そ、狙撃！？　ってことはセシリーか！？」

サイレンサーを装備しているらしく、発砲音とマズルフラッシュが無い。しかも速射性に優れているようで、立て続けに弾丸が夜明の王冠を狙って迫ってくる。

「し、死ぬ！　漏れなく死んでしまう！！」

「ぜぇ、ぜぇ・・・何だってんだちきしょう・・・」

「はぁ、はぁ・・・俺たち、何か悪いことでもしたっけか？」

遮蔽物に身を隠し、二人は大きく肩を上下に動かしながら呼吸を落ち着かせようとする。何で彼女たちはあぁも殺気立っているのか？

二人は知らない。二人が頭に乗せている王冠、それを手に入れられた女子は、その王冠を被っていた男子と同室になれることを。故に、彼女たちは恐ろしいほどに殺気立っているのだ。だが、そんな事は知らない夜明と一夏。

「俺、あいつ等に殺されたいほど嫌われてんのかな・・・」

「箒・・・絶対俺に愛想尽かせたんだ・・・」

もっそいブルーになっている。本当なら膝を抱えて項垂れたいところだが、セシリアの狙撃で遮蔽物から追い出されることに。

「ちきしょー不幸だぁぁぁぁぁ！！！！！」

「災難だこのやろぉぉぉぉ！！！！！」

ヤケクソ気味に無駄に広いステージの上を走り回っていると、

「「げぇっ！　行き止まり！？」」

に追い込まれた。どうやらセシリアの狙いはこれだったらしい。万事休す！　二人は嫌な汗を流して活路を見出そうとする。が、その前にセシリアの銃から放たれている赤い光線が二人へと迫ってきた。

「ここまでか・・・」

諦めかけたその時、

「夜明！　一夏！　伏せて！」

二人の前に現れたのは対弾シールドを装備したシャル。勿論、シンデレラ・ドレス装備である。

「しゃ、シャルか！？　助かった・・・」

シールドが銃弾を防いで鋭利な音が鳴る中、二人は揃って息を吐く。

「いいから早く逃げて！」

「お、おう！」

「恩に着るぜシャル！」

「あ、ちょっと待って！」

「ん、何だ？」

「その、夜明は王冠を置いていってくれると嬉しいんだけど・・・。一夏も、箒に王冠を渡せばそれでオッケーだよ」

「何、そうなのか？」

襲いかかってくる皆が王冠目当てなら、わざわざそれを頭の上に置いておくことはない。二人が王冠を外そうとすると、楯無のアナウンスが流れてきた。

「王子様にとって国とは全て。その重要機密が隠された王冠を失うと、自責の念によって電流が流れます」

「「はい？」」

聞き捨てならないアナウンスだったが、いかんせん二人はもう王冠を外している。刹那、

「「ふぎゃあああああああ！！！！！？？？？？」」

バチバチバチィッ！！　と二人の身体に電流が流れた。身体が青白く発光し、微妙に骨格が透けて見えているのは気のせいだろう・・・多分。

「何じゃこりゃあぁ！？」

「あぁ！　何ということでしょう！　王子様の国を思う気持ちはそこまで重いのか。しかし、私達には見守ることしか出来ません、何

と言うことでしょう」

「二回繰り返してんじゃねぇよボケナス！　後で絶対にぶん殴ってやっからな！！」

服の所々に焼き切れた後が残っている。また電流を流されては堪ったものではないので、二人は急いで王冠を被り直した。

「と言うわけですまんシャル！」

「えぇっ！？　そんな、困るよ！」

「俺も現在進行形で困ってんだ！！」

「夜明ってばぁっ！！」

脱兎の如く逃げ出す二人。だが、二人の行く手に立ちはだかるシンデレラ×二。

「そこに直れ一夏！」

「夜明、黙って王冠を渡せ」

日本刀を構えた箒と、タクティカルナイフを両手に構えたラウラ。黒と銀のシンデレラはあっと言う間に二人との間合いを縮める。

「今度はお前等かよ！？」

「不幸だぁーーーーーーーっ！！！！」

だが、二人の苦労は終わらない。

「さぁ！　今からフリーエントリー組の参加です！　皆さん、奮って王子様の王冠を狙ってください！」

本当に、本当に楽しそうな楯無のアナウンス。アナウンスが終わると同時に聞こえてくる地響き。その正体はさっきまで観客席にいた数十人の女子達。

「織斑君、大人しくしなさい！」

「月光君、神妙にお縄について！」

「私と幸せになりましょう王子様！」

「そいつを寄こせぇぇぇぇぇ[redacted]！！！！！！！！！！！」

途中から変なのが混じっているが、気にしない方向で。この軍勢からどう逃げるかを考えていると、軍勢の横で何かが閃いた。

「虚刀流、百合！！！！！」

聞き慣れた声が聞こえた瞬間、シンデレラの一群が凄い勢いで吹き飛んでいった。唖然とする二人の前に、回し蹴り一発で数十人の女子を吹き飛ばした太陽（シンデレラ・ドレス）がドレスの裾を翻しながら着地する。

「よ」

「た、太陽？　今のは・・・？」

「ん、百合のことか？　あれは刀語と言う本に出てくる虚刀流の技の一つだ。出来るかもと思ってやってみたんだが、存外簡単に出来るな」

それは貴方の身体能力が人外だからです。なんて事は口が裂けても言えない二人だった。

「ま、いいさ。そんな事よりも早く逃げろ二人とも」

「え、良いのか？」

「お前も、王冠を狙って来たんじゃ？」

「競争者を全員倒したら、ゆっくり回収に行かせてもらうさ。そら、行け・・・あぁ、追っ手がいるかもしれないから、二手に分れておいた方が良いと思うぞ」

シッシッ、と手で行けというジェスチャーをし、太陽は二人を舞台袖から脱出させる。二手に分れて逃げる二人を肩越しに見送り、太陽は視線を前に戻した。太陽の前に立っているのは箒、鈴音、シャル、ラウラ。そしてどこかで狙撃を狙っているであろうセシリア。

「さって・・・この場にいる者の目的は同じ。なら、実力行使で目的を達成させて貰うとしよう」

「ちょ、ちょっと待ってくれ太陽！　私は一夏の王冠が欲しいだけなんだ！」

箒の声を、太陽は鼻で笑って一蹴する。

「は！　なら、私を倒して行けばいいだろう」

取る構えは虚刀流七の構え『杜若』。太陽が本気だと察し、箒達はそれぞれの武器を構えた。

「そうか、ならば篠ノ之箒、参る！」

「邪魔するってんなら、容赦しないわよ！」

「撃ち抜かせてもらいますわ！」

「僕も、今回は絶対に退けないんだ！」

「悪いが・・・押し通らせてもらう！」

対峙する五人の少女が構えたのを見て、太陽は口元に笑みを浮かべる。

「さぁ来い。但し、私を倒す頃にはお前等は八つ裂きになっているだろうけどな」

白式対アラクネ　決戦兵器、夕暮太陽推参

「はぁ・・・楯無の野郎、クソ巫山戯たことしてくれやがって・・・後でぜってぇ殴る」

「女の子を殴ろうとするなんて酷いんでないかい、夜明？」

屋上へと逃げてきた夜明。荒い息を吐きながら大の字になって空を見上げ、楯無に報復しようと決意する。ふと、鉛色の雲が映していた視界に水色の髪を持った美少女が入ってきた。夜明と一夏を散々な目に会わせた元凶、楯無だ。

「手前ぇ・・・」

具現化させた怒りをその身に纏い、ゆらりと立ち上がった夜明を楯無はまぁまぁと宥める。

「まぁまぁ落ち着いてって。今は私をお仕置きするよりも大切なことがあるでしょ？」

「・・・ちっ、そうだな」

忌々しそうに吐き捨てながら、夜明は視線を鉛色の雲で閉ざされた空を見上げた。楯無も夜明の隣りに立ち、同じように空を見上げる。

「にしてもお粗末なステルスだな・・・いや、ＩＳ学園のレーダーに反応してないんだから、寧ろ優秀な部類だな」

「ステルスは付いてるけど光学迷彩は付けてないんでしょ。それに

してもたっくさんいるわね～」

「きっかり百機だな」

一瞬、二人の周囲に量子的な揺らぎが見え、それが無くなる頃には二人の身体をＩＳが覆っていた。夜明は隣りでＩＳを展開している楯無に視線を向ける。全体的に装甲の面積が狭く、小さい。だが、水のドレスのような液状のフィールドが展開されていて、楯無の身体を守っている。

「確か、『モスクワの深い霧（グストーイ・トゥマン・モスクヴェ）』だったか？」

夜明は楯無の両肩に浮かんでいる一対のユニット、アクア・クリスタルを突いてみた。アクア・クリスタルは水のヴェールを展開させ、楯無の身体をマントのように覆っている。

「いいえ。今は『深霧の淑女（ミステリアスレイディ）』よ」

「淑女（レイディ）ね・・・似合わねぇな」

「酷いなぁ。そんなこと言ってたら後ろから刺しちゃうよ？」

その手には大型のランスが握られているので、冗談とは言い切れない。夜明は鼻を鳴らして背中の二対の推進翼（スラスター）を広げて飛翔し、それに少し遅れる形で楯無も夜明の後を追っていった。二人は雲を切り裂きながら高度を上げ続け、やがて雲を突き抜けて蒼空を仰ぐことに。

「・・・はっ、雑魚がぞろぞろと」

「これはこれは」

二人の視線の先、青空が広がっているはずのそこには、大量のＩＳ擬(もど)きが浮かんでいた。

ーＩＳ二機を確認。移動モードから戦闘モードへと移行ー

機械音声が流れてくると、空を覆っていたＩＳ擬きが音を立てて変形を始める。その光景を見ながら、二人も静かに闘いの始まりを待った。

「さて、雑魚とは言え数が数か・・・行くぞ楯無」

「深霧の淑女は不屈の翼に護られて空を翔る・・・悪くないわね」

「言ってろ」

ー戦闘モード移行完了。敵機の排除を開始するー

百機のＩＳ擬きが二人へと迫っていった。

「こ、ここまで来れば大丈夫だろ・・・」

夜明と別れ、アリーナの更衣室へと戻ってきた一夏。ここなら制服に着替えることも出来るし、女子達が乗り込んできたら最悪ロッカーの中に隠れるという手もある。

「夜明に制服持って行ってやらないとな・・・誰ですか？　ここは関係者以外立ち入り禁止の筈ですけど」

手早く王子様の衣装から着替えて制服を着た一夏が振り返ると、そこにはスーツ姿の女性が立っていた。まさか気付かれるとは思っていなかったのか、女性は慌てたように両手を振りながら一夏に名刺と思しき紙を渡す。

「こ、これは失礼いたしました！　私、こういう者です！」

「ＩＳ装備開発企業『みつるぎ』渉外担当、巻紙礼子・・・さんですか？」

「はい。織斑さんに是非我が社の装備を使っていただけないかと思いまして」

「それで関係者以外立ち入りの場所に潜入ですか・・・ご苦労様です」

多少の皮肉を交え、一夏はその自称ＩＳ企業関係者に名刺を返した。それから胡散臭そうに巻紙なる女性を見据える。

「・・・失礼ですが、本当に唯の企業の人なんですか？」

「あ、気にしないでください。よく言われますから」

気さくな笑みを向けてくれている巻紙に、じゃあと一夏は腕を組みながら訪ねた。

「そうですか・・・なら、人を殺し慣れているとも言われますか？」

巻紙の動きと表情が完全に固まった。対する一夏はゆっくりと身体を動かしていった。

「分かるんですよ、そう言う悪意とか殺意とか。そして、あんたは企業関係の人にしては悪意と殺意が強すぎる・・・もう一度聞く。誰だあんたは？」

人が放つ悪意や殺意を敏感に感じ取る。口で言うと簡単そうに聞こえ・・・る訳もないが、一夏は巻紙と名乗る女性から放たれている微弱な悪意と殺意を、敏感に察知していた。偏に修行をつけてくれた夜明と楯無の御陰だ。巻紙は笑顔のまま固まり、ゆっくりと顔を

片手で覆う。

「・・・まさかバレっとはな・・・ガキの癖に生意気なんだよ!!」

顔から手を離すや否や、巻紙は一夏に蹴りを放ってきた。一夏は思いっ切り後ろに跳んで巻紙の蹴りを回避する。跳んだ勢いで床を滑りながら白式を展開、右手に握った雪片を巻紙に突きつけた。

「敵・・・って認識して間違いないよな?」

「決まってんだろが!!」

叫ぶと、巻紙と名乗っていた女性のスーツの背中部分を引き裂いて、蜘蛛のような脚が生えてくる。先端に鋭い刃物を持ち、黒と黄の配色のそれはかなり禍々しい。

「さっさと白式(そいつ)を寄越しやがれ!!」

女性の背中部分から伸びた八本の脚の先端部分が開き、銃口が覗く。銃口から弾丸が飛び出す前に一夏はスラスターを噴かして天井へと飛んで回避する。

「誰なんだよ、あんたは!」

天井を蹴って勢いをつけ、一夏は雪片を振り下ろす。女性は後ろに跳んで回避し、言葉を続ける。

「はっ!　『亡国企業』が一人、オータム様って言えば分かるかぁ!?」

「知るか！！」

一夏が薙いだ雪片をオータムは八本の装甲脚で受け止めた。押そうにも引こうにも雪片の刀身がガッチリと挟まれているため、動くことが出来ない。オータムは右手にマシンガンを構築、一夏に銃口を向けた。

「死ねよ！！」

「ぐっ！」

銃口から放たれた何発かの弾丸がシールドバリアを貫通する。痛みに耐え、一夏は左腕の雪羅をカノンモードにしてオータムの胸元に銃口を叩きつけた。

「あぁ！？」

「吹っ飛べ！！」

雪羅から荷電粒子砲が放たれ、オータムを吹き飛ばす。オータムが吹っ飛んだ際に奪い返した雪片で装甲脚の先端にある銃口を二、三個切り捨てた。

「ハハハ！　やるじゃねぇかガキ！　この『アラクネ』相手にちょこまかとよぉ！！」

「『アラクネ』ね・・・『蜘蛛女』にでも改名しとけよ！！」

互いに口を動かしながら攻撃を放ち、かわすを繰り返す。狭い更衣室内では機動が限られているため一夏には不利だが、オータムの『

アラクネ』は装甲脚をそれこそ蜘蛛のように動かして複雑に動き回っている。ハッキリ言って、本当に蜘蛛にしか見えない。

「ちょこまかしてるのはどっちだよ・・・」

口の中で小さく悪態をつき、一夏はオータムの動きを予想して攻撃へと移ろうとする。

「そうそう！　ついでに教えてやっけど、お前と不屈の翼を誘拐したのは俺たちの組織だ！　感動の再会ってやつだ！！」

冷静にオータムの動きを見極めようとしていた一夏は、オータムのその一言で一気に沸点を迎えた。背中のウィングスラスターにエネルギーを溜め、さっきまで行っていた様子見とは違う直線的な機動でオータムへと切り掛かる。

「だったらあの時の借りを返してやらぁ！！」

「はっ！　真っ正面から突っ込んでくるなんて・・・ガキだってもっとマシな動きをするっての！！」

装甲脚を壁に突き刺して、壁からぶら下がるような体勢になっていたオータムは指先で弄くっていた綾取りの様な物を一夏目掛けて投げる。エネルギー・ワイヤーで構成されたそれは一夏の目の前で大きく広がり、数秒で一夏を雁字搦めにする。

「ハハハ、楽勝だぜ！　蜘蛛の糸を甘く見てるからそうなるんだぜ？」

雪羅の装備でエネルギー・ワイヤーを斬ろうとしている一夏に品性

が欠片も感じられない笑みを送りながら、オータムは手に四本脚の装置を展開させていた。

「そんじゃ、相棒にお別れの挨拶をしな！！」

壁に突き刺していた装甲脚を曲げ、一夏へと飛び掛かろうとしたその時。

「やれやれ、騒がしいと思って来てみれば・・・随分と不快なゴキブリが潜り込んでるな」

次の瞬間、凄まじい音が更衣室内に響いて、オータムが壁から吹き飛んだ。オータムはそのまま一夏の頭上を通り越し、反対側の壁へと叩きつけられる。

「・・・な、何だ！？」

無様な格好で壁に叩きつけられたオータムを、唖然とした表情で見ていた一夏は慌ててさっきまでオータムがぶら下がっていた壁に視線を向けた。すると何という事でしょう。壁から人の腕が生えてるではありませんか！

「・・・本当に何だ？」

疑問しか浮かんでこない一夏を余所に、その壁から肘までが生えている腕は手首まで壁の外へと戻っていき、壁に手をかけた。そして、そのまま壁を横にスライドさせるタイプのドアか何かの様にこじ開けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こんな人気の無い所で蜘蛛女と密会か？　箒が知ったら泣くぞ。どうせ使うなら、何か恥ずかしいコスプレをした箒とセックスするのに使えよ」

濛々と砂埃が舞う中、壁をスライドドアにした張本人がつかつかと入ってくる。

「それに、戦闘中に熱くなるのも戴けないな。心はＨＥＡＴ、頭はＣＯＯＬ。基本だぞ、一夏」

余りの光景に言葉もない一夏に、黄昏の黒姫、夕暮太陽はニヤリと笑ってみせる。

「さて、私の友人に良からぬ事をしようとした報い・・・その命で償ってもらおうか、『亡国企業』」

触れる物全てを切り裂くような空気を放つ太陽の姿は、正しく武人のそれだった。

「・・・遅すぎるな。あのカス、ガキ一人からＩＳ奪うのに何時間かけているんだ。それにしても不屈の翼にＩＳ学園最強か・・・ん？」

ＩＳ学園校舎裏。鉛色の雲の向こうでＩＳ百機を一方的に破壊していく二人を、ステイシスのハイパーセンサーを発動させながらオッツタルヴァは一人呟く。数秒ほど空の上に視線を上げたままでいると、ステイシスのプライベート・チャネルに連絡が入ってきた。オッツタルヴァは二人の闘いを観察するのを邪魔されたことに苛立ち、舌打ちをしながらプライベート・チャネルを開く。

「俺だ」

『オッツタルヴァか？　クルーゼだ。いきなりで悪いのだが、オータムの救援に向かって欲しい』

「断る。あんなカスを助けることに労力を使うつもりはない。そもそも、ガキ一人を相手取るだけで救援が必要になるようなカス、助ける価値は無い」

『そう言ってやらないでくれ。何せ、闘いの最中で夕暮太陽が乱入してきたのだから』

ピクッ、とオッツタルヴァの眉が持ち上がる。

「ほぉ。あの『深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）』が。それはあのカスの手に余るだろうな・・・だが、逃げ延びるくらいは出来るだろ」

『・・・つまり、オータムが自力で状況を打破しない限り、助けるつもりは無いと』

「自分の尻も拭けねぇようなカス、存在する価値がねぇ」

『それについては概ね賛成だな・・・そうそう。Mもそっちに向かっているから、彼女と協同するように』

「あの首輪付きか・・・カスよりは確かにマシだな・・・分かった」

一方的にプライベート・チャネルを遮断し、オッツタルヴァは無人ＩＳの数を三分の一以下にまで減らした二人に視線を向けた。

「・・・存外、すぐに相見える時が来るかもしれないな、不屈の」

「た、太陽!?」

「それ以外の誰に見える？　まぁ、普通、逆の立場じゃないと駄目だとは思うがな」

肩に掛かった砂埃を払い落とし、太陽はエネルギー・ワイヤーで身動きが取れなくなっている一夏に歩み寄った。一夏を絡め取っているエネルギー・ワイヤーに指をかけ、紙か何かのようにあっさりと引き千切る。

「立てるか？」

「あぁ、大丈夫だ・・・てか、ＩＳを展開してもいないのに、ＩＳの武装を容易くぶっ壊すお前って・・・」

改めて太陽が人外だと思い知らされる。

「いってぇ・・・何なんだよお前!!」

弾丸の如き速さで壁に叩きつけられ、さっきまで意識が飛んでいたオータムは怒鳴りながら振り返った。オータムの怒りに呼応しているのか、アラクネの装甲脚がカチカチと音を立てている。対して、太陽は焦る様子もなく構えを取った。少し腰を落とし、右手は前に、左手は腰に添えるように。これこそ虚刀流一の構え『鈴蘭』。

「通りすがりの女子高生だ」

通りすがりの女子高生が壁を殴って貫通させたり、スライドドアの様に開く物だろうか？　ごく当たり前の疑問が一夏の胸中に浮かんできたが、何も言わないことに。

「一夏。私があの邪魔な脚をへし折るから、お前はそれまでの間に零落白夜の出力を最大にまで上げておけ」

「わ、分かった」

ＩＳを展開してもいないのにアラクネの装甲脚をへし折ると宣言した太陽。普通の人が聞けば何を言ってるんだこいつはと思うだろうが、一夏の様に太陽のことを知っている人には、太陽が容易に相手のＩＳを破壊していく光景が脳裏に浮かぶだろう。

「巫山戯るのも大概にしろこの女ぁ！！」

怒りで顔を真っ赤に染めながらオータムは跳躍、太陽に向かって装甲脚と、カタールを握った両腕を突き出した。高速で迫ってくるオータムを見て太陽は一言。

「・・・とろいな」

半身になってオータムの攻撃を全てかわし、突き出された装甲脚の内の一本を背中で押えるように両腕で拘束する。

「なっ！？」

「虚刀流『菊』」

驚愕に表情を歪ませるオータムの目の前で、太陽は装甲脚を梃子の

要領でへし折った。そこから太陽の連撃が始まる。

「虚刀流『薔薇』」

体重を乗せた飛び蹴りで装甲脚を蹴り折り、

「虚刀流『木蓮』」

飛び膝蹴りで更にもう一本をへし折る。

「虚刀流『野苺』」

両肘を用いた連続の肘鉄で、装甲脚を根元から破壊した。残りは半分の四本。

「こ、このあ「虚刀流『雛罌粟』」ちぃっ！！」

振り返ろうとしたオータムごと、上方に向けて放った手刀で装甲脚ごと吹き飛ばす。空中で体勢を立て直したオータムを、太陽は杜若の構えで追いかける。

「虚刀流七の奥義」

オータムが床に着地する前に天井目掛けて跳び上がり、天井を床に見立てて着地。

「落花狼藉！！」

天井を蹴り、斧刀の如き踵落としで装甲脚を斬り飛ばす。その際に床に大きなクレーターが出来たのは余談だ。

「虚刀流六の奥義」

オータムが逃げ出そうとする前に両手を合掌。

「飛花落葉！！」

手を開きながら掌底をオータムの胸部に叩きつけた。衝撃がオータムを伝って装甲脚まで届き、残りの二本を破壊する。生身の人間にＩＳを破壊されたことが信じられずに呆然とするオータムに、太陽は『鈴蘭』の構えを取って不敵に笑ってみせる。

「悪役は悪役らしく」

繰り出すは虚刀流最速の奥義。

「倒されていろ！！」

鏡花水月。強烈な掌底を、オータムは両手のカタールを交差させてどうにか防ぐが、カタールは二つとも破壊され、後ろへと吹き飛んだ。その先に待っているのは・・・零落白夜を発動させて眩いほどに輝いている雪片を構えた一夏。

「俺と夜明を誘拐してくれた礼だ・・・受け取れぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！」

飛んでくるオータムに、全身全霊の横薙ぎを叩き込む。その一撃は完璧に決まり、オータムは飛んできたのとは逆の方向へと飛んでいく。結構な勢いがあったらしく、オータムが壁にぶつかった際に壁の一部が崩れた。

「さぁて、それじゃ色々と聞かせてもらうぞ・・・肉体言語でな」

「ひぃ！　こ、ここまでか」

関節をバキボキ鳴らしながら歩む太陽の姿。滅茶苦茶怖い。圧縮空気の音を響かせ、オータムはＩＳ本体から離れる。

「何!?」

「ちっ、面倒なことを」

驚く一夏の目の前でＩＳ本体は光を放ち始め、数秒後に大爆発を起こした。太陽はＩＳ本体が爆発する前に周囲のロッカーでバリゲードを作り、その中に一夏と自分自身を護った。

「・・・ったく、最後の最後で古典的な手を使いやがって・・・一夏、大丈夫か?」

「あ、あぁ・・・それにしても何だったんだ?」

「さぁな・・・唯一つ言えるのは、悪意を持った何かが動き出したと言うことさ」

そう呟く太陽の瞳には、何時も浮かべている穏和な光とは別の鋭い光が湛えられていた。

「ほいっと」

戦場に似つかわしくない掛け声で楯無は無人ＩＳの胸をランスで貫く。背後から襲いかかろうとしていた無人ＩＳをランスの石突きで吹き飛ばし、ランスから離した左手で握った蛇腹剣で切り裂く。

「これで三十七体目、っと」

煙を噴き出しながら落ちていく無人ＩＳに一瞥を送り、楯無は少し離れた所で闘っている夜明に視線を向けた。

「・・・」

無言、無表情で無人ＩＳを撃ち抜いていた。夜明の射撃は正確無比で、無人ＩＳのコア部分のみを綺麗に撃ち抜いている。それも凄まじい連射速度で、無人ＩＳは夜明にまったく近づけずにいる。

（あぁ、やっぱり夜明って格好いい・・・胸がキュンキュンしちゃう）

顔を赤く染めながら色惚けた事を考えている楯無だが、しっかりと無人ＩＳを撃破していく。ＩＳ学園最強の称号生徒会長、その肩書きは伊達ではない。百機もいた無人ＩＳも、二人の手によって数分と経たずに十機までに減らされていた。

「さって、何でこんな数のＩＳ、それも独立稼働のがいるのか・・・黒幕でもいんのかね？」

「だと思うよ。まぁ、仮に黒幕がいたとしても、こっちには織斑先生や太陽ちゃんがいるから大丈夫でしょ」

「だな・・・ん？」

プライベート・チャネルに連絡が入り、夜明はプライベート・チャネルを開く。相手はラウラだった。

「何だ？」

『夜明か！？　先程、太陽から連絡があって学園に侵入した亡国企業の手の物を捕えようとしたのだが、新手が入って逃げられてしまった！　レイジングウィングのメサイアウィングなら追いつけるから、後を追ってくれ』

「了解っと・・・楯無、ちっとばっかし野暮用が出来たから、ここ任せて良いか？」

「べっつに良いよ～・・・でも、何か嫌な予感がするから気を付けてね」

「ハハハ、心配してくれてありがとな」

夜明は楯無を撫で、ラウラから送られてきた情報を元に侵入者が逃げていった方向へと身体を向ける。刹那、夜明を中心に穏やかな風が吹き、夜明の髪と瞳、レイジングウィングの推進翼（スラスター）が蒼銀へと染まっていった。

「行くぜ、レイジングウィング！！」

『Ｍｏｄｅ（モード） Ｍｅｓｓｉａｈ（メサイア） ｗｉｎｇ（ウィング） Ｓｔａｎｄｂｙ ＯＫ．Ａｒｅ ｙｏｕ ｒｅａｄｙ？』

蒼銀の閃光となり、夜明は尾を引く残光を残して飛んでいった。楯無はさっきから感じている嫌な予感が拭いきれずに夜明の後ろ姿を見送っていたが、自分の役割を果たそうとランスを構えて無人ＩＳに向かっていった。

「・・・良い様だな。あれだけの大口を叩いておいた癖に、アラクネを爆発させて尻尾を巻いて逃げ戻ってくるとは・・・」

「うるせぇ！！」

右手でオータムを掴み、飛翔しているＩＳの名は『サイレント・ゼフィルス』。ブルー・ティアーズを基礎データに使われているためか、装甲は青い。サイレント・ゼフィルスの搭乗者、Ｍは口元に嘲笑を浮かべ、オータムに向けていた視線を前へと戻した。オータムは太陽と一夏から逃げてきた所をラウラとセシリアに捕まり、あわやと言うところでＭに助けられたのだ。

「まぁいい。取り敢ず、戻ることがせんけっ！！　・・・ちぃ」

「あ、どうした？」

突然毒づいたMにオータムは仏頂面のまま訊ねる。

「後方から超高速のＩＳが私達を追いかけてきている。速度から察するに・・・『レイジングウィング』だな」

「んだとぉ！？　おい、もっと速く飛べよ、追いつかれちまうだろうが！！」

「お前が風圧で死んでも構わない、と言うのならそうしてやるが？　それに、どうせ今から最高速度で逃げたとしても追いつかれる・・・ほら」

空中で停止したMの真横を蒼銀の閃光が駆け抜ける。蒼銀の閃光はMの前で停止すると、蒼銀に輝かせていた推進翼（スラスター）を元の白に戻して広げた。

「初めまして・・・じゃないのもいるな・・・まぁいい。捕えさせて貰うぞ、『亡国企業』」

「絶体絶命、とやらか・・・オータム、はっきり言っておくが、私じゃ不屈の翼には勝てない。だから、それなりの覚悟をしておけ」

「なっ、巫山戯んじゃねぇぞ手前ぇ！！　せめて俺だけでも逃がしやがれ！！」

ＩＳの手の中で騒ぐオータムを無視し、Mは右手に握った長大なライフル『星を砕く者（スターブレイカー）』の銃口を夜明に向ける。

「戦闘の意思ありありだな、面倒くせぇ・・・そいじゃ、やりま！

！」

背筋に悪寒を覚え、夜明は横へと瞬間加速（イグニッション・ブースト）した。コンマ数秒の差でさっきまで夜明がいた空間をレーザーと実弾、四発のミサイルが通り過ぎる。レーザーと実弾はＭとオータムの身体を掠め、ミサイルは大きく旋回しながら夜明へと迫る。

「新手か！」

小さく毒づきながら夜明はディバイン・カノンを展開、小口径弾で四発のミサイルを撃ち落とした。夜明とＭの間に爆発が起こり、黒煙が視界を塞ぐ。

「・・・」

視界の中の黒煙が徐々に晴れて行くに連れ、夜明はある感覚を感じていた。美しく在りながら、人を殺すための殺人包丁。それも、鞘に収まっていない抜き身。

「よぉ、さっき振りだな」

黒煙が晴れると、Ｍの隣りに夜明の予想通りの人物がいた。くすんだ青の装甲を持った第四世代型ＩＳ、完全なアンノウン、ステイシスとその搭乗者。

「オッツタルヴァ・・・」

「首輪付きとは違うって所を見せてくれよ、不屈の」

「オッツタルヴァ・・・」

「覚えていたか。記憶力はそれなりに良いらしいな・・・首輪付きにカス、さっさと失せろ」

オッツタルヴァは左手に握ったレーザーライフルの銃口を向け、隣りにいるMにここから離れるようジェスチャーした。その目はM達など眼中になく、夜明だけを見据えている。

「は？　ざけんなよ！　何でお前の命令なんざ聞かなきゃいけ」

捲し立てるように喋るオータムの口にレーザーライフルの銃口を突っ込み、オッツタルヴァは無理矢理オータムを黙らせた。

「いいから言うとおりにしろ・・・そうでなきゃ」

ステイシスの背部スラスターから微かな音が漏れ始める。オータムの口からレーザーライフルを引き抜き、オッツタルヴァは僅かに身を屈めた。

「巻き込まない自信はない」

次の瞬間、オッツタルヴァの姿が消えていた。Mは急いでその場から緊急離脱した。考えての行動ではない、本能に基づいての行動だ。もしその場に残っていたら、死んでしまうと本能が告げていたのだ。

「消えた・・・いや、違う！」

一瞬で視界から消え失せたオッツタルヴァを、夜明はハイパーセンサーと一緒に視覚で見つけだそうとしていた。一見すると冷静に行動しているが、心の内に発生したざわめきは大きい。何故なら、彼は今まで自分よりも速い、若しくは同等の速さを有したＩＳ、また操縦者を見たことが無いのだ。

「本当に何者なんだ・・・っ！！」

背筋に悪寒が走り、夜明は頭を横に動かす。頬を掠めてレーザーが通り過ぎた。急いで後ろを振り返るが、後方には誰もいない。唯、オッツタルヴァがいたことを示すように、空中にスラスターから噴き出している炎の残光が残っている。

「ほぉ、今のを避けるか。やはり伝説は違う」

「そりゃどうも！」

右手のウィングスターを横に突き出す。オッツタルヴァが撃とうとしたアサルトライフルの銃口と、ウィングスターの銃口が交差する。まさか移動先を予測されているとは思っておらず、オッツタルヴァは少しだけ表情を歪めた。

「不屈の、お前、見えているのか？」

「いいや、見えなかったさ。でも、勘である程度の見当はつく」

「勘、だと・・・」

「それに、初動さえ見過ごさなければ見失ったりはしない」

「・・・言うじゃないか、不屈の」

呼吸が困難に感じられるほどの沈黙。二人は互いに無言のまま銃口を突きつけ合い、相手の動きを観察した。数秒経過した後、二人は同時に引き金を引き、同時に横に瞬間加速（イグニッション・ブースト）した。ビームと実弾が何もない空間を通過していく。二人の姿が消え、空中に幾つもの閃光が飛び交い始めた。

「お前等は一体何なんだよ！？」

ウィングスターを連射させながらフィン・ファングとシューティング・ビットを展開。然八基の自律兵器をオッツタルヴァに向かわせ、夜明はウィングスターを連結させて高威力のビームを放つ。

「言った所で、信じはしないさ！」

フィン・ファングとシューティング・ビットのオールレンジ攻撃をジグザグに移動しながら回避し、オッツタルヴァはアサルトライフルで全ての自律兵器を撃ち落とし、夜明に向かってレーザーライフルを向けた。銃口から放たれたオレンジ色の閃光を、夜明は右腕のビームシールドを展開させて防ぐが、一撃でビームシールドが破壊される。

（フィン・ファングとシューティング・ビットのオールレンジ攻撃をかわして、その上全部撃ち落とすだと！？　オマケにこのレーザーの威力は何だ！？　これじゃライフルじゃなくてバズーカだぞ！）

「戦闘中に考え事とは、余裕の現れか？　停滞して見えるぞ、不屈の」

「ちぃっ！！」

夜明の真下に移動したオッツタルヴァは、急上昇しながらアサルトライフルとレーザーライフルの引き金を引く。夜明は上昇して避けようとするが、頭上から四発のミサイルが迫ってきているのに気付いて、咄嗟の判断でオッツタルヴァに突っ込んでいった。

「ほぉ」

感心したようにオッツタルヴァは吐息を漏らす。正面からはオッツタルヴァ、後ろからはミサイル。この状況下で夜明はウィングスターを腰にマウントしてスターライザーを引き抜き、更に加速した。空中ですれ違う寸前、夜明は回転しながらスターライザーでオッツタルヴァのアサルトライフルとレーザーライフルを切り裂こうとする。だが、

「遅いな」

オッツタルヴァは夜明とすれ違う寸前に急停止し、後ろに飛んで夜明の斬撃をかわした。斬撃をかわされて体勢を崩しかけている夜明に追い打ちをかけるように、夜明の背後に迫っていたミサイルを撃ち抜く。

「がぁっ！！」

真後ろで撃ち抜かれたミサイルが爆発し、残りの三発も誘爆した。ミサイル四発分の爆風が夜明の背中を殴りつけ地上へと叩き落とす。オッツタルヴァは夜明に向かって急降下し、レーザーライフルを放った。身体を捻ってどうにか直撃を避けるが、右腰のディバイン・

カノンを破壊される。

「くそっ！！」

落下したまま夜明は身体を捻り、回転しながら両手に握ったスターライザーを投げつけた。まさか自分から武器を放棄するとは思っておらず、僅かにオッツタルヴァの反応が遅れる。オッツタルヴァが回避行動を取った時には既に、左肩のミサイルポッドを貫かれ、アサルトライフルの銃身を削られていた。

「ふん、流石と言うべきか」

爆発する前にミサイルポッドをパージする。ミサイルポッド内に残っていたミサイルが爆発を起こす。オッツタルヴァが武器を放棄している間に夜明は急上昇、オッツタルヴァの頭上を通り越してスタードライブを発射態勢に移行した。

「・・・伝説と言っても、所詮は子供か」

自分に向けられた二つの砲門にエネルギーが集中していくのを見て、何を思ったのかオッツタルヴァは夜明に突っ込んでいった。

（直撃覚悟の特攻？　いや、相手にはそんなことをする理由が無い・・・まさか！？）

夜明の思考がある可能性に辿り着くが、既にオッツタルヴァは目の前まで迫ってきている。腹を括り、夜明はスタードライブの引き金を引いた。スタードライブの砲門にエネルギーが凝縮し、放たれた刹那、オッツタルヴァは真横に瞬間加速（イグニッション・ブースト）して、至近距離で放たれた荷電粒子砲を回避する。

「それが狙いか！」

「そして終わりだ」

銃身を削られて銃としての機能を発揮しなくなったアサルトライフルを夜明の脇腹に叩きつけた。夜明が怯んだ隙に足を持ち上げ、スラスターで加速した蹴りを顔面に打ち込む。吹き飛んでいく夜明を追いかけ、腹部にレーザーライフルの銃口を押しつける。

「中々楽しめたぞ、不屈の」

レーザーライフルの引き金を引こうとした瞬間、夜明の口元が微かに笑みを浮かべた。オッツタルヴァの勘が警鐘を鳴らす。夜明の腹部からレーザーライフルを外そうとした瞬間、夜明の腹部からプラズマの柱が放たれ、レーザーライフルの半分を飲み込んだ。

「ちぃ・・・！」

オッツタルヴァはレーザーライフルを投げ捨て、夜明から距離を取った。体勢を元に戻し、夜明は口元を流れる血を拭う。

「さって、それじゃ続きと行こうっ！！」

夜明は後ろに瞬間加速（イグニッション・ブースト）してオッツタルヴァから距離を取った。刹那、さっきまで夜明がいた所に緑の閃光が網目のように走る。瞬間加速（イグニッション・ブースト）した後も夜明は飛び続け、その後を小型の何かが追いかけていく

「あれは・・・」

夜明を追いかけている何かに気付き、オッツタルヴァは振り返った。
そこには案の定、

「・・・何故、お前がここにいる、クルーゼ」

「少し心配になってね。来てみれば案の定、と言うわけさ」

全身装甲のＩＳ。『プロヴィデンス』を纏ったクルーゼの姿があった。オッツタルヴァが不機嫌そうに鼻を鳴らすのを無視し、クルーゼはオッツタルヴァの隣りまで移動する。

「俺は一人で不屈を墜とすと言った筈だが？」

「だが、今の君は全ての武装を破壊されている。その状態で闘うと言うのかね？」

忌々しそうに舌を鳴らし、オッツタルヴァはクルーゼがコールしたアサルトライフルとレーザーライフルを受け取った。オッツタルヴァが武装を受け取ったのを見て、クルーゼは夜明を追わせていた自律兵器、ドラグーンを呼び戻した。

「はぁ・・・はぁ・・・新手か？」

「ラウ・ル・クルーゼだ」

ドラグーンが戻っていった方向を目で追い、夜明はオッツタルヴァと並んでいるクルーゼを睨んだ。

「恨みはないが、死んで貰おう」

「二対一は不本意だが・・・仕方ない、行くぞ、不屈の」

「・・・くそ」

「おい、夜明はどうなっているんだ?」

「分からない。恐らく、亡国企業と交戦してると思うんだが・・・」

「加勢しに・・・行かない方が良いわよね。太陽や（忌々しいけど）

生徒会長クラスの実力じゃないと、夜明の足引っ張るだけだからね・・・どしたの太陽？」

鈴音の問いに太陽は首を振る。だが、顔に浮かんでいる不安そうな表情はそのままだ。

（何だ、何なんだこの感覚は？　胸がざわざわする・・・夜明・・・）

「それはそうと一夏君、亡国企業に襲われたらしいけど、大丈夫なの？」

「あ、はい。太陽が助けてくれましたから」

楯無の問いに答える一夏。丁度その時、混乱していた生徒や客達を落ち着かせに行っていた千冬が足早に一行の元に歩いてきた。

「無事かお前達！　月光の姿が見当たらないが、どうかしたのか？」

「夜明なら今」

ラウラが答えようとしたその時、ラウラの声を遮るようにドタドタと走ってくる音が聞こえてきた。振り返ると、山田先生が必死な形相で走ってくるのが分かる。

「おおおおお、織斑先生ぇぇぇ！！！！　たたたた、大変です！　大変ですぅぅぅ！！！」

「落ち着け」

「ぷぎゃあ！！」

千冬に頬を張られ、山田先生は一瞬中に浮かぶ。

「それで、一体どうしたんだ？」

「そそそそれが、織斑先生に言われたとおりにレーダーを監視してたら、亡国企業のＩＳを月光君が追いかけていったんです。そしたら、いきなりアンノウンのＩＳが出てきて月光君と交戦し始めたんです！　月光君が押され気味で、しかももう一機アンノウンが現れたんです！　このままじゃ月光君が・・・」

山田先生の話が終わる前に、バルディッシュトワイライトを展開させた太陽は天井をぶち破って空へと飛び出した。

「ちょ、太陽ちゃん！！」

数秒遅れて楯無が太陽の後に続く。

「・・・山田先生、詳しいことは観察室で。お前達も来い」

戸惑う一夏達と今にも泣きそうな山田先生を従え、千冬は学園敷地内なら映像を映し出すことが出来る観察室へと向かった。

左手に握ったウィングスターがクルーゼのビームサーベルに切り落とされた。すぐにクルーゼから距離を取ろうとするが、中距離から射撃してくるオッツタルヴァと、クルーゼが無線操作しているドラグーンがそれを許さない。

（このままじゃ、ジリ貧か！）

夜明は背中の推進翼（スラスター）を広角展開させて高機動形態に移行するが、推進翼（スラスター）は既に一枚が壊されていて、レイジングウィング本来の機動力はもう無い。ドラグーンのオールレンジ攻撃を回避しつつ、夜明はオッツタルヴァに右のウィングスターを向ける。タイミングは申し分ない。だが、二人の猛攻で精神を極限まで削られている夜明が放ったビームをオッツタルヴァは軽々と避ける。

「墜ちろ」

胸部にオッツタルヴァが撃ったビームが直撃し、夜明は体勢を崩しながら後ろへと吹き飛んだ。体勢を戻す前に、ドラグーンが一斉射撃して夜明の推進翼(スラスター)を撃ち抜く。

「しまっ「そろそろ退場してもらおう」っ！！」

推進翼(スラスター)を確認しようと振り返った瞬間、目の前に何かが迫ってきた。視線を戻すと、クルーゼがビームサーベルを振り上げている。咄嗟に両腕を交差させようとしたが間に合わず、クルーゼが振り下ろしたビームサーベルは夜明の肩から腰までを切り裂いた。

「では・・・さようなら」

血を噴き出しながら落ちていく夜明に別れを告げ、クルーゼは肩に担ぐように持ったビームライフルで夜明の胸に照準を合わせ・・・引き金を引いた。銃口から吐き出された緑の閃光は夜明の胸部装甲を吹き飛ばし、肌を焼き払った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・く、そ・・・・・」

体中からもたらされる激痛や、気管を逆流する血で喋ることも出来ず、夜明は血の線を空中に残して地面へと叩きつけられた。夜明が最後に見たのは無言でこっちを見下ろしてくる二人の襲撃者。後頭部を強かにぶつけ、夜明は意識を失った。

失われた物

「山田先生、映像はまだ出ないのか？」

「も、もう少し待ってください！　あと十秒で出せます！」

観察室にやってきた千冬は苛立ちを隠そうともせず、腕組みした手で自身の二の腕をとんとんと叩いた。山田先生も夜明がアンノウン二機と闘っている場所の映像を出そうとコンソールを叩いているが、如何せん距離がかなり遠い。一夏達は後ろから二人を見守ることしか出来なかった。

「・・・夜明さん、大丈夫なのでしょうか？」

不意に、ポツリとセシリアが囁いた。小さな声だったが、それを耳聡く聞いた鈴音はセシリアの後頭部を思い切り叩く。それもグーで。

「あんた何バカなこと言ってんのよ！　相手がアンノウンだか何だか知らないけど、夜明が負ける筈無いじゃない！」

「そ、その通りだ！　あいつが負けるなど、天地がひっくり返っても有り得ない！」

鈴音に続くような形でラウラも大声で言うが、二人の声音は震えている。必死に、夜明は大丈夫だ、と自分に言い聞かせているようにも見えた。

「映像出ました！！」

山田先生の声を聞き、一夏達は一斉にディスプレイに視線を向ける。そこに最悪の光景が映っているとも知らず。ディスプレイに映し出された映像を見て、観察室にいた者は例外なく顔面を蒼白にさせた。

「・・・嘘だ」

「有り得ない・・・」

「いや・・・」

「ちょっと、これって何のドッキリよ・・・」

「こんな、こんな・・・」

「嘘だ・・・夜明ぇっ!!!」

観察室の壁一杯に映し出された映像は、夜明がクルーゼの攻撃を受けて、血の線を空中に描きながら落下していく物だった。相手方に何の傷も残っていないことが、夜明を圧倒していたことを物語っている。受け身も碌に取れずに夜明は地面へと叩きつけられた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・く、そ』

絞り出すように一言呟き、夜明は大量の血を吐いて意識を失う。夜明が意識を失うのに伴い、レイジングウィングの装甲も強制的に解除された。レイジングウィングの装甲が光の粒子となって消え失せ、夜明の身体中に傷が出来ていることを示し出す。

「・・・まずいな、あのままでは数分と保たないぞ・・・丁度良い

ところに」

皆と同じく顔を蒼白にさせていた千冬は、画面の中に小さな黒い点が出てきたことに気が付いた。それが太陽で、その後ろを飛んでいるのが楯無だと理解するのに時間は掛からない。千冬は二人にオープン・チャネルを開いた。

「夕暮、楯無、聞こえているか!?　今は兎に角月光の救助を最優先にしろ!!　相手が攻撃してくるようならともかく、攻撃の意思が無い場合は捨て置け!!」

『分かりました!』

楯無からは了解の返事が返ってくる。だが、太陽から返ってきたのは・・・。

『・・・殺す』

何処までも澄んだ、それでいて底が見えないような純粋で、目眩がするほど鮮烈な・・・・・・殺意。

ー今、私の目の前で何が起こった？ー

お前の大切（よあけ）な人が墜とされた。

ー誰に？ー

お前の視界に入っている二人に。

ー私はどうすればいい？ー

お前はどうしたい？

ー私は夜明を傷つけた奴を許さないー

なら、答えは決まってるのでは？

ーそうだなー

「・・・殺す」

宇宙のように限りない殺意を抑えようともせず、太陽はオッツタルヴァとクルーゼへと全速力で飛んでいった。

「殺す殺

す殺す」

『Mode（モード） Transam（トランザム） Standby OK. Are you ready?』

展開装甲をスライド展開し、太陽の速度が爆発的に上昇する。本来、紅い光の粒子を放っているはずの展開装甲部分から、太陽の殺意を凝縮したかのような漆黒の粒子が溢れ出す。瞬間加速（イグニッション・ブースト）で一気に二人との距離を詰めようとした太陽の肩を楯無が掴んだ。

「太陽ちゃん、気持ちは分かるけど、今は夜明を助けることがせんけ「・・・殺す」っ！？」

太陽はガラスのように無機質な瞳で楯無を振り返り、何の躊躇もなくオールデリートで楯無を切り裂いた。墜ちていく楯無に目も呉れず、太陽は視線を敵対者二人へと戻す。

「・・・はぁ。ちっとは頭を」

ゆっくりと落下していく楯無の姿が崩壊した。楯無の姿を構成していた水が水滴となって周囲にばら撒かれ、太陽を囲む。声が聞こえた方に視線のみを向けた瞬間、楯無が構えていた蛇腹剣の切っ先が太陽の肩を貫いた。それと同時に二人の周囲に散らばっていた水滴が異様に濃い濃霧へと変わる。

「冷やしなさい」

楯無が指を鳴らした瞬間、爆発が二人を飲み込んだ。『深霧の淑女（ミステリアス・レイディ）』が纏う水はＩＳのエネルギーを伝達するナノマシンによって制御されている。そして、霧を構成しているナノマシンが一斉に熱に転換して対象を爆破する『清き熱情（クリア・パッション）』。

「君だけが夜明を傷つけた奴を殺したい訳じゃないの。それは分かってくれるよね？」

煙が晴れ、装甲の数カ所が壊れた楯無が太陽の目を真っ直ぐに見据えると、バルディッシュトワイライトの展開装甲から溢れていた漆黒の粒子が紅へと戻った。

「・・・すまない、少し頭に血が上っていた」

謝罪しながらも、太陽はオッツタルヴァとクルーゼに視線を向ける。既に二人は、太陽が追跡可能な距離を超えていた。

「・・・ひとまず襲撃者のことは忘れましょう。今は夜明を助けることが最重要よ」

「あぁ、早くしないと命に関わる」

二人は頷き合い、地上で血を流しながら倒れている夜明へと向かって飛んでいった。

「「「「「「「「「「・・・・・・・・・」」」」」」」」」」

ＩＳ学園には大学病院並みの設備があり、夜明はすぐに搬送された。今、太陽達は手術中のランプが灯っている手術室の前で待機している。

「・・・私の所為だ」

重苦しい空気に誰もが言葉も出せずにいると、ラウラの涙混じりの声が聞こえてきた。一同が一斉に視線を向けると、シャルに頭を抱かれているラウラが肩を震わせている。

「私が、夜明に奴らを追ってくれなんて言わなければ、こんな事には・・・」

切れて血が滲むほど唇を噛み締めながら、ラウラは声を殺して泣き始めた。無言で両腕を組み、壁に背中を預けていた千冬が徐ろにラウラに歩み寄り、ポン、と優しく手を置く。

「・・・確かに、教師達に連絡もしなかったのは早計だったな。だが、自分を責めるな。お前に連絡を受けた所で、私も月光に奴らを追わせていたさ」

夜明が負けるなんて事、想像どころか考えもしなかったからな。千冬が心の中で呟いた台詞は、ここにいる全員の心内にもあった。月光夜明は最強、絶対に負けるわけがない。と言うのが全員の共通認識なのだから。

「教官・・・」

「先生と呼べ、馬鹿者」

口調こそ何時も通りだが、顔に優しい微笑を湛えて千冬はラウラを撫でる。その時、手術中のランプが消えて、中から手術衣を着た男性が出てきた。

「先生、月光の容態は？」

「問題ない。出血がかなり酷かったが、ギリギリの所で輸血が足りた。それに、敵からの攻撃も内臓にまでは達していなかった。恐らく、ＩＳが搭乗者を守ったのだろう・・・唯」

全員が安堵の吐息を漏らす中、医者は何か言いにくそうに表情を歪める。それを千冬が指摘しようとすると、

「いたたた・・・何が起こってるんですか？」

手術室の中から一人の少年が出てきた。銀髪銀眼、見間違えるはずもない、夜明だ。

「「「「「「「「「「夜明！！！」」」」」」」」」」

「うわっ！？」

いきなり太陽達に詰め寄られ、夜明は一歩後ずさった。そんな事お構いなしで、太陽は夜明の身体を触診していく。

「これと言った問題は無さそうだな・・・良い腕をしているな、この医師達は」

「そりゃそうでしょ、何せ天下のＩＳ学園の病院なんだし」

「良かった、本当に良かったですわ・・・」

「ま、まぁ、あんただから大丈夫だってのは分かってたけどね！」

「夜明・・・夜明ぇぇぇぇ！！！」

「ら、ラウラ落ち着いて！　嬉しいのは分かるけど、夜明は怪我人なんだから！」

「はは、無事で何よりだよ、夜明」

「全くだ。少しは心配する方の身にもなって欲しいぞ」

太陽と楯無は医師達の腕に感心し、セシリアは目元に浮かんでいた涙をハンカチで拭い、鈴音は涙目で強がりを言っている。ラウラは喜びの余り夜明に抱きつこうとしてシャルに止められている。一夏と箒は夜明が無事なことを喜んでいた。好き勝手に喜ぶ友人達を見て、夜明はおっかなびっくり訊ねた。

「あの・・・あなた達は誰ですか？」

「「「「「「「・・・・・・・・・・は？」」」」」」」」

愛を・・・じゃなくて、記憶を取り戻せぇぇぇ！！！

「「「「「「「「ずぇぇぇぇっっっ、記憶喪失ううううううう！！！！？？？？？？」」」」」」」」

「そ。恐らく、墜落した際に後頭部を強打したのが原因だね」

太陽達の悲鳴に眉一つ動かさず、そのカエル顔の医師、通称『冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）』は診察室にある机の壁を叩いた。そこには夜明の頭蓋骨を写したレントゲンが貼り付けられている。

「傷の方は完全に治療したから大丈夫。余程強い衝撃でも与えない限り、傷口が開くことはないよ。だけど、記憶喪失の方は・・・」

う～ん、と腕を組んでいる冥土帰し。頭の中ではどうすれば夜明の記憶を取り戻せるかを考えている。太陽達と冥土帰しが診察台に横たわっている夜明に目を向けると、視線に気付いた夜明が皆に助けを求めた。

「先生、さっきから僕を誘惑して取って喰らおうとする妖艶な妖が見えるのですが、これも頭を強く打った影響なのでしょうか！？」

訳の分からない事を言っている夜明が横たわっている診察台の横では、

「ん～、駄目だね。普段の夜明だったら顔を真っ赤にさせてる所なんだけど・・・」

制服の前を限界まで開け、夜明に谷間を見せようとしている楯無が・

・・。冥土帰しは朗らかに笑い、夜明を安心させるように頷く。

「はっはっは、安心しなさい月光君。ここは病院なのだよ？　美女の幽霊が一人や二人出ても不思議ではない」

「いや、違うからな」

「おぉ、それなら安心です」

「夜明、お前もお前で納得、そして安心をしてるんじゃない」

太陽が夜明と冥土帰しに突っ込んでいる後ろでは、夜明に肌を見せていた楯無をラウラ、鈴音、セシリアの三人が粛正しようとしているのを、シャル、一夏、箒が抑えている。後ろでバカをやっている友人達に呆れ、太陽は冥土帰しに視線を向けた。

「先生、どうすれば夜明の記憶を取り戻せますか？」

真摯な太陽の視線に答えるべく、冥土帰しは真剣な表情で考え込む。だが、捻挫やら打撲と言った怪我ならともかく、記憶喪失など、いきなりどうこう出来る物ではない。

「記憶というのは、言ってみれば『木』のような物だからね。一枚の葉、即ち一つでも記憶が戻れば、それに応じて記憶が戻ってくるかもしれないね」

結局、そんな解決策しか今のところは無かった。

「ここが、僕の通っている高校ですか？」

「あぁ、ＩＳ学園。世界規模の学園だ」

夜明の問いに一夏が頷く。夜明が記憶を失った翌日、太陽達は夜明の記憶を取り戻すために夜明と関わりの深い場所、即ちＩＳ学園へと来ていた。夜明はＩＳ学園の大きさに驚いたような表情を浮かべているが、今一ぴんと来ない顔をしている。

「どうだ、何か思い出せそうか？」

太陽の問いに首を振りつつ、夜明はあることが気になった。

「一つ気になってたんですけど、僕ってどんな人間だったんですか？」

夜明に問われ、太陽達は少しの間考え込む。一分ほど考え込み、一番最初に口を開いたのは太陽だった。

「とにかく自由な奴だったな」

「自由？」

「あぁ。風のように自由で飄々としてて、雲みたいに掴み所がない」

「悪戯や人をからかうのが大好きで、色々な方々に悪戯をしてましたわ」

太陽とセシリアの言葉に頷きつつ、一夏や箒も夜明が如何なる人物だったのかを語る。

「でも、人の心の動きに敏感で、人の支えになるのが上手だったな」

「決める時は決める、自分の大切な物は絶対に貫く、一夏の次に良い男だな」

「そ、そうなんですか？」

一夏と箒に褒められ、夜明は照れくさそうに頭を掻く。その表情は満更でもなさそう。だが、次に喋ろうとしていた鈴音、シャル、ラウラの表情は暗澹たる物だった。

「人の心には敏感なのに、女心に対しては異常なまでに疎かったわね」

「そうそう。本当に嬉しくなるような事を言ってくれたかと思えば、デリカシーが欠片も感じられない事言ってくるし」

「正直な話、お前ほど女心を掴んで、女心を弄べる男はそういないぞ・・・あれ、何だこの胸の中に溢れかえってくるどす黒い、ドロドロした感情は？」

三人の身体からどす黒いオーラが溢れ出し、それに触れた太陽とセシリアの身体からも何かが漏れ始める。身の危険を感じて一夏と箒は距離を取るが、太陽達が何でどす黒いオーラを放っているか分からない夜明は精一杯の笑顔を浮かべて、一番近くにいた太陽の肩を叩いた。

「あの、何でそんな落ち込んでるのか分からないけど、元気出してください！」

ね？　と笑顔で言われる。どんなに胸の中でどす黒い感情がのたうち回っていたとしても、こんな事を言われれば、取り敢ず彼女たちも怒りを収めるだろう・・・言ってくるのが原因でさえ無ければ。ブッチーン、と太陽達の中で何かがキレた。

「原因であるお前が何を言ってんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

やったらんかいぃぃぃぃ！！　太陽の怒声を合図に、セシリア達は戸惑った表情を浮かべている夜明に殺到する。

巫山戯てんのか手前はぁ！！　幾ら何でも酷すぎますわ！！　本気で一遍死になさいよ！！　乙女の心を弄んでそんなに楽しいの！！
いい加減私の夫だという自覚を持て！！

罵詈雑言と共に降り注ぐ拳、足の裏、掌底、手刀、貫手、オールデリート、ブルー・ティアーズ、衝撃砲、盾殺し（シールド・ピアース）、ワイヤーブレード。

「ちょ、マジで死にます！　これはマジで死んじゃいます！！」

暴力の爆心地から聞こえてくる夜明の切実な助けを求める声。明らかなオーバーキルをしている太陽達に唖然としていた一夏と箒は夜明の悲鳴で正気に戻り、慌てて救助に移った。

「お前等、夜明は怪我人なんだぞ！！」

「女としてお前達の怒りは分からないでもないが、兎に角止めろ！！」

その後、太陽達の折檻は小一時間は続いた・・・。

「色々と紆余曲折はあったが、取り敢ず夜明の記憶を取り戻すぞ」

「「「「「「オォー！」」」」」」

「お、おぉー・・・」

アリーナへと移動した一行。太陽の声に一夏達は拳を突き上げる。その隣りではボロボロの更に上を行ったような状態の夜明が拳を突き上げている。身体中に巻かれた包帯の量を考えると、そうやっていられるのは奇跡に近い。

「普段やっていることをすれば、一部ではあるけど記憶が戻ると思うんだ。と言うわけで夜明、レイジングウィングを展開させろ」

「れいじんぐ・・・うぃんぐ？」

「その胸元にあるネックレスだ！！」

太陽に言われ、夜明は初めて自分がネックレスを付けていたことに気付く。

「あぁ、これですか・・・これをどうすれば良いんですか？」

「そこまで分からないのか・・・取り敢ず、ネックレスを握り締めて名前を呼んでみろ」

「はい・・・レイジングウィング」

胸元の蒼い翼のネックレスを握り締め、夜明は自分の半身とも言えるものの名を呼んだ。だが、ネックレスは微かに輝きを放ったのみで、何の変化も見せない。夜明がキョトンとしながら周囲を見ると、全員がかなり深刻な表情を浮かべていた。

「まさかレイジングウィングが起動しないとはな・・・これは本格的にまずいぞ」

「あの、何がまずいんですか？」

「ＩＳって言うのは最初に『最適化（フィッティング）』って言う、搭乗者専用の機体になる重要な作業をするんだ。その『最適化（フィッティング）』が終了したＩＳが起動できないって言うのは、そのＩＳに認められていないって言うこと。つまり、君はレイジングウィングの搭乗者なのに、レイジングウィングに認められていないってことだよ」

まして、レイジングウィングは第二移行（セカンド・シフト）も済ませていたので、夜明との結びつきはとても深い。そう言われても今一ピンと来ず、夜明は疑問の表情を浮かべながら首を傾げるしかなかった。

「とにかく、すぐにお前の記憶を取り戻すぞ！　夜明、これを持っていろ」

懐をゴソゴソと探り、太陽は服の中からＩＳ専用のアサルトライフル『レッドバレット』を取り出した。

「・・・どうやって仕舞ってましたの？」

「気にしたら負けだ。ほら」

セシリアの問いをばっさり切り捨て、太陽は夜明にレッドバレットを渡す。夜明が手渡されたレッドバレットを興味深そうに色々な角度から見ているのを横目で流し、太陽はアリーナの中央に置かれているあるマシーンを指差した。それは先日の学園祭で野球部がアトラクションに用いていた超高速バッティングマシーン、投げる君だった。

「あの機械から時速五百キロの球が何個か吐き出される。それを全部撃ち落とせ」

太陽の無理難題に一夏達は色めき立った。ＩＳ専用の武器を、ＩＳの補助無しで使うなんて正気の沙汰とは思えないからだ。撃った時の反動で大怪我は確実だろうし、最悪身体の一部が吹っ飛ぶだろう。一夏達が夜明を止めようとするのを、太陽は視線のみで黙らせる。その目は『黙って見ていろと』語っていた。

「いや、撃ち落とせって・・・そんなこと言われてもどうすればいいのかわから」

「始めるぞ」

夜明の戸惑いを無視し、太陽は投げる君のリモコンを操作する。投げる君から機械音がしたと思った次の瞬間、砲身から連続して三十発、つまり一マガジン分の硬球が夜明に向かって放たれた。時速は人を容易に吹き飛ばすであろう時速五百キロ。

「危ねぇ！！！」

太陽を除く全員がＩＳを展開して夜明を護ろうとした刹那、一発分の銃声がアリーナ内に響き渡り、投げる君から放たれた三十発のボールの軌道をずらした。ボールは鋭い風切り音を鳴らしながら夜明の真横を通り過ぎ、アリーナの壁にめり込む。皆が夜明の方を振り向くと、夜明の足下に五、六個の薬莢が転がっている。

「・・・夜明、お前何したんだ？」

「え？　何をしたって・・・全部撃ち落とすのは無理だと思ったんで、何発か撃ってボールとボールで跳弾させて当たらないように軌道をずらしたんですけど・・・駄目でした？」

何の苦もなく言ってのける夜明に一夏達は戦慄を覚えた。目の前の記憶を失った少年は、何の説明もされていないのに一発分の銃声が響く間に数発の銃弾を発射し、尚かつその一瞬でどうすればボールの軌道をずらせるかを予測、数発の弾丸で全ての軌道をずらせて見せたのだ。しかも、ＩＳ専用のアサルトライフルを反動を感じている様子さえ見せずに片手撃ちしたのだ。記憶を失って尚この戦闘力。戦慄を覚えさせるには十分すぎる物である。

「・・・身体に染み付いた技は簡単に無くならないとは良く言った物だな」

呆れたように呟く太陽。だが内心、この調子ならすぐに夜明の記憶が取り戻せるだろうと安堵していた。

だが、太陽の予想に反して、夜明は数日経っても記憶を取り戻さなかった。

愛を・・・じゃなくて、記憶を取り戻せぇぇぇ！！！（後書き）

ども、こんばんわ、サザンクロスでっす。地震で日本中が大変なことになっていますが、皆様はどうお過ごしになっているでしょうか？

自分には何も出来ないので、ここで小説を書きます。この小説が誰かの助けになれるのだとしたら幸いです。

今回後書きを書いたのは、皆様からの意見を聞きたいからです。何というかとんでもない展開になってきましたが、この記憶喪失編（仮）が終わった時、夜明はそれなりに進化します、その進化がオーバー過ぎないかを皆様に判断していただきたいのです。取り敢ず、これが夜明、正確にはレイジングウィングの進化形態。

名称
『不屈の翼（レイジングウィング）　月明りの福音（ムーンライトエヴァンジェル）』

世代、第五世代（人の想いに応えるＩＳ）

詳細、夜明の想いに呼応して第四世代から第五世代に進化したレイジングウィング。外側と内側の推進翼（スラスター）の間から精神力によって出来

たエナジーウィングを広げ、ステイシスを上回るほどの機動力を得る。

能力名
月明りの翼（ムーンライトウィング）

能力
夜明の精神力をレイジングウィングが増幅させ、推進翼（スラスター）の間から噴き出すことによって爆発的な機動力を得る。また、これは夜明の精神力で作られているため、ＩＳのエネルギーを一切使わない。

イメージ
ターンＡの月光蝶を銀一色にした感じ。

どうでしょうか？

未来の暗躍（前書き）

ちょっとした閑話ですね

未来の暗躍

「さて、どうしたものか・・・」

「悩み事かねオッツタルヴァ？　珍しいこともあるものだ」

青髪の美女、オッツタルヴァが振り返ると、そこには変態仮面・・・もといクルーゼがいた。苦い表情そのままに、オッツタルヴァは軽く舌を鳴らしながら視線を戻す。その視線の先には、五機の巨大無人ＩＳが佇んでいる。

「悩みもするさ。元々、月光夜明を殺すのが目的で送られてきたこの巨大ＩＳを使う前に、俺とお前で不屈のを殺してしまったんだぞ？」

「確かに。二百年後の技術の粋を結集して作られたこの五機・・・『ノイエ・ジール』、『サイコガンダムＭＫⅠ？』、『クィン・マンサ』、『α・ジール』、『デストロイガンダム』・・・これらを残していくのは少し拙いな・・・未来に送り返すにしても時間が掛かりすぎる」

元々、この五機は夜明と刺し違える形で破壊されることを予想して、未来からメルツェルが送ってくれた物だ。だが、その目標である夜明が二人に撃破された今、用意された五機は完全な無用の長物になっている。このまま置いていくと言う投げ遣りすぎる手段もあるが、未来の技術で作られたこれらを残していくのは拙い。唯でさえ、夜明を殺して歴史を変えたというのに、こんな物を残していけば亡国企業が利用することは確実、歴史も変わるだろう。これ以上の歴史への介入は二人にも気が引けた。

「その点については大丈夫ですよ」

「ハハハハハ！！　小難しい話は分からねぇが、メルツェルが大丈夫って言ってんなら安心して大丈夫だぜ二人とも！！」

ふと、二人にとっては聞き慣れた声が聞こえてきた。二人が声のした方を向くと、二人の女性が歩いてくるのが見えた。一人はスーツを着こなした女性で、黒いフレームの眼鏡をかけたクールビューティーを体現したような美女。もう一人は二メートル近い女傑で、さっぱりとした笑顔を浮かべている。どちらも二人の仲間だ。

「・・・メルツェルにヴァオーか。何故お前達がここにいる？」

「少しばかり問題が起きましてね。それで急遽、私とヴァオーがやって来たと言う訳ですよ」

「問題・・・それは一体？」

クルーゼの問いに、メルツェルは苦笑を浮かべる。

「問題も問題、大問題です。お二人は先日、不屈の翼を墜としたと言いましたよね？」

「それがどうした？」

「だとしたら奇妙なことに、歴史が全く変わっていないんですよ」

「・・・何だと？」

「・・・それはつまり、月光夜明の子孫である大空流星が存在していると言うことなのかね？」

「理解が早くて助かります。つまり、お二人に墜とされた筈の不屈の翼は今尚生きているのですよ」

メルツェルから聞かされた話が信じられず、クルーゼとオッツタルヴァは顔を見合わせた。あれだけの大怪我をしていたのに、あの少年はまだ生きていると言うのだ。驚きもするし、戸惑いもするだろ。

「そうか・・・確実に止めを刺しておかなかった私達の失態だったな、済まない」

「お気になさらず。そう言った事態に対処するのが私の役目ですから」

「俺の役目はメルツェルを守ることだ！」

ガッハッハ！　と笑うヴァオーに鬱陶しそうな視線を送り、オッツタルヴァはメルツェルに訊ねた。

「お前の事だ。どうせ大きすぎる保険でも用意してきたのだろう？」

「はい。今回は不屈の翼に加えて深紅の死神も相手取ると考え、無人ＩＳ千機を用意してきました」

口元に手を添えて上品に笑いながら、メルツェルは怜悧な感情を瞳の奥に灯す。

「今度こそ・・・不屈の翼には墜ちてもらいましょう」

糸口は見つからず、想いは抑えきれない

夜明が記憶を失ってから数日が経過した。夜明の記憶は未だに戻っておらず、唯一の進展と言えばレイジングウィングを展開できるようになったことのみ。全くと言って良いほど記憶が戻る兆しを見せない夜明に、太陽達は徐々に焦りを覚え始めていた。各々が夜明の記憶を取り戻す方法を模索している中、太陽は冥土帰しに呼び出されていた。

「先生、私だけに話したいことと言うのは何なんでしょうか？」

太陽は招き入れられた診察室を見回しながら冥土帰しに尋ねる。診察室内を見回してみても、太陽と冥土帰しの姿以外見当たらない。つまり、冥土帰しは太陽だけを呼び出したのだ。

「うん。今回は君だけを呼び出したんだ。見た感じ、あの子達の中で精神力が強そうなのは君だからね」

「は、はぁ・・・」

冥土帰しの真意が分からずに太陽が首を傾げていると、冥土帰しは机の電光板を指で指し示す。そこには夜明の脳の状態を写した写真が貼り付けられている。

「先生、これは？」

「月光君の脳をレントゲンで撮った写真だよ。素人目に見たら分からないかもしれないけど、あれだけの大怪我をしていたにも関わらず、月光君の脳は傷一つ無いんだ」

そう言って、冥土帰しは夜明の脳写真の横に、何の損傷も負っていない人の脳写真を貼り付けた。冥土帰しの言うとおり、その写真と比べてみても、夜明の脳には何の損傷は見受けられない。何が何やらさっぱり分からない表情で太陽は二つの写真を見比べていたが、ふと、ある疑問が胸の中に浮かび上がってくる。

「ちょっと待ってください。脳に何の損傷も無いと言う事は、夜明が記憶を失う原因が無いと言うことなのでは？」

「そう言う事になるね、理解が早くて助かるよ」

電光板の電源を落とし、冥土帰しは小さくため息をつきながら椅子へと腰を下ろす。よくよく見てみると、目の下にはうっすらと隈が出来ていた。

「伊達に長く生きてきた訳ではないから色々な症状の患者を診て来たけど、彼の様に脳に何の損傷も無いのに記憶喪失になっているなんて症状、初めて見たよ」

「どういう・・・事なんでしょうか？」

「なんとも言えないけど、可能性なら幾つか挙げられるね。まず第一に月光君が記憶を失っていると思い込んでいるか、第二に月光君が記憶喪失になった振りをしているか。第三は・・・」

そこまで言ったところで冥土帰しは言葉を切り、言い難そうな表情を浮かべながら太陽の表情を窺がう。とにかく夜明が記憶を失った理由を知りたい太陽は冥土帰しの様子に苛立ちを覚え、思わず声を荒げた。

「先生、他にも可能性があるならはっきり言ってください！」

太陽に怒鳴られて尚、冥土帰しは話すのを渋っていたが、天井を見上げながら大きく深呼吸をし、太陽の目を真っ直ぐに見つめる。

「第三に・・・月光君自身が記憶を思い出すのを拒否しているのかもしれない」

「・・・そうか、あぁ・・・あぁ、ありがとう。態々手をかけさせて済まなかった」

『いえ、気にしないでください。隊長の頼みとあらば、私達は命でも投げ出す覚悟ですから』

「・・・ありがとう、クラリッサ」

『お気になさらず。では、引き続き調べてみます』

頼んでおいた調べ物を一言の苦言も言わずにやってくれている部下に感謝しながら、ラウラはＩＳのプライベート・チャネルを切った。ラウラが頼んだ調べ物と言うのは、勿論記憶喪失のことである。ラウラが率いている『黒ウサギ隊』の副隊長であるクラリッサ大尉に、ドイツ軍の軍医達に記憶喪失の症状、及びどうすれば記憶を取り戻せるのか聞き回ってもらっているのだ。苦労を惜しまずに調べてくれている部下に感謝しつつも、未だに何も分かっていない状況に落胆を隠せず、ラウラは廊下の天井を見上げながら大きくため息を吐く。

「ラウラ！」

呼び声に振り返ると、ＩＳ学園の図書館で記憶喪失に関する書庫を探し回っていた一夏が走ってくるのが見えた。

「一夏、何か分かったことはあったか？」

藁にも縋る気持ちで尋ねるが、一夏は無言で首を振る。そうか、とラウラは落胆を隠し切れずに視線を落とす。ラウラにとって、夜明

は自分を助けてくれた恩人であると同時に初恋の相手なのだ。もし、夜明がこのまま記憶を取り戻せずに自分のことを忘れたままだったら・・・。

（それだけは、それだけは絶対に嫌だ・・・！）

言いようの無い恐怖が胸の中に広がり、ラウラは身体が震えそうになるのを必死で堪える。泣き出しそうなのを必死で我慢しているラウラにかける言葉が見つからず、一夏が黙っていると、向こうから箒が走ってくる。箒は箒で、姉の束に連絡を取っていた。

「箒！　束さんは何か言ってたか？」

一夏の問いに首を振りつつ、箒は少しだけ苦笑いを浮かべる。何も収穫が無かったと言うのに、その表情はどこか嬉しそうだった。

「いや。機械ならともかく、人体は専門外だと言われてしまった・・・序に説教もされてしまったよ」

ーマスターー！！！！！ー

目の前でマスターの腹を光る剣で貫かれた若いジェダイの騎士の叫びが携帯から流れてくる。

「ややや！！　この着信音は！！！」

頭の上につけているウサ耳をペコーンと反応させ、暇つぶしにナノサイズのＩＳプラモデルを作っていた鬼才、篠ノ之束は携帯が置いてある机と、自身が作業していた机の間にある家具を全て蹴散らし、ヘッドスライディングをしながら携帯を手に取った。

「は～い！　もすもすヒネモス！　よっくんの奥さんの束ちゃんだよ～！！！」

『・・・姉さん』

「・・・ありり？　何で箒ちゃんがよっくんの携帯からかけてくるの？」

落胆を隠そうともせず、束はげっそりとした表情で近くにあった椅子に腰を腰を下ろす。妹が電話をかけてきてくれたのは嬉しいが、それ以上に電話をかけてきた相手が夜明じゃないことの方の落胆が大きい。

『実は、姉さんに聞きたいことがあって・・・』

箒はなるだけ簡潔に、姉に夜明が記憶を失ったことを話した。

「・・」

物理的重量を含んだ沈黙を返しつつ、束はきっかり一分間無言を貫いた。電話の向こうで箒が冷や汗を流しているのは容易に想像できたが、今の束にとっては些細なことである。箒の精神が限界に近くなった時、ようやく束は口を開いた。

「箒ちゃん。それって・・・よっくんは私のことも忘れちゃってるって事？」

『はい。覚えていることと言えば、基本的な常識だけですから』

箒からの返答を聞き、束は無言で携帯を耳から離す。そして・・・。

「やだやだやだぁ！　よっくんに忘れられるなんてやだぁーーーーーーっ！！！！！！！！！」

床の上に転がって、子供の様に両腕両脚をばたつかせながら駄々をこね始めた。我が儘な子供も顔負けの暴れっぷりに、壁や床が軋み

始める。

『ちょ、姉さん！？』

「やぁーーーーーだぁーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

凡そ十分後。

「ごめんね。束さん取り乱しちゃった」

『取り乱しすぎです！！』

鼻をぐしぐし鳴らしながら束は携帯を手にとって箒との会話を再開する。箒は姉が暴れていた光景が容易に想像できたので、深々とため息を吐く。気を取り直し、箒は姉に尋ねたかったことを尋ねた。

『聞きたいんですけど、どうすれば記憶を取り戻せるか分かりますか？』

「分かんない」

あれだけ暴れてた癖に、あっさりと束は言い切る。電話の向こうで箒がずっ転けたのも無理からぬ事。

『そ、そんなあっさりと！』

「だって私は機械専門の天才だから、人の身体は専門外なのだよ」

束の言うことも一理ある。機械と人体は全く違う物だ。束が機械に対して天才的な才覚を持っているからと言って、それは人体に詳しいと言うことにはならない。そもそも、この奇天烈な姉に聞こうとしていたのが間違いだと思い、箒はため息を吐いて携帯を切ろうとした。

『そうですか・・・手間をかけてすみません。では、何れ・・・』

「・・・随分と塞ぎ込んでいるみたいだけど、よっくんに関しては心配無用だよ」

『・・・何でそんなことが言えるんですか？』

「だって、よっくんは月光夜明なんだよ？」

箒の呼吸が一瞬止まった。

「その胸に不屈の心（レイジングハート）、その背に不屈の翼（レイジングウィング）を持った不撓不屈の男、それがよっくんなんだよ？　心配なんかしなくても、絶対に記憶を取り戻すよ。私よりも近くにいるのに、箒ちゃん達はそんなことも分からないの？　存外、よっくんのことを良く見てないね」

それだけ言って、束は通話を切った。

「だそうだ」

「・・・はは、束さんらしいな、それ」

箒から話を聞いて一夏は苦笑いを浮かべる。その隣りでラウラも薄っすらとだが笑顔を浮かべていた。

「そうだな。妻である私があいつを信じなくてどうすると言うのだ！」

色々と突っ込みたいことはあるが、取り敢えず二人は何も言わないことに。過程はどうあれ、ラウラが元気を取り戻したのなら、それに越したことはないだろう。

「それでは、私達も私達でやれることをやろ「ラウラ、一夏、箒～

！！！！！」シャルロット？」

気持ちを入れ替えて出来ることをやろうとしたラウラ達の耳に響く裂帛の声。声の主、シャルは三人の所まで全力疾走してきて、膝に両手をつけながら息を整えようとした。

「シャルロット、どうかしたのか？」

「・・・鈴が・・・夜明の・・・記憶を、取り戻そうって。第三アリーナでＩＳの模擬戦をやって、夜明の傷口が開いて、セシリアが今夜明を運んでて」

途切れ途切れだが、シャルの言いたいことが分かって三人とも表情を青ざめさせる。ラウラは無言で走り出し、一夏達もそれに続いた。

十数分前。鈴音に呼び出された夜明は第三アリーナに来ていた。第三アリーナにまで歩いてくると、そこには甲龍を展開させた鈴音と、気が進まなさそうな表情のセシリアがブルー・ティアーズを展開させている。

「こうなったら、闘いの中で記憶を取り戻して貰うわ！　と言うわけで夜明、レイジングウィングを展開して私と闘いなさい」

「はぁ？」

「鈴さん。幾ら何でも、怪我をしてから数日しか経っていない夜明さんにＩＳの戦闘は酷かと思うのですけど」

戸惑いの表情を浮かべる夜明。セシリアは鈴音をやんわりと諫めている。だが、鈴音はセシリアの言葉に一切耳を貸すことなく話を進めていった。

「とにかく！　レイジングウィングが展開できるようになったんだから、記憶を取り戻すのに時間は掛からないはずだわ！」

「そう・・・ですかね・・・」

首を傾げつつも、夜明は鈴音に言われた通りにレイジングウィングを展開させる。胸元のネックレスから二対の光の翼が広がり、夜明

を包む。翼が消えると、白い装甲を纏った夜明が浮かんでいた。

「それじゃセシリア。審判役お願い」

「鈴さん！　・・・もうっ！」

自分の言葉に一切耳を貸そうとしない鈴音を睨みつつ、夜明が戦闘不能になった時にすぐ割って入れるように、セシリアは少し離れた所に待機する。

「夜明、あんたも早く上がってきなさい」

「あ、はい」

鈴音に言われ、夜明はぎこちない動きで上昇していった。その動きは記憶があった頃とは比べ物にならないくらい鈍重な物。飛ぶ、と言うＩＳの基本動作にさえ手こずっている夜明に苛立ちを覚えながら、鈴音は連結させた双天牙月で肩を叩く。

「さっさとしなさいよ！」

「すみません」

鈴音の罵倒に謝罪しつつ、夜明は漸く鈴音と同じ高度にまで上ってきた。鈴音が双天牙月を構えるのに対し、夜明は迷いながらスターライザーを引き抜く。

「始めるわよ、夜明」

「え？　もう少しだけ待ってくださっ！！」

鈴音が勢い良く振り下ろした双天牙月を交差させたスターライザーで受け止める。直撃は避けられたが、勢いは殺せずに夜明は後ろへと押し下げられた。

「ほら、反撃してきなさいよ！！」

「無茶、言わないでください！！」

暴雨風の様に襲いかかってくる双天牙月をどうにか捌きながら、夜明は叫び返す。今はどうにか鈴音の攻撃を防げているが、攻撃の勢いが強すぎて後退を余儀なくされている。

（・・・何でよ）

無心に双天牙月を振りながら、鈴音の胸中にモヤモヤとした感情が湧き上がってきた。最初、小さかったそれは夜明に攻撃していくに釣れて膨れ上がっていく。

（何で）

ー私達のこと忘れちゃったのよ？ー

（あんたにとって、私達はそんなに簡単に忘れられるような存在なの？）

徐々に、徐々に鈴音の攻撃が激しさを増していった。すぐに鈴音の異変に気付き、セシリアはオープン・チャネルで鈴音に呼びかける。

『鈴さん、どうされましたの？』

『・・・何で』

『鈴さん？』

「何で私のこと忘れたのよ！！！」

大上段からの一撃で夜明を吹き飛ばし、鈴音は双天牙月の連結を解除して二刀流の構えで夜明に向かっていった。すぐに迎撃の構えを取るが、夜明は鈴音が泣いていることに気付いて動きを止める。

「あんたの事が好きなのに！！」

右のスターライザーを吹き飛ばし、

「大好きなのに！！」

左のスターライザーを吹き飛ばす。

「何で忘れたりするのよ！！！」

肩の非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）の装甲を開いて衝撃砲の銃口が現れた。衝撃砲の銃口が光って衝撃弾を放つことを示すが、スターライザーを吹き飛ばされた夜明に防御の手立てはない。

「鈴さん！　それ以上は駄目ですわ！！」

セシリアが二人の間に割って入ろうと飛翔したが、それよりも早く衝撃砲の充填が終わった。

「バカァァァ！！！！！！！！」

最大出力の衝撃弾が放たれ、夜明の腹部に直撃する。巨人の手に叩かれた様に夜明の身体が吹っ飛んでいく。双天牙月を連結させ、鈴音は夜明目掛けて力の限り投げつけた。双天牙月は空気を切り裂いて夜明に迫り、夜明がアリーナの壁に叩きつけられるのとほぼ同時に夜明の腹に突き刺さった。

「はぁ・・・はぁ・・・あれ？」

回転しながら手元に戻ってきた双天牙月を受け止めた所で、漸く鈴音は自分が何をしたのかに気付く。涙を流している鈴音の視界に、アリーナの壁から落ちていく夜明の姿が映った。落ちている間にＩＳの装甲は解除され、夜明は床に叩きつけられる。数秒と経たずに夜明の身体の下に血溜りが広がった。

「夜明さん！！　大丈夫ですの！？」

悲鳴混じりの声を上げながらセシリアは夜明の元まで飛んでいき、身体が血で汚れるのも構わずに夜明を抱き起こす。

「だ、だいじょう、げほっ、がはっ！！」

大丈夫だと応えようとしたが、血を吐き出してセシリアの白い肌を真っ赤に汚してしまう。一刻の猶予も許されないと判断し、セシリアは夜明に肩を貸しながら鈴音の方を見た。

「鈴さん！　夜明さんを運ぶのを手伝ってください！」

「違う、違う、私は夜明に思い出して欲しくて・・・」

「鈴さん！！」

「夜明を、傷つけたかったんじゃなくて・・・」

呆然となった鈴音を捨て置き、セシリアは条約や迷惑などお構いなしで廊下をＩＳを展開させたまま飛んでいった。肩を貸している夜明の呼吸がおかしくなっていることが、夜明が極めて危険な状態だと告げていた。

例え全てを忘れても

「・・・夜明自身が記憶を取り戻すのを拒んでいるって、どういうことですか？」

「うん。これは仮定の話でしかないんだけどね」

冥土帰しは椅子から立ち上がり、診察室の窓際へと足を運ぶ。

「人間という生き物は、本人の自覚無しの怒りや憎しみ、ストレスと言った負の感情で簡単に体調を崩してしまうんだ。胃潰瘍なんかが良い例だね。今回の月光君の記憶喪失はそれらが原因で起こった物なのではないかと僕は思っている」

「今の今まで堪っていたストレスや怒りが爆発して、記憶喪失を引き起こした・・・」

だが、そうするとなると一つの疑問が浮かんでくる。夜明は何に対してストレスや怒りを感じていたのか？　普段の夜明の私生活を考えるとまったく原因が思い浮かばないが、太陽は心当たりがあるのか額に手を当てる。

「・・・闘いへのストレスや怒りか・・・」

「恐らくね。月光君は戦闘を楽しむような子では無いだろ？」

太陽は無言で頷いた。最強とこそ呼ばれているが、夜明は闘いを好む質では無い。理由さえあれば躊躇することなく闘いへと身を投じるが、可能であるのなら出来るだけ戦闘は避けるタイプである。

「彼はもう・・・闘いに拘わるのが嫌なのかもしれないね」

「・・・・・・・・・・・」

ＩＳとは兵器。どんな御託や綺麗事を並べようとも、人を殺傷できる力を持っている時点で、それは誰にも変えることの出来ない事実だ。そのＩＳと拘わると言うことは、否応なしに闘いに巻き込まれることに他ならない。そして、夜明がＩＳに拘わることになった大本とも呼べる理由を作ったのは・・・彼女（たいよう）だ。

（・・・私と出会った所為で、夜明はあんな大怪我を負ったのか？）

そう考えた瞬間、太陽の目の前が暗黒に染まる。顔を真っ青にさせてふらつく太陽を冥土帰しが支えた。

「大丈夫かね？　顔色がかなり悪いが？」

「え、えぇ、大丈夫・・・な筈です」

曖昧な笑顔を浮かべながら太陽が返事を返すと、診察室の電話がけたたましく鳴き出す。冥土帰しはすぐに表情を引き締め、受話器を耳に押しつけた。

「どうしたんだい？　・・・何？　そうか・・・分かった。すぐに準備してくれ」

「あの、また急患ですか？」

冥土帰しの表情がかなり剣呑な物になっていたので、思わずと言っ

た感じで太陽は訊ねる。

「月光君の傷口が開いたらしいんだ。君も一緒に来なさい」

太陽は更に表情を青ざめさせ、返事をすることも忘れて一度だけ頷いた。

「夜明の容態は？」

「かなり衰弱しているらしいけど、一命は取り留めるみたいだ」

「良かった・・・」

今にも泣き出しそうな表情を安堵で崩し、ラウラは崩れ落ちるように廊下のソファに座り込んだ。一夏や箒、シャルと夜明を運んできたセシリアもホッとした表情を浮かべている。そこから少し離れた所で、難しい表情を浮かべた太陽が窓のサッシに腰掛けていた。

「太陽。何か悩み事でもあるのか・・・」

心配そうな視線を太陽に送っていたラウラの視界に、少し離れた所で立ち尽くしている鈴音の姿が映る。途端、ラウラの目から感情の色が消え、ラウラは無言で鈴音に歩み寄っていった。そして・・・何の手加減もしないで鈴音の顔を全力で殴った。

「このバカがぁ!!!」

廊下を滑っていった鈴音の胸倉を掴み、壁に叩きつける。

「お前は何を考えているんだ!?　夜明は怪我人なんだぞ!!　それをＩＳで戦闘させるなんてどういう了見だ!!!」

「だって・・・だって・・・」

「だっても案山子もあるか!!!」

拳を引いて鈴音を殴ろうとするラウラの首根っこを誰かが掴んで持ち上げた。藻掻きながら振り返ると、疲れ切った表情を浮かべた太陽がラウラを持ち上げている。

「はぁ・・・その辺にしておいてやれ」

「離せ太陽!!　こいつは、こいつは!!」

「それ程夜明を想ってるなら、鈴の気持ちも分かるだろうが」

太陽の一言でラウラは藻掻くのを止めた。ラウラがこれ以上暴れないと判断し、太陽はラウラを離して鈴音の頬を撫でる。

「大丈夫か、鈴?」

「・・・ごめ、んなさ、い・・・」

返ってきたのは涙で曇った謝罪。太陽は無言で鈴音の頭を抱きかかえ、軽く頭を叩いた。

「謝罪なら私じゃなく、夜明本人にしておけ・・・皆、少し聞いて欲しい事があるんだ」

太陽は一旦全員の視線を集め、冥土帰しが言っていた仮定の話を聞かせた。

「夜明自身が、記憶を取り戻すのを拒んでいる？」

「あぁ。多分、その可能性が一番高いと思う」

太陽から聞かされた話に一夏達は呆然とする。

「・・・何故、夜明さんは記憶を拒否しているのでしょう？」

「さぁな、それこそ神のみ・・・もとい本人のみぞ知る事だ・・・」

セシリアの呟きに答えた太陽はある一点を見て固まった。全員が太陽の視線を追うと、廊下の向こうから壁を支えにするように夜明が歩いてくるのが見える。額に大量の脂汗を浮かべ、容態がかなり悪いことが容易に分かる。

「夜明！？　駄目だよ寝てなきゃ！！」

シャルが慌てて夜明をベットに戻そうとするが、夜明はそれを制して身体を引きずるように鈴音の前まで歩いてきた。そして、

「鳳さん、すみませんでした」

深々と頭を下げたのだ。何故、夜明が頭を下げたのか分からずに鈴音は戸惑いの表情を浮かべる。

「俺が記憶を失ったばっかりに、貴方を泣かせてしまった。本当に、すみませんでした」

それから一同を見回し、夜明はもう一度頭を下げた。

「皆さんもすみませんでした。要らぬ混乱を与えてしまって、本当にすみません。でも、安心してください。すぐに全てを思い出しますから」

「・・・いや。もうお前は何も思い出さなくて良い。もう、ＩＳに乗らなくても、闘いに拘わらなくてもいい」

今度は夜明、そして皆が戸惑いの表情を浮かべる番だった。太陽は胸に抱きかかえていた鈴音を離し、今度は夜明の頭を抱き締める。

「例えお前が全てを忘れたとしても、私は何一つ忘れずにお前のために生きて死ぬから」

夜明だけに聞こえるだけの声量で囁き、太陽は回れ右をして歩いていった。いち早く正気に戻ったラウラが歩き去っていく太陽の肩を掴もうとするが、シャルがその手を掴む。

「離してくれシャルロット！　太陽、お前も何を考えているんだ！！」

歩いていく太陽の背中に大声で問いかけるが、それはシャルによって阻まれた。

「ラウラ！！　誰が一番辛いのか、夜明に忘れられて誰が一番辛いのか考えて！！」

泣きながら、懇願するような口調でシャルに言われてラウラは言葉を詰まらせる。戸惑った表情を浮かべている夜明の胸倉を掴み、ラウラは涙で潤んだ目で夜明の目を覗き込んだ。

「夜明！！　お前は本当に忘れてしまったのか！？　太陽のことも、私のことも、シャルロットのことも、皆のことも！！？？」

「・・・すみ、ません」

夜明が謝った瞬間、ラウラの目から涙が溢れてきた。大声で泣きながら、ラウラは夜明の胸を滅茶苦茶に殴り始める。

「何で！　何で忘れたんだ！！　言ったじゃないか！　私を護ってくれるって！　お前が！　お前と不屈の翼が！！　お前の護りたい世界に入った私を護ってくれるって！！　嘘吐き！　嘘吐き！！」

尚、夜明の事を殴ろうとするラウラを夜明から引き剥がし、シャルはラウラを抱き締めながら目尻から涙を流しながら夜明に視線を向けた。

「・・・夜明、本当に何も覚えてないの？　僕に大切なことを教えてくれたのは君なんだよ？　僕の命は一つだけだって、僕の在り方を教えてくれて、僕の居場所になってくれるって言ってくれたのは君なんだよ？」

無言で頭を下げる夜明。シャルもラウラ同様泣き声を出しそうになるが、歯を食いしばって泣きそうになるのをぐっと堪える。泣きじゃくっているラウラの肩を抱いて歩いていくシャルの後ろ姿に何も言えずにいると、肩に一夏の手が置かれた。

「大丈夫だ。皆、お前が記憶を失ったから、少し気が動転してるだけだ。お前はゆっくり、少しずつ思い出していけば良い」

「兎に角、今は傷を癒すことだけを考えろ」

夜明を労るように肩を叩きながら、一夏と箒も去っていった。残っている鈴音に目を向けると、鈴音は深々と夜明に頭を下げる。

「夜明、今日は本当にごめん。その・・・本当に、ごめん」

謝罪だけを口にして、鈴音は足早に去っていく。最後まで残っていたセシリアは夜明の頬を撫でた。

「オルコットさん・・・」

「一夏さんと箒さんの言うとおりですわ。今は、傷を治すことだけを考えてください」

足早に去っていくセシリアの後ろ姿を見送りながら、夜明は自信の掌を睨み付ける。確かに感じたのだ。セシリアが震えていたことを、セシリアが泣きそうだった事を。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ちく、しょう・・・・・・」

彼女たちを泣かせてしまった自分が許せなくて、夜明は骨が軋むほどの力で握り拳を握り続けた。

「例えお前が全てを忘れたとしても、私は何一つ忘れずにお前のために生きて死ぬ、か・・・我ながらクサい台詞を言った物だ」

愉快そうに喉を鳴らしながら、太陽はＩＳ学園校舎屋上から見える夕陽を見つめた。今、自分の事を見ている人の事など意に介さず、夕日は憎たらしいほど綺麗に輝いている。無言で夕陽を見続けていると、後ろの方から誰かの気配が感じられた。

「・・・お前も夕陽を見に来たのか、楯無？」

「おりょりょ、太陽ちゃんが私を名前で呼ぶなんて珍しいね。明日は雨かな？」

太陽の隣りに並び、楯無は広げた扇子で口元を隠しながら夕陽に見

入った。

「聞いたよ。夜明、まだ何の記憶も戻ってないんだってね」

「あぁ・・・そっちはどうだったんだ？」

無言で首を振る楯無を見て、太陽はそうかと頷く。この数日間、楯無は楯無で家の力を総動員させて記憶喪失の治し方を探していたのだ。だが、努力虚しく治療法は見つからなかった。

「・・・ついさっき理事長と話してきたんだけど、夜明は停学になったよ。取り敢ずは傷が完治するまで自宅待機だってさ」

「ふ～ん。まぁ、妥当だな・・・夜明が記憶喪失になるなんて、考えたことも無かったな」

どこか遠くを見据えるような目で呟く太陽に流し目を送り、楯無はすぐに視線を夕陽に戻す。

「・・・泣きたいなら、泣けば良いんじゃない？」

「・・・夜明に笑顔の方が可愛いって言われたからな。それ以来、泣かないと決めている」

そう言ってくれた夜明が記憶喪失なんだが、と太陽は自嘲の笑みを浮かべる。

「・・・強情っぱり」

「お前に言われたくは無いさ」

「・・・だろうね」

楯無は扇子で顔を覆い隠したが、太陽は見逃さなかった。楯無の頬を、確かに一筋の涙が伝い落ちていったことを。

夜明が停学になってから早三日が経過していた。ＩＳ学園は何時もと変わらぬ様子だが、何かが決定的に欠落しているように感じられる。特に一年一組。学園祭前のバカ騒ぎが嘘だったように、今はシ

ンと静まり返っていた。ラウラは極端に口が減り、特に仲の良いシャルや太陽にも生返事しか返さなく鳴っている。シャルやセシリアは何時も通りに振る舞っているが、その表情にはやはり影が差している。鈴音も塞ぎ込み、太陽もほとんど喋らなくなっていた。そんな時だ。

『全生徒に連絡する。早急に各自の教室に戻り、担任の教師の指示を待て。教室からは絶対に出るな。繰り返す、早急に各自の・・・』

ＩＳ学園中にあるスピーカーから切羽詰まった校内放送が流れてくる。戸惑いつつも、生徒達は放送に従って教室へと戻っていく中、次の授業のためのプリントを受け取りに職員室に入ろうとしていた太陽は首を傾げた。

「いきなり何だ？　まさか避難訓練と言う訳でも無いだろうし・・・」

数秒ほど思考し、太陽は職員室の扉に耳を押しつけて中の会話を聞こうとする。

『おい！　学園の敷地内に謎の無人ＩＳ、それも千機が侵入してきたって本当か！？』

『そんな事、嘘や悪戯で言えるわけ無いだろうが！！　兎に角、すぐに迎撃に移るぞ！　生徒達に不安を与えぬよう、極力静かに動け！』

『くそ！！　亡国企業の連中、昨日の今日で襲ってきやがって！！』

これ以外にも色々な怒号が飛び交っているが、太陽が状況を理解す

るにはこれだけで十分だった。能面のような表情を浮かべ、太陽は扉から耳を離す。一度、大きく深呼吸をしながら目を閉じ、音さえ発生しないほどの速さで拳を職員室の壁に叩きつけた。職員室の壁が跡形もなく吹っ飛び、校舎全体が大きく揺れる。

「亡国機業。私から最愛の人を奪っただけでは飽きたらず、友を、仲間まで傷つけようと言うのか・・・許さない」

ゆっくりと瞳を開くと、その奥にはこの世の全てを焼き尽くすかの如き炎が踊っている。

「許さない、許さないぞ亡国機業」

この時、世界が震えた。

「亡国機業ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

夕暮太陽の、黄昏の黒姫の怒りに。

「待たせたな」（前書き）

無人ＩＳは好きな物を想像してください

「待たせたな」

突然現れたアンノウン千機の反応。これを迎え撃とうとする教師達はなるだけ静かに動いていたが、不審に思う生徒はいるらしく。

「「「「「「・・・」」」」」」

この生徒達もその不審に思っている生徒達らしい。一夏達は廊下の物陰から頭を突き出して慌ただしく走っている教師達を観察し、頭を引っ込めて額を突き合わせた。

「・・・どう思う？」

一夏の問いに箒達は黙り込む。どう思うもクソも無く、校内放送が流れた時から嫌な予感がしていたのだ。教師達の慌て様は尋常じゃなく、しかも放送が流れてから、次の授業に使うプリントを取りに行っていた太陽が何時まで経っても戻ってこないと来ている。

「どう思うも、何も無いと考えられるほどハッピーな頭をしている奴はこの場にいないぞ」

ラウラの一言に一同頷く。先日の学園祭で襲ってきた亡国機業。不安要素なら十二分にある。

「とにかく、観察室に行きません？　あそこなら学園内全体を監視できるモニターもあることですし」

セシリアの案に全員が賛成し、一夏達は観察室へと向かった。途中で何度か教師と出会しそうになったが、どうにかやり過ごして観察

室へと辿り着く。

「さて、中はどうなってるか・・・」

観察室のドアを少しだけ開いて、隙間から中を覗き込もうとした刹那、

「「「「「「っ！！？？」」」」」」

星が散った。何者かに思いっ切り頭を殴られ、痛みの余り床の上をのたうち回る一同。少しだけ痛みが引いてきたので視線を上げてみると、そこには冗談抜きで怒っている千冬の姿。

「・・・教室で待機を命じてた筈だぞ、問題児共・・・」

「で、でもち・・・織斑先生。まだ太陽が戻ってきてないんです」

「夕暮が・・・そう言うことか。お前等も入れ。どうせ戻れと言ったって素直には戻るまい」

千冬に促され、一夏達は観察室へと足を踏み入れる。観察室内では山田先生、その他数人の教師が迅速と呼べる動きを見せていた。

「教師部隊の展開は！？」

「もう少し掛かります！」

「急がせろ！！　これは訓練でも何でもない、実戦だ！　敵は待ってくれないぞ！！」

「織斑先生！　敵の映像、出せます！」

「出してくれ！」

千冬の指示に従って山田先生がコンソールを叩くと、観察室のメインディスプレイに鉛色の空が映し出される。

「？　何もいないじゃない」

鈴音の言うとおり、メインディスプレイは鉛色の空を映し出しているだけで、それ以外は何も映していない。

「・・・いや、違う」

箒が呟いた瞬間、分厚い雲の中から何かが現れた。それはクラス対抗戦で乱入してきた無人ＩＳにどこか似ていた。そして、雲の中から現れたのはそれだけでは無かった。

「「「・・・・・・」」」

観察室にいる者全員が絶句する程の無人ＩＳが雲の中から吐き出されている。無人ＩＳは雲の中から溢れ出し、ついにはディスプレイに収まりきらないほどになった。

「・・・展開、急がせろ！　私も向かう！！」

いち早く正気に戻った千冬が叫ぶのとほぼ同時、レーダーに反応が現れる。

「お、織斑先生！　学園内からＩＳ一機がアンノウンに向かって行

きました！！」

「何！？　誰だ先走った行動をするバカは！？」

その答えはすぐに分かった。空を覆い尽くした無人ＩＳ千機の前に立ちはだかったそのＩＳ。漆黒の装甲を纏いしその影は、誰もが良く知る人物だ。

「太陽・・・」

「やはり夕暮か・・・」

ディスプレイの中で、バルディッシュトワイライトの装甲がゆっくりとスライド展開されていく。展開装甲部分から放たれている粒子は通常の紅い物ではなく、夜明がオッツタルヴァとクルーゼに墜とされた時に見せた漆黒。

『Ｍｏｄｅ（モード）　Ｔｒａｎｓａｍ（トランザム）　Ｓｔａｎｄｂｙ　ＯＫ．　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？』

漆黒の粒子を空中に撒き散らしながら、太陽は背部ユニットを分離させてそれぞれの武器に装備させる。ゆっくりと目を閉じ、突進の体勢を取った。

『私は、お前達を・・・破壊する』

刹那、太陽は漆黒の閃光となって無人ＩＳへと突っ込んでいった。

「・・・・・・・・・・」

月光組本邸中庭。白い砂利が敷き詰められたそこに、鉛色の空を見上げている人影が一つ。記憶を失った少年、月光夜明は一時間前から、こうして空を見上げていた。偶然か、それとも必然なのか、彼が向いている方向にはＩＳ学園がある。

「どうなさいましたの？」

空を見上げていると声をかけられ、夜明はゆっくりと振り返った。そこには彼の義兄義姉三人の姿があった。数秒ほど三人に視線を向

け、夜明は空へと目線を戻す。

「・・・胸が、ざわざわするんです・・・皆が・・・仲間が危ない」

拳を握り締め、夜明は決意を湛えた目で空を見上げ続けた。

「行かなくちゃ」

「それは・・・自ら闘いへ身を投じると言うことですか？」

夜桜の問いに夜明は黙り込む。闘い。理屈もクソもない、勝者だけが正義になる。そう言ったコンセプトの物に身を投じると考えると、背筋に怖気が走った。震えそうになる身体を叱咤し、夜明は夜桜の目を真っ直ぐに見据えて頷く。

「友人との記憶もないのに、闘える力も無いのに、それでも行くのですか？」

「はい。確かに、僕には皆の記憶もないし、闘えるだけの力も無い・・・でも、それは何もせずにここにいていい免罪符にはなりませんよね？」

それに、それだけじゃ無いんです、と夜明は自身の胸に手を当てた。

「僕が記憶を失った所為で、何人も泣かせてしまったんです。彼女たちの泣いてる顔を思い出すと・・・胸が凄く痛くて・・・それに、胸の真ん中に穴が開いたような感じもするんです」

「自分に取って、核たる何かを無くしたと言うことか？」

銀河に頷いて見せ、夜明は拳をもう一度握り締める。

「僕には貫きたい何かがあった」

ー絶対にだ・・・な・・・んねんー

「僕には背きたくない何かがあった」

ー視界に・・・ったひ・・・かいー

「僕には護りたい何かがあった」

ー自分と・・・ひとた・・・もるー

「それは僕にとって、凄く大切な事なんです。僕が月光夜明であるために。僕はそれを全部破ってしまったんです」

大切な人達を泣かせてしまった。誰も救えない。誰一人として護れない。

「僕が月光夜明であるために、闘わなきゃいけないんです」

「・・・闘えるのか？」

夜雲の問いに俯きながらも、夜明は一回だけ頷いた。

「確かに、少しでも闘うと考えると、何もかもを捨てて逃げ出したくなるほど怖くなります・・・でも、それ以上に仲間を護りたいんです」

それが、月光夜明なのだから。心の中で呟くと、胸元から微かな脈動が伝わってきた。全員が夜明の胸元に視線を向けると、レイジングウィングの待機状態である蒼いネックレスが淡い光を放ちながら、鼓動を打っているのが分かる。戸惑いながら、それでも確信めいた表情を浮かべながら夜明はネックレスを握り締めた。身体中に電流が駆け抜けるような感覚を感じ、思わず目を閉じる。

「・・・っ！？」

感覚が収まったのでゆっくり目を開くと、世界が変わっていた。何もない真っ白な世界。どこまでも広がっている、果てがないのではと思えるほどに広い空間。

「また会ったな」

声が聞こえた。戸惑いながら振り返ると、蒼い脈動を放っている、二対の白い翼を広げた女性が立っていた。

「・・・」

オールデリート・ハーケンで無人ＩＳを数体纏めて薙ぎ払う。

「・・・」

ライオンハート・ザンバーで無人ＩＳを数体纏めて撃ち抜く。太陽はこの作業を無言で、そして延々と繰り返していた。目の前の無人ＩＳが放ったビームを紙一重でかわし、グリフォンを展開させた右足で切り刻む。

（・・・何故、そこまで頑張る？）

ー決まっている、仲間を護るためだー

（・・・何故、仲間を護ろうとする？）

ー私にとって大切な人達だからだー

（・・・それは本心か？）

ー・・・何が言いたい？ー

（お前は本当に大切だと思っているのか？　彼等が夜明の友人だからではないのか？）

ーそんなことは無い。私は私の意志で彼等を護ろうとしているんだー

（夜明のいない世界で何故頑張る？　夜明のいない世界に意味があるのか？）

ー意味ならある・・・はずだー

（お前が夕暮太陽（おまえ）である理由（よあけ）はもういないんだぞ）

ー・・・黙れー

（もう一度聞く。夜明のいない世界で何故がんば）

ー黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！！　お願いだから黙ってくれ！！！！ー

頭の中で響く声を無理矢理締め出し、太陽は必死で無人ＩＳを破壊していった。頭の中に響く声を振り払うように敵を斬り、撃ち抜く。だが、彼女の周りは無人ＩＳで埋め尽くされたままだった。

「・・・あなたは誰？」

何もない真っ白な世界で、二対の翼を生やした女性と対峙した夜明は訊ねた。

「不屈（わたし）の翼は月光夜明（おまえ）」

「・・・なら、僕は誰？」

「月光夜明（おまえ）は不屈（わたし）の翼」

「・・・あなたが僕であるのなら教えて欲しい。僕はどうすればいいんだ？」

女性、不屈の翼はゆっくりと夜明に歩み寄り、頬をそっと撫でた。

「お前はどうしたいんだ？」

「僕は・・・仲間を護りたい。でも、その為の力を持っていない・・・どうすればいい？」

夜明の問いには答えずに不屈の翼は夜明の頬から手を離し、腕を一振りする。すると真っ白だった世界に色が溢れていき、ある光景を創り出した。その光景は、かつて夜明が巻き込まれた内紛で、彼を世話してくれた人達が死んでいく物だった。

「っ！？」

「この光景を見たお前に問う。お前は何のために信念を貫く剣を欲した？」

「・・・絶対に誰も泣かせたくなかったから」

「何のために誓いに背かない力を欲した？」

「・・・視界に映った人、全てを救いたいから」

「何のために世界を護る翼を欲した？」

「・・・自分と一緒にいる人達を護りたいから」

「問う。記憶を失っても、その気持ちに変わりはないか？」

ゆっくりと首を振りながら、夜明は俯けていた顔を持ち上げて不屈

の翼を真っ直ぐに見据える。

「・・・その答えには答えられない。記憶を失った僕は以前の月光夜明じゃないから、以前の月光夜明の気持ちは分からない・・・でも、確かなことが一つだけ在る」

ー僕は・・・俺は、何時だって、どんな時だって、誰かのために強くあろうと、誰かのために強さを使えるようになろうと願っていたんだー

この時、夜明の中で何かが噛み合った。今の今まで何の反応を示さなかった体内の歯車が、今までに無い程の速さで回転を開始する。表情が変わった夜明を満足そうに見ながら、不屈の翼は再度彼に尋ねた。

「もう一度問う。その気持ちに変わりは無いか？」

「答えるまでもねぇ・・・行くぞ相棒！！」

「あぁ、お前のために私は翼を広げよう！！」

白い空間に罅が走り、粉々に砕け散った。不屈の翼が消え、夜明の目の前には夜雲達が立っている。夜明はネックレスを握り締めていた手を離し、ニッと口元に笑顔を浮かべた。

「夜雲兄貴、夜桜姉さん、銀河兄貴、ちょっくら行ってくる」

「あぁ、行ってこい！」

「気を付けてくださいね」

「お前が為すべき事を為せ」

三人の激励に片手を上げて応え、夜明はＩＳ学園の方に身体を向ける。胸元のネックレスはこれ以上無い程に輝きを増し、夜空に輝く星のように光り輝いていた。

「俺には貫きたい信念がある」

絶対に誰も泣かせない信念。

「俺には背きたくない誓いがある」

視界に映った人、全てを救う誓い。

「俺には護りたい世界がある」

自分と一緒にいる人達がいる世界を護る。

「そいつ等が在る限り、俺は、俺の魂（つばさ）は・・・不屈だ！！！！！！」

「・・・後、何機残っているんだ？」

肩を大きく上下させながら、太陽は周囲に視線を走らせる。既に装甲はボロボロで、スライド展開されていた展開装甲も漆黒の粒子を放つのを止め、閉じてしまっていた。残っている無人ＩＳは三機。太陽は動かなくなっていた四肢を無理矢理動かし、突っ込んできた無人ＩＳを迎え撃った。

（夜明はもういない）

一機目の首を斬り飛ばす。

（夜明はもう・・・）

二機目の身体を撃ち抜く。

（私の側にいない）

三機目の攻撃を捌き、オールデリート・ハーケンとライオンハート・ザンバーの刀身で身体を挟み斬る。太陽に墜とされた無人ＩＳは紫電を放ちながら爆散し、既に太陽に墜とされて、地上に瓦礫の山となって積み上がっていた無人ＩＳの残骸に加わる。

「・・・うっ、ぐしっ、ひぐっ」

誰もが信じられない、と言う表情を浮かべてその光景を見ていた。

たった一人、たった一人の少女が千機もの無人ＩＳを全て墜としたのだ。観察室でバカみたいに口を開いていると、警報が観察室内に鳴り響く。正気に戻った山田先生がレーダーを確認し、表情を青ざめさせた。

「織斑先生！！　謎の反応が五・・・いや、六、迫ってきてます！　五機は今までにない大型、もう一つは・・・有り得ない速度で向かってきます！！」

「まだ来るか・・・！夕暮！　今のは聞こえていたな、一旦戻ってこい！！」

『・・・もう、どうでもいい』

「何！？」

返ってきたのは涙混じりの声。

『夜明のいない世界なんて、どうでもいい・・・』

「夕暮！　気を確かに持て！！　夕暮、夕暮ぇぇぇぇ！！！！」

千冬の叫び虚しく、太陽の前に五機の大型ＩＳが現れた・・・。

「・・・会いたい」

眼前に迫ってくる五機の大型ＩＳを無関心に見ながら、太陽は呟く。視界が涙で歪み、食いしばった歯の隙間から嗚咽が溢れる。

ーもし、願いが一つだけ叶うなら、会いたい。唯ひたすらあなたにー

「会いたいよぉ、夜明ぇ・・・」

先頭にいるＩＳ、デストロイの胸部が輝き始めた。バルディッシュトワイライトが警告を送ってくるが、太陽はそれを無視して動かずにいる。デストロイの胸から三つの閃光が放たれた。迫る閃光。太陽は涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら俯くだけ。バルディッシュトワイライトのシールドエネルギーは一桁にまで減っていたので、誰もが最悪の光景を想像した。そして、三つの閃光は太陽に直撃した。

筈だった。

（あ・・・れ？）

閉じた視界の中で光が爆発した以外、何も感じなかった太陽は恐る恐る瞼を持ち上げた。そして確かに見た。

「・・・あ・・・あぁ」

目の前に広がる、不屈の名を冠した二対の翼を。

「待たせたな」

「待たせたな」（後書き）

色々と納得できないでしょうが、これが作者の限界です。

蘇る翼。冠する名は不屈

「よ、あ・・・け？」

「あぁ、月光夜明だ」

掠れた声で太陽が問いかけると、夜明は口元に微かな笑みを浮かべながら振り返った。口を軽く開き、目尻にうっすらと涙を浮かべている太陽の頭を片腕で引き寄せる。

「悪い、心配かけた」

「・・・お前が無事なら、それで良い」

抵抗せずに太陽は夜明に抱き寄せられ、夜明の肩に顔を埋めて泣き始めた。無言で夜明が小さく肩を震わせ、声を押し殺して泣く太陽の頭を撫でていると、再びデストロイの胸部が光り始める。

ー警告！　敵ＩＳから熱源反応を確認！ー

レイジングウィングから報される警告にため息を吐きつつ、夜明は太陽を抱き寄せる力を強くした。

「このタイミングで攻撃を仕掛けてくるか・・・もう少し空気読め・・・って機械じゃ無理か」

一人で納得して頷いていると、デストロイの胸部から高威力の閃光が三つ放たれる。迫り来る閃光に一切の物怖じを見せず、夜明は唯一言叫ぶ。

「レイジングウィング！！」

刹那、オーロラの様に輝く一対の翼が二人を包んだ。

「あれは・・・」

「見間違う訳、無いわね」

「記憶、戻ったんだね・・・」

「夜明だ・・・夜明だ!!」

狂喜乱舞して抱き合うセシリア、鈴音、シャル、ラウラを微笑しながら見ている箒の横では、苦笑いを浮かべた一夏がディスプレイに映った夜明を見ている。箒が最愛の人の横顔を窺うと、その表情にはありありと『予想通り』の言葉が浮かんでいた。

「やっと戻ってきたか、馬鹿野郎」

「・・・・・・・・・」

喜ぶ生徒達と違って戸惑いの表情を浮かべ、絶句する千冬は携帯を取り出してある人物の番号をコールする。数回、呼び出し音が鳴り、目的の人物の声が聞こえてきた。

『もっしもーし！　ちーちゃん？　用件は分かってるよ、私も見てるから』

「・・・そうか、なら話は早い。あれは何だ？」

千冬の問いには答えず、ちょっと待っててと束は口を閉ざした。カタカタとキーボードを叩く音が数秒聞こえ、束のため息が聞こえてくる。

『ほっほう、これはこれは・・・有り得ない、いや、でも・・・』

「一人で納得してないで教えてくれ、あれは何だ？」

電話の向こうで勝手に納得している束に苛立ちつつ、千冬は極力声音に怒気を含めないようにしながら質問を繰り返した。

『あっはっは、ごめんごめん・・・あれはよっくんの精神の固まりだよ』

千冬と束が言うあれ。それは、レイジングウィングの象徴とも言える二対の推進翼（スラスター）の間から溢れ出している、オーロラの様に輝いている、光り輝く蒼銀の翼だ。その光の翼は大きく広がり、二人目掛けてデストロイが放ったビームを防いでいる。

「精神の、固まり？」

『正確に言うと、精神力だね。映像しか見てないから仮定の域を出ないけど、よっくんの精神力をレイジングウィングが大幅に増幅させて、推進翼（スラスター）の間から放っているんだと思う。序でに言っておくと、あの翼は本来機動用で、防御用では無いよ』

「精神力を増幅させ、尚かつ機動力として使用するだと・・・そんな事が出来るのか？」

『今までのＩＳなら出来ないだろうね。でも、レイジングウィングは現にそんな無茶苦茶な芸当をこなしている。つまり、この事柄が示すことは一つ、レイジングウィングが進化したんだよ』

「進化？」

『そ。第四世代型、つまり「パッケージ換装を必要としない万能機」から第五世代型・・・「搭乗者の想いに応える異端機」に』

「そんな事が起こるのか？」

『さぁ？　でも、私から言える確かな事は一つだけ。人間って言う生き物は奇跡を起こせるって事だけだよ・・・あぁ、言い忘れてたけど、あの光の翼・・・月光の翼（ムーンライトウィング）とでも名付けようか、月光の翼（ムーンライトウィング）がレイジングウィングの機動力の全てを担っているから、本来レイジングウィングの機動に回されていたエネルギーが全て武装の方に回された・・・束さんが言いたい事、分かるよね？』

即ち、レイジングウィングは既存のＩＳを遙かに凌駕する機動力、そして攻撃力を得たと言うことになる。束の言った事を証明するかの如く、ディスプレイの中で夜明は一撃でデストロイを破壊した。

「・・・おいおい、これは威力強すぎだろ。半分くらいの出力で撃っただけなのに」

発射態勢に移行していたスタードライブを収納しながら夜明は胸部を荷電粒子砲で撃ち抜かれ、煙を噴き出しながら墜ちていくデストロイを見ながら思わず呟いた。夜明がスタードライブを発射態勢に移行したのを見て、自分の前にビームシールドを展開したデストロイだったが、スタードライブから放たれた荷電粒子砲は容易にデストロイが展開したビームシールドを破り、デストロイの胸部を撃ち抜いたのだ。余りの威力の上昇に、流石の夜明も冷や汗を禁じ得ない。

「・・・ってか、スタードライブ以外の武装も威力上がりすぎだろ。やっぱ、こいつが原因か？」

ブツブツと呟きながら、夜明は背中の二対の推進翼（スラスター）の間から溢れ出している蒼銀の翼、月光の翼（ムーンライトウィング）を見やる。

『不屈の翼（レイジングウィング）　月明りの福音（ムーンライトエヴァンジェル）』

それが夜明が得た新たな力だ。これは本来、レイジングウィングの機動に使われていたエネルギーの替わりに、レイジングウィングが夜明の精神力を増幅させて機動に使っているのだ。結果、夜明の精神力は蒼銀に輝く光の翼と言う形で推進翼（スラスター）の間から溢れ出し、機動に回されていたエネルギーが全て武装に回されたことになる。

（それ以上に驚きなのが、この翼を展開してる方が普通の時よりも速いって所だよな・・・まぁいい）

今、大切なことは目の前の敵を撃破すること。夜明は自分に言い聞かせ、月光の翼（ムーンライトウィング）を更に広げて残っている四機の巨大ＩＳに突っ込んでいく。デストロイに続いていたサイコガンダムＭＫー?は全身にある二十基のメガ粒子砲を放ち、リフレクタービットで反射させて、全てのビームを夜明に向けて放った。

「これは・・・余裕だな」

月光の翼（ムーンライトウィング）を羽ばたかせ、横に動くだけで全てのビームをかわした。瞬間加速（イグニッション・ブースト）をした訳でもないのに、空間にコマ送りのような蒼い残像が残る。サイコガンダムＭＫー?が夜明の動きを追おうと身体を捻った瞬間、全てのリフレクタービットが撃ち抜かれ、サイコガンダムＭＫー?自身も、真後ろから突っ込んできた夜明が握っていたスターライザーで胸部を貫かれた。

「そんじゃ、さよなら」

スターライザーをサイコガンダムＭＫー?から引き抜きながらもう片方のスターライザーを構え、夜明は後ろからサイコガンダムＭＫー?をバラバラに切り裂く。細切れになったサイコガンダムＭＫー?の破片にスタードライブの砲門を向け、荷電粒子砲で跡形も無く消し飛ばした。

「次は・・・二体同時か！！」

α・アジール、クィン・マンサが放った独立機動武装、ファンネル三十九個からの射撃を小刻みに動きながらかわす。三十九個ものフ

ァンネルから放たれる閃光は最早弾幕と言っても過言ではないが、夜明は全ての射撃を苦も無く回避し続けている。ファンネルが射撃と射撃の間に生み出しているタイムラグの間にウィングスターを引き抜き、全てのファンネルを数秒と掛からずに撃ち落とした。

「試しに瞬間加速（イグニッション・ブースト）でも使ってみるか」

全てのファンネルを撃ち落とされ、メガ粒子砲を乱射する二機に身体を向けつつ、夜明は瞬間加速（イグニッション・ブースト）の為に月光の翼（ムーンライトウィング）を集束させる。月光の翼（トゥィング）が縮んだ次の瞬間、夜明の姿が消えて、残像さえ残さずに二機の間を通り抜けた。夜明が二機の間を通り抜けた事を示す蒼い残光が消える前に、夜明はディバイン・カノンを展開させる。ディバイン・カノンから放たれた小口径弾は二機の装甲を貫通し、コアを破壊した。

「次で最後！！」

墜ちるα・アジールとクィン・マンサに目も呉れず、夜明は最後の一機、ノイエ・ジールと対峙した。有線クローアームからビームサーベルを伸し、何十発のミサイルを放ちながら肉薄してくるノイエ・ジール。スタードライブで全てのミサイルを破壊し、夜明はスターライザーで有線クローアームから伸びるビームサーベルを防ぐ。激しく火花を散らせながら鍔迫り合いを演じる中、ノイエ・ジールは四本のサブアームを夜明に伸す。が、四本ともディバイン・カノンから放たれた小口径弾で破壊された。

「決めさせて貰う・・・」

ノイエ・ジールを押し返しながら、夜明はスターライト・ブレイザーのロックを外す。数秒とかからずにエネルギー供給が終わり、夜

明の腹部から目が眩むほどの輝きが溢れ始めた。

「スターライト・ブレイザー・・・！」

放たれた蒼いプラズマの柱。それはノイエ・ジールを完全に飲み込むほど巨大で、そして跡形もなく消し飛ばす程の威力だった。跡形もなくなったノイエ・ジールに視線を送り、夜明は身体を反転させて太陽が待っている方へと向かった。

地上に降り立った夜明。レイジングウィングの装甲を解除して、目の前に立っている太陽を見る。

「随分と遅い起床だな」

「ちぃとばっかし寝惚けててな」

泣き腫らした目をしている太陽。だが今は、その泣き腫らした目に言い表す術の無いほどの喜びを湛えている。からかい気味の太陽の口調に照れたような、恥ずかしいような笑顔を浮かべながら、夜明は頭を掻いた。

「・・・っく、くくく」

「・・・っは、ははは」

呼吸を合わせたように、タイミングを見計らったように二人は笑い出した。口元に浮かべた笑みをそのままに、二人は握り拳を作る。

「お帰り！」

「ただいま！」

拳をぶつける二人に、駆け寄ってくる幾つもの人影。笑顔を浮かべながら、夜明は彼女たちに手を振るのだった。

「・・・どうやら、我々は彼が冠する『不屈』の意味を誤解していたようだ」

「フン、らしいな・・・」

仲間に囲まれて笑顔を浮かべている夜明が映っている画面を見つつ、クルーゼとオッツタルヴァにメルツェルとヴァオーは同意の意を示す。

「何があっても折れないのでは無く、何があっても幾度と無く蘇る、故に『不屈』・・・こういうのも難だが、男として憧れを禁じ得ないな」

「女である俺にとっては、凄い以外の感想が浮かんでこないがな・・・メルツェル、帰還の準備をしておけ」

「何故？　我々が同時に掛かれば、幾ら新たな力を得た『不屈の翼』とて、倒せぬ相手では無いだろう」

クルーゼにオッツタルヴァ、更に加わったメルツェルにヴァオーが同時に掛かれば、確かに夜明を倒せるかもしれない。だが、それでもオッツタルヴァの指示は変わらなかった。

「本当にそう思うのか？　新たな力を得た不屈の、それに『深紅（スカーレット）の死神（デスサイズ）』の異名を持つ夕暮太陽。未来の英雄となる織斑一夏達、そして『白い閃光（ホワイト・グリント）』の祖先、織斑千冬がいるのだぞ。これらを同時に相手して、お前はまだ勝てると言うのか？」

「・・・無理、だろうな。了解した、帰還の準備を始める。ヴァオー、付いてきてくれ」

「了解だ」

歩き去っていくメルツェルとヴァオーの後ろ姿を見送り、オッツタルヴァは再び映像に視線を向ける。

「・・・再び貴様と闘えることを楽しみにしてるぞ、不屈の」

蘇る翼。冠する名は不屈（後書き）

蒼銀という色は、蒼っぽい銀色を想像してください・・・微妙かな？

強化パッケージ一覧、二百万ＰＶ突破予告

ども、こんばんわ、サザンクロスでっす。皆様、読者の声援あって、漸く未来編の入り口へと立つことが出来ました。正直な話、この未来編は完全にノリで考えた物なので、丸投げして放棄したいです・・・ですが、楽しみにしていただいている読者の方達もいるので、どうにか頑張らせていただきます。

さて、前置きはさてとして、今回は主人公勢の強化パッケージについてです。それではまず、夜明のパッケージから。

夜明「月光夜明だ。こっから先は俺が進行役を務めるぜ。先ずは俺の強化パッケージだ」

『レイジングウィング』用殲滅戦用強化パッケージ『ミーティア』

機体説明

ガンダムＳＥＥＤに出てくるミーティア、それ以外に言うことは何もない。

夜明「続きまして、太陽の強化パッケージだ」

『バルディッシュトワイライト』用近距離特化パッケージ『？？ソード』

機体説明
バルディッシュトワイライトの基本装備である背部ユニットとオールデリート、ライオンハートを外し、完全なる近距離用装備になった。

武装
超高出力大型ビームブレード『アロンダイト』×2
両手に装備されるビームブレード。普段は肩にマウントされる。

ソードビット?×2
両腕に装備された自立型兵器。

ソードビット?×3
両腰、腰の後ろに装備された自立型兵器。

ソードビット?×2
両膝に装備された自立型兵器。

ソードビット?×4
両足の爪先と踵に装備された自立型兵器。装備したまま攻撃することも可能。

夜明「全部のソードビットを合体させたアロンダイトに装備させることで、似非約束された勝利の剣(エクスカリバー)が再現できる。次は一夏のだ」

『白式』用超高機動パッケージ『白き閃光（ホワイト・グリント）』

機体説明

大型ウィングスラスターの推力を上昇させ、更に両肩、両腰に大型スラスターを装備させてレイジングウィングに匹敵、或いは凌駕する機動力を得た。燃費が凄いことになっているが、各スラスターにエネルギーパックを挿入することでエネルギー切れを無くした。

武装

近接特化ブレード『雪片零型』

雪片弐型と性能は全く変わらないが、零落白夜に使用するエネルギーをシールドエネルギーではなく、エネルギーパックから使用することが出来る。一個のエネルギーパックで零落白夜が発動できる時間は六十秒。最大五個までを雪片零型に入れることが出来るので、最長で三百秒零落白夜を発動することが出来る。

夜明「エネルギーパック五個を同時に使用することで、バカみたいに刀身を収束させたり、数百メートルにまで伸すことが出来るぞ。クレバス様の意見を参考にさせて貰った。次に箒だ」

『紅椿』専用万能型パッケージ『百花繚乱』

機体説明

近接戦闘、中距離戦闘、遠距離戦闘、防御、全ての局面において安定した性能を持っている。

武装

射撃防御用マント『桜花繚乱乃羽衣（おうかりょうらんのはごろも）』

耐ビームコーティング、耐実弾防御が施されている、桜吹雪の模様が入ったマント。近接攻撃以外の攻撃を全て防げる外套。また、箒の想いに呼応して防御範囲を広げる。

エネルギー刃型ブレイドビット『紅揚羽』×6

『桜花繚乱乃羽衣（おうかりょうらんのはごろも）』の中に収納された自立型兵器。

中距離拡散ビーム砲『紅蓮』×2

両肩に装備されたエネルギー砲。脇の下から砲門を突き出す形で射撃する。

夜明「『桜花繚乱乃羽衣（おうかりょうらんのはごろも）』はその気になればこの世に存在している全ての武器を同時にぶち込まれても耐えうる装備だ。参考にさせて貰ったのはクレバス様と　ＨＡＬ－ＨＡＬ様だ。次はセシリーのだ」

『ブルー・ティアーズ』専用超遠距離射撃用パッケージ『スターシューター』

機体説明

超遠距離射撃、及び狙撃に特化した装備。狙撃専用の装備となっているので、機動力は皆無に等しい。

武装

超遠距離射撃ビームライフル『メテオデストロイヤー』

百キロ先の標的を打ち抜ける遠大なビームライフル。射撃する度にエネルギーパックを交換しなくてはいけないので連射には向かないが、掠めただけでもＩＳを行動不能にすることが出来るだけの威力を有している。

エネルギー反射自立型兵器『リフレクタービット』×１０
メテオデストロイヤーの射撃のみを反射する自立型兵器。これを用いた跳弾で、障害物に隠れた敵も撃ち抜くことが出来る。

夜明「完全な狙撃仕様だな。次に鈴音のパッケージだ」

『甲龍』用近接戦闘強化パッケージ『龍牙』
機体説明
甲龍用の近接戦闘強化パッケージ。
近接戦闘強化と銘打ってあるが、射撃能力も大幅に強化されている。

武装
伸縮型多目的ストライククロー『龍牙』×４
衝撃砲の代わりに両肩、背部に装備されるストライククロー。
イメージはシェンロンガンダムのドラゴンハング。
伸縮自在なので中距離も対応でき、さらに先端には強化型衝撃砲、『崩龍』を内蔵し、射撃力&ａｍｐ;空間制圧力も向上している。

強化型青竜刀『嵐』×２
連結して双頭型にする事もできる青竜刀。
衝撃砲の技術を応用し、振った瞬間風の刃を飛ばす事ができる。
飛距離はあまり長くはないが、相手にリーチを錯覚させる事ができ

る。

夜明「これはＨＡＬ－ＨＡＬ様の意見を丸々使わせて貰った。次はシャルだ」

『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』専用防御用パッケージ『ガーデン・ガーディアン』

機体説明

『ガーデン・カーテン』のシールドを二枚から六枚に増やした。その内の四枚に高出力レーザーが内蔵されている。また、背中には非固定浮遊部位（ファンロックユニット）の大型スラスターが装備され、そこに四本の隠し腕がある。スラスターも倍増したので、機動力も上がっている。

武装

六十九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻（グレー・スケール）』×６

両腕、隠し腕に装備されたパイルバンカー。威力と連射速度が強化されている。

大口径レーザーカノン『ディザスター』×４

シールドの内側に装備されているレーザーカノン。盾の内側に装備されているので、盾を構えたままでは発射することが出来ない。

夜明「これはオーキス様の意見を参考にさせたいただいた。また、このパッケージはアンロックユニットが変形することによって、超高速機動形態にも変化する。最後はラウラだ」

『シュヴァルツェア・レーゲン』専用近距離高機動パッケージ『リヒト・エイン・フリューゲル』

機体説明

両肩に装備していた大型カノンを両腰へと移動させ、背中に翼状の一対の大型スラスターを装備させて機動力を大幅に上昇させた。大型スラスターの先端にワイヤーブレードが装備されている。

武装

複合武装型旋棍『ゼーレクロイツ』×2

プラズマ刃と連射の利くビームガンを装備させたトンファー型の武装。両袖に常に装備されている。

夜明「ラウラの武装は近接に特化しているな。次は未来編に登場するキャラの紹介と専用ＩＳの詳細だ」

キャラクター名、大空流星（おおぞらりゅうせい）

身長、１７３，７？

体重、６６，９？

性別、男

趣味、機械弄り、花の世話

好きな

物、花
人、家族
食べ物、果物類
嫌いな
物、兵器
人、戦争をする人
食べ物、トマト
容姿、種死のシン・アスカ
性格、明るくて人懐っこい。誰とでもすぐに友人になることが出来る。
生い立ち
月光夜明の子孫。伝説を越え、神話とまで言われた曾祖父の夜明に深い尊敬の念を抱いているが、それと同時に大きな劣等感も抱いている。ラインアーク所属のリンクス（ＩＳの搭乗者）で、トワイライトウィングの搭乗者。

専用ＩＳ、『黄昏の翼（トワイライトウィング）』
世代、第五世代

待機状態、紅い剣の鍔に蒼い翼が生えたネックレス

詳細、レイジングウィングとバルディッシュトワイライトを基盤として作られたＩＳ。通常状態は普通のＩＳと何ら変わりのない性能だが、ＩＳ－Ｄシステムを発動することによって全ての性能が跳ね上がる。また、第二移行（セカンド・シフト）をすることによって、常にＩＳ－Ｄシステ

ムを発動することが出来る。が、未だに第一移行（ファースト・シフト）しか終わっていない。

外見、装甲が白い。背中に一対の小型ウィングスラスターが装備されている。パッと見は冴えないが、ＩＳ－Ｄシステムを発動することによってその外見は大きく変化する。

通常時武装

・ビームマグナム
高威力のビームマグナム。最大で六発まで連射が可能。

・ビームサーベル
これと言った説明は無し。

・シールド
以下同文。

ＩＳ－Ｄシステム発動時

外見、装甲の関節部分がスライド展開し、黒く輝き出す。それと同時に漆黒の粒子を放ち、背中の小型ウィングスラスターが大型ウィングスラスターに変わる。ぶっちゃけ、ディスティニー。右の大型ウィングスラスターは紅く、左の大型ウィングスラスターは蒼い。

武装

・ビームマグナム

・広域ビームシールド

・大型対艦刀『バルディッシュ』
右の大型ウィングスラスターにマウントされている大型ビームブレード。マウント時は二つ折りになっている。

・長距離高エネルギービーム砲『レイジングハート』
左の大型ウィングスラスターにマウントされている大型ビーム砲。バルディッシュ同様、マウント時は二つ折りになっている。

・掌部ビーム砲＞パルマ・フィオキーナ＜
左右の掌底部に内蔵された青白い光を放つ小型ビーム砲。砲と言うよりは、むしろ開放型のビームジェネレーターに近いデバイスで。密着状態の敵機を砲撃する等、主にゼロ距離戦闘時にその真価を発揮する。ビームサーベルとしての運用も可能。

ワンオフアビリティー

名称、運命の翼（ディスティニーウィング）

詳細、ＩＳ－Ｄシステム発動時に使用可能。背中の大型ウィングスラスターから精神力を具現化させたエネルギーを放出して超高速移動を可能とする。その時に副次効果として残像が生まれる。レイジングウィングの月光の翼（ムーンライトウィング）と同じ。

夜明「最後に、ＰＶ二百万突破記念に特別コラム～鉄刃人生相談～をやるぞ。相談に乗ってくれるのはこの人」

千冬「私の答えられる範囲内で答えよう」

夜明「司会進行は俺と太陽だ。何か悩みのある奴は、相談に来てくれ。じゃあな」

二百万ＰＶ突破記念コラム、未来編の大雑把な設定

夜明「さぁ！　と言うわけで始まりました～鉄刃人生相談～！　司会進行はこの俺、月光夜明と」

太陽「私、夕暮太陽がお送りする。そして質問に答えてくれるのがこの方」

千冬「織斑千冬、もとい鉄刃だ。誠心誠意、皆の質問に答えよう」

夜明「この三人で進めていきま～す。と言う訳で姐さん、改め鉄刃先生、よろしくお願いします」

千冬「あぁ、よろしく頼む」

太陽「それでは、早速最初の相談に行ってみよう。ＩＳ～インフィニット・ストラトス～破戒の錬鉄者より、Ｈ雪Ｒ我さんからです」

『鉄刃先生、俺の相談を聞いて欲しい。最近、知り合いの料理を昼頃に食べたら、気が付いたら夕方になっていたんだ。試しに原材料を聞いてみたら、何故かサンドイッチに水酸化ナトリウムが入っていたんだ。どう思う？』

千冬「・・・・・・・・・・（絶句）」

夜明「あぁ、初っ端からのぶっ飛んだ質問に鉄刃先生がフリーズしてる」

太陽「まぁ、致し方ないことだと思うがな・・・戻ってきてくださ

い」

千冬「・・・・・・・・・・っは！？　すまない、少し混乱していた。いきなり変な質問をして不快にさせてしまうかもしれないが、その知り合いと言うのは君に殺意でも抱いているのか？　そうでなければ、水酸化ナトリウム入りのサンドイッチを食べさせるとは思えないのだが・・・」

太陽「まぁ、抱いているのは殺意ではなく、好意だろうけどな」

夜明「空回りする好意ほど恐ろしい物は無いぜ・・・」

千冬「そ、そうか・・・取り敢ず、その知人に、一度自分が作った料理を味見させてみたらどうだ？　そうすれば、如何に自分が危険な料理を作っていたのかが分かると思うぞ」

夜明「まぁ、その程度であの金髪貴族が自重を覚えるかどうかは疑問の限りだが・・・次に行こう」

太陽「続きまして、ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞黒き牙と永遠の月より、Ｏ梨Ｋさんからです」

『夜明さん達に相談があって来ました。私、実力はそこそこあるんですが、メンタル面がレイジングウィングの防御力以下なんです』

夜明「そら酷すぎる」

千冬「少し黙っていろ」

『少し怖いんです。誰かといると、知らない内に傷つけてしまいそ

うで・・・本当に怖いんです。私には夜明さんみたいに信念がありません、太陽さんみたいに完璧ではありません。皆さんみたいに・・・強くないんです。側には誰かいてくれても、気付いたらずっと一人で。怖いんです、私が、私でなくなっていくようで・・・どうしたらいいか教えてください』

夜明「・・・ネタの企画で相談するには、ちと内容がヘビーだな」

太陽「色々な人が色々な悩みを抱えているのさ。それでは鉄刃先生、お願いします」

千冬「これは本気で応えなくてはな・・・そうだな。まず、自分を信じてみたらどうだ。そうしなければ、君自身が前に進めないぞ。誰かを傷つけてしまいそうになるのなら、その気持ちに呑まれるな、ねじ伏せろ。私から言えることはこれくらいだな。月光、夕暮、お前達からも何かアドバイスしてやれ」

夜明「俺たちがですか！？　・・・そうだな。あんたがあんたである理由を見つけてみたらどうだ？　そうすりゃ、自ずと信念なんてすぐに見つかる」

太陽「生きたくば何ものにも巻かれるな、己を信じろ。例え記憶のない己であってもな」

夜明「俺たち如きのアドバイスが助けになれば僥倖だ。それじゃ、最後の相談行くぞ」

太陽「ＩＳ～インフィニット・ストラトス～破戒の錬鉄者より、Ｓさんからです」

『ハロハ～ロ♪　最近暇で暇でしょうがないのよ。この前遊びでギリシャに喧嘩売りに行ったんだけど、ＩＳ全滅させちゃって・・・まともに肉弾戦が出来る相手がいないのよ』

千冬「・・・これは相談と呼べるのか？」

夜明「甚だ疑問です」

千冬「まぁいい・・・肉弾戦の相手がご所望なら、最高の相手がいるぞ。夕暮、行ってこい」

太陽「私がですか？　面倒くさいな・・・」

太陽、ＩＳ～インフィニット・ストラトス～破戒の錬鉄者の世界に転送。

夜明「・・・そっちの世界が崩壊しないことを祈ってるよ」

千冬「では、機会があればまた会おう！！」

夜明「さって、それじゃあ、未来編の大雑把な設定を説明するぜ。舞台は俺たちがいる時代から二百年後、西暦２２１０年。地球に残った企業連と、宇宙へと進出したラインアークとの戦争状態になっているんだ」

太陽「企業連とラインアークが戦争状態になった経緯は、凡そ五十年前の西暦２１６０年にまで遡る。人口が雪達磨式に増えていって、地球が食糧不足や住居不足に陥ったんだ。そこで、数年ほどに渡る協議の結果、人類の凡そ半数を抱えている民間企業『ラインアーク』が宇宙へと移住・・・まぁ、体よく追い出された訳だ。元々、人口の急増を危惧していたラインアークは宇宙進出を考えていたので、数年と掛からずに何十個物コロニーを作って宇宙へと出ていった訳だ」

夜明「地球に残った企業連と、宇宙に進出したラインアークは良好な関係を築いていたが、西暦２２００年に起こった事件で決定的な亀裂を作ったんだ」

太陽「それがこれだ」

『ユニウス１撃墜』
概要、ラインアーク最古のコロニー『ユニウス１』が隕石との衝突で機関部分が欠損してしまい、地球の企業連に救援を要請した。だが、企業連はこれを拒否、地球へと落下してきていた『ユニウス１』を破壊、結果、数億の人命が失われた。

『アルテリア・ウルナ襲撃』
概要、『ユニウス１撃墜』の翌日、ユニウス１を破壊した企業連への報復行為として、ラインアークの一部隊が企業連の傘下にある都市にエネルギーを供給している施設、アルテリア・ウルナを襲撃、そして破壊した。

夜明「この二つの事件が原因で、企業連とラインアークは戦争状態になったのです」

太陽「戦争が始まる際、ラインアークは企業連の主要都市の一つを奪い、そこを本拠地としている」

夜明「続いて、組織の説明だ」

企業連
ＧＡ、インテリオル・ユニオン、ＯＭＥＲ、ローゼンタールからなる統治機構。これ以外にも様々な企業があるが、主な物はこの四個。クルーゼは企業連の首長達の御意見番的立ち位置にいる。

ラインアーク
民間企業。『来る者は拒まず』の姿勢が災いして人数が人口の半分を占めるほどになり、これが原因で地球から宇宙へと進出することになった。現在の首長はギルバート・デュランダル。

ＯＲＣＡ旅団
クルーゼが個人的に雇っている傭兵部隊。元々、五人から始まった部隊だが、現在は少数ながら部隊と呼べるほどになった。実力は計り知れない。

太陽「次は準重要人物達の紹介だ。凡に、『リンクス』というのはＩＳ適正があり、尚かつ専用機を持っている人達を指す」

月光冬華
月光銀河と織斑千冬の子孫でラインアーク所属の元リンクス。『白閃光（ホワイト・グリント）』の搭乗者。女性。一年で企業連の企業、及び戦力を半分に減らすと言う伝説的活躍をしている。だが、スピリット・オブ・マザーウィルを撃破しに行った際、撃退された挙句にホワイト・グリントのコアを破壊されてしまった。それ以来は教導官として働いている。現在はアークエンジェルの艦長。

織斑朔夜
織斑一夏と篠ノ之箒の子孫。ＩＳ適正はあるが専用機はもっておらず、現在は流星専属のオペレーターをしている。

夜明「カラードやＯＲＣＡのリンクスは、一部を除いて全員女性だ。大体こんなもんか？　質問などがあったら送ってくれ」

未来からの来訪者（前書き）

とうとう始まっちまいました！　おつき合い下さい！！

未来からの来訪者

その日は・・・晴天だった。一年一組副担任、山田真耶は五時間目の授業に使うプリントをコピーするため職員室へと向かっていた。先日の『亡国機業』の襲撃、教え子である月光夜明の記憶喪失。色々と問題がありすぎたが、取り敢ず今、ＩＳ学園は平和である。

「願わくば、こんな平和な日々が続いて欲しいものです・・・」

しんみりと、だが万感の思いが込められた台詞。だが、この時彼女は知らなかった。この願いが儚くも砕け散ることを・・・。

ざぁ・・・

「あれ？」

と風が流れた。ピタリと山田先生の足が止まる。別段、風が流れるのは珍しいことではない。ここが窓の開いていない廊下でなければの話だが。頬を撫でていった風の感触に首を傾げつつ、山田先生は周囲を見回す。やはり、開いている窓はない。気の所為かとも思ったが、その可能性はすぐに無くなった。何故なら、現在進行形で風が彼女の横を通りすぎているのだから。

「一体何が？」

普段の彼女の態度から考えると、真っ昼間からの怪奇現象にもの凄くビビってそうだが、彼女も伊達にＩＳ学園教師、そして元代表候補生だった訳ではない。目線を鋭くしながら周囲を見回していた。心なし、眼鏡のレンズから放たれている光も鋭くなっている。風の

原因はすぐに見つかった。山田先生から数メートル前の所で、小さな球体が風を放ちながら大きくなっている。時折、紫電を放っているそれは徐々に大きくなっていく。

「・・・これは？」

警戒しながらゆっくりと近づいていくと、球体が爆発的に膨張した。反応する暇もなく、山田先生は飲み込まれる。だが、これと言った衝撃はない。

「あ・・・れ？」

間抜けな表情を浮かべながら、顔を護るように交差させていた両腕を下ろし、身体を確認する。これと言った異常は無い。だが異常は彼女にではなく、目の前にあった。一人のボロボロの服を着た少年が蹲るように座っていたのだ。

「だ、誰ですか！？　・・・って、月光君？」

警戒を露わにする山田先生だが、それもすぐに薄れた。目の前で蹲っている少年は見事な銀髪を持っているのだ。彼女の記憶の中では、そんな奇天烈な色の髪を持った人物は夜明以外いない。だが、すぐにその少年が夜明でないことが分かった。夜明は腰まである銀髪を項で束ねているが、その少年はそこまで髪が長くないのだ。それに、来ている服もＩＳ学園の制服ではなく、よく分からないボロボロの服。山田先生が月光の名を口にした瞬間、その少年は凄い勢いで顔を上げた。

「おいあんた！　今月光って言ったか！？」

「は、はい！　言いました！！」

いきなり大声で訊ねられ、山田先生は反射で即答する。すると少年は山田先生の肩を掴み、勢い込んで訊ねてきた。

「教えてくれ！　曾爺ちゃん、月光夜明はどこにいるんだ！！？？」

「ひ、曾お爺ちゃん？　何を言って」

「早く！！　時間が無いんだ！！！」

「お、屋上で寝てました！！」

山田先生から夜明の居場所を聞き出すと、少年は礼も言わずに屋上へと向かって走り始めた・・・途中で戻ってきて、屋上までの行き方を聞きに来たのは余談である。

「空が青いな～」

「青いな～」

「だな～」

「そうだな～」

「ですわね～」

「そうね～」

「そうだね～」

「全くだな～」

屋上。昼食を食べ終えた夜明達は大の字になって寝転び、少ししか雲のない空を見上げていた。輪っか状になって寝転んでいて、何ともお気楽な空気を放っている。

「あ、あの雲、魚っぽくね？」

「いやいや、トカゲだろ」

「違う違う、あれは象だ」

「お前達、せめて魚類かは虫類、ほ乳類なのか統一しろ・・・」

雲の形を動物に例えている夜明、太陽、一夏に箒が突っ込んだその時、凄い勢いで屋上の扉が開いた。突然の来訪者に驚き、夜明達は上半身を起こして扉の方に視線を向ける。更に驚くことになるとは露知らず。

「・・・俺？」

思わずそう呟いたのは夜明だ。太陽達も顔に浮かべていた驚愕を深め、来訪者と夜明の顔を頻りに見比べる。その来訪者、銀髪の少年と夜明は驚くほどそっくりなのだ。まるで、鏡で映しているのではと思えるほどに。違う点と言えば、髪の長さと着ている服のみ。

「・・・見つけたぞ、曾爺ちゃん！！」

「は、曾爺ちゃん？」

首を傾げる夜明にズカズカと歩み寄り、少年は夜明の周囲にいる面子にも視線を走らせた。

「夕暮太陽、織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・凄い、英雄のオールスターだ！」

「は？　お前何言って」

「ごめん！　説明してる時間は無いんだ！！　時空間転送装置発動、大空流星を含む八名を指定された座標に転送しろ！」

刹那、少年の身体から黒い球体のような物が溢れ、身体を覆い隠す。その球体は夜明達も飲み込んだ。数秒ほど表面に紫電を走らせ、球体は姿を消した。その場にいたはずの、少年と夜明達と共に・・・。

『こちらウィン・D・ファンションだ。依頼を完了した、これより

帰還・・・何、ここから数十キロ離れた所でＩＳを持った人間の反応が八つ？　・・・そうか、分かった。すぐに調査へ向かう』

謎の球体に飲み込まれて視界が真っ黒に染まり、妙な浮遊感を楽しんでいた夜明達は現在・・・紐無しバンジージャンプを楽しむ羽目になっていた。

「「「「「「「「「ずぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！？？？？？？？」」」」」」」」」

紐無しバンジージャンプと言っても高さは精々十メートル、下は柔らかそうな白い砂なので、相当当たり所が悪くでも無い限り死にはしないと思うが。六メートルほど落下したところで夜明、太陽、一夏は冷静さを取り戻し、手近にいた仲間を抱き寄せる。

「っと」

「・・・」

「よっと」

三者三様の声を出しながら着地を成功させ、抱き寄せた仲間を下ろした。夜明に抱き寄せられていたセシリアとシャルの顔が赤く染まっているのは完全な余談である。夜明達は各々に怪我が無いことを確認し、周囲を見回した。

「・・・どこだ、ここは？」

ラウラの問いに答える者は誰一人としていない。と言うよりも、答えられないと言った方が正確だろう。さっきまで屋上に寝っ転がって空を見上げながら雲の形をどうたらこうたら言っていた筈なのに、今、彼等は砂漠の上に立っているのだから。それも、サハラ砂漠のように、燦々と日光が降り注いでいる健康的な砂漠ではない。

「病的なまでに白い砂、日光が届かないほど厚い雲・・・少なくとも現在の地球上には、こんな場所は存在しないな」

太陽が冷静に足下の砂を手で掬って観察していたその時。

『そこのお前達、聞こえているか！』

いきなり割り込んできた全員が視線を上げる。一見すると何も見えないが、よくよく見てみると、灰色の雲の中に真珠色の装甲を持ったＩＳが浮かんでいるのが分かった。その真珠色のＩＳはオープン・チャネルで夜明達に呼びかけている。

「何ですの、あのＩＳは？」

「どっかの新型？」

「さぁ、どうなんだろう・・・」

セシリア、鈴音、シャルの三人が小首を傾げる。夜明は全員に黙っているよう指示し、自身は数歩前に踏み出しながらレイジングウィングのハイパーセンサーのみを稼働させた。

『あぁ、聞こえている！』

『私はインテリオル所属、カラードランク３のリンクス、ウィン・Ｄ・ファンションだ！　お前達の所属とカラードランク、及び目的を話せ！！』

『カラードランク？　何だそれは！？』

聞き慣れない単語を耳にし、夜明は素で疑問を返してしまう。この反応で相手に警戒心を抱かせてしまったらしい。真珠色のＩＳから聞こえてきた声に警戒の色が現れ始めた。

『・・・カラードランクを知らない？　何故、専用機を持っている

のにカラードランクを持っていなくて、しかも知らない！？』

『いや、何でって言われてもなぁ・・・』

どう返答を返して良いか分からず、夜明は詰まってしまう。真珠色のＩＳも、夜明達に何か事情があると思ったのか、声を和らげてこっちに向かって飛んできた。

『どういう訳かは知らないが、兎に角落ち着いた場所で話を聞きたい。ＩＳを展開して私に付いてきてほし！！』

夜明達から数十メートルの所まで近づいてきた所で、真珠色のＩＳはいきなり回避行動を取った。刹那、空の向こう側から閃光が閃き、紅いビームが轟音を上げて真珠色のＩＳの横を通り過ぎる。紅いビームの余波で吹き飛ばされながら、真珠色のＩＳはどうにかして体勢を立て直す。

『この馬鹿げた威力は・・・トワイライトウィングのビームマグナムか！？　ここで戦闘しては彼等に被害が・・・何だ、こっちは今急がし・・・何？　撤退しろ！？　なら、彼等はどうする・・・彼等はラインアーク関係者、だと？　・・・それはちゃんと確認してあるのだろうな？　・・・分かった、帰還する』

プライベート・チャネルで会話をすると、真珠色のＩＳは回れ右して何処かへと飛び去っていった。その後を追うように紅い閃光が放たれているが、真珠色のＩＳは背後から迫ってくるビームを全てかわして、雲の中へと消えていく。

「・・・何なんだよ？」

「現状では何も分からないな」

一夏と箒が落胆したような表情を浮かべると、真珠色のＩＳがいた方とは反対側の空から一機のＩＳが現れた。白い装甲で背中には小型ウィングスラスター、手にはさっきの馬鹿げた威力のビームを放っていたであろう武器が握られている。夜明達が警戒心も顕わに身構えていると、そのＩＳは夜明達のすぐ側に下り立ってＩＳを解除した。

「ごめんごめん。まさかこんな遠くまで座標がずれるとは思わなかったよ。カラードランク３のウィン・Ｄ・ファンションがいた時は本気で焦ったけど・・・ま、結果オーライだね」

「・・・誰だ、お前？」

勝手に納得している少年に尋ねると、その少年、さっき屋上で見た銀髪の少年は苦笑いを浮かべながら頭を掻く。

「そう言えば、自己紹介がまだだったよな。俺は大空流星。あんたのひ孫だよ、月光夜明」

「「「「「「「「「・・・・・・・・・・・・はい？」」」」」」」」」

唖然とする夜明達に、その少年、大空流星は組んだ両手を頭の上に運びながらにしししと笑う。

「よろしくな、曾爺ちゃん」

円卓での会話　早速危機到来

薄暗い円卓。そこを言葉で表現するならば、これ以外に最適な言葉は無いだろう。まぁ、円卓と言っても、そこにいるのは騎士団なんて呼べるほど高尚な連中ではないのだが・・・。そこにいるのはカラードランク1～10のトップリンクス達。二名を除き、全員が女性である。

カラードランク1、停滞の『オッツタルヴァ』出席。

カラードランク2、次期女王『リリウム・ウォルコット』欠席。

カラードランク3、災厄と呼ばれた『ウィン・D・ファンション』欠席。

カラードランク4、粗製の英雄、二人の男の一人『ローディー』出席。

カラードランク5，最も理想的なリンクス『ジェラルド・ジェンドリン』出席。

カラードランク6、女傑『スティレット』欠席。

カラードランク7、独立傭兵最高ランク『ロイ・ザーランド』出席。

カラードランク8、二人の男の一人、『王小龍』出席。

カラードランク9，ラインアークの守護神『月光冬華』欠席。

カラードランク１０、時間限定の天才『ハリ』欠席。

「・・・随分と集まりが悪いな」

半分の席が空席となっている円卓を見て、腕組みをしていたローディィーはポツリと呟く。重苦しい沈黙が流れている中、唯一人飄々とした態度を崩していない女性傭兵、ロイ・ザーランドはケラケラと笑いながら上位リンクス達に収集をかけた人物、王小龍に視線を向けた。

「まぁ、こんな陰気くさいじい様に呼ばれて、好き好んでくるような奴はいないだろうな」

ギロリ、と擬音が付くような勢いで王小龍に睨まれ、ロイは『怖ぇ怖ぇ』と肩を竦めて円卓を見回す。その視線に気付いたジェラルドがロイの疑問を代弁した。

「月光冬華にファンション、スティレットとハリがいないのはまだ頷ける。だが、ウォルコット嬢がいないのはどういう訳なんだ、王大老？」

ウィン・Ｄ・ファンションにスティレット、ハリは現在依頼を受けているため、この場にいないのは当然のこと。まして、月光冬華は企業連と戦争状態にあるラインアークの兵士、そして搭乗機である『ホワイト・グリント』は既に破壊されてしまっているのだ。ここにいる方がおかしい。だが、リリウムはそのどちらでもない。依頼を受けてもいなければ、まして敵対戦力の兵士という訳でもない。ジェラルドの質問に、王小龍は不機嫌そうに鼻を鳴らして答えた。

「いつもの悪い癖だ」

その言葉だけでも、この場にいる全員が納得しうる答えだ。カラードランク2、リリウムには困った癖がある。良く言えば旅人気質、悪く言うのなら脱走癖だ。良いところのお嬢様である彼女は小さい頃から箱入りで育てられた。その時の反動なのか、とにかく、ひたすらにリリウムは遠い場所、自分が知らないところへと行きたがるのである。

「『いつもの悪い癖だ』・・・なんて不機嫌そうに言っちゃいるが、やっぱり孫同然に育てたウォルコットの嬢ちゃんが可愛いんだろうねぇ。心配してるのが筒抜けだぜ」

「っ！！　・・・バカを言うな」

微かな動揺を顔に浮かべたが、すぐにそれを引っ込めて王小龍は何食わぬ表情で手元にあるコーヒーに砂糖を入れた。それを見て、ローディーが一言。

「王の爺、それは塩だぞ」

「何故こんな所に塩がある！？」

「嘘だ」

しれっと言ってのけるローディーに射殺せんばかりの視線を送りながら、王小龍はコーヒーを一口煽る。冷製に考えれば、こんな所に塩が置いてある何て有り得ないと分かるだろう。今の王小龍はそれすらも分からないほどリリウムを心配しているのだ。ロイはゲラゲラと笑い、ジェラルドもジェラルドで必死に笑いを堪えるために俯いている。不意に、拳を円卓に叩きつける音が響いた。

「・・・こっちは爺の惚気話を聞くために来たんじゃないんだ。これ以上待っても誰も来ないだろうから、さっさと始めろ。まして、俺たちを集めたのはお前だろうが、爺」

オッツタルヴァは不機嫌さを隠そうともせずに一同を睥睨する。カラードランク１の視線に、微妙に和やかになっていた空気が一気に凍り付く。王小龍はコーヒーを飲み干し、カップを置いた。

「若造の言うとおりだな。お前達を集めたのは他でもない、数十分前に確認されたアンノウンの事だ」

王小龍が円卓を指で数回叩くと、全員の前に空間投影のディスプレイが出現した。ディスプレイには砂漠の映像が映し出されている。

「こ奴らは突然、この砂漠に出現した。恐らく、空間を転送してきたのだろうな」

「ほぉ・・・で、砂漠に放り出された哀れな民間人八人をどうこうするために、お前は俺たちを呼んだのか、爺？」

「人の話を最後まで聞け若造。確かにこ奴らが唯の民間人であるのなら、ここの領域の主権を持っているインテリオルにでも任せているわ。だが、そうも言ってはいられなくなってな・・・これを見ろ」

再び王小龍が円卓を叩くと、今度は円卓の中央に八枚のディスプレイが浮かび上がってくる。それぞれのディスプレイに八名のＩＳの基本スペックが詳細に映し出された。それを見たジェラルドはその端正な表情を曇らせる。

「・・・これは」

「気付いたか。この者達が所有している専用ＩＳの内、四機が第三世代型、三機が第四世代型なのだ」

「確かに、こんな低いスペックのＩＳ、量産型の第四世代型でもお目にかかれないだろうな」

逆にこんなアンティークを専用機にしてる奴がいるって事が驚きだぜ、とロイは呟く。今のご時世、どの企業であろうとも、所有しているＩＳは四世代型だ。その殆どが量産型で、性能はリンクス達が搭乗している専用機の足下にも及ばないが、それでも第三世代型などとは一線を画した性能を持っている。ふと、面白そうにＩＳのスペックを見ていたロイの顔が驚愕に染まった。

「おい爺さん、こいつは・・・」

「うむ。私も俄には信じられんのだが・・・」

ロイと王小龍の視線を向けているディスプレイにローディー、ジェラルド、オッツタルヴァの視線も集まった。そして、三者同様に表情を驚愕に染める。この時代において最高の機動力を誇るであろうオッツタルヴァの専用機『ステイシス』に匹敵する機動力、現存するどのＩＳをも上回る総火力、そして小指の甘皮以下と言っても過言ではない防御力。そんな性能を持つＩＳなど、唯一つしか存在していなかった。

「『不屈の翼（レイジングウィング）』・・・」

「まさか、実在していたのか・・・」

ロイやジェラルドと言った比較的若いリンクスでも、レイジングウィングの名は耳にしている。と言うか、ＩＳに拘わっている者として、レイジングウィングの名を知らぬ者はハッキリ言ってモグリか何かだ。

「・・・となると、この八機の内、最後の一機は『黄昏の黒斧（バルディッシュトワイライト）』と言うことになるのか？」

「可能性は大きいだろうな」

「・・・これまた凄いのが出てきたな・・・ってぇとなると、残りの連中はレイジングウィングの愉快な仲間達ってことになるのか？」

「さぁな・・・この八人と接触したファンションが戻ってきたようだ。まずは彼女から話を聞くとしよう」

「あぁ・・・つまり、ここは二百年後の地球でお前は俺の子孫、そしてお前の所属している『ラインアーク』と『企業連』が戦争状態・・・で、一機しか専用機がないラインアークがめっちゃくちゃ不利だから、過去から俺たちを連れてきて手助けして貰おうと・・・そう言う事か」

所変わって夜明達がウィン・D・ファンションと接触した地点から数十キロ離れた所。そこには簡易的なテント村のような物があり、ボロボロの服を着た人達が興味津々で夜明達を見ていた。夜明のひ孫を名乗る流星に案内され、彼等は一番大きなテントへと入っている。

「うん、もの凄く噛み砕いて言うとそういう事になるね」

「・・・こりゃ面倒くさい事になったな」

「同感だ」

急激な状況の変化についていけてない一夏達を放置し、夜明と太陽は額を突き合わせて話し始めた。何らかのドッキリと言う可能性もあるだろうが、それにしては手が込みすぎている。何より、流星が放っている空気が真剣その物だということもあり、二人は流星の話

を信じることに。

「取り敢ず、よくも戦争に巻き込んでくれやがったなこの野郎、と馬乗りになって殴りたいところだが、これからの方針的な物を聞かせて貰おうか」

戸惑っている一夏達への説明を太陽に一任、と言うか押しつけ、夜明は流星に訊ねた。流星は横にある六脚のテーブルに地図を広げ、青い×印が書かれているポイントを指差し、それから青い×印から十数キロ離れた赤い×印が書かれている所まで指先を運んでいく。

「この青い×印が俺たちのいるポイント。で、この赤い×印がラインアークの造船基地。取り敢ずは二、三日かけてここに行く予定」

「成る程。確かにそれだけの時間はかかるだろうな」

このテント村にいる人達の数は凡そ百。その半分の内が負傷者や老人なので、移動にはかなりの時間を要するだろう。

「それで、ここはお前等と敵対してる企業連に所属しているインテリオルの領域なんだろ？　襲撃の可能性は無いのか？　それに、何だってそんな所にラインアークの造船基地なんかがあるんだよ？」

「まず襲撃の可能性だけど、多分無いよ。幾らラインアークに所属してるリンクスがいるからと言って、百人近い民間人を襲撃するとは思えないしね。それと造船基地のことだけど、まさか敵だって相手が自分の領域内に基地を作るなんて考えもしないでしょ？　それが狙い」

「・・・成る程ね」

こうして、夜明達は二日ほどの時間をかけて、その造船基地へと向かった。

「・・・こんな所に造船基地なんて物があるのか？」

「確かに、パッと見ではそんなのがあるなんて思えないよね」

ラウラとシャルは目の前に広がる光景を見て、揃って首を傾げた。

彼女たちの目の前に広がっているのはスクラップになった車や重機の山々・・・早い話、目の前にあるのはスクラップ置き場だ。

「ハハハ。基地はここの地下にあるんだよ。このスクラップは隠れ蓑って訳」

流星の説明に得心がいき、二人は避難民達の誘導を開始する。太陽に事情を説明された一夏達は最初の方こそいきなり自分達が未来へと飛ばされて戸惑っていたが、一日程で適応して、今では流星の手伝いをしている。凡に、夜明はレイジングウィングを展開させ、上空で周囲を見張っている。

「・・・・・・・・・・」

『こっちら夜明、今のところ敵影、異常なし。そっちはどうだ、太陽?』

「・・・あぁ、問題ない。今のところはな」

上空で周囲を見張っている夜明から連絡を受け、地上を見張っていた太陽は妙に引っかかる返答を返した。その妙な引っかかりに気付き、夜明は再び太陽へのプライベート・チャネルを開く。

『何だその今のところって? まるで、これから何か起こるみたいな言い方じゃねぇか』

「私の気の所為であって欲しいんだがな夜明・・・このスクラップ置き場に捨てられてる物、スクラップにするには早い物が多くないか?」

太陽は足場として使っている車を軽く爪先で突いた。乾いた音を上げるそれは新品同様で、確かにスクラップ置き場に捨てるにはまだ早い物だ。

『未来の人ってのは贅沢なんじゃねぇの？　・・・っ！　反応あり。高速でこっちに向かってきてるな。速度から察するに・・・ＩＳか』

「交戦するのか？」

『話し合いで解決できたら話し合いで解決するよ。流星に伝えてといてくれ』

プライベート・チャネルを閉じ、夜明は反応を確認した方向へと飛んでいった。月光の翼（ムーンライト・ウィング）を広げて飛んでいく夜明を見送り、地下にある基地の入り口に避難民を案内している流星に話をするために、太陽はスクラップを飛び越えて走っていく。突然、夜明が飛び去ったのを見て不安の声を上げている避難民に声をかけつつ、太陽は流星に追いついた。

「太陽。曾爺ちゃんがどっか飛んでいったけど、何かあったの？」

「ＩＳの反応があったらしい。それと、一つ聞きたいんだが流星。このスクラップ置き場に捨てられている物は、いつも新品ばかりなのか？」

太陽の質問で、流星は漸く周囲にあるスクラップの中に新品同様の車や重機が在ることに気付く。見る見る内に表情を青ざめさせていく流星。太陽は流星の顔色から厄介事が起こると悟り、流星の肩に手を置いて落ち着かせ、指示を仰いだ。

「落ち着け。それで、今の状況はどうなんだ？」

「最上級に拙いよ！　早く皆を基地に避難させなきゃ」

その時、何処からかカキン、と甲高い音が聞こえてきた。太陽と流星が音のした方を振り向くと、二人の目の前で一台の小型自動車が変型していった。

「・・・成る程、これは拙いな」

目の前でＩＳに変型した車を見て、太陽は静かに呟く。ここまで来るのに見たスクラップでない車や重機は約三十。これが全てＩＳに変型すると考えると・・・。

「軽く死ねるな、これは」

強すぎる気がしないでも無い主人公

「反応があったのはここら辺だよな・・・あれか」

月光の翼（ムーンライトウィング）を数十メートルにまで広げ、凡そ一キロ程離れていた場所に数秒で辿り着いた夜明は月光の翼（ムーンライトウィング）を収束させ、レイジングウィングのハイパーセンサーに反応を見せていたＩＳに視線を向ける。夜明から数十メートル離れた所に浮かんでいる、異常なまでに装甲が薄い黒い装甲。

「・・・カラードランク１７、ＣＵＢＥ」

「と、その搭乗機、フラジールです」

オープン・チャネルを通して機械的な女性の声が聞こえてくる。夜明はレイジングウィングが教えてくれるフラジールの防御力の低さ、そして空戦特化の機動力に舌を巻いた。フラジールの防御力の低さはレイジングウィングの上を行き、機動力もレイジングウィングに匹敵するほど。だが、搭乗者を制御負荷から完全に守るレイジングウィングと違い、フラジールには搭乗者を制御負荷から守ろう何てシステム、一切無かった。

「・・・随分と搭乗者想いのＩＳだな。潰してきた連中は数知れずってか？」

「貴方の与り知ることではありません」

違いない、と苦笑を浮かべながら夜明は一旦全武装を待機状態に戻した。驚くことに、相手のＣＵＢＥも同様の行動を取っている。

「・・・おっどろいたな。てっきり、問答無用で戦闘がおっ始まるもんだと思ってたんだが・・・」

「戦闘を避けるに越したことはありません。貴方が武器を収めたのだから、話し合いの余地はあるでしょう」

「・・・そうかい。なら、話は早い。このまま撤退しちゃくれねぇか？」

「こちらの要求を呑んで頂けるのであれば、構いません」

「ほう。で、その要求ってのは？」

「単刀直入に言います。貴方の仲間である夕暮太陽の身柄を渡しなさい」

ＩＳを操作するためだけに産み出された存在『ＡＤＶＥＮＴ（アドベント）　ＣＨＩＬＤＲＥＮ（ルドレン）』。太陽はその最高傑作にして最低最悪の欠陥品。恐らく、ＣＵＢＥの所属しているアスピナ機関の連中は太陽を解剖してでもして身体を調べるつもりなのだろう。太陽の名が出た瞬間、夜明は全武装を待機状態から戦闘状態へと移行させた。

「交渉決裂だな」

「ならば、貴方を排除します」

ＣＵＢＥは背中のブースターを出力全開にし、夜明へと突っ込んでいく。戦闘開始と共に爆発するように広がった月光の翼（ムーンライト・ウィング）から放たれる蒼銀の粒子が砂漠に降り注いでいった。

突然、目の前で変型した小型自動車が装備している近接ブレードを引き抜く前に跳躍し、脚のバネを利かせた飛び膝蹴りをそのＩＳの顔面に打ち込んだ。顔が変型し、後ろ向きに倒れたＩＳの胸部に拳を叩き込み、中からコアを引きずり出す。

「流星。これは何だ？」

目の前で独立稼働のＩＳを造作もなく、そして躊躇いもなく破壊し

た太陽に唖然としていた流星は慌てて意識を戻した。

「そ、そいつはトランスフォーマー、通称『ＴＦ』。飛行能力のないＩＳだと思ってくれればいいよ」

「そうか・・・一つ聞きたいんだが、ＩＳを展開したくても展開できないんだが、これはこのＴＦとやらの能力か何かか？」

バルディッシュトワイライトの待機状態であるネックレスを指で挟みながら、太陽は流星に訊ねる。さっきから展開しようとしているのだが、バルディッシュトワイライトはウンともスンとも言わない。

「それは多分『ＩＳＣ（インフィニット・ストラトス・キャンセラー）』の所為だよ。これは一定の空間内のＩＳを起動できなくなる装置なんだけど・・・」

「どうすれば破壊できる？」

「このＩＳＣを発動しているＴＦがいるはずだから、そいつを破壊すればどうにか出来ると思うんだけど・・・でもそいつを探している間に全員殺されちゃうよ！！」

少しばかり涙目になっている流星に頭突きを叩き込み、太陽はコアを破壊されて横たわっているＴＦの肩から近接ブレードを一息で抜き放った。

「落ち着け。お前は一夏達と協力して皆を基地内に避難させろ」

スクラップの山を駆け上り、近接ブレードを肩に預けながら周囲を見回す。どこも、スクラップだと思っていた車やら重機が変型し始めたのでパニックになっている。

「ＴＦは私が抑える」

言うや、太陽はスクラップの山から跳躍して近接ブレードを振り上げ、一番近くにいたＴＦの身体を真っ二つに断ち切った。残るＴＦの数は二十強。中には相当な重装備をした物もいるようだ。

「・・・皆、私が守り抜いて見せるさ」

それくらい出来なければ、夜明（あいつ）の隣りに立つ資格など無い。太陽は近接ブレードを担ぎ、皆を護るために駆けていく。

ＣＵＢＥの両手に握られているマシンガンの銃口が火を噴く。ばら撒かれる弾丸の壁。だが、放たれた弾丸は月光の翼（ムーンライトウィング）によって生み出された夜明の残像を撃ち抜くだけ。高速移動をしながら、夜明に捉えられないようにマシンガンのマガジンを交換してＣＵＢＥは再び夜明に銃口を向ける。夜明は無言で腰のディバイン・カノンを展開し、小口径弾を連射してＣＵＢＥが放った弾丸を全て撃ち落とした。

「ちぃ！」

スタードライブが発射態勢に移行したのを見て、ＣＵＢＥは横に瞬間加速（イグニッション・ブースト）する。直撃は避けられたが、真横を通り過ぎていった荷電粒子砲の余波で吹き飛ばされた挙句にシールドエネルギーまで削られた。直撃すれば、一撃で墜とされるだろう。

「・・・ここまで武装に差があるとは・・・」

「止めるかい？」

「まさか！」

両肩に装備しているチェインガンも発射態勢に移し、両手のマシンガンと合わせて想像を絶する数の弾丸を放つ。夜明は徐ろにスターライザーを引き抜き、横一文字に振り抜いた。蒼い光の軌跡が描かれ、全ての弾丸を切り裂く。

「悪いけど時間がない」

スターライザーを腰に戻し、夜明は月光の翼（ムーンライトウィング）を集束させる。

「決めさせて貰うぞ」

刹那、爆発的に広がった月光の翼（ムーンライトウィング）に押され、瞬間加速（イグニッション・ブースト）を上回る加速で夜明は固く握りしめた拳をＣＵＢＥの顔面に思い切り叩き込んだ。まさか直接殴られるとは思っておらず、ＣＵＢＥはモロに夜明の拳を受けて脳を揺らされる。脳震盪を起こして落下していくＣＵＢＥを助けるかどうか一瞬迷ったが、夜明はすぐに身体を造船基地へと向けた。

「なぁんか嫌な予感がするんだよな・・・っ！！」

最高速度まで加速しようとした瞬間、レーザーが頬を掠めた。瞬間加速（イグニッション・ブースト）しながら振り返ると、八発の高速ミサイルが迫ってくるのが分かる。夜明は慌てずにウィングスターを連結させ、先頭のミサイルを撃ち抜いた。撃ち抜かれたミサイルは爆発し、その後に続いていたミサイルも誘爆して次々と爆発していく。広がる黒煙で視界が遮られる中、夜明は確かに見た。

「へぇ、造作もなく俺の攻撃をかわすか。こりゃ大変な役目を引き受けちまったな」

レーザーライフルを構えながら迫ってくる、深緑のＩＳを。そのＩＳの名は『マイブリス』、搭乗者はカラードランク７、ロイ・ザーランド。

「ま、こっちも仕事だ。墜とさせて貰うぜ、不屈の翼」

夕暮太陽、彼女は本当に人間なのだろうか？（前書き）

今回、あるキャラが人外の仲間入りを果たします。

夕暮太陽、彼女は本当に人間なのだろうか？

右手に握った近接ブレードを真一文字に振り抜く。何かを切断した感触が右腕を通して伝わり、太陽は腰の辺りから横にずれているＴＦを蹴り飛ばした。太陽に胴体を真っ二つにされたＴＦの上半身がオイルを撒き散らしながら飛んでいき、彼女の眼前で数人の避難民を囲んでいる五体のＴＦ内の一機の後頭部に直撃、爆発する。

「太陽！！」

「シャル！　私がＴＦの注意を逸らすから、その間にあの人達を避難させてくれ！！」

「分かった！」

爆発の際に発生した黒煙の中でシャルが避難民を連れて行ったのを確認し、太陽は横に転がっている大型トレーラーのスクラップに手をかけた。

「ん・・・結構重いな」

とか言って、スクラップになって軽くなったとは言え、大型トレーラーを片手で持ち上げられるのは彼女くらいだろう。太陽は大型トレーラーを持ち上げた左腕を横に突き出し、左腕の関節が悲鳴を上げるのも意に介さずに思いっ切り真正面を薙ぎ払った。太陽に振り回された大型トレーラーはスクラップを巻き込みながらＴＦを捉え、鉄くずの固まりへと変える。

「次は・・・っ！」

大型トレーラーを放り投げ、次のＴＦに向かおうとしていた太陽の腹を鎖付きの杭が貫く。自身の血でぬるぬるになった鎖を躊躇無く引いて杭を放ったＴＦを引き寄せ、太陽は回し蹴りで杭を放ったＴＦの頭を吹き飛ばした。

「あぁ～、いった・・・」

「太陽、九割方避難・・・って、あんた大丈夫!?」

「内臓が傷つかないように避けたから問題ない。それより、避難の様子はどうなんだ?」

血の塊を吐き出しながら鎖を引き千切り、太陽は腹から杭を引き抜いて報告に来た鈴音に訊ねる。顔を真っ青にさせているが、鈴音は今の状況を太陽に伝えた。

「う、うん。九割方の人が基地の中に避難し終えてる。残りの人達は一夏達が避難させてる」

「了解した。私は引き続きＴＦの注意を引くから、お前達は避難の指示を」

「あ、太陽!」

鈴音の声を無視し、太陽は腹から血が流れ出るのも構わずに次の標的へと走っていった。

「カラードランク7、ロイ・ザーランド・・・一つ聞きたいんだが、このカラードランクってのは何なんだ?」

「リンクスの強さを数字で表した様なもんだな。数字が若い方が強い、って認識でいいぜ・・・まぁ、ランクの裏に企業とかの権力とかがあるから、一概には言えないけどな」

夜明は適当にその場を濁しながら、隙を見出して逃げようとしたが、それをすぐに諦めた。今、対峙しているロイ・ザーランドと言う女、飄々とした口調でいるが、全くと言って良いほど隙が無い。背を向けた瞬間、背中を撃たれる。そんな確信が夜明の胸中にあった。

「まぁいいさ。で、そのカラードランク7のロイ・ザーランド様が何の用だ？」

「ロイでいいぜ、不屈の翼。お前を墜としにきた・・・って言いたいところなんだが、とてもじゃねぇが俺の手に負えるような奴じゃ無いな」

「じゃあ、このまま見逃しちゃくれないかねぇ」

「そうも言ってられねぇのよ。こちとら独立傭兵は企業に所属しているリンクスと違って、クライアントからの信用が命。既に追いつけない範囲にまで逃げたってんならともかく、目の前にいるってのに戦闘をしないで逃がしたら信用はがた落ち、飯を食いっぱぐれちまう」

「・・・大変だな」

「そう思うんなら、素直に捕まってくれねぇか？」

「断る」

「ですよね～」

どこか似たような雰囲気を放っている者同士シンパシーを感じたのか、二人は揃って笑い始めた。夜明は喉を晒して、ロイは片手で顔を覆って呵々大笑いする。一頻り笑い合った二人の行動は素早かった。ロイが撃ってきたレーザーをウィングスターで相殺し、夜明はロイに向かって一気に肉薄する。左腕のガトリングから大量の弾丸を放ちながら夜明を牽制し、ロイは両肩のミサイルを放つ。向かっ

てくるミサイルを高速ロール回避で全て避け、夜明は左手に握ったスターライザーを振り抜いた。

「甘いな」

ロイは夜明が振り抜いたスターライザーを右腕に装備されたレーザーライフルの銃口で受け止め、夜明に左腕のガトリングの銃口を向ける。だが、

「甘いのはお互い様だ」

ガトリングを右足で蹴り上げられ、スターライザーを握っているのとは逆の手に握られたウィングスターの銃口を胸部に叩きつけられた。後ろに回避する前に数発のビームを撃ち込まれ、ロイのシールドエネルギーを削る。ロイは後ろへと回避行動を取りながらガトリングを連射させる。対して、夜明はディバイン・カノンから小口径弾を連射してガトリングを相殺した。地面に背を向けて降下していくロイを追いかけながら夜明はウィングスターを連射するが、二挺撃ちの夜明に対してロイは右腕のレーザーライフルだけで夜明の射撃を防いでいる。

（正攻法じゃ無理か・・・）

真っ向正面の撃ち合いでは不利と判断し、ロイは砂漠に激突する直前に思い切り背中のブースターを噴かした。大量の砂塵が舞い上がり、ロイの姿を覆い隠す。

「目隠しか・・・下らねぇ」

小さく呟き、夜明は迷い無く砂塵の中へと突っ込んでいった。数発

のレーザーが身体を掠めたが、臆することなく砂塵の中に飛び込み、夜明は集束させていた月光の翼（ムーンライトウィング）を一気に広げる。砂塵が一瞬で霧散し、夜明の死角を狙い撃とうとしていたロイの姿を露わにした。

「そこか」

「だが遅い！！」

夜明の背後に回って既にレーザーライフルを構えていたロイは夜明が避けられないと判断し、レーザーライフルの引き金を引いた。夜明は回避できず・・・否、回避せずに推進翼（スラスター）に収納されている待機状態のスタードライブから二発の荷電粒子砲を放ち、一発でレーザーを相殺して、もう一発をロイの足下に直撃させる。目の前の足下に荷電粒子砲が直撃した衝撃でロイは吹き飛び、舞い上がった砂塵で夜明の姿を見失う。

「どこだ・・・そこか！！」

独立傭兵として培ってきた勘が彼女を助けた。ハイパーセンサーが何の反応も見せない中、ロイは勘が命じるままに後ろを振り返った。砂の上を滑るように後ろから接近してきた夜明が真後ろに現れ、振り返る途中のロイのガトリングをスターライザーで斬り裂く。ガトリングの砲身が砂塵の中から飛びだして宙を舞う。

「・・・」

「・・・」

回転しながら宙を舞うガトリングの砲身が砂漠に突き刺さると同時に砂塵が晴れ、互いの顔にレーザーライフルの銃口を突きつけてい

る二人の姿が現れた。

「・・・」

ラウラは目の前に立っている、ブルドーザーが変型したＴＦと対峙していた。本当なら太陽が相手をしている筈なのだが、太陽の防護壁を突破してきたようだ。ラウラは太陽に助けを求めようとしたが、十体のＴＦを相手に一歩も退かずに渡り合っている戦友の姿を見て、両手にタクティカルナイフを構える。

（太陽が出来ているんだ・・・）

生身でＩＳと渡り合っている戦友。目を閉じて深呼吸。ＴＦが持ち上げていた右腕を薙ぎ払ってきた瞬間に左目を覆っている眼帯をむしり取った。

「私に出来ない道理は無い！！」

地面に這い蹲るようにしてＴＦの右腕を避ける。頭上をＴＦの右腕が通り過ぎた事で発生した風で髪が逆立つが、そんな事お構いなしでラウラはＴＦの股下に滑り込んだ。滑りながら逆手に構えたタクティカルナイフをＴＦの足首関節部分にねじ込み、中にあるコードを切り裂く。すぐさま起き上がってＴＦの左膝裏にナイフを突き立て、突き立てたナイフの柄を足場にして肩へと飛び移る。自分を捕まえようと伸びてくる両腕をかわし、ラウラは残ったナイフをＴＦの項部分に突き刺した。

「さっさと・・・」

ＴＦの頭を両手で押さえ付けながら身体を持ち上げ、

「墜ちろ！！」

勢いを付けた膝蹴りをナイフの柄頭に叩きつける。ラウラの膝蹴りでナイフはＴＦをあっさりと貫通し、ＴＦの首から飛び出した。紫電を放ちながら倒れるＴＦから飛び降り、ラウラは地面に突き刺さったナイフを引き抜く。

「・・・人間、死ぬ気になれば意外と出来るものだな」

激しく何かが間違っているが、そんな事は気にせずにラウラは太陽の救援に向かった。

「・・・何で撃たない」

「その台詞、そっくりそのまま返すぜ」

互いの顔にレーザーライフルの銃口を向け合ったまま数分間が経過

した。さっさと引き金を引いて勝敗を決さなかったのが災いしたのか、二人の間に妙な膠着状態が発生している。このまま早撃ちのガンマンよろしく、一瞬で勝負が決まると思いきや、いきなり夜明が後ろに飛び退いた。その瞬間を逃さずにロイはレーザーライフルの引き金を引こうとするが、さっきまで夜明がいた場所にレーザーが直撃して砂塵が舞い上がって視界が塞がれる。

「今度は何だ？」

左のウィングスターをロイに、右のウィングスターを新手に向けながら夜明は悪態を吐く。咳き込みながら砂塵から出てきたロイはレーザーが飛んできた方向を向いてため息を吐いた。

「・・・何でお前がいんだ、ウィンディー？」

そこには真珠色のＩＳ『レイテルパラッシュ』を身に纏った女性、ウィン・Ｄ・ファンションが浮いていた。ウィン・Ｄはロイ、夜明、少し離れた所で気絶しているＣＵＢＥの順に視線を走らせる。

『聞こえるか、不屈の翼。私はインテリオル所属、ウィン・Ｄ・ファンションだ』

「・・・あぁ、この間の」

オープン・チャネルを通して聞こえてきた声に聞き覚えがあり、夜明は数秒で彼女が数日前に接触した女性だと思い出す。

『覚えていただけて光栄だ。早速用件に入らせて貰う。誠に勝手だが、こちらに戦闘続行の意思は無い。このまま退いてはもらえないだろうか？』

「な!?　おいウィンディー、お前何言って『黙ってろ』はい、自分調子くれてましたマジで」

いきなり戦闘に水を差された挙句、勝手に戦闘を終わらせようとするウィン・Dにロイは文句を言おうとするが、一睨みで意志を挫かれてしまった。夜明の胸中に『蛇に睨まれた蛙』と言う諺が浮かんでくる。

「・・・まぁ、こっちは別に構わないぜ。元々、話し合いで解決できたらそれに越したことは無いと思ってたんだ」

『感謝する。行くぞ、ロイ』

「へぇーへぇー。また会おうぜ、不屈の翼」

飛び去っていくウィン・Dの後ろを気絶したCUBEを担いだロイが飛んでいく。二人が視界、ハイパーセンサーの認識可能外に出たことを確認し、夜明は造船基地へと戻っていった。

所変わって造船基地の入り口が隠されているスクラップ置き場。ロイに撤退命令が出されたので、こちらもＴＦに撤退命令が出されたのだが・・・。

「・・・人間、為せば為るな」

「人外の境地にようこそ、ラウラ」

太陽とラウラの手によって全てのＴＦが破壊されていた。

「なぁウィンディー。何で撤退命令なんて出たんだ？」

戦闘を邪魔されたのが少しだけ癪に障るのか、ロイは唇を尖らせて隣りを飛んでいるウィン・Dに訊ねる。ウィン・Dは前に向けた視線をそのままに、淡々と答えを返した。

「お前がやる必要無くなっただけだ・・・もうすぐ、彼等がいる造船基地はスピリット・オブ・マザーウィル　の射程圏内に入る」

「あぁ、成る程」

納得したようにロイは頷いた。

「そりゃ大変だ」

知り合いの子孫　アームズフォート

「夜明だ。こっちはこっちで片づいたぞ。そっちはどうだ？」

『問題ない。私の腹にちょっと風穴が開いたが、まぁ大丈夫だろう』

「それ、本当に大丈夫って言えるのか？」

プライベート・チャネルで太陽と会話しながら夜明は造船基地へと向かっていた。太陽からＴＦの襲撃があったと聞いて、夜明は微かに眉を曇らせる。

「なぁ、太陽。そのＴＦとやらが待ち伏せしてたって事は」

『あぁ。どういう経緯かは分からないが、敵さんはこの造船基地のことを知ってるという事だな』

それ即ち、戦力さえあれば二重にも三重にも策を張れると言うことだ。早々に何とかしなければ、ＴＦ以上に厄介な物が襲ってくるだろう。

『急いで戻ってきてくれ。何か嫌な予感がするんだ』

「ん、了解。後、一分もしないでそっちに着くからよ」

プライベート・チャネルを閉じ、夜明は月光の翼（ムーンライトウィング）を広げて更に加速した。蒼銀の粒子を放ちながら飛翔を続けること凡そ数十秒、夜明は一分と掛からずに造船基地の入り口が隠されたスクラップ置き場へと辿り着く。

「で、俺はどうすればいいんだ？」

どうやって基地内に入ればいいか分からずに空中に浮いたままでいると、オープン・チャネルが開かれた。通信の相手は流星だ。

『聞こえる、曾爺ちゃん？』

「流星か・・・どうでもいいが、その曾爺ちゃんって呼ぶの止めてくれねぇか？」

自分と同い年の少年から曾爺ちゃんと呼ばれる。どうにもむず痒いし、何だか年寄り扱いされてるような気がしないでもない。あはは、と笑いながら、流星は通信の向こう側で何かを操作する。

『ははは、ごめんごめん。後十秒くらいでＩＳ専用のハッチが開くから、そっから基地内に入ってきてよ』

流星の言うとおり十秒ほど経つと、夜明の真下の地面が音を上げてゆっくりと開き始めた。基地内へと続いているらしいそのハッチは内装が偉く未来的なので、夜明は改めてこの時代が未来なのだと思う。頭上で入り口が閉まる音を聞きながらゆっくりと下降していくと、数分ほどで床が見えてきた。

「よっと」

床から十メートルほど上の所でレイジングウィングを解除し、膝をクッションにして軽い音を上げて着地する。立ち上がると、そこには太陽達と流星、ラインアーク関係者と思しき軍服を着た人達が歩み寄ってきた。

「こっちも色々と大変だったみたいだな」

「まぁな」

「そう言えば太陽。腹に風穴が開いたって言ってたけど、大丈夫なのか？」

「ま、大丈夫だろ。さっきまでドバドバ血が出てたが、もう塞がっむご」

肩を竦めてみせる太陽を誰かが押しのけた。太陽を押しのけて夜明の目の前に現れたのは驚く無かれ、ラウラだった。何があったのか、夜明よりもちっこい身体をもの凄くふんぞり返らせている。

「ど、どしたラウラ」

「夜明。私はＩＳを展開しないでＴＦを破壊した」

それがどうした、と夜明が言う前にラウラは頭を突き出す。

「撫でろ」

単純明快な要求に全員がずっ転けた。唯一人、ずっ転けなかった夜明は少しばかり唖然としていたが、苦笑いを浮かべながら突き出されたラウラの頭に手を置く。

「はは、そっか。頑張ったな、ラウラ」

「・・・／／／」

夜明に撫でられ、ラウラは頬を染めながら気持ちよさそうに目を細める。羨ましい光景を見せつけられ、黙っていられない人影が三つほど。

「よ、夜明さん！　私だって頑張って皆さんを避難させてたんですのよ！？」

「わ、私だって！」

「僕は泣いてる子を泣き止ませてたんだよ！」

「ガキかお前等は」

夜明に撫でて欲しくて自分達が何をしていたかを言っている三人を見て、太陽はポツリと呟く。撫でて欲しくて夜明に殺到する姿は正しく子供。太陽の呟きに、この場にいる誰もが同意することだろう。苦笑いを深めて夜明が四人を撫でていると、軍服の中から誰かが咳払いして歩み出てきた。

「あぁ～、そろそろ良いだろうか？」

歩み出てきた人物を見て、夜明は眼球がこぼれ落ちる程に目を見開いた。それもその筈で、その人物は彼、その友人達がよく知る人物だからだ。

「あ、姐さん？」

「あねさん？　まぁいい。私はこの基地の最高責任者、月光冬華だ」

その女性、千冬にそっくりな人物はそう名乗り、夜明に手を差し出してきた。夜明は驚き冷めやらぬまま冬華の手を握る。ふと、ある疑問が浮かんできたので率直に訊ねてみることに。

「あの、付かぬ事をお聞きしますが、曾お爺ちゃんと曾お祖母ちゃんの名前って何ですか？」

「？　確か月光銀河と、月光千冬だったが・・・それがどうかしたのか？」

「あ、何でも無いです、気にしないでください　（やっぱくっついたのかあの二人・・・）」

疑問があっさりと氷解し、夜明は納得したように頷く。また、更に別の疑問が浮かんできた。胸中に浮かんできた疑問を解決する為に、夜明は流星の方を向く。

「なぁ流星。お前の曾婆ちゃんの名前ってなんだ？」

二百年後の未来に子孫がいる。それは夜明が結婚して子供を作ったと言うことに他ならない。だとすれば、相手は誰だったのか？　聞いた本人にしてみれば軽い気持ちで聞いたのだろうが、彼の周囲にいる五名の人物は目からビームが出せそうな眼力で流星を睨んでいた。五組の視線に若干、ではなく滅茶苦茶たじろぎながら流星は冷や汗をかく。

「え、えぇっと、確か・・・」

「た「「「「「確か！？」」」」」むごぅ！？」

流星が答えようとした瞬間、夜明を押しのけて太陽達が身を乗り出してくる。その眼はギラついているとかそんな生易しい状態ではなく、狂気を感じさせるほどに凄く血走っていた。怯みつつも答えようとしたその時。

「たたた、大変です！！」

誰かが人垣を掻き分けて飛び出してきた。飛び出してきた人影を見て、またしても夜明達は目を丸くすることになる。

「おいおい。姐さんの次は箒かよ」

ポニーテールにやや吊り目がちの目尻。見間違いようが無い。いきなり現れたその人影は箒その物だった。夜明はケラケラ笑いながら、唖然とした表情を浮かべている一夏と箒に視線を向ける。

「先に言っとくぜ、お二人さん。おめでと」

顔を爆発させる二人に一瞥を投げかけ、太陽は冬華を見た。

「月光さん、彼女は？」

「彼女は織斑朔夜。私の遠縁の親戚だ。流星のオペレーターを勤めてくれている。朔夜、彼等に挨拶しなさい」

「は、はい！　織斑朔夜です、よろしくお願いします！！」

冬華に促され、朔夜は勢い良く頭を下げた。勢い良く頭を下げすぎ、ポニーテールの先が顔に直撃したのは余談である。それを見て流星が噴き出す。途端、朔夜は顔を真っ赤にして流星へと食って掛かっ

た。

「わ、笑うな！！」

「うわぁっ！！　悪かった、悪かったって！！」

鬼ごっこを始めた二人にため息を吐き、冬華は二人の首根っこを掴んで猫のように持ち上げる。

「止めろ、子供じゃあるまいし。それで朔夜、何が大変なんだ？」

冬華に訊ねられ、朔夜は自分が何をしに来たのかを思い出す。

「基地の十二時方向にＡＦ（アームズフォート）を確認！　識別はＢＦＦ社のスピリット・オブ・マザーウィルです！！」

「で、貴様は避難民さえも巻き込んで不屈の翼を撃破するべきだと言うのか？」

カラードランク上位リンクスのみが立ち入りを許される円卓。円卓の一席に腰を下ろしながら、ウィン・Dはそこにいるはずの無い人物に殺意を込めた視線を送る。席に座ることなく円卓の側に佇んでいる仮面の男、クルーゼは鷹揚に頷いて見せた。

「その通りだ。もし情報通り数日前に突然現れ、ラインアークのトワイライトウィングに合流したアンノウンが本物の不屈の翼ならば、すぐにでも撃破すべきだ」

「・・・お前は人の命を何だと思ってるんだ？」

怒りを押し殺しながら訊ねるウィン・Dにクルーゼはこう返す。

「人は人を殺せる。唯、そう言う風に創られた。更に聞くが、選んで殺すのがそんなに上等かね？　・・・と、私が雇っている傭兵の一人ならそう言うだろうな」

「随分と趣味の良い傭兵を雇ってるんだな」

頭の後ろで両手を組みながら、ロイは嫌悪感を隠そうともせずにク

ルーゼを睨んだ。

「まぁ、問題点があるとすれば唯一つ、スピリット・オブ・マザーウィルが不屈の翼を墜とせるかと言うことだ」

一言でそれを表現するなら、要塞、だろうか？　いや、要塞なんて生易しい代物では無い。何せ、その要塞は六本の脚で動くのだから。

《スピリット・オブ・マザーウィル》

それがその要塞の名だ。実戦に投入されたのがラインアークと企業連が戦争を始めた十年前。最古参の超広域殲滅大型兵器、ＡＦ（アームズフォート）である。圧倒的な存在感を放つそれはＢＦＦ社のフラグシップであると同時に、『母』でもあった。何千キロにも及ぶ砂漠の中、その要塞が踏み出す一歩は緩慢、そして遠大。『母』の名を冠した要塞は、砂漠を歩いていく。自分の子供達を害そうとする存在を排除するために・・・。

「これがスピリット・オブ・マザーウィルか・・・でかいな」

「確かに。全長２．４ｋｍ、全高６００ｍ・・・ＩＳでも蟻同然だな」

「あの、二人とも。何をさも当たり前のようにブリーフィングルームに入ってきてるの？」

ブリーフィングルームのメインディスプレイに映し出されているスピリット・オブ・マザーウィルのスペックを見ている夜明と太陽に、流星が恐る恐る訊ねる。凡に、一夏達は不安がっている避難民達を安心させるために奔走していた。

「ヘリポートに筒状カタパルト。独立展開可能の三段飛行式甲板、射程距離二百キロを誇る三連キャノン。その他諸々の近接防御兵器・・・よくもまぁ、人を殺すためにこんなデカ物を創り上げたな、人間は」

兵器は人を殺すための代物。使い方がどうあれ、それは兵器の本質にして絶対の真理。苦笑いを浮かべながら、太陽は背後で会議をしている冬華達を振り返った。

「で、どうするつもりなんですか、月光さん？」

「基地内にいる者達を全てアークエンジェルに搭乗させ、ここから離れる。もう数分もしないでここはスピリット・オブ・マザーウィルの射程圏内に入るが・・・どうにか間に合うだろう？」

「破壊しないのか？」

夜明の問いで、ブリーフィングルームの中に苦々しそうな空気が生まれる。

「それが出来たら苦労しないさ」

「どういうこった？」

「スピリット・オブ・マザーウィルは、かつて冬華さんを、ホワイト・グリントを撃退したことがあるんだ」

「正確には撃退ではなく、撃破だがな」

流星の言葉に捕捉を加えつつ、冬華は自身の胸元にあるネックレスを持ち上げてみせる。白い光の矢を象ったようなネックレスを見て、太陽はあることに気が付く。

「それは・・・ＩＳか？」

「あぁ。私と共に闘ってくれた相棒さ・・・」

月光冬華、ホワイト・グリントの伝説は夜明達も耳にしている。一年間で企業連に所属している企業の半分、戦力を壊滅させた。それ程の戦績を残した冬華とホワイト・グリントが後れを取った相手がスピリット・オブ・マザーウィルである。成る程、と太陽は納得した。つまり、この場にいる者達は全員、冬華とホワイト・グリントを退けたスピリット・オブ・マザーウィルに誰も勝てる訳が無いと思いこんでいるのだ。

「下らない」

太陽はその考えを一言で切り捨てた。

「貴方達はバカか？　相手がどれ程強大であろうと、人の手で創られた物なんだぞ。ならば、人の手で破壊できる・・・違うか？　まぁ、無理だと思っているなら私達に任しておけ」

「任しておけって・・・どうせ俺がやんだろ？」

「当たり前だろ」

「当たり前だろって・・・はぁ」

諦めたようにため息を吐いて、夜明はブリーフィングルームから出ていった。太陽はブリーフィングルームに残り、その場にいる者達全員の目を真っ直ぐに見つめる。

「教えろ。どうすればスピリット・オブ・マザーウィルを破壊できる？」

スピリット・オブ・マザーウィル撃破（前編）（前書き）

ヴァンガード・オーバードブースト
ＶＯＢ
ＩＳ背部に接続する大型ブースター。一度点火すると時速四千キロの速度が出せる。尚、レイジングウィングは点火と同時に月光の翼（ムーンライトウィング）を展開させることで時速六千キロを出せる。

スピリット・オブ・マザーウィル撃破（前編）

《夕暮太陽のブリーフィング》

『これより、スピリット・オブ・マザーウィル破壊作戦を開始する。敵ＡＦの主兵装である大口径ロングレンジキャノン砲は馬鹿げた威力、それに加えて異常なまでの射程距離を誇っている。喰らえば、防御力が紙のレイジングウィングじゃなくても一撃でお陀仏だな。だから、スピリット・オブ・マザーウィル接近にはＶＯＢを使用する。

分かっているとは思うが、ＶＯＢはＩＳの高速機動形態を凌駕するスピードを出す。それなりの覚悟をしていないと目を回すぞ。懐に飛び込めばこっちの物・・・と言いたい所だが、各所に装備されている近接防御兵器や搭載されているノーマルＩＳが黙っていないだろうな・・・それはお前自身で何とかしてくれ。

懐に飛び込んだ後は、各所にある砲台を破壊してくれ。そうすれば、内部に被害が伝播して、最終的にはスピリット・オブ・マザーウィルを墜とすことが出来る。随分とお粗末な設計だな・・・いや、これくらいの弱点でも無ければフェアでは無いな。

あぁ、言い忘れていたが、お前がスピリット・オブ・マザーウィルと交戦を開始する前に、ここはマザーウィルの射程圏内に入る。お前を気にせずにロングレンジキャノン砲をこっちに向けてぶっ放してくる可能性もあるが、こっちは私達がどうにかするから心配しなくても大丈夫だ。

説明は以上だ。あぁ、言い忘れていたが、現在マザーウィルはここ

から十二時の方向、二百数キロ先にいる。お前との予想接触時間はＶＯＢを点火してから二分後。まぁ、お前が行くのだから、万一なんてことは間違っても無いと思うが・・・死ぬなよ』

「これがＶＯＢか。不満を言う訳じゃ無いんだが、でかいな」

夜明は首だけを回して視線を背後に向ける。そこには推進翼（スラスター）に接続されるような形で六基の大型エンジン、ＶＯＢが付けられていた。両足はカタパルトで固定されているため、首や腕を動かす以外の行

動が取れない。

『夜明、聞こえる？』

「あ、シャル？」

オープン・チャネルから通信が入ってくる。しかも、その相手は何故だかシャルだ。何故、このタイミングでシャルが通信を入れてきたのか訝しがっていると、すぐにその疑問は氷解することに。

『他の皆はスピリット・オブ・マザーウィルの砲撃を防ぐために展開してるよ。それで、僕は夜明のオペレーターを務めることになったんだ』

「へぇ・・・って、となると朔夜ってのは何してんだ？」

『スピリット・オブ・マザーウィルの砲撃を防ぐのに参加してる流星のオペレーターをしてる。いや、あの場合は皆のオペレーターをやることになるのかな？』

「まぁ、よく分からんがよろしく頼むぜ・・・って、そろそろか」

カタパルトの整備をしていたエンジニアの人達が、蜘蛛の子を散らすようにカタパルトの脇へと移動している。一人のエンジニアが両手に旗を持って、出発の合図を送ってきた。合図が送られたのを見て、夜明はＶＯＢを点火、月光の翼（ムーンライト・ウィング）を展開させる。

「んじゃま、行きますか」

『頑張ってね』

「へいへい」

この会話からはまったく想像できないだろうが、今からこの男は闘い、人の命を奪う闘いをしに行くのだ。それを自覚してないのか、夜明の声には全く緊張感が無い。夜明のオペレーターを務めたシャルの後ろ姿を見ながら、冬華は複雑な思いを胸の内に抱える。

（十五歳の少年が最古参のＡＦ、スピリット・オブ・マザーウィルを撃破しに行く・・・いや、撃破出来るのか？　何より耐えられるのか？）

人を殺したと言う事実に？　だが、この時彼女は知らなかった。月光夜明がどれ程規格外で、レイジングウィングがどれ程化け物であるかを・・・。

六基の大型エンジンが描く赤い炎と黒煙の軌跡が超高速で夜明を運んでいることを示す。同時に月光の翼（ムーンライトウィング）から放たれる蒼銀の粒子が空気中に散布され、病的な白さを持つ砂漠に降り注いだ。一向に進んでいないのでは？　と錯覚を覚えさせるような白い砂の平原が続いているが、かつてここに広がっていたであろう、砂から突き出している建築物の成れの果てが風景から引き剥がされるように後ろに流れていることから、自分が超高速で動いている自覚が持てる。

『・・・夜明！！　マザーウィルからの射撃が来るよ！！』

シャルの通信が入った刹那、夜明の視界に幾つもの閃きが奔った。夜明が横にブーストした瞬間、さっきまで彼がいた所をマザーウィルのロングレンジキャノン砲から放たれた必殺の弾丸が通り過ぎる。しかも、一発や二発ではない。数え切れない程の弾丸が無音で、そして高速で夜明に迫ってきていた。

「・・・行くぜ、レイジングウィング」

ＩＳを上回る大きさの弾丸、それも数え切れない量の弾丸が高速で迫ってくる。夜明は一切の物怖じを見せず、自身の相棒である白い装甲に呼びかけた。頭の中で何かが弾けるような感覚を味わい、夜明の瞳と髪が蒼銀に染まる。夜明の視界の中で全ての弾丸がスローモーションになった。夜明は両手に握ったウィングスターの出力を

最大にまで引き上げ、全ての弾丸を撃ち抜いた。目の前が爆発と黒煙で彩られ、夜明の視界を塞ぐ。ＶＯＢの出力を更に上げ、夜明は黒煙を突き破った。

そして見た。

『・・・作戦開始。ＢＦＦ社製ＡＦ『スピリット・オブ・マザーウィル』を撃破するよ』

空と白い地平線が交差するポイント。そこに陽炎と共にそびえ立ち、鈍重で雄大な一歩を踏み出す要塞を。スピリット・オブ・マザーウィル。夜明はその余りの巨大さ、存在感に一瞬だけ自分が戦闘空間にいることを忘れた。

『・・け・・・あけ！　夜明！！　回避行動を取って！！』

「あ？　ってうぉぉぉ！！！！！」

目の前に迫ってきた弾丸のカーテンに漸く気付き、夜明は死ぬ気で横に回避した。一瞬でもシャルの声に気付くのが遅れていたら、確実にお陀仏していただろう。背後で弾丸が砂漠に降り注ぐ爆発音を感じながら、夜明はシャルに感謝する。

『しっかりして夜明！　君が今してるのは超高速戦闘なんだ、一瞬の気の緩みが死に繋がるよ！！』

「あ、あぁ、悪い！！」

シャルの言うとおりだと、夜明は目の前に意識を集中させた。流石にロングレンジキャノン砲を連射し続けるのも限界があるのか、マ

ザーウィルはロングレンジキャノン砲からの砲撃を中断している。
替わりと言っては難だが、横に大きく突き出している甲板から白い煙を引いて大量の何かが射出された。ミサイルだ。

「おいおい・・・人一人に向けられる量じゃ無いだろ」

口元を引きつらせながら、夜明は物理的重量を感じさせるミサイルの壁に突っ込んでいった。と言うか、時速六千キロの馬鹿げた速度で飛んでいるのだから突っ込む以外に選択肢は無い。

「シャル、どうすれば避けられる？」

『・・・ミサイルが夜明に集中する前に突破するって手段があるけど、流石に無理かな』

「ってぇことは・・・」

『道理（ミサイル）を蹴飛（はかい）ばして無茶（じしん）を通せ！！』

「了解！！」

上も、下も、右も左も真ん中も。視界全てがミサイルで埋め尽くされている。詰まるところ、万事休す。と言うか、死ぬしか道が残ってないような気がする。死ぬ以外に道が残っていないのならやることは一つ。

「推し通る！！」

その手で道を創り出すのみ。スターライト・ブレイザーのロックを解除、ミサイルが殺到する一瞬でエネルギー供給を終了させ、ミサ

イルを薙ぎ払った。目の前が蒼一色に染め上げられ、次の瞬間には爆炎と黒煙が広がって夜明に殺到しようとしていたミサイル全てが爆発する。放たれたスターライト・ブレイザーはミサイルを全て破壊し、そのままマザーウィルへと飛んで六脚の内の一つを吹き飛ばした。

『ＶＯＢ使用限界！！　パージするよ！！』

シャルの声が響いたゼロコンマ、夜明を超高速の世界へと誘っていたＶＯＢが空中分解した。慣性の法則に従いながら宙を飛び、夜明は圧縮させていた月光の翼（ムーンライトウィング）を広げる。ＶＯＢの分と月光の翼（ムーンライトウィング）の展開で爆発的な推力を得た夜明はマザーウィルの甲板に飛び乗った。

（かなりの数だな！）

甲板の上にいる何十機のノーマルＩＳの間を滑るように動きながら、夜明はウィングスターを連射する。上からは航空機、足下からはマザーウィル搭載兵器、周りからはノーマルＩＳ、有りとあらゆる角度から夜明を狙った射撃が襲いかかってくる。回転するように動きながら、夜明はノーマルＩＳの武装、スラスターのみを撃ち抜いていった。

「っ！！・・・ちっ」

不意に左腕に衝撃が走る。見ると、ノーマルＩＳの射撃でウィングスターが撃ち抜かれていた。夜明は微かな舌打ちを漏らしながらウィングスターを放棄する。ウィングスターが爆発するのを視界の隅に置きながら甲板から飛び降り、マザーウィルの足下に広がっている街の廃墟へと飛び込んだ。飛び降りた勢いを殺すため、夜明は左にある建物の残骸に手を突っ込む。左手で建物、両足で道路を削り

ながらかなりの距離を滑り、建物の中間当たりで漸く止まった。

『スピリット・オブ・マザーウィルの各部兵装の起動を確認・・・これからだよ、夜明』

「了解だ」

甲板をゆっくりと動かせながら、マザーウィルは夜明に主兵装たる三連ロングレンジキャノン砲を向ける。自身に向けられた三つの砲口を見据え、夜明はゆっくりと息を吐き出す。

「行くぜ、レイジングウィング」

もう一度相棒に呼びかけると、レイジングウィングは夜明の呼び掛けに応えるように月光の翼（ムーンライトウィング）を広げた。小さな、だが強烈な旋風が彼等から放たれた。

スピリット・オブ・マザーウィル撃破（前編）（後書き）

ノーマルＩＳ、専用機ではない量産型のＩＳ。男も操縦できる。

（ザクとかそんな類のを思い浮かべてください）

スピリット・オブ・マザーウィル撃破（後編）（前書き）

今回は、とあるキャラの関連者が出てきます。

スピリット・オブ・マザーウィル撃破（後編）

「夜明がスピリット・オブ・マザーウィル撃破に向かって一分程度・・・そろそろだな」

うっすらと大気中に立ち込めている、夜明がＶＯＢを使用して飛翔していったことを示している黒煙を見据えながら、太陽は静かに呟く。その右隣にＩＳを展開させた鈴音、ラウラ、左隣に一夏、箒、後ろにセシリア、流星が展開している。彼女たちの作戦は単純明快、スピリット・オブ・マザーウィルから放たれる砲撃から造船基地にある戦闘艦『アークエンジェル』を護ることだ。

「二百キロの射程を誇るロングレンジキャノン砲か・・・正直言って、そんなのが本当にあるのか甚だ疑問だ」

「同感。仮にあったとしても、そこまで射撃精度は高くないでしょ」

ラウラと鈴音が何かを言ってるのを聞き流し、太陽はオールデリートのビーム刃を展開させる。視界に一筋の煌めきが奔った瞬間、思いっ切りオールデリートを振り抜いた。左手が吹き飛ぶような感覚を味わいながら、太陽は飛来してきた物を真っ二つにする。真っ二つにされてあらぬ方向に吹き飛んでいく飛来物に疑問を感じる流星達だったが、すぐに答えは出た。この状況で、マザーウィルがいる方角から飛んできた飛来物。そんな物、ロングレンジキャノン砲の砲弾以外想像できない。

（これは・・・予想よりも威力が遙かに高いな）

未だに退かない痺れを左手に感じながら太陽は流星達のＩＳスペッ

クを詳細に思い返す。第五世代型であるトワイライトウィングを装備している流星はともかく、過去の第三世代型を使っているラウラ、鈴音、セシリア個々の力では砲撃を防げないのは自明の理、第四世代型の白式や紅椿を装備している一夏や箒でも難しいだろう。

「太陽、今のは・・・」

「恐らく、夜明を狙ったスピリット・オブ・マザーウィルの流れ弾だろう・・・すぐに第二波が来るな。ラウラ、鈴音！　お前達はＡＩＣや衝撃砲を使って、一瞬でもいいから砲弾を止めろ！　セシリア、お前はスターライトＭＫⅠ?の出力を最大にまで上げて、二人が砲弾を止めた瞬間に砲弾を撃ち抜け！」

「そ、そんなの無理ですわ！」

「無理かどうか何かは聞いてない、やれって言ってるんだ！！」

セシリアの悲鳴に太陽の怒号が返ってくる。理不尽とかを超越して、無茶苦茶だ。

「無茶です！」

「無茶を通して道理を殴り壊せ！！　流星！　お前はセシリアと一緒に砲弾を撃ち壊せ！」

「は、はい！」

「一夏！　お前は私達の後ろに下がって零落白夜を何時でも発動できるようにしていろ！　箒は一夏と一緒に下がって絢爛舞踏を発動させておけ！」

「分かった！」

「り、了解だ！！」

一夏と箒が後ろに下がったのを確認し、太陽は視線を前に戻す。太陽の視界に幾つもの光が点滅した刹那、流星に朔夜の通信が入った。

『流星！　スピリット・オブ・マザーウィルからこの基地を狙った射撃を確認！　来るぞ！！』

数え切れないミサイルが夜明目掛けて降り注ぐ。夜明の頭上を覆うほどの密度で放たれたミサイル群は夜明を捉えることが出来ず、甲板に直撃するだけ。甲板の上にいるノーマルＩＳの武装とスラスターだけを壊し、粗方を片づけた夜明は甲板から飛翔してマザーウィルの上へと移動する。

「にしても丈夫だな、こいつ・・・」

試しにマザーウィルの機関部を撃ち抜こうと最大出力のスターライト・ブレイザーをぶっ放したのだが、機関部を護っている装甲に大きめのクレーターを作るに留まった。楽をしようとする物ではないな、としみじみ思いながら横に高速ロールして残像を残す。夜明を追いすがっていたミサイル群が残像を通り過ぎ、目標を見失って方々へと四散していった。三連装のロングレンジキャノン砲がゆっくりと砲口を向けてくるが、超威力を誇る替わりに動きが鈍重であるロングレンジキャノン砲が夜明を捉えられる訳も無く。

「遅いっての」

ロングレンジキャノン砲の砲口が向けられるよりも遙かに速く夜明はマザーウィルの真下に潜り込んだ。マザーウィルの足下を回るように動きながら片腕に残ったウィングスターの銃口を上に向け、三組二対の甲板にある垂直ミサイルポットを撃ち抜いていく。マザーウィルの足下から飛び出した夜明を砲台ユニット、対空マシンガン、スナイパーキャノンが狙う。轟音を放ちながらそれぞれの銃口から放たれた弾丸は正しく壁。

「壁があるなら殴って壊す！！」

急停止して空中に留まり、夜明は全ての武装にエネルギー供給を始めた。数秒と掛からずに全ての武装へとエネルギーが行き渡り、夜明の双眸をマルチロックオンバイザーが覆う。バイザー内がロックオンカーソルで埋め尽くされたのを確認し、夜明はスターライト・フルバーストを放った。レイジングウィングの全武装から放たれた射撃は全ての弾丸を消し飛ばし、マザーウィルの武装を幾つか破壊する。フルパワーのスターライト・フルバーストの反動で使用できなくなった武装を待機状態に移行し、夜明は腰からスターライザーを引き抜いた。

『マザーウィルの内部に武器を破壊した被害が伝播してる。この調子だよ！』

オープン・チャネルを通したシャルの声に無言で首肯し、夜明は月光の翼（ムーンライトウィング）を羽ばたかせてマザーウィルへと突っ込んだ。

「・・・まさか、これ程とはな」

ブリーフィングルームのディスプレイを見ながら、冬華は感嘆の声を上げる。それは周りにいる者達も同じ事だ。ディスプレイに映し出された夜明は最初にウィングスターを破壊された以外に攻撃を一切受けず、無傷でマザーウィルを破壊している。何よりも驚くべきなのは、地上最強を謳われたマザーウィルを破壊寸前にまで追い込んでいるのに、マザーウィルに搭乗している兵士を誰一人として殺していないことだ。

「伝説を越えて神話となった存在、月光夜明・・・強ち誇張という訳でも無さそうだな」

蒼銀の粒子を月光の翼（ムーンライトウィング）から放出しながら両手に握ったスターライザーを振り抜く夜明。スターライザーが描く軌跡は正確にマザーウィルの一部を切り裂いていく。

「朔夜！　流星達の方はどうだ！？」

冬華の問いに、朔夜は肩越しに振り返りながら答える。

「ジリ貧ではありますが、太陽さんの指示で全員どうにか無傷でマ

ザーウィルの砲撃を防いでます！」

「よし、そろそろアークエンジェルに皆が乗り込んだ頃だな。総員！　我らは月光夜明がマザーウィルを破壊した後、アークエンジェルに移動する！」

「「「了解！！」」」

「第三波来るぞ！！」

「休む暇も無いじゃない！！」

「鈴！　口ではなく手を動かせ！　死にたいのか！！」

次々と飛来してくるマザーウィルの砲撃を太陽が切り裂いていく。太陽が切り損ねた砲弾をラウラがＡＩＣで、鈴音が衝撃砲の連射で動きを止めた所をセシリアが狙い撃って砲弾を破壊する。三人が撃ち漏らしたのを流星がビームマグナムで撃ち落とし、それでも落とされなかった砲弾を一夏が零落白夜で切り裂き、どうにか絢爛舞踏を発動させた箒が常に一夏のエネルギーを回復しているような感じだ。

「夜明さん、まだマザーウィルを破壊出来ませんの！？」

「あっちは私達と違ってロングレンジキャノン砲だけじゃなく、垂直ミサイルやらマシンガンなんかを相手にしてるんだぞ！　それを考えれば、私達の方が遙かに楽だ！！」

まぁ、垂直ミサイルやマシンガンが降り注ぐ中自分を遙かに凌駕する大きさの兵器と闘うか、それとも流星群の如く襲いかかってくる超威力の砲弾を防ぐのか。どっちが楽かなんて、一概には決められないだろう。第三波の砲撃を防ぎきり、第四波が来るまでの短い間に太陽達は息を整える。いつ、マザーウィルからの砲撃が来ても良いように身構えていた太陽は、ふとあることに気付いた。

「砲撃が・・・止んだ？」

さっきまで一時として途切れなかった、視界を埋め尽くすほどの砲撃がピタリと止んでいるのだ。それが表すことは・・・。

「ここまで来れば大丈夫か？」

砂漠から半身を突き出している崩壊寸前のビルの屋上にゆっくりと着地し、夜明は後ろを振り返った。不屈の翼が視線を向ける先には、地上最強を謳われたスピリット・オブ・マザーウィルが各部より炎や黒煙を放っている。

『総員地上装備！　マザーウィルは陥落するぞ！！』

『・・・スピリット・オブ・マザーウィル、撃破を確認・・・夜明、お疲れさま』

「シャルこそ・・・にしても・・・疲れた」

最古参のＡＦ、スピリット・オブ・マザーウィルの相手は。老兵と表現されたスピリット・オブ・マザーウィルだが、その老兵が今日に至るまで地上最強の座を降りなかったことにはキチンとした理由があるのだ。一瞬として気を抜けなかったことから、夜明は地上最強の名が伊達ではないと思い知らされる。

『それじゃ、こっちで迎えに行くらしいから、そこでゆっくり待って・・・レーダーに反応を確認・・・これはヘリかな？』

「マザーウィルから避難した兵士達か？」

シャルがレーダーで謎の影を確認したのと同時に夜明もハイパーセンサーを起動させた。起動から数秒とかからずにハイパーセンサーは夜明の頭上を動いていた何かを捕捉する。夜明が視線を上げてみると、そこにはシャルと夜明の予想通りにヘリが浮かんでいた。ホケーッ、とヘリの行方を見続けていると、ヘリから小さな何かが落ちてきた。

「あぁ～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あぁっ！？」

その何かが人間だと言うことを理解するのに数秒と要さず、しかもパラシュートの類を付けてないことから夜明は自分目掛けて落ちてきた人影をキャッチした。

「キャア！！」

「へぶぅっ！！」

言わずとも分かると思うが上の悲鳴が落ちてきた人影の物で、下のが夜明の物だ。落ちてきた人影の下敷きになって夜明が目を回していると、そのフードにゴーグルと顔の下半分以外を完全に隠した人、女性は意識を取り戻す。

「あたた・・・おぉ、これは失礼」

女性が身体の上から退いたので、夜明は思いっ切りぶつけた後頭部を押えながら立ち上がった。

「あだだ・・・お前、パラシュートも無しでスカイダイビングするなんて死にたいのかよ？」

「はっはっは、面目ない。私の祖先が似たような事をしたと聞いて、私も同じようなことが出来るか試してみたかったんだ」

「随分とパワフルなのね、お前の祖先・・・ちょっと待て、お前、俺の知り合いにもの凄く似てるぞ」

夜明は妙なその女性から既視感を感じ、一歩後退して女性をマジマジと観察した。声の感じからして、年は十五歳ほど。その割には異常なまでに成長した胸。そして何より、雰囲気が夜明の知るある人物と似ていた。

「流石は月光夜明。すぐに気が付いたか・・・名乗るのが遅れたな」

女性、もとい少女は笑いながらゴーグルとフードを外し、顔をさらけ出す。顕わになった少女の素顔を見て、夜明はポカンと口を半開きにした。

「私の名は夕陽黄昏（ゆうひたそがれ）。夕暮太陽のひ孫に当たる者だ」

そこには、髪と瞳が銀色の太陽が悪戯っぽい笑みを浮かべて立っていた。

黄昏の正体　動き出す更識

「「「「「太陽の・・・ひ孫？」」」」」

「あぁ。以後よろしく」

「・・・似てるな、確かに」

夜明が太陽の子孫と名乗る美少女、夕陽黄昏と衝撃的な出会いを果たして数時間後、二人は月光冬華が指揮する戦闘艦『アークエンジェル』に回収された。アークエンジェルのブリッジへと案内された、正確には夜明を出迎えたのは太陽を筆頭にした恋する乙女一同と一夏達だった。流星と朔夜はと言うと、黄昏を見た瞬間に固まってしまった。しかも、朔夜は死ぬほど嫌そうな表情を浮かべている。太陽達が黄昏の登場に驚愕してる中、夜明と一夏は何をしてるのかと言うと・・・

「・・・一夏、俺は今猛烈に感動してる」

「奇遇だな、俺もだ」

「「まさか、生きてる間に空飛ぶ戦艦に乗ることが出来るなんて」」

アークエンジェルに乗れた嬉しさの余り、肩を組んで漢泣きしていた。箒が乾いた笑いを浮かべて二人の方を見ていると、反対の方からどす黒い何かが流れてくる。振り返ってみれば、セシリア、鈴音、シャルがもの凄いどんよりした空気を放っていた。理由は言わずもがな、太陽と話している黄昏だろう。

「銀髪銀眼・・・」

「あれってさぁ・・・」

「何処からどう見ても夜明の特徴だよね・・・」

つまり、

「「「夜明と結婚したのは太陽」」」

「何を悲しそうな顔をしてるんだお前達」

三人が頭の周りにどす黒い雲を発生させてＯＴＺ状態になっている中、一人だけＯＴＺになってないラウラが励ますような言葉を三人にかけた。だが、その目はどこか虚ろで、それでいてもの凄く血走っている。

「絶望するのはまだ早いぞ、黄昏は・・・私と太陽の子孫だという可能性もある！！」

「それで行くと結局ラウラは夜明と結婚出来てないよとか色々と突っ込みたいことがあるけど、それ以前に女の人同士じゃ子供が出来ないから！！　落ち着いてラウラ！！」

銀髪と言う特徴的部分だけ見れば、成る程ラウラの子孫と言う可能性もある。だが、彼女は女性、そしてまた太陽も女性。天地がひっくり返っても二人から子供が生まれることはない。そんな生物的な常識を超越してでも、ラウラは黄昏が夜明と太陽の子孫であることを否定したいようだ。ふと、黄昏の身体を触ったりしていた太陽が大きく息を吐き出す。

「オッケ～オッケ～、大体は理解した・・・黄昏、お前は人間か？」

太陽の問いにその場の空気が固まった。その問いに、最初は驚いた表情を浮かべていた黄昏だが、すぐに愉快そうな笑い声を上げ始める。

「ハハハハ、流石は私の曾お祖母様、察しのいいことで。貴方の言うとおり、私は人間ではない。正確に言うと、男性と女性が愛し合った結果、産まれた生命では無いと言うべきか」

「・・・太陽、どういうこった？」

話の流れについていけない一同を代表して夜明が太陽に訊ねた。夜明の問いに肩を竦めながら、太陽は黄昏を指差す。

「簡単な話だ。こいつは私と似すぎているんだ・・・いや、似すぎてるなんて物じゃない。髪の色と瞳の色以外、全て同じなんだ。指紋声紋網膜、スリーサイズまでな」

どうやったら見ただけ、聞いただけで指紋声紋網膜を確認することが出来るんだ？　と言う疑問が湧き上がってくるだろうが、そこは太陽だからと言う理由で納得して欲しい。戸惑いの表情を浮かべる夜明達を無視し、太陽は再び黄昏に視線を向けた。

「もう一度聞くぞ、夕陽黄昏。お前は何者だ？」

「スピリット・オブ・マザーウィルが陥落したらしいな」

円卓。カラード上位のリンクス達が沈黙を貫いている中、ローディーがポツリと呟いた。この面子（王小龍、ロイ、ジェラルド、ローディー、ウィン・D、オッツタルヴァ）が再び円卓に集められた理由はそれだ。数日前、マザーウィルの乗組員を名乗る兵士から連絡が入ってきたのだ。

マザーウィルが陥落した、と。

その報告に誰もが驚きの表情を見せたが、オッツタルヴァだけが予想通り、と言った表情を浮かべている。だが、更に入ってきた連絡

で表情を歪ませることに。

マザーウィルに搭乗していた乗組員は全員無事。一度闘い、尚かつ進化した夜明とレイジングウィングを見たオッツタルヴァでもそれは予想外のことだった様だ。ＡＦはその巨大さ故に大人数の兵士を内包している。その人数は数百に達するだろう。その全員が無事にマザーウィルから避難できたと言うことは、不屈の翼がマザーウィルへの被害を最小限に留めて破壊したと言うことに他ならない・・・もっとも、全武装を破壊され、六本ある内の脚を一本吹き飛ばされた状態を最小限の被害と言えるかどうかは甚だ疑問だが・・・。

「マザーウィルが陥落した、でも乗組員が全員生存している・・・不屈の翼ってのは本当に人間なのかね？」

円卓の上に乗せた両脚を組み、組んだ両手で頭を支えながらロイはオッツタルヴァを見る。形式上世界最強のリンクスであるオッツタルヴァをもってしても、数百人の兵士を殺すことなくＡＦを破壊するなんて芸当、とてもじゃないが出来ないだろう。

「生半可なリンクスやＡＦでは目立った被害一つ与えられないか・・・いや、マザーウィルを生半可と表現するのはおかしいな。だが、どうするんだ？　ここで私達がくっちゃべっている間にも、彼等はラインアーク地球本部に向かっているんだぞ」

ウィン・Ｄの言うとおり、不屈の翼と愉快な仲間達を乗せたアークエンジェルは現在海を横断してラインアーク地球本部へと向かっているとの報告が入ってきている。このまま何の妨害も無しに進んでいけば、数週間でラインアーク地球本部へと辿り着くだろう。

「アークエンジェルの予想移動地点にギガベースを配置すると言う

手もあるが・・・果たして障害に成り得るかどうか・・・」

「それなのだがな、奴らを墜としたいと、私経由でＢＦＦに依頼が入ってきた」

微かな呻き声を漏らしているローディーを一瞥し、王小龍が徐ろに口を開いた。

「ほぉ。自ら不屈の翼を墜としに行こうとする者がいるとは・・・随分と無鉄砲な者もいたものだな・・・それで、その依頼主は？」

「二十代目更識楯無だ」

「「「「「っ！！」」」」」

王小龍を除く全員が固まった、彼の口から出てきた名はそれ程の力を持っているのだ。

二十代目更識楯無。どこの企業にも所属せず、傭兵としても活動をしていない異端の非公式リンクス。どれだけの金を積まれようが気に入らない依頼は全て蹴り、逆に気に入った依頼は雀の涙ほどの金でも完璧に遂行する。全ての企業から煙たがられている存在だが、確かにその者のカラードランクは存在しているのだ。カラードランク０、永遠の空席と言われた最強の王座。そこに君臨する者の名が二十代目更識楯無、そして専用機『激流の女神（ハイストリーム・アテナ）』である。

「あの更識が動いたか・・・どういう風の吹き回しだ？」

どれ程の金を積まれようが、気に入らない依頼は全て蹴るあの楯無が自ら動き出す。どういう経緯で動き出したのか、リンクスである

彼等にはとても興味が湧いてくるのだろう。全員の視線を一身に浴び、王小龍は微かに表情を曇らせた。

「あの小娘、どこで情報を仕入れてきたのかは知らないが、この時代に不屈の翼がやって来たことを知ったらしくてな。暇潰しに見に行くと言っていたぞ・・・依頼の話をしていた最後の辺りで『流星をかっ攫って身も心も私色に染めるんだぁ～い』と惚けた笑みを浮かべていたな」

・・・更識家当主『更識楯無』。時代が移り変わっても、やることは変わりないらしい・・・。

「～♪　～♪」

何処までも広がる澄んだ水面。この時代では非常に珍しい透明度をしている湖の水辺を、金髪碧眼の純白のドレスを纏った美少女が踊るように歩いていた。彼女の名はリリウム・ウォルコット。若干十五歳にしてカラードランク2にまで登り詰めた王小龍の秘蔵っ子。才色兼備を絵に描いたような彼女だが、一つだけ困った癖を持っている。それは・・・

（・・・ここは、どこなのでしょうか？）

後先の事を一切合切考えないで自分の知らない所へと行こうとすることだ。見知らぬ道を歩き続けていたら活動中の火山の麓にいた、綺麗な蝶々を追いかけ、気が付けば流氷の上、なんてこともある。大抵の場合、取り返しのつかない事態に為る前に王小龍が探しに来て数時間に及ぶ説教をするのだが、彼女は王小龍の説教など右から左へと受け流して今日も見知らぬ道を歩き続ける。そうしていたら、いつの間にか綺麗な湖へと辿り着いたのだ。

（どうしましょう？　王大人が来るまでじっとしていましょうか・・・ん？）

ふと、自分の専用機『アンビエント』に通信が入ってきていることに気付き、リリウムはプライベート・チャネルを開いた。

『どちら様でしょうか？』

『リリー？　私だけど』

『楯無様ですか？　ご機嫌よう』

通信の相手はリリウムの親友、更識楯無からだった。目の前に話し相手がいるわけでも無いのにリリウムはスカートの裾を摘んで軽くお辞儀する。その光景が容易に想像できたのか、通信の向こう側から苦笑が聞こえてくる。

『ははは、相変わらず礼儀正しいわね君は。まぁいいや。君はまた王爺さんに黙って散歩（と呼ぶには些か活動範囲が広すぎる）に行ったんだって？　ダメだよ、王爺さんに心配かけさせちゃ』

『・・・あぁ、確かに王大人には何も言わずに出てきましたわ』

『だろうね・・・それは置いておいて、本題。リリー、例の噂は知ってるわよね？』

『はい。伝説の存在、月光夜明とその専用機『不屈の翼（レイジングウィング）』が過去からやって来たと』

日がな一日散歩をしてても、その噂は嫌でも耳に入ってくる。

『そそ、それ。流星に会いに行く序でにその夜明ってのを見に行こうと思うんだけど、リリーもどう？　あ、王爺さんには許可貰ってるから安心して良いわよ』

準備のいいことだ。ウ～ン、とリリウムは顎に指を当てて考え込む。確かに、月光夜明には興味があるし、見てみたいとも思う。だが、それ以上に、

（流星様・・・）

頬を染めるリリウム。流石は夜明の子孫、どうやら流星は過去の彼女に対してフラグを立てていたらしい。それも結構な代物を。その証拠に、流星のことを考えただけでリリウムの頬は完熟したトマトのように赤くなっている。

『おぉ～い。顔を真っ赤にしてるであろうとこ悪いんだけど、返事を聞かせてくれないかい？』

『行きますわ』

『即答だね・・・ま、それじゃ会いに行くとしますか。愛しの殿方に』

『はい！！』

斯くして、海の上を横断している夜明達に危機が迫ろうとしていた・・・危険かどうかは甚だ疑問だが・・・。

女難がやってくる

「先ず私が何者かという話だが・・・夕暮太陽と月光夜明の遺伝子を掛け合わせて作られた異形中の異形さ」

髪と目が銀なのは夜明の遺伝子が混ざってるからさ、と黄昏は自身の銀髪を摘んで引っ張て見せる。取り敢ず、黄昏が夜明の直系の子孫でないと分かってセシリア達はホッと息を吐いた。だが、彼女たちが吐いた息はすぐに凍り付くこととなる。

「私が作られたのは今から十五年前。企業連の気違い科学者共が嘗て名を馳せたリンクス・・・『ジョシュア・O・ブライエン』や『ベルリオーズ』、そして伝説を越え神話となった存在『月光夜明』を越えるリンクスを作ろう、って馬鹿げた計画が発足してな。名を『Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｒｅｂｉｒｔｈ』・・・伝説を復活させようって意味だったのかね？　ま、どうでもいい話か。とにかくだ、私はその気違い科学者共に生み出された化け物、って訳だ」

「・・・お前は化け物なんかじゃ無いだろ」

誰にも聞き取れない程度の声量で流星は呟く。確かに普通の人達には聞こえなかったみたいだが、人外のスペックを持った太陽や夜明、そして黄昏にはばっちしと聞こえていたらしい。その証拠に夜明と太陽は感心したように流星を見つめ、黄昏は心底嬉しそうに微笑んでいる。

「嬉しいことを言ってくれるな・・・話を戻そう。『Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｒｅｂｉｒｔｈ』で数万人の子供が生み出され、その内の二人を除く全員が死んだ。一人は勿論私、もう一人は行方も何もかもが

分からない。『Ｐｒｏｊｅｃｔ（プロジェクト）　Ｒｅｂｉｒｔｈ（リバース）』が最終段階に入った時だ。気違い科学者共の研究所にラインアークの皆様がやって来て、科学者共を皆殺しにしたのさ。その中に太陽の孫がいて、その人が私を引き取って育ててくれたのさ」

お分かり？　と訊ねてくる黄昏に夜明達は頷いてみせる。早い話、黄昏は太陽の孫に当たる人の養子になったと言うことだ。納得して頷く夜明達を見て、黄昏は不思議そうに首を傾げる。

「怖くないのか？　私は人を殺すために生み出された様な存在なんだぞ？」

「いや、怖いって聞かれてもねぇ・・・」

「私もお前と似た、と言うかそれ以上の存在だし」

「「「「「「確かに」」」」」」

頷き合う夜明達。彼等を黄昏が不思議そうに見ていると、黄昏と流星の間に立ちはだかる様な形で腕組みをしている朔夜が黄昏を睨んでいた。

「で、お前は何しに来たんだ？　本部でＩＳの開発をしてたんじゃなかったのか？」

どこか刺々しい朔夜の声を意に介さず、黄昏はセシリア、鈴音、シャル、ラウラを指差した。

「彼女たちのＩＳを改造するためさ。夜明のレイジングウィングや太陽のバルディッシュトワイライト、織斑一夏の白式に篠ノ之箒の

紅椿はともかく、彼女らのアンティーク同然のＩＳでは企業連のリンクスとは闘えないのが目に見えてるからな・・・ま、そんなのは建前で」

何やら喚いている朔夜を押しのけ、黄昏は流星に抱きつく。

「本当はお前に会いに来たんだぞ、流星」

「は、はぁ・・・ありがとう・・・？」

首に両腕を回してしなだれかかってくる黄昏に、流星は笑えばいいのか頬を引きつらせれば良いのか分からない表情を浮かべた。口調の語尾が疑問系なのも致し方ない。

「黄昏ぇっ！！　流星からはな「五月蠅い」ギャピィッ！！！」

軽々と押しのけられていた朔夜が顔を真っ赤にさせて黄昏の肩を掴んで流星から引っ剥がそうとするが、人体急所の一つである人中に的確な打撃を与えられ、余り可愛いとは言えない悲鳴を上げて撃破される。倒れ込む朔夜を心配そうに見ている流星の胸に頬摺りしながら、黄昏は口端から軽く涎を流した。

「あぁ、お前は可愛いな・・・性的な意味で食べたい」

「誰か助けて！　よく分からないけど色々な意味で危ない気がする！！」

流石は夜明の子孫。とんでもない女難に見舞われている。流星は藻掻いて黄昏の両腕から逃れようとするが、流星を逃がすわけもなく黄昏は両腕の力を強くしていった。流星の服を半分ほど脱がしたと

ころで、ふと黄昏は夜明の方を見る。それから流星に視線を向け、納得顔で頷く。

「うん。曾お祖母ちゃんが惚れるだけあっていい男だけど・・・やはり流星の方がいい男だな」

ビシィッ！　と太陽の額に青筋が浮かんだ。額に浮かべた青筋そのままに、太陽は一歩前に踏み出した。

「随分と戯けた事を抜かすな。お前みたいな小娘に抱きつかれて狼狽えている小僧なんかよりも、夜明の方が数万倍はいい男だ」

今度は黄昏の額に青筋が浮かぶ。顔を赤く染めてあうあう言っている流星を離し、太陽同様一歩前へと踏み出す。

「はぁ？　何を言ってるんだ？　女みたいに髪を伸しているような女々しい奴がいい男な訳無いだろうが」

「何だと？」

太陽が更に一歩前に踏み出す。

「何だよ？」

黄昏も更なる一歩を踏み出す。もう両者は鼻の頭がくっつきそうな位に距離を縮めていた。互いの胸が互いの胸で押し潰されて凄いことになっている。特殊な性癖でも持ってない限り全人類の男達が前屈みになる光景だが、如何せん二人の雰囲気が怖すぎて逆に萎縮してしまう。

「性奴隷にして一生嫁に行けないような身体にしてやろうか、雌犬？」

太陽が黄昏の顎を片手で持ち上げれば、

「処女膜ぶち破って啼かせ殺してやろうか、雌豚？」

黄昏は太陽のズボンの中に手を侵入させる。二人が放つ空気で凍り付く一同。何処からともなく、「よろしい、ならば戦争だ」なんて台詞が聞こえてきそうだ。誰もが動けぬ中、見かねた冬華が二人の間に割ってはいる。

「取り敢ずその話題は置いておけ。黄昏、お前は彼女たちのＩＳを改造しに来たのでは無かったのか？　それに太陽。君だって黄昏が君たちのＩＳに変な事をしないか監視しておいた方がいいのではないか？」

冬華に諭され、二人は渋々互いから離れる。

「いいだろう。どんな風に改造するか？　それを決めがてら夜明と流星、どっちがいい男か討論しようじゃないか」

「望むところだ。互いに長い夜になりそうだ」

獰猛な笑みを顔に浮かべ、二人は歩いていった。

そんなこんなあって数日が経過した。アークエンジェルは相変わらず海上を横断している。太陽と黄昏は二人だけでエンジニアルームに籠もり、セシリア達のＩＳを魔改造していた。最初の頃、黄昏にＩＳを渡すことを渋っていたセシリア達だが、太陽も一緒に作業することで漸く折れた。特にラウラは聞き分けが無かったが、夜明に撫でられて一瞬で陥落している。特に企業連からの襲撃があった訳でもないので、夜明達はのんびりと過ごしていた。

その平穏はすぐに破られることになる。ある二人のリンクスの手によって。

『アークエンジェルにお乗りの皆さ～ん！　聞こえますか～！？』

突如、アークエンジェル内部にあるスピーカーから底抜けに明るい声が流れてくる。時間帯が昼食時だったので、ある者は水を噴き出し、ある者はご飯を喉に詰まらせた。メインブリッジに集まった夜明達が見たのはメインブリッジのディスプレイに映し出された海上に浮かんでいる二機のＩＳ。片方は銀、片方は水色と銀が混ざった装甲のＩＳだ。冬華達は海上に浮かぶ二機のＩＳを見て驚きの表情を浮かべる。その中で、流星だけが驚愕とかそう言うのを通り越して顔を真っ青にしている。

「カラードランク２のリリウム・ウォルッコットに二十代目更識楯無だと・・・」

『流石は『白き閃光（ホワイト・グリント）』。自己紹介の手間が省けたわ・・・と、言いたいところだけど、若干名私達の事を知らない人がいるみたいだから一応自己紹介しとくね。私はカラードランク０、二十代目更識楯無、よろしく！』

『カラードランク２、リリウム・ウォルッコットですわ。以後よしなに』

ヒュビッ、と手を上げる楯無と、丁寧に頭を下げるリリウム。飄々としていて、どこか余裕を感じさせる楯無、全身から気品が溢れ出しているリリウム。更識と聞いて太陽達の殺意が膨れ上がり、黄昏と朔夜も同様に殺気を溢れさせる。

「ほぉ・・・」

「これはこれは。更識さん所の女狐さんではありませんか」

「この時代でもその呼称で呼ばれてるのね彼女・・・」

黒い何かを放ちながらディスプレイを睨んでいる黄昏と朔夜に夜明が呆れた視線を向けていると、楯無が二人の存在に気付いたらしい。にぱっ、と笑みを浮かべて手を振ってきた。

『あら？　黄昏に朔夜じゃない。私の流星に変なことしてないわよね？』

「黙れこの阿婆擦れ！！　そもそも流星はお前などのものではない！！」

「お前も黙ってろ黄昏！！」

「その通り、私のだ」

漫才じみた遣り取りをしている二人の頭に拳固を落とし、冬華はディスプレイ越しに楯無と向き合った。カラードランク０と言う化け物じみた実力を持った者と相対しているにも拘わらず、その姿は実に堂々としている。

「私がアークエンジェルの最高責任者である月光冬華だ。それで、一体何のようだ？　企業連に依頼されて私達を墜としに来たのか？」

『ちっが～～～うっ！！　何が悲しくて企業連の老害共の依頼をこなさなきゃいけないのよ！　今回は私達の意志で貴方達に会いに来たの！』

『正確には、流星様ともう一人のお方に会いに来たんです』

「もう一人？」

はい、と返事を返してリリウムはコホンと咳払いした。そしてすぅっ、と目を細めて宣言する。

『大空流星殿、月光夜明殿。私、リリウム・ウォルッコットと更識楯無が貴方達に決闘を申し込みます』

女難がやってくる（後書き）

夜明「祝！　何かいつの間にかお気に入り１０００突破してた記念！　キャラ人気投票！！」

太陽「この小説で好きなキャラを三人選んでくれ。一番好きなのが三ポイント、二番目に好きなのが二ポイント、三番目に好きなのが一ポイントと言った具合だ」

夜明「一位と二位のキャラは特別番外編として結婚式を書くぞ！」

太陽「ご協力、お願いするぞ！！」

ＩＳ－Ｄシステム発動

「さって、ご指名を受けて決闘なんてするわけだが・・・気分はどうだよ、流星？」

「悪くは無いと思うけど・・・」

その割には声に覇気がない。アークエンジェルの特徴である艦首両舷から突き出した脚部状ハッチ。夜明は右の、流星は左のハッチのリニアカタパルトに乗っている。夜明は兎も角として、流星が妙に尻込みしていた。それは戦闘に対する物ではなく、これから闘う相手、二十代目更識楯無に対する物のようだ。

「大丈夫かおい？」

「何とか・・・一年くらい前なんだけど、寝込みを楯無が襲ってきてさ。その時の肉食獣みたいな楯無の目を見て以来トラウマで・・・」

「・・・本当に変わらんなぁ、楯無は」

表情を青ざめさせる流星に同情の視線を送っていると、オープン・チャネルから夜明のオペレーター的位置になったシャルの通信が入る。凡に流星のオペレーターは何時も通り朔夜だ。

『夜明、聞こえてる？』

「ばっちし聞こえてるぜぇ～・・・今回もシャルがオペレーターなのか？」

『うん。太陽達もやりたかったみたいだけど・・・』

夜明のオペレーターを誰がやるのかを大乱闘で決めようとした結果、シャルを除く全員が冬華の拳で気絶させられたのだ。そしてなし崩し的にシャルが今回も夜明のオペレーターになった訳である。セシリアと鈴音は未だに目を渦巻き状にして気絶しているが、太陽とラウラは既に目を覚まして羨ましそうにシャルを見ていた。

『取り敢ず、リリウムさんのＩＳ『アンビエント』のデータを送るね』

『流星、女狐のＩＳ『エクストリーム・アテナ』のデータを送るぞ』

夜明と流星の目の前に一枚のウィンドウが浮かんでくる。それぞれに対戦相手のスペックデータが浮かんでいた。楯無とリリウムの平和的解決方法（ジャンケン）の結果、楯無が流星と、リリウムが夜明と闘うことになったのだ。

「高機動戦に特化したＩＳか・・・上等」

「上等なんて言ってられないよぉ～」

気合十分の夜明に比べ、流星は情けないことこの上ない。朔夜に思いっ切り怒鳴りつけられたのも致し方ないだろう。

「月光夜明、レイジングウィング、出るぜ！！」

「大空流星、トワイライトウィング、行きます！！」

それぞれのカタパルトが高速で動き、二人をアークエンジェルから吐き出した。アークエンジェルから飛び出した夜明は月光の翼（ムーンライトウィング）を広げ、流星は小型ウィングスラスターを噴かして自分が闘う相手へと向かう。

「あんたが俺の相手か？」

「リリウム・ウォルッコットですわ。よろしくお願いします」

「いえいえ、こちらこそ」

丁寧に頭を下げ合う二人。一方こちらは・・・

「フフフ、久し振りね流星・・・」

「あ、アハハハ、久し振り楯無、元気・・・してた？」

目を輝かせている楯無に流星は完全に尻込みしていた。まぁ、今の楯無の目は完全に肉食獣のそれ。尻込みするなと言うのも酷な話である。

「君に勝って・・・今度こそお持ち帰るぅぅぅ！！！」

「そんな下らない目的でここまで来たの！？」

「安心して！　お持ち帰るって言っても、具体的には身も心も私に溺れさせるだけだから！！」

「人の話を無視するなよ！　て言うか、微塵も安心出来るかぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

闘いの火蓋は切って落とされた。

銀に輝く装甲。言い表す言葉が見つからない高潔さを放っているリリウムのＩＳ『アンビエント』。夜明けはウィングスターとディバイン・カノンの銃口をリリウムに向け、レーザーと小口径弾を連射した。リリウムは夜明の連射を優雅に、容易くかわしながらアサルトライフルを夜明に向けて弾丸を放つ。迫ってくる弾丸をウィングスターで撃ち落とし、夜明は右手でスターライザーを引き抜いてリ

リウムへ強襲する。瞬間加速並みの加速（イグニッション・ブースト）でリリウムに接近した夜明はスターライザーを振り抜いた。

リリウムは迅雷の如き夜明の斬撃を蝶のようにヒラリと回避し、後ろへと下がりながら右腕のレーザーライフルを撃った。ほとんど目と鼻の先でレーザーライフルから放たれた青白いレーザーを、夜明は右手のスターライザーを振り抜いた体勢のまま左手でもう一本のスターライザーを引き抜いてレーザーを切り裂く。

「まぁ」

端正な顔に驚きを浮かべるリリウム。両腕を広げた体勢のまま夜明はスタードライブを発射態勢に移行、荷電粒子砲をぶっ放した。二つの蒼い荷電粒子砲はリリウムに直撃する。濛々と蒼い煙が漂う中、両肩のアクティブ・ポットを開いて全てのミサイルを射出した。白い煙を空中に描きながら全三十発の小型ミサイルは吸い込まれるように煙の中に突撃、爆発する・・・否、爆発したのではない。全て撃ち落とされ、破壊されていた。

「っ！！」

夜明がその事を理解する前に、ミサイル爆発で発生した白い煙と光を切り裂くように閃光が奔って夜明の頬を掠める。更にレーザーの後を追うように三発のミサイルが迫ってきた。普通のミサイルに比べて低速のミサイルを、夜明は月光の翼（ムーンライトウィング）から大量の粒子を放って残像を生み出すことで回避する。蒼銀の残像を貫いていったミサイルをウィングスターで撃ち抜き、背後に爆発を感じながらもう片方のウィングスターを煙の中から飛び出してきたリリウムに向ける。

「・・・やるじゃねぇか」

「お褒めに預かり光栄ですわ」

夜明の賞賛に対し、リリウムは優雅にお辞儀してみせる。戦闘の中でさえも礼儀正しさや高潔さを失わない彼女に夜明は素直に感心する。

「それじゃ、続きと行くっ！！」

再びリリウムとの闘いを始めようとした瞬間、夜明の背筋に悪寒が走った。反射的に流星と楯無が闘っている方向を向く。

「何だありゃ！？」

「兎に角！　俺のことは諦めてくれ！！」

「だが断る！！」

「会話が成立してねぇ！！」

自棄になって叫びながら流星はビームマグナムを楯無に向ける。

楯無のＩＳ『激流の女神（ハイストリーム・アテナ）』は十七代目更識楯無、つまり夜明達の時代の楯無が纏っていたミステリアス・レイディから進化したものだ。ハイストリーム・アテナの外見はミステリアス・レイディと何ら変わりない。違う点があるとすれば、水色の装甲の半分ほどが銀に輝いていることだろうか。決定的に違うのが武器だ。ミステリアス・レイディの武器がランスだったのに対し、ハイストリーム・アテナの武器はバスターソードだと言う事だ。実体剣に水を纏わせている。

流星がビームマグナムの引き金を引くと銃口に赤い光が集束し、超威力の紅い閃光が放たれた。眼前に紅い閃光が迫っても楯無は回避行動などは一切取らず、水を纏わせたバスターソードを薙ぎ払うように振り抜く。水の刃がバスターソードから放たれ、閃光を相殺した。

「くっ！」

ビームマグナムの銃身からエネルギーパックを排出し、流星は再び

楯無にビームマグナムを放つ。軽々と避けられたのを見て、流星は銃身内に残っている四つのエネルギーパックを使用して四発の閃光を撃った。三発までは避けられたが、最後の一発が楯無に迫る。楯無が指示を出すと、彼女の周囲を旋回するように動いていた十二個のアクア・クリスタルが四枚の水の防壁を展開してビームマグナムを防いだ。

「貫け激流！！」

バスターソードを一振り。刹那、アクア・クリスタルから水の弾丸が放たれた。その数は凡そ一つのアクア・クリスタルにつき三十。エネルギーパックを全部排出したビームマグナムにカートリッジを挿入する暇もなく、流星は左腕のシールドで水弾を防ぐ。シールドで直撃を防ぐが後退を余儀なくされる。バスターソードを構えて突っ込む楯無。流星は腰の後ろにビームマグナムをマウントしてビームサーベルを引き抜いて迎え撃った。

「しっ！！」

「おぉっ！！」

バスターソードとビームサーベルがぶつかり合って紫電と水飛沫が飛び散る。楯無が両手でバスターソードを振るっているのに対し、流星は片手でビームサーベルを扱っている。鍔迫り合いなら楯無の方が有利だろうが、流星は腕を思い切り振って楯無を吹き飛ばした。楯無が吹っ飛んでいる間に流星はビームマグナムにカートリッジを挿入する。ビームマグナムの銃口が楯無に向けられた。

「流石にあれが直撃すると洒落にならんのよね・・・」

三個のアクア・クリスタルで作った水の足場に着地、楯無は真横に突き出すようにバスターソードを構えた。残り九個のアクア・クリスタルがバスターソードへと集まり、ピンポン玉程度の大きさになって柄にある十二個の窪みに収まる。

「決めさせてもらうよ」

窪みに収まったアクア・クリスタルが異様な輝きを放つ。すると、バスターソードの実体剣に展開されていた水のブレードが凄まじい速さで伸びていき、数百メートルにまで伸びた。数百メートルにまで水の刀身が伸びたバスターソードを頭上で数回回転させ、大上段に構える。

「一刀、両断！！！」

振り下ろされる水の斬艦刀。轟音を上げて空気を切り裂く水の斬艦刀に流星はビームマグナムを向けた。そしてビームマグナムが発射された事を示す轟音が一回分轟き、六発のエネルギーの奔流が斬艦刀を吹き飛ばす。

「・・・え？」

バスターソードを振り下ろしたままの体勢で呆然とする楯無に流星が迫る。何の事はない、一瞬で六発のビームマグナムを撃っただけだ。だが、ビームマグナムは既存の兵器を遙かに上回る威力を持っている。ノーマルＩＳなら掠っただけで破壊されること確実、リンクスが駆るＩＳでもほぼ敗北が決定するだろう。それだけの威力を持ったビームマグナムを流星は六連射、それも瞬きする一瞬、片手撃ちでやって見せたのだ。

「俺にだって意地があるんだよ！！！」

最後のカートリッジをビームマグナムに挿入して流星は楯無の肩を掴んで拘束、ビームマグナムの銃口を楯無の腹に叩きつける。紅い光と轟音が空を彩った。

「流星が勝った！！」

「・・・いや、違う・・・」

喜ぶ朔夜。だが、その後ろに立っている黄昏は険しい表情を浮かべている。

「あれは・・・水の分身だ。流星!!　まだ終わってないぞ!!!」

『流星!!　まだ終わってないぞ!!!』

オープン・チャネルから黄昏の叫び声が響いたその時、流星の手に

よって拘束されていた楯無の身体が水になって崩壊した。

「え・・・？」

「いやぁ、危なかった危なかった。分身と入れ替わって無かったら、今頃私はお陀仏してたよ」

声がした方向を向くと、無傷の楯無が何時も通りの余裕を感じさせる雰囲気を纏っていた。額に冷や汗が浮かんでいるが、それ以外に異常は見られない。

「何時、分身と入れ替わったんだよ・・・」

「ビームマグナムの六連射でバスターソードの刀身部分が破壊された時だよ。あの一撃で決めるつもりだったんだけど・・・無理だったみたいだね」

でも、と楯無は薄く笑みを浮かべる。

「これで私の勝利は不動になった」

バスターソードを持っていない左手を軽く持ち上げた。瞬間、流星の足下の海水が水柱となって吹き上がり、流星を吹き飛ばした。

「がっ・・・あぁ？」

「ハイストリーム・アテナのワンオフアビリティー『水の楽園（アクア・ワンダーランド）』。ハイストリーム・アテナのナノマシンが操る水が触れた水を意のままに操ることが出来る・・・まぁ、ナノマシンの伝達が遅くて、操れるようになるまで時間がかかるのが欠点だけどね」

バスターソードの切っ先を空に突き刺すように振り上げる。海面から妙な唸りが聞こえ、幾つもの水柱が立ち上がった。水柱はそのまま海に落ちることなく空を飛び、楯無が掲げているバスターソードの切っ先へと集まって巨大な水球を創り出す。

「現時点をもって、私を中心とした半径十キロの海をハイストリーム・アテナの支配下に置いた・・・君に勝ち目はないよ、流星」

楯無はバスターソードを振り下ろし、天を覆うほどにまで膨れ上がった水球を流星に投げつけた。迫る速度は緩やかだが、範囲が大きすぎて回避ができない。為す術もなく流星が呆然と迫り来る水球を見ていると頬に衝撃が走って吹き飛ばされた。勢い良く吹き飛ばされて、水球の範囲外にまで逃げたと頭が理解した時、同時に夜明に殴られたのだと理解する。慌てて体勢を整えて夜明の方を向くと、既に夜明は水球に飲み込まれていた。

「曾爺ちゃん!!」

悲鳴が混ざった声を上げながら流星は夜明を水球から救い出すために飛んだ。だが、それよりも早く楯無が指を鳴らす。

「清き熱情（クリア・パッション）・・・」

夜明を捕えていた水球が一瞬で霧状になり、世界が壊れたと錯覚するほどの爆音が海上に満ちた。黒煙が視界を覆う中、流星は確かに見た。自分を庇った夜明が黒煙の中から海へと墜ちるのを。刹那、トワイライトウィングの全身から甲高い音が聞こえた。

ｌＩＳ‐Ｄシステム、Ｓｔａｎｄｂｙ　ＯＫ．　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？ｌ

「うあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

黒煙が立ちこめる海上、突如として流星の叫び声が響く。誰もがギョッとして流星を見ると、流星に、正確にはトワイライトウィングに異変が起きた。足首、膝、腰、胴体、肩、肘、手首、首の部分が順にスライド展開し、漆黒の粒子を放ち始めたのだ。それに伴い背中の小型ウィングスラスターが展開され、大型ウィングスラスターへと変わる。右は紅く二つ折りの対艦刀が展開され、左は蒼く二つ

折りの大型ビーム砲が展開された。これこそトワイライトウィング真の姿。

『黄昏の翼（トワイライトウィングインフィニット・ストラトスデストロイヤー）　ＩＳ－Ｄ』

「・・・お前だけは、墜とす！！」

殺す覚悟

「おおおおおおおおっっっっ！！！！！！！！！！」

獅子の如き咆哮を上げながら流星が楯無に吶喊する。スライド展開して黒く輝く展開装甲部分から漆黒の粒子をばら撒き、右大型ウィングスラスターに二つ折りになってマウントされている対艦刀『バルディッシュ』を引き抜いた。

「アクア・ガーデン！！」

楯無の声に呼応して海面から水柱が噴き上がって数メートル立方の水塊が出来て流星の行く手を塞ぐ。水塊に激突しそうになった瞬間、流星は無造作にバルディッシュを薙ぎ払うように振るう。ハイストリーム・アテナのナノマシンで鋼鉄並みに固くなっていた水塊はあっさりと両断された。間髪入れずに横薙ぎしたバルディッシュを振り上げ、楯無に振り下ろす。流星の一撃をバスターソードで防ぐ楯無。数瞬の鍔迫り合いの後、凄まじい速度で楯無が吹き飛ぶ。

「ぐぅ・・・！」

吹き飛ばされた衝撃で身体中が軋むのを感じながら楯無は海水でクッションを作って威力を殺す。視線を流星に向けると、既に流星は大型ウィングスラスターに装備されている長距離高エネルギー砲『レイジングハート』の砲口を楯無に向けていた。レイジングハートの砲口が光るのと、楯無が自分と流星の間に数十枚の水の壁を創り出すのがほぼ同時。さっきの水塊同様にナノマシンで硬化されている水の壁をレイジングハートから放たれたエネルギーは容易く貫いていき、楯無に直撃する。

「っ！？　・・・まだまだぁ！！」

レイジングハートの砲撃でシールドエネルギーの三分の一が削られ、海中へと叩き込まれた。水深五メートルまでに叩き込まれた楯無はバスターソードを振り回して周囲の海水を刀身に集める。数百メートルにまで刀身を伸すのではなく、超々高密度の水の刃を作る。バルディッシュとバスターソードがぶつかり合って空と海が割れる。数十秒間二人の打ち合いが続いた。二人の戦闘の衝撃が海面を揺らす度に海水が飛沫となって宙を踊る。

ガァンッ！！

互いの一撃の威力が強すぎて二人の間に距離が生じる。楯無が海面から幾つもの水柱を噴き上げさせて追撃をかけるのに対し、流星は空気中に幾つもの漆黒のラインを残して後ろへと下がった。空へと逃げた流星を目で追いつつ、楯無は海面に下り立つ。その様子はどこか幻想的だ。

「舞い踊れ流水・・・」

バスターソードを頭上で回転させ、海中へと突き立てる。一瞬、海が光り揺れた。その数秒後、音を立てて楯無の周囲の海が盛り上がっていく。流星が無言でバルディッシュを構えた瞬間、楯無の周囲の海水が何十もの龍となって流星に襲いかかった。

「・・・」

襲い来る水の龍を無言で見据え、流星は楯無へと突っ込む。水の龍をバルディッシュで切り裂き、或いはレイジングハートで撃ち抜く。

楯無まで数メートルの所にまで接近した所で、流星は信じられない行動を取った。右手に握っているバルディッシュを楯無目掛け投げつけたのだ。

「っ！！？？」

これには楯無も虚を突かれて呆然とする。正気に戻った時には投擲されたバルディッシュでバスターソードを弾き飛ばされ、自分を護らせていた水がレイジングハートの砲撃で吹き飛ばされていた。流星の漆黒に光り輝く右の掌が楯無の胸に添えられる。トワイライトウィングの掌部分に装備されている小型ビーム砲『パルマ・フィオキーナ』が火を噴こうとしていた。楯無の胸に添えられた右手から放たれる光が限界寸前にまで達した。が、

「こ、ここで時間切れかよ・・・」

悔しそうに流星が呟いた。右掌から放たれていた光が急速に収まり、展開装甲も次々に閉じられていく。広げていた右手を握り締め、流星は虚ろな目で一言呟く。

「くっそ・・・」

決闘の勝敗は結果的に言えば夜明と流星の負けだ。だが、二人は無事にアークエンジェルに帰還している。楯無とリリウム曰く「負けたと思ったその時点で勝負は決する」らしい。楯無は流星にパルマ・フィオキーナを突きつけられた時、リリウムは決闘が始まったその時から負けたと思っていたようだ。

「また来るよ」

「その時、また勝負をしましょう」

そう言って二人は去っていった。流星を庇って撃墜され、釈然としていなかった夜明にしてみれば願ってもない言葉だろうが、流星にしてみれば二度と来るなと言った心境である。まぁ、防御力が紙なレイジングウィングは楯無の清き熱情（クリア・パッション）でダメージレベルがCに達し、トワイライトウィングもIS‐Dシステムの反動で数日間は展開できなくなっていた。この二人が抜けると戦力的に大変なことになるが、幸いなことに数日の間は何も起こらずに過ぎていった。あの時

までは。

「いい加減地に足つけてぇなぁ～」

アークエンジェルの窓から覗ける何処までも広がる蒼海を見渡しながら、夜明は誰に言うわけでもなく一人ぼやく。夜明の隣りにいるシャルは苦笑いを浮かべて夜明にコーヒーを渡した。一週間ほどの期間をかけてアークエンジェルは海を横断し切ろうとしていた。

「ハハ、確かに海の上っていうのも何だか落ち着かないよね」

「その海の上とも後二、三日でお別れだ。やっと地面を踏みしめられるぜ」

コーヒーを飲み終えてんぎぃ～、と身体を伸す夜明。現在、ここには夜明とシャルしかいない。太陽と黄昏はセシリア達のＩＳ強化が最終段階に入ったらしく、セシリア、鈴音、ラウラはそれに付き合っている。凡に、シャルは三人よりも早くＩＳの強化が終わったのだ。

「そう言やシャル、お前のＩＳってどんな感じに強化されたんだ？」

「うん。太陽と黄昏が言うには防御力を上げたって言ってたけど・・・」

まず太陽と黄昏は四人のＩＳの性能を第四世代型にまで高め、それから序でに強化パッケージを作ったのだ。序でで強化パッケージを作れる二人に恐怖を感じずにはいられないアークエンジェル整備員達がいたりいなかったり・・・話を戻そう。シャルが胸元からＩＳの待機状態である十字のネックレスを取り出すと、夜明は興味津々

でネックレスを見つめる。

「・・・よ、夜明。そんなにじっと見つめられると恥ずかしいんだけど・・・」

「え・・・！！　ごめん・・・」

下心が無いとは言え、胸元を注視されるのは恥ずかしいようだ。シャルは顔を赤らめながら軽く両手で胸元を隠す。戸惑う夜明だったが、自分がシャルの胸元を覗くような体勢をしていたことに気付いて慌てて距離を取った。

「そ、それで、性能はどうなんだ？」

誤魔化すように咳払いする夜明をジト目で見つつ、シャルは太陽と黄昏から聞いた説明を話し始める。

「強化パッケージの名前は『楽園の守護神（ガーデン・ガーディアン）』。リヴァイヴの強化パッケージである『ガーデン・カーテン』を参考にしたらしいんだけど・・・まず、シールドが二枚から六枚に増えたんだ」

「ほうほう」

「その内の四枚に大口径レーザーカノンが搭載されてる」

「既に防御用ではないな」

「背中には非固定浮遊部位（アンロックユニット）の大型スラスターが装備されて、それに四本の隠し腕がついてて僕の両腕と合わせて同時に六個の武器を使用することが出来る」

「・・・そりゃ凶悪だ」

「その隠し腕にそれぞれ『灰色の鱗殻（グレー・スケール）』がついてて、背中の大型スラスターとレーザーカノンが搭載されたシールドを変型させることで超高速機動形態になるみたい」

「・・・それ、本当に防御用のパッケージなのか？」

「・・・それを聞かれると答えに詰まるね」

たはは、と二人は乾いた笑いを浮かべる。これと言って話すことも無いので無言でいると、シャルの中にある疑問が浮かんできた。それはポッと浮かんできた物ではなく、夜明がスピリット・オブ・マザーウィルと戦闘した時から感じていた物だ。

「夜明、少し聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

「夜明はさ・・・スピリット・オブ・マザーウィルと闘う時、怖くなかった？」

「いや、全く」

微塵も躊躇いを感じられない夜明の返答にシャルは軽くずっ転ける。思いっ切りぶつけた額を押えつつ、そんな事は無いだろと言う顔で夜明を見た。

「ほ、本当に？　本当に怖くなかったの？　一瞬でも判断が遅れて

たりしたら死んでたかもしれないんだよ？　それに・・・」

たくさんの人を殺してたかもしれないんだよ？　言わずともシャルの聞きたい事が分かったらしく、夜明は頭を掻きながら黙り込むシャルの頭を撫でる。

「本当だって。俺には貫きたい信念がある、俺には背きたくない誓いがある、俺には護りたい世界がある。そいつ等がある限り、俺は不屈でいられるんだ・・・それに、俺は誰にも殺されない、誰も殺さない覚悟をしてる」

「誰も殺さない・・・覚悟？」

「おぉ。視界に映る人全てを救いたいなんて思ってる奴が人を殺してちゃ本末転倒だろ？　だから、俺は戦争だろうが何だろうが誰も殺さない。そして周りにいる人も誰も殺させない」

勿論、俺だって殺されるつもりは無い、と夜明はニシシと笑いながらシャルの頭をくしゃくしゃにする。頭をくしゃくしゃにされるのを感じながら、シャルは上目遣いで夜明の目を見た。その瞳は優しい光を湛えているが、一切の揺らぎも翳りも無い。

「・・・強いんだね、夜明は」

「強くなんかないさ。俺は唯、強くありたいだけさ」

僕も夜明みたいになれるかな？　シャルが訊ねようとしたその時、アークエンジェル内に招集の為のアラームが鳴り響く。二人は顔を見合わせて頷き合い、メインブリッジへと向かった。

「何があったんだ!?」

メインブリッジに飛び込んできた夜明の質問に、太陽が苦々しそうな表情を浮かべてディスプレイを指差す。ディスプレイにはここいら一帯を示す海図とアークエンジェルを示す青い点、そして謎の大量の赤い点と大きな黄色い点が映し出されていた。

「これは?」

「ＢＦＦ第八艦隊とそれに護衛されたＧＡ製ＡＦ『ギガベース』だ・・・確実にこの艦が狙いだろうな」

「レイジングウィングとトワイライトウィングが動けないと知ってやってきたんでしょうか?」

「可能性は高いな」

急遽、ＢＦＦ第八艦隊とギガベース対策会議が開かれる。護衛としてついてきている第八艦隊はともかく、ギガベースはマザーウィルほどで無いにしろ高威力のロングレンジキャノンを装備している。射程圏内に入ってしまえば、かなりの被害を受けるだろう。会議の議題は誰がギガベースを撃破しに行くか?　だ。

「「俺がい「お前のレイジングウィングはダメージレベルがCな上にまだ修理が終わってない。序でに言うと流星。それはトワイライトウィングも同じ事だぞ」・・・」」

太陽に台詞を遮られて二人は黙り込む。

「じゃあ誰が行くのよ？　私とセシリア、ラウラはまだISの強化が終わってないし、一夏と箒だってAFを破壊できる装備は持ってないでしょ？」

太陽は数日間ぶっ通しで徹夜していて、とても出撃できるような状態ではない。その時、黄昏が口を開きながらある人物を指差した。

「一人だけいる・・・貴方だよ、シャルロットさん」

「えっ、僕!?」

いきなり話を振られて慌てるシャルに黄昏ははっきりと頷いてみせる。

「はい。あなたのガーデン・ガーディアンの超高速機動形態ならVOB並みの速度が出せて、アークエンジェルがギガベースの射程圏内に入る前にギガベースに接近することが出来る。唯一つ問題点があるとすれば・・・

貴方に人を殺す覚悟があるかどうかだ」

「人を殺す・・・覚悟？」

「あぁ」

そっくりそのまま言葉をオウム返しするシャルに黄昏は頷く。

「ま、待てよ黄昏。そんな人を殺す覚悟とか大袈裟な」

「大袈裟なんかじゃ無いさ。私達がしているのは戦争・・・殺し合いなんだ」

一夏の言葉をばっさりと切り捨て、黄昏は周りにいる者達を見渡した。

「まさかとは思うが、貴方達は誰も殺さないで戦争が出来るとでも思っているのか？　・・・そんな事、不殺（ころさず）を貫けるのは夜明や太陽のような絶対強者だけだ」

「・・・私達を未来などと訳の分からない所に連れてきておいて、随分と勝手な言い分だな。何だ？　お前達は私達に人を殺せと強要するのか？」

箒の辛辣な言葉に黄昏は顔を背ける。それは他の者達も同じ事。

「・・・こんな胸糞（せんそう）その悪いことに巻き込んでしまって悪いとは思っているさ。だが、そうでもしなければ私達は勝てなかったんだ」

黄昏と箒が剣呑な空気を作る中、シャルは小刻みに肩を震わせながら視線を床に落としていた。顔は青ざめ、呼吸も荒くなっている。

「僕が、人を、殺す？」

「そうしなければ、この艦に乗っている人達が皆死んでしまう」

「聞くなシャルロット」

黄昏と箒が言い争いを始めたが、その喧騒はシャルの耳に届いていない。視界に映っている光景はどこか霞の様に朧気で、世界が揺れているような感覚が彼女を襲う。

人を殺す。

言葉にしてみればたったの四文字だが、その四文字が持つ意味の重さは計り知れない。身体が震え、誰一人としていない真っ白な世界に一人放り込まれたような感覚。徐々に呼吸が過呼吸になっていき、シャルの身体がぐらついた。倒れそうになった瞬間、世界に色が戻る。力強い、心地よい暖かさを持った両腕に抱かれながら、シャルは両腕の持ち主に視線を向けた。

「・・・夜明？」

シャルの目尻から溢れ出しそうになっていた涙を拭い、夜明はシャルを安心させるように笑みを浮かべながら頭を軽く叩く。普段の飄々とした雰囲気を引っ込め、鋭くなった眼光で太陽を見据える。

「太陽、俺が行く」

有無を言わさぬ口調。纏う空気を変えた夜明に誰もが何も言えなくなる中、声をかけられた太陽は組んでいた両腕を解き、左手を腰に当てた。

「・・・下手をすれば、レイジングウィングが完全に壊れるぞ?」

「そりゃ嫌だな・・・なら、その下手をしないようにやれば良いだけの話だ」

そうだろ? と問いかけてくる夜明に苦笑を浮かべながら、太陽は右のポケットを探る。ポケットから右手を取り出すと、その手にはレイジングウィングの待機状態である蒼い翼のネックレスが握られていた。太陽はネックレスを顔の前にまで持ち上げ、夜明によく見えるようにする。

「そう言うだろうと思って簡易的な応急処置をしておいた。無理が出来るのは五分まで、それ以降は保証できないぞ」

「十分だ」

レイジングウィングを受け取るために夜明は片手を突き出す。太陽は予想通り過ぎる夜明の行動に嘆息しつつ、レイジングウィングを投げ渡した。部屋内にレイジングウィングを受け取った事を示す乾いた音が響いた。

（・・・背部大型スラスター、大型レーザーカノン異常無し。ラファール・リヴァイヴ・カスタム？『ガーデン・ガーディアン』、超高速機動形態に移行）

リニアカタパルトで足を固定したシャルは目の前に浮かぶ何十枚ものウィンドウに目を走らせていた。プライベート・チャネルを通して太陽の声が頭の中に響く。

『シャルロット、今からギガベースの構造データを送る。それでギガベースの乗組員が現在どこにいるのか分かるはずだ』

『ありがとう・・・でも早かったね、どうやって調べたの？』

『ギガベースにハッキングした』

苦労のくの字も感じさせない太陽にシャルは苦笑いを浮かべる。相変わらずの人外じみたスペックだが、それは元々の事なので気にしないことに。十数分前、レイジングウィングを受け取ったのはシャルだった。

「・・・僕が行くよ」

小さく、だがハッキリと告げるシャルに誰もが目を丸くした。

「正気か、シャルロット！？」

ラウラの問いに今だ青くなっている顔で、シャルは少しだけぎこちない笑みを浮かべ頷く。

「うん・・・きっと遠くない未来で、僕たちは同じ問題に直面すると思うんだ」

ＩＳは人を殺すことが出来る兵器。それに関わっている以上、何時かは人を殺すことになるかもしれない。だとすれば、今この瞬間に逃げ出してはいけない。逃げ続けていれば、何時か必ず取り返しのつかない結果を招いてしまうだろうから。それに、とシャルは苦笑いを浮かべながら夜明から離れ、太陽にレイジングウィングを返した。

「何時までも夜明と太陽に頼ってる訳にはいかないでしょ？　僕、夜明に護られてばっかなのも嫌だからさ」

どこか照れくさそうに笑いながらシャルは夜明を見つめる。

「僕だって皆を、夜明を、大切な人を護りたいんだ」

そんなシャルを後押ししたのは太陽だ。

『要は誰も殺さないようにそのギガベースってのを破壊すればいいんだろ？　軽い軽い』

頼もしすぎると言うか、無責任すぎることを言いながら太陽はアークエンジェルのコンソールを凄い勢いで叩き始めた。一分とかからずに太陽はギガベースにハッキング、ギガベースの詳細な構造データを創り出したのだ。しかも、乗組員が赤い点になってギガベースの何処にいるのか分かるというオマケ付き。相変わらずの太陽の人外スペックに皆は呆れるしかなかった。

『・・・シャルロット、お前に言っておかなければいけないことがある。今、ギガベースには数百人の兵士が搭乗してる。はっきり言うが、お前の技量じゃ全員を無傷でギガベースを破壊するのは無理だ』

『・・・出来るだけやってみるよ』

『それともう一つ。撃つことを躊躇うな。私はこんな訳の分からない未来なんかで友人を失いたくない』

『ありがと、太陽』

足下のリニアカタパルトが微かに動くのを感じる。シャルは眼前に広がる水平線と空を見据えながら、非固定浮遊部位（アンロックユニット）である背中の大型スラスター二基と六枚ある内の大口径レーザーカノン『ディザスター』を搭載している物を身体の横に移動させ、ディザスターの砲口を真後ろに向けた。

『ギガベースの途中にいる艦隊は無視しろ・・・ったく、空が忌々しいほど青いな。こっちの気も知らないで・・・死なないでくれ』

『分かった』

短く太陽に返事を返し、シャルは大きく息を吸い込む。

「シャルロット・デュノア、ラファール・リヴァイブ。行きます！！」

リニアカタパルトによってアークエンジェルから放り出された瞬間、シャルは大型スラスターとディザスターの出力を最大にまで上げた。景色が妙な感じに歪み、シャルを超高速の世界へと誘う。

（夜明みたいに上手くやれるなんて自惚れるつもりはない・・・でも、やるって決めたんだ）

護られるだけの関係なんて嫌だから。アサルトライフルを握る両手に力を込め、シャルは補助バイザーで鮮明になり始めた景色の彼方を見る。

「・・・行くよ、リヴァイヴ」

蒼空と蒼海に一筋の閃光を描いて楽園の守護神は翔る。その姿、正しく『疾風（ラファール）』

楽園の守護神、翔る（後書き）

夜明「シャルの戦闘は次回だ。悪いな、展開が遅くて」

太陽「謝罪はここまでとして、今回は皆様に協力していただきたいことがある」

夜明「正確に言うとＩＳの二次創作、オリジナルキャラを書いている作者様達だけどな。この未来編の本当の最終決戦で平行世界からの戦士を呼ぶ、的な展開になるんだ」

太陽「そこで、自分所のキャラを出してもいいよ、って人はオリジナルキャラとそのＩＳのスペックを送ってくれ」

夜明「四人くらい来てくれると嬉しい。序でに言うと敵だから、誰と闘いたいなんて物を書いてくれるとありがたい」

太陽「夜明と流星はとある諸事情で闘えないから、それ以外のキャラで頼む・・・誰一人として来なかったらどうなるんだ？」

夜明「そん時ゃそん時」

殺したという事実

真横を数十のミサイルが轟音を立てて通り過ぎる。視界を塞ぐように放たれるミサイルを全てアサルトライフルで撃ち落とし、シャルはミサイルを撃ってくる艦隊を無視してひたすら飛び続けた。海上を飛び続けて数十秒と掛からず、シャルの視界にギガベースを護衛しているＢＦＦ第八艦隊の部隊が入ってきた。

（艦隊如きの攻撃じゃアークエンジェルは沈まないはず・・・なら最大の脅威であるギガベースを叩く！！）

一瞬で視界から消え失せていく艦隊に目も呉れず、シャルは飛行の速度を上げる。目標のギガベースに到るまでの海域にいる艦隊の数はおよそ十、戦艦の数は四十は下らないだろう。それら全てを相手にしていたら、二十もの武装を持っているリヴァイヴとは言え弾切れになることは必定。弾幕のようにミサイルの雨を浴びせられるが、全てアサルトライフルの射撃で撃ち落とされていた。ミサイルを破壊するのに結構な数の弾を使ったが、許容範囲内だろう。何度目になるのか分からないミサイルの壁を破壊すると、視界の奥で何かが光った。

『避けろシャル！！』

夜明の裂帛の声に従ってシャルは横にブーストする。体勢を整えた瞬間、シャルの真横を光り輝く砲弾が通り過ぎた。砲弾の衝撃波で体勢を崩しながらシャルは砲弾が飛んできた正面に視線を向ける。

「今のは！？」

『ギガベースからの砲撃だ！　気を抜くな、まだまだ来るぞ！！』

夜明の言うとおり、シャルの視界で再び光が爆ぜた。再び迫り来る砲弾。シャルはしっかりと砲弾を視認し、余裕をもって回避する。艦隊からの攻撃を破壊、ギガベースからの砲撃を回避しながらシャルはギガベースの姿を捕捉した。くすんだ緑色の装甲、本体は二つに分けられていて、その本体を繋ぐようにロングレンジキャノンの砲台がある。

『シャル、そろそろ通常戦闘形態に戻れ』

「分かった！！」

ギガベースを護る最後の艦隊の横を通り過ぎた。シャルは大型スラスターとシールドを通常状態へと戻す。大型スラスターは本来の位置である両肩の後ろへと移動し、四枚のシールドは細長く畳まれ、ディザスターの砲口部分のみが突き出されるような形で両肩に収まった。ギガベースの砲撃をロール回避し、滑るように海面に下り立つ。

『シャルロット、今ギガベースの右本体の人数が少ない、まずはそこを狙え！』

「うん！」

ギガベース本体上部にあるグレネードが火を噴く。海面上にいるシャルは両肩に収納されているシールドを全て展開させた。グレネードが次々に海へと着弾して巨大な水柱を創り出す。その内の一発がシャルに直撃した。広がる爆発、舞い上がる黒煙。濛々たる黒煙が薄れていくと、そこには無傷のシャルの姿がある。

「・・・驚いたなぁ・・・まさかグレネードが直撃してもシールドエネルギーが全く減らないなんて・・・やりすぎだよ、太陽、黄昏」

若干黒こげになったか？　程度の損傷しかないシールドを折り畳みながらシャルは呆れたように呟く。再びグレネードが放たれた。右、左へと蛇行移動しながらシャルはギガベース右本体に接近、大型スラスター内から右の隠し腕を二本展開する。そのまま武器を展開させる訳でもなく、大きく引いた右腕と一緒に装甲をパージさせた。装甲内から現れたパイルバンカー盾殺し（シールド・ピアース）。

「はあああああっ！！！！！」

瞬間加速（イグニッション・ブースト）で一気に接近、右手と隠し腕をギガベースに叩きつけた。瞬間加速（イグニッション・ブースト）で爆発的に速度を上げたシャルの右拳と隠し腕は相当な威力を生み出してギガベースの装甲にめり込む。

「もう一撃！！」

右腕と隠し腕の盾殺し（シールド・ピアース）のリボルバーからそれぞれ薬莢が吐き出される。装甲内部から金属が金属をぶち抜く音が響いた。シャルはそのままの体勢で盾殺し（シールド・ピアース）を連射する。盾殺し（シールド・ピアース）の連射で意味を為さなくなった装甲を引っ剥がすようにギガベースから右腕と隠し腕を引き抜いた。その時、ギガベース内の兵士とばっちし目があったのは余談だ。

「こ、こんにちわ・・・」

「・・・撃てぇぇぇぇ！！！！！」

「普通そうなるよね！！」

兵士達が撃ってくるマシンガンから逃れる為に急上昇する。ギガベースを眼下に見下ろしながらシャルは太陽が言っていたことを思いだした。

『ギガベースはマザーウィルみたいに武装を破壊すると、被害が内部に伝播するなんて欠陥構造は無い。だから、狙うなら武装を狙え。武装はメインブリッジから操作されているだろうから、破壊しても人を殺すことは無いはずだ。序でに言うとギガベースに飛行能力はないから、武装が全部潰されたから特攻！！　なんて事はしてこないはずだ』

太陽の言うとおりにギガベースの武装を破壊しようとマシンガンを展開（コール）した瞬間、背中に衝撃が走る。振り返ると、さっき無視してきた艦隊が集まってきていた。衝撃の原因は艦隊が放ったミサイルだろう。

「武装だけでも破壊しておけば良かった・・・」

再び迫ってくるミサイル群をロール回避して飛翔する。Uターンして追いかけてくるミサイルを肩越しに確認しながらマシンガンの銃口を向ける。出鱈目に連射しているとその内の何発かがミサイルに当たって爆発、何割かを巻き込んで誘爆した。それでも半分以上のミサイルが残っている。シャルは体勢を反転させ、両肩に収まっている六枚のシールドを展開させた。ミサイルがシールドを直撃して爆発を生む。目の前でミサイルが爆発して結構な衝撃がシャルを襲うが、彼女には傷一つつかない。

黒煙の中から飛びだし、両手に握っていたマシンガンをスナイパーキャノンへと変える。シールドでギガベースの砲撃を防ぎながら、ギガベースの武装をスナイパーキャノンで撃ち抜いていった。ロングレンジキャノンを除く全ての武装を破壊し、シャルはロングレンジキャノンの砲台に両肩のディザスターを向ける。

「皆、護ってみせるよ」

両肩から放たれた白銀の閃光。四つの高密度レーザーは容易にロングレンジキャノンの砲台を貫通し、そのまま海へと直撃する。巨大な水柱が立ち上がってギガベースが危なっかしく揺れた。

（・・・やっちゃった!?）

『ギガベース全武装の破壊を確認。右本体の装甲がぶち抜かれて浸水が起こってるが・・・十分対応できる範囲だな。死傷者ゼロ、怪我人はそれなりに出ただろうが・・・問題ないだろ』

「そ、そうなの？　・・・良かったぁ～」

太陽の通信が入り、シャルは大きく安堵のため息を吐く。

『どうでもいいが、ホッとするなら戻ってきてからにしろ。そんな所に何時までもいたら、蜂の巣にされるぞ』

「へ、蜂の巣？　・・・そういうことか！」

武装を失ったギガベースを護るように集まった艦隊から射撃を確認して、シャルは慌ててアークエンジェルへと戻っていった。

「まさか本当に誰一人殺さずにやるとはね・・・」

「・・・そんなの嘘っぱちに決まってるだろ」

太陽の言葉にメインブリッジにいる全員が目を見開かせた。夜明もその内の一人だったが、すぐに表情を剣呑な物にして太陽に歩み寄り、胸倉を掴んで引き寄せた。

「何でシャルに死傷者ゼロだなんて嘘を言った？　返答次第じゃ許

さねぇぞ」

「・・・あいつは優しすぎるんだよ。意図してないにしろ、自分が人を、それも十数人の人を殺したなんて知ったら、確実に精神が潰れるぞ」

「・・・だからってよぉ・・・」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながらも、夜明は太陽を離した。この時、誰一人として気付いていなかった。オープン・チャネルの回線が開いたままだと言うことに・・・。

『・・・それ、本当なの？』

掠れた声が聞こえてきて皆ギョッとする。その声がシャルの物だと理解し、更にギョッとした表情を作った。特に太陽は表情を青ざめさせている。

『僕・・・殺しちゃったの？』

「・・・取り敢ず戻ってこい、シャル。話はそれからだ」

出来るだけ優しい声で夜明が言うと、シャルは無言でオープン・チャネルを閉じた。息詰まるような沈黙の中、夜明はシャルを迎えるためにハッチへと向かった。

偽善、自己満足・・・それの何が悪い？（前書き）

これが夜明の答えです。不快かもしれませんが、これから読む人はこのことを考慮した上で読み進めてください。

偽善、自己満足・・・それの何が悪い？

「シャルロット・・・」

「止めておけ。私達全員が行くよりも、夜明一人に任せておいた方がいいさ」

夜明の後を追ってメインブリッジから出ていこうとするラウラの肩を太陽が掴んで止める。その顔は罪悪感で険しい物になっていた。

「何でオープン・チャネルの回線を切っておかなかったんだ、私の間抜け・・・」

「いや、考えようによってはこれで良かったかも知れないぞ」

黄昏の言うとおり後で事実を知るよりも、今事実を知った方が遙かにマシだろう。それでも、太陽は深々とため息を吐いた。

「それに、今殺さなくても、何時か殺すことになっていたさ・・・殺さなければ殺されるのはこっちなのだから、割り切れないのか？」

「そんな簡単に割り切れるかよ・・・」

吐き捨てるように一夏は呟く。殺されるから殺す、そう簡単に割り切ることが出来れば、どれ程楽だろうか。それが出来ないから人は人足り得るのだろう。

「そもそも、戦場で不殺（ころさず）を貫くことの方が無理なんだ・・・あの人だって同じだ。幾ら絶対的な力を持っていると言っても、その力に

は限界がある。所詮、戦場における不殺(ころさず)なんて自己満足、偽善・・・何時か折れるぞ、不屈の翼は」

黄昏の言葉に皆が黙り込む。夜明がどれ程強かろうと、所詮は人間。やれることには限度がある。何時か折れてしまう時が来るだろう。全員が黙り込む中、場違いな音が響く。太陽が噴き出した音だ。

「・・・何か私はおかしいことを言ったか？」

「ハハ・・・いや、すまない。この場合、見当違いの事と言うべきか・・・お前が言わなくても、夜明は自分がしていることが偽善や自己満足だと分かった上で不殺(ころさず)を貫いているのさ。私がどうして敵を殺さないのかと訊ねた時、あいつは何の迷いもなく答えたからな」

アークエンジェルハッチ。シャルを迎えたのは夜明一人だけだった。クルー達は自分達では力になれない、と奥に引っ込んでいる。顔を蒼白にしているシャルは床に着地し、覚束ない歩調で夜明に歩み寄った。彼女を護っていた装甲が消え、身体が傾く。夜明はしっかりとシャルを抱きとめた。

「夜明・・・僕は、僕は・・・」

「良く頑張ったな」

何か言うわけでもなく、夜明はシャルを抱き締めながら鼓動に合わせてシャルの背中を軽く叩いた。夜明の腕の中で安心したのか、シャルはダムが決壊したように泣き始める。

「僕、は・・・取り返し、の、つかな、いことを・・・」

「・・・お前が無事でいてくれて良かったよ」

安心させるようにシャルの背中を叩くこと数分。夜明は泣き止んだシャルを彼女の部屋に連れて行った。憔悴しきった表情でベットに腰掛けるシャルを見て、夜明はやはり自分が行けば良かったと後悔する。

「夜明」

「ん、何だ？」

「側に、いて・・・」

思春期の男女が部屋に二人きりでベットに腰掛けるって余り良くないのでは？　と、普通の人間なら思うだろうが、夜明は何の躊躇いもなくシャルの隣りに腰掛け、シャルを安心させるようにポフポフ撫でた。シャルは夜明の肩に頭を乗せ、安心したように深呼吸する。

「落ち着いたか？」

「うん・・・ハハハ、情けないよね。誰も殺さないつもりで行ったのに、この様だよ・・・夜明みたいに上手くはやれないね」

「確かにお前が人を・・・殺してしまったことは変えようのない事実だ。でも、次を上手くやればいいだろ？」

どんな言葉をかけていいか分からず、夜明は口籠もりながらも言葉を紡ぐ。それに対し、シャルはどこか暗澹を湛えた笑みを浮かべて夜明を見る。

「・・・夜明は良いよね。どんな困難があって挫折しても、何度でも立ち上がってまた立ち向かう。その姿には迷いも揺らぎも無い。まして、後悔もない・・・」

「止めろよ、俺はそんな大層な人間じゃない」

「どの口がそんな事言えるのさ！！」

シャルの平手が夜明の頬を捉えた。余裕で避けられる速さの平手だったが、まさか引っ叩かれるとは思っておらず、夜明はモロにシャルの平手を受ける。びっくりしながら頬を押えていると、涙を流しているシャルにベットの上に押し倒された。

「君は知らないんだ!!　人を殺したと言う事がどれ程心にのし掛かるか！　どれ程心を削るのか！　どれだけ後悔しても消えることのない罪悪感、夜明は感じたこと無いんだろうね！　夜明みたいに最初から強い人は、強い人は・・・」

泣きながら夜明を引っ叩いていたシャルだが、やがて声を殺して泣き出す。叩かれた頬がジンジンするのを感じながら、夜明はシャルの頭を撫でた。

「・・・俺だって、最初っから強かった訳じゃ無いさ」

「え・・・っ!!」

シャルは戸惑いの表情を浮かべるが、すぐに夏休みに夜桜から聞いた話を思い出す。夜明が過去に旅をしている時、中東の国の内紛に巻き込まれて仲良くなった人達が死んでしまった事を。

「それって・・・」

「あ、話して無かったか？　・・・セシリーに話しただけだからな・・・」

頭を掻きながら夜明は話し始めた。中東の国で内紛に巻き込まれたこと。誰一人護れず、助けられずに死なせてしまったこと。目の前で仲良くなった人達が死んでいったこと。夜明が話し終えると、顔

に熱い雫が落ちたのを感じた。見ると、シャルがボロボロと涙を零している。

「おいおい、何で泣いてんだよ？」

「ご、めん・・・僕、何も知らないくせに、夜明に酷いこと言って・・・」

「あぁ～、泣くな泣くな。気にしてないから」

両手で顔を覆って泣いているシャルの頭をいつものようにポフポフと撫でる。暫くしてシャルは泣き止んだ。ふと、シャルの胸中に夜明に訊ねてみたいことが生まれる。

「夜明はさ・・・誰も殺さない覚悟をしてるんだよね？　投げ出したくなったりとかってしないの？」

「微塵もしねぇな・・・昔、太陽にも似たような事を聞かれたな・・・」

「解せないな」

「解せないって・・・何がやい？」

「何故お前は敵対者を殺さない？」

旅の道中、太陽にそんな事を訊ねられた。

「何故殺さないって言われてもねぇ・・・殺したくないから、じゃ答えにならないか？」

「偽善もいいとこだな。いや、自己満足と言ってもいいだろうな。そんな己にとって損にしか成り得ない物を貫いて、お前に何の得がある？」

「・・・んじゃぁ逆に聞くがよ、偽善の何が悪い？　自己満足の何が悪い？　人を殺すってことは、その人が持っている可能性を全て奪い取るってことだぞ。その可能性を奪い取る権利なんて俺にあるのか？」

「向こうが殺しにくるからこっちも殺すって考えもゴメンだ。人を殺す責任から逃げてる？　あぁそうさ。そんな物背負うなんざ真っ平だ。殺した人の命を背負うとか何て言ってる奴もいるが、背負えば殺すことが許されるのか？　そんなことをほざいている奴は殺した相手の命を背負うって言葉に酔って、自分が他者を殺したと言う事実から逃れようとしているだけのボンクラさ」

「殺した人の命を背負えるなんて思うほど、俺は自惚れちゃいない。出来ることと言えば、視界に映った人達を助けるために、死に物狂いで努力することだけだ。生き延びさせることがそいつの尊厳を踏みにじる？　なら、俺は何度だって人の尊厳を踏みにじるさ。尊厳を踏みにじられる位で命が拾えるんだ、安い買い物だろ？　世界では明日を生きたくても生きられない命が星の数みたいにあるんだ。そいつ等を差し置いて生きてる連中が殺されなかった事を悔やむってんなら、俺は何度だってそいつの考えと尊厳を踏みにじるさ」

「太陽、俺は間違っているのか？　人を殺さずに生きていて欲しいと願う想いが？　太陽、俺は間違っているのか？　生きて未だ見ぬ世界を見て欲しいと願う心が？　太陽、俺は間違っているのか？　人を殺すことその物が間違ってると判断している頭が？」

「もし間違っていると言うのなら、俺を殺して見ろ。俺の心臓に剣を突き立てて証明して見せろ。世界はそんな偽善や自己満足を貫き通せるほど甘く、優しくないと。言っておくが、俺はそう簡単には死なないぜ。何せ、俺の魂（つばさ）は不屈なんだからな！！」

「それで、その砂糖よりも甘い覚悟をお前は何処まで貫くつもりだ？　と訊ねたらあいつは間髪入れずに答えたよ」

『無論、死ぬまで』

「そう答えたら、太陽の奴に大笑いされちまったよ」

「・・・ハハハ、夜明は昔から夜明だったんだね」

「何だそれ、褒めてるのかよ？」

シャルは柔らかい微笑みを浮かべたまま、ゆっくりと立ち上がった。
夜明もシャルと一緒に立ち上がり、涙の跡が残っている頬を優しく撫でる。

「落ち着いたか？」

「うん。人を殺したって言う事実は一生ついて回ってくるだろうけど、それを理由にして立ち止まっている訳にはいかないから」

「そっか。なら行こう。皆、待ってるぞ」

二人は肩を並べて部屋から出ていき、皆が待っているメインブリッジへと向かった。

偽善、自己満足・・・それの何が悪い？（後書き）

もう一度言います。これが夜明の答えです。不快かもしれませんが、これから読む人はこのことを考慮した上で読み進めてください。

「艦長。本部から指令が来ています」

「何？　・・・分かった」

本部からの指令と聞いて、冬華は怪訝そうに眉を顰める。アークエンジェルの艦長である彼女の最も優先すべきことは、この戦争の切り札（ジョーカー）である夜明達を一日でも早く本部に届けること。そんな彼女に、はたしてラインアークの上層部はどのような面倒事を押しつけたのか？

「詳細はこれに」

「分かった、ありがとう」

普段は通信を請け負っている朔夜から指令が書かれている紙を受け取り、冬華は紙面に素早く目を走らせた。そして、本当に深々とため息を吐く。

「上の耄碌共は・・・こっちの苦労も考えないで無理難題を押しつけてくる」

本部からの指令とは、現在アークエンジェルがいる座標から一日ほど離れたところにある廃都市『イクリス』に駐屯している企業連部隊の壊滅、及び捕えられているラインアークの者達を助けろと言う物だ。やれないことは無いだろうが、失敗する確率の方が遙かに高い。主戦力であるレイジングウィングとトワイライトウィングが未だに修理中である上に、他の者達のＩＳの強化も終わっていないの

だ。シャルは出撃可能だが、持ち直したとは言え、人を殺した昨日今日でまた闘えと言うのは酷だろう。

「・・・太陽に相談してみなければな」

冬華は再びため息を吐き、太陽に会うために席を立つ。何よりも問題なのは、イクリスにカラードランク３『ウィン・Ｄ・ファンション』とＯＲＣＡランク１２『ラスター１８』がいることだ。

「本当にやって来るのか、彼等は？」

「さぁな。やって来ないのならばそれも良し。やって来るのならば、ここが戦場になるだけだ」

荒廃した街『イクリス』。十数年前なら高層ビルが建ち並んでいる光景があったであろうが、今は砂塵吹き荒れる荒れ果てた町並みが広がっている。人っ子一人いないであろう町並みの中で、企業連の兵士達が忙しそうに動き回っていた。その中で異彩を放っている人影が二つ。カラードランク３『ウィン・Ｄ・ファンション』とＯＲＣＡランク１２『ラスター１８』だ。

「・・・しかし私だけではなく、まさかＯＲＣＡ旅団からもリンクスがやって来るとは思っていなかったよ」

ウィン・Ｄは少し珍しそうにラスターを見る。それは周りで動いている兵士達も同じ事だ。企業に所属していたり、独立傭兵として動いているカラードのリンクスと違い、ＯＲＣＡ旅団はクルーゼが私的に雇っている傭兵部隊。故に、表に出てくることは余りないのだ。実際、カラード上位ランカーであるウィン・ＤもＯＲＣＡ旅団のリンクスは初めて見る。

「私達の雇い主の指示だ。私はそれに従うだけさ」

自分に向けられた好奇の視線に鼻を鳴らし、ラスターは与えられた休憩場所へと向かった。その後ろ姿を見送りつつ、ウィン・Ｄは考え込む。

（ラウ・ル・クルーゼ、貴様は何が望みなんだ？）

彼女、ウィン・D・ファンションはクルーゼの事を快く思っていなかった。仮面で素顔を隠し、彼女たちの与り知らぬ所で暗躍しているあの男が。綺麗な言葉を並び立て、腹の中で何を考えているか分からないあの男が。クルーゼは情報源を全く明かさず、このイクリスにアークエンジェルが来ると断言した。だからウィン・Dとラスターがここにやって来させられたのだ。

（考えても詮無いことか・・・）

小さくため息を吐き、自分の休憩場所へと向かおうとしたその時、俄に兵士達の動きが騒がしくなる。何事かと思い周囲を見回す彼女の目に何かが映る。崩壊寸前のビルを突き破ってこちらへと向かってくる漆黒の影を。

「考えても詮無いことでは無く、考えてる暇は無いの間違いか！」

敵を迎え撃つため、彼女は走り出した。

太陽が立てた作戦は至ってシンプル。彼女が敵の注意を引きつけている間に、他の者達が捕虜達を救出するという作戦と呼べるかも怪しい物だ。流石にこの作戦は危険すぎると全員から猛反対されたが、彼女以外に闘える者がいなかったので、結局全員折れることに。

（と言ってもカラードランク３『ウィン・Ｄ・ファンション』、ＯＲＣＡランク１２『ラスター１８』か・・・厳しいか？　ファンションは当たり前として、ＯＲＣＡ最下ランクのラスターもカラード上位ランカーに匹敵する強さの持ち主らしいからな・・・）

目の前にある、ビルと呼べるかどうかも怪しい建造物をぶち破り、太陽は地面を削りながら着地した。左手を振って舞い上がった砂煙を晴らすと、企業連の兵士達や軍用ヘリが攻撃してくるのが見える。放たれる弾丸が真横を通り過ぎる、或いはシールドに弾かれるのを感じながら太陽は右手のライオンハート・ザンバーの銃口を兵士達に向けた。

（君は大丈夫なのか？　人を殺すことになるんだぞ？）

ライオンハート・ザンバーの銃口に黒い輝きが収束していくのを感じながら、彼女はこう答えた事を思い出す。

（人を殺すことに躊躇いはある。だが、護るためなら躊躇うつもりはない）

その言葉通り、彼女は何の躊躇いもなく引き金を引く。放たれた漆黒の閃光は兵士達の真横を通り過ぎて着弾、ドーム状に広がって周囲の建造物諸共兵士達やヘリを破壊していった。

「さて・・・後は夜明達が捕虜を救出している間、ファンションとラスターの相手だな・・・」

目の前の兵士達がそっくり吹き飛んだのを確信してボソリと独り言を呟いたその時、背後で何かが崩れる音が聞こえる。振り返った瞬間、彼女の視界に映ったのは自分に向けて撃たれたバズーカとプラズマライフルだった。咄嗟に横へ瞬間加速（イグニッション・ブースト）して避けようとしたが間に合わず、バズーカとプラズマライフルは彼女の右肩に直撃する。刹那、右肩から先の感覚が無くなった。

「・・・」

自分の身体から何かが吹っ飛んだのが視界に映り、太陽は左手で右肩を確認する。感じたのは、本来右腕があるべき箇所から噴き出している赤く生暖かい液体と激痛。そう、太陽の右肩から先が綺麗に吹き飛ばされているのだ。

「・・・ちっ」

忌々しそうに舌打ちして太陽は左手を思い切り振り、ついた血を飛ばして目の前にいるラスターを睨む。本来、ＩＳに搭乗している者の身体はＩＳの絶対防御で守られているはずだが、何のことはない。

ラスターはプラズマライフルで絶対防御を消したその瞬間にバズーカを当てたのだ。

（この出血量・・・意識を保っていられるのは二、三分が限度だな・・・夜明からか）

夜明から通信が入り、太陽はプライベート・チャネルの回線を開く。

『夜明か？』

『あぁ。こっちは順調に捕虜を救助してる。そっちは問題ないか？』

『右腕を吹き飛ばされただけだ、問題ない』

『・・・お前、今何て言った？』

『問題ない。じゃあな』

『ちょ、たいよ』

夜明の声を無視してプライベート・チャネルを切る。腰からオールデリートを引き抜き、超高密度のビーム刃を展開させた。ガシャンと音がしたので振り返ると、真珠色のＩＳ『レイテルパラッシュ』を纏ったリンクス、ウィン・Ｄ・ファンションの姿がある。太陽は無言でオールデリートを振り上げ、斜めに勢い良く振り下ろした。突風が吹き荒れ、太陽を前後で挟んだ二人を襲う。

「ったく、人の片腕を吹き飛ばしやがって・・・滅茶苦茶痛いんだぞ、それ相応の覚悟は出来ているな？」

二対一、しかも相手は片腕が無いという絶対的に有利な状況。なのに何故だろうか？　ウィン・Ｄとラスターの背筋を冷や汗が伝い落ちるのは？

「トイレは済ませたか？　神様へのお祈りは？　戦場の端っこでガタガタ震えて、命乞いをする準備はＯＫ？」

キャラ人気投票結果発表！＋α

夜明「第一回！　ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼人気キャラ投票結果発表～！！」

一同「「「イエェッ～～～～～～！！！！！！」」」

ドンドンパフパフゥ～～～～～

夜明「司会進行はこの俺、取り敢えずこの小説主人公の月光夜明が務めさせてもらうぜ！！」

太陽「協力してくださった方たちは総計十九人！　作者も含めると二十人だ！！」

一夏「作者的には一位シャル、二位ラウラ、三位楯無先輩だそうだ」

夜明「それではサクサク行っちゃおうぜ！　まずは第九位！　一票の二人、麗しの蒼き狙撃手、セシリア・オルコットと未来の策略家、メルツェルだ！！」

太陽「早速、二人に今の心境を聞いてみたいと思う。セシリア、今の心境は？」

セシリア「く、屈辱ですわ。まさか、ポっと出の未来編キャラ、それも敵役と同じ順位だ何て・・・」

太陽「負け犬の遠吠えは放っといて、次に敵であるメルツェルに話を聞いてみよう」

メルツェル「いや、まさか私に票が入るとは思っていなかったな・・・時に夕暮。オルコットが死にそうなほど悲壮な表情を浮かべているのだが・・・」

セシリア「負け犬の遠吠え負け犬の遠吠え負け犬の遠吠え負け犬の遠吠え・・・（ブツブツ）」

太陽「セシリアの精神ケアは夜明に任せるとして、次は第八位！二票を獲得した四人、ツンデレまな板中華娘、凰鈴音、鬼も泣いて逃げ出す教師、織斑千冬、夕暮の血筋、夕陽黄昏、未来最強、オッツタルヴァことマクシミリアン・テルミドールだ！！」

鈴音「ちょっと！　誰がツンデレまな板中華娘よ！！」

夜明「今日の晩ご飯は！？　・・・じゃなくて、今の心境は！？」

鈴音「無視すんじゃないわよ！！　・・・たった二票ってのが気に入らないけど、一票のセシリアよりはマシね」

千冬「鬼も泣いて逃げ出すとはな・・・覚悟しておけよ夕暮。票を入れたこと、感謝する」

黄昏「ハハハ、ご先祖様には遠く及ばないみたいだが、嬉しいぞ」

オッツタルヴァ「・・・興味が無いな」

太陽「続いて第七位！　七票を獲得した自称夜明の妻、ラウラ・ボーデヴィッヒだ！！」

ラウラ「自称ではない、正真正銘の妻だ」

太陽「で、今の心境は？」

ラウラ「七位とは甚だ不本意だが、一応礼を言っておくぞ。それから夜明、七位になった私をひたすら愛でろ」

夜明「愛でろって・・・撫でればいいのか？」

ラウラ「・・・♪」

太陽「イチャイチャしてる二人を見ていると腸が煮えくり返りそうだから、さっさと次に行くぞ！！」

夜明「次は六位！　八票を獲得したＩＳ学園最強、またの名を手段を選ばない恋姫、十七代目更識楯無！！」

楯無「ブイブ～イ、皆、投票ありがと～♪」

太陽「さ、女狐は放置して次行くぞ次」

楯無「放置プレイは酷いんじゃない、太陽ちゃん？」

太陽「黙れ、殺すぞ」

夜明「どうどう・・・それじゃ楯無、一言コメントを」

楯無「私と夜明の幸せな未来の為に、今後とも応援よろしくね～」

夜明「・・・・・・・・・はい？」

太陽「ぶっちＫＩＬＬ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

暫くお待ち下さい。

夜明「さ、次行くか」

太陽「十票を獲得した第五位！　バカップルだけどやる時ゃやります！　織斑一夏！！」

一夏「誰がバカップルだ誰が！！」

夜明「お前と箒しかいないだろうが。では、コメントを一つ」

一夏「えぇっと・・・原作と違って夜明に色々と見せ場を取られてる俺だけど、これからもよろしく！」

太陽「・・・何でそう言うブルーな事言っちゃうのかねぇ・・・」

夜明「・・・一夏、何か知らんが・・・すまん」

楯無「しんみりとした空気になっちゃったけど楽しくやるわよ！第四位！　十一票獲得したバカップルの片割れ、篠ノ之箒！！」

箒「わ、私が四位か・・・」

楯無「それじゃ箒ちゃん。コメントをよろしくどうぞ」

箒「あ、その・・・投票してくれてありがとう。私は一夏と幸せになるぞ！」

夜明・太陽「「バカップルが・・・」」

楯無「いよいよＢＥＳＴ３の発表よ！」

太陽「第三位！　十四票を獲得したこの小説の主人公！」

太陽・楯無「「その翼が冠する名は不屈！　月光夜明！！」」

夜明「ピ～ス」

太陽「それじゃ夜明、一言頼む」

夜明「いやぁ～、まさか三位なんて順位になれるなんて夢にも思って無かったぜ。皆さん、ありがとうございます」

太陽「それでは第二位の発表！」

夜明「十九票！　金髪の姫君、シャルロット・デュノアだ！！」

シャル「ど、どうも～」

夜明「そいじゃシャル、今の心境を」

シャル「えっと・・・兎に角嬉しいです、ありがとうございます！
（夜明との結婚式夜明との結婚式夜明との結婚式）・・・エヘヘ」

楯無「もの凄く幸せそうねシャルロットちゃん・・・いいなぁ」

夜明「何かシャルがトリップしてるが置いといて、一位の発表だ！」

シャル「獲得票はぶっちぎりの四十一票！　漢の中の漢！　黄昏の黒姫、夕暮太陽！！」

太陽「感謝感激雨霰だ」

シャル「それじゃあ太陽、一言お願い」

太陽「私と夜明、それからシャルと夜明の結婚式、楽しみにしていてくれ」

夜明「明日、太陽の結婚式を書いて、明後日にシャルの結婚式を書く予定だ」

シャル「もし、来たい方がいたら是非来てください！」

太陽「どちらか一つの方に出席する形で頼むぞ」

夜明「祝！　何か何時の間にユニークアクセス二十万突破しちゃってた記念！」

一同「「「「「「「「いぇっ～～～！！！」」」」」」」」

ドンドンパフパフ～

夜明「今回は何をやるんだ？」

太陽「この小説の裏話、及び小ネタをやるらしいぞ」

セシリア「裏話、とは何ですの？」

太陽「うむ。裏話と言うのはだな・・・この小説、元々私が出る予定は無かったらしい」

一同「な、何だってぇ～～～！！！？？？」

太陽「本当は男のオリジナルキャラをもう一人出す予定だったらし

いんだが、男が何人もいるってこれ如何に？　と思い、急遽オリジナルキャラを私に変更したらしい」

一夏「その判断、絶対に間違ってないよな」

箒「だな。この小説は太陽がいて成り立っているような物だからな」

シャル「ひ、否定できないね」

鈴音「んで、小ネタは何をやるの？」

太陽「まずはこれだ」

～アークエンジェル、とある日常の一ページ～

少年「太陽お姉ちゃ～ん」

太陽「ん、どうした？」

少年「子供ってどうやって出来るの？」

太陽「ブホォッ！！　・・・そ、それは今すぐに知りたいのかな？」

少年「うん。お父さんとお母さんも教えてくれないんだ」

太陽「そうか・・・分かった、ついてきて」

一夏「・・・で」

箒「何故、私達の所に来た？」

太陽「実演しろ、子作り」

太陽「こんな感じ（スパァン！！）・・・痛いぞ」

一夏・箒「「お前は何をやらせるんだ！！」」

ラウラ「で、これで終わりか？」

夜明「取り敢ず、俺たちに似合いそうな名台詞を言わせてみたいらしいぞ」

鈴音「何それ？」

夜明「具体的にはこんな感じだ、太陽！」

太陽「ご覧の通り、貴様が挑むのは無限の剣。剣戟の極地！　恐れずしてかかってこい！！」ｂｙＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔアーチャー。

夜明「こんな感じだ」

シャル「何でだろうね。本来男性キャラの言う台詞なのに、太陽が言うともの凄く様になってるよ」

ラウラ「そうだな・・・次は夜明がやるみたいだぞ」

夜明「今この瞬間は力こそが全てだ・・・私を超えてみろ！」ｂｙＡＲＭＯＲＥＤ　ＣＯＲＥ　ＮＥＸＵＳ　ジノーヴィー。

セシリア「正直微妙ですわね・・・」

シャル「は、ハハ・・・次は一夏と箒がやるみたい」

一夏・箒「「さぁ、お前の罪を数えろ!!」」ｂｙ　仮面ライダーW　左翔太郎　フィリップ。

鈴音「まぁ、この二人は確かに二人で一人だしね」

ラウラ「次はセシリアだな」

セシリア「狙い撃つぜ!!」ｂｙ　ガンダムＯＯ　ロックオン・ストラトス。

夜明「・・・」

一夏「・・・」

箒「・・・」

セシリア「せ、せめて何かしらリアクションを下さいません!?」

鈴音「あんたバカァ～?」ｂｙ　エヴァンゲリオン　惣流・アスカ・ラングレー　。

太陽「ツインテール繋がりか？」

ラウラ「それ以外に共通点が思いつかないな・・・」

シャル「全て・・・振り切るぜ！！」ｂｙ　仮面ライダーＷ　照井竜。

夜明「これは？」

太陽「アクセルのテーマ『疾風のアクセル』から来たものだろうな」

ラウラ「戦場はシビアな場所だ　地道な鍛錬を経て自分のものにした技術以外は通用しない」ｂｙ　ＭＥＴＡＬ　ＧＥＡＲ　ＳＯＬＩＤ３　スネーク。

鈴音「・・・眼帯以外に共通点無いじゃない」

夜明「あぁ～・・・いんじゃね？」

キャラ人気投票結果発表！＋α（後書き）

何このカオス？

隻腕、されど強し（前書き）

結婚式の話は出席者整理の為、次回となります。

今回は本編です。

隻腕、されど強し

「・・・」

太陽は無言で吹き飛んでいった自身の右腕に視線を送る。すると、時折痙攣している右腕を守る装甲と一体化したライオンハート・ザンバーから甲高い音がした。ライオンハートに装備されたシュート・ドラグーンが刀身から外れ、太陽の周囲を旋回するように飛び始めた。

「さて、どっちが先に三途の川を渡りたい？」

太陽の問いにどちらも答えず、ラスターがバズーカとプラズマライフルを撃つ。半身になってラスターの攻撃をかわすと、後ろからウィン・Dが左腕のレーザーブレードを展開して肉薄してくる。オールデリートを薙ぎ払うように振って振り下ろされたレーザーブレードごとウィン・Dを弾き飛ばし、予め用意しておいたスラッシュ・ファングで追撃をかけた。

「ファンションを一撃で吹き飛ばすか・・・あれは一応カラードランク3だぞ」

「御託は良い。こっちは時間がないんだ、行くぞ」

太陽は背中のスラスターを最大出力まで上げ、ラスターへと突っ込む。ラスターはその場にどっしりと構え、両腕のバズーカとプラズマライフル、左肩にあるミサイルを連射した。襲い来るロケット弾と集束されたプラズマ、ミサイルを全て最小限の動きで避け、周囲を旋回している四つのシュート・ドラグーンに射撃の指示を送る。

シュート・ドラグーンの先端にある銃口が輝き、黒色の閃光が放たれた。

「ぐっ・・・」

四発の内二発を喰らい、ラスターは僅かに後退する。レーザーの直撃を受けても視線は太陽から外さず、ラスターは右肩のグレネードを向けた。ラスターの眼前にまで太陽が接近すると、グレネードの砲口から発射を示す輝きが漏れる。輝きが爆発して砲弾が放たれた刹那、太陽は上へと跳躍した。

「何!?」

驚くラスターの装甲を、太陽が投擲したオールデリートが切り裂く。オールデリートの切っ先が地面に突き刺さる前に太陽は地面へと瞬間加速(イグニッション・ブースト)して急降下、オールデリートを掴んでラスターを切り上げた。切り上げたオールデリートを後ろへとやり、スラッシュ・ファングの追撃を振り切ったウィン・Dが振り下ろしたレーザーブレードを防ぐ。

「後ろに目でもあるのか!?」

「悪いが、私は百目小僧の親戚じゃないぞ」

「それは失礼した!」

無茶な体勢で自分の攻撃を容易に防いだ太陽を見て、ウィン・Dは鍔迫り合いでは勝てないと判断。左肩の双発型レーザーライフルを展開させた。それと同時に太陽の真正面にいるラスターも左腕のプラズマライフルの銃口を太陽へ押しつけようとする。流石に零距離、

それも前後挟まれての砲撃を受ければ、ＩＳの絶対防御で守られているとは言え吹き飛ぶだろう。

「面倒な・・・」

心底面倒くさそうにため息を吐きながら太陽は両足のグリフォンを展開させた。まず、右足のグリフォンでラスターのプラズマライフルを切り裂き、踵落としの要領で踵のグリフォンをラスターの肩に突き立てる。そのまま右足を支えにして左足を跳ね上げ、両脚を百八十度開脚させて左のグリフォンでウィン・Ｄの双発型レーザーライフルを破壊した。

「ちっ・・・！」

双発型レーザーライフルをパージして距離をとるウィン・Ｄを無視し、太陽は両脚をラスターの首に絡ませる。逆エビ反りに身体を反らせ、後ろへと下がったウィン・Ｄにラスターを投げつけた。投げられたものが投げられた者なので、ウィン・Ｄは避けずにラスターを受け止める。

「大丈夫か！？」

「・・・敵から目を逸らすな、まだ闘いは終わってないぞ！」

ラスターに怒鳴られ、ウィン・Ｄはハッとして太陽に視線を向けた。絶好の追撃のチャンスであるにも拘わらず、太陽は二人を攻撃しないで真横にある嘗てビルだったであろう建物にオールデリートを一閃させている。そのまま百メートルはあるであろう距離を一瞬で飛翔し、建物の天辺を二人の方向へ蹴り飛ばした。

「「？　・・・っ！」」

訳が分からずに二人が建物を見ていると、危なっかしく建物が揺れ始めた。さっき、太陽がオールデリートを一閃させて建物の根本を切り、蹴られた衝撃で建物が倒れてきたのだ。それも二人に向かって。今からでは、建物が倒れる範囲から逃れられない。ウィン・Dは右腕のレールガン、ラスターは右肩のグレネードをゆっくりと倒れてくる建物に向ける。二人の砲撃が建物を爆散させた。建物がバラバラになって吹き飛び、周囲に破片が降り注ぎながら煙を巻き上げる。煙で視界が悪く中、何かが動いた。

「がぁっ！！」

凄まじい衝撃を背中に受けてラスターが吹き飛ぶ。衝撃で煙が弾け飛び、オールデリートを振り抜いてラスターを吹き飛ばした太陽の姿が現れる。ウィン・Dは迷い無く太陽へと突っ込んだ。太陽はウィン・Dへと身体を向けながら、表情一つ変えずに何かを蹴り上げて目隠しにする。

（目隠しか、下らん！）

レールガンの銃口を向け、自分に向けて蹴り飛ばされた物を撃ち抜いた。その瞬間、爆散した目隠しから何か液状の物が噴き出て、顔に掛かり視界を塞ぐ。

「なっ！？」

余りの事にウィン・Dは声を上げて驚いた。視界が赤く染まった事や、鉄の匂いがすることからそれが血であることが容易に分かる。ならば何故、ウィン・Dの視界は血で塞がれたのか？　答えは簡単、

太陽の足下に血を内包した物、即ちさっきラスターに吹き飛ばされた太陽自身の右腕が転がっていたのだ。

（まさか・・・！）

ウィン・Dは戦慄を覚える。幾ら自分の身体から離れたとは言え、目の前の敵は元々自分の身体の一部だった物を何の躊躇もなく目潰しに使用したのだ。それも表情一つ変えずに。慌てて目元を拭って血と細かな肉片を拭き取った彼女が見た光景は大きく脚を回転させている太陽。そして感じたのは反射で頭への蹴りを防いだ左腕を貫いたグリフォンから持たされる激痛だった。

吹き飛んでいったウィン・Dが後頭部を強打して気絶したのを確認し、太陽は後ろへと視線を向ける。そこにはさっき太陽に吹き飛ばされたラスターがボロボロの姿で立っていた。両肩のミサイルとグレネードはさっきの太陽の攻撃でボロボロだが、その目は爛々と輝いている。

「ハッ、やはり戦場はこうでなくてはな・・・行くぞフェラムソリドス！　戦場の血を吸わせてやる！！」

「・・・さっさと来い」

自身のＩＳに呼びかけるラスターを冷めた目で見ながら、太陽は周囲にシュート・ドラグーンとスラッシュ・ファングを旋回させた。ラスターが放つバズーカをスラッシュ・ファングで切り裂き、プラズマライフルをシュート・ドラグーンで相殺する。太陽自身はラスターに吶喊、渾身の左回し蹴りを叩き込んだ。地面を削りながら吹き飛んでいくラスターは廃墟をぶち破って漸く止まった。そこに追い打ちのスラッシュ・ファングがラスターの身体に刺さり、スラッシュ・ファングのスラスター部分をシュート・ドラグーンの砲撃が撃ち抜き爆発させる。

「つ、強いな・・・だが、まだだ・・・！」

身体中の傷口から血と一緒に力が抜けていくのを感じながらも、ラスターはバズーカの銃口を太陽に向けて引き金を引いた。ダンッ！
と大きな足音が廃墟に出来た風穴に太陽のシルエットが浮かぶ。
バズーカは太陽の真横を掠めて飛んでいった。それでもラスターは

引き金を引き続けるが、太陽にロケット弾が直撃することはない。
太陽はスラスターを最大出力にしてラスターに突っ込み、オールデリートを突き出した。

「・・・出血多量で意識が無くなる前に勝負がついて僥倖だったな」

右肩から噴き出す血の量が少なくなったのを若干気にしつつ、太陽は心臓を貫かれて絶命したラスターの死体をそっと横たえた。未だに両目を開いているラスターの顔を左手で覆い、瞼を下ろしてやる。

ゆっくりと立ち上がって廃墟から歩み出た所で、丁度よく夜明からプライベート・チャネルで通信が入った。

『太陽。こっちは終わった、そっちはどうだ?』

『片方は重傷、もう片方は殺した』

『・・・そうか』

『・・・すまない』

『いや、謝ることは無ぇよ。俺はお前の覚悟とかをとやかく言うつもりは無いしな』

『戦場で人を殺すことに覚悟もクソも無いがな・・・まぁいい。私はこのまま帰投すればいいのか?』

『あぁ』

『了解した』

プライベート・チャネルを閉じ、太陽はラスターの死体に身体を向ける。そして深々と一礼し、空へと飛び立った。

結婚式　『幸せにしてくれよ』ｂｙ太陽（前書き）

更新が遅くなってすみませんでした。最近買ったマジ恋に夢中になってまして・・・百代は可愛いなぁ

結婚式　『幸せにしてくれよ』ｂｙ太陽

古今東西、女性としてこの世に生を受けた人にとって例外なく憧れられる言葉がある。そう、結婚式だ。どれ程クールで現実主義な女性でも、どれ程悲観的で絶望している女性でも絶対に憧れたことがあるだろう。某結婚式場。今日この場所で、また新たな愛が産まれようとしていた。

月光夜明と夕暮太陽。周囲から『お前ら恋人だろ？　恋人だろ？つぅかもう事後まで行ってるだろ？』と言われ続けて早一年。二人がＩＳ学園を卒業して一年後の十九歳の春。二人はやっとこゴールインしたのであった。それでは、新郎と新婦の様子を見てみよう。先ずは新郎の方から・・・。

「無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理
無理無理無理無理無理理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無

理無理！！」

ものっそいテンぱってた。月光夜明、今年で十九歳になる若さ溢れ返る青年だ。その性格は雲のように掴みどころが無く、風のように自由気ままで飄々としている、だが決める時は最高に格好良く決める男だ、と言われるが・・・今の彼を見ては、誰もそんな感想を抱かないだろう。白いスーツが汚れるのも構わずに床の上を転げ回っている夜明に呆れたような視線を送る人影が二つ、と抱腹絶倒している人影が一つ。

「よくそんな一息で言えるな」

呆れたように呟く一夏の横で銀河も静かに頷いた。二人から少し離れた所にいる夜雲はひたすら腹を抱えて爆笑している。三兄弟の中で、一番焦るとかテンパるとかと言う感情と縁遠い夜明がこれほどにまで取り乱している光景は物凄く珍しいのだろう。

夜明を除くこの三人、既に既婚者だ。一夏は一年前にＩＳ学園を卒業したと同時に付き合っていた恋人、篠ノ之箒と結婚。その際、一

夏の姉である千冬が決戦兵器と化したが、高校生の頃から想いを寄せていた銀河と電撃結婚をすることになり、今では口・・・ではなく拳うるさい小姑となっている。

「結婚とか無理ぃーっ！！！」

頭を抱えながら、彼は絶叫するのだった。

「え、ってか結婚って何！？　男と女が乳繰り合って男と女が愛し合って男と女が色々と約束して男と女がスパーキィィング！！ってなるあれ！！？？」

言ってる事が意味不明すぎる。銀河は再びため息を吐きつつ、愚弟を落ち着かせるために踵落しを叩き込んだ。

「ぐぴゃっ！！」

「落ち着かないか馬鹿者。ここまで来て今更ジタバタするな。それに、そういう考えは太陽に失礼だと思わないのか？」

「・・・そうだけどよぉ～・・・」

踵を打ち込まれた部分を摩りつつ、夜明はため息を吐く。正直な話、結婚式当日になってもまだ実感が湧かないのだ。数年前までは無二の相棒だと思っていた女性が、今では互いの一生を支え合う伴侶になったのだから。

「俺なんかでいいのかよ・・・」

「さぁな。少なくとも、太陽はお前が良いと言ってくれたんだろ？」

一夏に諭すように言われ、夜明は太陽のプロポーズを思い出す。

『私はお前無しじゃ生きていけない。だから、私と結婚してくれ・・・安心しろ、お前も私同様、私無しでは生きていけなくしてやるさ』

どこまでも漢らしく、どこまでも力強く太陽はそう言い切った。その時の事を克明に思い出し、夜明は微かな笑みを浮かべる。

「・・・ま、あいつのぶっ飛んだ感を受け止められるのは、世界中に俺くらいしかいないだろうしな」

心の底からそう思う。世界広しと言えど、夕暮太陽の隣に立っても違和感が無い男は自分だけだろう。と、夜明は自負していた。

「ま、キチンと幸せにしてやれよ？」

「あぁ！」

夜雲に力強く頷いて見せ、夜明は勢い良く立ち上がり・・・転けた。

さて、一方こちらは新婦。炎の様な深紅のウェディングドレスを纏った太陽が落ち着いた表情で椅子に座っていた。

「似合っているぞ、太陽」

「全くだな。丸でお前の為に用意されたみたいだ」

「フフフ、お綺麗ですわよ、太陽さん」

箒、千冬、夜桜三人が賛辞を述べる中、徐に太陽は立ち上がって部屋の中を歩き回り始める。部屋を一周した辺りで椅子に戻り、静かに腰を下ろしながら一言。

「・・・蹴りがやり難そうだ」

人生初のウェディングドレスを着て、感想が『蹴りがやり難そうだ』なんてのは太陽だけだろう。三人が綺麗にすっ転ぶのを、太陽は不思議そうに見ていた。腰を摩りながら起き上がる三人。まぁ、太陽

らしいと言えば太陽らしい、と納得するのに時間はかからなかった。

「それにしてもお前は落ち着いているな」

「まぁ、ここまで来てジタバタするのは無しでしょう」

「その言葉、お前の旦那に聞かせてやりたい物だな」

さっき、夜明が頭を抱えながら床の上を転げまわっていたのを思い出し、千冬と箒は引き攣った苦笑いを浮かべる。普段の夜明からは想像もつかない光景に、ドン引きしたのは記憶に新しい。

「夜明さんも年頃の男の子と言うことですわ」

夜明が無理と連呼し続ける光景を見て、それだけで済ませる夜桜も流石と言える。ふと、壁に掛けられている時計が時間を告げる。

「時間か・・・それじゃ、行くとしますか」

椅子から立ち上がり、太陽はドレスを翻して部屋を後にする。その後ろ姿はこれから結婚する新婦のものではなく、戦士のそれだった。

「・・・所詮、私は負け組・・・」

「・・・ＩＳ搭乗者としても、女としても負けた私なんて死ねばいいのよ・・・」

「・・・アハハ、結婚式だよ、めでたいよぉ～・・・」

「・・・この結婚式場を爆破するには、どの程度の爆薬が必要か・・・」

結婚式場のど真ん中。一番新郎と新婦がよく見えるであろうテーブルに四人の美女が座っていた。セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ。夜明と太陽、共通の友人たちである。四人が放つ黒いオーラは凄まじく、結婚式場全体を覆っている。四人が座っているテーブルの隣りのテーブルに座っている男性が、組んだ両手で頭を支えながら呆れたような表情を浮かべていた。

「おいおい、暗すぎるだろあの四人。何時、ここは葬式場になったんだ？」

「無理も無いだろ。惚れた男が他の女と結婚するんだぞ。素直に祝福しろと言うほうが無理な話だ」

「それは分かりますけど・・・責めて、もう少し負のオーラを抑えて欲しいですね」

呆れたように言っているのは癖のある茶色い短髪、鈴木政志。腕を組んでいるのは黒主悠。理解出来るような、困ったような表情を浮かべているのは長峰零斗。更にそこから少し離れたテーブルでは。

「ウフフ・・・さぁ、太陽ちゃん。早く私と死合いましょう死合いましょう死合いましょう・・・」

「師匠！　だからここは結婚式場であって、戦場じゃありませんって！　騒ぎを起こさないでくださいよマジでお願いだから！！」

「分かってるわよ。あぁ、早く間近で見たいわね。太陽ちゃんが闘う姿・・・じゃなくて、ウェディングドレス姿」

「絶っ対ぇ分かって無ぇだろお前」

恍惚とした表情を浮かべたり、慌てて表情を引き締めたりと百面相をしている美女は陸奥謙信。その謙信を師匠と呼び、現在ジト目で睨んでいるのは彼女の弟子、氷雪麗我だ。

「・・・あっちもあっちで濃いのがいやがるなぁ・・・」

「あの人のことを師匠と呼んでいる彼、大変そうだな」

政志と悠が同情の視線を麗我に送る中、ふと式場内が暗くなる。

「二人とも、新郎と新婦が来たみたいですよ」

零斗が囁くのとほぼ同時、暗くなった式場内にライトが灯り、司会として立っている一夏を照らし出した。

「えぇ～、それでは皆様、長らくお待たせ致しました。新郎、月光夜明と新婦、夕暮太陽の入場です。盛大な拍手でお迎えしてくださいい」

一夏を照らしていたライトが入り口の方を向く。結婚式でよく聞く音楽が流れる中、一同が拍手していると扉が開いて二人が入ってきた。そして、例外なく拍手を止めた。入場してきた、深紅のウェディングドレスを着た太陽が美しすぎる所為ではない。それもあるだろうが、ほとんどの原因は彼女の隣りを歩く夜明にあった。何せ彼は・・・手と脚を同時に出しているのだから・・・。

「あ、あれはギャグでやってむごっ！？」

零斗が余計なことを言う前に、悠が口を塞ぐ。政志は笑うのを必死で堪えていた。遠めで見ても分かるくらい夜明は顔を赤くしている。そんな所に追い討ちを掛ければ、何かしらのハプニングが起こるのは必定だろう。

「・・・夜明の奴、緊張しすぎだろ・・・」

「隣りを歩いてる太陽ちゃんが綺麗過ぎるのかもね。あぁ・・・闘いたい」

「やめなさいって」

麗我が謙信を諌めていると、ようやく笑いを堪えきった政志が大声で夜明に呼ばわった。

「おい新郎！　腕と脚が同時に出てるぞ！！」

誰もが心の内で思いながら口にしていなかったことを・・・。悠の予想通り、夜明は政志の声で顔を更に赤くし、すごい勢いで転んで顔を思いっきりぶつけた。

「「「「「「・・・」」」」」」

物凄く気まずい沈黙が流れる。倒れた夜明はそのまま起き上がろうとしない。その心境、この上なく惨めだろう。悠と零斗は政志に非難の視線を送り、政志も政志で物凄い罪悪感に襲われていた。何時までも立ち上がろうとしない夜明を見かね、麗我が助け起こそうと動いたその時。

「ぷっ・・・」

誰かが噴出した。驚く無かれ、それは太陽本人の物だった。誰もが戸惑いの表情を浮かべる中、一頻り笑った太陽は夜明を助け起こした。パンパンとスーツについた埃を払い、苦笑いを浮かべながら夜明にデコピンする。

「何を気負っているんだお前は？　結婚式だからと言って、わざわ

ざ格好つける必要がどこにある」

ハハハ、と笑いながら太陽は夜明の首に両腕を回し、ゆっくりと、だが問答無用で唇を奪った。夜明の顔が驚愕を浮かべ、式場の至る所から黄色い悲鳴が上がる。

「太陽ちゃんも大胆なことするわねぇ～」

「大胆とかってレベルじゃ無いと思うんですけど・・・」

感心したように呟く謙信の横で、顔を赤くさせた麗我が突っ込む。弱弱しい抵抗を見せる夜明を拘束し続けること数分、太陽はようやく夜明を解放した。可愛らしい表情で唇を舐め、自分の額を夜明の額にくっつける。

「私は在りのままのお前に惚れたんだ。だから、何時も通りにしてろ」

「・・・ん、了解」

誰も聞き取れ無いくらいの声に、夜明は顔を赤くしつつも頷いた。よろしい、と太陽は満足そうに夜明から離れ、すっと手を差し出す。

「それじゃ、しっかりしてくれよ、旦那様」

「・・・あぁ、任せときな」

その手をとると、微かに太陽の口が動いた。

『愛してる』

対する夜明。

『俺も』

クスクスと笑い、二人は誓いを立てるために神父の下へ向かおう・・・としたのだが・・・。

「「ちょぉっと待ったぁぁぁぁ!!!!!」」

すごい勢いで式場の入り口が開く。全員が驚いて入り口を振り返ると、そこには二つの人影。人影を見て、夜明は首を傾げる。

「師匠に楯無？　一体何のようだよ？」

「何のよう？　そんな決まってるじゃない・・・花婿を奪いに来たのさぁぁぁ!!!!!」

「「普通そこは花嫁だろうがぁぁぁぁ!!!!!!」」

悠、麗我の全身全霊の突っ込み。零斗はどうすればいいのか分からずオロオロし、謙信と政志は遠慮もくそも無く爆笑していた。

「よっくんとようちゃんが結婚するって聞いて色々と考えたんだけど、やっぱりよっくんみたいないい男の子を独り占めするのは良くないと束さんは思うのだよ！」

「だから！　夜明を私たちの共有財産にすることにしましたぁ！！！」

「「「「その話乗ったぁ！！！」」」」

「セシリー、鈴音、シャル、ラウラ！　お前ら本気か！？」

「ん～、まぁ当然と言えば当然か」

束と楯無に呼応して四人が立ち上がる。驚く夜明、その横で太陽は納得顔で頷いている。

「「と言うわけで、夜明（よっくん）を奪わせてもらう！！」」

「「「「同じくぅーっ！！」」」」

夜明と太陽に吶喊する六人。それを見て、謙信は楽しそうに顔を歪ませた。

「あら、これは好都合ね。ドサクサにまぎれて太陽ちゃんと死合いましょ」

「自重しなさって話を聞けこのバカ師匠ぉぉぉぉ！！！！」

太陽に向かっていった謙信を追う、麗我の叫びが空しく響く。

「はっはぁ！　何だか知らないが面白くなってきたぜぇ！　俺も混ぜなぁぁぁぁ！！！！」

「おい！　場を必要以上にかき回すな！！」

「あぁ！　何なんですかこのカオスはぁぁぁぁぁっ！！！！！」

謙信同様、楽しそうに争いの渦中に突っ込む政志。政志を止めようとする悠、余りの急展開っぷりにぶち切れる寸前の零斗。喧々囂々、テーブルや椅子、食器が飛び交う中、夜明と太陽は苦笑いを浮かべて口づけする。

「俺たちの周りは騒がしすぎていけねぇな」

「だが、静か過ぎるのよりもずっと良いさ」

「だな・・・永遠に愛してる」

「・・・私もさ」

顔を赤く染め、二人は再び口付けした。

その後、バカ騒ぎを起こしていた者達が千冬に鉄拳制裁されたのは言うまでも無い。

結婚式　『幸せにしてくれよ』ｂｙ太陽（後書き）

こんなんでいいんですかね？　協力してくださった皆様、ありがとうございます！！

結婚式　『幸せになろうね』ｂｙシャル

古今東西、女性としてこの世に生を受けた人にとって例外なく憧れられる言葉がある。そう、結婚式だ。どれ程クールで現実主義な女性でも、どれ程悲観的で絶望している女性でも絶対に憧れたことがあるだろう。某結婚式場。今日この場所で、また新たな愛が産まれようとしていた。

月光夜明とシャルロット・デュノア。共にＩＳ学園在籍していて、二年に上がった辺りで恋仲となる。だが、学園を卒業すると同時にシャルは父であるデュノア社の社長に連れ戻された。その際、夜明は人生で初めて本気でキレ、単身フランスに乗り込んでデュノア社に喧嘩を売る。そして、遅れてやって来た仲間達と一緒にシャルを奪還した。

「私が私の道具をどう扱おうが私の勝手だ。部外者は黙っていろ」

「手前に俺の女を道具扱いする資格は無ぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！」

シャルを奪還する際、夜明とデュノア社社長の間でこんな会話があったとか何とか。その後、シャルはデュノアと完全に縁を切る。そして夜明と婚約、今日の結婚式に至った訳だ。さて、それでは新郎新婦の様子を見てみよう。まずは新郎から・・・。

「・・・燃えた、燃え尽きたよ・・・真っ白な灰みたいにな・・・」

絶賛燃え尽きていた。某超人気ボクシング漫画の主人公よろしく椅子に座りながら項垂れ、身体全体から色という色を失くして真っ白になっている。真っ白になった夜明を訝しげに見る三人、一夏、銀河、夜雲。

「何で燃え尽きてるんだ？　銀河さん、何か心当たりは？」

「いや、見当もつかぬ・・・夜雲兄上は？」

「わっかんねぇ。本人に聞くのが一番早いだろ。お～い、夜明ぇ～」

ぺちぺちと夜雲が夜明の頬を軽く叩き続ける事一分。ようやく夜明の身体に色、瞳に生気が戻ってきた。

「夜明、何で燃え尽きてたんだ？　何かあったのか？」

些か虚ろな目で見返してくる夜明に夜雲が尋ねる。まだ頭がまともに機能していないのか、夜明は己に喝を入れるために頬を数回叩く。

「あぁ・・・昨日の夜、シャルと色々とやっててね・・・」

それだけで大方の事情が分かったのか一夏は苦笑、銀河は呆れを顔に浮かべ、夜雲はゲラゲラと笑った。だが、少しばかり勝手が違うらしい。夜明は笑いと呼ぶには、どこか虚ろ過ぎる表情を浮かべて三人から目を逸らす。

「俺も明日、結婚式だから程々にしようって言ったんだけど・・・シャルが離してくれなくて・・・あの子って結構肉食系だったみたい」

「シャルがか！？」

驚きで声を上ずらせる一夏に夜明は頷いて見せた。そして昨夜のことを思い出したのか、嬉しい様な恐怖した様な複雑怪奇な表情を浮かべる。忘れたくても忘れられない昨夜のこと。シャルの汗の味、艶かしい嬌声、自分の身体の上を這い回るように動くシャルの舌。そして背筋がゾッとする様な声音で呟かれた一言。

『僕は君の子供が欲しいんだよ、夜明』

「いやぁ～、五十発を超えた辺りから、シャルの声が死神の呼び声

みたく聞こえたぜ・・・」

あはは、あははと壊れた機械の様に虚ろな声で笑う夜明。シャルの意外すぎる一面を垣間見た三人だった・・・。

一方新婦。こちらは・・・

「～♪　～♪」

シャルロット・デュノア。今日結婚する彼女は鼻歌を歌いながら、

部屋にある鏡でウェディングドレスを着た自分の姿を確認していた。
ふと、後ろの扉が開く音がしたので、振り返る。

「おぉ～おぉ～。幸せそうだなシャルロット。羨まし過ぎて妬けるな」

相変わらず男物のスーツをバッチリと着こなした太陽が立っていた。
心の底から嬉しそうに自分の姿を確認しているシャルに苦笑いしながら歩み寄り、肩に手を置いて彼女もシャルのウェディングドレス姿を確認する。

「綺麗だな本当に。結婚は女性を綺麗にするとは良く言ったものだ」

シャル同様、太陽も心の底から嬉しそうに言う。夜明とシャルが結婚することを決意した時、誰よりも二人を祝福したのは彼女だった。
自分が惚れた男が別の女と一緒になると言うのに、その時の太陽の表情は祝福以外の何物でもなかった。

『惚れた男が幸せになる。そして友人も幸せになる・・・祝福以外、何をすればいいのか分からないよ』

そう言って、彼女は一筋の涙を流しながら笑う。

「あ、あのさ太陽・・・その」

シャルが言葉を紡ごうとした刹那、強風が彼女の髪を揺らした。シャルの眼前に正拳突きを放った体勢のまま太陽は笑い、ゆっくりとシャルの目の前に突き出した拳を下ろす。その表情は笑っているが、心の底から怒っている物だと、シャルには容易に分かった。

「それ以上言ったら頭を吹き飛ばすぞ。あいつは・・・夜明はお前に惚れ、そして一緒になる道を選んだんだ・・・幾らあいつの無二の相棒だからといって、その事に一々口を挟む権利なんて、私は持ち合わせていないさ」

それに、そんな事を言っていられるのも今の内さ、と太陽は意地の悪い笑みを浮かべる。

「私が身を引いているのは、夜明が完全にお前に惚れてるからだ。もし、夜明の気持ちが少しでもお前から離れたら、その時は一切の遠慮なしに寝取らせてもらうさ」

「っ！？」

シャルは驚きで目を見開いた。驚愕の表情を浮かべているシャルに太陽が意地の悪い笑みを送っていると、やがてシャルは太陽同様意地の悪い笑みを浮かべる。

「・・・太陽。君の夜明に対する想いは、一応分かってるつもりだよ。僕だって、もう夜明無しでは生きていけなくなってる位愛してるからね。でも、それとこれとは話は別だよ」

シャルの周囲に量子的な揺らぎが走った。彼女の周囲を覆う量子的揺らぎが数多の武装を形成するのに時間は掛からないだろう。

「僕から夜明を奪う？　それなら僕にも考えがある・・・戦争をしよう」

その瞳に揺るぎない覚悟を灯し、シャルは太陽を見据えた。シャルの視線に対し、太陽は意地の悪い笑みを浮かべたまま腕組みをする。

だが、その意地悪な笑顔が柔らかな笑みになるのに時間は掛からなかった。

「それでいい。もし。私にここまで言われて何も言い返さなかったら、その横っ面思いっ切り張り飛ばしてたぞ」

組んだ両腕を解き、太陽はシャルの両肩に手を置いて、炎の様な真紅の瞳でシャルの瞳を覗き込む。太陽が内に秘めている激情を表しているようなその瞳には薄っすらと涙が浮かび、友人を心から祝福していた。

「幸せになれよ、シャル」

それだけ言って、太陽は部屋から出て行った。

「招待した人たちの案内は等たちがやってるからな。私は神父を迎えに行くとするか」

太陽は一旦式場を後にし、神父を迎えるために指定の場所へと向かう。二、三分と掛からずに到着し、神父が来るのを待った。

「そろそろだと思うんだがな・・・お、あれか？」

太陽の目が数百メートル離れたところを走るタクシーを捉える。太陽の予想通り、タクシーは彼女の目の前に止まった。そして、タクシーから降りてきた神父を見て、太陽はビシリと固まった。

「あぁ～、君が太陽ちゃん？　俺はグレイ・スティン、今回の結婚式で神父をやらせてもらうことになった」

よろしく！　と爽やかに挨拶する若き神父、グレイ・スティン。間髪入れずに太陽は一言。

「チェンジで！！」

「いや、それは酷いだろ！？」

その後、どうにか話が纏まり、二人は式場へと向かった。

「にしても若いな。その年で神父か」

「ま、人生色々あってな。それで今は神父に落ち着いた・・・様な気がする？」

「何で疑問系なんだ・・・」

呆れたようにグレイを横目で見ながら、式場に戻ってきた太陽はグレイを待合室に案内する。

「それじゃ、後三十分位で始まるから、よろしく頼む」

「任せなさい！　最高の結婚式にしてあげるさ！　・・・誰も忘れられないな・・・くっくっく」

最後ら辺の忍び笑いが多少、気になるところだが、取り敢えずは信用しても問題ないだろう、と己の勘に従って太陽は式場へと向かった。

「結婚式か・・・何か、待ってる方も緊張してくるな・・・」

弱めの証明に照らされ少し暗い式場のテーブルの一つ。黒いスーツを着た少年、黒谷終は少しだけ落ちつか無げに周囲を見る。何分、こういう式に来るのは初めてだから、緊張するのを禁じえない。

「待ってるほうがこれだからな、結婚する本人達はどんくらい緊張してんだろ・・・そう言えば、楓は何時までトイレに行ってんだ？」

終は自分と一緒招待された女子、音梨楓の姿を探す。数分前、トイレに行ってくると言って戻ってこない友人。まだトイレを探しているのか？　と首を傾げていると、すぅっ、と式場内の照明が一気に弱くなった。

「お、始まるのか？」

終の予想通り、数個の照明によって今回の結婚式司会を務める一夏が照らし出された。

「えぇ～、皆様お待たせしました。これより式を開始したいと思い

ます。新郎新婦の入場です、盛大な拍手で迎えてあげてください」

式場内に響く拍手。扉が開き、白いスーツを着た夜明が些か顔を赤くして入ってくる。その横には、夜明同様少しだけ顔の赤いシャルがエスコートされている。

「私の戦友である夜明は恐ろしいほど鈍い男でした。正直言って、私は彼が結婚とかそう言うものが出来るのかどうか不安しかありませんでした」

拍手と一緒にドッと笑い声が起こる。夜明は苦笑いしながら一夏を睨みつけ、隣りでシャルがまぁまぁ、と諌めている。

「そして彼を生涯の伴侶として選んだシャルロット。ＩＳ学園を卒業すると同時に実家のほうで色々なゴタゴタガありましたが、それも全て私達が終わらせました。心行くまで結婚式を楽しんでくれ」

「・・・うん、ありがと」

シャルは小声で礼を言う。そうこうしている間に、二人は神父、グレイの前まで歩いてきた。

「お似合いだねぇ、お二人さん・・・んっん！　・・・それでは、唯今より式を始める」

チャラチャラした雰囲気を引っ込め、グレイは厳粛な声で式の開始を宣言する。その後、色々と面倒な説教やら何やらがあったが割愛しちゃおう。

「汝月光夜明は、この女を妻とし、良き時も悪き時も、富める時も

貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻を想い、妻のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓うか？」

「誓うさ」

夜明の返事に頷き、続けてグレイはシャルのほうを向いた。

「汝シャルロット・デュノアは、この男を夫とし、良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、夫を想い、夫のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓うか？」

「誓います」

「よろしい・・・つか、堅苦しいのも面倒だから、誓いのキスをしちまってくれ。ほれブチュッと、ブチュッとぉっ！！」

こいつ、本当に聖職者か？　式場にいる誰もが思ったことだろう。夜明とシャルは互いに苦笑いを浮かべ、ゆっくりとキスした。

「よしよし・・・それでは夫婦となった二人を祝福するか！　聖歌隊、カムオン！！」

「聖歌隊？」

誰もが眉を顰めていると、ぞろぞろと数人の女子が入ってきた。その内の一人を見て、終は目を剥く。

（な、何やってんだ楓ぇーっ！！）

彼が驚くのも無理は無い。何せ、その聖歌隊の中に彼の友人、音梨楓がいるのだから。必死でアイコンタクトを送る終に対し、聖歌隊の服を無理やり着せられた感溢れる楓も涙目でアイコンタクトを送る。

（わ、私も良く分からないんだけど、トイレから戻ろうとしたら、聖歌隊をやらないか？　って言われて、それであれよあれよと言う間に・・・）

対象に何が起こっているのか認識させず、己の望むように動かす。恐ろしい早業だ。ちなみに楓以外の面子はセシリア、鈴音、ラウラ、箒ともう一人・・・。

「・・・何で一人だけ男が混ざってるんだ・・・？」

「何で僕がこんな格好を・・・」

その少年、奈々瀬ユウは深々とため息を吐き、自分が聖歌隊の格好をしなくてはならなくなった原因、グレイを睨む。いいじゃん、似合ってんだから！　その目はそう語っていた。

「はぁ・・・まぁ、祝福することに変わりはないし・・・ま、いいかな」

どこか達観したような表情でため息を吐き、ユウは手に持った歌詞カードを開く。作詞作曲編曲グレイ・スティン。曲名は『祝福する森の仲間達ｂｙ森のヤンキーズ』。

「・・・碌でもないタイトルだなぁ・・・」

それは言わない方向で。

「ミュージック・・・スタートぉぉぉ！！！」

グレイの合図で式場に愉快な音楽が流れてくる。どこか間の抜けた、でもしっかりと音楽になっている音。ユウ達は音楽に合わせて歌い始めた。

『Ｙｅａｈ！　俺達ゃ森のヤンキーズ　今日は結婚式めでたい日なんだＹＯ！！』

「何でラップ調！？」

『今宵産まれた愛に　神よ祝福をぉぉ～～』

「今度は演歌か！？　この歌のジャンルが分からねぇ！！」

歌にビシビシと終が突っ込んでいく。だが、歌は無常に続いていく。時にポップ調、時にロック調、時にヘビメタ調・・・ひたすらカオスだった。曲も終盤に差し掛かる。

『そして俺達は二人をからかう　口付けせよと囃し立て　口付けせよと囃し立て　口付けせよと囃し立て　口付けせよと囃し立て・・・』

口付けせよと囃し立て。この歌詞がエンドレスで続いた。

「え、何この無限ループ、怖い」

終の突っ込みをスルーし、歌はエンドレスに続いていく。多分、二人がキスしないと歌は終わらないだろう。

「ふ～・・・しょうがない」

「だね・・・夜明」

「ん？」

「幸せになろうね」

「・・・当たり前だろ」

心からの笑みを浮かべ、二人は口付けを交わす。

「これから始まる二人の物語に祝福を！！」

グレイの声が大きく響いた。どうか皆様。これから始まる二人の物語に祝福を・・・。

結婚式　『幸せになろうね』ｂｙシャル（後書き）

「「俺（私）達、参上！！」」ｂｙ一夏＆箒。

「貴方、私に撃ち抜かれてみます？」ｂｙセシリア。

「私の強さは泣けるわよ！」ｂｙ鈴音。

「君、倒すけどいい？　答えは聞いてないけど」ｂｙシャル。

「最初に言っておく。私は滅茶苦茶強い！」ｂｙラウラ。

「光臨・・・満を持して」ｂｙ太陽。

「さぁ、ご覧のとおり、これからお前達が挑むのは古今無双の軍団、史上最強の戦士！　・・・恐れずして掛かって来い！！」ｂｙ夜明。

流星「曾爺ちゃん、何これ？」

夜明「俺達の名乗り上げ・・・みたいな？」

流星「最後だけ電王じゃないのが謎だよ・・・」

束の間の休息・・・って訳でも無さそう（前書き）

「う～ん・・・」

ラスター、ウィン・Dとの交戦で右腕を失った太陽。本来、人体の一部が失われると言うことはあってはならない事であり、万人が生活する上で非常に困る・・・筈なのだが。

「やっぱり、片腕じゃかっこ悪いな。隻眼、とかの方が私的にはかっこいい」

彼女にしてみれば、片腕が失われた程度のこと、見てくれがかっこ悪くなるだけの問題らしい。実際、太陽は右腕を失っても生活に困ってはいなかった。

「・・・でも、やっぱり両腕あったほうが便利だな」

と言うことで、今現在彼女は黄昏から受け取った人体再生のカタログを熟読している。そんな物があるのか、と疑問に思うだろうが本当にあるんです。ウンウンと唸っている太陽に歩み寄るひとつの影。

「よぉ、どれかいいのは見つかったか？」

「夜明か。・・・中々しっくり来そうなのはあったぞ」

「へぇ、どんなんだ？」

肩越しにカタログを見る夜明に見やすいよう、太陽は身体を傾けてカタログの一部分を指差す。そこにはとても人とは思えない紅の甲

殻に青い筋が入った腕が写っていた。

「・・・はい？」

「悪魔の腕（デビルブリンガー）と言うらしいのだがな、これが是非とも欲しいものなんだ。まず、スナッチと呼ばれる遠距離の相手を捕まえる技、他にもバスターや魔人化とか色々」

「他のにしろ」

「え、でも「他のにしろ」・・・魔人化とかしてみ「他のにしろ」・・・はい」

こうして、夕暮太陽の魔人化は避けられるのだった。

「でもさ、太陽なら自力で魔人化出来そうじゃないか？」

「確かに」

一夏と夜明はウンウンと頷きあった。

束の間の休息・・・って訳でも無さそう

「私思うんだけどさ・・・別に右腕って無くても人って困らなくないか？」

「困るだろうが。もう少し常識で考えろや」

あほな事をほざいている太陽の頭を夜明が小突く。あたた・・・と頭を抑える太陽を無視し、夜明は周囲を見回した。

「にしても、こんな国があったとはな」

太陽たち・・・正確に言うと太陽が廃都市『イクリス』で死闘を繰り広げて早一週間。一行は企業連とラインアーク、どちらの側にもつかない永世中立国家『オーガ』へと来ていた。夜明たちが来ているのはオーガの中でも有数の大きさをした港町『リア』。何と言うか、夜明達にとって近未来的町並みのここに一週間ほど滞在して、それからラインアーク地球本部へと向かうらしい。本当なら滞在する必要は無いのだが、アークエンジェルのダメージがかなり酷いらしく、その整備を落ち着いた場所でしたい・・・と言うのが冬華の言い分だが、本当は自分達十代メンバーへの心配だろう、と夜明は確信していた。

「あぁ・・・他国、及び企業へ自衛以外の戦闘はしない。来る者は全て受け入れ手厚く保護する・・・こんなバカを絵に描いたような国があるとは思わなかったな」

「とか言っといて、お前もそう言うバカだろ」

否定はしないさ、と太陽は鼻を鳴らす。ラスターの砲撃によって吹き飛ばされたはずの右腕は何故だか元通りになっている。なぜか？

それは簡単、未来の技術だ。未来の技術なら、脳が吹っ飛ばされでもしない限り人体のどの部位でも再生できるようだ。未来の技術舐めんなオラ、と言うのが黄昏の言い分。・・・まぁ、いくら未来の技術が凄いと言っても・・・

「たった一週間で右腕が完全に再生、尚且つ本来の能力を取り戻すなんてな・・・」

僅か一週間で元通りになった腕を披露して、太陽はアークエンジェルクルー達に畏怖と畏敬を与えた。本来、人体再生は最低でも一年以上は掛かるらしい。

「それがたった一週間だもんな。そりゃ化け物扱いも受ける」

「全く、こんな美少女を捕まえて化け物とは失礼な・・・別に、人体再生しなくても右肘くらいまでなら自力で回復できたのに」

「うん、俺にも化け物って言わせろ」

右肘までという中途半端な部分までとは言え、自力でそこまで再生できるなら立派な化け物である。失礼なことを言ってきた夜明にお仕置きと誘惑を兼ね、太陽は夜明の頭をヘッドロックして自身の胸に押し付けた。

「誰が化け物だってぇ～？」

「ごぉぉ・・・私目が悪ぅございました」

ヘッドロックを掛けられて数秒と掛からずに頭からメキメキと剣呑な音が聞こえてきたので、夜明はすぐに太陽の腕をタップして降参の意を示す。すると太陽は満足げに笑い、今度は優しく夜明を胸に?き抱いた。周囲を歩いていく人たちの目が痛い。

「た「嫌だ」・・・俺まだ「た」しか言ってないっすよ太陽さん」

「はふぅ〜・・・」

腕の中で赤くなっている夜明を意に介さず、太陽は夜明を抱きしめて和んでいた。しょうもない、とため息を吐いていると、こちらに視線を向けている人たちの間を縫うようにして金髪の少女が駆け寄ってくる。

「いたいた〜、やっと見つけたよ二人とも。気がついたらいないんだからって、何で太陽は夜明を抱きしめてるの!?」

歩いていたら何時の間にか一人になり、数十分かけて二人を探し回っていたシャルだ。二人を見つけてホッとしたのもつ束の間、シャルは顔を真っ赤にして太陽から夜明を引っ剥がした。

「全くもう、少しは周りの目を考えなよ」

「お前もな」

呆れたように呟いたシャルに、太陽は絶対零度の視線で答える。え?　と周囲を見てみると、今度は自分に視線が集まっているではないか。まぁ、太陽から奪い取った夜明を抱きしめているのだから当然と言えば当然だが・・・。

「あ・・・えっと、その・・・・」

顔が真っ赤に染まるシャル。だが、顔が赤くなっている原因の夜明はしっかりと抱きしめている。夜明は達観した表情を浮かべ、再びため息を吐いた。

一方その頃。

「永世中立国家『オーガ』・・・ここなら、彼らも安心して休むこ

とが出来るだろう」

「それはどうだろうな」

永世中立国家『オーガ』有数の港町『リア』。アークエンジェルの整備が行われているドックから少しだけ離れた所にある酒場。小奇麗なテーブルが幾つもある中、一人の女性が一番奥のテーブルでコップを傾けている。月光冬華。戦闘艦『アークエンジェル』の艦長、年齢＝彼氏いない年数の人だ。

「・・・物凄く失礼なことを言われた気がするぞ・・・」

「事実だ」

冬華の手の中でコップに皹が入る。どうどう、と片手に炭酸ジュースのビンを握った黄昏が宥める。そのまま許可も取らずに冬華の前に座り、ジュースをラッパ飲みし始めた。

「・・・まぁいい。それで、私に話したいこととは何だ？」

「良い知らせが一つ、悪い知らせが一つ、最上級に悪い知らせが一つ、ってとこだ」

「・・・先ずは良い知らせから頼む」

口の中でこの上なく苦くなった酒を転がしながら冬華は黄昏を促す。それに対し、黄昏は空間投影のディスプレイをテーブルの上に広げた。その数七枚。

「これは？」

「セシリア・オルコット、凰鈴音、ラウラ・ボーデヴィッヒのＩＳ改造状況だ。強化パッケージも含め、八割がた完成している。恐らく、ここを出る頃には完成してるだろう」

「そうか。戦力が増強できるのは心強いな・・・ただ、十五歳の少年少女達に闘わせることしか出来ない自分がこの上なく情けなくなるがな・・・」

「いたし方無いだろう。あんたのＩＳ『白き閃光（ホワイト・グリント）』はコアまで破壊されて、完全に修復不可能になってしまったんだから」

二人は重く深いため息を吐く。重苦しい沈黙が流れるが、すぐに二人は気分を切り替えて次の話に進んだ。冬華はテーブルの上に投影された残りのディスプレイを指差す。

「この四枚は？」

「そっちは月光夜明、夕暮太陽、織斑一夏、篠ノ之箒のＩＳにつける強化パッケージだ。そっちは太陽と相談してて内容は決まったけど、実用化には時間が掛かる」

「そうか・・・それが悪い知らせか？」

「いんや。良い知らせの一部だ」

「・・・悪い知らせのほうを教えてくれ」

了解、と黄昏は指を鳴らして七枚のディスプレイを消し、次に二枚の空間投影ディスプレイを表示した。一枚は砂漠の上を横切る高速

道路を走る十数台の車。もう一枚は空を飛翔する一機の戦闘機。夜明達の時代ではＩＳの影響で戦闘機の存在はほとんどあって無いような物だったが、この時代では無人になった戦闘機が空を駆けている。無人ゆえに、どんな無茶苦茶な飛行をしても大丈夫なのだ。

「これはまさか・・・」

「ご察しの通り、全部ＴＦさ。唯のＴＦならさして警戒する必要も無いんだがな・・・その集団の先頭を走ってる馬鹿でかいアームがついた地雷除去車は『ボーンクラッシャー』。空飛んでる戦闘機は『スタースクリーム』だ」

黄昏の口から出た名に冬華は表情を引き締める。その二機はリンクスを撃破したことがあるＴＦだからだ。無人機が有人機を破壊するなど、まず無い。決められた事しか実行できない無人機に対し、有人機はいつ如何なる状況でも的確な対処が出来る。まぁ、それは搭乗者にもよるのだが・・・。

「この写真はこの町、リアの近郊で撮影されたものだ・・・そもそも、永世中立国家であるオーガの領域内にＴＦを飛ばすなんて正気の沙汰とは思えない。確実に敵は私達を狙ってくるぞ」

「・・・可能性は否定できないな。だが、企業連も友好関係を築いているオーガとわざわざ事を構えるつもりは無いだろ？」

「・・・そう信じたい物だな・・・」

「何か引っかかる言い方だな・・・では、最後の最上級に悪い知らせを聞かせてくれ」

「了解した。これは今さっき報告されたもので、全く信憑性が無いんだが・・・カラードランク８『王小龍』が夜明と接触した」

冬華と黄昏が酒場で話し合いを始める数十分前。夜明は居心地悪そうに町を歩いていた。周りからの羨望、嫉妬、殺意が充満した視線が怖い。夜明の右腕に太陽、左腕にシャルが抱きついているのだ。そう言う負の感情が籠められた視線に晒されるのも無理は無い・・・と言うか当然である。

「あの、二人とも。歩きにくいんだが・・・」

それとなく離れてくれと言っても。

「我慢しろ」

「我慢してね」

聞いちゃいない。身体中に突き立つ視線に耐えて歩くしかないようだ。深々とため息を吐いたその時。

「王大老。早く行きましょう！」

「急かすなリリウム。急がずとも、お前の想い人はどこにも逃げはしない」

妙に聞き覚えのある澄んだ少女の声。そして微かに掠れてはいるが、力強い老人の声。三人が声のしたほうを向くと。

「「「「あ」」」」

何時ぞや決闘を申し込みに来た美少女、リリウム・ウォルコットと見知らぬ一人の老人が立っていた。

「・・・リリウム、彼らと面識があるのか？」

四人揃ってポカンとした表情を作ったことに疑問を覚え、老人はリリウムに尋ねる。

「正確には、真ん中の方と。その他の方には面識がありませんが・・

・お久しぶりでございます、夜明様」

「あ、どもっす」

スカートの裾を摘んで優雅にお辞儀するリリウム。反射的に夜明も頭を下げた。夜明、と言う名を耳にして老人の眉が僅かに動いた。

「夜明・・・まさか貴様、月光夜明か？」

「だとすれば・・・どうする？」

挑発的な笑みを浮かべる夜明。老人は一歩踏み出し、僅かに曲がった背筋を伸ばすこともせずに名乗る。

「カラードランク８、王小龍だ。少し話がしたい」

答えも聞かず、王小龍はついて来いとジェスチャーして歩いていった。その背を、夜明は僅かの躊躇いも見せずに追っていった。

束の間の休息・・・って訳でも無さそう（後書き）

気軽な質問。かっこいい夜明とかっこいい太陽、どっちが見たい？

人として間違ったこと

「はあああああああっ！！！！！！！！！！！！！」

一夏が振り下ろす雪片。切っ先で鋭い軌跡を描く雪片が捉えようとするのは流星。鋭く振り下ろされた雪片を、流星は落ち着いて左腕のシールドで受け止める。

「そこぉっ！！」

雪片を受け止めて硬直した隙を箒が突く。だが、ビームマグナムの銃口から放たれる、爆発的な威力を秘めた赤い閃光が箒の接近を許さない。箒が接近するのは無理だと判断し、一夏は左腕の雪羅をクローモードにして流星に切り掛かった。雪羅のクロー五本がトワイライトウィングの装甲を切り裂く前に、流星はビームマグナムの銃身を一夏のこめかみに叩きつけて吹き飛ばす。

「一夏！？　くっ！！」

吹っ飛んでいった一夏にビームマグナムの銃口を向けている流星に向けて箒は空裂から攻性エネルギーを放つ。迫る赤い帯状の攻性エネルギーにシールドを裏拳の要領で振って相殺した。その間に一夏は体勢を整え、流星へ真正面から突っ込んでいった。箒は流星の背後を突くように動く。挟撃してくる二人に対し、流星は両手にビームサーベルを構えて対応する。二人の一閃を問題なく受け止めたが、そのまま吹き飛ばされた。

「っ！！　・・・流石に通常状態で二対一はきついな・・・なら」

ｌＩＳ‐Ｄシステム、Ｓｔａｎｄｂｙ　ＯＫ．　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？ｌ

流星はトワイライトウィングの根幹とも言えるシステムを発動させた。海上での楯無との一戦以来、流星はＩＳ－Ｄシステムを任意で使えるようになっていた。まぁ、システム発動限界時間は五分前後と短いが・・・。だが、目の前にいる二人を倒すには十分過ぎる。流星を守る装甲がスライド展開を開始したのを見て、二人は流星に突っ込んだ。だが、二人がそれぞれの武器を振るうよりも早くスライド展開が終わり、トワイライトウィングは紅蒼二色の大型ウィングスラスターを広げて真の姿をあらわにする。

「一分で片をつける・・・！」

右大型ウィングスラスターからバルディッシュを引き抜き、同時にレイジングハートを射撃モードに移す。肩を並べて突撃してくる二人の間を穿つ様に、超威力の砲撃が放たれた。一夏が箒を守るように飛び出し、シールドモードに移行させた雪羅を突き出す。零落白夜のシールドで完全にエネルギー系統の攻撃を防ぐ雪羅のシールドだが、レイジングハートの砲撃を完全には防ぎきれずに一夏が吹き飛んだ。一夏が砲撃を防いでいた間に箒は瞬間加速（イグニッション・ブースト）で流星に肉薄する。

「貰った！！」

「その程度！！」

箒が両手の二刀を振り下ろすのに対し、流星は文字通りバルディッシュを横一文字に振り抜く。バルディッシュの一閃で箒はあっさりと吹き飛ばされ、一夏を巻き込んだ。

「大丈夫か！？」

「問題ない！　それよりも」

回避を、と続けようとした箒の視界に移ったのは、掌部分を黒く輝かせながら突っ込んでくる流星の姿だった。流星は大きく引いていた右腕を思い切り突き出し、箒に掌底を叩き込む。箒の胸に掌を押し付けたままパルマ・フィオキーナを放ち、一夏諸共吹き飛ばした。吹き飛ばされた二人が地面に叩きつけられるとほぼ同時にアラームが鳴り響く。

『白式、紅椿シールドエネルギーゼロ。勝者、大空流星』

アラーム音の後に朔夜の声が響き、模擬戦の終了を告げた。流星は大きく息を吐き出し、ゆっくりと地面に降り立つ。今現在、三人はアークエンジェルにあるバーチャル訓練機に精神をダイブさせていた。ここはそのバーチャル訓練機が作り出した仮想空間だ。

『これで訓練は終わりだ。三人とも、お疲れ様』

周囲の光景がぼやけていくのを感じながら、流星は朔夜の声を聞きながら目を閉じた。数秒後、目を開くと見慣れたアークエンジェルの天井が視界に入る。バーチャル訓練機に精神をダイブさせるためのヘッドギアを外しながら、流星は身を横たえていた寝台から起き上がった。

「流星、お疲れ様」

「ん、ありがと」

礼を言いながら朔夜から飲み物を受け取る。チラッと左右を見ると、仮想空間で流星に打っ飛ばされた二人が未だに横たわっていた。

「二人は・・・まだ起きれそうにないか。ＩＳ－Ｄシステム稼働率５７％・・・そこそこ、と言った所か？」

「半分ほどの稼働率で五分が限界か・・・一対一ならともかく、一対多数だと厳しいかな？」

「仕方ないだろ。ＩＳ－Ｄシステムは驚異的な機動力を得ると同時に、搭乗者への負荷が激増する。そんな状態で何十分も戦闘を続けたら、確実に身体が壊れてしまう」

「だよなぁ・・・ＩＳ－Ｄシステム発動してないのに、曾爺ちゃんのレイジングウィングはトワイライトウィングＩＳ－Ｄシステム発動時に匹敵する機動力を持ってるんだよなぁ・・・何かずるい」

拗ねたような表情を浮かべる流星。少し唇を尖らせている流星に苦笑いを浮かべながら、朔夜はトワイライトウィングの稼動データを表示しているモニターを閉じる。

「その代わり、レイジングウィングの防御力はトワイライトウィングに比べて紙だろ。何、安心しろ。出来るだけＩＳ－Ｄシステム発動時の負荷を抑えるよう調整してみるさ」

「本当か？　ありがとな、朔夜」

「か、勘違いするな！　別にお前のためにやってるわけじゃない！」

屈託の無い笑顔をで感謝され、朔夜は頬を朱に染めながらそっぽを向いた。勘違いするな、とか言ってる割には頬やら項が赤い。ある意味、勘違いしろと言ってるようなものである。まぁ、流星は夜明の子孫なので、間違っても勘違いなんてしないだろう。ハハハ、と笑っていると、流星の視界に何かが映った。気のせいかと思い、目を擦ってもう一度目を凝らす。すると見えた。

「やっぱ、見つかったわ！」

「何やってますの鈴さん！　だから余計なことをせずに行けば良かったのに！」

「案ずるな！　捕まる前に町に出ればいいだけの話しだ！！」

開発工程最終段階に入った強化パッケージに精神をシンクロさせているはずの三人娘の姿が・・・。太陽＆黄昏いわく、魔改造を施したセシリア達のＩＳはより精密な機動を実現するために、搭乗者の精神とシンクロさせる必要があるらしい。一夏と箒、流星が仮想空間内で戦闘している間、三人はＩＳと精神をシンクロさせる作業を行っていたはずなのだが・・・抜け出してきたようだ。

「おい、何で鈴達がこんな所にいるんだ!?　シンクロが終わるまで椅子に縛り付けていた筈なのに！」

それも、教育衛生上あまり宜しくない縛り方で。太陽と黄昏の手によってふん縛られた事を思い出したのか、三人は顔を真っ赤に染める。

「朔夜！　もしその事夜明に言ったらぶっ殺すわよ！！」

「言うつもりなんて毛の先ほども無いが・・・それよりもＩＳとのシンクロは終わったのか！？」

「そんな物、途中で放り出してきましたわ！」

「何やってんだこのバカ共ぉぉぉ！！！　ＩＳとのシンクロは一回でも中断したらまた最初っからやらないといけないって二人が説明してただろ！」

「知るか！　私は夜明（よめ）と一緒にいたいんだぁぁぁ！！！」

聞く耳持たない様子。言葉よりも拳で語り合ったほうが早いと、流星と朔夜は三人に踊りかかった。激闘の末、二人は三人を拘束することに成功、そのまま作業室へと引きずっていった。

「「・・・」」

「「「・・・（空気が重い！）」」」

近くの喫茶店に入った五人。喫茶店はそれなりに小洒落た店で楽しそうな空気だったが、夜明と王小龍の二人が全てを台無しにしている。店内の客達が好奇やら非難やら様々な視線を送る中、二人は視線を意に介さずに注文をとった。

「俺はコーヒー。ブラックで」

「私には番茶を頼む」

「か、かしこまりました。あの、お連れ様は・・・？」

おっかなびっくり注文をとったウェイトレスは女性陣三人を見る。王小龍はリリウムに別の席へ移るよう指示し、夜明も同様に二人を移動させた。一瞬迷ってからリリウムは夜明に一礼し、太陽とシャルも若干視線が怖くあるが、王小龍に会釈してリリウムと同じ席に移動する。

「「・・・」」

互いに無言を貫いていると、注文したコーヒーと番茶が運ばれてく

る。ウェイトレスはテーブルの上にコーヒーと番茶を置くと、脱兎の如く去っていった。カップと湯呑みを口に運びながら、二人は互いを観察する。夜明は純粋な興味から。王小龍は夜明と出会った偶然をどう活かすか。

「お前に関して少し気になることがある。話を聞かせてもらえるか？」

「構わないが」

「何故、闘えるんだ？　別に闘う義理も無いだろう」

まずは揺さ振りを掛けた。訳も分からずに過去から連れて来られ、戦闘を強要される。まともな神経の持ち主なら、そんな状態では戦闘出来ないだろう。だが、夜明は容易く答えを返した。

「流星が困ってたからな。序でに言うと流星と一緒にいた人たちも困ってたし・・・やっぱブラックは苦いな」

格好つけるんじゃなかった、と夜明はカップに砂糖とミルクを入れ始める。これ以上この話題を聞いても無駄だと判断し、王小龍は別のことを聞いてみた。

「何故、殺さないんだ？　戦場では、その甘さは命取りになるぞ」

「それで殺されたら、俺はその程度の男だったってことだろうよ」

殺すつもりも、殺されるつもりも無い。それが戦場に立つ夜明の覚悟だ。王小龍は夜明の覚悟を鼻で笑って一蹴する。

「大層な偽善だな。それでは質問を変えよう。お前が戦場で殺せる者を殺さなかった時、その者がお前の仲間を殺したら、お前は責任を取れるのか？」

「逆にこう訊こう。もし俺がそいつを殺して、そいつが救えた筈の者達が死んでしまったら、俺はどう責任を取ればいいんだ？」

「・・・どう考えればそんな考えが浮かんでくるんだ？」

「さぁ？　俺は唯、人が持つ可能性を信じているだけだ。お前の言うとおり、俺が殺さなかった奴が俺の仲間を殺す可能性もあるだろうな。だが、俺がそいつを殺さなかったことで救われる命もあるかもしれない」

「お前の人を信じる心が出なかった筈の犠牲を生み出すかもしれないぞ。戦場で敵を殺すと言うことは、自衛だ。お前は自衛さえも投げ出すと言うのか？」

砂糖とミルクで甘くしたコーヒーを飲み干し、カップをテーブルに置いて夜明はため息を吐く。頬杖をつき、自虐の笑みを浮かべ王小龍を見る。

「ま、お前の方が正しいんだろうな。確かに戦場で敵を殺さないのはおかしいことだ。自分や仲間の命をまな板の上に置いて、敵に包丁を渡してどうぞ調理してくださいって言ってるようなものだろうな」

でもな、と眼光を鋭くして続ける。

「それは戦争と言う状況下においての話だ。戦争云々以前に王小龍、

お前は人として大切なことを忘れている・・・

人を殺すことは悪いことなんだぜ」

「・・・ほぅ」

思わずと言った風に王小龍は目を細める。そもそも、人を殺すこと自体が人として間違っているのだ。例えそれが戦争と言う特殊な環境であろうと、人として間違ったことに違いは無い。故に、夜明は

誰も殺さないのだ。例え殺したとしても、戦争だったから仕方ないなんて風に己を正当化することは無い。

「戦争だから殺しても仕方ない・・・何て戯言、俺は許さない。誰であっても命はそれぞれが一つしか持っていないんだ。それを奪うなんて、誰であろうと許されないことだ」

「・・・確かに、その通りかもしれないな。ふっ、中々面白い話が聞けたな」

「そう思うんだったら、ここの代金出してくれよ」

「構わないぞ」

「マジで!?　言ってみるもんだな・・・」

そのまま、二人は会計を済ませて喫茶店を出た。ちなみに、太陽、シャル、リリウムはガールズトークに花を咲かせていたとさ。

万事休す！　でも大丈夫な気がしないでもない

夜明と王小龍が接触した翌日。太陽達はリアへと繰り出していた。
夜明、一夏と箒はいない。強化パッケージと精神をシンクロさせるためである。昨日、色々と我慢してパッケージとのシンクロを終わらせたセシリア達の頭上には暗雲が立ち込めていた。ちなみに、ラウラの専用機『黒き雨（シュヴァルツェア・レーゲン）』のみ最終調整が早く終わり、待機状態であるレッグバンドとなってラウラの脚に巻きつけられている。

「・・・不幸ですわ」

「・・・不幸ね」

「・・・不幸だ」

「アハハ・・・そう言えば、太陽もまだ強化パッケージが出来てないんだよね？　僕達と一緒に出かけても良かったの？」

人目も憚らずにＯＴＺになっている三人と他人の振りをしつつ、シャルは太陽に尋ねる。頭を？きながら、太陽は何でも無いことのように答えた。

「強化パッケージの大部分を作ってる間に精神をシンクロさせておいたのさ」

「相変わらず手際がいいね」

「ま、精神をシンクロさせるなんて面倒くさいことで時間を取られたく無かったからな・・・にしても、こいつ等はまだ元に戻らない

か・・・」

呆れたように三人を見ながら、太陽は三人に歩み寄って鉄拳を頭に落とす。ゴズッと鈍い音が響いて、三人の頭にめり込む。頭を抱えてのた打ち回る三人を放置し、太陽はこれからどこに行くのかをシャルと相談した。

「どこに行く？」

「そうだね・・・昨日、夜明と一緒に行った服屋さんとかアクセサリーショップで良いんじゃないの」

「そうだな・・・おい、行くぞお前ら」

二日連続で夜明と一緒にいられなかったショックから立ち直れていない三人を立たせ、二人は歩いていく。ふと、ラウラと鈴音を歩かせていた太陽が怪訝な表情を作って周囲を見回した。

「・・・ん？　どうしたんだ太陽？」

ようやく立ち直ったラウラが太陽の眼光が鋭くなっていることに気づき、一緒になって周囲を見回し始めた。

「いや・・・誰かに見られているような気がしたんだが・・・気のせいか」

そう言いつつも、太陽はしっかりと確認していた。自分達に向けられた複数の視線を。九分九厘、企業連の手の者だろう。今すぐ捕まえてアークエンジェルに連れて行くのも良いが、泳がせておいて損は無いだろうと太陽はそのまま尾行者を放置することに。今は未来

での買い物を楽しむことにした。

太陽達から少し離れた物陰に隠れている幾つもの人影。その数五人。彼らは王小龍から指令を受け、太陽たちを捕らえにきたのだ。

「夕暮太陽、セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・彼女達五人を捕らえれば、不屈の翼の行動を制限出来る・・・」

リーダー格と思しき男がリストと太陽達の顔を照らし合わせていると、隣りにいる男が不安そうな声を出した。

「本当にこれだけの人数で大丈夫なのかよ？　相手は単騎でギガベースを潰したり、ウィン・Ｄ・ファンションとラスター１８を撃破したような化け物なんだぜ」

リーダー格以外の男達も不安を隠せない様子で頷いた。彼らが与えられているＩＳは専用機ではなく、大量生産されている量産型ノーマルＩＳ『ジン』。その性能は専用ＩＳには遠く及ばない。未だに改造が終わっていなくてＩＳを返してもらっていないセシリアや鈴音を捕らえるのは容易だろうが、太陽とシャル、そしてラウラを捕らえるのは不可能に近いだろう。そんなことは百も承知、と言った笑顔を浮かべ、リーダー格は懐からある物を取り出した。

「心配するなって。俺達にはこれがある」

リーダー格が懐から取り出したのは掌に収まりきる小型の立方体型ＩＳＣ（インフィニット・ストラトス・キャンセラー）。小型化されたためＩＳＣの効力が及ぶ範囲は数百メートルと狭いが、機動が制限される市街地では十分な範囲だろう。

「それに、これ以外にも浮遊型ＩＳＣが何個かある。万が一のことを考えなくても大丈夫だ。それじゃ二十時になったら行動を開始するぞ。あの五人を捕まえれば、王小龍様から専用機を与えられるぞ」

専用機。量産型ＩＳを使っている彼らにとって、それは喉から手が出るほど欲しいものだ。専用機を手に入れるためなら、多少のリスクを負うことも辞さないだろう。五人は周囲の人たちに怪しまれないよう注意を払いながら太陽たちを追跡していった。

楽しい時間はあっという間に過ぎるとはよく言ったもので、時刻は既に二十時五分前。太陽たちは夜明がいないなりに買い物を楽しんでいた。買い物と言っても、それぞれが見つけたお好みのアクセサリーやら小物やらを買っただけだが。

「にしても、未来でも女子がすることって変わりないわね」

鈴音が言っているのは、昼食を食べる際に寄ったレストランで聞こえてきた女の子達の恋に関する話だ。その時、話をしていた少女達

は実に楽しそうだった。

「まぁ、私達の場合、その恋話をする段階に進んでないからな」

太陽の呟きに全員がため息を吐く。この面子の中で誰かが夜明と恋仲になって、それ以外の面子がそのことをからかったりする光景は皆目想像がつかない。そもそも、夜明と恋仲になることが何よりも難関だ。

「私達が選んだ道は険しいですわね」

ハハハ、と五人は気の抜けた笑い声を上げる。ふと、太陽が険しい表情を浮かべた。続いてラウラも太陽と同様の表情を浮かべ、彼女が視線を送る方に身体を向ける。セシリア達は二人が表情を険しくさせたのを見て身体を強張らせる。買い物の途中でも、二人は偶に表情を険しくさせていた。だが、飽くまで表情を険しくさせるだけだったので三人は黙っていたが、ここまで露骨に何かを警戒するような行動を取られては落ち着かない。

「あのさ、二人とも。何でそんな怖い顔してるの？」

「出て来い」

「え・・・？」

太陽がシャルの問いに答えたのではない、と理解する数秒の間に、太陽とラウラが視線を向けている物陰の中から三人の男が出てきた。服装からは一般人だと判断できるが、漂わせている空気は兵士のものである。

「誰だ？　企業連の者か？　それとも企業連に雇われた傭兵か何か？」

「・・・作戦を開始する」

ラウラの問いに答えず、三人の男はＩＳ『ジン』を展開させた。

「問答無用か・・・っ！？」

すぐさま戦闘態勢を取ろうとする太陽とラウラの顔が強張る。幾ら呼びかけても、自身の相棒であるＩＳが展開されないのだ。訳が分からず混乱するが、すぐに原因が解明した。

「ＩＳＣか・・・」

忌々しそうに呟く太陽の耳に、男達が握る重機関銃が安全装置を外す音が届く。すぐにＩＳを展開させるのを諦め、太陽は足元に拳を打ち込む。太陽の足元が捲れ上がり、五人を守るような壁となった。鼓膜を叩き破るような銃声が幾つも轟き、壁に弾丸が当たって悲鳴のような甲高い音を奏でる。

「民間人がいる市街地で警告も無く発砲！？」

「走れ！！　連中の狙いは私達だ！！」

太陽の声に反応してセシリア達は男がいる方向とは反対へ走り始めた。セシリア達が走っていったのを見て、二人は壁の後ろから飛び出した。周囲の民間人たちが悲鳴を上げる中、二人は男達に襲い掛かる。太陽の踵落し、ラウラが投擲したタクティカルナイフが前に立っている二人の男が持っている重機関銃を破壊した。反撃する隙

を与えずに太陽はジンの基本装備である重斬刀を奪い取りながら男に蹴りを叩き込み、ラウラは別の男の顔面に拳を叩き込んだ。

「ＩＳＣは・・・あそこか！！」

周囲を見回してＩＳＣを探していた太陽の目に、数十メートル離れた空中に浮かんでいる浮遊型のＩＳが飛び込んでくる。奪い取った重斬刀を投げ槍のように構え、浮遊型ＩＳＣを破壊しようとするが。

「伏せろ太陽！！」

残り一人の男が撃ってくる重機関銃の乱射がそれを許さない。表情を顰めながら舌打ちし、後ろへと飛び退って別の男と渡り合っていたラウラと背中合わせになった。

「どうする？」

「ここだと周囲の人たちを巻き込んでしまう。とにかく一旦この場から離脱してセシリア達と合流、それからアークエンジェルに向かおう」

「了解だ！」

これからの動きを簡潔にまとめ、二人はセシリア達が逃げた方向とは別の方へと走り出す。後ろから様々な銃撃が襲ってくるが、男達が放つ銃撃が二人を傷つけることは無い。

「当面の目的はＩＳＣの破壊だ。一目見て確認しただけでも、四個はあった」

「そんなにか・・・っ！？」

反射的に二人は左右に散らばる。刹那、二人が走っていた場所を高威力のエネルギーが抉った。銃撃が飛んできた方向を向くと、肩に大型粒子砲を担いだ男がスラスターを噴かして飛んでくるのが見える。

「ちったぁ周りへの迷惑も考えろ！！」

再び放たれた高威力粒子砲を重斬刀で切り裂き、返す刀で突っ込んできた男を擦れ違い様に叩き切る。太陽の斬撃で体勢を崩した男の顔面に、ラウラの飛び膝蹴りがめり込む。

「大丈夫か！？」

「取り敢えずな！」

返事を返すラウラの後ろから別の男が迫る。飛び膝蹴りで意識を失った男を投げ捨て、ラウラは太陽に向かって走り始めた。一瞬でラウラの意図を察し、太陽は頭上で両手を組んだ。

「両手借りるぞ！」

眼前に太陽が迫っても走る勢いを抑えることなく、ラウラは跳躍して太陽の両手を壁に見立てて三角飛びする。声を上げる隙さえ与えず、追いかけてきた男を真下に叩きつけるように蹴った。顔面から地面へと落ちた男の後頭部に着地して追い打ちをかける。

「動くな！！」

その時、別行動を取っていたと思われる最後の一人が二人に重機関銃を突きつけた。二人は突きつけられる銃口に臆することなく構え、男を睨む。だが、投降せざるを得ない状況になっていた。何故なら、男の後ろに、別の二人組みに捕まったセシリア達の姿が見えたからだ。

「・・・別行動の奴がいたとはな」

「・・・友の命を危険に晒すわけにはいかない」

忌々しそうに太陽は重斬刀を投げ捨て、苦虫を噛み潰したようにラウラは両手に握っていたタクティカルナイフを地面へ落とした。二人は投降の意を示すため、頭上に両手を上げた。

本物の危機

「太陽達遅いなぁ・・・」

「積もる話でもあるんじゃ無いのか？」

アークエンジェルが収艦されている整備ドック前、夜明と流星は二十一時を過ぎても帰ってこない太陽達が心配になって、彼女達を迎えに行くためにドックの外へと出てきた。

「買い物に夢中になってるのか？」

「いや、セシリアや鈴音だけならともかく、太陽とシャル、ラウラがいるんだからそれは無いと思うけどな」

年の割りに子供っぽいしあの二人、と夜明は付け加える。二人が子供っぽいことは否定できず、流星は引き攣った笑みを浮かべた。ふと、流星の視界に人影が映る。流星が怪訝な表情を浮かべているのに気づき、夜明は流星が視線を向けている方を見た。

「あ、どした流星？」

「いや、誰かがこっちに歩いてきてるみたいなんだけど」

「ラインアークの人じゃねぇのか？　冬華さんに話でもあるんじゃ無いのか？」

二人であれこれと憶測を話していると、その人影、四十代の男は胸元から人と言う形をしたネックレスを取り出し、相棒の名を呼ぶ。

「行くぞ、雷電」

その男の名は有澤隆文。超大艦巨砲主義の有澤工業四十三代社長にしてカラードランク１６、超重量級ＩＳ『雷電』の搭乗者だ。有澤の身体を光の粒子が覆い、粒子は重厚な装甲を形作る。いきなりのリンクス登場に唖然とする二人、有澤は二人に構わず、グレネードが装甲と一体化した武器腕、両肩の超大型グレネードをドックへと向けた。

「作戦を開始する」

四つの銃口から放たれたグレネードが二人の頭上を通り過ぎてドックを直撃、二人は背後で起こった爆風に吹き飛ばされ、周囲を黒煙が満たした。

「今回、君に与えられる依頼は、永世中立国家『オーガ』の町で整備をしているアークエンジェルの襲撃だ、有澤隆文」

今回の依頼を口頭で伝えられた時、有澤は依頼主、ラウ・ル・クルーゼの正気を疑った。オーガは永世中立国家。直接オーガに攻撃を仕掛ける訳ではないが、オーガ国内で戦闘をすると言うことはオーガに攻撃を仕掛けることと同義だ。つまり、オーガにいる間にアークエンジェルを攻撃すれば、企業連はオーガを攻撃したことになり、敵に回すことになる。

「貴様、正気か？　オーガ国内で戦闘を行うということがどれ程の事か分からぬ貴様ではあるまい」

最悪、企業連はラインアークと同時にオーガを相手取らなければならなくなる。有澤に言われずともその事は分かっているのか、クルーゼは口元を歪めた。

「それくらい分かっている。私が考えも無しにこんなことをさせると思うかね？」

「しない・・・であろうな」

目の前のクルーゼという男、とにかく腹の中が読めない。顔の上半

分を隠しているマスクのせいか、表情を窺うことも出来ない。読めない男だが、頭がキレると言う事は企業連の誰もが知っている。なので、何かしらの考えがあるのだろう、と有澤はクルーゼの依頼を受けることにした。

「・・・いいだろう。貴様の掌の上で踊らされるのは癪だがな。先に言っておくが、この依頼のせいで企業連とオーガの関係が険悪なものになっても私は責任を取らんぞ」

「それくらい当たり前だ。では頼んだぞ」

「何なんだあいつは!?　いきなりぶっ放してきやがったぞ!?」

背中を殴りつけるような爆風で吹き飛ばされるが、夜明は地面に激突する寸前に受け身を取って全身強打を回避した。少し遅れて飛んできた流星を片手で掴んで、襲撃者の視界を遮れそうなコンテナの陰に放り込み、自身も別のコンテナの陰に飛び込む。

「む・・・」

視界を遮る黒煙が晴れると、さっきまで有澤の目の前にいた二人がいない。一瞬有澤は眉を動かしたが、自分の役目はアークエンジェルを破壊することだと意識を目の前のドックに集中させる。アークエンジェルが収艦されているドックは先のグレネード四発で既に外壁が破壊され、中にあるアークエンジェルがその姿を覗かせている。

「行くぞ雷電・・・っ!!」

再びグレネードを放とうとした瞬間、爆発的威力を秘めた赤い閃光が斜め上から有澤を襲う。ビームマグナムが直撃したのを確認し、ＩＳを展開させてコンテナの陰から飛び出した流星は煙で覆われている有澤にビームマグナムを連射した。流星に続くように別のコンテナから夜明が飛び出し、ウィングスター、スタードライブ、ディバイン・カノンを放った。煙の中にビーム、荷電粒子砲、超高速の小口径弾が降り注ぎ、煙の量が更に多くなる。

「・・・おいおい。こんだけ撃ち込んで傷一つ無いってどういうこった?」

煙の中から無傷で現れた有澤を見て、夜明は思わず顔を引き攣らせた。有澤のＩＳ『雷電』はとにかく重厚という言葉がピッタリだった。そして通常のＩＳと違い、脚部が戦車のキャタピラのようになっている。夜明が流星に視線を向けると、流星は説明を始めた。

「あの人・・・有澤隆文のＩＳ『雷電』はタンク型のＩＳなんだ。ＩＳにとって絶対的なアドバンテージになっている機動力を限りなく零にしてシールドエネルギー、後付武装（イコライザ）を馬鹿みたいに増やしたんだ」

動く要塞とでも考えておけばいいかな、と流星は付け加える。だが、夜明は流星の話を聞いてはいなかった。太陽たちが帰ってこないことと、今現在自分達が襲撃を受けていること。もしこれに関連があるとすれば・・・。流星も同じ考えに至ったのか、険しい表情を浮かべた。

「匹夫共。この雷電に真正面から挑むつもりか？」

有澤のグレネードが再び火を噴く。輝きを放ちながら二人に迫る必殺の爆裂弾。流星はビームマグナムを連射して、全てを撃ち抜いた。再び爆風で吹き飛ばされる二人。ＰＩＣで宙に浮きながら、流星は有澤を睨みつける。

「・・・曾爺ちゃん。曾爺ちゃんは太陽たちを探しに行って。有澤は俺が何とかしてみる」

「・・・やれるのか？」

夜明を見ることなく、でも流星は力強く頷いた。夜明も何も言わず、有澤の頭上を通り越して町へと向かった。

「見逃してくれるのか？」

「私の任務はアークエンジェルを破壊することだ。それに、雷電の機動力では、天地が引っくり返っても奴には追いつけまい」

「・・・アークエンジェルは・・・俺が守る」

「やって見せろ、匹夫」

リアの町を、三度目の爆風が彩った。

有澤の襲撃が始まる三十分前。企業連の手の者に捕まった太陽達は両手を縛られ、地味な小型トラックの荷台に押し込まれ、どこかへと運ばれていた。

（私達が捕まって大体一時間。そろそろ夜明達が私達のことを心配する頃か？　トラックの走り方からして、今は高速道路を走っているみたいだな。どこに連れて行かれるのやら・・・）

ちらっ、と太陽は視線を走らせた。荷台の中なので外の状況は分からないが、ＩＳが展開できないので、トラックの外にＩＳＣが浮かんでいるのが容易に想像できる。荷台の中に放り込まれた太陽たちを見張っているのは三人の男。もう二人は運転席と助手席にいるだろう。

（ラウラ）

太陽は声を出さずに隣りにいるラウラに話しかけた。読唇術を心得ているラウラは唇の動きで太陽の言いたい事を理解し、、同じように声を出さずに応える。

（何だ？）

（軍人のお前から見て、こいつ等はどう映る？）

（酷いの一言に限るな。第一にＩＳを使用不可能にすれば私達を無力化したと思っている時点でこいつ等は既に死んでる）

もし、この場にセシリア、鈴音、シャルがいなければ、二人は拘束を破って見張りを数秒で殺すだろう。それこそ赤子の手を捻るよりも簡単に。

（第二に拘束が甘すぎる。こんな拘束、十分もあれば素人でも抜けられるぞ。第三にお前を怖がりすぎだ）

（あの反応は傷ついたな・・・）

心の中でため息を吐きつつ、太陽は三人の見張りに視線を向ける。途端、見張りは身体を強張らせて身構えた。幾らＩＳが使用できないとはいえ、ＴＦを生身で破壊することが出来る太陽は怖いらしい。両腕にＩＳを展開させ、いつでも重機関銃を撃てるようにしている。ふと、太陽は自分達を運んでいるトラックの上を何かが飛んでいることに気づいた。

「何だ・・・？」

「王小龍様が言っていたＴＦか。やっと来たのか・・・」

太陽の疑問に答えたのは見張りの一人だった。王小龍の名に太陽は眉を顰める。

「王小龍？　私達を捕まえたのは王小龍の指示なのか？」

「え？　あ、あぁ。お前達を捕まえて企業連の本部にまで連れて行けば、俺達に専用機を下さるんだ」

ＴＦが来てホッとしたのか、見張りの一人はそんなことを言う。それを聞いて、太陽は納得したような表情を浮かべた。

「成る程・・・な！」

立ち上がるや、いきなり荷台の壁に体当たりをかます。トラック全体に衝撃が走り、車体が横にずれた。驚く暇も無く、さっきまでトラックの車体があった所が爆ぜる。車体が派手に飛び跳ねたが、どうにか横転を避ける。

「太陽！　今のは・・・」

「ご察しの通り。王小龍の奴、彼らごと私達を消すつもりだな」

苦々しい表情を浮かべつつ、太陽は両手を拘束していた縄を引き千切り、荷台のドアに蹴りをぶち込んだ。派手な音を立てて鉄製の扉が吹き飛び、外の光景が確認できる。荷台から首だけを突き出して空を見上げた。太陽の視線の先には漆黒の夜空を切り裂くように、戦闘機型のＴＦが飛んでいる。しかも、トラックの後方を十数台の車が走っていた。確実にＴＦだろう。

「用意周到だな・・・おい、死にたくなかったらＩＳＣを解除させろ」

忌々しそうに舌打ちをして、太陽は近くにいた見張りの胸倉を掴んだ。結構な力で胸倉を掴んでいるにも関わらず、見張りは驚きに目を見開いたまま呆然としている。

「な、何でＴＦが攻撃してきたんだ？　あれは俺達の護衛なのに・・・」

「少しは考えろ馬鹿。王小龍てのは結構な大物なんだろ？　そんな

大物がお前達みたいな下っ端に声をかけて、尚且つご褒美まで用意してくれるなんて都合のいい話があるわけ無いだろうが。って、そんなことはどうでもいい。さっさとＩＳＣを解除しろ、死にたいのか！！」

太陽に怒鳴られて見張りは目を虚ろにしながら、太陽に言われるままＩＳＣを解除させた。ＴＦに攻撃されたことがショックで、思考がまともに出来ないみたいだ。ＩＳＣが解除されたのを確認し、太陽はすぐにＩＳを展開させて荷台から飛び降りようとした。

「私が車の方のＴＦを片付ける。セシリア、鈴音、シャル。お前達は適当に車を運転してどこかに隠れてろ。後で拾いに来る」

「て、適当って・・・どうやってやるのさ！？」

「頑張ってくれ。ラウラ」

太陽は方向を変え、どこかへと飛び去ろうとする戦闘機型ＴＦを指差す。

「あれは任せた」

それだけ言って、太陽はトラックの外へと飛び出した。

気高き純白の騎士、見参（前書き）

ラインアークのマークはオリジナルです。

気高き純白の騎士、見参

視界の端でラウラが荷台から空へと飛び立ったのを認め、太陽は正面から迫るＴＦの集団に視線を向ける。どれも一般の人間が乗る車種だが、最後尾にいる車のみ異彩を放っていた。軍などで使われている地雷除去車（バッファロー）だ。唯一つ違う点といえば、地雷除去に使うアーム先端部分についているクローが異常なまでに長いこと。

「まった面倒なのが来たな・・・」

道路を削りながら滑り、太陽は突っ込んできた二体のＴＦを真正面から対峙する。変形しながら飛び掛ってくるＴＦを、太陽は無造作にオールデリートを横に振りぬいて真っ二つにした。切られた部分から紫電を放ち、横を通り過ぎて爆発するＴＦを無視し、太陽は更に突っ込んでくるＴＦを次々に切り裂いていく。

「この数、流石にＩＳを展開させていても疲れるな・・・」

気がつけば、太陽はＴＦに囲まれていた。背後から姿勢を低くさせてタックルしてくるＴＦの顔面を蹴り飛ばし、左腕でヘッドロックしていたＴＦの頭を無理矢理引き千切る。引き千切った頭を目の前のＴＦに投げつけ、左腕の中でぐったりとしているＴＦの身体を振り回して周囲のＴＦを牽制する。そのまま頭部を失ったＴＦを振り回していると、周囲を囲む内の一体に受け止められた。その隙を逃さず、同時に全てのＴＦが襲い掛かってくる。

「遅い！！」

振り回していたＴＦをあっさりと放棄し、太陽は両腕の武装を構え

た。オールデリートの柄から紫電と共に超高密度ビーム刃が溢れ、ライオンハートの実体剣にビーム刃が展開される。身体を一回転させ、二振りの剣の切っ先で円を描く。太陽に襲い掛かってきたＴＦは全て胴体を切り裂かれ、爆発した。一瞬、爆風と黒煙で太陽の視界が塞がる。視界が晴れると。

『アァァァァッッッ！！！！！！！！！！！』

最後尾を走っていた地雷除去車（バッファロー）のＴＦ、ボーンクラッシャーが一回転しながら変形し、足についているタイヤをローラースケートのようにさせながら突っ込んできた。自分の数倍はある巨体を滑らせるように向かってくるボーンクラッシャーに、太陽はポツリと一言。

「ＴＦって叫んだりするんだな・・・」

激しく着眼点がずれてる気がするが、それでも太陽は一切の物怖じを見せずにモードトランザムを発動させながらボーンクラッシャーと対峙した。濁った白色の巨体と、紅の粒子を放つ小柄な体躯が激突する。当然と言うべきか、軍配が上がったのはボーンクラッシャーのほうだ。幾らモードトランザムで出力を上げているとはいえ、太陽とボーンクラッシャーでは体躯の大きさ、そして重量が違いすぎる。全力でぶつかったにも関わらず、押し負けた太陽はボーンクラッシャーに押し倒され、そのまま道路の上を転がっていった。

「ガラクタの分際で私を押し倒すな！！」

縺れるように転がりながら、太陽はボーンクラッシャーを蹴り飛ばした。太陽の蹴りでボーンクラッシャーは確かに離れたが、片手はしっかりと太陽の片脚を掴んでいる。蹴られて吹き飛んだボーンクラッシャーは道路の外へと飛び出した。

「ぐっ！」

ボーンクラッシャーに脚を掴まれているため、太陽は道路の外へと飛び出したボーンクラッシャーと一緒に落ちていく。道路から落ちる寸前に道路を掴んで落ちないようにするが、太陽の握力はともかくボーンクラッシャーの重さに道路が耐え切れるわけもなく、あっさりと太陽が掴んでいた部分は砕けてしまった。二人は重力に従って下にある道路へと、派手な音を立てて落ちた。

「いたた・・・っ！！」

頭を打ってふらふらする太陽をボーンクラッシャーの拳が襲う。自分の頭程の大きさがある拳に殴られふらつくが、歯を食い縛って意識をはっきりさせて、再び自分に向けられて放たれた拳を受け止めた。ボーンクラッシャーが拳を引くよりも早く巨体を引き寄せ、ライオンハートをボーンクラッシャーの胸元に突き立てた。右足のグリフォンを展開させ、ライオンハートを引き抜きながらボーンクラッシャーの顔を切り上げる。

『アアアァァァッッッ！！！！』

顔を押さえるボーンクラッシャー。太陽は振り上げた右足を勢い良く振り下ろし、踵落しを叩き込んだ。これ以上無いくらいに踵落しが綺麗に決まり、ボーンクラッシャーは道路を貫通して下の地面へと落ちていく。ボーンクラッシャーが貫通して出来た穴に、太陽は躊躇無く飛び込んだ。道路の下の砂漠に着地すると、顔半分が無くなったボーンクラッシャーが背中のアームを伸ばしてくる。アーム先端のクローが閉じる前に太陽は上半身を逸らせてクローをかわした。そのままアームを掴み、オールデリートで切り落とす。

『ガアアァァァッッッ！！！！！！！！！！！！！』

ボーンクラッシャーの右腕が薙刀のように振るわれた。空気を切り裂きながら迫る右腕を、太陽は肘鉄で受け止める。肘鉄で右腕を砕かれ、ボーンクラッシャーは左腕を振るう。左腕が太陽を薙ぎ払うよりも早く、太陽が投げたオールデリートがボーンクラッシャーの胸を貫いた。胸を貫かれ怯むボーンクラッシャー。太陽は容赦なくボーンクラッシャーの顔面に飛び膝蹴りを打ち込む。体勢を崩して倒れるボーンクラッシャーの胸部に着地する。それもオールデリートの柄の上に。

「さっさとくたばれ」

冷酷に言い放ちながら太陽はボーンクラッシャーの左腕を切り、頭を捻じ切った。自分の手の中でカメラアイから光を失っていくボーンクラッシャーの頭部を投げ捨て、太陽は足元に転がるＴＦを観察する。

「それにしても、こんなデカ物が独立稼動で動いてるんだからなぁ。技術の無駄使いもいいとこだな・・・ん？」

首を捻じ切られて動かなくなったボーンクラッシャーのある一点を見て、太陽は訝しげに眉を顰める。太陽が見ているのはボーンクラッシャーの右肩部分。そこには本来、企業連のマークである白い地球がある筈なのだが、何故かそこにはラインアークのマークである、交差する白と蒼の翼と、黒と紅の剣が描かれていた。数秒間思考する太陽。やがて考えが纏まったのか、表情を蒼白なものにさせる。

「えげつない事してくれるな・・・王小龍」

忌々しそうに呟きつつ、太陽は夜空へと飛翔した。

『あれは任せた』

戦闘機型ＴＦ、スタースクリームを追いながら、ラウラは太陽に言われたことを思い出す。自然と、口元に笑みが浮かんだ。ラウラにとって、太陽は親友だ。生涯の友とも思っている。そんな彼女が、自分に任せた、と言ってくれたのだ。これ以上嬉しいことは無い。

気がつけば、ラウラはリアの町の上を飛んでいた。

「しっかりと太陽の期待に応えなければ・・・行くぞ、黒き雨（シュヴァルツェアリヒトゲン）　光の翼（エイン・フリューゲル）」

黒き雨（シュヴァルツェアリヒトゲン）　光の翼（エイン・フリューゲル）。それがラウラの強化パッケージの名だ。両肩にある大型カノンを腰に移動させ、代わりに大型推進翼が装備されている。大型推進翼はレイジングウィングの物と酷似している。そうなったのは、ラウラが強化パッケージを作った太陽と黄昏に我侭を言った結果なのだが、それは置いておく。レイジングウィングと違う点は、レイジングウィングの推進翼が二対であるのに対し、シュヴァルツェア・レーゲンの推進翼は一対であること。そして装備されている武装が自立兵器ではなく、ワイヤーブレードであること。

「夜明とお揃い・・・いかんいかん。今は目の前の敵に集中しなければ」

軽くトリップしかけたが、すぐに意識を眼前で飛んでいるスタースクリームに集中させる。両袖のプラズマ刃とビームガンが合体した複合武装型旋棍、ゼーレクロイツからプラズマ刃を展開させ、一気に瞬間加速（イグニッション・ブースト）してスタースクリームとの距離を詰め、プラズマ刃を叩きつけた。体勢を崩して落ちていくスタースクリームにビームガンを連射する。眼下に広がっているリアへと落ちていくスタースクリーム。

「行くぞガラクタ」

ビームガンの連射を止め、再びプラズマ刃を展開させながらラウラはスタースクリームに突っ込む。そのままプラズマ刃を突き立てようとした刹那、スタースクリームが変形してラウラを受け流した。

「何！？」

必殺の一撃を避けられ、ラウラは慌てて減速して振り返る。変形したスタースクリームがガトリングガンを乱射してきた。ラウラは左目を隠している眼帯を外し、越界の瞳（ヴォーダン・オージュ）を発動させた。途端、雨のように降り注いできたガトリングガンが止まっているかのように、速度が遅くなった。それは飽くまでそう見えているだけ。今までのシュヴァルツェア・レーゲンなら避けられなかっただろう。だが、今のシュヴァルツェア・レーゲンには光の翼がある。

「・・・貴様を振り切る」

文字通り、背中の推進翼が黒く輝き始めた。輝きが収束した瞬間、ラウラの姿が消えた。空間にラウラが超高速移動をしたことを示す影と残光が浮かぶ。レイジングウィングに匹敵する機動力だ。スタースクリームの真上に移動したラウラはプラズマ刃を突き刺し、地上へ向けて急降下し始めた。数秒と掛からず、ラウラはスタースクリームを道路へと叩き落す。町の中へと落としたせいで野次馬が寄ってくるが、そんなことはお構い無しでラウラは道路にクレーターを作ったスタースクリームに腰の大型カノンを放った。爆音、黒煙が周囲を満たす。野次馬が蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

「・・・」

無言で黒煙を見ていると、越界の瞳（ヴォーダン・オージュ）が何かを捉えた。すぐにＡＩＣを発動させ、黒煙の中で動いた何かを拘束する。黒煙が晴れると、片脚を失ったボロボロのスタースクリームがＡＩＣに捕まっていた。ＡＩＣの拘束から抜け出そうとするスタースクリームを、ラウラはワイヤーブレードで貫いた。

「これで終わり・・・でもなさそうだな」

八本のワイヤーブレードで貫かれ、完全に稼動を停止させたスタースクリームを放り投げ、ラウラは後ろを振り返る。そこには純白のＩＳを展開させた美女が立っていた。

「何者だ？」

ラウラの問いに美女は胸を張り、よく通る声で名乗り上げた。

「我が誇り高き名はジュリアス・エメリー！　ＯＲＣＡ旅団最初の５人が一人！　我が誇り、ＯＲＣＡ旅団の一員としての誇りを懸け、貴様を倒す！！」

そこに立っているのはＯＲＣＡランク３『ジュリアス・エメリー』。カラードランク１のオッツタルヴァに匹敵し得る強さを持った、ＯＲＣＡ旅団初期の一人である。

逆お気に入りユーザー百名突破記念・・・って言えるのか？

ども、こんばんわ。サザンクロスでッス。毎回毎回、このような駄作を読んでいただき本当にありがとうございます。見苦しい文が多々、と言うか見苦しい文しか無いと思いますが、これからもよろしくお願いします。

今回は、タイトル通り、逆お気に入りユーザー百名突破記念です。と言うわけで、何か記念の話でもやろうと思ったのですが、全く思いつきません。そこで、家の月光夜明と夕暮太陽を貸し出します。もし、『自分の作品に夜明と太陽を出してやんよ』という心優しい作者様がいらっしゃったら、感想にて返事を下さい。お待ちしています。

序と言うわけではありませんが、二つほど皆様に質問です。まず一つ。仮面ライダーの加速では、ファイズのアクセルフォーム、カブトのキャストオフ及びクロックアップ、アクセルのトライアルどれが好きですか？　深い意味はありません。ただ、太陽が加速するだけです。

二つ目の質問ですが、太陽をメインとしたオリジナル話を見たいですか？　もし見たい方がいたら、近い内に予告編を書きます。まぁ、原作八巻の後に書く予定なので、結構先の話になりますが・・・。

たくさんの方が協力してくださると嬉しいです。ではまた。

二発のミサイルがラウラを挟み込む様に迫る。ゼーレクロイツを連射してビームを弾幕のように左右へ張り巡らし、ラウラはミサイルを破壊しながら目の前の敵、ジュリアスと対峙する。軍人の勘で、ラウラは数秒と掛からずに悟った。目の前の敵は、自分よりも強いと。すぅっ、と金と紅のオッドアイが細くなる。

「・・・行くぞ！」

ゼーレクロイツからプラズマ刃を展開させたラウラは瞬間加速（イグニッション・ブースト）でジュリアスに接近、プラズマ刃を叩きつけるように振りぬいた。プラズマ刃が空気を焼き切る音が響く。ジュリアスは僅かに上半身を逸らしてプラズマ刃をかわし、ラウラの腹部にレーザーライフルを突きつけた。レーザーライフルの銃口が輝き、ラウラは腹に衝撃を感じて吹き飛ぶ。後ろにあった高層ビルに叩きつけられ、一瞬ラウラの呼吸が止まる。

「っ！？」

微かに靄がかかる頭をはっきりさせようと頭を振ろうとした瞬間、ジュリアスの左手がラウラの頭を掴んだ。瞬間加速（イグニッション・ブースト）で爆発的な速度を得ていたジュリアスはラウラの頭を掴んだままビルを貫通し、更に別のビルをもぶち破っていく。しかも、ラウラの腹部にレーザーライフルを押し付けて連射していた。

（このままじゃやられる！）

頭部のハイパーセンサーがジュリアスの握力で悲鳴を上げ、劈くよ

うな警告音を発してラウラの鼓膜を叩き破ろうとする。ラウラは死に物狂いでゼーレクロイツの銃口をジュリアスに向け、トリガーを引きまくった。僅かにジュリアスの握力が弱まり、その隙を逃さずにラウラはジュリアスの手から逃れる。後ろにブーストし、腰部の大型カノンをジュリアスに向けた。大型カノンから徹甲弾が放たれる。徹甲弾が当たる直前に、ジュリアスは横に瞬間加速（イグニッション・ブースト）して徹甲弾を避けた。標的を失った徹甲弾はジュリアスの後ろにあったビルに直撃、ガラスと鉄の破片を撒き散らす。

「堕ちろ！！」

ガラスと鉄が降り注ぐ中、ジュリアスは肩のレールガンを放った。迫る高速の弾丸をプラズマ刃で切り裂き、ラウラは瞬間加速（イグニッション・ブースト）でジュリアスに突っ込む。突き出されたプラズマ刃を紙一重で避け、ジュリアスは横を通り過ぎていったラウラの背にレーザーライフルを向けた。レーザーライフルが放たれる前にラウラは急旋回、大型推進翼についた八本のワイヤーブレードを射出する。ワイヤーブレード四本がレーザーを相殺し、残りの四本がジュリアスを襲った。

「厄介だな・・・！！」

不意に、多角的な軌道を描くワイヤーブレードをかわしていたジュリアスの動きが止まる。視線を敵がいる方へ移すと、自分に向けて右手を突き出しているラウラの姿があった。ＡＩＣだ。ワイヤーブレードがジュリアスの四肢を拘束する様を思い浮かべ、ラウラは勝利を確信する。だが、その確信はすぐに絶望へと変わった。

「鬱陶しい！！」

一声吼え、ジュリアスは容易にＡＩＣの拘束を払いのけた。さっき

までジュリアスが浮いていた所でワイヤーブレードがぶつかり合う。
顔を驚愕に染めるラウラへ、ジュリアスは左腕のハイレーザーキャノンを向ける。異常なまでにエネルギーを喰うが、絶大な威力を誇る武装、ＶＥＧＡが火を噴いた。

（回避を）

ラウラの視界が白に塗り潰された。

「ここまで見事に嵌められるとはな・・・いつか借りを返すぞ、王小龍・・・っ！？」

一旦、トラックで逃げたセシリア達を放置し、太陽はスタースクリームを追ってリアへと向かったラウラを追いかけていた。

（もし、私の予想が当たっていれば、アークエンジェルは何らかの襲撃を受けてるはず・・・スタースクリームを追ってきた者に対しての待ち伏せも十分考えられる）

そこまで考えた刹那、太陽は反射でロール回避していた。体勢を立て直した太陽の横をレーザーが横切る。レーザーが飛来した方を振り返ると、そこにはカラードランク１、オッツタルヴァの姿が。

「ここに来てお前が相手か・・・」

「俺の役目はお前の足止め、若しくは撃破だ。相手をしてもらうぞ、深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）」

レーザーライフル、アサルトライフルの射撃を避け、太陽はオッツタルヴァから距離を取った。考えていることはどうすれば、より時間をかけずにオッツタルヴァとの戦闘から離脱できるか。少しだけ方法を頭の中で模索して、太陽は頭を振る。オッツタルヴァを戦闘可能のまま放っておけばセシリア達に被害が及ぶかもしれないし、何より自分自身が背中を撃ち抜かれる。

（・・・仕方ない）

オッツタルヴァの射撃を避けながら太陽は心の中で嘆息し、目の前に数十枚に及ぶウィンドウを広げた。雨のようにオッツタルヴァが

射撃してくる中、太陽は最小限の動きでレーザーと弾丸を回避、数秒で作業を終える。

『パスワード認証　バルディッシュトワイライト　？？ソード展開』

「・・・ぐっ・・・シールドエネルギーの残量は？」

ーシールドエネルギー残量、８４　実体ダメージ高ー

シュヴァルツェア・レーゲンが教えてくれたコンディションは良いものではなかった。寧ろ、最悪の部類に入るだろう。ＶＥＧＡの銃口から放たれたハイレーザーが当たる直前、ラウラはプラズマ刃を展開させたゼーレクロイツを交差させてハイレーザーの直撃を防いだ。それでシールドエネルギーをゼロにされるのは避けられたが、大幅にシールドエネルギーを削られ、主武装であるゼーレクロイツもほとんど壊れている。

「状況は最悪だな・・・」

ちらっ、とジュリアスを見る。多少の傷は負っているが、ラウラに比べれば無傷に等しい。自分の状態、敵の状態を考え、ラウラは勝ち目がほとんど無いことを確信する。それでも、

「まだ・・・やれる・・・！」

彼女の中に諦める、なんて選択肢は無かった。

（ここで膝をついたら、夜明に会わせる顔が無い）

夜明への想いだけを支えに、ラウラはジュリアスに勝とうとしていた。ゆっくりと立ち上がり、ラウラは大型推進翼を広げる。大型推進翼はラウラの想いに応えるように輝いた。次で勝敗が決すると思ったのか、ジュリアスも構える。

「参る！！」

「来い！！」

ジュリアスがラウラへと突貫する。対してラウラはその場から動か

ず、ワイヤーブレードを射出した。だが、ワイヤーブレードはジュリアスを通り越していく。

「どこを狙っている！！」

レールガン、ハイレーザーキャノンＶＥＧＡが火を噴く。高速の弾丸が肩を抉り、ハイレーザーが装甲を吹き飛ばした。ラウラは顔を苦痛に歪ませながら右手を突き出し、ＡＩＣでジュリアスを捕らえる。ジュリアスはさっきと同じように、一瞬でＡＩＣの拘束から抜け出そうとするが、その一瞬さえ与えずにラウラはジュリアスに徹甲弾を直撃させた。爆発が周囲を震わせ、ジュリアスの姿が黒煙の中に消える。黒煙の中から抜け出そうとするジュリアス。だが、先ほどラウラが射出したワイヤーブレードが戻ってきて、彼女を拘束した。

「何！？」

「砕け散れぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！」

再び大型カノンが徹甲弾を吐き出す。ワイヤーブレードで拘束されて動けなくなったジュリアスに、非情な一撃が直撃した。もう一度広がる爆風、黒煙。黒煙の中から装甲の大部分を失ったジュリアスが吐き出され、道路に落下した。道路の上に横たわり、息をするだけで精一杯のジュリアスを見てラウラの脚から力が抜ける。

「か、勝った・・・」

勝利を確信して安心したその時、背後から衝撃がラウラを襲った。吹き飛ばされ、宙を舞うラウラの視界に襲撃者の姿が映った。一人は自分を砲撃で吹き飛ばしたであろう老人。そしてもう一人は顔を

バイザーで隠した二十台の女性。女性を見て、ラウラは驚愕に目を見開く。その女性が握っている武器、それは・・・。

「雪片・・・？」

道路に叩きつけられ、息が詰まる。咳き込むラウラを無視し、襲撃者二人はジュリアスに歩み寄った。

「大丈夫か？　手酷くやられたようだが」

「銀翁？　真改？」

ラウラを吹き飛ばした老人はＯＲＣＡランク２『ネオニダス』、通称銀翁。もう一人の女性はＯＲＣＡランク５『真改』。どちらも、ＯＲＣＡ旅団初期のメンバーだ。

「何故、二人がここに？」

「クルーゼの坊主に言われたのよ。万が一の事があるから、保険としてジュリアスについていけとな」

忌々しそうに銀翁ことネオニダスは呟く。自分よりも若い者に鼻で扱われるのが我慢ならないらしい。真改は表情も見せず、油断無くＩＳが強制解除されたラウラを見据えている。

「それにしてもお前がここまでやられるとは・・・油断でもしたのか？」

「いや。油断も慢心もした覚えは無い。彼女の力さ」

ジュリアスの返答に、ふむとネオニダスは顎に手を当て、ラウラを見る。

「その若さでジュリアスを追い込むか・・・危険だな。真改」

「御意」

真改は僅かに首肯し、右手に握っている刀を構えた。

「雪片淡月乃型（ゆきひらあわつきのかた）」

真改が名を呼ぶと、雪片は白く輝き始めた。それは紛れも無い零落白夜の輝き。白い輝きに照らされながら、ラウラは歩み寄ってくる真改を睨みつける。

「何故、貴様が雪片を持っている？　何者だ・・・」

「知る必要、あらず」

雪片を大上段に構え、ラウラに振り下ろそうとしたその時、蒼い荷電粒子砲が真改を吹き飛ばした。吹き飛んだ真改を追うように再び荷電粒子砲、ネオニダスに向けて小口径弾が連射される。

「・・・斬る！」

「新手か！？」

真改は雪片で荷電粒子砲を切り裂き、ネオニダスはＩＳ『月輪』の重厚な装甲で小口径弾を防いだ。二人が砲撃が飛んできた方を向くと、白い閃光が道路を滑ってきた。白い閃光は倒れるラウラの目の

前で止まり、背中にある二対の推進翼の間から光の翼を広げる。

「どうにか間に合ったか・・・大丈夫か、ラウラ！？」

仲間を守るため、不屈の翼が光臨した。

純白の騎士ＶＳ漆黒の雨　光臨する不屈の翼（後書き）

次回で太陽が加速します。

超越の時

『パスワード認証　バルディッシュトワイライト　？？ソード展開』

マシンボイスが響いた。太陽の身体を護っているバルディッシュトワイライトの装甲が輝き、変形を始めた。背中を守るように装備されていた背部ユニットが球状に変形し、左手のオールデリート、右手のライオンハートも同様の変形を遂げる。三つの球体は太陽の周囲を高速で旋回し始め、形を変えていった。オールデリートとライオンハートは片刃の大型ビームブレードに変形、背部ユニットは十一の小型ソードビットへ姿を変える。

「・・・ＩＳが変形しただと？」

目の前の光景に驚愕を禁じえず、オッツタルヴァは表情を歪めた。原則として、ＩＳは『初期操縦者適応（スタートアップ・フィッティング）』と『形態移行（フォーム・シフト）』でしか変形しない。その原則が目の前で破られたのだ。幾らカラードランク１のオッツタルヴァと言え、驚くのも無理ないだろう。

「変形じゃない。武装を変えただけだ」

オッツタルヴァの驚愕を否定するように太陽は肩を竦めた。そうしている間にも別の武装へと変形したオールデリートとライオンハート、背部ユニットは定位置に装備される。二振りの大型ビームブレードは両肩に。十一のソードビットは両腕、腰、両膝、爪先、踵に。その数合計十三。

「バルディッシュトワイライト　？？ソード展開完了。各武装に異常なし」

故に名をバルディッシュトワイライト??ソード。近接武装のみを装備した、超近接特化型強化パッケージ。太陽は目視で武装に異常が無いかを確認し、両肩から片刃の大型ビームブレード『アロンダイト』を引き抜いてオッツタルヴァを見据えた。無言で構え、対峙する二人の強者。オッツタルヴァの左手に握られたレーザーライフルの銃口が輝いた。威力を底上げし、レーザーライフルと言うよりもレーザーバズーカの呼び方が相応しい砲撃が太陽に迫る。太陽は無造作に左のアロンダイトを振りぬき、自身に迫るレーザーを切り裂いた。

「・・・ちっ」

オッツタルヴァの唇から微かに舌打ちの音が漏れる。連射の利かないレーザーライフルを太陽に直撃させるのは難しいと判断したのか、右手に握るアサルトライフルを連射し始めた。高速で襲い掛かってくる弾丸を、太陽は風に揺れる柳の葉のようにかわしていく。ふとオッツタルヴァが連射を止めると。

「よぉ」

アロンダイトを振り上げた太陽が目の前にいた。オッツタルヴァは無意識のうちに横へと瞬間加速（イグニッション・ブースト）する。アロンダイトを振り下ろした太陽は再びオッツタルヴァを見据えた。僅かに切られ、血が流れ始めた額を一撫でしてオッツタルヴァも太陽を睨みつける。視線が交差した刹那、さっきまでオッツタルヴァの頭があった空間をアロンダイトが切り裂いた。咄嗟に頭を下げたオッツタルヴァの顔面に、太陽の膝に装備されたビーム刃展開状態のソードビットが迫る。

「くっ！」

無理矢理身体を反らして突き上げられるソードビットを回避した。逆エビ反りの状態になったオッツタルヴァを踵落しが襲う。太陽の踵に装備されていたソードビットが装甲に食い込むが、その一撃はステイシスのコアを破壊するまでには至らなかった。オッツタルヴァは地面に落ちる寸前にスラスターを噴かして地面との激突を回避する。

「・・・その程度か？」

挑発的に唇を吊り上げ、悠然とこちらを見下ろしてくる太陽に視線を送るオッツタルヴァ。無言でオッツタルヴァと同じ高度まで下がり、太陽はアロンダイトを投げつけた。自身の武器を放棄すると言う太陽の行動に面食らうが、一瞬反応が遅れながらもオッツタルヴァはアロンダイトを避ける。避けた瞬間、背中に衝撃。背中を切られたと理解しながら吹っ飛ぶ。アロンダイトを投げた瞬間に瞬間加速（イグニッション・ブースト）してオッツタルヴァの後ろへと回り、自分が投げたアロンダイトを掴んでオッツタルヴァを切るという離れ業を太陽はやってのけた。

「・・・今ので決めたと思ったんだがな・・・」

余り手応えが無かったので、太陽はオッツタルヴァを倒せなかったと判断。その証拠に、吹き飛ばされたオッツタルヴァはＩＳを展開させたまま太陽に視線を向けている。

「・・・このままじゃ無駄に時間を経過させていくだけか・・・仕方ない」

ため息をつき、太陽はある物を展開させた。新たな武器を展開させたと思い、オッツタルヴァは身構える。だが、太陽が展開させた物

は・・・。

「腕時計？」

「やっぱりそう見えるか？　だが違う。これは私がバルディッシュトワイライト？？ソードに付け加えたあるシステムを発動させるための物さ」

腕時計のようなツールを左腕に装備した太陽。不審そうに眉を顰めるオッツタルヴァに意味ありげな視線を送り、太陽はツールの操作を完了させた。すると、マシンボイスが周囲に響いた。

『Ｍｏｄｅ（モード）　Ｅｘｃｅｅｄ（イクシード）　Ｓｔａｎｄｂｙ　ＯＫ．　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？』

太陽がツールのボタンを押すとバシュッ、とバルディッシュトワイライトの展開装甲から圧縮空気が漏れる音がした。スライド展開するのではなく、僅かに太陽の身体から装甲が浮いている。

「キャストオフ」

『Ｃａｓｔ　ｏｆｆ』

太陽がキーワードを口にした次の瞬間、勢い良くバルディッシュトワイライトの装甲がパージされた。黒い装甲が吹き飛び、バルディッシュトワイライトは紅の姿を露にする。極限まで薄くなった紅の装甲。その姿はほとんど人間と変わりなかった。再び圧縮空気が漏れ、胸部装甲が二つに展開されて肩の定位置に収まる。

『Ｃｈａｎｇｅ　Ｅｘｃｅｅｄ』

胸部装甲に守られていたバルディッシュトワイライトのコアが露出された。太陽の胸の真ん中にあるコアは文字通り、日輪のように輝いている。

「モードイクシードは出力を十倍以上に上げるモードトランザムの派生システムだ。本来、三分間続くモードトランザムを無理矢理十秒に縮めて、出力を激増させた・・・そこまでは良いんだが、モードイクシードを発動させるとコアが発熱して、胸部装甲を開いてないとコアその物が焼け爛れてしまうんだ」

だから、コアを露出させるなんて危険なことをしているのだ。コアを破壊すれば、そのＩＳは未来永劫起動できなくなる。オッツタルヴァも同じ事を考えているのか、視線を太陽の胸元で輝いているコアに注いでいた。

「・・・コアを露出させるなんて危険な真似をして、その見返りが十秒か・・・随分とお粗末なシステムだな」

「返す言葉も無いな・・・だが、その十秒間だけは私の独壇場だ。これ以上、お前に時間を割く余裕は無い」

『Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ』

「悪いが・・・振り切らせてもらう」

突如発生した風がオッツタルヴァの頬を撫でる。太陽が両手のアロンダイトを上へと放り投げた瞬間、オッツタルヴァは身体中に衝撃を感じた。太陽に攻撃されていると理解するのに一秒、反撃するのは無理と判断し、回避行動を取ろうとするために二秒を要した。そ

の間に、太陽はオッツタルヴァに正拳突き、裏拳、掌底、肘鉄、手刀を身体中に叩き込んでいた。オッツタルヴァが回避行動を取ろうと身体を動かす前に組んだ両手を振り下ろして真下へと叩き落す。

オッツタルヴァが地面に激突する前に先回りした太陽は脚を振り上げ、オッツタルヴァを蹴り上げた。上へとオッツタルヴァが打ちあがる前に全方向から超高速の蹴りを浴びせる。上へと打ち上げられたオッツタルヴァの周囲に紅い円錐状のエネルギー『クリムゾンジャベリン』が数十個現れ、全ての先端がオッツタルヴァに向いていた。上へと打ち上げられたオッツタルヴァに視線を送っていた太陽の姿が消える。刹那、目視さえ出来ない速さの太陽が全てのクリムゾンジャベリンをオッツタルヴァに打ち込んで姿を消した。

『3・・・2・・・1・・・』

「絶望がお前の・・・ゴールだ」

『Ｔｉｍｅ　ｏｕｔ』

大爆発がオッツタルヴァを飲み込んだ。

帰還する脅威

「その程度の火力でこの雷電に競り勝とうなど・・・笑止」

「ぐっ・・・！！」

有澤の全グレネード、流星のビームマグナムが放たれた。四つの必殺の弾丸と、爆発的威力を秘めた紅い閃光はぶつかり合うことなく擦れ違い、標的に直撃して爆煙が二人の姿を飲み込む。朦々とした黒い爆煙から飛び出した流星の左腕に装備されているシールドは、度重なる有澤の砲撃でボロボロになっていた。シールドで防いでいるにも関わらず、シールドエネルギーが半分にまで減らされた流星に対し、何発ものビームマグナムが直撃している有澤は、

「相変わらず無傷かよ・・・」

爆煙の中から無傷の姿を現す有澤を見て、流星は忌々しそうに呟く。シールドエネルギーが削れている様子もない。このまま行けば、確実にジリ貧だ。かと言って、ビームマグマムよりも威力の高い武装がトワイライトウィングには無いので流星に打開策は無かった。いや、あると言えばあるのだが・・・。

（ＩＳ－Ｄシステムを使えば・・・でも、もし決められなかったら確実に殺られる）

トワイライトウィングの真の力を引き出すＩＳ－Ｄシステムを使えば、ビームマグナム以上の威力を持つレイジングハート、バルディッシュが使える。だが、万が一そのどちらでも有澤を倒せずにＩＳ－Ｄシステムが時間切れになれば、確実に流星はグレネードの餌食

になる。

「けど、このままでも勝てないよな・・・仕方ない」

次の砲撃を食らえば確実に破壊されるであろうシールドを見て、流星は決心を固めた。強い眼光で自分を見据えてくる流星に、有澤は本能がざわめくのを感じる。

「（目が変わった）・・・だがそれでも、この雷電に打ち勝つことなど不可能」

有澤の両腕、両肩のグレネードが次弾を装填、再び四発の弾丸を放った。飛来する弾丸を前に、流星はゆっくりと目を閉じて深呼吸。目を閉じている流星をグレネードガ襲う。また、流星の身体が爆煙に飲み込まれた・・・だが。

ｌＩＳ‐Ｄシステム、Ｓｔａｎｄｂｙ　ＯＫ．　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？ｌ

有澤が見たのはグレネードによって破壊された流星ではなく、展開装甲をスライド展開させ、漆黒の輝きを放ちながら自分に突っ込んでくる流星の姿だった。

「おぉおぉおぉおぉおっっっっっ！！！！！！！！！」

大上段に振り上げたバルディッシュを力の限り振り下ろす。バルディッシュの刀身が少しだけ雷電の装甲に食い込んだ。流星は刀身を装甲に食い込ませたまま、強引にバルディッシュを振り抜いた。重厚な装甲で守られ、超重量になっていた有澤の身体が僅かに浮かぶ。十メートルほど吹き飛ばされ、脚部のキャタピラが道路を削ってい

く。

「ぬぅ・・・」

険しい表情を浮かべ、有澤はキャタピラについている補助スラスターで体勢を整えながら流星に視線を向けた。刹那、レイジングハートの砲撃が有澤を襲う。再び吹き飛ぶ有澤。着地する時間さえ与えずに流星は瞬間加速（イグニッション・ブースト）で有澤に接近、頭部を鷲掴みにする。

「消し飛べ！！！」

有澤の頭を掴んだ右手が黒い光を放ち、掌にあるパルマ・フィオキーナがエネルギーを放つ。有澤の頭を掴んだまま、流星はパルマ・フィオキーナを連射した。断続的に光る黒い閃光が有澤を撃ち抜いていく。十発目の砲撃を叩き込もうとした瞬間、グレネードの零距離射撃で流星は吹き飛んだ。咄嗟の判断で身体の前面にシールドエネルギーを集中させたので戦闘不能は避けられたが、それでもシールドエネルギーが十分の一以下にまで減らされている。流星は浮かびながら有澤を睨んだ。顔に目立った傷は無いが、それでも装甲がない顔を集中的に攻撃したので、絶対防御が発動してかなりのシールドエネルギーを削れたはず。

「・・・匹夫、名は？」

「ラインアーク所属、トワイライトウィング搭乗者大空流星」

有澤の問いに淀みなく答える。

「そうか。では行くぞ、大空の・・・何？」

グレネードの照準を流星に合わせようとした有澤の顔に不快の表情が浮かび上がった。それは怒り、納得へと変わる。もっとも、納得しているとは到底思えないが。

「任務完了だ」

有澤は呟くと、グレネードから今までとは違う種類の弾を撃った。それは道路に着弾すると、黒い煙を撒き散らし始めた。

「煙幕か！？」

黒煙が広がる中、流星は慌ててハイパーセンサーで有澤の姿を探すが、黒煙にはハイパーセンサーをジャミングする作用があるらしく、有澤の姿は見つからない。凡そ一分後、黒煙が晴れた頃には有澤の姿は無かった。

「流石にこの状態で二対一はきついか・・・！！」

ネオニダスの砲撃でシールドエネルギーを零にされ、ＩＳが強制解除されたラウラを左腕で抱きかかえながら、夜明はネオニダスと真改の二人に苦戦を強いられていた。真一文字に振り抜かれる雪片淡月乃型を飛翔してかわし、スタードライブの砲口を真改に向ける。

「無駄」

放たれた荷電粒子砲を振り上げで切り裂き、真改は淡月を振り抜いた体勢で瞬間加速（イグニッション・ブースト）、夜明に突っ込みながら返す刀で切りかかった。振り下ろされる淡月を、夜明は右腕のビームシールドで防ぐ。一瞬の拮抗、夜明は吹き飛ばされた。両腕で防げば押し返すことも出来ただろうが、左腕はラウラを抱きかかえるのに使っているため、両腕では防げない。

「離してくれ夜明。自分の身くらいは自分で守れる」

自分のせいで夜明の動きが制限されていると分かっているのか、ラウラは夜明の腕から離れようとする。だが、夜明はラウラを離そうとはせず、逆に腕の力を強くしてラウラを抱きしめた。

「ＩＳも展開できないような状態なのに、何言ってんだよ・・・安

心しろ、お前は必ず俺が守る」

不覚にも、ラウラは顔を真っ赤に染めてしまう。ラウラがドキドキしていることを知ってか知らずか、夜明はにやっとラウラに笑って見せた。

「ま、居心地は悪いかもしれないが、ちっとばかり寛いでてくれや」

（とまぁ、大口叩いては見たが、きついことに変わりは無いか・・・）

再びスタードライブの砲口を真改と、その隣りにいるネオニダスに向ける。ジュリアスは何時の間にか戦闘の邪魔にならないところに引っ込んだようだ。二人に向けて放たれる荷電粒子砲。荷電粒子砲を横に広がって避け、真改は淡月を構えながら突進、ネオニダスは両肩に装備している兵器でエネルギーを球状に集めている。

「斬る」

「お断りだ」

頭に向かって振り下ろされた淡月を、ビームシールドを展開させた右腕で弾き飛ばす。淡月を弾かれて体勢を崩した真改に上段蹴りを繰り出す。真改は後ろに跳んで夜明の蹴りを避け、再び突っ込んだ。真改を迎え撃とうと構えた刹那、真改が上に跳んだ。入れ替わりに、ネオニダスが放ったエネルギーの塊が夜明に迫る。

「ぶねっ！？」

ビームシールドを展開させた右腕でエネルギーの塊を防いだが、何

故かビームシールドが弾け飛んで夜明の右腕を守っていた装甲が吹き飛んだ。驚愕と痛みに顔を歪ませながら、夜明は後ろに跳んでネオニダスから距離を取る。

「何だ今の!?　何でビームシールドで防いだのにこうなった!?」

焼かれた右腕を押さえながら、夜明はネオニダスを睨みつけた。すると、夜明の腕の中で黙っていたラウラが口を開いた。

「夜明、さっきの攻撃はシールドエネルギーでコーティングされていた。恐らく、あの男の両肩にある武装で射出するエネルギーをシールドエネルギーで覆っているのだろう」

越界の瞳（ヴォーダン・オージュ）でネオニダスの攻撃を見ていたラウラの言葉を聞いて、夜明は納得したように頷く。つまり、ネオニダスは二段構えの攻撃をしてきたのだ。エネルギー弾を覆ったシールドエネルギーで夜明のビームシールドを破壊、その後にエネルギー弾で右腕の装甲を吹き飛ばす。シンプルだが、何も知らない相手なら意表を突けて効果的だ。

「零落白夜射撃バージョンみたいな物か。にしてもシールドエネルギーをエネルギー弾と一緒にぶっ放すなんて芸当、出来るもんか？」

「未来の技術だろう・・・勝てるか？」

「正直言って、滅茶苦茶きついな」

高速機動で接近してきて雪片淡月乃型を正確無比、超高速で振り抜く真改。防御不能の砲撃を撃ってくるネオニダス。真改は未だに零落白夜を発動してはおらず、ネオニダスだって両肩の装備のみが武

器ではないだろう。おまけに左腕は使えない。

「軽く詰んだなおい・・・ま」

苦笑いを浮かべながら背中にある推進翼の間から光り輝く翼を伸ばす。

「諦めるつもりは更々無いがな。ラウラ、少しだけ苦しいけど我慢してくれ」

ラウラが無言で頷いたのを見て、蒼銀の粒子を放ちながら夜明は二人に突っ込んだ。瞬間加速（イグニッション・ブースト）するために背中の月光の翼（ムーンライトウィング）を収束させながら、夜明はラウラを上へと放り投げる。ラウラが上へと投げられたのと同じタイミングで、真改とネオニダスの視界から夜明の姿が消えた。二人の間に飛び込んだ夜明は再び月光の翼（ムーンライトウィング）を収束させて真改に突っ込んだ。強烈な蹴りが真改を吹き飛ばし、夜明はサマーソルトしながらスタードライブとディバイン・カノンの砲口をネオニダスに向ける。荷電粒子砲がネオニダスを吹き飛ばし、高速で連射される小口径弾が装甲を抉る。

「まだまだぁ！！」

スタードライブとディバイン・カノンを待機状態に戻し、夜明は腰からスターライザーを引き抜いて身体を回転させながら吹き飛んだ二人に投げつけた。真改は化け物じみた反射能力でスターライザーを避けたが、高齢のネオニダスは反応が間に合わずに肩を貫かれる。

「銀翁！」

真改の叫びに答えず、ネオニダスは上から落ちてきたラウラを抱き

かかえる夜明を見据えた。その目はさっきまで浮かんでいた好々爺の物ではなく、歴戦の老兵のそれだ。

「・・・高が童と侮ったか・・・真改、クルーゼの言うとおりそろそろ潮時じゃ、撤退するぞ」

「御意」

ネオニダスが飛翔し、ジュリアスを回収した真改がそれに続く。真改に抱えられながら、ジュリアスは夜明の腕の中にいるラウラを見続けていた。三人が夜空へと消えていったのを確認し、夜明はプライベート・チャネルを開いて流星に連絡を取る。

『流星、そっちはどうだ？』

『曾爺ちゃん。うん、大丈夫だよ。有澤は退いたし、アークエンジェルにも目立った損害は無いよ』

『そうか・・・他の連中は？』

『一夏と箒は冬華さんと一緒に有澤の襲撃で起こった混乱を収めてる。二人のＩＳはまだ調整が終わってなかったからね。黄昏は相変わらず強化パッケージを作ってる』

『太陽たちは？』

『まだ戻ってきてないみたい』

『・・・分かった。俺は一旦そっちに戻る。それから太陽たちを探しに行くぞ』

『了解』

場面変わって太陽とオッツタルヴァの戦闘後。爆発に飲み込まれたオッツタルヴァが倒れている。モードイクシードを解除して、唯の？？ソードに戻ったバルディッシュトワイライトを纏った太陽がオッツタルヴァを見下ろしていた。

「ぐっ、これ程とは・・・所詮借り物のＩＳ。それで深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）の

相手など、到底無理な話だったか」

「借り物だと・・・まぁいい。ここでお前を倒せたのは嬉しい誤算だ。色々と吐いてもらうぞ」

オッツタルヴァを拘束しようとしたその時、無数の弾丸が太陽を襲った。無意識の内に後ろへと回避した太陽に低速の追尾ミサイルが迫る。アロンダイトでミサイルを切り裂き、弾丸が飛んできた方を睨む。そこには、

「そんな小娘にやられるとは・・・カラードになって平和ボケしたんじゃねぇのか、オッツタルヴァ？」

「・・・オールドキング」

薄緑の装甲を持つＩＳを纏った男がいた。オールドキングと呼ばれたその男。その男を見た瞬間、太陽は未だかつて感じたことの無いような悪寒に襲われた。それと同時に感じること。

ー殺らなきゃ殺られるー

両手にアロンダイトを構え、太陽はオールドキングに全力の殺気を飛ばした。闘うため、殺すために存在を変えられた夕暮太陽。それが飛ばす全力の殺気、それは容易く人を殺せるほどの物だ。現にオッツタルヴァは顔を青ざめさせ、微かに震えている。だが、オールドキングは少しだけ驚いた表情を浮かべただけで、面白そうな玩具を見つけた子供のように殺気を飛ばす太陽を見ていた。

「おぉ、ガキとは思えない殺気だな。中々心地いいが、ここで殺りあうのはまずいんだ。悪いが、オッツタルヴァを回収、ついでに退

かせちゃくれないか？」

物理的重量を感じさせる殺気の中、オールドキングは友人に話しかけるような気軽さで太陽に話しかける。額を冷や汗が流れ落ちるのを感じながら、太陽は構えていたアロンダイトをゆっくりと下ろす。

「・・・行け」

「ありがとよ」

オッツタルヴァを肩に担ぎ、オールドキングはそのまま飛び去っていった。飛び去るオールドキングの後ろ姿を見送りながら、太陽は額を流れる冷や汗を拭った。

「オールドキング・・・か」

自分が初めて夜明に敵対してないにも関わらず、明確な殺気を覚えた・・・と言うより覚えざるを得なかった敵の名を呟き、太陽は飛翔した。

帰還する脅威（後書き）

次回で多少、時間が飛びます。と言っても、数日ほどです。

予告　太陽がメインの話（前書き）

名前は・・・何にしようか？

予告　太陽がメインの話

南アメリカ大陸南西部、第三十五国防戦略拠点。通称『存在しない基地（ノーバディイア）』。極一部の軍事関係者しか知らないそこを、轟音が揺らした。

「砲撃を確認！　方角は北北西、距離二〇〇〇！　機影は一機！　繰り返す、砲撃を確認！　方角は北北西、距離二〇〇〇！」

「映像出ます！！」

『存在しない基地（ノーバディア）』の管制室に怒号が飛び交う。高性能カメラによって、襲撃者の姿が管制室のモニターに映し出された。

「あれは・・・」

管制室の誰もが絶句する。『存在しない基地（ノーバディア）』を襲った襲撃者は、世界最強の一つに数えられた者だからだ。普通のＩＳに比べ細い曲線、夜空さえも薄く見える漆黒の装甲。両手に握られた複合武装、右肩のグレネード、左肩の分裂ミサイル。その姿は世界最強を謳われたＩＳの一つ、『黄昏の黒斧（バルディッシュトワイライト）』に酷似していた。

「総員戦闘配備に付け！！　敵はあの黄昏の黒斧と酷似している、十分に警戒しろ！！」

指令が飛ぶ中、モニターの中で漆黒のＩＳを纏った者、十五、六歳の少女は顔を歪めた。双眸はバイザーで隠れているため表情は完全に窺うことは出来ないが、それでも少女の顔が邪笑に歪んだのを確かに見た。

「・・・黄昏の破壊者（トワイライトデストロイヤー）、武力行使を開始するぜ」

右肩のグレネードを折りたたみながら、漆黒のＩＳは空へと飛翔した。ＩＳ『トワイライトデストロイヤー』は雲ひとつ無い空に漆黒の線を引きながら飛行し、『存在しない基地（ノーバディア）』へと降り立つ。着地した少女を、アサルトライフルを構えた数十の男達が取り囲む。自分を取り囲む屈強な男達を睥睨する少女。少女の目を覆っているバイザーのアイカメラ部分が異常な輝きを示した。

「アンノウン！　今すぐにＩＳを解除して投降しろ！　そうすれば命の安全を保障する！　繰り返す！　アンノウン！　今すぐ「ハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！！！！」っ！！」

警告に重ねるように、少女は狂ったような笑いを上げ始めた。一頻り笑うと、少女は口元を歪めて男達をぐるっと見回す。

「お前ら馬鹿ですかぁ？　自分達に向けていきなりグレネードをぶっ放すような奴が素直に投降するとでも思ってんのかよあぁ！？」

再び笑うと、少女は両手の複合武装を構えた。マシンガン、荷電粒子砲、実体剣の三種が備えられた銃剣、名を『死の恐怖（デス・フィアー）』。実体剣の間から二つの銃口が覗いていて、それぞれがマシンガン、荷電粒子砲の銃口になっている。

「こ、こんなことをしてただで済むと思うなよ！　今、編成されたＩＳ部隊が応援に駆けつけてきている！　彼女達が来れば貴様なぞ」

「いいねぇ、そいつらも全員ぶっ殺してやるよ！！」

狂ったように笑い続けながら、少女は男達を虐殺していった。マシンガンモードにしたデス・フィアーを乱射し続け、男達を次々に血の海へと沈めていく。数十秒間乱射を続け、気が付けば少女の周りは物言わぬ骸で埋め尽くされていた。

「んだよつまらねぇな。生身でももう少し抵抗して見せろよ・・・あぁ？」

口元に浮かべていた狂笑を収め、少女は足下に転がっている男の死体を蹴り飛ばす。その刹那、弾丸の雨が少女を襲った。シールドエ

ネルギーが削れるのも構わず、その場から動かないで弾丸が飛んできている方向を向くと、そこには応援に駆けつけたラファール・リヴァイヴ五機が浮かんでいた。再び、少女の口元に狂気の笑顔が浮かぶ。

「ちったぁ殺し甲斐のある奴が来た・・・なぁ！！」

接近してくるラファール・リヴァイヴに向け、少女は右肩のグレネード、左肩の分裂ミサイルを放った。超高速で飛来するグレネードは右端のラファールを捉え、四肢をバラバラに爆散させる。分裂ミサイルは撃ち落される前に数十発の超小型ミサイルを射出し、超小型ミサイルは次々とラファールを直撃して二機のラファールを消し飛ばした。残りは後二機。一瞬で三人の仲間を殺され動揺するラファール二機の間に、瞬間加速（イグニッション・ブースト）で突っ込んできた少女が割り込む。

「ボサっとしてんじゃねぇよ！！」

一人を蹴り飛ばし、もう一人を片手で拘束してデス・フィアーを乱射させながら地上へと落ちていく。落ちていく間にシールドエネルギーを削り切り、少女はラファールを地面に叩きつけた。反撃どころか、武器を展開させる隙さえ与えずに荷電粒子砲モードにしたデス・フィアーの引き金を引く。漆黒の砲撃がラファール操縦者の頭部を消し飛ばした。頭部を失った死体をグレネードで吹き飛ばし、少女は視線を最後のラファールへと向ける。

「こ、来ないで！！」

最後のラファールは展開させたマシンガンを滅茶苦茶に乱射させて少女を牽制しようとする。だが、少女は自分に向かって飛んでくる全ての弾丸を回避して二段階瞬間加速（ダブル・イグニッション・ブースト）でラファールの後ろへと回り

込んだ。振り返ろうとしたラファールの腹部を、

「死ねよ」

デス・フィアーの切っ先が貫いた。腹部を貫かれ力なく仰向けに倒れるラファール。死体となったラファールを見下ろしながら、少女はゆっくりと己の双眸を覆っているバイザーを毟り取った。

「あぁ～・・・楽しかった♪」

僅か数分の間に起こった虐殺劇を嘲笑うように青い空。その空を見上げる少女、美少女と呼んでも差し支えの無い少女の瞳は・・・炎のように紅かった。

「『存在しない基地（ノーバディア）』襲撃犯として、夕暮太陽を拘束する」

色々とあるが、それでも当たり前の日常を楽しんでいた夜明達を襲う黒い影。世界は『存在しない基地（ノーバディア）』の襲撃者を太陽だと断定した。

『存在しない基地（ノーバディア）』襲撃者として世界から追われることになった太陽。逃亡を続ける彼女の前に、三人の人物が現れる。

「・・・誰だお前達は？」

「私達はアイン、ツヴァイ、ドライ・・・ＡＤＶＥＮＴ（アドベント）　ＣＨＩＬＤＲＥＮ（チルドレン）最高傑作にして最低最悪の不良品の劣化コピー。つまりあなたのコピーだよ、夕暮太陽（オリジナル）」

自分のコピーだと主張する三人の少女と行動を共にする太陽。

「お前達の目的は何だ？」

「私達は人間を超えた上位種だ。そのことを下等な人間どもに示そ

うと思っている」

夕暮太陽を捕えるため、世界中からＩＳ操縦者が集められた。各国の国家代表は勿論のこと、モンド・グロッソの部門受賞者（ヴァルキリー）、総合優勝者（ブリュンヒルデ）も集められた。初代総合優勝者（ブリュンヒルデ）の千冬、ロシアの国家代表である楯無も例外ではなかった。本格的に太陽を捕まえようとし始めた矢先、一人の男が彼女達の前に立ちはだかる。

「世界中の国家代表だろうが、モンド・グロッソの部門受賞者（ヴァルキリー）だろうが総合優勝者（ブリュンヒルデ）だろうが関係ねぇ。太陽を傷つけようってんなら・・・俺はあんた達を潰す」

たった一人の少女のために、不屈の翼は、月光夜明は世界に喧嘩を売った。

「私は人間だ。お前らの言う上位種でも、化け物でも何でもない」

「それ本気で言ってるのか？　そんな簡単に人を殺せる力を持ってる癖に」

「・・・夕暮太陽（オリジナル）は人間じゃない。それは絶対に変えることが出来ない真実」

「あなたは一度でも思ったことが無いのか？　自分よりも遥かに力が弱い人間を鬱陶しいと思ったことが？　愚鈍で愚かな人間を邪魔だと思ったことは？　人間なんていなくても良いと思ったことは本当に無いのか？」

アイン、ツヴァイ、ドライによって太陽の心は壊されていく。

「何で、何で私は人間じゃなくて化け物なんだ！！！！！！！！！！」

「戻って来い太陽。お前はあんな連中とは違う、お前は人間だ」

親友とも呼べる存在、ラウラに諭すように言われ、太陽は自嘲の笑みを浮かべる。

「・・・じゃあ一つ聞くがなラウラ」

突然、太陽は足を道路に叩きつけた。太陽の足下が吹き飛び、巨大

なクレーターが出来上がる。クレーターの中、太陽は虚ろになった目でラウラ達を見上げる。

「こんなことが出来る奴のどこが人間なんだ?」

クレーターの中に転がるコンクリートの欠片を手に取り、無造作に己の雪のように白い肌へを持つ二の腕と突き立てる。女性陣が息を呑む中、太陽はゆっくりとコンクリート片で己の腕に傷を作っていった。コンクリート片を投げ捨てる太陽、傷口から血が溢れ出すが、傷口も数秒の内に塞がった。

「こんな風になる奴のどこが人間なんだ・・・答えろよ、ラウラ・ボーデヴィッヒ」

答えは返ってこない。

「答えろよ、織斑一夏」

答えは返ってこない。

「答えろよ、篠ノ之箒」

答えは返ってこない。

「答えろよ、セシリア・オルコット」

答えは返ってこない。

「答えろよ、凰鈴音」

答えは返ってこない。

「答えろよ、シャルロット・デュノア」

答えは・・・返ってこない。

「こんな化け物(わたし)のどこが人間だと言うんだ！！！！」

太陽の叫びがラウラ達の心を抉る。

「私は化け物」

「太陽・・・」

ラウラの声は彼女に届かない。

「人の心を持たない殺すための道具」

「太陽・・・」

一夏の声は彼女に届かない。

「殺すことでしか価値を見出せない機械」

「太陽・・・」

箒の声は彼女に届かない。

「化け物と人の心が通じ合うことなど無い」

「太陽さん・・・」

セシリアの声は彼女に届かない。

「あるのは力と力による殺し合いだけ」

「太陽・・・！」

鈴音の声は彼女に届かない。

「今、この瞬間は力こそが全てだ」

「太陽・・・」

シャルの声は彼女に届かない。

「・・・私を超えて見せろ」

人ならざる身体に人の心を持った少女は、心を殺して友に牙を剥く。

「太陽ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

不屈の翼の声は彼女に届くのか？

ＩＦ　もし我が主人公がマジ恋の世界に行ったら（前書き）

話が思いついてるのですが、書けないので番外編。後書きにてアンケート

ＩＦ　もし我が主人公がマジ恋の世界に行ったら

「大和、携帯鳴ってるよ」

「え？　あ、本当だ。サンキューモロ」

友人の師岡卓也に振動する携帯を渡され、直江大和は礼を言いながら携帯を開いて耳に押し付けた。風間ファミリーの憩いの場、秘密基地で思い思いの行動をしていた愉快な仲間達はそれぞれの手を休めて大和を見ている。

「誰からだ・・・岳人？　もしもし」

『大和か！？』

仲間達の視線を感じながら大和は携帯に出た。携帯の向こう側から聞こえてきた想像以上の声量にギョッとする。

「な、何だよ岳人。携帯でそんな叫ぶなよ、鼓膜が破れるかと思っただろ」

『あ、あぁすまねぇ。でも、今俺様の目の前で大変なことが起こってんだよ！』

「大変なことって何だよ？」

注意したのに、声のボリュームを下げようとしない岳人に辟易としながらも、大和は律儀に友の声に耳を傾けた。

『今、俺の目の前ですんごい美人の女の子が踊ってるんだ！！』

「切って良いか？」

耳を傾けるのが心底馬鹿らしくなる今日この頃。通話を切ろうとする大和の耳を岳人の必死な声が揺さ振った。いつも以上に変な友人に疑問を覚え、大和は通話を繋げたまま再び携帯を耳に押し当てる。

「で、それがどうしたんだよ？」

『本当に綺麗な子なんだよ！　下手すりゃ美人さもスタイルもモモ先輩並だぞ！』

「・・・へぇ」

大和の中で僅かに興味が湧いてくる。岳人の言うモモ先輩というのは、今現在大和に好奇の視線を送っている仲間の内の一人で、相当な美少女だ。おまけにスタイルも良いときていて、彼らが在学している川神学園では絶大な人気を誇っている。更に、彼女は文字通り世界最強だ。

『場所は川神駅前！　これを見なかったら一生後悔するぞ！　・・・ってまた踊り始めた！　じゃあな！！』

一方的に切られた事を怒るでもなく、大和は携帯を閉じた。

「舎弟、あのアホは何だって？」

「いや、何か物凄い美少女が川神駅前で踊ってるって」

「それを先に言え！！」

「あ、待ってお姉さまぁ～！！」

聞くなり、川神百代は窓から外に飛び出していった。彼らの秘密基地があるのは廃ビルの高層部分。そこから躊躇いも無く飛び降りる。恐ろしいほどの身体能力、そして行動力だ。百代の義妹、川神一子が健気にも姉の後を追って窓から飛び降りようとしたが、流石に自分では無理だと判断したのかキチンと会談で降りて行った。

「何かよく分からねぇが、俺も二人に続くぜ！！」

楽しそうに部屋から飛び出していったのは風間翔一、風間ファミリーのリーダーである。

「僕達はどうしようか？」

「どうする、大和？」

秘密基地に残された自分以外の仲間、卓也と椎京から話を振られ、大和は数秒思考する。

「・・・俺たちも行ってみるか。岳人の言う姉さん並の美人って言うのも気になるし」

川神駅前では、物凄い人だかりが出来ていた。その数、百人近いだろう。その人だかりの一番前にいた島津岳人は遅れてやってきた大和たちに大きく手を振って呼び寄せた。体格が良くてどこにいるのかすぐに分かる岳人の横には、さっき秘密基地を出て行った百代、一子、翔一が既にいた。

「遅いぞお前ら。危うく一生後悔する羽目になるとこだったぜ」

「何その上からめ・・・」

岳人の口調に少しムッとした京が言葉を失う。それはついさっきやってきた大和と卓也も同じだった。

「・・・」

人だかりの中心、誰もいないその空間に一人の少女が目を閉じ無言で立っていた。シャギーが入ったセミロングの髪、その色は炎のような真紅。現実離れした、整った顔立ち。スラっとした肢体は女性にしては長身、細い肢体には不釣合いな大きさの胸。だがその胸は垂れることなく重力に逆らって突き出している。

「あんな美少女がこの世にいるなんて・・・今すぐにお姫様抱っこして撫で撫でしたい」

「駄目だぜモモ先輩。今からあの子踊るんだから」

手をワシワシと動かす百代を岳人が嗜める。普段こんなことをすれば彼女に殴られること確実なのだが、ここに呼び出された目的を思い出して百代は素直に拳を収める。やがて、紅の髪を持った少女は踊り始めた。

曲が終わると、周囲から爆発のような拍手と歓声が起こった。踊っている最中は目を瞑っていて周囲を見ていなかった美少女はいきなりの拍手と歓声に驚き、自分を囲んでいる人数にギョッとする。少女は顔を赤くしながら一礼し、そのままプレイヤーを担いで何処かへと消えていった。

「あぁ、あの初々しい反応も実に可愛らしい・・・お姫様抱っこしたいなぁ」

欲望丸出しの百代に苦笑いする一同。だが、この時誰も知らなかった。踊っていた美少女と出会うのがすぐだと言うことに。

翌日の朝、何時もどおり七人で登校していると彼らの目の前に人だかりが現れた。何時ものように百代への挑戦者が現れたのかと思ったが、そうでも無いらしい。不審に思い、大和は近くにいる男子生徒に話を聞いてみた。

「何があったの？」

「いや、何か知らないけど凄い美少女が川神学園の制服着て歩いて

るって」

「ほぉ、そいつは耳寄りな情報だな」

レズではないが、女の子大好きな百代は跳躍して人だかりの中心に飛び降りる。そして、

「上玉キタァッーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

歓喜の咆哮で世界を震わせた。彼女の目の前には川神学園の制服（何故か男子のもの）を着た紅髪の美少女、即ち昨日の夜川神駅前で踊っていた美少女がキョトンとした表情を浮かべている。百代は超人的な速さで美少女の手を取り、キリっとした表情を浮かべた。

「私の名前は川神百代、よろしくな」

これだけで大抵の女子は参ってしまう。実際、周囲から羨ましそうなため息が漏れている。だが、百代に手を取られた美少女はと言うと、

「はぁ、どうも」

何とも連れない返事を返して、そのまま学園へと向かおうとした。ここまで連れない返事を返されたのは初めてで一瞬、百代は呆然とするが、すぐに美少女を後ろからお姫様抱っこする。

「昨日の踊り、見てたぞ。いやぁ～、実に美しかった」

「それはどうも。早く学園に行きたいので、そろそろ離してもらえ

るとありがたいのですが」

「もう少しだけ良いだろ？　あぁ～、やっぱり美少女はいいなぁ」

「仏の顔も三度までって諺を知ってますか？」

「知ってるぞぉ。でも、私のような美少女なら仏様も許してくれるだろ」

会話をする気が全く無い。満足そうな笑顔を浮かべる百代の腕の中で、美少女は一回だけため息をつく。そして、

「少なくとも、私は我慢の限界だ」

次の瞬間、百代は顔面を蹴り飛ばされて吹き飛んでいた。何が起こったか分からずに誰もが言葉を失う中、空中で体勢を整えた美少女は再びため息をつきながら着地して歩いていこうとする。だが、すぐに足を止めて面倒くさそうに振り返った。彼女の視線の先では、禍々しいオーラを纏った百代が仁王立ちしている。

「お姫様抱っこしてきたかと思えば敵意をぶつけてくる・・・獣以下だ」

何かを言おうとした美少女の顔面を百代の拳が捉える。周囲に衝撃が走り、見物を決め込んでいた生徒達が吹き飛ぶ。それ程の威力を持った拳を食らったにも関わらず、美少女は痛がる素振りさえ見せずにゆっくりと拳を引いていった。

「消えろ」

再び美少女の拳が百代を吹き飛ばす。百代は空中でくるくる回転しながら着地し、心底楽しそうに笑い始めた。

「ハハ、ハハハハハハハハハハ！！　まだ視界が揺れてるぞ、こんなのは初めてだ！！　私の名は川神百代、お前の名は！？」

「・・・夕暮太陽」

「そうか。では行くぞ、夕暮太陽！！」

「朝っぱらから騒がしいな、遠足ではしゃぎ回る小学生ですかこのやろー」

「へ？」

何の気配も感じなかった背後から聞こえてきた少年の声。少年の声が終わった時には、百代の視界が反転して両腕に激痛が走っていた。投げられた上に両腕の手首、肘、肩の関節が外されたと理解する前に、少年は太陽の前まで歩み寄る。

「いやさ太陽。確かに俺らが転校する川神学園には決闘なんて辺鄙なシステムがあるよ。でもさ、転校初日、それも自己紹介も終わってない登校時から決闘するなんてどうかと思うぜ？」

「知るか。いきなりその女がお姫様抱っこしてきた挙句に敵意をぶつけてきたから、私は相応の反撃をしただけだぞ」

「そうなん？」

銀髪銀眼の少年、月光夜明は大和たちを振り返る。これが彼ら風間

ファミリーと、Ｄａｙｂｒｅａｋｅｒ（デイブレイカー）Ｓｕｎ（サン）と呼ばれた二人、月光夜明と夕暮太陽の出会いだった。

ＩＦ　もし我が主人公がマジ恋の世界に行ったら（後書き）

三百万ＰＶ突破記念！！

楯無「皆さんこんばんわぁ～。ＩＳ学園生徒会長、そして夜明の将来の妻、更識楯無よん。今回は皆に聞きたいことがあるのよ。内容は上に書いたとおり、三百万ＰＶ突破記念を何にするかと言うこと。三つほど案があるから、その中から選んでもらえると嬉しいわ。それじゃ、見てちょうだい」

一つ、『拳で語り合え、魂でぶつかり合え！　ＩＳ学園体育祭』

二つ、『この一球に全てを懸ける！！　ＩＳ学園球技大会』

三つ、『（太陽の）ポロリがあるかもしれないよ?！　ＩＳ学園水上体育祭』

楯無「この内の一つを選んでちょうだい。それじゃねぇ～」

ＩＦ　もし主人公二人が恋姫に行ったら（前書き）

連続ＩＦ話ですみません。

感想で夜明と太陽が出るマジ恋の話は書かないのかとありましたが、確実にありません。やるとすれば、恋姫無双ですね。

ちなみに、二人とも転生してます。某デビルハンターの武器やら腕やらが出てくるのはご愛嬌と言うことで一つ。

ＩＦ　もし主人公二人が恋姫に行ったら

ある日、大陸随一の占い師を自称する謎の人物がこんな言葉を残した。誰もが馬鹿の戯言と記憶していなかった予言を、偶然記していた文献にはこう書かれている。

大陸に暗雲立ち込めし時、三人の御使いが現れ大陸を繁栄に導く。

その者、魔を断つ聖剣を掲げて乱世の夜を明かす。

その者、神の腕と爆炎纏いし魔剣を携え、大陸を照らす。

その者、天の知識で人民を導く。

そう遠くない未来、この予言は現実のものとなる。そんなこと、誰も思いもしなかっただろう。

「今日も晴れたな」

雲ひとつ無く広がる蒼空を見上げ、五歳くらいの少女は自身の体重の数倍はある薪の束を軽々と担ぎながら歩いていた。人とは思えない整った顔立ち、炎のような深紅の髪と瞳。これだけ見れば、少女は美少女で済ませられるだろう。だが、少女は尋常ならざるものをその身に抱えていた。

「これくらいだな」

我が家にたどり着いた少女は、担いでいた薪をどっこらせと家の横に投げ捨てた。さっきまで薪の束を担いでいた左腕には、刺青のような紅の線が縦横無尽に走っている。その左腕のためか、少女は子供とは思えない力を有し、周囲から恐れられていた。少女を恐れない者と言えば彼女の両親と、

「あねうえ！！」

彼女の妹くらいだった。物思いに耽りながら自身の左手に視線を落とす少女の腰に誰かが抱きつく。結構な勢いで抱きつかれたにも拘らず、少女は僅かに体勢を崩しただけで抱きついてきた妹を撫でた。

「ん、どうした星?」

少女に撫でられ、星と呼ばれた少女は気持ち良さそうに目を細める。少女に抱きついた彼女の名は趙雲、字を子竜、真名を星。少女の双子の妹だ。真名と言うのはその人の本質を表す名らしく、自分が認めたものしか呼んではいけない神聖なもの・・・らしい。少女に撫でられながら、星はキラキラと目を輝かせながら少女を見上げた。

「わたしといっしょにあそびましょう、あねうえ!」

何とも可愛らしい妹の要求に、少女は苦笑しながら星を肩車する。

「いいぞ。今日は一緒に熊を狩りに行こう」

「はい!!」

少女の名は趙海、字を我竜、真名を太陽。人智を超越した力以外は、妹思いの良き姉である。

時を同じくして別の場所。銀髪銀眼の少年が蒼空を見上げてボ～ッとしていた。少年の名は孫外、字を我王、真名を夜明という。産まれたばかりの頃に親を賊に殺され、偶々近くを通りかかったどこぞの太守、孫堅に拾われ、養子として育てられたのだ。

「平和だなぁ～・・・」

「夜明ぇ～っ！」

「夜明ぇ～っ！」

「夜明」

「若殿！」

「にいさまぁ～」

「俺の周囲を除いてな・・・」

ため息を吐く夜明の元に次々と美女が集まってくる。夜明の義母であり、江東の虎の異名を持つ孫堅、真名を紅蓮。孫家長女であり、夜明の義姉にあたる孫策、真名を雪蓮。雪蓮の親友周瑜、真名を冥琳。孫家に古くから仕えている猛将黄蓋、真名を祭。夜明の双子の妹として育てられている孫権、真名を蓮華。美女、美少女に囲まれて夜明は引き攣った笑みを浮かべる。

「夜明。今日は私と一緒に遠駆けしに行くわよ」

「母様！　昨日も夜明と一緒にいて、今日もだなんてずるいわよ！　夜明、母様みたいな年増じゃなくて、私と一緒に町へ行きましょ」

紅蓮と雪蓮が火花を散らし合う横では、

「夜明、自軍の十倍以上の兵を持っている軍を相手にした時の作戦について話し合いたいのだが」

「若殿。偶にはわしと一緒に弓の稽古をしては如何か？　手取り足取り教えて差し上げますぞ」

冥琳、祭が目を光らせて迫ってくる。更に追い討ちをかけるように。

「にいさま、きょうはわたしとあそんでください！」

蓮華が腰に抱きついてきた。

「勘弁してくれよ・・・」

夜明が顔を引き攣らせるのも、無理ないかもしれない。

時は流れて十年後。故郷である村を離れて傭兵として生活している太陽と星。立派な美女へと成長した二人は互いの武に磨きをかけていた。星は尊敬する姉に追いつくために、太陽は己が惚れた男に笑われないために。

「相変わらず姉上は強いな。おまけに身体の均整も取れている・・・流石は私の目標！」

愛槍、龍牙を手入れしている星に、太陽はにっと悪戯っぽく笑って

見せた。

「お前も十分強いと思うがな。ま、頑張れや・・・身体の成長は無理だろうけど」

くぅ、と星は悔しそうに胸を押さえる。星も胸が小さいほうではないが、太陽に比べると完全に見劣りした。何時か姉上みたいにボインボインのバインバインに・・・と呪詛のように呟く妹に呆れていると、太陽の左腕を走る紅の筋が光り始めた。左腕が輝き始めたのを見て、二人は表情を険しくする。

「近くで争いが起こってるな・・・行くぞ、星」

「了解」

太陽は自身の武器である大剣、紅薔薇を背に担いで走り始めた。風よりも速く走る姉を、星は顔色一つ変えずに追っていく。幼少の頃から人外の姉と遊んでいた努力の賜物である。幾らもしない内に、二人は村を襲っている数百の賊を発見した。

「「・・・」」

無言でアイコンタクトを交わし、二手に分かれる。星が走っていくのを確認し、太陽は右手で背中から紅薔薇を引き抜いて柄を捻った。途端、周囲に爆音が響いて紅薔薇の刀身に炎が奔る。走る勢いそのままに、太陽は紅薔薇を回転させながら賊の真っ只中へと突っ込んだ。一回、二回、三回と連続で回転しながら爆炎を纏う紅薔薇で数十人の賊を切り裂く。突然現れた、火を吐き出す剣を持った女の登場に驚く賊の横から、龍牙を構えた星が襲い掛かる。

「だ、誰だお前ら!?」

大将の問いに、二人はこう答えた。

「通りすがりの美少女その一、爆炎の申し子、趙我竜と」

「通りすがりの美少女その二、常山の登り竜、趙子竜!!」

「「お前達をぶちのめした女の名だ、覚えておけ!!」」

「夜明、最近賊が出没してるらしいから、ちょろ～っと行ってぶっ飛ばしてきて頂戴」

「ちょろ～っとって・・・そりゃ構わないがよ、賊の数は？」

「ざっと五千くらいかしら？」

「義理とはいえ、息子を殺すつもりかあんたは？」

とんでもない無茶振りをしてくる母、紅蓮に夜明はジトッとした視線を送る。息子からの視線に対し、紅蓮は憎たらしささえ覚える爽やかな笑顔で親指を立てた。

「夜明ならそれくらいの数、楽勝でしょ？　ちゃんとやってきたら、気持ちいいことしてあげるわよ」

「息子に何するつもりだ馬鹿親」

ベキ。一瞬で紅蓮との距離を詰めた夜明は何の躊躇いも無く母の親指をへし折る。その場に立ち会わされていた雪蓮、冥琳、祭は夜明の早業に感心のため息を漏らした。

「凄いわね夜明。私でも動きが見えなかったわ」

「雪蓮でもか・・・やはり、夜明は孫呉の将来に必要な人材だな」

「わしとしては、何の躊躇いも無く堅殿の指をへし折った若殿に戦慄を覚えるわい・・・」

親指を折られてのた打ち回る紅蓮の首筋に手刀を叩きつけ、夜明は紅蓮を黙らせる。そして深々とため息を吐き、魔を断ち切る刀、闇魔刀を腰に差して出て行った。

「それじゃ行ってくるわ・・・死なないように祈っててくれ」

妹と自由気ままな傭兵暮らしをしている太陽に対し、夜明は母やその他大勢に振り回される生活を送っているようだ。

ＩＦ　もし主人公二人が恋姫に行ったら（後書き）

破壊屋、猟師の襲撃

襲撃を受けてから三日後、アークエンジェルはラインアーク本部へと向かっていた。本当なら、まだリアに滞在していたはずなのだが、血相を変えた太陽に急かされてリアを出てきたのだ。リアを離れてから三日後の本日、キタサキ・ジャンクションと呼ばれる砂漠の中にある高速道路跡地に停泊していた。ある人と会うためである。その人物と合流したことで、一同は何故太陽が血相を変えていたかを知ることになる。

「どうも～、お久しぶり～。愛してるよ流星～」

「初めまして～。お嬢様の従者の布仏本望で～す」

「お初にお目にかかります。同じくお嬢様の従者、布仏空です」

二十代目更識楯無と、従者である布仏本望とその姉布仏空がアークエンジェルメインブリッジにやって来た。姉のほうはピシッとしていて、妹のほうはのほほんとした空気を放っている。クルー達はカラードランク０のいきなりの来訪とあって警戒心を露にしている。特に黄昏と朔夜は尋常じゃない殺意を楯無に送っていた。

（なぁ、布仏ってことは・・・）

（あの姉妹の子孫だろうな）

微妙に緊迫した空気が流れてる中、夜明達は暢気にそんなことを話していた。そんな中、冬華が一同を代表して前へと歩み出る。一度咳払いして、真っ直ぐに楯無を見据えた。

「更識家の当主殿が何の用だ？　一応、君と我々は敵対関係にあるのだが」

「いや、私企業連の味方になったつもりなんてこれっぽっちも無いから」

顔の前で手を振る楯無に、なら何しに来たんだとその場にいる全員が突っ込みを入れる。本題に入るのか、布仏姉が一歩前に歩み出て

きた。その手には菓子折りと思しき舗装された箱がある。

「先日はお嬢様がすいみませんでした。これはお詫びの品です」

「あ、いえいえ、わざわざどうも」

先日とは、楯無がリリウムと一緒になって決闘を吹っ掛けてきたあの日のことだろう。空から菓子折りを受け取り、冬華は律儀に頭を下げた。

「いい加減話を進めてくれないか？　わざわざ、詫びの品を渡すためだけに来たわけでは無いだろ？」

太陽に言われ、楯無は本題に入ることにした。その表情は今までの物とは違って真剣そのものだったので、黄昏と朔夜でさえ楯無の話に耳を傾けようとしている。

「それじゃ一つ聞きたいんだけどアークエンジェル艦長さん。最近ニュースとか見た？」

「？　・・・いや、ここ数日少しばたばたしていたからな。ニュースなど見ている暇は無かった」

その少しばたばたすることになった原因は太陽なのだが、今は関係ないので置いておく。冬華の返事を聞いて、楯無は苦い表情を作りながら本望を振り返った。

「やっぱりそうか・・・本望」

「了解で～す」

間延びした返事を楯無に返しながら、本望は間延びした返事からは想像もつかない機敏な動きである物の準備を始めた。いきなりの行動に皆が訳も分からず見守る中、本望は空間投影ディスプレイの大画面バージョンを用意した。本望が組み立てた空間投影装置を姉の空がチェックし、楯無にＯＫのサインを送る。

「これは一日前のニュースでの映像。落ち着いて見て頂戴ね」

装置からジジッ、と音が鳴って空間に大型のディスプレイが映し出された。しばらくの間真っ黒な映像だけが出ていたが、唐突にディスプレイが多種多様な色で彩られ、音声が流れてくる。かなりの大きさの音量がいきなり流れてきたので夜明達は驚いたが、ディスプレイの中に出てきた人物を見てそれ以上に驚きの表情を浮かべた。

「ラウ・ル・クルーゼ・・・」

ディスプレイの中で演説台の上に立つ、報道陣に囲まれた金髪に仮面で顔を隠した男の登場に夜明は表情を険しくする。それは過去から来た者達も同様だった。

「え？　曾爺ちゃん、クルーゼの事を知ってるの？」

「知ってるさ。何せ、あいつは俺のことを殺しかけて、記憶を無くす原因を作ってくれた野郎だからな」

忌々しそうに夜明は事の顛末を話す。夜明から話を聞いて、流星は顔を青ざめさせた。

「クルーゼの奴、まさか過去に干渉するなんて・・・それは俺達が

言えたことではないけど」

「二人とも、少し黙ってろ。クルーゼの話が始まる」

太陽の言うとおり、ディスプレイの中でクルーゼが何やら声高に話し始めた。全員が息を殺してディスプレイに視線を集中させる中、クルーゼの演説が始まる。

『ここに集まった報道者の諸君！　もう知っているかもしれないが、先日、永世中立国家であるオーガの港町、リアでＩＳによる戦闘が行われた。幸いに死者は一人も出なかったが、重傷者、及び町の被害は計り知れない。何故この様なことが起こってしまったのか？それは企業連とラインアークの間に起こったこの戦争で、ラインアークが形振り構わずに勝利を得ようとしたからだ！』

一瞬の静寂の後、全員がはぁっ！？　と声を上げた。並大抵のことでは揺るがない冬華、黄昏さえも驚愕を露にし、夜明も顔を引き攣らせている。唯一人、太陽だけが予想通りとでも言いたげな表情を浮かべてディスプレイの中のクルーゼを睨んでいた。全員の驚きが薄れる暇も無くクルーゼの話は進んでいく。

『企業連とラインアーク。この二つの勢力の間で起こった戦争にオーガは関係なかった。それにも関わらず、ラインアークはオーガを攻撃した！　私の手元に証拠となる物がある！』

「あれま」

夜明が間の抜けた声を出すと、ディスプレイの中でクルーゼが三枚の写真を拡大させたものを広げた。一枚目は有澤と撃ち合う流星の写真、二枚目はジュリアスと闘っているラウラの写真、三枚目は真

改、ネオニダスと互角に渡り合っている夜明の写真。

『これらはリアを襲ったラインアークのリンクス達の写真だ。目的などは一切不明だが、幸いにも偶々リアに居合わせた傭兵部隊『ＯＲＣＡ旅団』とカラードランク１６の有澤隆文によって被害は最小限に食い止められた』

「何が偶々だ。全て貴様の掌の上だろうが・・・」

忌々しそうに太陽は囁く。耳聡く太陽の囁きを捉えた夜明は太陽に視線を向ける。

「おいおい。まさかとは思うが、この展開を予想してたなんて言わないよな？」

「ある程度の予想がついていたよ。私の予想が間違っていなければ、次に出てくるのは・・・バラバラになったＴＦだな」

肩を竦める太陽。彼女の目の前で、ディスプレイ内に予想通りの写真が映し出された。見るも無残に破壊されたＴＦの残骸が映し出され、その内の一枚が拡大されてあるマークを示す。

『それだけではない！　ラインアークは企業連から奪取したＴＦをも用いてリアを襲撃しようとした！』

拡大された写真には、ラインアークのマークである交差する白と蒼の翼、黒と紅の剣が写っていた。アークエンジェルのクルー達にどよめきが走る。

『ラインアークによってコントロールされていた全てのＴＦはカラ

ードランク1のオッツタルヴァが破壊した。だが、彼女は不意打ちを食らい撃破された！』

「どちらかと言うと、不意打ちを食らったのは私なんだがな・・・」

『思い出して欲しい！　あの時の惨劇を！　このまま企業連とラインアークの戦争が続けば、再び世界はあの時と同じ悲しみを味わうだろう。荒廃した地は更なる悲しみで焼かれ、涙と悲鳴は新たなる争いの狼煙となる！　私、ラウ・ル・クルーゼは全ての企業を代表して宣言しよう。少しでも早く争いを終息させ、もう二度とあの時の悲劇を起こさないと！！　ご清聴感謝する、では』

そこで映像は途切れていた。映像が終わっても誰も喋らない。そんな中、深々とため息を吐く音が響いた。ため息の主、夜明は組んだ両手を頭の後ろに持って行きながら苦笑いを浮かべる。

「何で報道陣の皆々様はクルーゼの話に疑問を抱かないのかね？オーガと敵対関係になったって、ラインアークには何の得も無いのによ」

「恐らく、王小龍が裏で動いてるんだろうよ。えげつない事してくれるな・・・」

やれやれ、と太陽は肩を竦めて見せた。物の見事に嵌められたと言うのに、何と言うか・・・二人とも軽すぎる。夜明は頭を?きながら楯無に視線を向けた。

「で、お前さんはどうして俺達のとこに来たんだ?」

「クルーゼと王小龍のやり方に納得できなかったんだよね。だから、

貴方達の味方をしに来た」

飄々と楯無が言ってのけたその時、警告アラートがアークエンジェル内に響いた。この警告アラートは敵からの砲撃を警告するもの。

「総員、衝撃に備えろ！！」

冬華の声に反応できたのは数人で、それ以外のクルーは碌に反応も出来なかった。刹那、巨人に真横からハンマーで殴られたような衝撃が夜明達を襲う。夜明達は洗濯機に放り込まれた洗濯物のように揉みくちゃになった。

「ぐっ・・・被害は！？」

「す、少し待ってください！　・・・右舷に被弾、火災が発生してます！　このままだとエンジンに被害が」

「消火活動を急がせろ！　ＩＳ展開じゅん「次弾来ます！　三十秒後、右舷に着弾予想！！」アークエンジェル急速浮上！！」

「間に合いません！」

「総員、再び衝撃に備えろ！！」

今度は全員がすぐ近くのものに掴まる。誰もが衝撃に備える中、動く人影が一つ。

「冬華さん、先に謝っとく、すまん！！」

叫ぶように謝りながら、夜明はメインブリッジを飛び出した。止め

る暇も無く、廊下に飛び出した夜明はレイジングウィングを展開させてスタードライブの砲口を壁へと向ける。そして躊躇いも無く壁に荷電粒子砲を撃ち込んでぶち破った。

「右舷だから・・・あっちか！」

外へと飛び出した夜明を、強風に煽られた砂塵が襲う。彼の視界に病的な白さを持つ砂漠、その砂漠の中に忘れ去られたように残っている高速道路だった建造物。最悪の視界で、夜明は確かに捉えた。こっちに向けて肩の砲口を緑色に輝かせる四脚、緑色の装甲を持つＩＳを。夜明がＩＳを視認した瞬間、緑の閃光が放たれた。視界の中で、蹂躙という言葉を体現したようなレーザーが彼に迫る。避ければアークエンジェルに致命的な被害が及び、防げば己の腕が吹っ飛ぶ。ならば、取るべき道は一つだけ。

「真っ向から撃ち破る・・・」

スターライト・ブレイザー、ロック解除。夜明の腹部装甲が蒼い輝きを放ち始める。緑の閃光が夜明を飲み込もうとした刹那、蒼き光の束が閃光を消し飛ばした。放たれたスターライト・ブレイザーは進行方向にある物全てを消し飛ばし、緑のＩＳに迫る。緑のＩＳが横に瞬間加速（イグニッション・ブースト）してスターライト・ブレイザーを回避した時、既に夜明は砂漠の上を月光の翼（ムーンライトウィング）を広げながら飛翔し、緑のＩＳへと肉薄していた。緑のＩＳが再び肩のレーザーキャノン砲をチャージし始める。だが、レーザーキャノン砲のチャージが終わるよりも、夜明が必殺の一撃を入れるほうが一瞬ほど速い。

「もらっ」

『夜明っ！！　もう一体いるぞ！！』

夜明が緑のＩＳに一撃を打ち込むのよりも早く、太陽の悲鳴が混じった声が彼の鼓膜を揺さ振った。振り返ると、太陽を背にして飛ぶこげ茶色のＩＳが右肩のミサイルポッドから一発だけミサイルを発射した。弧を描くように降下してくるミサイルが夜明を破壊しようと加速する。夜明は迷うことなくウィングスターを連結、視界の中で豆粒ほどにまで大きくなったミサイルに狙いを定めた。ウィングスターの銃口から放たれた翠のレーザーは正確にミサイルを撃ち抜く。距離はおよそ百メートル、かなりの距離がある。

にも拘らず、ミサイルの爆発は夜明を飲み込んだ。

「・・・堕ちたか」

半径百メートル以上の爆発に飲み込まれた夜明。既にミサイルの爆発範囲外にまで離れていた緑のＩＳ『ビッグバレル』を纏った男、ブッパ・ズ・ガンは小さく呟いた。

「・・・そう言う訳でもないか」

町一つくらいなら消し飛ばせそうな威力の爆発の中から生還した夜明の姿を確認し、ブッパは己の考えを否定する。と言っても、爆発の中から飛び出してきた夜明の姿は既にボロボロで、とても戦闘など続けられるものではなかった。だと言うのに、ブッパは一切の油断や傲慢さえ抱かずに最高の威力を誇る肩のキャノン砲をチャージし始める。

自分がやっているのは戦闘ではない、狩りだ。少なくとも、猟師を自称する彼にとって戦闘とは狩りと同義だ。己の領域に足を踏み入れた獲物（てき）を絶対を以って撃ち貫く、それだけ。そして、彼の目の前で獲物（てき）は未だに息をしている。ならば、狩らねばなるまい。

「己が撃つと決めた獲物の命は己の手で刈り取る。それが猟師の命に対する礼儀だ」

誰に聞かせるわけでもなく、ブッパは囁く。視界の中で自分と共同戦線を張ったリンクス、ＰＱが駆るＩＳ『鎧土竜』がさっきとは別のミサイルを垂直にばら撒き始めたのを確認して、レーザーキャノン砲を放った。夜明に迫る尋常を超えた威力のレーザー、雨のよう

に降り注ぐミサイル群。

狩った。

ブッパは確信した。だが、その確信は覆される。

『Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ』

無機質なマシンボイスが響いた瞬間、紅の閃光が夜明を覆った。紅の閃光はレーザー、ミサイル群を瞬く間に切り裂き、ブッパへと肉薄する。

「深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）・・・っ！！」

『３・・・２・・・１・・・Ｔｉｍｅ　ｏｕｔ』

研ぎ澄まされた一撃がブッパを襲った。攻撃が入る一瞬でブッパは防御をしたが、それでも七割がたのシールドエネルギーを持っていかれている。ブッパにアロンダイトの一撃を入れた紅の閃光、太陽は展開させていた胸部装甲を閉じ、パージさせていた漆黒の装甲を再び纏ってブッパの前から姿を消した。

「おぉ・・・凄い、凄いぞぉぉぉっ！！」

ＩＳ『鎧士竜』を纏ったＰＱは歓喜に打ち震えながら咆哮を上げる。その視線の先には、ボロボロになった夜明に肩を貸す太陽の姿があった。炎のような深紅の髪と瞳、そして漆黒の装甲。その姿、正しく深紅（スカーレット）の死神（デスサイズ）。

「あぁあぁ、最高（ホラーショー）だ！　あの深紅（スカーレット）の死神（デスサイズ）と戦えるなんてェェェェ！　もう、もう、もう我慢できない！　お強い女（デボチカ）を蹂躙し尽くす、これ以上の大暴力（アルトラ）があるものかッ！　――ミサイル・カーニバルだ、派手に行きましょうぉお！！」

己が言ったとおり、太陽に向けてミサイルの雨を降らせようとしたその時、ブッパから通信が入った。

『退くぞＰＱ。深紅（スカーレット）の死神（デスサイズ）の一撃でシールドエネルギーの半分以上が持っていかれた』

一方的に告げ、ブッパは通信を切る。一瞬、ＰＱは物凄い形相でブッパがいるであろう方向を睨みつけたが、すぐに表情を戻して太陽に視線を向けて深々とため息を吐いた。

「はぁぁぁぁぁぁ・・・仕方が無いですね。深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）を蹂躙し尽くすのは後でですね」

ＰＱが放った超広範囲ミサイルで戦闘不能になった夜明を担いで戻

ってきた太陽を交え、アークエンジェルではリンクス、ブッパ・ズ・ガンとＰＱ撃破のためのブリーフィングが行われていた。二人のリンクスの説明をしているのは、世界の裏に精通している楯無である。ちなみに、夜明はシャルに傷の手当をしてもらっている。

「まず、ＯＲＣＡランク９、ＰＱの説明から始める。彼は元々、リンクスではなくノーマルＩＳの搭乗者だったんだけど、過去に起こったアンデス戦線で名を上げてリンクスになったんだ。敵を文字通り破壊することで性的快感を覚える・・・かなりアレなリンクスだね」

そう言えば、太陽を見て尋常じゃなく息を荒げていたことを思い出して女性陣は顔を顰める。

「そのＰＱってのは私が相手しよう」

太陽の申し出に、全員が同意の意を示す。正直な話、幾ら戦場とは言えあんな危ない男と戦いたくない。それが太陽以外の女子の心境だった。

「次にＯＲＣＡランク１０、ブッパ・ズ・ガン。猟師を自称するリンクスで、搭乗しているＩＳ『ビックバレル』の肩にあるレーザーキャノンは一撃必殺の威力を有してるよ。後、狙撃の達人みたい」

「「「「「狙撃・・・」」」」」

狙撃と言う言葉に反応し、過去からやってきた者達は蒼き雫をその身に纏う、麗しの狙撃手へと視線を向けた。

破壊屋、猟師の襲撃（後書き）

前半、色々と訳の分からないところがあるでしょうが、すみません。

後、ＰＱの台詞はオブライエン様が感想に書かれた物を丸々使用させていただきました。オブライエン様に謝辞と感謝を。

蒼き雫の覚悟　黄昏の黒斧の叫び

キタサキ・ジャンクション。病的なまでの白さを持った砂漠の真っ只中にある高速道路跡地に、蒼き雫が落ちた。

（ＢＴレーザー軌道予測バイザー異常なし。『流星の破壊者（メテオデストロイヤー）』、リフレクタービット十基異常なし）

「セシリア・オルコット、目標を狙い撃ちますわ」

視神経が痛くなるほどに景色を鮮明にするバイザーで双眸を隠し、セシリアは長大にして遠大なビームライフル『メテオデストロイヤー』を構える。一撃を放つたびにエネルギーパックのリロードを必要とするそれは、明らかにＩＳの本来の領域である高速戦闘を考えたものではない。

蒼き雫（ブルー・ティアーズ）星を撃ち貫く者（スターシューター）。バルディッシュトワイライトの強化パッケージ、高速近接戦闘に特化した？？ソードとは対をなす物だ。まず、装甲が本来のブルー・ティアーズよりも二倍は厚い。装甲を厚くすることで機動力を失ったが、その代わりに絶大な威力を誇る射撃、そして通常のＩＳを遥かに上回る防御力を実現している。彼女の周囲を旋回している十基の自律兵器はメテオデストロイヤーの射撃のみを反射するリフレクタービットで、またシールドビットの役割も持っていた。

（負けるはずありませんわ・・・私とこの『星を撃ち貫く者（スターシューター）』なら！）

メテオデストロイヤーにエネルギーパックをリロードさせ、セシリ

アは五メートル以上はあるレーザーライフルを両手で構える。星(スター)を撃ち貫く者(シューター)の装甲が厚いのは、メテオデストロイヤー射撃時の衝撃に耐えるためでもあった。バイザーに標的、ブッパ・ズ・ガンが映る。セシリアに気づく様子も、彼女が射撃体勢に入った事を感じる様子も無い。セシリアとブッパの距離は凡そ五百、メテオデストロイヤーから放たれたレーザーは零コンマ数秒でブッパを撃ち抜くだろう。

「終わりですわ・・・」

引き金が引かれ、超々高密度レーザーが放たれた。始まりさえ告げていなかった闘いが、終息の時を迎える・・・。

「深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）・・・あぁぁぁぁ！！　何と言う幸運か！　あの伝説の！　最強の女性と闘えるなんてぇっ！！　今すぐ、今すぐ貴方を破壊したいぃぃぃ！！！！」

「・・・耳障りな声だな」

視線の先で絶叫するＰＱへの不快感を隠そうともせず、太陽は両肩からアロンダイトを引き抜く。砂漠の上を舐めるように移動していた太陽はスラスターを噴かして一気に飛翔、架台に支えられた高速道路の上に立つＰＱにアロンダイトを振り下ろした。高速道路ごと一刀両断された架台が音を上げて崩れ落ちる。だが、その中にＰＱの姿は無い。瓦礫と共に落下しながら、太陽は空を仰ぐように振り返ってアロンダイトを一閃させる。太陽を頭上から襲おうとしていた垂直ミサイルに、刃風で吹き飛ばされた大小様々な瓦礫が直撃して爆発させた。

「・・・そこか」

爆発と瓦礫の破片で視界が最悪になる中、太陽は瞬間加速（イグニッション・ブースト）しながらアロンダイトを構える。粉々になった瓦礫の間を縫うように弾丸とレーザーが襲い掛かってきた。左のアロンダイトを薙ぐように振って弾丸を切り裂き、返す刀でレーザーを切る。更に右のアロンダイトを投擲。主に投げられたアロンダイトは空気を切り裂き、爆煙の外にいたＰＱを襲った。

「おぉっ！？」

直撃寸前でＰＱはアロンダイトを回避する。思わず、視線でアロンダイトを追っていると、瞬間加速（イグニッション・ブースト）で爆煙の中から飛び出してきた太陽が視界の中に現れて飛んでいこうとするアロンダイトの柄を掴み、連続の瞬間加速（イグニッション・ブースト）でＰＱへと突っ込んだ。

「素晴らしい、素晴らしい、素晴らしいぃぃぃ！！　これ程蹂躙し甲斐のある女（デボチカ）は初めてだ！！　一刻も早く貴方をこの手で破壊したいぃっ！！」

胸を切られながらも、ＰＱは激しく笑う。反応するのもアホらしくなり、太陽は無言で距離を取ろうとするＰＱに迫る。胸部装甲は切ったが、手応えは浅い。もう一撃を入れて鎧土竜のシールドエネルギーを削りたいところだが、ＰＱの両手に握られているスナイパーライフルとレーザーライフルが彼女の接近を許さない。

「ご覧なさい深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）！　これが私の大暴力（アルトラ）だ！！」」

左肩のミサイルポッドから数十発の垂直ミサイルが連続して射出される。弧を描きながら迫るミサイル。太陽は視線を呉れることさえせず、両手のアロンダイトを合体させた。更に両腕、腰、両膝、両足に装備されていたソードビット全てが太陽の身体から離れ、合体したアロンダイトへと連結していく。ソードビットの連結が終わり、太陽は巨大なビームブレードの柄を両手で握った。ソードビットとの合体を終えたアロンダイト。名を『アロンダイトＢ（バスター）』と言う。

「鬱陶しいんだよ！！！」

吼えながら、彼女はアロンダイトＢを無造作に振り抜く。それだけ、それだけで太陽の頭上を覆うとしていたミサイルの雨が消し飛んだ。

ミサイルを破壊した太陽が迫る。だが、ＰＱは笑っていた。

「言ったはずだぞ深紅（スカーレット）の死神（デスサイズ）。これが私の大暴力（アルトラ）だと！！」

今まで無視してきたＰＱの叫び。それに異様な寒気を覚え、太陽は頭上を見上げる。視界に映ったのは五発の大型ミサイル。それは夜明を堕とした、絶対的な蹂躙を内包した超広範囲を吹き飛ばす代物。しかも、それが五個だ。

「何・・・だと・・・」

「その表情だ！　その表情が見たかった！！」

全てのエネルギーを防御へと回したＰＱの笑いが響く。粘着質で耳障りな笑いは、驚愕に染まった太陽ごと爆発に飲み込まれた。

結論から言って、勝負はついていなかった・・・いや、ある意味では、その時点で済んでいたのかもしれない。メテオデストロイヤーの銃口から放たれた蒼いエネルギーの奔流。その威力はレイジングウィング最強の武装であるスターライト・ブレイザーも凌駕するだろう。それだけの威力を持った砲撃が、コンマ数秒の速さでブッパに迫る。

「見えてるぞ、小娘」

ブッパの肩にあるレーザーキャノンが緑色の炎を吐き出した。威力はメテオデストロイヤーの砲撃よりも遥かに劣る。だが、ブッパはたったの一撃で己に迫る蒼い閃光をずらした。軌道をずらされ、超々高密度レーザーはブッパの真横を通り過ぎる。

「大層な威力だ・・・それでも、当たらなければ意味はない」

真横を通り過ぎただけでシールドエネルギーを削る砲撃。ブッパはシールドエネルギーが削られるのも意に介さず、ブッパは左肩のスナイパーキャノンを砲撃が飛んできた方向へと向けた。

「きゃあっ！？」

ＩＳが警告を示していた時、既にブッパが放った弾丸はセシリアを

直撃していた。装甲を抉る弾丸がもたらす痛みに歯を食い縛りながら耐え、セシリアはメテオデストロイヤーからエネルギーパックを排出、新たにリロードする。ブッパが放つ二発目をリフレクタービットで防ぎ、防御に使用した以外のリフレクタービットを並び替えながら、セシリアはメテオデストロイヤーを空へと向けた。彼女がつけているバイザーはリフレクタービットがどんな軌道でメテオデストロイヤーの砲撃を反射するかを表すもので、彼女にはどのようにしてレーザーが反射して、標的に直撃するかが映っていた。

「これで！！」

二度、セシリアの視界が蒼に染まる。レーザーは空に浮かぶリフレクタービットに次々と反射し、真上からブッパを襲った。だが、着弾点にブッパの姿は無い。

「どこに・・・っ！？」

背中に衝撃が襲い掛かる。セシリアはリロードしながら振り返り、メテオデストロイヤーをブッパに向けた。セシリアがトリガーに指をかけた刹那、チャージを終えていたレーザーキャノンがセシリアを吹き飛ばした。身体が砂漠に叩きつけられ、宙を舞うメテオデストロイヤーがすぐ近くの場所に突き刺さる。

「・・・負けましたわ」

自然、そんなことを呟いていた。思えば、数ヶ月前に似たようなことを彼女は経験している。絶対に負けるはずがないと思い、圧倒的実力差で捻じ伏せられた。傲慢ゆえに負けた。今回も同じ。星を撃ち貫く者（シューター）（スター）を装備したブルー・ティアーズなら、絶対に負けないと信じて疑わなかった。何の根拠もないのに、自分よりも遥かに強い相

手に負けるはずがないと。

「私は、あの時から何も変わっていませんのね・・・」

己へと向けられた嘲笑と一緒に涙が頬を伝う。己のプライドが原因で負けた戦い。あの時は導きを与えてもらえた。今回与えられるのは・・・引導である。涙で歪んだ蒼い空を視界に映していることさえ苦痛になり、セシリアは目を閉じた。その時、

「何諦めてんだよセシリー」

呆れたような声が響く。驚いて目を開くと、上下逆さまになった夜明がセシリアの顔を覗き込んでいた。彼の上にあるはずの蒼空は無く、セシリアは上下左右全てが真っ白な空間へと放り込まれていた。

「こ、ここは・・・いたっ!?」

慌てて起き上がったセシリアに夜明のデコピンが炸裂する。額を押さえて蹲るセシリアの周りを歩き始める夜明。

「まだ戦いは続いているんだぞ。それなのに負けを認めて諦めるってどういう了見だよ?」

「そ、そうは言いますけどね夜明さん・・・闘いに臨む際、傲慢を持ち込む私に勝ち目など、まして闘う権利な「お馬鹿」っつぅ~」

今度はチョップが炸裂する。頭を押さえながら呻くセシリアに、夜明は呆れとも苦笑いとも取れる表情を浮かべていた。

「傲慢を闘いに持ち込む?　良いじゃないの。行き過ぎた傲慢は己

を破滅へと追い込む害悪となる。だが、それは時として己を貫き通すための武器にもなり得る・・・それに俺がセシリーと初めて闘ったときに言ったこと、忘れたのか？」

「そんな訳ありませんわ」

俺には貫きたい信念がある。

俺には背きたくない誓いがある。

俺には護りたい世界がある。

そいつらがある限り、俺の翼は不屈だ。

忘れるわけがない。この言葉があったからこそ、セシリアは変わった、変われた。そして夜明に惚れた。

「セシリーにだってあるだろ、そう言うの？」

自分が自分であるための、大切なものが。夜明の問いに、セシリアは少しだけ考えて小さく、だがしっかりと頷く。セシリアが頷いたのを見て、夜明は満足そうに笑う。

「それじゃ、行ってこい」

セシリアの目の前から夜明が消え、白い空間も無くなった。再び彼女の視界に映った蒼空。澄んだ空が涙で滲むことはない。セシリアはメテオデストロイヤーを砂から引き抜き、己の双眸を隠すバイザーをむしり取った。

「・・・まだ闘うか。これ程の実力差があると言うのに」

視界からも、レーダーからも消えたブッパが問いかけてくる。

「えぇ、そうでしょうね。私と貴方とでは、埋め難いほどの実力差がありますわ」

それだけではない。狙撃手としての経験も、戦場に臨む覚悟も、ブッパはセシリアを圧倒的に上回っている。だと言うのに、セシリアは笑顔を浮かべた。

「貴方には狙撃手としての経験があります。そして覚悟も、私とは比べ物にならないものをお持ちでしょう・・・ですが、それらは貴方が私に勝利する要因にはなり得ませんわ」

優雅に、だが力強く彼女はメテオデストロイヤーを構える。

「私には辿り着きたい場所がある」

自分を惚れさせた男の隣りへと辿り着きたい。

「私には揺らぐことない想いがある」

自分が惚れた男へと向ける揺らぐことない想い。

「私には譲れぬ誇りがある」

自分を惚れさせた男と共にいられる誇り。

「この三つがある限り、私が放つ砲撃は絶対を以って標的を撃ち抜

きますわ・・・覚えておきなさい、誇り高き猟師よ。我が名はセシリア・オルコット。貴方に敗北を刻む者の名ですわ」

目を閉じ、セシリアはメテオデストロイヤーを空へと向ける。彼女は蒼き雫（ブルー・ティアーズ）。戦場に落ちる美しき雫。戦場に波紋が広がる。広がる、広がる、広がる・・・

「見えましたわ」

引き金が引かれた。

「クフハハハハハハハ！！　深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）を破壊したぞ！！」

五つの超巨大爆発に飲み込まれた太陽はピクリとも動かない。砂漠にうつ伏せに倒れたままだ。彼女のすぐ横にはアロンダイトＢが転がっている。

「さぁ起きてください深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）！！　まだ私は貴方の全てを破壊してはいない！　次は目の前で貴方の大切なものを破壊して心を破壊する！！」

目を血走らせるＰＱは気づかない。気を失ったままの太陽の指が微かに動いたことを。ふと、ＰＱは気づく。弱々しい、だがこの世の全てを切り裂くような風が己を撫でていることに。

「・・・哀れだな」

ゆっくりと、弱々しくもしっかりと、アロンダイトＢを支えにしながらも太陽は己の足で立ち上がった。圧縮空気が抜ける音、バルディッシュトワイライトの展開装甲が太陽の身体から浮かび上がる。

「哀れだな」

彼女はもう一度言う。

『Ｃａｓｔ　ｏｆｆ』

「お前は何も分かっちゃいない」

装甲が吹き飛び、胸部装甲が展開してコアが露出される。紅の装甲を纏い、コアと瞳を炎を凝縮させたように燃やしながら、太陽はＰＱに走り始めた。

『Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ』

「大切じゃないものなんて無い！！」

加速と同時にＰＱを真上へと蹴り上げ、己自身も跳躍する。アロンダイトＢを回転させ、勢い良く振り下ろす。ガコッ、と音がしてアロンダイトＢがＰＱを囲むように展開した。その数、太陽自身の手に握られているアロンダイトを含めて十三。紅の閃光となり、太陽はＰＱを斬る、武器を持ち替え再び斬る。

斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る！！

すり抜け様の連続斬撃。殆ど、全ての装甲を切り飛ばされたＰＱの視界に、アロンダイトＢを構えた太陽が飛び込んでくる。

『３・・・２・・・１・・・』

「これがバルディッシュトワイライト」

『Ｔｉｍｅ　ｏｕｔ』

「？？ソードだ！！！！」

最後の一撃がＰＱを切り裂いた。

蒼き雫の覚悟　黄昏の黒斧の叫び（後書き）

決着は次回に持ち越しです。

それぞれの決着

キタサキ・ジャンクション。今、ここで行われていた二つの決闘に終止符が打たれようとしていた。

「・・・ふん。これは、負けを認めぬわけにはいかないか」

軽く鼻を鳴らし、ブッパはがっくりと身体を傾けた。四本の脚が彼の身体を支えているが、いつ倒れてもおかしくはない。セシリアの砲撃で、彼は右腕を失った。それと同時に虎の子であるレーザーキャノンも破壊されている。辛うじて左手のハンドミサイルと左肩のスナイパーキャノンが残っているが、手負いの状態でセシリアに勝つのは無理だろう。

「猟師が狩るべき相手に後れを取り、あまつさえ武器を破壊された・・・これ以上の敗北はないな」

蹲るブッパの横に影が降り立つ。セシリアは周囲にリフレクタービットを従え、長大なメテオデストロイヤーの銃身を肩に預けながらブッパを見つめていた。

最後の一撃。セシリアは砲撃を空へと放ち、リフレクタービットでレーザーを合計十回跳弾させた。その一撃を、ブッパはしっかりと回避していた、していた筈なのだ。だと言うのにブッパは右腕を吹き飛ばされ、武器を破壊されている。何故か？　答えは簡単、セシリアが一瞬でエネルギーパックをリロード、刹那の間にもう一発の砲撃を撃って跳弾させたからだ。結果、ブッパは二発目を完全には避けきれず、右腕を失って膝をついている。

「戦艦でも一撃で撃ち落せる威力を持った砲撃を連続で撃つとはな・・・その年で大した腕だ」

「お褒めに預かり光栄ですわ」

ブッパの賛美に、セシリアは素直に頭を下げる。数秒、互いに沈黙が流れた。不意に猟師は笑う。

「どうした、早く撃て」

本来、セシリアが真っ先に取らなければいけない行動を、猟師は示唆していた。知らず、セシリアの身体が強張る。完全に命の主導権が握られているブッパの方が余程落ち着いて見えた。

「いいえ、貴方には一緒に来てもらいますわ。今は少しでも情報が欲しいのですから・・・」

再び、猟師は笑う。

「揺らぐな、蒼き狙撃手。私はお前に狩られた。ならば、己自身の手で引導を呉れてやるのが猟師の仕事だ」

「生憎、私は猟師ではありませんので」

刺々しいセシリアの声。彼女の声音には拒否の色が強く浮かんでいる。ふと、戦場で笑い声が起こった。笑いながら、ブッパは四脚を震わせながら立ち上がろうとする。

「・・・駄目だな。あの時、覚悟を述べながら引き金を引いたお前はもっと美しかったぞ」

「っ！！」

ブッパが動く。左肩のスナイパーキャノンが起動、砲身が展開され砲口がセシリアをロックする。反射でセシリアもメテオデストロイヤーを構えた。反射でトリガーを引く寸前、二人の間にリフレクタービットが割ってはいる。結局、セシリアは寸前で引き金を引かず、ブッパの攻撃はリフレクタービットで防がれた。最後の一発を吐き出し、ブッパは忌々しそうに舌打ちしながら力を失う。

「猟師としての矜持さえも貫けないか・・・だが、最後にこれだけの相手（えもの）と闘えたんだ。悪くはない人生だったな」

「最後だなんて・・・私のような小娘に負けた程度で生きることを諦めるのですか！？」

思わず、セシリアは語調を荒くする。夏休み、夜明が何故強いか、強くあろうとするかを聞かされた彼女は目の前で命を諦めようとするブッパに炎のような怒りを覚えていた。目の前の男は、自分の視界の中に映っている命、即ち己の命を諦めようとしている。それは視界に映った全ての人を救おうとする夜明への侮辱以外の何物でもなかった。セシリアの怒りを受け、ブッパは全てを成し遂げたような笑顔を浮かべる。

「悪いな。私は・・・男とは己の矜持一つで命を捨てる生き物なんだ」

ビックバレルのコアが輝き始めた。ブルー・ティアーズがセシリアに警告を送る。

「高エネルギー反応・・・まさか自爆!?　お待ちなさい!!」

セシリアの声を掻き消すように眩い閃光が戦場を走り、振動が砂漠を揺さ振った。立ち上がる砂の柱。

「・・・何故簡単に命を諦めるのですか!!」

リフレクタービットに守られ、セシリアには傷一つない。砂塵が降り注ぐ中、セシリアは掌から血を流し、蒼い空を見上げ叫んだ。

「・・・あっちも終わったらしいな」

セシリアとブッパが交戦していたポイントから数百メートル離れた場所。モードイクシードの限界時間を向かえ、再び漆黒の装甲を纏った太陽は砂柱が立ち上がるのを見えながら、微かな爆風で髪を揺らしていた。彼女から少し離れた所には装甲、右腕、左脚を切り飛ばされたＰＱが横たわっている。傷口から流れ出す血は砂漠に吸い込まれる。それは砂漠がＰＱの命を吸い取っているようにも見えた。辛うじてＰＱが生きているのを確認し、太陽は口を開く。

「降伏するか、しないのか決めろ。するなら助けてやるし、しないのなら勝手に野垂れ死ね」

太陽の問いにＰＱは無言。無言は拒絶と判断し、太陽は飛翔する。最後にちらっとＰＱに視線を送り、セシリアを回収してアークエンジェルに戻ろうとしたその時、

「甘い・・・」

ＰＱの声が聞こえた。振り返り、再び視線をＰＱに注ぐ太陽。彼女の視線の先で、ＰＱは血反吐を吐きながら立ち上がる。

「甘い、甘いぞ深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）」

スラスターを噴かし、ＰＱは太陽の後を追って空を翔る。

「甘い、甘い甘いそれは甘いッ！　私は破壊するぞ！　爪でも歯でも人は破壊できるのだ！　例え貴女が私を見逃したとしても、私はその先で敵を破壊してくれる！　壊して壊して、他のどいつで

もない、この私が最後に生き残るのだッ！！」

地獄を生き抜いた男の咆哮が太陽を襲う。破壊とは、何事にも勝る自己の保証。戦場を誰よりも醜く這い蹲りながら、戦場において命など虫けら以下だと知った男の答え。

「今の私でも・・・今の鎧士竜でも・・・貴方を破壊できるぅぅぅ！！！！！」

鎧士竜のコアが、ビックバレル同様輝き始める。自爆の前触れだ。傷口から血を噴出しながら、血反吐を吐き出しながら、目を血走らせながら突っ込んでくるＰＱを見て、彼女は悟る。

ーこの男は、殺さなければ止まらない、止められないー

この場を生きながらえ、戦場に立てばこの男は数え切れない命を文字通り『破壊』していくだろう。だから、彼女は選択する。

「己の生き様を貫くか・・・良いだろう」

目の前の男を殺すことを。

「お前の生き様で私を破壊して見せろ」

アロンダイトＢを突き出すように構え、太陽は迫るＰＱをひたと見据える。砂塵を巻き上げながら飛ぶＰＱ。五体全てを支配して『破壊』を貫こうとする太陽。狙うは爆発部分、即ち鎧士竜のコア。眼前に迫るＰＱ。太陽は輝きを放つコアへ真っ直ぐとアロンダイトＢを突き出す。その姿に迷いなどない。アロンダイトＢが正確に鎧士竜のコアを、ＰＱの胸を貫いた。確実にＰＱ絶命させる角度で、ア

ロンダイトBはPQを穿つ。

「・・・何故、破壊できない？　私如きの命では、貴方には届かないと言うのか？」

アロンダイトBに貫かれ、PQは力なく左腕、右脚をぶら下げる。アロンダイトBを引き抜きながら、太陽は重力に従って落下していくPQの左腕を掴んで持ち上げた。

「確かにお前なら私を破壊できたかも知れないな・・・でも、お前だろうと神だろうと絶対に破壊できない物を人間は持っている」

「・・・それは何ですか？　例え神でさえ破壊できなくとも、私は破壊してみせるぅ！！」

目をギラつかせるPQに、太陽は答えない。

「自分で考えろ。私には教えてやる義理も情けもない」

PQを空高く放り投げる。ISによって強化された、生身の人間を凌駕する太陽の身体能力がPQをあっという間に豆粒程度の大きさにしか見えない高度にまで打ち上げた。落下してくるPQを見ながら、太陽はアロンダイトBの柄を両手で握る。

「最後まで己の生き様を貫こうとしてお前に敬意を表して、？？ソード最強の攻撃で消してやる・・・モードトランザム発動」

『Mode（モード） Transam（トランザム） Standby OK. Are you ready?』

バルディッシュトワイライトの装甲がスライド展開、紅の粒子を放ち始めた。同時にアロンダイトBが輝きを帯び始める。刀身に紅の筋が浮かび上がり、紅の筋は数秒とせずにアロンダイトBを覆った。紅に輝くアロンダイトBを振り上げる。

「約束された勝利の剣（エクスカリバー）ァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！」

放たれるは光の奔流。紅の光は空を斬り裂き、PQを呑み込みながら蒼空を紅色に染め上げた。

「・・・」

輝きが収束していくアロンダイトBを下ろして、太陽は蒼空を仰ぐ。勿論、雲はおろかPQの形すらない。沈黙が戦場を駆け抜け、微風が太陽を撫でていく。

「And the rest is silence（そして残るは沈黙のみ）・・・か」

意味深に呟き、今度こそ太陽はセシリアを回収しに行った。

嵐の前のブリーフィング

「・・・よし」

企業連の本拠地とも呼ばれている大都市『スティーフィア』。企業連に所属している企業の重役達や、カラードトップランカー達が集う場所だ。上位トップランカー達が集まる、俗に『円卓』と呼ばれる場所もここにある。スティーフィアのリンクス専用治療施設、その一室に一人の女性が己の左手を開いては閉じてを繰り返していた。

ウィン・D・ファンション。カラードランク3のリンクスであり、先日の『イクリス』での戦闘で太陽に左腕に風穴を開けられ、今日まで治療施設に入れられていたのだ。強打した後頭部も痛まないし、今日治療が終わった左腕の傷も完全に塞がっている。普通に動かしても、左手に違和感はない。

（後は、今までの感覚を取り戻すだけか）

「おぉ～、もう治ったのか。凄ぇ回復力だなおい」

いきなり声をかけられ、ウィン・Dはギョッとする。普通に見舞いの人が来たのならば、別に驚くことはない。では、何故彼女はビックリしたのか。それは見舞いに来た人の声が病室のドアからではなく、窓から聞こえてきたからだ。おっかなびっくり振り返ると、窓に両腕を預けているロイ・ザーランドの姿がある。

「・・・」

「お、俺が悪かったウィンディー！　だから俺の顔を足で押して落

とそうとするのは止めてくれ！！」

下らない攻防が続くこと数分、ウィン・Ｄはため息を吐きながらロイを病室に入れた。

「お前は・・・何で態々窓から入ってきた？　ここは一応地上十五階だぞ」

「ウィンディーへの愛が成せることだばがぁっ！！」

「気色の悪いことを言うな。私に百合の気は無い」

ロイの顔面にめり込ませた拳を引き抜き、ウィン・Ｄはため息を吐きながらベットに腰掛ける。呻きながら、床の上をのた打ち回っていたロイも起き上がってベットの横にある椅子に腰を下ろした。

「いでで・・・いきなり顔面にグーパンチは無いだろウィンディー」

「黙れ、さっさと用件を言え」

余りにも辛辣な物言いにロイはよよよと泣き崩れるが、ウィン・Ｄが再び拳を引いたのを見て、慌てて姿勢を正す。

「そんなんだからお前は彼氏の一人も出来ないんだよ」

「悪いが、今のところはそんな事は考えてない」

「そうかよ・・・二、三日前、キタサキ・ジャンクションでＯＲＣＡランカーのブッパ・ズ・ガンとＰＱが撃墜された」

「アークエンジェルか？」

視線を鋭くさせながら訊ねるウィン・Ｄに頷いてみせるロイ。そうか、とウィン・Ｄは天井を見上げる。脳裏に浮かぶのは、死神の名を冠する深紅の少女。

「彼女が？」

「ＰＱを殺ったのは死神のお嬢ちゃんらしいな。ブッパ・ズ・ガンは別の奴に負けて自爆したらしい」

「こんな僅かな期間でＯＲＣＡ旅団のメンバーが三人も失われたか・・・クルーゼは何かしらの行動を取っているのか？」

「いんや、黙祷を捧げてただけさ。腹黒いあいつにしちゃぁ結構殊勝そうだったな・・・仮面で顔は見えなかったがな。そうそう。今回の一件で、企業連もやっと連中を危険視し始めたみたいだぞ」

それもそうだろう。既に、アークエンジェルはラインアーク地球本部のすぐ近くにまで来ている。寧ろ、危険視するのが遅すぎるくらいだ・・・と言うのが上位ランカー達の意見だったりする。ごそごそと胸元を探り、ロイは端末を取り出す。訝しげに眉を顰めるウィン・Ｄだったが、端末の画面に映し出された物を見て剣呑な表情を作った。

「ロイ、これは」

「そ。インテリオルが開発した最新型ＡＦ『ソルディオス・オービット』だ」

「これは極秘裏に開発が進んでいたものだぞ。何でお前がこれの情報を持っているんだ？」

「ま、そこは傭兵の情報網ってことで納得してくれ」

ロイはウィン・Ｄの質問を飄々と受け流す。そんなんで納得できるか！　と思わず怒鳴りそうになるウィン・Ｄだが、話の続きが気になるので怒声を無理矢理飲み下した。

「・・・それで、ソルディオス・オービットがどうしたんだ？」

「企業連のお偉いさん方は早速こいつを戦場に送り込むらしい。相手は」

「アークエンジェルか」

それだけじゃないぜ、とロイは端末を操作して別の画面を表示する。

「ＯＲＣＡランク５の真改と、カラードランク１０のハリもソルディオス・オービットと一緒に出る。連中には厳しい闘いになりそうだな」

《更識楯無、夕暮太陽のブリーフィング》

『はいはい～、そいじゃ敵さんの説明を始めちゃいますよ～。敵の数は三。リンクスが二人と、最新型ＡＦが一機。アークエンジェル十二時の方向、旧ピースシティに展開してる。リンクスはＯＲＣＡランク５の真改とカラードランク１０のハリ、ＡＦはインテリオル社製ソルディオス・オービット。

先ずリンクスの説明から。ＯＲＣＡランク５真改と専用ＩＳ『スプリットムーン』はとにかく動きが速い。オマケにどういう経緯で手に入れたのか知らないけど、零落白夜を発動できる雪片まで持ってるし、厄介この上ない・・・ごめん、何か愚痴っぽくなっちゃったね。気がついたらぶった斬られてあの世逝き・・・なんて事も十分有り得るから気をつけて。

次にカラードランク１０ハリと専用ＩＳ『クラースナヤ』。ハリは少し特殊なリンクスで、特異体質のせいで戦闘可能時間が極端に短

いんだ。でも、その短い戦闘時間で作戦を遂行させる実力は本物だから油断は禁物ね。クラースナヤの武装はライフルとレーザーブレードしか無いけど、それでも十分な脅威になる。真改同様、動きが速いから気をつけて。

最後はＡＦ『ソルディオス・オービット』。これはＧＡ社製のＡＦ『ランドクラブ』って言う冴えないＡｆを改造したもの。本体その物はそこまで・・・って言うか全く脅威では無いんだけど、本体についてる四基の自律浮遊型砲、ソルディオス砲が物凄く厄介。これ一基が一体のＩＳ並みの耐久力を持ってる。それに動きもかなり速いし、砲撃の威力も半端じゃない。

以上、更識楯無さんからの説明でした。作戦その物は太陽ちゃんが話してくれるから』

『さて、作戦の説明だ。夜明か私が突っ込んで敵を破壊するってのが一番確実なんだが、生憎先日の戦闘でレイジングウィングとバルディッシュトワイライトは結構なダメージを負ってしまった。それはブルー・ティアーズも同様だ。だから、今回の作戦に参加するのは一夏、箒、鈴の三人だ。他の連中は万が一の場合に備え、アークエンジェルの防衛についてもらう。

一夏、お前には真改の相手をしてもらう。零落白夜に対抗できるのは零落白夜だけだからな。はっきり言う。殺し合いを経験している真改とお前じゃ実力が違いすぎる。だから、まともな勝負はしないで高機動で相手をかき回せ。白式のパッケージ『白き閃光（ホワイト・グリント）』なら真改も追いつけないはずだ。常に最大出力の零落白夜を発動できるようにして、一撃で決めろ。

鈴、お前はハリの相手だ。相手は戦闘できる時間が限られているみ

たいだから、出来るだけ戦闘を長引かせろ。お前がハリに勝てないとは言わないが、分の悪い賭けはするべきじゃない。強化パッケージの龍牙もまだ使いこなせてはいないだろ。

ソルディオス・オービットを潰すのはお前の役目だ、箒。ソルディオス砲がＩＳ並みの耐久力を持ってる以上、長丁場は避けられない。絢爛舞踏でエネルギーを回復させながら闘ってくれ。それに、紅椿の強化パッケージ『百花繚乱』は全てにおいて安定した性能を発揮できるからな。お前が一番ソルディオス・オービットを破壊できる可能性がある。最後に一つ、死ぬな、絶対に』

闘う理由（前書き）

筈の戦闘と決着は次回です。今回はまたオブライエン様の言葉を使わせていただきました。

後、後書きの台詞ですが、余り気にしないで下さい。ちょっと、太陽が無限の剣製をやるかもしれないだけですから。

闘う理由

旧ピースシティ。夕陽に照らされ砂漠にかつて建造物だったものが影を伸ばす中、三つの影が飛翔していた。一つは黒、一つは紅、一つは白。鈴音、箒、一夏の順だ。

「「「・・・」」」

三者三様に無言。一夏と箒は強化パッケージを装備しての戦闘は初めてなので、緊張感を感じずにはいられないようだ。鈴音は己のＩＳの稼動具合を確かめている。

『そろそろ敵とエンカウントするぞ』

オペレーターをしている太陽の声がオープン・チャネルで聞こえたその時、三人に向かって白銀の閃光が突っ込んできた。

「・・・斬る」

「ぐっ！」

三人へと突っ込んできた真改は先行する二人には目も呉れず、一夏に淡月を振り下ろす。辛うじて雪片で真改の一撃を防いだが一夏はそのまま押され、振り返った二人の視界から外れていった。

「一夏！！」

すぐに取って返して一夏の援護へと向かおうとする箒の肩を鈴音が掴む。

「何やってんのよ！　あんたの相手は真改じゃなくてソルディオス・オービットでしょ！」

「しかし一夏が！」

渋る箒の頬を鈴音の平手が捉えた。それだけじゃなく、頭突きまでぶちかました。引っ叩かれた頬と痛打された額を押さえる箒に鈴音の叱咤が飛ぶ。

「この馬鹿！　恋人であるあんたがあいつを信じないでどうすんのよ！？」

「っ！！　・・・すまない、落ち着いた」

一夏を信じ、二人は己が相手にするべき敵へと向かう。数十秒飛び続けていると、見えた。夕陽に照らされ影を作り出す巨大な兵器を。十二本の脚で立つソルディオス・オービット。

「あれがソルディオス・オービット、見た目は地味ね・・・あれか」

小さく感想を呟く鈴音の視界に、ソルディオス・オービットの足下から飛び立つ一体のＩＳが映る。赤い装甲を持つ『クラースナヤ』とその搭乗者ハリ。加速していった鈴音の後ろ姿に視線を送り、箒も自身が相手取る敵へと向かっていく。

「・・・行くぞ紅椿！！」

腰から雨月、空裂を引き抜き、両脚と背中の展開装甲を開放させながら翔る。紅椿の強化パッケージ『百花繚乱』最大の武装とも呼ぶ

べき桜花繚乱乃羽衣を風に激しくはためかせながら箒は翔け上がり、両手に握る二刀を振り上げた。

「おらぁっ！！」

「・・・遅い」

一夏が全力で振り抜いた雪片を真改は左手だけで弾き飛ばし、淡月

で一夏の首を薙いだ。確実に首を吹き飛ばすであろう一撃をスウェーバックで回避し、後ろへと飛ぶ。背部にある二基の大型ウィングスラスター、両肩、両腰に新たにつけられた大型スラスターの推力を受けて一夏は一瞬で真改から距離を取った。白式の強化パッケージ『白き閃光（ホワイト・グリント）』の真髄は増設された大型スラスターがもたらす機動力にある。真改が無機質な表情に微かな驚愕を浮かべていると、一夏は雪片を振り上げながら全てのスラスターを全力で噴かして突っ込んだ。

「はあああっ！！」

「・・・！」

大上段からの一撃を受け流す真改。受け流された勢いそのままに、一夏は真改の後ろへと飛んで砲撃モードにした雪羅から荷電粒子砲を連射する。一撃目は完全に真改に直撃したが、二発目からは全て切り裂かれた。体勢を立て直す一夏に真改が突進、淡月を振り下ろした。クローモードにした雪羅で淡月を受け止め、雪片を構える。雪羅を通して確かな手応えを感じると同時、一夏の頭に衝撃が走る。胴を払う寸前に真改のハイキックが当たったのだ。

「「・・・」」

吹き飛び、距離が離れる両者。油断無く構えながら、一夏は腰に差してある五つのエネルギーパックを雪片の柄の中に入れた。雪片零型。性能は白式本来の装備である雪片弐型と大差ないが、零型はシールドエネルギーではなく、柄に挿入したエネルギーパックを消費することで零落白夜を発動できる。しかも、消費したエネルギーパックに比例して零落白夜の威力は上がる。更に、『白き閃光（ホワイト・グリント）』はそれぞれのスラスターや左腕の雪羅にもエネルギーパックを使用して

いるので、白式の悪い特徴だった燃費の悪さも解消されている。

「零落白夜・・・」

雪片零型の鍔から音を立ててエネルギーパックが排出された。雪片の刀身が輝きを帯びて零落白夜発動を示す。一夏が零落白夜を発動させたのを見て、真改も零落白夜を解放する。一瞬の静寂、最強の斬撃がぶつかり合った。刀身を輝かせる雪片と淡月が激しい音を上げながら火花を散らす。鍔迫り合いを演じながら、一夏は更にエネルギーパックを消費させた。

「っ！！」

雪片の輝きが目も眩むほどになり、真改が押され始めた。じりじりと、だが確実に一夏は真改を押していく。そして真改を吹き飛ばした。吹き飛んでいく真改に瞬間加速（イグニッション・ブースト）してクローモードに移行させた雪羅で追撃をかける。エネルギークローで真改を捕まえ、真改を掴んだまま雪羅を砲撃モードにする。荷電粒子砲の連射が真改の胸部装甲を叩き破った。真改の身体を離すと、胸部装甲から露出したスプリットムーンのコアが目に入る。

「あれさえ壊せれば！」

再び零落白夜を発動させ、一夏は落下していく真改へと降下していった。

「これで、終わりだぁ！！」

勝利の確信と共に光り輝く雪片を突き出す。切っ先がコアを貫こうとした刹那、鍔元に衝撃が走る。コアを破壊される寸前、真改はサ

マーソルトキックで一夏の右手を蹴り飛ばして雪片を飛ばし、淡月を構えた。

「・・・斬る！！」

閃光が奔る。全く反応が出来なかった一夏の身体から鮮血が噴き出した。胴体の装甲ごと身体を切り裂かれ、左腰と右肩の大型スラスターまでもが破壊されている。

「っ！？　・・・おらぁっ！！」

雪羅のエネルギークローと淡月がぶつかり合う。全力の鍔迫り合いが始まった。

青竜刀『嵐』が斬撃を放つ。その名の通り嵐のように放たれる斬撃を、ハリは右へ左へ高速移動しながらかわしていった。

「ちょこまかちょこまか・・・当たりなさいよ!!」

「それは嫌です」

鈴音の叫びに律儀な答えを返しながら、ハリは回避を続ける。放たれるライフルの弾丸を避け、鈴音は両肩、背中にある伸縮型ストライククロー『龍牙』を計四つ放った。内三つは避けたが、最後の一つがハリの右脚を捉える。

「うおっりやあああああ!!!!」

捕まえたハリを振り子の要領で砂漠に叩きつける。大きな砂柱が立ち上がった。砂煙が舞う中、鈴音は嵐を連結させ、砂煙の中心目掛け全力で投げた。既に龍牙から逃れていたハリは寸前で飛んできた嵐を回避する。砂漠へと突き刺さった嵐を引き抜きながら、ハリを視線で追っていた鈴音は四方に龍牙を伸ばす。

「何を・・・そう言うことか!!」

慌てて回避行動に移るハリ。さっきまでハリがいた所を鈴音に放り投げられた廃墟が通り過ぎる。

「もう一丁ぉぉ！！」

周囲に散らばっている廃墟に龍牙をアンカーのように突き立て、力任せにぶん投げる。恐ろしい力技だが、威力は絶大だ。もっとも、廃墟が重過ぎて当てるのはかなり難しいだろうが。現に、ハリは鈴音が投げた廃墟を避けている。再び二戸の廃墟が飛んできた。上昇して廃墟を回避したハリの目に、鈴音が時間差で投げたもう二戸の廃墟が映る。

「これは避けられませんね・・・」

言うなり、両手に握っていたライフルを投げ捨て、レーザーブレードを展開させて廃墟を真っ二つに断ち切った。

「そこぉっ！！」

「っ！！？？」

真っ二つになった廃墟の中から鈴音が飛び出してくる。虚を突かれ、ハリはレーザーブレードを交差させて嵐を防ぐのが精一杯だった。鍔迫り合いで動きが止まったハリに龍牙が襲い掛かる。クローを尖らせ、鈴音は龍牙の乱打をハリに叩き込んだ。飛んでいくハリの四肢を龍牙で掴み、

「まだまだぁ！！」

連結させた嵐をぶつけ、龍牙のクロー部分を開いて衝撃砲『崩龍』を連射する。嵐、衝撃砲の連射を受け、砂漠に叩きつけられるハリ。再び砂漠の中に砂柱が立ち上がった。

「やった・・・！！」

軽く肩で息をする鈴音に襲い掛かるレーザーブレードの斬撃。嵐で防ごうとするが、容易く弾き飛ばされてしまう。砂柱から飛び出してきたハリの背部装備が展開された。荷電粒子砲と大型グレネード。どちらも、お世辞にも高機動戦闘に向いているとは言えない。

（そんなの装備で闘ってたの！？）

爆炎と衝撃が鈴音を襲い、砂漠へと堕ちていった。

「形勢逆転ですね」

嵐を支えに立ち上がろうとする鈴音の前にハリが降り立つ。頭から血を流す鈴音に攻撃を仕掛けようとはせず、興味深そうに鈴音が立ち上がる様子を見ていた。

「・・・あによ？」

「いえ、少し気になることがありまして・・・貴方は何のために闘っているんですか？」

「はい？」

ハリの言ってることが分からず、鈴音は戸惑いの表情を浮かべて首を傾げる。既に夜へと変わり始めた空を見上げ、ハリは再び彼女に尋ねた。

「貴方達には闘う理由が無いはずだ。無理矢理過去から連れてこられ、闘いを強いられている・・・なのに、何故闘っていられるんで

すか？」

空を見上げたまま、ハリは語り続ける。

「僕は空を望む者です。空の先へ、宇宙へ、唯行ってみたい。そんな子供っぽい夢の為に命を賭けて戦っています。・・・貴方に問います。貴方は何の為に戦うのですか？」

どこまでも純粋な、自分で言ったとおり子供のような夢のために闘っているハリ。真っ直ぐな瞳を向けられ、鈴音は多少居心地が悪そうにしながら立ち上がった。

「そんな事聞いてどうするつもりよあんた・・・。まぁ、確かに最初のほうはいきなり未来とかに連れてこられて、訳も分からず闘ってくれって言われてふざけんなって思ったわよ・・・でも」

くるくると嵐を回しながら、鈴音はハリを見る。その瞳には、ハリとはまた別の覚悟が映し出されていた。

「夜明が・・・惚れた男が命懸けてんのよ」

少なくとも、私が命を懸けて闘う理由はそれだけで十分。そう締めくくり、鈴音は嵐を構える。

「お喋りが過ぎたわね・・・始めましょ」

互いの想いを懸け、二人の強者は闘いを再開する。

闘う理由（後書き）

もし貴方が翼を与えてくれるなら、私は貴方のために飛び立とう
例え、この身が地に堕ちようとも

もし貴方が光を与えてくれるなら、私は貴方のために輝こう
例え、この輝きが届かぬ絶望に包まれていようとも

もし貴方が誇りを与えてくれるなら、私は貴方のために立ち向かおう
例え、この身に千の武具が突き立てられようとも

もし貴方が私に力を与えてくれるなら、私は貴方のために刃を振るおう
例え、この世界が全て敵に回るのだとしても

もし貴方が私を愛してくれるのなら、私は貴方のために全てを捧げよう
例え、全てに見捨てられたとしても

貴方は私の全て　だから私は貴方のために輝こう
そして剣になろう

貴方を護るために

貴方と共に在るために
貴方を愛するために
私は剣になろう
我が愛しき人に向けられる悪意へ、斬撃の贈り物を

蠢くは古き王の名を冠する男

「これがソルディオス・オービットか・・・」

箒は自分の周囲を旋回する四つの大型浮遊自律兵器、ソルディオス砲四基にそれぞれ視線を走らせる。大きさは民家一軒分はあろうか。それが砲口部分を輝かせながら、ＩＳ程ではないにしろ高機動で動いているのだ。それなり以上の脅威である。四基のソルディオス砲砲口部分の輝きが一際強くなり、四つの光の束が箒に向けて放たれた。

「紅椿！！」

己の半身の名を呼ぶ。箒の身体を覆う桜花繚乱乃羽衣（おうかりょうらんのはごろも）に桜吹雪の模様が光りを放ちながら浮かび上がる。羽衣の裾を掴み、身体を包む。箒を囲むように放たれた砲撃は耐射撃コーティングが施されたマント、羽衣を貫くことなく四散した。

「・・・流石太陽、良い仕事をする」

どこか呆れたように呟きながら羽衣を払い、箒は再び視線を周囲に向ける。既にソルディオス砲は動き始めていた。次の砲撃が撃たれる前に箒は一番近くにあるソルディオス砲へと飛び、左手に握る空裂で斬りかかった。甲高い音を上げてソルディオス砲の表面を空裂の刀身が奔る。少し遅れ、空裂から放たれた帯状の攻性エネルギーがソルディオス砲を押した。直撃だが、目立ったダメージは与えていない。

「広範囲を攻撃する空裂ではダメージにならないか・・・ならば紅

揚羽！！」

四方から放たれた砲撃を回避し、箒は羽衣の前を開く。左右の腰にそれぞれ三本ずつマウントされていた小型の自律兵器が放たれ、エネルギー刃を展開させながら一基のソルディオス砲へと飛んでいった。六基の紅揚羽の内三基がスラスター部分に突き刺さり、残りの三基が閉じようとしていた砲口部分を縫いとめ開いたままの状態にする。

「はぁっ！！」

瞬間加速（イグニッション・ブースト）した箒が突き出す空裂がソルディオス砲を貫通した。時間差で刀身から発生した鏃状の攻性エネルギーが追い打ちをかける。内側から膨張し、爆ぜて落ちるソルディオス砲。背後から熱源反応を感知し、振り返りざま右手の雨月を突き出す。雨月の周囲に発生した幾つもの球状エネルギーが射出され、ソルディオス砲の砲撃を相殺した。左右から挟みこむように放たれた砲撃を空裂の攻性エネルギーで叩き切り、両肩に装備されている拡散ビーム砲『紅蓮』の銃口を脇の下から覗かせるように羽衣の中から外へ向ける。

「堕ちろぉ！！」

紅蓮の銃口が輝き、紅色の砲撃が噴き出した。二発の砲撃は途中で数十発に拡散し、紅の流星群となってソルディオス砲を貫き爆散させる。紅蓮を羽衣の中へと戻しながら箒は紅椿のステータスを確認する。短時間の間に怒涛の如く攻撃を続けていたため、紅椿のエネルギーは四分の一程度にまで減っていた。

「残りがこれだけ・・・いや、絢爛舞踏を発動できれば気にすることでもないか・・・私ならやれる！」

箒の声に応えるように、紅椿の展開装甲部分から金色の粒子が、微かだが確かに溢れ始めた。

「せあぁぁぁ！！！」

瞬間加速（イグニッション・ブースト）で激増させた威力を込め、一夏は雪片を振り下ろす。真改は一夏の振り下ろしを難なく防いだが、威力までは殺しきれずに後退を余儀なくされた。すぐに一夏は爆発的な加速力で追撃をかけよ

うとするが、真改は圧倒的な剣術で一夏を押し返す。さっきから、こんな感じで一進一退の攻防が続いていた。

（くそっ！　動きは俺のほうが速い。でも、剣の腕じゃあっちが圧倒的に上だ。どうにかして動きを止められれば・・・）

各部スラスターに内蔵されているエネルギーパックは残り半分を切っている。全速力で闘わなければ数十分闘えるだろうが、一瞬でも速度を緩めれば確実に真改が振るう淡月の錆になる。砲撃モードにした雪羅から荷電粒子砲を放った。もっとも、真改の動きが速すぎて砲撃は牽制程度の意味しかないが。

（考えろ、何か突破口があるはずだ！　考えろ、考えろ・・・）

真改の斬撃を瞬間加速（イグニッション・ブースト）で避けながら一夏は考える。相手もかなりの深手を負っているが、このまま戦闘が続けば地力の差で負けるだろう。

（瞬間加速（イグニッション・ブースト）からの雪片じゃ止めをさせない。かと言ってクローじゃ捉えられないし、荷電粒子砲は確実に避けられ・・・待てよ？）

ここで一夏の頭にある考えが浮かんだ。当たり前だが、荷電粒子砲は一直線に飛んでいく。弾速は普通の武装に比べれば速いほうだろう。真改はその荷電粒子砲を確実に、紙一重でかわす。では、もしその荷電粒子砲の範囲が広がったら？

「（試す価値は十二分にある！）・・・おおおおっっ！！！」

渾身の力で雪片を叩きつけ、真改を吹き飛ばす。吹き飛ぶ真改を追おうとはせず、上へと飛翔しながら雪羅に挿入されているエネルギ

ーパックを全て消費した。真改が追いかけてきたのを視認し、雪羅を頭上で構える。

「持ってくれ、雪羅！！」

「っ！！」

全力で雪羅を振り下ろす。輝きを集束させていた砲口の光が一際強くなり、拡散させた荷電粒子砲を半球状に放った。広範囲に拡がった荷電粒子砲は威力こそ無いが、回避行動を取ろうとしていた真改を確実に捉えた。真改の動きが一瞬止まる。一夏にはその一瞬で十分だった。限界まで加速した一夏の一撃が真改を直撃する。惜しむらくは、雪片零型のエネルギーパックを全て消費し、零落白夜を発動できなかったこと。

「・・・ぐぅっ・・・」

一夏渾身の一撃をモロに叩き込まれ、真改は砂漠を二、三回バウンドしながら転がっていく。淡月を砂漠に突き立て、勢いを殺しながら一夏に視線を向ける。淡月を構え、すぐに構えを解いた。

「・・・退く」

後ろへと跳躍しながら飛び上がり、一夏に一瞥を投げつけながら真改は飛んでいった。小さくなっていく真改を追おうとはせず、一夏はその場に膝をつく。

「はぁ、はぁ、どうにか勝てたか・・・いや、相手が退いてくれただけであって、勝ったとは言わないか・・・強くならないと」

瞳に決意を秘め、一夏は立ち上がった。

「うっ・・・時間ですか」

戦闘中、突然ハリの動きが遅くなった。鈴音は首を傾げるが、ブリーフィング時に楯無と太陽が言っていたこと思い出して合点がいった表情を浮かべる。ハリは特異体質の持ち主、故に戦闘可能時間が極端に短いと。

「粘った甲斐があったってもんね・・・このまま捕獲しよ」

ハリを捕獲しようと鈴音が動いたその時、一夏との戦闘から離脱してきた真改がハリの横に降り立った。

「真改さん？」

「・・・時間だ、退くぞ」

「そうですか・・・すみません」

「・・・気にするな。あのまま行けば私も危うかった」

ハリに肩を貸し、真改は鈴音に淡月の切っ先を向ける。鋭く輝く切っ先を向けられ、鈴音は嵐を肩に預けながら思考する。数秒間沈黙が続き、鈴音はため息をつきながら嵐を下ろす。

「・・・行っていいわよ。こっちも満身創痍だし、このまま闘っても流石に勝てる気がしない」

真改は露骨に警戒していたが、鈴音にこれ以上の戦闘の意思がないと分かるや、ハリに肩を貸したまま飛んでいった。すぐに小さくなっていく二人の後ろ姿を見送りながら、鈴音は飛んで仲間達の下へと向かう。

「さって、一夏は大丈夫だったみたいね。箒は・・・大丈夫でしょ」

鈴音の予想通り、箒は全てのソルディオス砲とソルディオス・オービット本体を破壊していた。合流する際、一夏と箒の熱烈なキスシーンを鈴音が見てしまったのは完全な予断である。

「そうか、ソルディオス・オービットは破壊され、真改もハリも撤退を余儀なくされた、か」

「我々は少々、不屈の翼と深紅の死神以外の面子を甘く見ていたようだな」

薄暗い室内、クルーゼとＯＲＣＡ旅団最初の五人が一人、メルツェルは揃ってため息を吐く。原因は勿論、夜明と愉快な仲間達のこと

だ。

「このまま行けば、企業連はラインアークに負けるぞ」

「我々の目的は両者の共倒れ・・・このままでは計画が完全に頓挫してしまうぞ」

その時、ノックも無しに部屋の扉が開いた。入ってきたのはＯＲＣＡランク４オールドキング。オールドキングは眉間に皺を作っている二人を見て、にやっと笑みを浮かべる。

「唯でさえ陰気な面ぁ陰気にして何話してんだよ？」

「何、大したことじゃない。少し、過去からやって来たイレギュラー達の快進撃に頭を悩ませていたところさ」

「あいつ等か。確かに、あいつらの実力は生半可なリンクスよりも数段上だはな・・・おい、メルツェル。俺一人がＯＲＣＡから消えるのと、連中が残らず消えるの、天秤にかけたらどっちの方が重い？」

「？　いきなり何を言っているんだお前は？」

「質問に答えてくれよ、正直にな」

激しくは無いが、有無を言わせぬ口調でオールドキングは尋ねる。オールドキングの放つ圧力にメルツェルは押され、クルーゼは事の次第を黙って見ている。数分間沈黙が続き、メルツェルは重い口を開いた。

「・・・お前一人の命で彼等を戦闘不能に出来るなら、安いものだろうな」

「・・・そうかい、そいつを聞いて安心したぜ」

返ってきた答えに怒るわけでもなく、オールドキングは満足げに笑いながら二人に背を向けてドアノブに手をかける。耳にこびり付いて離れない鼻歌を残し、オールドキングは去っていった。

「・・・彼は何をするつもりだ？」

「分からんよ。神でさえも、あいつの考えは読めないだろうさ」

歌う、歌う、彼は歌う。

何のために？　誰のために？

他者のためか？　己のためか？

それは彼自身にも分からない。それでも、彼は歌い続ける。

「Ｉ'ｍ　ｔｈｉｎｋｅｒ　ｔｕ－ｔｕ－ｔｕ――」

ＯＲＣＡ旅団で・・・いや、この世で最も危険な男が動き出そうとしていた。

蠢くは古き王の名を冠する男（後書き）

雪羅からぶっ放されたのは輻射波動みたいな物だとでも思ってください。

「ねぇ」

「あぁん？」

ぐでーっとしている鈴音の声に夜明が気のない声で応える。二人の周りにいる太陽たちも鈴音に応える様子は無い。猫のように身体を伸ばし、不満そうに唇を尖らせた。

「何時になったらアークエンジェルから降りられんのよ！！」

鈴音がぶー垂れるのも無理はなく、アークエンジェルは三日間止まることなく移動している。その間、ずっと空の上で揺られっぱなし、流石に地面が恋しくなってきたのだろう。

「流星の話だと、今飛んでいる山岳地帯を抜けた辺りにある『ハーツ』って町を越えて一日くらいで着くってことらしいが」

「今の私にはその一日すら苦痛だわぁ～！」

ごろごろと転げまわる鈴音。突っ込む気もないのか一同が気の抜けた苦笑を浮かべていると、血相を変えた流星が転がり込んできた。

「ん、どした流星？」

「曾爺ちゃんに皆、ここにいたんだ・・・結構やばいことになってるんだ、とにかくメインブリッジに来て！！」

何事かと思いながらも、流星の鬼気迫る様子に押されて夜明達は流星の後についてメインブリッジへと向かう。メインブリッジに入ると冬華と朔夜、黄昏を含めたアークエンジェルのクルー達が険しい表情を浮かべていた。

「何かあったんですか？」

夜明の問いに全員が更に表情を険しくする。状況がうまく飲み込めず、戸惑っていると徐に冬華がメインブリッジのモニターに映像を表示した。モニターに映し出された映像を見て、冬華達同様、夜明達も険しいものを顔に浮かべる。

「何だよこれ・・・」

モニターの中で町が燃え盛っていた。

「『ハーツ』。今アークエンジェルが飛んでいる山岳地帯を抜けた先にある町。町全体が燃えてることから考えて、襲撃があってから時間はそこまで経過していなくて集団、それもかなりの人数で襲撃したんだろうな」

「そんな、何で・・・！」

「さぁな、ハーツを襲撃して何か得られる物があるとは思えない。襲撃者の目的は全くの謎だな」

箒の疑問に淡々とした調子で答える黄昏を横目で見ながら、夜明は冬華を見据える。冬華も真正面から夜明の視線を受け止めている。

「・・・で、俺達を呼び出してどうするつもりだ？」

「・・・ハーツを襲った者達の目的及び人数、その他諸々分からないことが多すぎるから、アークエンジェルの守りについて欲しい、と言いたかったのだが・・・助けに行く気満々のようだな」

「当たり前だ。俺達は軍属になった覚えは無い」

「私は一応ぐんぞもがもが」

余計なことを言いかけるラウラの口元をシャルが塞ぐ。グッジョブ、とシャルにアイコンタクトして夜明は再び冬華を見る。

「もう、誰も生きていないかもしれないぞ」

「でも、生きてるかもしれない・・・もう、見捨てたくないんだ、助けられる命を」

助けられる命を死なせてしまった、己の眼前で。だからこそ思う。助けたいと、見捨てたくないと、死なせたくないと！　自然と、太陽たちが夜明を囲む形で冬華と対峙する。揺らぐことの無い目で見据えられ、冬華は選択を迫られた。軍属の者として、アークエンジェルの艦長として被害を小さくするのか。一個人として目の前の少年達と一緒に助けられる命を助けるのか。数秒間沈黙し、冬華は朔夜を見る。

「朔夜、医療クルー達に伝えておいてくれ・・・数え切れない負傷者達が運び込まれてくるとな」

「・・・はい！」

飛び出していく朔夜の後ろ姿を見送り、冬華は口元に苦さと満足を織り交ぜたような、複雑な笑みを浮かべる。

「ラインアーク無関係者救出のため、私的に部下を動かす・・・始末書じゃすまないな」

「手伝いますよ」

太陽の言葉にそうか、と返す。

「ま、今は負傷者の救助に全力を注ぐとするか・・・」

炎が酸素を食い尽くす。呼吸が困難な中、夜明達は建物の下敷きになっている人たちの救助を続けていた。救助を開始してから凡そ三十分、ＩＳを展開させながら救助活動に当たっているというのもあって、夜明達は数百人の人をアークエンジェルに運び込んでいた。救助に参加しているのは夜明、太陽、一夏、箒、鈴音、シャル、ラウラ。アークエンジェルの守りについているのは流星、セシリア、楯無だ。

「くそっ、助けても助けても限が無い！」

「一夏！　口を動かしている暇があったら手を動かせ！！」

太陽に怒鳴られ、一夏は横倒しになっているビルの中から両肩に人を担いで飛び出してきた。隣りに一夏が着地したのを横目で確認し、太陽は箒と一緒に助けた十数人の人たちを指差す。

「一夏、一旦箒と一緒にこの人たちをアークエンジェルにまで運んでこい。私はこのまま救助を続ける」

「分かった。行くぞ箒」

「あぁ」

それぞれ救助した人を肩に担いで、或いは小脇に抱えながら飛んでいく二人の後ろ姿を見送りながら、改めて彼女は周囲を見回した。あるのは身体の一部や身体その物が吹っ飛んでいる死体、崩れ落ちた建物の下敷きになった死体、身体を焼かれた死体。聞こえるのは

親が子を呼ぶ声、子が親を呼ぶ声。

「・・・地獄って言うのは、こういう景色のことを言うのかもしれないな・・・あれは!?」

ふと、太陽の常人離れした視力が炎で赤く彩られた空の中に何かを発見した。ハーツの上空を旋回するように飛ぶ数機の大型搬送機。飛行機を視認した太陽の顔が徐々に青ざめていく。

「まさかあれは・・・まずい!」

「大丈夫、しっかりして!」

シャルは元々民家であっただろう瓦礫の中に紛れるようにして転がっていた少年を抱き上げた。脈、呼吸がしっかりしていること、身体に目立った傷が無いことを確認してホッとした表情を浮かべ、気を失っている少年の頬を優しく叩いた。

「・・・んっ・・・」

「気がついた! 良かった・・・お姉ちゃんのこと、分かる?」

薄目を開けながら少年は一つ頷く。

「お姉ちゃんはこれから君を安全な場所に運ぶから。少しだけ空を飛んで、寒かったり苦しかったりするかもしれないけど我慢して」

シャルの言葉を遮るように、少年は弱々しく瓦礫の山を指差しながら口を動かした。擦れた声は非常に聞き取りにくく、シャルは少年の口元に耳を近づける。

「お、かあさんと、・・・おとう、さん・・・たすけ」

少年の言葉に泣きそうになるのを堪え、シャルは瓦礫の山を見る。瓦礫の山の間から覗いている二組の人の腕。それらが動くことは無い。

「・・・ごめんね」

胸が張り裂けるような痛みを感じながら、シャルは少年を出来るだけ優しく抱きかかえて飛翔しようとする。その時、

「おいおい、随分と場違いな嬢ちゃんがいたもんだな」

男の声を耳で感じ、冷水を全身に浴びせられたような悪寒が彼女を襲った。振り返ると、そこには大きな瓦礫に腰掛けている男の姿がある。じりじりと後ずさりしながらも、シャルは男から視線を外さない。

「誰ですか貴方は？」

「俺はオールドキングってんだ。よろしくな嬢ちゃん」

炎が広がる、地獄のような場所にいるというのに男の声は、表情はまるで世間話をするかのように涼しげで気さくだった。

「シャル、そっちはどうだ・・・誰だお前？」

シャルと合流した夜明がオールドキングに警戒も露な視線を送る。オールドキングは夜明の問いに答えようとはせず、興味深そううな目で彼を見ていた。

「不屈の翼か・・・こりゃまた随分と大きなのが引っかかったな」

「引っかかった？　どういうことだ！？」

「どういうって・・・そのまんまの意味だよ」

両腕を広げ、地獄絵図と化した町を示す。

「こりゃ、俺がやったんだよ」

「「っ！！」」

「ま、正確に言うと俺が昔頭やってたリリアナって組織の部下達に協力してもらったんだがな」

「・・・何でこんなことをした？」

殺意を抑えきれずも、夜明はひどく冷然とした声音で訊ねる。だがその手は怒りで震え、装甲に覆われた手の骨がメキメキと軋んでい

た。

「何でって・・・お前らを誘い出すために決まってるだろ」

欠伸を噛み殺しながらオールドキングは語る。

「お前らは少しばかり派手にやりすぎたんだよ・・・最初、お前らというイレギュラーはよくやっていた。俺達の目的のためにはラインアークと企業連の共倒れが必須。幾らホワイト・グリントの前例があるとは言え、トワイライトウィングにそこまでのことをやれる力があるかどうかは疑問だったからな。そこに現れたお前ら、お前らは上手いこと企業連の力を削っていってくれた」

だが、と一旦言葉を切る。

「お前らは派手に暴れすぎた。結果、企業連はかなり追い込まれている、ラインアークと企業連の共倒れを狙っている俺達としてはよろしくない事態ってわけだ・・・そこで、お前らのうちの何人かを消す、贅沢言うなら全員を戦闘不能にしたいと思ってこんなとこまで出張ってきた訳よ」

お分かり？　とオールドキング。二人は答えない。やがて、シャルがゆっくりと口を開いた。

「そんな・・・僕達を消したいだなんてだけの理由で、こんなにもたくさんの人たちを傷つけて、殺したって言うんですか？」

「そうだって言ってるだろうが」

「一体何人の人が死んだと思っているんだ！！！」

「そうさな、ざっと十六万人ってとこか？」

怒りを抑えきれずに吼えたシャルにオールドキングは淡々と答える。あっさりと返ってきた答えに口をつぐむ二人。驚き黙る二人だが、驚きは淡々と自分が殺した人の数を答えたオールドキングに対しての怒りへと変わっていく。

「手前・・・」

「かっかするなよ。殺しなんて毎日起こってることだろうが」

夜明の瞳孔が開き、恐ろしい早業で腰からウィングスターが引き抜かれオールドキングの眉間に銃口が向けられる。問答無用で引き金が引かれようとした寸前、オープン・チャネルで太陽の裂帛の声が聞こえてきた。

『夜明！　今すぐに空に飛んでくれ！！』

「太陽、すこし黙って『時間が無いんだ！！』っ！？」

太陽の剣幕に僅かに夜明は怯んだ。その僅かな間で太陽は簡潔に状況を説明していく。

『ついさっき、複数の大型搬送機からクラスター爆弾が投下されたのを確認した！　数は十万！　着弾予想時間は凡そ一分！　お前以外に全てのクラスター爆弾を破壊するのは不可能だ！！』

「これもお前の指示か？」

「あぁ、お前らが来たときには周囲一帯を消し飛ばすだけのクラスター爆弾を投下しろって言っといたからな。少なくとも、周囲十キロは跡形も残らねぇだろうな」

「夜明、行って。この人の相手は僕がするから・・・この子を安全な場所に連れて行って」

「シャル・・・分かった」

シャルの目に並ならぬ決意が浮かんでいるのを見て取り、夜明は黙ってシャルが抱きかかえている少年を受け取りその場から立ち去った。

『ミーティアを使え！　あれならやれるはずだ・・・』

夜明の姿と一緒になって小さくなっていく太陽の声をＢＧＭにしながらシャルはオールドキングを睨む。

「・・・命は何にだって一つなんだ、あなただってそれくらい分かるでしょ！！」

誰かが誰かの生き方を強制できないように、命は絶対に侵してはならないかけがえの無いものなのだ。夜明にそうだと教えてもらい、シャル自身も夜明同様に命はとても尊いものだと思っていた。その命を、全てにおいてたった一つしか無いものを、目の前の男は道端に転がっている石ころか何かのように踏み躙っている。だからこそ、彼女にはオールドキングが許せなかった。

「睨むなよ。人は人を殺せるように出来てるんだ・・・だから、人を殺したしても何の不思議も無いだろうが」

「・・・僕は貴方を許さない」

「・・・ま、理解しろとは言わねぇし、理解して欲しいとも思わねぇよ。ただな、これだけは覚えておけ」

武装を展開し、それぞれの銃口をシャルに向ける。燃え盛る炎の光を浴び、不気味に黒光りする銃口はオールドキングそのものを表しているようにも見えた。

「人を殺すのは運命でもないし、誇りや目的でもない。引き金を引くのは大義名分や立場でもない・・・俺達、人間なんだよ」

ライフルが、ショットガンが、チェインガンが火を噴く。壁をも連想させる弾幕は一瞬でシャルを飲み込み、砂煙が彼女の身体を包んだ。暫くの間、オールドキングが弾丸をばら撒き続ける音だけが周囲に響く。数十秒後、彼は引き金を引くのを止めた。

「・・・確かに人を殺すのは運命でも大義名分でもない、人です。それは否定できないしする気もない・・・でも!!」

不意に砂煙が吹き飛び、中から六枚のシールドを広げたシャルの姿が現れた。

「誰かを助けるために手を伸ばしたりするのも、誰かを守るために剣を手に取るのも人なんだ!!」

両腕にアサルトブレードを展開させ、四本の隠し腕にそれぞれマシンガン、グレネードランチャー、アサルトライフル、ショットガンを握らせ、シャルはオールドキングと対峙する。

「もう一度言います。僕は貴方を許さない、絶対に！！」

「・・・ま、俺を許せないなら許せないでいいさ。所詮は殺し合いだ、刺激的にやろうぜお嬢さん」

虐殺者と守護者。殺すために力を使う男と、守るために力を使う少女の闘いの行く末は如何に？

駆け抜ける不屈の翼

翔る、駆ける。破壊をばら撒こうとする十万ものクラスター爆弾が流星群のように降り注ごうとする空を、不屈の翼が駆け抜ける。

「なんつぅ数だよ・・・」

クラスター爆弾はその内に数十もの爆弾を内包している。それが全て落とされたとしたら・・・夜明の表情が絶望に歪む。だが、すぐに表情を精悍なものに変え、眼下に広がっている破壊されたハーツの町へと視線を落とした。まだ、何万という人が取り残されているだろう。そして、彼の友も人々を救おうと闘っている。

「・・・俺だけが負けるわけにはいかねぇ・・・！」

夜明の中で何かが弾ける。髪、瞳の色が蒼銀へと変わり、二対の推進翼（スラスター）の間から噴き出す月光の翼（ムーンライトウィング）も出力を上昇させていった。夜明は叫ぶ、新たな力の名を。

「ミーティアァァァァァッッッ！！！！！！！！！！！！！！」

レイジングウィングの装甲から光の粒子が溢れ出す。光の粒子は夜明の背中に集まりながら真の姿を形成していった。

極限にまで小型化した戦艦という表現がぴったりだろうか。随所に武装を搭載させたミーティアは大きく伸びている二本のウェポンアームで挟み込むように夜明とドッキングした。ウェポンアームのグリップを握った夜明の顔の前に、レイジングウィングとミーティア

の結合が終了したことを告げるウィンドウと、ミーティアのステータスを表示したウィンドウが現れる。通常のＩＳを数百倍上回る出力と武装。

「いっくぜぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！」

後方へと流れるように伸びているテールスタビライザーの間にある二基の超大型スラスターから爆炎を噴かせながらクラスター爆弾の雨へと突っ込む。クラスター爆弾は二つの層を成して落下してきている。夜明の目に映ったのは第一波のクラスター爆弾、ここだけで数は十万。第一波の上にある第二波の数はその二倍だ。

「数なんか知るかぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

咆哮を上げながら右のウェポンアームを構える。集束された高エネルギーを放つはずの銃口から蒼色のビームソードが伸びた。ビームソードは数秒と経たずに何千メートルにも刀身を広げていく。クラスター爆弾が開き、中から小型の爆弾を吐き出そうとする。小型爆弾が散らばって落ちていく前に、夜明が横薙ぎに振り抜いたビームサーベルが小型爆弾を飲み込んでいった。

「うおおおおおおおっっっ！！！！！！！！！！」

視界が爆発の光で埋め尽くされる。轟音が鼓膜を叩き破ろうとするが、そんなことお構いなしで夜明はウェポンアームを振り抜いた。夜明に切られ、或いは切られた爆弾の爆発に誘爆する爆弾。今の一撃だけで第一波のミサイルは全て破壊された。

「次ぃ！！」

空を仰ぐ。既にクラスター爆弾が小型爆弾を撒き散らしたことを示すように、空から無数の煌きがゆっくりと落下してくる。大げさな表現ではなく、本当に空が小型爆弾で見えない。後ろ向きに下へと降下して小型爆弾と距離をとる夜明の双眸をマルチロックオン用バイザーが覆う。小型爆弾をロックしたことを示すロックオンカーソルでバイザー内が埋め尽くされる。ミーティア全ての武装が展開された。

「全武装エネルギー充填完了、ミサイルポッド異常なし・・・当たれぇぇぇ！！！！！」

テールスタビライザーとウェポンアームにあるミサイルポッドが開くのを確認し、夜明は握ったウェポンアームのグリップにある引き金を引いた。

空が光で満ちた。放たれた幾つもの砲撃は小型爆弾を次々と撃ち抜き、ミサイルは光の尾を引きながら小型爆弾を次々と爆破していく。再び視界を突き刺す爆発の光と、鼓膜を痛めつける爆音に顔を顰めながら、夜明は全ての爆弾を破壊したのを確信してミーティアを光の粒子に変えて装甲内に戻した。

「・・・少なすぎるんだよ。悪いが、こちとら背中に色々と背負ってるんだよ・・・俺と不屈の翼（レイジングウィング）を潰したいのなら、この三倍は持ってこい」

甲高い音を立てて、宙を舞っていた二振りのアサルトブレードが地面に突き刺さる。

「どうした、俺を許さないんじゃなかったのかお嬢ちゃん？」

「言われなくてもっ！！」

薄ら笑いを浮かべながらショットガンを向けてくるオールドキングを、隠し腕に握らせたマシンガンとアサルトライフルの乱射で牽制しながらシャルは自分自身の両手に投擲用ジャベリンを呼び出した。上昇しながら身体を捻り、勢いをつけて二本のジャベリンを投げつける。二回、ショットガンを撃って飛来するジャベリンを撃ち落す。オールドキングが回避行動に移るよりも速く、瞬間加速（イグニッション・ブースト）で横に迫ってきたシャルが叩きつけるように広げた六枚のシールドで吹き飛ば

した。

「おっとっ」

崩壊した民家の壁に叩きつけられ、一瞬オールドキングの動きが止まる。シャルの両肩にある四門の大型レーザーカノン『ディザスター』が放たれた。間一髪でディザスターの砲撃を避けたオールドキングは変則的な動きでシャルに接近する。互いの砲撃が互いの砲撃で相殺しあう中、シャルは右腕の盾殺し（シールドピアース）を起動させながら突っ込んだ。

「そんなの当たらねぇよ」

紙一重でシャルの突撃を回避し、シャルの背中にショットガンとライフルの連射を撃ち込む。後ろからの射撃によろめきながら、シャルはアサルトブレードを右手に呼び出し、振り返りざまに斬撃を放った。胸部装甲を浅く斬られ、後退するオールドキング。アサルトブレードを振った勢いのまま回転し、シャルは左の隠し腕に持たせたグレネードランチャーをオールドキングの腹に押し付けた。爆音と黒煙が二人を飲み込み、爆風が両者を地面へと叩きつける。

「げほっ！　っ！？」

衝撃で咳き込み、一瞬動きが止まったシャルの喉笛をオールドキングが掴んだ。肩のチェインガンが起動し、至近距離で連射する。チェインガンを連射させたままシャルにショットガンの銃口を向けて撃つ。吹き飛ぶシャル。追い撃ちをかけるように数発のライフル弾が装甲を抉る。遅れて飛んできたミサイルも直撃し、シャルは壁をぶち破って転がっていった。瓦礫に背中からぶつかり、ようやく止まる。口元から血を流し、シャルは再び咳き込む。

「がはっ！　ごほっ！！　・・・あれは？」

激痛で霞む視界の中に、シャルはあるものを見つける。倒れた民家に押しつぶされ、炎で焼かれて死んだ家族の死体。目を見開くシャルの視界を遮るようにオールドキングが彼女の目の前に降り立つ。シャルの視線の先にあるものに気づき、何事も無かったかのように視線をシャルに戻しながらショットガンの銃口を額に押し付ける。

「何て面してやがんだよ。戦場に死体が転がってるのは当たり前のことだろうが・・・安心しろ、すぐにお前もこいつらと一緒にしてやるよ」

刹那、シャルは己の中で何かが爆発したのを感じた。それは怒りだったのかそれとも憎しみだったのか。気づけば額に押し付けられていたショットガンの銃口を払いのけ、隠し腕でオールドキングの四肢を拘束して地面を削りながら飛んでいた。飛翔し、オールドキングを殴って目の前の建物に叩きつけ、ディザスターの出力を臨界点にまで上昇させる。

「貴方だけは・・・貴方だけは！！」

ディザスターから放たれた数十本の光の柱を集束させたようなレーザーが、地面を切り裂きながらオールドキングを捉える。レーザーに押され、数え切れない建物を突き破っていく。オールドキングを圧倒していた光の帯が消え、ほとんどの装甲が破壊されたオールドキングの姿が露わになった。

「・・・さっき、そんなの当たらないって言ったよね」

ゆっくりと地面に着地し、オールドキングに歩み寄る。盾殺し(シールドピアース)を顔に突きつけ、シャルは残忍な笑みを浮かべる。

「この距離なら絶対に外さないよ・・・自分だって散々殺したんだ、殺されても文句なんて無いよね」

ゆっくりと、音を立てて盾殺し(シールドピアース)のリボルバーが回転した。次弾が装填され、未来でも最強の部類に入る威力の一撃が炸裂する。炸裂音が轟き世界が揺れ、砂塵が舞う。

「・・・シャル、もういい」

「夜明・・・」

シャルの手を掴んで、盾殺し(シールドピアース)を空へと向けている夜明。夜明の姿を認めると緊張が解けてしまったのか、シャルの身体を守っていたISアーマーが解除された。

「よ、あけ・・・」

胸に顔を埋めて泣きじゃくるシャルの頭をポフポフと撫でながら、夜明は力なく壁にもたれかかっているオールドキングを見やった。夜明の視線に気づき、オールドキングは力ない微笑を浮かべる。

「・・・殺せよ」

「・・・死にたいなら一人で死ね。こっちにはお前を殺してやる義理なんて無いからな・・・太陽か」

不意に太陽からプライベート・チャネルを通して通信が入ってきた。

内容はハーツにいた生存者全員を救出したというもの。

「そうか・・・生存者の数は？」

『ざっと見積もって三百人ってところか』

「それ以外の人たちは？」

『・・・間に合わなかった。それと、上空を飛んでいた大型搬送機はセシリアがエンジン部分を撃ち抜いて撃退した。もうここにいる理由は無い、アークエンジェルに帰還するぞ』

「・・・了解」

太陽との通信を終え、夜明はもう一度オールドキングを見る。胸部装甲からコアが顔を出していた。シャルを抱きかかえたままオールドキングに歩み寄り、胸部装甲からコアを引きずり出して粉々に握りつぶす。

「・・・本当はお前みたいな危険な奴、ここで殺しておいたほうが良いんだろうが・・・それは俺の覚悟に背くことになる。だから、俺はお前を殺さない」

「・・・甘いねぇ。何時か後悔するぞ、不屈の翼」

「その時はその時で何とかするさ」

飛び立つ夜明。そのまま振り返ることなく空を飛んでいく夜明を、オールドキングは何かするでもなく、じっと見続けていた。

「はっ、面白い奴だったな・・・ま、その反吐が出るほど甘い覚悟でどこまでいけるのか・・・あの世で見ててやるよ、不屈の翼」

小さくなっていく夜明の後ろ姿を見送りながら、オールドキングは口を大きく広げて笑う。やがて、その姿も町を焼いている炎の中へと飲み込まれていく。オールドキングの姿は完全に消えた。だが、彼の笑い声が途切れることは終ぞ無かった。

流星の受難　ＯＲＣＡの動き

「ここがラインアーク地球本部『メガリス』だ・・・って、聞いていないな」

全く自分の話を聞かないで、子供のように目を輝かせながら周囲を見回している夜明達に少し呆れながら冬華は乾いた笑みを浮かべる。ここ、『メガリス』に一行が到着したのはついさっきのことだ。鈴音はやっと地面に足を下ろせると感涙に咽び泣いていたが、実際は地に下りてはいない。メガリスは海上都市なのだから。流星曰く百年ほど前、地盤沈下やら海面上昇でメガリス建設予定地が海の中に沈んでしまい、どうするか悩んでいたら当時の首長が、

『海の上に作っちまえばよくね？』

この鶴の一声でメガリスは造られた。にしても、と太陽は頭を？く。

「さっきのには驚いたな」

確かに、一同頷く。さっき、アークエンジェルから降りた夜明達を出迎えたのはメガリスにいる数万人の歓声だった。特に、太陽に向けられる歓声は凄まじかった。

「太陽は素手でＴＦを破壊したりしてたからな。結構、メガリスでは有名になってるみたいだよ」

流星の説明にそうか、と太陽は困惑したような表情を浮かべる。移動してる間、メガリスの人達からの視線を浴び続けながら、夜明達は目的の場所に到着する。ラインアーク現首長、ギルバート・デュ

ランダルの下に。冬華が扉をノックした。

「誰かな？」

「アークエンジェル艦長、月光冬華とトワイライトウィング搭乗者、大空流星。月光夜明達を連れてまいりました」

「入りたまえ」

許可を貰い、まず二人が部屋の中に入る。続けて夜明達も。敬礼する二人の肩越しに夜明達はギルバート。デュランダルなる人物を見た。浮かんだ感想は、恐らく同じ。

「若いな」

ボソッと太陽が率直な感想を呟く。デュランダルは冬華達と簡単に挨拶を交わすと、椅子から立ち上がって夜明達に歩み寄ってきた。別に威圧的な雰囲気を放っているわけではない。だが、何かデュランダルからプレッシャーのような物を感じ、少し後ずさる。

「初めまして、だね。私はギルバート・デュランダル、ラインアークの首長を務めている」

「月光夜明だ」

「夕暮太陽」

「織斑一夏です」

「お・・・篠ノ之箒です」

「（箒さん。今、織斑箒と言いそうになりましたわね）・・・セシリア・オルコットですわ」

「凰鈴音よ」

「シャルロット・デュノアです」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。近い将来、ラウラ・月光になる」

「「「「なるか！！」」」」

鋭い突っ込みがラウラに突き刺さる。デュランダルは穏やかな笑みを浮かべながら、全員と握手を交わした。握手を終えて夜明達の前に立つと、深々と頭を下げる。

「本当にすまなかった。本来、この戦争に関わることのない君達を過去から呼びだしてしまい。これは私の決断だ。もし殺すのなら、私だけにして欲しい」

「別に良いっての。一々昔のことをとやかく言うつもりはない、さっさと戦争を終わらせようや」

「・・・感謝する。我々と君達が合流したことで、企業連は本気で我等を潰しに来るだろう。決戦の時は近い、それまで十分に休んでいてくれ」

デュランダルにそれぞれ返事を返し、夜明達は退出した。デュランダルは席に着き、冬華と流星に視線を向ける。

「冬華、更識の御令嬢が仲間になったという報告を受けたのだが」

「別室で待機してもらっています」

「そうか。では、後で話し合ってみるとしよう。それから流星。黄昏と朔夜を呼んできてくれ」

「え、何でですか？　黄昏と朔夜は何か首長に呼び出されるようなことをしでかしたんですか！？」

慌てる流星を落ち着かせるため、冬華の拳が炸裂した。頭の周囲に星を回転させながら横たわる流星に苦笑いしながら、デュランダルは机にある端末を操作する。すると、机の中から柱状の強化ガラスに覆われた何かが現れた。一つは二本の剣が交差したネックレス、もう一つは黄金の暁の文字のネックレス。どちらも待機状態のＩＳだ。

「つい先日、新型のＩＳが完成された。超近接特化ＩＳ『スサノオ』、超防御特化ＩＳ『アカツキ』・・・彼女達にこの二機を託そうと思ってね」

「・・・どうすれば良いんだ？」

彼女、織斑朔夜は悩んでいた。大空流星の部屋の前で。

（どうやって流星をデートに誘え・・・いやいやいや、違う！　私がしたいのはデートなどでは断じてない！　私はただ・・・流星と二人だけで買い物に行きたいだけだ、二人だけで！）

世間一般の人たちは、それをデートと呼ぶ。流星の部屋の前で悶々と悩み続ける朔夜に、通りかかる人たちは生暖かい視線や声援を送ったりしている。およそ一時間後、漸く決心がついた朔夜が扉をノックしようとしたその時、

「邪魔だ」

「へ？　きゃあああ！？」

誰かに首根っこを掴まれて放り投げられた。廊下に顔面着地し、そ

のまま数メートル顔面スライディングする羽目に。顔に襲う熱さと痛みにのた打ち回りながら自分を投げた相手、黄昏を見る。

「た、黄昏ぇ！　お前いきなり何をする！！」

「騒ぐな鬱陶しい。流星をデートに誘おうかと思って来てみれば、お前が流星の部屋の前で悶々としてた。一時間くらい待っても動く気配が無かったから、放り投げた」

「だからと言ってなぁ！」

「うるさいなもう！　さっきから人の部屋の前で何やってんだよ、あんた達は！！」

扉が開き、少し怒っている流星が部屋の中から顔を覗かせた。間髪いれずに黄昏が流星の胸倉を掴み、引きずって行こうとする。

「ちょ、いきなり何だよ黄昏！？」

「お前とデートする」

「拒否権は！？」

「ある訳無いだろ」

「誰か助けてぇー！！」

「あっ・・・」

有無を言わせずに流星を連れて行く黄昏。流星が部屋から顔を出し

てから、真っ赤になって何も言えなかった朔夜は黄昏に引っ張られていく流星に手を伸ばし、見送るしかなかった。

「はぁ・・・」

「何をため息吐いているんだ?」

「わきゃあ!?」

突然かけられた声に、可愛らしい声を上げて朔夜は飛び上がる。振り返ると、買い物袋を抱きかかえた箒がいきなり声を上げた朔夜に驚いた表情を浮かべて立っていた。

「ひ、曾お婆様ですか」

「その呼び方は止めてくれないかお願いだから。十五歳なのに、百歳くらいのお婆さんになった気がしてしまう」

「す、すみません曾お婆様」

「・・・まぁいい。それで、何故ため息を吐いてたんだ?」

「実は・・・って、曾お婆様は何を?」

「あぁ、これか? 実は一夏が私の手料理を食べたいと言ってな。しょうがないから材料を買って、作ってやろうと思ってな。全くあいつは」

物凄く嬉しそうに微笑む箒。そんな箒を、朔夜は心の底から羨ましそうに見ている。

「・・・良いなぁ、曾お爺様と仲が良くて。私なんて、私なんて・・・うぅぅ・・・」

「何故泣く!?」

数分後、どうにか朔夜を落ち着かせた箒はことの仔細を聞く。成るほどと納得しながら、箒はズビシッと朔夜を指差す。

「話は分かった・・・だがな、言わせて貰うぞ朔夜。それはさっさと流星を誘えなかったお前が悪い」

「ですよねうぅぅ・・・」

再び朔夜は泣きそうになる。

「このままでは、流星を黄昏に持っていかれるのも時間の問題だろうな」

「私は、私は一体どうすれば・・・」

「安心しろ、私がどうすれば良いのか教えてやる！」

この場に太陽やその他女性陣がいたら、口を揃えてこう言うだろう。

『激しく不安だ』

お世辞にも、箒は恋愛ごとに造詣が深いとは言い難い。そんな彼女が、自信満々に言い切ったのだ。仮にこの場に夜明と一夏がいたとしても、異口同音に不安だと言うだろう。

「ほ、本当ですか！？」

朔夜は目を輝かせる。箒はゴニョゴニョと朔夜に耳打ちする。

「・・・えぇぇぇっっっっ！！！！？？？？」

メガリスの町に、朔夜の悲鳴が木霊したとさ。

翌日の早朝。時刻は午前四時、余程の物好きか忙しい人でもなければ起きてはいないだろう。

「・・・」

約一名、余程の物好きが廊下を歩いていた。織斑朔夜、その人である。自分の祖先である、篠ノ之箒から教わった絶対に男を落とせる必勝法を胸に秘め、決意を露にした表情で流星の部屋へと向かっている。箒が教えた方法とは至ってシンプル。

『朝早く、素っ裸になって好きな相手の寝床に潜り込め』

碌でもない。だが実際、彼女は一夏をその気にさせるためにこの方法を実践しているようだ・・・どうでも良い話だが。抜き足差し足忍び足で廊下を歩きながら、ふとこのまま何の問題もなしに全てが成功したらどうなるのかを朔夜は考えてみた。

（このまま上手く行ったらどうなるのだろうか・・・流星だって年頃の男だ。早朝、何やら幸せな感触を感じて起きる。起きると、布団の中に裸になった私が。顔を真っ赤に染める流星。そんな流星に、私は胸を押し付ける。我慢が出来なくなった流星はついに猛りに猛った怒張で荒々しく私を）

若干の妄想癖が彼女にあるようだ。顔を棗のように赤くさせながら、朔夜は噴出しそうになる鼻血を押さえる。

「何をしているんだお前は・・・」

呆れ切った声が聞こえた。鼻を押さえたまま声のしたほうを見ると、黄昏がいた。

「黄昏か、こんな時間に何をしてるんだ？」

「その言葉、そっくりそのままバットで打ち返すぞ・・・昨日のデートで改めて分かったのだが、流星は私を女として見てない。どうすればいいのか太陽に相談してみたら、朝早くに裸で迫ってみろと教えられてな・・・まさか、お前もそうか？」

太陽も太陽で碌でもなかった。黄昏の問いに朔夜は一瞬言葉を詰ま

らせる。だが、

「あぁそうだ、悪いか！？」

開き直った。すぐに答えて見せた朔夜に驚きの表情を浮かべる黄昏。だがすぐに表情を元に戻し、口元に微笑を浮かべる。

「それならそれで良いさ。初めてが３Ｐというのも悪くない」

「３Ｐ？」

「知らなくていい」

二人肩を並べ流星の部屋へと向かう。音を立てないように扉を開き、するりと侵入する。足音を出さないようにベットに近づき、朔夜がある違和感に気づく。

「黄昏・・・流星のベット、妙に膨らんでないか？」

「言われてみれば確かに」

人一人の膨らみではない。二人は顔を見合わせ、一緒に布団を引っ剥がした。そして絶句する。

「・・・う～ん・・・」

「ふにゃぁ～、りゅうしぇ～」

顔を顰めて唸る流星と、流星に抱きつく楯無の姿があったからだ。しかも、楯無は一糸纏わぬ姿、何があったのか嫌でも想像してしま

う。

「・・・んぁ？　あれ、何で俺の部屋に黄昏と朔夜がいるんだ・・・って楯無ぃ！？」

寝ぼけ眼で現状を認識する流星。涙目の朔夜、無言で何かを黙考している黄昏。そして裸になって己に抱きついている楯無。今の自分の状態を把握するとともに、命の危険を知らせる警鐘が流星の中で鳴り続けていた。

「・・・ふぁ～・・・おはよ、流星」

「あぁ、お早う・・・じゃない！　何で俺のベットにお前がいるんだよ！？」

「何でって・・・酷いんじゃないの流星？　昨日はあんなに激しかったのに」

「はぁっ！？」

頬を薄紅に染める楯無に流星は言葉を失う。

「りゅうぜぇ～・・・」

どこから取り出したのか、真剣の日本刀を抜刀する朔夜。涙目なのは仕方の無いこと。

「ちょ、待って朔夜！　誤解だ、俺は何もしてない！！」

「上になろうとする私を無理矢理組み伏せて、あんな荒々しく突い

ておいて誤解も何もないでしょ」

「成敗ぃぃぃ！！！！！！！！！！」

涙目のまま朔夜は刀を振り下ろす。鋭い、人を絶命させることを厭わない見事な太刀筋だ。切っ先が流星を真っ二つにする寸前、黄昏が朔夜を止める。

「落ち着け朔夜。流星は何もしてない」

「・・・そうなのか？」

「考えてもみろ。セックスした後のベットがこんな綺麗か？　更に言うなら、部屋の中は変な臭いもしないし、ベットに染みも出来てない。そして何より・・・流星がそう言う行為をするとは思えない。ヘタレだからな」

「・・・確かに」

男としてかなり悲しい納得のされ方だが、取り合えず朔夜が刀を納刀したのを見て、流星はホッとため息を吐く。一方、楯無は唇を尖らせながらジト目で黄昏を見る。

「ぶぅ～。折角流星と既成事実作って私から逃げられなくしようと思ったのに・・・」

「ふざけるな。流星は私のだ、朔夜ならともかく、お前みたいな女狐にはやらん」

「べっつにくれなくても良いも～ん。奪い取って見せるから」

んべぇ～と舌を出しながら流星を抱き寄せ、楯無は自身の豊満な胸の間に流星の顔を押し付けた。

「・・・そう言えば、スサノオの試運転がまだだったな・・・朔夜、お前のアカツキもまだだろ？」

「あぁ。それにしても私達は運が良い。目の前に丁度良い相手がいるんだからな」

息の合ったタイミングでＩＳを展開させる二人。黄昏は漆黒の装甲、朔夜は黄金の装甲を身に纏う。

「ほぉ、カラードランク０の私と死合うっての？　上等！！」

楯無もエクストリーム・アテナを展開させる。目の前の展開についていけず流星は楯無に抱き締められたまま狼狽する。

「ちょ、待てよお前ら！　まさかここで闘るつもりかよ！？　せめて俺がいなくなってから始めぎゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・・・・・」

「ここがメガリスか・・・ラインアークも大層なものを作り出していたものだ」

「飯が上手いって話だぜ、メルツェル！」

眼鏡をかけたクールビューティーなんて言葉がぴったりそうな女性の横で、アマゾネスも真っ青な体格をした女性が豪快に笑う。

「・・・メルツェル。こんな言い方をするのもどうかと思うが、ヴァオーを連れてきたのはミスだと思うのだが」

がっしりとした体格の、だが年配の老人が呟くとメルツェルと呼ばれたクールビューティーは同感だと言わんばかりにため息を吐く。そこに、二人の女性が歩いていきた。どちらも物凄い美人。片方は長い銀髪をストレートに伸ばしていて、もう片方は白い髪をポニーテールにし、何故か白鞘の刀を握っている。

「皆ここにいたか。ヴァオーのお陰ですぐに分かったぞ」

「ジュリアス、真改。二人の居所は分かったのか？」

メルツェルの問いに、真改が無言で頷く。

「そうか。では予定通り大空流星とはジュリアス、真改、銀翁が接触してくれ」

「了解じゃ」

「分かった」

「・・・御意」

銀翁ことネオニダスが二人を連れて人ごみの中へと消えていく。

「メルツェル、俺達はどうするんだ？」

「・・・ヴァオー、お前また話を聞いていなかっただろ？　私とお前は月光夜明と接触する・・・旅団長、もな」

流星の葛藤　夜明の答え（前書き）

最初に言っておきます。言ってることが色々と滅茶苦茶なのでご用心ください。

流星の葛藤　夜明の答え

「腹減ったなぁ～」

「じゃあ、どっか食べに行こうか」

銀髪銀眼の少年が二人、肩を並べて仲良く歩いていた。月光夜明と大空流星の二人である。これと言ってやることが無かったので、夜明は流星にメガリスの町を案内してもらっているのだ。ちなみに、二人以外の面子は何をしているのかと言うと。

「斬り捨て御免！！」

「雪片ぁ！！」

「ヤタノカガミは破れない、絶対に！」

「直撃したビームをそのまま弾き返すだなんて非常識過ぎますわ！！」

こんな感じに、全員で黄昏のスサノオと朔夜のアカツキの性能テストをしていた。二人はジャンケンで勝って、自由を勝ち取ったのだ。

「食べに行く・・・とは言っても、実際にはどんなのがあるんだ？」

「そうだね・・・ラーメンとかお好み焼きとか。後、焼き鳥屋とかだね」

「豪く下町くさいな・・・ん？」

呆れたような表情を浮かべながら夜明は振り返る。名前を呼ばれた訳でもないのに振り返った夜明に流星が訝しげな視線を送っていると、流星の目の前で夜明は表情を剣呑な物へと変えていった。不審に思った流星は夜明の視線の先を追う。すると、二人の女性が視界に入ってきた。一人は眼鏡をかけた知的そうな美人、もう一人はアマゾネスもびっくりな体格の女性。二人とも、夜明に視線を送っている。

「知り合い・・・？」

「んな訳あるか」

過去から来た夜明に、この時代の知り合いなんているわけが無い。二人の女性は夜明に数秒視線を送り続け、どこかへと歩いていった。歩き去ろうとする二人の後ろ姿を見送りながら、夜明は面白そうに眉を持ち上げる。

「ついて来いってか？　ようござんしょ」

「ちょ、ついてくつもり曾爺ちゃん！？」

「ん、まぁな」

「まぁなって・・・」

「そんなことよりも流星」

「何？」

「お客さん」

親指で後ろを指し、夜明は二人の女性を追って人ごみの中へと消えていった。お客さん？　流星はゆっくりと後ろを向く。自分に向かって歩いてくる人影が三つ。

「お前さんが大空流星かな？」

がっしりした体格の老人が訊ねてくる。

「そうですけど・・・貴方は？」

「おぉ、名乗るのが先だったな。すまんすまん・・・ＯＲＣＡランク２、ネオニダスじゃ」

老人、ネオニダスは柔和に笑いながら、目を見開いている流星の肩に手を置く。その動きは緩慢で穏やかなものだったが、流星の肩に置かれた手からは有無を言わせない力が伝わってくる。

「少しばっかり、話を聞いてもらっても構わんかい？」

「・・・」

「そう睨まんでくれんか？　別にお前さんをこの場で取って喰おうと思ってはおらんよ」

近くの喫茶店へと入った流星十三人。注文したコーヒーを飲もうともせず、自分達のことを睨みつけてくる隆盛にネオニダスは苦笑を浮かべる。ネオニダスの言葉に、向かい合って座っている流星から見て右にいる銀髪の髪をストレートに伸ばした美女が呆れた表情を

浮かべた。

「それは無理な相談というものだろ銀翁。目の前に敵・・・それも親玉級のがいるんだからな・・・私はＯＲＣＡランク３、ジュリアス・エメリーだ。もう一人はＯＲＣＡランク５、真改」

「・・・」

紹介された白髪のポニーテール、真改は軽く頭を下げた。流星も硬い表情で会釈する。するといきなり、真改が携えていた白鞘の刀を流星に突き出した。いきなり刀を突き出され、流星は目を白黒させる。

「な、何ですか！？」

「・・・握ってみろ、心が落ち着く」

彼女なりに流星を案じてくれたらしい。だが、

「あぁ～、真改。それで落ち着くことが出来るのはお前さんくらいだと思うぞ」

「銀翁の言うとおりだな。刀を引っ込めろ」

ネオニダス、ジュリアスの両名からダメだしされ、真改は無言で刀を戻す。心なしか、ポニーテールがシュンとなっている。

「そ、それで、俺に何のようですか？　あなた方みたいな大物が、俺とお茶をするために態々敵の本拠地に乗り込んでくるとは思えないんですけど」

「そうだの。では早速本題に入るとしようか・・・大空流星。お前は今の世界をどう思う？」

「ど、どう思うか？　どういう意味ですか？」

「言葉通りの意味じゃよ。今の人類は争っている。態々、生活の空間を地球と宇宙に別れたと言うのに、地球に戻ってきて戦争を続けている」

「でもそれはあんた達企業れ・・・」

大声で怒鳴りかけ、流星は目の前の三人が企業連の直接の関連者ではないと思い出す。口から飛び出しそうになっていた怒声を飲み込み、流星はネオニダスに話の続きを促す。

「そこでな、わし等・・・正確にはわし等の雇い主は一度世界を見捨て、世界を、人類を再建することにした」

「・・・は？　それってどういう」

「『クローズプラン』。我々はそう呼んでいる」

ネオニダスの言ったことが分からずに首を傾げる流星にジュリアスが答える。

「この戦争で、企業連とラインアークは削りあって疲弊するだろう。そこに我らＯＲＣＡ旅団が介入して、両者を完膚なきまでに叩き潰す・・・あぁ、言っておくが、今までの我々が我々の全てだと思わないほうがいい。我々はまだ、一度として本気で闘ったことは無い」

ジュリアスの言葉に戦慄を覚える流星。それでも、話の続きを聞くために己が疑問に思っていることを訊ねた。

「両者を完膚なきまでに叩き潰すって言ってましたけど、具体的にはどうするつもりなんですか？」

「先ずはカラードに所属している上位ランカーリンクスを始末する。それから企業連とラインアークの代表全員だ」

「・・・ちょっと待ってくれ！　そんなことをしたら」

そこから先は言わずとも分かる。企業連やラインアークのような大組織が頭である代表達全員を失えば、両者は完全に、とまでは往かずとも組織としての力を失う。そうすれば、関係者や民衆に待っているのは死しかない。

「人類の八割・・・いや、九割が死ぬことになるだろうのぉ。企業連の老獪共は自分達の私腹を肥やすことしかしてなくて、自分達が失われた時、企業連に無能しか残らないことを気づいていない。ラインアークはギルバート・デュランダルのお陰で成り立っているようなものだしのぅ」

彼らが死ねば多くの人が死ぬ。それを分かっていながら平然としている三人を、流星は今度こそ怒声を浴びせようとする。だが、静かに、だが確かな殺気を込めて真改が刀の鯉口を切ったのを見て、押し黙るしかなかった。ジュリアスが目で真改を制し、流星に視線を向ける。

「若いな。自分に関わりの全くない人たちが死ぬと聞いてそこまで激昂できるのか・・・。だからこそ冷静になって考えて欲しい。そもそも、この戦争が起こった原因は何だ？　あぁ、確かに企業連の所為だろう。だが、戦争を引き起こすような企業連を・・・延いては世界を作ったのは人類だ。そんな人類に意味があるのか？」

流星は言葉を失う。真剣に考え始めた流星を見て、ネオニダスが畳み掛けるように話し始める。

「このままでは、人類は内側から壊死していくじゃろう。他の誰でもない、人類の所為で。だからこそ、わし等は人類を再建せねばならない・・・月並みな言葉を言うなら、変わる事に痛みは付き物。今回は、その付き物が半端じゃなく大きいというだけじゃ」

「・・・心で感じて、許せない行いだと考えるのは分かる。・・・それでも、考えて欲しい。・・・今の人類を生きながらえさせることが、果たして未来のためになるのかを」

寡黙な真改までが言葉を熱くして語りかけてくる。

「大空流星、私達にお前の力を貸してくれ。そして、共に人類に黄金の時代を齎すための礎となろう」

流星は握り締めた拳に視線を落とした。脳裏を駆け巡っているのは、今まで戦場で、様々な場所で見てきた悲劇。確かに、戦争で命を失った人たちはたくさんいた。だが、それだけではない。戦争に便乗し、人を殺して物を奪う連中だっている。戦争をいいことに、己の私腹を肥やしている連中だっている。この戦争が終わった頃、生き残るのはそういった狡すっからい連中だけで、真っ正直に生きている人たちは死んでいくだろう。

「お、俺は・・・」

「ふむ。まぁ、いきなりこんな事を聞かされ、決めろと言うのも酷な話じゃしの・・・一週間じゃ。一週間後、もう一度わし等はここにやって来る。その時、答えを聞かせて欲しい」

流星は答えない。これ以上言うことは無いのか、三人は机の上に勘定を置いて立ち去った。後にはただ、俯いて考え続ける流星だけが残されていた。

一方その頃の夜明。

「「ゴチになりました」」

「・・・ふっ。人類よりも先に、私の財布の中身が黄金の時代を迎えるとはな・・・」

ヴァオーと一緒になって、メルツェルの財布を空っぽにしていた。逆さにしても十円玉はおろか、砂一つ出ない財布を片手にメルツェルはさめざめと涙を流す。数分後、気を取り直したメルツェルが人の胸板くらいありそうなディスプレイを取り出した。

「・・・まぁいい。月光夜明、まずは彼女と話して欲しい」

メルツェルが操作すると、ディスプレイの中にあるマークが浮かんできた。風に靡く漆黒の旗。描かれたＯＲＣＡの文字。

『・・・さて、初めましてだな、月光夜明。私はＯＲＣＡランク１、マクシミリアン・テルミドールだ。画面越しの挨拶すまない』

「別に気にしちゃいねぇよ」

ディスプレイから聞こえた若い女性の声に律儀に応える。

『そうか・・・貴様を相手に言葉を飾る必要は無いな。人類に黄金の時代を齎すため、我々に協力して欲しい』

「スットレートな言い方だな・・・ま、話してみてくれよ」

※同じ内容なので割愛！

「ふ～ん。『クローズプラン』ねぇ・・・」

『答えを聞かせて欲しい。我々の仲間になるか、否かを』

テルミドールの言葉に夜明は頭を?く。ちらっと、メルツェルとヴァオーを見てみた。どちらも、真摯な目を夜明に向けている。目の前にいる連中は、別に大量虐殺を望む連中ではないのだ。本当に、本当に人類のことを心の底から考えた結果、行き着いた答えが大量虐殺の先にしかなかったというだけの話。だから、夜明に彼等を責めるつもりは欠片ほども無い。だが、彼の答えは最初っから決まっている。

「・・・悪いが、その話は断らせてもらう」

『・・・理由を聞いても』

「まず第一に最大の要因。殺しが入ってるって時点でダメだ。俺は誰も殺さないって決めてるんだ。それに、それだけじゃない・・・テルミドール。確かにお前の言うとおり、今、この世界は壊死しようとしてるのかもしれない。他の誰でもない、人類の手で。そんな

風になってしまった世界を作ってしまったのも人類だ・・・でも」

一旦言葉を切り、画面の中に浮かぶＯＲＣＡのシンボルに視線を向ける。

「お前達みたいに人類のことを考えて、そうやって大量虐殺者の汚名を被ってでも人類を救おうとするお前達を作ったのも人類なんだ」

テルミドールは何も返さない。

「俺は、お前達みたいな連中を作った人類に可能性を懸けたいと思う・・・いや、違う。懸けるなんて大層な物じゃない。俺はただ、人を信じたいんだ」

『・・・』

「それに、はっきり言わせてもらうけど、お前達に人類の未来をどうこう出来たりなんてやれないさ。未来ってのは、現在（いま）を全力で生き抜いた人に、神様がくれるちょっとした贈り物なんだ。お前たちは現在（いま）を諦め、現在（いま）を見捨てた・・・そんな連中が人類に黄金の時代を齎す訳が無い・・・」

決意を瞳に込め、夜明は握った拳を突き出す。

「マクシミリアン・テルミドール、そしてＯＲＣＡ旅団・・・お前等は俺達が止める」

『・・・それが貴様の、月光夜明の答えか？』

「・・・あぁ」

そうか、と長い沈黙が流れる。やがて、ディスプレイから声が聞こえてきた。

『我らＯＲＣＡ旅団にも譲れぬ物がある。だが、覚えておこう・・・貴様の答えも』

メルツェルとヴァオーが立ち去っても、夜明は長いこと座ったままだった。やがて、既に温いを通り越して冷め切ったコーヒーに口を

つける。

「決戦の時は・・・近いな」

流星の葛藤　夜明の答え（後書き）

馬鹿って言う言葉は作者のためにあるに違いない。

何か意味不明なことを言ってますが、受け流していただけると嬉しいですはい。

次回はちょっと短いです。

血戦間近

「・・・」

流星は無言で夜空を見上げる。あれから、ＯＲＣＡからの勧誘があってから六日が経過した。選択の時は明日に迫っている。視界一杯に映る星達を見据え続ける。答えが返ってくるわけでもないのに。

「・・・俺は、どうすればいいんだろう？」

悩む、だが答えは出てこない。ふと、自分の曾爺様の姿を思い出す。彼も謎の人物達に連れて行かれたということは、自分と同じように勧誘されたのだろう。そして、『クローズプラン』なる物も聞かされただろう。だと言うのに、夜明は一切のブレを見せることなく振舞っていた。

「・・・何で俺は悩んでいるのだろう？」

自分と夜明を重ね、どうしようもない劣等感が胸中を満たす。どうして、夜明と同じようにすぐに決められないのか？　どうして、夜明みたいに己の信念を貫けないのか？　どうして、夜明のように強く在れないのか？

「曾爺ちゃんが、凄すぎるんだよな・・・」

「誰が凄いって？」

「うわぁっ！？」

いきなり目の前に現れた夜明に流星は度肝を抜かれる。引っくり返りそうになる流星の胸倉を掴み、ため息と共に引き上げる。

「何してんだよお前は・・・仮にもラインアークのリンクスだろうが、もっとしゃっきりしろ」

「う、うん・・・」

夜明を見つめ、流星は再びため息を吐いた。人の顔を見てため息を吐くなよ、と夜明は突っ込みながら腕を組む。

「悩んでるのか、ＯＲＣＡからの誘い？」

「・・・まあ・・・ね」

ついっと流星は夜明から視線を逸らせた。組んだ両腕そのままに、夜明は何も言わないまま流星に背を向ける。そのまま歩き去ろうとして、ふと立ち止まった。

「ま、何にせよ明日には選択しなきゃいけないんだ。どんな道を選ぶにしろ、殉じろ・・・お前の答えに」

それじゃ、と片手を上げて歩き去ろうとする夜明を流星が呼び止める。相変わらずの飄々とした視線が流星を貫いた。夜明の目に射抜かれるような居心地の悪さを感じながら、少し言葉を逡巡していた流星は言葉を吐き出す。

「・・・俺は、どうすればいいんだと思う、曾爺ちゃん？」

「・・・あのなぁ、お前の人生だろうが。俺が口出しして答えが得

られる訳無いだろうが。それとも何か？　お前は俺がＯＲＣＡに行けって言ったら、本当にそうするのか？」

流星の答えは沈黙。眼前で黙り込む流星に苛立ちを感じつつ、夜明は頭を掻きながら訊ねる。

「流星、お前はどうしたいんだ？」

答えは返ってこない。ならばと、夜明は質問を変える。

「答えられないなら、こう聞くぞ・・・お前はどうなりたいんだ？」

ＯＲＣＡ旅団に走り、大量虐殺の汚名を着てでも人類を未来に導くための礎となるのか？　ラインアークのリンクスとしてこの戦争を終わらせるのか？　それとも、何か別の形で見つけた答えに殉ずるのか？　夜明が聞きたいのはそういうことだ。だが、流星が返した答えは夜明が想像していたものの遥か斜め上を行った物だった。

「俺は・・・曾爺ちゃんに、月光夜明になりたい」

「・・・はぁ？」

「俺は何時だってそう思いながら、そう願いながら闘ってきたんだ」

返答の真意が分からず首を傾げる夜明に、流星は至って真面目な目を向ける。

彼は、大空流星は物心ついた頃から月光夜明に憧れていた。いや、憧れていたなんて物ではない。それは尊敬を超え、崇拝の域にまで達していた。そして、夜明の血が己の身体に流れていることを何よりの誇りとしていた。だが、夜明に崇拝の念と誇りを持つ内に、流星は自分自身に対してもある感情を持つようになる。

言いようの無い劣等感だ。夜明の専用機『不屈の翼（レイジングウィング）』は元々第四世代型のＩＳだった。夜明は『不屈の翼（レイジングウィング）』を己の想いだけで第五世代型へと進化させ、尚且つ完全に性能を引き出している。それは夜明が精神力を『不屈の翼（レイジングウィング）』の機動力の原動力として使っていることが如実に述べている。そんな夜明に比べ、自分はどうだ？

最初っから第五世代型のＩＳを使っている。なのに、なのに、流星の専用機『黄昏の翼（トワイライトウィング）』は未だに一次移行（ファースト・シフト）しか終えずにいる。それどころか、ワンオフアビリティーさえも発動できず、第五世代型の能力である、ＩＳを通して搭乗者の精神力を具現化することさえ出来ないでいた。唯一引き出せている性能と言えば、ＩＳ－Ｄシステムだけ。

己と夜明を比べ落ち込む流星を、周囲は何時だって慰めていた。仕方ないと、お前はお前なんだから比べる必要などないと。だが、慰めの言葉は余計に流星の心を抉っていった。比べる必要が無い。即ち、比べる価値さえ無いという事だ。

「俺は何時だって、どんな時だって曾爺ちゃんになりたかったんだ・・・」

「流星・・・」

搾り出すように、拳を握り締めながら囁く流星の頭に夜明の手が置かれる。

「馬鹿かお前は？」

そして、全力のヘッドバットが流星の顔面に突き刺さった。鼻血を噴水の如く噴き出す鼻を押さえ、のた打ち回っている流星を、夜明は腰に両手を当てながら見下ろす。

「何をうじうじ悩んでいるのかと思えば、そんな下らないことだったのかよ・・・流星、ちょっと来い」

「ちょ、ちょっとって何？」

「ちょっとはちょっとだ」

要領を得ない返事をして、夜明は流星の首根っこを掴んで引きずっていく。訳が分からぬまま引きずられていくと、二人はメガリスで一番高いと言われているビルの前にまでやって来た。目の前に聳え立つ摩天楼を見上げ、夜明はよしと頷く。

「登るぞ」

「え？」

口をポカンとさせている流星を無視し、夜明は助走をつけてビルの壁に飛びついた。壁に飛びついたまま滑り落ちることなく、やもりか何かのようにビルを登っていく。夜明が十メートルほど登ったところで漸く流星は正気を取り戻し、慌てて夜明の後を追ってビルを登り始めた。

「ひ、曾爺ちゃん！　こんなことして怒られたらどうすんのさ！？」

流星の叫ぶような問いに答えず、夜明はひたすらビルを登り続けた。

彼が目指すのは、見据えるのはただ一つ、ビルの屋上だけ。夜明が何も答えないので、流星も登ることに専念した。

「ファイトーッ！　イッパ～ツ！！」

一人リポビタンAをやりながら、夜明はフェンスを乗り越えて屋上へと辿り着いた。既に夜空は白み始めている。夜明に遅れること十数分、ひいひい言いながら流星も屋上にまで上がってきた。フェンスにしがみ付く流星に、夜明は笑いかける。

「やりゃ出来んじゃねぇの・・・流星、今お前は物理的に俺と同じ高さにいる。ここで例え話だ。このビルの高さが俺の、月光夜明の限界地点だとする・・・そこに到達しただけで、お前は満足か？」

「え？　そりゃ、まぁ・・・」

「ヘタレが」

突然の罵倒に流星は目を白黒させる。

「男ならもっと高い場所に行ってみる、とか！　ここが俺の限界地点じゃないはずだ、とか思って頑張れよ！」

その後、体育会系な罵倒を流星に浴びせ続け、いきなり夜明は真面目な表情を作る。

「はっきり言うぞ流星。お前は俺になれない」

夜明の断言。分かりきっていることではあるが、そこまではっきり言われると堪えるものがあるのか、流星は俯き加減に黙り込む。でもな、と続けながら夜明は表情を和やかなものに変えた。

「俺だってお前にはなれないんだ」

「え？　それってどういう」

「そのまんまの意味だよ。俺だってお前と一緒だ。その人みたいになりたい、その人その者になりたいなんて思っていた頃があった・・・いや、お前の方がまだマシだ。俺にはそう言う人が、少なくとも三人はいたからな」

「さ、三人も？」

夜明の予想外すぎる告白に流星は目を見開く。にはは、と苦笑いを浮かべ、夜明は肩を竦めて見せる。

「でも、生きている内に分かった。人は己以外には成りえない。俺は月光夜明にしか、お前は大空流星にしか」

「・・・うん」

「だから、お前は大空流星になれ。誰かに憧れるなとは言わない。でも、他人と自分を比べて、自分のことを卑下するな　んざ馬鹿のやることだ。『もし、自分が曾爺ちゃんみたいになれたら』とか『もし、自分が曾爺ちゃんみたいにやれたら』なんて思いに惑わされるな。お前が、他の誰でもない、月光夜明でもない、大空流星自身が選んだ答えがお前の宇宙の真理だ！」

「・・・うん！」

「ほう、良い表情をするようになったじゃないか。六日前から浮かべてた表情とは丸で別物だ」

突如、その場にいない筈の第三者が喋った。驚く二人を他所に、ビルの外壁に張り付いていた太陽が屋上に飛び出してきた。

「太陽。お前、一体何時から？」

「『ヘタレが』、辺りだな。感動的な場面遮って難だが、緊急事態だ。本部のブリーフィングルームに来てくれ」

「緊急事態って、何があったの？」

屋上から降りて（外壁から）いこうとする太陽に流星が訊ねる。腰に片手を当てながら振り返り、太陽はにやっと笑う。

「今朝方、企業連の本拠地『スティーフィア』から発進した複数の機影が確認された。数は十三。カラードランク１、オッツタルヴァと『ステイシス』、同ランク２、リリウム・ウォルコットと『アンビエント』、同ランク３、ウィン・Ｄ・ファンションと『レイテルパラッシュ』、同ランク４、ローディーと『フィードバック』、同ランク５、ジェラルド・ジェンドリンと『ノブレス・オブリージュ』、同ランク７、ロイ・ザーランドと『マイブリス』、同ランク１０、ハリと『クラースナヤ』、ＯＲＣＡランク２、ネオニダスと『月輪』、同ランク３、ジュリアス・エメリーと『アステリズム』、同ランク５、真改と『スプリットムーン』、同ランク６、ヴァオーと『グレディッツア』、同ランク７、メルツェルと『オープニング』。敵も本気で私達を潰しに来たようだ」

口元の笑みを深くさせる太陽。それはこれから闘いに赴く戦士のものでもあり、本能を剥き出しにして闘う野獣のものにも感じられた。

「血戦だ」

血戦、開始（前書き）

ども、サザンクロスです。まず、最初に言っておきます。これは血戦は血戦でも、最終決戦ではありません。最終決戦は、この次の次です。

太陽「おい、ちょっと待て。今回ので水没王子がＯＲＣＡに戻って、その次がＯＲＣＡとクルーゼとの全面対決だよな？　だとしたら、その次に戦いなんてあるのか？」

ヒントはギルバート・デュランダルの声。そして、この後の展開で登場する、アンサラーと言う巨大ＡＦ（アームズフォート）です。

後、この話は決戦前です。戦いは無いです。

血戦、開始

《夕暮太陽のブリーフィング》

『さて、それでは作戦の説明を始める。今回の戦いで、十三機のＩＳがメガリスに向かって飛行しているのが確認された。更にもう一機、別に動いているＩＳがいる。まぁ、九分九厘クルーゼだろうな。何をしてくるか分からない、こちらにも気を配っておいて欲しい。まず戦力の確認だが、こっちは私、夜明、流星、一夏、箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、黄昏、朔夜（さくや）、楯無の十二人。必然、一人が二人の相手をしなくてはならなくなる。それは私か夜明の役目だ』

『作戦は《一人一殺》だ。最低限、一人につき一人は撃破してもらう。敵は恐らく編隊を組んで飛んでくるだろう。だが、必然的に機動力が速いＩＳと遅いＩＳで微妙な差が出来てくる。そこを狙って、二人一組で奇襲をかける』

『奇襲の一組目は黄昏、朔夜だ。お前達はＩＳを起動してほとんど日が経っていない。互いをカバーし合えよ。狙いはＯＲＣＡのメルツェル、ヴァオーだ。この二人のＩＳは余り機動力がよろしくない。最初に遅れ始めるだろう。機動力がないからと言って、甘く見るなよ。死にたく無ければな』

『二組目は鈴、セシリア。鈴の相手はハリだ。お前の甲龍は皆のＩＳと比べて燃費がいいから、戦闘可能時間が長い。戦闘の時間が限定されているハリにとっては、相性最悪だろうな。どうにかして戦闘を引き伸ばして、可能なら捕獲してくれ。セシリア、お前はネオニダスだ。奴のＩＳ『月輪』はヴァオーの『グレディッツィア』に次いでシールドが硬い。だがお前のメテオデストロイヤーなら、一

撃で撃破可能だし、機動力もそこまでない。撃ち落してやれ』

『三組目はシャルとラウラだ。お前達は特に相手を指定しない。オッツタルヴァ、リリウム、ジュリアス、この三人以外で一番捕まえやすそうなのをやってくれ・・・信じてるからな』

『四組目、一夏と箒。一夏の相手は真改だ。正直言って一夏と真改じゃ実力にかなりの差があるが、零落白夜に対抗できるのは零落白夜しかない。零落白夜本家の実力を見せてやれ。箒、お前は一夏のサポートをしながら他の奴と戦闘だ。もし、無理だと判断したら、最悪逃しても構わない。一夏と協同して真改を叩き潰して、他の仲間の援護に回れ』

『ここから先は一人だ。まず楯無、お前はリリウムをやれ。お前とリリウムは浅からぬ付き合いなんだろ？　なら、手の内もそれなりに分かるはずだ。尤も、それはリリウムにも言えることだがな・・・』

『次は流星だ。残っている内の誰か一人でも構わない。確実に堕とせ』

『夜明、お前はオッツタルヴァをやれ。バルディッシュトワイライトの『モードイクシード』ならともかく、素の状態で奴の機動性に追いつけるのはお前のレイジングウィングしかない。更に可能なら、もう一機相手取ってくれ』

『最後に私だ。私は残った奴を叩き次第、お前達の援護に向かう。一番不利そうな奴のところに行くから、基本的に私の援護は期待するな。それから、最後に一つ・・・月並みな言葉しか言えないが、死ぬなよ、絶対にだ！』

「・・・二機の反応を確認、これは・・・奇襲か！　最後尾のメルツェルとヴァオー、敵からの攻撃に注意しろ！」

編隊を組んで飛翔する十三のＩＳ。先頭を飛んでいたオッツタルヴァが敵ＩＳの接近を感じて、最後尾を飛んでいるメルツェルとヴァオーに警告を送る。だが、二人が反応するよりも早くに漆黒と黄金の影が襲い掛かった。

「斬り捨て・・・御免！！」

「行くぞ、アカツキ！！」

漆黒のＩＳは連結させた二刀をヴァオーに振り下ろし、黄金のＩＳは両脇から潜らせるように高エネルギー砲『オオワシ』の砲口を覗かせ、赤い閃光を放つ。二機の攻撃で編隊から弾き飛ばされるメルツェルとヴァオー。

『我々に構わずに行け、オッツタルヴァ』

『俺達はやれるぜぇぇぇぇっっ！！！！！』

二人からのオープン・チャネルを受け、残った十一人は編隊を崩さずに飛び去っていった。

「さて、先ずは第一段階成功か・・・行くぞ、朔夜・・・朔夜？」

連結させた刀を分離させ、黄昏は左右に構える。隣りにいる朔夜から返事が無いので視線を向けてみると、表情を強張らせた朔夜が顔を青ざめさせていた。ビームライフルのグリップを握る右手も、小刻みにカタカタ震えている。叱咤激励の意味を込め、黄昏は朔夜の尻を引っ叩く。

「初の実戦だ。怖がるなとは言わない。私だって怖いからな・・・だけど、臆するな。矛盾してるようだが、臆せば死ぬぞ」

「・・・あぁ、分かっている・・・」

「落ち着いたな。なら、行くぞ！！」

二人は漆黒と黄金の旋風となり、メルツェルとヴァオーに打ち掛かっていった。

「超高熱源反応、狙いは・・・わしじゃと!?」

ネオニダスが己が照準されていることに気づいた瞬間、光学迷彩が施されたマントを投げ捨てたセシリアがメテオデストロイヤーの引き金を引いた。蒼の光がネオニダスを編隊から叩き出す。

「ぎん・・・ネオニダスさん！！」

偶々、隣りを飛んでいたハリがネオニダスへと向かう。そこへ、

「あんたの相手は私よ！！」

鈴音が投げた二本の青龍刀『嵐』が交差するように飛んできた。回避しようとした刹那、接近してきた鈴音から衝撃砲を撃ち込まれ、体勢を崩す。

「本体と引き離された・・・大丈夫ですか、銀翁？」

「大丈夫じゃよ。直撃の寸前にアサルトキャノンで相殺した。にしてもやってくれるのう、お嬢ちゃん方」

互いに同じ高度に滞空し、それぞれの得物を構えて対峙する。

「もう、お尻ペンペンで済ませられる年齢ではないぞ！」

ミサイルの雨が編隊を襲う。

「いきなりご挨拶だな！！」

ロイ・ザーランドが編隊から飛び出し、ガトリングとハイレーザーライフルで全てのミサイルを撃ち落した。黒煙が広がる中、オレンジ色の疾風がロイの四肢をがっちりと掴む。

「ぐっ！　分断される・・・！」

「悪いけど、付き合ってもらうよ！」

隠し腕と己自身の腕でロイを拘束したシャルはそのまま編隊から離れていく。シャルの後から続く形で、黒のＩＳが編隊に突っ込んできた。突っ込んできたＩＳを見て、編隊の中間辺りにいたジュリアスが目を輝かせる。

「彼女は！　・・・オッツタルヴァ！　彼女とは私が戦う！」

一応の断りを入れてから、ジュリアスは黒のＩＳを迎え撃つ。少し表情を顰め、オッツタルヴァは舌打ちするが、どの道交戦を許可するつもりだったので、気にしないことに。

「ジュリアス・エメリー、貴様とは戦うなと言われていたんだがな・・・」

「ふん、戯言は聞かん。あの時の決着、今ここに！」

「・・・いいだろう。太陽は、私達を、私を信じていると言ってくれた！　私、ラウラ・ボーデヴィッヒは友の心に全力で応える！行くぞシュヴァルツェア・レーゲン！！」

ゼーレクロイツから伸ばしたプラズマ刃を構え、ラウラはジュリアスに突っ込む。黒と白が交差した。

「「・・・」」

雪片零型、雪片淡月乃型。全くと言っていいほど同じ形をした刀を構え、真改と一夏は睨みあっていた。一夏の隣りで雨月と空裂を両手に握る箒がそっと一夏に囁く。

「余り時間はかけられないぞ一夏。私は最低のノルマである一人を逃してしまっている」

「あぁ・・・即行で決着つけるぞ、箒！」

「分かっている」

武器を構える二人。真改が吼える。

「・・・来い！！」

「ありり。箒ちゃんってば、ノルマの一機を逃がしちゃったんだ・・・ま、太陽か夜明が何とかするでしょ。それじゃ、私達は私達でおっ始めましょ、リリウム」

編隊を組んで飛ぶ四機を見送りながらバスターソードを肩に担ぎ、楯無はリリウムを見る。それに対し、リリウムは少しばかり悲しげな表情を浮かべていた。

「楯無様。やはり、ラインアークの味方になったというのは本当だったんですね」

「まぁねぇ。私にとっちゃ、戦争の勝敗なんかよりも、惚れた男の方がよっぽど大事だから」

「・・・自由な貴方が、時々とても羨ましくなります。でも、それ

とこれは話が別・・・カラードランク2、リリウム・ウォルコット、アンビエント、参ります！！」

「二十代目更識楯無！　来なさい！！」

「この反応・・・トワイライトウィングか！」

回避行動に移った四機のど真ん中を、ビームマグナムの砲撃が通過する。砲撃の余波で編隊（もう編隊も何もあったものではないが）

が乱れる中、ＩＳ－Ｄシステムを発動させた流星が紅と蒼の大型ウィングスラスターを広げてウィン・Ｄ・ファンションへと手を伸ばす。掌ではパルマ・フィオキーナの砲口が輝いていた。

（先手必勝！　少なくとも一機は落とす！）

「回避が、間に合わないか・・・！」

回避が間に合いそうも無く、ウィン・Ｄの顔が悔しそうに歪む。だが、流星の伸びきった腕を何者かが弾き返した。慌てて姿勢を制御しながら、流星は謎の襲撃者に視線を向ける。そして、驚愕に目を大きく開いた。

「お前は・・・ラウ・ル・クルーゼ！！」

「答えを聞きにきたぞ、大空流星」

担ぐように構えた大型ビームライフルの銃口を流星に向けるクルーゼ。ちらっと、オッツタルヴァたちが飛び去っていった方向を見る。既に、追いつけない距離にまで離れていた。仮に追いつける距離だったとしても、目の前の男が許してはくれないだろう。

「・・・なら、お前を先に倒すだけだ！！」

右の大型ウィングスラスターからバルディッシュを引き抜き、流星はクルーゼを睨みつけた。流星の視線に怯むことなく、クルーゼは底の見えない笑みを浮かべるだけだった。

「・・・おいおい、何で四機残ってるんだ？　ここには三機しか来ないはずだろ」

呆れたように呟く夜明。夜明の目の前では、オッツタルヴァ、ウィン・D・ファンション、ローディー、ジェラルド・ジェンドリンが滞空している。夜明を警戒しているのか、何も仕掛けてこない。十秒ほどの膠着状態が続く。いきなり、オッツタルヴァが何も言わずに夜明へと突っ込んだ。それが合図だったかのように、他の三機は夜明を通り過ぎていく。

「だ、待ちやがれ！！」

「貴様の相手は俺だ、不屈の」

琥珀色のレーザーが身体を掠める。オッツタルヴァの砲撃に応じながら、夜明は考える。三機も逃してしまった。だが、

「ま、大丈夫だろ」

夜明はどこまでも楽観的に呟く。それもその筈だ。何故なら、彼の後ろには敵にとっては最悪の死神、味方にとっては最強の守護神がいるのだから。

「背水の陣とはよく言うが、俺の場合、背神の陣だな」

ケラケラと笑っていると、オッツタルヴァに照準を合わされた。笑みを引っ込め、夜明はオッツタルヴァを睨む。レーザーバズーカを構えながら、オッツタルヴァはゆっくりと高機動戦闘への準備を始める。

「不屈の翼。大袈裟な伝説も今日までだ」

「ま、俺としては伝説になったつもりなんて気の先ほども無いんだけどな・・・来いよ!!」

「・・・おい、どういうことだ？」

メガリス上空。メガリス防衛の最後の砦、夕暮太陽は腕を組みながら不機嫌そうに呟く。目の前に、三機のＩＳがいる。しかも、ウィン・Ｄ・ファンション、ローディー、ジェラルド、ジェンドリン。何れも実力者ばかりだ。

「相手は一人・・・ここは誰か一人が彼女を抑え、残った二人がメガリスに向かうべきだな」

「いや、それは絶対にダメだ。彼女は私達が三人がかりで漸く勝てるほどの力を持っている。一対一で挑むなんて、はっきり言って自殺行為だ」

ローディーの言葉にウィン・Ｄが反論する。ジェラルドは元々強め

ていた警戒心を更に強め、太陽を睨んでいた。警戒心と殺意を剥き出しにぶつけてくる三人を無視し、太陽は文句を言うべく、夜明へのプライベート・チャネルを開いた。

『おい夜明』

『あぁ？　何だ太陽？　こちとら今オッツタルヴァと闘ってて忙しいんだけど！！』

『何で私にところに三人も来ているんだ？　最高でも二人までの筈だぞ』

『誰かがミスったんだろ！　悪いけど、どうにかしてくれ！！』

無茶振りもいいとこだ。太陽は深々とため息をつき、了解の意を示す。

『分かった・・・ただ一つだけ条件がある』

『あ？　何だ、言ってみ』

『お前の子を孕ませろ』

『・・・パードゥン？』

妙に発音の良い英語で聞き返す。だが、太陽はククク、と笑みをこぼした。

『約束だぞ。後、これは決定事項だ。お前に拒否権は無い』

『太陽様あああああああああああああ』

プライベート・チャネルを通して頭に響く夜明の悲鳴をシャットダウンし、太陽はオールデリートとライオンハートを構える。心なし、三人に与えられる重圧が高まった。

「やれやれ、無茶苦茶な相方を持つと苦労する

『頼みごとはどんな無茶でもやってのける』

『どんなに命に危険があろうとも、絶対に死なない』

この両方をやらなきゃいけないのが、夜明（あいつ）の相棒の辛いところだ。

誇りの貯蔵は十分か？　命を賭す覚悟は？　・・・私は出来ている」

戦い

「はっはぁーっ！！」

豪快な爆笑と共に壁と錯覚させるほどの弾丸が飛来する。ヴァオーの両肩に装備されたガトリングキャノンが銃身から薬莢を吐き出しながら弾丸をばら撒いていた。朔夜は小刻みな高機動でガトリングキャノンをかわし、時折、弾丸の間を縫うようにして飛んでくるバズーカをシールドで防ぐ。

「典型的なパワーファイターか！」

回避行動から急降下に移り、身体を逆さまにさせたまま背中に装備されたオオワシの砲口を脇の下から潜らせる。放たれた二発のレーザーは過たずヴァオーを直撃する。だが、

「痛くも痒くもねぇぜ、お嬢ちゃぁぁぁん！！！」

重厚すぎるＩＳ装甲に守られたヴァオーには傷一つついていない。再び襲い掛かってくる弾丸の嵐を、朔夜はシールドを構えてやり過ごす。一方、メルツェルと闘っている黄昏は。

「せぁっ！！」

「ぐっ・・・」

両手に握った一対の実体剣、『不知火』と『雲龍』を閃かせ、黄昏はメルツェルを圧倒していた。メルツェルは両手に握ったライフルで応戦するが、黄昏はライフルの銃口から放たれるライフル弾を紙

一重で回避していく。二刀の柄を連結させた双刃薙刀、『蒼天』を大上段に構え、渾身の力で振り下ろした。蒼天をクロスさせたライフルの銃身で防ぐメルツェル。

「蒼天！」

黄昏が名を呼ぶ。蒼天の刀身が輝きを帯び始め、ビーム刃を発生させる。体重をかけてあっさりとメルツェルがクロスさせていたライフルを切り裂き、黄昏は返す刀でメルツェルの装甲を浅く切り裂いた。

「中々、やる・・・！」

メルツェルは後ろへと飛び退りながら状況を考える。ライフルが切り裂かれたとは言え、まだ両肩の武装が残っている。だが、メルツェルが装備しているのはグレネードと大型ミサイル。どちらも高威力の物だ。下手に撃てば、爆発に巻き込まれる。そして黄昏のＩＳ『スサノオ』は超近接特化型。

「切り裂く！！」

連結を解除させた不知火、雲龍を構えて突っ込んでくる黄昏に、自分自身が巻き込まれないようにグレネードや大型ミサイルを当てるのは至難の業だろう。状況はかなり芳しくない。だと言うのに、メルツェルは口元に笑みを浮かべていた。

「まぁいい、この戦闘においての我らＯＲＣＡ旅団の目的は時間稼ぎだ」

その呟きは、目の前の敵を撃破するのに必死な黄昏に届いてはいな

かった。

連結された青竜刀『嵐』が空間を切り裂くように翔る。眼前に迫る嵐をハリは両肩のグレネードで吹き飛ばした。グレネードの爆発で発生した黒煙の中から飛び出してきた嵐を空中でキャッチしながら、鈴音は両肩、背中のストライククロー『龍牙』をハリに向けて伸ばす。ハリはレーザーブレードで龍牙を弾き返そうとするが、身体に当たる寸前に龍牙は空中で停止。四本の牙の間から砲口が覗き、レーザーブレードを振り切った状態のハリに衝撃砲を叩き込んだ。

「ぐはっ！！」

体勢を崩したハリに鈴音が嵐を振り下ろす。嵐その物は防いだが、嵐の刀身から発生した衝撃刃でハリは再び吹き飛ばされる。

「これで！」

鈴音は全ての龍牙を伸ばして、ハリに向かって高速の打突を放ちながら衝撃砲も連射させる。超人的な動きで龍牙の打突と衝撃砲の連射を回避しながら、ハリは持ち替えたアサルトライフルで龍牙を撃ち返した。龍牙を戻しながら、鈴音は嵐を投擲する。嵐を回避するハリ。直後、瞬間加速（イグニッション・ブースト）でハリの後ろに回っていた鈴音が飛んできた嵐を受け止め、強烈な一撃を打ち込んだ。嵐で切られる寸前、ハリは鈴音をレーザーブレードで切り裂く。

「「・・・」」

左肩の龍牙を切り飛ばされた鈴音と、腰に強烈な一撃をもらってＩＳが思うように動かなくなったハリ。一瞬、両者の視線が交差して、黒と赤が激突した。

緑の巨大な光球を蒼い閃光が撃ちぬく。爆裂音と衝撃が拡がり、ネオニダスとセシリアの真下にある海を緑と蒼に染め上げる。すぐにセシリアはメテオデストロイヤーからエネルギーパックを排出させ、新しいものをまだ熱を持っている銃身に装填させた。その間にネオ

ニダスはセシリアへと肉薄、プラズマライフルとハイレーザーライフルを交互に撃つ。リフレクタービットで砲撃を防ぐ。遠～中距離からの攻撃ではダメだと感じたのか、ネオニダスは加速し、リフレクタービットの間にプラズマライフルの銃口を捻じ込んだ。

「レディーの領域に無理矢理入ってくるなんて、紳士ではありませんわね！」

銃口から集束されたプラズマが放たれる寸前、セシリアはメテオデストロイヤーの長大な銃身をネオニダスの脇腹に叩きつけて吹き飛ばした。プラズマライフルから放たれた砲撃は僅かにそれ、セシリアの肩を少し焼いてあらぬ方向へと飛んでいく。ネオニダスと距離が離れ、セシリアはメテオデストロイヤーの引き金を引いた。放たれた蒼の閃光を、ネオニダスはアサルトキャノンで相殺する。再び、蒼と緑に空間が染まった。

（やはり、真っ向正面からの射撃では決定打は与えられませんわね）

（近距離からアサルトキャノンをぶち込めれば・・・しかし、あのちょこまか動くビットが面倒だの）

互いを睨み合いながら、勝機を窺う。

（やはり、リフレクタービットの跳弾しかありませんわね）

（・・・って、いかんいかん。わしの目的はあくまで時間稼ぎじゃったわい。ハリは・・・予定通りやられておるな）

「セシリア・オルコット、ブルー・ティアーズ！　目標を狙い撃ちますわ！」

「ふっ、相手をしてやるわい、お嬢ちゃん」

アサルトライフル、ショットガン、マシンガン、グレネードの様々な銃器の連射がロイ・ザーランドを襲う。文字通り、頭上から雨のように降り注ぐ弾丸をロイは死ぬ気で回避しまくっていた。

「ちょ、これ何て無理ゲーだよ！！」

とか言いながら、隙は見逃さずにしっかりと反撃してるあたり、ロイの実力の高さが窺える。ロイが放った、双発のハイレーザーがシャルを掠めた。微かに顔を歪め、シャルは両手にアサルトブレードを展開させる。ロイ目掛けて急降下しながらアサルトブレードを振り下ろす。アサルトブレード二本の斬撃はハイレーザーライフルの銃身で受け止められた。

「そらよっ！」

アサルトブレードを受け止めたままガトリングガンを乱射させる。腹部にガトリングの乱射が直撃してシャルは後退を余儀なくされた。後方へと押されながら、負けじとシャルは四本の隠し腕にアサルトダガーを握らせ、ロイに投擲する。内三本は弾かれたが、一本がロイの右脹脛に突き刺さった。

「いって・・・！」

「ごめんなさい！」

一言謝り、シャルは瞬間加速（イグニッション・ブースト）で突貫し、右のアサルトブレードをロイの左肩に突き立てた。更にアサルトブレードの柄に盾殺し（シールド・ピアース）を押し付け、炸裂させる。盾殺し（シールド・ピアース）のリボルバー部分から薬莢が吐き出され、ロイの身体から左腕が吹っ飛んだ。

「謝るくらいなら最初からやらないでくれ！！」

残った右腕にハイレーザーライフルの引き金を引いてシャルから距離を取る。涙目になった双眸でアサルトブレードと盾殺し（シールド・ピアース）で吹き飛ばされた左肩を見た。

「・・・まだ、やりますか？」

「ミッション放棄したいのは山々なんだが、俺みたいな独立傭兵はそんなこと出来ないんだよな！！」

シャルの問いに、ロイは両肩のミサイルを全弾発射させて応えた。

漆黒の斬撃を白が受け流す、白の砲撃を漆黒が回避する。ラウラを蹴り飛ばしたジュリアスはそのままの距離を保って射撃を続けるが、ラウラは全てを最小限の動きでかわし、一瞬でジュリアスに接近した。拳と一緒に突き出されたプラズマ刃がジュリアスを掠める。

「そう簡単にはいかないか、ならばこれはどうだ！！」

ジュリアスの肩からレールガン、ミサイルが放たれる。レールガンをゼーレクロイツの速射、ミサイルをワイヤーブレードで切り裂いた刹那、突進してきたジュリアスにハイレーザーライフルの銃口を腹部に打ち付けられた。呼吸が止まったラウラの腹部で銃口が光り、追撃を放つ。白い輝きに弾き飛ばされ、ラウラは海中へと叩き込まれた。ジュリアスが更に追撃をかけようとした瞬間、海中から八本のワイヤーブレードが伸びてきた。

「何っ！？」

咄嗟に回避行動へ移るが、両足を絡めとられ、海中へと引きずり込まれた。ワイヤーブレードに引っ張られ、かなりの勢いで近づいてくるジュリアスを、大きく拳を引いたラウラが迎える。ラウラの拳は過たずジュリアスの顔面を捉えた。海中から叩き出したジュリアスをラウラが追う。海面から飛び出し、海水を滴らせながらすぐに高速戦闘を始める。

「はぁぁぁぁっっ！！！」

全身全霊で雪片を振り下ろす。だが、真改は一夏全力の一撃を容易く避け、カウンターの拳を打ち込んだ。一夏を攻撃して硬直した瞬間を狙い、箒が紅蓮の砲口で真改を捕捉する。

「堕ちろ！！」

拡散されたレーザーを真改は全てかわしながら移動する。高速で移動する真改を紅蓮の砲口で追い、箒は再び紅蓮の引き金を引いた。さっきの砲撃とは倍ほどの数のレーザーが拡散して真改へと迫る。

「零落白夜」

構えた淡月が燐光を放ち始める。大気中に白の輝跡を残し、真改は目にも止まらないどころか、映らない速さで全ての拡散レーザーを切り裂いた。紅を白で打ち消し、真改は零落白夜を解除させて二人を睨む。真改の双眸を覆うバイザー越しの視線。一夏と箒は己の刀を構え、真改へと切りかかった。

「はいっ！！」

水の刃を纏ったバスターソードが振り下ろされる。水によって大きさが増したバスターソードの切っ先がリリウムを捉えようとする。だが、リリウムはバスターソードを回避し、アサルトライフルを連射させながら楯無に突っ込んだ。自身の周囲を旋回していたアクア・クリスタルで水の壁を作ってアサルトライフルを防ぐ。

「アクア・クリスタル！！」

楯無の号令を受け、アクア・クリスタルから水の弾丸が放たれた。リリウムは放たれる数十発の水弾を回避し続けながら楯無に接近する。愚直に真正面から突っ込んでくるリリウムを迎撃しようと、バスターソードを突き出した。だが、そこにバスターソードで貫くはずのリリウムの姿が無かった。

「え？　・・・っ！」

咄嗟に後ろを振り返ろうとするが、後ろへと回っていたリリウムに両肩を掴まれ身動きが取れない。リリウムの膝蹴り、踵落としが楯無を海へと落下させる。

「・・・ちょっとちょっとぉ。格闘技が出来るなんてお姉さん聞いてないよ？」

「これでも、カラードランク2ですので」

海中から飛び出してきた楯無にリリウムは優雅に一礼して見せた。
一杯食わされたのが愉快なのか、楯無は唇を歪めてバスターソードを掲げ、ハイストリーム・アテナのワンオフアビリティー、水の楽園（アクア・ワンダーランド）を発動させる。

「それじゃ、お姉さんも本気だしちゃおうかな」

海が盛り上がり、数多の槍へと変化していく。射出される水の槍。
高速で回避するリリウム。バスターソードを振り上げる楯無。

「行くよリリウム！！」

「楯無様、お覚悟！！」

流星のバルディッシュとクルーゼのビームサーベルが火花を散らしあう。弾かれたように離れ、流星はレイジングハートを射撃モードへ移行した。

「何しに来たんだよ、あんたは！！」

「言っただろう、君の答えを聞きに来たと！！」

返答しながらレイジングハートから放たれた砲撃を避け、クルーゼは背中の大型スラスターから十一基ある内、三基のドラグーンを射出する。三方向から放たれるビームを防ぎ、或いはかわしながら、流星はクルーゼに疑問の目を向ける。

「俺の答え？　・・・まさか、お前もＯＲＣＡ旅団のクローズプランとかってのに関わってるのかよ！？」

「少々誤解があるようだな。元々、クローズプランは私が立ち上げたものだ。そして、ＯＲＣＡ旅団の皆は私に賛同し、協力してくれる同志だ！！」

「あんたがＯＲＣＡを煽動したってことかよ！！」

「確かに私が言ったことは煽動だっただろう。だが、同時に事実でもある！！　人は、己が始めた壊死を己で止めることは出来ぬさ！！」

「そんなことはない！！」

バルディッシュの切っ先で円を描いて二基のドラグーンを破壊し、残りの一基をパルマ・フィオキーナで消し飛ばす。未だに輝くのを止めない左の掌を握り締め、流星は声高に己の答えを叫んだ。

「人は、人は自分の力で未来を切り開けるんだ・・・お前やＯＲＣＡ旅団が思ってるほど、人は愚かでもないし、己を変えられないほど弱くも無い！！　俺はどこまでも愚直に人を信じ続けるぞ、ラウ・ル・クルーゼ！！」

唯、ひたすらに人を信じ続ける、それが流星の答えだ。・・・血は争えないと言うべきか、それは夜明と同じ答えだ。

「ならば、その未来を切り開く力とやらを今すぐ全ての人に与えて見せろ！！」

「・・・あんたを倒した後でな！！」

始まりへと

夜明の両手に握られた二挺のウィングスターが連続で緑の閃光を放つ。迫る閃光を全てロール回避し、オッツタルヴァは左手のレーザーバズーカの引き金を引いた。砲口から放たれた琥珀色のレーザーが夜明を貫こうと襲う。縦軸回転しながら琥珀色のレーザーをかわし、ウィングスターを連結させて夜明は銃口をオッツタルヴァに向ける。同時に両肩の装甲が開き、数十発のマイクロミサイルが高出力ビームと共に吐き出された。

「当たりさえしなければ、どうと言うことは無いだろうが！」

急上昇して高出力ビームを避け、レーザーバズーカの射撃でミサイルの半分を破壊する。爆発の中から飛び出してきた、生き残っているミサイルをアサルトライフルの速射で全滅させた。微かな蒼銀の光がオッツタルヴァの視界を染め、スターライザーを握った夜明が突っ込んできた。

「ちぃっ！」

振り下ろされたスターライザーをアサルトライフルの銃身で受け止める。

「この間よぉ！　ＯＲＣＡ旅団の連中にクローズプランとかいう計画に誘われたんだけどさぁ！！」

「それがどうした！！」

数秒の鍔迫り合いの後、オッツタルヴァは夜明を弾き飛ばし、上へ

と逃げた夜明にレーザーバズーカの引き金を絞る。上昇しながらレーザーバズーカの連射をかわし、或いは両腕に展開させたビームシールドで防ぎながらディバイン・カノンを展開、小口径弾の雨を降らせる。

「まぁ、んなことはどうでもいいんだ・・・でもよぉ」

一頻りディバイン・カノンを連射させ、夜明は蒼銀の残光を描きながらオッツタルヴァの頭上を飛び越える。振り返りざま、オッツタルヴァが二発のミサイルを発射した。

「そろそろ、本気でやったらどうだ、オッツタルヴァ・・・いや」

ミサイルを撃ちぬき、逆さまの体勢で全ての武装を展開させる。マルチロックオン用バイザーが夜明の双眸を覆い、赤い幾つものロックオンカーソルをオッツタルヴァに重複させて捉えた。己のＩＳからアラートを受け、オッツタルヴァは慌てて夜明の射程範囲内から逃れようとする。だが、もう遅い。放たれた閃光の濁流がオッツタルヴァを飲み込み、引き裂き蹂躙した。

「マクシミリアン・テルミドール」

レイジングウィング最強の砲撃、スターライト・フルバーストでステイシスのシールドエネルギーが底をつく。装甲の至る所から黒煙を噴き出している。それでもオッツタルヴァは体勢を立て直そうとする。だが、

「メインスラスターとＰＩＣがイカれただと！？」

ステイシスがオッツタルヴァの要求に応えようとしなかった。メイ

ンスラスターは推進力を生み出さず、ＰＩＣは発動していない。黒い線を空中に引きながら、オッツタルヴァは落下していく。

「まさか・・・狙ったか、レイジングウィング！？」

「ま、頑張ってな」

「よりによって海上で・・・駄目だ、飛べん！　・・・これが、私の最後だと言うのか・・・認めん、認められるか、こ」

最後まで言うことなく、オッツタルヴァは海中へと没した。全ての武装を待機状態に移行させながら、夜明はオッツタルヴァが消えた海面を注視する。何の変化も起こらない。オッツタルヴァが水没する際に発生した波紋が消え、海面は穏やかに波打っている。

『オッツタルヴァ、ステイシス、反応ロスト』

レイジングウィングが完全にオッツタルヴァを撃墜したことを告げた。それでも、夜明は海面から目を逸らそうとはしなかった。数分後、漸く視線を持ち上げた夜明は空を見上げる。その顔は何を思っているのか、険しい表情を浮かべていた。

「さて、どう出る？　ＯＲＣＡ旅団、ラウ・ル・クルーゼ・・・」

オールデリートを振ってウィン・Dを吹き飛ばし、ライオンハートを乱射させてローディーを牽制する。ジェラルドが両肩の三連装大型レーザーキャノンを放つが、太陽はそれすらも余裕でかわす。ライオンハートの実体剣を広げ、横薙ぎに振るってウィン・Dに叩きつける。ウィン・Dが防御に構えたレーザーブレードを弾き飛ばし、すぐに実体剣を折りたたんで銃口を押し付けた。

「うっ・・・！」

ライオンハートの砲撃で吹き飛ぶウィン・D。太陽の背後からジェラルドがレーザーブレードを振り上げて襲い掛かる。爪先と踵にある小型ビームサーベル、グリフォンを発動させて回し蹴りを放つ。レーザーブレードとグリフォンがぶつかり合い、火花が飛び散る。足と剣、異色の鍔迫り合いを続け、太陽は強引にジェラルドを吹き飛ばした。

距離が離れたウィン・Dとジェラルドには目も呉れず、太陽はローディーに向き直って瞬間加速（イグニッション・ブースト）で突っ込む。ミサイルとバズーカを避け、擦れ違いざまにもう一度瞬間加速（イグニッション・ブースト）しオールデリートで切り裂く。更に百八十度方向転換、瞬間加速（イグニッション・ブースト）して、実体剣を広げたライオンハートで断ち切る。ローディーの真上へと飛翔し、急降下しながら、両手の剣でクロスさせるように切った。

「ダメージ危険レベルが中を超えたか・・・まさか、ここまでとはな」

一度集まり、ローディー達は太陽を睨んだ。三組の視線に対し、太陽は何する訳でもなく、武装を展開させた両手をダランとぶら下げている。

（相手はカラード上位ランカー。今はこっちが押しているとは言え、長引くと不利だな・・・トランザムで一気にカタをつけるか）

バルディッシュトワイライトの展開装甲がスライド展開、紅の粒子を放ち始めた。前屈みの体勢になり、突撃のために背部スラスターを噴かせる。三人も太陽の突撃に備えて構えた。そして、勝負が決するであろう一瞬が始まろうとしたその時、衝撃が太陽を襲った。背中に散弾を叩きつけられた衝撃を感じ、振り返る。

「新手か！？」

少しばかり動揺しながら太陽は振り返る。三人は背を向けている太陽に攻撃しない。何故なら、彼ら自身が新手の登場に少なからず動揺していたからだ。

「援軍か？　そんな話は聞いてないぞ！」

「いや、援軍などではない、あれは・・・」

所々を失い、輝が入った薄緑の装甲。それはシャルに倒されたはずの男。

「オールドキング・・・生きてたか」

「どうやら、俺はまだ人を殺せるらしいからな」

彼、オールドキングは生きていた。と言っても、全身に重度の火傷を負い、夜明にコアを握りつぶされたＩＳ『リザ』は武装、正確にはさっき太陽に放ったショットガンを最後に全てを失っている。満身創痍、飛行するのがやっと、と言った状態だ。

「そんな身体で来たのか・・・死に損ないに用は無い。今度こそ死ね」

無機質な声で言いながら、太陽は肩のフレイアを引き抜く。投擲用トマホークの刃部分がビームで輝き始めた。振りかぶり、フレイアを投げる。甲高い音を上げながら、回転してフレイアはオールドキングへと飛んでいく。

「・・・」

何がしたいのか、全く真意が見えない笑顔を浮かべながら、オールドキングはフレイアを見据えている。回避行動を取ろうともしない。そのまま、フレイアはオールドキングの首を吹き飛ばした。三人は勿論、太陽さえも唖然とする。

「・・・何がしたかったんだあいつは？　まぁいい。こっちに集中すなっ！？」

戻ってきたフレイアを受け止め、太陽は三人に向き直ろうとする。だが、攻撃を始めようとした瞬間、後ろから羽交い絞めにされた。まさかと思いながら振り返る。首を失ったオールドキングの屍が太陽を拘束していた。

「嘘だ」

太陽の言葉を掻き消すように屍が自爆する。一瞬で太陽は轟音と黒煙、衝撃の中に呑みこまれた。

「し、死体が動くとか、ゾンビじゃないんだぞ・・・っ！！」

黒煙の中から、よろよろと太陽が出てきた。刹那、ローディーのバズーカが直撃する。再び、太陽は黒煙に呑みこまれた。黒煙に向けてジェラルドが三連装大型レーザーキャノンを撃つ。直撃音、黒煙が弾け飛び、高威力の砲撃でかなりの損傷を負った太陽が姿を見せる。ウィン・Dのレールガンと双発型ハイレーザーキャノンが追撃をかける。

「・・・く、そっ。油断した・・・」

忌々しそうに吐き捨てながら、太陽は自身とバルディッシュトワイライトのステータスを確認する。お世辞にも芳しいとは言えない・・・と言うか最悪だった。三人が突撃の構えを見せ、太陽は死を覚悟してオールデリートとライオンハートを構えた。その時。

「誰だ？　ＯＲＣＡ旅団のメルツェルか・・・何？　オッツタルヴァが堕ちた!?　ハリも敵に捕まっただと・・・あぁ、分かった」

連絡を受けたローディーの顔色が青くなっていく。ローディーが指示を出すと、ウィン・Ｄとジェラルドは彼に従い、一緒に去っていった。遠くなっていく三人の後ろ姿を見送りながら、太陽は釈然としないものを胸中に抱く。

「勝った・・・のか？」

とても、そうとは思えなかった。

『・・・あぁ、私だ。カラードランク1、オッツタルヴァは行方不明扱いになった。ハリも、予定通りラインアークに掴まっている。お前がＯＲＣＡに帰還し、ハリがあの装置を発動させればクローズプランが開始できる・・・あぁ、分かった。人類に、黄金の時代を・・・』

望まぬ帰還

「「う～ん・・・」」

月光夜明、夕暮太陽は悩んでいた。理由は言わずもがな、先日の戦闘でいきなり撤退していったリンクスたちのことである。カラードのリンクスは分かる。ランク１のオッツタルヴァが海中に没し、ハリが捕まった。更に、リリウム以外のリンクスはかなりの手傷を負っている。特に、ロイは片腕を吹き飛ばされ、戦闘を続けるのが困難になっていた。だが、ＯＲＣＡのリンクスはほとんど無傷の状態だ。こちら側はそれなりに消耗していた。なのに、リンクスはＯＲＣＡも含めて撤退している。

「どういうことだと思うよ？」

夜明の問いかけにさぁな、と太陽は返す。と言うか、そうとしか返事が出来なかった。

「そう言えば、あのハリとか言う奴はどうなったんだ？」

鈴音との戦闘で企業連のリンクス、ハリが捕えられた。当然と言うべきか、今はＩＳを取り上げられ、ボディチェックを受けた状態で尋問室にぶち込まれている。色々と聞き出されてるらしい。と、聞いていた夜明はそう太陽に伝える。

「何と言うか、膠着状態だよな」

「企業連も何のアクションも見せないからな・・・はてさて、どうなることやら」

企業連とＯＲＣＡ旅団、ラインアークの総力戦から二日が経過しようとしている。比較的ダメージが少なかった夜明のレイジングウィングや楯無のハイストリーム・アテナは既に整備が完了しているが、それ以外のＩＳは五割程度しか終わっていない。特にバルディッシュトワイライトは損傷が酷く、応急処置も出来ないような状態だ。

「ま、何かしらの動きがあるだろうさ」

「そう願おう」

座っていた長椅子から腰を上げたその時、二人の目の前に一枚のウィンドウが現れた。空間投影ディスプレイに出てきた鈴音を見て、夜明は僅かに眉を持ち上げる。

「あ、どしたよ鈴音？」

『夜明、太陽は一緒に・・・いるわね。二人とも、悪いんだけど今すぐにブリーフィングルームに来てちょうだい。何か、企業連の代表がここに来てデュランダルさんと話し合うらしいから』

「企業連の代表だぁ？　・・・分かった、すぐに行く」

返事をすると空間投影ディスプレイが消える。企業連の代表？　二人は揃って首を傾げながらも、急いでブリーフィングルームへと向かった。

二人がブリーフィングルームに入ると、既にデュランダルと初老の男が向かい合う形で長机に座っていた。流星と冬華、楯無や一夏達もいる。この男が企業連から来たという代表だろうと二人は見当をつけて、デュランダルの後ろに並ぶ。

「デュランダル首長、その二人は？」

「不屈の翼と深紅の死神、とお答えすればお分かりになるでしょう。それよりも、ご自身が名乗るべきではないですかな？」

デュランダルの指摘に、初老の男は頭を下げて名乗った。

「失礼、名乗るのが遅れた。私はアキラ・ダテ。企業連の代表として来た。話し合いの場を設けてくれたことを感謝する」

「カラードランク3、ウィン・D・ファンションだ」

「カラードランク4、ローディー」

ダテの後ろにいる男女が名乗る。女は苛烈な気性を表すような目つきの美人、男は老練という言葉がぴったりな雰囲気を放っている。この二人が護衛であることは、容易に想像が出来た。

「ラインアーク現首長、ギルバート・デュランダルだ」

「月光冬華」

「お、大空流星です」

互いの紹介も終わり、早速本題へと入った。

「では、単刀直入に聞こう・・・何故、ラインアークは理由も無く企業連を攻撃してきたのかを?」

ダテの問いに激昂した冬華が怒鳴る。

「理由も無く、だと?　ふざけるな!!　十年前に貴様ら企業連がユニウス1を破壊して数億の人を殺したからだろうが!!」

「何を訳の分からないことを言っている!　十年前と言うならば、貴様らラインアークがアルテリア・ウルナを破壊したことを忘れたとは言わせないぞ!!」

ウィン・Dも激昂した様子で怒鳴り返す。十年前、確かにラインアークのコロニーの一つ、ユニウス1は企業連の手で破壊された。だが、企業連の主要施設の一つ、アルテリア・ウルナがラインアークの部隊に破壊されたと言うのも事実。二人の言っていることは間違ってはいない。それでも、何か決定的な食い違いがある。怒鳴りあう二人をデュランダルとローディーが諫めようとする。二人は止まろうとしない。

「はぁ～、餓鬼かっての・・・太陽」

「ん」

夜明の指示に軽く頷き、太陽は拳を壁に叩き込んだ。部屋全体が揺れ、部屋内にいた全員がよろめく。冬華とウィン・Dが黙ったのを見て、夜明はすかさず話を進めさせようとする。

「まぁ、お互いに言いたいことはあるだろうがお二方。取り合えず、怒鳴りあうのは互いの言い分を聞いてからでも遅くは無いんじゃないか？」

やんわりと、だが有無を言わせぬ夜明の口調。夜明に圧され、二人は互いに言葉の矛を収めた。黙った二人に満足げにな様子で頷き、夜明はダテに視線を向ける。

「んで、え～っと、ダテさんだっけか？　取り合えず、何で企業連がユニウス1を破壊したのか聞かせてもらってもいいか？」

「何でと言われても・・・十年前。地球の近くを巡航していたユニウス1が隕石との衝突で大破寸前にまでなったのは知っているかね

？　それで、ラインアークは地球に、正確には企業連に助けを求めてきた。ですな？」

ダテの確認にデュランダルが頷く。

「けれども、当時我々はエネルギー供給施設、アルテリアを開発するので資源や資金が無かった。なので、ユニウス１を修繕するのは無理だと返事をした。その数日後、ユニウス１から全ての住人を避難させたから、地球に被害が及ぶ前に破壊してくれと連絡が来たのだが・・・」

「そんな連絡はしてないぞ」

デュランダルが鋭く返す。ダテは大きく目を見開いた。立ち上がろうとするダテをローディーが押さえる。夜明は自分の代わりにダテを押さえてくれたローディーに目で礼をし、ウィン・Ｄを見た。

「それで、アルテリア・ウルナが破壊されたってのはどういうことだ？」

「そのままの意味だ。我々がユニウス１を破壊した翌日、ラインアークのノーマルＩＳ部隊がアルテリア・ウルナを襲撃、破壊した」

無言で夜明は考え込む。頭の中では、かなり嫌な仮説が組み立てられている。己の仮説が合っているか確かめるため、夜明は再びダテを見た。

「あぁ～、一つ聞きたいんだがよ。そのユニウス１から住人が避難したって連絡、ラインアークから直接受けたのか？」

「？　いや。当時、我々代表はアルテリア・ウルナ以外のアルテリア施設の開発で多忙だったため、ラインアークとの交渉ごとは全てクルーゼに一任していた」

「・・・もう一つ聞くぞ。アルテリア・ウルナがラインアークに襲撃を受けたってことを報告したのは誰だ？」

「クルーゼだ」

「・・・成るほどね、納得だ」

この時、夜明の仮説が確信へと変わる。そのまま夜明は沈黙し、何やらぶつぶつと独り言を呟きながら黙考を始める。全員、夜明が話すのを待っていたが、何も言わない夜明に戸惑いだした。

「あの、夜明。一人で納得してないで話してくれないか？　皆、お前についていけてないぞ」

思考の海へ水没している夜明に、遠慮がちに太陽が声をかける。あ？　と曖昧な応えを返し、思い出したように手を打つ。

「悪い。でも、これで分かった」

「分かった・・・とはどういうことかな？」

「この戦争、企業連とラインアークが戦争をおっ始める原因を、引き金（リガー）を引いたのはクルーゼだってこと」

指を拳銃の形にし、バーン、と夜明は拳銃を撃つ真似をする。

「？　曾爺ちゃん、どういうこと？」

「考えてもみろ。企業連はユニウス１を破壊したのはラインアークからの連絡があったからだって言った。それに対し、ラインアークはそんな連絡をしていないと言ってる。つまり、両組織の間に立っていたもの、クルーゼが情報を捏造して伝えてたのさ」

そう考えれば、企業連が何の躊躇も無くユニウス１を破壊したことも頷ける。次にアルテリア・ウルナ襲撃について。

「アルテリア・ウルナが襲撃を受けたのはユニウス１が破壊された翌日なんだろ？　未来がどこまで進化してるか知らないが、宇宙に広がっているラインアークの連中が、たった一日で地球に戻ってきて、尚且つ企業連の主要施設に襲撃をかけるなんて不可能だろ」

確かに。そこで、ローディーが疑問の声を上げる。

「アルテリア・ウルナを破壊したラインアークのノーマルＩＳ部隊はどうなる？」

「ユニウス１を破壊する際、どさくさに紛れてクルーゼがかっぱらったんだろ。それに部隊っていうのも説明できる」

「何？　っ！？　・・・そうか、ＯＲＣＡ旅団か！」

「その通り」

夜明の仮説に全員が黙り込む。一応、辻褄は合っているような気がする。だが、余りにも突飛過ぎる話に全員がついていけてなかった。困惑してる皆を無視し、夜明は再び思考の海へと飛び込む。

「だけど、そうすると大きな疑問が出てくる。何でクルーゼはそんなことをしたんだ？」

「世界を試すためですよ」

答えは全く予想だにしなかった方向から返ってきた。バッ！　っと全員が答えが返ってきた方を向くと、そこには捕えたリンクス、ハリの姿があった。

「貴様、何故ここに！？　見張りは何をしているんだ！」

「見張りの方々には、少々気絶してもらいました。殺してはいないので安心してください。それよりも、月光君と話の続きをさせてもらってもいいですか？」

「あ？　俺と？」

チラッと視線をデュランダルに向ける。デュランダルが頷いたのを見て、夜明は視線をハリへと戻した。

「それで、世界を試すためってのはどういう意味だ？」

「読んで字の如く、です。五十年前、世界は二つに分かれました。企業連とラインアーク、地球と宇宙に。巨大な力をもつ者達は、何れ争いを始める。争いどちらかが消えるまでなくならない。そうなれば、宇宙はともかく、地球が疲弊しきってしまう」

「もし企業連が勝てば荒廃しきった地球だけが残る。もしラインアークが勝てば企業連は宇宙に上がれない。上がれたとしても、ライ

ンアークよりも下の立場になるのは当然のことか」

「世界は歪み始めました。だから、クルーゼは試したんです。この世界に生まれた歪みが、正すに値するか、人々は歪みから解放するに値するのか」

「・・・それで数億の人命を奪い、戦争を始めさせたか・・・歪んでるのはクルーゼも一緒だろうが」

「例え歪んでたとしても、彼の想い、未来を願う想いは本物です。だから、僕らＯＲＣＡ旅団は彼に協力しました・・・無駄話が過ぎましたね。それでは、もう一つの本題に入らせてもらいます」

「本題？」

「本来の目的と言うべきでしょうか・・・」

ハリは微笑する。その笑顔は穏やかだが、並々ならぬ決意の念が浮かんでいるのを見て取り、夜明達は反射的に身構えた。自爆？　全員が同じことを思っただろう。だが、ハリが取った行動は彼らの予想の遥か斜め上をいくものだった。

「フン！」

何の前触れも無く、何の躊躇いも無くハリは己の腹に腕を突っ込んだ。腹と口から血が噴き出し、ハリの足下に血溜まりを作る。一夏達は顔を青ざめさせ、戦場に出て出血など当たり前の光景となった流星も唖然としている。夜明と太陽はハリの一挙一動に注意している。やがて、ハリは内臓と一緒に腹の中から何かを引きずり出した。

「爆破スイッチか何かか？」

血と内臓に塗れたハリの手に握られた端末のようなものを見て、太陽はそう考えた。ハリは太陽の考えを否定するように首を振る。

「いいえ。これはメルツェル作った、貴方達を過去へと戻すための装置です」

一瞬、ハリの言ってることが分からず夜明達に沈黙が流れる。その一瞬が命取りになった。夜明と流星、一夏がハリの手から装置を取り上げようとした時には、既に装置のスイッチはハリに押されていた。バヂィッ！！　と派手な音を立てて夜明達の周囲に紫電が走る。

「遅かったか！」

すぐに太陽は自分の周囲に数十枚もの空中投影キーボードを浮かばせ、ハリが発動させた装置を無力化しようとする。だが、超人的な速さでキーボードを打つ太陽よりも、装置のほうが速い。あの時、流星が夜明達を未来に連れて行った時のような黒い球体が現れ、夜明達を飲み込む。

「曾爺ちゃん！！」

流星の悲鳴。黒球に呑みこまれた夜明達を見て、ハリは満足そうに笑いながら足下に広がる血溜まりに身を横たえた。

「後は任せました、皆・・・人類に、黄金の時代を・・・」

ハリが息を引き取ると同時、紫電を走らせ黒球は消えた。

戦士、未来へ

「曾爺ちゃん！！」

流星が黒球へと手を伸ばす。だが、黒球は流星の手が触れる寸前に消えてしまった。そこに夜明達の姿は無く、後に残っているのは流星達だけ。

「・・・見事にしてやられた訳だ、我々は。冬華、誰でもいいから人を。彼の死体を安置室に」

「分かりました」

デュランダルは冬華にハリの死体を片付けるよう指示を出し、これから起こりうるであろう事を考え始めた。先ず、考えるまでも無く分かること。ＯＲＣＡ旅団とクルーゼが動き出す。

「・・・これは、厳しいな」

思わずと言った感じでデュランダルは呟く。現在、ラインアークの戦力はお世辞にも整っているとは言えない。主戦力であるトワイライトウィングは現在修復中。更に、アカツキもスサノオも完璧と呼べる状態からは程遠い。企業連も似たような状況だろう。オッツタルヴァとハリが抜け、上位ランカーのほとんどが負傷、専用機が損傷状態にある。

「切り抜けられるか・・・」

ブリーフィングルームの壁にかけられた、ラインアークのマークが

描かれた旗を見る。そこに描かれているのは、守護と破壊を意味する黒と紅の剣。不撓不屈を表す白と蒼の翼。黄昏の黒斧と不屈の翼（バルディッシュトワイライトレイジングウィング）を示すラインアークのシンボル。デュランダルは無言で旗を見続けていた。

「・・・ハリが逝ったか・・・皆、己がやるべきことは分かっているな？」

旅団長、マクシミリアン・テルミドールの問いに一同が頷く。ネオ

ニダス、ジュリアス、真改、ヴァオー、メルツェル。そしてもう一人。ＯＲＣＡランク８、トーティエント。

「はぁ、宇宙から戻ってきたら即行でクローズプラン発動って忙しくない？　少しくらいは休ませて欲しいんだけど」

今まで、トーティエントは宇宙に上がってあることをしていた。自律兵器、『アサルト・セル』の製造。地球から誰も出さないことを目的としたそれ。その数、凡そ一万。ラインアークの人たちに見つからないよう、アサルト・セルを作るのは大変だった、と言うのは本人の弁だ。

「トーティエント、アサルト・セルの配置は？」

「旅団長、僕の言うことは無視かい？　まぁいいけど・・・一万基、全て衛星上に配置しておいたよ。あれなら搬送船一隻はおろか、単騎のＩＳでも抜け出せないだろうね」

「そうか・・・では、行くぞ」

不意に、アラームが鳴り始めた。

「失礼、私だ」

ローディーは一言断りを入れ、すぐに端末を取り出して小声で話し始めた。話が進むにつれ、表情がどんどん険しくなっていく。端末をしまい、ローディーはデュランダル達の方を向いて話し始めた。

「・・・ＧＡの主要要塞都市、ビックボックスがＯＲＣＡ旅団のメルツェルとヴァオーに占拠された」

「何？」

「それだけじゃない。ジュリアス・エメリーとトーティエントがアルテリア・カーパルスを襲撃している。今はジェラルドが相手をしているらしいが・・・」

「あらあら、単騎で？　それってまずいんじゃないの？　唯でさえ、先日の私達との戦いで消耗してるって言うのに」

口元を扇子で隠しながら楯無が言う。その飄々とした口調とは裏腹に、扇子で隠れていない目元は真剣その物。しかも、ローディーの報告はそれだけではないらしい。

「更に、アルテリア・クラニアムにもＩＳ二機が向かっているらしい。一機の反応は真改。もう一機は分からないが・・・恐らく旅団長だろう」

「ＯＲＣＡ旅団、本気で世界を壊すつもりか！」

アルテリア施設は企業連の主要都市にエネルギーを供給している。もし、全てのアルテリア施設が破壊されれば、ウィン・Ｄの言うとおり、世界の安寧が完膚なきまでに破壊されるだろう。これだけでも状況的には最悪だ。だと言うのに、まだ悪い報告が転がってくる。

「首長！　地球の衛星軌道上に大量の自律兵器を確認しました！」

「我々は袋の鼠というわけか・・・物の見事に嵌められましたな」

「デュランダル首長、そんな悠長なことを言ってられる場合ではありませんよ」

既にローディーは自分が所属している企業、ＧＡからの指示を受けてビックボックスへと向かっていた。ダテの護衛についているウィン・Ｄも指示があればすぐにでもこの場から飛び出していきそうだ。

「確かにそうですな・・・ダテ代表、ラインアーク首長として提案があるのですが」

「奇遇ですね、我々企業連からも提案があります」

「首長、彼らは上手くやってくれるでしょうか？」

「上手くやってくれるよう祈るしかない」

ラインアーク本部の廊下をデュランダルと冬華が歩いていた。今さっき、ラインアークは企業連と共同してＯＲＣＡ旅団に対応することになった。ＯＲＣＡの展開速度から考えて対応が遅すぎるが、そ

れでも今は最善の策を打つしかない。

「流星は楯無、ウィン・D・ファンションと共にアルテリア・クラニアムへ。黄昏はジェラルド・ジェンドリンの救援。朔夜はビックボックスへと向かったローディーとリリウム・ウォルコットの援護。我々は衛星軌道上の自律兵器・・・やれるでしょうか？」

「やれるやれないの問題ではない。やるしかないんだ」

かつかつと足音を響かせながら足早に歩を進める。向かう場所は地下最下層。そこにはラインアークの最終兵器が眠っている。

「“アンサラー”を宇宙に上げる」

「ぐぇっ！！」

「っ！！」

「きゃぁっ！！」

「むぎゅうっ！！」

「うわぁっ！！」

「ぐぅっ！！」

「あだぁっ！！」

「いっつっ！！」

夜明、太陽、セシリア、鈴音、シャル、ラウラ、一夏、箒の順番で八人は空から落下した。一番最初に落下したのが夜明なので、夜明は次々と落ちてきた友人達に押しつぶされる。

「あだだ・・・ここは？」

「・・・よ」

「見覚えがある光景だな・・・って、ＩＳ学園の屋上じゃないか！」

「・・・ろよ」

「ってことは、ハリが発動させた装置ってマジで私達を過去に戻すための装置だったってこと?」

「・・・りろよ」

「あっちでは少なくとも一ヶ月近くはいたからな。今は何時だ?」

「・・・降りろよ」

「夜明さん。さっきからぶつぶつとどうされたんですの?」

「さっさと降りろって言ってんだボケゴラボケェッ!!!!!!」

渾身の力で、身体の上に乗っている太陽たちを吹き飛ばす。頭から屋上に落下する太陽達。首を回して関節をゴキゴキ鳴らしながら、夜明は現状を確認しようとする。

「・・・あぁ、とにかく戻ってきたって事でいいんだよな?」

その時、バァン! と派手な音を立てて屋上の扉が開いた。全員が振り返る。そして後悔する。

「貴様ら・・・言い訳を聞かせてもらうぞ」

そこには鬼神、織斑千冬が阿修羅すら凌駕する存在となって仁王立ちしていた。

「それで、午後の授業を全てサボった理由を教えてもらおうか」

「「「「「「・・・」」」」」」

「「別にねぇよ」」

千冬の鉄拳が夜明と太陽の顔面を抉った。二人の後ろに立っている一夏達にも、千冬の肉体言語を伴う説教を受けた証が刻まれている。

「・・・織斑教諭。もう一度確認するが、今日は九月十二日なんだよな？」

口元を拭いながら太陽が訊ねる。九月十二日。即ち、夜明達が未来へと飛ばされた日当日である。未来でかなりの期間すごしていたにも関わらず、過去では数時間程度しか経過していない。さっきからしつこいくらいに同じ質問を繰り返してくる太陽に、千冬も疑問を抱き始めた。

「夕暮、何故さっきから同じ質問を繰り返す？　・・・何かあったのか？」

千冬の問いに皆、顔を見合わせる。どう答えたらいいのか全く分からない、と言うのが正直な感想だ。まさか、未来に連れて行かれて戦争に参加させられていた、何てとてもじゃないが言えない。一夏達が返答に窮していると、夜明が頭をバリバリ掻きながら部屋から出て行こうとする。

「おい、月光。話は終わってないぞ」

「どうせ言ったって信じやしませんよ・・・校庭を十週くらいしてくりゃいいですか？　いいですね、それじゃ」

有無を言わせずに夜明は部屋から出て行った。太陽は千冬に軽く会釈し、夜明の後を追って部屋から出ていく。千冬は無言で一夏達を見る。一夏達は、千冬が望む答えを返すことは出来なかった。

「・・・」

翌日の放課後。夜明は屋上で寝そべっていた。太陽はバルディッシュトワイライトの損傷が酷すぎるので、所在不明の束を探し出して修理を手伝わせている。故に、今朝からいない。

「・・・未来はどうなったかな？」

答えは返ってこない。代わりに、屋上の扉が開く音が聞こえた。視線を向けると、一夏達がやってくるのが見えた。夜明は寝そべったまま視線を空に戻す。何か言うわけでもなく、一夏達も夜明同様に寝転がった。

「・・・なぁ、どうなったかな？」

主語が無い問い。だが、この場にいる誰もが一夏の言っていることが理解できた。

「忘れろ。元々、あの戦いは俺達が関わることじゃなかったんだからよ」

「でも」

「でも案山子もあるかよ。それに、あっちに行く方法が無いだろうが。考えるだけ無駄だっての」

「じゃあ、その方法があったとしたらどうする？」

空に漆黒の影が浮かぶ。影は降下してきて、夜明達の目の前で着地した。ＩＳ装甲を解除した太陽は膝を伸ばしながらゆっくりと立ち上がる。

「早かったな。もう、バルディッシュトワイライトの修理は終わったのか？」

ラウラの問いに軽く頷いて見せ、太陽は服の内側を探り始めた。そして何かを取り出す。太陽が取り出したものを見て、思わず夜明は身体を起こした。太陽の手に握られているものは、ハリが夜明達を過去へと帰還させた物に酷似している。

「太陽、まさかとは思うが」

「あぁ。これを使えば、未来に飛べる。流石に私たちが過去に飛ばされた瞬間に戻ることは出来ないが、一日くらいのずれで未来につく」

夜明はすぐに太陽が手にしているものを受け取ろうとする。だが、太陽は腕をひょいと持ち上げて、装置を夜明に渡すのを拒んだ。太陽の意図が理解できずキョトンとする夜明達に、太陽は静かな口調で訊ねる。

「・・・お前は未来に行ってどうするつもりだ？」

「下らねぇ闘いを止める」

「・・・予想通りの答えだな。じゃあ、もう一つ聞くぞ。私達に彼らの、ＯＲＣＡの闘いを邪魔する権利があるのか？」

「何が言いたい？」

「ＯＲＣＡは確かな理由を持って闘っている。それに比べ、私達は巻き込まれたっていう理由だけで闘っていた。何も持っていない私達に、確かな誇りや目的を持っているＯＲＣＡを止める権利があるのか？」

「・・・」

黙考する夜明。彼にだって誇りはある。そのために闘ったことも。一応、誇りが大事だと言うことは彼なりに理解しているつもりだ。未来での闘いで、夜明は誇りを持って闘ったりはしなかった。太陽の言うとおり、夜明にはＯＲＣＡを止める権利は無いかもしれない。でも、

「それでも行くさ」

夜明は太陽の手から装置を受け取る。

「あいつらがどんな誇りや目的を持って闘ってるかなんて分からねぇよ。でも、あいつらがやろうとしていることで傷付いたり、死んでしまう人たちが出てくる・・・俺が闘う理由なんざ、それで十分だ」

「・・・そうかよ。お前達はどうする？」

呆れたような表情で夜明を見てから、太陽は一夏達の方を見る。答えなど、最初から決まっている。一夏が手を差し出した。その上に箒が手を重ねる。セシリア、鈴音、シャル、ラウラ、太陽も箒に続いて手を置き、夜明を見つめる。

「はっ・・・それじゃ、派手におっ始めるか！！」

装置を起動させながら夜明も手を重ねる。その瞬間、八人の姿が再び屋上から消えた。

トワイライトウィング、セカンドシフト

異形の傘、なんて表現が一番しっくり来るだろうか。“それ”は粒子を撒き散らしながら空を駆け上っていく。浮遊型ＡＦ『アンサラー』。ラインアークの切り札にして、現存するＡＦ、歴史上の兵器全てを凌駕するであろう性能を持つ決戦兵器。全身の至る所に兵器を搭載したアンサラーはその巨体を宇宙に向けて飛んでいく。

「アンサラー、大気圏を突破しました」

オペレータの声を聞き、冬華とデュランダルはモニターを見据える。モニターの中では、飛翔しているアンサラーと、一万基の自律兵器、アサルトセルがぶつかり合おうとしていた。

「・・・始めてくれ」

「ハッ！　アンサラー、飛行態勢から戦闘態勢に移行、全武装展開！！」

アンサラーの羽部分と、本体の装甲の一部が開いてハイレーザーの砲口、ミサイルポッドの姿を覗かせる。対し、アサルトセルも砲口をアンサラーへと向けた。

「砲撃開始！！」

宇宙空間を幾つ物閃光が飛び交い始めた。

ジュリアスの連射がジェラルドを襲う。ジェラルドは両肩の大型三連装レーザーキャノンを撃つが、ジュリアスの砲撃全てを相殺することは出来ず、何発かが直撃した。地面に叩きつけられそうになったジェラルドを、咄嗟に黄昏が助け出す。

「僕との戦闘中に余所見しないでよ」

「ぐぅっ！！」

トーティエントが左腕のレーザーブレードを展開させて突っ込んでくる。どうにかレーザーブレードの一撃は避けた。だが、一瞬遅れてトーティエントの身体から発生したシールドエネルギーの爆発が黄昏の足を舐め上げた。

「大丈夫か、ジェラルド・ジェンドリン？」

「大丈夫じゃないのはお前も同じことだろうが・・・二対二で状況、条件は対等であると言うのに、何故私達は押されている・・・」

「少なくとも、貴様らとは戦いへの覚悟が違う」

ジュリアスが言う。

「我らは確かな信念や誇り、使命をもって戦場に立っている・・・企業の命令で闘っている貴様らとは根本が違うのだ」

「そう言うこと。悪いけど、あんた達には堕ちてもらうよ」

ジュリアスとトーティエント、二人はスラスターを噴かして黄昏とジェラルドに襲い掛かった。

「ハッハァー！！　まだまだやれるぜぇ、メルツェェェル！！！！！」

「一々吼えるな・・・それは僥倖」

ヴァオー、メルツェルの前にローディー、リリウム、朔夜が膝をついている。三人のＩＳはほとんどシールドエネルギーがつきかけ、装甲も破損部分しかないほどのダメージを受けている。メルツェルとヴァオーもダメージを負っているが、それでも三人のダメージに比べれば天と地ほどの差がある。

「お前達に直接的な恨みがある訳ではない。だが、今の人類にお前達は邪魔だ・・・だから、消えてもらうぞ」

「人類に黄金の時代を、ってかぁー！！」

「・・・流石は真改。剣術じゃ全く歯が立たないなぁ」

「・・・・」

バスターソードを支えに立っている楯無に、真改は無言で淡月の切っ先を向ける。既にアクア・クリスタルは全て切り裂かれていた。バスターソード以外に攻撃の手立てが無くなった楯無が真改に勝てるわけも無く、二人の戦いは勝敗が決しようとしていた。二人から少し離れた所では、漆黒の装甲に紅のアクセントを入れたＩＳ、アンサングを纏ったマクシミリアン・テルミドールが流星とウィン・

Dを見下ろしている。

「まだだ、まだやれるだろう、レイテルパラッシュ！！」

「もう少しだけ、もう少しだけ頑張ってくれトワイライトウィング！！」

満身創痍のウィン・Dと、既にＩＳ－Dシステムの限界時間を迎えた流星が必死で立ち上がろうとする。立ち上がる前に二人はテルミドールの砲撃で吹き飛んだ。ウィン・Dは床の上を転がっていき、流星は壁に叩きつけられた。

「お前達・・・やはり、腐っては生きられんか」

全く歯が立たないと言うのに、自分に向かってきた二人にテルミドールは呟く。与えられたダメージが多すぎて、二人のＩＳは強制解除されていた。それでも、二人はテルミドールに闘志をぶつけていた。だが、身体が精神に追いついていない。二人は這って動くことさえ出来なかった。

「・・・一つの生命を想う・・・それを、愚かと呼ぶか・・・」

やがて、ウィン・Dが嗚咽交じりの声で囁いた。テルミドールは静かに呟く。

「・・・愚かとは言わない。だが、貴様らの惰弱な発想が人類を壊死させるのも確かだ」

「・・・んな訳、あるかよ・・・」

二人が、離れたところで闘っていた楯無と真改も声がした方を向く。
壁に叩きつけられた時の衝撃で流星の全身に軋みと激痛が走った。
それでも、流星は立ち上がる。

「あんた達の、ＯＲＣＡ旅団の言ってることも分かるよ。共感はしたくないけど、理解はしてる。確かに今の人類は駄目かもしれない・・・でも！」

握り締めた拳を薙ぎ払うように振って、己の意思を鼓舞させた。

「ウィン・Ｄさんの一つの生命を想う・・・そんな綺麗な願いが惰弱、まして人類を壊死させるなんてことが有り得てたまるか！！」

「・・・ならばどうする？」

「あんたは俺が倒す。今日、この時、この場所で！！」

「どうやってだ？　貴様のＩＳは強制解除され、起動させることさえ出来ない。力無き戯言ほど醜く聞こえるものは無いぞ」

確かにテルミドールの言う通り、トワイライトウィングはシールドエネルギーが零になって強制解除されている。だが、流星は銀の瞳を煌々と輝かせながらトワイライトウィングの待機状態であるネックレスを掴む。

「それでも！　諦めてたまるかぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

流星の中で何かが弾ける。刹那、テルミドールの脳内にアンサングから齎されたアラートが鳴り響いた。テルミドールはアラートの内容に目を見開く。

『トワイライトウィング、再起動を確認』

「馬鹿な、再起動だと!?　ありえるのか、そんなＩＳが!?」

流星の拳の中でネックレスが異常な輝きを放ち始めた。輝きで、その場にいた者全員が目を閉じる。輝きが収束する。瞼を持ち上げた全員の目に映ったのはトワイライトウィング第二形態『未来（フューチャー）を切り開く者（クリエイト）』を纏った流星の姿があった。

「・・・ここに来て第二移行（セカンド・シフト）だと!?　お前は一体何者だ!?」

「俺?　俺は大空流星・・・月光夜明の血と意志を受け継いだ男だ、覚えておけ!!」

トワイライトウィング、セカンドシフト（後書き）

夜明達が出るのは次回です。後、今回の戦いでラウラがかなり強くなります。

具体的に言うと、どこぞの丸が二つな機動戦士に登場した二重人格超兵みたいになります。

凱旋の英雄　遺伝子強化素体（アドヴァンスド）、覚醒（前書き）

バルディッシュトワイライト修理時。

太陽「束さん」

束「何かなようちゃん？」

太陽「時を越える装置に興味ってありませんか？」

束「詳しく聞かせて頂戴な！」

～太陽、説明中～

太陽「一緒に作ってみませんか？」

束「いいねぇ、面白そうだねぇ！！それで、作るのを手伝った束さんにはどんな報酬があるのかな？」

太陽「私と一緒に夜明を好きなだけ愛でる権利を」

束「交渉成立だよ！！」

凱旋の英雄　遺伝子強化素体（アドヴァンスド）、覚醒

「ふぅむ。勇んで出張ったはいいが・・・何もすることがないのぅ」

ＯＲＣＡランク2、ネオニダスは暇を持て余していた。彼の役割はアサルトセルの制御を全て担っている装置『エーレンベルグ』を死守すること。割り振られた役割としては、かなり重要なものだ。だが、ネオニダスは暇している。まぁ、少し考えればそれも当然のこと。既にカラードの上位ランカーは他の仲間達が相手してるし、ラインアークの三人もそうだ。少し前に、下位ランカーがやって来たが、全員ネオニダスのアサルトキャノンで一蹴されている。故に、彼の周囲に敵はいない。

「・・・皆は大丈夫かのぅ？」

こうして暇を持て余していると、要らない考えが頭の中に浮かんでくる。ＯＲＣＡ旅団の実力は確か、そしてネオニダス自身も仲間を信頼している。それでも、どうしても仲間を心配する気持ちが浮かんでくる。ネオニダスが思考を続けていると、それを遮るように声が聞こえてきた。

「心配なんてする必要は無いさ・・・いや、する暇が無いといった方が表現的には正確か」

ネオニダスは振り返った。そこには漆黒の装甲を纏った女性がいた。両肩の片刃大型ビームブレード、身体中につけられたソードビット、その数合わせて十三。炎のように紅い瞳、同様の髪を風に靡かせ、女性は身体の細さとは不釣合いな大きさの胸の前で腕を組む。人は彼女をこう呼ぶ。

「深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）・・・」

ネオニダスを無視し、太陽は周囲を確認する。視線こそ周囲に走らせているが、意識はしっかりとネオニダスに向けていた。数秒後、ネオニダスに視線を戻した太陽は腕組みを解きながら問う。

「あんた以外にいないのか、ここ？」

「・・・まぁの」

「と言うことは、私の相手はあんたってことか・・・それじゃま、派手におっ始めるとするか」

両肩からアロンダイトを引き抜き、構えながら太陽は不敵に笑う。

「構えろ、ＯＲＣＡランク２、ネオニダス。僭越ながら、あんたの相手は深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）こと若輩夕暮太陽がさせてもらう」

「・・・死神の嬢ちゃんがいるってことは、他の連中も」

「あぁ、来てるぞ・・・今頃、あんたの仲間を相手に大立ち周りを演じているだろうさ」

「「っ！！」」

突如、それぞれの専用機から敵機出現のアラートが齎された。ジュリアスとトーティエントは急いで回避行動を取る。数瞬後、ジュリアスを漆黒の雨のようなビームが、トーティエントをオレンジ色の疾風が襲った。

「新手かい？」

「新手・・・ではない。お前達は！？」

「決着をつけに来たぞ、ジュリアス・エメリー」

「あのまま終わってちゃ、少し・・・かなり寝覚めが悪いからね」

ラウラがプラズマ刃を構え、シャルは両腕と隠し腕に様々な武装を展開させる。過去に返したはずのイレギュラーの出現にジュリアスは驚愕を露にし、トーティエントは仲間と襲撃者を見比べて怪訝そうに眉を顰めていた。

「ジュリアス、誰なのこの子達？　・・・雰囲気からして滅茶苦茶強そうだけど？」

「・・・敵という認識で間違いは無い。それと、強いというのもな」

「ふ～ん・・・ま、僕達のやることに変わりはないけど」

「その通りだ・・・行くぞ！！」

「あ、貴方達は・・・」

朔夜は目の前に突然現れた二人の後ろ姿を見て呆然とする。片方は金髪を揺らしながら朔夜、ローディー、リリウムの無事を確認し、片方はツインテールを揺らしながら、連結させた青竜刀を無言で肩に担ぐ。

「何で、未来に？」

「想い人が行くと言いましたもので」

「惚れた女としては、ついていくしかないでしょ」

朔夜の疑問に、振り向かぬままセシリア、鈴音は答える。メルツェルとヴァオーはここにいない筈、いてはいけない人物の出現に目を見開く。

「おいおい、お前らは過去に戻ったはずだろ？」

「まさか、装置を作って戻ってきたと言うのか・・・貴様達は一体何者だ！？」

メルツェルの問いに、セシリアは優雅に、鈴音は悪戯っぽい、挑発的な笑顔で同時に答える。

「「どうしようもない朴念仁に惚れた馬鹿な乙女ですわ（よ）」」

「はあああああっ！！！！！」

振り下ろされた一撃を真改は心を乱しながら、だけど冷静に受け止めた。僅かな間の鍔迫り合い、刀同士の押し合いに勝った真改は相手を吹き飛ばし、追撃をかけようとする。だが、真改の斬撃は桜吹雪が描かれたマントで防がれた。

「一夏、箒!?　何で未来（こっちに!?）」

「太陽が、あのハリって奴が使ってた装置とそっくりな物を持ってな。それを使って来た!」

言葉少なに答え、一夏は雪片を構えなおしながら真改と向き合う。箒も雨月と空裂を腰から抜き放ち、戦闘態勢に入る。

「奮起しろ流星!　夜明も来ているぞ!」

「不屈の翼まで来ているか!」

「あぁ。でも、あんたの相手は流星だよ」

驚きを露にするテルミドールに一夏が言う。いきなり指名され、驚く流星に箒が夜明の言葉を伝える。

『ここはお前の時代だろうが。舞台は俺達脇役が整えてやる・・・精々、格好良く決めろ、主人公（ヒーロー）』

「・・・」

「真改は俺と箒で抑える。お前は旅団長を!」

「・・・分かった」

バルディッシュを背中から引き抜き、切っ先をテルミドールに向ける。テルミドールも身体に力を込め、戦闘態勢に入ったことを示した。

「行くぞ、マクシミリアン・テルミドール・・・大空流星、トワイライトウィング！　未来に向けて、飛翔する！！」

「アサルトセルの撃破率、五十パーセントを超えました」

「アンサラーの損害率は？」

「十パーセントを超えていません」

ラインアーク一同が視線を向けるディスプレイの中で、大型ＡＦ、アンサラーと大量の自律兵器、アサルトセルが撃ちあいを続けていた。既に二、三時間はこれが続いている。アサルトセルの砲撃はアンサラーのシールドに防がれ、アンサラー本体に届いていない。逆に、アンサラーの砲撃はどんどんアサルトセルの数を減らしている。

「このまま行けば、アサルトセルは片付きそうだな」

ホッとした矢先、ブリッジに警報が鳴り響く。弛緩しかかっていた場の空気が一気に引き締まった。

「何があった？」

「アンサラーのレーダーにＩＳ反応あり！　この反応は・・・プロヴィデンス！！」

「ラウ・ル・クルーゼか！？」

「クルーゼ、最初からアンサラーを潰すつもりだったな」

大声を出す冬華の隣りで、デュランダルは歯を食い縛る。戦闘宙域をより広範囲に映したディスプレイに一筋の閃きが映る。それはＩＳのスラスターから噴き出された炎であり、背中の大型スラスターを全開で噴かしているそれは、紛れも無くプロヴィデンスを纏ったクルーゼその人だった。

「迎撃しろ！」

「駄目です！　クルーゼはアンサラーの砲撃を全て回避してます！　狙いは・・・アンサラーエンジン部分と思われます！」

「・・・っ！？　もう一つのＩＳ反応を確認！！」

「新手か！？」

「分かりません！　クルーゼの倍の速度でアンサラーへと向かっています！！」

ふと、全員の脳裏にある人物が浮かぶ。出鱈目な速度を出すＩＳ、そのＩＳを平然と動かす、伝説を超えて神話になった男。全員がディスプレイを見る。現れたのは・・・蒼銀の粒子を撒き散らす、光の翼。

「はあああっ！！！」

「遅い！！」

ラウラが拳と一緒に突き出したプラズマ刃をジュリアスは紙一重で避け、レールキャノンを放った。レールキャノンの直撃に耐え、ラウラは拳を撃ち出した勢いを利用して回転、回し蹴りを繰り出す。遠心力が乗った回し蹴りがジュリアスを捕え、吹き飛ばす。吹き飛ばされながらも、ラウラが体勢を整える前にレーザーライフルを撃つジュリアス。今度はラウラが吹き飛んだ。

空へと吹き飛ぶジュリアス、海中に叩き込まれるラウラ。数秒後、ラウラが海中から飛び出す。ジュリアスに視線を向けてみるが、ダメージが与えられたとは思えない。

「やはり、唯の打撃じゃ決定打にはならないか・・・」

何時でもラウラの動きに反応できるよう身構えてるジュリアスを見て、自然とそんな台詞が口をついて出てくる。

（情けねぇな。それでも遺伝子強化素体（アドヴァンスド）かよ？）

「っ！？」

いきなり頭の中で響いた声にラウラは周囲を見回した。

「誰だ！？」

目の前にいるジュリアスの声ではない。それに、シャルでもない（シャルはこんな乱暴な感じでは話さない）。それに、シャルと闘っているトーティエントという男だとも思えない。それに、その声には妙な聞き覚えがあった。と言うか、ラウラの声その物だ。

（見てらんねぇな。おい、ちょっと俺と変われ）

「だから貴様はだ「さっきから何をぶつぶつと独り言を言っている！」っ！！」

ジュリアスが砲撃してくる。反応が遅れたが、どうにか回避する。その際に砲撃が顔を掠め、ラウラの左目を隠している眼帯を吹き飛ばした。瞬間、ラウラの身体が彼女の意識から解放された。

「！？」

続けざまに砲撃を連射させようとしたジュリアスの前で、信じられないことが起こった。砲撃が顔を掠めたラウラの姿が消えたのだ。

「どこに消え！！」

最後まで喋れずに、ジュリアスは顎に衝撃を感じて吹き飛ぶ。さっきの一瞬でジュリアスの真下に動いたラウラ（？）が繰り出した、スラスターの出力で威力が増したアッパーカットだ。ジュリアスの顎目掛け突き出した拳を引き戻し、肘鉄を喰らわせる。ダメ押しの回し蹴りでジュリアスを海面に叩きつける。

「あぁ～っ、ちっとばかし身体の反応が悪いな」

グッパ、グッパと拳を開いたり閉じたりする。口調こそ乱暴だが、その声音は紛れも無くラウラの物だ。スラスターで勢いを殺し、漸く止まったジュリアスが睨んでくる。ジュリアスの視線に対し、ラウラは獣じみた笑みで応える。

（こ、これは一体どういうことだ？）

戸惑い気味のラウラの声がラウラの脳内で響く。けらけらと愉快そうに笑いながら、ラウラは頭を掻く。

「心配すんじゃねぇよ相棒。別に見ず知らずの奴がこの身体を乗っ取ったって訳じゃねぇ」

（お前は・・・誰だ？）

「俺はお前・・・って、これは相棒が求めてる答えじゃねぇよな・・・俺はライラ・ボーデヴィッヒ。お前、ラウラ・ボーデヴィッヒの遺伝子強化素体（アドヴァンスド）、越界（ヴォーダン・オージェ）の瞳の力を最大限に引き出すための人格よ」

右目が金、左目が赤。反転したオッドアイを輝かせながらラウラ、ライラは拳をぶつけ合わせる。

「意志と想いのぶつかり合いだ、派手に行こうぜ！！」

凱旋の英雄　遺伝子強化素体（アドヴァンスド）、覚醒（後書き）

ライラ・ボーデヴィッヒの説明。

ラウラのもう一つの人格。遺伝子強化素体（アドヴァンスド）、越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）の力を最大限に引き出すため、生まれた人格（ライラ談）

性格は極めて好戦的、凶暴。理性ではなく、本能で行動する。また、本能で戦闘するためか、格闘術はラウラよりも遥かに優れているが、射撃やワイヤーブレードの操作はラウラよりも劣る。

ライラの人格が生まれたのは結構前らしいのだが、今までは表に出てくる必要性を感じなかったので、ラウラの中で寝ていた。ＯＲＣＡ旅団との戦闘で更なる力の必要を感じ、自発的に表へと出てきた。

ラウラ同様、夜明が大好き。本能で動くため、じゃれつき方や求愛行動が獣じみてる。（詳細はこの先の話で）

また、ライラの人格が表に出てくると、オッドアイの色が左右逆になる。

黄昏の黒斧、月を切り裂く

漆黒の一閃が放たれた。ネオニダスは片腕で太陽の一撃を防いだが、一閃の勢いまでは殺せずに吹き飛ぶ。スラスターを出力全開で噴かしながらネオニダスは勢いを殺し、太陽にハイレーザーライフルを浴びせた。閃光が掠め、装甲を削り取られる。

「ちっ」

軽く舌打ちし、太陽はネオニダスから距離を取る。刹那、ネオニダスから超々高熱源反応、アラートが伝えられた。回避行動を取った太陽の真横を巨大な緑の光球が通り過ぎる。余波でシールドエネルギーが削られるのを感じながら、太陽は瞬間加速（イグニッション・ブースト）でその場から離れた。数秒後、緑の光球は地面を蹂躙、形を変形させる。

「・・・アサルトキャノン、何て威力だ」

呆れたように呟いた太陽を、着弾に一瞬遅れて発生した視神経を突き刺す様な光と大気を振るわせる振動、轟音が襲った。

『ＬＥＴＨＡＬＤＯＳＥ』

俗称はアサルトキャノン。ネオニダスの専用機、『月輪』のみが持つ専用装備。シールドエネルギーを凝縮させ、一度ＩＳ装甲内に取り込み、月輪の両肩に装備されたＬＥＴＨＡＬＤＯＳＥで爆発的に増幅させ、射出する。原理的には瞬間加速（イグニッション・ブースト）に近い。最大出力で放てば、都市一つが軽く消し飛ばせるような代物だ。

（スペックデータを見た時は馬鹿なと思っていたが・・・一発で地

面にクレーターを作るなんてデモンストレーションを目の前でされては、認めざるを得ないか）

せめてもの救いは、アサルトキャノンの弾速が遅いことだな、と太陽は視線をクレーターからネオニダスに移す。

「・・・いな」

「？」

ネオニダスが何かを呟く。小さな声で呟いたので、太陽の耳には届いていない。疑問符を浮かべながらも、太陽はアロンダイトを構えて突っ込んだ。ネオニダスの砲撃をかわし、アロンダイトを叩きつける。アロンダイトはネオニダスのシールドエネルギーと装甲を僅かに削る。

「硬いな」

「そうでもなければ、お主に膾にされてしまうわ」

「なら、お望みどおり」

アロンダイトをネオニダスに押し付けたまま、太陽は両腕、両膝、爪先のソードビットを展開させる。太陽はアロンダイトのビーム刃を収束させ、ビーム刃発生部分で器用にネオニダスを引っ掛け、引き寄せながら両膝のソードビットを突き刺した。ネオニダスが体勢を崩した瞬間、両腕を乱舞させて切り裂く。爪先のソードビットを用いた回し蹴り、改め回し斬り。

「膾にしてやる」

ネオニダスからアロンダイトを外し、X字に振り下ろす。派手に吹っ飛ぶネオニダス。だが、目立ったダメージは与えられてなさそうだ。アロンダイトを通して伝わってきた月輪の装甲の堅固さに辟易しながら、太陽はどうすればネオニダスを倒せるかを考える。

「（トランザムで出力を上げて一刀両断するか？　それともイクシードの超高速機動でバラバラにするか？）「惜しいな」・・・さっきから何をぶつぶつ言ってる？」

「いや、お主が心底惜しいと思っての」

太陽の問いにネオニダスは答えた。何が惜しい？　太陽の心内に生まれた疑問を感じ取ったのか、ネオニダスは言葉を続けていく。

「その若さでわしを圧倒する強さ、恐怖を通り越して畏怖の念すら覚える・・・だからこそ、惜しい」

「何がだ？」

「頭のいいお主なら分かるじゃろ。今のままでは地球は駄目になる」

「ま、だろうな」

肯定を返しながら太陽は未来で見てきた光景を思い返す。荒廃した大地、病的なまでに白い生気を失った砂漠。灰色の海。鉛色の雲に塞がれた空。どう見たって、これらの光景からは良い印象を持てない。そして、ここまで地球を疲弊させたのは人類だ。

「世界は歪み始めた。そして、その歪みに拍車を掛けたのは人類じ

や」

「・・・何をほざきやがる老獪が。拍車を掛ける引き金を引いたのはお前らＯＲＣＡ、そしてクルーゼだろうが」

「だが、わし等が動いてなければ、遠くない将来に歪みは更に酷くなっていたぞ」

「・・・」

無言を以って太陽は肯定を示す。歪みが酷くなる。即ち、争いが拡がると言うこと。地球に残った企業連、宇宙に進出したラインアーク。一度始まってしまえば、どちらかが無くなるまで争いは止まることが無いだろう。

「分かっているじゃろ、深紅の死神（スカーレット・デスサイズ）・・・いや、夕暮太陽と呼ばせてもら」

「だぁ～、もう良い黙れ。お前の言いたいことは大体分かった。早い話、戦争を始めた片割れであるラインアークに協力するなんて愚かしい行為だぁ～・・・とか言いたいんだろ？」

面倒くさそうにネオニダスの話を打ち切らせ、ずばり太陽はネオニダスが言いたかったことを指摘する。頭を掻きながら、太陽は冷めた視線をネオニダスへと向けた。

「この際だから、はっきり言わせてもらうぞ・・・

ラインアークなんて、私にとってはどうでもいいんだよ」

「どうでもいい、じゃと・・・？」

太陽の言ったことが信じられず、ネオニダスは目を見開く。太陽はネオニダスの驚きに構うことなく話を続けた。

「あぁ。序に言うなら、企業連とラインアーク、どっちが勝とうがどうでもいいし、興味も無い。お前らが動き始めた結果、人類が虐殺されようが知ったこっちゃない。ぶっちゃけた話、未来がどうなろうと気にしないさ」

「なら、貴様は何のために未来に戻ってきた、何のために闘っておるんじゃ？」

「そんなの決まってるだろ、夜明がお前らと闘うって言ったからだ」

太陽の返答にネオニダスの表情が驚愕、疑問、それから侮蔑へと変わっていった。ネオニダスの軽蔑を含んだ目で見られながらも、太陽は相変わらず冷めた目をしている。

「ふん、己の意思で闘おうとは思わんのか人形が。貴様、月光夜明に死ねと言われたら死ぬのか？」

「あぁ、死ぬぞ」

即答。絶句するネオニダス。

「夜明が言えば、私は躊躇無く死ぬ。夜明が望むなら、人類を根絶やす。夜明が是とするなら、この世の全てを破壊してみせる・・・夜明さえいれば、私にとってこの世なんて小指の甘皮ほどの価値も

無いんだよ」

でも、今は大切な友達が出来たから一概には言えないがな、と太陽は照れくさそうに顔を僅かに紅くさせた。一度咳払いし、ネオニダスに戦闘態勢を取って見せる。

「さって、無駄話が過ぎたな・・・お前達にも想いや覚悟はあるんだろうさ。でも、夜明がお前達を止めたがっている・・・悪いが潰させてもらうぞ」

『Mode(モード) Transam(トランザム) Standby OK. Are you ready?』

『Mode(モード) Exceed(イクシード) Standby OK. Are you ready?』

二つのマシンボイスが同時に響く。その瞬間、太陽の身体を守る漆黒の装甲が内側から爆発したように吹き飛んだ。同時に外部装甲内から現れた紅の装甲が同色の粒子が爆流のように放ち始める。紅の粒子は瞬く間に二人を、周囲を埋め尽くしていった。

「これは!?」

（モードトランザムとモードイクシードの同時発動・・・無茶をさせる、だけど頑張ってくれよ、バルディッシュトワイライト!!!）

「夕暮太陽、月光夜明のために！　目標を駆逐する!!!」

両肩にアロンダイトをマウントさせた太陽の姿が消えた。ネオニダスの腹部を、太陽が腰から引き抜いたソードビットが貫く。再び姿を消し、太陽は自分の身体から悲鳴が上がるにも関わらずに超々高機動を続けたままネオニダスを攻撃し始める。ソードビットを突き

刺す、突き刺す。

突き刺す突き刺す突き刺す突き刺す突き刺す突き刺す突き刺す突き刺す。

両肩からアロンダイトを引き抜き、連結させる。ネオニダスはアサルトキャノンを放った。至近距離から放たれたそれを、太陽はアロンダイトで真っ二つに斬る。振るわれるアロンダイト。アロンダイトがネオニダスを切り裂く度、ネオニダスの身体に突き刺さったソードビットがアロンダイトと合体していった。全てのソードビットをアロンダイトに連結させ、ネオニダスを蹴り上げる。

「約束（エクス）された」

「・・・ここまでか。所詮、わしは時代に置き去りにされた遺物だということかの・・・」

大上段にアロンダイトBを構えた太陽にネオニダスの囁きは届いていない。

「勝利の剣（カリバー）アアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！」

数百本の光を束ね、集束させたような斬撃が放たれた。紅の爆流はネオニダスを飲み込み、全てを消し飛ばした。

「・・・」

暫くの間、太陽はアロンダイトBを振り下ろしたままの体勢で静止していた。数十秒後、何の変化も起こらないことを確認して空を見上げる。ネオニダスの影はどこにも無い。

「ネオニダス。お前達ＯＲＣＡ旅団は負ける。敗因はたった一つ、そうたった一つのシンプルな答えだ・・・お前達は月光夜明を敵に回した」

空を見上げたまま、太陽は一人囁く。その視線は、今も闘っているであろう仲間達、そして夜明のことを思っていた。

「さっさと終わらせろよ、皆」

黄昏の黒斧、月を切り裂く（後書き）

モードトランザムとモードイクシードの同時発動。トランザムバーストみたいなもんだと思ってください。

モードマルート、発動

「うぉっらぁぁぁぁ！！！！！！！」

「そんな単純な攻撃！！」

背中の大型推進翼から炎を爆発させるように噴出しながら、ラウラ・・ライラはジュリアスにプラズマ刃を振り下ろした。プラズマ刃が頬を掠めるのを避けながら、ジュリアスはレールキャノンとミサイルを放つ。

「そんなの当たっかよ！！」

レールキャノンから放たれた弾丸をロール回避する。自身のすぐ横を超高速の弾丸が通り過ぎるのを感じながら、ライラは左右から挟み込むように迫ってきたミサイルを両手のプラズマ刃で切り裂いた。切り裂かれたミサイルが紫電を放ちながら爆発する。既に爆発の範囲から離れ、左右の色が反転したオッドアイでジュリアスを見据えた。

「潰れろや真っ白女ぁっ！！！！！！」

プラズマ刃を収束させ、ビームガンを連射する。ジュリアスにビームの弾雨が襲い掛かるが、小刻みに動きながら全てを避けた。と言うか、ライラが自分から外しているような射撃だ。

（おい、何だその滅茶苦茶な射撃は！？　私の方が遥かにマシだぞ！！）

ライラの射撃を見ていられず、思わずラウラが頭の中で喚きたてる。

「だぁもう煩せぇ！！　俺は遺伝子強化素体（アドヴァンスド）、越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）の力、つまりラウラ・ボーデヴィッヒの肉体的な力を引き出すための人格だ。近接武器を用いた戦闘ならお前を遥かに上回るが、射撃やワイヤーブレードみたいな遠隔操作武装の操作は相棒どころかそこら辺にいるガキにでも負ける自信がある！！」

（力強く断言するな馬鹿が！！）

狙いもくそも無くビームガンを乱射させながらライラは独り言を大声で叫ぶ。下手をすれば、いや、下手をしなくても確実に変人扱いされる。現に、

「何を一人でギャアギャアと騒いでいる！！」

戦闘中であるにも関わらず、ジュリアスに怒られた。ジュリアスはラウラに急加速で接近し、レーザーライフルの銃口を腹部に叩きつけた。一瞬、怯んだライラを銃口から吐き出された光が吹き飛ばす。

「くそがぁ！！」

忌々しそうに咆哮を上げながら、レーザーライフルの直撃を微塵も感じさせない動きでライラはくの字を描くように二連続瞬間加速（イグニッション・ブースト）でジュリアスの後ろへと回った。

「遅い！！」

「手前もな！！」

急上昇しようとするジュリアスを、瞬間加速（イグニッション・ブースト）で勢いと速度を激増させたライラのショルダータックルが決まる。ライラの攻撃はそれだけに止まらず、身体を勢い良く捻ってバックハンドブローを叩き込んだ。地面に叩きつけられ、ジュリアスは衝撃で呼吸と動きを止める。動かなくなったジュリアスにライラが追撃をかけようとするが、三連続で使用した瞬間加速（イグニッション・ブースト）の反動と、さっき喰らったレーザーライフルのダメージがライラを襲った。

「クソが・・・まだ、相棒の身体が俺の動きについてこれてないのか・・・」

少量の血を吐き出しながらライラは忌々しそうに呟く。口元を流れる紅い筋を拭った瞬間、起き上がったジュリアスと視線がぶつかり合った。二人の瞬間加速（イグニッション・ブースト）で震える大気、交差する拳。互いの拳がそれぞれの頬を捉え、二人は真逆の方向に吹き飛ぶ。ジュリアスは施設の地面を削りながら滑っていき、ライラは海中へと叩き込まれた。

「っ・・・、この程度のことで！」

ジュリアスは震える四肢を奮い立たせながら立ち上がる。対し、海面は何の変化も無い。波紋が徐々に小さくなっていくだけ。

「・・・くそ、このままじゃ勝てないか・・・」

（どうするんだ？　何か勝つ方法は？）

肌を突き刺すような冷たさの海へと沈みながら、ライラとラウラは脳内会議をしていた。ライラの格闘技術はジュリアスを上回っている。だが、それだけでは勝てない。ラウラの射撃能力と精密な動きはジュリアスを追い詰めるに足る。だが、それだけでは勝てない。

やがて、ライラは少しだけ疲れたようにため息をついた。

「しゃぁねぇ、あれしか勝つ方法がねぇか・・・おい相棒、腹括れよ」

（・・・お前が何をするつもりかは知らないが、了解だ）

「そうかよ、だったら・・・」

大型推進翼にエネルギーを限界まで圧縮させ、両腕のプラズマ刃を展開する。にやっ、と持ち上がったライラの口角から小さな気泡が浮かび上がってくる。その笑顔は、正に獣のそれ。そして双眸は越界（ヴォーダン・オージェ）の瞳が発動したことを示す金色。

「行くぜぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

咆哮と共にライラは海中から飛び出した。奇襲にジュリアスは素早く反応し、ライラの突進を避けた。真横を通り過ぎていったライラの背中にレーザーライフルの連射を浴びせる。だが、放たれたレーザーは推進翼の先端にあるワイヤーブレードで全て弾き返された。

「何っ！？」

後ろに目でもあるかあのようなライラの反応にジュリアスは驚愕する。その一瞬でライラは最高速度にまで達していた身体を無理矢理止め、反転した。

「反射とぉ！！」

プラズマ刃がX字状にジュリアスを切り裂く。

（思考の！！）

超高速で宙を駆け回る八基のワイヤーブレードがジュリアスの武装を切り刻み、四肢を貫いた。

「（融合ぉぉ！！！！！！！！！）」

突き出された二つのプラズマ刃がジュリアスの胸部装甲を破壊し、アステリズムのコアを焼き切った。ライラの腰部分に装備された大型カノンが火を噴いてジュリアスを吹き飛ばし、ワイヤーブレードが辛うじて残っている装甲を切り裂く。

（侮ったか・・・いや、侮っていたわけではない・・・ならば）

吹き飛びながら、ジュリアスは両手のプラズマ刃を突き出したままの体勢のライラに視線を送る。数秒の浮遊感の後、海面へと落下した。衝撃と海水の冷たさで視界が暗転する。そして彼女の視界はそのまま、光を取り戻すことは無かった。

（覚悟、いや、想いの差か。恋する女の想いとは凄まじいものだな・・・すまない、皆・・・最早、共に成就は叶わん・・・）

「・・・はぁ～、どうにか勝ったか・・・いっつぅ！！」

ジュリアスの反応が消えたのを確認し安堵のため息をついた瞬間、ライラを激しい頭痛が襲った。

（おい、大丈夫か？）

「いや、あんまり大丈夫じゃねぇな・・・やっぱ、表に出てきてすぐに『モードマルート』を使うのは無謀だったか・・・」

モードマルート。ライラとラウラの精神を同時に表側へと出す、つまり一人分の身体に二人分の精神が存在している状態を作り出す、リミッター解除モードのことだ。モードマルート発動時にはライラが身体そのものを操作して格闘を行い、ラウラが射撃武装や遠隔操作武装などの動きを統括する。同時に近距離と遠距離の攻撃が出来るのだから効果は凄まじいが、当然ながらそんな無茶をすれば付けが回ってくる。そして、その付けは身体を動かしているライラへと齎される。

「まだ、マルートの発動限界時間は数秒程度か。とにかく疲れたぜ俺は・・・一旦休ませてもらうぜ、相棒」

（お、おい！　ちょっとま）

頭の中で響くラウラの声を無理矢理締め出し、ライラはその場に身を横たえた。

「他の連中は大丈夫か？　・・・ＯＲＣＡの一人を倒したんだ、夜明、褒めてくれっかな・・・」

にへらぁっ、と緩みに緩んだ笑みを浮かべながら、ライラは瞳を閉じた。

想いだけを残して

トーティエントが振り下ろしたレーザーブレードを、シャルは自身の腕と隠し腕に持たせた六本のアサルトブレードを交差させて防いだ。火花を散らせながら鍔迫り合いを演じること数秒、レーザーブレードがアサルトブレードの刀身に食い込んだ。同時にトーティエントの身体を覆う装甲が輝き始めたのを見て、シャルはアサルトブレードを放棄して後ろに下がる。アサルトブレードが両断された瞬間、トーティエントを中心として爆発が起こった。

「うわ・・・っ！」

シャルの視界を水色の光が埋め尽くそうとする。咄嗟に両肩に折り畳まれた六枚のシールドを前面に展開するが、それでもシールドエネルギーを削られる。シャルは更なる後退をせざるを得なかった。爆発の光が晴れると、シャルはシールドの間からグレネードの銃口を覗かせて引き金を絞る。だが、グレネードの着弾点にトーティエントの姿は無い。

「女の子がそんな危ないの持ってちゃ駄目でしょ」

真横から飛び出してきたトーティエントはレーザーブレードでグレネードを切り裂く。シャルはすぐにグレネードを手放し、飛び上がって隠し腕に呼び出したミサイルポッドを乱射させた。トーティエントはマシンガンで弾幕を張り、全てのミサイルを破壊した。二人の間に幾つもの爆発が生まれる。爆発の際に発生した轟音と黒煙が残っている中、トーティエントが煙を切り裂くように突っ込んできた。レーザーブレードを構え、装甲を輝かせながら。

「くっ！！」

今度は至近距離でトーティエントの爆発がシャルを呑みこむ。反射的にシャルはシールドを張ったが、爆発でシールドの内三枚が破壊されていた。

爆発に吹き飛ばされ、シャルは海へと堕ちていく。海面に落下する寸前、スラスターを全開にしてどうにか浮かび上がった。

「へぇ、アサルトアーマーの直撃を受けても大丈夫なんだ。丈夫なＩＳだね」

心底感心したような様子で、トーティエントはラファール・リヴァイヴ・カスタム?の強化パッケージ、『ガーデン・ガーディアン』を評価する。それに対し、シャルは険しい顔でトーティエントを見ていた。

アサルトアーマー。原理はネオニダスの専用機『月輪』に装備されていたアサルトキャノンに近い。自分の周囲に広げたシールドエネルギーを圧縮させ、一気に爆発させる。アサルトキャノン同様、この武装の威力も絶大だ。爆発の瞬間、瞬時にシールドを展開出来たからいいようなものの、もし出来てなかったら、確実に消し炭になっていいただろう。

（近づけばアサルトアーマーに焼かれる。でも、遠距離からの攻撃だと捉えられない・・・中距離から弾幕を張ってシールドエネルギーを削りきるしかないかな）

ガトリングガンやマシンガン、チェインガンやショットガン等の大

量に弾丸をばら撒ける武器を展開させ、シャルは全ての銃口をトーティエントに向ける。シャルが自分に向けている武装の種類を見て、意図を察したのかトーティエントは僅かに口角を持ち上げた。

「ふぅん・・・それじゃ、ラウンド再開と行こうか！」

トーティエントがスラスターを全開にさせて突進してくる。シャルは後ろへと下がりながら、大量の弾丸を吐き出し始めた。弾丸がトーティエントに次々と喰らいついていく。シールドエネルギーはがりがりと削られているはずだ。なのに、トーティエントはお構い無しで接近してくる。トーティエントの動きに戸惑いながらも、シャルは弾丸を放ち続ける。瞬間加速（イグニッション・ブースト）したトーティエントが腕を伸ばしてきた。喉笛を掴んでこようとするそれを、シャルは自身の真横を通り過ぎたトーティエントを受け流して、その背に射撃を浴びせる。

身体を反転させたトーティエントが突貫する。シャルは大量の弾丸で応えようとするが、既にマガジンが底をついていた。マガジンを交換しようとした刹那、トーティエントのマシンガンがシャルの武装を全部吹き飛ばした。シャルはあっさりと銃器を放棄し、アサルトブレードを呼び出そうとするが、それよりも早くトーティエントの手が喉笛に食い込む。

「弾幕でシールドエネルギーを削りきる、狙いは悪く無かったよ。シールドエネルギーが無くなったら、アサルトアーマーは使えないからね・・・でも、それは僕のグレイグルームが普通のＩＳだったらの場合」

シャルの首に指を食い込ませたまま、トーティエントは淀みなく話を続けていく。

「グレイグルームのシールドエネルギーはそんな簡単に削りきれないよ。何せ、グレイグルームのシールドエネルギーは普通に四桁を超えてるからね」

「う・・・そ・・・」

トーティエントの手を首から必死に剥がそうとしていたシャルの顔が絶望に歪む。トーティエントの装甲が、ゆっくりと輝き始めた。

「はっはぁーっ！！　俺はまだまだやれるぜ、メルツェェェル！！！」

「元気の良いお方ですこと・・・！」

威勢のいい咆哮と共に、視界を埋め尽くすような弾丸を吐き出すヴァオー。リフレクタービットで弾丸の嵐を防ぎながら、セシリアはメテオデストロイヤーの引き金を引く。蒼い閃光がヴァオーに直撃するが、

「ハッハァーッ！！！！！！！！！」

目立ったダメージは与えられていない。ヴァオーの専用機、『グレディッツィア』は機動力を捨てたタンク型ＩＳだ。普通のＩＳなら一撃で撃破することが出来るメテオデストロイヤーを以ってしても、グレディッツィアの装甲を撃ち抜くのは困難を極めた。不意に、リフレクタービットの間を縫って飛んできた一発の砲弾がセシリアを直撃する。瞬間、大規模な爆発がセシリアを吹き飛ばした。

「きゃあっ！！　・・・やってくれますわね！！」

極厚のガトリングキャノンの弾幕に混じって、高威力のバズーカがセシリアを襲ったのだ。ヴァオー。典型的なガチンコパワーファイターだが、器用な真似も出来るらしい。セシリアはすぐにエネルギーパックをリロードさせて銃口をヴァオーに向け、引き金を引く。メテオデストロイヤーの砲撃がヴァオーを直撃、ヴァオーも負けじと弾幕にバズーカを混ぜてセシリアを吹き飛ばす。何回かそんなことが続くと、ついにヴァオーが潰れた。

「うぉぉぉいっ！！　まだやれるだろ、グレディッツィアァァァ

ァッツツ！！！！！」

ヴァオーの装甲の所々から煙が噴き出している。セシリアはグレディッツィアの停止を確認し、メルツェルと戦っている鈴音の方を見た。

「鈴さん！！」

「問題ないわよ！！」

両手に握った青竜刀『嵐』を、その名の通りに振り回しながら、鈴音は叫ぶようにセシリアの呼び声に応える。強烈な一撃をぶちかまし、メルツェルを吹き飛ばす。鈴音の攻撃の威力を利用してメルツェルは鈴音から距離を取ろうとするが、鈴音は瞬間加速（イグニッション・ブースト）で近づいてメルツェルから離れない。

「べったりと張り付いてくる・・・」

「態々、あんたの距離に合わせるつもりなんてこれっぽっちも無いわよ！！」

メルツェルの専用機、『オープニング』には格闘の装備が無い。ライフルと大型ミサイル、そしてグレネードだけだ。ライフルはともかく、大型ミサイルとグレネードを至近距離で放つと爆発に巻き込まれるので、メルツェルはライフルのみで鈴音と応戦していた。また、オープニングはタンク型のＩＳ程で無いにしろ装甲が厚く、機動力が強くない。故に、メルツェルは鈴音に翻弄されていた。

「にしても、あんたのＩＳ、硬すぎんのよ！！」

だが、鈴音は鈴音でメルツェルを追い詰められずにいた。甲龍のコンセプトは『安定性と稼動効率』。それは、太陽と黄昏の手によって魔改造されても変わらない。なので、メルツェルに決定打を与えられるような装備が無いのだ。鈴音がメルツェルを削りきるか、鈴音が力尽きてメルツェルが反撃するのか。勝負の行く末はそのどちらかだろう。

「だぁ～！　こんなんだったら、太陽に頼んでどでかい衝撃砲をぶっ放せるように改造してもらえば良かったわ！　「鈴さん！」　セシリア・・・分かった！！」

セシリアがメテオデストロイヤーを構えてるのを見て、鈴音は怒涛の勢いでメルツェルを攻撃し始めた。嵐で斬り、薙ぎ払う。両肩と背中の龍牙で打突を繰り返しながら、衝撃砲を連射させる。

「ぐぅ・・・」

「セシリア！！」

メルツェルを吹き飛ばし、鈴音は距離を取る。体勢を立て直そうとするメルツェルを、ロックオンアラートが襲う。

「このロックオンは・・・！！」

何かを察し振り返る。視界を埋め尽くそうとする蒼の光。メテオデストロイヤーの砲口から放たれたメルツェルを飲み込もうとする・・・だが、

「があああああああっっっ！！！！！！！！！！！！！！」

何かがメルツェルの盾になり、彼女を守った。メルツェルは自分の前に躍り出た何かを見て、驚愕に目を見開いた。

「へっ、これが最期か・・・相棒を守れて死ねるんだ、悔いはねぇ。楽しかったぜ、メルツェェェェル！！！」

メルツェルを守るために、ヴァオーはコアが限界点突破（オーバードライブ）するのも構わず、零になったシールドエネルギーを捻り出した。コアが耐え切れず、グレディッツィアは爆発した。搭乗者のヴァオーを巻き込んで。目の前で相棒が爆発した。メルツェルは歯茎から血が出るのも構わずに歯を食い縛る。

「・・・単純馬鹿が・・・死んで治るものでもあるまい・・・！」

口元から流れた血と、彼女の目尻から溢れる涙が混ざり合う。頬を伝い落ちようとする涙をそのままに、メルツェルは鈴音とセシリアに視線を送る。

「二対一で勝てるとは思わない。だが、一矢報いさせてもらうぞ！！」

叫んだ刹那、何かが動き始めた。今、彼女たちが闘っている場所、ビックボックスは元々武装都市だった。そして、武装都市としての名残である、ビル上部にある武装が起動し始めたのだ。鈴音たちがいるビックボックス本部ビル、その周囲にあるビルが一斉に動き始め、キャノン砲の砲口が二人に向けられる。その数、四十五。

「・・・随分と手の込んだ都市ね」

「これは・・・厳しそうですわね」

二人目掛け、キャノン砲の嵐が襲い掛かった。

「ま、命は置いていくよ。早く過去に帰って、本来の生活に戻りな・・・って、気絶しちゃってるか」

アサルトアーマーの直撃を受け、既にシャルは気を失っていた。首を掴まれて持ち上げられたまま、ぐったりと力無く四肢を垂らした彼女を、トーティエントは優しく地面に横たえる。シャルがキチン

と呼吸してるのを確認し、周囲を見渡す。

「ジュリアスは・・・やられたか」

横たわっているラウラを視認し、ジュリアスの姿を探す。どこにもジュリアスがいないのを見て、トーティエントはジュリアスが撃破されたことを悟る。

「ラスター、ブッパ、ＰＱ。ハリに続いてジュリアスか・・・遣る瀬無いね」

逝ってしまった仲間達のことを想いながら、トーティエントはこれからどうするかを考える。

「どうしたもんかな。今から他の連中の所に行っても、援護が間に合うとは思えないし・・・宇宙に行ってクルーゼの手伝いでもするかね・・・ん？」

スラスターを噴かして飛翔しようとした瞬間、後ろで何かが動いたのを感じ取り、トーティエントは振り返った。

「・・・もう、止めておいた方が良いと思うよ。君、満身創痍だしさ」

荒い息を吐きながら立ち上がったシャルを見て、トーティエントは彼女を諭そうとする。だが、シャルは、

「お気遣い、ありがとう・・・でも、負けられないんだ」

交戦の意思を示す。トーティエントは頭をがりがりと掻きながら、

不思議そうにシャルを見ていた。

「・・・過去から来たってだけなのに、何でそこまで必死になれるのかね？　ちょっと不思議だなぁ」

トーティエントの疑問も尤もだ。シャルは、夜明達は自分達の意思とは関係なしに過去から連れてこられたのだ。そして、闘うことを余儀なくされた。そして、過去に帰ったにも関わらず、未来に戻ってきている。不可解としか言い様が無かった。

「・・・あなた達の仲間に、オールドキングって人がいましたよね」

「あぁ、あの人。僕が戻ってくる前、何かやらかしたらしいね。彼がどうかした？」

オールドキングの名前が出てきた瞬間、トーティエントは僅かに顔を歪めた。トーティエントが示した不快感に取り合わず、シャルは話し続ける。

「あの人は、僕達を始末するっていうだけの理由でたくさんの人を殺した」

「おいおい、ちょっと待ってくれよ。まさか、オールドキングと僕達がやろうとしてるのが同じ事だって言うつもり？　それは結構しんが「黙れ！！」っ！？」

シャルの怒号に黙り込むトーティエント。

「違うって言いたいの？　たくさんの人を殺そうとしているのは、あなた達だって変わりないじゃないか！　あなた達にはあなた達な

りの言い分や大義名分があるって言うのは分かる。だけど！　それでも！　人を殺すのは絶対にやってはいけないことなんだ！！！」

ふわぁ、とトーティエントの髪が風に持ち上げられた。その風が、シャルを中心に巻き起こっていることに気がつくには、時間が掛からなかった。

「ＯＲＣＡ、貴方達は僕達が止めてみせる」

「・・・そうかい。なら君の命、ＯＲＣＡとグレイグルームが貰い受ける！！」

レーザーブレードを展開させ、トーティエントはシャルに突っ込む。振り下ろされたレーザーブレードを、シャルは展開させたシールド二枚で、白刃取りの要領で受け止める。

「もらった・・・っ！？」

シールドを焼き切るのは無理だと判断し、トーティエントはアサルトアーマーを発動させる。装甲が輝き始めた。それを見て、シャルの口元に微かな笑みが浮かべられた。同時に、シャルの装甲も輝き始める。

「これは、アサルトアーマー」

水色とオレンジ、二つの爆発が発生し、互いを相殺した。

「・・・あんな至近距離で発動を見たんだ。見様見真似くらい、馬鹿でもできるよ」

虎の子であるアサルトアーマーを真似され、あまつさえ相殺されて呆然とするトーティエントに、シャルは装甲をパージさせた両腕、隠し腕を押し付ける。六本の腕についているのは未来でも最強の威力を誇るであろうパイルバンカー、盾殺し（シールド・ピアース）。

「はあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！！！！！！！！！」

拳を叩き付けながら、シャルは盾殺し（シールド・ピアース）を連射させる。リボルバーが回転し、薬莢が吐き出される。六点から放たれる一撃は、桁外れのシールドエネルギーを持つグレイグルームを確かに削っていった。両腕と隠し腕を大きく引き、同時に繰り出す。響く、六つの炸裂音。吹き飛んだトーティエントは壁に叩きつけられ、ずるずると滑り落ちていって地面にへたり込んだ。

「がはっ！！　・・・悪いね、負けちゃったよ皆」

身体中から齎される激痛にトーティエントは顔を顰める。だが、その表情はどこか清々しさを感じさせた。

「・・・こんな強い子たちが、何の見返りも求めずに過去から来てくれたんだ・・・存外、今の人類も悪くないかもしれないな」

そう呟いて、トーティエントは意識を失った。暫くの間、シャルは六つの拳を突き出したままの体勢でいたが、糸が切れたマリオネットのように倒れる。

「・・・僕が出来るのは、ここまでだね・・・皆、後はよろしく」

「ちょ、これ多すぎでしょ！！」

「鈴さん！　口を動かしてる暇があるなら、回避に集中してくださいな！！」

周囲からの砲撃、メルツェル自身の攻撃を避けるだけで精一杯の二人。さっきから、メルツェルによるワンサイドゲームが続いていた。

「どうにかして砲台を破壊しないと・・・」

「させると思うのか？」

「あぁ、もう！　しつこい！！」

メルツェルが撃ってくる大型ミサイルやグレネードの回避で鈴音は手一杯だった。それは、リフレクタービットで周囲からの砲撃を防いでいるセシリアも同じこと。

「ジリ貧、ですわね・・・っ！」

僅かに絶望が頭をよぎったその時、いきなり周囲の砲台が爆発した。しかも、その爆発は一回だけに止まらず、連続して起こっている。セシリアと鈴音、メルツェルが驚いている間に全ての砲台は破壊された。

『周囲の砲台は全て潰した。これが私に出来る精一杯だ・・・後は、任せた』

メルツェルとヴァオーに撃破されたはずのローディーからオープン・チャネルを通した通信が送られてくる。信じられないと言う風に周囲を見渡すが、さっきまで暴風雨のように吹き荒れていた砲弾が一つも飛んでこなくなっていた。

「・・・舞台は整えられたって訳ね」

「ここまでお膳立てされては、やるしかありませんわね」

鈴音とセシリアは顔を見合わせながら微笑し、メルツェルに突っ込んでいった。メルツェルは愚直に突進してくる二人に、大型ミサイルとグレネードで対応する。放たれたミサイルとグレネードが接近

しても、二人は止まらない。直撃、爆発。だが、爆発に巻き込まれたのは二人の武装だけだった。

「馬鹿な！　自分から武装を放棄するだと！？」

「ＩＳの武器は・・・」

「他にもありましてよ！！」

二人の拳がメルツェルを直撃する。吹き飛んだメルツェルはそのまま屋上をゴロゴロと転がっていき、四肢を投げ出して大の字に倒れた。

「・・・潮時、か」

空を見上げながら、メルツェルは囁く。

「まぁいい。最早、私も無用だ・・・人類に、黄金の時代を」

（一人では逝かせんぞ、ヴァオー）

「勝ったぁ～・・・って、オープニングから高熱源反応！？」

「これは・・・自爆！？　お待ちなさい！　めるつぇ」

二人の声が届くことは無く、メルツェルは自身の起こした爆発に巻き込まれ、そして消し飛んだ。想いだけを残して。

その命、どこに遣う？（前書き）

報告。『月明りに照らされ繋がる想い』の最後の会話文を書き直しました。詳細に言うと、アンサラー・オヴリージュがグラハム・エーカーみたいなキャラになってます。理由は、この先に書く太陽がメインの話で活躍するためです。確認しておいてください。

その命、どこに遣う？

アルテリア・クラニアム内が眩い白で埋め尽くされる。零落白夜を発動させながらぶつかり合う雪片と淡月。二刀の持ち手である一夏と真改は一瞬の鍔迫り合い後、弾かれたように離れた。間髪入れず、紅蓮の砲撃が真改を襲う。数十に拡散したビームを、真改は超人的な速さでかわしていく。

「動きが速すぎる！」

「・・・遅い！」

拡散ビームをかわし切り、真改は箒に向かって跳躍する。箒はもう一度紅蓮の引き金を引くが、真改は淡月を横一文字に振って全てのビームを切り裂いた。淡月を振り抜いた勢いを利用して回転、回し蹴りを箒に叩き込む。

「箒！　手前ぇっ！！」

箒を蹴り飛ばされたことに激昂し、語調を荒くさせながら一夏は空中で回転蹴りを放った真改に雪羅の砲口を向ける。

「吹き飛べぇっ！！」

放たれる荷電粒子砲。真改は無理矢理スラスターを噴かして荷電粒子砲を回避した。一夏は床の上をゴロゴロと転がっていく真改を無視し、壁に叩きつけられた箒の元にまで飛んでいく。

「大丈夫か箒！？」

「あぁ・・・」

二人は同じ方向に視線を向ける。そこでは派手に転がっていた真改が立ち上がり、既に淡月を構えて二人を油断無く見ていた。一夏は雪片の柄を握り締め、箒は腰から空裂と雨月を抜き放つ。視線が交差し、三者は動いた。一夏と箒は左右から挟みこむように真改に襲い掛かり、彼はその場から動かずに二人を迎え撃つ。

「おらぁ！！」

「はぁ！！」

「・・・来い！！」

雪片を淡月で受け止め、雨月を手刀で捌く。一夏は力押しで、箒は速さで真改を圧倒しようとするが、真改は呼吸を乱すことも無く二人を相手取っていた。雪片を押し返し、雨月の打突と共に放たれる無数のエネルギー弾を手刀で弾き飛ばす。二人の武器を滑らせて手首を掴み、後方へと投げ飛ばした。

「っつ！！」

「くっ！」

一夏は強かに叩きつけられ、箒は受身を取って素早く起き上がる。真改が淡月を振り上げて一夏に肉薄するのを視認し、瞬間加速（イグニッション・ブースト）で突っ込み二人の間に立ちはだかった。迫る淡月の刀身を、身体を覆っている桜花繚乱乃羽衣で防ぐ。

「行け、紅揚羽！！」

桜花繚乱乃羽衣を掴んでいた右手を一振りして真改を弾き飛ばし、小型の自律ブレードビットを六基飛ばす。真改は後ろへと下がりながら正確に淡月を振って紅揚羽を切り裂いていった。三基を切ったところで頭上に影が差した。見上げ、影の正体が一夏だと判断すると同時に回避行動に移る。さっきまで真改がいた所を雪片の切っ先が抉り取る。

「「・・・」」

無言で視線をぶつけ合い、互いの刀を打ち付けあう。火花を散らせあいながら、無理矢理刀を振り抜いた。二人の頬から血が飛沫く。一夏は雪羅をカノンモードからクローモードに移行させ、五本のエネルギークローの先を揃えて、真改の肩を貫いた。同時に残っている三基の紅揚羽が真改の身体を穿った。対し、真改は返す刀で一夏を切り裂く。傷口から血を噴き出させたまま二人は距離を取る。

「傷口は浅いか・・・」

「一夏、無事か！？」

「あぁ・・・」

袈裟懸けに切られた傷口を抑えていると、一夏の元に箒が飛んできた。心配そうに顔を覗き込んでくる箒に大丈夫だと片手を振って見せ、真改に視線を送る。

「・・・」

真改は無言で一夏に貫かれた右肩の傷口を見ていた。エネルギークローで大半の筋肉を焼かれ、ほとんど皮だけでつながっている状態の右腕を邪魔だと判断したのか、真改は無表情に右腕を引き千切った。噴水のように噴出す血潮。一夏と箒は思わず目を逸らすが、真改は無表情を保ったまま淡月を持ち直して二人を見据えた。

「・・・私は、死ぬだろう」

唐突に真改は呟く。とても小さな声だったが、何故か対峙している二人にははっきりと聞こえた。二人は一瞬目を見開くが、すぐに納得する。真改の右肩からは相変わらず血が噴出し続けている。止まる気配もないので、このままいけば出血多量で死ぬのは当然だろう。

「・・・死ぬ前に私は、知りたい。何故、お前達は闘う？　・・・その命、どこに遣う？」

「「・・・・」」

真改の問いに二人は黙り込んで考え込む。このまま黙っていれば、真改は出血多量で死ぬだろう。そうすれば、自分達は労なくして勝利が収められる・・・。何を考えているのか以心伝心したのか、二人は互いの顔を全力で殴った。一瞬でも、そんな考えを思い浮かべた自分が恥ずかしいのだろう。

「俺の命・・・」

一夏は答えを探す。真改が納得できるだけの答えを。そして思い浮かべたものは。常に揺るがず、崩れず、飄々と自由に己を貫き続ける男の後ろ姿。不屈の想いがどれ程大事なのか、背中で教えてくれた。

「私の命・・・」

箒は答えを探す。真改が納得できるだけの答えを。そして思い浮かべたものは。常に凛とし、圧倒的な意志と力を以って導いてくれる女の後ろ姿。強さとは何たるかを、言葉で教えてくれた。

「「友の為に」」

自分達が彼らに対し、出来ることなど些細なことだけかもしれない。ならば、命を賭して彼らに力を貸そう。それが、二人の答え。二人の答えを聞いて満足したのか、真改は少しだけ相好を崩した。

「・・・参る！！」

淡月を構え、零落白夜を最大出力で起動させる。一夏も、真改に応えるように雪片を輝かせ始めた。箒も、防御に回していたエネルギーを全て空裂と雨月に回して攻撃力を極限にまで高めた。視線と共に、覚悟、矜持、想いが交錯する。

次の瞬間、勝負が決していた。雪片と淡月のぶつかり合い。結果は引き分け、互いの零落白夜が相殺された。一夏が後ろに下がると同時、一夏の頭上を跳び越えるように跳躍していた箒が着地した刹那に空裂を振り抜いた。空裂の刀身が淡月に亀裂を走らせ、遅れて発生した攻性エネルギーが完全に淡月を両断する。折れた淡月の切っ先が回りながら飛んでいく中、僅かの時間も入れずに箒は雨月を突き出してエネルギー弾を発射させる。淡月を失った真改はなす術なく装甲を穿たれていった。

ふらつきながらも、真改は雨月の連打に耐え抜いた。視線を上げた

彼女が見たものは・・・カノンモードに移行した、最大出力の雪羅の砲口。

「・・・見事」

白い閃光。それが彼女の見た最後の光景だった。

その命、どこに遣う？（後書き）

みじけぇ～・・・

守りたい世界

大気圏外、無数の光と光が飛び交っている。浮遊型巨大ＡＦ（アームズフォート）、アンサラー。数え切れない量で宇宙を埋め尽くす自律兵器、アサルト・セル。両者が放つ砲撃で、宇宙が光で埋め尽くされている。そんな中、砲撃の光とは明らかに異質な輝きが一つ、白い筋を描きながら飛んでいた。

「また君か・・・厄介な奴だよ、君は！」

飛翔し、接近してくる輝きを睨みつけながら、クルーゼは腕を一振りする。背中の大型スラスターから三基のドラグーンが射出された。解き放たれたドラグーンは多角的な動きで巨大な流れ星となった輝きに迫る。

「あんただけは！！」

流れ星、夜明は両手に握り締めたウェポンアームのグリップを強く握り締めた。爆発的な推進力で夜明を推し進めていたミーティアの各部装甲が次々と開いていく。更にもう一度、グリップを握る手に力を込めると、開いた各部装甲から壁を連想させるほどのミサイルが射出された。

「あってはならない存在だと言うのに！」

クルーゼに向かって飛ぶミサイル群。ドラグーンは小刻みに、高速機動しながらクルーゼの前にビームの網を張り巡らせる。ビーム網に捉えられ、ミサイル群は一挙に爆発していった。

「知ったことかぁ！！」

ミサイルの爆発で発生した黒煙に向け、夜明は右のウェポンアームの銃口を向ける。高密度の収束ビームが黒煙を切り裂き、クルーゼへと迫る。収束ビームを回避し、クルーゼはビームライフルを乱射させた。クルーゼの砲撃は正確にウェポンアームを撃ち抜き、夜明はウェポンアームの放棄を余儀なくされる。

「知れば誰もが望むだろう、君のようになりたいと、君のようでありたいと！！」

「そんな大層な人間じゃねぇよ、俺は！！」

咆哮を上げながら、夜明は残った左のウェポンアームからビームサーベルを伸ばす。クルーゼも左腕の複合兵装からビームサーベルを展開させた。夜明はビームサーベルを薙ぎ払うように一閃させた。横からの一撃を、クルーゼは僅かに身体を上昇させてかわす。ビームサーベルを振り抜いて隙だらけの体勢になった夜明はすぐに後ろへと下がるが、それよりも速くクルーゼがウェポンアームを切り落とした。

「だとしても望まずにはいられない、故に許されない。君という存在は！」

夜明から距離を取りながらクルーゼは残りのドラグーンも全て展開し、ドラグーンとビームライフルの連射で光の雨を降らせる。

「力だけが・・・」

腰からスターライザーを引き抜き、夜明は自身とミーティアに直撃

するであろうビームだけを弾き飛ばしていった。ドラグーンが円形に夜明を囲み、一斉にビームを放った。

「俺の全てじゃない！！」

後ろへと下がりながらドラグーンの一斉射撃を回避し、夜明はスタードライブとディバイン・カノンを発射態勢に移行させ、クルーゼに向けて放つ。荷電粒子砲と小口径弾を避け、クルーゼはドラグーンでオールレンジ攻撃を開始した。

「それが誰に分かる！」

全方位から放たれるドラグーンの射撃を回避しながら、夜明はウィングスターとスタードライブ、ディバイン・カノンを連射させる。クルーゼは夜明の砲撃を全てかわし、夜明へと肉薄する。ドラグーンの砲撃が激しさを増す中、夜明はクルーゼの接近を許した。

「分からぬさ！！」

クルーゼが振るうビームサーベルがミーティアの大型スラスターを焼き、抉り取る。大きく体勢を崩した夜明の腹部に、クルーゼの蹴りが決まる。スラスターで威力を増した蹴りの直撃を受け、夜明は激しい勢いで吹き飛んでいった。吹き飛びながらもクルーゼに視線を向けた刹那、夜明の左腕の肘部分をビームが貫いた。左腕の肘から先が吹き飛び、宇宙に血が幾つもの水球になって飛んでいく。

「誰にも！！」

今度こそ、ドラグーンのオールレンジ射撃がミーティアを捉えた。ミーティアの爆発が直撃し、夜明は殴りつけられたかのように吹っ

飛んでいった。

「あいつは・・・クルーゼは『Ｐｒｏｊｅｃｔ（プロジェクト）　Ｒｅｂｉｒｔｈ（リバース）』によって産み出された、月光夜明のクローンだ!!」

「な、何だって!?」

テルミドールの告白に、流星は驚愕を露にさせる。その一瞬を逃さず、テルミドールはレーザーバズーカの引き金を絞った。反応が遅

れ、琥珀色のレーザーが直撃しようとするが、流星はＩＳ－Ｄシステムの馬鹿げた機動力でレーザーを回避する。第二移行（セカンド・シフト）したことによって、トワイライトウィングは常にＩＳ－Ｄシステムを発動できるようになった。流星はＩＳ－Ｄシステムを発動させ、テルミドールを追い詰めていった。だが、さっきのテルミドールの告白で、流星の動きが鈍りだす。

「そ、それはどういう」

「言葉通りの意味だ！　あいつは闘わせられるためだけにこの世へと産み出された存在だ！」

テルミドールの連射が流星を襲う。流星は回避行動を取るが、テルミドールの言葉に動揺しているのか、砲撃を全てギリギリで回避している。

「クルーゼは世界を変えたいと言った！　もう、自分のように、存在理由が決め付けられた存在を作りたくないと！」

「それで、それで行き着いた答えが大量虐殺かよ！！」

二つ折りにマウントしているレイジングハートを広げ、銃口をテルミドールに向ける。バヂィッ！　と銃口が輝くと同時に閃光が放たれる。テルミドールはビームを回避するが、流星はビームを放ち続けたままでテルミドールに狙いをつけようとした。レイジングハートの砲撃で、クラニアム内の壁がどんどん削られていく。

「そうでもしなければ、世界は変わらない・・・いや、人は変わろうとすらしない！！」

テルミドールはレイジングハートの砲撃を掻い潜り、瞬間加速（イグニッション・ブースト）で倍増させた勢いをアサルトライフルの銃口に乗せ、流星の横っ腹に叩き込んだ。

「違う・・・！　人は、人はそんな物じゃない！！」

テルミドールがアサルトライフルを引く前に銃身を掴み、パルマ・フィオキーナで破壊する。流星は背中からバルディッシュを引き抜き、テルミドールに斬りかかった。

「何が違うものか！」

レーザーバズーカの銃身でバルディッシュを滑らせ、バルディッシュを振り抜いた流星の首を掴む。そのままスラスターを全開にして直進し、流星を壁に叩きつけた。壁に出来たクレーターに流星を押し付け、蹴りを叩き込む。より深く、流星の身体が壁にめり込んだ。

「憎しみの瞳と、引き金を引く指しか持たない者達だけしかいない世界で、何を信じる！？」

流星の首を離し、レーザーバズーカを連射させる。琥珀色のレーザーは確実に流星を撃ち抜き、トワイライトウィングの装甲を穿っていった。

「最早、誰にも止められない！　この戦争で地は灼かれ、涙と悲鳴は新たなる争いの狼煙となる！　そして、人類は緩やかな壊死を迎えるだろう・・・人が数多持つ予言の日だ！！」

肩に装備されたプラズマキャノンの出力を最大まで上昇させ、狙いを定める。

「予言は、我々が止める。貴様らイレギュラーは不要だ・・・消えろ！！」

「・・・れ、でも・・・！」

夜明は左腕の激痛に耐えながら右の拳を握り締める。自分の存在が、クルーゼという存在を産み出してしまった。確かに、自分はあってはならない存在なのかもしれない。力だけが、自分の全てだと分か

ってもらえないかもしれない。

「それでも！！」

「と・・・しても・・・！」

流星はプラズマキャノンをビームシールドで防いだ。確かに、人類は緩やかな壊死を迎えようとしているのかもしれない。それを止めようとしているＯＲＣＡにとって、自分はイレギュラーな存在なの

かもしれない。

「だとしても！！」

「「守りたい世界があるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」」

壁から身体を引き剥がし、流星は背中の大型ウィングスラスターから紅の光で出来た翼を広げる。第五世代ＩＳの証、精神力の具現化。この土壇場で、流星はトワイライトウィングの性能を完全に引き出した。

「この土壇場で更に進化するか、トワイライトウィング・・・！」

驚きながらも、テルミドールはレーザーバズーカの引き金を絞る。だが、琥珀色の砲撃は光の翼によって生み出された残像を撃ち抜いただけだった。

『運命の翼（ディスティニーウィング）、最大出力』

「うおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！」

大型ウィングスラスターから展開された紅の翼は大量の粒子をクラニアム内に撒き散らしながら流星を後押ししていく。紅の閃光がテルミドールの横を通り過ぎた。レーザーバズーカの銃身が斬られ、爆発する。再び、テルミドールを切り裂く紅の閃き。今度はプラズマキャノンが切り落とされた。更に、流星は擦れ違いざまの斬撃をテルミドールに浴びせていく。

「・・・最後に敗れる、そんな運命か・・・」

武装を失い、ＰＩＣの力さえ失い落下していくテルミドールの視界に、レイジングハートを構える流星の姿が映った。

「心しておけ。貴様らの惰弱な想いが、人類を壊死させるのだと・・・」

「・・・人類なんて、どこにもいないさ、テルミドール・・・いや、オッツタルヴァ」

放たれた閃光。一瞬、紅の光で埋め尽くされたテルミドールの視界に、仲間達の姿が映る。

「人類に・・・黄金の、時代を・・・」

「いっくぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

シューティング・ビット、フィン・ファングを周囲に展開させ、夜明は器用に片手でウィングスターを連結させ、クルーゼの背にある大型スラスターに収納されたドラグーンを撃ち落し始めた。

「何っ！？」

クルーゼは急いでドラグーンを射出させる。だが、射出した側からシューティング・ビット、フィン・ファングによって撃ち抜かれていく。全てのドラグーンを破壊されたクルーゼはビームライフルを夜明に向ける。放たれた閃光が夜明の右脚を貫いた。右脚から血が

流れ出すのも構わず、夜明は右手に握ったウィングスターをそのままにしてスターライト・フルバーストのエネルギー供給を始めた。夜明の双眸をマルチロックオン用バイザーが覆う。何十ものロックオンカーソルがクルーゼを捕捉した。

全ての武装から放たれた砲撃が、次々とクルーゼを襲う。武器を破壊され、装甲を剥ぎ取られた。それでも、クルーゼは生きていた。

「・・・へっ、やってやったぜ・・・生きろよ、ラウ・ル・クルーゼ。生きて明日を掴め・・・」

そこまで言って、夜明は意識を失った。左腕と右脚からの出血多量のせいだ。気を失い、宇宙を漂っていこうとする夜明の身体を、クルーゼは困惑した様な表情を浮かべながら受け止める。

「・・・生きて明日を掴め、か・・・中々に大変そうだ」

そう言いつつも、クルーゼの顔はどこか清々しそうだった。

「私以外の者は・・・トーティエント以外、逝ってしまったか・・・悲しむのは後だな。今は、戦争を終わらせた英雄を地球に返すとしよう」

クルーゼが合図を送る。すると、アンサラーと激しい砲撃戦をしていた全てのアサルト・セルが機能を停止させた。満足げに頷き、クルーゼは夜明を脇に抱えながら地球へと降りていった。

守りたい世界（後書き）

一つ聞きます。頭で考えず、心で答えてください。

貴方なら誰を選ぶ！？

セシリア
鈴音
シャル
ラウラ

貴方は誰を選ぶ！？

今こそ決断の時！（前書き）

シャルが壊れてま～す。覚悟して見てね（キラッ★）

今こそ決断の時！

「ん・・・ここは？」

深い海溝から浮かび上がってきた気泡のように、ゆっくりと夜明の意識が浮上してきた。霞んでいる視界を、何度か目を開いたり閉じたりしてはっきりさせる。すると、視界に染み一つ無い、綺麗な白い天井が映った。取り合えず、どこかは分からないがベットに寝かされているのだということは理解できる。

「知らない・・・天井」

「そこ、ネタに走るな」

「たい・・・よう？」

思わずボケに走った夜明に誰かが突っ込みを入れる。首だけを回して突っ込みが飛んできた方向を向くと、目の下に結構な隈が出来た太陽が椅子に座っていた。夜明が視線を向けると、太陽は欠伸を噛み殺しながら手を上げる。

「ここは・・・地獄か？」

「何で私の面を見た瞬間、ここを地獄と判断した？」

「いや、だってお前だし」

「オーケィ、何時かお前と拳で語り合わねばならない日が来るであろう事を予言してやる・・・まぁ、何はともあれ無事に目を覚まし

てくれて良かった」

ホッとため息を吐く太陽。

「無事に目を覚ます・・・って、俺はどれくらいの間意識を失ってたんだ？」

「大体一週間だな。その間に吹っ飛んでいた左腕と、損傷が激しかった右脚の再生治療は終わったぞ」

言われてみれば確かに、クルーゼの攻撃で吹っ飛んだはずの左腕と、撃ち抜かれた右脚がキチンと元通りになっていた。未来の技術凄ぇ、と感心する夜明。ふと、病室の中には自分と太陽だけしかいないことに気がつく。

「太陽、あいつ等は？」

「安心しろ、皆無傷だ・・・少なくとも、お前に比べればな。今は外で寝てるよ。二、三時間前までは起きてたんだけど、流石に戦いの後での徹夜はきつかったみたいだ」

「お前は大丈夫なのかよ？」

鍛え方が違うからな、と太陽は肩を竦めて見せる。そして、ポツポツとこの一週間の間に起こったことを話し始めた。まず、企業連とラインアークの話。協同する形でＯＲＣＡ旅団に対抗した二組織はそのまま友好条約を結ぶ、という話になっているらしい。これは太陽が冬華から伝え聞いた話なので、まだ確定しているという訳ではないが、友好条約は確実に結ばれるだろう、と冬華は断言していた。

次に流星達のこと。流星、黄昏、朔夜の三人はそれなりに手傷を負っていたらしいが、そこまで重い傷ではなかったらしく、傷の治療をしながら後始末をしているデュランダルの手伝いをしているそうだ。太陽も手伝わされそうになったが、そこは手八丁口八丁で逃げてきたらしい。

最後にＯＲＣＡ旅団生き残りのトーティエントとクルーゼの話。現段階では、所在は突き止められていない。企業連とラインアーク、更識家の者が探しているらしいが、見つからないだろうな、と太陽は言った。

「ま、こんなとこだな。お前が寝ている間に起こったことは」

「そうか・・・」

「そうそう。言い忘れていたが、近い内に終戦記念の式典が行われるらしい。それには私達も出ることになっているから、今の内に十分休んどけ」

「分かった。そいじゃ、もう一眠りすっかなぁ・・・って、何をしてるのかな太陽さん？」

もう一度寝ようとしていた夜明は上擦った声を上げる。夜明の問いかけを無視し、太陽は猫のように身軽な動作でベットの上に飛び乗った。布団越しに夜明の腹に跨り、すぅ、と夜明の顔を指で撫で下ろしていく。

「何って・・・病室で二人きり。そしてお前は怪我が治ったばかりで思うように動けない・・・」

グッ！　とサムズアップしながら歯を輝かせて見せる。

「襲わなきゃいけないだろ・・・性的な意味で」

「誰か助けて！　ここに度し難い変態がいます！！」

身を捩って暴れる夜明だが、太陽は両脚でしっかりと夜明を挟んで逃げることを許さない。恍惚とした表情を浮かべながら、器用に右手で布団、夜明の服を剥ぎ取っていき、左手で自身の服を脱いでいった。

「いくら叫ぼうが無駄だ。この病室は、完全防音仕様だからな」

「何故に病室にそんな大層な仕様が！？」

「正確に言うと、私が一日で改造した」

「相変わらず高スペックだなお前は！？」

勉学、戦闘、料理のみならず、建築にまで造詣が深い美少女・・・夕暮太陽、恐ろしい子！　そして、今の夜明にとって太陽は恐怖以外の何物でもなかった。

「・・・そこまで嫌がられると流石に・・・」

「え、もしかして傷ついた？　い、いや、違うんだぞ太陽。お前のことが嫌いって訳じゃなくて、そう言うのはもう少し大人になってからするも」

ふと、表情に影を作った太陽。もしかして傷つけてしまったか？

と夜明はオロオロする・・・が、何故か太陽は頬を薄紅に染めてぃた。

「ムラムラするな・・・」

「やっぱりお前変態だろ！！」

一瞬でも彼女のことを心配してしまった自分を殴り殺したくなった夜明だった。手早く下着姿になった太陽は息を荒げながら夜明の肌を舐める。

「あぁ・・・やっとお前が私のものに・・・ハァ、ハァ・・・」

「待て！　落ち着け！　こんな場面を誰かに見られたり聞かれたりしたらどうするんだ！？」

「安心しろ。さっきも言った通り、この病室は完全防音仕様だ。しかも、ドアもかなり頑丈でロック済み・・・私がどんなに嬌声を上げようが、どれだけベットがギシギシ鳴ろうが、お前の『検閲削除』が私の『検閲削除』を貫いて卑猥な水音を出そうが、誰にも聞こえなし誰も見れない・・・夜明ぇ！！　私はお前を求めている、果てしないほどにぃ！！」

「にゃああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

迫る太陽の魔手、響く夜明の絶叫、最早、夜明も年貢の納め時か！？　誰もがそう思ったであろうその時、

ドガァァァァァァァァン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

扉が吹き飛んだ。木っ端微塵に吹き飛んだドアの欠片が病室内を飛び交う。不機嫌そうに唸り声を上げ、太陽は下着姿のままでベットから降りた。太陽が凄みを利かせた視線を送る先には、さっきまでドアがあった場所に立っている四つの人影が佇んでいる。

「お前ら・・・よくも邪魔してくれたな・・・」

殺気立つ太陽。どす黒いオーラが視認出来そうだが、それは四つの人影も同じこと。

「間に合って良かったですわ・・・！」

「そうよ・・・一番危険な奴をほっぽったまま寝るなんて、どんだけ危機感が無いのよ、私達は！！」

「夜明は・・・無事だね。太陽、僕達が眠ってるのをいいことに、抜け駆けは酷いんじゃないかな？　かな？」

「太陽、幾らお前でも、夜明（よめ）を渡すつもりは欠片も無いぞ」

『そうそう。夜明は俺と相棒のもんだ！！』

セシリア、鈴音、シャル、ラウラ（ついでにライラ）が戦闘態勢に入る。指の関節をバキボキ鳴らし、太陽も戦闘の意思を見せる。

「先ずはお前らと拳で語り合わなければいけないようだな・・・」

「あの、お前ら何してんだ？　まさかとは思うが、病室で戦闘をおっ始めるつもりじゃねぇだろうな？　ちょ、ま、落ち着ギャアアア

アアア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

草木も眠る丑三つ時。太陽たち女性陣は割り当てられた病室のベットで寝ていた。皆、未だに戦闘の疲れが取れていないのか、泥のように眠っている。規則正しい寝息だけが響く中、スクッ、と一人だけベットから身を起こした。シャルだ。

「・・・皆、寝てるよね」

キョロキョロと首を動かして周りを確認する。箒、セシリアは綺麗な姿勢で寝ている。鈴音は暑いのか、布団を肌蹴け、ラウラは猫のように丸まっていた。そして太陽は、

「そんな、駄目だぞ夜明・・・シシケバブだなんて」

意味不明な寝言を呟いている。

「一体、どんな夢を見てるのかな?」

気になるシャルだったが、それこそ神のみぞ知ることだと納得し、ベットから降りてそろりそろりと音を出さないようにドアを開けて出て行った。向かう場所は夜明の病室。

夜明は星空を見上げていた。ベットに座りながら窓枠に左の肘をつき、瞳に無数の星を映している。ふと、右腕を伸ばしてみた。星を掴める気がして。

「って、掴める訳ねぇだろ」

一人で突っ込み、右腕を下げる。その時、控えめなノックが室内に響いた。最初、夜明は己の聞き間違いではないかと思ったが、二度目のノックでその考えは違うと確信した。ベットから降り、スリッパを引っ掛けながらドアを開く。

「わっ！　・・・ビックリした」

「シャル・・・こんな時間に何の用だ？」

ノックの主であろうシャルと目が合った。ビックリしているシャルを、夜明は不思議そうに見つめる。

「あの、寝れなくてさ。それで夜明の所に来たんだけど・・・迷惑だった？」

上目遣いで見てくるシャルに首を振り、自分の眠れなくて空を見ていたと告げる。

「そう、なんだ・・・僕も一緒に見ていいかな」

「あ？　別に構わねぇけど・・・別段、何か面白い訳でも無いぞ」

「それでも良いよ・・・僕、夜明と一緒にいたいだけだから・・・」

「あぁ、そう・・・まぁ、入れば？」

夜明はシャルに部屋の中へ入るよう促す。病室に入った際、「・・・やっぱり、言葉じゃ夜明に気持ちは伝わらないか」と囁いているシャルをベットに座らせ、夜明もベットに座った。

「「・・・」」

二人は無言で星空を見上げていた。チラッ、とシャルは夜明の横顔を窺ってみた。シャルに視線を向けるでもなく、夜明はただただ星空を目に焼き付けている。

「・・・シャル、さっきから俺のことばっか見てるけど、どうかしたのか？」

暫くの間、夜明を見つめ続けていると、唐突に夜明がシャルに訊ねた。夜明の問いに首を振り、シャルは夜明の肩に頭を置いた。一瞬、夜明は驚いた表情を見せるが、すぐにシャルの頭をポフポフと撫で始める。気持ち良さそうに目を細めながら、今度はシャルが夜明に訊ねた。

「ねぇ、夜明・・・僕のこと、好き？」

「あ、何だいきなり？」

「答えて」

「・・・そりゃ、好きだけど」

妙な圧力を放つシャルに気圧され、夜明は素直に答える。だが、それはシャルが求めていた答えでは無かったようで、彼女は少しだけ頬を膨らませた。

「それって友達として？　それとも異性として？」

「え？　いや、その・・・」

答えに窮する夜明の首にシャルの両腕が回される。驚いている夜明を、シャルは濡れた目で見ていた。

「僕は夜明が好きだよ・・・異性として」

言うや、シャルは夜明の唇を奪った。驚き、目を開く夜明。数秒後、触れ合うだけの接吻を終え、シャルは唇を離しながら悪戯っぽく笑う。

「えへへ。キス、しちゃった」

再び、シャルは夜明の唇に唇を押し付ける。ご丁寧に、今度は舌を入れて。

「ん・・・れろ・・・ちゅば・・・」

夜明の口内を舌でなぞりながらシャルは両腕を彼の首から外し、驚きで固まってる夜明の両腕を掴んで自分を抱き締めさせた。十分近く夜明の味を堪能し、シャルはチュポンと音を立てて舌を引き抜く。

「あ、あの、シャルさん？」

「僕だけじゃない。太陽も、セシリアも、鈴も、ラウラも夜明のことが好きなんだよ」

「え・・・あ・・・いや・・・」

「皆、夜明の特別に、一番になりたがってる・・・」

顔を真っ赤にさせ、意味不明な単語を呟く夜明を、シャルは背筋がゾッとするほどの色気を湛えた目で見ていた。

「夜明・・・僕のことだ「はぁ～い、そこまでだぞ～」っ！」

いきなり聞こえてきた声に身体を強張らせる二人。声の発信源がどこか探していると、いきなり天井の一部が外れて何かが降りてきた。何かはベットのすぐ傍に着地し、ゆっくりと立ち上がる。

「「太陽？」」

「よっ・・・にしてもまぁ、シャルだったとは意外だったな。てっきり、セシリアかラウラ辺りが夜這いかけてるもんだと思ってたが」

「・・・悪い？」

シャルにしては珍しく、不機嫌そうな表情を浮かべながら夜明の首に回した両腕に力を込め、太陽を睨んでいた。

「別に悪いとは言わないさ。お前や私以外にも、同じようなことを考えてる馬鹿がいるからな・・・なぁ？」

太陽がドアに視線を向ける。夜明とシャルが訝しげな表情を浮かべていると、セシリア、鈴音、ラウラがぞろぞろと病室に入ってきた。

「・・・おやまぁ、皆さんお揃いで・・・」

夜明は顔を引き攣らせながらも取りあえずの挨拶をする。今、ここに朴念仁・オブ・朴念仁ズに恋する五人の乙女が終結した。流石の夜明も、何か凄い予感、それも危機を報せる予感がバンバンした。

「もうこの際だ、単刀直入に聞くぞ。夜明、お前は私達の中で誰を伴侶にしたい？」

「は、半魚？」

「しばくぞこら」

夜明は顔を引き攣らせながら五人の顔を見る。

「「「「「・・・（じぃ～）」」」」」

期待と不安で満ち満ちた五組の視線。身体中が爆発しそうな何かを感じながら、夜明は自分の中で選択肢を探し出そうとする。

（どうすんの俺？　どうすんのよ！？）

・全員を幸せにする。
・全員を伴侶にする。
・全員と結婚する。
（・・・あれ、軽く詰んでね？）
続く――――！！！！！！！！！！！！！！！

今こそ決断の時！（後書き）

ども、こんちわ、サザンクロスでっす。お聞きしたいのですが、夜明と太陽の恋姫無双の話を読みたいですか？　もし、読みたいか方がいましたら、一刀の扱いをどうして欲しいかだけ書いて教えてください。

夜明、男になったよ♪（前書き）

次回、本当の最終決戦開始。

夜明、男になったよ♪

（ど、どうすればいいんだ俺は！？）

迫り来る選択の時！　少年が選ぶ未来は如何に！？　恋する乙女五人の期待と不安に満ち満ちた視線を全身に浴びながら、夜明は目を閉じて自分の中にある、選ぶべき選択肢を模索する。

・全員を幸せにする。

・全員を伴侶にする。

・全員と結婚する。

まぁ、選択肢など既に決まっているのだが・・・。太陽たちにひたと見つめられきっかり一分。夜明の顔を流れ落ちていた汗が止まった。夜明は閉じていた目を開き、太陽に視線を向ける。

「夕暮太陽」

「お、おぅ」

「セシリア・オルコット」

「は、はい」

「凰鈴音」

「な、何よ」

「シャルロット・デュノア」

「な、何かな」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ」

「う、うむ」

名を呼ばれ、顔を真っ赤に染める五人の瞳を順々に見据え、夜明ははっきりと宣言する。

「お前ら全員、俺の女にする。異論も意見も認めない。その代わり、世界中の誰よりも幸せにする」

固まる五人。それぞれの顔が困惑、戸惑い、まごついた表情を浮かべる。だが、それも数秒間のこと。夜明が言ったことをはっきりと理解し、五人はこの上ない喜びで顔を輝かせながら、

「「「「「夜明（さん）！！！！！」」」」」

「うにゃあああああ！！！！！！！！！！」

全身全霊で夜明に抱きついた。五人分の突進に耐えられず、夜明は勢い良くベットに押し倒された。と言うか、女性とはいえ人間五人分の突撃を喰らい、ベットから落ちなかっただけ良いほうだろう。ベットに強打した後頭部を摩りつつ、夜明はグリグリと身体を押し付けてくる五人を撫でた。

「漸く腹を括ったか馬鹿野郎、どれだけ待たせれば気が済む」

「夜明さん。このセシリア・オルコット、身も心も貴方に・・・」

「・・・あんな大口叩いたんだから、絶対に幸せにしなさいよ、私達のこと」

「夜明、これからはずっと一緒に」

「お前は、きっと私が幸せにしてやるからな」

「うんラウラ、それ俺の台詞」

夜明に撫でられ、五人はそれぞれの表現方法で嬉しさを示す。数分後、夜明から離れた太陽は妖しく瞳を輝かせた。

「さて、それじゃ始めるか」

「？　始めるって何をごぼぁっ！！」

いきなり太陽は服を脱ぎ始めた。目の前で繰り広げられる太陽の艶姿に、夜明は鼻血を噴き出して後頭部を壁にぶつける。目の前に星が散り、打った部分を押さえる夜明に妖艶という表現がピッタリ太陽がにじり寄る。

「何って、ナニに決まってるだろ」

お前たちもしたいよな？　太陽の問いに四人は顔を赤くする。夜明が視線を向けて更に頬の赤みが増すが、意を決して服に手をかけた。

「お、お前ら！　自分の身体を大事にしなさい！！」

「大事にしてるからこそ、お前に見せるんだろうが」

夜明、両手で目を塞ぐ。太陽、強引に夜明の両手をこじ開ける。

「あの、太陽」

「誰からやるか順番を決めないと」

「おぉ、それもそうだ」

逃げるなよ、と夜明に念を押して太陽は四人の輪に戻った。

「で、誰からやるのよ?」

「公平にジャンケンでどうでしょう?」

「でも、それだと決まるのに時間がかかりそうだ」

こんな感じの会話が続く。夜明は諦めたのか、病室内中に視線を泳がせていた。そんなこんなで数分後、ようやっと話が纏まった。

「一番最初はシャルロットでいいだろ」

「え、良いの?」

戸惑いを見せるシャルに四人は頷いてみせる。

「一番最初にここに来たのはお前だからな」

「その勇気に敬意を表して、という訳ですわね」

シャルは遠慮がちな表情を浮かべるが、四人に背中を押されて意を決した。

「皆・・・ありがとう」

シャルが夜明に近づいていくのを見て、太陽は残った三人に視線を向ける。

「それじゃ、私達は私達で準備をするか」

「準備？」

疑問符を浮かべるラウラ。

「あけすけに言うと、セックスし易くする為に股を濡らすことだ」

ボフン！　と三人の顔が爆発する。にっ、と笑うと、太陽は一番近くにいたセシリアの腰に腕を回して抱き寄せ、耳の穴にぬるっと舌を差し込んだ。

「ひゃうん！　た、太陽さん、いきなり何をんんっ！」

セシリアは身を捩って太陽の魔手から逃れようとするが、耳たぶを甘噛みされて身体に力が入らない。しかも、乳房を揉みしだかれて悲鳴に近い喘ぎ声を唇の間から漏らしている。

「なぁ～に、安心しろ。私がめくるめく快楽の世界への入り口まで誘ってやる・・・」

「えぇっと・・・」

「・・・」

夜明は困ったように頭を掻いていた。そんな夜明に無言で抱きつくシャル。シャルから伝わってくる人肌の温もりと、徐々に速くなっていく鼓動に夜明はとぎまぎする。

「あぁぁ・・・あいつらは何をやってるんだ?」

何と言うか、無言の空気に耐え切れずに夜明は別のベットで痴態を繰り広げている四人に視線を向けた。すると、シャルは不機嫌そうに唸り声を上げながら夜明の顔を挟んで強引に自分の方へ向け、無理矢理唇を奪った。くちゅくちゅと卑猥な水音。

「ん、ちゅ、ちゅぷ・・・」

「ん・・・しゃ、シャリュ・・・」

夜明の声を無視し、シャルは夜明の口内に差し込んだ舌をうねうねと動かす。少ししてから離れると、二人の間に銀色の橋が渡されて

いた。シャルは唾液の橋を、夜明に見せ付けるようにゆっくりと舐め取る。

「今は、僕だけ見ててよ」

「あぁ～・・・ラジャー」

いきなり、夜明はシャルを押し倒した。夜明の豹変に、シャルは僅かに身体を強張らせた。ちらっと夜明の目を見る。そこに情欲の炎が燃えているのを見て取り、シャルは一抹の恐怖を覚える。

「よ、夜明、どうしたの？」

「いや、うんまぁ、我慢が色々と天元突破した」

どれだけ鈍く、どんだけ初心でも夜明は年頃の健全な男子。これだけの状況が揃えば、否が応でもそういう気分になるだろう。

「・・・（じぃ～）」

まじまじと夜明に裸体を見つめられ、途端にシャルは気恥ずかしさを覚える。顔を背け、シャルはもじもじしながら視線だけを夜明へと向けた。

「・・・夜明」

「何？」

「優しく・・・してね」

「善処はする」

翌朝、夜明達はデュランダルに呼び出されていた。首長室に向けて歩いていく一行。その内の五人はかなり歩き難そうだ。先頭を歩いていた太陽は顔を少し歪めながら下腹部を撫でる。

「まだ夜明の感触が残ってるな。オマケに腹の中からタプタプ音がするぞ」

「まぁ、二十回も中に出されればそうなるだろうな。ちなみに、私は十七回出された」

仕様も無いことで胸を張るラウラ。だが、すぐに歩きずらそうに体勢を崩した。

（よく言うぜ。七回くらい出されたあたりで、俺と代わってくれって頼んできやがったくせによぉ）

そこにライラの追い打ち。ラウラは顔を真っ赤にさせて黙り込む。

「あんた達はまだ良いじゃない、最後まで意識保ってられたんだから・・・私は十四回辺りで意識がぶっつり切れてるわよ」

「私は十三回から記憶が曖昧ですわ・・・」

羨ましそうな鈴音とセシリア。そしてシャルは、

「かなり歩き難いけど、そこまで酷くは無いね・・・夜明が優しくしてくれたからかな・・・」

夜明との甘いひと時を思い出し、身体をくねらせていた。彼女たち五人をこんな状態にした張本人はというと、

「・・・い、一夏。太陽が黄色を通り越して黄金に見えるぞ」

絶賛死にかけていた。夜明に肩を貸し、引きずるように歩いていた一夏は面倒そうに立ち止まり、夜明の胸倉を掴んでピシャピシャと頬を叩く。

「さっきから言ってるだろ夜明。それは三途の川の向こうの太陽だ。逝ったら（誤字にあらず）戻って来れなくなるぞ」

「というか、屋内にいるのに太陽が見えるわけ無いだろうが。しかも、黄色を通り越して黄金に見えるって・・・」

一夏同様、夜明に肩を貸しながら箒は呆れ切った表情を作る。まぁ、五人の女性を一度に相手した挙句、七十回近く出したのだ。寧ろ、太陽が黄金に見えてるだけで済んでいるほうが不思議だ。

「世界が、黄金に、染まってる・・・」

「戻ってこーい、夜明ぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

2010

夜明、男になったよ♪（後書き）

ども、こんばんわ。三百万ＰＶ突破記念に何か体育祭的なものをやると書きましたが、あれはユニークが三十万を超えたらやります。

と言うわけで、三百万ＰＶ突破記念として、『三年ＩＳ組　太陽先生』をやろうと思います。生徒になりたい人は来てね。それと、一巻分丸まるやるので、結構長くなります。

2011

答えを出す者（アンサラー）

「あぁ～、先日言ったと思うが、終戦記念の式典が企業連とラインアーク別々で二日後に行われる。その翌日、合同での式典だ。誠に勝手なのだが、君達を過去に戻すのはそれらが終わってからでも構わないか？」

「あぁ、構わない」

デュランダルの確認に、太陽は二つ返事で頷く。そうか、とデュランダルは一番後ろにいる、一夏と箒に支えられている死にかけた夜明を見た。

「一つ聞いてもいいかな。何故、夜明は死に掛けているんだ？」

「「「「「・・・（ポッ）」」」」」

「こういうことです」

全く同じタイミングで顔を赤くする五人の乙女。一夏が申し訳なさそうに謝り、デュランダルも大体の事情は察したのか何も言わなかった。

「・・・取りあえず、おめでとうと言っておくよ。それでは、また後日」

デュランダルに一礼し、太陽たちは部屋から出て行こうとする。だが、部屋を出る前に夜明が糸の切れたマリオネットのようにぶっ倒れてしまった。心なし、口から魂のようなものが出ている。

「どんだけ頑張ったんだよこいつは・・・」

「そこのソファに寝かせといてあげなさい」

一夏と太陽は協力して倒れたままの夜明をデュランダルが示したソファに横たえた。何分か経っても意識を取り戻さない夜明。夜明をデュランダルに任せ、太陽たちは首長室を後にする。

「・・・もう、疲れたぜ、バルディッシュ・・・」

「それは太陽のバルディッシュトワイライトとパトラッシュをかけているのかね？」

一時間後、夜明は意味不明な寝言共に起きた。現状を把握するために周囲を見ると、呆れたようにこっちを見ているデュランダルの姿が視界に映る。

「・・・俺は？」

「ここから出て行こうとする寸前、糸が切れた人形のように意識を失ってしまったのだよ・・・恐らく、過労か何かだろう」

「あぁ・・・」

過労、という言葉に妙な心当たりがあるようで、夜明は珍しく頬を赤く染めた。頭を掻きながら上体を起こし、ソファから降りる。

「悪い、迷惑かけた」

「構わないさ。君に、不屈の翼にも疲れることがあると分かり、ある意味得した気分さ」

歯を剥き出して唸り、夜明は首長室を後にしようとする。自動開閉ドアが横に開き、夜明は廊下に歩を進めた。そのまま歩いていこうとすると、デュランダルの声が夜明を止める。

「答え(アンサラー)を出す者。何故、私がＡＦ(アームズフォート)にこんな大層な名をつけたか分かるかね？」

「・・・お前は世界にどんな答えを出すつもりなんだ？」

デュランダルの問いに、夜明は質問で返す。両者は答えない。二人が沈黙を続けていると、自動開閉ドアが微かな音を立てて閉じられた。月光夜明とギルバート・デュランダル。両者の答えが、絶対に混じることが無いと示すように。

2014

「・・・やっぱりか」

深夜、夜明は与えられた部屋に備え付けられていた大型ディスプレイにある画面を映していた。ディスプレイに映し出された地球、アンサラー。そして、アンサラーの今後の軌道。無言のまま、夜明は組んでいた両腕を解き、キーボードを操作してアンサラーの軌道をシミュレートする。結果は変わりなく、夜明は眉を顰めた。

「どうしたんだ、そんな難しい顔をして？」

不意に、後ろから誰かの両腕が首に回された。後頭部に巨大な二つのゴム鞠を押し付けられたような幸せな感触。視線だけ後ろに向けると、炎の如き深紅の髪が見えた。

「太陽、何か用か？」

「自分の男に愛を囁きに来ることに、理由が必要なのか？」

耳を甘噛みしながら太陽は片手を夜明の頬をに添え、優しく自分の方に顔を向けさせた。自身の唾で湿らせた人差し指で唇をなぞり、炎の瞳を潤ませながら夜明の銀眼を覗き込む。

「夜明、セックスしよ・・・」

「・・・そうしたいのは山々だが、時間がなさそうだぜ」

「むぅ～、何だよそ・・・これは・・・」

ストレートに伝えた気持ちを即行で断られ、太陽は可愛らしく唸りながら唇を尖らせる。だが、大型ディスプレイの画面に映っているものを見て、すぐに表情を引き締めた。組んだ両手に顎を乗せ、夜明は囁いた。

「・・・これが、お前の世界にたいするｆｏｒ（フォーアンサー）ａｎｓｗｅｒか、ギルバート・デュランダル」

2016

式典当日。緊張した面持ちの六人と、自然体の一人が式典会場であるメガリス大広場へと向かっていた。スーツ姿の太陽たち。太陽と、こういう場に慣れているであろうセシリアはキッチリとスーツを着こなしているが、二人以外はスーツに着られている感が否めない。

「・・・太陽さん。夜明さんが言っていた話は本当なんですの？」

セシリアの問いに、太陽は歩調を緩めずに無言で頷く。今朝方、夜明から聞かされた話。それが太陽以外の全員を極限の緊張状態に叩き込んでいた。

「着いたぞ。お前ら、ボロを出すなよ・・・特に鈴」

「な、何で私なムガムガ」

大広場に着いた一行。太陽に注意され、大声を出そうとする鈴音の口を両隣りにいるラウラとシャルが塞いだ。鈴音は目と激しい動きで二人に離すよう訴えるが、デュランダルが歩いてくるのを見て、暴れるのを止めた。

「・・・夜明の姿が見えないが、何かあったのかね？」

「野暮用だと。すぐに戻ってくるから、さっさと式典を始めてろとのことだ・・・それを言うなら、流星と朔夜、黄昏の姿も見えないのだが？」

「少し用を頼んでいてね。何、問題が起こらなければすぐに戻ってくるさ」

互いの質問に、太陽は肩を竦めながら、デュランダルは微笑を湛えながら要領を得ない答えを返す。一見、和やかな雰囲気であるが一夏達は確かに見た。二人の間で、何かがぶつかり合い、鬩ぎ合っているのを。

夜明無しで式典は始まった。壇上に上がって話しているデュランダル、その横にある特等席に座っている太陽たち。太陽は広場に用意された数万の椅子に座り、デュランダルの言葉に耳を傾けているラインアークの兵士達を見ていた。

「・・・以上をもち、私、ギルバート・デュランダルの話を終わりとする。この後は、この戦争を終結させた立役者となった月光夜明に話をしてもらうつもりだったのだが、生憎と用事からまだ戻ってきていないようだな・・・太陽、頼めるかな？」

ん、と頷き、太陽は椅子から立ち上がり、デュランダルと入れ替わるようにして壇上の上に立った。一度だけ深呼吸し、自分に向けて飛んでくる数万組の視線を全身で受け止める。そして、ゆっくりと口を開いていった。

「お前たちは何のために戦った？

平和の為に戦ったか？

未来の為に戦ったか？

人類の為に戦ったか？

愛する者の為に戦ったか？

自由の為に戦ったか？

家族の為に戦ったか？

国家の為に戦ったか？」

2019

太陽の口から紡がれたのは、戦争が終わったことへの祝いの言葉でもなく、戦い続けた戦士達を労う言葉でもなかった。誰も答えない、答えられないのを見て取り、太陽は言葉を続ける。

「その戦いの向こうに、答えはあったか？」

誰も、答えない。

「それでいい」

数分の沈黙の後、太陽は優しい笑みを浮かべながらそう言う。

「戦いの向こうに見出した答えなど、虚しさしかない。今、世界はお前たちの尽力で平和になった。答えは、これから見つけろ。そして、殉ずるがいい・・・己の答えに」

それだけ言って、太陽は話を閉めた。一瞬の静寂、そして巻き起こる拍手の嵐。何分もの間、拍手は続いていた。だが、太陽は壇上からは降りずにデュランダルに視線を向けている。

「私から話すことはこれだけだが・・・デュランダル首長、一つだけ聞いてもいいか？」

「・・・聞こう」

デュランダルから許可を頂き、太陽は指を鳴らす。すると、太陽の背後に巨大な空間投影スクリーンが現れた。そこに映しだされていたのは地球、そしてアンサラー。戸惑う兵士達に解るよう、太陽は立てた親指でスクリーンを指差す。

「こいつはアンサラーの予想軌道映像だ。何度もシミュレートしてみたんだが、結果は変わらなかった・・・今から二時間後の正午、アンサラーが地球に、企業連の主要都市、スティーフィアに落下するのはな。どういうことか、説明してもらうぞ、ギルバート・デュランダル」

大気圏を突破しようと、蒼銀に輝く光の翼が空を駆け上っていた。
レイジングウィングを展開させた夜明は全速力で飛翔していく。

前日の夜中。

「アンサラーが地球に落下する」

夜明の告白。いきなりのことに、太陽に呼び出された一夏達は面食らう。

「マジか？」

「真剣と書いてマジ、だ。デュランダルが何を目的にしてアンサラーを落下させるかは知らないが、俺は黙って見過ごすつもりは無い」

「では、具体的にどうするんだ？」

ラウラの問いに、夜明は不敵に口元を笑わせながら答えた。

「俺とレイジングウィングで、アンサラーが地球の引力に引っ張られる前に破壊する」

「単騎でするつもりですの！？」

「あぁ、破壊するだけなら、レイジングウィングでも事足りるからな・・・明日、俺は先ずスティーフィアに行って状況を説明してくる。それから、宇宙に上がってアンサラーを破壊する・・・万が一ってこともある。俺が何かしらの妨害を受けて間に合わなかったら、お前たちが何とかしてくれよな」

と、いうやり取りが前日の真夜中に行われていた。空を切り裂くように上昇を続けていると、巨大な異形が視界に映る。アンサラーだ。

「どうにか間に合いそう・・・でもないな」

大気圏突破寸前、夜明は停止して後ろを振り返る。そこには自分を追ってくる三つの機影。

『近距離特化ＩＳ、スサノオ　搭乗者、夕陽黄昏　防御特化ＩＳ、アカツキ　搭乗者　織斑朔夜　全距離対応ＩＳ　トワイライトウィング　搭乗者、大空流星』

2023

本当の最終決戦（前書き）

協力してくださった作者様たちに無上の感謝を。

2024

本当の最終決戦

「お前ら…デュランダルの命令か？」

三人から答えはない。夜明の頭の中で、レイジングウィングのロックオン警告（アラート）を鳴り響く。それが三人の答えだった。夜明は微かに舌打ちし、左に瞬間加速（イグニッション・ブースト）する。刹那、夜明の残像を二条のビームが撃ち抜いた。体勢を整えながら夜明は流星と朔夜に狙いを定めるが、真上から急降下してきた黄昏が射撃を許さない。

「くそが…！」

地上へと落下しながら、夜明は組み付こうとしてくる黄昏を蹴り飛ばす。蹴った反動を利用し、黄昏から大きく距離を取りながらディバイン・カノンを展開して連射する。黄昏は両手に握った二刀、不知火と雲龍を振り回して小口径弾を切り裂き、上昇して夜明から離れた。

（流星のトワイライトウィングと黄昏のスサノオはともかく、朔夜のアカツキは『ヤタノカガミ』でビーム射撃が効かないからな）

既に夜明は三人が敵と見做し、臨戦態勢に入っていた。いつ、どの方向から攻撃されても良いように神経を張り詰めさせ、三人に視線を走らせる。流星と黄昏はまだいい。二人の実力、専用機のスペックはかなり高いが、それは夜明自身の力で何とかできる。だが、朔夜のアカツキの特殊装備である『ヤタノカガミ』はありとあらゆるビーム射撃を跳ね返す。主武装がビーム兵器であるレイジングウィングにとってアカツキは天敵と言っても過言ではない。

「さて、どうしたもんか…」

後ろから黄昏の斬撃が襲う。左腕のビームシールドで黄昏が振るう雲龍を防ぐと、絶妙のタイミングで流星がバルディッシュを振り下ろすのが視界に映った。ビームシールドで黄昏に対抗しながら、右手でスターライザーを引き抜いてバルディッシュを受け流す夜明。更に斬撃を加えようとしてくる流星を殴り、黄昏の胸倉を掴んで離れた流星に叩きつける。発射態勢に移したスタードライヴを二人に向ける。

蒼い二発の荷電粒子砲が二人に当たる直前、朔夜が飛び込んできた。『ヤタノカガミ』発動によって金色に輝く装甲に跳ね返され、荷電粒子砲は夜明に向けて直進する。

「やっぱり厄介だな！」

スタードライヴを推進翼（スラスター）に収納しながら器用に後方宙返り、夜明は両手にスターライザーを握り爆進する。蒼銀の粒子を撒き散らす光の翼を広げ向かってくる夜明を、朔夜の後ろから飛び出した流星と黄昏が迎え撃つ。二人の同時攻撃が一瞬だけ不屈の翼を止めた。だがそれは本当に一瞬で、次の瞬間には二人とも左右に吹き飛ばされていた。肉薄する夜明を朔夜は二振りのビームサーベルが連結したビームジャベリンを腰から引き抜いて受け止めた。

「…っ！」

「これがお前達の意志か！！」

刹那の交差。スターライザーとビームジャベリンがぶつかり合い、火花が散る。夜明は止まることなく朔夜の横を通り過ぎ、両肩の装

甲を開いて至近距離からミサイルを全弾ぶち込んだ。爆風で吹っ飛ぶ朔夜。夜明は振り返りながらスタードライヴとディバイン・カノンを展開させる。荷電粒子砲は流星と黄昏に、小口径弾は朔夜に直撃する。三つの爆炎。黒煙に呑み込まれた三人をハイパーセンサーで探しつつ、夜明は点のように見えるアンサラーを見上げた。

『敵ＩＳ健在、ロックされています』

「やっぱあれじゃ終わらないよな……」

アンサラー落下阻止限界時間まで、後一時間三十分。

「どういうことか説明してもらうぞ、ギルバート・デュランダル」

大広場に集まった数万の兵士達がざわめき始めるが、太陽は真っ直ぐに向けた視線をデュランダルから外さない。対し、デュランダルも目を逸らすことなく太陽を見返す。兵士達のざわめきも無くなり、大広間を沈黙が埋める。

「…何とか言いなさいよ！」

一向に口を開こうとしないデュランダルに業を煮やした鈴音が吼える。それでも喋らないデュランダルに鈴音は更に言葉をぶつけようとするが、隣に座っていたセシリアが彼女を抑える。

「…粛清だ」

徐にデュランダルは口を開いた。予想通り、とでも言いたげに太陽は鼻を鳴らす。

「はっ、差し詰めクルーゼの計画に気づけなかった企業連に対する粛清、ってとこだろ？」

沈黙は肯定、デュランダルはゆっくりと話し始めた。

「クルーゼの計画。投入されたアサルト・セルの数や手際の良さから考え、相当な時間を要して練られたものだろう。その間、企業連の重役達は何も気づいていなかった…いや、気づいていたのかもしれない」

だが、行動しようとしなかった。クルーゼを止めようとしなかった。

「何れ、企業連は第二、第三のクルーゼを生み出すだろう。故に、私は企業連を変えることを、粛清すると決心した」

「だからって…あんなデカ物を地球に落とすのかよ！　たくさんの人が死ぬぞ！！」

「企業連の老害共は自分達のことしか考えていない、それは周囲にいる連中も同じこと。だから抹殺すると決めた！」

一夏の苛烈な炎を宿した双眸に睨まれても、デュランダルは臆することなく一夏の視線を真正面から受け止める。シャルが椅子から立ち上がり、話にならないと言いたげに首を振った。

「人が人に罰を与えるなどと…」

「私、ギルバート・デュランダルが粛清しようというのだ！」

「それはエゴですわ！」

「世界が変わらなければいけない時が来ているのだ！！」

「はぁ…話は平行線だな。悪いが、夜明があれをぶっ壊そうとしてる。止めさせてもらうぞ、デュランダル」

スーツの襟を掴み、思いっ切り剥ぎ取る。スーツが宙を舞い、ＩＳスーツを纏った太陽の姿が露になった。太陽に続き、一夏達もＩＳスーツ姿になる。七人はそのままＩＳを展開して飛翔し、飛び去っ

た。

「首長…」

「大丈夫だ……手は打ってある」

アンサラー落下限界阻止時間まで、後一時間三十分。

「そろそろ大気圏を突破するな…お前ら、分かっていると思うが、

私達がこれから上がるのは宇宙（ソラ）だ。空気がある地上と同じ感覚でいると、死ぬぞ」

大気圏突破寸前、編隊の先頭を飛ぶ太陽は後ろに続く一夏達に前もって告げておいた。宇宙で万が一のことがあった場合を想像し、一夏達の背筋を冷や汗が伝い落ちる。不意に、編隊を中心とした半径五十キロを索敵していたセシリアが声を上げる。

「ここから四十数キロほど離れた地点で四機のＩＳの交戦を確認しましたわ。恐らく…」

「夜明。そして流星と朔夜、黄昏ってところだろ」

侮蔑するように目を細めながら最後尾を飛んでいたラウラは反応があった方向に目を向けた。

「ふん。所詮、あいつらもデュランダルの傀儡だったということか」

「言ってやるな。あいつらだってあいつらなりに悩んだろうさ……！！」

ラウラを嗜めていた太陽の表情に緊張が走り、太陽は戦闘態勢に入る。一瞬遅れ、太陽と同じように一夏達もそれぞれの武装を展開させる。敵機接近の警告（アラート）が響き、セシリアの専用機『ブルー・ティアーズ』の索敵範囲内に二つの反応。

「来ますわ！」

「散開しろ！！」

散らばった太陽たちの中心を抉るように閃光が奔る。接近してくる二機の内の一つが一気に加速し、一夏の視認範囲に飛び込んできた。全体から攻撃的な雰囲気を放つ、悪魔のような翼型スラスターを広げた黒いＩＳ。

「俺と箒がやる！　お前達はアンサラーを！！」

雪片を握る右手に力を込め、一夏は黒いＩＳに突っ込んだ。一夏に続こうとする一夏を箒が追いかけようとすると、セシリアが待ったをかける。

「お待ちください箒さん！　相手が狙撃タイプなら私が」

更なる狙撃がセシリアの言葉を遮るように空間を切り裂く。箒は桜花繚乱乃羽衣で狙撃を防いだ。

「いや、私がやる。相手が狙撃型である確証もないし、何より連携なら私の方がやり易い。セシリア達は一夏の言うとおり、アンサラーを！」

「…分かりました、ご武運を！」

「互いにな！」

「はぁぁぁぁ！！！！！」

「おらぁぁぁ！！！！！」

雪片と獣の牙を連想させる刃をもつブレードがぶつかり合う。爆ぜるように離れ、一夏は雪片を突きの形で構え突っ込む。黒いＩＳが横にかわした瞬間、一夏の頭上からビームが閃いた。

（狙撃の奴か！）

そのまま突きの威力を殺さずに前へ飛び出し、二発目を雪片で弾き飛ばす。三発目に備えていると、今度は弾雨が降り注いできた。

「なっ、連射も出来るのかよ！？」

即座に一夏は左手の雪羅をシールドモードで発動させ、前に突き出してビームの雨を防いだ。ビーム弾雨は止まることなく振り続け、白式のシールドエネルギーをがりがりと削っていく。

「このままじゃ…「一夏！」箒か！　上の奴を頼む！　俺はあの黒いのを！」

「了解した！！」

飛んできた箒が上へ向けて加速すると、ビームが止んだ。雪羅のシールドモードを解除し、一夏は黒いＩＳに向き直る。黒いＩＳの搭乗者は肩に剣を預け、感心したように一夏を見ていた。

「へぇ、強いな…少なくともこっちの世界の一夏より」

「お前誰だよ？　ラインアークのリンクスか？」

「リンクス？　…あぁ、まぁそういうことに…ならねぇな。強いて言うなら、傭兵ってとこだな。黒谷終、ブラックファングだ。相手してもらうぞ、一夏」

「クスクス…へぇ、凄いわねそのマント。完全にビームを防いでる……成るほど、近、中、遠距離選ばない万能機ってところかしら？」

「…貴様、何者だ？」

警戒を解かず、寧ろ更に強くしながら箒は空裂と雨月を引き抜き、対峙するＩＳ搭乗者を見据える。さっきの黒いＩＳとは対照的なＩＳ。天使のような翼型スラスター。だが、纏う雰囲気は堕天使という表現がピッタリだ。搭乗者、箒と同じくらいの歳の少女はクスクスと笑う。

「名前なんてどうでもいいでしょ、さっさと殺しあいましょ…と言いたいところだけど、最低限の礼儀として名乗ってあげるわ。音梨椛、エターナルムーン…楽しみましょ、箒」

「二機、また来ますわ！」

「ちょっと！　まだいるなんて聞いてないわよ！！」

再び、セシリアの索敵センサーが反応する。宇宙空間へと飛び出した五人は一直線にアンサラーへと向かっていた。だが、また謎のＩＳ反応が二つ後を追ってくる。太陽は軽く舌打ちし、スラスターを全力で噴かし始めた。

「シャル、ラウラ、高機動モードに移れ！　一気にアンサラーに突

っ込むぞ！　鈴、セシリア！　お前らはその二機の足止めを頼む！！」

鈴音は親指を持ち上げ、セシリアは索敵センサーを閉じてメテオデストロイヤーを構えることで太陽に応える。ラウラの背にある広域展開された大型推進翼が黒く輝き始め、シャルはディザスターの砲口を後ろに向ける。エネルギーを溜め、三人は残像を残す速さでアンサラーへと飛んでいった。

「こっから先は！」

「抜かせませんわ！」

鈴音は両手に嵐を構え、セシリアはメテオデストロイヤーの引き金を引く。メテオデストロイヤーの砲口から放たれた蒼い激流はハイパーセンサーでも確認できない距離にいる二機のＩＳの中央を撃ち貫くように飛んでいった。二機は距離を取って砲撃をやり過ごし、急激に加速しながら突っ込んでくる。

「セシリア！　私が突っ込むから援護しなさい！　当てたら承知しないわよ！！」

「分かりましたわ！！」

鈴音が二機に向かって加速する。セシリアは銃身にエネルギーッパックをリロードさせながらリフレクタービットを周囲にばら撒いた。鈴音は嵐を連結させ、掌の中で回転させ始めた。二機の内の一つが両手に実体剣を握り、鈴音を迎え撃つ。

「おりゃあああああ！！！！！！！」

「攻撃するのにわざわざ叫ぶ必要があるんですか？」

高速回転で威力が増した嵐が振り下ろされる。相手は実体剣を交差させ、嵐の切っ先を防ぎ止める。そのまま鍔迫り合いにもつれ込むと、残った一機が二人の横を通り過ぎていった。

「何者よ、あんた達！？」

「ヴァレンシア・ファン・ウーレンベック…って言っても分かんないですよね。シアで良いですよ」

「あんたの愛称なんか知るかぁぁぁ！！！」

嵐を力の限り振り抜いてシアを吹き飛ばす。スラスターで勢いを殺し、シアは鈴音を見つめる。

「乱暴だなぁ……ま、いいか。それじゃ、始めましょうか、行くよ、カゲキヨ」

「あの馬鹿でかいビームライフル、連射は出来ないみたいですね…て言うか、あの威力で連射できたらどんな無理ゲーだよって話になりますね」

呟きながら、長峰零斗はセシリアを観察する。周囲を飛び回っているリフレクタービットがシールドの役割を果たしているのも容易に想像できた。

「まぁ、動きは鈍そうですし問題は無いか…頼みましたよ、五月雨」

「っ！！　…貴様は何者だぁ！！」

「通りすがりの破壊神だ、覚えときなぁ！！」

悪魔のような笑みを口元に浮かべ、鈴木政志は両手で握ったバスターソードを振り下ろす。咄嗟にラウラは両手をクロスさせ、プラズマ刃でバスターソードを受け止めたが勢いを全く殺せずに吹き飛ばされてしまった。

「っつぅ！！　…馬鹿力が（シャルも別の敵に捕まったか）」

「考え事なんてしてる暇は無ぇぞ！　逝っちまいな、ファングゥ！！」

ＩＳ『アルケー』の腰の左右にあるバインダー内から十基の自律兵器が飛び出す。その名の通り、牙のような形状をしたビーム砲がラウラに迫る。高速機動でラウラはファングを回避し続ける。だが、

「ところがぎっちょんっ！」

回避先に政志がバスターソードを振り上げていた。バスターソードで真っ二つにされる寸前。ラウラはギリギリでＡＩＣを発動させて政志の動きを一瞬だけ止め、どうにかバスターソードを避けた。

（おい相棒！　あの茶髪野郎、格闘技能だけなら太陽並だぞ！！）

「だがそれでも、やるしかない！！」

エネルギーの奔流が迫る。シャルは六枚のシールドを全て前面に展

開して砲撃を防ぐが、それでもシールドエネルギーを削られる。

「楽園の守護神（ガーデン・ガーディアン）のシールドを貫通してダメージを与えてくるなんて…無茶苦茶だよ」

シールドの間から砲撃が飛んできた方向を覗く。そこには、天使のような曲線をもったＩＳが、流星のトワイライトウィングの主武装であるビームマグナムに酷似した（と言うかほぼ同じ）ライフルを構えていた。シャルの視線の先で、『月明の守護者（アルテミス）』の搭乗者、奈々瀬ユウはライフル（以下ビームマグナムと表記）にエネルギーパックをリロードさせる。

「ビームマグナムの残りは後十発…流石にあの六枚のシールドをぶち抜くのは難しいですね。まぁ、ビームマグナム以外にも武装はあるから問題ありませんけど」

身体を護るように装備された四枚のバインダーからそれぞれ三基の自律兵装、ファンネルが飛び出す。シャルは険しい表情を浮かべながらも、両腕と隠し腕に武器を展開させて戦闘の意思を示した。

「もう少しで……ここに来て敵か…！」

アンサラーに辿り着く寸前、二機のＩＳ反応が太陽に近づいてきていた。さっき接近してきた二機の相手はラウラとシャルに任せ、ここにいるのは太陽だけ。即ち、今近づいてくる二機の相手は太陽自身がしなければならない。

「良いさ、五分で決着（かた）をつけてやる」

オールデリート、ライオンハートを構え、太陽はモードトランザムを発動させる。漆黒の装甲がスライド展開し、紅の粒子を放つ。

「ん～、良い殺気……二対一になっちゃうみたいだけどどうする？」

陸奥謙信は隣りを飛翔する男と同じ速度で走りながら訊ねる。彼女のＩＳ『極致』は飛ばない。走るのだ。そう言う風に作られたから。

「そうだな…俺は遠くからチクチク撃ってるから、謙信さんは突っ込んで接近戦してれば？　て言うか、そのＩＳじゃ接近戦しか出来ないでしょ、遠距離武装無いし」

「そ。んじゃ、お言葉に甘えさせてもらうわ。勝負が長引いたらかなり危なくなると思うから、その時は助けて頂戴ね」

「うぃ～っす…宇宙空間を走る人間ってのは中々シュールだな」

ＩＳ『ソレスタル』搭乗者、グレイ・スティンは手をヒラヒラ振って走っていく謙信の後ろ姿を見送る。

アンサラー落下阻止限界時間まで、後一時間。

迫るタイムリミット

大気圏の最上層に位置する熱圏。そこは高度と共に温度が上昇する気圏で、大気は希薄。そして電離が起こってオーロラが発生したりする。とても人が長時間いられる環境の場では無い。だが、搭乗者を完全に護るＩＳにはそんなこと関係なかった。

熱圏の中で漆黒と輝白、そこから離れた場所で真紅と純白がぶつかり合っている。

「時間が無いんだよ、こっちは！！」

「俺は時間を稼いでんだよ！！」

一夏の握る刀の形をした剣、雪片。終の振るう獣牙型の剣、ハデス。二つの武器が派手に火花を散らして互いを削りあう。一夏は左手を握り締め、終を殴り飛ばした。突き出したままの左手を開き、掌部分から突き出している銃口が輝く。

「吹っ飛べぇ！！」

銃口部分に集中していた光が収束し、荷電粒子砲が放たれた。銃口から吐き出された荷電粒子砲が過たずに終へと向かっていく。終は回避行動を取ろうとしない。その代わり、吹っ飛ばされながらの不安定な体勢で身体を一回転させるようにハデスを振りぬき、己に向かってくる荷電粒子砲を切り裂いた。

「何っ！？」

「こんなんで驚いてんじゃねぇぞ！！」

一夏の視界から消えた終が次の瞬間、一夏の目の前に現れた。ほぼ一夏に零距離まで近づいた終はハデスを二振りのナイフ、オルトロスに持ち替えてクロスレンジの斬撃を仕掛け始める。一夏、終の攻撃を雪片で捌くが、得物の長さが災いして徐々に追い詰められていく。一瞬の隙を突かれ、走行の一部が切られた。雪羅をクローモードにし、薙ぎ払うように振る一夏。終は上昇して雪羅のエネルギークローをかわし、両手で握ったハデスを振り下ろす。ハデスの切っ先が一夏の頭を引き裂く寸前、一夏は雪片の柄頭でハデスを受け止めた。

「はっ、やるじゃねぇか！」

「お前に褒められたって嬉しかねぇよ！」

一夏は雪片を跳ね上げた。終は後ろに回転しながら吹き飛ばされる。体勢を整えた終の視界に映った雪羅の輝く銃口。荷電粒子砲は終に直撃する。

「…へぇ、まさか俺に一撃当てるとはな…」

（目立った手傷は与えられず、か…）

煙の中から出てきた、ほぼ無傷の終を見て一夏は内心毒づく。ちらっ、と視線を持ち上げると、さっきまで米粒大だったアンサラーが豆粒大にまで大きくなっていた。

「…本当に時間が無いんだよ、こっちは！！」

「だったら俺を倒して進めばいいだけの話だろうが」

苛立ちを怒声に滲ませる一夏に、終はいとも簡単そうに告げる。無言でエネルギーパックに腕を伸ばし、一夏は雪片の柄にエネルギーパックを叩きつけるように挿入した。

「それもそうだな…だったら、決めさせてもらうぞ」

零落白夜、発動。雪片の刀身から目を覆うほどの眩い光が放たれ始める。光り輝く雪片を構えた一夏を見て、終は同じようにハデスを構える。

「俺も本気で行くとするか…ファングクラッシャー」

そして終は発動させた。黒い零落白夜を。

「零落…白夜だと!?」

「そう言うこった。精々負けないように気張れよ、本家」

瞬間加速（イグニッション・ブースト）で突っ込む箒。加速と箒自身の力で振るわれた空裂を、椛は右手のルシファーで受け止める。斬撃に遅れて発生した帯状の攻性エネルギーが椛を襲う。だが、左手に握ったゼウスの連射で容易に打ち消された。

「ほらほら、もっと頑張ってよ」

「くっ！」

額に向けられたゼウス。逆海老反りに身体を曲げた箒の眼前を、ゼウスの狙撃が横切る。箒はそのままの体勢で後方宙返りし、椛の蹴りをかわした。

「はぁっ！！」

距離を取った箒の雨月の打突。刀身の周囲に発生した何十ものエネルギー弾が椛に喰らいつこうと飛翔する。箒の攻撃はそれだけでは終わらず、空裂の攻性エネルギーを放ち、更に紅蓮の砲身を椛に向けて拡散エネルギーをぶっ放す。

「ふふふ、何これ？　霧雨か何か？」

口元に怜悧な笑みを浮かべ、椛は雨月のエネルギー段をゼウスの連射で相殺、空裂の攻性エネルギーをルシファーで斬り捨て、紅蓮の拡散エネルギーは狙撃モードにしたゼウスの砲撃で薙ぎ払った。無傷の椛を見て渋面を作った箒は桜花繚乱乃羽衣を大きく広げて紅揚羽を射出した。その名の通り、揚羽のように不規則な動きで、だが高速で椛に迫る六基の紅揚羽。

「ふぅん。自律兵器なんて繊細な武器…貴方、使いこなせてるの？」

「大きなお世話だ！！」

箒の怒声と共に紅揚羽が椛に飛んでいった。愚直に突っ込んでくるだけの紅揚羽を椛はつまらなさそうにルシファーで弾く。だがその瞬間、空裂の攻性エネルギーが彼女の頬を掠めた。驚く暇も無く、雨月のエネルギー弾が降り注ぎ装甲を穿っていく。

「あは、そうこなきゃ♪」

楽しそうに笑いながら椛は両手をフルに動かし始めた。ルシファーで攻性エネルギー、エネルギー弾を防ぎ、ゼウスの速射で紅揚羽を弾いていく。嵐のような箒の攻撃。全てを完全には防げず確実にダメージを蓄積されていく中、椛は狂気を孕んだ笑みを深める。攻撃を当てても当てても怯むどころか、反撃の勢いを強めてくる椛に箒は本能的な恐怖を覚えていた。

「お前は…何なんだ！？」

紅蓮の砲撃が直撃する。だが、椛は倒れない。それどころか、笑みを深めていくばかり。

「そんなのどうでもいいでしょ？　殺しあう私と貴方。今はそれだけが世界の全て…クスクスクス」

狂気は深まっていく。

二丁のサブマシンガン、イキシアが火を噴く。雨の如き弾丸を、鈴

音は連結させた嵐を高速回転させることで弾き飛ばしていく。

「おぉ、全弾防ぎ切るなんて…これは別の武器を使ったほうがいいですかね？」

シアが呟いた瞬間、イキシアのマガジンが底を尽きた。弾切れの瞬間を見計らっていた鈴音は弾が切れた刹那に嵐の連結を解除し、力の限り振りぬいた。嵐の刀身部分から発生した衝撃の刃がシアを襲う。衝撃刃が直撃する寸前、シアの両肩にマウントされていた大型装甲が分離し、衝撃刃を防いだ。

「セシリアのリフレクタービットと同じ！？」

「正確に言うと、これはビームの反射は出来ませんけどね…攻撃は出来ますが。『アサルトモード』」

シアが呟くと、八基に分離した三角形型のシールドビットの辺部分がエネルギー刃を形成する。高速で飛来するシールドビットを嵐で防ぎながら、鈴音は口元を不敵に歪ませる。

「成るほど、攻防一体って訳ね！」

「少し違うような気がしますが…ま、いいか」

シールドビットに間断なく攻撃されその場から動けない鈴音。シアはシールドビットを操作しながら大口径エネルギーライフル、アマリリスを展開して構えた。鈴音はシールドビットを防ぐのに手一杯なので、狙いは容易につく。アマリリスの銃口にエネルギーが集中していくのを感じながらシアは胸中に勝利の予感を覚える。そして引き金を引こうとした正にその時、

「油断してんじゃ無いわよ！！」

両肩、背部に装備されたストライククロー、龍牙が高速でシアに向けて伸びてきた。シアは咄嗟にシールドビットで防ごうとするが、八基とも鈴音を攻撃するのに使用しているため間に合わない。四本の龍牙がアマリリスの銃身を貫いた。内側から膨れ上がり、爆ぜようとするアマリリスをシアは放棄する。爆発、そして爆風の中から衝撃砲の砲口を覗かせた龍牙が現れた。

「もらった！！」

衝撃砲の連射が降り注ぐ。しかし、衝撃弾がシアを捉えることは無かった。シアの周囲に浮かぶ非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）である、Ｖ字型全方向推進器（マルチ・スラスター）による個別連続瞬時加速（リボルバー・イグニッション・ブースト）で回避したのだ。

「…あっぶな。まさかシールドビットに梃子（てこ）摺ってたのが隙が大きい攻撃を誘うためのブラフだったなんて…これは油断できないか」

視線の先で、悔しそうに顔を歪める鈴音を見据えながら、シアは全方向推進器（マルチ・スラスター）のエネルギー供給を開始した。

甲高い音を上げ、リフレクタービットによって防がれた弾丸が宇宙空間へと霧散していく。零斗は軽く舌打ちしながらアサルトライフル、地雨を投げ捨て、細身の太刀、時雨を片手にセシリアへと突っ込んだ。時雨をセシリアの頭に振り下ろす。機動力が皆無であるブルー・ティアーズ強化パッケージ、スターシューターの機動では回避できないが、リフレクタービットが時雨を防いだ。

「ビームの反射もできるし、シールドビットとしても使用することが可能…地味だが高性能ですね」

呆れたように呟きながら零斗はセシリアから距離を取る。メテオデストロイヤーの砲口に光が収束したのを視認し、横へと避ける。瞬間、蒼い砲撃が真横を通り過ぎた。掠った訳でもないのにシールドエネルギーが削られる。しかも、リフレクタービットによる跳弾のオマケ付き。

「ビームを跳弾させるなんて非常識すぎる」

そう言いながらも、確実に高出力ビームをかわす。エネルギーパックをリロードするセシリアに接近し、時雨を振るう。だが、やはりリフレクタービットに防がれる。セシリアは黙々とリフレクタービットを操作しながら、一切の油断を見せない瞳で零斗を見据えた。構えられたメテオデストロイヤーの砲撃。

「リフレクタービットが硬すぎる。近距離じゃリフレクタービットに防がれる。中、遠距離じゃまず勝ち目が無い…軽く詰んでませんか？　いや、やり様はありますかね。『ＨＳＳ』を発動させて、至近距離から雷雨を撃ち込む…これしかありませんか」

再び展開させた地雨で弾幕を張りながら、零斗は『ＨＳＳ』発動のためのエネルギーチャージを開始した。

「おらどうしたぁ！　そんなもんかよ、ドイツの遺伝子強化素体（アドヴァンスド）ぉ！！」

「貴様が何故それを知っている！！」

（相棒、今気にすることはそこじゃねぇぞ！！）

「分かっている！！」

内側から聞こえてくる相棒（ライラ）に大声で応えながら、ラウラは必死で両腕のプラズマ刃を振るう。だが、プラズマ刃は政志に届くことなく、逆に手酷い反撃を喰らわされていた。

（このままじゃジリ貧だ！　おい、代われ相棒！）

「すまないが頼む！！」

ガクン、とラウラの身体が揺れて動きが一瞬止まる。政志がその一瞬を見逃すはずもなく、大上段に構えたバスターソードを振り下ろした。バスターソードの切っ先がラウラの頭を両断したように見えた…が、政志はすぐにバスターソードが空を切ったことに気づく。

「……そこだぁ！！」

コンマ数秒でラウラの位置を特定した政志は右足にの爪先にビームサーベルを発生させて回し蹴りを放った。刹那の瞬間で政志の背後に回っていたラウラ…ライラが振り下ろしたプラズマ刃とビームサーベルがぶつかり合い、両者の間に火花が踊る。

「いきなり動きが速くなりやが…って、何でオッドアイの色が反転してんだよ！？」

さっきのバスターソードの一撃で、ライラの左目を隠す眼帯が切られていた。曝け出された相貌の色が反転してることに気づき、政志は少しばかり驚きの色を見せる。ライラは獣の笑みを唇に浮かべ、プラズマ刃を振り抜いて政志を吹き飛ばした。

「応える義理はねぇよ！！」

吹き飛ばした政志を追いかけ、ライラは暴風雨のようにプラズマ刃を振り回す。バスターソード、或いは両の爪先から伸びるビームサーベルで応戦しながら、政志は知らず知らず口角を吊り上げていた。

「はっ！　よく分からねぇがいきなり動きがよくなったな！　こいつにはどう対処するよ！？　逝けよファングゥ！！」

バスターソードを大きく振ってライラから距離を取り、政志は腰左右のバインダーから十基のファングを射出する。ライラは両袖のゼーレクロイツからビーム弾を乱射させながら己の内側にいるラウラへと呼びかけた。

「相棒。流石に俺でもあのファングとかってのを捌きながら野郎の相手をするのは難しい。だから協力しろ！」

（分かっている！　私がファング、お前があの男だな！）

「分かってるじゃねぇか！　行くぜ、反射とぉ！」

（思考の！）

「（融合ぉぉぉぉぉぉ！！！！！！）」

金と赤のオッドアイが輝き、金色の双眸が露になる。先端部にビームサーベルを展開させたファングがライラを貫こうとしたその時、ライラの背部大型ウィングスラスターからワイヤーブレードが射出された。ラウラによって操作された八基のワイヤーブレードは一瞬で全てのファングを切り裂き、政志の装甲を貫き縛り上げていった。

「何！？　ぐぉ！！」

ワイヤーを引き千切ろうとするが、それよりも早く大型カノンが火を噴いて政志を直撃した。黒煙に呑み込まれた政志を、ライラは強引にワイヤーを引っ張って引き寄せ、腹にプラズマ刃を突き刺した。政志の口から血が吐き出される。だが、政志もバスターソードを強引に振ってライラの左肩を斬った。バスターソードの刀身はライラの肩を護る装甲を両断し、肉に食い込む。

「っ…さっさと死ねこの野郎がぁ！！」

「そりゃこっちの台詞だくそったれがぁ！！」

激痛に顔を歪ませながら、それでも両者は互いを離さずに痛みに耐え続けた。

両腕、隠し腕の計六本の腕に持たせたマシンガンを振り回すように乱射しながらシャルは高速機動を続けていた。シャルの後を追う十二基の小型自律兵装ファンネルは多角的な軌跡を描きながらシャルを追っていく。

「この自律兵器、セシリアのティアーズよりも動きが速い！　っ！」

ファンネルに撃ち抜かれたマシンガンを投げ捨て、シャルはシールドを広げながらショットガンを展開（コール）する。シールドでファンネルを

防ぎながら引き金を引く。広範囲に拡散した散弾がファンネルを破壊していった。シャルはショットガンを連射し、全てのファンネルを破壊した。弾丸がまだ残っているショットガンをユウ目掛けて投げ、呼び出したスナイパーライフルで撃ちぬく。

爆発がユウを覆った。更にシャルは砲撃の手を休めることなく次々と火器を展開し、黒煙の中心に狙いを定めて乱射していく。不意に、煙が晴れ馬鹿げた数のエネルギー弾がシャル目掛け降り注いできた。壁と言っても過言ではない量のエネルギー弾。シャルは慌ててその場から離脱し、エネルギー弾雨に追われながらも後ろを振り返る。シャルの視界に四つのバインダーからビームシールドを発生させ、両手にビーム・ガトリングガンを持ったユウが追いかけてくるのが見えた。

「あのビームシールドで僕の攻撃を全部防いだのか…ちょっとずるいんじゃないか、な！」

背部非固定浮遊部位（アンロックユニット）の大型スラスターを前に向け、一気に減速する。振り返り様に左拳を突き出し、『灰色の鱗殻（グレー・スケール）』を発動させる。薬莢が吐き出され、杭が放たれる。シャルを追っていたユウを直撃する…と思われたが、ユウは身体を捻って『灰色の鱗殻（グレー・スケール）』をかわして既にシャルの横を通り過ぎていた。

「…これに反応するって。決まると思ってたんだけどなぁ」

「いや、今のは結構ギリギリでしたよ。もう少し貴方の動きに気づくのが遅かったらやばかった…でも、そんな奇襲、もう通じませんよ」

そんなことは言われなくても分かっている。シャルが六本のアサル

トブレードを展開させると、ユウもそれぞれビームサーベルを六本構えた。二本は己自身の腕、もう二本は後ろのバインダー。残りの二本は他の四本に比べ、刀身が長大だった。両者、武器を構えたまま動かない。数秒の沈黙が流れ、二人は示し合わせたかのように動いた。

「やぁっ！！」

「そこっ！！」

それぞれ自分自身の腕で握ったアサルトブレードとビームサーベルがぶつかり合う。ユウは後ろのバインダーから伸びたビームサーベルでシャルを貫こうとする。だが、それは隠し腕に握られたアサルトブレードで切っ先を逸らされた。前のバインダーから伸びた二本の高出力ビームソードがシャルに迫る。残った隠し腕が持つアサルトブレードで防ぐが、刀身の半分が焼き切られたのを見て、シャルは隠し腕を捨てる覚悟を決めた。

「悪いけど、このバインダーもらっていくよ！」

「っ！！」

シャルの思惑に気づいたユウは慌てて前バインダーを引っ込めようとするが、それよりも速くシャルがバインダー内に隠し腕を突っ込んだ。アサルトブレードを焼き切られ、隠し腕その物も破壊されようとしている。だが、高出力ビームソードが隠し腕を破壊するよりも、『灰色の鱗殻（グレー・スケール）』がバインダーを貫くほうが速かった。両者、離れる。互いに主から放棄された隠し腕とバインダーは暫くの間宇宙を漂っていたが、やがて大きな光芒となって消えていった。

「…相手の武装を破壊するために自分の装備を躊躇無く犠牲になんて…貴方、凄いですね」

「ハハハ。まぁ、僕の友達に比べたらまだまだだけどね」

何せ、その友人は自分の身体の一部でさえ戦いに利用するのだから。

戦いは続いていく。

アンサラー落下阻止限界時間まで、後三十分。

迫るタイムリミット（後書き）

次回、太陽と夜明の戦闘。

伊達じゃない！！

大気圏内。最早、雲を突きぬけ上には宇宙（ソラ）の暗黒が広がる世界。そこで、四つの影が超高速でぶつかり合っていた。交差する色取り取りの閃光。全身の武装、周囲に展開させた八基の自律兵器を乱射させながら高機動で飛ぶ、幻想的な蒼銀の粒子を放つ光の翼を広げたＩＳに、三機のＩＳが迫る。

「……」

無言で視線を肉薄してくる三人に走らせ、夜明は両手に握ったウィングスターのトリガーを絞る。夜明の動きに呼応して、彼の周囲を旋回していたシューティング・ビット六基、フィン・ファング二基が散らばり、三人に光の雨を降らせ始めた。

「私が防ぐ、二人は夜明を！」

前へと飛び出した朔夜は『ヤタノカガミ』を発動させる。輝く黄金の装甲に反射され、ビームが放たれた時と同威力のまま弾き返された。だが、『ヤタノカガミ』で跳ね返されたビームは夜明に届くこと無く、凄まじい速さで連射されるウィングスター、シューティング・ビット、フィン・ファングの射撃で相殺されていく。それだけじゃない。

「何！？」

アカツキのアラートに朔夜は顔を驚愕に歪めた。夜明の連射速度が速すぎて、『ヤタノカガミ』の反射が追いついていないのだ。朔夜の眼前に表示されたアカツキのステータス画面が赤で塗りつぶされ

ていく。この間、僅か二、三秒足らず。

「朔夜、お前はアカツキの性能に頼りすぎだ」

三種の射撃武装を乱射させたまま、夜明はスタードライヴの砲口を朔夜に向けた。スタードライヴ先端部分の穴に光が収束し、蒼い閃光が二発放たれる。朔夜に直撃した荷電粒子砲は反射されず、大爆発を巻き起こした。煙の中から朔夜が叩き出される。装甲は至る所から煙を吐きだしている。

夜明の視界に影が差した。スタードライヴを推進翼（スラスター）に収納しながら上を向くと、日輪を背に急降下してくる黄昏の姿が見える。

「堕ちろ！」

左手に握られた不知火が振り下ろされた。夜明は動くどころか、回避行動さえ取ろうとしない。違和感を覚えた黄昏は不知火を引き戻そうとするが、それよりも速く夜明が動く。不知火の切っ先が頭を切り裂こうとする瞬間、夜明は左のウィングスターを振って不知火の刀身を弾いた。驚く黄昏に向け、右のウィングスターが火を噴く。ビームの直撃を受け、装甲を吹き飛ばされた黄昏は表情を顰めながらも今度は右手の雲龍を振り抜いた。だが、これもウィングスターに弾かれ手痛い反撃を喰らう。

「っ…く、そがぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！」

ビームをモロに浴びて吹き飛んだ左肩と右脇腹の装甲。剥き出しになった肌をそのままに、黄昏は雲龍と不知火で斬撃を放ち始めた。その速度は人の領域を完全に超えていて、軌跡はおろか残像さえ残

らない。夜明は黄昏の攻撃を紙一重でかわす。時折、二刀の刃が装甲を掠めるが、眉一つ動かさずに黄昏の目を見据える。

このままじゃ夜明を倒せないと感じた黄昏は一旦後ろに下がって距離を取り、二刀を連結させた。構えられた双刃薙刀、『蒼天』。二刃の表面は淡く輝いていて、刀身にビームを展開していることを示している。

「斬り捨て…御免！！！」

大上段に振り上げられた蒼天。夜明はビームシールドを展開させながら両腕を交差させた。蒼天の刃がビームシールドに食い込み、ビームシールドは蒼天を押し返す。激しい拮抗で火花が散った。夜明がビームシールドの出力を限界まで高めると、蒼天に皹が入った。

「なん、だと！？」

「黄昏、お前は自分の身体能力に頼りすぎだ」

両手を勢いよく広げる。蒼天の刀身に入った皹が更に大きくなり、次の瞬間にはへし折れていた。折られ、くるくると舞い飛ぶ刀身を黄昏は呆然と見上げる。夜明は予めロックを解除しておいたスターライト・ブレイザーを放った。数十条の光を束ねた柱に飲み込まれ、黄昏は堕ちていく。

「そして流星、お前は…」

口を動かしながら、夜明は何故か動こうとしない流星に目を向ける。夜明の視線を受けても、流星は動こうとしない。流星の背中にある大型ウィングスラスターから紅色に輝く光の翼が広がった。夜明の

月光の翼（ムーンライトウィング）、流星の運命の翼（ディスティニーウィング）。相反する色を持った翼が広がる。だが、流星の背から伸びる、精神力を具現化させた翼の輝きはどことなく弱い。

「自分の意志が弱すぎる」

飛翔。急接近してくる夜明を流星はバルディッシュで迎え撃つ。擦れ違い様、夜明は腰の左右にあるディバイン・カノンにマウントされたスターライザーを引き抜き、回るように流星を斬った。バルディッシュでスターライザーをどうにか防ぐ。流星の横をすり抜け、夜明はスターライザーをウィングスターに持ち替え、引き金を引いた。数発のビームが流星の背に直撃する。流星はすぐに振り返り、夜明の射撃をビームシールドで防いだ。

夜明の容赦ない連続射撃に耐えながら、流星はレイジングハートを射撃体勢に移す。すぐに夜明もスターライト・ブレイザーのロックを解除した。放たれた閃光は馬鹿げた威力でぶつかり合い、周囲に衝撃波を撒き散らす。

「これがお前の答えなのか、流星」

連結させたウィングスターの銃口を、徐々に大きくなっていくアンサラーに向け夜明は問う。流星の返答は無い。

「粛清と言う大義名分の名の下の大量虐殺…それがお前の殉ずる答え、お前の宇宙の真理か」

「……」

「答えろ、流星！！」

「だったら俺はどうすれば良かったんだよ！！」

泣き叫びに近い咆哮を上げ、流星は夜明にレイジングハートを向ける。

「やっと戦争が終わってこれから平和な世界を作っていこうって思ってた矢先、首長に呼び出されてあんな話を聞かされた俺はどうすれば良かったんだ！！　今まで信じてついてきた首長に大量虐殺の片棒を担げと言われた俺はどうすれば良かったんだよ！！」

デュランダルの言い分も分からないでもない。それなりに頭のいい流星なら尚のこと。だが、それでも心の底から納得して動いているわけでは無かった。

今まで信じていたデュランダルを信じ続ければいいのか？　それとも間違っていると止めれば良かったのか？　流星には分からなかった。レイジングハートの砲口が光り、高出力のビームが撃たれた。眼前に迫る高威力ビームを、夜明は展開させた左腕のビームシールドで防ぐ。

「俺はどうすれば良かったんだ！！！」

「……んなこと知るかぁ！！！！」

左腕を全力で振りきり、レイジングハートの砲撃を弾き飛ばす。今にも泣きそうな流星を射抜くような眼光で見ながら、夜明は全ての武装を発射態勢に移して叫ぶ。

「お前がどうすれば良いかなんてお前自身が決めることだろうが！

！　他者から与えられた答えに胡坐をかかないで、自分自身で見つけた答えに殉じろ！！」

ウィングスター、スタードライヴ、ディバイン・カノン、シューティング・ビット、フィン・ファング、スターライト・ブレイザー。全ての射撃武装を流星に向け、夜明は吼えた。

「自分自身に殉じる。それが人間、命だ！！！！」

破壊の奔流に呑みこまれ、流星は装甲を剥ぎ取られていく。シールドエネルギーも底を突き、辛うじて装甲が展開しているだけのＩＳ。最早、ＰＩＣも発動していない。先に落ちていった朔夜、黄昏を追いかけるように落下していく流星に向け、夜明は一言だけ言い放った。

「俺はアンサラーを止める」

誰の意志でもない、自分自身の意志で。自分自身の答えに殉ずるために。蒼銀の粒子を放ちながら、アンサラーに飛翔していく夜明。思わず、流星はその後ろ姿に手を伸ばした。勿論、その手が届くことは無く…。

「…俺は、何も出来ないのか？　こんな所で、俺は…」

アンサラー落下阻止限界時間まで、後五分。

「…！！　周囲に多数の熱源反応…ラインアークのノーマルＩＳ部隊か！」

忌々しそうに舌打ちしながら太陽はアロンダイトを振って謙信を牽制し、宇宙に視線を向けた。目を凝らすと、黒い宇宙空間に無数の光芒が見える。ノーマルＩＳのスラスター部分の光だろう。

「この二人相手でも梃子摺っていると言うのに…また熱源反応、しかも地球から！？」

彼女にしては珍しく上擦った声を上げる。だがすぐに、口元に浮か

んだ焦りは余裕に変わった。

「成るほど。流石に自分達も動き始めたか、企業連」

大気圏内から上がってくる数機の熱源反応。いずれも、企業に所属しているカラードの上位ランカー達だ。口元に笑みを浮かべていると、プライベート・チャネルから通信が入る。カラードランク2、リリウム・ウォルコットからだ。

「よぉ、少しばかり遅かったな」

『申し訳ありません。市民の避難に手間取っていまして…夜明様からお聞きした話は本当なんですね』

「こんな大規模なドッキリをするほど、ラインアークも暇じゃないだろうさ」

『最初は信じられませんでしたが…あの、太陽様、流星様はどちらに？』

「…夜明と戦ってる」

『…あの御方なりに悩まれたのでしょうね…我々、リンクスはラインアークのノーマルＩＳ部隊を叩きます。太陽様、アンサラーの破壊を頼まれていただけますでしょうか？』

「もとよりそのつもりだ」

リリウムが率いるリンクス達と、ラインアークのノーマルＩＳが戦闘を開始した。横目で戦闘開始を確認し、太陽は謙信に視線を戻す。

「態々待っててくれたのか？」

「不意打ちって形で勝ってもつまんないしね～」

「そりゃどうも…」

太陽は謙信のほうに意識を向けつつ、遠くに離れた所で武装を展開させているグレイにも注意を払った。身体中の随所に武装を施した装備は完全な射撃特化武装。腰から伸びるアーム部分にはホルスター状のビット、そしてホルスタービットの中には銃撃タイプのビットが収められている。

（前衛が遠距離武装を持たない近接戦闘特化。後衛は射撃特化型…いや、恐らくは様々な形態を持つＩＳだろう。あれはその内の一つってことか）

考えていると、謙信の拳が飛んできた。アロンダイトの柄で正拳突きを防ぐ。

「流石に余所見をされると、少しカチンとしちゃうわね」

「あぁ、悪かった。少し考え事をしててな！！」

拳を弾いた刹那、蹴りが飛んできた。頭を逸らして蹴りを避け、アロンダイトを振る。謙信は太陽の一撃を容易にかわし、再び拳を突き出した。太陽は両手に握ったアロンダイトで拳を弾き、返す刀でＸ字に謙信を斬った。

「あは、凄いわね！」

拳打が太陽の頬を捉える。よろめいた太陽を謙信の更なる拳の連打が襲った。ラッシュの終わりに上段蹴りを放つ。太陽も同様に足を持ち上げ、謙信の蹴りを相殺する。

「楽しいわね。こんなに楽しいの、何時以来かしら？」

「楽しい…まぁ概ね同感だ。だけど、こっちには時間が無い。悪いが、通らせてもらうぞ」

「え？」

太陽は身体中に装備された十一のソードビットを射出し、謙信に突っ込んだ。アロンダイトと拳がぶつかり合う。太陽が後ろに下がる。入れ替わるようにソードビットが謙信を襲い始めた。謙信の相手をソードビットに任せ、太陽はアンサラーに向けて飛んでいく。

「あ、ちょっと！」

謙信の声を無視して加速する。だが、途中で小型の熱源反応が追いかけてきた。数は十四。太陽は追ってくる熱源反応に視線を向ける。十四基のライフルビット、ケリュケイオンが銃口から熱線を放ち始めた。

「鬱陶しい！！」

両手に持つアロンダイトを合体させ、薙ぎ払うように振るう。剣圧に押され、ケリュケイオンは吹き飛んでいった。すると、今度は別方向から射撃。左肩に複数のソードビットを装備したシールドスラ

スターを持った青の色合いを持ったＩＳに形態変化したグレイが、ライフルモードにしたガンソード、レヴァンテインを連射しながら太陽へと肉薄していた。

「邪魔をするな！！」

レヴァンテインの刀身を回転させ、グリップを元に戻してグレイはソードモードに変形させる。レヴァンテインを受け止めながら太陽は吼える。

「そういう訳にもいかねぇんだよ！」

鍔迫り合いで押し負けそうになる。グレイはレヴァンテインを傾けアロンダイトを滑らせ、斬撃の軌道を逸らした。左肩からソードビットを引き抜き、先端にビームサーベルを展開させて斬りつける。太陽は肩を切られて顔を顰める。グレイの腹を蹴って吹き飛ばす。太陽とアンサラーに挟まれる形になったグレイは再びＩＳの形態を変化させ、先の射撃戦特化型に変えた。グレイの横に太陽のソードビットを全て破壊した謙信が並ぶ。

「…しぶといな」

肩にアロンダイトを預けながら太陽は囁く。既に、モードトランザムは発動限界を迎えている。空いてる手で頭を掻き、ため息をつく太陽。

「しゃあない…お前には無理させてばっかだな。だけど頑張ってくれよ、バルディッシュトワイライト」

『Ｍｏｄｅ（モード）　Ｔｒａｎｓａｍ（トランザム）　Ｓｔａｎｄｂｙ』

『Ｍｏｄｅ（モード）　Ｅｘｃｅｅｄ（イクシード）　Ｓｔａｎｄｂｙ』

『Ｔｒａｎｓａｍ（トランザム）Ｂｕｒｓｔ（バースト）　Ｓｔａｎｄｂｙ　ＯＫ．　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？』

閉じられたはずの展開装甲が再び開いた。しかも、放たれる紅の粒子の量はモードトランザム発動時と比べ物にならない。紅の爆流を周囲に発生させながら太陽はアロンダイトを突き上げた。

「約束（エクス）された」

「いやいやいや」

「あれは無茶苦茶すぎでしょ…」

グレイ、謙信は揃って顔を引き攣らせる。それもそのはず。太陽が宇宙を突き刺すように持ち上げたアロンダイトから、数千メートルにも及ぶ長さのビームサーベルが発生しているのだから。

「勝利の剣（カリバー）ァァァァァァ！！！！！！！！！！！！！」

最早、光の柱と呼んでも差し支えないビームサーベルを、太陽はアンサラーに向けて振り下ろした。グレイはすぐにアームに装備されているホルスタービット、クラールヴィントを外して盾を作った。ビームサーベルをクラールヴィントの盾が受け止める。凡そ十秒、クラールヴィントは耐えて溶解した。その間に移動していた謙信。あろう事か、巨大ビームサーベルを前にして白刃取りの構えを見せている。

頭上から迫る巨大ビームサーベル。謙信は恐怖を浮かべず、それど

ころか闘争本能を剥き出しにしたような笑顔を浮かべて受け止める。受け止めた瞬間、両腕の装甲が吹っ飛び、血が噴き出した。両手に残った装甲のみで耐えながら、謙信は歯を食いしばって巨大ビームサーベルを押さえる。数十秒の拮抗後、謙信の身体ではなくＩＳの方が耐え切れなくなり、謙信は弾き飛ばされた。

「おおおおおぉぉぉぉぉっっっっっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

そのまま、太陽はビームサーベルをアンサラーに向けて振り下ろす。二人の防御で、半分以上威力が削られているが、それでも十分だった。巨大ビームサーベルは一瞬でアンサラーを護るシールドエネルギーを焼き切り、アンサラーの三分の一を切り裂く。

「やったか！？」

輝きを収束したアロンダイトを握り締め、太陽はアンサラーを見る。そして、絶望に表情を歪めた。

「遅かった…」

太陽に切られたアンサラーの破片が、地球の引力に引かれて落ちていく。既に、アンサラーは落下阻止限界を突破していたのだ。

「遅すぎた…」

『ふざけたこと言ってんじゃねぇよ馬鹿！』

唇から血が出るほど強く噛み締めていると、元気のいい罵声が通信を介して飛んできた。驚きながらも見ると、地球から蒼銀に輝く翼

を広げたＩＳが、落下していくアンサラー本体に向けて飛翔していくのが見える。

「夜明、何をするつもりだ！？」

『こんな鉄くずの一つ、俺が押し出してやらぁ！』

「馬鹿なことはやめろ！」

『やってみなけりゃ分からねぇさ！』

「アンサラーの落下は始まっているんだぞ！」

「レイジングウィングは……伊達じゃねぇ！！！！」

アンサラーに取り付いた夜明は月光の翼（ムーンライトウィング）の出力を限界以上にまで上げた。世界を蒼銀の粒子が埋め尽くし、地球が光の翼で覆われた。

伊達じゃない！！（後書き）

こんにちわ、サザンクロスでっす。最近更新が遅くてすみません。前は一日一話は更新してたのに…。更新速度を取ったら何が残るんだよ、この小説…。

失礼。ちっとばかし相談したいことがありまして後書きを書いた次第。以前、太陽のオリジナル話を書くと言いましたが、少しばかり困ったことになりまして。展開的にはダブルオーの劇場版みたいになる予定なのですが。金属は出てきませんよ。「戦力差は一万対一」みたいな感じです。ではここで本題…

一夏達の強化パッケージが思いつかねぇんだよぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！

ラウラとセシリアは良いんですよ、ハルートとサバーニャにするつもりですから。でも、それ以外の連中のが思いつかないぃぃぃぃぃ！！！！！！

と言う訳で、誰か作者に救いの手を下さい！！！　マジでお願いします。考えて欲しいのは一夏、箒、鈴音、シャル、楯無、簪です！

追伸　一応、太陽のオリジナル話を以ってこの小説を完結させるつもりです。未来編を終わらせて、閑話、『三年ＩＳ組　太陽先生』、原作六巻、原作七巻、太陽のオリジナル話、の順で書こうと思ってます。

それでは皆さん、この駄作者に救いをぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！

生きて明日を掴め（前書き）

今回出てこなかったゲストの皆様は、次回で活躍してもらいます。
次回、未来編完結。後書きも見てね。

生きて明日を掴め

「…まさか、このような形で君達と別れることになるとは…いや、これで良かったのかもしれないな。人類が緩やかな壊死を迎えるか、それとも未来を切り開くのか？　そのどちらなのかを見守ることが出来るのだから」

誰も訪れることの無いだろう深い深い、名前さえ忘れられた森の先。切り立った崖の上に佇む人影が一つあった。人影は金髪を風に靡かせながら、崖に当たって砕け散る波の音に耳を傾ける。人影、クルーゼの前には十一の墓標が並んでいた。共に闘いを駆け抜けていったＯＲＣＡ旅団の墓である。簡素な墓石の前にはそれぞれの専用ＩＳが待機状態になって置かれていた。

「生き残ったトーティエントは何処かに消えていったよ。私に一言も無く…勝手な奴だ。いや、君達に愚痴を聞かせるつもりは無い。これから、私は私なりに生きて行こうと思う。彼に、月光夜明に生きて未来を切り開けと言われたからな」

墓石に背を向け、クルーゼは歩き始めた。

「もし、気が向いたらあの世で私を見ていてくれ、同胞よ…」

数歩歩いたところで、クルーゼはあることに気がついて歩みを止めた。見上げる視線の先、空が、宇宙（ソラ）が、世界が蒼銀に覆われている。それが夜明の月光の翼（ムーンライトウィング）から放たれる光だと、クルーゼはすぐに悟った。

「…また、君は未来を切り開くために戦っているのか？」

差し出した掌に一つの粒子が落ちてくる。粒子は蒼銀の輝きを放ち、僅かの間光って消えた。粒子を掴んでいた筈の手を握り締め、クルーゼはまた空を見上げる。

「…流石に、重いな…くそったれがぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

夜明の咆哮に応えるように、推進翼（スラスター）の間から放たれる光の翼の出力

が爆発的に上昇する。それでも、アンサラーが止まる気配は無い。山、と言うか落下してくる大地を持ち上げ、支えるような感覚。レイジングウィングの馬鹿げた出力とアンサラーの超重量の間で板ばさみになり、夜明の身体は随所から悲鳴を上げている。それでも、夜明は月光の翼（ムーンライトウィング）の出力を下げようとはしなかった。

「あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

両腕の装甲が弾け、内側から爆ぜるように血が噴き出す。痛みに顔を歪めながら、夜明は止まらない。夜明の咆哮と想いを乗せ、蒼銀の粒子は広大に広がっていった。

「…無茶苦茶しやがんな、あいつ」

蒼銀のオーロラに遮られ、朧に見えるアンサラー。はっきりとは見えないが、アンサラーのような馬鹿げた大きさの物を、たった一人で止めようとする馬鹿がいると言うのは嫌でも分かった。終は呆れとも憧憬ともつかない表情を浮かべる。

「夜明の邪魔はさせねぇぞ！！」

「邪魔なんかしねぇよ」

急加速で威力を増した一夏の一撃をハデスで弾き返し、終は戦闘に

意識を集中させようとする。だが、すぐに視線はアンサラーの方を向いた。ハイパーセンサーで拡大された映像の中、両腕から血を噴き出しても止まろうとしない夜明を見て彼は何を思ったのか？

「…ちっ、柄じゃねぇ」

一回、忌々しそうに舌打ちすると、終は一夏に背を向けてアンサラーに向けて飛んでいった。

「あの野郎！！」

声を荒げ、すぐに終を追おうとする一夏。だだ、すぐに戸惑いで動きを止める。一夏、敵の目の前で、終は全ての武装を消して、ブラックファングのエネルギーを全てスラスターに回したのだ。今が戦闘中であるにも関わらず、敵の目の前であるにも拘わらず。光の翼を突き抜け、終の視界にアンサラーと、それを押し返そうとする夜明（カバ）の後ろ姿が映る。無言で夜明の左横に並び、終はスラスターを全開にしてアンサラーを押し始めた。

「…っ！　お前、何してんだ！？」

「さぁな、焼きでも回ったんだろうよ！」

「止めろ！　こんなことに付き合うんじゃねぇ！　死んじまうぞ！」

「俺の命だ、好きに使うさ！！」

吼えるように答えながら、終は更にブラックファングの出力を上げる。

「終ったら何してるのかしら？　酸素が薄くて頭でもいかれた？」

椛はルシファーを片手で弄びながら、夜明と一緒になってアンサラーを押し返し始めた終を見ていた。下らなそうに、つまらなさそうにアンサラーを見上げる。あれが落ちた結果、地球がどうなろうが知ったこっちゃ無いと言わんばかりに。椛は視線を箒に戻す。既に満身創痍になっている箒は肩で息をしていた。身体を守る桜花繚乱乃羽衣はボロボロで、どれだけ椛に押されていたかが窺える。

「これ以上は戦えなさそうね…それじゃ、終わりね。せめて楽に死なせてあげるわ」

「くっ…！」

歯噛みしながらも、箒は雨月と空裂を構えて戦闘の意思を見せる。獲物（ほうき）の態度に満足したのか、椛は口元に笑みを浮かべた。高速で箒に接近し、ルシファーを振りぬく。箒は雨月と空裂を交差させてルシファーを防ぐが、呆気なく二刀を弾き飛ばされる。

「それじゃ、ば～い」

回転しながら落ちていく二振りの刀を見る時間さえ与えず、椛はゼウスの銃口を、目を閉じた箒の額に押し付けた。そして、引き金が引かれ…無かった。死を覚悟した箒は不審に思って目を開く。目の

前ではゼウスのトリガーに指を引っ掛けた椛の姿がある。

「…ちょっと、楓。邪魔しないでよ」

（…速く行かなきゃ。私は誰も見捨てたくない！）

誰かと会話しているかのように独り言を呟く椛。やがて、椛はゆっくりと箒の額からゼウスをどけた。

「はいはい分かりました。今回は貴方に譲ってあげるわよ」

（ありがとう！）

命拾いしたわね。箒に肩を竦めて見せ、椛は方向転換してアンサラーの方を向く。アンサラーに向かって飛んでいく椛の後ろ姿、それは同一人物のものとは思えなかった。

「！　この感じ、椛じゃなくて楓か！？」

終の声のすぐ後、今度は夜明の右横に誰かが並んだ。信じられない、と言う表情で夜明は終同様、自分と一緒にアンサラーを押している椛、改め楓を見る。

「無茶だ、止めろ！！」

「無茶でも、諦めたくないんです！！」

エターナルムーンの推力を最大にまで上げ、楓は叫んだ。僅か、少しだけアンサラーの速度が下がった。

「あれは…放っておけませんね」

「仕方ない、お付き合いしましょう」

地球の引力に引かれ、落下していくアンサラーを押し返そうとする

三人の姿がシアと零斗の視界に映る。互いの相手と戦っていた二人は身体の向きを反転させるや、全速力でアンサラーに向け飛んでいった。

「お前らまで…！」

「少しばかり、いい格好をしたくなっちゃいまして」

「何をしようが、僕の勝手ですから」

夜明の声をサラリと流し、二人もアンサラーを押し始める。シアはカゲキヨのV字型全方向推進器（マルチ・スラスター）全てを全力で噴かし、零斗もまた、五月雨を鼓舞した。

「もういいんだ！　皆、止めろぉ！！！」

喉が張り裂けても構わないと言わんばかりの声量で夜明は叫ぶ。だが、誰一人として止めようとする者はいなかった。

「ぐっ！！　…な、何だ！？」

必死で巨大兵器を押し返そうとする五人を嘲笑うかのように、アンサラーの重量が一気に増した。少なくとも、そう言う風に感じた夜明は状況を把握しようとする。

「恐らく、さっきまであの赤髪さんの一撃で止まっていたこのデカ物の動力装置が再起動したんでしょう」

シアの冷静な考察。それを述べている本人の顔はとても苦しそうだ。それは、周りにいる四人も同じこと。

「流石に、簡単には、いかねぇか…！」

「でも、このまま…いや、諦めちゃ駄目！」

「まだ…まだぁ…！」

（やっぱり…無茶だったのか…！！）

顔を歪ませる四人を見て、夜明の中で僅かに後悔と諦めが鎌首を擡げた。正にその時。

「君が諦めの感情を抱くなどと、あってはならない事ではないか。『不屈の翼』！！」

「この声…クルーゼか！！」

突如、オープンチャネルを通して聞こえてきた、つい数日前に生死を賭した闘いを繰り広げた男の声。首を回し、顔だけを後ろに向けた夜明の目には大気圏を突き破るクルーゼと『プロヴィディンス』の姿が映る。

「未来への水先案内人は、このラウ・ル・クルーゼが引き受けた！」

「何をするつもりだ！？」

「アンサラーの動力部分で、プロヴィディンスのコアを爆破させる！」

夜明達の横を通り過ぎ、クルーゼはアンサラーの動力装置が集中し

た中心部分へと飛翔していった。

「待て！　そんなことをしたらお前は」

「『生きて明日を掴め』と私に言ったのは君のはずだ！　ならば私は、私なりのやり方で明日を掴んで見せよう！！」

大型ビームサーベルでアンサラーの装甲を焼き切り、クルーゼはアンサラー内部へと突入する。数秒もしない内に、クルーゼはアンサラー動力装置を視認した。

「これは、死ではない！」

限界まで威力を上げた大型ビームサーベルを動力装置に突き刺す。動力装置から緑色の光が溢れた。爆発の前兆だ。それでも、クルーゼは動力装置から離れようとはしない。身体を照らす緑色の輝きが視神経を灼くほどになってもビームサーベルの出力を上げる。

「人類が黄金の時代を迎えるための…！」

とうとう、何も見えなくなった。真っ白になった視界の中、クルーゼは共に戦った仲間達の姿を見る。

（テルミドール、ネオニダス、ジュリアス、オールドキング、真改、ヴァオー、メルツェル、トーティエント、ＰＱ、ハリ、ブッパ、ラスター…こんな私を、君達は愚かと呼ぶか？）

皆が苦笑いを浮かべたように見えた。ふっ、と口角が上がる。それがクルーゼが見た、最後の光景だった。

生きて明日を掴め（後書き）

ども、こんばんわ、サザンクロスでっす。

前回強化パッケージの案を募集しといて、また募集をします。今回の募集する内容はこれ。バルディッシュトワイライトの強化パッケージ『レジェンド・オヴ・アームズ』の名前を募集。名前と言っても、Ｆａｔｅに出てくる宝具の真名みたいなもんですが。真名を考えて欲しい武器は次の十個。

・レーヴァテイン
・グングニル
・デュランダル
・ブリューナク
・アロンダイト
・アスカロン
・グラム
・ガラティン
・フラガラッハ
・エクスカリバー

です。　……え、少しは自分でも考えろって？　考えてるさ！　唯、作者の貧困な頭じゃ思いつかないだけなんですよぉぉぉぉ！！！！！！

人が英雄になる瞬間（前書き）

これにて未来編完結！　色々と見苦しい点がありましたでしょうが、こんなのに最期まで付き合ってくださった皆様に感謝します！　キャラを貸してくれた作者様たちには無上の感謝を！

何と言うか、何と言うかな展開になってます。

人が英雄になる瞬間

「クルーゼ！　……おおおおぉぉぉぉぉ！！！！！」

クルーゼの命を懸けた特攻でアンサラーの動力機関はそっくり吹き飛んだ。爆発の凄まじい衝撃を感じながらも一瞬、夜明はクルーゼがつけていた仮面の破片を白煙の中に見つけ、思わず手を伸ばす。だが、仮面はすぐに暗い漆黒の宇宙へと消えていった。伸ばしていた手をアンサラーに戻し、夜明は全身全霊で巨大ＡＦを再び押し始める。彼の背から溢れ出す、蒼銀の爆流が更に勢いと量を増した。

超重量を誇っていたアンサラーの巨体が推進力を失い、徐々に速度を失っていく。引力に引かれ、地球に落下していくアンサラーがついに夜明達に押し返され始めた。

「…うっわぁ…」

「…まさか、人生の中でこんな有り得ない光景を目の当たりにする日が来るとは夢にも思いませんでしたわ」

ＩＳを纏った人間と巨大ＡＦ。大きさと重量を比べれば、文字通り蟻と象だ。その蟻（人間）が象（ＡＦ）を押し返す。物理法則なんざ消し飛んじまえ、と言わんばかりの光景に、鈴音とセシリアは驚きと呆れを入り混じらせた表情を隠せなかった。

「…いや、このままじゃ駄目だよ」

肩をザックリと切られたラウラを支えるように肩を貸しながらシャルは呟く。

「シャルロット、何が駄目…！」

（成るほど、確かにこのままじゃまずいな）

疑問を浮かべるラウラの中で、さっきの戦闘でダメージを負って引っ込んでいたライラの意識が賛同する。シャルに訊ねたラウラは今度、ライラに問おうとする。が、すぐに二人の言ったことに得心することになる。

「……っ！！　ここまでか…すまねぇ！」

夜明の隣りでアンサラーを押していた終の姿が急激に霞み始めた。終は身体が消え始めたことを気にする様子も無く、夜明に拳を突き出した。驚く暇も、拳を返す時間も無く夜明の視界から終の姿が消えうせる。答えを求めるように、逆側でスラスターを噴かしている楓に目を向けた。楓も終同様、身体が霞み始めていた。

「私達は平行世界と呼ばれる世界から召喚されたんです！　その召喚された時に与えられたエネルギーを使い果たすと、終さんみたいに」

楓も細かな粒子となって消える。シアも、零斗も、同様だ。二人とも、消える直前、激励するように夜明の背を叩いた。さっきまで五人で押していたアンサラーの重さが一気に夜明へと圧し掛かり、関節が悲鳴を上げ始める。

「諦めるかよ…」

止まっていた両腕の出血が再び始まる。それでも、

「くそったれがあああああぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

不屈の翼は未来を諦めない。

「一夏…」

傍らで不安げに呟く恋人を安心させるように、一夏は箒を抱き寄せる腕に力を込めた。持ち上げた視線の先には蒼銀に輝き拡がる光の翼。

「信じてるぞ、夜明…」

「曾爺ちゃん…」

大空流星は宇宙（ソラ）を見上げていた。星々の輝き以外、色を持たぬはずの宇宙（ソラ）が蒼銀で埋め尽くされている。何故そんなことが起こっているのか？　流星にはすぐに分かった。月光夜明だ。彼が、本来ならこの時代（未来）に存在しないはずの人間が命を賭して、地球へと落下していく脅威（アンサラー）を押し返そうとしているのだ。

「何で…」

そこまで出来る？　自分を、友人達を戦争なんてものに巻き込んだくそったれ共の為に命を懸けられる？

「何で…」

夜明だけではない。太陽も、一夏も、箒も、鈴音も、セシリアも、シャルも、ラウラも。皆、決して拘わるはずの無かった戦争に参加され、夜明同様に命を賭してくれた。そして、今も。

「何で…」

ＯＲＣＡ旅団との戦いの時もそうだ。彼らは一度、過去に帰還している。なのに、再び未来へと舞い戻ってきた。自分達を戦争に引きずり込んだくそったれ共を助けるために。

「な、んで…」

夜明達を未来に拉致連行し、戦争へと参加させた張本人、大空流星（じぶんじしん）は今ここで、彼らが命を懸けて戦っているのを黙って見ていることしか出来ない。喉の奥からこみ上げてきた嗚咽を噛み殺そうともせず、流星は宇宙（ソラ）へと伸ばした手を血が出るほどに握り締める。

「……トワイライトウィング！！」

涙で霞んだ声を張り上げ、流星は自身の半身とも言える相棒に呼びかけた。夜明との戦闘で装甲の大部分を破壊されたトワイライトウィングは、辛うじて発動させたＰＩＣで流星の身体を大気圏内に浮

かせながら、主の呼びかけに応えるように電子音を鳴らす。

「もう嫌なんだ！　誰かが散っていくのを見ているだけなのは！！
そうさせないためにお前を、力を手に入れたのに、これじゃ何も変わらないじゃないか！！」

彼が物心をついた頃から、既に戦争は始まっていた。流星にとって、誰かが目の前で死ぬことなんて日常の光景となりかけていた。それが、人の死を受け入れられるようになってしまうのが嫌だったから、自分の祖先（よあけ）のように人々を護りたいと思ったから、彼はＩＳに乗る決意をする。そして流星は望み通り力を手に入れた。その結果、誰かが命を賭して戦うのを見ている事しか出来ない。

「誰も死なせたくないんだ！　命が消えるのを見たくないんだ！！
だから、だから…俺に力を貸してくれぇぇぇぇぇぇっっっ！！！！」

叩き付ける場所も見つけられぬまま、流星は涙を流しながら拳を振り下ろす。その時だ。トワイライトウィングの装甲が爆発的な速さで自己修復を始めたのは。

「おいおい、あの兄ちゃん。一人でっかいのを押し返してるぞ」

「すっごいわねぇ～。私の弟子にも見習わせたいわ」

「少し無理があると思いますけど…それよりも、大丈夫なんですか？」

「あぁ、俺か？　ま、問題ねぇだろうよ」

グレイ・スティン、陸奥謙信、奈々瀬ユウ、鈴木政志は横一列に並んで、蒼銀の粒子を吐き出す翼がアンサラーを押し返している光景を見ていた。幾ら動力部分を破壊し、さっきまで五人で押していたとはいえ、一人の人間がＡＦを押し返す光景に四人は微かな驚きを顔に浮かべる。

「お前ら！」

その時、四人の背後から声が聞こえた。振り返る。赤い髪と漆黒の

ＩＳ装甲が見えた。

「頼む、力を貸してくれ！！」

彼女、夕暮太陽は敵である四人に向かって深々と頭を下げる。四人も彼女が言わんとしていることが容易に想像でき、敢えて何も言わなかった。太陽の頼み。即ちアンサラーの破壊だろう。現在、夜明達の活躍で、アンサラーは地球の引力圏外から脱しようとしている。そこでアンサラーを破壊すれば、地球に被害が及ぶことは無い。例え破壊されたアンサラーの破片が引力に引かれていっても、大気圏の摩擦で落下するよりも早くに燃え尽きるだろう。

だが、太陽、一夏達にアンサラーの破壊はできない。破壊するだけのエネルギーが残っていないからだ。故に、太陽は彼等四人を頼るしかなかった。

「「「「…」」」」

四人は言葉では太陽の願いに答えようとしない。その代わり、行動で答えた。身体の向きをある方向へと転換させる。アンサラーの方へと。

「先鋒は俺がもらうぜ！！」

「付き合いますよ」

四機のＩＳがアンサラーへ飛んでいると、二機が飛び出して先行する。政志とユウだ。政志は両腰のバインダーに再装填されたファングの射出準備を。ユウはＩＳ－Ｄシステム（イグニッショナルストライク・ドライヴ）発動準備を。政志は射程圏内にアンサラーを収めた。

「逝けよ、ファングゥ！！！」

バインダーから飛び出した十基の小型自律兵器は先端にビームサーベルを展開させ、唸り狂う蜂のようにアンサラーへと襲い掛かる。

そしてユウは、

「ＩＳ－Ｄシステム発動を確認…目標を駆逐します」

全身の装甲をスライド展開させ、サイコフレームと呼ばれる機関を露出させた。サイコフレームから溢れる紅の淡い燐光が空間に躍動する。そして蹂躙が始まった。

ファングはアンサラーの装甲に突き刺さると、そのまま内部に突入してあらん限りの破壊をし尽くし、飛び込んだのとは別の場所から飛び出して、Ｕターンして再びアンサラーへと襲い掛かる。そして、ＩＳ－Ｄシステムを発動させたユウも、ファングと同等の動きをしていた。

小さく、小回りが利くファングと同等の機動をするなど、普通のＩＳ、そして搭乗者には出来ない。だが、ユウとそのＩＳ『アルテミス』はそれをやってのけている。ファングと同じように超高速で飛び回りながらビームサーベルでアンサラーの至る所を切り裂き、穿っていく。

「次は」

「俺達の番かな！」

アンサラーを蹂躙した二人は、召喚された時のエネルギーを使い果たして消えていった。消えた二人と入れ替わるように、謙信がアンサラーへと跳躍する。

「すぅぅぅぅ……せいやぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

深呼吸しながら跳んでいた謙信は、アンサラーに足がつくと同時に拳を突き出した。拳の先にある、出力を細大にまで上昇させた衝撃増加アーマーでアンサラーにクレーターが出来上がる。

「いくぜラファエル。全力全壊、ってなぁ！！！！」

脚部装甲が変形し、巨大な腕のような形状となる。グレイは腕のような形の武装、マッハキャリバーとブリッツキャリバーを砲撃モードにし、更にレーザーバズーカ、グラーフアイゼンの砲口をアンサラーへと向けた。

「消し飛べぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！！」

マッハキャリバーとブリッツキャリバー、グラーフアイゼンから放たれた極太の光線。それはアンサラーの三分の一を飲み込み、そして完全に消滅させた。

「それじゃ、後はよろしく～」

「頑張れよぉ～」

腕をヒラヒラと振りながら、二人は消えていった。

「よし、これなら行ける！！」

既に、アンサラーの二分の一が失くなっていた。全体の半分を消し飛ばされ、アンサラーの重量は文字通り半減する。これなら、夜明単騎でも押し返すことは可能だ。だが、想定外のアクシデントが起こった。さっき消えていった終達のように、太陽達の身体も霞み始めたのだ。勿論、一人でアンサラーを押している夜明の身体も。

「ここに来てか…！！」

（太陽、こいつはどういうことだ！？）

唇から血が出るほど噛み締める太陽に、一夏の通信が届く。一夏と箒の身体も消えかかっているのか、その声には余裕が無い。

「私達を未来に送った装置があるだろう。あれの力が薄れ始めたんだ。このままじゃ、私達は過去に戻されるぞ！」

（…ここまで来て、そんなオチってありかよ！！）

悔しげな一夏の声。太陽の心と同調するように落胆した声音に、太陽は更に顎の力を増させた。だが、二人の耳に安心させるような声が届く。夜明の声だ。

『心配しなくても大丈夫だよ…そうだろ、流星ぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！』

それが、太陽達がこの世界で聞いた最後の声だった。

掻き消えるように、蒼銀の翼が消えた。己を押し返す者がいなくなり、アンサラーへ嬉々として地球への落下を始める。それはすぐに終わることになった。蒼銀の翼と入れ替わるように、紅の翼が地球を覆ったのだ。

『流星ぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！』

聞こえた。確かに聞こえた。夜明が、憧れた存在が自分を呼ぶ声が。

（あぁ、分かってるよ曾爺ちゃん！）

完全に修復した装甲のスライド部分から紅の粒子を放ち、背中の大型ウィングスラスターから広がる紅の輝きを放つ光翼を広げながら、流星は飛翔する。

今から思えば、尋常ではないことを体験したものである。自分と同い年の頃の祖先と出会い、共に過ごし戦い、そして敵として戦った。導かれることしか出来なかった。常にあの人の背中を追い続ける自分がいた。ここまで引っ張ってもらった。舞台を整えてもらった。

散々お膳立てをしてもらって、こんなことを言う資格は無いかもしれない。それでも、大空流星は叫んだ。

「ここは、俺達の、俺の時代だ！！」

だから最後は、最期は、せめて終劇の幕だけは俺が引く！！

「大空流星、未来を切り開く！！！！！！」

バルディッシュを背中から引き抜く。粒子の奔流が勢いを増し、紅の天の川を創り出した。

「うおおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

流星は目の前に接近する、アンサラーの巨体へとバルディッシュの切っ先を突き出した。地面を掘っていたら、岩にでもぶち当たったかのような硬質な手応え。それも一瞬で消え去り、流星は運命の翼（ディスティニーウィング）の出力限界以上にまで引き上げ、アンサラーを貫いていく。

アンサラーの内部を貫いていく内、流星は不思議な感覚を覚えた。視界に映っていた、飛び散る火花やアンサラーのパーツが消えうせたのだ。代わり、何もない真っ白な空間だけが広がっている。ふと、空間の先を見据えると、誰かが立っているのが分かった。その後ろ姿、一目で分かる。夜明だ。

「曾爺ちゃん！！！」

流星の声に夜明は振り返らない。ただ、片手を持ち上げて動かしただけだ。

行けよ、とでも言うように。

流星は吼える。もう、叫びすぎていて言葉になっていない気がする。きっと、彼の口から溢れているのは、獣の咆哮に似たものだろう。それでも流星は叫び続けた。両手で柄を握り締めたバルディッシュを力の限り突き出し、徐々に増していく抵抗感に負けずに。

ふと、気がつけば抵抗感がなくなっていることに気づく。慌てて周囲を確認してみるが、依然として白い空間が広がっているだけだ。後ろを振り返る。そこにはまだ夜明がいた。流星は何時の間にか夜明を通り越していた。何か言うわけでもなく、夜明は満足そうな笑みを浮かべる。

「……」

流星が何も言えずにいると、夜明の口が動いた。何も聞こえない。でも、唇の動きははっきりと見えた。そして、夜明はこう言っていた。

ーあばよー

と。思わず、流星は夜明に手を伸ばす。空を掴んだ感触に流星はハッとする。そこは白い空間ではなく、宇宙だった。流星の視界の先では、真っ二つになったアンサラーが引力に引かれながら自壊していくのが見える。

アンサラーを破壊した。地球を、愛する人たちを護った。そう自覚した瞬間、流星は拳を突き上げていた。今この瞬間、自分は確かに英雄になっているのだと。

それからの話。デュランダルとラインアーク上層の一部の者達は拘束された。本当なら冬華も拘束されるはずだったのだが、デュランダルの代わりになるだけの人材が彼女しかいなかったので、今では臨時のラインアーク首長として活躍している。

ラインアークと企業連の間にあった蟠りは無くなり、今では両者の間で永久和平条約が結ばれている。近々、流星はラインアークのリンクスとしてカラードに登録される予定だ。

『こっちは万事うまくいってるよ。本当に、曾爺ちゃん達には感謝してもしきれないよ…何時か、また会おう』

「…はっ、うまくいってるのか。それは重畳…黄昏とか、朔夜達との関係がどうなってるのかがかなり気になるけどな」

流星が毎日彼女達に交際を迫られて逃げ回る日々を送っているのはまた別の話だ。ＩＳ学園校舎の屋上。未来から来た簡単な文面の手紙を読みながら、夜明は笑みを零す。彼らが未来が帰ってきてから、

数日が経過していた。帰ってきたばかりの時は、太陽達はアンサラーが地球に落下した、と最悪の想像をしていた。だが、それは夜明の一言がすぐに打ち消した。

『大丈夫大丈夫。後は流星がどうにかしただろうから』

何の根拠も無いが、絶対に間違いないといった感じで夜明は断言してみせた。最初、半信半疑だった太陽達も、未来から来た流星の手紙を見て、夜明の言ってることが正しかったと知ることになる。

「…頑張っていけや」

お前なら更なる高みに行けるさ。自分を超えていった子孫の姿を思い出し、夜明はそう思うのだった。

人が英雄になる瞬間（後書き）

こんにちわ、サザンクロスでっす。

今回は、『三年ＩＳ組　太陽先生』を始めるまでの閑話についてです。

今のところ、書くのが確定している閑話がこれ。

・楯無、大奮闘

未来から帰還してきた夜明達。普段どおりの学園生活に戻る。が、何時も以上に楯無が過激なスキンシップを取ってくるようになる。のだが、太陽達は楯無の行動を鼻で笑う。これは何か変だと思った楯無は太陽達が夜明と男女の関係になったと知り、こうしちゃいられないと奮闘するのだ！

こっから先がアンケート。今から数個の閑話の概要を書きますので、どれがいいのか三つほど選んでください。

・千冬、銀河をくっつけろ大作戦！

晴れて太陽達と付き合うことになった夜明。弟に続き、義弟が彼女（複数とか突っ込まない）持ちになり、千冬は「あれ、私行き遅れてね？」と危機感を抱く。そんなある日、束と夜明、絶対に混ぜてはいけない二人が千冬と銀河のために行動を始めるのだった

・あの名シーンを再現しよう
夜明や太陽達で、あの名シーンを再現してみよう！　という企画。もし再現して欲しいシーンがあったら、配役とどの漫画のシーンなのかを明記してください。出来る限り調べて書きます。今のところ書こうと考えているのはワンピース、黒ひげの「夢は終わらねぇ！！」と同じくワンピースからゴールド・ロジャーの処刑シーン。

・夜明、太陽武勇列伝
夜明と太陽がＩＳを使わないで戦闘！？　どこか別の世界へと飛ばされた二人はどんな化け物と戦わされるのか？　今のところ考えているのは、銀魂の夜王鳳仙と神威。

・夜明ラバーズ、動物化！！
ある日、夜明が目を覚ますとベットの中に真っ黒なウサギがいた。そして、そのウサギは何故か眼帯をしていた…ラウラがウサギ！？鈴音が猫！？　セシリアが狸でシャルは柴犬、楯無は狐で太陽は…サーベルタイガー！？　獣と化した彼女達はどんな風に夜明に甘えるのか？

こんな感じでっす！

楯無奮闘　（前編）

夜明達が未来から帰還して早数日が経過した。未来でかなりの期間過ごしていたにも拘わらず、こっちでは数時間程度しか経っていなかった。何このご都合主義？　と思わなかった訳ではないが、それならそれで気にすることはないだろう、と夜明達は普段通りの日常を送っている。それは周囲も同じことだった。ある一人を除いて…。

「うにゅにゅにゅ……」

昼休み、一人の女子生徒が屋上から校庭を見下ろしていた。双眸に押し付けた双眼鏡から見える光景は一人の男子生徒と五人の女子生徒が仲良く授業をサボった罰を受けていると言う物。

「…や～っぱし何か雰囲気変わったわね、太陽ちゃん達」

双眼鏡を下ろし、顎に手を当てながらＩＳ学園生徒会長兼最強、更識楯無は思案顔を作る。校庭で罰を受けているのは夜明と愉快な仲間達。校庭にいない一夏と箒は学食でいちゃついてることだろう。食堂で砂糖よりも甘い雰囲気を放っているだろう二人のことはどうでもいいとして、楯無はもう一度双眼鏡のレンズを覗いた。

「何と言うか、女らしくなったと言うか、動作動作に色気を感じさせるようになったというか、露骨に夜明に甘えるようになったというか」

張り込み中の刑事よろしくアンパンを齧りつつ、楯無は夜明を取り巻く五人を見やる。女性陣五人、罰なんかそっちのけでひたすら夜明に甘えていた。そして夜明も夜明で、罰である校庭の掃除をしながらも五人を諌めようとしない。

「うらや…うらやま…羨ましい…」

言い直す意味が欠片もない。楯無がアンパンを食べ終えたのとほぼ同時、太陽が夜明の首に両腕を回してキスをした。それに続く形でラウラと鈴音が夜明の耳に吸い付く。ベギィッ！　と楯無の握力に耐えられなかった双眼鏡のボディに細かな亀裂が走る。

「ふ、ふん。あれくらい、私も四六時中してるし…」

顔を真っ赤にさせ、腕を小刻みに震わせながらも楯無は平静を装う。今度はシャルとセシリアが夜明の服を脱がせ始めた。次の瞬間、怒りに震える生徒会長の手の中で双眼鏡は砕け散り、足下に塵の山を作り上げる。

「……本人達に聞くのが一番手っ取り早いかな」

その呟きだけを残し、楯無は屋上を去った。序に、千冬に告げ口することも忘れずに。

「あだだだ…何であんないい場面で織斑教諭が出てくるんだ…」

千冬の鉄拳制裁で痛む頭を摩りながら、太陽は愚痴を零す。彼女の周囲にいる四人も痛そうに自分の頭を撫でているが、自分たちが学生に有るまじき行為をしようとしてたのは事実なので文句は言わなかった。

「そう言えば太陽、私達の専用機の調整ってもう終わったの？」

四人の視線が集まる。おぉ、と答えながら太陽は待機状態になっている専用機をそれぞれに返した。未来から帰還した翌日、太陽は四人に調整をするから、と専用機を預かっていたのだ。

「調整って言ってたけど、何か問題でもあった…」

専用機のステータス画面を開いたシャルが絶句する。それは回りの三人も同じこと。ステータス画面に映し出されたＩＳのスペックがこの時代の第三世代のＩＳ並に、大幅に下がっているのだ。下がったと言うより、元に戻ったという表現の方が正しい。オマケに、インストールしていた強化パッケージもなくなっている始末。どういうことだ？　と視線で訊ねてくる四人に肩を竦めて見せる太陽。

「少し考えれば分かるだろうが。私達は未来で結構な期間すごしていたけど、過去（こっち）では数時間しか経ってないんだぞ。その数時間の間で、お前たち国家代表候補生の専用機が大幅に性能を強化され、その上今まで見たこともないような高性能の強化パッケージまでインストールしいるんだ…お前ら、どうやって国の連中に説明するつも

りだったんだ？」

未来に行ってて、未来の技術でこうなりました、何て説明は死んでもできない。露骨に視線を逸らした四人に太陽はため息をつく。

「私の『バルディッシュトワイライト』や夜明の『レイジングウィング』、一夏の『白式』と箒の『紅椿』は国家や企業に所属している訳ではないからそうそうスペックデータを見られたりはしないだろうが、お前たちは一応代表候補生なんだぞ。何時、国から専用機の状態を見せろといわれるか分からないんだろうが」

白式と紅椿の調整が既に終わっているのは余談である。幾ら性能が上がったとはいえ、自国が所持しているＩＳを勝手に弄くられて黙っている国家があるとは思えない。シャル達が面倒なことになる前に、太陽は不安の目を摘んでおいたのだ。

「まぁ、そう言うわけだ。文句は受け付けないぞ…そろそろ出てきたらどうだ、女狐？」

「ありり、ばれてたの？」

何の前触れもなしにひょっこり現れた楯無に太陽以外はギョッとする。

「貴様…今の話を聞いていたのか？」

視線を鋭くさせ、ラウラが問う。楯無はん～、と顎に指を当てながら考え込んだ。

「何か未来の技術がどうとか、国が黙ってないって話は聞こえたよ」

お姉さんにはよく分からないけどね～。そう言って、楯無はにっこりと微笑む。ラウラたちは顔から血の気を引かせ、太陽は苦虫を噛み潰したように表情を顰める。『敵の命は我が手中にあり』と書かれた扇子で顔を隠しながら楯無は目を細めた。

「でもでも～、お姉さんの質問に答えてくれたら、今さっき聞いた話は忘れちゃうかもしれないよ？」

「…何が聞きたいんだ？」

「ずばり、太陽ちゃん達と夜明の関係の変化よ！！」

閉じた扇子で鋭く太陽を指し示す。

「ここ最近、太陽ちゃん達夜明と仲良しすぎない！？　何があったのかお姉さんに洗い浚いぶちまけばさい！」

楯無の質問に顔を見合わせる五人。まさか、未来に行ってたなんて言えないし、事実だけを伝えることに。

「別に、ただセックスしただけバガァ！！」

背後から襲い掛かってきたドロップキック四発の威力に耐え切れず、太陽は吹っ飛んだ。太陽の背にドロップキックを叩き込んだ四人は顔を真っ赤にしながら叫ぶ。

「「「「何でお前（貴方／君／あんた）はそう明け透けに物を言うんだ（言うんですの／言っちゃうの／言うのよ）！！」」」」

「あだだだ…事実を述べて何が悪いんだ…」

尚、何か言っている四人を抑えながら太陽は楯無を見る。無言で立つ楯無の顔は扇子で隠され、表情は窺い知れない。そっか。一言呟くと、楯無は太陽達に背を向けた。

「五人ともシたんだよね？」

「あぁ、シたな」

「ふ～ん、そっかそっか……」

何度も頷きながら、楯無は去っていった。

「うぅ～ん、意外と楯無お姉さんはメンタル面が弱かったのね」

時は流れ、場所は再び屋上。地平線に沈んでいこうとする日輪が放つオレンジ色の陽が膝を抱え込んでいる女子を照らす。楯無だ。手の甲で顔を擦り、目尻から流れ出る暖かい水滴を拭う。

「恋人同士でもないのに、夜明が自分以外の女の子と関係を持ったってだけでこんなにショックを受けるなんて…ここまで独占欲が強いとは思わなかったわ」

ため息をつきながら、膝の間に顔を埋める。

「太陽ちゃんはともかく、他の子達が夜明とそういう関係になるなんて…予想外だったなぁ……よしっ！」

やおら立ち上がり、己に喝を入れるべく両手で頬を叩く。

「うじうじしてたって仕様がない。夜明が自分以外の女の子とイチャイチャしてるからなんだ、私はそれ以上にイチャイチャすればいいだけのこと！　私は諦めないわよ！！」

あの時、亡国機業の襲撃者から助けられた時から抱いているこの想い、そう簡単に諦めてなるものか。楯無は拳を握って誓った。

「夜明の一番になる！！」

そのためには、先ず太陽達と同じ立場まで行かなければならない。
楯無は持ち前の行動力を発揮し始めた。

翌朝。夜明はベットの中でうとうとしていた。時刻は六時半、今日は休日なので、そのことを考えるとかなり早い起床だ。上半身をベットから起こし、二、三秒ボ～っとしていた夜明は再び横になって布団を被る。見事な二度寝だ。

「…て、起きて…起きてってば、夜明」

不意に身体を揺すられる。二度寝したばかりの夜明は起きる気がせず、軽い唸り声をあげて起きる意思がないことを相手に伝える。

「後、一時間…」

「うん、何時だったか聞いた、太陽ちゃんの『一生寝させてくれ』より百倍マシね。でも、そろそろ起きてくれないとお姉さん…色々とエッチィことしちゃうぞ」

「邪悪な気配！！」

すぐさまベットから飛び出し、床を転がりながら立ち上がって起こそうとしてきた侵入者、改め犯罪者に油断無い視線を向ける。

「おっはよ～♪」

「…お前か、楯無…」

悪戯が成功した子供のような笑顔を向けてくる一つ年上の女性に嘆息しながら、夜明はやれやれと首を振りながらジト目を向ける。

「何だよ、こんな朝っぱらから？　俺は二度寝がしたくて仕様が無いんだが？」

「二度寝もいいけど、美人なお姉さんと一緒にどこかに遊びにいくのはどうかしら？」

その場でクルリと一回転する楯無。そこで、夜明は楯無が学園の制

服ではなく、私服だということに気づく。

「遊びに行く、ねぇ…でもなぁ…」

太陽、セシリア、鈴音、シャル、ラウラ。五人の恋人がいながら、それ以外の女の子と休日に出かけるなんて如何なものか？　うんうん唸っていると、夜明の考えている事などお見通しと言わんばかりに楯無はVサインを作る。

「それなら大丈夫。太陽ちゃん達にはちゃんと許可とっといたから」

「マジでか！？　それなら別にいっか…今日は特に予定も入ってなかったし。うし、んじゃどっか行くか。着替えるから少し出てろ」

「舐めるように視姦しちゃ駄目？」

「出てけぇーっ！！！！！！」

その頃の太陽達。

「もがぁーっ！　もがぁーっ！（箒！　私達を解放しろぉぉぉぉぉ！！！！！！！！）」

太陽と箒の部屋に五つの簀巻きが転がっている。太陽達だ。本日未明、寝ているときに楯無に縛り上げられた挙句に簀巻きにされ、ここに放り込まれたのだ。ちなみにもう一人の部屋の主、篠ノ之箒はと言うと、

「すまないなお前ら。だが、楯無さんとの約束を果たせば私は…ウフフフ…」

一夏絡みのことだろう。しっかりと買収されていた。

楯無奮闘（後編）（前書き）

次回、夜明ラバーズ動物化

楯無奮闘（後編）

「さぁてやって来ました、どこぞの大手水族館！！」

「楯無、誰に言ってんだそれ？」

「さぁ、誰だろ？」

バイクに二人乗りして移動すること一時間半、二人はどこぞの水族館ゲート前へと来ていた。両手を広げて説明口調の楯無。夜明が真意を訊ねるが、返ってきた答えは余り要領を得ていない。

「何と何とこの水族館、敷地内にアトラクションまであるのだ！」

「八景島シー〇ラ〇イスみたいな所だな」

夜明のギリギリな発言に楯無は冷や汗を滝のように流す。気を取り直すように咳払いし、心底楽しそうに夜明の手を取った。

「それじゃ行こう夜明！　若い二人の時間は有限なんだから！」

「引っ張るなって！　…ガキかお前は…」

自分の腕を取りながら、スキップでも始めかねない足取りの楯無を咎めるわけでもなく、夜明は苦笑を浮かべて引っ張られるままついていく。楽しい楽しいデートの始まりだ。

一方その頃太陽達。

「あんの女狐、夜明をどこに連れて行った！？」

「ちょっとセシリア！　今すぐＩＳ展開させて夜明を探しなさいよ！　スナイパーのあんただったら遠くに離れた場所にいる夜明でも見つけられるでしょ！」

「む、無茶を言わないで下さい！　流石に私でもそんな芸当は出来ませんわ！」

「皆、とりあえず心当たりのある場所を探していこうよ」

てんやわんや、上よ下のよ大騒ぎ。騒ぐ四人の横では、

「よくも俺達を縛り上げてくれたなぁ、箒ぃっ！！」

「あぁっ！　…た、確かに友を裏切ったことは反省している。だが、一夏との甘い時間を手に入れられたのだから後悔はしてない！！」

ちなみに、箒は何で買収されたのかと言うと、以前、文化祭の時にやった『各部対抗月光夜明と織斑一夏争奪戦』。あれの景品である夜明と一夏をどこかの部に強制入部させる権利、それを餌に箒は買収されたのだ。かくして、一夏は箒が所属している剣道部に強制入部されることが確定する。ちなみに夜明は、楯無による根回しで生徒会に入ることになっている。

まぁその話は置いといて、騒ぐ四人の横ではラウラと人格をチェンジして表に出てきたライラが箒を縄で拘束していた。凛とした表情でふざけた事をほざく箒にキレたライラ。問答無用で箒を亀甲縛りで縛り上げる。太陽ほどではないにしろ、女子高生にしては大きい箒の胸に縄が食い込み、絵的に凄いことになっていた。

「縄が、縄が食い込んでる…」

何故か恍惚とした表情を浮かべる箒を捨て置き、ライラは太陽に向き直る。

「んで、どうすんだよ？」

「とにかく、近くにある遊園地やら水族館やらを虱潰しに探してい

くぞ」

「「「了解」」」

「こいつはどうする？」

太陽の指示に返事を返す三人の隣りで、ライラはあられもない姿で床の上に転がされている箒を爪先で突いた。

「一夏に、『箒がＳＭプレイに目覚めた』とでも言っとけ」

この問題に一切拘わっていない一夏にとんでもない置き土産を残し、太陽達は行動に移った。

「色々な魚がいるわね」

「ここまで来ると、種類の多さに呆れるな…おぉ、あそこの水槽に入ってる魚、うまそうだな」

館内の魚コーナーを練り歩く二人。何と言うか、デリカシーとかそういうのが欠片も感じられない発言に楯無は呆れ切った表情を作る。何か言ってやろうか、と思いながら周囲に視線を走らせていると、何かを発見したのか小悪魔みたいな笑みを浮かべた。

「ねぇねぇ夜明。こっちに夜明そっくりな魚がいるわよ」

「俺そっくりな魚？　どれど……」

振り返った夜明は楯無が指差す、水槽の隅に貼り付けられた魚の名前が刻まれたプレートを見て固まる。その水槽に入れられた、美しい光沢を放つ銀の鱗を持った、背びれがかなり長い魚の名とは。

『トウヘンボクネンジンギョ』

無言で楯無の方を向くと、それはそれはいい笑顔が返ってきた。

「…なぁ、楯無」

「何かな？」

「この魚の名前と、お前の笑顔から途方もない悪意を感じるんだが…俺の気のせいか？」

「気のせい気のせい～♪」

確信犯だ。実に楽しそうな様子の楯無に、夜明はそう思わずにいられなかった。ジトッとした目で見ていると、楯無は歳の割には幼く見える笑顔を浮かべる。

「はいはい、拗ねないの。お詫びにお姉さんがチュ～したげるから」

「拗ねてもないし、キスをせんでもいい」

唇を突き出して顔を近づけてくる楯無を押しのけつつ、夜明は次にどこ行くべきかを考えた。

「楯無、次はどこに行きたい？」

少し考え、こういうことは相手の意見も聞くべきだと思い、夜明は楯無に訊ねる。唇を突き出すのは止めたものの、夜明に顔を近づけたまま楯無は顎に指を当てて考えた。

「そうね～…今が十一時。確かイルカショーが十二時から始まるから、それまで時間潰してましょ。アトラクションもやってみたいし」

「ん、了解」

そして水族館ゾーンを出てアトラクションゾーンにやって来た二人。人の多さ、アトラクションの多さに驚きながらキョロキョロ周囲を

見ている二人の視界に最初に映ったのは…。

「ジェットコースターか」

「最大の特徴は三連続縦回転だとか」

「それって怖い『ギャアアアアァァァ！！！！！！』…らしいな」

このジェットコースターに乗っているであろう人々の悲鳴に台詞を遮られ、夜明はこのジェットコースターが恐ろしいことが容易に理解できた。ジェットコースター搭乗者の絶叫に楯無は目を輝かせながらジェットコースターの入り口を指差す。

「夜明、あれ乗ろ！」

「お前、絶対にSの気があるだろ」

今の絶叫を聞いて乗りたいのだと思ったのなら、そいつは自分も悲鳴を上げたいドMか、他の人の悲鳴を聞きたいドSだ。

「えぇ～、そんなことないよ」

そして楯無の場合。

「じゃぁ、何で乗りたいんだよ？」

「隣りで夜明の絶叫する様を思う存分見たいから♪」

ドSを遥かに超える理由だった。夜明が送ってくるジト目の視線を

遮るように楯無はどこからともなく取り出した扇子で顔を隠す。顔は扇子で隠れて見えないが、目元から笑っていることが容易に分かる。

「早く早く！　夜明が子供みたいに叫んでるところが見たい♪」

「欲望漏れすぎだろ…まぁいいや」

そして数分後。

「……（キュ～）」

「お～い。大丈夫か？」

ジェットコースターから少し離れたベンチで目を回しながら横たわっている楯無と、彼女を介抱する夜明の姿があった。ジェットコースターがどれ程のものだったのか、十七代目更識家当主兼ＩＳ学園生徒会長である楯無が気絶してることから推して測るべし。

「と言うか、楯無が気絶するようなアトラクションを一般人にやらせんなよ…」

そう言う夜明も少しふらふらだったりする。自身もベンチに座り込んでふらふらが納まるのを待った。それから数分後、漸く夜明の意識が正常に戻った頃、楯無が目を覚ます。

「ん、ん～…」

「おぉ、起きたか楯無」

呻き声を上げながら瞼を持ち上げた楯無。意識は戻ったらしいが未だに頭がクラクラしているらしく、目はかなり虚ろだった。

「大丈夫か？」

「…何で夜明の顔が歪んでるの？」

「大丈夫じゃないな…」

更に少し時間が経過し、楯無はやっとこ上半身を起こせるまでに回復した。

「いやぁ、まさかあそこまで凄いとはね…流石のお姉さんでも呆れちゃうよ」

「確かになぁ。お前が気絶するって相当だぞ」

寧ろ、何故このジェットコースターが普通に運営されているのかが不思議だ。

「うん。今回は安易にこんな危険アトラクションに乗りたいなんて言った私が悪いわね。夜明、ごめん」

「気にしてないから別にいいけどよ。次はもっと落ち着いたのに乗りてぇな」

「だったらメリーゴーランドとかどうかな？」

「うし、それでいくか」

こうして、二人は様々なアトラクション、イルカショー等のイベントを楽しんでいった。そして時はあっという間に流れ…。

「もう夜になっちゃったわね」

楯無の言葉に視線を持ち上げてみると、そこには星空が広がっていた。楽しい時間は経過するのが早く感じるとはよく言ったものだと、二人は口には出さず、心内で同じ事を考える。

「ん～、それじゃそろそろ帰るか？」

「う～ん、そうだね。でも、その前に一つだけしておきたいことがあるんだよね」

「何だ？」

「うん…夜明、単刀直入に聞くわよ…太陽ちゃんにセシリアちゃん、鈴ちゃん、シャルちゃんラウラちゃん…この五人と付き合ってるでしょ？」

「ぶっふぉ！！！」

いきなりの不意打ちに夜明は後退りする。獲物に狙いを定めた肉食獣を連想させる笑みを浮かべながら楯無は夜明ににじり寄った。

「他人の恋事情に首を突っ込むのは野暮だって分かってるけど、流石に五股は生徒会長として見過ごせないわ」

「…で、お前は結局何が言いたいんだ？　言っておくが、俺は後悔もしてないし反省もしてないぞ」

もう言い逃れは出来ない（と言うか、最初からするつもりなんて皆無だが）と悟り、夜明は先に己の思いを言葉にして述べた。その言葉に、楯無は満足そうに笑う。

「君ならそう言うと思った…何、物凄く簡単なことだよ。私もその五人の中に加えて欲しいだけ」

「…お前にしちゃ珍しく、笑えない冗談だな」

「これが冗談を言ってる目に見える？　何なら、今この場で夜明への想いを叫んでもいいのよ？」

「勘弁しろ」

こいつなら本当にやりかねない。いや、確実にやるに違いない。確信しか持てない夜明が流す冷や汗は滝にも匹敵しそうだ。

「それとも…私みたいな軽薄な女の告白は信用できない？」

「…いや。苦手なタイプの人間だとは思ったことはあるけど、お前のことを軽薄な人間だと思ったことは一度もないぞ」

自分以上に自由で、自分を凌駕する破天荒さを以って包容してくる楯無のようなタイプの人間は、唯一夜明が苦手としている人種だ。夜明の言葉に苦笑を浮かべる楯無。

「そっかぁ、お姉さんは夜明にとって苦手なタイプなんだ…その苦手なタイプのお姉さんと恋人になるのも悪くないと思わない？」

「……」

返答に詰まる夜明。如何に朴念仁・オブ・朴念仁ズと呼ばれる彼でも、自分に向けられた楯無の好意が本物だと言うことは分かっている。だが、昔の自分ならともかく、今の彼には恋人が五人もいる。

（何!?　何なの!?　これが所謂、俺の人生におけるモテ期という奴なのか!?）

いい感じに頭を暴走させる。

「早く答えをくれないと…お姉さん、実力行使に出ちゃうよ？」

頭が爆発するような感覚を抑えるのに必死だった夜明は、何時の間にか楯無が目の前にまで来ていることに気づかなかった。反射で身を引こうとするが、それよりも速く楯無の両腕が夜明の首に回される。

「夜明。女の子にとって、心の底から惚れた男の子の大切な人になることは最高の幸せなの。夜明の大切な人になるためなら私」

一旦言葉を切り、首筋を舐め上げる。それから耳にゆっくり息を吹きかけ、背筋はゾッとするほどの色気を湛えた声で囁いた。

「何でもするよ」

（何、俺何されちゃうの！？）

楯無の身体から香る甘い匂いに夜明の頭はオーバーヒート寸前。その時、天の助けのように携帯が鳴った。しかし、夜明が携帯から着信音が流れてることに気づくよりも早く、楯無が夜明の携帯を取り出して勝手に通話ボタンを押す。

「もしもし？　悪いけど、この携帯の持ち主は今取り込み中だからまた後でかけなお」

『…お前が出るってことは、夜明がすぐ近くにいるってことだよな、女狐？』

「…あ～ら、誰かと思えば太陽ちゃんじゃない。夜明に何か用？」

『この女狐が、どの口がそんなことをほざきやがる…まぁいい、大体の状況は察した。とりあえず、私の質問に一つだけ答えろ。お前が更識家の当主だなんてつまらない事はどうでもいい。理屈も理論もいらない。唯一人の女、月光夜明という男に惚れた女として一つだけ答えろ』

『お前は月光夜明を愛してるのか？』

「全身全霊、全力全壊で」

躊躇も、迷いもなく楯無は断言した。少しの間、電話の向こうから沈黙が流れてくる。

『そうか…おい、夜明はすぐ傍にいるんだろ？　替わってくれ』

「りょうか～い。ほい」

夜明は訳が分からぬまま、受け取った携帯を耳に押し付けた。

『夜明』

「太陽…お前、楯無と何はな『夜明、女狐のことは好きか？』…はい？　女狐って楯無だよな？」

『好きか嫌いか、それだけ答えろ』

一旦、携帯を顔から遠ざけ、夜明は楯無を見た。その瞳には拭いきれないような不安と、日輪のように光り輝く期待で満ち満ちている。

ゆっくりと、夜明は携帯を口元に持っていった。

「正直、苦手なタイプではある。でも」

『でも？』

「凄く魅力的な女性だとも思ってる」

『…早い話、女性として好きだと？』

「まぁ、そういうことに…なるのか？」

『浮気者』

研ぎ澄まされた日本刀の様に太陽の言葉が胸に突き刺さるが、何も言い返せない。沈黙する夜明に呆れたのか、太陽は通話の向こうでため息をつく。

『はぁ…。まぁ、お前が複数の女から愛される星の下に産まれた男だなんて最初から分かってたからな。今更、三人くらい増えようが仕方ないか』

「ちょっと待て。三人って何だ三人って？」

『私の勘だが、女狐を含めた三人の女がお前を愛するようになると思うんだよな…月光夜明』

「はい！」

いきなりフルネームで呼ばれ、夜明は思わず背筋を伸ばしてしまう。

『恋人が六人に増えても、キチンと全員を愛するんだぞ…特に正妻である私をな！』

それだけ言って、通話は向こう側から切れた。夜明も通話を切って視線を楯無に戻す。夜明の目から何か感じ取ったのか、楯無は夜明に身を委ねるように身体から力を抜いた。驚くほど柔らかい身体を抱き締めながら、夜明は楯無の耳元で呟いた。

「絶対幸せにする」

「ん…私を君の特別にしてね」

こうして、また一人夜明の恋人が増えたわけです。

追伸

何か新しい世界に目覚めそうになった等ですが、一夏の働きで、ギリギリのところで普通の世界に戻ってきましたとさ。

楯無奮闘（後編）（後書き）

オマケ

「そう言えば、楯無って」

「うん。楯無は更識家の当主が名乗る名前だから、私の本当の名前ではないんだ。本当の名前は結婚式の時、相手にだけ教えるものなんだって」

「ふ～ん。一つ聞きたいんだけど、楯無の由来って」

「そのまんま。常に攻める矛であれ。護る楯など必要ないくらいに…って意味」

「やっぱしそうなのか…でも、確かにお前が楯である必要はないな」

「え？」

「これからずっと、俺が護るんだから」

「…うん／／／」

事件は会議室で起きてるんじゃない、俺の部屋で起ころうとしてるんだ！　…と言いたい。

とりあえず、ライラの話。そして事件が始まる前日。

事件は会議室で起きてるんじゃない、俺の部屋で起ころうとしてるんだ！　…た

（…何でこんなことになったんだろ？）

彼、月光夜明はベットに身を横たえながら黙考していた。考えることは、今置かれている己の状態。ちらっ、と視線を横に向けて見れば、

「……（じぃ～）」

全身から構って構ってオーラを放つラウラ、ではなくライラの姿が。金と赤の色が反転したオッドアイ、夏休みの時、シャルと買い物に行った時に買った猫パジャマ（猫耳フードがついてるあれ）を身に纏い、枕を胸に抱きかかえている。

（……何でこんなことに？）

以下、回想。

夜明、ベットに寝ながら少年誌を読んでいた。

←

扉がノックされた。夜明が扉を開けるとライラが目の前に立っていた。

←

夜明は逃げ出した（扉を閉めた）！　だが逃げられない！

←

ライラのウルウル涙目攻撃！

←

急所に当たった！　夜明は倒れた。

←

ライラは８０９７の経験値を得た。ライラは夜明の部屋に潜り込んだ。

こういうことだ。そして今現在、

「……（ちらっ）」

「……（じぃ～）」

夜明はベットの上に横たわり、ライラは枕を抱きかかえながら椅子に座っている。ライラの全身から放たれる構ってオーラ、真っ直ぐな視線が背中に突き刺さる。でも、それだけだ。それだけで、ライラは別に自分からアクションを起こそうとはしなかった。

（…このまま放っておけば部屋に戻るんじゃないか？）

特別規則第一条、男子部屋に女子が泊まってはならない。夜明がライラを部屋に泊めたということが寮長である千冬にばれた場合、夜明は何らかの罰を受けることになる。流石に千冬の罰を喰らうのは御免だ、と夜明はライラを無視することに。

「……」

「……（じぃ～）」

「……」

「……（じぃ～）」

「……」

「……（くしゃ）」

「あり？」

背後から伝わってくるライラの気配が変わり、夜明は反射的に振り返った。

「……（うるうる）」

物凄く涙目だった。夜明に構ってもらえないのが相当悲しいのか、目尻に溜まった涙は今にもライラの白い頬を流れ落ちそう。そんなのを見て、この男が無視できるわけも無く、

「…はぁ～（ぽんぽん）」

ため息を吐きながらベットの空いてる部分を手でぽんぽんと叩いた。ジェスチャーの意図を察したのか、ライラは顔を輝かせながら弾丸のような勢いでベットに飛び乗り、夜明に抱きつく。

「夜明夜明夜明～」

「はいはい」

自分の名を呼びながら、胸に頬擦りしてくる恋人の頭をなでる夜明。クゥ～ン、と子犬よろしく嬉しそうに鼻を鳴らすライラ。

「んで、何か用か？」

「お前と一緒に寝たかった」

ストレートな答えに苦笑する。本能に忠実なライラだからこそ、何の恥ずかしげも無くこういうことが言えるのだろう。

「よ～あけ♪」

「ん？」

かなりの時間撫で続けていると、不意にライラは頬ずりをやめた。夜明が見ると、目を閉じて唇を尖らせている。何を求めているかは一目瞭然だ。夜明はライラを撫でていた手を項に回し、ゆっくりと引き寄せる。

「ん…」

二人の唇が触れ合う。ライラの唇から甘い吐息が漏れた。夜明はこれだけで終わらせるつもりだったが、ライラが更に深く夜明を求め始め、強引に唇を割り開いて舌を差し込んでくる。一瞬だけ抵抗を試みたが、身体に巻かれたライラの両腕の感触と、口内を舐め回す舌の快楽に夜明の拒絶を瞬時に融解した。

「ん、ちぅ、ちゅる、ぬちゅ…はぁ」

本能の赴くままにライラは夜明を味わう。唇を甘噛みしてきたかと思えば、舌を搦めて唾液を啜り上げる。ライラの舌の激しい動きに夜明の体温は加速度的に上昇する。それはライラも同じだ。体温で頭がおかしくなると思った時、やっとライラは夜明から顔を離した。二人の唇の間に涎の橋が出来たが、すぐに切れてしまう。ライラは夜明の唇に垂れ落ちた唾液を舐め取っていく。

「ぺろ、れろ、れる…夜明ぇ。俺、もう…」

静かな湖畔のように濡れた目でライラが見つめてくる。服を脱ぎ始めたのを見て、夜明はやんわりとその手を握った。

「ライラ、明日も授業があるから、また今度な」

そう言って諫めようとするが、ライラは不満を隠そうともせずに半目で見てくる。苦笑しながら抱き締めてやると、頬を胸に摺り寄せて甘えてきた。

「ん、分かった。約束…だ、ぞ…」

頭を撫でていると、ライラの目がトロンとしてきた。そのまま手を動かし続けていると、数分としない内に穏かな寝息を立て始めた。ライラが完全に寝入ったのを確認し、夜明は部屋の電気を消そうとするが、ライラがギュ～ッ、と抱きついてくるので立ち上がれない。仕方が無いので、すぐ横にあった枕を投げて、壁のスイッチに当てて器用に電気を消した。

「…本当、俺なんかには過ぎた恋人だよな」

真っ暗になった部屋の中、夜明は己の両腕の中で眠るライラに視線を落とした。それと同時に、他の恋人の姿も脳裏に浮かんでくる。

「あいつら。何で俺みたいな奴に惚れたのかね？　若気の至りってやつか？　…まぁいいや。俺は全力でこいつらを幸せにするだけだからな」

「くー…、くー…」

「お休み、ライラ」

安心しきった顔で寝ているライラの額に口付けを落とし、夜明は眠りについた。

「何じゃこりゃー！！」

翌朝、事件は起こった。

事件は会議室で起きてるんじゃない、俺の部屋で起ころうとしてるんだ！…もう

とりあえずの決定事項。

『シュヴァルツェア・レーゲン』の強化パッケージはハルートもどき。

サバーニャの方はセシリアかシャルにするか検討中。

一夏は原作七巻、つまり太陽編に入る寸前で白式を第五世代に進化させる予定。

シュヴァルツェア・レーゲンの強化パッケージですが、『堕天使』と名づけるつもりです（中二！）。誰か、ドイツ語で堕天使の読み方を教えてください。

恋人が動物化！？（前書き）

恋人が動物化!?

始まりはある違和感だった。ベットの中で平和に寝息を立てている夜明。その隣りには至福の表情を浮かべたライラが寝ている…筈なのだが。

「…朝か…あり、ライラ?」

半ば意識を眠らせたまま覚醒した夜明は隣りで寝ていたライラがいないことに気づく。ライラの姿を探して部屋の中を見回すが、彼女の姿はない。

「起きて部屋に帰ったのか?　いや、あいつのことだからまだ俺に引っ付いてるはず…さっきから気になってたんだが、何かベットの中に丸っこくてふわふわしたものが」

掛け布団を捲り、中を覗き込む。そこには見慣れない、黒くてふわふわした毛の塊があった。何じゃこりゃ?　と思いながら夜明はその黒いふわふわに触れた。触った瞬間に動いたことと、暖かい感触に少しびっくりしながらも黒いふわふわを取り出す。その正体は、

「…うさぎ?」

真っ黒なウサギだった。しかも、唯のウサギではない。ウサギのシンボルともいえる長い耳と頭頂部分が見事な銀色なのだ。それだけじゃなく、金と赤のオッドアイというオマケ付き。

「……まさか!」

とんでもない可能性が脳内を過ぎり、夜明は滝のような冷や汗をかく。そんなことある訳がない、と自分の考えを否定しながら未だに寝ているウサギを突いてみた。

「お〜い、ライラ〜」

名を呼んでみる。すると、黒ウサギはむっくりと起きた。唖然とする夜明の目の前で器用に前脚を使って頭を掻くウサギ。自分を見ている夜明に気づき、眠そうな半目をぱっちりと開いて鼻を摺り寄せてくる。その時、夜明の中の予感が確信に変わった。

「…取りあえずライラ、自分の現状に気づいているか?」

夜明の問いに黒ウサギ、改めライラは首を傾げる。小鼻をヒクヒク動かしながら、まず自分と夜明の視線の高さが尋常じゃないくらい違うことに気づく。それから自分の身体を覆うふわふわの毛、そして頭に生えている長い耳…。

「……(うぉーっ!! なんじゃこりゃぁーっ!!)!!」

ベットから飛び下りたライラは凄い速さで部屋の中をグルグル回り始めた。絵に描いたような、見事なパニックだ。動物化したにも拘わらず、何故か普通に意思の疎通が出来る夜明はとにかくライラを落ち着かせることに。走っているライラを抱き上げ、ぽんぽんと背中を叩く。

「ほれほれ、とにかく落ち着きなさい」

「……(これはこれでありだな)」

腕の中でうっとりとしているライラを撫でている時だ。カリカリと音がした。夜明とライラは音の発生源、ドアの方を見る。音はドアの向こう側からしているようだ。その音は何かを引っかくかのような音、まるで、動物が爪を立てて引っかいてるかのような音。

「…まさか」

ライラを抱きかかえたまま、夜明をドアを開ける。ドアの向こう側には、予想通りというべきか、

「ニャー」

黒い猫。

「キューン」

蒼い狸。

「ワンワン」

金色の柴犬。

「コーン」

水色の狐がいた。

「…鈴音、セシリー、シャル、楯無か…」

四匹の動物は肯定するように鳴く。痛む頭を押さえ、夜明は深々とため息をつく。そこである可能性に気が付き、更に表情を険しくさ

せた。

「ちょっと待てよ。お前等が動物になってるってことは、あいつが動物化してるって可能性も」

その考えは間違っていなかった。とにかく動物化した恋人達を部屋に招きいれようとした夜明の耳に、悲鳴が届く。悲鳴の原因が何なのか、大体想像できていたので、夜明はやはりといった表情でため息をつく。

「やっぱりあいつもか。ってか、人に悲鳴を上げさせるような動物って何になったんだあいつ？」

夜明はライラ達に部屋の中で待ってるよう指示し、悲鳴が聞こえてきた方へと向かっていった。一分もしない内に悲鳴の出所であろう人だかりが見えてくる。ちょっと御免、と人だかりを掻き分け進んでいった夜明を迎えたのは。

燃え盛る炎を連想させる毛並み。人々の頭上で燦々と輝く日輪の如き瞳。上顎から伸びた、そこいらの短刀なんて目じゃないくらいに鋭い犬歯。

「……ガゥ（夜明、お早う）」

体長三メートルはあるサーベルタイガーが眠たげに目を細めながら片手を上げ、フラフラと危なっかしい足取りで歩み寄ってくる。

「…何でサーベルタイガーなんだよ」

勿論、夜明の問いに答えられる者は誰一人としていなかった。

「…月光。現状、何が起こってるのか簡潔に述べろ」

「俺の恋人達の身に不思議なことが起こりました」

本当に簡潔に述べた夜明に千冬は呆れた表情を作った。それは夜明の部屋に集まった一夏、箒も同じこと。だがまぁ、そういう風にしか言えないような状況なので、千冬は何も言わずに夜明の周りに集まっている、本来なら有り得ない毛の色を持った動物達に目を向け

る。

「この赤いサーベルタイガーが夕暮、黒いネコが凰、蒼い狸がオルコット、金の柴犬がデュノア、黒いウサギがボーデヴィッヒ、水色の狐が更識なんだな？」

「「「「「「ガゥ（ニャー）（キューン）（ワン）（…コクコク）（コーン）」」」」」」

「間違いないみたいです」

一つとして同じもののない動物大合唱。ライラに至っては声さえ出していない。と言うか、ライラなのかラウラなのか判断に困るところだ。夜明がライラだと言っているのだから、ライラで間違ってはいないだろう。動物達、改め恋人たちの人ならざる声を夜明は容易に訳してみせる。

「どうでもいいが、夜明は何で普通にあいつらと意志の疎通が出来てんだ？」

「愛のなせる業だろう」

一夏と箒が話していることが事実かは不明だが、夜明が普通に動物化した太陽達と話しているのは事実だ。その時、何ともいえない目で太陽達を見ていた千冬が口を開いた。

「しかし…ボーデヴィッヒのウサギは分からんでもない。凰も、デュノアも、更識もだ…しかし」

「…キューン！　（何故、私は狸なんですのぉー！）」

千冬の言葉を代弁するかのようなセシリアの悲痛な叫び。彼女自身、狸に変ったことがえらくお気に召さない様子だ。そこに鈴音と楯無が追い打ちをかける。

「ニャー」

「コーン」

二人の声を訳すと、

「「（ネタキャラだからでしょ）」」

セシリア、部屋の隅で丸くなっていじけてしまう。夜明、取りあえず鈴音と楯無を軽く叩き、不貞腐れてボールみたいになって寝ているセシリアを抱き上げた。

「はいはい、いじけないの」

「…キューン　（これはこれで役得ですわ）」

大人しく両腕の中で寝ようとするセシリアを撫でていると、シャルも自分も抱っこしてくれと足に擦り寄ってくる。続いて鈴音、楯無も。足下に三匹の動物がいて動けない夜明。ちなみに、太陽とライラが何をしていたかと言うと、

「「…くぁ」」

二人仲良く、大きく欠伸をしながら夜明のベットを占領して寝ている。氷河期最強の猛獣であるサーベルタイガー。大した力も無く、

獲物としての生を享受しているウサギ。その二匹が仲良く寝ている光景はかなり異様だ。

「…夕暮だけ、何故絶滅したはずの動物なのだ？」

「そんなの、太陽の凶暴性が露骨に表れただけでしょ」

千冬の疑問に夜明が答えたその時だ。

「「月光、後ろ後ろ」」

ドリフの志村よろしく、一夏と箒が夜明の後ろを指差す。振り返ってみればそこには…。

「グルルル…（そうか、私の凶暴性か）」

もっそい犬歯を剥き出しにして唸ってる太陽の姿があった。はっきり言おう、滅茶苦茶怖い。動物化した女性陣は夜明から離れて千冬の後ろに隠れ、一夏と箒も同じ行動をとる。だが、千冬の顔を青ざめさせて太陽を見ていた。

「あ、あの、太陽さん？」

「ガゥゥゥ（そうだよなぁ、私は凶暴だもんなぁ…だったら、凶暴な私がお前に襲い掛かってもなんらおかしな所はないよなぁ、夜明ぇぇぇぇぇ！！！！！）」

「ちょ、待て太陽！　今のお前が人を襲うと冗談抜きで洒落にならなあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

魂震わす咆哮をあげ、太陽は夜明に襲い掛かった。ガブリと太陽の牙が夜明の頭に食い込み、血が噴出して部屋の中は地獄絵図と化す。室内が鉄臭くなり、夜明が悲鳴を上げる中、腹を丸出しにして寝ているライラは流石と言える。

「ち、千冬姉、どうしよ？」

目の前、現在進行形で頭を丸齧りにされてる夜明を助けるべきか否か、一夏は姉に訊ねる。

「…いや、放っておいても大丈夫だろう。今のは月光が悪い。それに夕暮もちゃんと加減は心得ているだろう」

「それなんですけど千冬さん…あの…太陽、夜明のこと、味わってませんか？」

箒の疑問に、一夏と千冬は視線を襲われている夜明に向ける。銀髪の頭に噛み付いている太陽、さっきまでは漫画よろしくガジガジ口を動かしていたが、何故か動きを止めている。そして、夜明の味を味わうように口をモゴモゴさせ始めた。三人の背筋に奔る戦慄。

「「「こいつ、味わってる」」」

人間を。

「夕暮、それ以上はやめろ！！」

「そっから先は人が踏み込んじゃいけない領域だ！！」

「戻って来い！　そうじゃなきゃ一生戻って来れなくなるぞ！！」

数分後、どうにかして太陽から救出された夜明。

「ガゥ…（何だろうな。ついさっきまで人として踏み込んではいけない世界に肩までどっぷり浸かってたような気がする…）」

「そうかよ…姐さん、どうしましょ？」

頭を包帯でグルグルに巻いた夜明の問いに、千冬は腕組みをしながらため息をつく。

「どうするもこうするも、この状態で授業を受けろと言うのは無理な話だ。全員、公休扱いするしかあるまい。夜明、お前も公休だ。しっかりとこいつらの面倒を見てろ。こいつ等は何をしでかすか分からん」

どうせ、一日で元通りになるだろうしな。と残して、千冬は一夏と箒を連れて部屋から出て行った。

「千冬姉、何で太陽達が一日で元通りになるなんて分かるんだ？」

「天啓（作者からの電波）だ」

「「…」」

連載休止の報告

短編、及び活動報告にも書きましたが、ついさっき交通事故にあった兄が死にました。即死だったらしいです。

正直言って、実感がまるでありません。これがドッキリで実は兄が生きてるとか、もしかしたら夢なんじゃないかって思ったりもします。でも、現実なんですよね。

本題に入ります。タイトルにもありますが、少しの間だけ小説の連載を休止したいと思います。今は何と言うか、頭が混乱して何をすればいいのか分からない状態ですが、一日、二日後、確実に精神的に脆くなる日が来るはずです。その状態から立ち直るまで、少しだけ時間を下さい。手前勝手な理由ですみません。

もしかしたら、現実を認めたくなくてこのサイトに逃げ込んでくるかもしれません。その時は、叱ってくれるとありがたいです。八月の半ばまでには立ち直って見せます。それまでの間、少しだけさよならです。

本当に申し訳ありません。

にじファンよ、俺は帰って来たぁ！！（前書き）

ども、こんにちわ、サザンクロスです。

兄貴の通夜、告別式が終わりました。

取りあえず、俺は大丈夫です。両親は…大丈夫。俺と兄貴を育てた二人だから。

と言う訳で、少し早いですが復帰します。これからもこの駄作者をよろしく！！

本当なら動物化した太陽達の話を書くはずなのですが、一話だけ書かせてください。俺なりの、兄貴への手向けです。

この名場面を再現しよう。天元突破グレンラガンのシモン復活の場面。

配役は

シモン→太陽

カミナ→夜明

ロシュウ→一夏

アルマジロみたいな奴→オータム

にじファンよ、俺は帰って来たぁ！！

「オラオラ！　もう少しでコアが抜き出せるぜ！！」

「くっそ…！」

オータムが展開するＩＳ『アラクネ』の装甲脚に捕まり身動きのとれない一夏。白式のコアを抜き出そうとするオータムの手をどうにか押さえられているが、オータムの手がコアに届くのは時間の問題だろう。その時、顔に苦悶の表情を浮かべ歯を食い縛る一夏の耳に聞きなれた声が届いた。

『一夏！』

「太陽！？」

声の主を探し、一夏は周囲を見回す。彼が太陽の姿を見つけるよりも早く、次の声が耳朶をなでた。

『私もやるぞ！！』

「っ！　…あぁ！！」

笑みを浮かべ、一夏は渾身の力でオータムを吹き飛ばした。その瞬間、上空から急降下してきた漆黒の機影がオータムに突っ込んで強烈な飛び蹴りをぶちかます。

「んなぁ、深紅の死神か！？」

忌々しそうに己を蹴りつけてきた相手を睨むオータム。太陽は綺麗に後方宙返りを決め、そのまま腕を組んで空中に仁王立ちしてオータムを射抜くように見据える。

「夜明は死んだ、もういない…だけど！　この背に！」

蒼い翼のネックレスを握り締めた右手で心臓を叩く。

「この胸に！　一つになって生き続ける！！」

「あぁ！？」

己が放つ覇気で気圧されるオータムを無視し、太陽は天を貫くように右手を空に掲げた。

「翼を広げりゃ天翔る。例えへし折れても羽ばたき続けて、飛び続けたんなら、私の勝ち！！」

「はぁ、何言ってやがんだ！？」

「私を誰だと思っている。私は太陽だ、月光夜明じゃない…」

右手のライオンハート、左手のオールデリートを構え、一気にオータムへ肉薄する。

「私は私だ！　夕暮太陽だ！！！！」

「があああぁぁぁぁぁ！！！！！」

X字に振り下ろされた二振りのビームソードが直撃し、オータムは

錐揉みして吹っ飛んでいく。だが、すぐに体勢を立て直して太陽へ接近してきた。

「御託はいらねぇ！！　『アラクネ』！！」

オータムの声に応じるように装甲脚が太陽に向かって伸びる。先端が太陽を貫こうとするが、攻撃は二人の間に飛び込んできた一夏によって防がれた。

「今だ、やれ太陽！！　…太陽！！」

振り返れば、太陽は顔を俯かせて肩を小刻みに震わせている。一夏が大声で呼びかけるが、顔を上げる様子はない。

（夜明…）

コマ撮りの映像の様に何かが脳裏を駆け巡っている。それが夜明だと気づくのに時間はかからなかった。

笑ってた夜明、自信満々だった夜明、飄々としていた夜明、自由気ままだった夜明、誰かの支えになっていた夜明、怒っていた夜明、少しだけ情けない夜明、泣いていた夜明、戦っていた夜明、自分を導いてくれた…夜明。

暖かい何かが頬を滴り落ちる。このまま何もせずにへし折れたい、夜明に支えて欲しい。他にも様々な思いが胸に去来した。それでも、太陽はしっかりと顔を上げた。

夜明に依存しきっていた自分を、柳の枝のように折れやすくなった自分を、この世の何よりも弱くなってしまった自分を振り切る。今

までの自分を全て振り切るために。

「必殺…」

太陽の背にある背部ユニットが複数の自律兵器に分離した。両手に握るビームソードと合体させるわけではない。そのまま周囲に展開させ、スラッシュ・ファングの切っ先を、シュート・ドラグーンの銃口をオータムに向ける。

「あの技は…！」

「スターぁ、ライトおおお…フルバーストおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！」

一夏がオータムから離れた刹那、熱線の濁流がオータムを呑みこんだ。太陽の手に握られた、周囲に展開された武器から放たれた閃光はそのまま天を穿ち、徐々に収束していく。太陽は突き出すように構えていた両腕を下ろし、視線をあげた。そこには目が痛くなるくらいの蒼穹が広がっている。そして蒼空を見上げる太陽の目に…涙はなかった。

にじファンよ、俺は帰って来たぁ！！（後書き）

ニアがいないって突っ込みはなしで。自分はもう大丈夫なんで、気をつかわないでください。気を使われると、逆に変な感じになるんで。

追伸と言う名の質問。

一夏に似合っている動物を挙げてください。出来れば三匹ほど。

落ちがない！！（前書き）

特に落ちもなくさっくりと終わります。次は『千冬、銀河をくっつけろ』になります

落ちがない！！

「さって、姐さんから授業を休んでもいいっていう許可をいただいたが…どうしよっか？」

ＩＳ学園屋上。銀髪銀眼の持ち主、月光夜明は胡坐をかいた脚の中で眠っているネコになってしまった恋人、鈴音の顎を撫でながら考える。鈴音が気持ち良さそうに目を細めて喉を鳴らしているのを見ていると、金色の柴犬になったシャルが構ってくれと袖を銜えて引っ張ってきた。

「はいはい…そういや、太陽とライラの姿が見えないんだが、どっか行ったのか？」

「コーン（あの二人なら、動物の状態で世界がどんな風に見えるのかって言ってどっか行ったよ）」

「キューン（お二人とも、凄く楽しそうでしたわ）」

空いた手でシャルを撫でている夜明の疑問に答えたのは狐になった楯無、狸になったセシリア。二人とも、夜明の服に潜り込んで胸部分から顔を覗かせている。はっきり言って、息がしにくい上に暑苦しい。

「…二人とも、暑いから出てく「「（やだ）」」」…目線だけでこいつらの考えが分かる自分が恨めしい」

はぁ、とため息を吐きながら寝っ転がる夜明。

「ま、太陽がいるんだから滅多なことは起こらねぇだろ。俺達は…寝よう」

「「「「（はーい）」」」」

一方その頃。

「ガゥ（う～ん。やっぱり目線が低くなった状態で歩くのは新鮮だな、世界が新しく見える）」

「…（そうだな。俺の場合、お前の背中に乗ってるだけだけどな）」

校舎の廊下をのっしのっしと歩いているのは炎のような毛を持ったサーベルタイガーになった太陽、彼女の背中にちょこんと座っているのがライラだ。テコテコと移動しながら物珍しそうに視線を走らせている二人に、休み時間で廊下に出ていた一年生徒達は遠巻きに視線を送っている。千冬を経由して担任から話を聞いていたらしく大騒ぎは起こってないが、それでも皆怖そうだ。特に、太陽の口から覗いている二本の牙を見る目は、まるで猟奇的殺人鬼が持つ獲物を見るよう。

「ガゥ…（やはり視線が痛いな…）」

「…（まぁ、仕様がないだろ。サーベルタイガーなんて、今時どこの動物園に行ったって拝めないからな）」

今時じゃなくても見れないはずだ。そんなツッコミはさておき、遠巻きに二人を見ている一年生達の中から、歩み寄る剛の者が現れた。彼女の正体は…。

「ねぇねぇ、ゆうゆう」

「ガゥガ（のほほんか）」

「…（今の姿の太陽に何の恐れもなく歩み寄るとは…やはりこいつ、侮れねぇ…）」

のほほんこと布仏本音。彼女の図太さには太陽とライラ含む、この場にいる全員に戦慄を覚えさせた。周りがドン引きしてることなど

意に介さず、のほほん改め本音は太陽の前で立ち止まる。

「おぉ～、思ってるよりもゴワゴワしてるんだねぇ～。触ってもいい？」

「ガァ～ゥ（既に触っておきながら許可を求めるな…いいぞ）」

通じるはずもないか、頭を撫でてる本音に答えてから、太陽は苦笑いを示すように喉を鳴らす。勿論、太陽の声は人語ではない。なので、本音には伝わってないはずなのだが…。

「うん、ありがと～」

「「（んだとぉ）！！？？」」

本音は太陽の人ならざる声を的確に理解し、抱きついて頬ずりを始めた。

「ガゥ…（夜明しか理解できなかった私達の鳴き声を理解するなんて…）」

「…（のほほん、やはり侮れねぇ…って囲まれとるぅ！！）」

顔の間近に短刀のような牙があるにも拘わらず頬ずりを続ける本音に畏怖の念を抱いていると、何時の間にやら二人は囲まれていた。

「本音、何だか気持ち良さそう…」

「太陽、私も撫でさせてもらってもいい？」

「夕暮さん、その次は私に！」

「ガゥア！？　（え、ちょ、待てお前ら！　そんな一遍に来られたら）」

本音に続くように生徒達が太陽に群がっていく。制止の声をかけるも、動物になっている太陽の声が届くはずもない。一瞬、実力行使で彼女達をぶっ飛ばすという考えが浮かんだが、今の姿の太陽が暴れたら確実に死者が出る。故に、太陽は大した抵抗も見せられず、

「ガゥーッ！！　（あぁーっ！！）」

「…！　（太陽ぉぉぉぉぉ）！！」

生徒達に飲み込まれていった。唯一出来たことは、ライラを放り投げて逃がすことだけ。そんな太陽の行動も空しく、ライラも捕まってしまう。

「うわぁ、ふわふわしててぬいぐるみみたい！」

「私にも抱っこさせて！」

「…（助けてぇー、夜明ぇぇぇ！！）」

「ん？」

「ワゥ（どうしたの、夜明？）」

「いや、何か俺に助けを求める声が聞こえてきた気がするんだが…大して危ない事態ではないと判断し無視する」

「ニャー！…（何気に酷いわねあんた）」

「コーン（まぁいいじゃないの。ここはＩＳ学園、そんなに危険なことがしょっちゅう起こらないわ）」

「キューン（今はこの平穏を楽しみましょう）」

「っつう訳で」

「「「「「おやすみ～」」」」」

翌日、セシリア達は無事に人間に戻った。女子達にぬいぐるみ扱いされていた太陽とラウラ（途中で入れ替わった）も同様に元の姿に戻っている。

「あぁ～、豪い目にあった」

「お前なんかまだいいだろ。私なんてライラと入れ替わった瞬間、大勢の女子に抱き枕替わりにされてたんだぞ。もう何が何だかさっぱり」

廊下を歩いていきながら、二人揃ってため息を吐く。

「そう言えば太陽。何で私たちはあんな摩訶不思議な体験をしたんだ？」

ラウラの言う摩訶不思議な体験とは、勿論動物化したこと。あぁ、そのことか、と太陽は面倒そうに頭を掻きながら口を開く。

「未来から帰ってきてから、お前達のＩＳを色々と弄繰り回しただろ？　多分、その影響だな」

「ふぅん…って、そうなると、お前が動物化した原因が分からないんだが」

「パッケージを外したり、性能を落としたのは私だからな。だから、少なからず影響を受けてたんだろうさ…こりゃ、白式と紅椿の整備も見送らないとな」

今はとりあえず、夜明の下へと急ぐ二人だった。

落ちがない！！（後書き）

大した落ちもなく終わりました。次は千冬の話ですが、その前に原作六巻、七巻の予告をば。

予告！　と暇潰しに作った（前書き）

暇潰し。詳しくは後書きにて

予告！　と暇潰しに作った

原作六巻予告、始まり～

キャノンボール・ファスト。ＩＳによる高速バトルレース。本来なら世界規模の大会で行われるのだが、ここ、ＩＳ学園の場合は市の特別イベントとして開催される。勿論、一夏を筆頭とする一年生達も参加することになっているのだが、専用機持ちの女子達の関心は、専ら別のことに向いていた。

「あ、俺の誕生日？　一夏と同じだけど、それがどうかしたのか？」

「そう言えば昔は同じ日に誕生パーティーして、どっちが誕生日ケーキを早く食べられるかで競ったっけか」

恋人の誕生日をどう祝うかに、だ。

誕生日プレゼントを買う名目で夜明とデートに向かうシャルとセシリア。その影で、怪しい動きを見せる人影。

「ふ、フフフ。このプレゼントで夜明は私にメロメロ」

「まさかとは思うが、身体にリボンを巻いて『プレゼントは私だ！』とかやるつもりじゃないだろうな、ラウラ？」

「な、何で分かった太陽！？」

「えぇ～、ラウラちゃん私とやろうとしてたことまる被りじゃない」

「お前は黙ってろ女狐ぇ！！」

彼女達があほな事をやっている最中、一人黙々と訓練に励む者が一人。

「…まだまだ、こんなんじゃ駄目だ。もっと強くならないと」

「一夏…」

そしてキャノンボール・ファスト当日。

専用機『レイジングウィング』の機動力が余りにも出鱈目なため、キャノンボール・ファストに出場できなかった夜明は観客席で襲撃者の姿を視認する。

「ありゃＢＴ二号機『サイレント・ゼフィルス』！？　…いや、でもあの姿は…！」

迫る襲撃者。その姿、背に装備された大型バックパック。それから

突き出している十基の自律突撃機動ビーム兵器、ドラグーン。

「サイレント・ゼフィルスを雛形に、クルーゼのプロヴィデンスから得た情報を元に作られた第四世代型ＩＳ『レジェンド』」

襲撃者、Ｍは口角を吊り上げて笑う。更にその隣りには…。

「任務了解…『黄昏の斬撃者（エクシア・トワイライト）』、目標を駆逐する」

太陽の専用機『バルディッシュトワイライト』に酷似したＩＳを纏う者が。

続きまして、原作七巻予告、始まり～

「夜明、恋人としてのお願い。妹をお願い！」

「……はい？」

部屋にやって来た恋人、更識楯無にいきなり土下座をかまされ、月光夜明は目を丸くするしかなかった。

楯無の頼みとは、キャノンボール・ファストの亡国機業、及び謎のＩＳ襲撃事件を踏まえて行われる全学年合同のタッグマッチで妹と組んでくれというもの。

「強引に押し切られてしまった…まぁいい。とりあえず、楯無の妹がいるっていう四組に」

行ってみた。

「…ただいま～」

「おかえ…ってどうした夜明！　ぼろぼろじゃないか！？」

唯一人事情を知っている一夏。ボロボロになった夜明はため息混じりに事の顛末を話す。

「いや、何か知らないけど、顔合わせた瞬間、平手食らわされて頭突きかまされて挙句の果てにバックドロップ決められた」

「…お前何したんだ？」

「こっちが聞きてぇよちきしょーっっっ！！！」

夜明の怒号が響く中、夜明に流れるような三連コンボをかました更識簪はと言うと。

「……（ボン）！！」

顔を真っ赤にさせて、頭から煙を噴いてた。それもそのはず、彼女は月光夜明に一目惚れしてるのだから。その話はいつか書く…かも。

何やかんやでペアになっちゃった夜明と簪。様々なアクシデントを乗り越えたり乗り越えられなかったりしてタッグマッチ当日。

『全員、戦闘態勢に入れ！！　何か来るぞ！』

太陽の裂帛の声が聞こえた瞬間、アリーナ中に衝撃が走った。

襲撃機の数は十三。それぞれが苦戦を強いられる中、楯無は簪を護り倒れる。

「いないんだよ、ヒーローなんていないんだよお姉ちゃん！」

「そうかなぁ…少なくとも、お姉ちゃんは一人知ってるよ？」

何度折られても、決して屈することなく立ち上がる不屈のヒーローを。

「ヒーローなんて大したもんじゃんねぇさ…俺はただ！　俺が俺であるために立っているだけだ！！」

「白式ぃ！！　世界を救えとは言わない、視界に映った人全てを助けろとも言わない！　ただ、お前が俺の相棒であるというのなら、仲間くらい救ってみせろぉぉぉぉ！！！！！！！」

『レイヴン！　ウルフ！　タイガー！』

白式世代移行（ジェネレーション・シフト）、第五世代型白式『白騎士』ここに降臨。

乞うご期待…出来ないか。

予告！　と暇潰しに作った（後書き）

太陽「よし。こんなものだな」

夜明「待てこら」

太陽「ん、どうした夜明？」

夜明「どうしたもこうしたもあるか！　何だ上のあれ！？」

太陽「上？　…あぁ、『レイヴン！　ウルフ！　タイガー！』のことか。あれは第五世代型に進化した白式『白騎士』、通称レヴルガーだ」

夜明「訳分かんねぇよ！　何だよレヴルガーって！」

太陽「何か、作者がオーズ風にしたかったみたいだ。それで、これになった」

夜明「いや、それにしたって無理あるぞ！　鴉、狼、虎って…。百歩譲って狼と虎が哺乳類、四足歩行って共通点があったとしても、鴉に共通点なんかないぞ！」

太陽「ところがどっこい、あっちゃうんだなぁ」

夜明「何！？」

太陽「白鴉、白狼、白虎。この三匹、頭に白をつけてもちゃんとした言葉になるんだ」

夜明「…確かに」

太陽「ま、それ以外に共通点なんかないがな。正直、作者もこれをマジでやるのか、それともネタとしてやるのか悩んでいるらしい」

夜明「ま、そこは皆さんの反応で判断しよう…ところで、前書きの暇潰しって何だ？」

太陽「これだ。ババン！！」

月光夜明、夕暮太陽のＦａｔｅ風ステータス。

太陽「それじゃ、先ずは夜明からだ」

夜明「いきなり！？」

クラス、メサイア（救世主）

真名、月光夜明

性別、男

属性、秩序　善

能力

筋力、Ｂ＋　魔力、Ｂ－　耐久、ＥＸ　幸運、Ｂ　敏捷、ＥＸ＋
宝具、ＥＸ

保有スキル

不屈、ＥＸ

何度折られても立ち上がり続ける不屈の精神。身体を吹き飛ばされようが、どれ程高威力の攻撃を受けようが魔力を枯渇させない限り止まることはない。

宝具

『この胸には不屈の心（レイジングハートエクセリオン）』

ランク、ＥＸ　種別、対人宝具　レンジ、－　最大捕捉、－
折れず、屈せず、立ち上がり続ける不屈の心。浴びた光を全て魔力に変換する。尚、使いすぎると身体が耐えられなくなる。

『不屈の翼（レイジングウィング）』

ランク、ＥＸ　種別、対人宝具　レンジ、－　最大捕捉、－
蒼銀に輝く二対の光り輝く翼。発動中、夜明はサーヴァント史上最速の動きを得る。

太陽「こんな感じだな」

夜明「中々凄いな。特にＥＸ＋って…」

太陽「さて。次は私だな」

クラス、ラバーズ（恋人）

真名、夕暮太陽

性別、女

属性、混沌　善

能力

筋力、Ａ　魔力、Ｂ　耐久、Ａ　幸運、ＥＸ　敏捷、Ｂ－　宝具、ＥＸ

保有スキル

漢、ＥＸ

性別問わず人を（人間的に）惚れさせ、心酔させる力。カリスマの頂点。

宝具

『最愛の人に全てを（デスサイズスイッチ）』

ランク、ＥＸ　種別、対人宝具　レンジ、－　最大捕捉、－
太陽を覚醒させるための宝具。発動条件は想い人（夜明）のキス。

夜明「…何か、思ったよりもぶっ飛んでないな」

太陽「ところがどっこい。これが私の真の力じゃないんだな」

夜明「マジで？」

太陽「宝具を見れば分かるだろ」

夜明「あぁ、あの発動条件があれなあれね。どうでもいいけどこれ、名前とルビが果てしなく噛み合ってねぇ…」

太陽「これが私の本当の戦闘能力だ」

クラス、デスサイズ（死神）

真名、夕暮太陽

性別、女

属性、混沌　善

能力

筋力、ＥＸ＋　魔力、ＥＸ＋　耐久、ＥＸ＋　幸運、ＥＸ＋　敏捷、ＥＸ　宝具、ＥＸ＋

保有スキル

なし（と言うか必要ない）

宝具

『黄昏に染まる世界は我（ワールド・オブ・トワイライト）』

ランク、ＥＸ＋　種別、ｌ　レンジ、ー　最大捕捉、ー

一応、種類的には固有結界。だが世界を変えるのではなく、新しく世界を創造する。この世に存在している宝具（既に無い物も含む）全てを内包し、尚且つ無限に創り続ける。内包されている宝具は全てオリジナル以上の力を有している。宝具を射出することで、ギルガメッシュも涙目のワンサイドゲームを展開できる。

『黄昏の黒斧（バルディッシュトワイライト）』

ランク、ＥＸ＋　種別、対界宝具　レンジ、∞　最大捕捉、一～∞

『黄昏に染まる世界は我（ワールド・オブ・トワイライト）』で創り上げた世界を凝縮した剣。バルディッシュとあるが、形は大剣。一つの世界が籠められているため、威力は天地乖離す開闢（エヌマ・エリシュ）の星さえも軽々と上回る。

夜明「……何だよ、ＥＸ＋って」

太陽「恋する乙女はそれだけ強いということさ。では皆さん、次回の『千冬、銀河をくっつけろ大作戦』でお会いしよう！」

夜明「おい！　そんなあっさりと終わらせるなぁぁぁぁ！！！！！！」

世界最強、でも純情女の恋模様（前編）

「…はぁ」

昼休み時、ため息一つ零れた。ＩＳ学園一年一組担任、そして元世界最強織斑千冬（ブリュンヒルデ）はコーヒーカップ片手にため息を漏らす。ため息などとは無縁のこの女性が嘆息したのだ。隣りの席に座って仕事をしていた、同じクラスの副担任山田真耶は手を止めて千冬を見る。

「どうかしたんですか織斑先生？　ため息なんて吐いて」

「ん？　…あぁ、すまない、気を遣わせてしまったか。何、ちょっとした悩み事さ」

「え？　織斑先生が悩み事ですか？」

「…普段君はどんな目で私を見ているんだ？　私だって悩みの一つや二つくらいあるさ」

す、すみません、と萎縮してしまった真耶を半目で見ながら、千冬はもう一度大きく息を吐き出す。やれ世界最強（ブリュンヒルデ）だやれ千冬様と呼ばれている彼女であっても所詮は人間、悩みの一つや二つ当たり前にあるだろう。

「そ、それで、悩みと言うのは？」

気になるのか、真耶は書類仕事をしていた手を止めたまま千冬に視線を向けていた。同僚として仕事をしろと言ってやりたいところだが、悩みがあると打ち明けたのは自分なんだから、ここは話すべき

だろうと千冬はカップを置いて真耶を見る。

「真耶、単刀直入に聞くから正直に答えてくれ…私は行き遅れているのだろうか？」

ドンガラガッシャーン！！　と凄い音が職員室中に響き渡った。各々の仕事をしていた教員達が何事かと音源に視線を向けると、そこには椅子ごと引っくり返る真耶とびっくりした表情を浮かべている千冬の姿が。大丈夫、とジェスチャーして教員達の注意を仕事に戻させ、真耶はぶつけた後頭部を押さえながら千冬を見やる。

「な、何で自分のことを行き遅れだと思うんですか？　織斑先生まだ二十四歳じゃないですか」

その歳で行き遅れとはこれ如何に？　言外にそう言う真耶だが、千冬の悩みは結構深刻なもののようだ。

「そうは言ってもな、私の場合周りが」

「周り？　でも先生の中で恋人がいる人ってそんなにいな…あぁ、そういうことですか」

同僚達のそんな浮ついた話を聞いていない真耶は首を傾げるが、すぐに合点がいったように手を打つ。

「織斑君と月光君ですね」

まさしくその通り。千冬にとって同僚以上に近い人間など、家族の一夏と家族同然に過ごしてきた夜明しかいない。千冬は真耶の答えを肯定するようにため息を吐きながら組んだ両手を額に当てる。

「一夏は将来を誓った恋人持ち。夜明に至っては一夫多妻状態…私だけだぞ、春が来てないのは…」

呟くなり、千冬は普段の凛然とした様子からは想像も出来ないような黒いオーラを放つ。いつもなら絶対にお目にかかれない千冬の姿にどうしていいか分からず、真耶はパタパタと両手を振る。

「あ、いや、でも、そんな悲観することもないんじゃないですか？　恋人ってそんな無理して作るものじゃないですし、キチンと好きになった人じゃないと」

「好きになった相手、なぁ…」

好きな相手。その言葉で思いつく人間は一人しかいない。

『月光銀河』。月光夜明の義兄にして織斑千冬初恋の相手。高校時代から募らせている恋心。どこぞの恋愛小説みたいで、知らず千冬は頬を赤らめていた。だがこの相手、一筋縄どころか、ありとあらゆる手段を用いても陥落できそうにない。夜明の義兄ということもあってか鈍さは筋金入り。高校二年生の頃、千冬決死の告白をドッキリ、罰ゲームと判断した鈍感さは伊達じゃない。

「…真耶」

「何でしょうか？」

「もし、もしだぞ。私の好きな相手が一夏や夜明以上に、自分に向けられた好意に鈍かった場合、私はどうすればいいと思う？」

山田真耶、暫し沈黙を貫いて思考中。導き出された答えは…。

「…強硬手段に出るか、諦める以外に道はないと思います」

自分自身で選んだ道とはいえ、道程のなんと険しいことか。どうしても自分と恋人になっている銀河の姿が想像できず、千冬は頭を抱えて机に突っ伏してしまった。

「…！　…誰かが私の噂をしているな」

場面は変って月光家。縁側に座って昼寝をしていた銀河は急に発したクシャミを無言で放つ。

「お前は…何の声も出さないでクシャミをする人間なんて見たことないぞ」

呆れたような表情を作りながら再び寝ようとする銀河の横に腰を下ろしたのは月光夜雲、夜明、銀河の義兄だ。

「夜雲兄上…」

「兄上、じゃねぇっつぅの。銀河、お前いい加減身を固めろよ。あの夜明でさえ恋人が六人も出来たんだぞ。月光家でそういう相手がいないの、今やお前だけだぞ」

「兄上が夜桜姉上と結婚してるから、夜明に恋人ができたからといって私が恋人を作る理由にはならぬはず。何より相手がいない」

本気で顔に呆れを浮かべる夜雲。千冬と交友がある夜雲にとって、その言葉は義弟の鈍さを如実に表すものだった。

「相手がいないって…千冬ちゃんはどうなるんだよ?」

「…何故、そこで千冬が出てくるのですか?」

「それを真顔で、しかも本気で言えるお前って本当に凄ぇと思うよ…夜明も筋金入りのニブチンだが、お前は更にその上を行くな」

色々と紆余曲折はあったが、夜明は夜明で自分に好意を向けてくれ

る女性達にキチンと答えを示した。だが銀河は何年も親交がある千冬の好意に答えるどころか気付いてさえいない。この差は途轍もなく大きい。

「私が夜明よりも鈍い？」

銀河にとって、義兄の台詞は聞き捨てならないものだったようだ。数秒ほど夜雲の台詞を頭の中で租借、反芻し、そして。

「…ガハ！」

血を吐いて崩れ落ちた。

「おいおい。夜明よりも鈍いってのがそこまでショックだったのか？　…って、のんびりしてる場合じゃなかった。お～い、誰でもいいから医者呼んできてくれ～」

…月光家は今日もまた愉快だった。

「…と、こんなことを織斑先生が言ってたんですけど、どう思いますか？」

「どうと言われても…」

「相手が銀河さんじゃ絶望的ですね」

放課後、偶々屋上で夜明達を見つけた真耶は昼休みに千冬と交わした会話のことを聞かせた。どうと言われても、相手はあの銀河なのだ。銀河のことをよく知らないセシリア達ならともかく、一夏と太陽の返答はどれも芳しくなかった。

「ねぇねぇ。夜明のお義兄さんの…銀河さんだっけ？　そんなに鈍いの？」

「うん。僕達も一回会っただけだから詳しくは知らないけど、夜明に鈍いって言わせるくらいだから」

小声で訊ねてくる楯無にシャルは同じように小声で返答する。頭をバリバリと掻きながら、太陽は何とも言えない表情である方向に視

線を向けた。

「ま、どうにか出来そうな人が二人ほどいますが…」

紅蓮の如き瞳が見据える先には…。

「流派！　東方不敗は！」

「王者の風よ！」

「全新！」

「系列！」

「「天破侠乱！　見よ！　東方は赤く燃えている！！！！！」」

頭にウサ耳を装備したバカと銀髪銀眼のアフォが綺麗にポーズを決めていた。夕陽に向かって。

「夜明、そして束さん…。それをやるんならせめて束を向いてやれ。そっちは西だぞ」

呆れを隠そうともしない太陽の声に、ポーズをとっていた二人は固まる。そして体勢を戻しながら、ジト目を太陽に送った。

「太陽、それは言わない約束だろうが。と、夜明は目の前の赤髪に悪態をついてみせます」

「だからようちゃんは可愛い気がないんだよ～、と束は束は意地悪を言ってみたり！」

「ほぅ…」

※暫くお待ちください※

「「マジですみませんでした」」

「分かればよろしい。それにな、私は可愛い気なんていらない。漢気こそ、私が求めているものだ」

ボロボロの姿で土下座する二人を見下ろす太陽。彼女の背に、一夏達が漢の一文字を見ているのは何時ものことだ。

「それで、姐さんと銀河兄貴をくっつけるって？」

「大変だと思うよそれ。ちーちゃんは色恋沙汰に素直じゃないし、何よりぎんくんが鈍すぎるし」

あんなアホなことをやっていながらこの二人、しっかりと話を聞いていたらしい。どんなに馬鹿なことをやっていても、やはり侮れぬ二人だった。

「ま、俺と師匠で二人をくっつけるとしますか」

「そだね！　束さんとよっくんで二人の愛をプロデュース！！」

イェーイ、と楽しそうにハイタッチを交わす二人に戦慄を覚えずにはいられない太陽達。この二人、とにかく相性が良すぎる。それも、どちらも抑え役じゃない。二人してアクセルの役割を担っている。メーターが振り切れても加速し続け、この世の全てを振り切ってし

まうのが篠ノ之束、そして月光夜明だ。この二人が本気を出したら…。早速、額を突きあわせて話し合いを始めた二人に真耶を除く全員は不安を覚えずにはいられなかった。

「それでは！　『鉄血の純情女と天元突破の鈍感野郎をくっつけろ大作戦』を開始する！！」

「いえぇぇぇぇぇぇぇいっっっっ！！！！！！！！！！！！！」

「「「「「「「「「い、いぇーい…」」」」」」」」」

どれが誰のものか、言わずとも分かるはず。

「…何でこうなった？」

元世界最強（ブリュンヒルデ）、織斑千冬は現状を確認、と言うか容認できずにそんなことを呟いていた。現実を認められずに呆然としている彼女の横には、

「宿は…あっちか。では行こうか、千冬」

自分、千冬の荷物を肩に担いでいる銀河の姿が…。この状況を説明するためには昨日まで遡る必要がある。

「『一泊二日、京都旅行券』だと？」

「あぁ。箒と一緒に買い物行った時、福引で当たったんだよ。それで、千冬姉にあげようかな～なんて」

土曜日、時刻は既に夜だ。仕事を終えた千冬が自身の部屋でのんびりしようとすると、来客が現れた。弟の一夏だ。こんな時間にどうした？　という姉の問いに、一夏は二枚のチケットを取り出しながら答える。

「旅行か…それならお前が行けばいいだろう。二枚あるのだから、篠ノ之と行けばいいだろうが」

「いや、俺と箒は既に予定が入ってるし」

その予定が何なのかはある程度予想はついたが、あえて千冬は突っ込まなかった。軽く痛み出した頭を押さえながらため息を吐くに留める。

「…もうお前の恋路にとやかく言う心算はないが、学生として最低限のことは守れよ」

「大丈夫。そこはキチンとしてるから」

限りなく信用できないが、一先ずは弟を信じることにし千冬は口を

閉じて黙考を始める。チケットは二枚、折角なのだからもう一人誘って京都に行きたいところだ。

（やはり、ここは真耶を誘っていくか）

担任クラスである一年一組の副担任であり、親交もある山田真耶を誘うことに。考えが決まったのならば彼女の行動は速い。最低限の身支度を整え、真耶の部屋へと向かう。その道中、ことは起こった。

「それにしても、一夏はどこでこんな物を手に入れたんだ？　この近くで福引をやっているなんて噂は聞いていないが…ん？　っ！？　あ、あれは！？」

突如、千冬の心拍数が跳ね上がる。顔を紅潮させる彼女の視線の先には。

「華屋の和菓子詰め合わせ、しかと届けたぞ」

「おう。悪いなこんなこと頼んじゃって。何か知らないけど、いきなり美味い饅頭やら羊羹やらが食いたくなって」

照れくさそうに頭を掻いている銀髪銀眼の月光夜明。そして夜明に大き目の袋を手渡している千冬の想い人、月光銀河がいた。自分を訪ねてきたわけでもないのに動揺を隠し切れない元世界最強。とりあえず、逃走を図ろうとするも。

「あり？　何してるんですか姐さん？」

目敏く千冬を見つけた夜明に声をかけられてしまう。反対方向に進もうとしていた足を止めて振り返ると、当然と言うべきか夜明と銀

河がしっかりと千冬を見ていた。ここで逃走するのは余りにも不自然なので、千冬は顔が赤くなっているのを悟られないようにしながら二人に歩み寄る。

「夜明、こんな時間に何をやっているんだ？　そして銀河、何故お前がここにいる？　ＩＳ学園は基本的に部外者の立ち入りを禁止しているはずだぞ」

好きな人を前にして、こんな色気のないことを話せる辺り、彼女がどれだけ恋愛ごとに疎いか窺える。千冬の微妙に刺々しい物言いに気を悪くする様子もなく、銀河は頭を掻いている夜明を指で示した。

「どういう訳かは知らぬが、夜明が美味い和菓子を食べたいと連絡してきてな。それで月光市の和菓子を買ってきた言うわけだ」

「…一応、聞くが警備の者達はどうした？」

「私に気付いていなかったぞ。たった一人の男の侵入すら気付かぬとは、ここの警備も存外ザルだな…ここに身内を預ける者として、些かの不安を覚えたぞ」

そんな事あるものか。ここ、ＩＳ学園は曲がりなりにも『ＩＳ』という兵器に乗る人間を育成する機関なのだ。警備のレベルはアメリカのホワイトハウスと比べたって遜色はないだろう。その警備をザルと言わしめる男、月光銀河。彼の身体能力は初代ブリュンヒルデになった千冬さえも大きく凌駕しているだろう。

「ま、ＩＳ学園の警備レベルは置いといて、姐さんは何しに行くんで？」

「あ、あぁ。一夏に京都一泊二日のチケットをもらってな。それで誰かを誘おうかと思っていたところなのだが…」

そこまで言って言葉を切り、千冬は一瞬銀河を見た。彼女の視線に気付いてるのか気付いてないのか（確実に気付いていない）、銀河は相変わらず涼しい表情を保っている。

「（このニブチン兄貴が…）なら、銀河兄貴でも誘ったらどうですか？　どうせ、夜雲兄貴を諌めること以外やることないだろうし」

「な…！？」

夜明の発言に千冬は彫像よろしく凍りつく。一方の銀河は。

「別に構わぬが…しかし、男女が共に旅をするというのは余りよろしくないのではないか？」

相変わらずの冷静さ。どこまでいってもぶれない、そして鈍い義兄の姿に夜明は呆れ果てる。

（（（（（（（お前が呆れるな！）））））））

何やら六人分の乙女電波が飛んできたが無視する。義兄の考えていることを一蹴するように夜明は笑って千冬に視線を向けた。

「いやいや。銀河兄貴や姐さんに限ってそんなことは起こらねぇだろ。なぁ、姐さん」

「あ、あぁ」

ここで返事をしてしまったのが千冬のターニングポイント。そして冒頭に戻る。

「ここが我らが泊まる宿のようだな」

「あぁ。何と言うか、言いようのない雰囲気を感じるな」

そんなこんなで、あれよあれよと言う間にやって来てしまった京都。周囲が加速してあっという間に時が過ぎてしまったような感覚を覚

える千冬だったが、来てしまったものはどうしようもないので旅行を楽しむことに。銀河は…相変わらずだ。二人の前には宿『仮面の家』がある。言いようのない、でもどこか覚えのある雰囲気に首を傾げている千冬を連れ、銀河は玄関を潜った。

「いらっしゃいませー。『仮面の家』にようこ頭蓋がメキメキってぇぇぇ！！！！」

「お前だったかこのくされウサ耳…！」

二人を出迎えた、ウサギのお面をつけた女主人（と言うか、どっからどう見ても束）の頭を握り潰そうとする千冬。この宿全体から放たれる何ともいえない、でもどこか覚えのある雰囲気は彼女のものだったようだ。千冬の手の中でメキメキと悲惨な交響曲が奏でられる中、束がつけているお面には罅一つ入らない。恐ろしい強度だ。

「落ち着け、千冬。相手が束や夜明のような人外ならともかく、一般人にその攻撃はきついぞ」

「離してくれ銀河。私は一度、こいつと本気で語り合わなければならない…というか、気付かないのかお前！？」

何にだ？　本気で聞き返してくる銀河に疲れた表情を浮かべ、千冬は束に視線を向ける。

「それでどういう心算なんだ、束？」

「私はラブリープリチーな天才美少女博士、束ちゃんなどではありまセーン。私はここの主人、通称『ウサちゃん二号』デース」

「何だ二号って!?　お前まさか、ここの宿の人たちに何かしたんじゃないだろうな!?　それ以前に私は博士とは一言も言ってないぞ!」

「お荷物、お預かりしマース」

「人の話を聞かんか貴様…」

千冬の言葉を無視して銀河から荷物を受け取るウサちゃん二号、もとい束。拳を震わせている千冬の怒りは絶賛上昇中。隣りで銀河が抑えていなければ、すぐにでも束に飛び掛っているだろう。

「それでは部屋に案内させていただきマース。ヘーイ、カモーン!」

束の呼び声に応じ、奥から二人の従業員が出てきた。男と女、仮面こそつけているが、働くには些か早すぎる年齢の二人…。

「この二人が荷物をお持ちシマース」

「む、そうか。では頼む…何をしているんだ、千冬?」

「気にするな。少し確認したいことが」

銀河の問いを受け流しながら千冬は携帯を操作する。操作を終えて数秒としない内に、従業員の男の方から電子音が聞こえてきた。

「あ、すみません。俺のけいた「一夏…お前こんな所で何をしているんだ?」あ、やばぶるがぁ!!」

ユラリ、なんて擬音が聞こえそうな空気を纏いながら拳を鳴らす。

墓穴を掘ったことに気付き、男の従業員は狼狽するが、それよりも速く女の従業員が男に肘鉄を喰らわせて気絶させた。

「あ、すみません。相方の気分が悪くなってしまったようなので、少し下がらせてもらいます。荷物は責任を持って運びますので、部屋に行っててください　（何をしているんだ一夏！）」

相棒を担ぎ、反対の手で荷物を運ぶ女の従業員は十中八九箒だろう。

「貴様まで何をしている篠ノ之！　えぇい、離さないかこのくされウサ耳！！」

二人を追いかけようとする千冬を束は羽交い絞めにする。

「彼女達は当宿の夫婦従業員、トーマス・イチロウ（４１）、通称デイブとエリザベート・カズコ（４２）、通称ベッキーでース。いっくんや箒ちゃんなどではありまセーン」

「黙れ！　人種年齢性別全てにおいてダブルで嘘をつくな！！　それにその名でその通称はおかしいだろうが！！　私はいっくんや箒ちゃんなんて一言も言ってないし、そして何より私は結婚を認めた覚えはないぞぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！」

「いや、そうでもなかろう。通称なんてつけようと思えばどんな物でもつけられるし、気がつけば出来ちゃった結婚なんてのもザラだからな」

「…銀河。だとしても、少しはおかしいと思ってくれ」

疲れ切った表情を浮かべながら千冬は、何故自分はこんな摩訶不思

議人間を好きになってしまったのかを小一時間ほど自問自答し続けた。

「それではごゆっくりドーゾ」

ウサちゃん二号、改め束は二人を部屋に案内するとさっさと消えた。
必然、部屋の中は千冬と銀河の二人きりになる。

（束、一夏と篠ノ之がいるということは十中八九、夜明や夕暮達もこの件に拘わっているのだろうな…お前達は何がしたいんだ!?）

こう考える辺り、彼女も相当な鈍感なのかもしれない。とまぁ、こんなことを考えていても意中の相手と旅館の部屋で二人きり、頬が紅潮するのも仕方ないだろう。チラリと視線を向けてみれば、銀河は自身で淹れた茶をゆっくりと飲んでいた。

「…こいつとは間違いなんて、天地が引っくり返っても起こらないだろうな」

安心するべきなのか、それとも悲しむべきなのか？　軽く千冬が泣きたくなっていると、不意に銀河が湯呑みを机の上に置き、鋭い視線を天井に向けた。

「…降りて来い。覗き見は感心せんぞ」

銀河の言葉に千冬が天井を見上げると、天井の一部が外れて何者かが降りてきた。驚きながらも構える千冬と落ち着き払った銀河の前で、降りてきた人影はゆっくりと立ち上がる。

「あはは、気付いてらしたんですか。こりゃ想像以上の凄腕ね…初

めまして、私は女狐太夫。お二人の案内を任された者です」

そう言って頭を下げたのは狐の仮面をつけた、水色の着物を着た女性…と言うか、

「…更識、お前まで何をやっているんだ？」

「はっはっは、何のことか分かりませんね。更識って誰ですか？借りに私が更識だとしても、女狐太夫と言う名の更識です」

「何を言ってるんだお前は…」

もう突っ込む気力が失せた千冬は疲れたように座り込んだ。そんな千冬を楽しげに見てから、女狐太夫、もとい楯無は銀河に視線を移す。

「どうしますか？　お望みであればすぐに京都をご案内しますが？」

楯無の問いに少しだけ考え、銀河は首を横に振った。

「いや。私も千冬も長旅で疲れている。少し休んでから案内を頼むとしよう」

一時間後、楯無に連れられた二人は京都の町へと繰り出した。

「ここが『清水の舞台から飛び降りる』で有名な清水寺で～す」

楽しげな楯無の声が清水寺に響き渡る。観光客のほとんど全員が、狐面に着物と言う変人じみた姿をしている楯無に視線を向けていた。それが普通の反応なのだが、銀河は最初から楯無の格好に一切の突込みを入れずに京都を楽しんでいた。千冬も突っ込むことは無駄だと考え、素直に京都を観光している。

「清水の舞台から飛び降りるか…しかし、ここから飛び下りるのにそこまで覚悟がいるとは思えないのだがな」

本堂の柵から下を覗き込みながら呟く。それはお前人外だからだろうが、と突っ込みを入れかける千冬だったが、自分もここから飛び下りて死ぬとは思えないので、黙っていた。

「そうなんですよね～。実際、ここから飛び下りても死ぬことって少ないんですよね。生存確率約八十五パーセントですし」

格好はふざけているが、与えられた仕事はしっかりとやっている辺り流石楯無といえる。妙なところで千冬が感心していたその時、清水の舞台に裂帛の悲鳴が木霊した。その場にいた全員が何事かと悲鳴の発生源を見やる。そこでは、

「アーハッハッハ！　この清水寺は私たちが占拠したわー！」

「これで清水の景色は私たち二人だけの物ですわー！」

鉄製の杖をもった鈴音、ガチ仕様のライフルを構えたセシリアがノッリノリで子供を人質にして馬鹿なことをやっていた。束達同様に二人とも猫と狸のお面をつけていたが、千冬には二人が誰なのか一瞬でわかった。

「…頼む、誰でもいいから状況を説明してくれ」

懇願するように千冬の唇から漏れた言葉に誰かが応じてくれるわけもなく、更に事態は加速していく。

「待てぃ！！」

更に聞きなれた声。自分をピンポイントで狙撃してくるような追い打ちに千冬の頭痛はクレシェンドしていく。声のした屋根の上を見ると、そこには二人の人影が背中合わせに佇んでいた。

「天呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ！　悪逆倒せと我等を呼ぶ！」

「た、助けを求める声あらば即参上！」

とう！　と気合の入った掛け声を出しながら屋根から飛び下りる二人。

「切り札仮面！」

「し、疾風仮面！」

「「観光客の安全を護るため、唯今参上！！」

着地するや、シャキーンと決めポーズ。片方は『切り札』と書かれた紙を顔に貼り付けた銀髪の少女、もう一人は同じように『疾風』の紙をくっつけた金髪の少女…というか、どっからどう見てもラウラとシャルだ。

「ボーデヴィッヒ、何故お前はそこまで変ってしまったのだ？　デュノアは…まだ救いようがあるか。というかキョンシーかお前達は」

千冬はかつての教え子の変わり果てた姿に涙を流さずにはいられなかった。シャルはシャルで、この茶番を演じることに多少の恥ずかしさを感じているようなのでまだ救いようはあるように思える。千冬の思っていることなど関係ないと言わんばかりに茶番劇は進んでいく。

「やい、貴様ら！　いくらこの素晴らしい景色を独占したいからといって、観光客の子供を人質にするなど言語道断！　（さぁ行くぞシャルロット！　ヒーロータイムの始まりだ！）」

「ぼ、僕達が成敗してくれよう！　（で、でもやっぱり恥ずかしいよこれ！）」

そう思いながらもしっかりと付き合う辺り、やはりシャルは優しい子だ。ズビシ！　と指を突きつけてくるラウラに鈴音とセシリアは怒りを露にする。

「何～、私たちに勝負を挑むとは生意気な！　（行くわよセシリア！）」

「返り討ちにしてさしあげますわ！　（清水の舞台、存分に舞わせていただきますわ！）」

戦闘を始める四人。四人全員が代表候補生ということもあり、戦闘のレベルはそれなりに高い。最初は戸惑っていた観光客達も、次第にこの茶番劇に引き込まれていった。

「これは…ヒーローショーか何かか？」

「そうであってくれればどれだけ気が楽か…」

怪訝そうな顔をする銀河の横、千冬は頭痛に続き襲い掛かってきた胃痛に苦しんでいた。そうこうしてる間に戦闘は続き、状況は徐々にラウラ・シャルペアに傾いていた。強烈な一撃をもらい、鈴音とセシリアは追い込まれる。

「くっ、強い！　私たちじゃ勝てないわね」

「忘れないことですわ、ここで貴方方が勝ったとしても、第二第三の私たちが現れ清水の舞台を」

「どこの魔王だ貴様らは！　次で決めるぞ疾風の！」

「え、疾風のって…僕か！　わ、分かった！」

最後まで言わせず、二人は呼吸をぴったりと合わせて高々とジャンプし、

「「ジョーカーエクストリーム！！」」

「…何故そこだけ英語？」

身体が二つに分裂！　…は流石にせず、千冬の突っ込みと同時に普通の飛び蹴りが決まった。覚えてろー！　と悪役のような台詞を残しながら二人は鈴音とセシリアは星になる。華麗に着地した二人に、観光客たちの拍手が送られた。と、その時！

「安心するのは」

「少しばかり早いぞ、観光客共！」

「まだ終わらないのか！？」

未だ終わらない茶番劇。いい加減、これ以上辛労を増やさないでくれと祈りながら声のほうを向く千冬。彼女の視界に映ったのは、

「清水の舞台はこの俺、ＧＥＫＫＯＵと！」

「ＳＩＮＩＧＡＭＩが貰い受ける！」

月の仮面をつけた夜明、髑髏の仮面をつけた太陽がいた。

「ほう、二段構えとは悪役もやるな…そして千冬、何を飛び下りようとしている？」

「離してくれ銀河！　教え子が奇行に走る世の中なんて私は生きていたくない！！」

何故か感心したような表情を浮かべながら、全力で清水の舞台から飛び下りようとしている千冬を止める銀河。

「む、貴様らは！」

「ハッハッハ！　清水の舞台から観光客を片っ端から叩き落し、怪我人を続出させてやる！」

「な、何だってー！？　そんなことをしたら、観光客が激減してしまう！」

「そ、そんなことはさせないぞー！」

「ならば、我等を止めて見せろ！！」

再び始まる茶番と言う名の戦闘。が、地力の差もありラウラとシャルは一瞬で敗れてしまう。

「ぐはぁ！　…こ、このままでは清水寺が、京都が危ない！　誰か、私たちに替わってこいつらを止めてくれ！！」

「さ、お二人の出番ですよ」

「む？」

「な！？」

ラウラの叫びが木霊した時、何時の間にか消えていた楯無が銀河と千冬の背を押した。一歩踏み出してきた二人に夜明と太陽は構えを取る。

「次の相手はお前らか？」

「少しは楽しませて欲しい、な！！」

これこそが束と夜明が考えた作戦…。

「銀河さんと織斑教諭をピンチに陥らせる？」

太陽の問いに束はその通り！　と胸を張る。

「そ！　とにかく、どっちでも良いからピンチにするの！　そうすれば、ピンチじゃない方がピンチになってる方を助けるでしょ？　ピンチの中で生まれる熱愛！　これしかない！」

こうしてたてられた計画の大まかな流れはこう。

鈴音、セシリア、シャル、ラウラが何かしらのピンチを起こす。

←

そこに夜明と太陽が乱入し、千冬と銀河を巻き込む。

←

どうにかして、そこから二人を良い雰囲気に持っていく！

こうだ。

「よく分からないが、あの二人をどうにかすれば良いのだろう？」

「銀河…お前は本当にぶれないな」

コキコキと指を鳴らしながら二人に向かっていく銀河に千冬は呆れとも感心ともつかぬ想いを胸に抱く。銀河は夜明を指差しながら千冬を振り返った。

「私は月の方をやる。お前は髑髏の方を」

「はぁ…了解、だ！！」

次の瞬間、既に戦闘は始まっていた。千冬と太陽は拳をぶつけ合わせて清水の舞台を震わせ、銀河と夜明に至ってはドラゴンボール顔負けの空中戦をしている。

「夕暮、これはどういうことなんだ？」

「…ま、何も言わずに戦ってくださいよ」

要領を得ない答えを返しながら、太陽は徐々に攻撃の勢いを増していった。最初は互角に渡り合っていた千冬だが、徐々に圧され始める。

「っ！　殺す気か！？」

「私の目的は貴方のピンチを作ることなので！！」

死神（デスサイズ）の鎌を連想させる蹴りを放ち、太陽は千冬を圧倒していく。夜明の相手をしながら銀河は旗色の悪い千冬を見ていた。

「余所見してんじゃねぇよ！」

放たれたハイキックを、銀河は余裕で受け止めて見せる。夜明の足を掴んだまま、銀河は自分に言い聞かせるように呟く。

「…やはり、護りたいものくらい己の手で護るべきだな」

「はぁ？」

反転した視界の中、夜明は疑問の声を上げようとした。だが、声が音となって唇の間から出てきた時には柵の外に飛び出してしまった千冬に追撃をかけようとしていた太陽を巻き込んで吹き飛んでいた。夜明をぶん投げた銀河は躊躇することなく柵の外に飛び出し、千冬を抱きかかえて優雅に舞台の下に着地した。

「ぎ、銀河…」

「千冬…お前は私が護る」

こういう台詞を何の躊躇いも、恥ずかしげもなく言えるのが月光家クオリティ。この銀河の一言で千冬は完全にノックアウトされ、気を失ってしまったとさ。

その夜、温泉に入った千冬は浴衣に着替えて部屋へと戻っていた。

（今日は散々な一日だったな…いや、そうでもない、か）

気を失う前、銀河に言われたことを思い出して赤面する。頬が熱いのを感じながら千冬は部屋の中に入った。そこでは既に温泉に入ってきた銀河が窓辺で月を見上げている。銀河はチラッと千冬を見てすぐに視線を月に戻した。どうしようか少し迷ってから、千冬は銀河の横に座って月に見入った。

「…私の顔に何かついてるのか？」

ふと、銀河が自分を見てることに気付いて千冬は訊ねた。すると珍しく、非常に珍しく銀河は言葉を逡巡させて顔を薄紅に染める。

「いや…すぐ横に月よりも美しいものがいる私は幸せ者だと思ってな…」

「…そうか」

小さく呟くと千冬は寄り添うように銀河に近づき、肩に頭を置いて凭れかかった。銀河も千冬を拒もうとはせず、そのまま月を見続けていた。

何ともまぁ、二人だけの甘い時間が長い間流れてましたとさ。

世界最強、でも純情女の恋模様（後編）（後書き）

徹夜明けのテンションで書いたので意味不明です。ご了承を。

三年ＩＳ組、太陽先生！！　クラスメイト紹介（前書き）

とうとう始まっちゃいました。とりあえず、色々と設定を変えさせてもらってます。二重人格が双子になってたり、親が海外で働いてるとか…とりあえずどうぞ。

三年ＩＳ組、太陽先生！！　クラスメイト紹介

愛絵子学園。当て字の無理矢理感が凄まじい学園だ。

三年ＩＳ組。何でクラス数に二文字使ってんだよなんて突っ込みは無しの方向で一つ。その三年ＩＳ組所属、織斑一夏は思うのだ。

『ウチの面子って濃いのが多すぎないか？』

例えば彼のいる席から見て、右斜め前にいる生徒。

「あ、あの何やってるの椛？」

「何って…見て分からないの、楓？　この間撮影した哀れな亡国機業高校の男の子達の写真（女装バージョン）を日本中のサイトに貼り付けてるんだけど？」

「何してるの！？　そんなことしたらあの人達お日様の下を歩けなくなっちゃうじゃない！？」

「これくらいで済むだけまだマシでしょ。なんせあいつ等は私たちに、ＩＳ組に喧嘩を売ってきたんだから…クスクス」

ドＳなんて言葉がピッタリな笑顔を浮かべてクスクス笑っているのは音梨椛、そして椛をどうにかして止めようとしてるのが音梨楓である。この二人、双子だ。椛が姉で楓が妹になる。椛が言っている『喧嘩を売ってきた』と言うのはもう少し先に語られる。

姉妹愛（？）溢れる会話に一夏はため息を吐きながら今度は左斜め

前を見る。

「おいジーク、何かいいバイトは見つかったか？」

「終か…いや、駄目だな。どこも時給がしけてやがる…そういうお前はどうなんだ？」

「あぁ、見つかったっちゃあ見つかったんだが…」

「だが？」

「真っ白い粉を一杯に詰め込んだトランクを港の倉庫に運ぶって仕事なんだよなぁ」

「何だそりゃ？　しょぼすぎだろ」

「あぁ。どっかから真っ白な粉を分捕る、みたいなやつだったら喜んでやったんだけどな」

黒谷終、ジーク・キサラギ。個性的な連中が集まるＩＳ組の中でも特に異彩を放つ二人だ。この二人、余り友好的ではなく、最初の頃こそ皆から敬遠されてたが何かと皆の面倒を見るため、今となっては兄貴分的な位置にいる。ついた渾名は『新ジャンルのツンデレ』だ。元々、二人は余り仲良くはなかったが互いに両親が海外に働きに出て行ってる、最低限の生活費以外は自分稼いでいるという共通点があり、親しくなった。

「あいつら、どんなバイトしてんだよ…」

呆れつつも、今度は後ろを振り返る。右斜め後ろに女子と見紛う体

格の男子と、右目を眼帯で隠した男子が何やら話しこんでいる。

「ユウ、借りてた本返すぞ」

「確かに。面白かったですか？」

「全体的には面白かったと思うぞ」

奈々瀬ユウ、祭麗我だ。ユウはＩＳ組の参謀、麗我はそのサポート的な役目を担っている。二人は一夏の視線に気付くと、軽く手を振った。一夏も手を上げて二人に応え、左斜め後ろを見る。

「やっぱハンドガンで一キロ先の標的をぶち抜くのって難しいな」

「いや、それだけ出来れば十分だと思うよ？　俺なんか五百メートル先のに当てるのも怪しいって」

「お前みたいに一秒に何十発もぶっ放せりゃ十分だと思うけどな…」

黒光りする銃身を磨いてる二人の名はアーノルド・ギアナ、成瀬・レインハート、通称アルとレインだ。二人とも超重度のガンマニア。そして驚くなかれ、二人が持っている銃器類は全て本物だ。趣味が共通してるということもあり、やはり仲が良い。次に一夏は真後ろを見た。

「……」

静かにライトノベルに熱中している茶髪の名は鈴木政志。今は物静かに本を読んでいるが、性格はかなり粗暴、札付きの不良だ。尤も、政志自身が原因で起こった問題はほとんどないので、不良と決め付

けるわけにもいかないが…。喧嘩となると先陣を切って相手に突っ込むこと、またその暴れっぷりから特攻隊長、破壊神なんて呼ばれている。続いて、一夏は真正面を見る。

「やっぱ『ＩＳ』は面白いな」

政志同様ラノベを読んでるのは織斑唯。一夏と同じ苗字だが、赤の他人だ。唯は所謂二重人格で『ユリ』という人格を持っている。そのため過去に色々とあったようだがここ変人の巣窟、ＩＳ組では普通に受け入れられている。政志とは時々ライトノベルを交換し合う仲のようだ。右を見る。そこでは七人の女子が楽しげに話していた。琴吹ななせ、河井和花、セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ、そして一夏の恋人、篠ノ之箒。ふと、こちらを向いた箒と目が合い互いに笑みを浮かべる。周りの女子にからかわれている箒を見ながら、改めて一夏は思う。

（やっぱウチの面子って濃いよな…まぁ、一番濃いのは俺達を纏め上げてるこいつと担任だけどな）

そう思いながら一夏は左に視線を移した。そこにはＩＳ組最後の生徒、銀髪銀眼の男子、学級委員長月光夜明が大欠伸をしている。基本的にＩＳ組は夜明を頭にして動いている。クラスメイトを諫める時は諫め、締める時は締め、暴走するときはとことんまで暴走させる。そうこうしてる内に自然と皆、夜明に従うようになっていた。

月光夜明を筆頭とした愛絵子学園三年ＩＳ組。音梨楓、音梨椛、黒谷終、ジーク・キサラギ、奈々瀬ユウ、祭麗我、アーノルド・ギアナ、成瀬・レインハート、鈴木政志、織斑唯、琴吹ななせ、河井和花、セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ、篠ノ之箒、織斑一夏。そして、彼らを纏め

上げるのは…

ーキ～ンコ～ンカ～ンコ～ンー

「席つけお前ら。ＳＨＲを始めるぞ」

炎髪灼眼、アホみたいなボディラインを持った女教師、夕暮太陽その人だ。

休み明けテスト。ペナルティはクラスのリーダー！？

三年ＩＳ組担任教師『夕暮太陽』。何と言うか、色々な意味でぶっ飛んだ人物だ。先ず第一に格好が変だ。女性であるにも拘わらず、炎のように紅い男物のスーツを愛絵子学園にいる男子教員の誰よりも着こなしている。トレードマークとも言うべきタバコ型チョコを常に銜え、何よりも驚くべきは年齢が十代だということだ。

「と言うかお前達。私が出るまでに一話使ってるんだ。待ちすぎてチョコを何本か食べちゃったじゃないか」

とても教師とは思えない言葉。常識が通用しない漢気、究極のゴーイングマイウェイ、どこまでも破天荒、三拍子揃った超絶曲者だが、生徒達からの信頼は厚く、その証拠に太陽が入ってきただけであれ程騒いでいた連中が大人しく自分の席に座っている。

「うし、それじゃ朝のＨＲ始めるぞ。日直、号令よろしく」

「あ、はい。きりーつ」

日直の一夏が号令するのにあわせて全員立ち上がり、気をつけ、礼と一例の動作を終えて着席する。

「出席とるぞ。音梨姉妹」

「「はい／は～い」」

「織斑一夏」

「はい」

「織斑唯」

「います」

「オルコット・セシリア」

「いますわ」

「河井和花」

「はい」

「馬鹿（ギアナ・アーノルド）」

「おいちょっと待てぇ！　俺だけおかしいだろ！？」

「いるな。キサラギ・ジーク」

「いるぞ」（無視かよ～…）

「黒谷終」

「いる」

「琴吹ななせ」

「はい」

「篠ノ之箒」

「います」

「鈴木政志」

「いるぜ」

「デュノア・シャルロット」

「はい、います」

「奈々瀬ユウ」

「はい」

「成瀬・レインハート」

「はい」

「凰鈴音」

「いるわよ」

「ボーデヴィッヒ・ラウラ」

「はい！」

「祭麗我」

「うっす」

「月光夜明は後で私と一緒に保健室に来るように」

言い終わる前に空気を切り裂いて、太陽目掛けて何かが殺人的な速度で投擲される。瞬きする間もないコンマ数秒の間に太陽は銜えていたタバコチョコを吐き出して投擲物を弾き返した。

「ちっ」

渋面を隠そうともせず、夜明は弾き返されたコンパスをキャッチする。

「まだまだ甘いな、夜明。まぁ、今のは冗談だから安心しろ」

「入学式早々に俺のことを保健室に連れ込んだ教師が言っても説得力無ぇよ」

確かに、と皆頷く。愉快そうに口角を持ち上げつつ、太陽は生徒達に背を向けて黒板に何か書き始める。ゴンゴン、と単調な音が続き、ある文字が書かれた。

『休み明けテスト』と。

「が、来週の月曜からあるのは知ってるな？　お前ら、このテストのどの科目でもいいから八十点以上とれ。そうでなきゃ、私の授業を全部トライアスロンに変える」

「待てコラ」

教室から出て行こうとする太陽の肩を政志が掴んで止める。

「ん、どうした？」

「どうしたじゃねぇ。何でこうなったのかせめて過程だけでも説明しろや」

クラスメイト一同、政志に同意する。合計十九組の視線が突き刺さる中、面倒くさそうに頭を掻きながら説明を始めた。

「ってか、色々と面倒だから次の※から読んでくれ」

面倒くさがるなぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！　一同の叫びも虚しく、回想シーンへと続く。

※

そこは異質な校長室だった。デスクに応接用のソファやらテーブル、壁にある歴代の校長方の写真があるのはまぁ普通だ。だが、それ以外の空間を訳の分からない、形容しがたい機械が埋め尽くしている。ガッションガッション動いてたと思えば、何か悲鳴じみた甲高い音を奏でる。クトゥルー系と言われても何も言い返せない機械を創造したのは愛絵子学園校長、

「太陽ちゃん、その爆乳を大人しく束さんに揉ませなさい」

篠ノ之束その人だ。頭にウサ耳、アリスドレスを纏った、とにかく異質という表現がピッタリの人だ。

「教室戻りますね」

開口一番、完全なセクハラ発言に太陽は踵を返して校長室から出て行こうとするが、教頭の更識楯無にまぁまぁと戻される。

「冗談は置いといて…言わなくても分かると思うんだけど、太陽ちゃんのクラスの生徒って一部を除いてもの凄く成績悪いのだよ。え、何これ？　激安スーパーのタイムサービス？　って思っちゃうくらいの点数をテストの度に叩き出してる訳よ彼らは」

「ま、勉強なんかよりも大切なものがあるって連中ですからね」

来客用ソファーに踏ん反り返りながら束の台詞に相槌を打つ太陽。どうでもいいが、校長の話を聞く態度ではない。だが、もうそんなのには慣れっこなのか、束も隣りに控えてる楯無も何も言わなかった。

「確かに勉強だけが全てだとは束さんも言いませんよ。でも、だからってテストで悪い点を取っていい理由にはならないよ？」

「それに、君の男子生徒達は一週間前に亡国機業高校と大喧嘩して補導されてるじゃない」

一生に一度あるかないかの束の真面目な台詞、楯無に痛いところを突かれて太陽は少しだけ詰まる。一週間前、確かに女子を除くＩＳ組生徒は亡国機業高校と一悶着起こした。

「喧嘩はするわ馬鹿だわじゃ救いようが無いし、何より他のクラスのＰＴＡ共がうるさくてうるさくて」

「でも、一週間前のあれは全面的に向こうがわる」

「それは私も校長も知ってる。だけど問題は周囲の目よ。ここで何かしらの結果を残してくれないと、ＩＳ組は他のクラスにも悪影響を与えることになっちゃうわよ」

グゥの音も出ない。ばつの悪そうな顔で頭を掻く太陽に追い打ちをかけるように束が高らかに宣言する。

「もう単刀直入に言うね。今度の休み明けテストでＩＳ組全員が一

つの教科で八十点以上取れなかった場合」

「場合？」

「よっくん（夜明）の貞操を束さんと楯無ちゃんの二人掛かりで奪わせてもらうよ！」

刹那、

「ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

渾身の上段廻し蹴り一閃、束のウサ耳が弧を描いて宙を舞う。

「うみゃぁぁぁぁ！！！！！　束さんのウサ耳が、ウサ耳がぁぁぁぁ！！！！！！」

吹き飛んだウサ耳を両手に涙を噴水のように流す束を無視し、

「ふざけるのも大概にしろウサ耳に女狐！　と言うか、完全に犯罪だぞそれ！　教育委員会とかＰＴＡが黙ってないぞ！」

「ハハハ、何言ってるのさ。教育委員会やＰＴＡを黙らせるなんて、校長と私の力を以ってすれば赤子の手を捻るよりも容易さ」

束は太陽並みの人外、そして楯無の実家は対暗部用暗部。情報収集などお茶の子さいさいだ。流石の太陽でもこの二人を相手取るのは厳しい。少しして、太陽はため息を吐きながら立ち上がる。

「けっ、上等だ考えうる限り最狂最悪の二人組。やってやろうではないか。あいつらだって本気を出せば八十点なんか余裕さ」

「その言葉、忘れないようにね」

楯無の言葉には振り返らず、校長室を後にした。

※

「と言うことがあった訳だな」

「だな、じゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！！」

「ぶふぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！！！！」

一部始終を回想して見せた太陽の顔面に夜明のドロップキック炸裂。吹き飛んだ太陽は黒板に背中から叩きつけられて崩れ落ちる。

「お前は何をやってんだ！　何でクラス全員分のペナルティを俺一人が背負わなきゃいけないんだよ！！　と言うか何でテストのペナルティで貞操をかけなきゃいけねぇんだぁぁぁ！！！！」

「だ、だって…私的にはそれが一番重いペナルティだったんだもん…」

「お前の価値観はどうでもいいんだよ！！」

一人熱くなる夜明だが、周りの反応はかなり冷めていた。

「それくらいのペナルティだったら別にいいんじゃねぇか？」

「そうですね。夜明と夜明に好意を抱いてる人達はともかく、僕達には何のデメリットもありませんし」

「うぉい！！」

終、ユウの台詞に夜明は全力で突っ込む。

「寧ろ得なんじゃないか？　校長と教頭、性格はともかく見てくれは美人だからな」

「一足先に夜明は大人の階段を上るわけだ。あぁ妬ましい妬ましい」

「やべぇよ、俺泣きそうだよ…」

クラスメイト達の何とも心温まる反応に両手両膝をついて涙を流す夜明。そのまま夜明がハラハラと涙を零していると、政志が読んでいたライトノベルを閉じた。

「ま、冗談はそこまでにしとけよ。流石に何もしてないうちから仲間を易々と見捨てるのは忍びない」

「そだね。ここにいる皆、持ちつ持たれつ、皆は一人のために一人は皆のためにだからね」

「それに、馬鹿な上に暴力事件を起こす危険な連中ってレッテルを貼られるのも御免だ」

政志の言葉にレインが同意し、麗我は口元に笑みを浮かべる。するとさっきまでの冷めた空気はどこへやら、一気にクラスの雰囲気は固まった。

「よく言ったお前ら。帰りのＨＲ、緊急のテスト対策会議を開くぞ。以上、全員一次元目の準備しろ」

それだけ言うと、太陽は教室から出て行った。

テ・ス・ト！！　結果は如何に！？

「流石ＩＳ組。さっきまであんな纏まりがなかったのに、一瞬にして結束しちゃいましたね…って校長先生？」

デスクの上に置いてあるノートパソコンの画面に映し出されたＩＳ組の映像を見ながら、楯無は束を見るが、当の本人は、

「う～、ウサ耳～」

太陽に蹴り折られたウサ耳を両手に握りながら、来客用のソファに寝っ転がっていじけていた。

「貴方は何時までいじけてんの！　ほら、状況確認するわよ」

楯無に無理矢理立たされ、束は触覚を抜かれた蟻のように危なっかしい足取りでデスクにある椅子へと腰を下ろす。最初は自分が握るウサ耳ばかり見ている束だったが、気持ちを切り替えたのか接着剤でウサ耳を頭にくっつけて画面を覗き込んだ。

「ほうほう、ＩＳ組の監視カメラの映像だね」

「はい。何かこう、うまい具合に隠れてて彼らからは見えないやつです」

説明が豪く中傷的だが気にしない方向で。

「それにしても、相変わらずだねＩＳ組は。朝一であんな話聞かされて、一瞬で結束しちゃうんだから」

「そう言えば校長。何でこんなしたんですか？　今まではＰＴＡや教育委員会が何を言ってきてもテストの点数なんて気にしなかったのに」

楯無の疑問に束は己の欲望を隠すことも無く、正直に吐露した。

「太陽ちゃんが羨ましすぎるのだよ～！　師匠である私を差し置いてよっくんの担任教師になるなんて…羨ましい羨ましい羨ましい！！」

「凄く大事なことだから三回言ったんですね、分かります」

メタ過ぎる束の欲望を咎めるわけでもなく、楯無は同意の念を示して何度も首肯する。夜明の教師と言う配役を与えられなかった束は何らかの意趣返しを太陽にしたかったようで、こんな馬鹿げたことを考えたらしい。幸いと言うべきか、ＩＳ組は一部の生徒を除いた全員が脳みそ、ライク・ア・ババロアであるため、現段階で束の望みは確実に叶うだろう。

「いやぁ～、やっぱり束さんは天才だねぇ～」

「校長先生、いや束さん。一生ついていきます」

「うん、よろしくね教頭、いや、たーちゃん！」

よく分からない友情で結ばれた二人はガッチリと握手を交わした。

時は流れ放課後。ＩＳ組では急遽開かれた『テストどうすっぺ会議』なるものが開かれていた。

「と言う訳で、夜明の貞操を奪うと言う私の欲望を叶えるため、テスト対策会議を開く…その前に一応聞いておきたいんだが、お前らの中で一度でもテストで八十点以上をとったことがある奴はいるのか？」

束同様、己の欲求に正直な太陽は願望を隠そうともせず生徒達に問うた。太陽がこんなことを言うのは何時ものことなので、誰も突っ込むことなく話は進む。ＩＳ組十九名の生徒の内、四人の手が挙が

った。シャル、セシリア、ななせ、ユウの四人だ。この四人、一度と言わず、ほとんどのテストで全教科八十点以上取っている。愛絵子学園の中でもかなり優秀な方だが、如何せん周りの連中が、

『テスト？　何それ？　食えんの？』

を地で行くため、馬鹿のレッテルを貼られている。

「ＯＫ。把握したから下ろしていいぞ」

「と言うか太陽よぉ。担任が手前のクラスの生徒の成績を把握してないって結構問題なんじゃあああああ！！！！！」

尤もな事を言う終の頬を掠め、太陽が投擲した出席簿が背面黒板を真っ二つにして壁に突き刺さった。

「続けるぞ～」

勿論反対する者は誰もいない。で、仕切りなおして会議再開。

「まぁ、小難しい事は一切考えなくていい。要はどんな手を使ってでも八十点以上取ればいいんだ」

どんな手を使ってでもな、と意味有り気に繰り返す太陽。まさか、と一同が思う中、恐る恐る和花が挙手する。

「あの、先生。それってまさかとは思いますけど…」

「そのまさかだ…カンニングだ」

口角を邪悪に持ち上げ、太陽は和花の疑問に答えた。

カンニングだと!?　と教室中から驚きの声が上がるが、太陽は手を差し出して皆を沈める。

「おいおい。一教師が生徒にカンニングを示唆するなんてどういうこった?」

「私だってカンニングなんてやらせたくないさ。でも、これだけの一大事、手段は選ばない所存だ」

「お前と夜明にとっての一大事だろうが…」

呆れの中に皮肉を含ませるジークを無視し、

「っつぅ訳で、カンニングの方法を考えろ」

話を新幹線の如く進める太陽は色々無茶苦茶だ。慌てて一夏は椅子を鳴らして立ち上がる。

「ち、ちょっと待ってくれよ先生!　俺たちがカンニングするのは決定事項なのか?　カンニングなんかよりも、ユウ達に勉強を教えてもらうって方法もあ」

「馬鹿野郎!　相手はあの篠ノ之束と更識楯無なんだぞ!　そんな正攻法が通用する訳ないだろ!」

恐ろしいほどに説得力に満ちた一喝だ。それでも、と逡巡する一夏の真後ろから声が投げかけられる。

「別にいいじゃねぇかカンニングくらい。楽して高得点が取れる、俺はアニメが見れて一石二鳥だ」

「お前も大概欲望ただ漏れだな…」

勉強なんかよりもアニメの方が遥かに大事な政志らしい考えに呆れながら、どうにかカンニングじゃなくて真面目に勉強しようと提案する一夏だが、クラスの反応は芳しくない。

「諦めなよ一夏。今回は事がことだけに太陽も引き下がらないよ」

と、レインの諌めるよう声。そこで一夏は渦中の人物である夜明に視線を向けた。

「夜明、お前自身はどう思ってるんだよ？」

「俺？　…少なくとも、こんな下らない事で誰かとそういう関係になるのだけは嫌だな」

だから、手段は選ばないと鬼気迫る表情で告げた。余りの気迫に一夏は気圧されるが、なお躊躇う。ついに業を煮やした太陽が怒鳴る。

「だぁ！　もう分かった！　なら一夏。もしお前がカンニングしてくれたら、来月にオープンする大型アトラクションパークのペアのプレオープンチケットをくれてやる！　箒でも連れてけ！」

刹那、一夏の体内を雷光が駆け巡った。

「文句はねぇ！　オラお前ら！　さっさとカンニングの方法を考えやがれぇぇぇ！！！！！！」

と、一旦はカンニングの方向で落ち着いたのだが、唯の内側にいる人格「ユリ」の

『答えもないのにどうやって八十点もカンニングするの？』

この一言で結局真面目に勉強する事になった。

「じゃあ、どの教科を勉強するんだ？」

麗我の一言に皆考える。八十点の高得点を取らなくてはいけないとはいえ、所詮は一教科。今から二週間、死ぬ気で一つの教科を勉強し続けていけば、取れない点数ではないだろう。

「それで、何の教科にするんだ？」

「どうすれば人により激しい痛みを与えられるか」と椛。

「ある訳ないだろそんなの。ってか怖い！　そもそも教科が分からん」

「精密機械の改造、なんてのはどうでしょう？」ユウが言う。

「どこの大学だどこの」

「女装が似合う男の娘はどんなものかについて語る！　ハァ…ハァ…！」和花は若干暴走気味だ。

「頼むから教科を言え教科を」

「いい加減にしろ貴様ら！」

疲れたように太陽がため息を吐くと、さっきまで静かに両腕を組んでいたラウラがいきり立つ。どういう訳か、彼女は太陽に心酔してる。

「大喜利をやってる場合ではないんだぞ！　教官が言っているのだから真面目に考えろ！　教官、市街地における制圧戦のシュミレーションなどはどうでしょうか！」

大真面目な表情のラウラを、太陽は石破天驚ゴッドフィンガーで黙らせた。

「あの、ちょっといいか」

いい具合に教室がカオスになり始めた時、さっきまで黙っていたアルが手を上げた。恐らく、この会議において尤も場違いな者であるだろう彼の登場に太陽は愉快そうに眉を持ち上げる。

「お、何か言いたいのか？　オール教科万年赤点のアーノルド・ギアナ？」

そう。

「ひでぇこと言ってんじゃねぇぞ太陽！　て言うか、万年赤点言うなら俺以外の連中も似たり寄ったりの馬鹿じゃねぇか！！」

「「「「「「お前にだけは言われたくねぇよ！！！！！！！！！！」」」」」」

彼はＩＳ組、いや、愛絵子学園で最も馬鹿な男だからだ。シャーペン、コンパス、分度器、三角定規、文鎮、ソロバンなどの様々な学習用具が投げられアルを襲う。

「り、理不尽だぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

傷だらけになり沈むアルだが、一瞬で回復して何事も無かったかのように話を進めていく。

「自分の回復力に若干引いてきたぜ…教科だけど、英語にしないか？」

英語？　とクラス全員（成績優秀者を除いた）眉をひそめた。おぅ、と頷きながらアルは英語のワークブックを取り出す。

「皆も知ってると思うけど、ウチの高校の英語テストってこのワークブックの問題から丸々三十点分出題されるだろ？」

アルの言ったことに一同（しつこいようだが成績優秀者を除く）は

「「「「「そうだったんすか！？」」」」」

マジで驚いていた。このテスト製作者のささやかな親切を悉く踏み躙ってみせる級友達に流石のアルも驚きを隠せずに唖然とする。

「へぇ、そうだったのか…続けろ」

「そうだったのかって、体育教師とはいえ、知っておかなきゃまずいだろ…まぁいいや。とにかくそうなんだよ。俺が英語で赤点を取らないのはその問題を丸暗記してるからだ」

「英語では、な」

「英語では、ね」

「お前ら人のことをいたぶってそんな楽しいか？」

『英語』だけを強調する政志と椛にガリガリと体力を削られるアルだが、気持ちを切り替え話を続ける。

「とにかく、英語ならワークブックのテスト範囲内の内容を丸覚えするだけで三十点取れるんだ。残り五十点は死ぬ気で勉強して稼ぐしかねぇ！！」

拳を握り語るアルだが、周りの反応はそこまで芳しくない。

「英語か…正直言って苦手なんだよな」

「何言ってやがる。英語以外も苦手なくせに」

「おいジーク。お前って確か海外に住んでたんだよな？　なら英語は得意なんじゃねぇの？」

「俺が住んでたのは中国だ。英語なんざ無縁だ」

各々勝手なことを言ってると、夜明が席から立った。自然、話をしていた皆は夜明に視線を向ける。

「確かに英語は俺も苦手だ。だけど、三十点が確定してる英語なら一番点数が取りやすいと思う。だから、俺たちＩＳ組は英語で勝負するぞ」

夜明の言葉でＩＳ組の方針は決まった。全員の方針が決まったのを見て取り、太陽は両腕を組んで口角を上げる。

「決まりだな…死ぬ気で勉強するぞ野郎共！！！！！！！！」

と、まぁ気合たっぷりで勉強に臨むわけだが、今まで勉強のべの字もやったことのない連中。いきなり、放課後を使って長時間勉強しても、

「「「「……（プスプス）」」」」

こうなる。頭から煙を噴出して意識を失っている連中、楓、レイン、麗我、和花、鈴音、ラウラはまだいいだろう。他の連中はもっと酷い。

「アイラブユー、アイニードユー、アイウォントユー…どうすればこの胸の中の想い全てを一夏に伝えられるだろうか」

「落ち着け箒。目的が果てしなく変な方に向かって行ってるぞ」

一夏への想いを抑えきれない箒をジークが現実に戻し、

「真理が…真理が見える」

「戻って来い唯。勉強してるってだけでどこに行こうとしてるんだ」

目を虚ろにさせながら天井へと手を伸ばす唯を、疲れきった表情の終が引っ叩く。他のも似たり寄ったりの状態だ。特に酷いのが椛、アル、政志の三人だ。

～椛の場合～

「…何で私はこんなことをしてるのかしら…？　テスト？　…何でテストなんてあるの？　…あぁ、そうか。学校があるから。なら学校を破壊すればテストも…クスクスクス」

「うぉぉぉ！？　目からハイライトが消えた椛が片っ端から窓を叩き割っとる！！」

「クスクスクス。テストモ学校モ壊レチャイナサイ」

「「「「「怖っ！！！！！」」」」」

～アルの場合～

「狙い撃つぜぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！」

「おい！　何いきなり絶叫しながらワークブックを天高くに投げ飛ばしてんだこの馬鹿！！」

「乱れ撃つぜぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！」

「今度はシャーペンの芯を弾幕に！？」

～政志の場合～

「ライトノベルを…ライトノベルを読ませろぉぉぉぉ！！！！！！！！！」

「だぁ！　また政志が暴れ始めやがった！！沈静隊、行くぞ！！！！！」

「■□■□■ぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！　射殺す百頭（ナインライブス）！！！！！！！！」

「ぎゃあああああ！！！！！！！　バーサーカー化しとるぅぅぅぅぅ！！！！！！！！！！」

「えぇい、本当に厄介な！！！！！！」

こんな具合に精神的にも肉体的にもボロボロのヘロヘロになったＩＳ組。だが、そのお陰で三十点分のワークブックの丸暗記、及び残り五十点を自力で得るだけの学力を身につけた…はず。そして、本番がやってきた。

ーってか問題違くね？　ってか違いすぎね！？ー

テスト当日。彼、アーノルド・ギアナは心の中でシャウトしていた。配布されたテスト用紙に書かれていた問題文にはワークブックの問題は何一つ無く、彼らの二週間の頑張りを嘲笑うかのようなレベルのも問題が並んでいる。ワークブックの問題文ではビリーとミーナがデート先で些細な問題に巻き込まれマイガッ！　程度の内容が、アレルヤとハレルヤが世界の悪意について小難しいことを話してやがる！

不意に、ベキィッ！！　と凄い音が聞こえてきた。声の方向を見ずとも分かる。恐らく、クラスメイツの一人が凄い形相でシャーペンをへし折りながら睨んでいるのだろう。最初の音を皮切りに、教室中からシャーペンを握力で折る音が聞こえてきた。そしてアルに向けられる濃密な殺気。

（いやいやいや、ちょっと待ってくれよお前ら！　だって今までのテストは本当にワークブックから問題出てきてたんだぜ！？なのに何でいきなりこんな難しいのが…やっべ、泣きそうだ…）

しかし、泣いたって始まらない。彼らはやらなければならないのだ。

この馬鹿みたいにレベルが高いテストを。徐々にアルに向けられた殺気が納まり、解答用紙にシャーペン（予備）を走らせる音が聞こえてきた。

「……」

何を思っているのか、試験監督夕暮太陽は無言で天井のあるう一部分見つめていた。

結果、物の見事に四人を除く全員が撃沈した。その四人も、ギリギリで八十点台だったのだから、今回のテストが異常に難しかった事が分かる。湿っぽい空気の中、今にも自殺をしそうな雰囲気を纏うアル。

「気にしてんじゃねぇよ。誰もお前一人のせいにしたりはしねぇ。寧ろ、お前みたいな馬鹿の提案に碌に考えもせずに乗ったのがそもそもの間違いだったんだ」

政志の言ってることは相当酷いが、彼なりに友を気遣ってるのだ。

「しっかし、これで夜明の貞操は校長と教頭のものか…」

一夏が同情の目を向ける先では、燃え尽きた夜明が深々と項垂れていた。これから己に待ち受けているであろう未来を想像し、絶望のどん底に沈んでいる。その時だ。

「邪魔するぞ」

凛とした声が聞こえ、ガラガラと教室の扉が開き、誰かが大きな何かを引きずりながら入ってきた。

「り、理事長。それに引きずられてるのは校長と教頭か」

整った顔立ち、凛とした姿勢に太陽同様に着こなされた男物のダークスーツ。名を織斑千冬、一夏の姉にして愛絵子学園理事長である。彼女に引きずられている、顔を前衛的芸術に昇華された束と楯無に一同引き気味。

「大体の事情は分かった。全くこの馬鹿共は碌なことをしない…と言う訳で、この馬鹿共が示した条件は無しだ」

夜明はホッと息を吐き、一夏達は声を上げる。かくして、夜明の貞操は護られた。

と、ここで終わればよかったのだが…

「ところで貴様ら…カンニングに手を染めようとしていたという報告があるんだが…」

教室の空気が固まった。恐る恐る千冬を見てみると、某一子相伝の暗殺拳継承者顔負けの覇気を放ちながら指の関節を鳴らしている。全員が夜明を見た。ＩＳ組学級委員にしてリーダーが出した指示は、

「総員退避ぃぃぃぃ！！！！！！！！！」

全力の逃亡だった。一同、夜明の命令に逆らうことなくそれぞれ窓から、天井から床から逃走を図る。

「逃げられると…思うなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！」

リアル鬼ごっこ、始まり始まり。

七不思議、それはどこの学校にもあるもの

「…怖いなぁ…」

ＩＳ組所属、音梨楓の夜の校舎を見た感想はそれだった。現在の時刻、午後十時。場所は校門の前である。ヒュォォ、と真横を吹き抜けていく夜風、何か見える気がする校舎から立ち上る黒いオーラ。昼はスライムのような雑魚敵しか出てこないのに、夜になるとゾーマが出てくる、そんな感じだ。

「でも、行かなきゃ…」

そう、彼女は夜の校舎に行かねばならない。明日提出の課題をやるために。課題自体は既に九割方終わっているのだが、最後の一番重要な考察部分をやってないため急いで取りに行かねばならない。彼女は余り成績は振るわないが、基本的に真面目な子だ。すぅ、と息を吸い込んで頬を叩いて気合いを入れる。

「…よし！」

己を奮い立たせ、楓は校門に手をかけた。手から伝わる金属の冷たい感触とか、軋む音に心が挫けそうになるが、負けずに必死で身体を持ち上げたその時、

「何してんのよあんた！」

鋭い声が背後から浴びせられた。吃驚仰天した楓は背中から地面に落ち、痛みに悶絶しながらもその場で土下座する。

「ごごごごごめんなさい！！　何も悪い事をするつもりは無かったんですただ課題を取りに来ただけなんですぅぅぅ！！！」

「何だ楓じゃない。こんな真夜中に何してんのよ？」

「いや、今大声で課題を取りに来たって言ってたよ…」

はっ！　と顔を持ち上げると、そこには級友、鳳鈴音と琴吹ななせが立っていた。

「鈴さんにななせさん？　…驚かせないで下さいよ」

安堵のため息をつきながら楓は服と膝についた砂を払う。にゃはは、と楽しげに笑いながら鈴音は頭を掻いた。

「ごめんごめん。何か腕をプルプルさせながら校門をよじ登ろうとするあんたを見てたらこう…意地悪したくなって」

「もう、鈴ってば…楓、大丈夫？」

ななせの問いに大丈夫と答えながら楓は訊ねる。

「二人は何で学校に？　やっぱり忘れ物？」

「私は政志に頼まれて、教室に忘れてきたポータブルブルーレイプレイヤーを取りに来たの」

「私はコンビニから帰る途中でななせに会って、暇潰しに付き合ってきたのよ」

言われてみれば、確かに鈴音は制服じゃなくて私服で手にコンビニの袋を下げている。

「そうなんだ…それにしても政志さん、何で自分で取りに来ないでななせさんに？」

「何か、今日は見逃せない深夜アニメが何本もあるんだって。だから私に頼んできたの」

政志らしいと言えば政志らしい。

「楓も忘れ物？」

「はい。課題を教室に置いてきちゃって…あの、もし良かったら一緒に行きませんか？　夜の学校って…」

楓の言いたい事がすぐに分かったのか、二人は苦笑いを浮かべてみせる。

「あぁ、確かに夜の学校って怖いわよね。何かこう…ラスボス出てくんじゃないの？　みたいな雰囲気出してて」

「それじゃ早く行こっか。あんまり夜遅くに歩いてるのも良くないし」

こうして、三人は警察やら不審者やらに見つからない内に校門に手をかけた。

「えっと…あったあった。楓は見つかった？」

「はい。机の中に入れてただけなんで、すぐ見つかりました」

ＩＳ組教室。電気をつけると警備の人に進入した事がばれるので、三人は携帯のライトを頼りに探し物をしていた。頼りに、と言っても机にいれてたのを探すだけなのですぐに見つかったが。

「見つかったんならさっさと行きましょ。警備の人に見つかって大目玉、なんてやだし」

鈴音の提案に反論する事もなく、二人は鈴音について教室を出て行った。何事もなく無事に忘れ物を取れて、二人はホッ、と安心したように息を吐き出す。暫くの間、廊下には三人分の上履きがなる音が響いていた。一階の廊下まで下がってきたその時だ。

「ん？」

「んって…どうしたのよ、楓？」

唐突に足を止め、楓は後ろを振り返った。不審に思い、鈴音とななせも足を止め楓に視線を向ける。鈴音の問いに楓は首を傾げながら顔を前に向けた。

「いや…何か足音みたいなのが聞こえて…」

「え、それって…」

「どうせ警備の人かなんかでしょ。見つからないうちに行きましょ」

ななせは顔から血の気を引かせるが、鈴音は興味なさそうに帰ろうとする。が、

ーキュッ、キュッー

今の足音は二人にもはっきりと聞こえた。ばっ、と三人が音が聞こえてくる廊下の奥へと視線をやる。警備の人かと思ったが、少し考えて三人はおかしな点に気がつく。警備の人であるなら懐中電灯か何か灯りになる物を持っているはずだ。では何故、足音の主は何の光源も持たずに歩いているのだろうか？

「「「……」」」

嫌な予感が三人の脳裏を過ぎり、顔が蒼白になっていく。しかも、

『…ボウコ…ウス…ケント…』

何かぶつぶつ呟いている。廊下の向こうで人影のようなものが見えたと思った瞬間、三人は無意識の内に昇降口とは反対の方向に走り出していた。

「何!?　何あれ!?　マジで出ちゃった!?　何か七不思議的なもの出てきちゃった!?」

「知らないよそんなのぉ!!」

「何であの時足音なんかに気付いたの私の馬鹿ぁ!!」

恐怖からか、三人は陸上競技者も真っ青な速度で走っている。だのに、あの人影のようなものとの距離が縮まってる気が一向にしない。それどころか、足音と呟きがどんどん近づいてくるような気配さえした。

「あそこ!!」

鈴音が指差す先に教室がある。どこの教室かは分からないが、三人は躊躇することなく飛び込んだ。鈴音が扉を開いて真っ先に飛び込み、次になせ、最後に入ってきた楓が扉をぴしゃりと閉め、ななせが鍵をする。

「はぁ…はぁ…何なのよあ、れ…（ブクブクブク）」

「「鈴（さん）！！！」」

どうやらここは理科準備室だったらしい。勢い良く飛び込んだ鈴音は奥にある人体模型と骸骨標本と至近距離でこんにちわをしてしまったらしく、泡を吹いて失神した。二人が慌てて駆け寄るが、白目を剥いたまま起きる様子は無い。

「どどどどうしよ楓！？　このままじゃ鈴音が！」

「おおお落ち着いてななせさん！　こういう時は人工呼吸？　心臓マッサージ？　電気ショック？」

二人して良い具合に慌てふためいていると、

ーキュッ、キュッー

「「（ビックーン！！）」」

教室の外から聞こえてきた微かな上履きの音を聞き取り、二人は揃って髪の毛を総毛立たせる。どっか行けどっか行け、と心の中で強く願うが、足音は確実に近づいてくる。しかも、何だか二つ分聞こえてきたような気が…。

「「（ガタガタブルブルガタガタブルブル）」」

いい年をした女子高生二人。完全に腰を抜かして、抱き合いながら涙目で震えていた。しかも最悪な事に、足音はここの前で止まった。不意にガンガン！　と強めの力で扉がノックされる。

「（私達どうなるんですか！？　このまま愛絵子学園七不思議の仲間入り！？）」

「（嫌だよそんなの！　まだ政志に好きって言ってないのに！！あ、でも鍵をちゃんとかけたんだしだいじょ）」

ーカチャンー

「「神様助けてー！！！！！」」

ガラリと扉が一気に開き、

「…何してんだお前ら？」

「楓になせ？　そんで後ろに倒れてるのはって、何で鈴の奴は泡吹いて失神してんだ？」

呆れた表情のジーク・キサラギと黒谷終が懐中電灯で泣いてる二人とぶっ倒れている鈴音を照らしていた。

「成る程。忘れ物を取りに来て、それで俺達の足音をお化けと勘違いしたと…アホだろ」

「何で灯りが無いってだけでお化けだと思うんだ？　電池切れとか考えなかったのか？」

「「「…返す言葉もありません」」」

ジークと終に連れられ、三人はシュンとしながら昇降口に向かっていた。ちなみに、何故この二人が夜の校舎にいるのかと言うと、太陽に校舎の夜間警備のバイトを紹介されたからだ。

「ほら、忘れ物も取ったんだしさっさと帰れ」

「道中、気をつけてな」

「って言うか、何であんた達は私達が昇降口に向かうタイミングで一階の警備してたり、訳わかんないこと呟いたりしてんのよ！」

見送ってくれる二人に鈴音は理不尽すぎる怒りをぶつけ、ジークと終は揃って眉を顰める。だがそれは鈴音の理不尽に対する怒りではなさそうだ。

「一階？　俺は四階を回ってた時、一階から走り回る音が聞こえてきたから理科準備室に行ったんだが…終、お前は？」

「お前と同じだよ。三階回ってた時、何か騒がしかったからな。と言うか、訳のわかんないことって何だ？」

二人の言ってる事を総合すると、あの人影は、あの足音の持ち主は、何やら呟いてた者はこの二人とは別人であるらしい。

「「「…いやあああああああ！！！！！！！！！！！」」」

その考えに至った瞬間、三人はそれぞれが持っていたものを投げ出し、悲鳴を上げながら一目散に駆け出していた。

「あ、おい！」

ジークが三人の背に声をかけるも、三つの後ろ姿は物の数秒とかからずに豆粒になる。

「あいつら…これ、どうすんだよ？」

「明日、渡すしかないだろ…ってか、何ですぐにお化けと結び付けるんだ？　もう一人、警備の奴がいるって考えないのか？」

二人で女子三人が投げ出していったものを拾っていると、

「何か凄い悲鳴が聞こえてきたけど、何かあったのか？」

三人目のバイト、織斑唯が不思議そうな面持ちをしながら歩み寄ってくる。

「何でもない。怖がりの馬鹿女子三人が勝手に怖がって走ってったけだ」

ジークの説明で事情が分かる訳もなく、疑問符を浮かべる唯に終が簡潔に事の顛末を話す。すると、唯は怪訝な表情を浮かべた。

「一階？　俺が警備してたの二階だぞ？」

三人の放り出していった物を拾っていたジークの動きが止まり、終は一瞬だけ頬の筋肉を引き攣らせた。

「「…マジか？」」

二人の問いに頷く唯。

「…不審者か？」

「俺達以外に夜間警備の奴はいないはずだから、そう考えるのが妥当だろうな。若しくは本当に…」

お化けか何かなのか？　言葉に出さずに三人が同じことを考えると、どこからか聞こえるはずの無い足音が聞こえてきた気がした。

「おい、この学校に七不思議なんてあったか？」

「知らねぇよ。ユウあたりに聞いてみれば分かるかもしんねぇけど」

「どの道、夜明と太陽に相談したほうが良さそうだな…」

こうして、三人は神経を研ぎ澄ませながら夜間警備を終えて帰路についた。

「お、ユウじゃねぇか。お早う」

「夜明ですか。お早うございます」

翌朝、下駄箱でばったりと出くわした夜明とユウは軽く挨拶をして一緒に教室へと向かった。道すがら、夜明は昨晩見たホラー番組について話し始める。

「その番組でさ、学校の七不思議特集みたいなのやってたんだよ。トイレの花子さんだとか、結構ポピュラーだったな」

「その点、ウチの高校は色々とぶっ飛んでますからね」

「そうなの、ってかあったのかウチに七不思議？」

首肯しながらユウはバックからボールペンとノートを取り出し、歩きながら器用にサラサラと書き始めた。これです、と渡されたノートを見て夜明は眉を顰める。

「何々…

1、職員室から聞こえる咽び泣き（喘ぎ声？）
2、家庭科室で包丁を研ぐ血塗殺人鬼
3、校庭に現れる狙撃主の亡霊
4、アニメと音楽をこよなく愛する音楽家
5、踊り狂う人体模型
6、ウサギの世話をする黒耳ウサギ
7、屋上に彷徨い出る受験生の亡霊

…確かに個性的っちゃ個性的だわな」

「ま、校長があれですから」

絶対に関係ないと思うが、何故か納得してしまう。夜明がユウにノ

ートを返すと、教室が見えてきた。

「ちゃおっ～す」

「お早うございます」

二人が教室に入ると、雑談をしていたクラスメイト達が視線を向けて挨拶を返してくる。

「おい夜明。ちょっといいか？」

「あ、何だよジーク？」

席につくと、ジークが声をかけてきた。実はな、とジークは昨夜の出来事を掻い摘んで話す。

「ふ～ん。不審者、若しくは幽霊か…十中八九不審者だと思うぞ。幽霊だったらそれはそれで面白いが」

「面白いって…」

夜明の返しにジークが呆れた表情を作ると、太陽が教室に入ってきた。

「席つけお前ら、ホームルーム始めるぞ～…って、楓とななせ、鈴がいないじゃないか。おい椛、片割れはどうした？」

出席簿を教卓の上に投げ飛ばした太陽は三人の女子が欠席してる事に気付き、先ず最初に楓の姉である椛に訊ねる。

「ん～、学校に行こうって言ったんだけど、頭から布団被って出てこないのよね。お化け怖いお化け怖いとか言って」

「それ本当か？　ななせも似たような感じになってたぜ」

「鈴さんもですわね」

椛に続き、政志、セシリアが思い出したように呟く。

「はぁ？　何だそれ？　あいつら三人とも、昨日のホラー番組でも見てたのか？」

「いや、多分違うと思う」

ボソッと呟いた唯に全員の視線が集まる。

「どういうことだ、唯？」

「いや、昨日に…」

（唯、説明中）

「ってなことがあったんだ」

唯の説明が一通り聞き終えた太陽は腕を組みながら頷く。

「はぁ～、成る程。警備のお前ら三人以外誰もいないはずの校舎に謎の足音か…不審者ならとっ捕まえればそれで終わりだな。しかし、七不思議となると…よし、調べるか」

その夜。

「それじゃ、これより『愛絵子学園七不思議の真相を暴け』プロジェクトを開始する」

ラスボスが出てきそうな雰囲気を放つ校舎前に太陽、夜明、和花、レイン、シャル、麗我の六人が並んでいた。

七不思議、それはどこの学校にもあるもの（後書き）

質問、次の仮面ライダーの内どれが好きか答えよ。

1、電王

2、W

3、オーズ

「にしても、本当に幽霊なんて出るのか？」

まず一行が向かったのは咽び泣き（喘ぎ声？）が聞こえるという職員室。今夜の警備員は昨日と同じ三人なので、夜明達は何を気にするでもなく普通に歩いていた。

「出来れば出てこないでもらいたいな」

「え、太陽先生って幽霊が怖いんですか？」

意外そうな和花に太陽は、

「あぁ。もし出てきたら、お前たちがドン引きするほど怖がる自身がある」

物凄く嫌な自信だ。真面目な表情で言い切る太陽に呆れていると、廊下の向こうに職員室が見えてくる。先頭を歩いていた夜明は手で皆の歩みを止め、何か聞こえないか耳を澄ました。

「何か聞こえるか？」

「いや、別にこれといって変わった声とか音は聞こえな」

その時だった。

ーうぅ…うぅ…ー

聞こえた。今、確かに聞こえた。職員室の中から、正体不明の咽び泣きが。男性陣、驚きで顔を見合わせ、女性陣は早くも涙目だ。特に太陽なんか、夜明の背に隠れて生まれたての小鹿よろしく震えてる。

「よよよ夜明、こここれって…」

「落ち着けシャル。今のは俺たち六人が本当に、偶々、偶然、天文学的確立で同時に聞いた空耳かもしれない」

こう言ってる時点で、夜明自身も空耳だと思ってないことは確実だ。しかも、相変わらず職員室からは現実を認めろと言わんばかりに咽び泣きが聞こえる。

「まぁ、咽び泣きの意味は分かったよ。でも、（喘ぎ声？）って何なんだ？」

麗我の疑問に一同首を傾げるが、疑問はすぐに氷解した。

ーうっう…あ…はぁん…ー

「確かにこりゃ咽び泣き（喘ぎ声？）だな…」

とにかく中に入らんことには正体が分からないので、夜明達は職員室突入を決心する。抜き足差し足忍び足で音を立てないよう入り口まで近づき、夜明は引き戸に手をかけながら仲間たちを振り返る。全員が頷いたのを確認し、一拍の間をおいて中に踊りこんだ。

悪霊退散！　妖魔降伏！　ジュゲムジュゲムゴコーノスリキレ！
エロイムエッサイム！　テクマクマヤコン！　アッチョンブリケ！

てんでばらばらな叫び声を上げながら飛び込んだ六人が見た咽び泣き（喘ぎ声？）の正体は！？

「…何やってんですか山田先生？」

恐怖から一転、太陽が冷めた目で見据える先には愛絵子学園数学教師、山田真耶が頬を薄く紅色に染めながら己の手で胸を押さえつけていた。

「あぁん…はり、太陽さん？　それにＩＳ組の生徒さん達も…どうしたんですか？」

「そりゃこっちの台詞だ。あんたこそ、夜の職員室で何淫靡なことしてんだ？」

麗我の突っ込みに真耶は恥ずかしそうに視線を逸らす。

「ご、ごめんなさい…私って胸が大きいじゃないですか？　だから男子達からエッチな目で見られることがあって…」

「成る程、その目が嫌で、夜な夜な職員室に忍び込んでは胸を小さくしようと頑張ってた訳だ」

「家でやりなさいよ家で」

恥ずかしそうに頷く真耶にレインが突っ込む。

「だって、家族にばれたら恥ずかしいじゃないですか」

「職員室でやる方がよっぽど恥ずかしいわボケェ！！！！」

太陽は真耶にローリングソバットを叩き込む。

ー何が咽び泣きだこのボケがぁ！　怖がって損したわこの淫乱巨乳教師！　それから己の胸を小さくしようとなんてするな、巨乳はステータスだ希少価値だ！　おい和花！　真耶の胸揉んで更にでかくしてやれ！　えぇ！？　いいのかな…ー

「や、止めてください！　これ以上大きくなったら私、サイズが合う下着がなくなっちゃ…ひゃあああああん……」

かくして、七不思議の一つが解明されました。

「何が七不思議だ。蓋を開けてみれば、淫乱ホルスタイン教師じゃないか」

「ホルスタイン教師って…先生も大して山田先生と変わりないよね」

「寧ろ、太陽先生のほうが大きい気がする」

列の最後尾で何やら言ってる女性陣を無視し、先頭の男性陣は次の七不思議『家庭科室で包丁を研ぐ血塗殺人鬼』の正体を確かめるべく、家庭科室へと向かっていた。

「包丁を研ぐって言うと、やっぱり山姥の類か？」

「こんな都会の高校に出向いて、山姥に何の得があるんだろうな…」

それこそ、神のみぞ知ることだ。数分とかからずに一行は家庭科室があつ三階へと来ていた。そろそろ家庭科室が見える所まで歩くと、レインが先頭の夜明を止めた。

「あ、どしたレイン？」

「…家庭科室の中に誰かがいる」

全員の表情が凍りつく。

「…あ～、こりゃ確かにいるな」

家庭科室から何かの気配を感じ、麗我も頷く。夜明は抱き合って震えてる太陽達に待ってろと指示し、レインと麗我をつれて家庭科室へと向かう。引き戸を少しだけ開け、そっと覗き込んでみる。

しゃーこ、しゃーこ

何やら恐ろしい音が聞こえる。間違いなく包丁を研ぐ音だ。しかも、中は電気がついてなく、光源が蝋燭だということも恐怖に拍車をかけている。見えるのは向こうを向いている人間の後ろ姿。

「（やべぇよあれ。確実にやべぇよ）」

「（山姥ではないだろうけど、確実に二、三人は殺ってるぞあの後ろ姿は）」

「（寧ろ、山姥でいてくれたほうがどれだけ気が楽だったか…）」

三人、小声で話していると、不意にその何者かが動きを止めた。まさか、と思いながら三人で見ていると、何者かはゆっくりと振り返り、

「み～た～な～」

包丁が蝋燭の明かりを受けてキラリ。

「「「ぎゃあああああああ！！！！！！！！！！！！！」」」

盛大に叫び声を上げながらも三人は戦闘態勢に入る。

「って夜明に麗我、それにレインじゃない。何してんの？」

「ぜぇ…ぜぇ…そりゃこっちの台詞だ、椛！！！」

家庭科室で包丁を研ぐ殺人鬼こと音梨椛は研いだばかりの包丁を輝かせながら答える。

「何って…料理の練習だけど」

「家でやれ家で！！」

「そうしたいのは山々なんだけど、私が料理すると、何故か台所が猟奇殺人事件の現場みたいになっちゃうのよ」

「あぁ～、確かに」

何故か壁天井、どこもかしこも血塗れの家庭科室内を見て、レインは納得する。

「あんた達もやる？　解体作業は楽しいわよ。クスクス…」

謹んで遠慮し、三人は家庭科室から出た。後ろ手に引き戸を閉めた瞬間、何かが弾ける様な音が聞こえ、家庭科室から鉄くさい臭いが漂ってくる。

「…忘れよう、ここで見たことは」

「「異議なし」」

七不思議二つ目、家庭科室で包丁を研ぐ殺人鬼、解決。

ま、最初があれで二つ目がこれだ。大方の人が想像ついてるだろうが、愛絵子学園七不思議は、六人の手によって次々とお馬鹿な真相が明らかにされていく…。

三つ目の『校庭に現れる狙撃主の亡霊』の正体はＩＳ組所属、アーノルド・ギアナことアルが狙撃の練習をしてたというのが真実で、

「流石アル。成層圏の向こうを狙い撃つ馬鹿の異名は伊達じゃないな」

と、レインに感心された。

次の『アニメと音楽をこよなく愛する音楽家』なんてのは音楽室に忍び込んだ政志が異常な上手さでアニソンをピアノで演奏していて、

「家でやれよ」

と麗我に冷たく突っ込まれた。

五つ目の踊り狂う人体模型なんてのはお騒がせ校長、束が作った警備ロボで、こいつは突然の登場に驚いたシャルと和花の手によって破壊された。その際、

「うにょ～！　束さんの自信作がぁ～…」

なんて悲痛な叫び声が聞こえたが、夜明達は綺麗に無視した。

六つ目の『ウサギの世話をする黒耳ウサギ』はというと。

「最近、ピョン太郎の具合が悪くてな、心配で様子を見に来てたんだ。それと、ピョン子がもうすぐ子供を産みそうだったから…」

と、何故か黒いウサ耳をつけたラウラが一行を出迎えた。ウサギを抱きかかえ、黒ウサ耳をピコピコ動かすラウラに、お馬鹿過ぎる七不思議で心が荒んでいた夜明達は癒されていた。

そして七つ目、『屋上に彷徨い出る受験生の亡霊』は…。

「さて、この愛絵子学園七不思議ツアー、改めお馬鹿共のお馬鹿所業風雲録も終わりだな」

いつの間にか、名前が変てこなものに変わっている。だが、そうなるのも無理ないくらいに今回のツアーは馬鹿げていた。

「さっさと終わらせて帰ろうぜ。もう疲れた」

「そうだね…やっぱり、最後の七不思議も僕達のクラスの誰かなのかな？」

シャルの疑問を夜明はすぐに否定した。

「それはないだろ。ウチの面子に受験なんて下らないことで自殺を考える奴はいないはずだ」

全員、反論する気もなく同意する。そうこうしてる内に屋上への扉前へとたどり着いた。どうせまた下らないオチだろうと高を括り、夜明はさっさとノブを握って扉を開け放つ。どっと風が一行を出迎える。途端、六人は足を止めた。正面十メートルほど先にあるフェンスの向こう側に立つ男子生徒の姿を。

「……」

夜明と太陽は無言で表情を険しくし、こちらを凝視している眼鏡の男子生徒を見据えた。

「亡霊…ではないな」

「足がちゃんとあるからな。とにかく、引きずり戻すぞ」

「了解」

レインと麗我が一歩踏み出そうとすると、

「来るな！　来たら飛び降りるぞ！」

「…面倒なことになりやがった」

ただならぬ事態であった。七不思議を解明しに来たというのに、どこでルートを間違えたのか男子生徒の自殺に立ち会うことになろうとは…。

「来るな、僕は本気だぞ！」

「って言ってらっしゃいますが、どうする？」

内心の焦りを隠しながら夜明は太陽を振り返る。とりあえず、太陽はこう言う。

「止めとけ。そっから飛び降りたら痛いぞ」

真面目にやれ、と全員から手痛い突っ込みをもらう。突っ込みをもらった部分を擦りながら、太陽は頭を掻いた。

「とりあえず、自殺の理由を聞いとこうか」

「そ、それは…」

男子生徒は一瞬言い澱んでから話し始めた。どう頑張っても上がらぬ偏差値、親からの期待、予備校のライバル…早い話、受験競争に疲れたらしい。男子生徒の話を聞き終えた太陽はうんうんと頷きながら

「下らなさ過ぎて笑えないな」

ばっさり一言で切り捨てた。

「ったく、自殺するくらいだから、何か余程差し迫った理由でもあるのかと思ったが…んな下らない理由で自殺なんかするな」

心底だるそうに太陽は男子生徒に歩み寄ろうとするが、

「来るな！　ほ、本当に飛び降りるぞ！　嘘じゃないからな！」

ヒステリックな叫びに足を止める。男子生徒との距離はおよそ八メートル。人外の領域に全身を突っ込んでいる太陽なら取り押さえられない距離ではないが、間にフェンスがあるのでかなり危険な賭けになる。夜明達が固唾を呑んで見守る中、太陽は冷徹に言い放った。

「そうか。んじゃ、さっさと飛び降りて死ね」

男子生徒は勿論、夜明達でさえもギョッとした。そんなことはお構いなしで太陽は手で落ちろとジェスチャーする。

「どうした、飛び降りるんだろ？　なら早くしろ。なぁに、心配するな。骨くらいは拾ってやる」

「おい、太陽！」

堪りかね、夜明が呼びかけるが無言の重圧で黙らされられた。

「そもそも、自殺する根性が気に入らない。しかもその理由が受験に疲れたなんて下らない理由だ。どうせ、ここで自殺しなくったってこいつは将来何やっても駄目だよ。なら、さっさと死んで生まれ変わった方がいいだろ」

ただな、と太陽は愉快そうに告げる。

「そっから飛び降りてもお前は死ねないぞ」

「え？」

戸惑う男子生徒に、太陽は校庭を指差してみせる。

「今校庭にな。私の教え子のアーノルドってのがいてな。こいつは間違いなく学園一、いや、日本一馬鹿な奴だが、狙撃の腕は文句なしの世界一だ。もしお前が飛び降りたとしても、すぐにお前の服だけを撃ち抜いて校舎の壁に縫い付けるぞ、あいつは」

「う、嘘だ！　そんなこと出来る人がいる訳ない！！」

「そう思うんならさっさと飛び降りろよ。何なら突き落としてやろうか？　生徒のことを手伝うのも教師の仕事だからな」

悪役も浮かべないだろう笑みを浮かべる太陽に男子生徒も含め戦慄を覚える。今、男子生徒の意識は完全に太陽に集中してるので、夜明、レイン、麗我はゆっくりと動いていた。

「もう、もう僕は疲れたんだ！！」

と、ついに限界が訪れたのか、とうとう男子生徒は飛び降りた。その時、既に三人は動いていた。レインは流れるような動作で腰から拳銃を引き抜いて、フェンスの網を撃ち抜いて人が通れるくらいの大きさの穴を作った。男子生徒目掛け突進していた夜明は穴から飛び出し、男子生徒の胸倉を掴んで屋上に放り投げ、夜明に投げ戻された男子生徒は麗我の手によって受け止められる。

「…って夜明!?」

シャルが大声で呼ぶが、その時既に夜明の姿は見えなくなっていた。

「あぁ〜、死ぬかと思った。助かったぜ、ジーク、唯」

「心臓に悪いことしてんじゃねぇよこの馬鹿」

「本気で、焦ったぁ…」

勢い良く屋上から飛び降りた夜明は何故か三階の廊下に待機していたジークと唯に引きずり上げられていた。

「ってか、何でここにいんだ？　警備してたんじゃ」

ジーク曰く、警備の最中に屋上から飛び降りようとする男子生徒の姿を目撃したので、唯と一緒にいつ落ちてきてもいいようにここで待機してたらしい。

「終は？」

「向こう側の校舎で、飛び降りるタイミングを伝えてくれたよ」

言われたとおり向こう側の校舎を見てみると、三階の窓に人影が見えた。

「そっか…お前達がいてくれて助かったよ。流石に屋上からじゃ捻挫で済みそうにないからな」

「普通骨折でも済まないっての…大丈夫なのか、あいつ？」

あいつとは男子生徒のことだろう。唯の疑問に夜明は壁に背中を預けながら答える。

「ま、太陽がどうにかすんだろ」

「これに懲りたら、二度と自殺なんてしないように。分かったな」

「…はい」

「返事が小さいっての」

屋上に座り込んで俯いてる男子生徒に頭突きをかまし、太陽は面倒そうに頭を掻いた。

「お前、童貞か？」

「「「「「…はい？」」」」」

太陽の突拍子もない質問に男子生徒のみならず、レイン達も素っ頓狂な声を上げた。

「だぁかぁらぁ、セックスしたことあんのかって聞いてるんだよ」

「あ、ありません」

「キスは？」

「ないです…」

「恋人は？」

「…いません」

「酒は…飲んでる訳ないか」

一通り質問し、太陽は軽く男子生徒の額にチョップを落とした。

「その年で疲れたなんて腑抜けたこと言ってるな。受験に失敗しようが、人生に失敗する訳じゃないだろ。それが分かんないほど、お前も馬鹿じゃないだろ」

ポンポン、と軽く男子生徒の頭を撫でながら太陽は懐から酒瓶を取り出す。

「今、私が持ってる一番上等な酒だ。まぁ、とりあえずこれでも飲みながら、人生考えてみろ」

言うだけ言って、太陽は立ち上がりレイン達に帰るぞ、とそのまま屋上を去っていった。

「あいつ、大丈夫なのか？」

「さぁな。あそこまで言ってまた自殺するようなら、もう救いようがないさ」

麗我の問いに投げやりに答えながら、太陽はにっと笑う。

「ま、人間どうとでもなるさ。これで七不思議は全部解決したことになるな。全く、どれも下らなかったな…お前ら、気をつけて帰れよ」

ひらひらと手を振りながら太陽は歩き去っていた。相変わらず、背中で語る人だ、と見送っていた夜明達はそう思った。

七不思議解明編（後書き）

新作『不屈の翼が魔法にこんにちわ』もよろしく

野球の助っ人　やりすぎだぜ太陽先生！！

どこぞの病院の個室である。ベットの上には愛絵子学園教師、イーリス・コーリング先生が横たわっていた。授業中であろうと、病院のベットに入っていようがロマンスグレーのグラサンを外す事無いハードボイルド教師である。

「頼んだぞ」

「いや、頼んだぞって言われてもな…」

ベットの傍らにいるのは我等が太陽先生。

「ぶっちゃけ、私に関係ないですよねこの話？」

「大有りだろうがこの野郎」

めこり、とイーリスの拳が太陽の顔面を捉えようとするが、太陽は華麗に攻撃をかわして逆にイーリスへクロスカウンターを叩き込む。

「まぁまぁ落ち着いて。暴力はいかんよ」

「どの口がそんなことをほざきやがる…お前んとこの生徒がしでかしたことだろうが。なら、手前と手前のクラスの連中が何とかするのが筋ってもんだ」

そうなのか？　と首を傾げる太陽だが、ベットに横たわるイーリス先生を病院に担ぎ込む原因を創ったのはＩＳ組の生徒、セシリア・オルコットなのだから、確かに責任の一端くらいは自分にある気が

しなくもない。

「いいか。試合は来週の土曜。向こうはかの有名な亡国機業高校だ。断ったらどんな難癖つけてくるかわからねぇし、それは負けた場合でも同じだ。ウチの主力はオルコットのあれでほとんど潰れちまったから、お前んとこの生徒に頑張ってもらうしかねぇんだ…」

その時、セシリアの劇物（りょうり）によってズタズタにされた臓器が痛むのか、イーリスは布団の上から腹を押さえて呻き声を上げる。

「とにかく、試合は来週の土曜だ…頼んだぜ」

「っつぅ訳で、ウチのクラスは来週の土曜、亡国機業高校と野球の試合をすることになった」

「「「「「了解」」」」」

「ちょっとお待ち下さいな！！」

冒頭の回想で全てを理解した夜明達はすぐに了解の声を上げるが、唯一人セシリアだけは納得がいかなさそうに席を蹴って立ち上がった。

「何故、今の説明だけで納得出来るんですの！　太陽先生は具体的なことは何も仰っていないのに！？」

「お前の名前が出てる時点で、全員大体の予想がついてんだよ」

政志の言葉に一同頷く。

「何なら、簡潔に纏めてやろうか？　おい、ユウ」

夜明に指示され、ユウは了解しましたと黒板に何かを書き始めた。

「纏めると…こんな感じですかね？」

・セシリア、料理の練習で何かを作る。

←

・持って帰ろうとするが、量が多いのでどこかの部活にお裾分けし

ようとする。

←

・偶々目に入った野球部に料理した劇物を渡す。

←

・顧問含め、全員の腹をスクランブルにしちゃった、テヘッ★

「ってな感じだろ？」

「劇物だなんて…あんまりですわ」

致死性毒物と書かれないだけマシだと思う一同。九分九厘的中してるため、セシリアはぐうの音も出ない。パンパンと手を叩き、太陽は全員の視線を集めた。

「ま、そう言う訳で今日から放課後、お前らは野球部で練習だ。放課後、グラウンド集合だ」

そして放課後である。バックネットを背にし立っている太陽はジャージ姿。そして彼女の前に立つＩＳ組の野郎共は野球のユニフォームである。ちなみに女子は応援だけと言うことで、チアリーディング部にぶっこまれている。

「う～し、集まったな野郎共。つぅ訳で早速練習だ」

「その前に一ついいか？」

「ん、どうしたジーク？」

「野球部の奴らは？　一人もいないんだが？」

「あぁ、セシリアの料理から放たれる激臭に耐え切れず、食ってない連中も例外なく病院行きだ」

納得出来るんだから恐ろしい。準備運動をキッチリとこなし、早速練習に移る。ちなみにポジションは

ピッチャー、鈴木政志。

キャッチャー、月光夜明。

ファースト、ジーク・キサラギ。

セカンド、黒谷終。

サード、織斑一夏。

ショート、織斑唯。

レフト、祭麗我。

センター、アーノルド・ギアナ。

ライト、成瀬・レインハート。

ベンチ、奈々瀬ユウ。

である。でもって、今度こそ練習が始まるのだが、これを監督するのが人外先生、夕暮太陽である。当然、人がやっていい練習になるわけが無く、

「しっかりとれ唯。本番はもっと速い球が飛んでくるんだからな」

明らかに時速三百キロを超えるノックをしたり、

「ホームランボールくらいキャッチしてみろレイン。根性出せ～」

キャッチ出来ないからホームランなんだが、という突っ込みは当たり前に無視される。

「内野陣、同時千本ノックくらい捌いて見せろ～」

人間を超越した動きで同時に千本ノックし、それら全てを捌けという。練習にならない。と言うか、参加してる全員が死なないように動くので精一杯である。まぁ、当然、こんな命をすり減らすような練習をして無事で済む訳が無く一時間後には全員、グラウンドにぶっ倒れていた。

「何だお前ら、この程度で情けない…よし、決めた。一週間かけて、強化合宿をやることにしよう」

「「「「「「「「「「「「はぁ！！？？」」」」」」」」」」」」

勿論、太陽が言ったのだから笑い話などにはならず、現実となる。

「ラウラ、本当にこの道であってるの？」

「何か、更に迷い込んでる気がするんですけど…」

とある、魔境と呼んでも差し支えないであろう鬱蒼と茂った森の中、ＩＳ組女性陣は一列に並んで進んでいた。先頭を歩くラウラは、その手に持った紙を見ながらひたすら進んでいく。

「教官が書いた地図がこの先を示しているんだ、間違いない」

「お前のその太陽に対する無尽蔵の信頼はどこから湧いて来るんだ？」

無条件に太陽を信頼するラウラに呆れるが、彼女がいい加減なものを渡す訳も無く、一行は地図が示す場所へと辿り着いた。そこでは、

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

椛でさえ絶句する地獄が展開されていた。総重量五十キロはあるだろう重りを全身に括りつけられた仲間達が、滝のように汗を流しながら太陽に追い立てられている。

「この屑共がぁ！！　トロトロ走るんじゃない！！」

しかも罵声のオマケ付き。

「全く、何という様だ！　貴様らはダニだ！　蛆だ！　この世で最も劣った下劣で知性の欠片も無い生き物だ！！　いいかクソ虫共、私の楽しみは貴様らが苦しみ悶える様を見る事だ！　爺の検閲削除のようにひぃひぃ言いやがって、みっとも無いと思わんのか！　玉があるならこの場で検閲削除をして見せろ！」

機関銃のように放たれる言葉の数々に、女性陣は顔を赤くさせる。

「太陽先生、お下劣…」

「と言うか、あの血の気の多い連中があんな罵声を浴びせられてよく耐えられてるわね」

「そりゃ。そうですよ…」

恥ずかしそうに人一倍頬を染める楓の横で、椛は感心したように夜明を先頭に走る男子達を見ていた。すると、足下で声がしたので見てみると、そこにはユウが虫の息で横たわっている。

「ちょ、大丈夫なのあんた!?」

「えぇ、まぁ…誰も文句言える訳ないですよ。だって太陽先生、僕たちの二十倍の重さの重りをつけて、僕たちと同じ練習をしてるんだから…」

そりゃ何も言い返せない訳だ。納得すると同時、そんな重装備で普段と変らない動きを見せる太陽に戦慄を覚えずにいられない女子達だった。

その後も太陽の人を人とも思わない練習は続いた。練習内容は余りにも過激すぎるため、放送可能なものだけをピックアップする。

「いいか！　貴様らは人間以下だ、命を持つ価値の無い検閲削除だ！　私の訓練を生き延びたその時、初めて貴様らは生物としての権利を得る！！」

「泣くことも笑うことも貴様等には必要ない！！　貴様等は闘うための兵器だ！！　闘わなければ存在する価値はない！！　隠れて【検閲削除】している【検閲削除】に過ぎん！！」

「罵られて屈辱を受けたいか！！　殴られて痛い思いをしたいか！！　この負け犬根性が染みついた芥溜めがお似合いの【検閲削除】が！！」

「とろとろ走るなこの【検閲削除】！！　さっさと走らなければお前の【検閲削除】に【検閲削除】を流し込むぞ！！」

「この【検閲削除】の【検閲削除】共がぁ！！　貴様等の【検閲削除】を【検閲削除】して、【検閲削除】するぞ！！」

これ以外の練習は余りにも過激すぎるため、割愛する。

とまぁ、そんなこんなで試合当日になった。試合場所はどこぞの名も無き休場。試合相手の亡国機業高校の連中、まぁとにかく柄が悪い事で有名で、今も実際、選手のいない愛絵子高校側のベンチにメンチを切ってたり、チアガールの格好をしてる女子を嘗め回すような視線で見てたりする。以前、ＩＳ組の全員で、亡国機業高校の奴らをボコボコにしたことがあるが、それは割愛しておこう。

「遅いなぁ…太陽先生、政志たちって本当に来るの？」

強制的に太陽にチアガールの格好をさせられ恥ずかしそうにしなが

らも、女子を代表してななせは同じくチアガールの格好をしてる太陽に訊ねた。すると、太陽は何時も通り『漢』の笑みを浮かべる。

「心配するな。もうそこまで来てるはず…来たな」

口角を持ち上げながら太陽が見据える先、そこには十人の男がゲートを潜ってグラウンド内に入ってきた。勿論、夜明達である。笑みを浮かべたまま、太陽はベンチから立ち上がり、男子達を出迎えた。男子は太陽の前に立つと直立不動の姿勢をとるが、一人だけよろよろと覚束ない足取りでベンチへとやって来た。

「あの、大丈夫ユウ？　満身創痍って言葉がピッタリな状態だけど…」

「えぇ、どうにか…何とかあそこまで染められずに済みました」

シャルの問いに答えながら、ユウは太陽達を指差す。

「いいか！　今この時を以って貴様らは蛆虫を卒業する！　貴様らはメジャーリーガーだ！！」

「「「「「「「「「「サァーイエッサァーッ！！！」」」」」」」」」」

「貴様らはこれから最大の試練と戦う！　全てを得るか、地獄へ堕ちるかの瀬戸際だ。どうだぁ！　楽しんでるか！！」

「「「「「「「「「「サァーイエッサァーッ！！！」」」」」」」」」」

「よし！　戦闘準備！！！」

掛け声と共に、九人のユニフォームに身を包んだ姿が露に。

「野郎共！　俺達の特技は何だ！！！！？？？？」

「「「「「「「「「殺せ！！　殺せ！！　殺せ！！」」」」」」」」」

「この死合い（誤字にあらず）の目的は何だ！！！！？？？？」

「「「「「「「「「殺せ！！　殺せ！！　殺せ！！」」」」」」」」」

「俺達は学校を愛しているか、野球部を愛しているか！！！！？？？？」

「「「「「「「「「ガンホー！！　ガンホー！！　ガンホォォォ！！」」」」」」」」」

「よし、行ってこい！！」

天よ裂けよ地も割れよと咆哮を上げ、夜明達は戦場（グラウンド）へと向かった。

「あれって一種の悪質な洗脳よね…」

「それよりも、あの連中があんな物騒なことを叫んでたら冗談抜きで洒落にならないぞ」

誰一人として、箒のいうことを否定しなかった。

試合開始！！

「プネ…プレイボーイ！！」

「噛んだな」

「あぁ、噛んだ」

「噛みましたね」

「ありゃ確実に態とだな」

「失礼、噛みました」

「違う、態とだ」

「かみまみた」

「「「「「「態とじゃない！？」」」」」」

「髪が薄い」

「「「「「「自虐！？」」」」」」

「アホやっとらんで試合始めるぞ」

まぁとにかく、こうして試合は始まったのだった。

（けっ、愛絵子だか愛の巣だか知らねぇけどよ）

と、亡国機業高校一番打者は心の中で呟く。

（手前らが出てくるとは正直思ってなかったぜ…丁度いい、試合に託けてボッコボコにしてやる…！）

彼、そしてベンチにいる連中がここまで殺気立つのには理由がある。と言うのも、彼ら亡国機業高校学生達、野球部の者だけでなく、学生全員がＩＳ組男子勢に叩き潰されている。そりゃもう完膚なきまでに。ま、彼ら如きがＩＳ組の連中をどうにか出来る訳ないのだが…。

「ククク、アニメもラノベも我慢して打ち込んだ一週間の合宿（と言う名の地獄）で俺が手に入れた魔球を見せてやるぜ…！！」

マウンドの上に立つ政志。目は血走っていて、ピッチャーと言うより殺人者を連想させる。殺すなよ、と夜明のアイコンタクトに頷き

ながら振りかぶる。そして第一球が投げられた。

「逝けよ、ファング球ゥゥ！！」

素人とは思えない剛速球が放たれた。ギョッとする打者だが、ギリギリで反応できるボールだ。バットを振りきり、夜明が構えるミットに投げられたボールを芯で捉えようとしたその瞬間、ボールが十個に分身した。

「「「「「「「「「「「「はっ？」」」」」」」」」」」」

亡国陣はバッターボックスに立つ打者だけじゃなく、ベンチにいる皆も目を丸くした。分身したボールは多角的な軌道を描き、打者の急所と言う急所に叩き込まれる。

「……」

悲鳴を上げる事さえ出来ずに沈む打者。分身したボールは何事も無かったかのように一個に戻り、夜明のミットに納まった。

「「「「「「「「「「「「待てこらぁぁぁぁぁ！！！！」」」」」」」」」」」」

当然、亡国陣から怒声が上がる。政志にボールを投げ返しながら、夜明は面倒くさそうに亡国陣のベンチを見る。

「何だようるせぇな。試合中は静かにしろよ。ったく、これだから不良は…」

「不良云々以前の問題だろ！　今のは完全にデットボールだろ！？」

夜明はニヤリと笑って問い返す。

「ほう。なら、打者にぶつかったボールはどこに消えたんだろうな？」

そう言われると返す言葉がない。なんせボールは一個、キチンと夜明のミットに納まったのだから。といっても話はそこで終わるわけが無く、暫く平行線を辿ったが、結局政志の魔球、ファング球（ボール）は使用禁止となった。まぁ、当然と言えば当然である。

「禁止されちまった以上仕方ない。正攻法で勝負するしかないだろ」

一回の裏、愛絵子高校ベンチである。ガシガシと頭を掻きながら、太陽はそう言うのだ。

「正攻法と言っても、野球では向こうに一日の長がありますよ。流石に化物じみた身体スペックを持ってるだけのこっちは少しきつい

んじゃないですか？」

と、ユウは言うわけだが、ファング球（ボール）を禁止された政志はストレートのみでこの回を一点に抑えた。それを考えると、結構いけそうな気もする。

「でも、政志の腕が最後までもつかどうか…」

「そりゃ、そん時に考えればいいだろ。一番バッターアル！」

「おうよ！」

太陽の呼びかけにアルは元気良く応じる。

「三点取って来い」

「一人じゃ無理だから」

「二点なら」

「だから無理だっての。アホやっとらんで行って来い！」

真剣な顔のアルをベンチから蹴り出し、夜明は太陽を引っ叩く。アルはバッターボックスに入る前に調子を確かめるように担いでいったものを一振り、

「来いやこらぁ！　成層圏の向こう側まで狙い撃ってやるぜ！」

勇ましくピッチャーを睨みながら構える。だが、その手にあるのはバットではなくスナイパーライフル。その後、三振してきたアルが

全員にボコボコニされたのは言うまでも無い。

とまぁ、野球ど素人丸出しのＩＳ組だが、異常な身体スペックをフルに活用して亡国機業高校に一歩も引かぬ試合を展開していた。

少しばかりコントロールに難があるが、政志は一回以降から変らぬ剛速球を投げ続けていた。時々、強い当たりを飛ばされることもあるが、それを追う守備勢の頑張りも相当なものだ。サードの一夏が痛烈な当たりを逆シングルで捌き内野ゴロにし、レフトの麗我はホームラン確実と思われたボールを、フェンスを三角跳びしてキャッチする。

さっき、バットと間違えてライフルを持っていき、挙句三振するという失態を見せたセンターのアルはグラウンドの端から、ホームまでワンバウンドもさせずにホームに返球する特大レーザービームを見せた。そして、攻撃面でもＩＳ組はその人外っぷりを遺憾なく発揮した。

レインは当たりこそ大きくないが確実にヒットを打って出塁して流

れを作る。また、ジークと終は打率はそこまで良くないが、当たれば確実にホームランを放ち、唯は打ったボールを相手の守備陣にぶち当てると言う離れ業を披露して相手に戦慄を走らせた。

ベンチにいる椛も活躍していた。相手の心を抉るような言葉の数々を放ち、戦意を大きく下げている。

ー何で貴方達の高校はあんなに制服がダサいの？　正直言って、あんなのを着てる貴方達の神経が分からないわ。駅からも遠いし、良いとこなんて一つも無いじゃないー

応援そっちのけで微塵も関係のない罵倒を浴びせ続けている。

とまぁこんな具合にＩＳ組は有利な流れを作り、十対七という大健闘で試合を終えた。

「くそっ、愛絵子学園の奴ら、この仮は必ず返してやっからな」

三下じみた捨て台詞を残し、亡国機業高校のオータムは野球部を引き連れて帰っていった。

試合開始！！（後書き）

長らくお待たせした割にはさっくり終わらせます。まぁ、ご了承。

学園祭　そうだ、俺たちが仮面ライダーだ！

祭である。愛絵子学園文化祭の当日だ。如何にも手作り感満載の小ぢんまりしたアーチが微笑ましい。普段は学生と教員、そして来賓くらいしか通らない校門も、今日ばかりは父兄たちが潜っている。

「愛絵子学園文化祭、か…」

と、ここに一人、校舎から醸し出される楽しげな雰囲気にそぐわない人物がいた。と言うか、どっからどうみても亡国機業高校のオータムである。彼女の背後には同じく亡国機業高校の男が二十五人。オータムは忌々しそうにアーチを見てから、今度は校舎に視線を移し口元に歪んだ笑みを貼り付けさせる。

「こいつがあれば、あいつらに…派手にやるとするか」

「おぉ～、流石に文化祭ってこともあって皆楽しそうだね～」

頭につけたメカメカしいウサ耳を揺らしながら歩くのは愛絵子学園校長、篠ノ之束と教頭、更識楯無である。

「高校生活でたった三回しかない文化祭ですからね…本当なら私も夜明と一緒に学園祭を楽しむはずだったのに」

益体の無いことをぶつぶつと呟く楯無に苦笑いしながら、束は各クラスの出し物を見て回った。廊下で擦れ違う、走ってる生徒達に注意をしつつ向かうは三年のクラス。

「さて、どんなのがあるかにゃ～」

「ま、ウチの生徒達はスペックがかなり高いですからね。それなりに期待してもいいと思いますよ」

そんなことを話しながら二人は端のクラスから覗いていった。

まずはAクラス。様々な色のペンキをぶちまけたような壁画、一見、子供の落書き以下に見えるこの絵、実はある角度から見るとちゃんとした絵になるというトリックアートになっているのだ。

ちなみにテーマは『芸術はエックストリィィィィム！！！』であ

る。

「ピカソもビックリな抽象画かと思ったけど、まさかトリックアートだったとは…束さんも予想外だったよ」

「本当ですね…ただ、少しあの絵の説明をする子達の目が少し狂気じみてて怖かった」

こんな感じにクラスの出し物に驚嘆しながら歩く事数分、二人はとうとうＩＳ組の前にたどり着いた。

「「……」」

のだが、模擬店やらお化け屋敷やら、何かしらの店を出してるはずの教室はもぬけの殻。代わりとでも言いたいのか、教室の真ん中には机が一つ、そして机の上に置かれた紙。二人は無言のまま紙を手に取り、紙面に視線を走らせる。

『三年ＩＳ組ゲーム　皆を探し出せ！　学園中でそれぞれ思い思いの店をやっているＩＳ組メンバーを探し出し、ゲームに勝利して賞品をゲットしろ。尚、メンバーがどこにいるかは自分で探すこと』

「…良く言えば個人の自主性を重んじて」

「どの角度から解釈しても手抜きだよ」

楯無の良心的な見方を束はばっさり斬り捨てる。紙を握り潰し、束は楯無を振り返る。

「一応聞くけど、ここってどこ？」

「三年ＩＳ組です」

「一応聞くけど、担任って誰？」

「太陽ちゃんです」

「シメちゃう？」

「あぁ～、返り討ちにあうのが落ちだと思いますが…やってみましょう」

「んで、私に何の用だ、校長ア～ンド教頭？」

数分後、二人は目的の人物、夕暮太陽を見つけた。相変わらずの炎を連想させる紅のスーツ。口に銜えたタバコ型チョコ。普段と違う点があるとすれば、斜めから被せるように頭に乗せられた仮面ライ

ダーのお面、両手に握られた焼きモロコシ、そしてベルトに挟まれた学園祭のしおりだろうか…。

「ほ～、学園祭を全力で楽しんでるようで何よりだよ」

「まぁ、こういう行事は全力で楽しむ主義なんで…どうせ、ウチのクラスの奴に文句言いに来たんでしょ？」

「分かってるなら何でそんな悠長に構えてられるのかな？　かな？」

全て分かってますと言わんばかりの表情で、太陽は焼きモロコシを齧る。額に青筋を浮かべた束、怒りの余り口調がおかしくなってる。後ろから楯無が束を羽交い絞めにしながら宥め、太陽に視線を送った。

「まぁまぁ、落ち着いて校長…太陽ちゃん、流石にあれはどうかと思うよ。教室には何も無くて、代わりと言っちゃあ難ですが、見たいな感じで紙があるだけって…」

「と言われてもね。あの個性が核爆発起こしてるような連中に戦闘以外の協同作業をしろってのははっきり言って無理でしょ。ほとんどが一歩間違えれば社会不適合者みたいな奴らだし」

確かに。納得出来る部分しかないのか、束も楯無も腕を組んで黙り込んでしまう。一方、太陽は食べ終わった両手の焼きモロコシを近くのゴミ箱に投げ込み、指についたタレを舐めながら歩き出した。

「ま、とりあえず見に行きましょうや。幾らあの連中でも、そこまでぶっ飛んだものはやってないでしょう」

「「……」」

「誠にすみませんでした。全てはあの連中を甘く見ていた私のミスです」

絶句する校長&教頭。二人の足下には土下座する太陽の姿が。このカオスな状況を作った原因は二人の視線の先にある。ＩＳ組所属、ラウラ・ボーデヴィッヒと音梨椛がオーナーママを務めるクラブ、その名も『ＴＨＥボッタクリ』。とんでもない名前だ。そして二人の目の前に正座させられている箒を除くＩＳ組女子勢。

「いいか、この店のコンセプトは『Ｙｅｓ　ボッタクリ　Ｎｏ　タッチ』だ。店に来る男共を人間だと思うな、金を貢ぎに来た豚だと思え」

「家庭がどうとか、懐具合は大丈夫なのかなんて情けは捨てなさい。毟り取るだけ毟り取って、その後はポイよ」

二人して凄い事言ってる。とても、高校生の言う台詞だとは思えない。いや、本業でお水をやってる女性達だってこんな過激な事は言わないだろう。そんなの無理！　と首を振るセシリア達にラウラと椛が殴る、蹴るなどの鉄拳制裁を執行していると、ボーイの格好（無理矢理着せられた）をしたユウが、天井に吊るされたミラーボールで劇画チックに彩られた教室から頭を覗かせる。

「あの、そろそろ戻ってきてもらえませんか？　予想以上にお客が来てて、他のクラスの女の子達だけじゃ回らない…って太陽先生。何でここに？」

ユウの言葉に、漸くラウラ達は太陽、束、楯無の存在に気がつく。地獄に仏と言わんばかりに、セシリア達は三人の脚に縋りついて助けを求める。

「助けて先生！　このままじゃ私達、十六の若さでこの世の汚い部分を知っちゃう！！」

「と言うか、何でこんな無茶な企画を通したんですか！？」

「男の人の話し相手なんて無理ですぅ～！」

ななせ、楓、和花を筆頭に騒ぎ出す。

「あぁ～。まぁ、その件に関しちゃしっかりラウラと椛の企画を見てなかった私のミスだな、すまん…んじゃ、次行こうか」

太陽、彼女達をあっさり見捨てる事に。さっさと早歩きで去っていった太陽の後ろ姿に救いを求めるも、ラウラと椛に引きずり戻され

る女子勢。引き攣った笑みを浮かべる楯無の隣りでキョロキョロ周囲を見回していた束がユウに問う。

「ユウちゃんユウちゃん。箒ちゃんはいないの？」

「箒ですか？　箒はクラスで唯一の恋人持ちと言う事で、一人だけ助かりました」

「何だ、ならどうでもいいや」

興味を失い、束は楯無を伴って太陽の後を追った。

続いて現れたのは『織斑一夏、箒のお好み焼き屋』と言う名の屋台。箒の前に篠ノ之姓がないのがミソだ。並んでる客の数から想像するに、かなり繁盛しているらしい。忙しく鉄板の上でコテを動かす一夏、お客を整理している箒。忙しそうだが、二人ともとても楽しそうだ。見ててとてもほのぼのする光景だが、それをぶち壊しかねな

い人が約一名。

「離せ貴様ら！　私は、私は弟についた害虫をこの世から消し去らねばいけないんだ！！」

「まぁまぁ、とにかく落ち着きなさいよ理事長」

「太陽ちゃんの言うとおりですよ、学園祭で殺人沙汰が起こるなんて洒落になってないですって」

太陽、楯無、束の三人がかりで抑えられてるのはＩＳ学園理事長織斑千冬。その手には織斑家に代々伝わる家宝の刀、『雪片』が握られている。箒を切り殺そうという魂胆だろう。一時、騒然となったが、その場は太陽は千冬を気絶させることでどうにか納めた。

「つ、疲れた…箒ちゃんの元気な姿も確認できたし、束さん的にはもういいかなと思うんだけど…そう言えばよっくんは？」

「夜明なら他の面子と一緒に学園祭の警備に行ってます」

『こちら校舎西側異常なし』

『校舎東側、同じくだ』

『校舎北側、同じく』

「う～し、分かった。引き続き頼むぜ唯、麗我、レイン。屋上から何か見えるか、アル？」

『今のところは別に怪しそうな人はいないな』

そうか、と返しながら夜明は携帯を閉じ、ポケットに突っ込む。文化祭に店を出してない彼らはアルバイトと言う名目のもと警備をしていた。まぁ、警備と言っても文化祭ということでテンションが上がった生徒を注意するくらいしかやることがないが。

「にしても平和だな。何か怪人とか出てこないのかよ？」

「政志、お前は学園祭に何を求めてんだ？」

警備そっちのけでポータブルブルーレイプレイヤーを操作しながら変なことを言う政志。今見てるのが仮面ライダーWであるためか、そういう展開がお望みらしい。夜明がため息を吐くと、不意に携帯から着信音が流れてきた。開いて画面を確認すると、屋上から監視してるアルからだった。

「アルか。どうした？」

『夜明、かなり面倒なことになってる。すぐに政志と一緒に校門まで来てくれ』

「面倒なこと？」

『亡国機業』

それだけで大方の現状を理解した夜明は通話を切り、携帯をしまいながら政志を振り返る。

「行くぞ」

「お、喧嘩か？」

「亡国機業が来たんだと」

すっと政志の目が細くなった。

「ウチの学園祭に遊びに来た…わけないか」

「分かりきってること言ってんじゃねぇよ」

校庭。オータム率いる亡国機業男子生徒二十五人と、夜明を筆頭としたＩＳ組の面々が対峙していた。

「と言うか、お前も暇人だよな。喧嘩でボコボコにされて、その次は野球でボロボロに負けて、それでもまた来るんだから」

ある意味、見上げた根性である。呆れとも感心ともつかない表情で夜明が視線を送っていると、オータムが不気味に笑い始めた。

「へっ、そんな余裕ぶっこいてられんのも今の内だけだぜ。今日こそ、手前らをぶっ潰す！！　行くぞお前らぁ！！」

叫ぶオータム。後ろに控えている男子生徒たちは大声で応えるでもなく、ＵＳＢメモリを大きくしたような何かを取り出しながら、コネクタみたいな刺青を露にさせる。

『Ａｃｃｅｌ！』

『Ｂｉｒｄ！』

『Ｃｙｃｌｏｎｅ！』

『Ｄｕｍｍｙ！』

「Fang」!
「Gene」!
「Heat」!
「Iceage」!
「Joker」!
「Key」!
「Luna」!
「Metal」!
「Nazca」!
「Ocean」!
「Puppeteer」!
「Queen」!
「Rocket」!
「Skull」!
「Trigger」!

『Ｕｎｉｃｏｒｎ！』

『Ｖｉｏｌｅｎｃｅ！』

『Ｗｅａｔｈｅｒ！』

『Ｘｔｒｅｍｅ！』

『Ｙｅｓｔｅｒｄａｙ！』

『Ｚｏｎｅ！』

渋い音声が流れ、男子生徒たちはコネクタにＵＳＢメモリ、あらためガイアメモリを挿入する。姿形が揺らめき、そこに怪人の一団が出来上がる。余りに現実離れした光景に流石のＩＳ組一同も唖然。

「……おいおい、どこの日曜朝八時半の番組だよ」

いち早く正気に戻ったジークが冗談めかして言う。目の前に現れた怪人たちに恐れず尚対峙し続けているのはＩＳクオリティ。

「んで、どうするよ？　見てくれだけって訳でもなさそうだぜ、あいつら」

このまま戦えば怪我人が出るのは確実。と言うか、怪我で済むかかなり疑問だ。かと言って、逃げ出すなんて選択肢はこの連中の中に存在しない。さてどうしたものかと頭を悩ませていたその時、どこからともなく、オータムと夜明たちの間に割って入るように線路が現れた。

「「「「「……は？」」」」」

驚きの連続。線路は空から伸びていた。線路が突き出ている部分が光ったかと思うと、今度は巨大な電車が走ってくる。慌てて後ろに下がる夜明たちの眼前で、電車は音を立てながらゆっくりと止まった。

「怪人の次は電車かよ」

もう、呆れることさえ面倒になり、終が投げやりにため息を吐く。

「……っと、ついたんか？　いや～、にしてもホンマに次元を超えて別世界に移動するなんて……流石ドクター、凄いマッドサイエンティスト振りやな」

電車のドアが開き、中から怪しげな関西弁を使う腰まである長い青髪をした青年が降りてきた。

「んだよ、唯の人間かよ」

「政志、お前は何に期待してたんだ？」

青髪の青年は夜明たちに気づくと、笑みを浮かべながら歩み寄っていった。

「おぉ～、ホンマに政志達がおるなぁ。馬鹿も相変わらず馬鹿面やし、夜明に太陽もいるやないか」

「お前、誰だ？」

警戒心を露にする夜明に、青年は相変わらず笑みを浮かべながらスーツケースを渡した。

「色々面倒やから後で説明するわ。とりあえず、これ使ってあいつら倒してや」

夜明のを含め、計十四個のスーツケースを置いていく。ほなな、と軽く手を振り、青年は電車に乗った。大きな音を上げ、電車はそのまま線路の上を走っていき、空の中に消えていった。

「何だってんだ一体？」

電車が消えていった空を見上げながら、夜明はスーツケースを開いてみた。中には一本のベルト、電車のパスみたいなのが納まっている。

「……いや、まさかな」

とりあえず、お約束だろうと腰にベルトを巻きつけ、

「変身」

するわきゃねぇじゃろがい！　と心の中で突っ込みながらパスをベルトにセタッチ。案の定、何も起こるわけ、

『Ｄａｙｂｒｅａｋ　Ｆｏｒｍ』

…あった。はい？　と疑問符を浮かべる夜明の周囲を駆け巡るように光が走り、操行となって身体の各部分に装着されていき、顔に翼のような仮面が展開される。どっからどう見ても仮面ライダーです。

「差し詰め、仮面ライダーデイブレイカーってとこだな」

再び一同が唖然とする中、唯一人冷静に政志は変身後の夜明をそう呼んだ。それから、嬉々としてスーツケースに手をかける。こういうのが好きな政志にとって、凄く興奮する展開なのだろう。

「おい、お前らも行くぞ！」

政志に促され、戸惑いながらも一同はベルトを取り出す。ベルトを腰に巻きつけ、ツールを構えながらとりあえず叫んでみる。

「「「「「「「「「「「「「「変身！！」」」」」」」」」」」」」」

『レイヴン！　ウルフ！　タイガー！』

『ゼウス！　ポセイドン！　ハデス！』

『Guardian！』

『スコーピオン！　イーグル！　パンサー！』

『Rebellion！』

『Artemis　Form』

『Sky　Form』

『Lifle！』

『Bullet!』

『Destroy!』

『Justice! Believe!』

『Diabolus!』

『Walkure Form』

スーパーヒーロータイム!!（檜山修之風）

思いついた（前書き）

劇場版『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ ｎｉｇｈｔ －ＵＮＬＩＭＩＴＥＤ ＢＬＡＤＥ ＷＯＲＫＳ』の士郎とアーチャーが戦ってるシーンを見て思いついた。ま、不屈の翼の“ＩＦ”程度に読んでください。

思いついた

夜明は膝を突きながらも、倒れそうになる身体を必死で支えた。今、確かに見えたのだ。燃え盛る炎、数多の死屍。そして死体の中心で泣き叫ぶ銀髪銀眼の男の姿を。

「今、お前は見たはずだ。未来に待ち受ける現実を。下らぬ誓いに囚われ続け、走った男の末路を」

背後に立つ『銀の男』の言葉が突き刺さるように背中に投げかけられた。歯が軋むほどに食い縛りながらゆっくりと立ち上がった夜明は咆哮を上げ、振り返り両手に握ったスターライザーを振り抜いた。初撃を避けた『銀の男』は夜明が握っているのと全く変りの無いスターライザーで夜明の連撃を受け止める。

「お前は本当に視界に映った全ての人間を救う心算か!?」

「心算じゃない！　絶対に救うんだ!!」

切り結びながらも言葉による応酬を続ける二人。

「そうだろうなぁ！　何故ならそれだけがお前にとって、唯一の感情だからだ!!」

「何が言いたい!!」

「お前は恐れていただけだ!!」

『銀の男』の攻撃をかわし、追撃を迎え撃つ。

「かつて目の前で目の当たりにした『他人の死』が余りにも恐ろしかったから、もう見たくないと思っただけだ……貴様の誓いは不屈の覚悟から生まれたものではない、お前が『他人の死』を直視しないために作った逃げるための目隠しだ！！」

「違う！！」

飛び散る火花。ぶつかり合うようにくっつき、弾かれるように離れながら互いの叫びを乗せた斬撃を叩きつけ合う。

「他人の死を見たくないがために視界に映った人全てを助けねばならないと強迫観念に突き動かされてきた！　それが破綻してるとも知らず、ただひたすら走り続けた！　だがそれでも聞こえる視界の外からの『死』の叫びに空虚さを覚えた！」

「……う」

「目の前の人間を救っても、お前の目の届かぬ場所で数十倍の人間が死んでいく！　お前のやっている事は全て偽善だ！！」

「……がう」

「空虚さを抱きながら尚走り、偽善を貫くと言うのなら、それでしか自分が生きた証を確かめられないと言うのなら、抱いたまま溺死しろぉ！！」

『銀の男』の一撃が袈裟懸けに夜明を切り裂く。焼け付くような痛みが走り、傷口から生暖かい血が噴き出す。一瞬視界が暗転するが、夜明は倒れまいと足を踏ん張る。項垂れるように、地面へ滴り落ち

ていく血を見ながらも、夜明は自分の中に言い様の無い力が駆け巡っているのを感じていた。

「俺には貫きたい信念がある」

「お前……！」

絶対に誰も泣かせない信念。

「俺には背きたくない誓いがある」

「まだ……」

視界に映った人、全てを救う誓い。

「俺には護りたい世界がある」

「諦めないと言うのか！」

自分と一緒にいる人達がいる世界を護る。

「そいつ等が在る限り、俺は、俺の魂（つばさ）は……不屈だ！！！！！！！」

血が噴き出すのも構わず地を蹴り、『銀の男』に切りかかる。

「誰かを救えると言うのなら、負けてもいい……けど、自分には負けたくない！！」

激しく呼吸を乱しながら、猛火の如き勢いで『銀の男』を圧倒していく。顔に焦りと戸惑いを浮かべる『銀の男』にスターライザーを

激しくぶつける。

「……んかじゃない！」

「敵わぬと知りながら尚挑み続けるその愚かさ！」

「間違いなんかじゃない！！」

『銀の男』が振り下ろしたスターライザーを受け止め、弾き飛ばし肉薄する。スターライザーを連結させ、連結部分を両手で握り締めた。

「俺が今までやってきたことは、これからやっていくことは！　間違いなんかじゃないんだよぉ！！」

ただ前を、目の前に立つ、驚愕を顔に浮かべた『銀の男』に向けてスターライザーを突き出した。そして……。

「っていう夢をみたよ」

思いついた（後書き）

『銀の男』

もしかしたら存在するかもしれない未来の夜明の“ＩＦ”。目の前にいる人々を救っても、己の見えないところで更に多くの人々が死んでいくことに絶望した男。そうする内に過去の自分を憎むようになり、殺そうとした。

まんまアーチャーやんけ…

クライマックスだぁぁぁ！！！！（前書き）

太陽が言ったら洒落にならない台詞を考えてみた

「どうした、ＡＤＶＥＮＴ（アドベント）　ＣＨＩＬＤＲＥＮ（チルドレン）？」

「調子はどうだ？　満身創痍だな、腕が千切れてるぞ？」

「それがどうしたクソ野朗。高々、腕一本が千切れただけじゃないか」

「まだ私には一本の腕と二本の脚、頭が、魂が残っているぞ」

「さぁ、私の腕を切り落として見せろ脚を磨り潰して見せろ頭を捻じ切って見せろ魂を踏み躙って見せろ早く早く早く早く！！！！」

クライマックスだぁぁぁぁ！！！！

「ほぉほぉ。何とも面白い事になってるじゃないか」

あっつ熱のたこ焼き（出来立て）を口の中に詰め込みながら、太陽は屋上からそのテレビとかだったら普通、現実としては異様な光景を見ていた。対峙する怪人と正義の味方達。周囲にいる父兄たちは戸惑いの局地にいることだろう。子供達は大喜びしてるが……。

「お、始まったか」

戦闘が始まった。襲い掛かる怪人たち、迎え撃つ仮面ライダーに変身した生徒共。特撮アニメ撮影現場に来た気分で太陽はのんびりとその光景を眺めていた。

「夜明のデイブレイク、一夏のレブルガー、楓のゼウセース、椛の守護者（ガーディアン）、終のスルンサー、ジークの反逆（リベリオン）、ユウのアルテミス、麗我のスカイ、アルの狙撃銃（ライフル）、レインの弾丸（バレット）、政志の破壊（デストロイ）、唯の正義（ジャスティ）を信じる（スピリーヴ）、ななせの悪魔（ディアボロス）、和花のワルキューレ……オールライダーかっての」

私も変身したいな～、とか思いながら観戦しているうちに、夜明達は既に怪人全員を倒していた。すると、オータムが白いガイアメモリを取り出し、腰に巻きつけたベルトに挿入すると『Ｅｔｅｒｎａｌ』の音声。オータムは黒いマントを纏う白いライダーへと変身した。しかも、今度は別の女の子が出てきて、話をややこしくする。

「ありゃ亡国機業高校のＭか？」

Mは何やら目まぐるしく色を変えるガイアメモリを取り出しながら、自身は腰にオータムとは違うタイプのベルトを装備した。

『Ｃｈｉｍａｉｒａ』

Mがガイアメモリを投げると、ドーパント達が融合し始め、これまた形容しがたい生物へと進化する。

「おぉ、何という超展開！　夜明達はどうやってこのピンチを乗り越え「おい」……お前は？」

振り返ると、そこには夜明達にベルトを渡した青髪の青年が立っていた。

「オータムが、エターナルだと！？」

「これは予想外ですね」

「克己の兄貴に謝れこの阿婆擦れ！！」

一夏とユウが驚いている横ではどういう訳か、ジークが悪鬼羅刹のように怒り狂っている。対し、仮面ライダーエターナル改めオータムは悪役の高笑いを響かせながら天を仰ぐ。

「うるせぇ！　原作では結構強いはずなのに回ってくる役目は全部噛ませ犬！　オマケにどの二次創作でも俺が活躍する例がねぇ！！　漸く掴んだ活躍の予感、そして今夜限りのトップステージ、俺は輝くぜぇぇぇ！！！！」

オータムの隣りに立つMは熱くなる目頭を抑えながらベルトにパスをセタッチさせる。

『Ｈｉｊａｃｋ　Ｆｏｒｍ』

「おいおい、今度はMまで変身したぞ。オマケにドーパント達も変な化物に変っちまったし……」

「どうすんだ？」

政志、終の問いに夜明は頭を掻く。

「普通、こういう場面になったら最強フォームが出てきてサクーっと勝てるんだけど、そんな上手くいくわけ「あるでぇ～」お前は……」

目の前に何か降ってきた。その何かが太陽で、肩に担がれたのがさっきの青髪の青年だと言う事に気付くのに時間は掛からなかった。

「まぁ、説明して欲しい事とか、納得できひん部分多々色々あるやろうけど、作者がさっさと本編を進めたいと言うとるから、ちゃっちゃと終わらせるで～。夜明、これ。ほな太陽、後頼むで」

夜明に携帯電話のような物を渡し、今度こそ青年は去っていった。夜明達が何ともいえない雰囲気を醸し出していると、太陽は腰にベルトを巻いて言葉を投げかけてくる。

「お前ら、訳が分からないだろうが文字通りのクライマックスだ。派手にいくぞ、変身！」

『Ｔｗｉｌｉｇｈｔ　Ｆｏｒｍ』

「太陽まで変身しやがった……えぇい、こうなりゃヤケだ、やってやるぜ！！」

ほとんどヤケクソ気味に夜明は携帯を開き、ボタンを適当に押しまくる。するとあら不思議、携帯から何やら音楽が流れてきた。

『Ｄａｙｂｒｅａｋ　Ｒｅｂｅｌｌｉｏｎ　Ａｒｔｅｍｉｓ　Ｄｅ

ｓｔｒｏｙ　ＳｕｐｅｒＲａｇｉｎｇ　Ｆｏｒｍ』

「あ？」

「い？」

「う？」

「え？」

「「「「おぉぉぉぉ！！！！？？？？」」」」

音声が響いた瞬間、ジーク、ユウ、政志の体が幽霊のように半透明になり、夜明へと迫る。逃げ出そうとするがそれよりも早く三人に捕まり、夜明は最強形態、『超不屈（スーパーレイジング）』へと変身した。両肩、胸部に装備されたそれぞれの仮面。何を言っていいか分からず、呆然とする本体（夜明）。

『おい、何か合体したぞ』

『四人分の精神が一つの体の中に納まった状態……気持ち悪い』

『流石にこりゃキツいな。さっさと終わらせちまおう』

「お、おう。とりあえず、不屈キターぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

内側から聞こえる三人の声に頷きながら、夜明は大きく両腕を上げながら叫んだ。その光景を、残された面子は放心状態で見ている。

「私はM、夜明……と十三人はオータムをやる。残りはあの気持ち悪いのを倒せ」

太陽の指示の下、最後の戦いが始まった。

「過去が消えていくのなら、俺はせめて明日が欲しい。だから足掻き続けているんだよ！」

「何を言ってるんだこのバカは……何れ決着をつけるぞ」

気絶したオータムを引きずってMは去っていった。その後ろ姿を見送り、夜明達は文化祭へと戻っていった。

クライマックスだぁぁぁぁ！！！！（後書き）

まず最初に一言

すんませんでしたぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！

キャラを借りておきながらこの酷い結末。えぇ、もうホントにすみませんでした。

言葉を飾っても意味は無いので、謝罪は以上です。

これにて三年ＩＳ組　太陽先生は終わります。次回からは六巻からです。では！

やっぱり夜明は夜明です（前書き）

やっと本編だ……前話、色々と言いたい事は多々あるでしょうが、
お付き合いください

やっぱり夜明は夜明です

「俺の誕生日？　んなもん聞いてどうする心算だ？」

寮での夕食。モヘモヘと夜明が平和にハンバーグ定食を食していると、唐突にシャルがそんなことを訊ねてきた。逆に問い返され、シャルは誤魔化すような笑みを浮かべる。

「い、いや、他意はないんだよ！？　ただ、一夏の誕生日が今月の二十七日って聞いて。だったら夜明の誕生日って何時なのかな～っと思って……ね！？」

シャルに相槌を打つセシリア、鈴音、ラウラ。同じ席には更に一夏と箒、太陽も座っている。シャルの言い分をとくに疑うでもなく、夜明は困ったように箸でハンバーグを突いた。

「誕生日ね～……すまんが知らん。俺、捨て子だからな～」

なははと夜明は朗らかに笑うが、周りにいる仲間達は凍りついたように固まる。夜明に誕生日の話を振った張本人、シャルは涙目だ。

「そ、そうだったね。ごめん……」

「へ、何で謝るんだ？　あぁ、そゆこと。気にすんなよ。別に俺は親に捨てられた事、何とも思っちゃいないし。それに家族もいるからな」

シャルの頭を撫でつつ、夜明は微笑を浮かべながら自分の実家である月光組での生活を思い出した。が、彼の顔に浮かんだ微笑は徐々

に引き攣ったものへと変っていく。

「どうかしたのか？」

「いや、よくよく思い出してみれば、月光組は毎日がお祭り騒ぎだったからな」

毎夜、浴びるように酒を飲みまくる組員たちと現組長夜雲。暴れる彼らを大人しくするために駆けずり回る銀河と自分。どれ程の騒ぎっぷりだったかは、夜明の顔が青くなってることから推して計るべし。

「それでしたら、一夏さんと一緒に誕生日を祝えばよろしいのでは？」

セシリアの提案に全員が手を打つ。一夏とは実の兄弟のように育ったのだ、だったら誕生日が一緒でもいいじゃないか！　そう言う訳で、本人の承諾も得ないで女性陣は誕生日にどうするかを話し始めた。ちなみに太陽はと言うと、

「……ＺＺＺ……ＺＺＺ（スピ～）」

昨晩夜更かしをしていたらしく、箸を銜えたまま器用に鼻提灯を膨らませながら寝ていた。ぺちぺちと頬を叩いて太陽を起こしながら、夜明は額を付き合わせる女子達を見る。

「お前ら。盛り上がってること非常に結構だが、当日にあれがあることを忘れてねぇか？」

「そうそう。ＩＳ高速バトルレース『キャノンボール・ファスト』

がある日だぜ」

夜明と一夏の言葉に全員がそう言えばという表情を作った。ＩＳによる高速バトルレース『キャノンボール・ファスト』。本来なら国際大会として開催されるのだが、ここＩＳ学園がある市では特別イベントして行われるそれに生徒が参加することになっている。と言っても、専用機持ちとそうでない者の機動力が違いすぎるため部門が分かれたりしてるが。

「普通のバトルとは違うが、これはこれで面白そうだな。おい、起きろ太陽」

「うにゅ～、バナナはおやつに入ります……」

「どんな夢見てんのよこいつ……」

頬を引っ張られても爆睡し続ける太陽。鈴音の問いに答えるものは誰一人としていなかった。

「ま、何にせよ明日からキャノンボール・ファストに向けての授業が始まるんだ。お互い、頑張ろうぜ！」

一夏のこの一言で、とりあえずキャノンボール・ファストに関しての話は終わった。そろそろ皆、各々が頼んだメニューを食べ終えていたが、太陽は相変わらず眠ったままで、半分以上残っていた。

「いい加減起きろ太陽。そしてさっさと食べろ」

そんなことを言うならお前が食べさせろと言わんばかりに、太陽は起きてるのか寝てるのか分からない目のまま夜明に箸と茶碗を差し

出す。夜明は呆れ、一夏と箒は苦笑、セシリア達はどす黒いオーラを放ち始めた。

「お前って奴ぁ本当に……ほれ」

箸と茶碗を受け取り、ひな鳥よろしく口を開く太陽にご飯を食べさせてやる。太陽は口を小さく動かし、長い時間をかけて口の中のものを咀嚼した。

「美味いか？」

「……（ニヘラッ）」

肯定の笑みを浮かべる。

「そりゃ良かった……さて、俺の後ろから痛いほどに殺気を放つ四人をどう捌いたもんか」

「あの後、彼女たちが恋人と言う立場を利用して無茶苦茶な要求をしてくるのは目に見えていたので、俺は命からがら部屋へと戻ってきたのであった」

「誰にいってるの？」

「気にしたら負けだ、とだけ言っておく……と言うか、何でお前が俺の部屋にいんだよ楯無？」

部屋に戻ってきた夜明だが、中には既に先客がいた。深々とため息を吐きつつ、夜明は侵入者、更識楯無にジト目を送るのだが、彼女はあっけらかんとした笑みを浮かべ、

「生徒会長＋恋人の特権♪」

等とほざきやがった。お忘れの方々も多いだろうが、彼、月光夜明は複数の女子達と恋人関係にある。これからも増えていくだろうが……それはその時書くとしよう。疲れ切ったようにベットに腰掛けると、寝転がっていた楯無が素早い身のこなしで擦り寄ってくる。

「んで、今度は何の用だ？　既に何百回言ったかは分からないが、

ピッキングは犯罪だぞ」

「恋人に逢いに来るのに理由が必要なの？」

憎まれ口を叩いた心算だが、思いの外真剣に問われたので、夜明は少しばかり気恥ずかしそうに楯無から視線を逸らした。

「と、恋人をからかうのは今度にするとして、ちょっと真面目な話ね。ついさっき、非公式の情報だけど、アメリカ軍のＩＳ保有基地が襲われたらしいわ。しかも、その基地に保有されていたＩＳは『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』」

「夏の合宿の時に俺たちが止めたあれか……確か、コアの半永久凍結が決定されてたんだっけか？」

頷く楯無。ちなみにもう一体の暴走機『終焉の騎士（ナイト・オブ・オメガ）』のコアは、特殊装備『次元超越弾』を扱えるのが終焉のコアしかないと言う理由で、稼動制御がかけられてるに留まっている。厳しい表情を浮かべたまま、夜明は疑問を口にした。

「その基地を襲ったのは亡国機業（ファントム・タスク）なんだよな？　連中が『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が保有されている基地を襲ったのは偶然なのか？」

偶然であるのならば大きな懸念事項は無い。だが、もしその基地に『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』があると知って襲撃をかけたというのならば話は変ってくる。

「亡国機業はどうやってその情報を突き止めたのかしら？　優秀なバックを味方につけた……？」

「国家の最高機密であるだろう、凍結したＩＳのコアの在り処を割り出すほどのバックか。正直、考えたくないな」

だが、現実に存在するのならば相手をしなくてはならない。

「家の方でも調査させてみるわ。ただ、どこまで調べられるかが問題ね」

「無理はしないでくれよ」

「心配してくれてありがと……それはそうと、セシリアちゃん達に追い回されるなんて何やらかしたの？」

思わぬところで話を蒸し返され、流石の夜明もずっ転けそうになる。

「こ、ここで思わぬ伏兵。説明しなきゃ駄目……ですよね」

笑顔と言う名のプレッシャーに耐え切れず、夜明は食堂であったことを全て白状。

「成る程……目の前でそんなことされたら女の子は怒っちゃうわよ」

「そんなもんか……女心は分からん！」

「分かろうとする努力をしなさいな。そう言うわけで、早速女心の勉強」

いやどういう訳？　と聞き返す間も与えず、楯無は夜明の掌に何かを転がした。ちっこくて、微かに甘い香りがするそれは……。

「飴玉？　これをどうしろと？」

訊ねれば、眼前に口を開ける楯無。早い話、食べさせろと。

「これのどこが女心の勉強になるんだ？」

疑問を感じつつも、夜明は飴玉を摘んで楯無の口へと持っていく。口元まで運ばれた飴玉を器用に舌で絡め取ると、楯無はそのまま夜明の指に吸い付いた。

「うぇい！？」

驚く夜明を他所に、口の中で飴玉を転がしながら指を舐め、甘噛みしてくる。夜明が動く事もできずに顔を真っ赤にさせているのを視認すると、満足そうな表情を浮かべ音が立つように指を口内から引き抜いた。

「ふふふ、味あわせてもらいました。それじゃ、お客さんも来たことだしお姉さんは帰るわね。ちゃお♪」

機敏な動作で夜明の唇に唇を押し付け、楯無は天井裏へと消えていった。唇に残された微かな甘みを舐めながら夜明は天井を見やる。

「あ、あいつは普段何処から俺の部屋に入ってきてんだ？　段々泥棒じみてきやがったな……つぅか、お客さん……」

絶句する夜明。振り返るとそこには、ハイライトを失った目のシャルが……。

「……何時からいたのでせうか？」

「楯無さんが飴玉を取り出した辺りかなぁ……夜明、君は一体全体何をしてるのかな？　カナ？」

シャルが余りにおっかなかったので、夜明はベットの上でジャンピング土下座を決める。

「すすすすみませんでしたぁぁぁ！！！！！　別に太陽や楯無を特別扱いする心算は欠片もないんです俺はお前のことも心の底から愛してますぅぅぅ！！！！！！」

そのままベットの上でかたかた震えていると、不意にシャルが噴き出した。恐る恐る視線を持ち上げると、可笑しそうに笑っているシャルの姿が視界に映る。

「あはは。夜明ってば普段はいつも飄々としてるのに、こういういうことになるとすぐにあたふたするんだもん。思わずからかいたくなっちゃう」

そう言うシャルの笑顔に邪気はない。どうやら、本当に怒ってないようだ。ホッと息を吐き出しながら姿勢を整えると、シャルは夜明の隣りに座った。

「それで何か用か？」

「うん。ちょっと聞きたいことがあるんだけさ。その前に、夜明って最近耳掃除してる？」

シャルの唐突な問いに首を傾げながらも、夜明はここ最近耳掃除をしてない事を正直に打ち明ける。するとシャルは嬉しそうに、

「それじゃ、僕がしてあげるよ」

何故かシャルの手には一本の耳かきが……。現状が理解できないが、とりあえず夜明は言われるがままシャルの膝に頭を置く。

「痛かったら痛いって言ってね」

「おう……って、何でこんなことを？」

「この間、ラウラと一緒にネットサーフィンしてた時に偶々耳掃除の動画見つけてさ。その動画で耳掃除してもらってる人が気持ち良さそうだったから、夜明にしてあげたいなって思って」

そういうことか、と納得しながらシャルの好意を嬉しく思う夜明だった。

「ラウラなんか自作の耳かき作るって息巻いてたよ」

「それはそれは……」

ナイフで一心不乱に竹を削っているラウラの姿が容易に想像でき、夜明は思わず苦笑いを浮かべた。そのまま目を閉じ、シャルに身を任せる。

「夜明って誕生日に何か欲しい物ってあるの？」

「何だまたいきなり？」

「いや、その、ほら。臨海学校に行く前に夜明からブレスレットも

らったでしょ？　だから、そのお礼を兼ねたプレゼントを誕生日に贈りたいなぁなんて……」

耳掃除を終え、恥ずかしそうに顔を赤らめるシャルを夜明は膝枕してもらったまま見上げる。そのままの体勢で片手を持ち上げ、包むような手つきでシャルの頬を撫でた。

「欲しい物ねぇ……俺にとって、お前らが隣りにいてくれる日々こそが最高の贈り物なんだが」

「……もう、そういうこと真顔で言わないでよ／／／」

言えるからこその夜明クオリティ。恥ずかしさと嬉しさで更に頬を染めるシャルを、夜明はずっと撫でていた。

「でもそれじゃ僕の気が済まないから……今週の週末にどこか駅前に行こうよ。もしかしたら、欲しい物が見つかるかもよ」

「ん……そうだな。特に予定も入ってないし、行くか」

「ほ、本当!?　約束だからね！　ドタキャンとか絶対駄目だからね！」

こうして、シャルにしつこい程に念押しされた挙句に、『指きりげんまん、嘘ついたらクラスター爆弾のーます♪』という恐ろしすぎる指切りをさせられた夜明だった。

乙女達、（いろんな意味での）戦場へ

さて、週末である。ＩＳ第三アリーナ。休日であるにも拘わらず、そこでは多くの生徒達がＩＳの訓練に励んでいた。それは夜明の恋人である彼女も例外ではなく、

「曲がりなさい！」

イギリス代表候補生、セシリア・オルコットも高速ロールからの偏向射撃（フレキシブル）の訓練をしていた。目標であるバルーンのやや上方に向け、スターライトｍｋ？のトリガーを五連続で引く。頭の中に淀みなく流れる川を連想し、曲がれと念じる。内、曲がったのは二発。二発は見事に曲がりバルーンを撃ち抜いたが、残り三発はそのまま直進し、アリーナ天井にある遮蔽シールドにぶつかりそのまま霧散した。

「……五発中ニ発までなら完全に制御できるようになりましたが、決していい数字ではありませんわね」

それに、五発以上となると偏向射撃（フレキシブル）出来るかどうかさえ怪しい。更なる精進を心に誓いつつ、セシリアはブルー・ティアーズを解除しようとする。流石に昨日の夜からぶっ続けで訓練していたので、汗で髪が張り付いて気持ち悪い。

「……」

最後にもう一回、スターライトｍｋ？を構える。そして、

「まっがーれ♪」

五発どころか、十発のレーザーが彼女の意思に従いあらゆる方向に曲がった。何故かこの台詞を言うと、セシリアの偏向射撃の成功率が一気に跳ね上がる。

「……ブルー・ティアーズ待機モード」

寒いを超え、最早痛いとさえ感じさせる冷気を纏いながらセシリアは光に包まれ、ＰＩＣの影響が無くなり地面へと降りた。

「……二度とあの言葉は言いませんわ」

セシリア・オルコット。彼女もまた、誇り高き戦士だった。

「あら、シャルロットさん。こんな朝早くにどこに行きますの？」

「え？　せ、セシリア！？　君こそどうしたのこんな時間に？」

シャワー室へと向かっていたセシリアは偶然にも気合の入った服装のシャルと出くわした。シャル、ここでまさか誰かに、しかも知人に会うとは思っておらずへどもどになる。そんな彼女を、セシリアはじ～っと見ていた。

「セシリア？　その、もう行ってもいいかな？　僕、ちょっと急いでて」

シャルが何か言ってるが、綺麗にスルーしセシリアは相変わらず、まじまじとシャルを見つめ続ける。頭の中にはある公式が浮かんでいた。

余所行きの格好＋この慌て具合＋困った表情×恋乙女の絶対とも言える勘＝……

「誕生日プレゼントを選ぶと言う名目での夜明さんとのデートですわね」

「何で分かったの！？」

恐るべきは乙女の勘である。ハッと口を噤むが時既に遅し、セシリアはジト～っとした目でシャルを睨んでいた。

「抜け駆けとは些か卑劣なのではありませんか、シャルロットさん」

「べ、別に僕はそんなつもりじゃ……」

シャルの返答にセシリアはニッコリと素敵に笑う。

「そ。でしたら、私が一緒に行っても困りませんわよね？」

「ま、まぁそうかな……」

表情を変えずに頷いて見せるが、心の中ではブーイングの嵐。脳内数千万に及ぶシャルロットサポーター達がセシリアに「引っ込めー」とハンドサインを送っている。

「じ、じゃあ後五分以内に準備してね。さっきも言ってるとおり急いでるからさ僕。それ以上は待てないよ」

「五分ですわね。分かりましたわ」

優雅に歩み去っていくセシリアの後ろ姿を見送りながらシャルは小さくガッツポーズを作る。今のセシリアの姿はＩＳの訓練後ということもあり、ＩＳスーツ姿。ＩＳスーツは着ている人の体のラインにピッタリと合うという性質上、脱ぐのに非常に時間が掛かる。それだけでも五分以上は確実に掛かるのに、それに加えシャワー、着替え等々……。男ならパッパッと終わらせるだろうが、女の子である彼女達はそういうことに必要以上に時間を使うため、どう見積もっても二十分はかかる。

（実際、僕も一時間近くかけて選んでたし）

シャルの場合は若干気合が入りすぎているが、好きな相手との買い物なのだからまぁ仕方ないだろう。夜明手作りのブレスレットと一緒に手首につけた腕時計で時間を計る。無理だと分かっていても、こうして待ってる辺り彼女は律儀だ。

（四分四十四秒……四分四十五秒……四分よんじゅうろ）

「お待たせしましたわ」

まさかと思いつつ視線を腕時計か持ち上げる。そこには、

「それでは参りましょうか、抜け駆けをしてないシャルロットさん」

シャワー、着替えはおろか、軽い化粧まで終えたセシリアの姿が。

これにはシャルもグゥの音も出なかったとさ。

再び場面は移り第二アリーナ。第三アリーナでは大勢の生徒が練習していたが、ここではたった一人がアリーナ内の広い空間を占領している。

「……こんなんじゃ駄目だ。もっと強くならないと……」

この学園にたった二人しかいない男子の片割れ、織斑一夏である。アリーナ内には一夏が訓練で破壊した反撃装置つきターゲットの破片が散らばっていた。

「よ～、青春してるか青少年」

気さくな呼び声に振り返ると、そこにはジーンズTシャツ羽織という何時ものスタイルの太陽が立っていた。太陽は腰に手をあて、少しばかり呆れた表情を作り周囲を見回す。

「にしてもまぁよくここまでやったな。普段のお前の訓練からは想像もできないな」

「え、マジで？」

「普段は箒とイチャついてるようにしか見えん」

二人での訓練（と言う名のイチャつき）を思い返し、太陽は苦笑いを浮かべて一夏の頭を小突く。

「イチャつくんなら二人だけの時にしろ。ベットの中であれば尚よし」

「普通、そういうのは男が言う台詞だと思うんだけどな……」

豪快に笑ってみせる太陽。一夏は軽く突っ込みを入れるだけだった。

「んで、どういう心境の変化だ？」

「え？」

「え？　じゃない。箒が心配してたぞ。最近、一夏が妙に険しい表情をするようになったってな」

あ～、と一夏はばつが悪そうな表情を浮かべながら頭を掻く。フッ、と爽やかに笑いつつ、太陽は一夏の肩に手を置く。『私は全部分かっています』と言わんばかりの表情だ。

「分かってるぞ、一夏」

「ま、マジでか！？」

「あぁ……箒に特殊なプレイを迫りたいけど、迫れない。違うか？」

「違うに決まってるだろうが！！」

「うん、知ってる」

一夏の拳を華麗にかわし、太陽は今度こそ真面目な顔を作る。

「ま、言わずとも大方の予想はつくが……アンサラーだろ？」

「……まぁな」

頷きながら、一夏はゆっくりと拳を下ろす。未来での最終決戦。巨大ＡＦ『アンサラー』が地球に落下するのを阻止した夜明、見てる事しか出来なかった自分。友が命を懸けるのを見ている事しか出来なかった、己の無力さを恨むことしか出来なかったあの時。

「もう、夜明が戦ってるのを見てるのだけは嫌だからな……だから、少しでも強くなりたいって思ったんだ……そこまで強くなれるかどうかは分かんないけどな」

「真っ直ぐだな、お前は」

口調こそ呆れているが、太陽の浮かべる表情は柔和だった。

「太陽！　そろそろ行かないか？」

「訓練か一夏？　もし差し支えなければ私も一緒に」

見ると、ピットに普段着のラウラとＩＳスーツ姿の箒がいた。太陽は手を振ってくるラウラに応えながら腰に手をあて一夏を見る。

「一夏。戦場に長くいた人間として一つだけアドバイスしてやる。この世になれるなれないは無い。あるのは零と無限、やるかやらな

いかだ」

何もやらずに零のままでいるのか、何かをやって無限を生み出していくのか？　ただ、それだけ。一夏の肩に手を置き、太陽はそのまま何も言わずにピットへと歩いていた。

「……太陽！」

呼び止められ、太陽は首だけを曲げ肩越しに一夏を見る。

「ありがとな」

一夏の礼に太陽は何か返事をするでもなくニヒルに口元を歪め、片手を上げそのまま去っていった。入れ違いに小走りで一夏の隣りにやって来た箒はラウラと一緒に歩いていく太陽の後ろ姿を見送る。

「そういや、あの二人ってどこに行くんだ？」

「ここに来るまでに聞いた話だと、一緒に夜明への誕生日プレゼントを買いに行くらしいぞ」

「ふ～ん……箒達って仲良いけど、あの二人は特に仲いいよな」

不思議そうな一夏。。箒は思い当たる節があるのか、優しげな笑みを口元に湛えていた。

「ラウラにとって、夜明が初めて恋した異性であるのと同じように、太陽は初めて出来た同性の親友だからな。きっと、同じくらい特別なのだろう」

「親友……か」

呟きながら一夏は広げた掌に視線を落とす。自分は果たして、この手で大切な友を、仲間を、最愛の人を護れるのだろうか？

「いや、違う。護るんだ、絶対に」

だから、強くなろう。拳を握り締める。白式。その装甲は搭乗者の想いに呼応するかのように輝いていた。

「それで、どこに買いに行くんだ？」

「そうだな。やっぱり駅前が妥当だろうな……ってあれは？」

ゲートに向かって歩いていると、数メートル先に見慣れたツインテールがピョコピョコ跳ねているのが視界に映った。

「鈴！　こんな所で何してるんだ？」

「察するに、『キャノンボール・ファスト』専用のパッケージの試運転（トライアル）でもしてたのだろう」

鈴音は振り返ると、笑顔で二人に挨拶を返した。

「おっはよ～太陽、ラウラ。そ、高機動パッケージ『風』の量子変換（インストール）と試運転（トライアル）がついさっき終わったとこ。『出来るだけ早くデータが欲しいから』とか言って、昨日の晩からぶっ通しよ。ほんっと、信じられない」

二人と言う不満の捌け口を見つけ、鈴音は鬱憤をぶち撒けるように話し始める。夜明への誕生日プレゼントを買いに行くとはいえ、特に急いでいた訳でもないので太陽とラウラは鈴音の話し相手になった。

「あ、そうそう。太陽。中国（ウチ）の技術部門の連中から伝言。いい加減、レイジングウィングの『Ｍｏｄｅ（モード）　Ｅｘｅｌｉｏｎ（エクセリオン）』とバルディッシュトワイライトの『Ｍｏｄｅ（モード）　Ｔｒａｎｓａｍ（トランザム）』の技術を世界に公表しろだって」

アラスカ条約か、と太陽は苦々しげに舌打ちする。

「それじゃ、その連中にこう言っておいてくれ。『お前ら無能じゃ例え技術を公表したとしても、再現するのは絶対に無理だからいい加減諦めろカス共』って」

「そんなこと言える訳ないでしょうが！　もっとオブラートに包みなさいよ！」

「？　これ以上、どうやってオブラートに包めって言うんだ？」

どうやら、さっきのが太陽にとって精一杯の遠まわしな言い方らしい。

「太陽が各国のＩＳ技術者達をどう思ってるのか非常に気になるな」

「止めときなさいよラウラ。聞いたら後悔しそうだわ……それよりもあんた達、余所行きの格好してるけど、これからどこか行く……あぁ、夜明の誕生日か」

やはり、彼女もまた一人の乙女であった。かくして、鈴音を加えた二人は駅前へと向かうのだった。

買い物にレッツ&ゴー（前書き）

最近気付いたんだけど、このサイトでＩＳって検索するとこの作品がいっちゃん文字数多いのね。

買い物にレッツ&ゴー

「お気持ちは分かりますが、いい加減にそわそわするのはお止めなさいシャルロットさん。道行く人達が私達に奇異なものを見る目を向けてますわ」

「う、うるさいなぁ。セシリアこそ何回前髪チェックしてるの？二十回目だよそれ」

「み、身嗜みを気にするのは淑女（レディー）として当然の事ですわ」

約束の時刻三十分前である。にも拘わらず、シャル（＋α）は既に集合場所である駅前にやって来ていた。シャルは終始落ち着かない様子でデート（余計なのが一人いるが）の相手を待ちわび、その隣りでセシリアは蒼い二つ折りの手鏡を使って前髪を弄っている。服装や身嗜みに無頓着な太陽やラウラが見たら揃って呆れるだろうが、そこはやはり複雑な女心。愛する男には己の百パーセントを見て欲しいのだ。

「ねぇ、セシリア。この際、お互いで身嗜み整えない？　自分でやってたらずっと終わらないよ」

「確かにそうですわね。それではそうしましょう」

シャルの提案にセシリアは賛成する。向かい合い、互いの服装や髪をセットしていく。漸く納得のいく出来栄えになったのか、二人は向き合ったまま満足そうに頷きあった。が、その満足そうな表情もすぐ崩れる事になる。

「ねぇねぇカノジョ♪　今ヒマ？」

「俺達と一緒にどっか行かない？」

如何にも『遊び人』という風体の男二人が話しかけてきた。ＩＳのお蔭で女尊男卑となったこのご時勢、地位が急転落中の男と言えど、見てくれさえ良ければ女性に可愛がられるようになったのだ。故にこういう、魅力的な女性は自分達を愛してくれると思い込んでる馬鹿が増えたのである。

「約束がありますんで」

「右に同じくですわ」

「そんなこと言わずに遊びに行こうよ」

「俺、向こうに車とめててさ。フランス車のいいとこ一杯教えてあげるからさ！」

フランス車、で二人は反応を見せる。

「日本の公道で燃費の悪いフランス車ですか」

「体力（ねんぴ）の悪そうな貴方達にはお似合いだと思いますわ」

笑顔百パーセントで二人は毒を吐き出す。遊び人×２が若干たじろいだのを横目に見ながら二人はため息を吐く。シャルは『ラピッド・スイッチ』で、セシリアは『偏向射撃（フレキシブル）』で男二人を虐殺する光景をイメージした。そしてどういう思考を経たらそうなるのかは一切合財不明だが、二人の表情から『脈アリ』と判断した男がシャルの肩

に手を置こうとするが……。

「俺の女に何してんだこら」

横から放たれた蹴りで相方を巻き込んで吹っ飛ぶ羽目に。ゆっくりと蹴りを放った脚を下ろしながら夜明は首を捻り鳴らす。

「「夜明（さん）！」」

この時、二人の目には夜明がキラキラと光って見えたとかなんとか。

「あぁいう手合いってのは何時の時代にもいるんだな……ってか、何故にセシリーがいるんだ？」

あの後、突っかかってきた遊び人二人を伸した夜明は不思議そうにセシリアを見る。

「今朝、僕が出かけようとした時に出くわしちゃって。それで一緒に行くってことになったんだ……」

優雅に微笑を浮かべるだけのセシリアに代わってシャルが答える。

ほぇ～、と頷きながら夜明は近くにある時計を確認する。

「そうなのか。それにしてもお前ら、少しばかり早いんじゃないか？　正直、俺よりも先にいるとは思ってなかったんだが」

「「女の子には色々とあるの（あるんですわ）」」

まぁ、そう言ってるんだからそういうことにしておこうと夜明はそれ以上何も追求しなかった。

「それじゃ行こうか」

「「うん（はい）」」

歩き出した夜明の両側に、極自然に二人が寄ってくる。やっぱりと言うべきなのか、二人とも夜明の腕に両腕を絡ませている。太陽や楯無ほどじゃ無いにしろ、柔らかな双山が押し付けられる感触に夜明は些か顔を赤くした。

「あの、二人とも。少し歩きにくいんだけど……」

「「我慢してね（して下さいな）」」

「……はい」

こうなった場合、夜明に拒否権はおろか人権もない。周囲の男達の

殺意を込めた視線に全身を抉られるのを感じながら、夜明は心の中で謝罪する。

（ごめんなさい。俺、この二人以外にもあと四人恋人います）

もしそのことを男達が知ったら、哀れ夜明は屍となるだろう。ま、そんなことは両側にいる二人の恋人がさせないだろうが。

「それで、夜明に何を送るのか決めているのか？」

駅前へとやってきた太陽ご一行。太陽の問いにラウラは自信満々に頷き、鈴音は首を振る。

「そっか。それでラウラ、お前はどんなものをプレゼントする気なんだ？」

「この間、シャルロットと一緒に見ていたネットの動画を参考にし

て、私が一から作った耳かきだ！」

そう言って、ラウラは懐から細くて短い棒状のものを取り出し、太陽と鈴音に見せ付けた。が、二人の表情は何ともいえず、微妙な目でラウラと耳かきを見比べている。太陽はやんわりとラウラの手から耳かきを取り上げた。

「ラウラ。悪い事は言わないからこれを送るのは止めておけ」

「そうした方がいいわね。こんな先端が尖ってる耳かきじゃ汚れを取る前に鼓膜破っちゃうわよ」

ガビーン！　とショックを受けるラウラを宥めていると、ふと太陽が何かを見つけた。

「ん、あれは……」

ラウラと鈴音も太陽の視線を追う。その先にはまさしく両手に華という表現がピッタリの、左右にシャルとセシリアを侍らせている（ように三人には見える）夜明の姿が。

「……ほぉ、第一夫人である私を差し置いて旦那とデートか。良い度胸をしてるな、あの二人は」

「誰が第一夫人よ。でも、私達に何も言わずに三人でデートってのはいただけないわよね」

「よし。ここは刃傷沙汰をともなったＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＩを」

「止めれラウラ」

どこから取り出したのか、愛用のコンバットナイフを引き抜いて三人に暗殺者（アサシン）よろしく音も無く近寄ろうとするラウラの首根っこを掴んで、太陽はラウラを引き戻した。

「ここはばれないように尾行していって、弱みを握って埋め合わせをさせた方が得だ」

「太陽。あんたってそんな腹黒いキャラだっけ？」

鈴音の突っ込みを華麗にスルーしつつ、太陽は無造作に襟元に片手を入れて谷間を探り始めた。

「テテテテッテテェ～。変装セット～」

効果音と共に取り出されたのは人数分のサングラス、双眼鏡、アンパン、新聞紙である。古人曰く、この三つのアイテムは三種の神器と呼ばれ、尾行や張り込みの必須アイテムだとか何とか。

「白昼堂々嘘言ってんじゃないわよ！　ってか毎度思うんだけどあんたはどこに仕舞ってんのよ！　何、胸の薄っぺらい私やラウラへの当て付け！？」

「鈴、地の文に突っ込むのは止めろ。当て付けかはともかくとして、一体どういう構造になってるのだその身体は？」

「知らないのかお前ら。爆乳美少女の谷間には四次元が広がってるんだぞ」

「そんなの初めて聞いたわよ！」

「当たり前だ。今、私が初めて言ったんだからな」

あほな事を言いつつ準備完了。太陽は新聞紙、ラウラは双眼鏡、鈴音はアンパンを装備して夜明達の追跡を始めた。

「太陽。思うんだけどさ、これ、余計に目立ってない？」

「安心しろ。通行人たちはともかく、尾行の対象たちには不思議とばれないものだ」

「それが事実だとすれば、世界七不思議に付け加えるべきだな……む、太陽、鈴。三人はショッピングモールに入っていったぞ」

通行人たちの視線なぞ何のその。三人は夜明達が入っていった所を確認し、額をつき合わせて相談しだす。

「で、どうすんのよ？」

「勿論追いかけるさ……ムーンウォークで」

「了解」

華麗な足捌き（後ろ向き）でショッピングモールに入っていこうとする二人の姿を見て、鈴音の中で盛大に何かが切れる音が響いた。

ゴンッ！　×ニ

「アホやってないでいくわよ！」

「「……ふぁい」」

足取りも荒くズンズン歩いていく鈴音の両手には、襟首を掴まれて引きずられる、頭を抑える涙目の太陽とラウラの姿があったとか。

「シャルロットとセシリアは夜明にどんなものをプレゼントするのかしらね？」

「あいつ等は私達の中でも特に乙女だからな。常に身につけられてるものとかで指輪とかじゃないか？」

アクセサリーショップに入っていった夜明達を、数十メートル離れた所から観察していると、双眼鏡を覗き込んでいたラウラが不意に声を上げた。

「ん、どしたラウラ？」

「いや。見知らぬ女が三人に話しかけてる。誰だあれは？」

「へ、誰々？」

夜明達に話し掛けた女と言うのに興味津々の鈴音は引っ手繰るようにラウラから双眼鏡を受け取った。双眸に双眼鏡を押し当て、話し掛けた女を見て目を丸くする。

「誰かと思えば蘭じゃない。夜明達に何の用があんのかしら？」

「知り合いなのか？」

「一夏の友達に五反田弾って馬鹿がいて、そいつの妹。一夏にホの

字なのよ。それにしてもホントに何の話してんのかしらね」

ラウラの問いに答えながら、別に話が聞こえるようになる訳でもないのに鈴音は強く双眼鏡を握り締めるのだった。

「あの……夜明さんって六股してるんですよね？」

少女、五反田蘭がおずおずと投げかけた質問は深々と夜明の心を抉り削った。胸を押さえながらがっくりと膝をつく夜明に代わり、シャルとセシリアが慌てて弁解するように説明を始める。

「た、確かに夜明が僕を含めた六人の女性とそういう関係にあるのは事実だけど、別にやましい事とかは無いからね！」

「そ、そうですわ！　妾、愛人などいない、六人全員が正真正銘の恋人、第一夫人ですわ！」

何を口走っているのか自分達でも分かってない様子。三人の反応に蘭は慌てて両手をブンブン振る。

「あ、いや、別に責めてる訳じゃないんです！　ただ、それで何の問題も起こってないんですよね？」

コクリと頷く三人。彼らは特に何の問題も無く、楽しい日常を過ごしている。三人の返答を何度も反芻しながら蘭は力強く頷き、拳を握り締めた。

「そうなんですか……よし、私も頑張って一夏さんの愛人に……！」

何やら良くない方向に頑張り始めようとする少女の姿がそこにはあった。

「ってな感じのことでも話してるんだろうよ」

「一夏に恋人が出来ても諦めずに愛人になろうとするその根性……蘭、あんた大したもんだわ」

「その諦めの悪さに敬意を表するぞ」

一夏へのプレゼントを探しているのだろう。夜明達と一緒に店を回り始めた蘭に太陽は何ともいえない視線を送り、鈴音とラウラは敬礼していた。

「そろそろ覗き見してるのも飽きてきたな……私達も本来の目的を果たすとするか」

三人はその場から離れ、ベンチに座って夜明と一夏に何をプレゼントするのかを相談し始めた。

「アクセサリーだとシャルロットやセシリアと被るだろうからな。何か料理でも作るか？」

「う～ん。でもやっぱ形に残るもんにしたいわね」

「いっそのこと、身体にリボンでも巻きつけてプレゼントは私だ！　よし、これだ！」

「止めろラウラ。確実にドン引きされるぞ……」

頬を紅潮させて拳を握ったラウラをやんわりと窘めていた太陽の目がスッと細くなった。それと同時に、ラウラの中に生まれたもう一つの人格、ライラが呼びかけてくる。

（ボサッとしてんな相棒。どっからかは知らねぇが明らかな敵意を

持った奴に見られてるぞ！）

「え、何？　どうしたのあんたら？」

立ち上がり、周囲を見回し始めた二人に鈴音は首を傾げる。太陽とラウラは鈴音の問いに答えず、自分達に注がれている視線の元を探す。視線の主は見つからず、警戒心が強まっていく。数分が経過すると、視線を感じなくなった。ラウラはホッとため息を吐きながら太陽を見る。

「太陽、今のは……」

「多分、亡国機業だな」

（それだけじゃ無さそうだがな……）

視線は二組あった。一つは三人に、もう一つは鈴音とラウラなど眼中に無く太陽だけに注がれていたものだ。

「これは、一波乱ありそうだな……」

「暢気に買い物とは、気楽なものだな」

駅前を一望に見下ろす事のできるビルの屋上、ミラーシェイドのゴーグルで双眸を覆ったMは口元を歪ませながら、隣りにいるフェンスに背を預けた同い年くらいの女子に視線を向ける。

「で、どうだ？　自分のオリジナルを初めて見た感想は？」

「……何も。任務に支障をきたすような感情はない」

燃えるような紅髪を箒同様ポニーテールにした女子は淡々とした口調で応えた。余りにも淡白な返答だが、大して気を悪くした様子も無くMは詰まらなさそうに鼻を鳴らす。

「そうか。まぁいい。戻るぞ、ドライ」

屋上の扉に向かって歩いていくMに従おうとするが、ふと足を止めて少女は振り返り、再びフェンス越しの視線を太陽に向けた。

（……私達三人のオリジナル、夕暮太陽、か）

髪同様、燃え盛るような灼眼。だがその瞳はとても冷たく無機質で、機械を連想させた。

襲撃（前書き）

おっひさ～っしぶりの投稿

襲撃

「……何でこんな事になったんだっけか？」

マリアナ海溝並に深いため息をつきながら、夜明はベンチに座って目の前で展開されているラクロスの死合い（誤字にあらず）を見ていた。振るわれるクロスは鎌のように、放たれるボールは弾丸のよう。こうなった原因は『生徒会執行部・月光夜明貸し出しキャンペーン』なるものが始まったからだ。

学園祭の時の部活投票で一位二位になった部活は強制的に夜明と一夏を入部できる権利を得られるというのは覚えているだろうか？あれの結果は亡国機業の襲撃や夜明の記憶喪失やらでうむやむになったかと思われたが、強かなもので、夜明の復活を信じきっていた楯無はどさくさに紛れて夜明を生徒会に突っ込んだ……というのが風の噂である。

（まぁ、記憶喪失で皆のこと心配させたのは事実だし、生徒会に突っ込まれる事くらい納得するけど……）

部活に貸し出されるなんて聞いてない。かくして夜明は生徒会所属の、ＩＳ学園に存在する全ての部活の『お手伝いさん』と相成った。そして行われた全部活参加のあみだくじ。そこで夜明を獲得したのは鈴音が所属するラクロス部だった。最初のほうは唯の手伝いとして動いたり練習風景を見ていたのだが、

『一番良い動きをした奴に、今日一日月光を好きに扱っていい権利をやる』

と、顧問の爆弾投下。こうして、グラウンドは戦場となったのである。

「はぁぁぁっ！」

「絶対に、負けない！」

「一番になって月光君にあんなことやそんなことをするんだぁぁぁ！！」

その気迫、最早女子学生のものにあらず。例えるなら常在戦場の古強者。そして、その中でも一際目を引く鬼神が一人。

「あんた達ぃぃぃ！！　人の男に手ぇ出すんじゃないわよぉぉぉ！！！！！」

中国代表候補生、凰鈴音。本来、球を投げるはずのラケット（クロス）を方天画戟か何かのように振り回し、周囲の部員達を先輩だろうが級友だろうがお構いなしでぶっ飛ばしている。木っ端のように吹き飛ぶラクロス部員達を心配そうに見ながら、夜明は隣りに立っているラクロス部顧問を見やる。

「あの、先生。クロスで相手を直接攻撃するのってルール違反なんじゃ」

「ハッハッハ、凰は今日も気合十分だな」

「はぁ～……鈴音～、怪我させんなよ」

その声が今の鈴音に聞こえているかどうか、甚だ疑問な夜明だった。

「今日一番良い動きをしていたのは凰だったな」

「ヴぃ、ヴィクトリィ～……」

「一番良い動きをしてたって言うよりも、最後まで戦場（グラウンド）に立ってたのが鈴音だけだったって感じですがね」

数十分後、呆れた様子で夜明は周囲を見回す。グラウンドには戦いに負けたラクロス部員たちが死屍累々（死んじゃいないが）となって横たわっている。そんな中、鈴音一人だけがクロスを支えにしながらも立っている。夜明の言うとおり、一番良い動きをしたものというより、勝者と言う表現がピッタリだ。

「ここまでやるか普通……っと。大丈夫か、鈴音？」

ふらつき、倒れそうになる鈴音を支える。さっきまでの試合（と言

う名の戦闘）でフルスロットルで動いていた身体は熱く、汗でベタベタだった。荒い息を吐きながらも、鈴音は夜明の腕の中で嬉しそうな笑みを浮かべる。

「フフフ。分かってると思うけど夜明、今日一日あんたは私の下僕よ」

「下僕になった覚え、俺には一欠片も無いんだがな……まぁいい。分かりましたよ。それで、俺はどうすればいい？」

「そうね……汗でベタベタになっちゃたから、シャワー浴びたいわね。って訳で、よろしく」

「え？」

「え？　じゃないわよ。勿論、あんたの部屋のシャワー……でね」

そう言って、鈴音は悪戯っぽい笑みを浮かべながら赤くなった夜明の頬を突いた。

夜明の部屋に戻ってきた二人は二時間ほど時間をかけてシャワーを浴びていた。この間に何があったのかは皆様のご想像にお任せするとしよう。シャワーを浴び終えた二人は現在ベットの上にいる。

「～♪　～♪」

「髪くらい自分で拭けっての」

ため息を吐きながら、夜明は膝の上に座ってりながら鼻歌を歌っている鈴音の濡れた髪をタオルで拭いてやっていた。ここは夜明の部屋なので、当然鈴音の服はない。だが、鈴音はさも当たり前のように夜明のYシャツを着たのだった。下着にYシャツという、かなり刺激的な格好をしてる鈴音だが、今は借りてきた猫のように大人しい。

「よ～あけっ♪」

そして、彼女のクラスメイト達が今の鈴音を見たら、口を揃えてこう言うだろう。

「ん？」

「呼んだだけ♪」

誰こいつ？　と。普段の攻撃的なツンツンした態度は完全に鳴りを潜め、ひたすら夜明に甘えまくってる。ツンデレではなく、デッレデレである。夜明が髪を拭き終えると、待ってましたとばかりに首

筋に頭をグリグリ押し付ける。

（こいつ、本当に鈴音か？）

恋人の夜明でさえそう思ってしまう始末。頭を撫でてやると、猫のように喉を鳴らしながら首筋を舐めたり甘噛みしてくる。その甘えっぷりは他の恋人達と一線を画する程だ。他の恋人たちの場合、割りと時と場所を選ばずに甘えてくるが、鈴音は余り人前では甘えてこない。その代わりとでも言うように、夜明と完全に二人きりになると、もうベッタベタに甘えてくる。

（何か調子狂うんだよな……）

普段の鈴音を見慣れてる夜明。こう甘えられるのも嬉しいし、デレデレの鈴音も新鮮だがやはり何かどこか違う気がする。

「隙あり」

そんなことを考えていると、不意に唇に柔らかいものが触れた。意識を集中させると、視界に鈴音の顔がドアップで映る。

（ま、こんなのもありかな）

そう思いながら、夜明は舌を絡めてくる鈴音の頭を抱き締めるのだった。

「はい、それでは皆さーん。今日は高速機動の授業をしますよー」

一年一組副担任、山田真耶の声が第六アリーナに響き渡る。普段は騒々しい女子達も、今は（授業中だけは）真面目に真耶の話を聞いている。

「この第六アリーナでは中央タワーと繋がっていて、高速機動実習が可能である事は先日言いましたね？　早速、専用機持ちの皆さんに実演してもらいましょう。オルコットさん、月光君！」

真耶が手を向ける先、高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』に換装したブルー・ティアーズを装備したセシリアと、背中にある二対の推進翼を広角展開させて高速機動形態『ハイマットモード』にレイジングウィングを移行させた夜明の姿がある。

（そういや最近不屈（こいつ）の翼動かしてなかったからな。機嫌悪くしてなきゃいいんだが）

『どうかしましたの夜明さん？　少し浮かない顔をしてらっしゃいますが？』

応援の声に軽く応えながら益体のないことを考えていると、プライベート・チャネルを通してセシリアの声が聞こえてきた。

『いんや別に。ちろっとばかし身体が鈍ってきた気がしてな。今の内に勘を戻しとかねぇと』

そんな会話をしている内にカウントダウンが始まろうとしていた。二人はプライベート・チャネル間での遣り取りを止め、意識を高速機動に集中させる。

「3、2、1、GO！」

真耶の声が響いた瞬間、レイジングウィングの背部推進翼の間から蒼銀の光が爆発的に膨れ上がり、一気に夜明を蒼空へと持ち上げる。数瞬遅れてセシリアが夜明の後を追うように舞い上がってきた。中央タワー外周を目指しながら夜明は後ろに張り付いているセシリアに視線を送る。

『よ、夜明さん！　少し速すぎるのではなくて！？』

『いや、これでも結構抑えてるんだが……まさかとは思うけど、ついてこれないなんて言わないよな？』

最後の部分だけ挑発的に言うとセシリアのプライドに火がついたのか、ブルー・ティアーズのスカートアーマーに固定された四基の射撃ビット、二基のミサイルビットが爆炎を吐き出して夜明に迫ってきた。

『絶対に追いついて見せますわ！』

『上等！！』

キャノンボール・ファストの前哨戦とでも言うべきか、夜明とセシリアによるちょっとしたレースが始まった。中央タワーに触れないように注意を払いながら二人は最大速度で外周を回り切り、アリーナ地表へと着地する。結果はニ、三秒の差で夜明の勝ちだった。普通のレースでならともかく、高速機動でこの差はかなり大きい。

「くっ、やはり機動性能は段違いですわね」

「ま、確かに不屈（こいつ）の翼より速いＩＳなんてねぇだろうな」

悔しそうに表情を歪めるセシリアの頭を人撫でし、夜明はセシリアと一緒に生徒達の列へと戻った。

千冬の号令で生徒達はそれぞれ別れて自分の作業を始めた。夜明もレイジングウィングのステータスを調節していたが、すぐにやる事

が無くなった。何分、元が完全に高速機動であるため、下手に弄る必要が無いのだ。特にやることも無かったので、夜明は太陽達の様子を見に行く事に。

「よぉ」

声をかけると太陽は一瞬だけ視線を夜明に向け、軽く手を上げてまたすぐ作業に没頭し始めた。かなり連れない態度だが、それだけ集中しているということだろう。少しばかり気になり、夜明は太陽が忙しそうに視線を走らせている空間投影ディスプレイに視線を注いだ。

「んで、今回のレースでお前はどうするんだ？　まさかとは思うが、『Ｍｏｄｅ（モード）　Ｅｘｃｅｅｄ（イクシード）』で一気にゴールなんて」

「するか馬鹿。そんな外道な手を使ってまで勝ちたいとは思わないよ。背部リフターに乗って爆走、これだけさ」

脳筋である。背部リフターに乗った高速機動状態でもバルディッシュトワイライトは搭乗者の人外スペックも相まって、通常戦闘時並の正確さで攻撃、妨害してくるだろう。

「お前とやり合うと考えると俄然やる気が出てくるな。言っとくが負けねぇぞ」

「お前が私に負けたら今週末、一日中イチャイチャさせてもらうからな」

幸せオーラを隠そうともしないバカップルに近づく一つの人影。

「ここにいたか月光」

「あね……織斑先生。何か用ですか？」

夜明に問われ、千冬にしては珍しくバツが悪そうな表情を作って口ごもる。が、それも数秒の事ですぐに何時もの凛然とした顔に戻り夜明を見据えた。

「単刀直入に言うぞ。お前は『キャノンボール・ファスト』出場禁止になった」

「……ｗｈｙ？」

間抜け面を作りながら夜明は思わず隣りの太陽に問いかけた。思い当たる点があるのか、太陽は納得顔で千冬の言葉に頷いている。

「はっきり言うとだ。お前の専用機『不屈の翼（レイジングウィング）』の機動性能が余りにも出鱈目過ぎて、出場すると勝つのがほぼ確定してしまうんだ。今回のレースは各国からもお偉方が来る。そういう連中に出来レースを見せるのは余りよろしくないとＩＳ学園上層部は考えた訳だ」

「簡潔に三行で纏めて下さい」

「お前の専用機
自重しても速過ぎ
だから諦めろ」

「まぁ、予想してなかった訳ではないが。まさかここまでピンポイントに予想が的中するとはな」

「……欝だ」

授業終了後、意気消沈してしまった夜明を励ますのに太陽達は結構な時間を消費したとか何とか……。

『キャノンボール・ファスト』当日。会場である市のＩＳアリーナへと二人揃ってやって来た五反田兄妹。

「えっと、私達の席って」

「確かＦ－４５とＦ－４６だろ。あっちだな」

夜明からチケットをもらった蘭と一夏からもらっていた弾。今回は特に妹からの鉄拳制裁も無く、弾は会場へと脚を運んできていた。

「おっ、あったぞ。あそこ、だ……」

チケットに指定されてる席を見つけ、早速座ろうとした弾が固まる。兄の動作停止に不審そうな表情を浮かべながらも、蘭はすぐに兄の動作停止の理由を知る事となる。

「……知ってるか、涙って心の汗なんだぜ」

二人の席の隣り、Ｆ－４７に腰を下ろしている銀髪のＩＳ学園男子生徒、月光夜明の存在があったからだ。真っ白に燃え尽きたボクサーのように項垂れ、口元を虚ろに歪ませている様子は尋常ではなく、誰一人として近づこうとする者はいない。

「あ、あの、夜明さん？」

恐る恐る蘭が声をかけると、夜明は生気が消えうせた瞳を持ち上げる。

「……あら、蘭ちゃんじゃないの。とりあえず座れば。そろそろレース始まるよ」

「いや、夜明さんはレースに出なくていいんですか？」

「色々あるんだよ……色々」

どういう事なのか皆目見当がつかないが、触れないでおいたほうが懸命だという事は、静かに涙を流す夜明の様子から容易に分かった。頷きあい、空気を読んだ五反田兄妹は何も言わずに席へとつく。物理的重量を伴う沈黙が夜明から放たれ、観客席を支配しつつあった。

「始まったか」

周囲から聞こえる、爆発するような歓声に若干表情を顰めながら夜明はアリーナを見ていた。十数分ほどで二年生のレースが終わり、次は一年生の専用機持ちのレースが行われる。

「本当だったらさぁ、俺もあそこに並んでるはずだったんだよねぇ。は、はは、ははは……」

スタートラインに立った仲間達に虚ろな笑いがこみ上げてくる。地獄にでも堕ちそうな消沈っぷりに五反田兄妹が本気でどうしようか悩んでいると、不意に夜明の眼光が鋭くなった。

「よ、夜明さん。どうしたんですか？」

「ど、どうした？　トイレか？」

余りの豹変に蘭と弾は驚きを隠せないでいると、夜明は何も言わずにどこかへと走っていった。

「夜明さん！？　もうレース始まっちゃいますよ！」

「う～ん、ありゃ突発性の下痢か何かだな」

勿論、違います。

レースは白熱を極めていた。先頭で太陽、シャル、ラウラが苛烈なデットヒートを繰り広げ、鈴音、セシリア、一夏、箒の順に追いすがっていく。アドレナリン放出しまくりのバトルレースが二周目に入ったその時、異変を告げる大声が会場中に響き渡った。

『亡国機業（ファントム・タスク）だ！！　先頭の三人、避けろ！！』

夜明の声が響いた刹那、太陽、シャル、ラウラの三人目掛けて上空から数十条の閃光が降り注いできた。太陽は咄嗟に左腕のフィン・ファンネルを展開させて事なきを得たが、シャルとラウラは直撃を受けて姿勢を崩し、加速した状態で壁に激突した。太陽が二人に駆けつけるのを視界の端で確認しながら、中継室に飛び込んだ夜明は上空に浮かぶ五つの敵影を睨みつける。

「黒、青、緑……あん時の三馬鹿か！　んじゃ残りの二つの内一機はＢＴ二号機『サイレント・ゼフィルス』！？　いや、でもあの姿はクルーゼの『プロヴィデンス』！　それにもう一機のＩＳは何だ！？　あれじゃまるで……」

「ジャスティア、シュヴァルツェ。分かってるとは思うが、今回の目的は飽くまでMとドライの新型の性能テストで、俺達はつゆはら」

「うっせぇよガンフィッツ！　それはもう耳にたこが出来るくらい聞いたってぇの！！」

「私には問題ありません。そっちの二人はどうだが知りませんが」

アビス、ガイア、カオス。三機の搭乗者に視線を送られ、Mは鼻を鳴らすだけ。

「不屈の翼と深紅の死神ならとかく、織斑一夏達がこの『レジェンド』の性能を測るに値する相手とは思えないんだがな……まぁいい。行くぞ、ドライ」

Mの言葉に五人目の少女は首肯のみで応じる。

「任務了解。『黄昏の斬撃者（エクシア・トワイライト）』、目標との戦闘に入る」

漆黒の装甲を纏った紅蓮の少女。その姿は『黄昏の黒斧（バルディッシュトワイライト）』を纏った太陽に余りにも酷似していた。

襲撃（後書き）

とりあえず、白式の進化をどうしようか考え中。

以前書いたとおりのネタでいくのか、それともガチでいくのか……

そこんとこどう思います？

かなり重度の劣勢

「大丈夫かシャル、ラウラ！？」

フィン・ファンネルのフィールドを形成させたまま太陽は壁に激突した二人の下に駆け寄る。ビームの直撃と壁に激突したダメージを受けたスラスターはぐしゃぐしゃにひしゃげ、搭乗者を飛ばせそうに無い。

「だ、大丈夫だ。スラスターが完全にやられてしまったがな」

「右に同じく。ＰＩＣは生きてるけど、高機動戦闘に参加するのは無理だね」

三人が視線を持ち上げるとアリーナ上部で一夏と箒がＭと、中継室から飛び出した夜明が三馬鹿とやり合っている。太陽は後ろからセシリアと鈴音が近づいて来るのを視認すると、矢継ぎ早に指示を飛ばした。

「ラウラ、シャル。お前らは一夏と箒の援護に徹しろ。自分の身を護る事も忘れるな。それからセシリア、鈴音。二人は観客達の避難が終わるまで観客席の防衛。避難が終わり次第、一夏と箒に加勢しろ、いいな？」

「あんたはどうすんのよ？」

首肯しながらの鈴音の問いに、太陽は瞬間加速（イグニッション・ブースト）のエネルギー供給をしながら双眸を漆黒の斬撃者に向ける。

「私はあいつをぶちのめして夜明の援護に回る。行くぞ！」

言うや、太陽は背中のスラスターから炎の翼を広げさせ、斬撃者へと飛翔する。

「目標接近。黄昏の斬撃者（エクシア・トワイライト）、ドライ・トワイライト、目標と交戦する」

プライベート・チャネルの向こう側に無感情で簡潔な報告を済ませ、ドライは右腕に折り畳まれているＥＴソードを展開させて太陽が振り抜いたライオンハートを迎え撃った。

「お前と遊んでる暇は無い……どけ」

紅蓮の双眸に含められた殺気。恐れるでも身体を竦ませるでもなく、ドライは淡々と太陽の視線を受け流す。

「交渉の席につく心算はない」

「そうか。なら力尽くだ……！」

「どきやがれぇ！！」

スタードライヴが火を噴く。夜明が放った二発の荷電粒子砲はガイア、シュヴァルツェに喰らいつこうとするが、シュヴァルツェの前に飛び出したアビス、ガンフィッツの両肩シールドによって防がれ四散した。

（防いだ、いや、守った！？）

スタードライヴが防がれたことよりも、夜明は目の前の光景に驚愕を露にする。あの時、クラス対抗戦の時に戦ったこの三人は連携もクソも無かった。寧ろ、互いが互いの足を引っ張り合っていた。それが今、仲間を守るために砲撃の前に飛び出してきたのだ。

（頭でも打ったか！？　いや、世界の破滅か！？　黙示録かアポカリプスか神々の黄昏かラグナロクか！？）

「戦闘中に考え事は感心しませんよ、不屈の翼」

かなり酷い事を考えていると、背後からカオス、ジャスティアがビームサーベルで擦れ違い様に切り裂こうとする。思考する間もなく夜明はスラスターを駆使して後宙する。ジャスティアのビームサーベルをかわし、体勢を戻しながら砲撃を仕掛けようとするが、それよりも速く三人の攻撃が迫る。

「ぐぅ……！　連携するだけでここまで変るものなのかよ！」

悪態をつきながらウィングスターを構えた両腕を交差させ、夜明は三人の攻撃を防ぐ。更なる追撃をかけようとする三人を展開させたディバイン・カノンの高速連射でどうにか牽制する。

（完全に舐めてた……！　こいつら、個々の実力はとかく、連携させたら太陽とだってタメ張れるぞ！）

侮っていた故に、戦闘の流れは完全に三人に握られてしまった。夜明は心の中で己を罵る。そんな暇は無いと言わんばかりの、三方向からの照準警告（ロックオン・アラート）。

「こいつぁ本格的にまずいか」

口元に笑みを貼り付けながらも、夜明は背筋を冷たい汗が伝っていくのを感じずにはいられなかった。

「だが上等。この程度の逆境、何億回でも跳ね返して見せてやるさ……行くぜ不屈（あいぼう）の翼！！」

引き金を引いた三人の視界から夜明が消える。接近警告（アラート）が聞こえる前に三人は回避行動に移るが、小さいながらも確かな手傷を負った。

「行くぞぉぉぉぉぉ！！！！！」

「この程度か」

「舐めるなぁ！！」

「熱くなるな、箒！」

左右からの攻撃を、右手に握ったビームジャベリン（連結された二本のビームサーベル）で受け流しながらMは軽い挑発を口にした。激昂した箒が大振りの攻撃を繰り出そうとするが、一夏が諌める。余程意外だったのか、Mは興味深そうに、面白そうに口角を持ち上げた。

「ほぉ、まさかお前が諌める側に回るとはな。どういう心境の変化だ」

「別に。ただ、熱くなったら一瞬で消し飛んぢまいそうな世界を体験しただけだ」

無意識の内にそう返しながら、一夏が未来で経験した戦闘の数々を思い返す。だからこそ、表情には辛うじて出さないものの動揺を感じるのを禁じ得なかった。

（何でだ？　何であいつに俺と箒の攻撃が通用しない！？）

未来での戦闘は全て死闘と呼ぶに相応しかった。特に最後の真改との戦いは壮絶を極めた。幾ら二対一での戦いだったとはいえ、彼女に競り勝ったことは二人を大きく成長させている。なのに、なのにだ。

（何で俺達の刃はあいつに届かない！！）

力をつけたからこそ分かる。今、自分達は目の前の敵の眼中にいない。目の前の敵が考えているのは、新しい機体の性能チェックと早く自分に馴染ませること。一夏と箒との戦いなど、完全に二の次だ。雪片ニ型を握ってる手が震えているのを見たのか、Mは下らなさそうに鼻を鳴らして口を開く。

「自分達は未来で数々の強敵と戦い成長した。なのに、何で私に傷一つつけることが出来ない……とでも考えていたか？」

「っ！？　何故、私達が未来に行ったことを知っている！？」

「悪いが答える心算はない……だが織斑一夏、お前の疑問には答えてやる」

箒の鋭い視線と共に飛んできた問いを無視し、Mは冷たい眼光を一夏に突き刺す。

「確かに貴様らは未来での戦闘、殺し合いを経験する事で飛躍的に成長した。そこは認めてやる。相手の質も相当に高かったのだろう」

だが、それがどうしたとMは冷笑を浮かべる。首筋にナイフを突き

つけられたような感覚に襲われ、思わず二人は武器を握る手の力を強くしていた。

「亡国機業にとって殺し合いなど日常茶飯事。亡国機業のメンバーが何歳から殺し合いを経験していると思っているんだ？　……たかだか数回程度の殺し合いで私達に追いつけるなどと思い上がるな。相手の質はともかく、潜り抜けた死地も踏み越えてきた場数も私達が圧倒的に上」

背中の大型バックパックからドラグーンを射出し、ビームジャベリンを構えながらMは口元を歪める。

「余り亡国機業（ファントム・タスク）を舐めるなよ、新兵（ルーキー）」

派手な火花を散らして太陽とドライが切り結ぶ。素人目に見れば太陽が圧してるように見えるだろうが、実際は違う。ドライは最小限の動きと迎撃で太陽の斬撃を撃ち落していた。

「……」

「ちぃっ！！」

しかも、少しでも隙を見せれば深く抉るような一撃を放ってくる始末。左手に握られたＥＴロングブレイドをフィン・ファンネルシールドで弾き上げながら膝蹴りを見舞う。綺麗に膝がドライの腹部に突き刺さったように見えたが、咄嗟にドライは後ろにスラスターを噴かして威力を半減させた。ドライが離れた隙に太陽は周囲を見回して現状を把握する。

（戦況はかなり悪いな。一夏と箒は完全にＭに翻弄されてるし、夜明も主導権を相手に握られている。ラウラ達の援護もほとんど役に立ってないしセシリアと鈴音は観客の護衛に手が離せない）

「これ以上、戦闘を長引かせる訳にはいかないか……時間はかけられない。行くぞ、贋作」

『Ｍｏｄｅ（モード）　Ｔｒａｎｓａｍ（トランザム）　Ｓｔａｎｄｂｙ　ＯＫ．　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？』

瞬間、バルディッシュトワイライトの装甲にある無数の継ぎ目から紅の燐光が放たれ始める。ドライが太陽の変化に気付いた時には既に足首から順々に太陽を守る装甲が次々に展開されていく。深紅の粒子をばら撒きながら太陽は一気にドライへ肉薄し、オールデリートとライオンハートを交差させるように振り抜く。

「……」

常人ではとても認識できないような速度で十字架のように迫ってくる二つの斬撃。コンマ一秒後には自分の命を絶つだろう攻撃に、特に取り乱すでも諦めるでもなく、ドライは変わらず冷淡で無機質な声で周囲にいる者達の鼓膜を突く。

「トランザム」

と。

（……なん……だと？）

最初、太陽は何が起こったのか理解できなかった。何故、目の前の敵がトランザムを口にしたのか。何故、敵の搭乗しているＩＳがトランザムを発動させているのかが。赤く発光する装甲を纏ったドライが太陽の視界から消え失せる。トランザムの発動によって現れる残像を眼で追い、太陽はギリギリで背後からの攻撃に反応する。

「……何でお前がトランザムを使える！？」

「……」

相変わらずの無言。動揺してるせいか、ヤケにドライの斬撃が重い。唐突に鍔迫り合いに負けないように歯を食い縛っている太陽の脳裏にある考えが浮かぶ。

（待てよ、こいつがトランザムを使えるという事は）

最悪の予感に当たらないでくれと必死で願いながら太陽は鍔迫り合いしたままＭを見やる。丁度、一夏と箒を弾き飛ばしたＭと視線が合い、太陽ははっきりと見た。Ｍの口元がこれ以上無いくらいに愉

快に、邪悪に歪んだのを。

「一夏、箒、そいつから離れろ！！」

叫びも虚しく言葉は紡がれる。

「トランザム」

世代移行の兆候（前書き）

えぇ～、今回のは完全に悪ふざけです。でも、後悔はしてないＺＥ！！

ま、見てやってください

「流石はMね。幾らトランザムで機体性能を底上げしてるとはいえ、第四世代型ＩＳを一瞬で切り刻むなんて」

逃げ惑う観客達の中、異様な人影が一つ。この非常事態の中、余裕を持ってサングラス越しにアリーナ内の戦闘を観察している様子は一般人とは思えない。サングラスを押し上げて女性、スコールが戦闘に集中しようとすると、背後に誰かの気配を感じた。

「トランザムって随分と面白いことを言ってるわね。その話、お姉さんに詳しく教えてくれないかしら」

「お姉さんって。詳しく教える心算は無いけど、少なくとも貴方より私の方がお姉さんよ、更識楯無ちゃん」

からかうように振り返ると、そこにはＩＳ学園最強が扇子を広げて立っていた。楯無は扇子を閉じると、再び顔をアリーナ内に向けたスコールの視線を追うように赤く発光する黒い斬撃者と赤灰色に輝くＭを見る。

「結構最近なんだけどね。太陽ちゃんにトランザムシステムがどんな機能なのか教えてもらったんだけどね。あれはどう考えても生身の人間が使用できるような機能じゃ無いんだよね、身体に掛かる負荷が強すぎる」

搭乗者に強いられる負担もさることながら、僅かな時間とはいえ機体性能を数倍に上げるなんて普通では出来ない。それが『ミステリアス・レイディ』を独力で造り上げるという偉業を成し遂げた楯無

の正直な感想だった。しかし、今目の前で二機のＩＳがトランザムを発動させている。

「トランザムシステムはあの篠ノ之博士が作ったもの。それを再現するなんて、貴方達には過ぎた力よ」

瞬時にミステリアス・レイディを展開させ、楯無は普段の余裕たっぷりの態度を引っ込めてスコールを睨んだ。対し、スコールは大人の余裕と言わんばかりに笑みを浮かべ、観客席の柵に背をもたれさせた。

（何が、起こった？）

一夏は現状が呑み込めずに周囲に視線を巡らせる。覚えているのはＭが「トランザム」と口にしたこと。次の瞬間、赤灰色の閃光が目の前を走り、急に嫌な浮遊感が内臓を押し上げたこと。

（あれ、何であんなとこにスラスターが？）

忙しなく動かす視界の中に幾つ物白い破片が映る。それが白式のスラスターや、雪片だということに気付くのに時間は掛からなかった。その向こうに自分と同じようにスラスターを切り裂かれ、重力に従って落下している箒の姿も見えた。

「……箒っ！？」

反射的に腕を伸ばすが、距離がありすぎて届かない。ＩＳを展開しているのなら取るに足らない距離だが、如何せん機動の要となるスラスターが無い。その上、ＰＩＣまで死んでいる。更に最悪な事に、箒は意識を失っているらしく目を閉じている。

「箒、箒！！」

必死に手足を動かすが、距離は一向に縮まらない。一夏と箒の距離とは真逆に、地面は凄まじい速さで迫ってきている。

「箒ぃぃぃぃ！！！！！」

絶叫するも、箒が反応する様子は無い。箒に向けて限界まで伸ばされた腕がゆっくりと拳を作る。腕を守る白い装甲に赤い液体の筋が出来たが、気付く様子もなく一夏は更に力を手に込めた。

（こんな負け方ってありかよ……！　何されたかも分からないで、負けるなんて……！）

滲んだ視界の中で何条もの閃光が交錯する。一夏と箒を助けようとする夜明を、三人が妨害している。ドライと切り結んでいる太陽、

援護射撃を行っていたシャルとラウラ、観客の避難を護衛していたセシリア、鈴音も間に合いそうに無い。

（何で、何で俺はこんなに弱い……！）

ふと、首筋に冷たい何かを感じた。首を曲げて後ろ、上を見上げるとビームジャベリンを握ってこちらを見下ろしているMが見えた。あれでスラスターを切られたのか、と頭の片隅で考えながら一夏の視線はMの口元に注がれている。笑っているのだ。これ以上無いほどに嬉しそうに、歪んだ笑みを隠そうともせずに笑っている。

（……何、笑ってんだよ）

悔しさやら何やらでぐしゃぐしゃになっていた頭が驚くほど冷たくなる。ハイスピードカメラみたいに遅く感じるようになった落下の中、一夏は視線を箒に戻す。意識が戻ったのか僅かに瞼は持ち上がっている。

「いち、か」

箒の口がそう動く。現状を瞬時に把握したのか、それとも最愛の人が自分と同じように死の危機に瀕していると魂で分かったのか定かではないが、箒は目尻に涙を浮かべて一夏へと手を伸ばす。

邪悪に笑っているM。自分が弱いせいで泣きそうな箒。

一夏の中で何かが爆発した。

「～～～箒が泣きそうなのに手前如きが笑ってんじゃねぇぇぇぇぇ！！！！！！！！」

叫ぶ一夏の右手に雪片が現れる。一夏の周囲が光り輝き、切り裂かれたはずのウィングスラスターを形成する。加速した一夏は空いてる左腕で箒を抱きとめ、身体を反転させて雪片の切っ先を驚きで目を見開いてるMに向けた。

「白式ぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！！！！！」

一夏の咆哮に応じるように左手の雪羅が消える。入れ替わるように現れた、バルディッシュトワイライトのソードビットに酷似した自律兵器六基が次々に雪片へと合体していく。

「零落白夜ぁぁぁぁ！！！！！」

刹那、二倍近くまで伸びた雪片の切っ先から爆発的な白い光が放たれた。人どころか、一般家屋程度なら軽く飲み込みそうな大きさの閃光がMに迫る。

「っ！！」

間一髪でMは緊急回避する。獲物を逃した白銀の光柱はアリーナ天井のシールドバリアにぶち当たり、紙切れか何かのようにシールドバリアを切り裂いて蒼空を駆け上っていった。最初、一夏は自分のやった事が信じられないといった表情で空を見ていたが、Mに一矢報いた事に満足したのか、箒を抱きすくめて背中から落下した。

「っつぅ！！」

「い、一夏！？　大丈夫か、一夏！？」

必死で身体を揺さぶってくる箒に片手で応えながら、一夏は大声を張り上げた。

「後、任せたぁ！！」

「後、任せたぁ！！」

一夏の叫びが聞こえると、夜明と太陽は目の前の敵をぶっ飛ばし、すぐに一夏と箒のもとへ駆けつけた。

「一夏さん、大丈夫ですの！？」

「あんた無茶しすぎよ！」

「一夏、大丈夫！？」

「意識ははっきりしてるか！？」

少し遅れてセシリア、鈴音、シャル、ラウラも飛んできた。逆にMの周りには、さっきまで夜明と太陽の二人と戦っていたドライ、三人組が半身を庇っているMを守るように集まっている。

「大丈夫かよ、M？」

「あんな武装が残っていたとはな。舐めすぎていたか」

ガンフィッツの問いには直接答えず、Mは地面の上に横たわっている一夏を睨みつけた。

「んで、一旦集まったは良いけどどうすんだよ？」

「正直、面倒な状況になったと言わざるを得ませんね」

傍らのシュヴァルツェ、ジャスティアの会話を聞き流しながらドライは視線を太陽にではなく、一夏へと注いでいた。

（……世代移行（ジェネレーション・シフト）の片鱗か）

互いに睨みあったまま静寂が続く。そのまま膠着状態が続くかに見えたが、唐突な一言でそれは破られた。

『皆、退くわよ』

「あらあら。まさかあんな隠し玉を持ってたなんて、喰えない子…
…皆、退くわよ」

相変わらず柵を背凭れ替わりにし、オープン・チャネルで退くよう指示を出しながらスコールはある物を取り出す。

「退かせると思っているの？」

「退く、と言ったわ」

言いながらスコールは腰に取り出したもの、ロストドライバーを装着させる。怪訝そうな表情を作りながらも、楯無は油断することなくスコールを見据える。

「何の心算？　まさか悪の組織である亡国機業（ファントム・タスク）が仮面ライダーなんて言わないわよね？」

「あら、知らないの。最近ではダークヒーローっていうのが流行ってるのよ」

相変わらず余裕のある笑みを浮かべたまま、スコールは右手に持っ

ているＵＳＢメモリのような物を見せ付ける。金色のメモリには漆黒の『Ａ』が描かれている。

『ＡＭＡＴＵ』

メモリをロストドライバーに挿入すると、スコールは両腕を広げて柵から落ちていった。慌てて楯無は観客席から飛び出すが、当然スコールは観客席の下にはおらず、Ｍ達と一緒にいた。

「帰還するわよ」

「私はまだやれるぞ」

「嘘言わないの。さっきの織斑一夏の攻撃、当たってもいないのに三分の二近くシールドエネルギー削られたでしょ」

少し剥きになるＭを軽く受け流し、金と漆黒を基調としたＩＳを纏ったスコールは夜明達に視線を向ける。

「今日はごめんなさいね、キャノンボール・ファストを滅茶苦茶にしちゃって。でも、私達は楽しかったわよ」

じゃあね、と投げキッスを一つ置いてスコールは空へと飛翔して行く。少し遅れて三人組が続き、Ｍも渋々方向転換して去っていく。

「……試練の時は近いぞ、人間」

最後まで残っていたドライは謎めいた一言を残し、去っていった。

「逃がすと思ってんのかよ……！」

夜明と太陽がすぐに後を追おうとするが、オープン・チャネルで介入してきた千冬によって阻まれる事に。

『待て二人とも！　後を追う事を許可する事は出来ない』

「……おやおや姐さん。さっきまで戦闘俺達にほっぽってた癖に、ここに来て許可は出来ないときましたか」

『それに関してはすまないと思っている。ようやく観客の避難が終わったんだ。だが、市街地上空での戦闘を許可するわけにはいかない。特にお前のＩＳは唯でさえ高火力の武装を積んでいるのだから』

そう言われてしまっては何も言い返せない。夜明は忌々しそうに一つ舌打ちし、一夏の様子を見に行った。

（黄昏の斬撃者（エクシア・トワイライト）、ドライ・トワイライト。バルディッシュトワイライト以外では発動する事のできないはずのトランザムシステム……考えることが多すぎて頭が痛くなりそうだ）

ため息を吐いていると、プライベート・チャネルで千冬が通信を送ってきた。内容は九割方予想できていたが、一応太陽は通信に応じた。

『夕暮太陽です』

『夕暮、この後お前と話がしたい。少し時間をもらうが構わないか？』

『夜明と一夏の誕生パーティーに間に合うようにしてくれるのなら、

文句はありません』

プライベート・チャネルを切断し、太陽は亡国機業が飛んでいった方向を見やった。

「……世界が動こうとしているのか」

良い方向にか悪い方向にか。とにかく、近い将来に世界を揺るがすような出来事が起こるのを、太陽は予感していた。

世代移行の兆候（後書き）

それとやる夫スレなる物に詳しい方がいらっしゃったら作り方を教えてくだせぇ。
色々と見てるんだけどさっぱり分かんねぇ。

彼の者のやることに変わりなし（前書き）

質問、オータムに似合いそうなモビルスーツって何ですかね？

彼の者のやることに変わりなし

ＩＳ学園秘密の部屋……もとい解析室。読んで字の如く、映像やデータなどを解析するための部屋だ。十数メートル級の、視線が合っただけで人を殺せる物騒な蛇はいないのであしからず。部屋の奥にある、学校の黒板ほどの大きさがあるディスプレイには先のキャノンボール・ファストでの戦闘映像が映し出されている。

「では夕暮。今回の戦闘で分かったことを教えてくれ」

「了解です」

室内には二つの人影、織斑千冬と夕暮太陽の姿がある。太陽はキーボードを叩き、ディスプレイにトランザム発動状態の黄昏の斬撃者（エクシア・トワイライト）とそのステータス画面を映した。

「こいつ、黄昏の斬撃者（エクシア・トワイライト）が発動させているのは間違いなくトランザムです。ですが、バルディッシュトワイライトのに比べると、かなりお粗末な代物です」

「お粗末？」

「バルディッシュトワイライトのトランザムは機体性能を三倍にします。でも、相手が発動させたトランザムの機体性能上昇値は二倍。しかも、時間が経過するごとに上昇値が落ちていってます」

太陽は黄昏の斬撃者（エクシア・トワイライト）のステータス画面を拡大させ、時間経過と共に機体性能を表すグラフが徐々に短くなっていくことを示す。

「……あのレジェンドが発動させたトランザムも」

「同様のシステムです。その上、トランザムの発動限界が一分と少し。機体性能の低下も半端じゃない」

掠りもしなかったのに一夏の攻撃でレジェンドのシールドエネルギーが大幅に削られた原因がこれである。一瞬、白式の変化したことについて聞きたくなったが、それは後回しにと千冬は太陽に視線を向けた。

「問題はトランザムの性能ではなくて、亡国機業（れんちゅう）がトランザムシステムを発動させた、っていう点です」

「確かにな……参考までに聞くが夕暮、現段階の各国の技術でトランザムシステムを開発できる可能性は」

「皆無ですね。第三世代型に着手したばかりの国々が第四世代型のシステムであるトランザムを開発出来ますか？　いいや、出来ない」

だろうな、と質問したとうの本人である千冬も頷く。トランザムシステムは篠ノ之束が開発したシステム。国レベルとはいえ、束の技術を開発できるかと問われれば誰もが否と答えるだろう。だが、いくら性能が劣化してるとはいえ、亡国機業がトランザムを開発したのは事実である。

「夕暮。お前の考えを聞かせて欲しい」

「ほとんどが推測の域を出ませんが」

「構わない、話してくれ」

「分かりました。連中のトランザムですが、連中は独自にトランザムシステムを開発したのではなく、バルディッシュトワイライトのトランザムを模倣したんだと思います」

「と言うと？」

無言で太陽はディスプレイに二つのステータス画面を映し出す。右が黄昏の斬撃者（エクシア・トワイライト）ので、左がバルディッシュトワイライトのものである。

「これは」

「そうです、完全に同じなんですよ。機体性能の伸びや劣化はともかくとして、トランザム発動の瞬間から稼動停止するまでのプロセスが」

亡国機業が独自の理論でトランザムシステムを再現したのなら何かしらの相違点があるはず。しかし、画面上のどこを見ても相違点は無い。

「どういう事だ？」

「考えるに、亡国機業は何かしらの装置を以ってバルディッシュトワイライト、正確にはトランザムシステムを蓄積させ、完全ではないとはいえ模倣した、ってところですかね」

「蓄積か。ならば、亡国機業は何時バルディッシュトワイライトの戦闘データを？　今回みたいにお前と直接戦闘をしたことは無いはずだ」

「銀の福音、終焉の騎士（シルバリオ・ゴスペル ナイト・オブ・オメガ）」

ボソッと太陽の口から出てきた名前に千冬を目を見開く。

「あの時の暴走が亡国機業の手によるものだと考えているのか？」

「それ以外に考えられないでしょう。束さんが悪ふざけでやったってのも否定できませんが」

確かに、と納得してしまう千冬。一旦ディスプレイを閉じ、太陽は深々とため息を吐きながら天井を見上げる。

「とにかく、亡国機業が厄介な相手だということに変りはありませんよ」

「そうだな……ところで、白式のあれはなんだったんだ？　零落白夜の暴走か何かか？」

「白式のあれ？　……あぁ、Mを攻撃したときの。それは今から調べるので、ちょっと待っててください」

再び太陽はディスプレイを開くと、一夏から借りてきた待機状態の白式（ガントレット）を取り出し、数本のコードを繋ぎ、キーボードを操作し始めた。千冬に急かされるよりも早く作業を終え、太陽はキーボードを叩く。

「……これは」

ディスプレイに表示されたものを見て、二人は揃って眉を顰めるの

だった。

「それで、どうだったのM。『レジェンド』は？」

「……悪くは無い。使い慣れさえすれば、不屈の翼とも深紅の死神とも十二分に戦える」

それは頼もしいわね、とスコールは微笑を浮かべる。日本の何処ぞかにあるホテルの大きな一室、スコール一行はここを一時的な拠点として使っていた。

「……ちっ！」

不意に部屋の隅で椅子に座っているオータムが舌打ちする。Mは特に気にする訳でもないが、スコールはため息を吐きながら困ったような視線をオータムに向けた。

「まだ拗ねているの、オータム？　舌打ちは品位を下げるから止めておいたほうがいいわよ」

「品位なんか知るかよ。何で今回の作戦、俺は不参加なんだよ！」

苛々を隠そうともせず、オータムは椅子を蹴って立ち上がった。今回の襲撃にオータムが参加していなかったのにはちゃんとした理由があるのだが、それでお留守番させられたことを納得出来るほど彼女は大人ではないらしい。

「何でって、あなたの専用機がまだ仕上がってないのだから仕様が無いでしょう」

「なら、何で俺のだけこんな遅ぇんだよ！　Ｍのはもう出来てるってぇのによ！」

「貴様が前回の作戦で、ご丁寧にコア以外を爆発させたからだろうが」

「あぁ！？」

淡々としたＭの指摘にオータムは殺気立つ。Ｍの言うとおり、オータムが使っていたＩＳ『アラクネ』は前回、つまり学園祭の時の作戦でコア以外のパーツを爆発させたため、ほとんど零の状態から改造している。装甲も武装も無事な『サイレント・ゼフィルス』に比べ、時間が掛かるのは当然の事だ。

「ま、あの夕暮太陽相手にコアを失わずにすんだだけ僥倖と考えるべきだろうな」

「あのクソ女ぁ……今度会ったら生まれてきたこと後悔させてやる！」

その台詞を聞いて思わず、身の程を弁えろなんて言葉が口から飛び出しそうになったが、Mはどうにか無言を貫きながらポケットから携帯端末を取り出す。ここでオータムとことを構えるのも心底アホらしいと考えての行動だ。殺気立っているオータムをスコールが宥めすかしているのを横目にMは端末の画面にレジェンドのステータスを開いていた。親指で端末のボタンを叩いていると、室内に着信音が鳴り響いた。

「何の用だ？」

『相変わらず素っ気も何もあったもんじゃないですね貴方は。レジェンドの正確な被害状況が確認できたので、一応報告しておこうと思いまして』

「どうなんだ？」

『正直な話、あのアリーナからここまで戻ってこれたのが奇跡、と言っても過言じゃないような状態です。トランザムの発動で装甲内部がガタガタになっていて、機動中枢も六割がた焼け爛れています。何より、最後に織斑一夏から受けた攻撃でシールドバリア関係の機関が完全にイカれています』

電話の主、ジャスティアの報告を聞きながらMは空いてるもう片方の手をきつく握り締めた。

「（織斑一夏）……それで、どれくらいで直せる」

『そうですね……オータムの新型の開発も同時進行していくことが前提なら一週間は欲しいですね』

「そうか。なら、新型の開発を優先してくれ」

Mの言葉に、電話の向こう側でジャスティアは意外そうに短く息を吸い込んだ。

『これは驚きですね。てっきり、レジェンドの修復を急かされると思ってたのですが』

「オータムの我慢がそろそろ限界だ。それが原因で暴走されても困る」

『それもそうですね……あぁ、そうそう。ドライからの伝言です。レジェンドが修復次第、新しいトランザムシステムの試運転（トライアル）をするからその心算でいろだそうです』

新しいトランザム？　とMが問い返す間もなくでは、とジャスティアは通話を切った。ツー、ツー、と乾いた電子音を鳴らしている端末をポケットに突っ込み、Mは椅子に座り込んでドライの言う新しいトランザムについて思考を巡らせ始めた。

不思議な空間だった。四方八方が白色に揺らめく、明らかに現実ではない光景。その中を、黄昏の斬撃者搭乗者（エクシア・トワイライト）、ドライ・トワイライトは黙々と歩み続けていた。時間の感覚どころか、方向感覚さえも失いそうな空間を正確に真っ直ぐ歩き続ける事数分、ドライの目の前にスライド式のドアが現れた。コンコン、と軽くノック。

『……誰だ？』

「ドライ・トワイライト。任務から帰還した」

機械的な調子で応えると、ドアの向こう側で人の動く気配がした。数秒と経たずにドアがスライドし、中から一人の少女がドライを出迎えた。

「おぅ、おっかえり～って無視かよ」

ボーイッシュな短髪の少女は無言で傍らを通り抜けていったドライにジト目で視線を送る。髪、瞳はドライ同様の炎髪灼眼、顔立ちは似ているというレベルではなく、完全に一致していた。唯一の相違点があるとすれば、短髪の少女は表情が豊かだという所だろうか。

「ツヴァイ、アインは？」

ツヴァイと呼ばれた少女は無言で部屋の中央を指差す。そこでは数

百枚の空間投影ディスプレイが円柱状に張り巡らされていて、その中心に膝裏まで炎髪を伸ばしている少女が漂っていた。

『お帰り、ドライ。送ってもらった戦闘データは今さっき見させてもらったよ。それで、試作段階のトランザムシステムの使い心地はどうだった？』

「メリットよりもデメリットの方が遥かに大きい。実戦で使用するのは自殺行為だと謂わざるを得ない」

部屋全体に反響し、脳内に直接語りかけてくるような声にドライは律儀に答える。そうか、と再び室内に声が響くと、投影ディスプレイが連続してシャットダウンされていった。一枚だけを残し、それ以外全てのディスプレイが閉じると宙を漂っていた少女がストン、と床に着地する。

「やはり、たった一回だけの戦闘、それもこんな間接的な情報取得方法では流石のヴェーダでもトランザムシステムを模倣しきる事は出来なかったか」

さっきと違い、声帯を震わせて声を発しながらアインは残った最後の一枚を見続ける。ディスプレイの中では銀の福音と終焉の騎士（シルバリオ・ゴスペル ナイト・オブ・オメガ）の二機相手に海上で戦う太陽の姿が映し出されていた。

「いや、寧ろこの一回だけの戦闘で不完全とはいえトランザムを再現できたヴェーダが凄いと思うぜ俺は」

果汁が伝い落ちていくのもかまわず、ツヴァイはリンゴを丸齧りしながら感想を漏らす。

「まぁいい。今回の直接戦闘でヴェーダにはトランザムシステムの情報がかなり蓄積された。次はより完璧にトランザムを模倣できるだろう」

満足そうに頷きながら椅子に腰を下ろすアイン。早々にリンゴを食べ終えたツヴァイは手についた果汁を舐めとりながらアインに視線を向ける。

「んで、次はどうすんだアイン？」

「ヴェーダの情報によれば、近い内にＩＳ学園で専用機持ち限定のタッグマッチが行われる。その時を狙ってゴーレムやストライクシリーズ、インパルスシリーズでも送り込んでみようかな」

「独立稼動シリーズを送り込むのか……ってことは、俺に出番なし？」

「そうなるね」

心底嫌そうな表情を浮かべていたツヴァイだったが、すぐに表情を変えてドライに顔を近づけた。

「なぁ、ドライ。お前、オリジナルと戦ってきたんだよな？　どうだった、強かったか？」

新しい玩具を与えられる寸前のような表情を浮かべた顔を押し付けてくるツヴァイを押しのけ、ドライはアリーナでの戦闘を鮮明に思い出す。そして出てきた答えは一つ。

「とても強かったな」

「そっかぁ……クゥーッ、たったかいてぇ～！」

「待ちきれないのは分かるけど、今は我慢してくれないかなツヴァイ。遅かれ早かれ、彼女と僕達の運命は交差するんだから」

頬杖をつきながらアインは口元に薄い笑みを浮かべる。

「さぁ、人間達よ。試練の時は近いぞ。僕達上位種に君達が支配されるのか。それとも君達が僕らを打ち倒すのか」

一方その頃夜明達は。

「一夏、お前への誕生日プレゼントは私自身だ！！」

「ちょっと待て箒！　何だその太陽ｏｒ楯無さんが考えそうなプレゼントは！？」

「えぇい、黙って受け取れぇぇぇ！！」

「そういうのは夜二人きりの時にしてくれぇぇぇぇ！！！！！」

「し、篠ノ之さん、何て大胆な……私も負けてられない。五反田蘭、いっきまーすっ！！」

ドップラー効果を残しながら走り去っていく一夏と箒。二人の後を、顔を赤く染めた、でも決然とした表情を浮かべた蘭が追いかける。

「あんな事があったのに元気なやっちゃなぁ、あいつら」

あっという間に小さくなっていく三人の後ろ姿を見送りながら夜明はジュースを飲み干す。コップを握る右手の小指にはシャルとセシリアが送った銀のフェザーリング、手首には太陽、ラウラ、鈴音の三人がプレゼントしたブレスレットが輝いている。

「はは、いいことじゃない。元気なのはいいことよ」

「にしたって限度があるだろうよ」

隣りに並んだ楯無に苦笑混じりの表情を浮かべて見せながら、夜明は遠くなっていく一夏達から視線を移す。その先では、太陽とラウラが今日のために練習してきたという一発芸『いつもより少なめに回しております』を披露していた。傘を超低速で回転させながら、乗ったボール全てを落とさないという離れ業である。

「そう言えば、一夏の白式はどうなったんだ？　レイジングウィングみたいに第五世代型に進化したのか？」

「それがちょっと違うみたい」

「は、どういうこった？」

「太陽ちゃんが言うには、白式があの時の戦闘中に第五世代型に進化したのは確実なんだって。でも、あの後調べてみたら白式は第四世代型に戻ってて、第五世代型に関する情報は全てブラックボックス化されてたんだって」

楯無の話を聞いて、夜明は益々訳が分からないといった風に首を傾げる。

「どうなってんだ？」

「さぁ？　太陽ちゃん曰く、一夏君は白式に試されてるんだって。自分の進化についてこれているのか、自分が進化した後、自分の全力を扱える者なのか」

そんなことが有り得るのかと思う一方、あるんだろうなと夜明は思う。何せ、彼自身のＩＳが第五世代型「搭乗者の想いに応える異端機」なのだから。少しばかり顔を俯かせ、今後のことを考えているといきなり額を小突かれた。驚いて視線を持ち上げると、目の前で楯無が悪戯っぽく笑っている。

「そんな難しそうな顔しないの。未来のことなんて誰にも分からない。だから皆が今を全力で駆け抜けてる。その結果が悲しいものになるはずなんて無いわよ」

それに、と茶目っ気たっぷりに片目を瞑ってみせる。

「何があってもあなたが皆を護ってくれるでしょ？　私のヒーローさん？」

暫しの間、夜明は呆気に取られていたが、すぐに笑い始めた。

「ハハハ、そうだ、そうだったな」

（俺のやる事に変りは無い。ただ、護り続けるだけだ）

星が輝く夜空、胸の中にある誓いを再確認するように夜明は拳を握り締め、夜天を見上げるのだった。

年明け企画　ＩＳ学園海上体育祭（前書き）

一話で終わりますよ。……年明け最初の投稿で俺は何をやっているんだ……

年明け企画　ＩＳ学園海上体育祭

どこぞの海上である。見渡す限りの海、海、海、海……真っ青なオーシャンブルーの上にかなりの大きさの船が数隻。その中でも一番小さい船に乗っている楯無（スクール水着）がマイクを片手に高らかと宣言する。

「それではただ今より！　ＩＳ学園海上体育祭を始めます！！」

宣言と同時に打ち上げられる数発の花火。花火の余韻が無くなると、楯無は実況席に座り口を動かし始めた。

「さぁ、そう言うわけで始まりました。ＩＳ学園海上体育祭『ドキッ！　女の子だらけのお祭！　嬉し恥ずかしいハプニングを起こすのは誰か』！！　実況は私、ＩＳ学園生徒会長更識楯無が務めさせてもらいます！　そして私を手伝ってくれるのがこの二人！」

「司会進行の月光夜明と」

「織斑一夏です」

楯無の紹介にあわせ、二人は頭を下げる。それは海上に設営された特別舞台に設置された巨大スクリーンに映され、船の上にいるＩＳ学園生徒達に見られていた。

「にしても、碌でもないタイトルだなおい」

「あ、それ考えたの私」

成る程、と納得顔の二人。もっとマシなの思いつかなかったんですか？　という一夏の問いに楯無は細けぇこたぁいいのよ！　と良い笑顔で返した。

「既に紅、白、蒼の三つに分かれてますね？　皆、楽しく頑張りましょ～！！」

「何が楽しく頑張りましょ～だ。自分は夜明と一夏掻っ攫って高みの見物決め込んでやがるくせに」

船の内の一つで、太陽（水着）は愚痴りながら巨大スクリーンに映っている楯無に苦い表情を浮かべる。彼女の周囲には何時もの面子（やはり水着）に加え、楯無の妹である更識簪（勿論水着ですとも）の姿もある。

「にしても、あのタイトル無いわね」

「破廉恥ですわ」

「お姉ちゃん……」

楯無が考えたという海上体育祭のタイトルに鈴音とセシリアの二人が渋面を浮かべる。その傍らでは簪が居心地悪そうにもじもじしていた。

「そ、それにしても、こんな海の上で体育祭だなんて凄いね！」

簪の居た堪れない雰囲気を払拭しようと、シャルはわざとらしく声を出す。

「確かに。色々あったとは言え、文化祭もそれなりに普通だったから、てっきり体育祭も普通にやるものだと思ってたが」

「それに教師達も参加することになっているなんてな」

箒とラウラの視線が一方を向く。その先では千冬を筆頭とした教師達（しつこいようだが水着）が入念に準備体操をしていた。ストレッチをしている千冬を見つめながら、太陽は嬉しそうに指を鳴らす。

「フフっ、しかし、これは嬉しいな。これで公然に織斑教諭と殺し合える……！」

「た、太陽。分かってると思うけど、これは体育祭だからね？」

シャルの注意に分かっているさと返しながら、太陽は再びスクリーンに視線を移した。スクリーンの中では、夜明が持っている箱の中を一夏が片腕を突っ込んで探していた。

「しかし、何をしているんだあれは？」

「多分、これからやる競技を決めてるんだと思う」

『その通りだよ～、簪ちゃん』

ラウラの疑問に簪が答えると、楯無の肯定が降ってきた。

『ちなみに、競技の内容は私の独断と偏見で決めちゃったのでご了承ください』

（（（（（（（（（激しく不安だぁーっ！！！）））））））））

生徒どころか、教師達の心さえも一つになった瞬間だった。不安という荒波に揉まれている生徒と教師を余所に、一夏は箱の中から一枚の紙を取り出す。

『え～っと、第一種目は……海上騎馬戦です！』

紙に書かれた競技名を一夏が読み上げると、夜明がルールの説明に入った。

『ルールを説明するぞ。これから船と船の間に小さな円形の足場が数十個用意される。出場者はその足場の上で騎馬を作って、待機していてくれ。足場はかなり不安定だから、一瞬でも気を抜くと落ちるぞ。海に落ちた場合と、頭に巻いた鉢巻を取られたら失格だ。残っている騎馬が多い組の勝ちだ』

「足場って言うと、あれか」

船縁から身を乗り出しながら太陽は海の上に現れた足場を見やる。
彼女の両隣には同じように身を乗り出している鈴音とセシリアが夏休みのウォーターワールドでの出来事を思い出していた。

『それじゃ、出場選手は準備をしてください』

「にしても、楯無が考えたって割には内容がまともで驚いた」

「俺も」

「……」

ルールが書かれた紙を見ながら率直に感想を述べている二人を、楯無は頬を膨らませながら睨みつけていた。

「あぁ、悪かった悪かった。だからそんな顔すんなって……ん、どした一夏？」

「いや、何かちょっと、文を無理矢理消してから書き直したような跡が」

「あぁそれ。それは虚がルールを書き直した跡よ。鉢巻よりも水着を取り合ったほうが絵的に面白いと思ったんだけどなぁ」

（（虚さんナイス！！））

やはり楯無は楯無だったと思い知る二人だった。こんなあほな事をやってる内に騎馬戦の準備は終わっていた。

『お、どうやら準備が終わったようね。それじゃ行くわよ～。オーシャンファイトォ！！』

『レディーッ！！』

『ゴォォォウッッッッ！！！！！！！！』

楯無と夜明が元気に拳を突き上げ、隣りでは一夏が銅鑼を力の限り叩いていた。いよいよ開幕である。

「行くぞラウラ、鈴音、簪！！　狙うは大将首唯一つだ！！」

開始の銅鑼が響いた瞬間、太陽は騎馬の三人に突撃の指示を出していた。向かう先には教師組の大将、千冬の姿がある。

「よし、突貫するぞお前達！」

「派手に行くわよぉ！！」

「頑張る！」

下の三人もノリノリだ。不安定な足場も何のその、代表候補生である三人は足場の上に立っているものは敵だろうが味方だろうが関係なく押しのけて千冬へと肉薄していく。自分に向かって急接近してくる太陽達の存在に気付くと、口元に笑みを浮かべて拳をぶつけ合わせた。

「迷いなしに私を狙ってくるか、面白い！　受けて立つぞ夕暮ぇ！」

「堕ちろぉぉ、織斑教諭！！」

ぶつかり合う二つの拳。その衝撃は凄まじく、周りにいた騎馬戦参加者の三分の一が吹っ飛んだほどだ。

「オラァッッ！！」

「無駄ァッッ！！」

「ドラドラドラドラドラドラドラドラドラドラドラドラドラドラド

ラドラァッッ！！」

「貧弱ゥッッ！！」

「ロードローラーだぁぁぁぁ！！！！！」

「タンクローリーだぁぁぁぁ！！！！！」

最早、人の領域を超えている拳の応酬。火薬なんかあるはず無いのに、派手に爆発やらが起こっている始末。

「あ、あの夕暮さんに織斑先生！　この競技の勝利条件は相手の鉢巻を取る事であって、決して殴りあいに勝利する事では無いんですよ！　聞いてます！？」

「確実に聞いてないですわね」

周囲に甚大な被害を齎しながらも殴り合いを止めない二人に真耶が声をかけるが、効果は全くと言っていいほど無い。完全に二人だけの世界に入ってしまっている。真耶が頭を抱えていると、背後から声をかけられた。振り返るとそこには、

「お、オルコットさん？」

相手の鉢巻のほとんどを手にしてるであろうセシリアの姿があった。
セシリアはにっこりと微笑むと、持っていた鉢巻を放り投げて拳を鳴らし始めた。

「山田先生。あの二人の闘いを止めようとするのは大変結構ですが、今が競技中だということをお忘れなく……あの時の雪辱、今ここに！！」（詳しくは第十八話と第四十七話を読んでね！）

セシリアの放つ殺気にも似たオーラに真耶は涙目になる。

「せめてもの情けですわ。右手で葬られるか、左手で屠られるかを選ばせて差し上げますわ」

「どっちにしろ死んじ¥じゃいますよね私！？　う、うぅ……右手でお願いします」

「ＮＯ！　ＮＯ！　ＮＯ！　ＮＯ！」

「じ、じゃあ左手で」

「ＮＯ！　ＮＯ！　ＮＯ！　ＮＯ！」

「も、もしかして両手ですか～！？」

「ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　ＹＥＳ！」

「選択する意味無いじゃないですか～！！」

「ＹＥＳ、ＹＥＳ、ＹＥＳ」

「ＯＨ　ＭＹ　ＧＯＤだね」

セシリアの騎馬をやっている箒とシャルは憐憫の念が籠った目で真耶を見つめ、静かに心の中で敬礼した。

「アリーベデルチ！！」

「んにゃ～！！　こんなんばっかです～！」

号泣しながら吹っ飛んでいく真耶。反対にセシリアはこの上ない程に清々しい表情を浮かべて、ラッシュの間に真耶から奪い取っていた鉢巻を握り締めていた。

「勝った……勝ちましたわ！　第三部、完っ！」

「いや、第三部とか無いからね」

ちなみに太陽と千冬の戦いはというと、

「夕暮、お前の敗因はたった一つ。そう、たった一つだけだ……お前は私を怒らせた」

「ま、まだ一夏と箒をくっつけた事恨んでんのかあんた……がくっ」

千冬の勝利で幕を閉じたとさ。

「おいおい、第一種目だってのに何人負傷者でてんだよ？」

「四分の三がさっきの騎馬戦（主に太陽と千冬姉の戦闘の余波）で

怪我しちゃったからなぁ……」

「これ以上は無理だね！　と言う訳で海上体育祭、完っ！！」

年明け企画　ＩＳ学園海上体育祭（後書き）

ちろっとご協力を仰ぎたく存じます。

白式の第五世代型の名称ですが、『白式　騎士王～』みたいにしようと思っているのですが、～の部分に合う名前って何かありませんかね？

千冬、花嫁修業……だよね？

「夕暮、私に家事を教えてくれ」

「一夏に教わりゃいいでしょうが。今までさんざっぱら押し付けてたんだから」

とある休日、教師が生徒に土下座して頼み事をしてるという教育上非常によろしくない光景が広がっていた。何の前触れも無く部屋に押しかけてきて、土下座をする千冬に同室の箒は目を白黒させるが、頼まれたとうの本人である太陽は素っ気無い返事をする。

「弟に教わるなんて恥ずかしい真似出来るか！」

「生徒に教わる事も十分恥ずかしい事だって理解した上での発言ですよねそれ？　……と言うか、教わるんなら将来の義妹に頼めばいいじゃないですか」

「え、私！？」

急に話を振られ、箒は顔を真っ赤に染める。千冬の将来の義妹と言うだけですぐに反応したと言うことは結構な自覚があるらしい。箒自身、料理などの家事はそつなくこなすので、教えることは十分可能だろうが千冬は憤懣たる表情を浮かべ拒否した。

「人の弟を寝取る女に教わる事などない！」

とのことだ。表現がひわ～い、と太陽は呆れ返った表情を浮かべて開いていた週間少年ジャンプを閉じる。

「そもそも、何だっていきなり家事を覚えようなんて思ったんです？　今までみたいに一夏にやらせればいいじゃないですか」

太陽の指摘に千冬は気恥ずかしそうに咳払いした。

「いや、そのだな。流石にこの年にもなって家事が出来ないのはまずいと思ってな。それで」

「はっきり言いますよ織斑教諭。それはまずいと言うレベルではなくて、もう取り返しのつかないレベルにまで達しています」

太陽の言い放った言葉が剣となって千冬の胸を抉り穿つ。床の上に倒れ、時折痙攣している千冬を見下ろしながら太陽は頭を掻く。

「誤魔化さなくたっていいですよ。どうせ銀河さんがら「チェストおおおおお！！！！！」」秘儀、箒プロテクション」

「ぬおぉぉぉぉ！！！！！」

亜光速で放たれた千冬の拳を箒を盾にして防ぐ太陽。装甲板として使われた箒は哀れ夜空に輝くお星様と化す。

「ぎぎぎぎぎ、銀河はいっしゃいがっしゃいきゃんけいにゃい！！」

「噛み噛みですね」

それでも銀河の名前だけは噛まなかった千冬。ため息を吐きながら太陽は天井に出来た人型の穴を塞ぐため立ち上がった。

「とにかく、私は教える心算は無いんで他を当たってください」

「……成績（ぼそっ）」

「ハハハ！　誰かに何かを教えるのは楽しいなぁちくしょーっ！！」

ヤケクソ気味に叫びながら太陽は有らん限りの殺気を込めた双眸で千冬を睨みつける。

（織斑教諭。あなたは何時か私が殺る）

（やれるものならやって見せろ青二才）

かくして、太陽は半ば強制的に千冬に家事を教えることと相成った。

所変わって調理室。千冬に家事、正確には料理を教えるため、太陽に加えて楯無、そして助手としてラウラが集められた筈なのだが。

「あれ、ラウラちゃんは？　調理室に来るまでは一緒にいたのに？」

エプロン姿の楯無が首を回していると、何か重いものを引きずる音が廊下から聞こえてきた。不審に思った太陽と楯無が扉の方を見ると、

「教官！　言われたとおり洗濯機を持ってきました！」

小型の洗濯機を運ぶラウラの姿があった。ご苦労、と千冬がラウラに労いの言葉をかけようとするが、それよりも太陽が千冬の腰に両腕を回すほうが速かった。

「何でこれから米を研ぐのに洗濯機が必要なんだぁ！！」

「ぐおぉっ！！！」

タイルの床がひしゃげるほどの威力のバックドロップが炸裂。後頭部を強打し、さしもの千冬も痛みに呻き声を上げる。

「織斑先生。少し頭……」

そこに笑顔の楯無が歩み寄り、

「冷やしましょうねぇ！！！」

「ごっほうぅ！！！」

流れるような動きでパイルドライバー！！　立て続けに頚椎に重大なダメージを負って動けないでいる千冬を、二人は指を鳴らしながら

ら見下ろす。

「楯無、お前は腰椎をバッキョリやれ。私は脊椎をメッキョリやる」

「じゃあ、その後は二人で頭蓋骨をグッチョリやっちゃいましょう」

「待て待て待て！　お前ら流石にそれ以上は教官でも死んでしまうぞ」

慌ててラウラが二人を止めに掛かるが、

「「当たり前だろ（じゃない）。殺しに行ってるんだから」」

と、笑顔で返されてしまった。数分後、どうにか落ち着いた太陽は何時でもアイアンクローの刑に処せるように頭を掴みながら千冬に問う。

「んで、何でラウラに洗濯機を持ってこさせたんですか？」

「いや、だって洗米するのだろう？　なら洗濯機はひつよいだだだだだ！！！！！」

「サイズと常識を考えろ！！」

太陽の手の中で千冬の頭部が破滅的なオーケストラを奏でている横で、楯無もやんわりとラウラに問い質していた。

「ラウラちゃんもラウラちゃんだよ。何で何の疑問も持たないで洗濯機を運んで来ちゃったの？」

「教官の言う事に間違いがあるはずが無い！！」

「その言ったことが間違いだったから織斑先生はあんな生き地獄を味わってるんだよ？」

色々と紆余曲折はあったが、千冬への料理レッスンは次の段階へと進む。

「どうでもいいが、何故料理から教えるんだ？」

「そんなの簡単ですよ。女最大の地雷、それは……」

千冬の問いに、太陽はたっぷりと間を置いてからババーン！　と効果音がつきそうな勢いで答えた。

「『メシマズ』だということ！！」

「め、メシマズ！？　とは何だ更識？」

「単純に料理が下手な人。更に上に行くと料理で人の精神を崩壊できるレベルにまで達します」

「そうなのか……ちょっと待て。夕暮、貴様私がそのメシマズだと言いたいのか！？」

「今のままで行ったら確実にそうなりますね」

洗米するのに洗濯機を持ってこさせるような人物なのだから、どこからどう考えてもメシマズ嫁予備軍だ。ショックを受けて倒れそうになる千冬を慌ててラウラが支える。

「ま、そうならないようにするためにこうやって練習するんですし。気持ちを切り替えていきましょう織斑先生」

楯無に背中を押され、今度こそ料理開始……といっても、まずは米を研ぐところから始まるのだが。

「では、まず最初に米を研ごう。織斑教諭、やり方は分かりますよね？」

「あぁ、勿論だ。まずは洗剤を「「武神双天波！！」」ぐおぉぉぉぉ！！！！！」

二人の合体技で吹き飛ぶ千冬。

「いい加減洗濯機から離れろぉ！」

太陽の叫びが調理室に虚しく木霊した……。

「さって、これが織斑教諭が研いだお米で～す」

数十分後、太陽は額に青筋を浮かべながら楯無とラウラの前に洗米後の米が入ったボウルを差し出した。ボウルの中身を見た二人の感想は驚くほど同じだった。

「「どうやれば米が粒子状になるの（んだ）？」」

「そんなのこっちが聞きたいさ。さて、気を取り直して次は調理に行こうと思うのだが……あれ？　さっき用意した材料は何処に？」

さっき机の上に置いておいたはずの材料が無く、太陽は首を傾げる。楯無と一緒になって机の周りを探していると、

「それなら教官が片っ端から鍋に（そのまま）突っ込んでいるが」

「「止めろぉぉ！！！！！」」

叫びながら二人はグラグラと煮え立った鍋に人参豚肉じゃが芋やらを適当的にぶっこんでいる千冬を蹴り飛ばした。流石に堪忍袋の尾が切れ掛かっているのか、太陽は吹っ飛んだ千冬に馬乗りになり、拳の雨を降り注がせる。

「もう我慢出来ない！！　あんたが！　死ぬまで！　殴るのを止めない！！」

「何を物騒な事を言っているんだ貴様は！？」

マウントポジションを取られながらも太陽の拳を防ぐ辺り、流石モンド・グロッソ初代総合優勝者といえるだろう。

「ラウラちゃんも見てたんなら止めようよ」

「いや、教官の動きに余りにも迷いが無くてな……」

それなら仕方ないか、と楯無は半ば諦めた表情を浮かべてため息を吐くのだった。

「さて、様々な難関苦難を乗り越えた結果、出来た料理が……これだ」

「1，2，3」

どこぞのテレビ番組のように軽快にカウントダウンを口にしながら楯無は料理を隠している箱を取っ払った。

「何だこれ？　クトゥルー系？」

そうラウラに言わしめるほどそれは名状しがたきものだった。明らかに食べ物として放たれてはいけない光沢。何か、心なししゃれこうべの形に見える極彩色の湯気。

「これ、どうしよっか？」

楯無の問いに太陽は答えない。いや、答えられないという表現の方が正しいのかもしれない。こんなものを食う度胸は無いし、かと言って二人にＧＯサインを出すのも大いに気が引ける。頭を捻って捻って考え抜いた結果。

「放っとこう！」

そういう結論に達した。三人がかりで気絶させた千冬を担ぎ、三人は調理室から去っていった。『織斑先生が作った料理』という最悪の書置きを料理のすぐ傍に置いて。

一時間後、大量の生徒達がここ、ＩＳ学園病院に運び込まれた。ほとんどが激しい腹痛、吐き気、眩暈などを訴え、中には幻覚を見る者さえいた。彼女たちの治療に当たった冥途返しは後にこう語った。

『私は患者が生きているなら必ず助けると言って今まで実行してきたが、見ただけでこれは手遅れだと感じさせられたのは今も昔も今回だけだ』

ちなみに、調理室に置いてあった名状しがたきものは誰かさんたちの手によって綺麗さっぱり無くなっていたとさ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0939q/

ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼

2012年1月7日23時54分発行